

特異点の白夜

DOS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界と世界を旅する少年、白神光努。彼が友人に連れられて旅行と称してやってきたのはマフィアの世界。そんな世界で一体何をやるのだろうか？なし崩し的にマフィアのボスになって、戦いに巻き込まれていく。もしくは自ら戦いに突っ込んで行くとも言う。

目次

『白い少年、ミステリーツアーに行く』	1	『人間大砲の威力は人によって変わるぞ』	44
『雷親父を無視してオカマの料理を堪能する』	7	『謎の初代と咲き誇る花』	57
『切り裂き王子と赤ん坊はダーツの的に少年を選ぶ』	16	『リコールの宣言は武力を持って却下する』	65
『作戦隊長は買わずとも苦勞が絶えない』	24	『邪魔をする奴は蹴られてしまえ』	72
『ミッシュンインキャバツローネ』	32	『代役は時として生死の境を彷徨う』	81
イリスファアミリー編		『スーツを着るのは最初だけでよくね？』	90
		『世の中楽しんで者が勝つ』	97
		しばらくの日常的な話	

	『遊園地はスリルに始まる』	104			
	『逆年功序列の世の中ってどうよ?』				
	『人の怒りは意外としぶとい』	121			
	『泣きつ面にニードルスピア』				
128	『殺し屋奮闘記前編』				
	『殺し屋奮闘記後編』				
	『は仏への近道』	137			
	『は恐ろしい』	145			
	『日本っていいな』	153			
159	『弱肉強食、世は時として無情なり』				
	『転入先は学級閉鎖』				
	『地獄って実際どんなところだろうな』				
	『?』				
	『少しマジになる』				
	『共鳴する海と花』				
	『爆弾男とメガネヨーヨーの喧嘩』				
	『入』				
	『毒? 何それ、飲んだらまずいの?』	201			
	『武VS犬、コングってどういう意味』	211			
	『だっけか』				
	『前門の虎、後門の鷹』				
		228			
		218			
		193			
		185			
		175			
		168			

骸編

『VS 襲撃者①—蜚気楼の記憶—』

235

『VS 襲撃者②—慣れた—』

246

『ツナ編—あの時と一緒—』

255

『小言弾—ナイスタイミング—』

267

『VS 光努—正解—』

275

『決着—灰色の城—』

285

『よく現れた！そしてくたばれえ!!』

295

『また、いずれ』

303

戦いおわって少し日常編

『友達の友達は友達だ!』

312

『困ったときはお互い様』

330

『居候』

341

『転校性、白神光努』

347

『校内は静かにしましょう』

355

『招待状の行き先は……』

365

『よくあることですよ』

372

『いえ、ただ寄っただけですよ』

382

『また来ますよ』

395

ヴァリアー編I 『襲撃』

『避難は速やかに行いましょう』

408

『落下・再会・父親』	419
『釣りか、俺も行きたいな』	430
『過保護?』	439
『重箱つて四重が正式らしい』	448
『昨日の友は今日も友』	456
『途中経過、見て回ります』	463
『動く前に、仕留めるべし』	473
『黒曜組特訓前編』	485
『黒曜組特訓後編』	494
『暗殺戦隊ヴァリアーアーセブン見参』	504
『忘れ物』	514

『風穴と粉砕』	533
『第一回今後の状況会議』	542
『雷の戦い、親父VS仔牛』	551
『5分つて意外と長いね』	558
番外編 『初めてのお使い』	565
『笑わない道化』	601
『嵐の戦いは化かし合い』	612
『考えず戦い考え戦う』	625
『沈黙と勝敗』	636
『魔の剣豪』	648
『ツンドラ地帯にご用心』	660
ヴァリアー編 II 『リング争奪戦』	523
『晴れの戦いと軽快な暗殺者』	523

『勘違いしてないか?』	—	671
『霧の戦いだから体術で攻めよ』	683	
『巡る輪廻街道まっしぐら』	—	696
『雲の戦いは快晴なり』	—	707
『ターゲットチェンジ』	—	718
『雨の戦い水を打つ』	—	729
『それフラグだ!』	—	743
『祈りの紋章と最強の剣』	—	754
『剣帝』	—	769
『驚愕、零地点突破』	—	783
『棟梁と呼ばれる男』	—	799
『さっきの借りはなしだ』	—	810
『希望の交差点』	—	824
『真実を掘り起こす』	—	839
『後始末は燃え盛る建物の外で』	850	
『劇的に匠が作りました。』	—	863
『森の中の病室』	—	872
『よし!これは十年弾だ!』	—	884
『キャラクター紹介』	—	894
『未来編I 『10年後』』	—	901
『知っているけど知らない場所』	—	913
『古きを侮るべからず』	—	925
『+2』	—	925

- 『現状把握、そして対策』 935
『よくわかる匣講座』 946
『黒曜ランド迎撃態勢』 956
『赤い壁作動』 967
『戦いは既に始まっている』 982
『好奇心が突き進む』 992
『隣の修行は面白そう』 1002
『白い綿毛』 1013
『獲洞山、そこは入口であった』 1024
1034 番外編『RJP、つまり・・・』
『まだ壊滅はしてないさ』 1047
『不可能を可能に』 1058
未来編Ⅱ『メローネ基地』
『ツナ側襲撃ダイジェスト』 1069
『光努VSニゲラ』 1079
『メローネ基地始動』 1089
1100 『白銀の装甲は、黒き銃弾を遮る』
『襲撃者激闘開始』 1112
『空洞の騎士』 1125
『グラジオラスの花言葉』 1137
『10年間の空白』 1151
1164 『とりあえず切れればいいと思うよ』

『ツナ側襲撃ダイジェスト②』 | 1174

『休息と現状把握』 | 1187

『君達を待ってた』 | 1201

『4人で計画したゴール地点』 | 1217

未来編Ⅲ 『V A R I A 』

『We are V A R I A!』 | 1231

『炎出して飛ぶって結構目立つよね』 | 1242

『四方迎撃態勢に入る』 | 1253

『座した強者』 | 1265

『小休止』 | 1278

『成長した君達への贈り物』 | 1292

未来編Ⅳ 『戦間期』

『忘却の彼方の怪物』 | 11305

『真紅の大鷲VS九尾の狐』 | 1321

『太平洋まで迎えに来て』 | 1336

『青空の休日』 | 1350

『四神の扉・前編』 | 1373

『四神の扉・後編』 | 1384

『すべてを知ることとはすべてを許すことになる』 | 1401

『よし、修行に混ざろう』 | 1419

『光努VS獄寺く人形争奪戦く』 | 1434

『I want to see you』 | 1434

u r s m i l e

『当然100点満点の採点で』

14771458

『ああ懐かしき我が故郷(?)』

1492

『知った気配と似た表情』

1507

未来編V 『チョイス』

『チョイス開幕』

1525

『バトルロイヤル14』

未来編VI 『最終決戦』

『白と黄と橙』

1751

『龍よ穿ちて蛇囲い』

『アルコバレーノの特異点』

1773

『一隻眼の龍と隠者の死神』

『二つ目の誤算』

1800

『ホワイトロードチェンジ』

『幻惑の瞳に映る炯然たる剣』

1827

『紅い刃を少女は振るう』

『舞い散る緋刃の白騎士』

1844

『爆弾を投下してきやがった』

『あなたは一体何?』

1866

G H T S

F I R E O F W H I T E N I

『蒼い燕と紅い桜』

16691650

『剣士と神と悪魔と』

『雷様は鬼というのが一般的』

『災いの女神は微笑む』

173717131695

- | | | | | | |
|------|--------------------|------|--|-------------------|------|
| | 『一番大ピンチ大賞授与』 | 1891 | | 『助けてくれてありがとう』 | 128 |
| | 『夜明けの決戦』 | 1914 | | 『エピソード・イリス』 | 2153 |
| | 『リターン・バトル・ミュージアム』 | | | 繋ぎの日常編 | |
| 1936 | 『白虹のワールドブレイク』 | 1961 | | 『何気ない日常の幸せ・前編』 | 170 |
| | 『白夜解体打倒幽霊』 | 1990 | | 『何気ない日常の幸せ・後編』 | 2182 |
| | 『炎の力』 | 2019 | | 『プレイ・ウイズ・ヴァリアー・シユ | 1 |
| | 『イノベーション・アライアンス・イリ | 2034 | | ター・前編』 | 2198 |
| | ス』 | | | 『プレイ・ウイズ・ヴァリアー・シユ | 1 |
| | 『そう単純な話じゃなかったよ』 | | | ター・後編』 | 2211 |
| 2052 | 『白夜の鴉と揺るぎない覚悟』 | | | 『クリーニング・オフ』 | 2236 |
| | 『虹と貝と海と、花と』 | | | | |
| | | 2104 | | | |
| | | 2083 | | | |

『白い少年、ミステリーツアーに行く』

とある二人の人物による、不思議な会話が繰り広げられた。

「なあなあ光努^{こうど}くん、今とても面白い旅行プランがあるんだが是非とも行って見ないか？大丈夫、こちらでセッティングは全て終わっているさ」

「旅行？どこ行くんだ」

どう見ても不自然な怪しげな会話にも拘わらず、光努と呼ばれる少年はいたって普通に対応する。どうにも慣れていて、というような対応だった。

「別の世界。こことはまた違った楽しみがあると思うぞ」

「へー、どんな世界なんだ？」

「楽しいぞ。そこらへんにマフィアとかいるしな」

「マフィア？それって治安が悪いってことか？」

「そんなことはない。普通にいい世界できつと楽しいぞ」

「ふーん。ま、ここにも飽きてきたからいいかな。いいよ、旅行に行こうか」

「うむ、そうこなくてはな」

どこかの世界の、国かどうか曖昧な所の、どこかの山の頂上にて、二人の間でそんな会話がされていた。

冷たい空気にさらされて、山頂から見える白夜の景色を眺めつつ、二人の人物は唐突に姿を消した。まるで空気に飲み込まれたかのように、もしくは最初からそこにいなかったかのように、ふと消えた。

後に残されたのは、山頂を撫でつける柔らかな風のみだった。

「……………ん……………ん」は

ちかりと、瞼の裏からでもわかる眩い光。直射日光が目には辺り、わずかに細めながら自分のいる場所を見渡す。目が覚めた場所は、生い茂る木々に囲まれた、深い森の中

だった。

目に優しい新緑に囲まれ、むくりと枝の上で器用にバランスよく起き上がったのは、見た目的には中学生程度に見える一人の少年。

柔らかかそうな白い髪を風に揺らし、特徴的ではないありふれた私服に身を包んだ少年、白神光努は周りを見回してみる。

「森の中……みたいだが、どこだろうか？」

これまで何度か似たような旅行(?)をした事がある。事セッティングを楽し気に買って出たハクリの旅行プランは、毎回目的地へ、目覚めるといつの間にか着いていた、というような物だ。今回もそうだし、森の中で目を覚ました事は別に1度や2度ではないので特に不満や疑問は無い。

さて……どうするか。

どうせしばらくしてればハクリの方からコンタクトを取ってくると思うから、その間にこの辺りを散策してみるのもいいだろう。

まず楽しむ為には、それぞれの物を知らないとな。

全く知らないで行き当たりばったりというのもまた楽しいが、知っている事で楽しめる事もある。

例えるならば、どこかの遺跡を探索するなら、その遺跡の名称、歴史、などを事前に

知ってれば、また楽しみ方も変わってくるという物だ。

そんなわけで、とりあえず高めの木に登ってみるかな。

別に何とかは高い所が好き、という理論で登るつもりでは無いのであしからず。ただ単純に高い所の方が知らない場所では周りを見渡せるからいいというだけだ。

ちなみに狙撃手に狙われているなら目立つ場所は控えるように。狙われた事無いけど。

木々の高さはおよそ10メートル程。

足先に力を籠め、地面をわずかに凹ませつつ、中腹の枝へと一息に飛び乗った。

「さーて、どこかに面白そうな物はあるかなった。といってもそう簡単に建物が……あつたよ！」

およそ一キロ程離れた場所に見えるのは、石造りでできた城のような豪華で堅牢そうな建物。結構大きく、敷地も広い。公共物には見えないし、ちらほら人が見えるから誰かの屋敷か？

掲げられた旗を見てみると貝とXの模様動物のようなイラストが着いた赤黒い旗。

見たことない旗だな。そう思つて旗の意味を考えるべき思考にふける——つもりだったけど、なんだか面倒そうだったし実際に行つて現地人にも聞けば一発だろうしな。

困った事があれば、人の聞くのが一番早い。

最も、そこに人がいる事と言葉が通じる事が前提条件だけだな。

「この世界の事が分かるといいな。楽しみ♪」

世界を旅してきた少年、白神光努は、木の上で髪をなびかせ、服をはためかせ、楽し気に笑みを浮かべた。

地球上の某所。

「さてと、落ちた場所はよりにもよって独立暗殺部隊ヴァリアーの本拠地か。光努君がどれだけ相手になるのやら。いや……彼らがどれだけ光努君の相手になるのか……かな？」

旅行と称して、光努をこの世界に連れてきた人物、ハクリ。

何を考えているのか、何を思っているのか、何をしているのか。

誰にも覺られず、誰にも気づかれず、どこかの誰かを彷彿とさせるように楽し気に、笑みを浮かべた。

『雷親父を無視してオカマの料理を堪能する』

移動中に下を見てみるとところどころに同じ黒服の男が何人かいた。

同じ服だからやつら全員同じ組織のやつらか。

「まあどうでもいいか。建物に行くかな」

気配を消しながら木の上を移動して建物に向かった。

そして着いた建物。空いていた二階の窓からとりあえず侵入。

所々に置いてある調度品や大理石の床など内装も結構豪華だと思った。

「とりあえず適当に歩くか」

赤い絨毯の引かれてる廊下を歩きながら見渡す。

窓から見ると庭も結構綺麗。

(しかしあの黒服のやつら。動きとか気配を見るに軍隊とか殺し屋とかそんな感じのやつらだが、一体ここはどんな場所なのか？誰かに聞いてみるか。)

長い廊下を歩いていると前方に人発見。

「ちよつとその人」

「!?小僧、誰だ!!」

髪の毛が逆だつて顔にピアスをつけたいかついおじさんがいた。

黒い服に背中に指してるのは刀……じゃなくて傘。

……傘?

まあどうでもいいか。人にはそれぞれ趣味とかあるからなあえて考えるのをやめることにした。

それにしても怪しいやつだな。ま、向こうからしたら俺のほうが怪しいだろうけど。

「貴様、どこのファミリーの者だ!」

「ファミリー?」

「答える気がないならすぐに片付けてやる」

そう言つて背中の傘を一本抜く。先端は鋭くなつてるからやつぱり武器のようだ。

8本も背負つて8刀流か?

「喰らえ!!」

一本の傘の先端を突き出して特攻を仕掛けてきた傘男に俺は——。

ガシ!!

「な!バカな!!」

傘を背負つた男は驚いた。自分が攻撃を仕掛けて相手はまだ10代前半ほどしか

い少年。どう考えてもこの一撃で絶命すると思っていた。
なのに――。

「傘は悪天候時に使うものだぞ？もしくは日差しが強い日か曲芸する時」
「ぐ・・小僧！貴様！」

男の前には自分のつきだした傘を刺さる前に掴む少年がいた。

（まったく動かん！なんて力だ！ならば・・・100万ボルトを喰らえ！）

電力の出力を上げて傘に流すと少年は素手で掴んだままモロにくらってしまった。

「な!!」

「ふっ、たわいも・・・な!!」

「だいたい100万Vってどこか、普通なら死んでるぞ」

「な・・なんだ!!このガキは!!」

電流を流されてなお、傘を掴み続ける少年がいた。

「じゃあな」

そう言つて少年は傘を掴んだまま窓に向かって傘男を放り投げた。

「ぬあああー!!」

傘男は窓ガラスを突き破つて外へ吹っ飛んでいった。

「なんか降ってきたぞー!!」

「うわっ！隊長！」

「レヴィ隊長！大丈夫ですか!？」

外から声が聞こえて来たけど無視するかな。外より中だ。

「これどうしようかな？」

光努の手には掴んだままの傘男の傘が一本残っていた。

「戦利品にもらつとこう。使わないだろうけど」

光努の探検はまだまだ続く。次にやってきたのは台所。

どうして台所にやってきたかは簡単だ。

「いい匂い・・・お腹すいたな」

そう思っただけでやってきたら誰かが料理を作ってるようだ。中にある時計を見てみるに

現在はお昼頃。

きつとお昼ご飯を作ってるだろうと予測できた。

「ん〜いい感じね♪こっちの料理ももうすぐ完成だわ〜♪」

なんか奇妙な声が聞こえた気がしたけど気のせいだといひなく。

と思っただけどきつと現実なんだなと諦めて台所に入る。

そこにはモヒカンのような髪型をしたサングラスの男。

「というかオカマ？料理当番？」

身のこなしから同じ戦闘する組織の人だと光努は考えた。

ぐ〜。

あ、料理の匂い嗅いだらお腹すいちゃったな。

「あら？ボウヤどこから来たの？もしかしてお腹すいてるの？」

「うん」

「まあ、かわいいわ！この料理食べるかしら？」

「是非ともいただきます」

中華料理や洋食などいろいろとあったがどれも美味しかった。

もちろん複数人分あったけど全部食べてないからな。

それにしてもここままで美味しいと日常的に料理してるっほいしやっぱり料理当番の

人かな？

まあなんにしても満足満足♪

「ごちそうさま」

「お粗末さま！お口にあったかしら？」

「美味しかったよ。ありがと。じゃあそういうことで」
光努はお腹も膨れたし台所をあとにしたのだった。

一人残ったサングラスのオカマ。

「そういえば、あの子一体誰なのかしら？」

城の中を探索中。

「あー・・・この事聞くの忘れた。まあいいかな」

ヒュッ、ドス！

ドスドス！

何かを投げて突き刺さる音。ダーツでもしてるのかな？

目の前にある扉が少し開いてるので覗いてみると誰かいた。

「ししし、百点♪やっぱオレって天才」

「これくらいできて当然でしょ。たいしたことないよ」

ダーツをしていたけど投げるのは投げナイフだったよ。いたのは目元が髪で隠れた王冠を乗せた男にフードをかぶった赤ん坊。

何あの顔わからないコンビ。シャイなのか？

投げナイフでダーツか・・・面白そう！是非ともやろう。

「ねえ二人とも、オレも混ぜて」

「！お前誰？どっから入ってきた」

「気配を消してたね。敵かい？」

「敵？ただのダーツの挑戦者だよ。自称天才に対してね」

「自称じゃねえよ、このガキ・・・いいぜ、王子が相手してやるよ♪」

どこからか現れた謎の少年VS髪で目が見えない自称天才男。

「おいてめー！紹介に悪意を感じるぞ！誰が自称天才だ！」

「違うの？」

「まあ普通は自分で天才なんて言わないよね」

「マーモン！どっちの見方だよ」

「うるさいね。さっさと始めたら」

とりあえずナイフを3本お互いに同じのを使い交互に投げて刺さった箇所の数が高いほうが勝つというシンプルなルールである。

「じゃあ俺一番な。それっ」

一番手は自称天才による投擲。手から離れたナイフは吸い込まれるように見事にダーツの的の中央、直径わずかな点くらいしかないような円に突き刺さった。

「百点♪これでお前の勝ちはなくなつたぜ」

「ん？なんでだ。まだ俺は投げてないぞ」

「だって見ろよ。もう100点の円にはナイフが刺さる場所がないんだぜ。どう投げたってお互い次に高い90点取れば100点とつた俺の勝ちじゃん♪」

ナイフが突き刺さり100点の円にはもうナイフが刺さる場所がない。100点が一人生か取れないなら、お互いに投擲が得意だとしたら残りは90点しか取れず最初に100点を取ったほうが10点高く、普通に投げるならもう勝つのは無理だろう。もちろん、それは普通ならの話だが。

「じゃあ、よっ」

ズガン!!

「……」

「マジ？」

結果として光努の投げたナイフはダーツの中央に突き刺さり100点を取った。

最初のナイフが突き刺さった状態でどうやって中央に突き刺さったのか？

答えはナイフを気にせず突き刺さった。光努の投げたナイフは最初のナイフの柄に当たりそのまま壁に押し込んで突き刺さったのだ。

「よし、100点だ。これで同点だね♪」

一人を除いて誰も声を出せなかった。

『切り裂き王子と赤ん坊はダーツの的に少年を選ぶ』

ベル side

「おいおい・・・なんなんだよこいつは」

「刺さったナイフの全身を壁に押し込んで無理やり自分のナイフを的の中央に当てるなんて・・・随分と乱暴な力技だね」

マーモンの言うとおりでだぜ。

俺のナイフを壁に押し込むなんてこのガキ、一体どんな力してんだよ。

つーか普通ありえねー。

「次はそつちの番だ。投げていいよ」

「・・・」

どーすつかない・・・さすがに俺でも壁にナイフを全身埋めるのは難しいぞ。たださえこのアジトは敵に奇襲されても大丈夫なようにある程度は頑丈に作られてるのに。

ベルの頬を一筋の汗が流れる。どうするか考えてると。

「休憩中失礼します!!ベルフエゴール様、マーモン様、侵入者が現れました!!」

部屋の中に隊員が一人入って来た。あれはレヴィの雷撃隊のやつだったな。侵入者ってもしかして……。

「侵入者って、もしかしてこいつ」

俺と勝負中のガキを指して聞くと。

「はっ!おそらく!レヴィ隊長は白髪の子供と言っていました!!」

「ふーん。つーことは殺つちやっつていいのか」

ナイフを取り出して狙いを定める。

「侵入者とは人聞きの悪い。開いてたから入っただけだよ」

「それを侵入者って言うんだよっ!!」

俺の投げた複数のナイフが侵入者であるガキに向かって飛んでいった。

ベルside out

光努side

やっぱり侵入者扱いされちゃったよ。ただ開いていた窓から入っただけなのに(注・

それを侵入といいます)

向こうはナイフを投げてきた。全部で10本程もあるけど大した量じゃないな。戦利品の傘を使ってひとまず全部叩き落とした。

「ん？あれってレヴィのパラボラじゃね？」

「そうだね。レヴィはやられたのかもね」

「ししし♪だつせ。俺が仕留めといてやるよ」

「大丈夫なのかい。あいつ、力は大したものだよ」

「全然余裕♪」

そう言つて今度はナイフを持って接近してきた。

何度か攻撃してきてわかったけど、所々急所を狙ってくるあたりやつぱりこいつらは殺し屋とかかな。

そう考えてるあいだにも何度も攻撃を避け続ける。

「そういえばお前らつて何者？」

「しし、それはこつちのセリフだよ。お前何者？」

「白神光努。以後よろしく」

「ま、誰だろうと関係ないけどな」

再びナイフを使って攻撃を仕掛けてきたけど途中で止まった。

「マーモン!!手出すなよ!」

「まどろっこしいからね。ボクがやってあげるよ」

光努 side out

ベルは立ち止まった。目の前に多くの数百本に及ぶナイフが中に現れたから。マーモンによる幻覚。

「ここであかつに動くのもまずいかもしれないと思い一旦立ち止まるが納得ができない。」

「俺の獲物だ。よこせ」

「攻撃が当たらないじゃしようがないよ。ボクが早く仕留めてあげるよ。もちろん金は取るけどね」

「お前ら殺し屋?仕留められる筋合いはないと思うけど」

「ししし、ここに入った時点でゲームオーバーだ」

「この幻覚の中じゃ打つ手がないよ。じゃあね」

マーモンがそう言うのと周りに会った数百本のナイフが全て光努に向かっていった。

「俺もいるんだぜー！」

ベルも自分のナイフを投げつける。全てのナイフが光努に向かって飛んでいき光努は、

パシ！

「ぬ!!」

「あれ?」

光努はベルの投げたナイフを掴んで止めた。それよりも驚いたのはマーモンの幻覚などまるでなかったかのように本物のナイフだけを掴んだことだ。

マーモンが幻覚で作り出したナイフは全てベルのオリジナルナイフと同じものであり、一見して見分けるのは難しいはずなのに。

「ボクの幻覚が効いてない?そこそこやるみたいだね」

「ししし、役に立たねーじゃんかよ。俺にまかすとけよ」

ナイフを何本も投げつける。しかし光努に当たらず、壁や天井に刺さる。

「ベル、あれやる気だね」

「ししし、容赦しねーからな」

「当たってないけどね」

「っっっ」

「ん!？」

光努の服の袖に切れ目が入った。ベルのナイフは全部的外れの方向に飛んでいったのに勝手に切れたのに、光努は驚いた。

「これって……糸？」

「当ったり〜。意外と早く見破ったけど、もう遅いぜ。お前、逃げられないよ」

光努の周りにはナイフの柄に取り付けられた極細のワイヤーがあたりには張り巡らされて囲っていた。触れれば切れるワイヤーの罠。これで躲したらワイヤーに切り刻まれるということだ。

「つーわけで、ばいばい」

何本ものナイフを周りから一斉に投げる。今度は幻覚ではないのでよけなくてはならない。しかし避けては糸に当たる。光努は、

「横もダメ、上にも糸。ならば」

ドゴオオオオン!!!

耳をつんざくような激しい音が部屋に響いた。そして部屋には激しい土埃が充満した。

「ぐっ！何が起こった!!」

「ぬぬ！ベル！下だよ！」

ベルが下を見てみると床には大穴が開いていた。かろうじて見えた光努の動作は、大理石の床を素手でぶち抜いた。よけられないなら床に穴を開けるといふ随分と激しい荒業にでた。

「とんでもねーことしてくれるな。つーか……この下つて確か……」

「………ボスの部屋………だね」

「……逃げよ」

「……ボクも」

瓦礫の落ちた先にある部屋にて。瓦礫がおちたせいで土埃が大量にここでも舞って、

視界が何も見えなかった。そんな中で瓦礫からでてきた光努。

「いや、一階だけしか突き破らなくてよかった。それにしてもここは一体なんの部屋？」

周りを見渡して見ると、豪華な部屋。さっきの部屋や廊下なども十分豪華な作りになっていたがこの部屋はさらに調度品や壁やその他家具までいろいろと豪華となっているが今や瓦礫と泥とほこりによってポロポロとなっているが。

「高級そうな部屋だから社長室かなにか？……人の気配、しかもこれは……怒っているっぽいな……!!」

殺気を感じて光努はその場から飛び退くとさっきまで光努のいた場所の瓦礫が消し炭と化した。

「うるせえぞ、ドカスが」

『作戦隊長は買わずとも苦労が絶えない』

光努 side

人の声が聞こえた。怒気の籠った声の主は瓦礫の中、高価な椅子に座ったままでその左手にはオレンジ色の炎が宿っていた。

「いきなり攻撃というのはひどいんじゃないか？」

瓦礫の山を消し炭にした男に話しかける。見た感じ年齢は10代後半から20代前半くらいと思われる。

鋭い眼光とこの殺気、それに顔に着いた傷跡が只者でないと物語ってる。

「消えろ」

そう言つて再び左手を向けその瞬間巨大な炎が迫ってきた。

「よつと」

再び避ける！床もあつという間に黒焦げになってしまいうに中々の威力。とりあえずどうするか。

1・戦う

2・逃げる

この選択肢の中から何を選ぶかで今後の展開が決定する。

『戦う』を選んだ場合は………相手は問答無用で攻撃してくるだろう。

『逃げる』を選んだ場合は………相手は問答無用で攻撃してくるだろう。

……あれ？どっち選んでも結局攻撃されるんじゃない？

ちなみにこう考えてるあいだも攻撃をされてる。

さっきの炎もだが蹴ったり殴ったりとしてきてる。

もちろん俺は避けたり避けたり避けたりしてるがな。

おかげで高価な調度品の数々があつという間に炭の塊となった。

あー……もつたない。

「ちっ、うろちよろしやがって」

そう言つて右手に握られていたのは銃。

黒い銃身に赤い『X』の模様が入った自動式拳銃。

銃程度ならなんとかなるな。よし！逃げるか。

「カッ消してやる」

銃に炎が灯った。力を貯めてるっぽいな。やばいかな？

というかホントにこんなところで放つつもりかよ。人のこと言えないがコイツもた
いがい容赦なしだな。

「今度こそカッ消えろ！」

とある建物の一室で、尋常じゃない爆発が起こった。

ドオオン!!

「まあー、何かしら？」

「ボス!!」

「派手にやっつてるみたいだね」

「ししし、ボスの部屋から離れて正解♪」

「う、おい!!なんの騒ぎだあ!?!」

ボスを心酔するレヴィはいち早く部屋に向かい、スクアーロとルツスーリアも部屋に
向かう。

事情を知ってるベルとマーモンはあえて部屋に近寄らないようにするのであった。

光努 s i d e o u t

スクアーロ s i d e

ドオオン!!

どこかで大きな爆発音がした。

!?なんだ!今の爆発音。聞こえた場所を聞く分にボスの部屋からしたな! 一体何が
あったんだ。

いくらうちのボスがキレやすいっていつてもそう簡単に憤怒の炎を使うとは思えね
えが。

仕方ねえな、行ってみるか。

「うゝ おおい!! なんの騒ぎだあ!?!」

「あつ、スクアーロ様! どうやらザンザス様の部屋にて爆発が起きたようです」

「ちっ! やっぱりあのクソボスがあ! 余計な手間を増やしやがって!」

ボスの部屋に向かう途中にレヴィとルツスーリアの後ろ姿が見えた。

「あら、スクアーロ。ボスが何かしたみたいよ」

「ベルとマーモンはいねーのか!?!」

「二人とも用事があるってどこかいったわよ」

「ちっ! あのガキ共!」

そうこうしてるうちにあつという間にボスの部屋の前。ドアは中から吹っ飛んで廊

下の壁にぶつかって砕けていた。中からは煙と火の粉で充満していた。

「ボスー!!」

レヴィはすぐさま部屋の中に突っ込んで行きやがった。

「一体何があつたのかしら?」

「ぐはっ!」

さつき入ったレヴィが吹っ飛ばされて出てきやがった。

「うゝ おおい!! ボス!! 何があつたあ!!」

「うるせえ、ドカス共が。とつとと片付けろ」

「んだと!?!何を撃ちやがった!」

「侵入者だ。とつとと捕まえてこい、カス共が」

「侵入者だと!?!」

そういえばさつきレヴィがやられたとか言ってたな。

ボスの部屋に来てやがったのか。

ガキだつて報告されてたが、ボスに炎と銃を使わせるほどの使い手だったというのか
?

うちのボスとまともに戦えるやつなんてそうはいねえはずだが。一体何者だつて言
うんだ。

「レヴィ!もつと侵入者のことを詳しく教えろ!」

とりあえずレヴィを蹴つ飛ばして起こしてから話を聞かか。

スクアーロ side out

ヴァリアー本部から約2キロほど離れた木の上。

「ここまでくれば大丈夫か。それにしても派手にやったな」

光努の目線の先には少し前までいた場所が壊れ煙を上げてるのが見えた。

XANXUSの攻撃により部屋が崩壊したと同時に外に飛び出して、気配を消しそのまま一直線に建物を離れた。

そして現在木の上で一息ついていた。

♪♪♪

「もしもし?」

『あーおれおれ。久しぶり』

「詐欺はお断りです」

ブチ。

「この後どうしようかな」

「そんな光努くんにこれ! 『ナマケモノだつて使いたくなる携帯電話の使い方』。これで携帯の使い方もバッチリ!」

木の枝に座っている光努の隣にいつの間にか人が増えていた。

和服を来た人物。着物を着て袴を履いた格好に、下には下駄を履いた日本風の格好をしている。

特徴的なのは顔につけた仮面。白銀の仮面に黒いラインの入った奇妙な仮面。銀色の髪が仮面から出ていた。そして胸には白いおしやぶりをつけていた。

「ハクリ？うわっ・・・なにその格好。小さっ」

「好き好んでこの格好じゃないんだけどな」

「その仮面はファッション？」

「かっこいいだろ」

（微妙だ・・・）

赤ん坊サイズのハクリは木の枝から跳んで光努の頭の上に座った。

「それでどうしたの？その体とおしやぶりは」

「んん、ちよつとした遠足のルールかな」

『ミッションインキャバツローネ』

現在午後5時頃。そろそろ太陽が沈みかけて夕日が見える時間帯。

イタリヤのとある屋敷の近くの茂みにひとりの人間がいた。

「台所はここから少し遠いな」

少年、白神光努は茂みの中から明かりの着いている屋敷を見ていた。

さて現在光努は台所を探しているのだが別にお腹がすいているわけではない。

まあ厳密に言えばお昼に食べたけどそろそろ夕食時だからお腹なすいたなくらいにはすいているけど（結局すいてるじゃん！）

今回のミッションは盗まれた機密書類の奪還！——ではなく。

それは少し前のこと。

「それでルールって何？てかなんで赤ん坊？」

「それはこのおしやぶりに秘密がある」

ハクリは自分の胸に着いているおしやぶりを指す。

「なんだ？そのおしやぶりは？」

「これは最強の赤ん坊といわれるアルコバレーノのおしやぶりと同じようなものだ。このおしやぶりの呪いで赤ん坊の姿になっている」

「最強の赤ん坊？呪いで？それにアルコバレーノって虹のことだな」

「そう、全部で7人のアルコバレーノがこの世界に存在する。全員俺のことは知らないけどこのおしやぶりのことはなんとなく感じ取ってるかもしれないな」

「そうか。でもそんなのなくともいいだろ？」

「じつはこのおしやぶりを外してしばらくするとこの世界は崩壊する」

「……そんな危険なもの返してくれば」

「俺専用だからしょうがない。本来なら世界の維持に必要なものだが私たちが来たことによりその分の世界が歪んだから正常にするのに必要なんだ」

「ぶーん」

「そもそも別次元の場所に来るには場所によってルールが追加されて来るんだよ。これもその一つ」

「まあどうでもいいや」

「いいのかよー!」

「俺には関係のないことだしな。つまりハクリがつけてればいいんだろ? この世界にいる間はつけてろよ。つけても別に困らないだろ。小さくなる以外は」

「これおしゃぶりに炎灯すから結構力使うんだぜ」

「炎?」

「後で教えてやる。それよりハーゲンダッツ食いに行こう」

「アイス? ここは森のど真ん中だぞ。ていうかどこだよ。日本ではないと思うけど」

「ああ、ここはイタリアだよ。それよりハーゲンダッツだ」

そう言うとき光努は何かを感じた。何か妙な感じ。

「おい、なんだソレ」

光努の頭の上にいるハクリの小さい手のひらから妙な炎が出て宙に浮かんでいた。

「ただの擬似テレポーターションだよ♪昔知り合いに教えてもらったんだ。というわけで行ってこい!」

「なんだとおお——」

光努は炎に吸い込まれてどこかに行った。残ったハクリは人知れずどこかへ行くのであった。

「しまった！回想シーンなのに全然わかんねー!!」

情報の分析ができない作者に変わって俺が説明してやる！

ハクリの出した謎の炎によって元いた場所からどこかに移動した俺。

気づいたらやはり森の中。そばにあったメモにはハクリが書いたと思われる文字。

メモには「ここから北西に200メートルの場所にある屋敷の台所にハーゲンダッツが2つあるからとつてくるといい。戻ってきたらここで落ち合おう。byハクリ」と書かれていた。

どうあつてもハーゲンダッツを持ってこないと現れないらしい。ハクリを探すの至難の業だから向こうから出てきてもらうしかないので俺は結局ハーゲンダッツを取り

に行くことにした。

ならもらいに行けばいいじゃないかって？それは無理。メモには「誰にもバレないよ
うにしましょう（要注意）」と書かれていたからどうかこつそりと奪うしかないな。ま
あ見つかったらそれはそれでしようがないよね♪

安心しろ。ちゃんとハーゲンダッツ2つ分として1000円札をおいておこう。お
釣りは相手に迷惑料として置いておいてもらおう。これで一安心（どこか!?!）
「さてと、まずは台所の場所を探るか」

屋敷のとある一室。

広々として快適そうな部屋のお椅子に座っているのはまだ若い男。

少し長めの金髪をして首筋から左腕にかけて刺青。肩には小さい亀をのせた青年。

そばには黒い服の部下と思しき男たちが数人いた。

「ボス。日本へ行く用意が整いました。明日の飛行機で行けます」

「そうか。サンキューな。リボーンに会うのも久しぶりだし楽しみだな」

ボスと呼ばれた青年はディーノ。跳ね馬と呼ばれるキャバッローネファミリーの若きボス。

「どうやら日本へと行くようだ。」

「よし。そろそろメシにするか」

「そうですね。広間に用意されています」

「ああ」

ディーノと部下が部屋を出て少し歩くと廊下の上に何やら黒い物体が落ちていた。

いや、よく見ると黒いのは服。ディーノの部下と同じを黒服をきた人間が廊下に落ちる、もとい倒れていた。

「ボス！」

「ああ！大丈夫か!?イワン！」

そばに駆け寄って起こす。イワンと呼ばれる部下の男。どうやら気絶しているようだ。特に目立った外傷はないようなのでひとまずディーノは安心した。

「ロマーリオ！直ぐに屋敷を捜索だ！全員2人1組で当たれ！」

「イエス！ボス」

「どうやらキャバッローネに客が来たみたいだな」

デイーノ side

懐かしい家庭教師のリポーンに会いにくくために日本行きの準備を済ませてひと段落したと思つたら騒がしくなつたきたな。

とりあえず屋敷を少し見て回ると倒れていたのはさっきの一人だけ。ひとまず安心したけどうちの部下だつてそう簡単にやられるたまじやない。誰かに気絶させられたみたいだから次の被害が出る前になんとか侵入者を見つけないとな。

「ボス！3階の窓が一つ外れてます！」

「外れてる？壊されたんじやなくてか？」

「ええ、窓枠から綺麗に外れてました。ちなみに窓ガラスは一枚も割れてませんでした」
「まあ・・・なんとというか・・・随分と荒っぽいような・・・荒っぽいような・・・」
まあこれで侵入経路はわかった。誰にも気づかれずに3階から侵入となると随分と手練かもしれないな。

ひとまず全員に探索するように言ったが相手が相当なやつだとあいつらじゃ分が悪いかもしれない。

というよりまずは見つけないとどうしようもないな。人相もわからないし何か起きるまで待つか。

俺は廊下を通って広間に入る。

「うまいーこれが本場のパスタか。ん？そいういえば飛ばされたからここがイタリアかどうかも分からないな。まあうまいからいいか」

「……………」

確かにさっきロマーリオが広間にメシの支度をしたと言っていた。そして俺は探索活動をしてこの広間にやってきた。目の前に広がるのはテーブルに乗る料理を食べているひとりの少年の姿だった。美味しそうに今日の晩飯であるパスタを頬張ってる少年は特徴的な白い髪をした中学生くらいの子供。

「……なあ、お前は誰だ？」

いろいろと疑問を持ったが、俺は意を決して話しかけた。

デイノ side out

もぐもぐもぐ。

「……なあ、お前は誰だ？」

もぐもぐもぐ。

「……」

もぐもぐもぐ。

「ひとまず飲み込んでくれ」

ごっくん。

「あ、ご馳走様です」

「あ……ああ、お粗末さま……て違う！お前は何者だ」

ディーノは再び問うと光努は椅子から立ち上がる。

「白神光努。そして済まないが……あなたには寝てもらおう」

「なに！お前はどこのモンだ！キャバッローネに何か用か？」

「キャバッローネ？あんたの名前？」

（見たことぼけてるようには見えないな。ここがどこだが知らずに来たっていうのか？）

その時ディーノの入って来た扉から部下が入って来た。

「ボス！イワンが目を覚ましました！て、誰ですか？」

「ロマーリオ。俺もまだわからないんだがな。おい。戦う気はないんだが少し話をしないか？」

「まあ後で眠らせればいいか（ぼそり）それで何の話する？」

ディーノは最初の方をあえて聞かなかったことにして交渉の余地があるから話をまですることにした。

とりあえずテーブルに二人とも座ってロマーリオの入れてきた紅茶を飲む。

「紅茶って美味しいなく。クツキーとかない？」

「……お前って確か家に侵入したんだよな？」

「そうとも言おう」

「とりあえずお前はどこかの組織の者か？」

ディーノにはいろいろと疑問があった。そもそもまだ十代の子供が一人でこんなところにも、しかもマフィアの屋敷に侵入するなど目的とかいろいろと聞きたいことがあったがひとまず素性から聞くことにした。

「違おうよ」

即答されたので少し面食らってしまった。

「じゃあこの家に来た目的は？」

「ハーゲンダッツ」

「は？」

デイーノは一瞬間き間違いかと思った。しかしそれもしようがないだろう。

目的を聞いたのにアイスの名前が出たのだから。

「この家の台所の冷蔵庫にあるハーゲンダッツを頂きに来た」

「・・・・・・・・ボス・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

デイーノも反応に困ってしまった。これがキャバツローネファミリーに攻めてきた別のマフィアだったのなら迎撃するのだが侵入してきたのは子供。しかも目的はアイス。一瞬デタラメ言ってるのかと思ったがデイーノには目の前にいる光努が嘘をついているようには見えなかった。

それゆえにどう対応していいのか本気で困ってしまった。

「・・・・・・・・ロマーリオ。この家の冷蔵庫にハーゲンダッツはあったか？」

「え？・・・・・・・・ええ。確か2つ程残っていましたね」

「じゃあ頂戴♪」

無邪気な笑顔でそういう目の前の少年。デイーノには、その少年が悪いやつには思え

なかった。

「ハハ、もし嫌だつて言つたら、お前は どうする?」

「もちろん実力行使に決まつてるじゃないか」

「クク、ハハハ! ロマーリオ。冷蔵庫のアイス持つてきてくれ」

「ククク、オーケー、ボス」

笑いをこらえつつロマーリオは台所に向かった。

「それで、なんでこの家に来たんだ?」

「この家の冷蔵庫の」

「いや、そうじゃなくて、なんでわざわざこの森の方にある屋敷に来たんだ? しかも冷蔵庫の中のハーゲンダッツなんてピンポイントなこと。あるかもわからないのに」

「……まあいろいろあつてね」

「なんだか苦勞してる空気を感じたのかあえてディーノはこれ以上聞くのをやめるの
だった。」

イリスファアミリー編

『人間大砲の威力は人によって変わるぞ』

「確かこの辺だったな」

手に下げたビニール袋の中にあるのは二つのハーゲンダッツ。これだけ見るとあたかもコンビニに行つてアイスを買つてきた帰りみたいだが光努が行つてきたのはマフィアの屋敷。

デイーノに平和的にもらつたアイスを持つて再びこの地へやってきた時の森の中へ戻つて来た。

「おつかえりー♪」

声をかけて来たのは赤ん坊姿のハクリ。いつからいたのか、もしかしたら最初からいたかもしれないな。

「ほらよ。2個もらつたから一つな」

袋から取り出したアイスを放り投げるとハクリはうまくキャッチして蓋を開けてす

ぐさま食べ始めた。

え？仮面があるのにどうやって食べたかって？箱ごと仮面の下に入れて数秒したら空っぽの箱と蓋だけ取り出したよ。正直ドン引きだ。まあこいつの奇行にはもう慣れっただけだね。

「いやー、やっぱりアイスはうまいな。特にハーゲンダッツはうまい」

「それでこれからどうするの？」

「大丈夫。この世界はなるように出来てるからな。それとこの世界の人間に別世界の話はするなよ」

「なんで？」

「もし話をしたその瞬間」

「どうなるんだ？」

「世界が歪むかもね」

「歪むって・・・」

「わかったか？それじゃあそういうことでちよつと行くか、来い」

「は？」

光努はハクリとともにまた炎に飲まれて消えた。

ここは秘境ともよばれる程の森。巨大な木が生い茂って入ったら迷いそうである。

そんな森の中にぽつんと置かれるように木の影になるように目立たないように家があった。

石造りでできた2メートル程の立方体の建物。窓の類は無く、石でできたドアだけがあつた不思議な家だった。

「なんだこれ？随分とシンプルなデザイン。古代人の家？」

「まあ確かに昔の物だけど。それより中入ろう」

家の前にいたのは先ほどイタリアの某所から移動した光努とハクリ。

妙な森の中、妙な石造りの家とも呼べるか分からない小さな建物に入る二人。

鍵は特にかかつてないらしくドアを開けて普通に入る。

入ると目の前には地下へと続く階段があつた。

コツンコツン。

「コツンコツンって昔の遺跡か何か？」

「もちろん。かれこれ100年以上は軽くたつてるかな」

「それにしては……随分と綺麗だな。最近綺麗に加工されたばかりみたいだぞ」

「ふーん。不思議だね〜♪」

(こいつ絶対何か隠してるな!)

そうこうしているうちに階段も終わって地面に降り立つ。幅は約1メートルほど。

目の前には地面にくっついていてる大きさ30センチ程の立方体の石でできた箱。

「なんだこれ？」

「(にやり) 光努、ちょっとこの箱壊してみてくれよ」

「ん? まあ別にいいけど」

そう言つて光努は足を上げて箱の上に振り下ろした。

ガアアン!!

「!?」

光努の足のしたにはヒビ一つない石の箱があつた。

光努の力なら石程度、簡単に砕くことができるはずなのに目の前にある石には壊れるどころかヒビ一つ見当たらなかった。

「なんだこれ？そんな頑丈には見えねーぞ」

「ククク、アツハツハツハ！そりゃ無理だよ」

「……………どういうことだよ」

「とりあえずこの石造りの箱も、この空間も、建物も全て力だけでは崩れないようになってるんだよ」

「それわかってて壊してみろって言ったのかよ……………」

「アハハ、まあいいじゃないか。それよりその箱に触ってみてくれ」

「こうか？」

光努が手の平を箱の上に乗せると箱が光った。

「な!？」

そうすると光努の体から何かが溢れ出た。

「これは！白い炎!？」

「予想通りだ。光努、危険じゃないからそのまま待つてろ」

「マジかよ……………」

光努の体から出た白い炎が箱に吸い込まれていった。すると箱の蓋がひとりで外れて床に落ちた。

「箱が開いた！ハクリ、今の炎はなんだ？」

「とりあえず中身見てみー」

「ん？なんだこれ？」

入っていたのは小さい箱。それ以外何もない。

箱を取り出して開けて見ると中に入っていたのは一つの指輪だった。

中心に透き通るような白い石がはめ込まれて装飾の施された指輪だった。

「指輪？」

「おー、おめでとー。それ今から光努の物だからね」

「え、マジ？もらっていいのか」

「開けたのは光努だからな。大事にしろよ」

「・・・まあもらえるのならもらつとくよ」

「じゃあこれで首から下げとけば？」

ハクリが銀色のチェーンを取り出して光努に渡した。準備がいいなと思いつつ光努

は指輪をチェーンに通して首から下げて服の下に入れといた。

「じゃあ、封印開放したところで」

「封印開放？おい、これ開けて良かったのか・・・ってちよつと待て！」

光努はそこでハクリの出した炎に飲まれて消えた。

白い雲が浮かび、太陽だよく出ている晴れ間。

誰かの所有地なのか、どこなのか、広大な敷地の中央ほどに位置する大きな屋敷。その玄関前からなにやら楽しげな子供の声が聞こえてきた。

「隊長ー」

話しかけたのは2人の子供。およそ小学生くらい少年少女。

二人とも傍から見たら同じような顔をしているのでおそらく双子だと思われる。

お互い肩にかかる程度の少し長めの黒髪をして似た髪型でいるからやっぱり傍から見たら服装しか違いがわからない。若干女の子のほうが活発そうかなという程度。

「どうした、リコール」

答えたのはそばにいた男性。

黒い髪と黒い背広。ネクタイまで黒い黒づくめの20代から30代程に見える男性は、声をかけてきた双子の方を振り向いた。

「あたしはリルだよ？」

「僕はコルだよ。略さないでよ」

「そうだな。ちなみに俺は隊長じゃなくて灯夜だ」

「ねえ灯夜ー」

「どうしたコル」

「なんか降ってきたー」

「降ってきた？」

ドオオン!!

その瞬間近くで何かが爆発したような大きな音が響いた。

「なんだ！」

「あー、落っこちた」

「空からね。びゅーんって」

「わかったわかった。それで落ちたのはどこだ？」

「火薬庫かダイナマイト倉庫か危険薬物保管庫のどれかかも」

「なんでそんな危険なところしか選択肢がないんだ！それで何が落ちてきた？」

「子供ー」

「多分中学生くらい」

「子供？じゃあ生きてないな。埋葬してこよう」

「自分だつてやること早すぎ」

「ていうか考えすぎ」

たわいもない（？）会話をしながら落下物が落ちた地点にやってきた3人。

どうやら落ちた場所は危険な物がない建物だったようで特に爆発などはなく2階建ての建物が崩壊して行くくらいだ。

「新しく建てるにはまずは瓦礫をどかさないと。コル、リル、今すぐルイを呼んでこい！パワーシヨベルで一気に終わらせろ」

「いやいや、その前に人命救助が先でしょ！」

ドガシャーン!!

二人の子供と一人の男性が会話をしていると、話の中心に位置していた瓦礫の中から激しい音が聞こえ、内側から爆ぜるようにがれきが吹き飛び、中から人影が出てきた。

「灯夜、誰かいるよ。生きてるよ。びっくり（棒読み）」

「ホントびっくりだね（棒読み）」

「お前たち、絶対驚いてないだろ」

ガラガラガラ。

瓦礫を外側に押し出ししながら一人の人間が出てきた。

柔らかな白い髪をした中学性くらいの少年。体のあちこちくつついた瓦礫の破片が立ち上がって動いたたびにこぼれ落ちた。

「あー、ついてないな。あのヤロー……絶対後でシめてやる」

誰にも聞こえないくらいに呟かれたその言葉には明らかに殺意が含まれていた。

「灯夜ー。ほらほら。私の言ったとおり」

「そうだな。どこの子供だろうか。ひとまず無事なところを見るとただの子供じゃないみたいだな。リル、コル、迎撃だ」

「いいの？」

「やっちゃって？」

「子供には子供。あいつが敵かどうかも分からないからな。ひとまずあいつを戦闘不能

にしてから事情聴取だ」

「普通逆じゃないの？」

「気にするな。行つてこい」

「りようかい」

双子の姉弟は瓦礫の山に向かっていった。

光努 side

「あー、ついてないな。あのヤロー・・・絶対後でシめてやる」

さすがにこう何度もポンポン飛ばされると温厚な俺も怒っちゃうぞ？

しかしあの移動術は是非とも覚えたいな。いろいろと便利そうだし。でも俺炎を出す曲芸とかできないしな。どうするか？やっぱ直接ぶつ飛ばすしかないよな。

「それで・・・殺気はないけど何の用かな。少女よ」

「てい」

脚をかがめてしやがむとさつきまで頭のあつたところを刀が横に通った。

いや。刀だけあの大きさと脇差、いや小太刀？。使い手が子供だから普通の刀に見えたよ。

後ろを振り向いたら黒髪の女の子が脇差を振った状態で止まっていた。

「あれ？避けられちゃった」

「なんの用だい？俺は別に父親の敵ってわけでもないぞ？」

そう言いながらその場で飛び上がるとさつきまでいた場所に今度は後ろから別の刀が突かれた。そのまま一回転して少し離れて地面に降り立つと眼前には脇差を一本ずつ構える同じ顔の少年少女（どっちがどっちは服装からすぐわかった）がいた。

「迎撃ー」

「いざ尋常に」

どうやら俺を迎撃するみたいだ。なんでか知らないが。ここ私有地だったのかな？
だった悪いことしちゃったかな？建物一戸壊しちゃったし。

「まあ待て待て。ここは話し合おうじゃないか」

「むりー」

「灯夜が事情聴取は戦闘不能にした後だつてさ」

「ふーん。つまりどうあがいても戦えと」

「あつたり〜」

「はあ・・・」

しようがないな。子供相手に気が乗らないけど。

「軽く説教でもしてやるかな♪」

『謎の初代と咲き誇る花』

「それでどういうわけだ」

「リルとコルじゃ相手にならなかったか。二人とも弱くはないんだがな」

「きゅ〜」

光努の両手の中で二人の子供は仲良く気絶していた。

「ほら」

「どうも。二人が迷惑をかけたな。まあ中に入れ」

お前のせいじゃないのか？と思つたが光努はあえて突つ込まないでおいた。

リルとコルを引き渡して灯夜と一緒に壊れた建物とは別の建物に入っていく。

「それでここどこ？俺何も知らずに落ちてきたからさ」

「まあ見てればなんとなくわかる。ひとまずお互いに情報交換をしようか」

「了解」

リルとコルはそばにあるソファの上に寝かせておいて二人はテーブルについて紅茶を飲みながら話を始めた。

「俺から話すことは一つ。名前は白神光努。気がついたら空中ダイブしていた。以上」

「随分とわかりやすいな。内容は全然わからないけどな」

「それでここどこ？」

「ここはイリスファミリーの敷地内。ここは母屋だ」

「ファミリーってことはマファイア？」

「まあそうとも言えるけどそうとも言えない。どちらかと言うと企業に近いかな」

「企業？何か売ってるの？」

「まあいろいろだな。幅広く企業してるからな。俺が社長代理だ」

「代理？社長は？」

「いない」

「は？」

「この企業、というよりイリスファミリーには昔からこのファミリーを作った初代

ボス以降、ボスがいないんだ」

「どうして？まさか初代ボスがずっと生きてるとでもいうのか？」

「まさか。まあ死んでるのか分からないが」

「どういうこと？」

「初代イリスは消えた。そしてボスになるのに証が必要なんだ」

「証」

「初代イリスが深い森の中に証であるリングを隠した」

「リング？」

「ボスの証は初代ボスが持っていたときれるフィオーレリングだ。これがレプリカだ」

そう言って懐から取り出したのは指輪。真ん中に透き通るような白い石がはめ込まれ装飾の施された指輪、光努が手に入れた指輪と同じものだった。

「!？」

「どこにあるのかはわかっているが入っている箱を開くことができるものが初代以

降、一人も出ていない。これまで多くのチャレンジャーが試してみたが全く開かなかったそうだ」

「・・・そうか」

光努は服の中に入れていたチェーンに通したリングを取り出した。

「!・・・お前・・・それって」

「ああ、あんたが言っていた深い森の中で手にれた、フィオーレリングだ」

灯夜の表情は驚きの色で染められていた。思わずレプリカリングを落としてしまうほどに。

「あの箱を開けたのか？」

「まあな」

「……なるほど、お前は初代からボスと認められたってことか」

「そうなるのかな」

「ふうん……少しイリスについて教えてやるよ」

初代イリスファミリーボスはどこからか現れた。

古い記録を見ても初代がイリスファミリーを作った以前の記録が出てきていない。周りの人間のことなどは出てきたが初代個人のこととなると全くと言っていいほどわからない。

ファミリーを作った後のことなら記されているがそれ以前の経歴など、他はわからない。

そんな謎のある初代が作ったイリスファミリーが、現代でも知られる企業だった。一節によれば初代の友人がに対抗をして作ったとか。

一節によれば初代の暇つぶしが企業に発展したとか。

一節によれば初代が権力が欲しくて作ったとか。

説は多くあるが初代がなぜこの組織を作ったのかは正確には伝わっていないかった。

今や知っているのは本人とその当時いた仲間のみである。

昔は食料や武器などを仲間と生産して別の組織などに売っていた。

今ではそれに加えて多くの製品を取り扱っていくうちに大きな企業のようになっていたのだった。ちなみに悪徳商売や人体に被害の及ぼす薬物などは扱っていないのであしからず。しかし人も多くなつたのに依然として初代以降のボスはいなかった。

初代は圧倒的な頭脳や技術力を持っていて、それにより数々の起業や取引に成功していた。そんな初代がファミリーをある程度大きくしていきなり消息をたつた。

何の前触れもなく、誰にも告げず。最後に会話したのは、その時ファミリーにナンバー2でもあつた男だつた。

「なあ、次のボスだけどき」

「どうした、いきなり」

「このリングをボスの証にしようと思うけど、どうだ？」

「お前がつけてるフィオーレリングか。とんでもない代物だからボスくらいでないと思えないってことか？」

「いや逆だ」

「逆？」

「ボスに与えるんじゃないなくて与えられた者がボス。ボスはリングが選ぶということさ」

「リングに？ どういうことだ」

「いずれわかる。どんなことがあるかとボスはこのリングを持つ者だけとする」

「フツ。お前の無茶は今に始まったことじゃないからな。いいぜ。そのリングに合うやつが見つかるのを待っててやるよ」

「助かるよ。生きてるうちにいるか分からないがいつか現れるだろう」

「他の奴らにも言つとくよ」

「頼むよ。これで再び花が咲く手立ては揃ったからな。後は次の世代に任せるか」

「なんだ。まるでもうボスをやめるみたいないない方だな」

「ハツハツハ、リングはどっかに置いておくかな」

それ以降初代の姿を見たものはいなかった。

そしてボスの言いつけ通りに、新しいボスはリングを箱から取り出せないことにより現れることはなかった。

そしてファミリィは待った。再びボスが現れる日を。

「妙な話だな。ボスがいないのにボスを作らないとは。リーダーの存在は組織には大きいのに。よほどその男は初代を信頼していたってことか」

「ああ。初代は仲間と絆で結ばれとても仲が良かったらしい」

「それで、俺はどうなる？」

「まあ初代の言うとおりボスになるかな」

「いいのか？いくら初代が言ったからって企業のボスにそんな簡単になつて」

「まあ俺としては別に構わないんだがな。ボスがいなくても今までやってきたのも事実だし。ボスがいがいがまいがあまり関係ないしな。形だけボスでいてもさ」

カチン。

光努の中で何かスイッチが入った。

「形だけとは言ってくれるね。いいよ。ボスになつてもいいならボスになつてやろうじゃない」

「まあ頑張れ」

「言っておくがやるからには俺はボスをやるぞ。形だけでなくな」

「そう言ったら灯夜は少し驚いたような表情をしたけど直ぐに笑った。いいぜ。お前がどうなるのか楽しみにしてるよ」

光努がボスになるため険しいような険しくないような道が始まった。光努がボスになる日は近いのだろうか？

『リコールの宣言は武力を持って却下する』

「やだー！あたしは反対！」

「僕も反対」

「そう言うな。一応ファイオーレリングを持つ者はボスという言い伝えだからな」

「灯夜も持つてるじゃん！」

「俺のはレプリカ。あっちが本物」

灯夜は光努の首に下げられたリングを指して言う。

光努がボスをやるというて少しして目を覚ましたリルとコルの姉弟。

案の定、光努に挑んで返り討ちにあつたから光努がボスになるのに反対してきた。

社長就任反対というより子供がだだをこねてるようだ。

実際子供なのだが。

「じゃああの指輪がなかったらボスじゃなくなるんだね」

「いや、まあ・・・確かにそうなんだが・・・」

「コル！」

「了解」

再び小太刀を取り出して構える双子。光努もそれを見て迎撃態勢に入る。

「——なんてことはしないで。お前らストップ。俺戦う気ないんだが」

「指輪を渡したら止まってあげる」

「断つたら斬る」

「選択の余地なしかよ。灯夜！なんとかしてくれよ」

「フィオーレリングはボスの証だから取られたり無くしたりするなよ」

「それが今まさに狙われてるボスに対して言う言葉か」

灯夜はやれやれという感じで立ち上がって双子の方を向いた。

「リル、コル」

「何？」

「邪魔しないでよ」

「あまり部屋を壊すなよ」

「とうやああああああ!!」

言うだけ言って灯夜はどこかへ行ってしまった。

「というわけで」

「尋常に」

「覚悟！」

「あー、どうしよっかな」

光努VSリル&コルの第2ラウンドの火蓋が切って落とされた。

「せいっ！」

「よっ」

「とりやつ！」

「あらよつと」

「りゃー！」

「ほっ」

「らー！」

「甘いっ！」

リルとコルの斬撃をことごとく避けながら光努は母屋から離れていった。

決してこの双子は弱くはない。今も光努が避けた剣により周りの大木を簡単に切り倒している。ゆえにあの場で戦闘をしたのなら周りの被害が多いだろうと考えた。

さつきは瓦礫の山の仲だったから良かったものの今度は綺麗な部屋なのだから光努

もそう簡単に部屋を壊すつもりはさらさらなかった。

しかしリルとコルが弱くないとはいえ光努にはかなわない。一瞬で気絶させようとも思っただけとそれだとさつきと何も変わらないので光努は避けながらどうしようかと考えていた。その間にもよけられて不機嫌になったリルとコルの攻撃がヒートアップしていく。

「むむむー」

「リルー、当たらないよ」

リルとコルは一旦攻撃の手を止めて少し離れる。

「お前ら、諦めたら?」

「こうなったら。コル! 虚実の太刀やるよ」

「いいよ。どっちからにする?」

「2番目のやつでやるよ」

「了解」

(話が見えないな。何する気だ?)

リルとコルが構えるのはさつきまでと同じだがさつきまでと違うのは二人が全く同じ構えをしたということ。しかも並列に並んで同じ方向に同じ手で構える。服装だけ無視すればまるでステレオグラムの写真を見ているような感じだ。

「やつ!」

同じ掛け声と同時に二人とも全く同じ動きで上から小太刀を振り下ろしてきた。

(驚いたな。足運びや細かい所作まで完璧にシンクロしてる。けど、こんな単調な攻撃じゃ直ぐに避けれるぞ?)

振り下ろされた2本の横並びの刀を少し後ろに下がるだけで避けた。

「とりや!」

「!?!」

二人とも同時に振り下ろしてリルの小太刀はおろしきったけどコルの方の小太刀は途中で止まって下がった光努に向かって突きを放ってきた。

「危なっ!」

両の手の平で突いてきた小太刀を挟んで止めた。

「リル!」

「まっかせて!」

コルを止めたら今度はリルが再び振り上げて振り下ろしてきた。

「とと・・」

バックステップをして今度は少し離れたところに降り立った。

「虚偽の太刀と真実の太刀。二人のうち一人だけが全力で攻撃してもう一人が避けられたためにあえて力を抜いて攻撃をする技か。しかもこれは二人の人間が全く同じ動きをするから避けたあとの対応が遅れて攻撃が喰らうということだな」

やられる方が相手二人とも全力で攻撃してするようにしか見えず本来なら避けて終わりのところを避けてももう一人が力を抜いてるから軌道を変えることができ避けた人物を追って攻撃を行える。

初見だったら攻撃をくらって一卷の終わりというわけだ。

「大抵の奴らは避けられないのに。やるじゃん」

「まさか僕の太刀が止められるとは。残念」

「ちよつとびつくりだ。だがもう効かないぞ」

「フツ。あたし達の技がこれだけなわけないじゃない」

「そうそう。甘い甘い、お心甘だよ」

「ま、そう来るよな。来い！」

ヒュルルルル。

「「ん？」」

その時、空からミサイルが降ってきた。

『邪魔をする奴は蹴られてしまえ』

ヒユルルルル。

「ミサイル?」

誰がそう言ったかはわからない。けど上空を見上げると炎と煙を出しながら確かにそこにミサイルが迫っていた。長さ1メートルはあると思われるほどの大きさのミサイルが降ってきた。

「二人とも!下がれ!」

リルとコルはすぐさまミサイル予想落下地点より離れていった。

「らっ!」

光努は足元のソフトボール大の石を掴んで飛んでくるミサイルに向かって投げつけた。真つ直ぐにミサイルに飛ぶ石は見事命中してミサイルは空中で爆発を起こした。

ドオオオオン!!

ミサイルの爆風が周りの木々を揺らし、葉を巻き上げた。

「おーい！白い人ー！」

「大丈夫ー！白い人ー！」

「誰が白い人だー！俺の名前は光努だ！」

そう叫ぼながら爆風の中から光努が出てきてリルとコルの隣に立った。

「で、あのミサイルに見覚えは？」

「んー、多分」

「カルカツサの人たちかもね」

「カルカツサ？会社か？なんで狙われてる？」

「会社じゃなくてマフィア。多方向新しい武器の製造法とか奪いに来てるんじゃない？」

「そうだね。カルカツサって黒い商売してるみたいだし」

「へー、あれもそうか？」

煙の向こうから大勢の人間が現れた。顔には黒いマスクに全身に黒いプロテクターを装着して銃やナイフを持つてる軍団が現れた。総勢50名程の人物がいる。

「多分。ていうか敵丸出しだね」

「ホント。無駄に人数集めて」

「しようがない。迎撃してやるかな。俺もボスになったみたいだからな。二人とも下がってろ」

「へーきへーき。あの程度ならあたし達で十分」

「まあここは大人に任せておけ」

「大人じゃなくて子供じゃん」

「まあな」

「お前らー!」

「ん?」

黒装束が一人前に出て話してきた。

「抵抗するなら殺す。大人しくしていろ」

「なんだおめーら。アポはとってきたのか? じやなきやこころ先へは行けねーぞ」

「そうそう。人の家に入るときはまずはインタホンって教わらなかったのか

な?」

「きつと何も考えてないんだよ。使い捨ての兵隊ってこれだから」

三人に容赦なく言葉を浴びせられて黒装束の沸点は案外早く限界に近づいていた。その証拠に拳銃の撃鉄を親指で引いてナイフの柄に手をのばした。

「貴様ら。そんなに死にたいようだな。お前ら、殺れ」

一番手前の一人が拳銃を向けていきなり発砲してきた。

パンパンパンパンパン!!

「お前らな。この程度でこの家に攻め込んできたのか」

「な!」

光努のが握っていた手を開くと拳銃の弾がこぼれ落ちてきた。

「さてと。リル、コル。お前らは別にほうつておいても平気なんだな」

「もつちろん」

「上等!」

灯夜 s i d e

現在。母屋にて俺は書類整理を行っていた。

一応役職としては社長代理に近いものであるから当然仕事量もそれなりにある。まあ部下たちも優秀だからそこまで大変というわけでもないがな。

光努がボスとして現れたのには少し驚いたがあいつがボスらしくなってくれるのならありがたい。表では社長のいない会社というのもまずいからな。誰でもいいから入って欲しいところだったがまさか子供がくるとはな。

今はリルとコルと戦ってるみたいだけど早めに仲良くなつて欲しいな。

ドオオオオン!!

「なんだ?」

監視カメラのモニターを作動させて見てみると母屋の前の庭で煙が上がっていた。そこにいたのは先程まで戦っていた光努にリルとコル。そして対面して多くの黒装束の侵入者達だった。

「あれは、カルカツサファミリーの奴らか。随分と早く来たな。相変わらず荒っぽい」
カルカツサファミリーは何かとつけて家に敵対してくるからな。武器関係で。

自分の武器が売れないからって八つ当たりはやめてほしいものだ。

光努達は迎撃するみたいだな。せっかくだからここから見物でもさせてもらおうか。
「わざわざ俺がでる必要はなさそうだな。頑張れよ3人とも」

敵side

今俺たちが見ているのは夢だろうか？

俺たちは泣く子も黙るカルカッサファミリー。敵対組織のイリスファミリーに攻め込んで新しい武器の奪取および壊滅を目論んだ。

来てみればいたのはまだ二十にもならない子供。

中学生や小学生くらいの子供が3人いるだけ。

俺たちは楽勝だと思い手に持った武器で攻めた。

俺たちの勝利は揺るぎない——はずだった。

「ていつ！」

双子と思われる小学性くらいの子供。所詮は子供だと思って甘く見ていた。

双子の振るう小太刀によって銃弾や銃身やプロテクターが簡単に切り裂かれていく

様は夢を見ているようだ。この日のために用意した装備はもはや何の役にも立たなかった。

そして一番恐ろしいのは、

「吹き飛ばえええー!!」

もう一人の白髪の子供の蹴りによって一気に何十人もの仲間が吹っ飛んでいった。強固なプロテクターなどなんの意味をなさずに碎け皆気を失った。

どういうことだ？あの子供の蹴りはもはやそこらの兵器より破壊力があるぞ!!

地面がえぐれ木々が切れ、数分後にはもはや立っているのは子供が3人と俺しかいなかった。仲間は全員気を失って地に付してしまった。

「さて、後はお前だけだな。お前がリーダーか？」

「くっ!」

「倒して灯夜に引き渡そう」

「そうだね。その後は拷も・事情聴取しよう」

（あの子供今何を言いかけたあああー!!）

「こうなったら奥の手だ!」

俺が取り出したのは長方形のポッキーサイズのプラスチックの箱。

これぞ我がカルカッサの技術をつぎ込んで開発した小型爆弾LLB—2000だ!

小型であるにもかかわらず半径100m以内を一気に消滅させる程の威力を持つ恐ろしい爆弾だ。ここで爆発すればこの辺りの人間は全て吹き飛ぶ。

「お前らもこれで終わりだ」

「コル！あれって！」

「うん！やばいよ、リル！」

「……おいおい。まだ仲間がいるんだぞ」

「これで終わりだ!!」

俺は起爆スイッチを押した。

敵 side out

ザ——。

モニターの画面は真つ暗になり雑音しか流れなかった。

どうやら庭を映していた監視カメラが壊れたようだ。

「まさか最後は自爆とはな。バカなやつだな」

灯夜は書類仕事の手を止め、ため息をつく。

「無駄なのに」

『代役は時として生死の境を彷徨う』

庭が爆発で生じた煙に包まれた。爆風が周りの木々を思い切り揺らした。
「な……あ……バカな……何が!？」

爆弾の起爆スイッチを押したカルカツサ部隊の隊長が横たわっていた。周りの部下たちもさつき倒れたのと同じ状態。つまり爆発の影響を受けていなかった。

リルとコルはしやがんで頭を伏せて爆風を受け流していた。

そして光努は、倒れた隊長の前に立っていた。

「ふぎけるなよ」

「な……に?」

「まだお前の仲間がいただろうが。なのに自爆だと?そんなに任務が大事か?お前のしたのは意味のない自殺行為だ。得るものなど何も無い」

「ふ……お前らが道連れなら本望だ」

「お前の勝手で仲間を危険にさらすな！リルとコルもいたんだぞ！何かあったらどうする！お前が死んでも誰も代わりに責任をとるやつはいないんだぞ！」

「光努……」

「……」

リルとコルが光努の言葉に目を見開いた。子供とはいえ自分を攻撃した奴のことを心配してくれるのに吃驚していた。

「次同じことをするなら……今度は本気で潰す」

「くっ……」

そのまま男は意識を失った。

光努はリルとコルの元へ歩いていく。

「リル、コル。大丈夫か？爆風も結構強かったからな」

「うん、平気だよ」

「光努は？大丈夫」

「ハハハ、俺は頑丈だからな」

「3人とも！無事か!?!」

母屋の方から灯夜が走ってきた。

「灯夜。見てたのか？」

「まあな。よく間に合ったな」

「まあな。平和的に終わって良かったよ」

光努はやったのは簡単なこと。

男が起爆スイッチを押す刹那、足に力を込めて一足で男に肉薄し、男の意識を刈り取る。しかし倒れながらも起爆スイッチを押したのでスイッチが押されてから爆発までのコンマ数秒の間に、爆弾を壊さないよう加減をしつつ思い切り蹴り上げ上空へ押し上げた。そして爆発。

文字にするだけなら簡単だけど実際にやるとなるととても難しい。僅かな失敗が命取りとなる。

上空およそ300m程の所まで一瞬で上がったがやはり爆発力は強く、そして爆風もその分強くなっており周りの木々を揺らしカメラまで破壊した。

「そうか。それにしても……なつかれたな」

「ん？」

「えへへへ」

「……」

灯夜の目の前には光努にしがみついてぶら下がってる子供二人が目映った。

「この二人がここまで懐くとは、珍しいな」

「まあいろいろと。それよりこいつら全員どうにかしといてくれ」

「フツ。まあ任せておけ。二人は頼んだぞ」

「ああ」

その後、灯夜がトラックを持ってきて黒装束を全員積み込んでどこかへ持ち去つていった。

「さて、俺達は——ん？」

「zzz」

「スपीー」

「とりあえず母屋に戻るかな」

光努 side

とりあえずさつききの部屋に来てリルとコルを寝かせておいた。ひとまずやることもないから敷地内でも散策しておこうかな。

だいぶ広いこの敷地内。建物がいくつもあり灯夜やリルやコルが基本的に住んでいるのは敷地の中央にある母屋である。その周りに倉庫や工場、他にもよくわからない建物などが多く存在している。後は間に道や森、庭に他にもいろいろとある。

「さて、どこから回ろうか」

母屋から出て森の間にある道を歩いていると前方に何か落ちていた。

「……………」

落ちていたのは人間。背中程ある金髪を後ろで一つにくくって白衣を来ている10代後半くらいの男。目の前で行き倒れていた。

「……………おーい。大丈夫か？」

「……………」

「……………返事がない、ただの屍のようだ」

「だ…だれが…屍だ…」

「大丈夫か？」

「あー…頼む…技術舎まで…連れてってくれ」

「技術舎？地図とかあるか？」

「……………れだ…」

白衣のポケットから紙を出して腕を上げて渡された。地図を見るとこの道を

まっすぐ行けば技術舎とやらにつくらしい。

それにしてもこの男いったい何者？まあ別に敵というわけではなさそうだな。地図とか持ってたし。

ひとまず男を背負って道をまっすぐ歩くとなんだか近未来的なドーム状の建物が見えて来た。これは面白い形だ。

自動ドアとなってるドアをくぐって中に入る。

「お邪魔しまーす」

「ああ、いらつしやい。君は？て、主任！全く、また行き倒れてたんですか!？」

「また?！」

「ああ、すまないね。ここの主任でな。昔から疲れやすくてほんの数メートルを歩くだけですぐに疲れて倒れるんだ」

「なるほど。ここから母屋までの道に間で倒れていたよ」

「ああまたですか。よくあるんで気にしないでください。こちらで引き取りますよ。

「おーい！誰か手伝ってくれー！」

「あー、また主任が倒れたのか」

「あれほど誰かと一緒に行ってくださいって言ったのに」

部下と思われる白衣の男たちが数名来て主任と呼ばれる男を担いでいった。

「さてと、こちらは助かったわけだけど。君は？」

「あ、どうも。白神光努だ。イリスファミリーのボスになったからよろしく」

「ボスって、黒道さんが言ってた・・・ホントに見つかったんだ」

「黒道って誰？」

「ああ、黒道灯夜さん。オレらのボス代理の人」

「灯夜のことか」

「ええ。まあいきなりボスが現れたといってもピンと来ないんですけどね」

「まあそりやそうだ。そこで俺はボスになるにはどうすればいいのかと考えてみた」

「ふむ、それで？」

「今日はこの技術舎で仕事をする！というわけでよろしく」

「え!?素人がそう簡単に入れる所では・・・ていうか今は主任が寝込んでいるんですが」

「ちようどいい。一人抜けたから俺が入ろう」

「・・・まあ、どうぞ」

「ん．．．んは．．．」

「あ、主任。目が覚めましたか？」

行き倒れの所を光努に連れられて技術舎と呼ばれる建物に戻ってきた主任と呼ばれる若い男はベッドの上で目を覚ます。周りは機械だらけで作業をしていた部下の男たちは目を覚ました主任に声をかける。

「えーつと、どうなったんだっけなく。確か歩いていて．．．疲れて．．．そのまま倒れた」

「全く。あれほど一人で外出しないでくださいって言ったのに」

「ここには通りすがりの少年が連れてきてくれたのですよ」

「少年．．．そうか。礼を言わないとな。今どこにいる？」

「確かラインと一緒に第二研究室にいるはずですよ。確か少年の希望で一日体験入室
をしているそうですよ」

「そうか。俺ちよつと言ってくるよ」

男は部屋から出て廊下を歩いていく。少しあるいて第二研究室と書かれたプレートのかかっている扉を開けて中に入る。

「おーい、ライン。俺を助けてくれた少年は．．．どこ．．．だ．．．」

「ここは燃料をもう少し分散して左のブースターの出力をあと30%ほどあげよう」
「え？でもそれだと機体の強度が持ちませんよ。そろそろ限界ですし途中で破損しますよ」

「大丈夫だ。そこはこれをここで使ってフォルムをこうすれば空気抵抗が少し軽減されてダメージも分散され……………」

「確かに！……………これならなんとかかなりますね」

「後は……………して……………を……………すればいいはずだ」

「確かに！これは盲点、というより普通考えつきませんよ」

「まあ環境（というより世界）の違いかな？」

「そう言いながらよくわからない会話を二人はしながら手元でいろいろと機会を弄っていた。

「おーい、二人ともー」

「ん？主任じゃないですか！起きたんですか」

「おつ？無事だったのか。まあ疲れてるだけだったみたいだしね」

「そうやって動かす手を止めてひとまず話をすることにした。」

『スーツを着るのは最初だけでよくね?』

技術舎とよばれる母屋から少し歩いたところにある建物。

その研究室とは違う一室で紅茶でも飲みながら話す人の影が3つ。

「なんか今日は紅茶をよく飲むような気がするな。気のせいかな?」

「きつと気のせいさ。それより助かったよ。あのまま行き倒れるところだったよ」

「まあ今度からは気をつけることだね」

「それで今更だけどお前は誰?俺はこの主任をしてるルイ。よろしく」

「俺は白神光努。今日イリスファミリーのボスになったからよろしく」

「.....」

ルイはポカンとした表情になった。

「そうか.....ククク.....アハハハハ!そうか!お前が灯夜の言ってた突如現れたボスカ!まさかホントに子供か。本物のファイオーレリングを持つてるんだって?見せてくれ

ないか？」

「いいぞ。ほれ」

光努は左手のファイオーレリングを見せるとルイは興味深そうに見つめる。

「へー。こうして見るとレプリカとはやっぱり違うな。サンキュ」

「どうも」

「それで、さつきは何してんだ？ライン」

「ああ、はい。ボスとバイクを改造していました！ボスはすごいですね！とんでも

ないものができました！もはや兵器ですよ！」

「ふうーん。お前がそうまでいうとはな。光努だっけ？中々やるな。ライン。さつき

やってた資料見せてくれ」

「はいどうぞ」

「……………おいおい、マジかよ。すげーな。お前何者？」

「今日からボスだ！よろしく！」

「ククク。面白くなってきたな。よろしくな、ボス」

「ああ」

光努 side

次の日。

昨日はルイといろいろと研究して母屋に帰った。ルイって基本的に体力が全然ないが研究のことになるととんでもない実力を持っていた。にわか仕込みの俺よりはるかに技術力は高いな。俺のは別の世界に言つて培われた技術だからな。

この世界だけであそこまでの技術を持つとはすごいな。

そしてさつきも言つたけどあつという間に次の日。

ちなみに俺は住む場所ないからここの母屋に住むことになったのであしからず。

「光努——遊ぼ——！」

「遊ぼ——」

「いいよ。何やる?」

現在、リルとコルに懐かれた。灯夜が言っていたけどリルとコル、特にリルは気に入つたらすぐく懐くみたい。まあ刃を向けられなくて良かったよ。

「おーい。光努」

「ん？何ー？灯夜」

リルとコルと木の上限定の鬼ごっこをしていると灯夜が呼びかけてきた。何の用事だろうか？

「とりあえずボスが決まったから報告しておかないとな。ひとまずここらで一番大きい組織のトップに会いに行くぞ」

「え、マジ？それ絶対？」

「絶対だ」

灯夜には有無を言わさない迫力がある。後ろになんか修羅的なものが見えるぞ。

「イエツサー・・・」

「えー！光努ー！もつと遊ぼう」

「遊ぼう」

「悪いな。帰ったら遊ぼうな」

「・・・うん」

「いつてらつしやい」

「行つてきます」

「よし。行くぞ、光努」

「了解♪組織のトップってどんなやつかな？なんて組織？」

「ボンゴレファミリーだ」

光努 side out

同時刻某所にて。

「楽しみだな。イリスファミリーの2代目ボス」

「ええ。あそこは我々ボンゴレと古く長い付き合いなのに初代以降ボスがいないという変わった所でしたからね」

「それにボスが現れたということはフィオーレリングも見つかったようじゃ」

「!あの今まで封印されてたというフィオーレリングがですか!?!」

「ふふふ。楽しみだ」

「一体どんな人物が来るのでしょうか。9代目、そろそろ支度を」

「ああ。わかった」

とあるマフィアの屋敷でそんな会話がされていた。

「灯夜ー、俺窮屈なの嫌いなんだよな。というわけでスーツやめて私服着てもいいか？」

「お前もボスなんだから正装くらい少しくらいしろ。次からなら私服でいいぞ」

「しょうがないな」

光努は灯夜に言われたので渋々黒いスーツを着て来た。

そして黒い外車（しかも高級車）に乗ってやってきたのはとある屋敷。

「ここがそのボンゴレファミリーのアジト？」

「いや、ここはアジトの一つだ。いくぞ」

ドアの前でインターホンを押すと黒服の男が数人出てきた。

「イリスファミリーの黒道様ですね。9代目がお待ちです。こちらへ」

「そちらの方は？」

「ああ、気にするな。それより9代目は最上階か?」

「はい。お連れいたします」

光努と灯夜は黒服に連れられてエレベーターを上がり最上階の部屋へやってきた。

扉の前で黒服はノックをする。

「9代目、黒道様をお通ししました」

「通してくれ」

中から聞こえたのは年老いた人間の声。

扉を開けて中に入ると中にいたのは二人の人間。

年老いた温厚そうな老人に髪色が二色の男。

「よく来てくれたね灯夜君」

「久しぶりです、9代目。それにガナツシユも」

「久しぶりだな」

「それで灯夜君。もしかしてその子が・・・」

「はい。こちらが先日イリスファミリーのボスとなった、白神光努です」

「初めまして。ボンゴレ9代目。先日イリスファミリー2代目ボスとなった白神光努です。よろしくお願いします」

『世の中楽しんだ者が勝つ』

灯夜 side

光努が敬語使つてる！俺も少し驚いたがやればできるのか。

初対面だろうがなんだろうが問答無用で気楽に話すだろうと思つていたので9代目への挨拶を見たときは正直驚いた。年上でも地位の高い人物でも関係ないと思つていたけど、あいつにも礼儀はしつかりとあつたんだな。

まあ無作法というわけではないな。

「そうか。どんな人物が来ると思つたが君のような子が来るとはな」

「やつぱり意外でしたか？」

「まあね。それより敬語は少し堅苦しそうだね。気楽に話すといいよ」

まあ普通は9代目に気楽に話せと言われて普通に話せる奴など数える程しかいないんだけどな。

「そう？助かったよ。あまり敬語って好きじゃなくて。9代目は話がわかる」

「はっはっは。楽しそうだね」

やっぱり長くは持たなかったか。

まあ9代目も悪い気はしてないみたいだしよかったよかった。

「ガナツシユ」

「はっ。灯夜少し散歩でもするか」

「ああ」

部屋に9代目と光努を残して俺とガナツシユは部屋の外へ行った。

灯夜 s i d e o u t

9代目 s i d e

最初の印象は不思議な少年だった。

イリスフアミリーの灯夜に連れられてやってきたのは柔らかかそうな白い髪をした少

年。年齢は中学性くらい。その目には不思議な光が宿っていた。

悪い意味ではなく、目には好奇心のような光が見えた。そして真っ直ぐな瞳だった。2代目イリスファミリーのボスか。中々面白い少年がボスになったものだな。

「光努君。君はどうしてイリスファミリーのボスになったんだい？」

ガナツシユと灯夜がいなくなった部屋の中で聞いてみた。

聞けばこの光努君はどこからともなく現れてボスを引き受けたらしい。普通はファイアのボスになどそう簡単にならないのに。わしは気になったので聞いてみた。

「ボス？楽しそうだから！」

「楽しそうだから？」

「ああ！俺はここでまだ何もしてないからな。最初から大きいこととしてみるのいいかと思っただ。マファイアのボスは楽しそうだよ」

「ふむ・・・そうか」

「でも、気楽にボスを引き受けたつもりじゃないぜ」

「!!」

「仲間は守る。そしてファミリーも強くする。俺はやるからには全て超える。もしも目の前に立ちはだかるのならなんだろうと容赦はしない。たとえボンゴレだったとして

もね♪」

野心……ではないな。これは純粹に楽しくしたいということ。この子の目に映るのは真剣な楽しさ。仲間と共に楽しむために全力を尽くす……か。だからといってボンゴレを倒すつもりなど毛頭ないみたいだけどな。

ふふふ、面白い子だ。

「私達は敵対してないから戦うつもりはないよ」

「もちろん。じゃ！俺は帰ってリルとコルと遊ぶ約束してるから。またね、9代目！」

「またね、光努君」

私と会うのより遊ぶ約束の方が重要か。これからの君を楽しみにしているよ。

9代目 side out

「どうでした、9代目。イリスファミリーの2代目ボスは？」

灯夜と光努が帰って部屋に残った9代目とガナツシユが話していた。

「中々面白い少年だったよ。これからイリスがどうなるのか楽しみだよ」

9代目は楽しそうな笑をして柔らかに微笑む。

「そうですか。まだまだ子供だったんじゃないですか？」

「うむ。とても子供らしいけど子供とも思えないほどの者だったよ」

「そうですか」

「そういえば灯夜」

「どうした」

「ここは車の中。9代目の元から家への帰路。」

「イリスとボンゴレだどどっちの方がマフィア的には上なの？」

「ん？まあボンゴレの方が上じゃないか？」

「そうなの？意外だな」

「マフィア的にはボンゴレの方が上かもな。だがどつちかというといリスは企業の面が強いからな。だから企業的にこつちの方が上だな。ボンゴレとは傘下でも同盟でもないけど昔から仲が良いんだ。いつからいいのかは調べたことないからわからないがな」
「つまりどつちが上なの？」

「どつちもどつちじゃないか？」

「へー、地位的にはイリスもボンゴレ並に高かったんだ。戦力的には？」

「戦力？」

「うん！戦ったらどつちが勝つ？」

「どうだろうな？イマイチわかりにくいな」

「どつちかが一方的に勝つことはないのか」

「まあな。大体俺は負けるつもりはないからな」

「あ、なるほど。そういうこと」

そうこうしているうちに家に着いた。母屋の前で車から出てくる灯夜と光努。

その瞬間高度に向かって飛んでくる影。まるでミサイルのように飛んでいくのは、

「おつかえりー！」

「うおっ！リル！ただいま」

飛んできたのはリルで光努のお腹へと強烈にぶつかった。光努はそれをダメージの

無いように柔らかく受け止めた。

「おかえりー、光努、灯夜。何して遊ぶ？」

「ただいまリル、コル。そうだな——」

その日も楽しそうな光努達の声が響いた。

しばらくの日常的な話

『遊園地はスリルに始まる』

「マファイアランド?」

朝、広間のテーブルで灯夜とリルとコルとルイと食後の紅茶を飲んでいる時に灯夜が話した。

「ああ、9代目から招待をもらってな。行ってみるか?」

「灯夜ー。マファイアランドって何?」

朝食にパスタを食べていたリルは灯夜に質問する。

「マファイアランドっていうのはいろんな善良マファイアが資金を出し合って作ったリゾー
トアイランドで遊園地で遊んだり海で泳げたりする楽しいところだそうだ」

「遊園地! 光努行こっ!」

「行きたい」

「へー遊園地か。俺もたまには遊ぼうかな」

「ルイは直ぐにバテるだろ。でも楽しそうだ。行こうぜ灯夜」

「俺は急用があつていけない」

「急用？」

「前から招待はもらつてたんだが俺は用事が出来たから光努、代わりに行つて来い」

「しようがないな。リル、コル、ルイ！4人でマフィアランドに乗り込むぞー！」

「「おー!!」」

光努 side

そしてやつてきたのは豪華客船。どこからどう見ても立派な豪華客船。

さすがマフィア連中が金をかけただけある。果てしなく豪華な船だ。

「おおー、これは豪華な船だ」

「やったー！船だー！」

「楽しみ」

「もう・・・無理・・・疲れた」

「……」

ルイが早くもバテてしまった。ホントに体力がないやつだ。

まあ予約されてる部屋があるから寝かせて来るか。

「リル、コル。俺はルイを部屋に置いてくるから先に食堂に言つてろ」

「はい」

「わかった」

リルとコルはすぐさま船の中に入って走っていった。そういえば二人とも食堂の場所知つてるのか？この船来たばかりなのに。

イリスファミリーで暮らし始めて知つたがリルはかなり方向音痴だ。気づいたら妙な場所にいることがしばしばある。前にお使いに行くリルをつけて行ったら歩いて5分のスーパーに行くのに2時間くらいかかってたっけ。まあトラブルもその時はいろいろとあつたけど。

コルはそうでもないからリルもいつも迷子になるわけでもないのだけどな。二人がはぐれたら大変だな。まあリルといえど船の中から出ることはないと思うけど。

「さてと、まずはルイと荷物を運びに行くかな」

「コルー、こつちこつち！」

「そつちつて食堂じゃないんじやないの？」

「きつとこつちだよ！早くー！」

「はいよ」

光努の想像通り、リルとコルは迷子になっていた。正確にはリルがコルを連れ回して迷子になっているという感じだ。コルからしたらまあ別に迷子になっても船からでなければいいかな？という感じでリルに連れ回されてる。

「!?」

「どうしたの？」

「気配がする。あえて隠してないって感じの」

「ホントだ。あの鎧からするね」

壁に寄り添うように建てられた甲冑。そこから少し気配が漏れているのはリルとコルは感じ取った。子供だけどここの二人には気配を感じるくらいならわけないようだ。

「水穿の太刀!!」

リルの取り出した小太刀で鎧を一突きにする。まるで鎧が紙のように一気に小太刀が貫通した。刺さる瞬間甲冑の兜のみが飛び上がってコルの頭の上に降り立った。

「ちやおつす。久しぶりだな、二人とも」

兜を脱いで現れたのは赤ん坊。小さい鎧を着込んで騎士の姿（というよりコスプレ？）をし、胸に黄色いおしやぶりをつけた赤ん坊だった。

身のこなしはもはや赤ん坊ではないが。

「リボーンだ！ やっほー！」

「久しぶり。来てたんだ」

「オメーらがいるってことは、灯夜も来てるのか？」

「ううん。灯夜は用事があるから来れないって。代わりに光努が来てるよ」

「イリスの新しいボスだつてな。9代目が言つてたぞ。俺も会つてみてー」

「船の中にいるから後で会えるよ」

「リボーン遊ぼ！」

「悪いな。今は隠れてる途中だ。後でな」

「うんわかった！ またねー」

「ばいばい」

「ちやおちやお」

マファイア界最強の赤ん坊、黄色いおしゃぶりアルコバレーノ、リボンとリルとコルは知り合いだった。

光努 side

「さてと、ルイも荷物と一緒に部屋に置いてきたし。食事でもするかな」

二人とも食堂にいればいいんだが……まあなんとかなるよね。

食堂に向かう廊下を歩く。

「光努ー！」

「ん？リルにコル。食事は食べたか？」

「食べてない」

「……コル？」

「ちよつと船を探検してた」

リルに連れ回されてたか。まあちよつどいいからみんな（ルイを除く）で食事にする

かな。

「よし！食事にするぞ！」

「おー！」

そしてやってきたのは食堂。

「高級料理だー！」

「これ全部食べていいの？」

「あはは、俺たちの分だけな」

予約席に座って全部食べた。

そして時間は流れて船はマフィアランドに到着。

なんか船の中で色々と騒動があったみたいだけど……まあついたから別にいいかな。

「おー！遊園地だー！」

「すごい」

「光努、俺ホテルで休んで来るよ」

「はいはい、いつてらっしゃい」

やってきたのはマフィアランド！

島全体が遊園地やビーチそれにホテルなどの施設もいくつも存在する南の島のパラダイス。まさにドリームアイランド！

マフィアも遊ぶものなんだな。まあ仕事だけじゃやってらんないよね。

♪♪♪。

「もしもし?」

『よう光努、俺だ。楽しんでるか?』

「灯夜か。これから楽しむところだ」

『着いたならちようどいい。入島手続きをして来い。責任者はお前だからな』

「え〜」

『じゃあよろしく』

ブチ。

要件だけいって切りやがった、まあ手続きくらいならいいか。

「光努ー！ジェットコースター乗ろ！」

「僕は観覧車に乗りたい」

この二人は面白いな。見事に正反対のことを言ってるよ。

性格の問題か？双子とか三つ子って性格が変わるといふからな。

「俺はとりあえず入島手続きをして来るから二人で遊んでこい。後で合流するからな」

「わかった！」

「いってら〜」

一旦リルとコルと別れて手続きに行く。

そして『INFORMATION』と書かれる建物に入る。

「さって、受付はと．．．ん？」

受付に人がいた。基本的に気にも止めないと思うけどそこにいたのは子供。

多分中学生くらいいのツンツンした髪をした気弱そうな少年だった。

ここに來ているってことは代表？マフィアの？自分で言うのもなんだが中学生でボスになる奴なんていないだろ、普通。

「沢田ツナです。ボ・・・ボ・・ボングレファミリーの・・・」
ボングレファミリー!? 9代目のファミリー。

ということは9代目の部下の家族とかかな。9代目がボスなんだからあの少年、ツナって言ったか。ツナがボスなわけないからな。ボングレファミリーがボス2人で構成されているならわからんが（まあないと思うけど）

「すみません。白神光努。イリスファミリーです」

『逆年功序列の世の中ってどうよ?』

「えー！君マフィアなの!？」

ツナも驚いた。自分と変わらない年の少年がマフィアらしいのだから。まあ周りにリボンとか獄寺とか自分と同年はおるか赤ん坊にまでマフィアがいるのだからまあないこともないと思うけどツナは普通にありえないと考える。

「最近なつたんだ。えっと、ツナだっけ？へー、ボンゴレファミリーなんだ」

「い．．．いや、俺はマフィアなんかじゃ．．．というより君は？」

「ああ、俺は白神光努。光努とでも呼んでくれ。よろしく♪」

「お客様、ご推薦状かご招待状をお持ちでしょうか？」

「い．．．いえ．．．」

「ない」

「招待状なし．．．と。そうしますとマフィア審査が必要となりますね」

「マフィア審査．．．?」

「沢田様はこちらへどうぞ」

ツナが受付に連れられて別室に入った。

「あれ？俺は？」

「白神様はイリスファミリーボスの証であるフィオーレリングをお持ちなのでご本人様と確認されました。審査は必要ありませんのでどうぞマフィアランドをお楽しみください」

「どうも」

光努はツナの入っていった別室のドアを見てるとどこからともなく警備員らしき人間が部屋の中に入ってツナを掴んで出てきた。そのまま引きづられて行くのであとをつけて見てみると地下鉄にツナを放り込んでそのまま発信した。

「マフィアランドに地下鉄か。どこ行くのかな♪」

光努は地下鉄の屋根に飛び乗ってそのまま同乗(?)する。

少し走って地下を走っていた電車が外に出た。

いきなり出てきた太陽の光に光努は思わず目を細める。

「おー、いい景色。おっ、リルとコルだ」

ジェットコースターで移動中の二人が見えた。とても楽しそうなのでひとまず安心した。そしてしばらく電車の屋根の上で揺られ少ししたら電車が止まった。

屋根の上からこっそりと外を見てみるとツナと赤ん坊2人がいた。

「あのおしやぶりは・・・ふーん。あれが最強の赤ん坊と言われるアルコバレーノか。どっちも手ごわそーだな♪」

片方は黒いスーツに黒い帽子をかぶり、帽子にカメレオンを乗せた黄色いおしやぶりの赤ん坊。もう片方は軍服に背中に長いライフルを背負って頭に鷹を乗せた青いおしやぶりの赤ん坊。

二人は会った瞬間お互いに銃を取り出して打ち合いを始める。

一発軍服の頭に当たったけど無事だった。

「おおー頑丈」

光努 side

会話の内容から黄色いおしやぶりの赤ん坊はリボーン。

青いおしやぶりの赤ん坊はコロネロというらしい。

リボーンの説明によるとここは裏マフィアランドで審査失格で不法侵入された者をもう一度再審査させるために鍛える場所らしい。

なるほど。ツナは審査に失敗したからここに来てコロネロに鍛えられに来たということか。

そしてツナを見てみるが、中々不憫だなく。

見てる限りリボーンとコロネロにひねられて蹴られて殴られて叩かれて
・・・・・・・・いろいろなあいつも大変なんだな。

「おいリボーン。おまえは黙って見学してろ。ここは俺の仕事場だぜコラー！」
「やっぱやめたぞ。ツナは俺の餌食・・・・生徒だからな」

「とうとう餌食つて言っちゃった!!」

うん、ホントに不憫な気がするよ。

極めつけに崖下の渦巻きに飛び込まされた。あー、溺れてるなー。

まあ人間死ぬ気になればなんでもできるよな？（↑光努も割とひどい）

「さて、そこのお前。そろそろ出てきたらどうだ」

「ー」

「そうだなコラー！出てこい」

やっぱりバレたか。まあただ電車の上で隠れてただけだしね。

最強の名は伊達じゃないみたいだしね。

じゃあ、アルコバレーノと対面でもしますか。

光努 side out

リボーン side

「よっと」

電車の上のいた人影は俺たちの前に降り立った。

現れたのはまだツナと同じくらいの少年。白い髪をした少年。

白い髪ってことは、まさか9代目が言っていた……。

「お前も審査不合格の修行者かコラ！」

「ちげーな。おめーはツナと一緒にいたが地下鉄に乗らなかったから審査には合格した
だろ？」

ツナを見ているとき、ツナと違ってマフィア審査も受けてなかったし地下鉄にも強制的に乗せられなかったからこいつは審査をパスしたみたいだな。

「ああ、知ってたのか。島の中にある地下鉄の行き先が気になったんだが、まさかアルコバレーノ二人と会えるとは思わなかったよ」

「お前は何者だ、名を名乗れコラ！」

「自己紹介が遅れたな。イリスのボスになったばかりの白神光努だ。以後よろしくな
♪」

「そうか、オメーがイリスのボスか」

「イリスの2代目だそうだなコラ！」

「やっぱり。白髪の子供は珍しいからな。9代目の言ったとおり、不思議な雰囲気

持った少年だな。心底楽しそうに笑っている姿をみるとただの子供にしか見えねーな。

「そういえば、アルコバレーノに会ったら聞きたいことがあったんだ」

「なんだコラ!」

「最近、おしゃぶりに何か変わったことがなかった?」

「!!」

(この反応。やっぱり本当にハクリもアルコバレーノになったってことか)

確かに、しばらく前、おしゃぶりに尋常じゃない輝きが会った。

その時は他のアルコバレーノも近くにいなかったし、俺も何もなかった。なのにあの輝きはやはり尋常じゃなかった。何かが現れたと直感的に予感したが、もしかしてそのことを言ってるのか。

「お前は何か知ってるのかコラ!!」

「オメーはこのおしゃぶりのことを知ってるのか?」

「いや、少しだけ聞いたことがあるだけだ、それより生徒が戻ってきたぜ」

後ろを見るとツナが渦の中から無事に生還したみてーだな。

「起きろ、ダメツナ」

「ぐはあ!!」

ツナも戻ってきたし話は後で聞くことにするか。

リ
ボ
ー
ン
s
i
d
e

o
u
t

『人の怒りは意外としぶとい』

「マフィアランドのシンボル！マフィア城!!」

「マフィア城か。金をかけてるだけあるな」

「うおっ、すげー!!」

現在。光努、ツナ、ロンシャンが地下鉄を歩いて戻ってマフィア城にやってきた。

簡単に説明するとあのあと地下鉄に乗ってトマゾファミリー8代目ボスでありツナのクラスメイトの内藤ロンシャンが修行にやってきてその後マフィアランドに敵対するマフィアが攻めてきたらしいので島の間人が一旦マフィア城へと集まっているらしい。

ちなみにツナは戦力にリボンとコロネロを期待したがお昼寝タイム中（起こすと殺される）なので3人だけで城にやってきた。

「これ全部マフィアか。水面下でマフィアの存在が大きくなってるんだな。いつか世界中マフィアだらけかもな」

「ちよつ、光努！怖いこと言わないでよ！」

「アツハハー！光努ちゃん面白ーい！」

笑いながら（ツナは若干怯えてる）城の中に入る。

「ツナ！」

「母さん」

（あれがツナの母親か。他の奴らは中々個性的な面々だな）

「この城で敵マフィアを迎え撃つんでしょ？」

「なっ！母さんまでマフィアとか・・・！」

「面白いイベントね」

「山本的ー!!!」

（大物だな、あのツナの母親。それともただの天然か）

その後ツナの母親を含む女性陣は後方で（飯を作るみたいなので裏方に行った。

「スパイを島に入れたトマゾの8代目ってのはお前か！」

（ロンシャンのことだ！殺されるぞ！）

とツナは思ったが。

「よくやった!!」

「えらい!!」

「な——!!?」

「どゆこと？普通逆じゃね」

「リゾート気分にあきあきしてたとこよ！スリルがねえ！」

「久々に銃をぶつ放せると思うとワクワクしやがるぜ」

「やっぱマフィアは殺しあわねーと」

どこからか銃器類を大量に取り出して楽しそうに語るマフィアたち。

ロンシャンの失敗は彼らにとってはラッキーなことだったらしい。

ツナも驚愕していた。

すると今度はいくつもマフィアのボスが自分らがマフィア連合を指揮すると言ったので口論が始まった。

「マフィアにも譲り合いの精神ってのはないのかねえ。ツナ、お前ボスなら指揮したら？」

「ちよつ！勘弁してよ！それに俺マフィアのボスじゃないし！」

「10代目く!!ご無事でしたか！」

「ご．．．獄寺君．．．」

人ごみをかき分けてツナの元にやってきたのは若干柄の悪そうな少年。

「まぎらわしーぞガキ．．．10代目とか変なアダ名つけんじゃねえ！」

「アダ名じゃねえ、沢田さんはボスだコラ！」

「ほー、どこの馬の骨のファミリーかな？」

「ボンゴレで文句あるか!？」

ざわっ！

ボンゴレは数あるマフィアの中でも伝統・格式・規模・勢力において他のマフィアを大きく上回る程の組織。他のマフィアも一発でツナをボンゴレボスとして連合の指揮者として認めた。

(いいのかな、これで)

「みな者!!われらが大将ボンゴレ10代目に続けー!!」

マフィア共はスーパードン!!ハイテンション状態となった。

ドンドン!!パンパン!!ドーン!

外から戦闘音がしてきた。どうやら敵もマフィア城までやってきたようだ。

光努は近くにいた他人に話しかける。

「なあ、どこが攻めて来たんだ？」

「ああ?ボウズ知らねーのか?カルカツサファミリーだよ」

「カルカツサ・・・ふーん、カルカツサね〜」

一瞬——。マフィア城の広間に集まった人間全てに恐怖が走った。

とてつもない殺意が爆発的に大きくなった。一瞬のことだったから誰から出たのかは分からず、すぐに消えたから恐怖すら実感しなかった。しかしマフィア達は確かに一瞬硬直してしまった。

光努は歩いて入口に向かった。

「ツナ、ちよつと俺出てくる」

「な、光努！ 外危ないよ！」

「大丈夫。カルカツサのやつら潰してくるだけだから」

「いやいや！ 全然大丈夫じゃないよ!!」

「ならば大将！ 俺たちも行きましょう！」

「ええ！」

マフィアどもは気のせいかと思いつつ準備を始める。

もうすでにあちこちでドンパチが始まっている。

ツナも無理やり前線に持ち上げられていった。

光努とツナを含めて敵の戦艦に向かって森の中を通つてると木が倒れて何かが出てきた。現れたのは赤ん坊の軍団。中央にいたのは額のタコの模様が書かれたフルフェイスのヘルメットにライダースーツを着て紫色のおしゃぶりをつけた赤ん坊。

「奴はカルカツサファミリーの軍師スカル!!」

「え——！あのちっこいのが——!?」

「間違いない。あの紫のおしやぶりはアルコバレーノの証」

アルコバレーノはイタリア語で虹の意味。

マフィア界にいる7人の最強の赤ん坊を指す。リボンとコロネロもそうである。

ツナはよくわかってないようだが。

マフィア連合勢が銃を撃つとスカルは手を少しだけ動かした。すると銃弾がスカルに当たると瞬間何かにはじかれた。

「何かにはじかれたぞー！」

「シールド!?」

「茂みに何かいる」

現れたのは大ダコ。普通のタコより数十倍もある巨大なタコが現れた。

「スカルは巨大なヨロイダコを操ると聞いたことがある!!」

「夢だ！夢を見てるに違いない!!」

ツナは現実逃避をするのであった。

ドゴオオ!!

その瞬間、スカルの背後にいたはずの巨大なヨロイダコは吹っ飛んだ。周りの木々を盛大に破壊しながら来た道を引き返して海まで飛んでいった。

「な!!何だ!何が起きた!」

スカルは慌てた。自分背後で攻撃と防御を行っていたタコは一瞬のうちに退散させられてしまったから。あとに残ったのは砕けた鎧の破片だけだった。

「お前がこの場にいるカルカツサの中で一番偉いのか?」

スカルの前にいたのは上げた脚を下ろして笑っている光努だった。

『泣きっ面にニードルスピーアー』

「な・・なんだお前は！」

「一つ聞きたい。イリスを襲ったのはお前の指示か？それとも別の奴か？返答しだいで貴様の心の命日は今日となる」

スカルは明らかに恐怖していた。もとより個人的に戦闘力が高い方ではないスカルは自慢のペットを一瞬で吹っ飛ばした光努に畏怖の念を抱いていた。

「あいつ、イリスの者か！」

「あの、イリスって何ですか？」

ツナは近くのマフィアに尋ねる。

「イリスファミリーはマフィアだが一般の企業としての方が有名なマフィアで代々ボスがない変わったところだったんですが最近、初代以来のボスが現れたそうです」

「それが・・・光努」

「あいつがボス！まさかまだ子供だったとは！」

光努はニコニコ笑いながらスカルに再び話しかける。

「で、どうなの?」

「あ・・・あれはボスが命令したんだ!俺は全くと言っていいほど関係ないぞ!お・・・俺を恨むのは筋違いだ!!」

「あ、そうなんだ。じゃあいいや。悪かったな、大丈夫♪手加減したからあのタコはちゃんとしてるよ」

明らかに笑っていないような笑いをしていたが一瞬でスカルに対してフレンドリーになった。

(あれで手加減したの!!光怒デタラメすぎ!!)

別にイリスが襲われたことはもう大して怒ってないしスカルを理不尽に怒るつもり

だってない。別にカルカツファミリーを徹底的に潰そうとかはこれっぽっちも考えていない。なんにしてもリルもコルも無事だったからとつくの昔に少しだけ湧いた怒りは消えていた。

だがもしスカルがそうだと聞いたのならどうなっていたのだろうか?

今となつては誰もわからなかった。

「やっぱお前は情けないやつだな」

どこからともなくそんな声が聞こえた。

無事に立っている木の枝の上にいたのは、黒いスーツをつけて黄色いおしゃぶりを胸

につけた赤ん坊。

「リボーン！ やつと起きたのかよ！ お前が寝てるあいだにこっちは大変だったんだぞ！！」

「な・・なぜここにリボーン先輩が・・？」

「ちやおっス」

「せ・・せんぱいー!?!」

(コイツもリボーンの変てこな知り合いかよ——)

「せつかく会ったんだし、一杯やるぞ」

「バ！ バカ言うな!! 俺は今カルカツファミリーのボスから命を受けている！ お前は倒

すべき敵だ！」

「お前いつつも誰かのパシリだよな」

「パシリじゃない!! お前だけだ!! 俺をパシリに使ったのは!! 舐めやがって、許さんぞ!!

殺れ!!」

スカルが合図すると部下たちが銃を構えてリボーンに向けて一斉に発砲した。

「おせえ」

リボーンの前打ちに部下は一瞬でやられ、スカルに詰め寄って殴りつけた。

スカルは吹っ飛んでヘルメットが割れながら木にぶち当たって倒れた。

「くそ・・・こうなったら・・・戦艦から城を砲撃しろ！許可する!!」

「そいつは無理だぞ。コロネロも起きただろーからな」

「なっ！コロネロ先輩もここに!!」

バツサバツサ。

鷹に頭を掴まれながらライフルを持ったコロネロが海上にいた。

「いくぜコラ」

コロネロは海に浮かぶ戦艦に向かってライフルを構えた。

「SHOT!!」

ドンツ!!ドガァン!!

『スカル様!!全艦撃沈されました!』

「なっ!」

「コロネロのライフルが火を噴いたな」

「さすが最強の赤ん坊」

（あの兵隊チビもメチャツヨかよ!!）

「つーか寝ないで最初からやれよ!!」

「いーだろ、お前は戦ってねーんだから」

（そーいえば、いつもは俺が戦わされてるよーば……まさか今日は守ってくれたのか？）

「俺のパシリは俺が締める」

（でた!!リボン美学!!!）

こうして、マフィアランド連合軍はカルカツファミリーに勝利し、島に再び平和が訪れた。

「へー、俺が寝てる間にそんなことがあったのか」

「お前ずつと寝てたのかよ……」

「光努ー!!ジェットコースター乗りに行こー!」

「光努ー、立体迷路に行こー」

ルイの寝ている光努達の予約した部屋にて、光努以下全員集まっていた。ルイはマ

ファイア同士がドンパチやっていた間、ずっと部屋でくつろいでいたようだ。リルとコルは誰もいない遊園地を楽しんでいたみたい。電気が止まってアトラクションが動いていないのに何をしていたのかと聞かれたらそれはリルとコルにしかわからなかった。

「ルイも外に出たらどうだ？プールとか気持ちいいぞ」

「泳ぐと疲れる」

「コーヒカッパなんてのは」

「回ると疲れる」

「観覧車」

「歩くと疲れる」

「……」

（だめだこいつ！早くなんとかしないと!!）

ひとまずルイを外へ連れ出すにはどうしたらいいだろうか。別にルイは外が嫌いな引きこもりというわけではない。ただ疲れることを極端に嫌う。興味があるのなら全く疲れないのだが。

コンコン。

「ん？リル、出てくれ」

「はい」

リルが部屋の扉を開けて客を迎える。

「あ、リボーン！何しに来たの？遊びに来たの？何して遊ぶ？」

「また今度な。光努はいるか？」

「いるよ、光努ー！リボーンだよ」

「リボーン？」

「ちやおっす」

部屋にやってきたのはリボーンのみ。まあ頭にレオンを乗せているが。

「光努、今いいか？」

「ああ、リル、コル、とりあえず遊んどいで」

「えー、さつきもそう言ったじゃん！」

「遊ぼー」

「すぐ済む。ほら、後でおやつ買ってやるから」

「やった！行ってくる！」

「いってきまーす」

おやつで買取されてリルとコルは遊園地に向かった。

そして場所が変わってホテルの屋上。

現在この場にいるのは光努とリボーンのみ。

「リルとコルはほうっておいてよかったのか？お前に随分なついてたな」

「後で埋め合わせするから問題ないさ。それで話つてのは？」

「お前は何者何だ。アルコバレーノの呪いを知ってるのか？」

リボーンは確信をついた。呪い、本来アルコバレーノの他は一部の人間しか知らない情報。なぜ光努が知っているのか疑問に思っていた。

「呪い……か。俺が知ってるのは着けると赤ん坊になるってことだけだ。知り合いに聞いただけだしな」

「そうか……。おしやぶりに異変は確かに少し前にあつたが、お前は何か知ってるのか？それにお前の知り合いっていうのは、」

「……」

（どうするかな。ハクリのことつて話しても大丈夫なのかな？まあ黙ってる義理とかないしな。別世界の事言わなければいいか）

ヒュルルルル、カッ!!

「!!」

「矢文？」

上から降ってきて光努の足元に刺さったのは一本の矢文。光努は手紙を広げて見てみる。

『光努へ。私のことは詳しく話さないでねbyハクリ』

「……………」

手紙は一瞬で燃えて消えてしまった。

(なんてタイミングがいいんだ！まああの擬似テレポーションがあればこんなことも可能か……………)

「何が書いてあるんだ？」

「あー、すまん。おしゃぶりとか呪いのことは今は知り合いに聞いたとしか言え

ないんだ(あいつ次に会ったら殴ろう)」

「気にするな。その矢文も何かお前に関係があるんだろ。まあ確認がしたかっただけだしな」

「そうか、サンキューな」

『殺し屋奮闘記前編　　く知られないのは仏への近道く』

ここはマフィア、イリスファミリーのアジト。このマフィアはもともと企業として設立され様々な事業に手を広げ成功を収める。今では一般大衆も名前を聞いたことあるくらいに有名である。イリスファミリーはマフィアであり、どこの組織とも同盟を組んでいないがどこの組織とも仲が良く、ただの取引先だけでなく、ファミリー同士も仲が良い。それもイリスファミリーの皆が良い人物であるからかもしれない。

今日話すのはここで起こった哀れな殺し屋の話。

殺し屋 side out

俺は緑色のおしやぶりを持つアルコバレーノ、ヴェルデ様直属の光学迷彩部隊。

光学迷彩とは光の屈折を利用し周囲の景色に溶け込み姿を消す装置。ヴェルデ様の発明したこの光学迷彩スーツを着ることで完全に透明化することに成功した。

俺はこれを使い、誰にも気づかれないことなく、何人もの人間の暗殺を今まで成功させてきた。今回のターゲットはイリスファミリーに新しくボスとなった人物。

名前は白神光努。白い髪が特徴の中学性くらいの少年。資料にはこれしかなかった。我が部隊が調べ上げたのにこれしかわからないとは、謎に包まれた人物だ。

他の部隊の奴はボンゴレ10代目を暗殺に向かっているから俺も成功させねばならぬいな。一瞬でこの毒を塗ったナイフであの世に送ってやる。この毒に触れたら大人の像であろうと数秒で全身に周り死亡する優れもの。

一気に仕留めてやる！

まずやってきたのは母屋。基本的に白神光努はここで生活をしているようだ。

こっそりと玄関を開けて中に侵入を成功する。スーツに備え付けられた機能によって壁や天井に張り付きながら中を探る。

「さて、まずはターゲットを探さないとな」

天井を徘徊しながら階段を上がったりする。広いスペースにやってきたら下の方を見てみると机に向かってる人物が一人。

「そうだ。明日までに搬入済みの機材の確認をしておいてくれ。それと……」

あれは黒道灯夜。企業としてのイリスの副社長であり社長代理であり、イリスファミリーのボス代行。つまりこの組織のナンバー2といってもよい人物。

その実力は高く、奴がいたからこそイリスは企業として多くの成功を収めてきた。もちろん他の人物の力も大きい。黒道灯夜こそ影の功労者。あまり名を売らないようにしているらしいがとんでもない実力を持っている。

イリスファミリーでは高い戦闘力を持っていて、何世代か前のボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーを撃退したこともあるのかなとか。自他共に認める実力者。

「こいつにはかかわらない方がいいな」

幸いにも今は仕事中的のようだ。携帯で部下と思われる人物と話をしているらしく手元では書類に色々と書き込んでいる。

やつを敵に回したら厄介だから今回は無視してターゲットを暗殺しなくてはな。

ヒュツ!!ガン!!

風切り音がして、気がついたら俺の顔の数ミリ横にボールペンが突き刺さっていた。

「おっと手が滑ってしまったな」

「・・・・・・・・」

し・・・・・・・・死ぬかと思つた・・・・・・・・!!!!

なんだと!まさか見えてるのか!?いやそんなはずない!!偶然だ!!本人も手が滑つた
と言つてるしな!!

「早く次に行こう・・・・・・・・」

天井を音もなく移動した。

「もうちよつと離れよー」

「もう少し?これくらい?」

「もうちよつとー」

天井から降りて床を普通に歩いて移動中。廊下を歩くと角の向こうで二人の人間の声が聞こえた。こつそりと近づき、角から覗いてみるといたのは二人の子供。

廊下の端と端にお互いたっている。手にミットをはめて片方は野球ボールを持ってるところからどうやらキャッチボールを始めるようだ。

「あの二人はイリスのリルとコル」

二人の子供は同じ顔をした小学性くらいの子供。

お互い同じ顔立ちに肩くらいまである黒髪をしている。顔だけだと一見して分からないが今回はコルの方が後ろで縛っているので顔だけでも一応判別できる。なんで髪を縛ってる方がコルとわかったのかは服装ですぐにわかった。簡単に、リルはスカート、コルはズボンを履いているからである。ちなみにシャツと上着は同じ柄だが色違いを着ている。だから今回の二人はどっちがどっちなのかとても分かりやすい。

「これくらい?」

「もつとー、端までー」

二人は廊下の隅から隅まで離れている。その間には大体50メートル程。

「……50メートルだど!!あいつらそんな距離でキャッチボールをするつもりか!!」
「どんだけ離れてると思ってるんだ!キャッチボールにしてはレベル高すぎだろ!!」
「つか届くわけねえよ!」

「いっくよー」

「いいよー」

「せーの、やっ!!」

ドゴオオ!!

まっすぐボールはコルの持つミットに向かって飛んでいき、吸い込まれるようにミットに収まった。その際とんでもない衝撃があったかのようにすごい音がしたのだがコルは平然と取った。

「ていつー!」

ドゴオオ!!

「やっ!」

ドゴオオ!!

「ほっ！」

ドゴオオ!!

お互いともんでもない速度を出しながらキャッチボールを始めた。

「何なんだあいつらは！ホントに子供か！さすがはイリスなだけあるということか!」

確か父親がイリスの『アヤメ』に所属していてその父親に二人とも剣を教わり実力は下手な兵より高いという。こいつらにもかかわらない方がいいな。

「あっ！手が滑った！」

向こうからこちら側にいるコルに向かって投げていたリルがそう言うどボールは途中の壁にぶつかってジグザグに動いた。その際ぶつかった壁には思い切りへこみとヒビが入っていたのだが……。

ヒュツ!!

「へっ？」

ドゴオオオオ!!

「ぐはっ!!」

壁にぶつかって威力を増しながら角の向こうにいた俺に向かって飛んできた野球ボールは俺に思い切りぶつかって俺は吹っ飛ばされた。つーかこの威力！お前らホントに子供かよ！というかこれボールにしては固……鉄！鉄球かよ!!ああ……意識が

遠のいていく……。

「もー、リルったら。壁にヒビが入ったじゃない。投げるときは気をつけてって言われたでしょ」

「ごめんごめん。手が滑っちゃった♪」

コルの足元には床にめり込んだ野球ボールに見せかけて作った砲丸投げの玉が落ちていたのだった。

殺し屋 s i d e o u t

t o b e c o n t i n u e d

『殺し屋奮闘記後編　　く知らぬことは恐ろしいく』

前回のあらすじ！

緑色のおしゃぶりを持つアルコバレーノ、ヴェルデ直属の光学迷彩部隊の一人がイリスファミリーの2代目ボス、光努の暗殺にやってきた。そして母屋で光努を探しているうちに偶然灯夜にボールペンを突き刺されそうになったりリルとコルのキャッチボールの流れ玉に当たったりして大変だったがくじけずに暗殺を続けるのであった。

殺し屋 side

とりあえずトイレにて、さっきの野球ボール(という名の鉄球)が思い切りぶち当たっ

てかろうじて大丈夫だったが光学迷彩スーツがダメになってしまった。

だがこんなこともあるのかと予備を持って来といてよかった。スーツを交換して再び光学迷彩起動!!透明化に成功した。

「くそっ!とんだロスタイムだ!早く暗殺せねば」

トイレからこっそりと出て再び移動。

どこだ!?イリスファミリー2代目ボス、白神光努はどこにいるんだ!

ひとまず見つけないことには暗殺のしようもない!

考えてみる!ボスならどこにいるのか。この母屋の地図を出して眺めてみる。

そして考えてみる!

他にも空き部屋や台所、ゲーム場や研究室・・・研究室!

ここだ!!

ボスならファミリーのために日夜研究をするはず!我がボスのヴェルデ様だってそうなのだから(※注意:ヴェルデの研究は多分自分のためです)そうに決まってる!(※注意:この暗殺者は若干頭が悪いです)というわけで研究室へ行こう!

そして暗殺だ!

そしてやってきたのは研究室というプレートの飾られた部屋。

こっそりと音を立てず中に入る。

キュイーン!!ジジジ!

機械音を上げながら作業をする人物が一人。

金色の髪を背中であつて一つにくくり、白衣を来た人物。

推定年齢10代後半くらいの青年だつた。

「やつは、イリスの技術者、ルイか」

ルイはイリスの技術者の中で最も偉く、それに伴う実力をもつ持ち主。

機械工学や生物学、その他の分野で圧倒的才を持つている青年だ。

今は何か作つてようだな。

窓が開いて外につき出すように銀色の巨大な砲台、ドラム缶程の幅があるのを見ると

まるで巨大な大砲のような機械を弄つていた。

これは一体なんなんだ?新しい新兵器か?

「後は場所選びだな。でももう少し砲台の強度を高めたほうがいいだろうか?そのほうが長距離まで可能だしな。でもこれくらいでも大丈夫かな……ブツブツ」

何を言つてるのかよくわからないがこの部屋の広さはコンピニススペースくらいしかないから天井から全体を見渡せる。そして見渡して見たがこの部屋に白神光努はいないな。俺の勘も今回は外れてしまったか。

♪♪♪♪

「もしもし」

『よおルイ。あれできた?』

「光努か。大体できたぞ」

光努だ?!?ということは今ルイと電話しているのは白神光努か! 一体どこに! 居場所を聞き出してくれ!

「試してみるか? 今どこにいる」

ナイス!!

『今? 中庭にいますぞ』

母屋の入口から入って反対側の扉から出ると中庭に出るそうぞ。

ということはある突き出た砲台のある窓の下にいますということか。天井を移動して砲台の設置されてる窓の隣にある窓を覗くと中庭にある大きな木のしたで電話をする少年がいた。

(いた! やつが俺のターゲット、白神光努か! 任務を速やかに遂行する!)

開いてる窓から出て壁を伝ってターゲットに近づく。

音を立てず気配を消して、ターゲットに近づいた。

まだ電話を続けているらしく、さつきと違うのは立ち上がって砲台の方に顔を向けているということくらいだ。毒入りナイフを取り出して構える。

「あれが？どつからどう見ても大砲じゃん」

『最初に思いついたものを作ってみた。というわけで試してみよう。秒読み開始30

秒前。29・・・28・・・27・・・』

ふふふ、いいだろう。その秒読みがお前らのボスの最後だ。

『ところで光努』

「どうした？」

『その中庭では不用意に動かない方がいいぞ』

「ん？なんでだ？」

『だってそこには』

秒読みは残り5・・・4・・・3・・・。

ターゲットにジリジリと近寄ると。

カチリ。

「え？」

ビョーン!!

俺の足元が飛び上がって俺は吹っ飛ばされた。

「のわああ!!」

「?ルイ、地面が飛び上がったぞ」

『ああ、やっぱり出たか。その中庭には色々と罟が仕掛けてあるんだ。あと母屋とかにもあるぞ』

「俺初耳なんだけど・・・」

「うわああ!!」

空高く飛び上がった俺は、そのまま弧を描いて砲台の中に入った。

『0』

ドオオオオオオオン!!!

「うわああ!!」

俺はもう殺し屋をやめよう。こんなことしてたら命がいくつあっても足りない。

巨大な音がしたと同時に砲台から何かが勢いよく飛び出して空の彼方へと消えた。

「・・・おいルイ。何だあれは・・・」

『何って、お前に頼まれた擬似テレポーション装置だが?』

『どこがだよ!ただの大砲じゃん!』

『これ一つでどこへでもあつという間に飛んでいける。なんて素晴らしい』

『全然素晴らしくねーよ!もつと近未来的なものを想像したのに!』

『けどおかしいな。空砲で試し打ちするからまだ何も入れてなかったんだがな』

『まあなんにしても却下だ。大体あれじゃ片道切符じゃねーか』

『そういえばそうだな。今回は失敗したな』

『おい・・・』

ヒュルルルル。

「ん?」

『光努!上だ!』

光努が上を向くと、一本のナイフが眼前に狭っていた。

ガチン!

「ほいほい、あうえーは(おいおい、危ねーな)」

歯で刃を受け止め光努は無傷だった。

「ん?変な味がするな。毒でも塗ってあるのか?なんでこんなものが」

『大丈夫か?光努』

「このナイフ毒が塗ってあるっぼいな。ちよつと調べといてくれよ」
ルイの部屋に投げ入れて光努は木の下で読書を始めた。

殺し屋 side out

「これは結構強力な毒だな。普通なら少しでも舐めたら普通死ぬぞ」

「ふーんそうなのか、別に異常ねーけど」

「・・・・・・」

「どうした？」

「お前ちよつと身体調べさせてくれよ」

「断固拒否する！」

今日もイリスファミリーは、平和だった。

『日本つていいな』

「やってきたぜ！我が故郷、日本！」

やってきたのは日本。多分俺の生まれ故郷（仮）だと思ふ場所。なんか名前的に。さてなんで俺が日本にいるのかそれは昨日の話に遡る。

「さて、お前たち。俺は明日から日本へ行つてくるからな」

唐突に広間でくつろいでいた光努とリルとコルとルイに灯夜はそう言った。

「日本？何しに行くの？」

「仕事と帰宅だ」

「帰宅？家ここじゃん」

「ここはアジト。俺の家はちやんと日本にある」

「別に帰ったら誰かいるわけでもないだろ」

「ちやんと妻と息子がいる」

「へー……ええええ!!灯夜!お前既婚者だったのか!」

「知らなかったのか?そういえばお前には言つてなかつたな」

全然知らなかったよ!だつてずっとこの家にいるし!まさか故郷に家族を残して来ていたとは思わなかつたな。リルとコルとルイは知ってるのか?

「あたしも行きたい!夕君元気かな」

「夕君つて?」

「灯夜の息子の夕輝君だよ」

「ホントに子供いたのかよ!つーかお前今何歳!」

「29だが?」

「息子は?」

「5歳だ」

うん!確かによく見たら5歳の息子がいてもあんまおかしくねーや。

むしろ納得……かな?

「それで日本か。いいな、俺も行つていい?」

「まあ別に構わんが」

「よし！お前ら支度だ！」

「やったー！」

「楽しみ」

「日本と言ったらやっぱり温泉だ。あれは疲れが取れる」

ふむ、ルイも行くとは珍しい。確かに温泉はいい。日本サイコー。

まあ行く場所知らないから温泉あるか知らないけど。

どうやらリルとコルとルイもオツケーなようです。

よし！行くぜ日本！

そしてやってきたのは日本。町名はなんだっけ。ここら辺はあんま詳しくないからよく知らないが灯夜の奥さんが息子と暮らしている家はここらにあるらしい。

「まだつかないの？」

「もうすぐだ」

すでにルイはダウンしているのでリヤカーの中に入れて引いている。ついでにリルとコルも荷物と一緒に入ったからかなり面倒だ。実際歩いてるの俺と灯夜だけだしな。しばらく歩いて着いたのは結構大きい家。

庭も広く、わりと広めの和風建築な家だった。

表札には『黒道』の文字が。

「久しぶりに帰ってきたな。おーい、俺だー」

灯夜が門を開けて玄関の扉を開けて入る。俺も続いて入る（リヤカーからはもちろん全員降ろしたよ）

「はーい、あなた！おかえりなさい」

出てきたのは背中まである艶やかな黒髪の美人。優しそうな笑顔をして灯夜を迎えてくれた。ホントに奥さんいたよ……。

「ただいま。それと客だ」

「あら！リルちゃんにコル君、それにルイ君も久しぶりね。そちらの方は？」

「こいつは光努。よろしく頼む」

「始めまして、白神光努です」

「黒道朝菜です。よろしくね、光努君」

「よろしく」

「わーい！おとーさんおかえりー」

「ああ、ただいま。夕輝」

家の中に入った灯夜に抱きついてきたのは彼の実子である現在幼稚園に通う黒道夕輝。今は夏休み期間中らしい。少しツンツンとした黒髪をした人懐っこい笑顔をした少年だ。

幼稚園には夏休みあるんだな。似たようなものに保育園があるがあっちは夏休みなかつたようなきがする。

「夕君やつほー」

「大きくなつたね〜」

「リルおねえちゃんとコルおにいちやんだー！あれ？ルイおにいちやんは？」

「あそこで寝てる」

指を指すと畳の上でうつ伏せになってピクリとも動かないルイの姿があった。大丈夫かこれ？とか皆思ったけどまあいつものことだしいいかなと思った。

「……(じー)」

夕輝君はルイを見たあとこちらを見た。知らない人がいるので興味を示しているのだろう。人見知りは特にしてないみたい。

「よう、夕輝だっけ。俺は光努、よろしく」

「うん！よろしく！」

なかなか人に懐っこい。子供っていいよな。

リルとコルには初対面で攻撃されたし。いや、あれは灯夜のせいだったな。

「じゃあ自己紹介も終わったし、ご飯でも食べましょうか」

朝菜の言葉に皆同意したのであった。

『弱肉強食、世は時として無情なり』

「夏と言つたら夏休み、夏休みと言つたら？」

「夏祭りー!!」

現在、リルとコルと夕輝を連れて俺、光努は夏祭りに来ていた。

あの後ご飯を食べてしばらくすると今日は夏祭りをしているらしいのでリルとコルと夕輝は目を輝かせたので早速祭りへゴー！ちなみに灯夜は夕方頃から仕事らしくて別行動、朝菜とルイは家で留守番である。

というより疲れて動きたくねーっていうからルイは家で涼んでる。

まあ動かないのはほつといて、

「夏祭り！よーし、お前ら来い」

「はー!!」

そう言つて懐から財布を取り出す。祭りに行くならと灯夜からいくらかもらつた分。来るときひつたくりが多発してるみたいだから気をつけろつて言つてたけどまあ、大丈

夫かな。

「はいよ、一人二万円な」

「「やったー！」」

ここで一人二万円って、祭りの屋台で高っ!!とか思ったと思うけど、白神光努はあまりお金を使用せず、というかあんまり見ていず金銭感覚が鈍いのであまり違和感に思わなかったのであった。

もちろんリルたちも子供なので特に疑問にも思わなかったのである。

そして、その様子を笑みを浮かべながらを見ていた者がいた。

「わたあめあまーい！」

「焼きそばうまつ！」

「かきごおりつめたーい！」

「久しぶりに食べたな、りんご飴」

光努達はおもいきり夏祭りを満喫していた。

光努はいろんなところへと行ったけど日本の、それも夏祭りのあるところにはあまりきたことないから懐かしそうに、面白そうに遊んでいた。

「よし、次何するか」

ドン!!

「おっと」

夕輝が多分高校くらいの男とぶつかって思わず尻餅をつきそうになったので咄嗟に光努は受け止めた。

「大丈夫?夕君」

「あ、逃げた」

ぶつかった男はそのまま誤りもせずにダッシュで逃走した。

「怪我はないか?夕輝」

「うん・・・あれ?」

「どうした?」

「お Сайフ ない」

「なに?」

(スリか)

光努は逃げていく男の後ろ姿をにらみつつ、夕輝の服の汚れを払ってやる。

「よし！リル、コル」

「なに？」

「夕輝頼むぞ」

「了解！」

即、光努は地面を蹴って追いかけた。

「さて、あじなまねしてくれたな．．ん？」

目線の先に捉えていたひつたくりは別のひつたくりと合流した。小脇に抱えているのは金庫っぽいのでおそらく灯夜の言っていた最近噂のひつたくり犯みたいだな。

よし、泳がせるか。

そしてやってきたのは神社の境内。階段を上った先には大量の人がいた。

いかにも不良というガラの悪い奴らが大量に武器を持って待ち構えていた。

いや、待ち構えていたっていうより誰かを囲むようにしているな。向こうの方には他にも金庫を持つてる奴ら、こいつらがひったくりの主犯どもか。

「ん？ツナじゃん。何してんの？」

「あ、光努！どうしてこんなところに!？」

人垣の向こうにいたのはツンツン頭の少年、ツナ。本名は沢田ツナ（ツナはマフィアランドの受付でこう名乗ったので光努はこれが本名だと思っている）ボンゴレファミリーの10代目ボスらしい。

「見るからに、ひったくりにあっただみいだな」

「え、光努も!？」

「まあ、知り合いがな」

見渡すように見てみるとツナのほかにいるのは学ランを来てトンファーを装備した男。ツナの友達かな？そんな雰囲気じゃなさそうだけど。

「なんだ？てめーもこいつらの仲間か？」

「いいぜ、ついでにぶっ潰してやる」

「そうか、夕輝の金を奪った奴らは連帯責任。俺もお前ら潰してついで罰金として金は全ていただく」

「！」

「雲雀さんと同じこと言ってるー!!」

トンファーの男はこちらを向いてきた。

「その金は風紀委員がいただく」

「いや、俺がいただく」

「邪魔するなら咬み殺す」

「できるか？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!

今この場に、二人を止められるものがあるだろうか。

光努と雲雀は二人とも顔に笑みを浮かべつつ戦闘態勢に入る。

雲雀はトンファーを構え、光努は腰を落として迎撃態勢に。

「ちよ!二人で争ってる場合じゃないでしょ!この数みてよ!」

「だったら、お前が戦え」

ズガン!!

「ツナ?」

飛んできた弾丸がツナの額にあたった。

倒れたツナは服を破り起き上がり、額にはオレンジ色の炎が現れた。

(炎?)

「復活!!死ぬ気でケンカ!!」
(リ・ボン)

「うお? どういう手品だ、ツナ?」

「よそ見してる場合?」

ツナが不良と戦うあいだにも雲雀と光努の戦いは続いている。

ちなみにそのスキにと攻撃してきた不良は二人にことごとく「邪魔」と言わんばかりに吹き飛ばされている。

なので雲雀と光努のお互いの攻防は続いているが同時に向かってくる不良も蹴散らしているのので地べたに多く伏している。

そんな中、ツナの仲間の獄寺&山本が登場。本格的に不良グループがかわいそうになってきたのであった。

「あ、光努！」

「どこいつてたのー？花火始まるよ」

「わーい、はなびー！」

「おー、楽しみだな。ほれ、夕輝。今度は気をつけるよ」

「ありがとー！」

そう言つて夕輝にスられた財布を渡す。

俺が三人に小遣い（一万円）を渡すのを見て金持ちの子供だと思つて一番年齢の低い夕輝からスつたみたい。今度から金はあまり見せないようにしないと。

あの後、最終的に不良は蹴散らしてツナおよび仲間達は自分たちの金庫を取り戻して、俺は夕輝の財布を発見したので後は雲雀にくれて退散してきた。まあ祭りにそこまでするからな。

ドオーン!!ドオーン!!ドオーン!!

「うわあ」

「おおおー」

「きれーい」

「いいな、こーういうの」

空にはカラフルな花火がいくつも飛び交い、夜空一面に花が咲いたかのようにだった。

骸編

『転入先は学級閉鎖』

光努 side

「中学校？」

「ああ、お前も見ただけ目的にいい年だからしばらく通ってみたらどうだ？」

黒道家の茶の間にて、テレビを見つつみんなで夕食を食べてると灯夜が唐突に提案してきた。

確かに今まで中学校にはちよつとしか通ったことないし、行ってみようかねー。まあ学生の本文は勉強というしな。学生かどうかは置いといて。

「光努どっか行くの？」

「ああ、中学校に通おうかと思つてな」

「ま、頑張れ」

「そういえばルイって今何歳なの？」

「俺か？確か18くらいだったか」

見た感じ10代後半くらいだと思っただけどまさにそのとおり。

っていうか18ってことは今の時期的には普通だったら高校3年生くらいか。ルイって高校通ってないのか？確かにイリスの研究主任なんてやってるしもしかしたら何か事情があるのかもしれないしな。

「ルイは高校通ってないのか？」

まあそんな事情は置いといて聞かなきゃ始まらないよな。

「俺か？高校なんて元から通ってないよ」

「なんで？」

「ルイは13のときに飛び級で大学に入学して16で卒業。それ以前は小学校に少ししか通ってないから中学と高校には通ってないんだ」

面白い経歴といえば面白いな。というかいっからイリスの研究主任とか疑問はあるけど、まあおいおい聞こう。

というより、俺はまだそこまでイリスについて知らない。リルやコルのこと、灯夜に関してもまだまだ知らないことが多すぎる。

おいおい、聞いて行かないとな。

ボスとしては、ファミリーのことも知っておかないと。

「それで、どこの中学に通うんだ？」

「ああ、たしか……」

そしてやってきたのは黒曜中とよばれる中学校。

灯夜としては、本来夏休みの終わりと同時に入学できるようにしたかったみたいだが書類の関係上新学期が始まってから5日程かかってしまった。

というわけで初登校なのだが……、

「これはどういうわけだ」

誰もいない。

教室はガランとして本当に誰もいない。

始業のチャイムが成り終わるのに本当に誰もいない。

あまりにも誰もいないので職員室まで行った。

そして情報収集の結果発表。

黒曜中は真面目な生徒2%と98%の不良によつて構成されていたのだが。

ある日、というか夏休みの終わりに転校してきた帰国子女3人によつて不良たち、しいては黒曜中が制圧され今は皆（というかほとんど）の不良生徒）は学校へ来ないで黒曜ヘルシーランドとよばれる廃墟に潜伏しているらしい。そんなわけで今学級閉鎖ならぬ学校閉鎖状態。

「つーわけで、やってきたよ黒曜ランド」

黒曜ランドとは、映画、カラオケ、レストラン、動物園などが施設内に同時に存在し楽しめる複合娯楽施設。だが、2年前にあつたと言われる台風によつて土砂崩れを起し、そのまま閉鎖してしまい今は廃墟と化した場所。

「学校に来たのに授業がねーとかどうなのよ。ま、黒曜を制圧した転校生とやらと対面と行くか、確か先生に聞いた転校生集団のリーダーの名前は・・・」

鍵のしまつてる柵を飛び越えつつ、中に着地する。

「六道骸・・・だっけか」

いざ、黒曜ランド潜入。

「ハハハ」

やってきたのは黒曜ランド中央ほどに設置されたボウリング場。

黒曜ランドには多くの不良が潜伏している。黒曜中学校の2年に転入してきたのにそこにいた生徒のほとんどが休みとはこれいかにと思ったが大半の生徒がここにいた。

ここまでの道のりで同じ黒曜生なのでスルーできるかと思われたが見たことない顔の生徒が来たから絡んできたが、転入生だと言ったら骸の仲間と思われたらしく、敬語になりながら骸さんはあっちですと親切に教えてくれた。まあなにはともあれ居場所がわかったしさっさと行くかな。

「おい、おまえ」

声をかけられて振り向くとそこにいたのは黒曜中の制服を来た男。

顔に傷のあるヘアピンをつけた野性的な男。

「何？（何か獣っぽい気がする）」

「こつちには骸さんしかいねーけど、何か用かびよん」

「おー、骸はこつちにいるのか。（それにしても面白い語尾だな）サンキュー、お前名前は何？」

「俺は城島犬。そういうお前だれ？」

「白神光努。今日転入してきたんだ。骸に会いたくてさ。ガム食う？」

「食う!!」

そう言つて渡したガム（ストロベリーミント味。これ微妙だったんだよな）をうまそうにほおぼる犬を見るとホントに犬みたいだな。

「なんら、お前いいやつらな。骸さんはこつちらびよん」

「サンキュー、そういうえば犬達は帰国子女なんだってな」

「そうらびよん。俺と柿ピーと骸さん」

「柿ピー？」

「そうだびよん。あ、骸さーん」

犬と歩いてきたのはポロポロに壊れたレジャーランドの中、多分ボウリング場だと思ふ。そこにいたのは二人の男。

一人はソファアール近くにフラリと立っているメガネにニット帽、オカツパ頭に左頬にバーコードをつけた黒曜中の制服を来た男。そしてもう一人、ソファアールに座っているのは髪を真ん中分けて後ろ髪を逆立たせる特徴的な髪型に奇妙なのは六の文字の見える右目の赤い瞳。

「おや犬、おかえりなさい。そちらはどちら様ですか？」

「骸さん、こいつ光努だつて。ガムもらった」

「おやおや、これは餌付けされてしまいましたね」

「犬………」

「なんらびよん！文句あつか柿ピー」

「……別に」

犬と柿ピーとよばれた男が言い合っている。その間に骸とよばれる男の前まで来た。

「よう。あんたが六道骸だつて？」

「確かにそうですね。そういうあなたはどちらですか？」

「白神光努。光努とでも呼んでくれ。よろしく」

『地獄って実際どんなところだろうな?』

骸side

犬が連れてきたのは同じ黒曜の制服をきた少年。白い髪をした少年と楽しそうに二人で入ってきたときは何事かと思いましたよ。

よもや犬が他の黒曜生と仲良くなるとは思いませんでしたしね。黒曜中はすでに制圧し、不良たちは部下として黒曜ランドに配置して置きましたがまさかその中で仲良くなるものがあるとは僕も想定外ですね。

それにしても黒曜中じゃ見かけなかった顔ですね。

「白神光努君でしたね。君はもしかして転入生でしょうか?」

「正解。今日転校してきたんだ」

なるほど。転入生なら僕達を知らないのも無理はない。でもなぜここに来たのでしょうか?自ら不良のたまり場へと来るとは普通なら考えられないのだが。

「白神君、君はどうしてここに来たのですか?」

「ここ?六道骸という帰国子女が黒曜中を制圧して学級閉鎖っぽい状態だから不良の集

まってるここに来て骸に会おうと思つてな」

「.....」

随分と変わった人ですね。学校が制圧されたのに制圧した者の元へすぐさま来るとは。

「それで、僕にあつてどうするつもりですか?」

「ん、そうだな。骸、お前の力がみたいな」

にやり、という笑みを浮かべた。

ゾクリ。一瞬、何か強大な力に抑えられたような気がした。目の前の少年は何もしてない。ただ笑っただけだがその笑みは考えが読めず、面白いおもちゃを見つけた無邪気な子供のようでもある。

「クフフフ、僕の力がみたいです。いいですよ」

「骸様」

「千種、大丈夫ですよ。すぐに、終わらせますから」

第一の道、地獄道。

この身が前世で体験した六道輪廻の記憶。

第一の道、地獄道は永遠の悪夢を相手に見せ、精神を崩壊させる技。

つまり、幻覚による精神破壊。

右目の数字が『一』を刻んだとき、白神光努の足元が膨れ上がり、巨大な火柱が出現した。

「わお！ さっすが骸さん！」

巨大な火柱は煌々と燃え上がり周りごと燃やしていく。

これが地獄道の悪夢。幻覚により直にくらったものはありもしない火柱に身を焼かれ簡単に崩壊する。

僕がさつき感じた力の感覚は気のせいだったみたいですね。

この程度でやられてしまう者など、

「面白い技だな。こんなの初めて見たよ」

何？ 彼の声が聞こえたと思うと、火柱の中から悠々と現れたのは白神光努。まるで動じず、そこには何もなかったかのように火柱をくぐり抜けてきた。

「ほう、僕の幻覚を見破りますか。思ったより君は面白い人間のようにですね」

「そいつはどうも。ところでその目の数字が変わってこの技を出したってことは他にも技があるのか？」

僕の技に興味があるのですか。まあ見せても困ることではないですしいでしょう。彼の身の保証はしませんかね。

「いいでしょう、見せてあげますよ」

右目の数字が『一』から『三』へと変化したとき、光努の足元には大量の蛇が現れた。
「蛇?。」

「これが第三の道、畜生道。人をしに至らしめる生物の召喚ですよ」

「畜生道・・・六道!天界・人間・・・なるほど。というと、さっきのはもしかして地獄道・・・とか?。」

ほう、まさかそこまでわかるとは。意外と頭もキれるみたいですね。

「正解ですよ。僕の体には、前世に六つの冥界を体験した記憶が刻まれてましてね。六つの冥界から六つの戦闘能力を授かったのですよ」

「なるほどね、幻覚能力の地獄道に召喚能力の畜生道か。面白い身体してるんだな」

「クフフフ、その蛇も真正銘毒蛇ですよ。早く対処したほうがいいのではないですか?。」

畜生道により召喚された毒蛇が彼の足元に迫ってる。このまま何もしなければ噛まれ、毒に侵されて終わりですね。

「対処?なんでそんなことする必要がある?。」

.....。

さすがの僕も目の前の光景には少し驚いてしまいましたよ。

人を死に至らしめる生物を召喚する畜生道は毒蛇以外にも多くの生物を召喚できる。もちろんそのどれもが危険極まりない生物。凶暴性の高い者や猛毒を持つ者も多い。

対処を間違えばその場で死ぬことになるというのに、この男.....。

毒蛇を手懐けてますね。

「おーよしよし、お前らどこから来たんだ？」

片膝を突いてしゃがみこんでる光努の足元および体に蛇がすりより見た感じとても仲良し、というよりほんとに仲良くなってるようだ。

僕もこの能力で数多くの生物を召喚しては多くのマフィアを葬ってきましたが、まさか召喚した生物が手懐けられたのは初めてですよ。もしかして動物などに懐かれやすいのでしょうか？.....犬の例もありますし。

「さて、じゃあ残りの二番と四番と五番を見せてくれ」

蛇とのじゃれあいを終え、こちらに再び向き直る光努。

どうでしょうか.....。

わざわざ手の内を晒すような真似はあまりしたくはないのですが。

人間道は論外。修羅道による武力制裁でもいいのですが、彼の遊びに乗る必要もありませんし。

「……千種」

「はい、骸さま」

ポケットに入れていた手を動かしつつ態勢を変える。どうやら僕の言わんとしたことをわかってくれたみたいですね。光努には悪いですがそろそろこの場から退場してもらいましょうか。我々はこれからやることがあるのですから。

「ん? 骸は終わりで次はお前か。確か名前は……柿ピー」

「違う……柿本千種。めんどいしすぐ終わらせる」

骸 side out

ヒュツ!!

柿本千種と光努の距離は約5メートル程。一見して何も持っていない千種がポケットのから手を出して腕を振るつたと同時に光努はその場でしゃがみこむ。しゃがみこんだ光努の上を、ボロボロの窓から入ってくる太陽の光に反射しながら何かが通り過ぎた。

光努は後ろを見ると壁には無数の針が刺さっていた。

「針か。今投げたのか？そんな感じはしなかったけどな」

「めんどい」

ヒュヒュツ!!

(ヨーヨー？予想以上に面白い武器！)

千種は両手からヨーヨーを放ち、左右から光努の頭上を挟むように操作する。

ビビビビビ!!

そしてヨーヨーから先ほど光努が避けたものと同じ無数の針が飛び出てきた。

全方位から針が出せるようにヨーヨーには無数の穴が開けられており、そこから飛び出してきた針は光努を挟み込むように地面に降り注ぐ。千種の素早いヨーヨー裁きに避けることは難しいが、光努は……。

「針は危険だけど攻撃力は低いんじゃないかね？」

「な!?!」

一步。5メートル程の距離は、立った一步踏み込むだけでなくなり、光努は千種の目の前に移動した。千種も予想外の光努の速度に思わず声を出す。今の千種は両手を広げるようにしてヨーヨーを操作している状態。つまり、懐ががら空き。

「つーわけで、ばいばい」

ドゴオオ!!

千種は鳩尾を殴られ吹っ飛んだ。それはもうすがすがしいくらいに綺麗にくの字型に折れ曲がり壁を破壊して外まで飛んでいった。

「大丈夫、怪我のないようにしたから。しばらく痛みとか痛みとかで動けないけど明日になれば治るんじゃないかね。多分」

「クフフフ。これは驚きました。千種をこうもあつさり」と

避ける暇を与えない攻撃を繰り返すとはね。

「柿ピーだっせー、瞬殺じゃん」

「犬、次どうですか」

「いいれすよ。つー分けて光努。次俺な」

「おおいぜ。動物の躰は割と得意だぜ」

「俺は動物じゃねー!!」

「え!?!」

「なんらびよん! その本気で驚いてる表情は!?!」

「だって・・・ねー?」

「いや、僕に振られても返答に困るのですが・・・」

「ちよつと痛い目見てもらうぜー」

カチリ。そう言つて犬はつながつた歯を取り出して自分の口にはめ込んだ。

「チーターチャンネル。俺も瞬殺してやるびよん」

「何それイメチェン? どういう原理」

「犬の能力ですよ」

城島犬はカートリッジ状の動物の歯を自らに付けることにより、その動物の能力を使うことができる。それは視覚、聴覚、嗅覚と言つた感覚はもちろん、肉体すらも動物同じような体格となりそれに合わせた筋力、瞬発力、反射神経を発動させることができる。

チーターの歯をつけた今の犬はチーターの能力を使える。

チーターは走行してからわずか2秒で時速を70キロを超える。最高時速100キロを超えると言われるチーターは短距離なら地球上最も速い動物。

通常、人には出すことのできない速度で犬はすぐさま特攻をかけ、光努の喉元めがけて歯をむきだした。

が、しかし!!

「直線的すぎ、甘い」

光努は犬を横に交わして足を引つ掛ける。当然足元で勢いが止まったのだから重力に従つて犬の顔は下に落ちていく。

ドツ!!

追撃。下に落ちていく犬の首に正確に手刀を当てる。

あっけなく、犬は床に崩れ落ちてピクリとも動かなくなった。

『少しマジになる』

光努は犬と千種の二人と一対一で戦った。

だが二人とも瞬殺された。別に彼らが弱かったわけではない。そこらへんの不良にも負けず、殺し屋にも引けを取らない彼らだが相手が悪かった。

白神光努という人物は、あまりにも実力が違いすぎた。

(犬には人を超える野生動物特有の反射神経も宿つてるはずですが、それすらも置き去りにして攻撃を当てるとは。予想以上に厄介。この男、やはり一般人ではありませんね)

「まあ、まずまず。不良にしては強いな二人とも。明日から立派に始末屋にでもなれそうだね」

「やれやれ、二人ともやられてしまつては、僕が出ないわけには行きませんね」

そう言つて立ち上がったのは先程までソファに座つて観戦していた六道骸。

その手には先端が三つに分かれている槍、三叉槍。

「やるのか? 骸」

「ええ。それに、君に聞きたいことができました」

そう言った骸の右目には『四』の文字が、そしてその右目から炎が灯った。

「聞きたいこと？」

「ああ、光努・・・君はマフィア関係者ではないのですか？」

「！」

（骸から、まさかマフィアの話が出るとは思わなかった。灯夜からあまりマフィアのボスだと言いつらすなど言われてるし・・・）

まだ日は浅いとは言え光努もまがりなりにも一マフィアのボス。つまりトップ。

マフィアをやっている以上恨みを買うこともあるので灯夜としてもあまりボスだと言いつらして他の組織から狙われるのは面倒だと考えたのだろう。

そんなわけで光努の答えとしては、

「そうだけど？」

（ガクリ）・・・まさかこうも正直に話すとは思いませんでしたよ」

「こつちとしてはそつちからマフィアの話が出たのに吃驚。不良じゃなかったん

だな。お前もマフィア？」

「クフフ、面白くない冗談ですね。あんな奴らと一緒にしないでもらいたいです・・・」

ね！」

ヒュツ!!

「うおつとー！」

骸の繰り出す突きを避ける光努。

そのまま鋭い連撃を繰り出す光努も避ける。

「その目、今回は格闘能力なのか？」

「正解ですよ。これは第四の道、修羅道で得た格闘能力です、よー！」

ヒュヒュヒュ!!

骸の得た修羅道の格闘能力は凄まじい。ここに来てから避け続けていた光努の服が少し切れる。わずかに血がにじむ。ベルのワイヤーに引っかかって以来の切り傷だ。しかも今回は肌が少し切れた。

「傷……か……」

「(? 動きが止まった?)」

だがそれも勝負の間ではお構いなし。骸の鋭い槍が光努を貫く……。

ガシ!

「なにー！」

「ハハ、ハハハ!! そうか、そうだな」

(雰囲気が変わった！これは一体)

骸の前には槍を掴む光努。先ほどと変わらぬ景色だが、何かが違う。

光努からにじみ出ていた楽しげな雰囲気か………さらに濃くなった。

それと同時に、計り知れない威圧感が現れてきた。

「ここで俺の体に傷をつけたのは骸、お前が初めてだぜ」

「クフフフ、それはどうも」

「マジ楽しい、そんなわけで」

——少しマジになる。

「なー」

瞬間、骸は中に浮いていた。

なぜ、という疑問を持ったがすぐにわかった。シンプルな答え。

ただ光努は骸の槍を掴み、掴んだ槍を持ち上げて手を離れただけ。それだけで骸は中に浮くことになった。

いくら修羅道による格闘能力に優れた骸であろうと、空中では身動きをとることができない。故に、

「よけられない」

「ガッ!!」

ドゴオオン!!

跳躍した光努の拳を槍の柄でガードしたにもかかわらず押し上げられ、天井に衝突した。

(くっ!!予想以上に強い力!この男!...!!)

骸のすぐ横には光努がいた。背中から天井に激突したすぐ横の天井、そこに足をつけてしやがみこんでる光努。たったいま、跳躍して体を逆にししながら天井に足をつけた。そして拳を振り下ろし骸を追撃する。

「これでジ・エンド・・・とかな♪」

ドオオン!!

そのまま骸は天井を突き破って上階に吹っ飛ぶ。

が、光努は天井を蹴って上には行かず下に向かう。

そして地上に立ち、何もない空間をなぎ払うように蹴る。

ガッ!

光努の足は何かに当たり、空中で止まる。空間がぼやけたと思つたら光努の足が止まった先には先ほど天井にいた骸が槍で蹴りをガードした状態で現れた。

「ぐあー!」

蹴り抜かれた骸はガードした状態のまま壁まで吹っ飛ばされた。

（く．．．幻覚が簡単に見破られている！それに速く重い！）

骸は光努に天井まで押し上げられた後、すぐに自分の幻覚を残して地上に降り立った。しかし、光努はそれを察知して上にはいかず、下に戻り幻覚で姿を消した骸を正確に蹴り抜いた。

自分に避ける暇を与えない速度に、苦もなく吹っ飛ばす力、そして何より作り出した幻覚に全く惑わされない。

「クフ．．．フ。予想以上に．．．怪物でしたね．．．」

「さあ、次はどうする、骸」

（こうなったら．．．）

骸が手を右目にかざしたとき、

♪~~~~♪~~~~♪~~~~。

「．．．．．」

「．．．．．」

♪~~~~♪~~~~♪~~~~。

「ワリ、ちよつとタンマ」

「・・・いいでしょう」

ピッ！

「もしもし？」

『よう、光努。今どこだ？』

「確か黒曜ランドってとこ」

『ああそうか、黒曜中って今学校閉鎖状態だったろ』

「確かにそうだけど」

『つー分けて中学校変えたから』

「は？」

『ほら、転入早々休みみてどうよって感じだろ？そんな分けて別の中学にしたから』

「ちよ！そんなの初耳だぞ！」

『まだ学校に通ってないから問題ない。そんなわけで学校がないなら家に戻れ』

「え、なんで？」

『ボスだろ、仕事ができた。わかったな』

「はあ・・・了解」

プツン。

「・・・どうしましたか」

「急用ができたから帰る」

「は？」

「じゃ！犬と千種によろしく。面白かったよ！またな」

「あ、ちよっ！」

光努は瞬く間に風のように去っていったのであった。

呆然としている骸を残して。

『共鳴する海と花』

「たっだいまー。灯夜ー、帰ったぞ」

「光努か、出かけるぞ」

家に帰ったと思っただけで、すぐに出かけると言う。

少しはゆつくりしたっていいじゃないか！つーか骸達おいてきちまったよ。

「それで、どこ行くんだ？」

「ん？ジツリヨネロファミリー」

ああ、またどっかのボス巡りか。

イリスに入ってから定期的にあるボス巡り。

今までボンゴレ以外にはいくつか回ったよ。世界中に。

「ていうかそれ日本じゃねーよな。どうやっていくんだ？」

「あれを使う」

と言って用意されていたのは一台の機体。

真つ黒に塗装され、白いラインが何本か引かれた飛行機、というより戦闘機。

この異常な形状、それに黒い色。こいつはアメリカによって開発された超音速・高度戦略偵察機、SR-71。愛称は、ブラックバード！

マツハ3級の超音速で移動することでミサイル回避をしつつ敵の情報収集を行うことを目的とされ生産された機体だが、他の偵察技術の向上、それに飛行に高度な技術が必要なことと敵地を飛行するリスク、さらに機体を作るには膨大な費用が必要なことにより退役を余儀なくされた。

しかし偵察衛星だけでは情報集が足りず、数年後再び復活を果たし新SR-71部隊が編成された。が、さらに翌年、当時アメリカ大統領の拒否権により再び退役され整備の施された機体は実用されないまま再び使用されることはもうなかった。

「それなのになんでこんなところにあるんだ」

「いや、軍の方から使われなくなったのは買い取って改造を施したんだ。というか詳しいいな」

昔戦闘機と関わる機会があつたからな。

なるほど。言われてみると細部が若干異なるような。ていうかこれ乗るの？

運転は誰がするの？つーかよく改造なんて出来たな。

「もちろん俺が運転する」

「……あ、そう。じゃ、よろしく（大丈夫か？）」
そして光努と灯夜は飛んだ。音速を超えて……。

「おお、綺麗なところ」

やってきたのは森の中。柔らかな木々に太陽の光、そして森の中にそびえるお屋敷。かなりリラックステキなところ。

玄関前に来たら大きな屋敷。最近はどこもかしこもマフィアだらけだな。

灯夜が呼び鈴を鳴らすと少しして玄関の戸が開いて人が出てきた。

「早かった、灯夜」

「よう、^{ガンマ}γ。お前らのボスは？」

「ボスなら中でお待ちだ。んで、そいつか」

金髪の多分20代くらいの男がこちらを見た。その手には緑色の石に羽が生えた形をしたリングをしている。

「光努だ、よろしく。γだっけ？」

「ああ、ジツリヨネロファミリーのγだ」
ガンマ

お前にΔデルタって名前の兄貴いる？とか一瞬言いそうになったけどあえて口に出さないでおこう。

灯夜の説明によればジツリヨネロファミリーはボンゴレと同等の歴史を持つマフィアみたいだ。

今更だけどイリスの交友が謎すぎる。こんなにいるんなマフィアと仲良くしているのだろうか。中には敵同士のマフィア両方に支援物資を送っていたことがあったとかないとか・・・ま、仲がいいのは良いことだけだね。

そして屋敷の中を案内広めのリビングを通り過ぎて中庭の方に出ると一人の女性がたいていた。

黒髪をし、左目の下に五弁花のマークがある大人の女性。

その瞳には不思議に感覚がした。けどそんなこともお構いなしに気になったのは、首から下げられて胸元に位置するオレンジ色のおしやぶり。

「オレンジ色のおしやぶり、アルコバレーノ？」

「あら、いらっしやい灯夜。それと・・・白神光努君、だったかしら？」

「えっと、白神光努だけど、どちら様？」

「あらごめんなさい。私はアリア。ジツリヨネ口のボスよ」

ジツリヨネ口のボス。妙な感覚だな。

それにあのおしやぶり。

「そのおしやぶり。アリアってアルコバレーノなの？」

「おい、ガキ！ボスになんて口を！」

「構わないわ。そうね、まあ一応アルコバレーノってところかしら」

「ふーん。アルコバレーノ全員におしやぶりの輝きってあったの？」

「ー」

このアリアとγの反応。やっぱりリボンと同じでおしやぶりに反応ありか。

まあこの反応は予想通り。後は適当にごまかすところかねー。

「ああ、別に何か知ってるってわけじゃないんだ。他のアルコバレーノに聞いたから

ちよつと確認しただけ」

「そうか」

「・・・」

アリア side

イリスのボス、白神光努君。柔らかかそうな白い髪をした中学生くらいの子。

おしゃぶりの反応は他のアルコバレーノに聞いたって言っていたけど、それだけじゃないような気がするわ。

この子は何か知っている。

それにあのおしゃぶりが輝いたとき、何か、この世界が歪んだような妙な感覚を感じたけど……。

それに……この子の未来が見えない。

不思議ね、先の見えない感覚って。まるで未来が無いみたい。

何者かはわからないけど、それでもこの子は危険じゃない。

とても柔らかい雰囲気。とってもフレンドリーな感じを放っている。

γから見たらちよつと生意気かもしれないけど、面白い子ね。

「なあなあ、γ。それ何？」

「あ？ああ、これか？」

そう言つてγが手を上げて見せたのはマーレリング。

「こいつはマーレリングっていうんだ。ジツリヨネロに伝わる守護者のリングだ」

「へー。面白い指輪だね。ちよつと触っていい？」

「少しだけだぞ」

「サンキュー」

こうして見てみるとまだ無邪気な子供って感じね。

マーレリングに興味を示すなんて。

光努君がYのつけてるマーレリングに触れたとき。

コオオ。

「！」

マーレリングに光が！すぐに光努君が手を話すと光もすぐに収まっていった。

今、光努君の胸元がわずかに光っていた。首元にチェーンが見えるから首から何か下げてるわね。それに共鳴していた？

「光努君。首から下げてるものを見せてくれないかしら？」

「これか。いいよ、けど今のは一体」

光努君が取り出したのはチェーンにかけられた指輪。透き通るような真つ白な石が埋め込まれ、装飾の施された一つの指輪。もしかしてこれが、イリスファミリーボスの証、ファイオーレリング！

「ボス！こいつは一体！」

「ファイオーレリングとマーレリングが共鳴したというの？」

「これは一体？この二つが何故共鳴を。」

「これは、ちよつと調べてみるか」

光努君？あなたは本当に何者なの。

初代イリスのボスがいたのは今よりはるか昔の話。以来ボスのいないイリスに突如として現れた少年。フィオーレリングに選ばれたと言っていたけど、そもそもフィオーレリングというものの事態どういったものなのか誰も知らない。なぜなら、ずっと封印が施されていたから。

まだまだ謎の多いリング。

それを持つ少年。

少し、調べてみようかしら。

トウリニセツテの一角、マーレリングに共鳴するフィオーレリングについて。

それに白神光努君。

灯夜の話だと空から降ってきたって言うていたけど、それ以外の話はあまり聞いてないしね。正直空から降ってきたって聞いたときは「え？」って思っちゃったしね。いろいろな気になることはあるけど……。

まあでもせっかくな来てくれたのだし、今は楽しく過ごそうかしら。

アリア side out

『爆弾男とメガネヨーヨーの喧嘩介入』

そして帰ってきた日本。日本とイタリヤの距離をブラックバード飛ぶと少しゆっくりに飛んで5時間くらい。中々楽しいところだったな、ジツリヨネロファミリーと仲間たち。マーレリングとおしやぶりについてはかなり興味があつたけど、まあそこはおいおいってことで。

「やつほう！光努お帰りー！」

「ごはあー！」

帰ってきて玄関のドアを開けるなりミサイルのごとく飛んできたリルが腹に思い切り当たった。地面を蹴つて後ろに飛んでリルを受け止めて空中で一回転して無事に着地！

「よう、リル。元気だったかー」

「うん！遊ぼー！」

「コルはどうした？」

「朝菜と夕君と一緒に買い物に行ったよ」

「そうか。ルイは？」

「寝てるー！」

「まあここは予想通りだな。さて、何する？」

今日は日曜だしのんびりするかねー。

そういうえば結局黒曜中はいろいろとあれだから別の中学に転校することになったんだよな。まあ確かにあの学校閉鎖状態はなかなかいただけなかったからな。骸達は面白かったけど俺も学校生活を送りたいからね。

明日になったら骸たちに転校するよって挨拶しに行くか。

「そういうえば光努」

「ん？何？」

「お前なんで黒曜ランドなんて行ってたんだ？あそこ今は廃墟になってるそうじゃない

か」

「ああ、不良が溜まってたからリーダーってのに会いに行つてた。中々面白かつたよ」

「いいなー、私も行きたいなー」

「やめといたら」

灯夜の間に答えるとリルが目を輝かせてコルがなだめる。そしてそばの畳の上でルイがぐでぐでしてしているのは日本の黒道家に来てからよく見かける光景。その光景を樂しそうに見る朝菜に、そして今はそばでお昼寝中の夕輝。なかなか平和な家庭が続いてるのであった。話してる内容は結構ちよつとアレだけど。

「ちよつと戦闘になつたけど面白かつたよ。一番は骸つてやつだな」

「ムクロ？そいつつて、六道骸のことか？」

「そうだけど、よく知つてたな」

「そいつ、結構凶悪な脱獄囚だぞ」

「脱獄囚？」

六道骸。

灯夜に聞いた話では、少し前に凶悪なマフィアばかり収監されていた監獄で、その場にいた人間を皆殺しにして脱獄。その後、部下二人とともに日本に渡つたという。リーダーの少年の名前は、ムクロ。

「確かどつかの中学に3人の帰国子女が転入したらしく、そのうちの一人が六道骸というらしいが。そうか、黒曜中にいたんだっけな」

「ホントに脱獄囚か？中々丁寧なやつだったぞ、口調は」

あ、そういうえば犬と千種は丁寧といえば微妙だ。千種はまだマシだけど犬は丁寧とは正直言い難いな。ま、明日になったら挨拶ついでに聞いてくるか。

骸ー、お前つて脱獄囚なのー？つてね（笑）

そんなこんなで休み明け。

さてと、この黒曜の制服もこれで着おさめだな。

今日は黒曜生生活最後らしく過ごすか。学校はまだ閉まってるけどな。

そんなこんなでやってきたのは並盛り商店街。

なんでこんなところに来たかって？何か爆発音がしたから。花火にしてはそれらし

い影は見えないからちよつと気になってな。

そして見てみると・・・千種？

そこにいたのは間違いなく骸の部下の柿本千種。

ニツト帽にメガネに猫背でオカツパでヨーヨーを持つてる千種だ。

誰かと喧嘩（そんなレベルじゃない）中だな。相手は、別の中学の生徒か。

銀髪で真ん中分けの少年。

少し不良っぽい感じで手にはダイナマイト・・・ダイナマイト!?

最近の中学生は物騒だな。

ヨーヨー対ダイナマイト。文字だけ見るなら普通にダイナマイトが圧勝だけど、そこはさすが千種。ヨーヨーから針を飛ばしたりヨーヨーを投げて導火線を切ったりと相手を追い詰める。

が、そこへ遠近法のトリック。銀髪の投げた二種類のダイナマイト。

片方は普通の大きさのダイナマイト。もう片方は手のひらで覆える程小さいダイナマイト。

普通の大きさのダイナマイトを千種から少し遠く、小さいダイナマイトを千種とすれ違いざまに千種の近くに投げる。すると人の目線は近くにあるものを大きく、遠くにあるものを小さくみえるようになっていたため、銀髪の計算通りに小さいダイナマイトは普

通の大きさのダイナマイトと同じの大きさに見えるようになり、千種からみて投げられたダイナマイトは全て同じ大きさ。

これにより同じように遠くの導火線を切ろうとして、近くにある小さいダイナマイトの消火に失敗。至近距離で爆発を食らってしまった。

そして爆発を食らって遠くのダイナマイトの消火に失敗したことにより、必然的に全てのダイナマイトを食らってしまった。

ありや痛そ〜。いくら千種でも無事じゃすまないな。

「ん？何だてめーは」

あ、こっち見た。

「黒曜の制服。てめーもメガネも仲間か！」

「ああ、いや。俺は」

「果てろ！」

どこからか取り出した大量のダイナマイトを一気に俺に向かって放る。

ダイナマイトか。これは危ない。まあ安全地帯に逃げますか。

ドオオン!!

「ふ、ボンゴレナメンじゃねーぜ」

「残像だ（笑）」

「なっ!」

バシ!

ガクン!

足カクン。懐かしいな、これ。

「てめっ!いつの間に後ろに!何しやがった!」

「何と言われても」

ダイナマイト落ちてくるの時間が(2, 3秒くらい)あつたし、普通に動いて火の元が飛んでこない銀髪自身の後ろに来てついでにカクンしたただけけど。

「普通に移動したただけけど。だってダイナマイト落ちてくるのに時間あるし」

「うっ! (グサツ!)」

ちよつとダメージ受けたみたいだ。どうやら少し気にしてたみたい。

「獄寺君!!」

「なっ!10代目!どうしてここに!」

どうやら銀髪爆弾野郎の名前は獄寺というらしい。

というかあれツナだな。なぜこんなところにな?

説明を聞くと黒曜生がこの獄寺を狙っているらしくてツナが心配で探しにきたそうだ。今つてツナの通つてる並盛中の奴らが次々襲われてる危ない時らしい。

一体誰がそんな辻斬りみたいなことしててるんだろうな。

あ、ツナこつち気づいた。

「て、光努！なんでここに!?!ていうか、それ黒曜の制服！もしかして並中生襲ってるのって光努の事！」

「いや違うけど。その獄寺と今戦ってたのはそこで燃えてる千種だ」

と言つて指差すと地面に焦げ跡があつたけど千種がいない。

どこに行つたのかと思つたけどすぐそこにいた。めちやくちやボロボロで重症だけど。

「ひいいい！」

ツナビビりすぎ。まあ確かに燃えて爆発してボロボロのゾンビみたいなのが来たらホラーだけどな。

「大丈夫か、千種」

「おまえは・・・白神光努・・・骸様が探してた・・・」

「そうか、まあ後で行くつもりだし。喧嘩も程々にしておけよ」

（光努！これ喧嘩つてレベルじゃないでしょ！ていうか知り合!!?!）

ヒュッ！

ツナを狙つた千種のヨーヨーから飛び出た針が、ツナをかばつて獄寺につきささり、

出血多量で倒れ、気を失った。

「10代目……逃げてくださいい……」

「獄寺君！大丈夫!!」

「光努とボンゴレ……壊して……連れて帰る」

俺も対象に入ってるのか。

ヒュッ！

俺より先にツナを狙って針を飛ばすがそれは当たらなかった。

ビビって動けなかったツナだが、横から滑り込んで来た人物がツナを掴んで針を無理やり避けさせた。

「フー、滑り込みセーフってところだな」

「山本！」

現れたのは、黒髪に短髪、ツナ達と同じ制服を着てカバンに野球バットのケースを背負った少年。山本と言うらしい少年は人懐っこい笑顔でツナを助け出した。

が、すぐそばに倒れている獄寺を見て笑顔を潜め、怒りをあらわに千種を睨む。

「邪魔だ」

シャッ!!

キン!!

今起こったことをありのまま話す。千種が投げたヨーヨーを山本がケースから出したバッドで真つ二つにしたらバッドはなく山本は刀を握っていた。

何を言っているのかわからねーと思うが俺も何をされたのかわからなかった。頭がどうにかなりそうだった・・・催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ・・・。

まあ見たまま言えば千種が投げたヨーヨーを山本が真つ二つにしたのはそのまま。山本がバッドを取り出して振り切るとき、変形して刀が中から出現、振り切った時には立派な刀が出来上がっていた。どうやらあのバッドは素早く降ると刀に変形する機能を持っているらしい。

あ、超スピードが原因とかで説明できたよ。まあいいか。

しかしヨーヨーが切られたらさすがの千種もなすすべないな。

どうするのかと思ったら自分の獲物じゃないとか言っただけだった。

犬の獲物とか言ってたな。まあ詳しいことはここにいるツナたちに聞いてみるか。

あとこっそりと手紙を書いて千種の帽子の中に入れておいたので帰ったら誰か気づくだろうな。

さてと、獄寺をみんなで運ばないと。応急処置しておくか。

『毒？何それ、飲んだらまずいの？』

獄寺がやられて運び込まれたのは並盛中学の保健室。

とりあえず治療して寝かせて今は安静にしている獄寺君。

そばに居るのは先ほどのツナと山本、それに保険医のシヤマルという男性に、毒々しい果物を持ってきたビアンキという女性。つーか何このパーティー？

話を聞く限りビアンキは獄寺の姉らしい。嘘だ！だって似て・・・似てるか？

「で、あんたは誰よ」

「お前誰だよ」

「そーいや初めて見るな」

上からビアンキ、シヤマル、山本。まあこの三人とは初対面だったから。いや、山本は確か祭りの時にチラツと見た記憶が・・・まあ今はいいか。ていうか黒曜の制服で余計に睨まれてんだけど。ビアンキから殺気が・・・。

「名前は光努。よろしく」

「お近づきよ。飲みなさい」

といつてどこからか取り出したのは缶ジュース。スポーツドリンクのロゴの入ったそこらへんの自販機に売ってそうな缶。少し水滴がついてるからよく冷えてるもと思われる。ま、くれるならぜひもらつとこう。

「サンキュー。いただきマース」

「ちよ!光努!それ飲んじや!」

カシユ!!ゴクゴクゴク!プハー!!

正直味は微妙。ていうか美味しくない。こういうのが好きな人間がいるのだろうか。まあ人の味覚はそれぞれで少し変わるからな。中にはゲテモノ好きとかいるし。

空の缶を置いて周りを見ると何か皆驚愕してる。え?どうした?

シヤマルとツナは「うそーん!」って顔でビアンキは「そ、そんな!」みたいな顔で山本は「え?マジ?」って感じ。一体本当にどうしたのだろうか?

(ちよ!あれどういふことシヤマル!)

(あきらかにおかしい!ビアンキちゃんの料理は全部ポイズンクッキングのはず。

それは自販機のジュースだろうと例外じゃねえ・・・)

(あの光努つてやつ全然平気そうっすよ・・・)

(くっ!私の料理が効かない!?こいつ何者)

「ツナの知り合いだったっけか？」

「あ、うん。前にマファイアランドで少し・・・」

「つーことはオメエどつかのファミリーの人間か？」

「ああ、イリスファミリーってところ」

「イリスか。そういえばつい最近ボスが来たって言ってたな。いきなりボスが現

れるなんて、ファミリーからしたら吃驚だろうな」

「ホントホント俺も吃驚だよ（いきなりボスだし）」

「だろうな（どこぞの人間がいきなり自分の上司になって大変だな）」

「あのさ、シヤマル。光努がそのボスなんだって」

「は？」

思わずシヤマルの顔がポカんと。よく見たらビアンキの方も「え？」って感じの驚い

た顔に、山本は笑いながら頭の上に「？」だ。

「お前がボスってことは、灯夜にはもう会ったか」

「あれ？灯夜の知り合いか。今は仕事中心じゃね」

「黒道灯夜。昔仕留めそこなったわ」

「え？」

「まあ今は依頼人が消えたから依頼の方もなくなってるし、ていうかもうあいつとは関

わりたくないわ。消えてくれないかしら」

灯夜・・・・お前一体ビアンキに狙われた時に何したんだ。結構な嫌われようだぞこれ。昔結婚前の灯夜の彼女の朝菜ちゃんナンパしてな、そのあと待ち合わせしてた灯夜が来てけり倒されたんだよな」

「まさか朝菜に手を出すなんて。自業自得だね」

「おめー、意外とひでーやつだな。今灯夜家に戻ってるのか?」

「ああ、俺もそこに居候中。あとリルとコルとルイがいるぞ」

「あいつらもいるのか。相変わらず朝菜ちゃんはきれいなんだろうな。リルはきつと将来美人になるぞ」

「シヤマル。お前まさかロリ・・・・」

「ちげーよ!!いくらなんでも守備範囲外だ!俺をなんだと思つてやがる!」

「何つて・・・見境無い女たらし?」

「ちげーよ。ちよつと可愛い子がいたら声をかけてるだけだ!」

それつて同じなんじゃ・・・・。

保健室から出るとリボンとツナが廊下で何か話していた。

ボンゴレ9代目から手紙がツナ宛に来たらしく、12時間以内の六道骸一派を捕らえてこい。凶悪な脱獄囚を中学生に捕まえろとか9代目は意外と厳しいんだな。普通

はしなと思うがマフィアらしいのかねー？成功したらトマト100年分、断つたらお陀仏らしい。

そしてとうの本人のツナは逃げたと。

「ようリボーン」

「ちやおツス、光努。日本にみんなできたんだってな」

「知ってたのか。今灯夜ん家に住んでんだ」

「そうか」

「そういえばさっきの話。六道骸だっけ」

「ああ。今は黒曜中に転入してるらしいが、お前も黒曜だとは思わなかったぞ。も

しかして骸を知ってるか？」

「知ってるけど」

「………（ホントに知ってるとは思わなかったな）」

「あいつ結構面白いやつだったよ。まああったのは一回だけだけど」

「そうか。今から骸討伐に行くけど光努も来るか？」

「そうだな、骸のところ行くつもりだったしな」

「よし、じゃあ後でツナン家集合な。これが地図だ」

「サンキュ、リボーン」

「てめーこんなところで何してやがる!」

ツナの家に行つて早々絡まれた。名を獄寺隼人。中学2年生。

さつき千種と戦つた爆弾野郎だ。結構な重症だったけど平気そうだな。シヤマルつて腕がいいんだな。

隼人の中ではまだ俺は黒曜の敵つて認識だから会つたら睨まれたよ。

「よう、ツナの知り合いで光努だつてな。俺は山本武。よろしくな」

「よろしく武。光努とでも呼んでくれ」

「山本!敵と馴れ馴れしくしてんじゃねーぞ!」

「おいおい、ブツ倒れたお前保健室に連れて行く前に応急処置したの光努だけ。感謝しろよ」

「なっ!」

「ところでなんでビアンキはリスの頭かぶってるの」

一応言つておくけどリスの頭の着ぐるみだから。本物じゃないぞ。

「えつとね、獄寺君ってビアンキの顔見たら腹痛になる体質で」
「どんな体質だよ！お前から姉弟だろ!？」

「武、それ何持ってるの？」

「これか？家で作った寿司と茶だ。後で光努も一緒に食おうぜ」

「お前んち寿司屋か。今度行くよ」

「おう、まってるぜ」

武は中々フレンドリーだな。獄寺と正反対。面白いなこの二人。

「よし、じゃあ皆揃ったところで、骸退治に出発だ」

リボーンの号令で俺たちはLet's 骸狩り。

『武VS犬、コングってどういう意味だっけか』

黒曜ランド到達。

武、落ちる。

犬、突入。

武VS犬。

前回からここまで来たのにそう時間はかからなかった。

黒曜ランドに着いた俺、白神光努と愉快な仲間達。

とりあえず正面の柵をビアンキのポイズンクツキングで溶かして中に突入。

ちよつと歩いたら犬が飛んできて武を突き飛ばす。

突き飛ばされたら地面が落とし穴になっていて下の空間に真つ逆さまに落ちる。

犬が穴から武の場所に飛び込んで下で二人が戦うことになった。

大まかなあらすじはこんな感じで、次から本編！

「山本氣をつけて！影に何か獸いる！」

どうやら武が落ちたのはもともとは黒曜ランドの植物園だったガラスのドーム状の建物。今は土砂崩れの影響で土に埋まり、さつきみんな歩いていた場所は植物園の天井をだっただけらしい。武が落ちて犬が入ったのは土に埋まった植物園の中。中にまでは土が入っておらず中々広々とした空間だ。

中は真つ暗で光源は武が落ちた穴から指す日の光のみ。したの空間の影に位置する場所から歩いて出てきたのは、城島犬。

骸の腹心の部下。

「柿。ピー寝たままでさー、命令ねーしやることねーし超暇だったの。そこへわざわざ俺の獲物がいらつしやつたんだもんな」

影から姿を現して楽しそうに笑いながらひたひたと裸足の足で歩いてきたのは間違いない、犬だな。

「超ハッピー」

「おーい、犬！何してんだー」

「んあ？光努！おめー骸さん探してたし、つーかもつかい勝負らびよん！」

「後でな、それよりやることあるんじやねーのか？」

「そうらつたびよん。こいつ片付けたら次はお前らだびよん。そんなわけで、よい………ドン！」

犬は武に突っ込んでいったが武はその特攻を躲して犬は飛び上がり、カートリッジ状の歯を口に装着すると壁を蹴り、大仰に回転をして人間技とは思えない飛び上がりを見せつけた。

「ひやおっ！」

「な！なにあれ！」

「人間技じやねえ！」

そのまま天井付近の壁に足をつけ、飛び上がり、武に向かっていった。

「ウキツ！いったらつきまーす!!」

「なっ！」

ガキン!!

向かってきた犬に山本のバッドを振り下ろし刀に変形したが、動物の能力を得た犬の

鋭い歯に噛み砕かれてしまった。

猿の歯ってあんなに丈夫だっけ？顎の問題？だからといって鋼でできた刀を砕けるものだろうか？

刃の根元を砕かれたことにより残り先っぽは飛んでいき天井付近に突き刺さった。

「ヒヤホーウー！次は喉をえぐるびよん」

数回転して地面に着地して舌をベロリと出すと同時に噛み砕いた刀の欠片もポロポロと溢れてきた。

「ひいひい！木とかえぐったのあの人!？」

「ありや人間じゃねー！呪い!?呪いかー!?」

「落ちてけツナ、隼人。よくあることだ気にするな」

「よくねーよ!!」

「フー」

「!?」

下にいる武から息を吐くような声が聞こえてきた。溜息じゃない、妙に納得したような表情をしている。

「なるほどな、ファイアゴツコっていうのは加減せずに相手をぶつ倒していいんだな。

そういうルールな」

「ここまで会話でわかったが武は本気で今の状況を遊びの一環だと思っ
ているらしい。すごいやつだな……」。

「山本、怖がるどころか……」

「あいつ、あー見えて負けん気つえーからな。バッド折られて内心穏やかじゃねーぞ」

「へー、ますます面白いやつ」

刀も折られ、ひとまずいらなくなったバッドケースを地面に置く。

「やりあう前に一つ聞いていいか？」

「んあ？」

「お前ナリ変わってねーか？いつ変装した？」

「ゲ……やっぱ天然……」

（山本、変わったことにすら気づいてなかった！）

まあ猿と人だからわかりにくかったかな。

爪とか毛とかいろいろとチェンジしてたけど。

「ま、いや。教えちゃう。ゲーム機ってカセット差し替えるといろんなゲームで

きるっしょ？それとおんなじ」

そう言つて複数の歯を取り出して見せる。

犬はカートリッジ状の動物の歯を自らに付けることに……略。

この説明は前にもしたな。

「コングチャンネル」

肉体が肥大化し、腕が伸び、毛深くなり、正しくゴリラと呼ぶ風貌に変化した。別にゴリラチャンネルでもいいと思うのは俺だけか。まあゴリラチャンネルよりコングチャンネルの方がネーミング的にかっこいいとは思うけど。

「あれは霊長目オランウータンカ、ニシローランドゴリラね」

「確かアフリカ中央部に生息して霊長目最大とかいつてるやつだな。でかい割には木登りが得意らしい」

「うそー!? ありえない!!」

さて、ここまで明らかな変化に武の反応は、

「うおすげー、最新のドーピングかよ」

さすが武というところか……。

「だーかーらー、違うんよ!」

思い切り掴まれて壁まで放り投げられる。

壁といつても基本ガラスでできたドームだからぶつかってガラスが割れる。

一応土に埋まつてるし割と強度のあるガラス製ドームだから今ので崩壊するようなことにはならないけど割と強めにぶつかり落ちて無事に着地した。

「山本！」

「くそ！暗くてよく見えねえ」

「今の犬は動物同然だからな。暗闇で察知する術をいくつもあるだろう。大丈夫か、武」
犬に投げられて着地した武が右腕を確かめるような素振りをする。野球選手だから右腕を壊さないようにしてるのか。そうでなくとも確かに大怪我はなんとも避けた
いつてところだな。

犬はカートリッジをコングチャンネルからウルフチャンネルに変える。

暗闇でも血の匂いを嗅ぎ分けて武を攻撃する。

その攻撃をかううじて躲す。それにあの動き、やつぱり体をかばってるな。

どうやら秋には大事な用事があるみたい。ふむ、野球部だし、やつぱり野球の大会と
かあるんだろ。確かにこんなところで怪我してる場合じゃないよな。

ドン！

リボーンがツナを穴の中に突き落とした。

「うぎやああああ!!げふっ！」

お！生きてる。

「何やってんすかりボーンさん!!」

「黙って見てろ」

逃げる標的より弱い標的。動物らしく、落ちてきたツナに狙いを定める犬。

「よし、山本逃げるし、先に兎狩つとくかな。いったらつきまーす!!」

「うぎやー!来たー!!食べられるー!!」

そういうば犬って動物能力を得てる間は食生活もその動物と同じになるのだろうか?ふむ、今度ルイと一緒に犬について詳しく調べて見るか。面白そうだし!

ガッ!

「んあ!」

ツナに特攻を仕掛ける犬の後ろから石が当たった。

後ろにいたのは小石を野球ボールのように弄ぶ武の姿が。

「お前の相手は俺だろ?こいよ、こいつぶちあててゲームセットだ」

「た、助かったー、山本ー」

「ほへー、挑戦状だ。面白そーじゃん。んじや、俺も本気見せちやおっかな」

そう言って新たな動物の歯を取り付ける。

「チーターチャンネル!」

あの時のチャンネルか。最速、いやー速い。どうする武?

「くっ!」

犬めがけて石を投げつけるか、チーターの俊敏さとスピードで軽く避けそのまま武に

左腕に向かって食らいつく。

「いたらき!!」

鋭い牙が突き立てられ腕から血が吹き出す。

「山本!!」

「そいつは・・・お互い様だぜ!」

腕を食われたまま、武は右手で持っていた刀の塚を振った、

ガツ!

「キャン!!」

攻撃が当たった油断とその隙を突かれたため、武の攻撃を避けることができなかつた。しかも思い切りこめかみに当たったからありや痛いぞ。

「ごめん山本!俺のせいだ腕を・・・野球あるのに!大会あるのに!」

「おいおい勘弁してくれよツナ。いつの話してんだ?ダチより野球を大事にするなんてお前と屋上ダイヴするまでだぜ」

「や、山本・・・」

「それに、これぐらいのケガじゃ余裕で野球できるぜ」

「すげえ!!」

すごいな武。友達思いなやつだな。全然とはいかないけど平気そう。あれぐらいの

怪我ならちやんと治療すれば問題なさそうだな。それにしても屋上ダイヴって何？後で聞いておこう。

「今倒したのが主要メンバーの城島犬だ。この写真を見てみる」

武を引き上げた後、そう言っけてリポーンがツナ達に一枚の写真を見せる。

「これが敵の三人組？」

「ああ、真ん中のやつが六道骸だ」

その写真に写っていたのは右側に犬、左側に千種、そして真ん中にいるのが……
誰これ？

『前門の虎、後門の鷹』

「リボーン、この真ん中の誰だ？」

「ん？六道骸だぞ」

「いや、俺はこんなやつを見たことない」

「!？」

「たりめーだろ！てめーも骸見たことねーだろうが」

「ちげーぞ獄寺。光努は骸を知ってるんだ」

「な！やつばこいつ敵っすか！」

「ちよ、獄寺君！落ち着いて」

「敵ならとつくに襲ってくるだろ」

真ん中に写ってるのは黒髪をオールバックにして顔に二本の切り傷のある長身の男。ホントに誰だろこいつ。あ、犬に聞けばいいか。

それにしても骸は随分と用意周到というか頭腦的なやつだったんだな。

さて、武の治療も終わったし、オポツサムチャンネルで死んだふりをしていた犬がお前ら全員骸にやられるぜーみたいなこと言つて上から隼人が砂をまこうとしてビアンキが横からバスケットボール大の岩を落とした。

ちなみ、犬は武を引き上げる時に岩にロープで縛り付けてある。

ヒューー、ゴッ！

「キャンッ！」

「ヒクヒクしてるけどあれも死んだふりかしら？」

（やっばこの人怖えー！）

大丈夫かな犬？いくら動物でも岩を落とされたら重傷なのでは？

「お前ら、先に言つてていいよ」

「え？光努はどうするの？」

「何、ちよつと友達手当してくるよ」

そう言つて穴に飛び込む。

「光努！」

「ま、あいつなら大丈夫だろ。俺たちは先に行こーぜ」

「そうっすね。10代目、ほつといていきましよう」

「え、でも」

「ツナー、後で追いつくから行ってこーい」

とりあえずなんとか納得したらしく、みんなで先を急いだのであった。

「よー、大丈夫か犬？」

「あん？光努か、お前骸さんが探してたびよん」

「ふーん、千種も言ってたな。俺何かしたっけ？」

「何したか知んねーけど、骸さん微妙な笑い方してたびよん」

「微妙って……まあいいか」

とりあえず犬の手当を完了。ロープを解いて地上に出る。

上に人がいない状態でどうやって出たかはまた今度な☆

「ところで犬。聞きたいことあるんだけどいいか？」

「ん？なんらびよん」

「これ誰？」

そう言つてリボーンからもらつた脱獄三人組の写真のコピーを見せる、

「これはランチアだびよん」

「ランチア？ 骸の影武者みたいなもんか．．．こいつ強い？」

「んー、あんま知らんけど、まあ強いんじゃない？」

ふむ、是非とも見てみたい。軽く戦つてみたいな。別に俺は戦闘狂とかじゃないよ、強者に興味があるだけさ（それは戦闘狂というのでは？）

「！」

「ん？」

「犬、一体どうしたんだ。何か変な匂いでも嗅いだか？」

「あたり、前に嗅いらことのある匂いが近くにあるびよん」

「ふーん。あそこらへん．．．か！」

足元の小石を草むらに向かつて蹴つ飛ばすと草むらの中に入つていった小石がキンという音と共にこちらに帰つてきた。

パシ！

が、帰つてきた石を受け止める。

「犬、あいつお前の知り合い？」

「確かどつかで見たびよん．．．あー、前に骸さんと会つてたやつびよん」

ガサツ!

草むらから人影が飛び出してきた。

そのまま腕を光努に向かつて振るつた。

パシ。

「こんなんで当たると思ったか?」

光努の両手には相手が振るつてきた手に握られた一本の変わつた形状のナイフの刃が挟まれていた、つまり白羽取り。

「いや、思つてないな。骸の情報通り、強いな」

ガシヤ。

「!」

ビユツ!!

音がしたと思つたら、掴んでいたナイフの刃が伸びた。

咄嗟に顔を剃らしたが、さすがの光努もあまりにも不意を突かれて頬をかすめた。ナイフを持った手を振り回し、襲撃者ごとぶん投げた。

皮を切つただけだから出血はしなかったが、確実に光努に傷をつけた。

この世界で光努を傷つけたものは少ない。

今回、その光努を傷つけた者はこう予想していた。

光努が自分の攻撃を受けるといふことを。骸は分析した。

光努は基本的に攻撃を交わすが、受ける。

交わす方が簡単なのに、武器を掴んでも止めるように受ける。

それを利用された。

受けたあとの二段攻撃。完全に光努の隙を突いた。

「へえ、面白いな、そのナイフ。どういう仕組みだ？」

「企業秘密もしも勝ったら教えてやるよ」

投げられた後、空中で一回転して着地した襲撃者がしゃべる。

「俺らにな」

「！」

光努はその場でしゃがむと頭の上を何か貫通した。

ドオン！

横を見てみると、光努の頭の位置と同じくらいの位置にある木に銃痕が残ってい

た。痕から煙が出ているのを見るとたった今撃ち込まれたのがよく分かる。

そう、撃たれた。

(狙撃!?)

「犬、近くにいと危ないぞ。骸のところ戻つてろ」

「へーい。ま、頑張れよ」

そう言つて猿のような素早さでこの場を去つていった。

「さて、前門の虎、後門の狼・・・いや、鷹つてところか」

「いくぞ、白神光努」

『VS襲撃者①―蜃気楼の記憶―』

襲撃者は男性。

かぶっている帽子、シャツ、ズボンは全て迷彩柄の男。

帽子の中から金髪の髪がはみ出し蒼い瞳をした推定年齢10代後半くらい。

上から黒曜の制服を羽織っていたが、すぐに脱ぎ捨てた。

その姿はまるで軍人のようだった。

右手には先ほど光努に仕掛けた妙な形状のナイフが握られていた。

通常のナイフから刃が伸びて剣並の長さとなったナイフが。

カシャン。

少し手を振ると、先ほどのナイフは元の長さへと戻った。

「やりあう前に一つ聞いていいか？」

「なんだ？」

狙撃が止まっている。男の耳にインカムが付けられていることからここでの会話は

狙撃手にも聞こえていゝらしい。

「お前、名前なんての？」

「俺の名前はラツシユ・ギナ。悪いが骸に言われてね、ちよいと始末してくれってさ」

「あれ？あいつ会いたがってたって聞いたけど」

「俺らが来たからよろしくってさ」

「そうか、つまりお前から突破して来いと」

「そうともいうかな、まあなんにしても」

「そう言つてラツシユはナイフを構える。」

「悪く思うなよ？」

「当然」

「ビュッ！」

突き刺してきたナイフを光努は左に躲そうとしたが途中でやめて後ろに下がった。その瞬間光努の左側に弾が飛んでくる。

（銃で避け道を塞いでナイフ攻撃か。面倒だな）

カチリ、カシャン。

「うおっと！」

突き刺してきたナイフをボックスステップで避けたが、またナイフの刃が伸びてきた。

後ろに下がった状態から上体をさらに後ろにそらしナイフを避け、そのままバク転をして一旦距離をとって着地した。

「らっ！」

着地と同時にラツシユがピンを口で引き抜いた手榴弾を光努に投げつけた。

だがそこは光努。投げつけてきた手榴弾を掴んで投げ返そうと手を伸ばしたら、手榴弾が狙撃された。

ドゴオオン!!

結果、手榴弾は目的に当たる前に爆発した。

『どうだ、ラツシユ?』

「多分まだだな。骸の話じゃ、随分と人間離れしてるみたいだからな。ほら」

通信機に話しかけていたラツシユが上を向くと、爆発で生じた煙の中から光努が上空に飛び出してきた。

タアアン!

上空に飛んだ光努に向かって狙撃手からまたもや銃弾が飛んできた。

光努に当たると思いきや、

カッ!!

「な! (銃弾型の閃光弾! しまった、目が!)」

そのまま墜落して着地は無事にする光努。だが至近距離で閃光弾を食らったことに
より目を伏せる。

この閃光弾の目的は一時的な失明。
相手の戦略。

この場で戦っているのは光努と二人の人物。

ラツシユともう一人、蔵見くらみ考魔こうまは作戦を立てた。

通常攻撃なら骸の修羅道でさえ、ほぼ躲す光努。ならばどうするか？

予想外の事態を連続で起こして隙を無理やり作る作戦。

ラツシユのナイフ。そして手榴弾を打ち抜く。さらに銃弾型の閃光弾による一時的

失明。結果、光努現在地面に膝をつけ、手で目を伏せていた。

『ラツシユ！』

「あいよー！」

ラツシユは光努に素早く接近してナイフを振るう。

むき出しの刃が、光努に迫る。

タアーン！

それと同時に狙撃音！光努に向かって銃弾が飛んできた。

銃弾より早くナイフの刃が光努に迫った。

「!」

カツ!

光努は目を開いた。そのままナイフをふるって来たラツシユのナイフを躲し、ラツシユのナイフを持つ腕を掴んで少し引つ張るように動かすと、

キン!

『!』

ラツシユのナイフに狙撃銃の弾丸が当たった。そしてはじかれた。

「はっ!」

いきなり持っていたナイフに銃弾が当たり、衝撃が加わったことにより一瞬態勢を崩したラツシユを光努は上空へと蹴り飛ばした。

「ぐっ! (こいつ! 何をした!?)」

蹴られたラツシユはそのまま木の上に着地した。

蹴られた箇所を抑えつつ光努を上から見る。

『大丈夫かラツシユ』

「ああ、なんとかな」

『閃光弾を撃つてからまだ10秒程しか経ってないのに……回復するのが早すぎ

る』

「確かに……」

『それに……撃ってくる場所を読んでるな』

「おいおい、化物かよ……」

光努は立ったまま木の上にいるラツシユに視線を向ける。

「ふう、視力問題なし。そろそろ俺から行くぞ」

「……面白いじゃん。考魔、援護頼んだぜ！」

『任せろ』

ラツシユは懷に、ナイフを持っていない方の手を入れた。

黒曜ランド中央のレジヤールランド内。骸の本拠地。

その中の一室で獄寺に負傷された柿本千種とボス、六道骸が話をしていた。

「骸様、彼らは今どちらに……」

千種の言う彼らとは骸、犬、千種の三人の元へやってきた援軍。

少し前、光努達がこの黒曜ランドへ来る前、骸たちの元へ数人の人間がやってきていた。今回は骸達の仲間ということとで全員黒曜生の制服を着ていく。だからといって皆中学程の年齢というわけではないのだが。10代のもものもいれば20代、ましては30代の者もいる。

「MMは先ほどやられたようですね。今沢田綱吉達がバーズと、そして白神光努はラツシュ、考魔の二人と交戦中みたいですね」

「そうですね．．．あの二人は何者ですか」

骸達の援軍とは、骸達の脱獄の際に一緒に脱獄してきた者たちのこと。その中に千種の記憶ではラツシュと考魔の二人はいなかった。

「僕がこちらに来る前に知り合いましたね。元傭兵のようなものですよ」

「そうでしたか」

「あの二人なら、もしかしたら白神光努も倒せるかもしれませんね」

「お会いにならなくていいのですか？」

「クフフ、まあ今度こそ消すつもりでしたからね。ここで消えてくれたのならラツキー．．．つてところでしょうか」

「．．．．．」

（そう．．．．．それなら幸運なんですけどね）

にやりと骸は笑うのだった。

シャツ！

ラツシユが懐から取り出したのはもう一本のナイフ。

これでラツシユの両手にはナイフが一本ずつ握られた。

(同じナイフ、双剣。これがラツシユの全力)

「ミラーシユナイフ 蜃気楼剣、メモリーダガー 記憶剣」

木から飛び光努の上空へと飛び出した。

光努は狙撃を警戒しつつ上空のラツシユを見上げる。

ヒュヒュツ!!

ラツシユがナイフを振るうと先端からナイフの刃先が外れ、光努に向かって飛び出した。とんできた2本の刃先を掴もうとして光努は何か感じたのか、後ろへと下がった。

ドゴン!!ドゴン!!

「爆発!あの刃先、爆弾か!」

飛んできた刃先が地面にぶつかつた瞬間、爆発が生じた。火力が割と高め。地面には少しえぐれたあとが残つた。

「はああ!」

上空で身をひねる、回転するようにナイフを振り、刃先をいくつも光努に向けて飛ばした。

ドゴン!ドゴン!ドゴン!ドゴン!

「危なっ!」

ターンターン!

(2発の狙撃音!だけど・・・二箇所とも俺から外れてるな。わざとか?)

爆発を避ける光努の耳には狙撃音が聞こえた。

横目で見てみると、光努から数メートル離れた位置を通過してラツシユがさつきまで乗つていた木に向かつて飛んでいった。もう一発はこれも光努から少し離れた位置、光努の横にある岩に飛んでいった。

(あの狙撃位置・・・跳弾!)

キキン!

(普通木とか跳ねるかよ．．)

光努の予想通り、木と岩にぶつかつた銃弾は一度跳ねて方向を変え、光努に向かつて飛んできた。俗に言う跳弾というやつである。

上から爆弾の雨。横からは跳弾による狙撃。

「まだだ！」

光努の手に握られていたのは小石。

避けながら拾つた小石を手を振ることで上空へと投げつけた。

落ちて爆発する前に小石にぶつかつたナイフの刃先は、上空で爆発し、連鎖的に周りの刃先も爆発させた。

そして体をわずかにずらすと、二方向から飛んできた銃弾は、ちょうど光努を中心として鏡のように飛んできたことにより光努が中心からいなくなるとお互いにぶつかった。

「この狙撃．．．距離が多少あるのと、あの爆弾の爆発の後に入っていくように撃たれたから避けられ」

『爆発弾、合わせ鏡』

カチン。

「！」

ドゴオオオオ!!

まるで鏡合わせのように跳弾した銃弾同士が正面からぶつかり、光努の至近距離で爆炎を上げた。

『VS襲撃者②—慣れた—』

ラツシユ&考魔の戦略はありえないような攻撃で隙をつくこと。

骸からの情報により、正面からの攻撃は防がれる可能性が高いことにより、今回はいくつもの爆弾付きの刃と爆発弾ボムによる超火力攻撃。それも虚をつくように刃先から出した爆弾と、普通の銃弾に見せかけた爆弾。

光努は先ほどの閃光弾フラッシュから今度の銃弾も何かあると予想をしていたが、一度跳弾した事によりこの考えを捨てた。爆発したり閃光を出したりするような弾なら、ぶつかつた瞬間に効力が発揮するからである。

だからこそ、今回は光努は隙を突かれた。

ラツシユと考魔は光努の読みを惑わせたのだ。

周りが煙で立ち込める中、上空にいたラツシユは地面に着地した。

「考魔、あいつは中か？」

『ああ。サーモグラフィーで見たらまだ煙の中。確かに爆発の直撃を受けたはずだ

が・・・』

さすがの光努も今の爆撃には無傷で済まないはず。

考魔が使ったのは跳爆弾^{リフレットボム}。外郭と内郭の構造上、一度だけの跳

弾を可能にして二度目の着弾時に爆発させる銃弾。普通に撃つ分には最初のあたりで爆発しないので使えないが、跳弾させて方向転換させ爆発させるのにもってこいという銃弾。

光努は銃弾の特性を一つだけと考えた。考魔の持つ銃弾にはぶつかつた瞬間爆破する爆発弾^{ボム}や威力を殺して跳弾しやすくした跳躍弾^{ジャンプ}、閃光を放出する閃光弾^{フラッシュ}など数多く存在する。

光努も考えなかった。まさか二つ、跳弾と爆発の特性を持つ銃弾があるということ。注意深く様子を探るラツシユと考魔。

ちなみにサーモグラフィは人の体温を感知して画面上に映し出す機械なので光努の居場所は煙の中でも正確に分かる。

考魔から見て光努は煙の中じゃがみこんでいた。

「ふう。ギリギリセーフか」

「！やっぱり、ていうかなんてタフなやつ」

『それでもダメージは与えられたみたいだな』

片膝について腕をクロスにしてガードの態勢をしている光努。

だが無事とは言えず、服の所々は煤けて黒曜の制服の上着に至っては下半分ほど燃えていた。光努自身も焦げた跡が見える。

「この制服が衝撃吸収素材と耐火繊維でできてなかったらシャツもこげていたな」

「なんでそんな制服来てんだよ！というか最近の制服はそんなに高性能なのか!？」

「最近の制服をなめるなよ。もらった制服を改造して作り出した俺の制服に死角など存在しない」

「今改造って言ってよな！正規品じゃねえのかよ！」

「そりゃそうだ、こんな制服。日頃から学校で銃撃戦でもない限り防弾とか耐火と

かの機能なんか必要ねえよ」

「……………」

『まあなんにしてもまだ仕留めてないってことだな』

「そうだな」

光努は立ち上がって汚れを落としつつ、首をコキコキと鳴らして軽くストレッチし終わる。「ふう」と息を吐く。

「そのナイフ。どんな仕組みだ？」

「これは^{ミラージュナイフ}蜃気楼剣と^{メモリアル}記憶剣。両方合わせ、計21の機構を持つナイフだ、いいだろう。こ

れまで見せたのはたったの3つ。まだ行くぞ」
チャキ。

そう言つてナイフを構えるラツシユ。

「いいぜ、そつちの狙撃手は？」

グツ。

そう言つて拳を握る光努。

「蔵見考魔。あいつは今回援護一択だからな。それでももつと派手にやつてやるぜ」

「そうか！」

一足でラツシユに接近して拳を振るつた。ラツシユは予想通りと言わんばかりにその場にしやがむ。

通常よけられないであろう光努の拳だが、事前情報が効いているのか、ラツシユは避けることができた。

「はあ！」

避けつつナイフを横に薙ぐように振るとナイフの刃が伸び光努に向かった。

「そりゃ、飽きたぜ？」

「そうか、じゃあこれはどうだ？」

光努がナイフを避けるとラツシユは後ろに下がり腕を振るつた。ナイフの長さを変

えても明らかに届かない距離。だが、

シユルルル。

「うおっとー！」

ナイフの柄からワイヤーが伸び、そのワイヤを掴んで鞭を振るうようにナイフをを当てに来た。

ヒュヒュヒュ。

巧みにワイヤーを操り、光努にナイフを当てにかかる。

ガシ！

だがそこは光努。あつさりとナイフを止めてしまった。

その瞬間。掴んだ光努の腕に向かって銃弾が放たれた。

光努の腕に向かってまっすぐ飛んできた銃弾は、ワイヤーを掴んで止まった光努の腕に当たると思われた。

ドッ！

『!!』

光度の腕には銃弾は当たらなかった。銃弾が飛んできた瞬間、ワイヤーを掴んだ方の手と逆の方の手を手刀にして側面から打ち払った!!

そう、素手で銃弾を打ち払ったのだ。

飛んでくる銃弾の威力のある正面ではなく、横から銃弾以上の速度で打ち払われた銃弾はそのまま地面にぶつかって停止した。今回は普通の銃弾を使ったゆえに何もアクシオンは怒らなかつたのだが……。

「おい。てめえ、何しやがった」

「何がだ？」

「銃弾が素手で払えるか！何した！」

「お前は飛んでくる物体を払うこともできないのか？」

「な！」

「そろそろ銃弾には、慣れた」

（こいつ、音速で飛ぶ銃弾をキャッチボールの玉程度にしか考えてないのか!?!）

光努にとつては、飛んできた野球ボールを横から力を加えて落としたようなものが普通はできない。

ましてや考魔は今、狙撃用に狙撃銃を使っている。一般的な拳銃と比べて狙撃銃の弾丸の速さはおよそ3倍。その速度は音速を優に超える速度。

その物体を横から落とすことなどできようか？普通は触れることすら難しく、またできたとしてもはじかれる。だから難しいが避けるか、何かで正面から弾いたりするもの。それにある程度の硬度のある武器を持ち、力と速さのあるものなら可能かもしれない

いが、それでも素手でやる分には等に人間の杵を超えている。

「おらっ—」

「ぐっ—」

ワイヤーを引つ張って、ラツシユを上空へと上げた。

そのままワイヤーを放して跳躍し、ラツシユへと接近。そして殴る！

「う!!」

咄嗟に腕を出して防御をしたが、いかんせん光努の拳はパワーがある。

防御したまま地面に思い切り叩きつけられた。

上空にいる光努に向かって銃弾が放たれたが、ワイヤーを両手で掴んでピンと張り、

銃弾を当てて防いだ。

そのまま地面へと着地と同時に、倒れているラツシユへと拳を振るう。

ドゴオ!!

「どうだ?」

「はあ……降参だ」

自分の顔のすぐ横の地面に拳をめり込ませた光努に向かって、ラツシユはそう宣言した。

「考魔だっけ。お前まだ大丈夫なのに降参していいのか?」

「いいんだよ。依頼なんて、まあまあで完了しとけば」

「気だるそうに岩に腰掛けながらくつろいでいるのは先程までラツシユと共に光努と戦っていた狙撃手、蔵見考魔。」

「ラツシユと同じ迷彩柄の帽子と服装、少し長めの黒髪を後ろで一つに縛り、狙撃銃を肩から下げている男。」

「あの後、ラツシユがした降参宣言に考魔も同意して狙撃地点からバイクで光努の所まで来た。」

「ラツシユ、そんなんでいいのか?」

「何か言ったら精一杯やりましたと言うだけだ」

「すごいなそれは・・・」

「ラツシユと考魔は骸に雇われた傭兵のようなもの。」

「今回骸に光努を仕留めて来いと頼まれていたのだが、」

「あれは絶対に無理だなんて思ってる顔だな」

「そうだな、なんか胡散臭い笑顔してたし」

「骸の信用ガタ落ちだな・・・」

その後、骸の愚痴、敷いては脱獄囚どもの愚痴をつらつらと話してきて光努も苦笑いで返していくのだった。

『ツナ編―あの時と一緒―』

ピク!

「今の……銃声か?」

ラツシュ達と別れ、ツナ達を一人で追いかけてながら、光努はふとつぶやいた。

光努がラツシュ、考魔と戦っているとき、ツナ達は骸の元へと来ていた。

骸の脱獄囚仲間のMM、バーズ、ヂヂ&ジジ、そして骸の影武者であるランチアをどうにか倒した。

そして骸の本拠地、3階の映画館で本物の六道骸と対峙した。

骸の能力によって追い詰められたが、後からあらわれた雲雀恭弥と獄寺隼人の二人。

雲雀恭弥はドクターシャマルによって『桜クラ病』という桜を見るとフラフラになるという不治の病をかけられていた。そのため骸は手っ取り早く、近接格闘で互角の雲雀を潰すため、地獄道の幻覚で桜を再現した。

だが、その油断から雲雀の攻撃を食らってしまった。

事前に合流していた獄寺に特效薬をもらっていた雲雀は病気を治したことにより、桜を見ても平気な状態となっていた。

結果として、骸は雲雀に攻撃を受け倒れた。雲雀も力つき、倒れた。

そして拳銃を取り出して、自らの頭を撃ち抜いた。

それで終わりのはずだった……。

「どういうことだ、憑依弾は禁断のはずだぞ。どこで手に入れやがった」

自らを撃ち抜いた骸。そのまま倒れたがビアンキがツナを攻撃した。

そしてビアンキが倒れて獄寺がツナを攻撃した。

まるでバトンリレーのように倒れては別の人物がツナを攻撃する。

そして現在、ツナを攻撃した獄寺の右目には、骸とおなうじ「六」と刻印された赤い瞳が……。

「クフフフ、気づきましたか。これが特殊弾による憑依だと」

「え？特殊弾って死ぬ気弾や嘆き弾のこと？」

ちなみに嘆き弾とは。トマゾファミリーに伝わるという、撃った人物を嘆き状態にして卑屈になった人物は周りから同情を買うという効力がある。別段他人に興味のないようなやつには効かない弾なのだが。

「そうだ。憑依弾はその名のとおり、他人の肉体に取り付いて操る弾だぞ」

「なんだってー!!」

その昔。

エストラーネオファミリーとよばれるマフィアが開発した特殊弾。

画期的な発明だったのだが、使いこなすためには強い精神力、そして何より弾自身との相性の良さが必要とされていた。死ぬ気弾も自分が後悔をしないとそのまま死んでしまうかもしれないというリスクが存在するが、憑依弾も弾に拒否されたのならそのまま死に至るかもしれない危険な弾。

憑依という特性上、使用方法があまりにも酷く、他人の肉体を乗っ取って犯罪を犯す

ものも多発したためにマフィア界で禁弾とされ、弾も製法も葬られたとされていた。「マインドコントロールの比ではありませんよ。操るのではなく乗っ取るのです。そして頭の頂辺からつま先まで支配する。つまりこの身体は………僕の………僕のものだ」

そう言つて獄寺に憑依した骸は自らの体につけた。

「や……やめろ!!」

「さあ、次は君に憑依する番ですよ。ボンゴレ10代目」

「な……俺!？」

「やはり、お前の目的は………」

「クフフ、目的ではなく手段ですよ。若きマフィアのボスを手中に収めてから僕の復讐は始まる」

「な……何言つてんのー!!俺はダメダメで……いいことないって!!」

自分が狙われていると知つて自分はダメだとパニックになりながらアピール(?)するツナ。半端なくビビってるのがよくわかる。

「奴の剣に気を付けろ。あの剣で傷つけられると憑依を許すことになるぞ」

「そ……そんな!」

「よくぞ存知で」

獄寺（骸）は持っていた剣を投げるとその場で倒れこみ。

「その通りです」

倒れていたビアンキが立ち上がり剣を受け取り、倒れている雲雀に剣で傷をつけると倒れこみ。

「ま・まさか、雲雀さんの中にまで!!」

ふらりと雲雀が立ち上がり、持っていたトンファーでツナを殴り飛ばした。

バキ!!

「がっ!」

どさっ!

だが、殴った勢いそのまま倒れてしまった。

雲雀の体はすでに限界に近いほど傷つけられていた。一度目の襲撃の時に骸の用意した桜によって戦闘不能状態のままあっけなくやられ、その傷のためすでに立ち上がることもできなくなっていた。

雲雀に憑依した骸は倒れ、憑依を解いた。

「気をつけろ、また獄寺かビアンキに憑依するぞ」

「!」

立ち上がったのは獄寺。・・・そしてビアンキ。

「獄寺君！…え!? ビアンキも!？」

バキヤ!

扉を破壊して入ってきたのは、雲雀と獄寺に戦闘不能にされた犬と千種。

二人ともボロボロの体だが、獄寺、ビアンキと同様に右目に「六」の文字の入った赤い瞳があつた。

「骸が四人!!」

「四人同時に憑依するなんて、聞いたことねーぞ」

「それだけでは、ありませんよ」

獄寺（骸）が使つたのはダイナマイト攻撃。

千種（骸）が使つたのは仕込みヨーヨー、ヘッジホッグによる攻撃。

ダイナマイトの爆発に、ツナはなんとか逃げ回り、

ヘッジホッグの針による攻撃に、リボーンは上着を盾にして針を防ぐ。

「第二の道、餓鬼道は……技を奪い取る能力」

今の骸には、憑依した獄寺のダイナマイト、ビアンキのポインズックキング、千種のヘッジホッグ、犬のチャンネルを全て使うことができる。

それに加え、骸個人の六道輪廻の能力も使うことが可能。つまりツナとリボーンは4人の骸と戦っていると言っても良い状態である。

地面から幻覚の火柱を出しながら、二人を追い詰めていく。リボーンは今回の骸の犬に9代目の命により手出しができない。

だからツナには攻撃できるが骸には攻撃ができなく、避けるしかないのが現状。だが、骸からの攻撃を避けるリボーンはまだまだ余裕そう。

それでもツナはめちやくちや焦ってる。

「俺は手は出せねーんだ。ツナ、早くなんとかしやがれ」

「ひいひい!!無茶いうなよ!!俺のなんとか出来るレベル超えてるよ!!」

「俺の教え子なら超えられるはずだぞ」

「そんなメチャクチャな理屈ってあるかよ!?!」

「クフフ、先生は焦っているのですよ。生徒の絶体絶命の危機に、支離滅裂になってい
る」

会話をしながらビアンキ(骸)はリボーンにポイントスルクッキングで攻撃を仕掛ける。リボーンはそれを飛んで躲す。

「ウソじゃねーぞ。お前の兄貴分のデイーノ超えてきた道だぞ」

リボーン曰く、リボーンの相棒の形状記憶カメレオンのレオンはある時しつぽがちぎれてる。その際、リボーンの生徒、昔ならデイーノ、今ならツナに絶体絶命のピンチが訪れるという定番のお約束みたいなことがあるらしい。

かつて、ディーノが生徒だった時も絶体絶命のピンチが訪れ、見事にその試練を超えたとき、”へなちよこのディーノ”から”跳ね馬のディーノ”に成長したという。

「なっただって・・・意味わかんねーよ！だいたい俺は、」

「上だぞ」

ドガガン！！

「がはっ！」

ダイナマイトの攻撃をくらい、ツナの体はすでにボロボロ。

爆風に吹き飛ばされ床に叩きつけられる。

「さあ、おしゃべりはこれくらいにして終わりにしましょう」

「死ぬ気の炎！」

千種（骸）は右目を「四」の修羅道にし、剣を構えて座り込むツナに迫った。

ドサ！

ツナの元へつく前に千種（骸）は倒れた。

そのまま手放した剣は床を滑って犬（骸）が手にとった。

憑依弾は相手の身体、敷いては精神を乗っ取る特殊弾。

骸はいくら憑依した人物越しで傷を負おうが痛みを感じない。

いくら傷を負って出血しようが、まだ動く範囲内であれば骸は無理やり動かすことが

可能。だがあまりにも怪我が多く、肉体が壊れてしまつては憑依していようが動くことができない。

千種（骸）は怪我をして血を流しているが、まだ動かせるのか、フラフラとしながら立ち上がる。

「ああ、無理やり起こしたら怪我が・・・」

「クフフ、平気ですよ。僕は痛みを感じませんから」

そう言った千種（骸）の顔と体には、多量の血が流れていた。

だが自分には関係ないともいうように笑っていた。

「何言つてんの！仲間の体なんだろう!!」

「違いますよ、憑依したら僕の体です。こわれようが息絶えようが僕の勝手だ」

その言葉にツナは絶句した。

人を人として思わず、仲間を仲間と考えない骸に。

「そんなの・・・おかしいよ」

「他人の心配をしている暇があるんですか？」

ツナの後ろに立つ獄寺（骸）とピアンキ（骸）からも明らかに軽傷ではない傷が。肉体の方も限界に近づいているのか、骸は平気でもフラフラと立っている。

「たのむ！やめてくれ！このままじゃ死んじゃう！」

すでに立っているのも限界の獄寺達の体をこれ以上酷使したのなら、それこそ重傷では済まない事態になる。

そして骸は思いついてしまった。

光努がラツシユ達と戦っている時にツナたちが戦ったバース。

彼は並盛町に刺客を放ち、京子とハルの二人を人質に、ツナを殺そうとした。

ツナは友達のため、自らその要求を受け入れる寸前までいったが、その時事前にリボーンによつて頼まれていた助っ人が現れ、刺客は倒され、人質は解放された。

人質。優しいツナは、人質を見捨てることができな性格。そこを突いた。

「いいですか？君の仲間をこれ以上傷つけられたくなければ、逃げずに大人しく契約してください」

「・・・そ・・・そんな」

「やまり迷うのですね。どのみち君のような人間はこの世界では生き残れない。ボングレの10代目には不適合です。さあ、体を明け渡してもらいましょう」

剣を持った犬（骸）が迫る。

「どうしよう・・・リボーンどうしよう!!」

「俺は何もしてやれないぞ、自分でなんとかしろ」

「そんなあ、いつも助けてくれるじゃないか！見捨てないでよりボーン!!」

バキ！

ツナに蹴りを繰り出して向き合うリボン。

「情けねえ声だすな。おまえは誰よりもボンゴレ10代目なんだ」

「!?」

「お前の気持ち吐き出せば、それがボンゴレの答えだ」

「クフフ、家庭教師もサジを投げましたか。彼の気持ちは”逃げ出したい”ですよ。

それとも”仲間のために逃げられない”……かな？」

「骸に……勝ちたい……」

ポツリとつぶやかれたツナの言葉。

「ほう、これは以外ですね。だが続きは乗っ取った後でゆっくり聞きましょう。君の手

で仲間を葬った後でね」

「……こんなひどい奴に負けたくない……」

静かだが確かな言葉。骸を許せないという気持ち。

「こいつにだけは勝ちたいんだ!!!」

そこには確かな意思が込められていた。

カッ！

その時、リボンの背で丸くなっていたレオンが飛び出し、光りながらまるで繭のよ

うに体から糸のようなものを部屋全体に飛ばした。

「！」

「うわあ！」

「ボンゴレ、何をした！」

「俺は何も……あつ！レオン!!？」

突然のレオンの変化に、リボーンは「羽化した」と言った。
「あの時と一緒だ、ディーノが”跳ね馬”になった時とな」

『小言弾—ナイスタイミング—』

——ツナったら、また散らかしたまま出掛けて

自分のことは自分でしなさいって言ってるのに——

——日直日誌に沢田のテスト紛れてんじゃん。しかも……2点

京子モノにしたいんならもちよつとしっかりしろよ——

小言弾。

撃たれた本人は、リアルタイムで自分に届く小言を感じる事が出来る。

生徒のピンチに繭になったレオンから生まれたアイテム。

ちなみにもう一つは「27」というマークの入った手袋。

骸は特殊弾のツナへの着弾を阻止しようとしたが、リボーンの早打ちは骸の攻撃が当

たる前にツナに特殊弾を当てた。

今ツナには、家族、友達から来る小言が頭の中に響いていた。

(なんでこんなところで小言聞かされなきゃいけないんだ……)

——ツナ達は……音からしてこつちか。大丈夫かな——

(あ、光努。無事だったんだ。よかった)

——はひー、何やってるんですか!?

犯人のアジトに乗り込むなんて正気じゃありません!——

(ゲ、ハルだ……)

今の小言は、ひよんなことからツナに思いを寄せる少女、三浦ハル。

少々天然ボケの入った行動力のあるバイオレンスな少女である。

——ガハハ、ハル泣いてるんだもんね——

——な・泣いてません!ハルはマフィアのボスの妻になるんですこんなところで泣きません——

ツナの頭の中には、公園で話をするハルたちが浮かんでくる。

——ツナさん、頑張ってください!——

「!」

——落ち着け、京子——

——だって・・・シヤマル先生がツナ君達が乗り込んだって——

病院のベッドで体を起こす怪我をした少年と、そばに立つ少女の光景が映る。

少年は笹川了平。ツナの中学の先輩で熱血少年。犬にやられてしまった被害者の一

人。少女はその妹、笹川京子。

ツナのクラスメートでツナが思いを寄せる少女。

——心配するな——

——・・・でも——

——あいつはオレが手を合わせた中で最も強い男だ負けて帰ってきたらオレが許さ

ん——

——そうだよね・・・大丈夫だよね・・・ツナ君、元気で帰ってきてね——

「・・・・・・・・・・」

——オレと同じ過ちを繰り返すな、仲間を守れ。お前がその手で、ファミリーを守る

んだ——

ランチア。骸の影武者として、憑依弾の効力により己のファミリーに残虐の限りを尽

くさせられたが、壊れかけた優しさをツナによって取り戻してもらった男。

「俺の小言は言うまでもねーな」

ツナの瞳には、紛れもない強い意思が漲っていた。

「ほう、この期に及んでそんな目をしますか。ですがもう幕引きにしましょう。

このまま死なれても困りますからね！」

非情にも、千種（骸）は剣を床に伏せるツナに向かって振り下ろした。

ガッ!!

「な!!」

先程まで攻撃を喰らっていたツナは手袋を付けたままの手で振り下ろされた剣を掴んで止めた。

ツナの手が光輝き、光がやんだ時にツナの両の手にハメられていたのは黒いグローブ。その手の甲にはローマ数字で10を表す「X」のエンブレムが。

バキ!

そのまま掴んだ三叉剣の一部を折る。

千種（骸）は思わず後ろに下がる。

「.....!!」

「骸、お前を倒さなければ.....死んでも死にきれねえ!!」

額に炎を灯し、ツナは立ち上がった。

「その頭部のオーラ、なるほど．．．特殊弾が命中していたようですね」

額に炎を灯しているのは同じだが、前のツナの場合だともっと荒々しかった。

今のツナは静かに佇んでいる。

死ぬ気弾と小言弾。

二つの特殊弾は同じようにツナを死ぬ気モードへと変化させたが少し違う。

ツナの死ぬ気モードとは、簡単に言ってしまうえばリミッターを外し普段以上の力を出すこと。その際、死ぬ気弾の場合は外側から危機によるプレッシャーで無理やりリミッターをはずすのに対して小言弾は内側から自分の秘めたる力、潜在能力を解放する弾。

それにより、今のツナは普段の死ぬ気モードよりもはるか上の力、言うなれば超^{ハイパー}死ぬ気モード。

そして同時に、内面にある感覚のリミッターも解除された。

ツナの場合、それにより解除された感覚はボンゴレの血統特有の”見透かす力”。

超直感！

^{ハイパー}超 死ぬ気モードとなったツナは身体能力が向上し、攻撃、幻覚などを見透かす力が備わった。

それにより、仕掛けてきた犬（骸）と千種（骸）の攻撃を止め、否し、さらには地獄道の幻覚をも見破り、すぐさまに二人を戦闘不能にした。

「バカな・・・奴は地獄道の幻覚を見破れなかつたはず・・・」

「これこそ、小言弾の効果だぞ。まだグロープの使い方がなつちやいねーがな」

ツナが一步踏み出す。

「おっと、忘れてしまったわけじゃないですよ。これはお仲間の体ですよ。手を挙げられるんですか？」

ガッ！

獄寺（骸）はツナに攻撃を繰り返す。

「できるんですか？」

ドス！

ビアンキ（骸）はツナに攻撃を繰り返す。

「クフフ、やはり手も足も出ませんか」

「ちげーぞ。これほどの攻撃力だ、ガードしても避けても、ビアンキ達の体に負担

がかかっちゃう。ツナは今、自分の体で攻撃をいなし、2人の体を守ってるんだ」

獄寺とビアンキの体には、重傷とも呼べる傷があるため、本来は立つのも傷に響く。これほどに動かすのなら、攻撃の衝撃で自分自身にダメージを与えることになる。ツナをそれを防ぐため、二人の体には最小限のダメージしか行かないように攻撃をわざと喰らっていた。

タン！

獄寺（骸）の攻撃を躲し、後ろから首を肘で打った。

「ク・・・体が！」

「打撃で神経を麻痺させる戦い方を直感したな」

「直感しただと？ふざけたことを！」

ビアンキ（骸）の拳を柔らかく押さえ込み、獄寺と同じように首の後ろを手刀で打った。

「くそ・・・」

結果、二人は体の自由を失いツナはそれを優しく受け止めた。

神経を麻痺させられたことにより体を使えなくなり、骸からの憑依は解かれたのだ。

「またせーごめん・・・」

ツナは二人を床にそつと寝かした。

「！」

リボーンとツナは感じた、人の気配を。

(バカな、この気配……骸！)

ツナは驚愕する。ツナには骸の気配を感じ取ることが出来る。

超直感により、骸がまだ死亡していないと感じていたが今の驚愕はそのことではない。骸の気配は入口からしている。

「あいつが来たみてーだな」

「違う」

「？」

「出てこいよ、骸」

入口に向かって問いかけると、

「クフフ、ナイスタイミングでしたね」

現れたのは少年。

柔らかそうな白い髪、所々焦げた黒曜中の制服。

笑みを浮かべたその右の瞳には「六」の文字が映る赤い瞳が。

『VS光努—正解—』

「どういふことだ、骸」

「クフフ、あの時戦つといつて良かったと初めて思いましたよ」

光努の姿をした骸。

ツナ達の前に現れたのは、骸に憑依された光努だった。

「ハイハイ」

檻の中。

光努は檻の中にいた。

黒曜ランド映画館の入口付近に来て、急に意識がなくなつて気づいたらこの場所で目

を覚ました。明らかにおかしい場所。現実では有り会えないような場所。

「ふむ、肉体を乗っ取られたか」

精神世界。

そんなものがあるのか知らないが、理由はわからないが、光努はこの状況にすぐに適応した。

分かりやすく動けない状態というのが檻となつて現れたという感じに、光努は精神世界のような世界に囚われていた。

「これは多分……骸だな」

大正解。檻の中でポツリとつぶやいた。

「ふーん、やりやがって」

光努は楽しそうに、にやりと笑った。

骸は光努と以前戦っていた。

その時、骸の三叉は最初の攻撃の時に一撃、傷を入れることに成功していた。骸の剣で傷をつけること。それが、骸が憑依する条件。

あの時は憑依弾は一発しかな、使うことができなかつたが、今骸は憑依弾を使った状態で目の前に現れた光努は剣で傷を入れられていた。

結果、光努は骸に憑依された。

「そういうことか」

「ええ、僕も驚きのタイミミングで来ましたよ。正直彼をどうしようかと思っていたところでしたからね」

骸の憑依弾は別の対象に憑依してから自分に対象を戻したら効力がなくなる。

骸が獄寺達の体から離れ自分の体に戻ると思ったときに光努が来たのだから本当に骸自身にとつてもナイスタイミミングだった。

「僕は運がいい」

光努（骸）はツナに迫り拳を繰り出した。

ツナはすぐに対処して拳を手のひらで受けたが、

「くっ！」

「クフフ」

一瞬止まったが、ツナが後ろに押されている。

ツナは光努を見てみたが重傷ではない。所々焦げているがすべて軽傷。

ツナ多少の無茶しても大丈夫だと判断して攻撃にかかった。

体を横にして掴んだ拳を前にだし、そのまま回転するように裏拳を顔に放つが、光努

(骸)は少し顔を後ろにそらして躲した。

「——餓鬼道」

技を奪い取る能力、餓鬼道を発動して光努(骸)は蹴りをツナに当てる。

そしてそのまま蹴りぬくと、ツナは壁まで吹き飛んだ。

ドゴオオン!!

派手な爆発音を出して壁を崩壊させてツナは叩きつけられた。

「ほお、正直僕も予想以上の威力でしたよ」

(餓鬼道か。光努の力はあまり知らねーが、ファイアランドで見せた力から見ても相当

だな。ツナ……)

「クフフ、もう終わりですか?」

「まだだぜ骸。光努の体……返してもらおう」

煙の中から立ち上がったツナは、額に当てていた手を外すと、両方のグローブに額の

ものと同じ炎が灯った。

「わかってきたみてーだな、グローブの意味が」

「クフフ、正直勝つのは無理だと思えますよ」

(それにしても、この白神光努の体・・・おかしい)

憑依弾の憑依は他人の肉体を乗っ取って戦う弾。

なので自分とは違うからだに入って動かすため、わずかに違和感が生じる。

それでも同じ人間の体を操るのだから違和感はほんの小さなもの。さらに餓鬼道によりその肉体の本人と同じ動きが可能である。それでもある程度の違和感がある。

触れればわずかだが必ず摩擦が生じるように、憑依にも多少の違和感があるのだが、(この体には違和感がまるで感じられない。まるで自分の肉体に入ってるように・・・)。一体どういうことでしょうか・・・)

今の骸には都合のいいことだが、どこか納得できないでいた。

(ま、それは後で考えますか。今は・・・)

眼前のツナは額と両手に大きな炎を灯してたっていた。

「Xグロ^{イグス}ープは死ぬ気だんと同じ素材でできていて、死ぬ気の炎を灯すことができるんだぞ」

「クフフ、いくらオーラの見てくれを変えたところで無意味ですよ」

「死ぬ気の炎はオーラじゃない」

「ほう。ならば見せてもらいましょうか！」

光努（骸）はツナに接近し拳のラツシユを放つ。

それをツナは紙一重で躲す。

そして、炎の灯ったグローブで光努（骸）の腕を掴んで拳を止める。

（熱い！オーラが熱を帯びてる!!）

すぐに腕を放して距離をとり、蹴りを繰り出そうとして

ピタ。

「！」

「どうした？」

ツナの拳を喰らって吹っ飛ばされる。

（？骸の動きが一瞬止まった。どうした？）

「これは・・・」

「余所見をするな」

吹き飛ばした骸の背後にツナはいた。

（いつの間に後ろに！）

そのまま炎の拳を背中に喰らう寸前、体をひねり躲す。そのままこちらから仕掛けようと拳を構えたが、

（！：まだまだ！体が思うように動かない！）

そのまま避けることもできずツナの攻撃を喰らう。

「ガハッ!・・・く!」

確実に、光努（骸）の動きが鈍くなっていた。

（これは・・・まさか!・・・）

「終わりだ」

背後に一瞬で現れたツナは、手刀を光努（骸）の首の後ろに落とした。

いや、落としたはずだった。

だがそれは、手を後ろに回した光努によって止められた。

攻撃を止められたツナの超直感、何かを感じ取った。

「!・・・光努!」

「正解。よう、ツナ。少し様変わりしたな」

いつの間にか、光努の右目はいつもどおりの目に戻り、楽しそうな笑みをしていた。

「檻壊していろいろしたら肉体を取り戻した」

「・・・光努、でたらめだな」

「ランチアは記憶がなかったって言ってんじやなかったのか？」

「ランチアって影骸か。それにしても一体何が起こったんだ？」

リボーンはこれまでの経緯と骸と憑依弾について光努に説明した。

「ふーん。憑依か。なるほど、納得だな。じゃ、灸を据えるか・・・なあ？骸」
暗がりのステージの方へと、光努は話しかけた。

コツコツ。

クツ音。誰のかは聞かなくても、ツナもリボーンも光努もわかっていた。

「クフフ、これはどういふことでしょうかね。白神光努」

六道骸。憑依弾を撃った時に出来た傷が額から血を少し流していた。

「何がだ？」

「僕の憑依を強制的に解除。こんなのは初めてですよ」

「目論見が外れたみたいだな。だが俺の体を使った代償は支払ってもらおうか」

「ほう、何を要求するつもりですか？」

「そうだな・・・そういえばまだ見てなかったな」

「？」

「お前の力。5番目の能力、人間道」

そう、骸はこの戦いで六つの能力のうち、天界道、修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の5つは使用したが一つだけ使用していない能力がある。

それが人間道。

人間の住むこの世界を表す。

だが骸は語る。他の5つの冥界よりも、この世界が一番酷い。

人間道は最も醜く、とても危険な世界。だからこそ骸も使用を避けたかった。

「ですが、こうなってはしょうがないですね」

骸は人間道を瞳に写しだした。

それと同時に、骸からどす黒いオーラが吹き出してきた。

「最終手段、つまり切り札か」

「さあどうしますか。なんなら二人まとめてでもいいですよ」

先端のない棒を構える骸。

「.....」

「ツナ、ちよつと待ってろ」

「どうするつもりだ？」

「骸、前回の続きしようぜ」

「クフフ、いいでしょう。かかってきなさい」
「行くぜ」

『決着―灰色の城―』

檻を破壊して外に出たら、城の中だった。

当たり全て灰色の空間。モノクロの城という不思議な空間。

所々、壁や床に”六”という文字が壁紙のように貼り付けられている異常な場所。

この壁の文字がなければ結構綺麗な城だなと思いつつ。

「六、か。骸の仕業だな。分かりやすい」

不思議とすぐに理解できた。

長い廊下を歩いていると、大きな扉が見えた。

モノクロの扉。

取っ手を掴んで開いた。

その部屋は立体の半円、つまりドーム状の形で広い部屋。

周りの壁にはたくさん額の縁に入った絵がかかり、床にはいくつもの、大きさの様々な彫刻が置いてあった。小さい手のひらサイズの物。巨大な標本のような大きさの大

きいもの。

「この絵、それにこの彫刻」

大きな恐竜の彫刻。奇妙な空中庭園の絵。羽を広げたドラゴンの彫刻。洋風な町並みが描かれた絵。見覚えがある。

全て灰色の空間の中、中央にあったのは炎。

中央にある燭台に灯っているのは白い炎。静かに燃える透き通るような炎。

「この炎は、前に石の小屋で見たときの」

近寄り炎に触れたとき、光が部屋を包み込んだ。

「クッ！これは！」

白い光。光がやんだとき、異変が起こった。

「これは・・・色が」

白い炎を中心に、周りに色が現れた。

絵は鮮やかに、彫刻は迫力をマシ、城の中には人がいないが活気が戻ってきたように、あるべき色が広がり全てを包み込んだ。

それと同時に、壁や床にある“六”の文字も消えていく。

「……の感覚。骸の力が消えていく」

中央の炎が激しく燃え盛る。

そろそろここともおさらばだな。

「さて、骸。人の体に乗っ取りやがって。少々覚悟してもらおうか」

バキン！

「クッ！」

「どうした骸。お前の切り札はその程度か？」

光努の蹴りに、防御に使った骸の棒は真ん中から粉碎され、2本に分かれた。

一度後ろに跳んで距離をとった骸に、同様に前に跳んで接近した光努の拳が骸の腹を打ち抜いた。

「グッ！」

二人とも同じ方向へと跳んでいたことが幸いしたのか光努の拳の威力は下がり、骸は少し飛ばされたが着地して態勢を立て直した。

「はああー！」

2本となった棒を巧に操り、人間道で強化された修羅道以上の格闘能力で光努に襲いかかる。腕をなぎ払うように、左腕の棒を振るうが光努はしやがんだだけでさすがに躲す。だが骸は左腕で薙ぎ払う威力を加えたまま円を腕で描くように右腕の棒を突くように光努の顔に攻撃する。

ガッ！

「光努！」

「大丈夫だ。見てみる」

ギリギリ。

「君は本当になんなんですか？ 実はサイボークとか言いませんよね？」

「安心しろ、それはない。」

骸の棒（鉄製十人間道強化十遠心力を利用して威力増大）を歯で受け止める光努。

今のは威力的にも申し分ないが、光努に受け止められてしまった。

「……リボン、光努は人間だよな？」

「……そうだな。俺も若干疑わしくなっちゃったな」

ガッ！バキ！

そのまま嘯み砕く。

「クツ！君はワニか何かですか？」

「はっ！言うにことかいて鰐かよ！ひでーな」

ガツ！ドス！ヒュヒュツ！ドツ！

一方的。

骸の格闘能力は明らかに一般人を超えた修羅道の上を行く人間道によりかなり強化されている。骸の能力はいくつもの危機を乗り越え、何人も倒してきた為実践で証明されている。が、それ以上の存在がいた。

憑依弾を無効化され、幻覚も効かず、格闘能力も効かない。

骸には、勝てる要素がなくなっていた。

「はあ、はあ」

骸は地面に膝をついて荒く息を吐く。

光努は骸の前方に立って笑っている。

お互いに対した怪我はないが肉弾戦で戦い続けたことにより、疲弊していた。

骸は疲れている様子だが、光努は全然余裕そうだから全員「やつぱり機械か何かじゃないのか?」と思いは始めているのは置いておこう。

「クフフ、参りましたね。これでは僕の理想が遠ざかってしまいます」

「お前の理想?」

「そのボンゴレ10代目を乗っ取ってファミリーに殴り込み、マフィア間の抗争を起すことですよ」

「—」

「マフィア間の抗争がお前の目的か」

「クフフ、まさか。それだけではありませんよ。僕はこれから世界中の要人に乗っ取つとり、この醜い世界を美しい血の海に変える。世界大戦・・・何てベタですかね」

「.....」

「だが手始めはマフィア。マフィアの殲滅からです」

「明らかに私情混じってるな」

「クフフ、そういえば白神光努。君はマフィアらしいのですがどこのマフィアに属

「しているのですか？」

「イリスファミリーだ。知ってるか？」

「ほう！大企業のイリスファミリーですか。これは面白い名前を聞きましたね。もしかして君は沢田綱吉のようにそのボスとでも言うのですか？」

「よくわかったな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

骸が固まってしまった。が、すぐに気を取り直してにやりと笑う。

「クフフ、ハハハ！まさか、君がイリスのボスとはね！そのボンゴレですが、強大なマフィアのボスがまさかまだ中学生とは！これは傑作ですね！」

「ハハハ！俺もそう思うよ、骸！ハハハ！」

笑い合う骸と光努にツナとリボーンは若干呆れ気味。

二人してひとしきり笑いあつたら「ふう」と息をついて止める。

「行くぞ、骸。御終いにしてやる」

「やれるものならやってみてください、よー！」

骸から現れたのは黒い骸。これは骸の幻覚。

骸からまるで幽霊のように出てきた真っ黒な幻覚は光努に一直線に向かつていった。

ぐしやり！

「気づきましたか」

「骸、お前幻術の精度落ちてねーか？なんか霞んでるぞ」

「……」

骸は幻覚の中に石を潜ませていた。幻覚は見破っても壁として、後ろにある礫に気づかせないようにしたもの。幻覚ならと素通りさせたところで本物の攻撃が当たるといふ仕組みだったが、光努は手を伸ばし、飛んできた石を掴んで握りつぶした。

そして光努の言葉に三人とも耳を疑った。

（今の骸の幻覚の威力は、地獄道よりも向上している。俺には威力が落ちてるようにみえねーが……）

「幻覚が落ちているとは、言ってくれますね」

光努に接近して骸は蹴りを放つが光努はその蹴りを片手で受け止めた。

「ぐっ！」

「おらあー！」

片手で受けた足を両手で掴み、骸を上空へと投げつけた。

上空へと投げられた骸は態勢を立て直したが、すぐ目の前には光努が接近していた。

「歯あ食いしばれよ、骸！」

骸の腕を掴んで、一本背負いをするように地面へと投げつけた。

ドオン!!

地面にクレーターを作り、土埃を上げながら骸が激突した。

「ぐふ……。クフフフ……。これは勝てそうにないですね……。殺せ、君達マファイアに捕まるくらいなら死を選ぶ」

「骸、潔いいな。だがお前の目はそうは言っていないぞ」

骸の瞳に諦めの色はなく、隙を見せれば襲いかかるような獣の目。

光努はそれを感じ取った。

「…………クフフ、お見通しですか……。ならば、やはりお前たちを潰すしかないようですね!」

起き上がり、最後の力をだし、光努に攻撃を仕掛ける。

ドゴオ!

「がはっ!」

下から顎を蹴り、骸は上空へと打ち上げられた。

「ツナ、お前の炎の出番だ」

「ああ、任せろ」

ツナが両手を下にして構えると、グローブにまもっていた炎が勢いよく吹き出しツナはジェット機のように上空へと飛んだ。そして上空にいる骸の上まで飛んでいった。

「な、炎を噴射だどー！」

「そうだぞ、骸。光努に憑依した時にツナがお前の背後に回ったのは、死ぬ気の炎の推進力を使った高速移動だぞ」

ツナの炎を纏った手が、骸の右目を塞ぐように顔を掴み、もう片方の手の炎を噴射した。

「うわあああ!!! ああ……あ……」

ツナの炎に触れた骸のオーラが消えていく。

「死ぬ気の炎が骸のどす黒いオーラを浄化したな」

「すごいな、あの炎」

ドゴオ！

そのままツナは骸を舞台横へと叩きつけた。

そこにいたのは、静かに目を閉じて倒れる骸と、そばに佇むツナだけだった。

ピキピキ、パキーン！

壁に突き刺さっていた骸の三叉槍の先が自ら崩壊した。

『よく現れた！そしてくたばれえ!!』

「終わったな」

「うん」

ツナの炎で浄化され、静かに倒れている骸と、そばにいるオレとツナとリボーンの三人の間で静寂が訪れた。

リボーンの話じやボンゴレの医療班がきて今は黒曜ランド周辺にいた仲間の治療も終わってそのうちこの場所にも来るらしい。

骸のそばまでいってとりあえず確認。

脈拍は正常。心臓も動いている。呼吸も規則的。

死んでもいないし特に以上も見られない。

人間道のあの黒いオーラから何かリスクでもあるのかと思ったけど特に何もなさそうだな。一応骸は自分の能力を使いこなしてたしな。まあ問題ないならいいし、これで終わりならそれはそれで全然いいしな。

「光努、骸無事か?死んでないよな?」

「つたく、お前は甘いよな」

ツナも自分で最後に叩きのめしといたが心配でこちらに来た。

さつきまでは自身溢れて冷静だったのに、死ぬ気モードが解けたと思つたらオドオドした人物に戻った・・・。これは面白いな。まるで二重人格だ。

「骸さんに近づくんじゃねえびよん!!マフィアが、骸さんに触んな!!」

「ひいひい!」

「びびんなツナ、奴らはもう歩く力も残っちゃいねえ」

「犬・・・それに千種・・・」

リボーンの言ったとおり、犬も千種も叫んではいるがもう力も残っていない。

二人とも必死に床を這いながら骸に近づこうとしている。

「なんでそこまで骸のために?君たちは、骸に憑依されて利用されていたんだぞ」

確かにな。犬達も憑依されたのに骸に対して怒ったような感情は見られない。あるのは本気で骸を心配し、逆にツナ達を憎むような感情だけ。

ツナというよりマフィアが憎いようだ。骸もマフィアの殲滅と言っていたが、こいつらに一体何が・・・。

「わかつた風な口をきくな」

「だいたいこれくらい屁ともねーびよん。あの頃の苦しみに比べたら・・・」

「あの頃？」

「俺らは・・・自分のファミリィに、人体実験のモルモットにされていたんだよ」

「！！！！」

人体実験・・・なるほどな。骸や犬の特殊な能力も、おそらくその実験で得た副産物だな。

「やはりそうか、もしかしてとは思ってはいしたが、お前たちは禁弾の憑依弾を作った、エストラーネオファミリィの人間だな」

「禁弾？それはテメーらの都合でつけたんだろーが。おかげで俺らのファミリィは人でのなしのレットルを貼られ、他のマフィアからひっつでー迫害をうけた」

エストラーネオファミリィ。

当時彼らの開発した憑依弾は、あまりの酷さにマフィア間で使用を禁止し禁断に指

定された。それにより、禁断を作ったファミリーの人間は犯罪者のように扱われ、外に出れば他のマフィアに銃弾を浴びせられ、殺されるような毎日を過ごしていた。その有様は、ファミリーの大人たちによる、憑依弾同様の力を持った特殊兵器の開発に拍車をかけた。

彼らは地に堕ちたファミリーの栄光を、新たな兵器を開発して再び戻そうと考えた。だがその開発実験は、当時のファミリーの子供である犬や千種、そして骸たちにとつては地獄のような人体実験ばかりだった。

危険な薬品、爆薬、装置。

子供たちは、どこへ行こうと、どうあがこうと、生き延びる道はなかった。

だがその地獄は、ある日忽然と消えた。

人の悲鳴。ガラスの割る音。何かが倒れる音。

そんな音を聞いて、やってきたのはこれまでの実験になんとか生き残った子供達、犬と千種の二人。

いつもの実験場にいたのはファミリーの大人達。だが皆一様に倒れ伏している。しかも見たところ、致命傷となる傷をつけられている為絶命している。

周りの機材も全て破壊され、荒らされた部屋の中央に佇んでいたのは一人の少年。

その手にあったのは、一本の剣。

たった一人で、この地獄を壊した。

大人しく、目立たないタイプだったその少年は、自分の右目に貼り付いていたガーゼをはがし声を発した。

——クフフ、やはり取るに足らない世の中だ。全部壊してしまおう。

この時生まれて初めて、犬と千種には、

——二人とも……一緒に来ますか？

居場所が出来た。

「骸さんは俺達に居場所を作ってくれた。それを、オメーらに壊されてたまつかよ!!」

「犬……」

「でも俺だって……仲間が傷つくのを見てられない。だって、そこが俺の居場所だから」

「ぐっ!」

「!」

(この感覚・・・まさか!)

ドゴオオオン!!

激しい爆音。

咄嗟に目を向けたツナ、リボン、犬、千種の四人。

目を向けたのは光努がさつきまでいた場所。その床は爆音とともにクレーターが出ており、爆風に吹き飛ばされないようにツナはしゃがんで耐える。

だが爆発ではなく、今のは光努が足を踏み込んだ音。

弾丸のような速度で光努は、入口まで飛んで行き、そして入口にいた人物を思い切り殴り飛ばした。

「くたばれえ!!」

ドゴオオ!!

入口から今度は爆発音と爆風が飛んできた。

「光努!どうしたの!というかそこになっていたのっでもしかして医療班の人じゃないの!?!」

「違うぞツナ、あいつらは・・・」

「なんのつもりだ」

そこにいたのは黒いコートに黒いシルクハット、さらに異様なのは顔と腕、皮膚のあるところには包帯が巻かれ何も見えない、その雰囲気はまるで死神のような人物。

拳を振り下ろして床を破壊させた光努の前には3人の死神のような人物が存在した。(確かに当たってははず。避ける素振りも見せずに、体を透過したような感覚。気づいたら俺の前にいた。どういふことだ……。というか……)

「ワリ……人違いだ。ハクリだと思っただが、間違っただよ」

「……そうか！お前がハクリの連れてきた特異点か」

「何？ハクリを知ってるのか？」

「我々の邪魔はしないでもらおうか」

そう言うのと、黒服は手元から先端に首輪のようなものが突いた鎖を取り出し、倒れている骸、犬、千種の首にかけて手元に引き寄せた。

「光努、そいつらは復讐者^{ヴァンディチエ}。法で裁けないやつを裁く、マフィア界の掟の番人だ」

「そうか。だが関係ないな。ハクリについて知ってるなら教えてもらおうか」

コオオ。

「!この輝きは!」

「リボーン、それって」

リボーンのおしやぶりが輝き出した。これは他のアルコバレーノが近くいる証拠。

「俺が教えてやるから、大人しくしてくれよ、光努」

カラン。

復讐者^{ヴァインディチエ}の後ろから現れたのは、赤ん坊。

銀色の髪に、幼い顔つき。今日は飽きたのか仮面をつけておらず、気に入っているのか、着流しをきて羽織を羽織って下駄をはいた和風の服装。そして胸元にあるのは、リボーンのおしやぶりと同様に輝く白いおしやぶりだった。

「!」

「やあ、君は確か・・・リボーン?」

『また、いずれ』

アルコバレーノ。

イタリア語で虹を意味するマフィア界の最強の赤ん坊集団。

それぞれ虹の色のおしやぶりを持つ赤ん坊。

その色は、橙、赤、青、紫、黄、緑、藍の7色。

つまり白色は虹の一部ではない。よって白いおしやぶりのアルコバレーノなど本来存在しないはずなのだが……。

「お前ら、あいつのところ戻ってもいいぞ」

「わかった」

そう言うヴァインディチエと復讐者の連中は光努達ヴァインディチエに背を向けて、骸達を連れて行つた。あとに残つたのは、白いおしやぶりの赤ん坊、ハクリのみ。

「白いおしやぶり!?!まさかあいつつてアルコバレーノ!?!」

「いや、そんなはずはねえ」

アルコバレーノは最強の7人の赤ん坊。

その7人をリボーンは全員知っている。

だから、ハクリなんてアルコバレーノがいないことはすぐにわかる。

だからこそ、何者なのか。

アルコバレーノではないアルコバレーノ。

「オメーは何者だ」

「俺はハクリ。君と同じアルコバレーノだよ」

「アルコバレーノは全部で7人。オメーみてーな奴は見たことねーぞ」

「そりゃ、俺がこのおしやぶりを手に入れたのはつい最近だからね。知らないのも

無理はない」

「おしやぶりを手に入れた?」

「ま、この話はまた後にしようか。医療班が到着したみたいだしな。光努はもらつてく

ぞ」

「は？ちよつとハクああ！」

ハクリに引つ張られ光努は攫われていった。

あとに残つたツナとリポーンは、獄寺達を医療班に任せ、ツナは死ぬ気モードの副作用が来て筋肉痛になつて気を失い、リポーンは珍しく疲れたのか、自分たちも医療班に任せて眠つてしまった。気になることを残して。

「くたばれえ！」

「よつと」

光努の拳を避けるハクリ。

「て、何するの？」

「お前に落とされて、手紙が来てからこう思つた。ぶつ飛ばしてやるとな」

「ひどいな。別に対した傷もおつてないだろ。むしろ無傷だろ」

「まあそうだけどな。で、今までどこにいたんだ?」

黒曜ランドの外。道路を歩いているのは光努と頭の上に座るハクリ。

あのあとで復讐者^{ヴァインディチエ}によつて、骸達以外にも骸の作戦に加担していたやつらは罪を問わずにひとまず連れて行かれたらしい。まあ人によつてすぐに釈放とかあるそうさ。

骸に操られたランチアや、依頼されたラツシユと考魔もハクリによれば多分すぐ出てくるらしい。後は罪の大きさによるらしい。

「ああ、復讐者^{ヴァインディチエ}のアジトに厄介になつてたんだ」

「なんか犯罪でもしたのか?」

「俺がそなことするわけないだろ。ただ知り合いの家に泊まつてたつてだけだよ」

(随分とヘビーな知り合いをお持ちで・・・)

「確か光努つて今イリスの灯夜の家にいるんだろ?」

「よく知つてるな」

「俺もそこに泊まるつもりだしな」

「もう復讐者^{ヴァインディチエ}のアジトはいいのか?」

「ま、後は世界に馴染むだけ。そうすれば説明することも出来るしな」

「なんの話だ？」

「いや、なんでもない。さて、帰るか」

骸達は連れて行かれ、全てが終わった。

「湖、草原。綺麗な場所だな」

光努は気がついていたらその場所にたっていた。

柔らかい風。温かい日差し。そんな場所にいた光努は声をかけられた。

「つくづく君は、おかしな人ですね」

「そうか？お前の方が変だろ、骸」

そばにいたのは骸。でもそこにはいない。

光努はそう感じた。

「クフフ、君はおかしいですね。この精神世界を見ることができるとして」

「こんなところで何をしてるんだ？」

「ちよつとした散歩ですよ。今は肉体を牢獄に入れられて暇ですからね」

骸は今頃復讐者の牢獄に収監されている。
ヴインディチエ

この世界は骸が言うように人の精神が入り込む世界。骸は憑依弾の効果なのか、人の精神に入り込めるからこの世界へと足を踏み入れられたけど、普通は入り込めない世界。

「君は面白い。周りの人間を、この世界では鍵のかかった家だと思えば、君はさしずめ、開放された要塞つてところでしょうか」

骸は誰でも操ることはできない。自分の剣で傷をつけた者のみ、その者の精神の鍵を開け、侵入する。簡単にいえばそんな感じ。

だが光努の場合、特に苦勞するでもなく、すんなりと入ることができたのに乗っ取れない。逆に憑依を弾かれてしまった。

まったくもって不思議な感覚を骸は味わった。

「妙なたとえだな。それで骸、ほかの奴らは？」

「とりあえず犬と千種は逃がしましたので、そのうち会うかもしれないね」

「無事ならよかつたよ。それにしてもまた脱獄でもしようとしたのかよ」

「クフフ。僕はあんな牢獄で一生を終える気などさらさらないですからね」

「まあそれでさらに嚴重なところに入れられたら世話ないな。ハハハ」
「それもそうですね。クフフフ」

二人とも楽しそうに話しているが、話している内容は専ら笑い話ではない。

「それにしても君には散々な目に合わせられましたね」

「俺の体に乗っ取ろうとするからお前が悪い。ま、自業自得つてことだな」

「クフフ、これは手厳しい。そういえば君にもびつくりですね」

「俺？」

「あのイリスファミリーのボスとはね。もっと早く知っていれば最初に会った時から作
を考えていたんですがね」

「まあ別に隠してはいないんだけど特に聞かれなかったしな」

「とうにか聞きましたけど答える前に君は帰ってしまったんですね」

「そうなんだよな。いつもボスの仕事だって灯夜が呼び出すんだよな」

「灯夜・確かイリスのボス代理の黒道灯夜ですね」

「知ってるのか？」

「まあマフィア方面で言えばボス代理の黒道灯夜、それに戦闘部隊の『アヤメ』は
割と有名ですからね」

「アヤメ？」

「おや知りませんか？イリスに所属する唯一の戦闘部隊ですよ。中々手ごわい連中と聞いてますね」

「へえ、骸なら勝てるか？」

「どうでしょうかね。彼らは本当に化け物のような集団みたいですからね」

「ぜひとも見てみたいな。今度灯夜にでも聞いてみるか。その部隊って何人くらいいるんだ？」

「それがたった3人だそうですよ」

「3人？そんなで大丈夫なのか？」

「ええ。事実彼らはたった一人でも簡単にマフィアや組織を潰せる实力を持ってるそうですよ。まあ噂しか知らないのですけどね」

「ていうかお前も組織をいくつも潰してるだろ」

「クフフ、まあそんなんですけどね。昔まだ捕まる前の話ですが、犬が出かけに

『アヤメ』の一人と会ったことがあるそうなんですよ、偶然にも」

「そうなのか？それでどうだったんだ？」

「・・・あのときの犬は目も当てられない有様でしたね。その日からしばらくトラウマになってましたし・・・」

「一体何があつたんだ？」

「いろいろあつて喧嘩を挑んだらしいのですが、ボコボコの返り討ちにあつたそうです」

「そりゃ・・・犬も災難だな・・・」

「名を、かいどう海棠というそうですよ」

「ふむ、そこらへんも気が向いたら聞いてみるか」

ぎわつ。

その時一瞬そよ風が強くなったような気がした。

「おや？そろそろ帰る時間ですね」

「そうか、もう帰るのか」

「まあこの散歩もいつでもというわけではありませんからね」

「そうか。ま、囚人というものあれだが、元気でやれよ」

「クフフ。君も、沢田綱吉同様にいつか操ってあげますよ」

「ハッ！できるものならやってみろよ。返り討ちにしてやるよ」

「また・・・いずれ・・・」

「ああ・・・またな、骸」

一瞬風が強くなったが、やんだ時には、骸の姿は見えなくなっていた。

草の上に立つ光努だけが、あとに残った。

戦いおわって少し日常編

『友達の友達は友達だ!』

「あれ? 灯夜、リルとコルとルイいないけどどこいったんだ?」

「ん? リルとコルは最近知り合った友達と一緒に遊んでくるつてさ」

「最近の子は朝から元気だね。ルイは?」

「最近寝てばかりだから動いてこいつていつてリル達に同行させた」

「はは、そりゃいいや。じゃあ俺も遊びに」

「何言ってるんだ。骸討伐中に溜まった仕事するぞ。一日分でもかなりある」

「まじか・・・」

ツナside

骸との戦いが終わり平和な日々が続いていた。

今日は日曜なのでいつもよりとゆつくりと眠っていたけど、部屋の外から騒がしい音で目が覚めた。またランボ達が騒いでるんだろうな……。

もう10時くらいだし、さすがにそろそろ起きるかな。

ベットからおりて部屋を出る。下の話し声を聞く分に、皆でご飯を食べているらしい。まだ眠く、欠伸をしつつ台所に入ると、前と比べて人数の多くなった我が家の台所だけど……いつもより人が多い。

朝食を食べていたのは、モジャモジャヘアの子供、ランボ。人間爆弾の異名をもつ殺し屋の子供、イーピン。獄寺君のお姉さんで俺を殺しに来たビアンキ。そして俺の家庭教師のリボン。

いつもはこのメンバーに母さんがご飯を出しているけど、今日は違った。

座つてご飯をリボン達と一緒に食べてるのは3人。

一人は金色の髪を後ろで一括りにした男性。俺より年上っぽい。

二人目と三人目は同じ顔をして同じ髪型をした、多分双子。

肩程まである黒髪。年齢はフウ太と同じくらいの子供。

顔だけだとちよつと男の子か女の子がよくわからない……。

その3人がリボン達と、普通に朝ごはんを食べていた。

「……………」

「おいしー! あ、フウ太。醤油とって」

「はい、リル」

「ありがとう」

「リル、次醤油俺な」

「はいよー」

「……………」

いつの間にか俺の家庭が前より大所帯に……。

てかこの子達誰?

「(もぐもぐ) ツナ、やっと起きたみてーだな」

「リボン! 人が増えてんだだけど!」

「ああ、俺の知り合いだ」

「やっぱりリボンの仕業!」

「いや、今回はフウ太が連れてきたんだぞ」

「フウ太が!？」

「うん、最近友達になったの。リルとコルと・・・ルイ?」

「うん、ルイだよ」

黒髪の子供はリルとコル（どっちがどっちかはやっぱりわからない）でフウ太の友達みたい。金髪の男性はルイというらしい。

フウ太の最近できた友達ってことはマファイア関係ないってことだよな？

いや、そうに決まってる。というかそうであって欲しい・・・。

俺も一緒に朝食を食べ終わって全員でごちそうさまをした。

現在、俺の部屋にはフウ太とリルとコルにルイそれとリボン。

ランボとイーピンはどこかへ行ってしまった。

朝食の後で教えてもらったけどリルの方が姉でコルの方が弟の双子らしい。

座ってたときはわからなかったけど、服装が女の子の服と男の子の服で違いがあるから一応判別はできそう。やっぱり顔の判別は難しいけど・・・。

「「ビー」」

「えつと・・・何?」

「「リボン」」

「何だ?」

「何か頼りなさそう」

「うわー! 初対面の子供にひでいこと言われた!」

「二人ともー、ツナ兄すごいんだよ」

リルとコルの反応にフウ太が弁護してくれているけど……。

俺ってそんなに頼りなく見えるのかな……。

「おい、確か綱吉と言ったな」

「え、あ・・はい」

声をかけてきたのはいつの間にも俺のベッドに寝転がっていたルイ。

「実は俺は今日はリルとコルの付き添いで来たんだ」

「あ、そうなんだ」

「だが他の引率者がいれば問題ないと思うんだ」

「まあ確かに」

「そんなわけで綱吉。あとよろしく」

「え?」

言うだけ言って部屋から出て行ってしまった。

これって俺今日一日この三人の面倒見ろってこと?

嫌な役押し付けられたー! つーかあの人一体何?

「ルイはかなりの面倒くさがりだな。自分の興味のないことには、とことん面倒になる
体質なんだ」

「それって体質じゃなくてただの面倒くさがりだよ！ていうかりルとコルも、ルイ行っ
ちやつたけどいいの!?!」

「あ、ちよつと大変だね」

「うん。ルイが道端で倒れていないか心配だな」

「逆に心配してる！本当にどういうこと?」

「ルイは面倒くさくなるしすぐ疲れる体質なんだ」

「体質って言えばなんでも解決すると思ったら大間違いだぞ!」

「よし!じゃあツナと不良を戦わせてみよう!」

「賛成」

「いいよ!ツナ兄は絶対勝つもん」

「しかも何かこつちでは物騒な話を持ち上がってるし!!」

俺が不良と戦う?無理無理無理!

つーかフウ太も張り合うなよ!

そして、なんやかんやで俺はフウ太達3人に外に連れて行かれた。

ツナ side out

「あ!10代目ー!」

「獄寺君!」

ツナとフウ太とリルとコル、そしてリボーンの4人が道端を歩いていると向こうから手を振りながら走ってきたのは獄寺隼人。

「不良だ!」

「よし、ツナをけしかけよう」

「違うよ。隼人兄だよ」

(ちよ!獄寺君にけしかけるとか勘弁してよ)

「奇遇つすね10代目。俺は暇なのでそのへんブラブラして10代目の家に向かおうか
と思つてました」

「そ・・・そうなんだ」

「いけツナ!不良を倒せ!」

「レッツゴー」

「ああん？なんだテメーらは。あと誰が不良だ！」

(違うの!?)

獄寺が近くにいたリルとコルを睨みつける。

逆にリルとコルも獄寺をじつと見つめる。

「あ、獄寺君。この子達はフウ太の友達でリルとコル」

「フウ太の友達ですか。見分けがつかないっすね」

「うん。俺もつかない」

服装以外、まったくといっていいほどに違いが見られないリルとコル。

雰囲気若干リルの方が活発そうというくらいしか違いがない。

「隼人兄！ツナ兄の頼りになるところ見せてよ！」

「何？10代目の頼りになるところだと」

「フウ太はツナが強いんだって」

「でもそうは見えないよ」

リルとコルがそう言うのと獄寺の目がぎらりと光ったような気がした。

「このガキども。なるほど・・・いいだろう！お前らに10代目の素晴らしさを叩き込んでやる！」

「ちよ、獄寺君……」

「安心してください10代目!俺に任せてください!」

(不安しかないよ!!)

「えっと……獄寺君……ここは?」

ツナ達が獄寺に連れてこられてやってきたのは小さなビル。

2階だてほどしかないビル。

獄寺、ツナ、リル、コル、フウ太、リボーンはビルの入口にたっていた。

ちなみにリボーンはコルの頭の上に乗っている。

「ここはこのあたりを仕切ってるヤクザのアジトです」

「何笑顔でさらつととんでもないこと言ってるの!?!ていうか前に潰さなかった!?!」

「別の奴らがここら辺を仕切り始めたんすよ」

「俺が教えたんだぞ」

「リボーン！」

ツナが隣を見るとコルから降りていたりボーンは髪をオールバックにして黒いサングラス、紫のワイシャツを着たいかにもなヤクザのコスプレをしていた。

「ツナも、骸との戦いが終わって緊張感が抜けてきているからな。つーわけで、ここらでレッツファイバー！」

「何恐ろしいこと言ってるんだ！相手はヤクザだぞ！」

「ヤクザより骸の方が怖えーだろ？」

「どっちも怖いよ！」

「ぜひボンゴレの島荒らす奴らを潰しましょう！」

「ええー!!」

ガタガタガタ！

ツナ達が騒いでいると、ビルの入口が開いて数人の男達がでできた。

どの人物も、刺青をしていたり傷をつけたりといかにもないかつい集団。間違いなくこのアジトのヤクザだろう。

「おうおう。ガキどもが、何の用だ？」

「ひいー！いや、俺たちは・・・」

「とりあえず金目の物全部だせ。処分はそのあ」

ドスウ!

「ぐう……」

ドサリ。

獄寺の膝蹴りがヤクザの一人の腹にめり込み、ヤクザはその場で気絶した。

「てめーら、10代目に何してやがる」

「獄寺君!」

「次はお前だな。部下にもフウ太にも、たまにはいいところ見せてやれ」

ズガアン!

リボーンの拳銃からうち出た弾丸は、真っ直ぐにツナの額に当たった。

この時ツナは後悔した。こんなことなら、少しくらいいいところ見せておけばと。

「復活!死ぬ氣でいいところ見せる!おらあ!」
リ・ボン

額に炎を灯したツナは起き上りざまに近くのヤクザをぶん殴り戦闘不能にした。

「な!てめえら!やつちまえー!」

「うおおー!」

「くたばれやあ!」

「2倍ボム!」

ドガアン!ドガアン!!

獄寺のダイナマイトに、ヤクザも吹っ飛んだ。

「おらあ！」

ドガツ！

「ぐああ」

「うわあ！何だこのガキ！ぐはあ」

ツナと獄寺が暴れている近くで、フウ太達が見物している。

「ツナ兄すごーい！」

「おおー！めっちゃ荒っぽい」

「まるでヤクザがゴミのように」

「くらえ！」

メリケンサック装備のヤクザがツナに攻撃したが、ツナに腕を捕まれ止められけり倒された。

「がはあ！」

「おー、あつさり」

「このヤクザも終わりだね」

そして、あらかたヤクザを殲滅したら。

しゅー。

「ふう・・・」

「あ、戻った」

「ナイスだツナ。ボンゴレの勝利だな」

炎が額から消えて元の雰囲気に戻ったツナ。

下にはヤクザの屍（死んでません）がゴロゴロと倒れ伏している・・・。

「やりましたね！10代目」

「あ、あははは（うわー、やっちゃった）」

「おうおうなんだこの騒ぎは？」

入口から出てきたのはまたヤクザ。今度は3人程だけど2人は真剣を1人は拳銃を
持っている。

「ひいー！またでたー！しかも拳銃！」

「てめーらか、よくも部下をやってくれたな」

「10代目！」

「おっと動くなよ。このガキがどうなってもいいのか？」

拳銃を持ったヤクザが近くにいたフウ太に向かって拳銃を向ける。

人質を足られて獄寺も立ち止まってしまった。

「てめえ」

「お礼はたっぷりとしないな。ガキ共」

拳銃を持ってない方のヤクザが剣を構えた時、

——スパン！

拳銃が、縦と横に切れ目が入り、4つの鉄の塊に別れた。

「リル!? コル!」

フウ太の隣にいたリルとコルが、いつの間にか小太刀を手に、振り切った状態で止まっていた。

「なんだこのガキぐほお!」

拳銃を持っていたヤクザはしゃべり終わる前にリルとコル接近して小太刀の塚を思い切り鳩尾に叩き込んだ。そして周りの屍（だから死んでません）と同化した。

「フウ太に何するのさ」

「てめえ! やりやがったな! おらあ!」

「死ねえ! このガキ共!」

ヤクザがリルとコルに向かい、リルとコルもヤクザに向かった。

「え! あれ何!」

ツナ達には、向かうリルとコルの姿がぼやけて見えた。

キーン!!

ヤクザ2人とリルとコルがすれ違った時、ヤクザ達の持つ剣はへし折られ、体に何箇所かの打撃痕を残して地面に倒れ伏した。

「今のは一体!」

「あれがリルとコルの使う剣刀術の一つ。虚実の太刀、参番。ハザホウサ刃座宝叉」

「剣刀術? どっち? ていうか、は・・刃座?」

「足運びと重心移動に緩急をつける歩法と、察知しにくいいくつもの複雑な剣筋により、受け手に錯覚を起こさせて攻撃する技だ」

虚実の太刀には全部で3つの技があり、前にリルとコルが光努に対して使ったのは弐番、ハイコウザンシ並行斬刺。左右まったく同じ動きの攻撃を繰り返し出し、片方は力を込めそのまま攻撃

し、もう片方は力を抜き、避けた相手に向かって軌道を変えて追いかけて攻撃する剣技。

「あのヤクザ大丈夫なの!」

「安心しろ。ちゃんと二人とも峰打ちにしたから」

「ていうか、リルとコルって一体・・・」

「リルとコル・・・そうか! 思い出しました!」

「獄寺君?」

「昔マファイアの間で神童と言われる双子の姉弟剣士の話を聞いたことがあります

す。父親に教わったその剣技は、そこらのマファイア相手におお立ち回れる程に強力。その双子が、イリスのルルとコル」

「やっぱりマファイア関係者ー!!っーかイリスファミリーって光努のファミリーじゃん! あー!なんだか一度にありすぎ!」

「ま、とりあえずヤクザは潰したし。そろそろ帰るか」

「え!10代目!あの男ってイリスファミリーのボスなんすか!」

ツナの家に全員戻り、イリスの話をしていて光努の名前が出たら獄寺が驚いた。

「あれ?獄寺君知らなかったっけ?」

「その話したとき、獄寺は寝込んでたからな」

千種の毒針にやられて意識不明の状態だったので獄寺は知らないのも無理はない。

というか本当に獄寺は光努が誰だか分からずに一緒に行動していたようだ。

ツナはリルとコルがイリスの一員と知り、驚愕。

やっぱりマフィア関係者かー、とか考えていた。

「それにしても無事でよかったな。最近は物騒だからな」

いつの間にか帰っていたルイがしみじみと語る。

「てことはルイもイリスの人なの?」

「研究者だ。すごいだろ」

「あははは・・・」

(研究者って何かジャンニーニとか胡散臭い人しか思いつかない・・・)

ジャンニーニとはボンゴレの武器チューナーで父親のあとを継いだのだが、腕の方は優秀な父親と比べて全然で武器をダメにする人物である。

「ま、なんにしても世話になったな。そろそろ帰るぞ、リル、コル」

「またねー二人とも」

「じゃあねーフウ太」

「また遊ぼうね」

ツナ的に、今日みたいのがまさか遊び!?とか思ったけど、やっぱり違うよねとあえて自分のいい方に無理やり思考した。

リルとコルとルイは、ツナ達に別れを言って、家に帰ったのであった。

『困ったときはお互い様』

「へえ。ツナの家行ってたのか」

「うん！面白かった」

「楽しかった」

リルとコルとルイがツナの家に行った日の夜、食卓で夕食をとっているイリス&黒道ファミリーの皆。ちなみに今日の夕食のメインデッシュはハンバーグだ！

ていうかリルとコルの友達がツナの知り合い、とかツナの家の居候だったとはな。世間って意外と狭いなー。ランキングが得意な少年らしいから今度俺もランキングしてもらおうかな。

それにしてもリルとコルはどこでも小太刀持ってるんだな。どこにしまってたんだろうか。

「灯夜、リルとコルっていつも小太刀持ってるのか？」

「ん？ああ。武器は肌身離さずと言われているからな。まあ力半分つてところであらう
どいいだろ」

「力半分？」

「ああ。リルとコルの剣刀術は本来二刀流だけど、二人ともまだ子供だから一刀しか
使つてないんだ。もう一本の剣はお預けつてとところだ」

知らなかった。あれで全力じゃなかったてことか。全力だけどまだ上があるらしい。
あの技は刀一本でも使用できる技だけど剣を増やしたらもつと強い技になるらしい。
リルとコルはまだそこまでできない、というか2本は重くてまだ扱えないらしい。今は
一刀でも扱える太刀技を教わっているらしい。

「そういえば話を聞く限りルイは何してたんだ」

「そういえばどこいつてたの？」

「そういえばどつかいったよね」

「そういえばを連発するな。そうだな・・・」

ルイがリルとコルをツナに任せて一人でツナの家をあとにしたとき、考えたことといえは。

(どこで休憩しようか)

すでに散歩とかさういったことは考えずに休憩所を探していた。

だがよく考えて欲しい。

ルイは研究所からイリスの母屋に行く道(大体300メートルくらい)の途中で力尽きて倒れた。別に虚弱とかではないのだがただ疲れやすいだけ。

つまり、

「疲れた……」

ルイはいつもどおり道端で倒れていた。

「……やっぱり綱吉の家で寝てれば良かったかな……」

とぼやいていたら、

「お！あんた大丈夫か？」

「ん．．」

ルイの前に人影が当たったことにより、声をかけた人物を見てみると少年が一人。黒髪の短髪で部活帰りなのかジャージを着て肩に野球バッドのケースを背負った少年。

ルイは少年に起こしてもらい、肩を貸してもらった。

「誰かは知らないが親切にどうも。俺はルイ」

「あはは、困ったときはお互い様。俺は山本武。よろしくな」

ツナ達が獄寺と会っていたころ、ルイは山本と会っていた。

「武というのか。済まないな。どうにも疲れやすくてな」

「はは、気にしないでくださいよ。それにしてもルイさんってここらじゃ見かけな

い顔っすね」

「俺は少し前にここら辺に来たんだ。それよりその格好。部活とか行くんじゃないのか？」

「ああ、終わって帰るところだったんで問題ないですよ。それより疲れてるんなら家で休みますか？」

「そうか、悪いが頼めるか？」

「了解」

部活帰りの山本に拾われてルイはとてもラッキー。

そんなわけで休憩所は山本の家、『竹寿司』となつたのであつた。

そして山本の実家、竹寿司にて、

ガラッ！

「ただいまー」

「おう武！帰ったか！ん？そつちの兄ちゃんは？」

山本が寿司屋の正面から入ると威勢のいい声が聞こえる。

回転寿司ではなく、本格的な寿司屋。カウンターの中にいたのは、手ぬぐいを額に巻いた男性。山本武の父親である、山本剛だった。

「ああ、道端で倒れてるの見つけてな。少し休ませてやつてもいいか？」

「そういうことならいいぜ！なんなら元気つけるために寿司食ってくか？」

「日本に来たら寿司は食べてみたいと思ってたんだ。頼んでいいか？」
「あいよー！」

山本（父）は寿司を握り始め、ルイはカウンター前の席に座り、山本（武）は中に入つて寿司屋の格好をして出てきた。

「寿司はあまり詳しくないが、確かトロとかいうのがうまいと聞いた」

「トロね。あいよー！」

と言つてシャリを掴み、ネタを乗せ素早く、それでいて丁寧に握る。

「へい、お待ちー！」

ルイの前にトロの握りをゲタとも言われる足のついた板の上に乗せて差し出す。

ルイは寿司を掴み、小皿に載せた醤油に少しつけて口に入れる。

噛めば噛むほど甘味が広がり、醤油と中に付けられたわさびがよいアクセントとな

り、寿司の風味を引き立てた。ルイは初めて食べたトロを味わった。

「・・・うまい！初めて食べたけど、うまいぞ！」

「ありがとよ！次は何にする？」

「そうだな、次は——」

ルイは初めての寿司屋を堪能するのであった。

「親父い！」

「あん？どうした武」

ルイが寿司を堪能しつつお茶をすすっていると、奥にいた山本武が店に入って山本父を呼んだ。山本父は何事かとおもい聞いてみると、

「冷蔵庫が冷えてねーんだ！」

「何い!？」

「もしかしたらショーケースの方も……」

「な！……冷えが止まってやがる！」

竹寿司には奥にある大きな冷蔵庫とカウンターの前にあるお客からネタの見えるショーケースに冷蔵機能がついているものとあるのだが、その両方が一度の壊れてしまった。まだまだ生物が多量に入っており、夏が終わったばかりとはいえまだ暑い今の時期には生物を冷えていない場所に放置は大変危険。

食事処で食材が保存できないのは大問題であった。

「大変だ！すぐに業者に連絡しねえと！」

山本の父はバタバタとすぐに奥に向かう。

「ワリーなルイさん。ちよつと待っててくれ」

「冷蔵庫の故障か？」

「ああ、ネタはまだあるんだが冷えないと」

「なあ武。その冷蔵庫、少し見せてくれないか？」

「え？」

カチャカチャ。

竹寿司のカウンターの中にて、ルイはショーケースの冷蔵機能を工具片手に弄っていた。

「どうだいルイくん」

「直るんスカ？」

「ふむ……直った」

「本当かい！」

「すげー！」

ルイが直し始めてからわずか30分程で奥の冷蔵庫とショーケースの冷蔵機能は無事に直った。ついでに改造を施して瞬間冷凍機能をつけつつ燃費をよくなるようにした。まあ瞬間冷凍の機能が役に立つのかわからないのだが。

イリスの研究所の主任を任せられているルイにとつては、家電製品を直すことなど造作もないことなのであった。ちなみに工具類は日頃から持ち歩いている

「ありがとよ。助かったぜ！」

「ルイさんってすげーんだな！」

無事に直り、山本親子はお礼を言う。

「助けてもらったからこれくらいお安いよ」

そして、寿司を食べて山本に礼を言ったルイはそろそろ時間だなど思い、挨拶をしてツナの家に戻るのであった。

余談だが、山本のバッドに改造を施して灯台並の懐中電灯にするという無駄にすごい機能を付けて『山本のバッド・改』にしたのは本当に余談である。

「いいなく、あたしもお寿司食べたい！」

「まさか山本の実家に行ったとはな。俺も今度行きたいな」

「トロがうまかった。あとイクラとかウニとか」

「僕も食べたい……」

ルイの話を聞いて光努とリルとコルが寿司を食べたがった。

光努は今度行こうと再び決心するのであった。

「それで光努は何してたんだ？」

「ん？ いろんな会社回ってた。ボス巡りの次はイリスの傘下の企業巡りだよ」

「ま、頑張れよ」

「そういえばルイもいくつか会社を担当してるんだよな」

「そうだな。自動車とか工場とか機械系をちよつと手伝ってるくらいだな」

イリスファミリーの研究主任兼、あちこちの会社の総合研究主任みたいなの？

ちよつとどこらじやなくてかなり重要な役職だった。

といってもルイの性格上、実際に会社の方には行かないで作業をしているのである。コンピューターも扱えるのでノートパソコン一台でいろいろとできるらしい。興味が出たらめちやくちややるんだけど……。

「あれ全部灯夜ひとりでやってたんだろうか」

「まあ会社ごとに優秀な社長がいるから企業のトップがいなくてもそれなりに回るんだよ」

「なるほど。そういえば灯夜って代理だったんだよな」

「まあ本来は必要なんだけど、そこはちゃんと仕込んでいたらしいからな。後はお

前がどうするかだな」

「期待してろ。イリスをもっと大きくしてやるよ」

ルイに対してにやりと笑う光努。

それに対してルイは、「ふっ」と笑いながら残りのハンバーグを口に入れた。

「うまつ」

今日も黒道家のイリスファミリーは平和であった。

『居候』

やあ諸君。俺はハクリ。

光努を連れてこの世界へとやってきた人物さ。

ここではおしやぶりをつけてるから赤ん坊の姿だけど本来はちゃんとした大人。いろいろ制限付くからこのおしやぶりは割と面倒なんだよ。

光努を放置している間は復讐者ヴァインディチエに知り合いがいたから厄介になってただけどそろそろ用事もすんだしあの場所飽きたから明るそうな光努の今泊まつてるイリスファミリーに居候することにしたんだ。

それにしてもリボーンのところの綱吉も死ぬ気の炎とか使えるようになったから光努にも少し炎を使ったこの世界の戦い方とか教えとくか。光努に必要なかはわからないけど、必要になると思うからな。

まああつてもなくてもそんなじよそこらの脱獄囚や暗殺者やマフィアのボスとかには負けないと思うけどね。まあそれも現段階ではの話。

しばらくしてからどうなるのかはまだわからないからな。
どうしようか？

イリスの本拠地は日本ではなく海外にある。

日本では企業として会社がいくつもあるがアジトと呼べるほど大仰なものはない。

なので代わりに灯夜の家である黒道家を仮拠点にしていた。

と言っても部下の方は本拠点にいるし、日本に来たのは灯夜、光努、リル、コル、ルイの5人。

しばらくはボス教育的に灯夜と光努はセットで行動するってことで光努は灯夜についてきて、光努に付いてきたリルとコル。そして日本旅行について来たルイ。

灯夜と光努は定期的にあちこちに行くが、基本的に黒道家にとどまる。

そこに、ハクリが居候に来た。

「というわけで居候のハクリだ」

「居候という言い方は俺的に微妙だがまあよろしく」
「.....」

灯夜にハクリを連れてきて見せたが、とうの灯夜の表情は幾分怪しがつっていた。
まあ当然といえば当然である。

本来アルコバレーノは7人しかいない。それはマフィア関係者はほとんど知っているが実際にアルコバレーノの全員を知っているわけではない。それでもおしゃぶりが虹の色をしているということは大抵のマフィアは知っているので今回の灯夜も怪しがつた。

「白白おしゃぶりの赤ん坊なんて聞いたことがないんだが」

「まあね。ハクリはかなり例外的なアルコバレーノなんだつて」

「まあそこらへんの詳しい説明は中でしようか」

ひとまず居間の机に座ってお茶を飲む光努とハクリ、そして灯夜とリルとコルとルイの5人。え？増えてるつて？

まあ灯夜の家の中だから皆いるのは当然だろ。学校とか通つてないしな。

「ちつちやーい。リボンサイズだー！」

「赤ん坊が流暢にしゃべるとは」

「どうか白白おしゃぶりのアルコバレーノ何て聞いた事ないがな」

ルイも当然アルコバレーノのことは知っている。故に灯夜同様に不思議がった。リルとコルは普通におもしろがってるだけだった。

「このおしゃぶりは他のアルコバレーノのおしゃぶりと少し違ってな、俺専用なんだ」「ん？他のアルコバレーノのおしゃぶりもそいつ専用じゃないのか？」

「いや、あのおしゃぶり専用アイテムじゃねーし」

「どういうことだ？」

「まあそんなことより、しばらくここに住むからよろしく」

少々はぐらかし気味のハクリに光努はジト目だったがまあいいかと思つた。

別段困るわけでもないし、知らなくても問題ないからと。

「そういえばハクリと光努は知り合いか？」

灯夜がふと気になったようで二人に聞く。

そもそも灯夜達からしてみれば光努に関しては知らないことのほうが多すぎる。

いきなり降つて出てきた光努。名前と簡単なプロフィールくらいしか知らないと思う。

そんな光努と一緒に来たハクリ。当然興味が湧いた。

「そうだな、少し昔話でもするか？」

ハクリは楽しそうに笑つた。

夜。光努の部屋。

畳の上の布団の中で光努が仰向けに寝転がっていた。

壁際にかけてられている掛け軸の下に座布団が置かれており、その上にハクリがいた。すでに時刻は深夜。窓から入る月の光が光努の顔をわずかに照らしていた。

「なあ、ハクリ」

「どうした？」

「灯夜たちに他の世界の話してもいいのか？めちやくちや驚いてたぞ」

「……ま、困らないな。話したからといって世界に影響が出るわけでもないしな」

「そうなのか？」

「まああまり言いふらされるのも面倒だから口止めたけど、広まっても正直構わないしな。知ったところで何かあるわけでもないし」

「もし広まってどっかのバカが異世界行きたいとか余計なこと考えないか？」

「行けないな。たとえ未来の猫型ロボットを連れてきてもそれはできない」

「・・・微妙に分かりにくいな。まあなんにしても問題ないってのはわかったよ」

「問題はない、だから思う存分この世界で暴れていいぞ。俺は旅行するなら観光ツ

アーより自由に旅をするのが好きな方だからな」

「俺もだ、サンキュ」

静かな真夜中。光努は楽しそうに笑みを浮かべ・・・・・・・・眠った。

「学べ、遊べ、戦え、光努。この世界は・・・・・・・・面白いぞ」

『転校性、白神光努』

並盛中学校。

並盛町内にあるごく普通の中学校。

通っている生徒には一部問題があるものの、至って普通の学校である。

ちなみにボンゴレ10代目ツナや獄寺、山本そして雲雀などもこの生徒。

今日は平日なのでいつもどおり校門には登校する生徒が増えてきた。

校門くぐる人の中には、今回は遅刻もせずに登校して来たツナの姿もあった。

「よっ！ツナ」

「おはよう山本」

「10代目ー！おはようございまーす！」

「あ、獄寺君もおはよう」

ツナに声をかけてきたのは友達達の山本武。野球部に所属する短髪の少年。

そして自称10代目の右腕の獄寺隼人。真ん中で髪を分けてアクセサリーを所々に

つけている若干ガラの悪そうな少年。

下駄箱で靴を履き替えて、3人の教室である2年A組に向かう。

教室にはすでに何人かの生徒がいた。

「おはようツナ君。山本君。獄寺君」

「お、おはよう京子ちゃん！」

「よお、笹川」

「ういーす」

ツナ達に話しかけてきた少女は笹川京子。

現在、ツナが思いを寄せている少女でありボクシング部首相の笹川了平の妹。

リボンが来る前は、話しかけることすらままないほどだったのに、今では話もする程の仲となっていた。

「さつき先生の話聞いたんだけど今日このクラスに転校生が来るんだって」

「へえ、どんな人だろう」

「そいつって男か？女か？」

「ううん。そこまではわからなかった」

「興味ねーな」

ガラリ。

「みんな席につけー」

教室の扉が開いて教師が入ってくると会話中だった生徒たちは自分の席に戻る。皆が静かになったのを見計らって口を開く。

「さて、今日はこのクラスに転校生がやってきた」

転校生……という言葉にクラスの生徒は口々に騒ぐ。

獄寺が転校してきたときもだが新しい人が来るといっているので皆興味がわいたのだろう。中には獄寺みたいに興味のないことには興味のないものもいるが。

「せんせー！転校生って女子ですかー！」

「それとも男子？」

「どんなやつ？特技は？」

「好きな食べ物は？」

「俺も知らねーよ！そんなこと本人に聞け！おい入ってこい」
ガラリ。

教室の扉が開いて廊下から入ってきたのは一人の少年。

並盛中の制服である白いワイシャツにネクタイ、黒いベストを着用した姿で現れたのは、柔らかそうな白い髪をして楽しそうな笑を浮かべている少年。

「えっ！」

「なっ！」

「こ、光努！」

「あー、転校してきた白神光努くん。仲良くしろよ」

ツナ、山本、獄寺は驚きをあらわにして口々につぶやく。

そんなツナ達を教壇から見て光努は笑った。

「白神光努だ。よろしくな」

バン！

「てめえ！どういうことだ！」

転校生紹介が終わり、皆で光努にこぞって質問でもしようかなといったところ（余談だが女子の比率が多かった）、獄寺が光努の元へやってきて机を叩きつつ話しかけた。

「やあ、どうしたのかな獄寺君。そんなに血相抱えて」

「何他人ごとみてえな喋り方してんだよ！俺のこと知ってるだろ！」

「よお光努。久しぶりだな」

「久しぶり。犬に噛まれた怪我も無事そうであつたよ」

光努は山本の左腕を見て、もう包帯も取れて犬に噛まれた傷もなくなつたようなので満足そうに言う。

「光努！」

「ようツナ。前にリル達世話になつたらいいな。迷惑かけなかつたか？」

「あ、うん。大丈夫（まあ・・・一応だけど）」

微妙な顔で返答したツナにやっぱりかと言うように笑う。

「なんで山本と10代目には普通の対応してんだよ！」

「どうした隼人。そんなに怒つて」

「てめえ、果てやがれ」

「ちよ！獄寺君！ストップ！ここ教室だから！」

ダイナマイトを取り出しかけた獄寺だが、ツナがストップをかけたのでなんとか思いとどまつた。

「ま、つもる話は屋上でも行こうか」

ところ変わって屋上。

ツナと獄寺、山本、光努が来ていた。

「そういえば光努。お前って黒曜中の生徒じゃなかったか？」

「ああ、転校してきたんだ」

黒曜中は別に廃校になったりとかはしていないけど、骸が制圧したあと不良を従えたりなんなり、この前はほとんどの不良が戦闘不能にされたりしたので、まあ色々あつたおかげで現在軽く学級閉鎖が連発するような状態であつた。

そんなわけで閉鎖していなくて通える学校に通うことにした光努であつた。

まあそこらへんは灯夜が独断でいろいろと勝手に決めただが。

「というわけ」

「なるほどな。黒曜中も大変なんだな」

「まあ骸に制圧されたって聞いたし・・・」

「それでここに來たつてわけか」

ひとまず光努が來たことに驚いたが納得がいったようだ。

「骸の時には世話になつたみてーだが所詮お前は別のマフィア。あんまり10代目に馴れ馴れしくするんじゃねーぞ」

という獄寺に、

「後ろ向きに善処するよ」

笑顔でさらりと流す。

「てめえ!」

「いいじゃねーか、獄寺。今日からクラスメートなんだし」

「オメエは黙つてろ!」

獄寺と山本でワイワイと騒いでいると、

ガチャリ。

「君達……何群れてるの?」

屋上の扉を開けて出てきたのは、雲雀恭弥。

並中の制服ではなく風紀委員の制服の学ランに風紀の腕章をつけた並中風紀委員長。もはや何年生かもわからないほど学園に在籍していると思われる謎に満ちた最強の不良兼風紀委員長であり並盛中学だけでなく並盛町をも支配している程の人物。

この街で最も並盛りに愛着を持つ人物でもある。

気性は荒く、風紀を乱す者と群れる（多人数で行動する）やつらを見つけたら嘯み殺したくなるそうだ。

「ひ・・・雲雀さん！」

「げ、雲雀」

「いや、俺たちは別に」

「雲雀？誰？」

歩く足を止めて光努見た雲雀の目が少し見開いた。

「君は・・・」

『校内は静かにしましょう』

屋上にやってきた雲雀恭弥は光努を見て足を止めた。

そして記憶を探るようにつむいて思い立った。

少し前、光努が日本に来てすぐの頃リルとコル、そして灯夜の息子である夕輝とともに夏祭りに行った。

その時夕輝の財布がひったくりにスられ、光努は追いかけて神社の境内にいたのを見つけた。見つけた時にはツナと雲雀が不良に囲まれている状態。

光努も割って入って最終的には獄寺と山本も来て不良は一掃された。

その際、雲雀と光努が軽くバトつたのだが……。

「確か・・・夏祭りにいた君」

「・・・ああ、そういえば」

「どうしたの、光努」

「ほら、夏祭りの時にひったくりあったら」

「そういえば・・・ああ、光努と雲雀さんってその時会ってたね」

「よく考えたら俺たちも光努とそんなとき会ってたな」

「すっかり忘れてたぜ」

マフィアランドで会ったツナと違って、山本や獄寺は一応会ったと言っても不良との戦いの中でチラッと見た程度なので今まですっかり忘れていたのであった。

だが雲雀の場合は境内で少し戦っている。

あの時は風紀委員としてひったくりの金を全て没収（もしくは強奪とも言う）しようとした雲雀と、夕輝が財布を盗られたため取り返すのと連帯責任で他のひったくりの金を全て没収（やっぱり強奪とも言う）しようとしていた光努。目的がかぶったので邪魔なやつを排除するために一時的に光努と雲雀は戦っていた。

戦ったと言っても共闘じゃなくてお互い邪魔だと思つて潰し合っていたのである。

最終的には夕輝の財布を取り返したらもういいかなと思つた光努が帰つたので戦いは割とすぐに終わったのだが……。

「まさか転校生だったとはね」

チャキ。

にやりと獰猛な笑みを浮かべながら両手にトンファーを取り出して構える。

「ツナ、こいつだれ？」

「えー！」

(雲雀をこいつ扱いとか……)

(あーあ、俺知らね。10代目、光努囷にして逃げましょう)

雲雀の説明をを聞き終わった光努の感想は……。

「そのトンファー、どこからだしたの？」

「気になるところそこ!？」

「夏祭りの決着、つけようよ」

殺気をぶつけてくる雲雀。

光努の方にもやりと楽しそうに笑う。

屋上の中央で対峙する雲雀と光努とそばにいるツナ。獄寺と山本はいつの間にか屋

上の端の方に退避して獄寺はツナに手招きしている。

(10代目、こっちは来ないと巻き込まれますよー)

(で、でも・・・)

「行くよ」

「来い」

雲雀はトンファーを振り、光努は蹴りを繰り出した。

「ちよっ！二人とも！こんなところで戦うなんて」

「だったらオメーが止めてこい」

バキ！

ドガ、ドガ！

「ぐふっ！ぶへっ」

「ん？」

「あ」

雲雀の振り上げたトンファーと、光努の蹴り上げた足がツナを挟み込むよう思い切り攻撃を当てた。真ん中のツナは思い切り顔が潰れてしまった・・・。

「げふっ」

どしやり。

そのまま地面に倒れてしまった。

「じゅ・・10代目ー!!」

「大丈夫かツナ!」

「まったく、情けねーな」

ツナを蹴り飛ばして雲雀と光努の喧嘩の真つ只中に送り込んだのはリボン。

黒い帽子にスーツを来て、帽子のつばには緑色のカメレオンを載せた赤ん坊。

そして胸につけた黄色いおしゃぶり。アルコバレーノの一人であり、ツナの家庭教師のリボン。ツナを蹴り飛ばすなどいつものことなので普通にしれつとしていた。

「赤ん坊」

「ちやおつす雲雀。それに久しぶりだな光努」

「ようりボン。お久」

「赤ん坊、邪魔しないでくれる」

「ちよつと取り込み中なんだ。つー分けて、行くぜ」

「来なよ」

ドガッ!

「うわっ!」

「ちつ、あいつら始めやがったぜ」

ガッ!ドガガッ!バキ!

光努は雲雀のトンファーを交わして蹴りを入れる。

雲雀は光努の蹴りをトンファーで防御してもう一方のトンファーで光努の体に攻撃を仕掛ける。光努は雲雀の攻撃を、後ろに下がることで躲して下からトンファーを持った手を蹴り上げる。

キン！

「！」

あまりの威力に雲雀のトンファーが宙に飛んだ。

パシ！

飛び上がって雲雀のトンファーを掴んで上から振り下ろすように雲雀に攻撃する。

キーン！

「僕のトンファー……」

「悪いな♪」

トンファー同士がぶつかった。

そこからはお互いトンファーと拳と脚を使って攻撃を繰り返す。

ほぼ全ての攻撃を躲す光努と、トンファーで防御をしていた雲雀だが、トンファーを一つ取られたことにより防御力が落ちて攻撃を多少くらい始めていた。

「おいおい……」

「まじかよ、あの雲雀が」

「押されてる!？」

「さすが、骸を終始圧倒したただけあるな」

キーン!

再びトンファー同士がせめぎ合う。

ガキン!

「!」

雲雀のトンファーから鉤爪が現れてせめぎ合っていた光努の持っていたトンファーを掴んだ。

「ふん!」

「うおつと!」

そのまま奪われたトンファーを引つ掛けたまま振り下ろし、光努は思わず手を離して後退。雲雀は腕を振るって引つかかったトンファーをつかみ直して両手で構えなおす。

「そうか、光努は雲雀のトンファーの仕掛けを知らなかったな」

「これで振り出しに戻ったな」

「二人ともすごい」

お互いにならみ合って少しじつとしていると、

キーンコーンカーンコーン。

「ん」

「チャイム？毎回いいところで・・・」

「やべっ！休み時間終わりだ！」

「ええ！早く行かないと授業に遅れる！」

「別にいいんじゃないですか？」

雲雀は授業に出ていないので普通に佇む中、ツナと山本、一応獄寺も屋上から出て教室へ行くこうと入口に向かう。

「お先っ！」

「ちよっ！光努」

「またなー、雲雀ー！あ、リボーン。これうちの居候から」

リボーンに白い封筒を投げつけて走る。

走り出したかと思ったら屋上の柵を飛び越えて下に落ちた。

「ええ!!」

「光努ー!!」

柵から身を乗り出してツナ達が下を見ると、下の方で教室の窓から中に入る光努が見えた。

「・・・・・・・・」

ツナ達は哑然として声が出なかった。

雲雀は帰り、教室に戻ったツナ達が先生に怒られる中、普通に席に座ってこちらに手を振ってる光努と、そんな光努を見ている教室の皆を見てツナ達は引きつった笑みを浮かべていた。

ちなみに教室の皆は窓から光努が入ってきてめちやくちや驚いたそうだ・・・。

雲雀が屋上から出て、一人屋上に残ったりボーン。

その手には一つの封筒が握られていた。

その捺印にはおしやぶりの模様が刻まれていた。

「あいつからの・・・招待状か」

それは招待状。

白いおしやぶりを持ったアルコバレノ。

異世界より渡ってきた男、ハクリからの招待状だった。

『招待状の行き先は……』

カコーン。

流れる水が庭にあるししおどしに流れて水がたまり、耐え切れなくなった竹の器が岩に当たり、乾いた音を立てながら再び中を空にして水を貯める。

そんなことを繰り返す。

元々ししおどしとは、カラスなどの鳥類に対する威嚇する物の総称。カカシなども含まれるが最近では竹でできた装置のことを指す。

そして日本庭園に置かれ風流を楽しむように設置されるものが多くなってきた。

ここもそんな風流を楽しむために作られたものだと思う。

庭園と言うには少し微妙な場所。

少し高い塀に囲まれたその庭は、塀に並ぶように何種もの木が並び、端の方に少し小さい池にそれにくつつくようにししおどしが備わる。後は岩がいくつもあり、草原のよ

うに草が伸びて土が見えない。一応日本的な庭園と言えることもないだろうけど少し野性的する。一体どんな人物が住んでいるのか。

その庭から見える場所にはこれまた日本的な家。縁側から見える部屋の中は畳が敷かれて座布団もある。まさに和風建築の家。

縁側には人影が。

普通より幾分小さい人影。

片方は黒いスーツに黒い帽子、鍔の上にはみどいろのカメレオンが乗っていた。その胸には黄色いおしやぶりがついており、手には三色団子の刺さった串が握られていた。

もう片方は和服を来て羽織を羽織っている。胸には白いおしやぶり。手には薄茶色のみたらしがついていて白い団子が刺さった串、つまりみたらし団子を手に持っていた。

「(もぐもぐ) この団子うめーな」

「だろ。(もぐもぐ) みたらしもうまいぞ」

座っていたのはリボンとハクリ。

お互い、暖かい日太陽の日差しにあたりながら団子を咀嚼していた。

始まりはリボンへと送られたハクリの招待状。

ハクリは少し前から光努達が住んでいる灯夜の家に住んでいた。

というわけで光努に学校に行くついでにリボンに手紙を私てきてーと頼んだのである。

だったら自分でいけよとか、リボンが学校にいないかもしれないのにか、まあ色々光努的には考えたけど特に断る理由も……まあいくつもあつたけど別にいいかと考えたのだった。

「実は別の所から来たんだよ、俺ら」

「別の所？」

「異世界みたいな♪」

「！」

ハクリはおかしそうな笑みを浮かべながら団子を持った手をプラプラとさせているが、

(この目……嘘を言っていない……)

目の奥が笑っていない。楽しそうにはしているが、確かに真実を語っている目をして
いた。

「異世界……なんてのはあるもんだな。さすがの俺もびつくりだ」

「ま、だからといってこつちから異世界に行ったりするのは不可能。というか今の

俺にもできないしな」

「今の？」

「このおしやぶりのせいなんだけどな」

おしやぶりは、つけたものに枷を与える。ハクリおしやぶりをつけたことにより使え
なくなった力には異世界を渡る力もあつた。

「光努も異世界人みたいなものか？」

「ふむ、異世界人、人……か。まあそうだな。そんなところ。光努と二人でこ

こに来たんだしな」

「光努の力とかも異世界が関係あるのか？」

「微妙だな。関係あるといえはあるし、ないといえはないし」

(……正直、俺がこんな会話してるのは違和感ありまくり……というかホントに
どうなってるんだ……)

さすがのリボーンも見た目冷静となってるがいろいろと考えている。

最強の赤ん坊であり、世界一の殺し屋とよばれるリボーンだが、さすがに容量の限界を超える情報だつて存在する。

だつていきなり異世界だぜ？しかも嘘か真か見分ける程の洞察力を持っているだけに真実だとわかるから……ホントに大変である。

「実は光努のことについても聞いておきたいんだ」

「光努？」

「あいつ、スペックが異常すぎるぞ」

身体能力、五感、反射神経、光努の力は異常すぎる。

これまでに戦った回数は割と少ないのだが、それでもほぼ圧勝。傷を負ったことなどほぼ皆無。体が頑丈すぎる。というか動きが化物じみてる。

「くく、まあそうだろうな。あいつはここでは特異な存在だしな」

「……それはオメーもだろ」

「まあな。まあ詳しいことはまた今度話すが、一つ面白いこと教えとくよ」

「？」

「光努はな、最初は普通だったんだ」

「！」

「まあ周りに比べれば確かに頑丈。身体能力もある。それでも異常とまではいかな

いほどだったんだ。あの身体能力は後で身に付いたんだ。だからといって人体実験をしたわけでもないんだけどな」

（後からあれほどの力を手に入れた？しかも、何もしないで!）

光努にはまだ秘密がある。ハクリはそれを意図的に隠している。

隠さなければならぬほどに重要な秘密なのか。

いや、ただ面白がつてるだけか。

「周りがそうさせたんだよ」

「周りが……だと?」

「いわゆる……環境問題ってやつか?」

「ちよつとちげーんじゃねーか?」

「それと、光努はこれから弱くなるかもしれない」

ハクリの言葉に耳を疑った。

弱くなる。そんなことがあるのか?一度身につけた力が使えなくなるといふことな

のか、それとも……。

「どういことだ」

「ま、かもしれないってだけ。逆に、さらに強くなるかもしれない」

にやり、と笑うハクリにリボーンはぞくりとした感覚を味わった。
滅多に味わわないような、感覚を。

「いやー、楽しみだな。これからの光努♪」

（あれいじよう強くなったらどうなるんだろーな・・・）

「あいつ弱くなんねーかな。そうすりゃからかうのが楽になるんだがなー」

「・・・」

「そうしたら避けるのもすごく楽なんだよな」

（光努も苦労してんだな）

リボーンはカラカラと笑うハクリを見て光努に同情した。

「で、お前って何なんだ？」

「俺？俺か・・・俺はな——」

『よくあることですよ』

バラバラバラバラ。

日本上空で飛ぶ大きな影。

一台のヘリコプター。

それもアメリカ軍の偵察用に作られた軍御用達の機体。

全体的に丸い期待形状なことから「空飛ぶ卵」フライングエッグの名で呼ばれているような機体である。

しかもこの機体、偵察用なのでステルス性能も搭載していて軍のヘリなので戦闘にも使える。本来は4人乗りだが、この機体は改造が施されているので通常よりもスペースは上がり、2人乗りになっている。

そんな機体が空を飛んでいた。

「そろそろ目的地が見えてきましたよー」

機体のプロペラの音に負けないように、大きめの声でヘリの操縦士は隣の席に座る人

物に話しかける。隣に座る男は閉じていた目を静かに開き、体を起こした。青みがかつた黒髪に少し長めの髪。端正な顔立ちで見た目はおよそ20代と思わしき男。後ろにおいていた自分の荷物を背負った。

「あ、どうも。じゃあここら辺でいいですよ」

「気をつけてくださいね」

「ああ、帰りもお願いします」

ガラ、ビュウオオオオオ!!

男はヘリのドアを開けると、外の風が勢いよく室内に入ってきた。

髪がバタバタとはためく中、男は足に力を入れて——へりから飛び降りた。

100メートル程もある高さから飛び降りた男は真つ逆さまに落ちていき森の中にそびえる大きめの木にめがけて落ちた。

木に差し掛かった時、両手を木の枝につけ、そのまま体操選手のように回転。落下の威力を殺し、手を離して木を踏みしめながら徐々に降りていき、軽やかに地面に降り立った。男はヘリから飛び降りたにもかかわらず、無傷で地面に到達した。自分のいる場所を懐かしむように、荷物を持って歩き出した。

「久しぶりですね、日本」

「暑いなー、早くアイス買って帰ろ」

「俺も食いてーぞ、早くしろよダメツナ」

「何様だよー」

会話をしながら歩いているのはツナとリボーン。

最近暑いのでツナはアイスが食べたいと思い今からコンビニに行くところ。

リボーンもそれに便乗した。

ツナは暑さとは別に若干苦しそうに歩いている。

その原因はリボーン。

ツナの腰にはロープが巻かれており、後ろに伸びたロープはキャスターの突いた椅子に伸びており、ツナが歩くたびにカラカラという乾いた音がする。そしてその椅子の上に座っているのはリボーン。

ちなみに椅子の形状はビーチチェア型なのでリボーンはサングラスを掛けてパラソルを指してくつろいでいる。それにくらべツナは暑くて重くて苦しそうだ。

「ちよ・・リボーン！自分で歩けよ！」

「マフィアのボスたるもの、この程度の錘くらいでへこたれんじゃねー。罰として錘追加だ」

そう言っどこから取り出したのか鉄球のついた鎖をツナの足首に枷で固定した。鉄球には10kgと刻まれていた。

「重っ！リボーン！これめっちゃ重いぞ!!」

「そりゃ、こんな暑い日に外に出るんだから、足取りも重くなる」

「意味が違うよ！リアルに重いよ！」

「つべこべ言わず、さっさと行け」

「うわーん！」

リボーン達は、今日も絶好調(?)だった。

そして「7」と看板に書かれたコンビニ。

入口の脇に鉄球が置かれているのが妙なところ。

ツナの足に突いた錘をコンビニ前で外してもらったのである。

そして中のツナ達はいえ、

「おらあ！おとなしくしろ！金出せやゴルア！」

強盗に選挙されたコンビニにいた。

「ひいひい！」

「ガキ！おとなしくしてろよ。店員はとっと金を詰める！」

黒い覆面をつけた体格のいい大男は大きめのナイフと拳銃を両手に持って店員に命令をしている。

ツナは端で縮こまっており、リボーンはツナの横にいる。

（リボーン！なんとかしてくれよ！お前なら楽勝だろ！）

(あめーこと言うな。ボスになったらもっと大変なことになるぞ)

(だから俺は10代目にならないって！それよりこの状況！)

(だったらオメーが何とかしろ)

チャキ。

帽子のつばに乗っていたレオンを手に載せると、レオンは緑と黒のカラーの拳銃に変わった。

ガ―。

「！」

リボーンはツナの額に照準を合わせたとき、コンビニの自動ドアが開いた。

「ああ！誰か入ってきたよ！大変だ！」

ツナは大慌てで入口を見るが、リボーンの方は珍しく少々驚いたような顔をしていた。

「リボーン？」

「なんであいつがこんなところにいるんだ？」

コンビニに入ってきたのは男性が一人。

灰色の七分丈のシャツを着て、ブラウンのスボンと黒いブーツ。

黒いバッグを肩からかけている。顔立ちに青みがかった黒髪の端正な顔立ちをした

およそ20代程の男。

入ってきて目の前にいる強盗を見て、足を止めた。

「これはどういう状況でしょうか・・・」

「ちっ、入ったもんはしようがねえ。てめえも人質だ！大人しくしてもらおうか」
強盗はナイフを、入ってきた男に向かって振り下ろした。

「あ！危ない！リボーン！」

「大丈夫だ、見てろ」

パシ！

「いきなり攻撃するとは、危ないですね」

「て・・・てめえ・・・」

白羽取り。

男は振り下ろされたナイフを右手の指二本で軽々と止めていた。

「うそお・・・」

ツナも唾然としていた・・・。

「このやろお!!」

もう片方の手に持った拳銃を男に向けた。

「あ！銃が！」

パァン！

「おっと」

男が首を傾けると横を弾丸が通過していった。

「このー！」

パンパンパンパンパン。

「よっ、危な、い、です、よ」

首を軽く動かして続けざまに撃った弾丸が全てあつさりと男に躲された。

「あの人すごい！全部よけちやった！」

「あの強盗は銃の扱いが素人みたいだな」

「そういう問題?!」

この場合扱いが素人でも至近距離から撃たれたら普通はよけられないはずなのだが

ツナはそこまで頭が回らなかった。

カチンカチン！

「しまった！弾が！」

「あれはアメリカ式のリヴォルバー、コルト・ドラグーン。6発しか入らないから弾切れ

だな」

リボーンの解説になるほどと思うツナ。

続けざまに撃ったからすぐに弾切れになった。
すつ。

男がナイフを掴んだ手と反対の手の平を強盗の顔の横に持っていった。

パアン！

突然そんな音がしたと思ったら、強盗はフラフラと揺れて地面に倒れふしてしまつた。

「店員さん、この人はしばらく目を覚まさないの。後は警察に連絡してくださいね」

「は、はい！ありがとうございます！」

声をかけられた店員はすぐに110番に通報した。

「今あの人が何したの？」

「横から強盗に衝撃を加えて脳を揺らしたんだな」

ツナには、男何をしたのかが分からなかったが、リボーンには見えていたようだった。

男はこちらに気づいたようにツナの方を見ると「おやつ？」という表情をした。

「リボーンじゃないですか。こんなところにいるなんて珍しいですね」

「オメーもこんなところにいるなんて珍しいじゃねーか、そうじ銃時」

「リボーンの知り合い？」

「まあな」

「君は？」

「あ、えつと沢田綱吉です」

「僕は海棠槍時かいどうそうじ。よろしく、綱吉君」

『いえ、ただ寄っただけですよ』

「すいませーん。宅配便でーす」

「はーい」

黒道家の前に止められた宅配業者のトラックから荷物を引っ張り出して玄関の中に持ってきていた。インターホンを押したところ、中にいた朝菜が出てきて印鑑を押して荷物を受け取った。届いた荷物は縦が2メートルに横幅が30センチ程もある大きな箱。上等そうなケースに入っており、鍵がかかっているのに鍵は入ってなかった。

「朝菜、荷物か？」

「ええ、この荷物あの人のみたいですよ」

「そうか」

イリスファアミリーには戦闘出来る人員が割と少ない。

全体的に会社経営や工場などを持っていたり、幅広く企業を展開しているのでマフィアと企業とは、企業のほうが有名なほどである。

そんなイリスファアミリーだが他のマフィアが襲撃しても全て返り討ちになっている。

それは戦う人員がいらないわけではないから。

少数精鋭とも呼ばれるほどに、怪物どもがイリスの中にはいた。

その中でもトップクラスの戦闘能力を持つのが、イリスの戦闘部隊である『アヤメ』。構成人数はわずか3人。

それでも他のマフィアを牽制するほどに強大な力を持っていた。

その一人が今、ツナ達の目の前にいた。

海棠槍時。

普段一箇所にとどまらない『アヤメ』の一人が日本へ来ていた。

強盗が警察に引き渡されたその頃、ツナとりボーンと槍時は警察が来る前にはコンビニから出ていた。

「君が、噂のボンゴレ10代目ですか。9代目も思い切ったことをしますね」

「俺が鍛えてるから問題ねーぞ」

「確かに、リボーンは信頼できますね。少々荒っぽい気がしますが」

「少々どころじゃないけど・・・」

ツナとりボーン、そして槍時は並んで歩きながら会話をしていた。

「それで、槍時さんってどういう人なの？やっぱマフィア？」

ツナ的にはコンビニ強盗の一件からもうこの人マフィアじゃねとあたりをつけていたが見事に的中。さすがマフィア関係者に囲まれているだけはある。

「ああ、僕はイリスファミリーってところに所属しているんですよ」

「イリス！光努のファミリーじゃん」

「光努？」

「あれ？知らないの？」

イリスファミリー、という名前にはもうツナは驚かなくなった

けどイリスに所属しているのにボスの光努を知らないというのはツナは不思議がった。ボスの知らない部下とかいるのだろうか、と。

だけどツナはそもそもイリスというマフィアについてあまり詳しくない。

これまでボスがいなかったマフィアというと有名だが今までマフィアとかかわらなかったのだからそこは無理もない。リボーンに軽く説明されてツナも改めてイリスというマフィアの特異性に驚いた。

槍時が知らなかったのも、ボスが新しく決まったとただ知らされてなかったというだけである。実はこの『アヤメ』というイリスの戦闘部隊、携帯端末を持っていないのである。理由は様々だが、メンバーの全員が「別になくてもいい」と言ったのである。彼らにしてみれば通信手段などいくらでもあるのだから携帯などなくても問題ないと考えたのであった。灯夜達からしてみれば非常時に連絡が取れないから逆に迷惑と考えたが、非常時には大抵向こうから来るからまあいいかという結論に至った。

「イリスって変わってるんだね」

「はは、まあ否定はしませんね」

「それで、おめーがこんなところにいるってことは何かあったのか？」

リボーンはじつと探るような視線を槍時に向けた。

数少ないイリスの戦闘部門が動くということは、マフィア方面で何か動きがあった証。しかも日本に来るといふのだからリボーンは槍時の用事が気になった。

「いえ、ただ寄っただけですよ。用事のついでに」

何もないとは隠さない。でも口にはしなないとも言っている。リボーンは「そうか」と言つてこれ以上の追求をやめた。

「けどボンゴレ10代目とは大変ですね。それにリボーンの指導は結構大変ではないのですか？」

「えっ!」

ツナは槍時の思つても見ない言葉に思わず涙腺が緩んだ。

今までリボーンのでたらめな修行や過剰なお仕置き、今まで周りにいた人間で山本は遊びだと思つて楽しみ、獄寺はツナを10代目にしようかと奮起し、ビアンキやランボ、イーピンなど元々ツナを仕留めに来た殺し屋。ツナに同情する余地なし。ツナの母親は山本並なので楽しそうねという感覚。

つまり、ツナの指導（もしくは虐待？）に疑問を抱く人間がいなかった。

が、今ツナは「大変では？」と言われた。つまり、

「この人めっちゃいい人だー!!」

槍時の発言にツナは思い切り感動した。

（正直マフィアだから緑な人じゃないと思っていただけ、この人良い人だ！）

「辛い修行なんて、甘いこと俺がするわけねーじゃねーか」

「あはは、まあそれもそうですけど」

「おまえ辛いつてわかっててやってるのか!？」

リボーンの指導はスパルタ指導なのでそこはまあ当然っちゃ当然である。

「あはは、まあ綱吉君も頑張ってくださいね。あまり無理のしないように」

「あれ？同情してくれてる？なんだか目から涙が出てきたよ。俺感動しちゃって・・・」

あまりにも良い人な槍時にツナはまたしても感動した。

「けど、新しいボスですか。早く会ってみたいですね。どんな人ですか？」

「えっと、髪が白くっていつも楽しそうに笑ってる、ちょうどあんな感じの」

ツナが指を指した先にいたのは白い髪をした少年、光努。手に紙袋を持っており、美味しそうに鯛焼きを頬張っていた。光努の隣には光努よりも小さく、黒い髪をして光努と同じように鯛焼きを頬張っているコルの姿があった。

「光努！」

「はむ、ん？ツナ、それにリボンと・・・誰？」

「あ、そーじ」

光努は槍時を見て頭に「？」を浮かべたけどコルの方は槍時の名前を口にした。

「やあコル。久しぶりですね」

タン！

コルが跳躍をし、空中で一回転。そして槍時の背中にくつついた。

「久しぶり〜」

「元気そうですね」

「ツナの知り合い？」

「え？ いや、どっちかって言うとならぬ知り合いじゃ」

「？ 俺の知り合いじゃないけど」

「君が、白神光努君？」

鯛焼きを食べている光努に槍時が声をかけた。

「えっと・・・どちら様？」

「初めまして、イリス『アヤメ』所属の海棠槍時。よろしく」

「『アヤメ』の！ しかも海棠って・・・」

光努は記憶を探った。

『昔まだ捕まる前の話ですが、犬が出かけに『アヤメ』の一人と会ったことがあるそうなの』

んですよ、偶然にも』

『……あのときの犬は目も当てられない有様でしたね。その日からしばらくト
ラウマになってましたし……』

『喧嘩を挑んだらしいのですが、ボコボコの返り討ちにあったそうです』
『名を、海棠というそうですよ』

そして骸との精神世界での会話を思い出した。

「犬をフルボッコにしたやつだ」

「「は?」」

予想外の光努の返答に思わず全員ポカンとしてしまった。

「くく、あははは。ああ、あの時ですか、あははは」

「え？笑い事？」

骸が言っていた犬の話が槍時にしたら、おかしそうに笑い始めた。

「いやあ、まさかここでその話を聞くとは思いませんでしたよ」

本当に、心底おかしそうに笑う槍時はひとしきり笑ったら「ふう」と息を吐いて笑うのを止めた。

「それで犬をボコボコにしたんだって？」

「いや、勘違いですよ。どうやら犬君はその骸君にはちゃんと説明をしていないみたいですね」

「とうとうと？」

「実は……」

数年前。

骸達グインディチエが復讐者でなくマフィアが収監されている牢獄に入る前の話。

その時骸が拠点としていたとある町の中で。

犬は手に持ったリングゴを食べながら歩いていいたとき、その時その場所には人が多く、露店が多く出ている活気があり、荷物を持った人も多く歩いたり馬車に乗せて移動したりといろんな人がいた。

犬が歩いていると前の方から歩いてきたのは槍時。この時、別の場所に行く途中でこの街を通過する最中だった。

二人の距離が縮まって数メートルとなったとき、偶然が起こった。

果物屋でバナナを食べていた男が食べ終わってバナナの皮を後ろに放った。

そしてナイスタイミングで犬がその上に足を乗せた。

その後の展開は予想通り。転びはしなかったけど犬は前のめりにつんのめってしまい、片足ケンケンという風になり前にいた槍時とぶつかった。

ドン！

「おっと」

「おわっ」

ぶつかった拍子に、犬は食べかけのリングゴを落としコロコロと転がった。

槍時は思わず後ろに一步下がった。

ぐしやり。

「あ……」

槍時の一步下がった足がちょうどよく転がり込んできた犬のりんごを潰してしまった。ちょうどかじりかけの部分に足を乗せたので槍時は転がることなく潰してしまっ

た。「あー！俺のりんごー！てめー何すんだびよん!!名を名乗れびよん！」

「え？海棠ですけど、僕のせいですか？どっちかという君の不注意のような」

「海棠？この野郎！食物の恨みは怖いびよん！」

犬は口に入れたかと思うと、風貌を少し変えて軽快な動きで槍時に飛びかかった。人間離れた瞬間発力に、周りは驚いてしまったが槍時は、

ひよい。軽く躲して飛び上がった足を自分の足で引つ掛けて犬の足を上に持ち上げようにした。バランスを崩した犬の背中をとんと押しした。

「わわわわ！」

犬は地面をゴロゴロと転がり、露店に突っ込んだ。

ドガシャアアン!!

金物屋だった店のフライパンに埋もれてしまった。

ガシヤ。

フライパンの中から犬が出てきて当たりが悪かったのか少しふらつとしている。

「……こんにゃろ〜」

ガタリ。

犬がたつた表紙で露店の棚が外れた。その上には大量の鍋が。

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン!

「……………」

槍時と周りの人は犬の頭に大量の鍋が落ちていくのを唾然として見ていた。

犬は鍋とフライパンに埋もれてあちこち打たれながら目を回してしまった。

「えっと、とりあえずサルベージしてつと……後はここに寝かせて」

槍時は気絶した犬を引つ張り出して近くのベンチに置いた。そして近くの露店で

買ってきたリングゴを犬の体の上に置いてその場をあとにしたのであった。

その後、犬はフラフラの状態で大量の鍋をくらったので実際記憶が曖昧だったそうで、槍時にポコポコにされたと思つてしばらくトラウマになったそうだ。そしてバナナがしばらく嫌いになったとかなんとか。

「だっはっははは！犬だっせえ！今度会ったら笑ってやろ！」

あまりの犬の自業自得っぷりに光努とコルとリボーンは笑ってツナは苦笑いするしかなかった。結局全部偶然起こったことだが犬が少々間抜けすぎた。あまりにも間抜けすぎて逆に不憫に思えてくるのだった。

「けどイリスにボスがいたとは驚きですね。まあ最近戻ってませんでしたししょうがないですね」

「ああ、ボスの白神光努だ。よろしくな、槍時」

「ええ、よろしく」

『また来ますよ』

「つーわけで連れてきた」

「久しぶりですね、灯夜さん」

「・・・槍時か。お前の荷物が家に届いてたぞ」

そう言つて取り出したのは少し前に届いた上等そうな大きめのケース。

「流石イリスの宅配業者。時間に正確でしたね」

灯夜から受け取つて問題がないか確かめる。

「やっほーい！そーじー！」

玄関から入つてきた槍時に廊下の向こうからリルが飛んできて飛びかかつてきた。

「久しぶりですねリル。はい、お土産のマンゴスチンですよ」

「わーい！やっほーい！」

どこからか取り出したのは黒っぽい果実のマンゴスチン。

見た目は黒っぽいが中の実は真っ白で結構うまい。

「あれ？ 槍時じゃん。珍しいな」

部屋から出てきたルイが槍時を見て少し驚いていた。

「いや、こっちのセリフですよ。ルイがここに居るとは思いませんでしたよ……」

逆に槍時の方は割と驚いているみたい。

まあルイのいつもがいつもだけにしようがないけど。

「ああそうだ。灯夜さんこれ」

懐から取り出した封筒を灯夜に渡した。

「ふむ、確かに受け取った」

そう言つて灯夜の方ももらった封筒をすぐに懐にしまった。

「灯夜、それなんだ？」

「ん？ 重要な書類だ」

「重要？ 見せて」

「まあ順序よく、ということでもた今度な」

そのまま奥の部屋に入つていった。

「けどボスになるなんて、もの好きなんですね」

「そうか？ ボス面白そうじゃね？」

「イリスといえは社長も兼任するから大変ではないですか？」

普段は灯夜がPC一つで仕事ができるようにしているので光努はあまりあっちこっち行かずに仕事をしている。まあそれでもやるのがいろいろとあるので定期的な世界中を飛び回る。学校の合間を縫って色々としていたのであった。学校にいるときでも普通にいろいろとしているのだが……。

「仕事というのは割と面白いぞ」

「ちなみに最近した少し大きい仕事は何ですか？」

「とあるマフィアのところに一人で出向いて交渉しにいったら攻撃してきたので全員潰して有利に取引を勧めた」

「……随分とまあ妙な仕事をしますね……」

ちなみに、この仕事をするときに、灯夜の方で取引先のマフィアが割と好戦的で光努一人で出向けば絶対に取引を有利にしようと光努を攻撃してくると予想して光努を送ったので、正当防衛の攻撃で有利に取引を勧めたという計画的なことだった。

灯夜的に、ボスとなった光努の戦闘能力が高かったのも幸いとしたのでこんな仕事もたまにやるのである。まあ光努からしたらかなり不本意なだけだね。

「ほら、向こうが暴力的に交渉しようとしてくるなら逆に叩きのめせばこっちがさらに有利に進められるわけ、こんなにいい話ってないと思うんだ」

（それはお前だからできることだろうが！）

と、寝転がっていたルイは思ったが面倒だったので口には出さなかった。

「ねえそーじく。パパはー?」

「は?」

唐突にリルが言った言葉に光努は珍しくポカンとしてしまった。

ていうか今のセリフは……。

「クルドさん?今は確かアメリカの方にいるんじゃないでしょうかね」

「一緒じゃなかったの?」

「基本的に僕らは別々に仕事をしていますからね。皆でする時もありますけど」

「なあ槍時。一応聞くがそのクルドって……」

「クルドさん?『アヤメ』のリーダーでリルとコルの父上のことですよ」

「……リルとコルって両親いたんだな」

まあ両親がいるかどうかわからない人間が多すぎるからそれかもしれない。ツナ
の家には何者かもわからない子供だっただけでたくさんいるし。

しかも『アヤメ』のリーダーときた。

「クルドねえ……それであともう一人の『アヤメ』ってどこにいるの?」

「確か……アフリカとかでしょうか」

「ワールドワイドな部隊だな。ていうかなんで三人しかいないの?もつと増やせば?」

「まあ理由としては、三人で事足りるからですかね。あまり多すぎても面倒ですしね」
「少数過ぎるのめどうかと思うけど・・・」

「まあイリスは企業ですから、そんなに戦わなくてもいいのですよ。そこまで強い組織が攻めてくるわけでもありませんしね」

確かに、と光努も思う。

実際普通に攻めてきたのは光努がイリスの本部にいたときに来たカルカツファミリーくらい（他にも暗殺者とかもいたけど気づかず撃退した）でそれ以降は普通に取引にくるマフィアとか企業の人とかしか来ない。というかこれが普通で基本的に攻めて来るのは無謀かバカのどちらかである。

「まあ新しくボスもできたし大丈夫そうですね。こちらも期待してるんですよ、光努」
「ま、期待には答えるつもり。ほんと来いや」

「フフ、他の二人にも教えてあげましょうかね」

そう言つて手をパチンと鳴らすと、開け放たれていた窓から鳥が飛んで入ってきて槍時の肩に二匹停まった。

「キュイ」

「ジャグ、ルグ。よしよし、これ届けてくださいね」

頭部分が黒く、嘴と足がオレンジっぽい体が白と灰色の鳥。二匹の足に手紙を巻きつ

けると、二匹は入ってきた窓から出て行って空高く飛んでいった。

「あれは、アジサシ。確かめっちゃ飛ぶ距離の長い鳥だったな」

「槍時の鳥なの。ジャグとルグだよ」

「ちなみにジャグがお兄さんでルグが弟なのですよ」

「いや、どっちがどっちかわかないけど・・・」

さすがの光努も初対面の鳥のどっちが兄でどっちが弟か判別するのは不可能であった。

「中々楽しかったですよ光努。そろそろ僕は行きますね」

そう言って肩に大きいケースを背負って玄関にいるのは槍時。

夕食は食べていったけどまだ用事があるそうなのでそろそろ出るそうだ。

ちなみに、あのケースの中身は何か聞いたけどまた今度と言われてしまった。

「槍時、どれくらい日本にいるんだ？」

「そうですね、もうしばらくは。機会が会ったらまた顔を出しますよ」

「じゃーねー」

「またねー」

「気をつけてくださいね」

「また来いよー」

光努を含めた皆に見送られ、槍時は夜の闇の中、黒道家をあとにするのであった。

コツコツ。

真つ暗な夜、街灯の灯りしか光源のない道路を歩く足音が響く。

「いやはや、新しいボスというのもいいですね。灯夜さんはこれで正式な副社長ってところでしょうか」

海棠槍時は気分よく、先ほど会っていた新しい自分のボスのことを思い浮かべながら自然と笑みを浮かべる。少しズレ落ちた後ろの荷物を背負い直しながら、目的地のホテルの中に入る。

数階建てもある大きいホテル。光り輝く高級感の溢れる場所だった。

ガシャン。

「！」

入った瞬間、入口の扉がしまった。そして上から防護シャツターが降りてきて完全に入口を塞いだ。よく見たら周りの窓も全て閉まり始め、あつという間にホテルの中は完全な密室となってしまった。

「『アヤメ』の海棠槍時だな」

「あなたは……ルチエルトラファミリーのボス、ヴィンゴ」

ホテルの二階の通路から槍時を見下ろすように現れたのは、一人の男。オールバックの黒髪に黒い髭を蓄え、黒いスーツを来た黒づくめの男。

あまりいい噂を聞かないルチエルトラファミリーのボスである男。

目元にある傷と、その眼光からは威厳が感じられるがあまりよい雰囲気ではない。

「僕はここに別用で来たのですけど、何か用ですか？」

「まさかこんなところに一人でのこのこ来るとはな。所詮は『アヤメ』というのも

噂に過ぎないということか」

「それはどういう」

パチン。

ヴィンゴが指を鳴らすと、あちこちの扉が開き、奥の通路から黒服の男達がぞろぞろと現れた。中には軍人や傭兵のような人物、明らかに下つ端とは思えない程の人物も混じっている。手にはそれぞれ、銃やナイフ、刀に洋剣といった武器を持っていた。

「……これは、どういうことでしょうか？」

「お前を人質にしてイリスから有利に交渉を進める。悪く思うなよ。恨むなら一人で行かせたお前のボスを恨むんだな」

そう言われると槍時はボスと聞いて光努の顔を思い浮かべた。思い浮かべた光努はピースをしながら楽しげに笑っていた。

「ふむ、恨むのは……筋違いですね」

思い出した光努の顔を消して、目の前のマフィアたちを見た。

「やれ、お前ら。人質として生かしておけ」

「オーケー、ボス」

銃を構えた男たちは、一斉に槍時に向かって発射した。

周りからいくつもの弾丸が槍時に降り注ぐ。

奴はその射撃で終わりだと思った。かろうじて生きる程度に重傷を与えるように支してあるから海棠の身柄はもらったと思った。

そう、思ったのに……。

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

ドゴオオ!!

壁に、床に、部下共がめり込まれていく。

弾丸を交わし、剣を交わし、頭を掴んで叩きつけていく。攻撃が単調なのに、まったく部下どもの攻撃が当たらない。

「何をしている！ たった一人だぞ!!」

現役の傭兵団に所属している傭兵共が海棠の前に立ちはだかった。

やはり下っ端どもには任せておけん。あいつらなら……。

「さっきの人達とは格が違うようですね。でも」

カシャンカシャンシャキン!

懐に手を入れて取り出したのは4本の束になっている棒。手を振ると全て自動的に組み合わさり、一本の棒となった。

その先端には刃渡り30センチ程ある漆黒の刃が備わっていた。

つまり槍。

海棠槍時の主武器は槍。

あの槍はありえない程の硬度を誇る海棠槍時の槍、『黒星』。

圧倒的硬度が特徴の仕込み槍。海棠槍時が普段好んで使う武器である。すべてが黒く、その先端についている漆黒の刃が、禍々しく見えた。

「たかだか槍一本！やれ!!」

傭兵たちは剣を持ち、海棠に襲いかかったのだが、

「たかが槍、されど槍・・・ですよ」

ガガガガガガ!!

一瞬、海棠の手と槍が消えたと思ったら、奴の正面にいた傭兵団と部下どもが一瞬吹き飛ばされた。一体何をした!?

ガガガガガガ!!

まるでゴミのように吹き飛ばされていく。

だが！まだ数のはこちらのほうが上！いくらやつでも所詮は人の子。

いつか疲れが生じてくるはず!!

「数が多いですね。では、少しだけ本気でやりましょうかね」

ゾクリ!!

奴の目がこちらを捕らえたとき、私は恐怖した。

手を出してはいけないものに、私は手を出してしまった。

三人しかない『アヤメ』。
やつらは一人一人が怪物だったということだ。

あれが、『アヤメ』の一人！海棠槍時！

気づいたときには、立っているのは私だけだった。

「おやすみなさい、ヴィンゴ。後は、こちらで処理をしておきます」
もう二度と、イリスには逆らわない。

命がいくつあっても足りない。

これでまだ一人だと？イリスは、化物ぞろいだ。

一瞬で迫った海棠槍時を目に、私は意識を手放した。

この日、一つのマフィアが壊滅した。

ヴアリアー編Ⅰ 『襲撃』

『避難は速やかに行きましょう』

暗い夜。

ビルの立ち並ぶ都心の下では夜でも人が多く、営業してる店も多かった。明るい通路、人が賑わう声。そんな声と裏腹に、高く立ち並び、暗いビルの屋上にて、激しい金属音が響いていた。

キン！キン！キン！

金属と金属のぶつかる激しい音。

二人の人間が争っていた。

一人は少年とも言えるまだ中学性程の子供。持ち手のついたブーメラン状の武器を持ち、常人離れた身体能力を発揮し、その額には青い死ぬ気の炎が灯っていた。

もう一人は大人の男性。男にしては長い髪、全身黒づくめの服装に左手には両刃の剣が備え付けてあった。

刃物同士がぶつかり合う金属音、壁の破壊される音に爆発音。まさに命懸けの戦いをしている真っ最中だった。

「う」お おい!! てめえなんで日本に来たあ? ゲロつちまわねえと三枚におろすぞお! おらあ!」

「答える必要はない」

黒ずくめの男性の荒っぽい問いかけに、少年は何も答える必要はないと答えた。その答えに、黒ずくめの男は獰猛な笑みを浮かべ、地面を蹴って少年に迫った。

ガキン!!

男の振った剣を、少年は自らのブレードで防いだが、男の剣の威力に押されてビルの屋上から飛ばされた。

咄嗟にビルの屋上の淵を掴み、少年は宙にぶら下がる状態となり、屋上に立つ男は少年を見下ろした。

「う」お おい! よええぞで
ヒラリ。

ぶら下がる少年の懐から一枚の紙が落ちる。

(「こんなところで、負けるわけには!」)

咄嗟に紙を掴む少年。それは紙ではなく一枚の写真。

そこに写っていたのは小さな子供。母親に肩車されている小学生程の子供の写真。その顔はまだまだ幼いが、確かに沢田綱吉のものだった。

「えっと、バニラとチョコとイチゴくださいーい」

「へいおまち。嬢ちゃん、落とさないように気をつけな」

「わーい！」

リルはアイスの屋台で三段重ねのアイスを買ってこちらに走ってきた。

「見てみてー！光努！」

「おー、うまそうだな。こっちはたこ焼きだ。いいだろう」

「冷たいものと熱いものは合わないよ」

「そりやお腹壊すからな」

リルと一緒にデパートの3階にあるフードコートからそれぞれたこ焼きとアイスを

買いつつ、窓際の席に座って食べ始める。

今日は日曜なのでリルと一緒に買い物にやってきた。

仕事？もちろん休み。だって世の中日曜だし、最近の会社って土日祝日休みのほうが多いみたいだからな。まあそうでなくても普通に平日だって休みにするけどな。もちろん学校には行くけど。

二人とも食べ終わると一息ついて次にどこに行こうかと話す。

「で、次どこ行きたい？」

「んー、ケーキ食べたい！」

「さっきアイス食べたばかりだよ」

「ケーキって甘いんだよ？」

「いや、知ってるけど」

リルは甘いものが好きみたい。こちら辺は子供らしいなと思ったけど逆にコルは辛いのがお好みときた。なんで双子でこうも逆の味覚してるのだろうか。まあそれもさすがは双子らしく共通点が多い。

「ケーキ買ってくるー！」

と言つていつの間にかリルがいなくなってるけど、まあ食い過ぎないように注意しないとな。じゃあ俺はラーメンでも買ってくるか。さっきやっていた30分以内に間食

すれば無料になる「白乾児麵」バイカルメン「ちなみにこれは中国人の店主が自分の好きな中国酒のバイカル白乾児と世界一深い湖のバイカル湖とをかけてつけた名前みたい。

なかなか洒落の聞いた名前だ。だが、間食して見せよう！

「親父ー！白乾児麵一丁！」

「ふっ、まさか俺のこの麵を頼むものが来るとはな。いいだろう、お前に世界の壁を教え
てやる！」

そして出されたのは巨大なラーメン。ゴミバケツのような巨大な器に入った麵。汁と麵と具が大量に入っている、尋常じゃない量が。

「これを食えるか、兄ちゃん」

「ふ、俺も甘く見られたな。いいぜ、やってやるぜ！」

箸を取り、俺は麵を取って食べ始めた！

（光努頑張つて。なんかよく分からない展開だけど・・・）

隣でいつの間にか戻っていたリルが、光努と店主の妙に暑い展開に頭にハテナを浮かべていたけど、ショートケーキをほおぼって光努を応援していた。

ドーンドーン。

「ん？光努、下が騒がしくない？」

「ズズズ、どうした？騒がしいって？そりやデパートだからな」

「そうじゃなくなつて！なんかすごい音が」

ドゴーン！ドゴーン！

さつきより明らかに大きい爆発音。

「パクパクパク。緊急事態か、下で何が起こつてるんだ？」

窓から下を見てみると、下の方の建物が多少崩壊している。

おおお、意外と切迫しているみたいだな。

「光努ー！早くー！」

「ゴクゴクゴク、ぷはー。ちよつと待つてる。親父、ごつそさん」

ラーメンの器を置いてリルと一緒にラーメン屋をあとにした。

「まさか俺の麺をわずか10分で間食するとはな。ナイスな食いつぶりだ兄ちゃん」

後ろからそんなつぶやき声が聞こえた気がした。

ドゴォーン！！ドガァーン！！

下で爆発が起こったことにより、デパート内で買い物したり食事したりしていた人が大量に外へ出ようと走っている。というかもうほとんどいないな。

リルに聞いたところラーメンを食べている間に行ってしまったみたい。いや別にラーメン食べるのに夢中だったわけじゃないんだからそれくらい知ってるよ。

窓のから外を見てみると、下の方から煙が上がっている。

その近く、地上で何人かの人間が残っていた。

どっかで見たことのあるような制服、というかあれ並中の制服じゃね？

「光努、あれツナ達だよ」

「確かに、でも知らない奴もいるな。二人ほど」

眼下に見える戦上では二人の人間が戦っていた。

一人は黒ずくめで長髪、そして左手に剣を備え付けている男。今はこちらのほうが優勢みたい、というか圧倒的。

もう一人はツナと同じくらいの少年。ブーメラン型の武器を持って応戦中。額には青い死ぬ気の炎。死ぬ気の炎？

つーことはボンゴレ関係者？ 確か死ぬ気の炎ってボンゴレに伝わる炎って前に聞いた気がするしな。

ということは何ずくめは敵か。ツナも巻き込まれてるみたいだし大変だな。

というか武と隼人も倒れてるし。

「あ、スクアアロー」

「リル知り合い？ どっち？」

「あの黒い方。前に少し会ったことあるよ」

剣を使ってるほうか。同じ剣士つながりで知ってるのか、リルが知ってるとは意外だ

な。

「スクアールってどこ所属か知ってるか？」

「ボンゴレの人だって。パパが言ってた」

「ボンゴレ？」

ボンゴレ、ボンゴレ。ていうことはボンゴレ同士で戦ってるのか。

まあまだあの少年の方がボンゴレと決まったわけではないのだけど。

「ま、ピンチみたいだし、行くぞリル」

「おー！」

「はあー！」

ガシヤアン!!

デパートの窓を粉碎して、背中にリルを貼り付けて飛び降りた。

「やつほおおお！」

「復活!!^{リ・ホーン}ロン毛、死ぬ気でお前を倒す!!」

時間は少し前、ツナ達は商店街で楽しく遊んでいたが、突如起こった爆発から飛び出てきたのはロン毛ことスクアアロと、少年バジル。二人は戦い、周りの人間は逃げ出した。スクアアロの攻撃によりツナの所まで吹き飛ばされたバジルはツナを見てバジルはツナのことを知っているみたいだったが、スクアアロがそのことを知り全員を標的にみなした。

応戦した山本と獄寺は、スクアアロの圧倒的な力で倒された。

かろうじて戦っていたバジルも、ついに倒れてしまった。

スクアアロは止めを刺そうとしたその時、「X」のエンブレムをつけた死ぬ気のツナに腕を掴まれた。

「うう おお おい……なんてこった……」

スクアアロはツナをみて、心底驚いたような表情を見せた。

「死ぬ気の炎に……このグローブのエンブレム。まさかお前、噂に聞いた日本の……
そうか……お前と接触するために……」

驚いていた表情をしていたが、口角をあげ、獰猛な笑みを浮かべた。

「ますます貴様ら、何を企んでんだあ!?!死んでも吐いてもらおうぞおオラア!!」

「うおおおお!!」

ガツ!!

「!?」

死ぬ気モードのツナの拳は、スクアーロにあっさりを受け止められてしまった。

「う”お”おい、よええぞ」

ガキン!

スクアーロの振った剣を、かろうじてツナはグローブの甲のエンブレムで受け止めたので無傷で澄んだが、あまりの威力に吹き飛ばされてしまった。

リボーン的には普通の死ぬ気弾による死ぬ気モードよりも、小言弾を使った超^{ハイパー}死ぬ気モードにしたいところだが、今のツナだとこのモードの後は2週間筋肉痛になる。今後何が起ころのかわからない状態では使えないということだろう。

あっさりと倒され、死ぬ気状態も消えてしまったツナに剣に仕込まれた爆薬を飛ばすスクアーロ。寸前でバジルの投げたブーメランによって爆発を阻まれ、周りは煙で包まれた。

そのスキにバジルはツナを連れ出して、物陰へと避難した。

「君、大丈夫なの?」

「拙者はバジルといえます。親方様に頼まれて沢田殿にあるものを届けに来たのです」

バジルの時代錯誤な物言いにツナは戸惑ったが、バジルが取り出して見せたものに頭にハテナを浮かべた。

「何？これ・・・」

バジルが見せたのは箱。中に収まっているのは、歪な形状をしている7つの指輪だった。

「何かはリボーンさんが知っています」

「え！君、リボーン知ってるの？」

「リボーンさんはわけあって戦えません。これを持って逃げてください」

「ちよ、急にそんなこと言われても」

「う”お”おい！」

「!!」

「そおいうことかあ。こいつは見逃せねえ、一大事じゃねーかあ。貴様らをかっさばい
てから、そいつは持ち帰らねえとなあ」

すでにバジルはボロボロの状態。箱を持って震えるツナとそれを見つめているリ
ボーン。その時、

「「やつほおおお！」」

空から声が聞こえた。

『落下・再会・父親』

「やつほおおお！」

「なんだあー！」

「あ、あれは！」

「光努!!」

空中より飛び出してきたのは、白い髪はバタバタとなびかせ楽しそうに笑みを浮かべた少年、光努。

「とりあえずー、悪っぽい顔したお前ー！」

「ああん？」

「喰ーらーえー！」

ギュン！ドゴオオ!!

空中で回転をして、かかと落とすをスクアークに叩き込んだ。

重力と回転の影響で、威力が増加された光努のかかと落とすは、容易に地面を砕いた。

スクアーロは咄嗟に跳びのいて光努の攻撃を躲した。光努が砕いた地面の破片が襲いかかったが、全て剣で防いだ。

「今度はなんなんだあ！う」お”おい!!」

スクアーロが剣を向けた先にいるのは、土埃から抜けて出てきた光努。背中にリルを貼り付けたまま楽しげに笑っている。

「光努！ていうかどこから降ってきたの!？」

「ツナ、それとそこの知らない少年。離れてろ、危ないぞ」

「う”お”おい!!てめえも俺に楯突くようなら、かつさばくぞお!!」
突き進みながら光努へと剣を振り下ろす。

光努は剣を躲し蹴りを放つがスクアーロも避け、剣戟を浴びせる。

キーン！

「う”お”おい！貴様、どこからその刀取り出したあ」

「ちようど後ろにあつてな」

光努が取り出した小太刀とスクアーロの剣が競り合っていた。

ちなみに、光度の取り出した小太刀はもちろん背中のリルに借りた。

「何してんのスクアーロ」

「何い!？」

競り合っていたスクアーロは後ろに跳んで距離をとってから、肩から顔を出したりリルを見た。

「リルだとお！う”お” おい！てめえ、なんでこんなところにいやがる」

「お買物だよー。スクアーロこんなところで何してんの？仕事？こんなに明るいのに？」

「てめえには関係ねえ。邪魔するならそのガキもろとも消し去るぞお」

「無理ー、光努の方が強いもん」

「う”お” おい！言ってくれるじゃねえか！」

「おい二人とも。俺を間に挟んで会話するな。あとリル、挑発とかするなよ」

「え、してないけど？」

「・・・..そうか」

自覚のないリルにやれやれといった表情をする光努。

険悪な雰囲気（スクアーロだけだが）となった二人の間で火花がちろうとしたその時、またしても声がかかった。

「相変わらずだな。^{スベルヒ} S ・スクアーロ」

「!？」

全員で声が出した方へ向くとそこにいたのは3人の男。

二人の部下を引き連れ、その男は、長めの金色の髪に首から左腕にかけてのタトゥー。そして手に黒い鞭を持った青年、デイーノ。

「子供相手にムキになって、恥ずかしくねえのか？」

「デイ、デイーノさん！」

「跳ね馬だど!?!」

「その趣味の悪い遊びをやめねーっていうんなら、俺が相手になるぜ」

デイーノは鋭い眼光をスクアアロへと向けた。

（日本のこのガキ、こんなコネをもつてやがるのか。跳ね馬デイーノ、こいつを相手にするとなると、一筋縄じゃいかねーか……。つか、下手にリルに手出したら後々面倒だしな）

「う」お、おい、跳ね馬。お前をここでぶつ殺すのも悪くない。だが同盟ファミリーとやりあったとなると、上がうるせえ。

今日のところは大人しく……。帰るわきやねえぞお!!」

スクアアロはそばにいたツナの頭を掴み、持ち上げた。

ちなみに位置的にツナ達と光努達がスクアアロを挟むようにいて、その横からデイーノ達が来たようになってる。

「手を離せ!!」

デイーノは手の鞭を振るったが、届く前にスクアア口の剣から飛び出た爆薬が爆発し、あたりを再び煙で包んだ。

すぐにデイーノはツナ達を発見し無事を確認したが横から声がきこた。

「貴様に免じてこいつらの命は預けといてやる。だがこいつはいただいていくぜえ、う”お”おい！」

いつの間にか、ツナの持っていた箱が、スクアア口の手の中にあつた。

「ああつ！ボンゴレリングが!!」

「ボンゴレリング・・・？」

「じゃあな」

目的を達したのか、すぐにスクアア口はその場から消えてしまった。

バジルは追いかけてしようとしたが、あまりにもダメージが溜まりすぎていたのか立ち上がった瞬間その場に倒れてしまった。

「深追いは禁物だぞ」

「リポーン！なんで今頃出てくるんだよ！どーして助けてくれなかつたんだ！」

「俺は奴に攻撃しちやいけねーことになってんだ」

「な、何で？」

「奴もボンゴレファミリーだからな」

「え！なんだって!?俺ボンゴレの人に殺されかけたってこと!?どうゆうことだよ!?!」

「あいつ、本当にボンゴレだったんだ」

「でしょ?私の言ったとおりだね」

ツナとリボーンの会話に入ってきたのは、光努とリル。

すでに背中から降りたリルは光努の横を歩いている。

「よう、光努、リル。珍しいところで会ったな」

「あれ?デイーノって光努のこと知ってるの?」

デイーノが光努にも声をかけたことに不思議がるが、デイーノは昔を思い出したのか、少し笑いながら答えた。

「少し前にな。それより、こいつを病院へ運ぶぞ。話はあとだ」

警察も駆けつけ始めたことにより、ツナ達はその場を後にした。

「こいつ、大丈夫か？」

「よく鍛えられてる、命に別状は無いな」

すでに廃墟となった病院で、ディーノ達によるバジルの手当は無事終わった。

廃病院といつても必要な機材とかはすでにディーノが手配したみたいだから問題なく治療が行われた。

武と隼人はあのあとリボンが家に返した。

正直こてんぱんにやられてあの二人も気が気じゃないはずだが、リボンにも何か考えがあつてのことみたいだからこはそつとしておくか。

とりあえず少年、バジルはこちらの味方ということらしいが、ボンゴレ側であるスクアードに狙われたことによりツナは困惑している。

リボン達の話だと、あの箱に入っていたリングの名はボンゴレリング。

正式名称をハーフボンゴレリングというボンゴレの家宝みたいだ。

リボン曰く、長い歴史の中でそのリングのためにどれだけの血が流れたのかも分からないという程の曰くつききの代物らしい。

やっぱ家宝というだけあつて、いつの時代も奪い合いとかが起こっているみたいだな。

ツナはその話を聞いて怯えていたけど、スクアーロが持っていたとしたとしてほっとした。だが、

「それがな、ツナ……。ここにあるんだ」

「えええ!!」

「!？」

「それって、バジルの持っていた箱と同じものだな」

「中身入ってるの？」

「デイーノが取り出したのはバジルの持っていた箱と同じもの。」

その箱を見たとき、ツナはまたもや怯え、リボーンは珍しく表情には出していないが驚いたように体を一瞬硬直させた。

「な、なんで!だってリングは奪われたはずじゃ……。」

「こつちが本物だ。俺は今日このためにきたんだ。ある人物からこれをお前に渡すように頼まれてな」

バジルは囁いてことか。しかしさつきみた様子だと、バジル本人には偽物ってことは言われてなかったみたいだな。

「えー!また俺に!?!何で!?!そんな恐ろしいリング!!」

「そりゃー、お前がボンゴレの……。」

「ス……ストップ！家に帰って補習の勉強しなきゃ！ガンバロ!!」
「な……」

「おいおいツナ……」

「じゃ、ディーノさんに光努たちもまた!!リボン先行ってるぞ!」

「おい、ツナ……?」

バタン。

ツナがそのまま帰ってしまい、全員唾然としてしまった。

「さっきの話から察するに、そのリングってボンゴレの継承者に渡されるものとかそういう感じか?」

「まあそういうことだ。ツナのやつ、逃げれると思ってるのか?」

やれやれというふうにはディーノがため息をついてるが、まあツナの性格上争いごとには極力関わりたくないみたいだからしようがないといえましょうがないし、そろそろ荒事にもなれたらどうだとも思えてくる。

「それにしても光努、驚いたぜ。お前イリスのボスなんだってな」

「あれ?よく知ってるな」

「9代目が言ってたんだ。新しいイリスのボスになったっていう奴のこと。お前の名

前聞いたときは正直驚いたぜ」

「あはは、まあ俺もいきなりだしな」

「お前俺の家にきたとき無所属って言ってなかったか？」

「あの時はまだボスじゃなかったんだよ」

「そういうえばディーノの家に行った時はまだボスじゃなかったんだっけな。」

あの時はアイスを貰いに行っただけな、懐かしいな。

「リボン、あの二人知り合ってたんだね」

「ああ、俺も初めて知ったぞ。リル達は、今日はどうして上から降ってきたんだ？」

「光努とあそこのデパートでお買い物してたの。そしたら下でスクアー口達が戦ってたから下に降り立ってわけだよ」

「しかし、偽物渡すとは。こいつの親方ってのは何考えんだか」

「いや、光努。あの人のことだからこうなることは読んでた。相当きつい決断だったと思うぜ」

「ディーノの知り合いか？その親方様っていうのは」

「まあな。つーかこれ直接ツナに渡せばいいのには。あの人、オレと一緒に来たんだぜ」

「そーか、あいつ・・・来たのか」

「なあ、それでそのあいつって誰のことだ？」

じれったそうに言う二人にもう一度問うと、ディーノはにやりとして答えた。

「バジルの親方はツナの親父、沢田家光だ」

まじっ？

『釣りか、俺も行ききたいな』

「ヴァリアー?」

その夜、黒道邸。あのあとディーノ達と別れ、家に帰って灯夜と話をしている。

「ああ。スクアーロはボンゴレの独立暗殺部隊ヴァリアー所属の男だ。やっぱこの近くに來てたのか」

「知ってたのか灯夜?」

「槍時に聞いてな。ヴァリアーが一人日本に來ていると」

イリスの戦闘部隊『アヤメ』所属の海棠槍時。

少し前に家に來た時に灯夜に封筒を渡してたけど、いろんな情報が入ってたみたいだ。というか知ってたなら教えろよ。そんな物騒なやつら。

「それでスクアーロは何しに來てんだ」

「ああ、ボンゴレリングを奪って帰ったよ」

「ボンゴレリングを？」

ボンゴレリングとは、ボンゴレを継ぐものに受け継がれるというボンゴレの家宝。

つまり、10代目候補であるツナにいずれ渡されるはずらしいのだが、

「まさかヴァリアーが奪うとは。ボンゴレの方も大変みたいだな」

「まあ偽物みたいだから安心じゃないか？今のところはだけど」

「そうだな。その偽物がどれほどのものかは知らないが、すぐにでもヴァリアー本

隊が日本へと来るかもな」

いよいよと物騒な話になってきたな……。組織が大きくなると内部争いとか大変みたいだな。その点うちの場合はそもそも戦闘できる奴らが少ないし、企業が乗っ取られないように色々と細工してあるからとくに問題ないけどな。内部の企業、もしくは他企業が何かしてきたら……。みなさんのご想像にお任せしよう。というか他を寄せ付けないコンセプトでやりますからね。

ん？灯夜が何やら思案顔をしているが何考えてるんだ？

「そういえばまだヴァリアーには挨拶してなかったな」

「はっ。」

何かとんでもないこと言い始めたんだけど……。

「もしヴァリアー来たたらお前挨拶くらいしとけよ」

「今言うことかよ、それ．．．」

「暗殺部隊って殺し屋だろ。あんなスクアーロみたいな戦闘狂がごろごろと来たら面倒だな。いや、でも標的はツナみたいだしいいか？」

冷たいようだが、これも組織を守るため。許してくれツナ。

まあ個人的には興味大だからもちろん行くけどな。組織？いやいやただの社長のプライベートのことだから問題なし。ていうかよく考えたらイリスって同盟ファミリイがないんだよな。

こちらから他のマフィアに好きに干渉していいという特権（勝手な解釈です。被虐に考えたら普通は孤立していると狙われやすい）。

「ま、明日になったら色々わかるか」

「光努終わったー！」

バンと襖を開けて入ってきたリルが飛び込んできたのを、リルの入ってきた部屋からロープがリルに伸びてきた。

なんの、とリルがロープを一瞬で切り裂いたが、今度は向こうから硬質のロープが飛んできてリルをぐるぐるに巻いて元の部屋にリルを引っ張って言って襖がしまった。

「コーラー！離してー！」

「はいはい、話の邪魔しちやダメだよ」

「ルーイー！」

「会話くらい後で聞かせてやるから、マンゴスチン食うか？」

「食べる！」

襖の向こうからそんな会話が聞こえてきたが、まあ楽しそうだからいいかな。……いや待てルーイー！お前今何て言った！

『ああ、ボンゴレリングを奪って帰ったよ』

あれ、おかしいな。今襖の向こうで俺の声が出たような気がしたのだが。気のせいだよな？もちろん気のせいだよな？

『ボンゴレリングを？』

灯夜の声が聞こえた気がするぞ！あれ、俺のそばにいるのは誰だっけな。

灯夜だよ！俺の対面に座って茶をすすってるのは灯夜だよ！襖の向こうから聞こえるはずないだろうが！

「おい灯夜！」

「ん・・まあ、いつものことじゃないか？」

「プライバシーの侵害だろ！」

「大丈夫。重要そうな話にしか作動しないからプライバシーは侵害されない」

「もつとんでもないものが侵害されてるじゃないか」

『そういえばまだヴァリアーには挨拶してなかったな』

「ルイイイイ!!」

襖を吹き飛ばして向こうの部屋に踏み込んだ。

「おい光努。ボンゴレ大変なことになってるみたいだな」

「それよりも今もつと大変なことが目の前にある気がするんじゃないか？」

「確かに、ボンゴレリング何て家宝が出てくるとはな。大丈夫かな」

「いやそれもだけどさ、お前今の声どっから出したんだよ！盗聴か？お前

絶対盗聴してただらろ！」

「いや、会話を少し録音したのを再生しただけだ」

「同じだああ!!」

空が薄暗い。

深夜というには明るく、朝というにはまだ暗い時間帯。

どこかの川。

気温は肌寒く、川の水は冷たい。

そんな人のいなさそうな時間帯に一人の人間が川のそばに座っていた。

体格の良い男性。下は作業着を着て、上半身は白いシャツのみ。

座っている男の手には一本の釣竿。隣にはバケツが置いてあり、中には水と数匹の魚が入っていた。

「♪♪♪」

釣竿を持ち、鼻歌を歌いながら釣りを楽しんでいたのは、沢田家光。ツナの父親である。なんでこんなところでこんな時間に釣りをしているのかと言うと、朝から息子に釣り行こうぜと声をかけたけど断られたので一人で朝ごはんを釣りに来たのである。ちなみに朝といっても今の時間帯は4時くらいなのでツナが断つたのも当然といえば当然である。学校だつて普通にあるし。

そんな家光がしばらく釣りをしていると、

「釣れるか？」

「まあまあだなあ。けどこれ食えるのか」

「ちゃんとリリースしろよ」

後ろから声が聞こえた。家光はその声に従ってバケツを手に持った。
ポチャポチャ。

バケツをひっくり返して、取った魚を全て川に返した。

川に入った魚は元気よく泳いですぐにどこかへ行ってしまった。

「魚は無邪気だな。俺ももつと楽に生きたいな」

「サラリーマンにでも転職するのかわ？」

「ははは、冗談きついで。灯夜」

家光の後ろにいたのは、黒いスーツを着て立っている灯夜。

そのままスタスタと家光のとなりまで歩いてきた。

「まさかお前が日本に来るとは思わなかったな」

「おいおい、そりや俺のセリフだぜ？」

「しかもこんなところで釣りをしているとはな」

「いや、息子誘ったんだけど断られてよ」

「普通はこんな朝早くに釣りする奴はいないと思うが」

「だよな」

ガハハと笑いながら釣竿の糸を手繰り寄せて竿に巻きつける。

よっこいしょ、と言いながらバケツを持ち、竿を肩に担いで立ち上がる。

「随分と、面倒事を持ち込んだな」

「……まあな」

そう答える家光の眼光は、さつきまでとは違って鋭く、灯夜を見ていた。

「そつちの争いごと、もしかしたら家の奴が少し邪魔でもするかもしれないが、そんな時はよろしく頼むよ」

「お前の所、今誰が来てるんだ？」

「今家にいるのが、リルとコルとルイ、そして光努だな」

「イリスの新ボスだったな。白神光努。面白い子供だつて9代目に聞いたぞ」

にやり、と笑つて光努の話題を持つてくる。

職業柄、多くの情報を入手している家光。まあそれとは別に9代目に普通に聞いた、というより新しくイリスのボスとなった光努はマフィア間で噂になっている。

まだ10代の少年が一マフィアのボスとなった。しかもそのマフィアが、大企業イリスとなればまた驚く。普通のマフィアのボスというだけでもあれなのに、イリスは社長兼任何で割と噂は広まるのは早かった。

「まあな、面白すぎるのも時々問題なんだがな」

「いいじゃないか元気で。うちのツナも見習ってもらいたいもんだよ」

「中々難しいだろう。だが、俺も見てみたいいな、お前の息子」

「俺もだ、お前のところの新しいボス。見てみたいいな」

暫く、お互いの中で静寂が流れたが、ふっと空気が軽くなった気がした。

「ま、光努は今回の騒動には面白がつてるみたいだけど、機会が会ったらすぐに見つかるだろう」

「そうか、楽しみにしてるよ。だがよ、もしかしたらヴァリアー連中何かしでかすかもしれないぜ?」

「・・・なあ家光」

「ん? 灯夜?」

家光は思わず少し驚いてしまった。

横顔だけだが、灯夜には似つかわしくないほどに、微妙に口角を上げて少し、楽しそうに笑ってるように見えた。

「もしそれでヴァリアーに何かあっても、イリスは一切責任取らないからな」

「・・・ふつ、そうか」

ボンゴレ門外顧問、沢田家光。ボンゴレファミリーの実質ナンバー2の男。

灯夜の言葉を聞いて、家光の方も楽しげに笑っていた。

『過保護？』

ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアー。

ボンゴレファミリー最強と謳われる部隊。人間わざでは到底クリアできないようなミッションをいかなる状況でも完璧に遂行する悪魔のような能力の高さを持つ集団であり、周りからは畏怖を込めて「ヴァリアー・クオリティ」と呼ばれているようだ。

今現在、ツナ達が置かれている状況は、後数日したらこのヴァリアーがせめて来るという状態。そのため、ツナとその仲間たちはヴァリアーを迎え撃つために強くなろうとしているところだった。

「広大な草原。気持ちのいいところだな」

俺が立っていたのは一面見渡す限りの草原。

周りをぐるりと見てみると、緑の葉が茂っている木が所々に生えている。

遠くから吹いてくる風が足元の草や葉をさわさわと揺らす音は、静かなこの場所ではとても心地よかった。

さく。

足音がする。

自身は動いていないのにする足音。

後ろの木の影から人の気配を感じながら、懐かしい人物に語りかけた。

「久しぶりだな、骸」

木の影から姿を現したのは、一人の少年。

特徴的な髪型をした黒髪、真っ白なワイシャツと黒いスラックスの簡素な格好。そしてその右目は赤く、瞳の中には「六」の文字が刻まれていた。

「久しぶりですね、光努」

六道骸。

かつて骸一味とツナ達は死闘を繰り広げ、最後はツナの死ぬ気の炎によって浄化された男。今はマフアアアの収監された牢獄を脱獄し、ツナ達に倒されたことにより復讐者ヴァインディチェの牢獄の最下層に収監されている。ならば今の状態はどういうことなのかというが、ここは精神世界。人の精神のみが入り込める世界。

通常、この世界には骸と波長の合う人間のみ入ることができるとは、俺はどういうわけかこの世界にすんなり入って骸と会話ができたのだ。俺は自分だけだ。

もつとも、骸の方から話しかけてくる分にはすんなりとここに入れるのだけれど、自分から精神世界に入るなんて能力はあいにくと持ち合わせていないのだ。

まあやればできないこともないかもしれないけどな。

「現在進行形で拘束されてる奴にいうのもあれだが元気か？」

「クフフ、まあ元気ですかね。そういう君に元気そうじゃないですか」

「まあな」

いつの間にか白い丸テーブルと椅子が草原の上に置かれており、俺たち二人はその机に対面になるように座った。

「なあ骸」

「どうしました？」

「お前、何するつもりだ？」

「・・・何、とはどういうことですか?」

一瞬先ほどの言葉に反応した骸を見逃さず、会話を進める。

「実はそろそろヴァリアーが来るらしいんだ」

「ほう」

「それでツナ達が迎え撃つらしいんだよ」

「それは沢田綱吉も大変なことに巻き込まれましたね」

「・・・お前知ってただろ」

「おや? どうしてそう思いますか?」

にやり、という笑みを浮かべながら骸はからかうような笑みを浮かべる。

「その笑いムカつくな。まあお前が知ってそうなのはなんとなくだけだな」

タイミンが絶妙すぎるといふのが一番の理由。

ヴァリアーの一人、スクアアロがやってきて間もないこの時間。そんな時に骸が話

しかけてきたというタイミング。

言ってしまうえば全て想像と、なんとなく、かなんか引つかかるなく、みたいなものでつまり勘とかなのだが、

「恐ろしい勘ですね。まあ正解なのですが」

「正解なのかよ。で、何? お前牢獄に囚われたままじゃん。どうするんだ? 誰か操るの

か？」

「僕の状態を知ってて言ってるのでしたら驚きですよ。まあそれに近い感じですかね」

「近い？」

「実はそのことで君に話をしにきたのですよ」

？ 骸の話は覚えてこないが、まあ聞かないという選択肢は無視して、話を聞こうじゃないか。わざわざ俺のところに来るくらいだから何かあるのだろう。

「それで、どうしたんだ？」

「じつは——」

ダン！

地面が沈む程踏み込んで、高く高く飛び上がった。

そのまま山なりの大地の上の方に着地、そのまま再び上に向かって飛び上がった。

「高いい！」

「おおー！」

「二人とも、しっかりと捕まってるよー！」

風を切り、強大な脚力は驚くようなスピードを發揮し、山のような場所を突き進んでいた。地を蹴り、木を蹴り、古い廃墟のような建物を蹴って、頂上付近を指すように進み、そして目的の場所で勢いのあるスピードにブレーキを駆けた。

「やったー！アスレチックだー！」

「随分と趣のある建物。まるで廃墟みたい」

「まあ廃墟なんだけどな。けど懐かしいな」

黒曜ランド。

牢屋から脱獄した骸一味が潜伏していた、すでに廃墟となった総合レジヤ―施設。

ツナ達と骸達が戦った場所。俺も戦った場所。ほぼ圧勝したけどな。

けど相変わらずボロボロだ。いつか崩れるんじゃないか？というか一回土砂ぐずれしたみたいだしな。まあそれで施設はほぼ土の中。その上にいる分には全然問題なさそうだ。

「よっしーリアルバイオハザード！行くぞー！」

「よっしやあー！」

「待て待て。そんな戦争ごっこしに来たんじゃないぞ。武器はしまえ」

俺から降りたリルとコルは二人ともどこからか小太刀を取り出す。

廃墟の雰囲気子が子供のには面白いみたいで、楽しそうに武器を構えたけど別にゾンビを倒しに来たわけじゃないからな。言うとき少しつまらなさそうに武器をしまおう。

だがすぐに気を取り直す。

「よし、行くか」

リルとコルを引き連れて、黒曜ランドの中央地帯にある施設、前に黒曜ランド内で骸が基本的に住んでいた建物に入っていった。

崩れている廊下を突き進み、壊れた階段を駆け上がり、人の気配がした一室に入るとそこにいたのは一人の人間。

「……だれ？」

「骸の友達だけど、聞いてるか？」

「……白神……光努？」

およそ中学生くらい少女。

真ん中から分け、後ろを縛って逆立たせている特徴的な髪型（つまり骸と同じ髪型）、黒曜中学の女子制服。すぐとなりには黒曜中の鞆。そしてその右目には、鞆の模様がついた黒い眼帯がしてあった。

少女の名はクローム鞆。

俺が骸から引き受けた頼まれごとの正体。

骸の器となる少女。彼女の存在は骸によって成り立ち、骸は彼女を介して牢獄から出ることができると言っていた。

なんとなくしか意味がわからないが、骸は微妙な表情で頼み事をしてきた。

「実は今クロームは黒曜ランドに住んでいるのですけれど」

「けれど?」

「あの通り廃墟でまあ環境がいいとは言えません。そんなわけでなんとかしてくれませんかね」

「犬と千種も一緒じゃないのか?」

「犬は清潔とは無縁ですし、千種もクロームには興味なさそうですからね。自ら生活を改善しようとする気はあの3人にはなさそうなんですよね」

「クロームも?」

「まあ命があつて感謝というところでしようか。素直なのはいいのですけれど。そんなわけで第三者に直してもらおうというわけですよ。少し面倒見てやってくれませんか」
「お前はクロームのお父さんか何かか？」
「……………とにかく頼みましたよ」

「リル」

「うん！」

リルに声をかけると、背負っていたバッグを降ろし、中身をいそいそと取り出した。

「それは、何？」

「ん？ 弁当。ま、まずは腹越しらえでもしよーか」

『重箱って四重が正式らしい』

「もぐ・・・美味しい！」

「でしょ？ 朝菜の料理美味しいよね」

「唐揚げうまつ」

「たくさん持ってきてよかったな」

黒曜ランド中央施設の一室。

椅子と机を用意してその上に持参していた3段重ねの重箱を広げる。

唐揚げや卵焼き、ハンバーグ、ナポリタン、とりあえずいろいろな料理が弁当箱には積まれていた。もちろん味は美味しい。灯夜の嫁の朝菜が作ったんだけど、流石主婦なだけあって料理はうまい。

それにしてもこの料理いつ作ったんだろ。頼んでから一時間くらいでこんなに数十種類って作れるものなのか？ 明らかに下ごしらえとか必要な料理とかあるような気がするけど、まあ美味しいからいいか。

「まあそれで骸に頼まれて来たんだよ」

骸の名前を出すとクロームは少し目を開いて驚いたような表情をする。

「骸様に？」

「ああ、それで犬と千種はどうしてる？」

「わからない。どこかに行ってる」

「そうか。匂いに釣られてくれば楽なんだがな」

「あー！お前から何食ってるびよん!!」

来たよ……。

「よう犬。お前も食うか？」

「光努！何でいるか知らねーが、食うびよん！」

勢いよく飛び込んできてガツガツと弁当を食い始める。

荒つぽく手づかみで一心不乱に弁当を口に詰め込んでいる。行儀が悪いな。

少しは躡けないとな。ん？

そう思っていると犬の後ろにリルとコルがいつの間にか立ってた。

二人とも背中手に手を回して小太刀を引き抜く。どの顔には影がかかり、目が赤く光つてくるような気がした……。

そして弁当を食べている犬の背後にこつそりと忍び寄り、小太刀を二人とも一斉に振

り上げて、犬の頭上に振り下ろした。

「おあずけ!!」

ガアアン!!

「ギャイン!」

ドゴラガシャアーン!!

机を粉碎しながら地面に顔を激突。そしてもともとボロボロだった床に顔をめり込まして動かなくなってしまった。

いくら犬の行儀が悪く、せつかくの料理が少々ぐちゃつとなっていましたかといえ、これはやりすぎかなと思った。

………まあ犬は丈夫そうだからいいか?

「てー大丈夫なわけないびよん!」

ほら大丈夫だった。

ああ、心配なくても料理は全部閉まって俺の手に収まっているから壊れたのは机と犬の頭と床だけだ。こんな美味しい弁当を壊されてたまるものか!

「!お前ら何するんだびよん!ウルフチャンネル!グルルウ!」

「変身だ!」

「狼、微妙。元の顔がアレだからからかな」

リルはともかくコルの辛辣な感想。

「大丈夫？犬」

勢いよく床に突っ込んだ犬を心配そうに見るクローム。

そのうち犬がリルとコルを追いかけて逃げる三人の構図が出来上がった。

鬼ごっこか、楽しそうだな（絶対に違います）。

まあなにわともあれ、弁当は無事だから食べるか。

「で、何か申し開きがあるなら言ってみろ。話だけは聞いてやる」

「だってこの狼がー！」

「このガキ共が悪いびよん！」

「僕は悪くない」

「よし、お前ら少し黙ってもらおうか」

黒曜ランド中央にあった複合施設の外にある広場。

少し広い場所に大きめのシートを広げ、その上に正座して並んでいるリルとコルと犬の三人。そしてそれを見下ろす俺。となりではクロームが座って今の状況を見守っている。

何故中ではなく外に座っているのか。別に外が明るいからピクニックにするかというわけでもない。理由がある。

「お前ら、鬼ごっこもいいが．．．建物を崩壊させてどうする!!」

今現在、俺の後ろには瓦礫の山が築き上げられていた。

先程まで会った建物は見る影もなく崩れ去ったということ。

なぜこんなことになったのかといえば話は簡単だ。

鬼ごっこをしたリルとコルと犬が暴れて壁や床を破壊したり切り刻んだりしたおかげでわずか数分で崩れた。もともとボロボロの廃墟だったのに、重要な柱とか崩してしまったおかげであつという間に瓦礫の山が出来上がったよ。

クロームを連れて建物から避難する羽目になったよ。

「お前たちの意見はよくわかった。よって罰を与える」

「コル!」

「うん!」

ダツシユ!

一瞬のうちにリルとコルが目の前から消えた。

犬も隣にいた二人が消えたから「あれ?」とか思っていたがよくよくと見たらすぐ近く、クロームの後ろに隠れるように逃げてクロームの背中からこちらを伺っていた。

「ちよ!お前ら!逃げるなびよん」

「わーん!クローム助けてー」

「え!?でも・・・」

「ヘルプ・・・」

「はあ・・・しようがないな。よし、一人差し出せば他の二人は罰なしにしよう」

「!」

三人は考えた、どうやってこの罰から逃げ出すかと。静寂が三人の間で行われたが、それは一瞬だけだった。

「じゃ、あとはよろしく」

「え、待って二人とも・・・」

リルとコルはクロームを連れて一目散に逃げ去った。

「え?待つびよ、ぎゃん!」

すぐに追いかけてしようとした犬は立ち上がってダツシユしようとした瞬間、地面に吸い

付くように顔面を打ち付けた。よくよく見てみると、足首にロープが巻きつけて近くの木につながっていた。

あの二人いつの間に。まあこれでお仕置き対象は決まったわけだし。

「じゃ、犬」

「ちよ！待った！俺じゃないびよん！あいつらが・・」
すつ。

右手を上げて犬に手を見せる。

その手は、手をパーにした状態から中指を曲げ、先端に親指が付くようにして中指と親指で丸の形をした手の形。つまりはデコピンの手。

（お仕置きって・・・これ？）

犬の手を額に持つてきて、犬はこれくらいかとほつとした表情をしたが、

バシン！ドゴオ！！

額をデコピンで打ち付けられた犬は、地面と平行に飛んで行き、森の木をなぎ倒して向こうの建物を崩壊させて倒れた。

まあ気絶してるだけだろうから問題ないな。犬回収してリル達と合流するか。

(光努、罰を喰らわれないように気を付けよう……。そして犬、安らかに眠って)
そして物陰から見ていた千種は静かに犬に黙祷するのであった。

『昨日の友は今日も友』

前回のあらすじ。

骸に頼まれてクローム、犬、千種の様子を見に来ただけど、犬とリルとコルのおかげで黒曜ランド壊滅。その際犬には罰を与えておいた（リルとコルは犬を捧げて逃げた）。で、今はどこにいるかというのだけど。

「まあ上がって上がって。ほら千種と犬も」

「おっじやまー」

「・・・・・・・・」

「えつと・・・お邪魔します」

「たっただいまー！」

「ただいま」

犬に千種、そしてクロームを連れて黒道家に帰っていた。

「おかえりなさい。あら、お友達？」

家に入り出迎えてくれたのは朝菜。

本名黒道朝菜。灯夜の奥さんでおしとやかですごく良いひと。

たまにすごいスキルを発揮する。いろんな意味ですごくいい人。

いつも黒道家のご飯を作ってくれてるのだが、すごくうまい。

今は夕飯の時間帯なので居間に入ると机の上にくくも料理が並んでいた。

「あれ？ルイと灯夜は？」

料理の用意をしていた朝菜に尋ねる。

ちなみすでに夕輝とリルとコルは机についている。けどいつもゴロつとしてるルイ

の姿が見えず、灯夜も部屋にいなさそう。

「二人なら少し前に出かけたわよ」

「どこいったの？」

「確かヨーロッパに行くって言ってたかしら？」

「・・・ヨーロッパねえ。まあそこは灯夜に任せるか」

それにしてもルイまで行くとは。

めんどくさがりなあいつがわざわざ出向くとはな。

「あ、紹介遅れた。こつちが犬と千種とクローム」

「いらっしやい。黒道朝菜です。よろしくね」

「・・・よろしく」

「光努！これ食っていいの？」

「犬、意地汚い・・・」

「ふふ、いいのよ。たくさん作ったからね」

「とうか普通にちようど8人分あるよな。灯夜達いないのに・・・」

「なんだか今日はお客さんが来るような気がしたの」

笑顔で言ってるがなんたる勘のよさ・・・。減った人数と増えた人数で最数的な人数がピタリと当たってるとは。朝菜、恐るべし。

まああるのなら都合がいい。食うか。

「それで、お前からどうするつもりだったわけ」

「どうって？」

「いや、もしかして黒曜ランドにでも住むつもりだったのかと」
「・・・そのつもりだけど」

キョトンとした表情をするクロームを見て、光努は「えー」というような表情をする。
まさか本当にあの廃墟に住むとは思わなかったらしい。

だがあの廃墟は崩壊してしまった。

「それでどこに住むつもり？」

「えっと・・・」

「まあそこらへんに」

「野宿とか？」

「お前らなく・・・」

無計画、というよりはこの三人は本当にどこにでも住めそうなところがあれば住むつもりらしい。無謀というかたくましいというか・・・。

「光努」

「ん？朝菜、どうした」

「今日はもう遅いし、泊まっていつてもらったら？」

「・・・」

いや待てよ、むしろ家においたほうがいいんじゃないか？ここなら安心安全だし。

生活環境も廃墟よりはいいし。部屋もこの家広いから問題なさそうだ。

うん、いいじゃん。ナイス朝菜。

「よし、お前ら泊まっていけ」

「でも、迷惑じゃ」

「いや大丈夫だろ。家主の許可もとったし」

灯夜がないから今の家主は朝菜だな。元々家主がどつちか知らないけど。

「でも……」

「だったら灯夜達が帰ってくるまでいれば？」

「リル、いやいやさすがにそんな話だけじゃオツケーは」

「それなら……邪魔になります」

「するの……。じゃあ犬と千種も泊まってけよ。ちなみに異論は認めないからな」

「……」

「やつほう！いい寝床ゲットだびよん」

よし、灯夜にはしばらく帰ってくるなど伝えるか。

その後、クローームは朝菜の部屋に行った。クローームは一人でいいと言ったけど朝菜に押し切られたらしく一緒に寝るみたい。犬と千種は各々好きな部屋使うつてよ。もちろん使えない部屋もあるけど。

「あれ？骸一味じゃないか。何してるんだい」

天井から降ってくるように落ちてきた白い影は、ハクリ。

そういえば全然出てこないから忘れてたな存在。

「なんらこいつ？」

「ははは、何か動物みたいだ」

「なんらと！」

安っ！なんて安い挑発に乗るんだ！

「このやろ！」

「はっずれーっ」

飛び跳ねるハクリに犬の攻撃がことごとく躲される。

普通は空中で身動きがとれないけど、ハクリは体の強い捻りとすかさず攻撃する犬の腕や足を軽く触れてスムーズに避けて空中を移動するからまるで宙を自在に飛んでい
るようだ。

「………こいつのことだからもしかしたらホントに飛んでるかも。」

「いやさすがにそれはないよな？」

「ほい」

「ぎゃいふん！」

ピン、ヒユウウウウウ・・・ドゴオン!!

犬の額にデコピンをかまして、犬は地面と平行に飛んでいった。

途中窓に当たる前にリルとコルが窓を開け外に飛んで行き、庭を越えて塀に埋まってしまった。

何か最近どつかでこの光景見た覚えがあるな・・・。

千種が何か黙祷してるし、縁起でもない。

「たく、少しは手加減しろよ」

「人のこと言えないだろ」

「俺はちゃんと加減している」

「・・・そうか」

そう言うとき天井に戻った。

降りてきたときの天井の穴から入って天井の板がしまった、

お前忍者かとか思ったけどあえて何も言わないでおこう。というか天井で何してたんだ？もしかして住んでるの？

まあ調べるのは今度にして、とつとつと犬を回収するか。

『途中経過、見て回ります』

朝。

普通に並中に登校。

登校する生徒に混じり校門をくぐって校舎に入る。

途中、金属音とかが上からかすかに聞こえたけど、後で見に行くか。

「おはよ」

「よ、光努」

「おはよう、光努君」

「おはよう」

クラスメイトに挨拶をしつつ、席を座る。

周りを見てみるとツナ達の姿が見当たらない。

ツナと隼人と武の三人がいないな。

「あ、おはよう光努君」

「おはよ」

「よう京子、花」

声をかけてきたのは笹川京子と黒川花。

二人とも同じクラスの女子。

京子はツナが今片思い中の女子。昔と比べて今はよく話したり先日も遊びに行ったりという仲になって進展はあるらしい。花はその京子の親友。

少しウェーブのかかった黒髪をしている正確的には大人びた女子である。

「あんたって名前呼びしか呼び方ないの？」

「苗字より名前の方がわかりやすくていいじゃない」

名前に比べたら苗字は日本で同じのがたくさんあるからな。

名前は一人ひとりを示す記号みたいなものだからな。

大事だぞ、名前は。名前はな。

「まあ確かに京子も並中に兄貴いるけど」

「兄貴いたのか。3年？」

「うん。ボクシング部首相なの。今日はお休みなんだけどね」

「風邪でもひいてるのか？」

「ううん。最近家いるコロネロくんどこかに行ってるみたいなの」

「すまん。聞き間違いかと思うが誰とどこかに言ってるって？」

「家に今泊まつてる赤ん坊のコロネロくんだよ」

コロネロ。

それは、マフィア界最強の赤ん坊である青色のおしやぶりを持つアルコバレーノの一人。元タイタリア海軍潜水奇襲部隊C O M S U B I Nコムサブイン所属の軍人であり、銃火器と近接格闘に秀でた高い戦闘力を持ち、昔マフィアランドでも一人でカルカツサの艦隊を沈めていた。

いや、きつと同名の他人だな。

コロネロ何て赤ん坊は世界にたくさんいるだろうし。

「あんたん家赤ん坊何て泊めてるんだ」

「うん。いつも迷彩柄の服着てて青いおしやぶりに持つてるの」

「……それどういいう赤ん坊なのよ」

きつと気のせいと信じたかったが、絶対にコロネロだ。

迷彩柄の服着て青いおしやぶりをつけた赤ん坊がコロネロの他にいるだろうか？

いやいてたまるか！

「なあ京子。最近兄貴に変わったことなかった？」

「変わったこと？うーん、いつもどおり元気だし・あ、そうだー！」
「？」

「最近綺麗な指輪を持つてたよ。何か誰かに貰ったみたい」

「綺麗な……指輪？」

ボンゴレリング。

最近起こったことで指輪と言ったら咄嗟にボンゴレリングが連想する。

これも偶然と信じていたのだが、案外ボンゴレリングだったりして。

ボンゴレリングは全部で7つ。

その全てに違う模様がついており、それぞれ大空、嵐、雨、晴れ、雷、雲、霧の7種類
の属性に分かれている。

それは大空をボスに、残りの6つはボスを守護する守護者に託されるというリング。
歴代のボンゴレボス達にもボスとそれを守護する6人の守護者の計7名がボンゴレ
を支えてきたという。ちなみに今の9代目にももちろん守護者が6人いるようだ。

京子に聞いた笹川兄の特徴は、とりあえず「元気で一直線な正確。座右の銘は「極限」と
いうらしい。なるほど、いわゆる熱血漢なんだな。

守護者になるとしたら晴れのリングとかかな、性格的に。今度リボーンにでも聞いて
答え合わせでもするか。

「そういえば沢田達も昨日から休みなのよね」

「ツナ達？もしかして武と隼人も休みか？」

「そうだよ。よくわかったね」

「ま、なんとなく想像がついたんだ」

「三人とも風邪なんだって。ご両親から連絡があったみたい」

「風が流行ってるのかね」

「まあ流行ってるだろうな。割と面倒な風邪がな」

きつと全員特訓中だな。後で遊びに行こつと。

紅の空、オレンジ色の雲、そして赤い夕日。

学校の授業も終わったしさて帰るか。

と、その前に……。

階段を上がって屋上に向かう。

扉に近づくにつれて金属音破壊音が大きく聞こえてくる。

キーン！ガガ！ビシ！

ガチャリ。

「おつ邪魔〜」

「らっ！」

「ふん！」

黒く、しなやかな鞭は正確に相手の顔面に迫ったが、手に持ったトンファアを匠に使って防ぎ攻撃を仕掛ける。だがその攻撃も、鞭を両手で持って引っ掛けるようにして止める。ここで二人は一度静止した状態になった。

戦っていたのは、デイーノと恭弥。

デイーノは鞭を、恭弥はトンファアを使って凄まじい攻防を繰り返していた。

お互いあちこち痣ができていたり、血が滲んでいたりしていた。

「よう光努」

「君か、何しに来たの」

「おいおい、生徒なんだし放課後なんだからいても不思議ないだろ。何してるのはこっちのセリフなんだけど……」

「恭弥の特訓中だ」

「この人を咬み殺す途中」

「お前ら答えが待ったく違うぞ」

全く別別の答えを出すとは。でも特訓中つてことは、ツナの守護者は恭弥か。

恭弥もまさかそんなことするとはな。あれ？確か群れるの嫌いなんじや……。

あ、だから今噛み殺し中つてことか。

「まあ多方リポーンに頼まれて恭弥を鍛えに来たけど、恭弥は師事するのとか嫌がりそうだし、多方ディーノが戦って勝ったら守護者にでもなれとかそんな感じだろ」

（光努、恐るべき洞察力！まさかさっきの俺のセリフから全部わかったというのか）

（鋭い……）

ディーノもだけど、雲雀も内心吃驚。まるで最初から見ていたかのようにピタリとあっていたのでさすがに雲雀もびっくりしていた。

「ま、二人とも頑張れよ」

「光努、どこ行くんだ」

「ん、そうだな。ちよつとツナ達見てくる」

「場所知ってるか？」

「探すよ。ディーノと恭弥もまったねー」

「オリヤア!!」

「甘い!」

死ぬ気モードのツナと、死ぬ気モードのバジルのスパーリング。

二人とも同じ死ぬ気モードだが、色々と違う。

ツナの荒々しい死ぬ気モードとは違ってバジルは本人の意識をそのままに死ぬ気をコントロールした状態にいる。全力を出し続けていればすぐに疲れるが、定期的に力を抑えたりすることで長時間の戦いが可能となる。

今のツナの特訓は、全力で死ぬ気モードのツナに死ぬ気をコントロールさせて長時間の死ぬ気モードを維持する特訓。

「オラー!」

「ふん!」

ツナの振り下ろす拳を、バジルは柔らかく否し、そのまま腕を挿んで岸壁に向かつて投げつけた。ツナはそれでも一回転して岩に足をつけ、再びバジルに接近して拳を振るったが、バジルには躲されてカウンターを仕掛けたことにより吹っ飛んでしまった。「少しは死ぬ気モードも伸びたけど、まだまだだな」

「まだ気力の暴走状態が続いている。バジルを倒すとなるともう少しかかりそうだな」
そばで会話をしていたのは、リボンと家光。

ツナの教師リボンと、バジルの言う親方様である沢田家光。

まだ家光はツナに自分の職業のことを話してはいない。今はツナは死ぬ気状態なので一応後になってもあるていどは覚えているが、今はバジルとの戦闘により横にいる家光のことはほぼ気がついてない。

ツナは知らぬ間に父親にも一緒に鍛えられていたのであった。

「あ！沢田殿！」

「ツナ！」

「!?待て」

バジルの攻撃の方向が崖の方に向いてしまい思わず、崖から落としてしまった。

一瞬見たツナは死ぬ気モードがちょうど消えた状態。家光は思わず一瞬焦ってしまっただがリボンが止めた。

崖から伸びてきたのは手。

その手が地面を掴み、勢いよく人影が崖の上に飛び上がってきた。

「よ、落し物だぞ」

現れたのは光努。柔らかそうな白い髪を揺らし、楽しそうに笑っている。その肩には気絶しているツナが抱えられていた。

『動く前に、仕留めるべし』

「はいよ、落し物」

と、光努が地面におろしたのはツナ。死ぬ気モードが解けたのとバジルの攻撃によってノックダウンしたツナであった。

「お主は！あの時は助けていたでかたじけない」

「バジルだっけ。怪我大丈夫そうで良かったよ」

バジルは光努を思い出してスクアアロに襲われた時の礼を言った。

あの時光努がスクアアロと軽く交戦してなければディーノが間に合わなかったかもしれないからである。

「ようリボン。何？ツナの特訓中？」

「ああ。もうすぐヴァリアーが日本に来るからな。それまでビシビシ鍛えてるところだぞ」

「はは、そりや大変。そちらは？」

光努はリボーンのとりにいる家光に話しかける。

「ん？俺は沢田家光。ツナの父親だ。よろしく」

「ツナの父親か。俺は白神光努。光努とでも呼んでくれ」

「光努・・・そうか、お前がイリスの二代目だな」

家光は、面白いものを見つけたようににやりと笑い光努を見つめた。

「あたり、よく知ってるね。さすが門外顧問」

「・・・へえ、よく知ってるじゃねえか」

自分の役職がバレているのを知って、家光の眼光が鋭く変わった。

気のいい父親像からは想像もつかないような、数多の危険をくぐり抜けてきた猛者のような顔つきをした。

「ああ、灯夜に教えてもらった」

「灯夜の野郎、人の職業を簡単に説明しやがって。すまんがあんまり公にしないでくれよな。こう見えて裏じや有名なんぞな」

「人気者って辛いよね。了解」

あはははと笑い合う二人。

リボーンも笑い、バジルは家光とタメ口を聞きつつ、役職的には家光に劣らぬどころ

か上に位置すると思われる光努に驚いていた。

「そうだ！光努、お前バジルと戦って見ないか？」

「親方様？」

「バジルと？ツナの特訓中じゃなかったのか」

そう言つて未だに気絶中のツナをちらりと見る。

「今は休憩中だ。それに、お前の実力が見てみたい」

口角をあげ、光努は楽しそうに笑みを浮かべた。

「俺はいいぜ。いいか、バジル？」

「はい！手合わせ願います」

ガガガガガ!!

「はあ！」

バジルは光努に接近し、拳の連打を繰り出した。

今のバジルは光努に合わせて死ぬ気モードではないが、その身体能力は常人よりはるかに高い。さすが門外顧問組織で家光に鍛えられただけはあるという程。

だが、

「ハハハ、まだまだ!」

バジルの拳は、全て光努の出す右手の平で受け止められていた。

負けじと拳を引つ込めて回し蹴りを放ったが、光努はその場でしゃがんで頭上にきた足を掴みそのまま力任せに投げ飛ばした。

「ほら!」

「うわっ!」

投げ飛ばされたが、回転してうまく着地する。そのまま飛び出し光努に蹴りや拳を当てにかかると。だがそれも全て光努は受けたり躲したりして今はダメージが一発も通っていない。

「へえ、バジルをこうも軽くあしらうとは」

「久しぶりに見たが、相変わらずだな」

感心したように二人の戦いを見つめる二人。

同年代で体術でバジルが遅れを取るとは思わなかったのか、吃驚した様子だが家光は少々楽しそうに笑みを浮かべ始める。

「バジル、死ぬ気丸を使え」

「え！親方様！しかし光努殿は・・・」

「構わん、許す」

「・・・分かりました！」

一旦光努と距離を取ったバジルは、懐から錠剤を一粒取り出し飲み込んだ。

ゾワッ！————ポオウ！！

瞬間、バジルの額に青い炎が灯った。

「死ぬ気モード？さしずめ、今のは死ぬ気弾の錠剤バージョンってところか」

「ええ。これは死ぬ気丸。親方様が拙者専用にごさった丸薬でござる」

死ぬ気弾はボンゴレに伝わる秘弾。

それを擬似的に人工的に再現するとは。すごいな、沢田家光。

「ふう、準備完了でござる」

「じゃ、ラウンド2。行くぞー！」

ダッ！

明らかに先ほどより速い速度で光努に詰め寄った。

その拳や動きは、通常状態よりも格段に上がっていた。

死ぬ気丸は死ぬ気弾と同じリミッターを外す丸薬。死ぬ気弾と比べたら体にかかる負担も大きく、死ぬ気度も小さいが携帯用に便利で死ぬ気弾に起こるような大きな副作用が無い点が優れている。

複数の服用でさらに大きな力が望めるみたい。

「はあー！」

ビュッ！ビュビュッ！

バジルの連撃を、光努は紙一重で躲す。

すかさず蹴りも連撃を浴びせるが、光努は両手を匠に動かして全て否し、ダメージはほぼゼロだった。手刀をなぎ払うように振るうバジルの手を掴み、蹴りをバジルの腹に打ち込んだ。バジルは咄嗟にもう片方の手でガードをしたが、

「くっ！重い！うわっ！」

威力が高かったのか、ガードしたにもかかわらず強引に突き破ってきた。

バジルは蹴り押されたが、そのまま距離をとって再び構えた。

「身体能力、動体視力ともに死ぬ気モードを圧倒か。おいおい、どんなスペックしてんだよ」

「光努はそういう奴だぞ。まだまだ力は高いみたいだけどな」

（勘弁してくれよ灯夜。ホントに何かありそうだな。あの力は、ヴァリアーにも通用しそうだしな）

ドガ！ガガ！ビュビュビュ！ドドツ！

「正直、ヴァリアーとの戦争もそうだが、イリスとボンゴレのドンパチもできるだけ避けたいんだが」

「大丈夫だろ。光努もそんなつもりサラサラなさそうだしな。まあでも、全力で楽しみたいだろうがな」

「その全力で何かあったら面倒なんだがな」

「うっ！」

シユウウ。

「はあ・・はあ・・お見事です、光努殿」

「楽しかったよ、バジル。おつ、ツナも起きたみたいだな。じゃ、またな」

何が楽しいのか、いつの間にかいなくなっている家光同様に、ツナに見つかる前に退散するつもりらしく、崖から飛び降りた。バジルは崖から下を覗いたが、光努がはるか下の方で軽快に森の中を進むのを見て、感嘆の声を上げた。

「拙者もまだまだ精進しなくては」

「その前に、ツナの精進が先だけだな」

「ん……あれ？今父さんいなかった？それに、バジル君誰かと戦ってたような？」

「何言ってるやがる、とつとと修行再会だぞ」

「そんな！もう勘弁してよ！」

ツナの叫びが、今日も響いていたのであった。

ドゴオン！

「爆発音、火薬の匂い、ダイナマイト。それに……紙ヒコーキ？」

森の中を移動中、上空を見上げると爆発があった。よく見ると、爆発したそばを紙ヒコーキがふよふよと飛んでいた。

そして近寄ってみると、地面の上で隼人がダイナマイトを握りしめて、少し高い丘の上でシヤマルが寝転がって紙ヒコーキを手に持っていた。

そばには空になったビールの缶が落ちていた。

特訓中？

「隼人ー、何してるのー？」

「んあ？てめっ、こんなところで何してやがる」

「それはこっちのセリフだけど、特訓？」

「・・・まあな」

そう言うと、再び空を飛んでいる紙ヒコーキにダイナマイトを当てに行く。

しかし飛んでるヒコーキには当たらず、ふよふよと再び空を漂った。

丘の上の方を見ると、シャマルが紙ヒコーキを寝転がりながら投げていた。

光努は丘の上まで上がってシャマルの隣にたつた。

「ようシャマル。何？家庭教師中？シャマルが？」

「おう、何か文句あつか？」

「だってシャマルって保健の先生でしょ？何教えてるの？応急処置？」

「おめーなあ、ヴァリアーが来るのに治し方何て教えてどうするんだよ。それに俺は殺し屋だ。トライデントシャマルって聞いたことねーのかよ」

「いや、俺この世界の人間に詳しくないし。全く知らん」

「お・お前なあ・・・。さすがにきつぱり言われるとムカつく。そのうちに痛い目見るぞ」

「はは、できるものならやってみろ、とっ」

そのまま前体を倒し、に飛び降りて隼人のところに向かった。

(あいつ、後ろから接近していた三叉矛トライデントモスキートの蚊に気がついたのか。それとも偶然か。なんにしても、さすがイリスのボスだけはあるってことか)

シヤマルの必殺技は、不治の病原菌を持つ666匹の蚊を自在に操り、標的を病死させる三叉矛トライデントモスキートの蚊。その効力は様々であり、桜を見るとフラフラになってしまふ”桜クラ病”、己の恥をしゃべるドクロのあざを体に増やしながら死んでいく”ドクロ病”など妙だけど恐ろしい病気もたくさん持つ。

こつそりと近づく蚊に気がついてなのかすぐに飛び降りてつた光努に思わず少し冷や汗を流してしまった。

「隼人ー、貸して貸して。俺もやりたい」

「おめっ！遊びじゃねえんだから！邪魔すんじゃねえ」

「一回だけだから、な？そんなわけで早速」

と言つてダイナマイトを一本構える。

「ん？ダイナマイト？あ、いつの間に！」

「紙ヒコーキか。どれが100点だ？」

「ねーよそんなの！」

「どれでも一発で当てたら100点やるぞ」

「てめっ！シヤマル！」

「よし！」

ダイナマイトを構える。さながらやり投げの選手のように。そしてふわふわと漂う紙ヒコーキに向かって、

ヒュッ！ドオオオン！！

「な！」

「ほう」

「よし！100点！」

真つ直ぐに向かったダイナマイトは、紙ヒコーキにぶつかり粉碎した。

「おまつ！一体どうやった！」

「どうって、普通に投げただけだけど」

「んなバカな！」

「やめとけ隼人。お前とそいつじゃやり方が根本的に違う」

「どういうことだよ」

「技術を習得しようとしてるお前と違って、そいつはホントに力任せに投げて紙ヒコーキが動く前に当てたんだよ。真似したって無駄だぞ」

「なっ！」

「今のはバカみたいな力があって出来る芸当だ。お前はお前のやり方がある、ほら続き

だ」

そう言つてまでも紙ヒコーキを飛ばす。

釈然としないながらも、渋々とダイナマイトを点火してヒコーキ落としを再開する。光努はそれを見送りながら、再び森の中を疾走するのであつた。

『黒曜組特訓前編』

森の中を歩いていった。

歩いていったのは、光努、リル、コル、犬、千種、クロームの5人。

森の中にある平坦な道をスタスタと歩いている。

進むにつれてだんだんと木々が曲がりくねって不気味な雰囲気を出しているが、ここにいる5人はそれくらいでは怯える程でもないので問題なしに歩いている。

「そろそろ見えてくるはずらしいが」

「見てみて光努、あれあれ」

「ん？あれか」

見えてきたのは、道端にぽつんと置かれた鳥居。

だが普通の鳥居と違って色は灰色。大きさは枠の中が普通の扉サイズと果てしなく小さい鳥居が森の中に道に建てられていた。

そして鳥居の額束にはただ一字、『獄』の文字が書かれていた。

「よし、始めるか。黒曜組の特訓メニュー。題して『地獄巡り』」
名前そのままのお題を、光努は告げた。

「ところでクロームも一応守護者だから特訓とかしなくていいのか？」

今日は学校が休みなので、家でくつろいでる。

犬は庭で遊んでおり、千種は自室、居間では光努とクローム、そしてリルとコルが二人でトランプのスピードをしている。

「一応してる。幻術のトレーニングとか」

クロームが沢田綱吉を守護する霧のボンゴリングの守護者と光努が知ったのは少し前。どうやって知ったかはあえて語らないでおく。

「まあ幻術使える奴がいなさそうだから家庭教師もつけられないな。他の守護者に比べて少し不利だな」

話を聞いたところ、骸が霧の守護者として選ばれたが骸は現在牢獄の中なのでほぼ代理ということだ。クロームが参加している。

「なになに？クローム特訓するの？」

「特訓？戦うの？誰と？」

トランプを終えてリルとコルが興味深そうにクロームの元までやってくる。

今までの境遇から、ニコニコと笑って自分と親しげに話しかけてくるリル達に若干の戸惑いがあるものの、クロームも4日程一緒に暮らしていると多少この空気に慣れた。

「ヴァリアーだよ。そういえばお前らヴァリアー知らないのか？スクアーロは知ってるのに」

「だって剣使ってるのスクアーロだけだし」

「他は面識ないよ」

「お前らの知り合いは剣士しかいないのか……」

「おーい、見てみて！面白いの拾ったびょん！」

「犬、拾い食いはあれほどダメだって」

「言われてねーしやらねーびょん！」

ひらり。

犬の手元から落ちたのは、一枚の紙。

何かのビラのようにも見える紙を、落ちたそばにいたクロームは拾って読み上げた。

「えっと、『これであなたも最強になれるツアー。剣士も術師も格闘家もドンと来い!』
犬、これって」

「いや・・・まあ負けたら骸さんに悪いし、今のままじゃその女よえーし」

つまり家庭教師のいないクロームの為に持ってきたと。

「おーおー優しいこった。あの犬がこんなにいる子に育つなんて。ビラは怪しいけど」

「時が経つのは早いねー。ビラは怪しいけど」

「感慨深いねー。ビラは怪しいけど」

「犬・・・」

「う、うるせーびょん!!あと一言余計らびょん!」

珍しく照れつつ、縁側にどきりと寝転がってそばにあった鰻頭をガツガツと食べ始める。光努達はそんな犬を見てにやりとしつつ、クロームの持っているビラに目を落とすた。

「えー、『いつでもお越し下さい。詳しいルールは下記記載』。ルールはつと・・・
なるほど」

「行こ行こ!楽しそう!」

「よし、じゃあ行くか!クロームの、いやまとめて黒曜組の特訓だ!」

ルールは簡単。

- ・ 入口の鳥居からスタート。
- ・ 山の頂上にある燈籠の元までたどり着けばゴール。
- ・ それができれば君はレベルアップ！
- ・ 場所は地図参照。

それがビラに書かれていたルール。

そして今、光努達はスタート地点と思われる鳥居の元へとたどり着いた。

「特になんの変哲も無い山のようなな」

「ここから入って頂上に行けばいいってことだね」

「それでどうやって強くなるびよん？」

「めんどい・・・」

「えっと、注意書きがあるな」

※注意書き

- ・鳥居は一人ずつ入ってください。
- ・何かあっても全て自己責任といたします。
- ・お菓子は300円までです。

「……………」

「どうしよう！400円分持ってきちゃったよ」

「リル、大丈夫。そのまま持っていていいぞ」

光努はリルの頭をぽんぽんと叩き、早速鳥居の中に入った。

「—」

鳥居をくぐった光努とクロームは、何かを感じ取った。

さっきまでとはまるで別の空間に出たような気がしたが、周りの景色に変化はなかった。紛れもないその場所。だけどその場所に違和感を感じていた。

「今の鳥居……何か、術がかけてると思う」

「幻術か、多分。もうスタートしているのか」

「あ！鳥居が」

リルの声に後ろを向くと、先ほど通ってきた鳥居が影も形もなかった。

幻術を出したら光努は見破る、というよりほぼ効かないはずだが、光努は鳥居を見つけることができなかつた。

「ま、いいさ。頂上に向かうぞ」

そして順番を変えて、

先頭クローム、犬、千種の三人。その後ろに光努とリルとコルの三人。

今回はクローム達の特訓なのであえて先頭において進む。

周りの木々は、普通の山のように。平坦だった道はだんだんと上り坂になって山を登っているのがわかる。このままだと頂上まで楽勝ではないのか？と一同思ったが、そうは問屋が下ろさなかつた。

ギューン!!

「あれは!」

空の上から飛んできたのは、平たい円形の物体。

よく見てみると、木でできた歯車のように、大きさは直径で1メートル程。

「ライオンチャンネル!こんな、引き裂いてやるびよん!」

たてがみを伸ばし、目を細くし、凶暴な牙と爪を持った犬は飛んでくる木の歯車に向かって跳んでいった。

「まづい!千種、犬を止めろ!」

「ふっー！」

咄嗟に、千種は光努の呼びかけに反応してヘッジホッグを操り、犬の体を糸で絡めて引つ張つて無理やり後退させた。

「ぬあー！」

犬のいたところを通過して、地面にぶつかつた木の歯車は、

——地面に吸い込まれるように消えた。

「え？」

一瞬クロームは幻覚？と思ったが、今の歯車からは幻覚の気配を感じることができなかった。つまり今のは——幻覚ではない。

「よく見てみる、その地面」

「ん？これって！」

歯車の吸い込まれた地面をよく見てみると、一筋の黒い線。

だがさらによく見ると線ではなく細いメートル程の穴。つまりさっきの歯車は地面に吸い込まれたのではなく、地面を切り裂いて地中に潜つたということ。

それほどに今の歯車は鋭く加工されており、回転数が異常なほど高かつた。

もしも、犬がそのまま齒車を引き裂こうとしていたら、人様にお見せできないような映像が出来上がっていただろう。

「随分と原始的なのに、恐ろしい罠仕掛けやがる。主催者はいったい誰なんだか……」
「犬、大丈夫？」

「……ええい！ さつさと頂上行くびよん！」

ヒュンヒュンヒュンヒュン！

「おーい、危ないぞ」

さつきの齒車が再び飛んできた。

「それにしてもあの罠。随分と凶悪だな。犬達は大丈夫か！」

「うん、なんとか」

「ぜえ……大丈夫だびよん」

「大丈夫」

クローム達も、避けたり避けたり木を投げたり岩を投げたりと頑張つてなんとか対処した。ひとまず齒車の嵐はやんだようなので先を進む。

すでに暗くなっているが、光努達はそのまま突き進む。

『黒曜組特訓後編』

夜。

どつぷりと暗くなり、暗い山の中を俺たちは歩いていった。

朝菜にはすでに連絡してあるので問題ない。

しかしなぜ俺たちが帰らないのか？それは帰り道がわからないという理由。

普通に一本を歩いているはずなのに、気がついたら妙な道を歩いている。

クロームの感覚で言うと、幻覚に近い何かが自然に張り巡らされているらしい。

幻覚そのままではなく、幻覚ではない別のものを混ぜ込んで、より複雑な迷宮に山が改造されてるみたい。つまり簡単に言ってしまうえば、この山は普通に迷宮だが幻覚でブーストされてさらにめんどい。

ヒュヒュヒュヒュ。

上から降ってきたのは槍。数十本もあるほどの大量の槍。

だが目を凝らすと、もっと少なくて見える。

まるでちやちな3D映像みたいに違和感のあるほどぼやけた姿に見える。ようは幻覚。あの槍の半分程は幻覚で出来てる。

なるほど、確かに術師の特訓もできるな。

「クローム、犬、千種！本物だけを叩き落せ！」

「わかった！」

「へっ、軽いびよん！」

「・・・わかった」

クロームは骸の持っていた三叉槍を匠に振るい、落ちてきた槍を叩き落とす。

あの槍は先ほどの歯車よりも威力が低い。それにクロームの動き、骸が使用していた

六道輪廻の能力の一つ、格闘能力の修羅道。

犬はコングチャンネルにより、槍を掴み、叩き折り、へし折る。

千種もヘッジホッグでうまく槍を弾く。

そこまで苦もなく三人は飛んできた槍を全て叩き落とした。

幻覚でできた槍は無視し、落ちてきた幻覚の槍は霧が晴れるように霧散した。

ところでなぜこの三人に任せ俺自身は何もしないのか？

答えは簡単、両手がふさがってる。それに素早く動けない。これじゃ躲しようがない

よな。少し嘆息するように、目の前と背中にあるものをちらりと見る。

「むにゃ・・・」

「すー、すー」

背中でおんぶするようにコルが、正面で抱っこするようにリルが寝ている。

そりやもう深夜だしな。この二人はいつもなら寝てる時間帯だし。

おかげで機動力が落ちてしまったが、

「すう、すう」

ちよいちよい、によーん。

子供の頬つて割と伸びるな。

まあ黒曜組が何とかしてくれるから大丈夫だな。

暫く歩くと、洞窟のような物が見えて来た。

洞窟というかなんとか、周り全てレンガでできてるような作りの洞窟。

山の中だとかなり違和感あるな。

「よし、中に入ろうか」

「でも、多分中も罨だらけ」

「つつても外も罨だらけなんらけどね」

「別にどつちでもいい」

「じゃあ中入るか」

カツンカツン。

レンガ造りの洞窟を歩いていく。

壁の所々に松明があり、炎が灯っていたので特に問題もない。ていうか今のところ何もないな。かれこれ洞窟に入って10分くらいだけ、罨らしい罨が無い。

こいつは一体どうしようかと思つたら少し広い部屋に出た。

しかしその部屋でも特に罨らしいものもない。部屋の向こうには続きの通路も見えない。

一旦ここで休憩するか。何事も、やりすぎるのは良くないからな。

「ん？なんかあるびよん」

と思つたら犬がそんな声を上げる。

部屋の隅にいた犬の元へ皆で行くと何やら壁にくぼみがあり、その中にスイッチのよ
うな物が備わっていた。妙なものがついてはいたが、さらに妙なことにこのスイッチには
押したあとのような痕跡がある。

「・・・犬」

「なんびよん柿ピー」

「これ・・・もしかして押した？」

「？問題あんの？」

「……………」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ。

「な、なんびよん！」

「多分100%お前のせいだよ」

「犬……………」

「……………」

異変はすぐにわかった。見れば一目瞭然、バカでもわかる。しかも簡単なこと。

壁が動いている。

左右の壁が挟むように迫ってきている。が、特に問題はない。

なぜなら、迫っている壁は少し広いこの小部屋の左右の壁のみ。しかも速度はあまり早くない。なのでこのまま奥の通路に入れば簡単に回避出来る。

というわけで普通に歩いて通路に入ると、後ろの方で壁同士がゼロ距離になり入口がふさがってしまった。

「……………」

「よし！あとは先に進むだけびよん！」

「開き直るな！」

ガン!

「ぎゃん!」

よし!犬は置いといて、行くぞ!

ギュルルルル!

「この音、何?」

「もしかして・・・」

ギユイイイイイ!!

先ほどの超高速歯車が飛んできた。

——さっきの倍の大きさで。

「うわああああ!!どうするびよん!」

「・・・っ!」

「狭くてよけられないし、入口もふさがってる!」

「いいぜ、全員下がってろ!あとリルとコルよろしく」

クロームにリル、千種にコルを放り投げ、二人がキャッチしたのを確認して歯車に向き直る。

「光努!」

ボゴッ!

光努は壁に手を当て、レンガを一つ無理やり引き抜いて飛んできた歯車に視線を向ける。

右手に持ったレンガを、軽く中に放る。そして、ちょうど歯車が放り投げたレンガの横に差し掛かった時、光努は動いた。

歯車は光努の正面から接近し、その横には光努が投げたレンガ。到底レンガなんかで防げるものでもなく、投げた位置も横なので的外れ。

だが、光努はそのまま斜めにツツコミ、右足の膝を振り上げて、放ったレンガを間に挟むように歯車の側面中央に叩き込んだ。

ギイイイイイイン!!

歯車はその場にとどまったが、まだまだ超高速回転したまま。

光努の膝と歯車のあいだにあるレンガがだんだんと削れてなくなっていく。

「光努!」

ついにレンガが全て削れてなくなった。歯車が再び正面に切り込む前に、光努は高速で膝を戻して拳を叩き込んだ。

「オラアア!!」

ガガアアン!

歯車が真ん中から真つ二つに割れ、壁に突き刺さった。

「おお！やった！」

「光努！手が！」

クロームが見ると光努の右手の拳から血が滲んでいた。

リングで威力を殺したが、それでも凄まじい程の回転速度だった。

「予想以上の罠だったな。……主権者いつかぶん殴る」

物騒なことをいいつつ、光努は懐から簡易救急セットを取り出すと怪我した手に包帯を巻きつけて処置を終えた。

それから俺たちは、あれよこれよと罠を突き進み、幻覚の街を破り、森を進み、そして頂上にたどり着いた。

やってきた場所には、森が切り拓けた広い場所。その中央には一つの灯籠がぼつんと建っていた。高さ3メートルはあるかというほどの大きな燈籠。

「ついに……ついに来たぞ！」

「うん……辛い道のりだった……」

「やっとなついたらびよん……」

「……疲れた……」

「わあ、きれーい」

「絶景かな」

俺たちは疲れたと言ってるが、リルたちは山の頂上から見える朝日を見て目をキラキラさせている。少し前まで眠っていたからこの二人は元気だな。

燈籠の前に移動すると、すぐそばに看板が建てられていた。

『おめでとう。これで君も最強に一步近づいた。帰りは燈籠の下にある階段から帰ってね☆』

イラッ。

この星マークすぐくムカつくな。

リルとコル以外、この場にいた全員が思った。

ゴゴゴ。

巨大な燈籠はスライドして地中深くに伸びる階段が現れた。

「なんか終わりは随分とあっさりしてるね」

「ご褒美とかないのかびょん！」

「なっさそうだよ、犬」

少し不満気に全員でブツブツと言いながら階段を降りて行き、少し通路を歩いてまた階段を上がる。そして天井がスライドして階段から外に出るとそこは、

「あー鳥居だ」

鳥居のすぐ前から出てきた。

随分とあっさりと出てきたな。てつきり帰り道にも罨を仕掛けられていたのかと思っただが。

しかし本当に頂上まで登ったのに何か不満だな。

もつとレベルアップしたという分かりやすい物が欲しかった。

うん、やっぱり主催者に会ったらぶっ飛ばそう。

「さてと、帰って飯でも食うか」

「ひゃー、お腹すいたびよん」

「私も、疲れた」

「早くシャワー浴びたい」

「ご飯！ご飯！」

「眠い……」

なんだかよくわからない試練をクリアして、なんだかよくわからないパワーアップをしたのであったとき。

めでたしめでたし？

『暗殺戦隊ヴァリアーセブン見参』

「よく寝た」

山から帰ってきたのが大体朝の6時くらい。

あのあと全員で朝ご飯（昨日の夜から何も食べてないから実質夕食も同然）食べて全員寝た。そしてあつという間に時間が立って、光努が起きたのは夕方になってから。

起きてから居間に入ると、すでに起きていたリルとコル、それにクロームと千種がトランプをしていた。種目はポーカー。

ポーカーとは、山札から一人5枚ずつのトランプを手に取り、その数字の組み合わせによつて勝ち負けを決めるゲーム。

カードは一度の交換だけ可能となっておりそれにより良い組み合わせを作る。

一番強い組み合わせが、マークが全てスペードのA、K、Q、J、10の5枚のカードでロイヤルストレートフラッシュと呼ぶ。

とまあ軽いポーカールのルールを説明したが、勝利したのはリル。

ダイヤのストレートフラッシュで一番に勝っていた。ちなみにクロームが一番負けた。カードを見てみるとクロームの手札はフラッシュ、全てのマークが同じという割と強い手札だったに、他のやつら強っ！とか光努も思った。

そんな4人をそつとしておいて光努は外を出歩く。

すでに夕日が沈み掛けて暗くなりつつある時間帯。やっぱ家にいれば良かったかなと考えつつ光努は考える。

「さてと……どこ行こうかな」

遊びに行くか？でもどこへ？

そういえばツナ達まだ修行してたな。

よし、茶化しにいこつ。確かまだ行っていないのは、武と京子の兄貴の了平だな。

え？一人足りないって？何かリボンもにやつとしてただけでそこまで教えくれなかったからまあそのうち偶然にも会うだろう。ということでは保留。

よし、了平とやらのところに行こつと。

と言って目的地に向かって歩こうとしたが、

「そういえば修行場所知らないな……。先にリボンのところにいつて聞いてくるかな」

光努が再び道路を歩き始めた頃、普通に歩く光努を見つめる影が一つあった。

沢田綱吉、通称ツナは走っていた。

今日の修行を終え家に帰ると、出かけるところだったのか、玄関にいた家光と遭遇。バジルのと家光の会話から、自分の父親がバジルの言う親方様という驚愕の事実を知ったが驚いている暇などなかった。

家光の情報により、ヴァリアーが日本にやってくることを知らされた。

そのため、先行してやってきた部隊から最初の目標は雷のリングということがわかったが、雷のリング保持者はまだ幼い子供であるランボ。

雷の守護者がランボということを知ったツナは、ランボを保護するために街の中を駆け回っていた。

そしてついにランボと一緒にいたフウ太とイーピンを見つけたがその時には後ろに

迫っていた黒服の男、ヴァリアーの人間がいた。

今にも剣を振り下ろされようとしたまさにその時、

ドゴオ！

横から弾丸のごとく飛んできた拳。その拳は攻撃を仕掛けようとしたヴァリアーの男に正確に突き刺さり、吹き飛ばしてランボ達を救出した。そして拳を振った男は、拳を構え直した。

「ボンゴレファミリー晴れの守護者にして、コロネロの一番弟子。笹川了平、推参!!」

「お兄さん!・・・何て派手な登場」

「ただだぞ」

上空の木の影から現れたのは先ほどの男と同じ黒服の男。さっきの男と同じヴァリアーの人間。だが、突如現れた攻撃により、一瞬で戦闘不能にされてしまった。

その光景を見た新たなヴァリアーの人間が来たが、どこからともなく飛んできたダイナマイトの爆発に、こちらも戦闘不能にされてしまった。

そして了平達の元へと現れたのは、竹刀を手に持った山本武と獄寺隼人だった。

「つたく、なんでアホ牛がリングを・・・」

「もー、大丈夫だぜ」

「み・・みんな！」

「家光のやつ、なんとか間に合ったみてーだな」

「みんな！」

「10代目！」

「何か久しぶりだな」

「オス」

無事に再開することのできたツナ達。

殺し屋に狙われるという恐怖体験をしたフウ太はツナに抱きつき、そしてツナは怪我をしているイーピンの手当をした。

等の狙われたランボはゴロゴロと寝転がり腹減ったとだだをこねる。

そんな緊張感のないランボと大事なハーフボンゴレリングがランボの髪に引つか

かっているのをみて、ツナは真っ青になるのであった。

「俺には全く理解できないツスよ！なんでこんなアホにリングが・・・」

「まあまあ、いーじやねーかまずは無事ってことで」

獄寺の意見も最もだが、そんな獄寺を山本は落ち着かせる。

ひとまずヴァリアーが撃退をできたのでよしとしたのか、獄寺もそれ以上は愚痴を言うのをやめた。

「しかし思ったより骨のない連中だったな。楽勝だぞ」

「そいつは甘えぞ。こいつらはヴァリアーの中でも下っ端だ。本当に怖えのは・・・！！来るぞ！！」

リボンが気配を察知したのか、そう言うとう方の茂みから飛んでくるように人が現れ、ツナ達を見下ろした。

全身黒づくめの服を纏い、逆立たせた黒髪。顔にピアスをつけて背中に8本の剣のようなものを差した男、レヴィ・ア・タン。明らかに、先ほどの男たちより威圧感が違うのをツナ達は感じ取った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。クァットロ チンクエ 04と05がいないが、お前たちがやったのか」

倒れている男たちをちらりと見てつぶやく男。そのあとツナにしがみついてガタガタと震えているランボを睨んだ。

「雷のリングを持つ俺の相手はパーマのガキだな。邪魔立てすれば皆消す」
(やばい！明らかにさっきの敵とは格が違うっぽい!!)

背中の剣に手を伸ばし、今にも抜きはとうとしたその時、

「待てエ、レヴィー！」

声が聞こえた時、レヴィと呼ばれた男の後ろから現れたのは複数の人影。

現れた人物を見て表現するなら妙な集団。

モヒカンのような髪型に、サングラス。

襟元に毛皮の付いた黒ずくめの男、ルツスーリア。

前髪が隠れるほどの金髪に頭に載せた王冠。

まだ10代ほどに見える黒ずくめの少年、ベルフェゴール。

顔を隠すようにかぶったフードの上にカエルを載せた、

小さな黒ずくめの赤ん坊、マーモン。

人のようだが、顔にはフルスキンのガスマスクのような物がつけられ、

人際大きな異形の黒ずくめの大男(？)、ゴラモスカ。

そして、

「うゝおゝ おい！よくも騙してくれたな、カスども！」

腰まで届くほどの長い髪。左手に剣を備え付けた黒ずくめの男。

5日程前にツナ達を襲ったヴァリアアの剣士、スベルビS・スクアアロ。
鋭い眼光をツナ達に向けて睨みを聞かせ、獰猛な笑みを浮かべる。

「雨のリングを持つのはどいつだあ？」

「俺だ」

スクアアロの問いかけに、對抗するように目を鋭くさせて名乗り出る山本。

「なんだあ、てめーか。3秒だ、3秒でおろしてやる」

剣を構え、余裕そうに山本を睨む。

「のけ」

その時、スクアアロ達の後ろから現れた人影は、スクアアロを押しつけるように前へ進み出た。

「のけっ」

「う」お、おい！てめーはカンケーねーだろ！」

ついでにとスクアアロを押しつけて前に出ようとすするレヴィにスクアアロは怒鳴り散らす。そして、スクアアロをのけて出てきたのは一人の男性。

顔にいくつか傷があり、他の者たちに引けをとらないほどの殺気を放ち鋭い眼光を持

つ男。XANXUSザンクス。

今この場に、XANXUSを筆頭にしたボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアアが勢揃いし

た。

XANNXUSが睨みを聞かせただけで、ツナは怯え、他の物は動きが止まった。

「沢田綱吉……」

XANNXUSが左手上げ、つぶやいた瞬間、XANNXUSの手が輝いた。

「まさかボス、いきなりあれを……！」

「俺たちまで殺す気か！」

その光を見たとき、他のヴァリアー、スクアードでさえも少し焦った様子を出した。

「死ね」

ガッ！

だがその光は、第三者の介入で収まった。

XANNXUS達の前の地面に突き刺さったのは、一本の鶴橋。

「までXANNXUS、そこまでだ」

「！」

声の発生源は、少し離れた場所からした。

ツナ達も咄嗟に見ると、三人の人影が見えた。

「ここからは、俺が取り仕切らせてもらおう」
それは部下を引き連れて現れた、沢田家光だった。

『忘れ物』

ボンゴレ門外顧問。

沢田家光のボンゴレでの役職であり、普段はボンゴレに属さない諜報組織だが、ボンゴレの危機の時にはボスに継ぐ権力を持つ。

そして門外顧問とは、ボンゴレの後継者選びにおいてボスと対等の決定権を持ち、二つに別れたハーフボンゴレリングの片方を、己の選んだ時期ボス候補に授ける権利を持つ。

今回は、ボンゴレ9代目の選んだ後継者がXANXUS、家光の選んだ後継者がツナとなり、それぞれ二人とその守護者にハーフボンゴレリングが渡された。

ツナ達とXANXUS達の前に現れた家光が持ってきたのは、9代目からの勅命。そこにはこう記されていた。

『今まで自分は、後継者にふさわしいのは、

家光の息子である沢田綱吉だと考えてそのように仕向けてきた。

だが、最近死期が近いせいか、私の直感は冴え渡り、他によりふさわしい後継者を見つけたに至った。

我が息子、XANXUSである。

彼こそが真の10代目にふさわしい。

だがこの変更には不服な者もいるだろう。

現に、家光はXANXUSへのリングの継承を拒んだ。

かと言って私は、ファミリー同士の無益な抗争に突入することを望まない。

そこで、皆が納得するボンゴレ公認の決闘をここに開始する。』

つまり、

「同じ種類のリングを持つ者同士の、1対1のガチンコバトルだ！」

家光は静かに言い放った。

「同じリングを持つ者同士のガチンコバトルー!!」

家光の言葉に、ツナは「ええええええ!」というふうに出す。

そりゃいきなりバトれというのはないだろう。まして相手はボンゴレ最強といわれた殺し屋集団。迎え撃つために修行をしていたとは言え、一中学生には荷が重い話だ。

「ああ、あとは指示を待てと書いてある。」

「「お待たせしました」

重なる女性の声が聞こえたと同時に、どこからともなく現れたのはやはり二人の女性。

二人とも、目元を隠すような黒いマスク。日焼けしたような肌に、服装は女性らしい私服を着用し、首からホイッスルを下げている。そしてマスクで正確にはわからないが、二人とも同じ顔をしているのがわかるほどに似ている。

「今回のリング争奪戦では」

「我々が審判をつとめます」

「我々は9代目直属の、チエルベツ口機関の者です」

「リング争奪戦においては我々の決定は9代目の決定だと思ってください」

「9代目は、これがファミリー全体を納得させるためのギリギリの措置だとおっしゃっ

ています。異存はありませんか？XANXUS様」

「……………」

「ありがとうございます」

XANXUSの無言を肯定と受け取り話を進める。

だが、家光からは異議が申し立てられた。

家光ですら、チエルベツ口機関という名前を聞いたことないという。

確かに門外顧問の家光が知らないというのなら、本当に9代目しか知らない直属機関か、もしくは全く謎の機関。家光としては、大事な後継者争いに部外者のような奴らに審判を任せたくはないと異議を唱えたが、チエルベツ口の女性は、異議を認めないと言いつつ放った。

チエルベツ口の女性が指定した戦いの舞台は、深夜の並盛町。

明晩11時に全員に集まることを言い、すぐに姿を消してしまった。

XANXUS達も、ツナを睨んでからくるりと背を向けてしまった。

「あ、ちよつと待って」

「!!」

帰ろうとしたXANXUS達の元へとかけられた、その場に似合わない軽い言葉。咄嗟に振り向くと、上から黒い物体が二つ程降ってきた。

すぐさまレヴィがXANXUSの前にでて、黒い物体を弾き飛ばしてからそれが何かに気づいた。

「!!04、05!」
クアットロ チンクエ

レヴィが弾き飛ばしたのはツナ達が倒したのとは別の自分の部下、レヴィ雷撃隊の構成員だった。レヴィに弾かれるまえから気絶してゐらしく、そのまま地面に落ちてしまった。

「何者だ!」

ツナ達や家光達も、声の聞こえた方に警戒を向けた。

暗がりの向こうから一人分の足音が聞こえてきた。

近づいてくるにつれて、街灯に照らされて顔が見えて来た。

街灯の明かりに照らされて、薄く光る柔らかそうな白い髪。

黒いパーカーを着て、白いシャツ。ジーンズを履いてスタスタと歩いてくる。その顔には、楽しそうな笑みが浮かんでいた。

「忘れ物。ちゃんと部下持って帰ってよね」

「こゝ、光努!」

今まさに、一触即発の雰囲気だったのに、まるで喧嘩を売るような行動を起こした光努を見てツナはひやひやした。

だが、そんな心配は色んな意味で無意味だった。

XANXUSから、ありえない程の殺気と怒りのオーラが発した。

「なんだ？あのすげー怒りようは」

「う”お” おい！どうしたボス！お前らも手伝え！とつとと引くぞ!!」

リボンがあまりにも怒ってる様子のXANXUSに疑問を持ち、スクアーロがXANXUSを止める。他の奴らにも怒鳴るが、様子がおかしかった。

「おい、スクアーロ・・・あいつだぜ」

「どうしたあ!？」

「少し前にあつたじゃない。ヴァリアー本部謎の襲撃者事件」

「それがどうしたあ、マーモン!!」

「その犯人、あの坊やなのよ」

「何い!？」

ベル、マーモン、ルツスーリアの言葉に、スクアーロは驚いた表情をする。

「どうしたの！リボン！」

「数ヶ月前、イタリアのヴァリアー本部に一人の侵入者が入ったそうさ。その時に、ヴァリアーの奴らと交戦した侵入者の手によって本部の一部が崩壊、結局捕まえることができずに取り逃がしたという事件があつたんだ。犯人は謎のままだったが、あいつら

の話聞いてると……」

「その犯人が……光努!？」

「あ、それ間違い。犯人あれ」

と言って、光努はXANXUSを指差す。

指を刺されたXANXUSは、光努の言動にさらに怒りを増幅させた。

「おい待てよ。お前も壊しただろーが」

ベルが口を挟んだがXANXUSが破壊したということには否定しない。

なぜなら事実だからだ。

「だって先に攻撃してきたのそっちじゃねーか」

「お前は侵入者だろーが。攻撃されて当たり前だつっうの」

「正当防衛だ。だってこっちから何もしてねーし」

「そういう問題じゃねーよ。あそこに入った時点で抹殺対象だ」

光努の言葉にベルが反論。

二人が言い争いを始めた。

あーだこーだと責任の擦り付け合い（結果的にはどっちの言い分も正しい）に、ヴァリアー側とツナ側、そして家光側がだんだんと呆れかけてくると、XANXUSは再度後ろを向いて歩いて行った。興が覚めたのだろう。

「う」お おい！ベル！お前も帰るぞ！」

「・・・わかつたよ。おいお前。名前は」

「光努だ。またな、自称天才」

「自称天才って呼ぶな！次言ったらぶち殺す」

そう言い残してヴァリアー全員がその場から去っていった。一応部下も持って帰つて。

「人のせいにするなんて。あの自称天才め。今度会ったら前髪長い奴と呼んでやろう」

「いやそれ悪口っていうのか？」

山本が光努のつぶやきに軽く突っ込む。

「光努、ヴァリアーと知り合いなのか？」

「いや、ヴァリアーとは知り合いじゃない」

「でもさっきお互い知ってるような話してたじゃ・・・」

「あの中の何人かは知ってるがヴァリアーとは知らなかったよ」

殺し屋と知らずに知り合ったということなのか？

一体どんな状況で知り合ったのか非常に興味があったが、あえて聞かないでおこうと思つた。

と思つたが、そういえばそのことについてさつき話してるのを思い出した。

「で、なんでヴァリアーなんて襲撃したんだ」

リボンがみんなの疑問解消にと光努に質問をする。

「襲撃したんじゃないんだが、実はな——」

詳しく知りたかったら 第2話『雷親父を無視してオカマの料理を堪能する』から第4話『作戦隊長は買わずとも苦勞が絶えない』までを参照。

そこに真実がある！

ヴァリアー編 Ⅱ 『リング争奪戦』

『晴れの戦いと軽快な暗殺者』

「つつても、光努には驚いたよな」

「やることなすことめちやくちやな奴ですね」

「あはは、うん。確かに・・・」

次の日の朝、ツナが登校していると山本と獄寺と会い、昨日のことについて話をしてきた。あれから光努のヴァリアー本部での出来事をさらっと聞くと、反応様々に呆れたり驚いたりとした反応を示した。

「あいつあのまま問題起こすんじゃないですかね」

「問題？」

「だってヴァリアーの方も何か恨んでるみたいですし。次に会ったら面倒なことになりますよ」

「だけれが、面倒だって？」

山本と獄寺の肩に手を回すように間から顔を出してきたのは、さっきまでツナ達が噂をしていた少年、光努。あいも変わらず楽しそうに笑っていた。

「てめっ！ いつの間に」

「隼人。何？俺がヴァリアーと揉め事起こすって？」

「かもしれないってただだが、可能性は大だろ」

「ま、否定はしないけどな」

カラカラと笑う光努。ツナ達もそんな光努を見て苦笑いを出す。

ヴァリアーと揉め事は正直ん勘弁してもらいたい。主にそのせいで矛先がこちらにも向くのを避けて欲しい。

「それにしてもヴァリアーとガチンコとか、9代目は何考えてるのか」

「光努って9代目のこと知ってるのか？」

「1回しかあったことないけど、あんな勅命を出すとは思えないんだけどな」

「リボンもそんなこと言ってたな。9代目はこんな戦いをさせる奴じゃないって」

「でもよ、勅命にもこれがギリギリだって書いてあったし。9代目って人がどんな人か知らないが、なるべく大勢が争わないようにしてくれただろう？」

「確かに勅命を見るとそう見える」

だがよく考えて欲しい。

XANXUS側とツナ側がガチンコバトルすること。ヴァリアーはプロの殺し屋の集団。ということは戦うことは必然的に殺し合いになる。いくら10代目候補とその守護者とは言え、今まで中学生だった人物達と殺し屋を戦わせるようなことをするか？

普通はしない。

まして光努が知る9代目はとても温厚な人物。ギリギリの措置を取ってガチンコバトルとしたが、そもそも戦いをさせるのがおかしい。光努は9代目については全て知っているというわけではないが、光努の勘は違和感を告げいていた。

「……けどま、考えてても始まらないか」

「光努？」

「まあ俺お前らのバトルと関係ないし、楽しく見させてもらおうかな」

笑う光努に呆れるツナ達。確かにツナ達ボンゴレ側の問題でイリスは関係無いのだが案外冷たかったかのように聞こえたが、ツナ達から見ればそうは見えなかった。相変わらず瞳の奥では好奇の色が浮かんでいる。

ちつとも説得力のない「関係無い」という言葉である。

「……邪魔だけはするんじゃないぞ」

「なあ光努、スクアー口と戦うのは俺だからな？」

「武にまで言われるとは……いや、そんなに言わなくても横取りとかしないし。別に自分から思い切りどうしようとかないからね」

獄寺はともかく、山本にまで言われて光努も少し傷ついたのか、微妙にすねたようにした顔に、ツナ達は珍しいものを見たように少し驚いていた。

「ま、今日は誰が戦うにしても頑張れよ」

「ああ」

「たりめーだ」

「うん」

暗い暗い並盛町。

あつという間に時間がすぎて今や夜中の11時程。つまり今からヴァリアーとツナ側の戦いが始まるところ。

並盛中に用意されていたのはリング。普通と違うのは、巨大な檻の中にあるという

点。そして夜のためなのか、檻の上部にはスポットライトが設置されて、リングを照らしていた。

戦うのはルツスーリア、そして笹川了平。つまり晴れの守護者同士の対決。

それにしてもあれが了平か。初めて見たが、さすがボクシング部主将でコロネロの弟子で晴れの守護者を選ばれるだけはあるほどに様になっている。ボクシングの構え。それにめちやくちや元気そうだな。円陣とか皆で（ほぼ強制的に）組んでたし。

デイーノの前に聞いたが、ボンゴレ晴れの守護者の指名とは、『ファミリーを襲う逆境を、自らの肉体で碎き、明るく照らす日輪となる』。

その指名通り、歴代晴れの守護者も肉弾戦を得意とする格闘家であったという。

それはヴァリアーの晴れの守護者も同じ。

さすがに料理番だけではないな。見ただけでわかるほどに鍛え抜かれた肉体。ルツスーリアが使う格闘技はムエタイ。タイの国技でもあり、現代スポーツではあまり使用しない肘や膝を使う分、殺傷力が割と高い格闘技。

そしてついに晴れの守護者同士の戦いが始まったが、あの光の柱は。

よくよく見ると檻の上部の角のスポットライトだけでなく、さらにその上部にいくつものライトが備わっている。明るさが通常の物とは比較にならないライトの光は、リングの中央を真っ白に、つまり普通なら目視も難しいほどに輝かせていた。

人間の瞳は、暗闇だと何も見えないけど、逆に明るすぎても何も見えないからな。まあ俺は普通に見えるけど。

ん？なんでか？黒曜ランドで閃光弾をくらったからね、激しい光源にはもう慣れた（普通は慣れたからといってそれで見えるものではありません）。周りにいるツナ達はリボーンの用意したサングラスをつけてる。スッゲー怪しいけどな。

ベルとマーモンはサングラスがついてないっぽいけど見えてるのか？それとも前髪の下につけているのだろうか？謎だ。ちなみにレヴィのつけてるサングラスは似合っていない。

しかし、これだと明らかに不利だな。

暗闇だろうとサングラス常備のルツスーリアと、何もつけていない了平。

外野からの手助けはルール違反で即失格なので、サングラスを渡すこともできず、了平は何も見えない状態で戦わなければならない。逆にルツスーリアはサングラスをつけているので全部見える。了平の奴、大丈夫かな。

そう思いつつ、覗いていた小さめの単眼鏡を外す。

今いるのはベルの屋上。ここから並中まではおよそ800メートル。チエルベツロ

の幻術士が、通常なら周りが気づくようなことも全てカモフラージュしている。なので今現在並中にそびえる光の柱も、並中の外からは見えなくなっている。俺にはあまり関係ないけど。

「了平には頑張ってもらおうとして、俺もやることするか。なあ？お前ら」

光努の周りには、黒服の男たちが手に銃を持ち、構えていた。

「白神光努か。今回の任務、お前に用はない。邪魔するなら消すぞ」

「そうも言つてられない事態なんだけどな」

手に持った単眼鏡を弄びながらため息を付くように話す。

「確かにお前らとはなんの関係もない、が」

カアアアアアア!!

単眼鏡の側面にあるスイッチを押すと、眩しいばかりの閃光が辺りを包み込んだ。

閃光弾。

暗闇であつた分、とつきの光に男どもは思わず腕で顔を隠した。

この閃光弾は3秒ほどしか続かないが、それだけあれば十分。

ドガ！バキ、ゴス、ドドド！ガッ！ドス！

閃光が収まった時には、足元には倒れふしている男たちしかいなかった。

「残念これが、関係あるんだな♪」

♪~~~~♪~~~~♪

「あー、もしもし？ 灯夜？」

『光努か。そつちはどうだ？』

「とりあえず10人程潰したけど、他はいたっけ」

『確かそつちに手練が一人いったはずだ。』暗殺者『とよばれる殺し屋だ』

「それって違うの？」

『奴の手口は誰にも気づかれずターゲットを仕留める暗殺スタイルだが、他にも目撃者を全て抹殺して犯行を全てこっそりとした暗殺にしてみようほどに危ないやつだ』

「目撃者か、となると俺も危ないんじゃない？」

「That's right!」

ザシュー！

光努が後ろに飛ぶと、先程まで立っていた場所に突き刺さる黒光りする物体。

黒いフードの付いた先がボロボロのマントを羽織っており、ところどころ見える場所には黒いプロテクターが体のあちこちに付けられていて黒ずくめの出で立ち。地面から先ほど突き立てた爪を引き抜き、レンズ部分が赤く光るゴーグルをつけた顔をこちらに向ける。

顔にも黒い帽子とマスクで、闇に溶け込んでいる。明らかに素人とは思えないほどの

鋭い殺気を放っている。

「お前が噂の”暗殺者”さんか」

「That's right! そんなわけで、恨みはないがYouのお命Goodbye!」

軽快そうにしゃべり、回転しながら突撃してきた。

そのまま後ろに下がり、攻撃を回避するが”暗殺者”もさらに追撃を加え、両手についた黒光りする爪を素早く動かす。その度に後ろに避けていくと、ついにビルの端に立ち、後ろには街並みが広がっていた。

「これが本当の崖っぷち。Bye」

両手の爪を突き刺すように攻撃したが、”暗殺者”は驚いた。

光努は正面からの攻撃を避けるのに、後ろに倒れた。

「What!?! おいBoy!」

そのまま見えなくなった光努を追うように、ビルの端から下を覗くと、
ドゴオ!

「グー!」

覗き込んだ”暗殺者”は目の前にきた足の裏がヒットした。

(ん? 直前で後ろに跳んで威力を殺したか。残念)

メキリ。

片足を伸ばしつつ、逆立ちのような向きでビルの端のすぐ下の壁に指をめり込ませて張り付いていた。落ちたと見せかけて、逆さに壁に張り付き、上から覗いたところを蹴り飛ばしたということ。

考えても実際はやろうと思ってもできないほどにでたらめな戦術である。

カシヤアン。

かすかに聞こえた音を、光努の耳は拾った。

逆さまの状態で正面を見ると、並中の光の柱が消えていた。

（了平がライトを壊したのか。光源で蒸発気化した汗（つまり塩の結晶）を拳に乗せて飛ばし、上方の檻の天井につけられたライトを破壊したと。これで視覚は直角か。普通はこれでサングラスは逆効果と言いたいが、相手はヴァリアーだしな。あとは了平しだい）

一度壁にめり込ませた手を外し、空中で素早く一回転して体を逆の逆、正常に戻してビルの端を手で掴み、反動をつけてビルの屋上に上がり、スタリと着地した。

「じゃ、こつちも第二ラウンド、始めるか」

「OK！バラバラにしてやるよ」

再び両者はぶつかりあった。

『風穴と粉碎』

それは、ある一人の少年の話。

小学生の少年はとても元気だった。まっすぐ一直線に進む元気な少年。

ある日、その少年をよく思わない近所の中学生達が、少年の妹を人質に取って少年を呼び出した。妹が人質に取られてる為、少年はなにも抵抗できず、中学生達に袋叩きにあい、額を割られる程の重傷を負ってしまった。

それを自分のせいだと悲しんだ妹の為、少年はもう喧嘩はしないと誓った。

ボンゴレ晴れの守護者、笹川了平VSルツスーリア。

檻に囲まれたリングが戦いの部隊。晴れの守護者にふさわしいステージとして用意されたそのリングは、圧倒的な光源によって生み出される熱と光の中でのデスマッチとなった。

その戦況は現在、了平の方が劣勢だった。

了平の必殺技『マキシマムキヤノン極限太陽』は、了平の持つ何億人にひとりというしなやかかつ強靱な細胞一つ一つの力を己の右腕に集め、絶対なる破壊力を生み出すパンチ。細胞の伝達率によつては破壊力がさらに増大する。

だがその拳は、ルツスーリアの左膝に埋め込まれた鋼鉄、メタル・ニーによつて防がれてしまった。

「ぐあああ!!」

メタル・ニーとぶつかった了平は、右拳から少くない血を吹き出しながらうずくまっていた。

(細胞の伝達率は90%というところだけ。今のトレーニング時間じゃこれが限界か)

相棒の鷹、ファルコにつかまり上空から戦況を見守るコロネロ。

5日という短い修行時間では、精鋭ヴァリアーとの勝率を上げるのはアルコバレーノといえどわずか。後は本人次第ということだった。

「お兄ちゃん……?」

「!きよ……京子ちゃん!?なんでここに!!?」

「娘さん達がコロネロを探してたんでエスコートしたんだ」

「父さん!」

並中に現れたのは、了平の妹の笹川京子と親友の黒川花。

了平及びツナ達はヴァリアーとの戦いのことを一切京子には伝えていない。

ヴァリアー対策の特訓は、了平が相撲大会の特訓中だとかまかしている（普通はごまかされないが京子はごまかされている）。もしかしたら死の危険性のあるヴァリアーとの戦い、妹に心配をかけまいとして隠していたが、来てしまった。

居候のコロネロを追いかけて、隔離された並盛中に来てしまった（原因はコロネロと家光）。

「お兄ちゃんやめて!ケンカは死なないって約束したのに!」

（普通の喧嘩だと思ってる!）

京子の天然ぶりにツナも吃驚。殺し合いだとは微塵も考えていない様子。

「ああ……確かに、額を割られたとき……もう喧嘩はしないと約束し

た……。だが、こうも言っただけだ」

——それでも俺は男だ……。どうしても

喧嘩をしなくちゃならない時が来るかもしれない

い……い……

——しかし、京子がそれほど泣くのならもう——

「俺は……負けんと!!」

立ち上がった!

良平は劣勢なる状況の中、心配する妹の為にその身を奮い立たせた。妹を思うその気持ち、了平の細胞伝達率を100%へと押し上げた。

「みさらせ!!これが本当の!!」

突撃する了平、ルツスーリアは迎え撃った。

「マキシマムキヤノン
極限太陽!!」

了平の右拳と、ルツスーリアのメタル・ニーが、再度ぶつかりあう。

その了平の拳は、まるで光り輝く太陽のようであった。

ピシピシ……バキン!!

「ぎゃあ!!」

絶対的な硬度を誇っていたルツスーリアのメタル・ニーが砕けた。

ルツスーリアにはもう了平の拳を止める方法がなくなった。
今この時、晴れの守護者の戦いの決着がついた瞬間だった。

キラ!

「あの光・・・やったか、了平」

「ヒヤッハー!とつととK i i l l させな!」

「それは、勘弁だ!」

ドゴウ!

光努の蹴りが、暗殺者にぶつかったが、直前で後ろに跳んで躲しただけでなく、光努の伸ばした足に向かって爪を振るう。光努がすぐに足を引つ込めたので爪は空を切ったが、構わずに突撃して爪を光努の顔面に突き刺してきた。

「はっ!」

光努の下からのアッパーで”暗殺者”の腕を下から思い切り跳ね上げた。

あまりの威力に、腕を上にあげたまま”暗殺者”は一瞬硬直してしまった。

バギィ!!

「やっぱりか」

「へー、よく分かったな。どうしてだ? Why?」

「あからさまじゃねえかよ。腕から刃が生えるとか、膝から弾丸だぜ?」

光努の貫手が”暗殺者”の胴体を貫いていた。否、胴体に空いていた穴に貫手が通り抜けたというのが正しい。最初から空いていたかのような丸い穴。綺麗に空いていた丸い穴は、その人物が普通の人間でないことを示唆していた。

「!」

通り抜けた穴が縮まり、光努の腕が絞められて固定された。今二人は至近距離。そして光努の右手は固定され、”暗殺者”は両手が空いていた。

「今度こそ Good bye!」

左右から両手の爪を振り下ろすように光努の顔に向かって腕が振るわれた。

今度は動くこともできず、片手しか使えない状態。

まさに絶体絶命だった。常人だったらの話だが。

「ぬん!」

「Oh! What!」

光努は固定されていた右腕を上にも動かして”暗殺者”を持ちあげた。

左右から顔を刺すように振った両爪を、光努は本人を持ち上げることと、自分の膝を曲げ、頭を下げて態勢を低くすることで空振りに終わらせた。そしてそのまま、右腕を上にも上げてから下に下ろすようにして、”暗殺者”を頭から地面に叩きつけた。

ドゴオ!!

地面に突き刺さった腕を引き抜くと、いつの間にか”暗殺者”が取れていた。そのまま正面を見ると、向かいのビルの屋上に着地する黒い姿が見えた。

先がボロボロの黒いマントが風になびき、顔のゴーグルが怪しく赤く光っていた。

「咄嗟に腕を外して、空中で投げられる勢いそのまま跳んだのか」

「ハハ！危ない危ない。ん、向こうの戦いもFinishのようだし、全員帰るな。今

日はMeもHomeに帰らせてもらおう」

「おい！名前だけ名乗っていけよ！」

背を向けた”暗殺者”にむかって叫ぶと、くるりとこちらに向いた。

「Meは”暗殺者”アドルフオ！次はTargetを始末させてもらおうよ。ついでにお前もな」

「やせるとでっせー！」

「するさ。じゃ、今度は本当に Good bye」

そう言うと、ビルの中に入って言った。

「ビルの上なら追いかけてやすかったんだがな……。さて、晴れの守護者の戦いも終わつたみたいだな」

並中の方向を見ると、檻が開いたリングに、撤収する皆が見えた。

了平がツナ達と一緒に笑っている、そしてルツスーリアがモスカに抱えられてぐつたりとしている。これを見れば勝敗は丸分かりだ。

「……あ、灯夜？リング戦終わったぞ。ついでにアドルフオが撤退したぞ」

『まあターゲットがいなくなったからな。次のリング戦にはまた来るかもしれないな』

「面倒だな。目撃者も全員始末する気なんだろ？」

『大本が潰れるまで耐えろ。明日には槍時がそちに着く』

「お、助かる。正直あいつ並のやつが複数来たら面倒だったんだよな」

『また何か会ったら連絡する』

「おう、サンキュ」

灯夜との通話を終わらせて並中を見る。

すでにツナたちはいなく、チエルベック機関の者と思われる奴らがリングを解体して運んでいる。さつきまであそこで命懸けのバトルをしていたのかと思うと中々シュー

ルな光景だ。

「さてと、次のリング戦については、明日聞かか」

ビルを降りて、光努は暗い道を歩いて帰路についた。

『第一回今後の状況会議』

「ずずず、ぷは。さてと。全員そろったか」

「もしやもしや、ごっくん。そうだな」

「バリバリ。あ、おかわりあるか？」

『お前らの緊張感のなさは呆れるな』

光努、リボン、家光、灯夜。

時刻はほとんどの人間がまだ夢の中を彷徨っている午前3時。モニター上の灯夜と、丸い机を囲むように座布団の上に座る光努達三人。光努は湯呑に入った暖かい緑茶を、リボンは爪楊枝に刺さった芋ようかんを、家光は皿に入った海苔煎餅を手し、モニターの中の灯夜はカメラ越しにそんな三人を見てすでに疲れたような表情をしていた。

「じゃ、会議とやらを始めるか」

場所は黒道邸の一室。

家の住人、朝菜、夕輝、リル、コルの4人は当然のごとく眠っており、静寂に包まれた家の一室だけ灯りがついていていた。

10畳程の和室の中央に置かれているちゃぶ台。壁際にはいくつかの機械が積まれ、そこから伸びたコードは畳の上を貼ってちゃぶ台の上にもまで伸びている。

上にあるのは小さめのモニター。

そこに写っているのは家主、黒道灯夜。

どこかのホテルのような一室が背景から見とれる、黒いスーツをきた灯夜がモニターに写っていた。モニターのそばにあるカメラからこちらの様子も分かることだろう。そして灯夜の映るモニターと一緒にちやぶ台を囲むように座っているのは、イリスファミリィボスの光努とボンゴレ門外顧問家光、さらにツナの家庭教師リボン。

メンバーがメンバーだけに一体何事だというメンツだが、内三人があまりにも普通に寛いでいるのでモニターの向こうの灯夜は嘆息している。

「さてと、定時連絡を先に済ませるか」

「今回のヴァリアーとの晴れのリング戦。勝者はツナ側の守護者、笹川了平。少々

危なかったが辛くも最初の勝ち越したな。ちなみにルツスーリアは暫くは動けなさそうだな」

「弱者は消す……か。まあ確かに弱いものを切り捨てれば必然的に最強にはなっていくが」

家光の報告にその場にいなかった光努はつぶやく。

「それで、そっちはどうだったんだ？ 光努」

「ああ。いたのは数人の部下と」暗殺者「という名の殺し屋、アドルフオ。リング戦が終わったらずぐに帰っていったな」

”暗殺者” アドルフォ、という名前が出たとき、家光の眉がピクリと動いた。表情に出さないが、リボンも何かを感じたようだ。

「アドルフオか。面倒なやつが出てきたな」

「確かに。口調は面倒だけど、あいつの実力はにやばい部類だ」

「それで、結局あいつらが何者かはわかったのか？」

自分以外で知っている風な口調をするのが癪だったのか面倒だったのか、光努はモニターの灯夜に訪ねた。

『どこのマフィアかはまだ搜索中だ。だが、ぼぞうかい墓造会の奴らが動いているのは間違いない

な』

「やっぱりか」

「そいつは面倒なことになってるな」

「で、墓造会って何？」

『お前と戦ったアドルフオの所属する組織でな。簡単に言うなら殺し屋派遣会社つ

て言ったところか』

墓造会。

トップ不明。組織構成不明。所在地不明。

唯一わかるのは、殺し屋を他の組織に派遣するということ。

しかし派遣といっても連絡手段は全くの不明。

この組織のメンバーがどういう経緯でマフィア達と接触しているのか全くわからな
いのも謎の一つである。

他にわかっていることはこの墓造会のメンバーが一筋縄じゃ行かないという事。

後は幾人かのメンバーの名前。

「それで、今は誰が来ているかはわかるのか？」

『今のところ確定しているのは、“暗殺者”が日本に、“道化師”、“棟梁”がもうすぐ

日本に来るといふところだ』

「本当に面倒だな。しかしまずいな・・・」

「ああ。今は目下ヴァリアーと交戦中だし、横から狙われたら厄介だな」

「ま、その為の俺らなんだけどな」

光努がなぜ昨夜アドルフオと戦っていたのか。

原因は、奴らの狙いがボンゴレであるということ。

そして家光からの、イリスへの依頼。

本来なら狙われたのがボンゴレなのだからボンゴレ内で解決したいといふところなのだが、それも簡単な話ではない。

現段階でヴァリアーが好き勝手に行動を起こしているといふことは、ボンゴレ本部の方がそれを容認、もしくは手が出せない状態であるといふこと。

チエルベツ口という謎の組織、動向の探れない9代目、ボンゴレは現在不安定な状態なのは確実である。

つまり、ボンゴレからの救援はあまり宛にできないと言つてもいい状態。

頼れるのは、門外顧問組織の数人と現在日本にいる同盟ファミリーであるキャバツローネとその他、後は個々に己を身を守ること。

なので、同盟ではないが確かな戦力、イリスの助力を頼つた。

その為、並中の周りを警戒していた家光達門外顧問組織、デイーノ率いるキャバツローネ、そして光努。

あの日光努のところ以外にも来ていた人物たちは家光たちのところにも来ていた。無論家光はツナ達に気づかれる前に片付けてリング戦に合流したのだが、光努のところには手練が一人来たのだった。

「もしも戦いの後で来たら面倒だな。戦った方はどちらも疲弊してるだろうし。ヴァリアー側に至っては助け合いとかなさそうだしな」

「そうだな。ツナ達もまだ特訓は終わってないしな」

『ひとまず俺は敵を探る。それまでは警戒をしておいてくれ。時期に槍時もそちらに向かうだろう』

槍時とは、海棠槍時。

イリスの誇る戦鬪部隊『アヤメ』の一人。

メインウェポン
主武器に槍を使う温厚で丁寧語で話す男。

単体でマフィアを一つ、あるいは軍隊を敵に回しても勝ち越せるだけの化物並みの戦鬪能力を持つ人物である。いつ頃に合流するかは今のところ不明だが、来たのなら光努達にとってはかなり助かる。

「あいつが来るのか。それまでなんとかするか」

「そうだな。ディーノ達にも俺から言っておくぞ」

「じゃあ今後の方針は、敵はリング戦の最中を狙ってくるみたいだし、その時には十分に警戒するか。それにツナ達にも話しとくか」

「ああ。一応日中の間にも狙うかもしれないからそこも警戒しないとな」

「ヴァリアーにも話しとくか?」

「あいつらが話を聞くような奴らとは思えないけどな。ていうか多少の敵なら返り討ちにしようだし」

『まあ奴らは奴らでなんとかするだろう。今は自分たちをなんとかしないとな』

敵の正体は灯夜に任せるとして、光努達はリング戦に集中するツナ達の周辺の警戒。

一応はこのスタンスで行くことが決まったのであった。

「それにしても、わざわざこんな時に来なくてもいいのにな」

「まあボンゴレを落とす絶好の機会っちゃ機会だしな」

「ていうかそのどこぞマフィアの目的ってボンゴレ潰すことなのか?」

『まあ絶対とは言い切れないが、ボンゴレが狙われているのは確かだな。一応光努も気をつけるよ』

「ああ。気をつけるさ。リング争奪戦を潰させてなるものか。あんな面白いイベントを
！」

「おい、本音が漏れてるぞ」

「できればヴァリアーが負けるところを是非とも見てみたいが、あの中の何人かは自分で叩き伏せたいとも思ってみたり」

「とんでもねーこと言ってるな」

まあなんにしてもひとまず警戒は怠るなということだ。

ガラリ。

『「！」「！」「！」』

突如空いた襖。

何者かと空いた襖の方を見るとすぐに警戒を解いた。

「んんん」

とろんとした目を擦りつつ、歩いて入ってきたのはリル。

黒い艶やかな髪はところどころはねており、寝起きなのがすぐわかる。

左手に持っている抜き見の小太刀を見たとき、家光が一瞬間まったのは余談である。というか普通は寝る時に刃物を持たない。

「おはようリル。ほら、顔洗いに行くよ」

「んん、おはよ……どこお？」

光努が立ってリルを抱えると、リルも光努に気づいたのか、でも眠そうに片目を開け

てぼーっとしている。

「コルはどうした？」

「こる？ねてる？」

「疑問形なんだ。じゃ、そろそろ起こそうか」

「うん・・・」

外を見てみると、空もそろそろ明るくなり、早いものなら起きてくる時間帯。

といつても普通は8歳の子供が起きてるような時間帯ではないのだが、リルとコルに常識は通用しなかったらしい。

灯夜もモニターをオフにして、今夜の会議をお開きとなった。

『雷の戦い、親父VS仔牛』

タン！

塀を蹴り、一般家庭の屋根の上に上がってあたりを見回す。

夜ということもありあたりは暗く、さらに雨が激しく降っているので視界が悪くなっているが、俺の目には特に問題なく見える。

白いレインコートを羽織っているため雨は防げるが、多少屋根が滑るので移動の際は気を付けないと屋根から落ちてしまう。

しかしここから並盛中の屋上が見えるけど、あれが雷の守護者の試合場所だな。

巨大な避雷針が何本か、屋上から天につき出すように建って雷を集めていた。

分かりやすいステージ。

一応並中の周辺区域は見て回ったが、さすがに雨の中だと面倒なのか特に怪しい奴らは見当たらなかったな。いるのは警戒しているディーノの部下と門外顧問組織の人間だけ。さすがに連続で来ることは無かったのか。けどまた来そうな感じがしてたしな。

まあ考えて闇雲に探し回ってもしょうがないから雷の守護者の戦いを見に行くか。

確かツナ側の守護者はランボという5歳の少年。ヴァリアー側は逆毛ピアスの雷親父ことレヴィ。随分とまあ危ない戦いだこと。

ランボはボヴィーノファミリーのヒットマンらしかったがリング戦に参加のためボングレに入ったらしい。ちなみに、その際にボヴィーノのボスは泣いて喜んだらしい（大手就職先に就職が決まった万年ニートの息子を持つ父親の心境みたいなの？）。

本人はまだ子供なので至って遊び100%でリング戦に参加しているのだが、相手のレヴィにはそんなことは関係無い。リポーンによれば、レヴィは女子供だろうと一切容赦なく仕留める性格。そして仕事熱心で趣味は任務、いつも枕元には116個の目覚ましを用意しているというアホみたいな男（こちら辺は割とどうでもいい。どうやって調べたかはまた今度な☆）

力関係は天と地の差。まあいざとなれば邪魔でもすればいいかな？

とりあえず、早速行くか並盛中。

ゴロゴロと激しく雷がなっている並盛中屋上へと、足を向けた。

で、来たのはいいんだけど……あれ誰？

リングにいたのはレヴィと、10代半ば程の青年だった。

「あ、光努！」

「ツナか。今日は雷のリング戦でランボとレヴィが戦うって聞いたんだが」

「そうだけど」

「あれ誰？ランボとやらは？」

「えくつと……あれがランボなんだけど」

「ランボ？どこが？別人じゃん」

「だ・か・ら！あいつは10年バズーカでこっちにきたランボなんだよ！」

「ちよ、獄寺君！そんな急に言ってもすぐに理解できるわけ……」

「なるほど。その10年バズーカっていうのはきつと名前からするに弾に当たった人物が10年後の人物と入れ替わるタイムマシンのようなものだ。なるほど、あれが10年後のランボか。面白いアイテムもあるもんだな」

「ものつそい順応力！ていうか洞察力高！よくあれだけで理解できたね」

「しかし危ないフィールドだな」

エレットウリコサーキツト。

エレットウリコはイタリア語で雷を意味する。

特殊な導体の線が屋上の床を六角形の形にいくつも敷いてあり、一番外側六角形の頂点と真ん中に巨大な避雷針が建っている。雷を計7本の避雷針に呼び寄せ、そこから雷が床の線全てに電動するため、もしも雷が降ってきた時に床から足を離さないと雷をモロに喰らうという非常に危ないフィールドである。

経緯を聞くと、ランボVSレヴィの戦いが始まり雷が降ってランボ黒焦げ。

しかしランボには雷を受け流すことの出来る特殊体質もあつて絶命にならず、けど痛いものは痛いので泣きながら10年バズーカを使って10年後のランボを呼ぶに至ったわけであるということ。ちなみにレヴィはちゃんと避けたので今のところノーダメージらしい。

「おい、ランボ。なんで餃子持ってるんだー」

「光努！他に気になるところそこ!?!」

だつて餃子だぜ？普通戦闘フィールドにそんなもの持ってたら気になるだろ。

あ、そうか。急に入れ替わったから別に戦闘準備中とかじゃないんだ。だつたら不利じゃね？

「いや今晚餐の途中、ていうか貴方誰ですか？」

「白神光努だ」

「いや聞いたことないですよ。ていうか今そんな場合じゃないですよね」

「目の前の的に集中しろ！死ぬぞ」

「あなたが先に聞いてきたんでしょ！」

まあつまらない問答はおいておこう。敵はまだまだ目の前にいるし。

「サンダーセット」

ピシャアア!!

頭に牛の角のようなモノを二つ取り付けたランボがそう言うと、上空の雨雲から落ちてきた落雷がランボの直撃した。しかし、平然と立ちつくすどころか、両角にはありえない程の電流が留まっていた。

あれだけの電気を留めておくのは普通は不可能なんだがな。ランボの体質のおかげといえはわかりやすいが、そもそも雷を留めておける物体って何なんだろうか？

あの角何でできてんだが興味深いな。

ヴァリアー側も、避雷針を無視して雷を呼ぶランボには少し驚いたらしい。

「喰らえ！電撃角!!」

角に雷を纏ったまま、レヴィへと突撃をした。

確かに喰らえばスタンガンなんか目じゃないほどに高ダメージのはず。なにせ落雷一発分だから伊達じゃない。だけど、

「貴様、目立ちすぎだぞ。雷の守護者として申し分ない働きをし、ボスから絶大な信頼を勝ち得るのは・・・俺だ!!」

叫ぶと同時に、背中に備えていた8本の剣のような物が宙へ飛び出した。

8本の剣は開き、傘のような形状（というか傘にしか見えない）となつて、ランボを中心に開いた状態で滞空、全てに雷が留まり、ランボに向けていた先端から電撃が飛び出した。

「ぐあああ!!」

「ヤベーな。ランボの体質をもつてしても、あの電圧に耐えられねーぞ」

リボーンの言うとおり、8本の傘ではなくパラボラにそれぞれ貯められた雷の量は、ランボの角に貯めた電圧よりはるかに高い。そんなのを一斉に喰らえば、いくら雷ダメージを緩和出来るランボといえどやばいな。ちなみに普通の人は死ぬ程だからランボは確かにすごいのは事実だな。

ついに、ランボは倒れふしてしまった。けど意識はまだあるしそこまで重傷というわけでもなさそう。

「うつ・・・が・・・ま・・・うわああああ! くだいよお!!」

「泣くか普通。あいついくつだよ．．．」

いや待てよ。ランボが5歳くらいって聞いたから10年後のランボってことはまだ中高生、子供じゃん！衝撃の事実だよ。全然大人でも戦闘員でもないだろ。

まあだからといって普通あそこまで泣かないが。

「うわああああ！」

「あ、あれはランボが置いていった10年バズーカ！」

泣きながら手探りに、落ちていた10年バズーカを自分に向けて————発泡した。

ドガン！！

「ん？これって」

「なんだ．．．？このだたならぬ威圧感は．．．」

ヴァリアー勢も感じたようだ。爆発で起きた煙の中に佇む人物が、只者でないことを．．．。

「あれは．．．20年後のランボ!!」

『5分って意外と長いね』

少し伸びた黒髪。頭の横につけている牛のような角。

雨風にさらされて、毛皮の着いたコートがハタハタとはためく。

20年後のランボ。

幼少ランボの10年バズーカによって呼び出された10年後のランボが、さらに10年バズーカを使用することによって呼び出された存在。

その理屈で行けばさらに30年後40年後と呼べそうだが、今はそんなこと考えてる場合ではなかったな

「お前が誰であろうと、消すまでだ」

「やれやれ、昔の俺は相当てこずったようだが……俺はそうはいかないぜ」
「ほぎけ。消えろ！」

ランボの余裕そうな言葉に、レヴィのパラボラが再びを火……いや、雷を吹いた。
ピシヤアアアアアアアアア!!!

しかも、ちようど雷も降ってきてフィールドは帯電状態。

ランボはパラボラの雷とフィールドの雷でダメージは何倍にもなるはず。
「エレットウリコ・リバース!!」

普通なら、な。

雷を纏ったランボが手を地（屋上のコンクリ）につくと、体にまとわりついていた電気が全て地面に流れ、さらに校舎の壁面を伝って地面にまで流してしまった。

その衝撃で、校舎の窓ガラスが全て粉碎した。

「!!・・・あれだけの地面を電流に!」

「すごい!これが20年後のランボ!」

「必殺技、敗れたりってやつだな」

「まさに避雷針だな」

地面にただ流すだけでなく、周りの俺たちやヴァリアー側にも電撃が流れないように操作して地面に流すとは。これでレヴィの雷は全く効かないな。

レヴィってあれでヴァリアーの幹部に引き上げられたってさつき聞いたけど、効かなかったらただの構成員レベルなのかな。

「遠い将来、開花するかもしれないこの雷の守護者の脂質にかけてみたんだが・・・俺の見込み以上の上のようだな」

「父さん!」

いつのまにか隣に現れた家光とバジル。一体どこから現れたのか。

ああ、普通に扉からか。

「家光、どうだ？」

「光努か。いや、今のところ何もいないな」

「今日は来ないのでしょうか？」

「そうだといいんだがな」

家光達も警戒をしてもらってるが、今のところ敵らしい敵は見つかってない様子。

このまま普通に終わるとありがたいんだが。

ガッ！

レヴィの剣による直接攻撃。

雷が効かないとわかって攻撃方法を雷を纏った剣での物理的な攻撃に変更したみたいだな。さすがに馬鹿ではないだろうしな。

今の音は、レヴィの突き刺した剣を、ランボが落ちていた古ぼけた別の角で受け止めた一撃。10年後のランボだったら今ので本当に串刺しだったな。

「1週間前に警察に捜索願いを出したのに、こんなところにあつたとは。今の攻撃で二スガ剥がれ、また顔を出したか。幼少の頃、獄寺氏に書かれた、屈辱的な文字が・・・」
古ぼけた角の表面が今の攻撃で剥がれ、中から出てきた角には、油性マジックでデカ

デカと「アホ牛」と書かれていた。

「あれは！さっき俺がアホ牛の角に書いた文字！」

「なんであの角から？」

「あの角は、20年後のランボの角だ」

家光が知っていた。

一週間前にランボの所属していたボヴィーノファミリーのボスに家光が渡されたものらしく、このリング戦でランボが勝つためのキーアイテムだったそうだ。

この角をヒントに、20年後のランボを呼ぶことができればと考えたそうだ。まあ10年後のランボは気づいてなかったみたいが、結果オーライみたいだな。

「やっぱリスペアの角よりしつくりくる。サンダーセット！エレットウリコ・コルナータ電撃角！！」

自らの角をつけ、電撃を纏って突撃をした。

「愚かな、その技は見切った。致命的な弱点があるからな」

レヴィも受けて立つように、自らの剣に雷を纏って構える。

「え・・弱点？」

「リーチがみじけーんだ。角に当たらねーと効果ねーからな」

「つってもあの角って鹿とかサイみたく大きくも前にあるわけでもないし。ましては頭の横って普通は当てるの無理じゃね？」

「そ．．．そういえば！やばいよ！」

「昔の話しき」

ランボがツナの言葉に、そうつぶやきながら笑うと、角に纏っていた雷が変形し、巨大な雷の角を作り上げた。

雷を操る．．．とは。予想外というか予想以上。あの雷耐えられるかな？

雷をモロにくらい、レヴィはダウン寸前だな。

「もう引け．．．これ以上やると、お前の命が．．」

ポフン！

「ぐびやあああああああ！」

「ランボ！戻ったぞ。つうか自分の雷でダメージ受けてるな」

「どうやらバズーカの効果は、最初の一発があたつてから5分間のようだな」

「あのバズーカつて一発5分しかもたないのか」

20年後のランボは平気だったが、今の子供ランボには強すぎる雷。

あまりにも強すぎて、体質のおかげで死にはしなかったが気絶してしまった。

そしてレヴィはまだ動ける。状況的にはやばいな。

ん？

「！．．．家光！」

「ああ、来るぞ！」

「レヴィ！避ける！」

キイイイン！

「ぬう！」

光努の言葉に、咄嗟に視界の端で光った物体に向かって剣を向けた。

ガキイン！

ランボに近寄り、剣を振り下ろそうとしたとき、横から飛んできた物体を咄嗟に剣で防いだ。なんとか弾き飛ばし飛ばしたが、今度は別の物体がいくつも飛んできた。

「ちっ！」

一旦ランボの場所から後ろに下がって回避をする。その際、剣をランボに向かって投げつける。ランボは倒れて気絶したまま。レヴィの剣と、横から飛んでくる金属の物体が全てランボに向かった。

「ランボ！」

ガガガガガ！

コンクリートをえぐるような音と金属音。

コンクリートから巻き上げられた煙は雨によつてすぐに流された。

だが、現れた光景に、その場にいた奴らは目を疑った。無残に切り裂かれたランボが

いると思いきや、地面に突き刺さった剣と薄いリング状の物体。

ランボはどこにもいなかった。いや、いた。

リングの外に。

ランボを抱えた人物は、静かに佇んでいた。

額に揺らめく炎。全てを見透かすようなオレンジ色の瞳。

片手でランボを抱え、もう片方の手に付けられたグローブからは額の炎と同じ、死ぬ気の炎が纏われていた。

ランボを助けたのはツナ。それも、前までの荒々しい死ぬ気モードではなく、静かで静寂、強大な力を秘めた超死ぬ気モードだった。

「父さん、ランボを頼む」

「ツナ・・・」

家光にランボを渡したツナは、炎を纏った拳を握り身構え、見えない襲撃者に向かって叫んだ。

「誰だ！出てこい！」

その声に、白い影が答えるように飛び出してきた。

番外編 『初めてのお使い』

ここは並盛町。

とあるマフィアやとある企業的なマフィアや、とある非日常を生きている中学生達が多く住んでいる町。

そんな町の道路の上を、一人分の小柄な影が動いていた。

「~~~~~」

楽しそうに鼻歌を歌い、スキップでもするように楽しそうに歩いているのはまだ幼い少女。手に持った買い物のハンドバッグを振りながら歩いている。

「きよーおは、たーのしい、おっかいーもの〜♪」

肩口程まで伸びた柔らかな黒髪は、少しだけ吹く風に揺れる。

薄い桜色の長袖のシャツ。袖の部分がベルスリーブ風に少し広がり、袖にわずかに隠れている手には花柄の買い物のハンドバッグが握られていた。ショートパンツから

伸びた細い足はブーツに包まれ、リズムよくコンクリートの道路を踏み、歩いていく。いつもよりかは少し肌寒いのが、そんなことなど関係の無いように軽やかに通る。

少女の名はリル。

年齢は、まだ幼い8歳。

イリスファミリーに所属している天真爛漫な少女。

いつもなら、双子の弟であるコル、同じイリスファミリーのルイ、灯夜等、誰かと一緒にいる彼女が、今日は一人だけ。

そう、今回は、彼女の物語であつた。

「さてと、今のところは問題ないな」

黒道家。

イリスのボス代理、灯夜の家であり、イリスファミリー日本での仮本拠地として使用

している。

そして今現在、黒道家の一室にて、壁にかかった大画面のモニターと、その周りにいくつか置かれ壁にかかっている小型のモニターが複数。

一番大画面に写っているのはリル。楽しそうに歩いている様が綺麗に撮れている。

これは今現在、リアルタイムでリルの歩く様子がモニターに映し出されている。周りのモニターには別の角度と付近の様子が映されている。

そしてそれを眺めているのが、こたつに入つてみかんを食べながら寛いでいる、柔らかな白い髪に、楽しそうな笑みを浮かべるおよそ中学生程の白神光努と、同じくみかんを食べている、長めの金髪を後ろで一つに結っている青年のルイ。

そしてこたつの上でみかんを剥いているのは、リルの双子の弟のコル。リルと全く同じ顔と同じく肩口まで伸びた柔らかな黒髪。見た目は同じだがコルの方が若干クールそう。そして他にもこたつに入っているのは黒道朝菜

黒く長い艶やかな髪の毛の穏やかな女性。黒道家の主である灯夜の妻である。

みかんの皮とスジを綺麗に取り、ちぎって一口食べている。

その隣で同じようにこたつに入つてみかんを食べているのは夕輝。

灯夜と朝菜の息子で現在5歳と小学校にもまだ通っていない男の子。少しツンツンとした黒髪をして人懐っこく、みかんを美味しそうにほおばって幸せそうに笑っている。

る。

今この場にいないのはリルと灯夜。

リルはご存知の通りモニターに映っているため、外にいるというのがすぐにわかる。灯夜は現在買い物のため出かけている。珍しく今日は休みとなっているため仕事に出ないののである。

「けど、大丈夫かしら？リル一人で」

片手を頬に当てて、少し心配そうに話す朝菜。

リルは、今までイリスファミリーで暮らしてきた。

だが一応大企業と言われるイリスもマフィアでもある。

そこでずっと暮らしてきたリルは世間一般の常識というものから割と外れているのも事実である。もちろんそれは弟のコルにも言えることである。

そんなわけで今回計画したのが、題して、『リル、初めてのおつかい！』という企画。今回リルには、並盛町各地にある肉屋、八百屋に行つて挽肉と玉ねぎ、卵というハンバーグの材料を人数分を買ってくるように頼んである。渡したのは買い物用の花柄のハンドバックと中にあるリルの財布、そしてお店までの地図である。

並盛町自体はそう広いという町ではないが、それでも迷わないかどうか朝菜としては心配なのであった。

「大丈夫じゃ？ 同年代と比べてリルは強いし」

「強いとお使いは別じゃないの？」

「コルも行けば良かったのに。ていうかりルって初めてなの？ お使い」

まさか8歳になるまでにお使いに行つたことないとか？

まあないといえばないと思うけど、それとも単にお使いに行く必要がなかったというだけなのか？

「一人で行つたのは今日が初めてだよ」

コルの言葉になるほどと思う。

「まあリルなら大丈夫じゃない？」

同年代と比べたらトラブルに対処する能力とかなりそうだし、腕も割と立つし。

「それはどうかな」

珍しく作業をしているリイがしゃべる。

壁のモニターと接続している機器から伸びているキーボードを操作して、モニターを見ながらカチャカチャと軽やかな音を鳴らす。

「どういふこと？」

「まあ、見てればわかる」

「えっと、突き当りを右に曲がって、三つ目の角を左に曲がると」

リルは地図の書かれたメモ用紙を見ながら呟く。

とことこと歩いていき、突き当りで止まってそのまま右に曲がる。

そして左側を見ながら角を数えていく。

「一つ……一つ……一つ……三つ……」を左だ！」

といつて、本来道とは呼べない塀と塀の細い隙間へと歩いていく。

「リル！そこじゃない！というかなぜそこを通る!?!」

「実はな、リルはかなりの方向音痴何だ」

ルイのセリフも意外といえば意外だ。だがそんな気もしなかったわけでないが、今まではコルや他に一緒に行くものがあったために迷うということはなかった。自分で道を選んでいくわけではなかった。今回は一人のため失敗した。いやいや、普通しないだろ。

だつてリルが通つたの、リルがまだ小さい子供だから通れる塀と塀の隙間だぜ？

普通道としてカウントしないだろ。

「実はリルは、普通は通れないし通らない道でも通る道として通つてしまうんだよ」

「通れないって行つても限度があるだろ」

「たとえ山道だろうと地下だろうと行き止まりだろうと、問題なく進めるだけの運動能

力あるんだよね、リルって」

「・・・優秀なのも厄介だな」

だからあの地図と言えない場所でも普通に通るのか・・・。

しかしあのままでと地図に記載されている二つ目の角と三つ目の角の間を通つたわけだから、この後地図通りに行つても別の場所に出るんじゃないや・・・。

「ふむ・・・。早急になんとかしないとな・・・」

そう思っている間にも、細い道を通るリルの姿がモニターに映し出されている。

絶妙なカメラアングルで、苦もなく楽しそうに歩いているのがよくわかる。

「今更だがこのカメラはどうやって撮ってるんだ？これリアルタイムで誰かが撮ってるだろ」

「カメラ？槍時と灯夜が撮ってるぞ」

なんて人員の無駄遣い。

イリスファミリーの誇る最強戦闘部隊『アヤメ』所属の海棠槍時と、イリスナンバー2の黒道灯夜。この二人をカメラ担当にするとは、ルイ恐るべし。

灯夜が買い物とか聞いたけどこれやってたのか。

ていうかどうでもいいが二人ともカメラ撮るのうまいな。

「緊急事態の時は二人がなんとかすることになってる」

なるほど、これならなんとかなるかな。ていうか過剰戦力すぎ。

まあ大丈夫……かな？

「~~~~~♪。お肉屋さんほとっこかな」

最初の目的地は肉屋。通常は、さつきリルが遠った細い通路のもう一つ奥の角を左に

曲がってまっすぐ進み、突き当りを右に曲がったら見えてくる予定だったのが、

「突き当たり、突き当たり。次の突き当たりを右に〜」

突き当りは見えないが細い道を進む。途中で周りの塀が少し高くなったのか、先ほどよりも薄暗かった。

「突き当りどこだろ？。ま——」

「リルが映ってないぞ」

「ホントだ。どうしたんだろ」

モニターの中からリルが消えた。

正直モニターをしつかりと見ていたにも関わらず、いつの間にかいなくなっていたよ
うな気がしたが………。

「どうした。槍時、灯夜」

『ルイか。じつはな』

別の小さいモニターに映ったのは灯夜と槍時。

テレビ電話みたいなので話してる見たいだ。

『リルが消えてしまったのですよ』

「消えた？」

『ええ。我々途中からリルが入った路地の出口を先回りしたのですが、いつまでたつてもリルは出てこないの上から見たところ、どこにも見当たらない』

あの二人が見失った？

たった20メートル程しかない細い路地の中で、入口出口を見張っていたのに消えた？ どうやつても消えようがないと思うんだが、これが噂に聞く神隠しというやつなのだろうか……？ いやいや、必ずどこかにいるはず。

きつと塀の横にある隠し扉にでも入ったのでは？

『ちなみに路地内に隠し扉、落とし穴の類は見当たりませんでした。というか一切ありませんね』

「(仕事早いな)……………」

これは本格的にまずいな。

リル、一体どこに行つたんだ……………。

「あれ？（こ）ど（こ）？」

緑色の草を踏みしめて、キョロキョロとリルは辺りを見回す。

草木が生い茂り、見たこともないような草花が咲いている。

渦のようにくるりと回った茎、カラフルな花びらをつけた大きな花、青く艶のある果実。

「どこだろ。外国？」

リルは心底不思議がって歩きながら周りを探る。

そんなリルを草むらから見る目が4つ。

草むらの中にいたのは、子供が二人だった。

「ねえねえ。あのお姉ちゃん誰？」

「見たことない子だね」

男の子と女の子の二人。

一人は燃えるような赤毛をした男の子。もう一人は対照的に綺麗な海を思わせる蒼

い髪をした女の子。二人とも共通して、幾何学模様の入ったバンダナと、どこかの民族を思わせるような模様の入った服に、首から下げた羽をつけたネックレス。違いはシャツと短パンの少年と、ワンピースの少女。そして色違いということ。

男の子は女の子より少し小さく、おそらく女の子の方が姉だと思われる。

ヒソヒソとリルをこっそりと見ながら話を進める。

「父さまに知らせたほうがよくない?」

「じゃあ気づかれる前に行こうか」

「どこに行くの?」

「うひゃっ!!」

こっそりとどこかへ行こうと思ったら、後ろから声をかけられて思わず二人とも変な声を出して驚いてしまった。

恐る恐る後ろを見ると、ニコニコと笑顔のリルが立っていた。

「ねえねえ、どこ行くの?ていうかここどこか知ってる?」

「え、えつと(チラッ)・・・」

「あの・・・(チラッ)」

言葉がつまりつつ、お互いにお互いを見る。

内心二人ともどうしようと思っっているみたい。

ヒュッ！

「！」

リルがその場から後ろに下がると、先程までいた場所に一本の矢が突き刺さった。木を削って作られた矢。鮮やかな色の矢羽が取り付けられている。

「大丈夫か！アモン！イルナ！」

上から降ってくるように現れたのは、一人の男性。

「父さま」

褐色の肌をした大人の男。

二人の子供と同じように幾何学模様の入ったバンドナと衣装を着ているから、二人の関係者だということが容易に想像できる。

その背には、矢の入った矢筒。左手には、弓が握られていた。

先ほどの矢を射ったのは、この男。

リルと二人の間に立つようにして、リルを睨んだ。

「何者だ！貴様、なぜこの場所にいる！」

「なんでって言われても、迷っただけなんだけどね」

えへへ、と笑いながら頬をポリポリとかくリル。

その様子を見て、男は特に驚異を無いと判断したのか、構えていた弓を下ろした。

「少女よ。お前の名を聞こう」

「やだ！」

「何い!？」

「名前を聞くときは自分から名乗れってパパ言ってたもん」

「……俺の名はウンガ。こっちは息子のアモンと娘のイルナだ」

「私はリル。それで聞きたいんだけどどこってどこ？」

バサバサ!!

「!!!!」

「ガアアアア!!」

上からまたもや降ってくるように現れたのは、一言で表すなら……怪物。黒く、強靱そうな四肢。そして太く鋭い鉤爪。

さらに背中から生える四枚の黒い羽。全身は黒く、目だけが赤く光っていた。形容のし難い怪物が、上空から降りてきた。

「くそっ!こんなところに!二人とも、逃げろ!」

「父さま!」

「父さまも一緒に!」

「バカを言うな!逃げろ!お前も逃げろ!」

リルの方を見て、激しく言い立てる。

それほどに、目の前の敵はやばい存在ということだろう。

「ガアア！」

「くらえ！」

ヒュヒュヒュヒュ!!

次々と矢を上空へと飛ばす。しかし、敵は強靱な手足を鞭のように振るい、鉤爪で叩き落としていく。そのうちに、ウンガの矢筒から矢がなくなってしまった。

それを好奇と捉えたのか、勢いよく降下してウンガに迫っていった。

ザシユ!

「ぐう!!」

すれ違い様に、肩口を切り裂かれ、鮮血が舞った。

ウンガは肩を抑え、思わず膝をついてしまった。

一度上空へと戻った怪物は、再び飛んでウンガの元へと向かった。

「父さま!!」

ベシ。

「グギャウー！」

ウンガに飛びかかろうとした矢先、横から飛んできた石が正確に怪物の目に辺って

呻いた。獲物を狙おうとしてできた一瞬の隙を突かれたのだろう。

「プレイボール！」

第二球！石を持って振りかぶり、リルは投げた！

「ガアウ!!」

目に当たって怯み、その隙に第二撃を再び目にぶつけた。

怪物はウンガから離れ、空高く飛び立って行った。

「大丈夫？」

「うっ．．すまん。とりあえず、村に案内しよう」

黒道家にて、現在、重苦しい雰囲気にもまれていた。

「リルの行方が見つからない」

「どうするか」

「もはや並盛町にはいないかもしれないですね」

「だがそんなこと可能か？」

「ふむ、本当に神隠しにでもあつたかのようですね」

「このままではマズイな」

「ええ。もしもこのことがクルドさんに知れたらこの町滅びますよ」

「あの親馬鹿には気づかれないようにしないと」

「まあ都合よく来るわけでも電話がかかってくるわけでもないから問題なくね？」

♪♪♪♪♪ブツ。

「そうですね。僕はもう一度探してきますよ」

「今の電話は大丈夫か？絶対わざと切ったよな？」

「平気です」

「かわいそうな黒道家の黒電話・・・」

「おいしー！」

あの後、ウンガによって近くにあった村に案内されたリル。危ないところを助けてくれたので、ウンガはすでにリルを味方と認識した。

自分だけでなく、自分の子供すらも危機から救ったとのことなので、リルは本来余所者を入れない村の中に入る許可を手に入れたのであった。

そして現在、ウンガの家にておやつをご馳走になっていた。

ちなみにおやつはリルの見たこともないような青い果実を使ったタルト。

リルの表情を見るに、その味は中々に美味のようである。

そして食べ終わり、一息ついたた。

「それでさっきの何？ ユーマ？」

「さっきの奴は、俺たちがオルギルと呼ぶ生物だ」

オルギル。

見た目は四枚の羽を生やした黒い馬のようだが、四肢の先についているのは蹄でなく頑強な鉤爪。

さらに目は赤く光、牙は鋭く、馬よりはるかに大きく強靱な顎を持つ。

空を自在に飛び、大地を踏みしめ獲物を捕らえる野生の生物のようである。

「オルギル？ 弓以外に武器ないの？ そんなに強いのか？」

「弓の他には、まあボウガン、て手裏剣、あとは吹き矢とかが」

(なんで飛び道具しかないんだろ・・・)

リルが村を回って知ったのだが、この村には近接格闘という物が存在しないらしい。そんなことあるのか?と思つたが、この村の人たちは身体能力的には高い方だが、今まで村に現れる同じ人間の敵などいなく、それらの能力は全て畑を耕したり荷物を持つたりと生活に役立つ能力。

攻撃の手段として接近して戦う術を学ばず、遠くの獲物を獲る為の、つまり遠距離の敵を仕留める技術だけが発展していったということらしい。

そのため、弓は小さい力で遠くへと飛ばすように作られ、吹き矢は連射すら可能。口シアンルーレットすらできるといふ高性能ぶりを持つという、妙にすごい武器が出来上がったらしい。

「しかしリル、迷つたとはな。コイツは困つたな・・・」

「どうして?」

「一応俺もこの村の外に詳しくはないんだが、帰り道には心当たりがある」

「そうなの?」

コトリ。

物音が下ので二人とも横を見てみると、扉が少し開いてアモンとイルナがこちらを見ていた。

「二人とも、おいで」

ウンガがそう言うのと、二人がトコトコと歩いてきてリルの隣まで来た。

「お姉ちゃん、さつきはありがとう」

「ありがとう」

「うん、どういたしまして。怪我なくてよかったね」

リルがそう言うのと、二人とも笑顔になった。

アモンが「お礼」と言つて握つた手を差し出したので、リルが受け取る。

広げてみると、紐に通された鮮やかな羽飾り。木で作つたビーズのようなものと、紐と羽で作られた民芸品のようである。艶やかで鮮やかな色合い、綺麗なネックレスであつた。

「わあ、綺麗。ありがとね、アモン」

「えへへ」

「それでどうする。もう帰るか?」

「そうだね、お使いの途中だし」

「もう帰つちやうの?」

「もうちよつとゆつくりして言つたら?」

帰ろうかなという事言うのと、アモンとイルナの二人は少し悲しそうな顔をする。

そしてリルの服の裾を掴んで引き止めにかかった。さすがにリルも悲しそうな自分より小さい子の頼みを無下にしたくないが、自分もお使いがあるのでリルの中で天秤が揺れていた。

「えつと・・・」

「リル、ちなみにお使いの内容は？」

「えつと、挽肉と玉ねぎと卵」

「それならこの村にもあるぞ」

「ホント!？」

「皆戻って来ないわね」

「母さん、お腹すいた」

「あら、じゃあおやつでも食べましょか」

「うん！」

「確か、お隣にもらったお餅があったし……お汁粉でも作ろうかしら」

「やったー!」

「夕輝は甘いのがいい?」

「甘い!」

「ちよと待つてね」

黒道家には、朝菜と夕輝しかいなかった。

「おお! ホントにある。ていうかすごい」

リルの目の前にあるのは、元が小型サーベルタイガーのような生物から作られた挽肉。そして卵はまるでダチョウウの卵のような大きさの、綺麗な模様の描かれた卵。玉ねぎは、玉ねぎというよりキャベツのようだった。

「こんなに大きいのは初めて見たよ! ホントにもらつていいの?」

「ああ、俺やこの子達も助かったしな。お礼にもらつてくれ」

「ありがとう」

「ねえ遊ぼう！」

「遊ぼう！」

「お使いも終わったし、いいよ！遊ぼうか」

「やった！」

家の窓から三人が遊んでいる様子を、ウンガは微笑ましそうに眺めている。

村内にいた他の子供も次第によつてきて、皆で楽しく遊び始めた。

すでにリルは、この村に溶け込んでいた。

そしてしばらく時間が立って、

「それで帰り道どこ？」

「帰り道は、ここから少し森の奥に行つたところなんだが……」

「どうしたの？」

徐々に菌切れの悪くなるウンガに不思議に思い聞き返すリル。

「あそこつてオルギルの巣なんだよな」

「……」

「昔はあそこには別の生物が住んでたんだがな」

「そうなの？」

「カリオンという生物でな。美しい羽と体軀を持つ生物で、あの怪物が来てから姿が見えなくなつたんだ」

ウンガは悲しそうに顔を伏せる。

最悪のことを想像しているみたいだが、あまり信じたくないようだ。

「もしかしたら避難してらんじやない」

「避難？」

「あの怪物追い払つてくるよ。そしてらそのカリオンもきつと戻つてくると思うよ」

「リル……だがあそこは危険だぞ」

「平気平気。じゃ、ちよつと行つてくるね」

「リル！ 待て！ つつ！」

肩の傷が痛むのか、逆の手で肩を抑える。

静止の声を効かず、ウンガを家に残してリルは村を出て行つた。

そしてすぐに戻つてきた。

「それでその巣つてどこにあるの？」

「……………」

並盛町を風のように動き、移動する影がいくつかある。

大地を蹴り、壁を蹴り、屋根を蹴つて移動しながら、目は忙しくあたりを見回す。電柱の上にしやがみ、光努は周りを見た。

「いないな。どこに行ったのやら。おい、お前知ってるんじゃないのか？」
「何をだ」

光努の肩に現れたハクリに尋ねる。

「リルの居場所だ。お前なら自由にどこへでも飛ばせるんじゃないのか？」

「まあできないことはないけど。今は場所はわからないな」

「どうしてだ」

「おしやぶりついてるし。やることには制限がかかってるんだよ」

「……使えない奴」

「おい、聞き捨てならねえ。なんてこと言いやがる」

「だって事実だし」

「……」

ハクリの体から、ただならぬ威圧感が漏れ出てきた。

「ハクリ？」

「いいだろう。そこまで言うのなら、少しだけ力を開放してやろう」

「え？ いや別にそこまでしろとは」

「10秒くらい、世界中で天変地異が起こるかもしれないが、我慢しろよ」

「やめろ！ 全力で今しようとしてることをやめろお!!」

小さな滝。

透き通るような水が流れ落ちて滝壺を作る。

そこから少し広がって小さいが、綺麗な湖を作り出していた。

だが、周りの木々はそれとは対照的だった。

草花はどす黒く、周りの木々も枯れている。

まるで地獄の一丁目のよう。だがそれと対象な湖はオアシスのようにも見える。近

くの黒い草の上に、黒く丸まっている生物がいた。

全身が黒い毛並み、背中から生えた4枚の闇のような黒い羽にくるまつているその姿は、巨大な黒く丸い塊にしか見えない。

わずかに上下運動をしていることから、それが生きている物体ということはわかる。サク。

そんな場所に、足音がかすかに響く。

異常なる聴覚を持つ黒い生物は、耳をヒクヒクと動かし、閉じていた目を開いた。その目は血のように、真っ赤に光っていた。

オルギルは、目の間に現れた人物を睨んだ。

「ウンガ、隠れるのは無駄みたいだよ」

「そのようだな。二人は下がっている」

「うん」

アモンとイルナは近くの草むらに隠れ、その前にウンガとリルが立った。

「じゃ、後方支援よろしく☆」

「正直子供を戦わせるのは気が進まないが、俺にはこれしかできないからな」

そう言つて弓矢を構えるウンガ。そしてリルは、両刃の西洋剣を取り出して構えた。

オルギルは立ち上がり、息を吐き出しながら全身から激しく殺気を漂わせた。

野生動物によく見られる臨戦態勢に入ったのだろう。

全身の毛を逆立たせ、鉤爪を立て、羽を広げて威嚇した。

「ガアアアアア!!」

「はっ!」

ウンガが素早く弦を引き絞り、矢を飛ばす。

一度に数本の矢を発射できる弓は、何本もオルギルに向かって跳んでいった。

弦自体が強力なものもあつてか、並大抵ではない速度で飛んでいく。

オルギルは反射的に全てを横に移動することで躲し、こちらへと突っ込んできた。

「やっ!」

キイーン!!

リルの振りかぶった西洋剣にオルギルの鉤爪が当たる。

鋭い音を立てて二人の持つ武器がぶつかりあつた。

さすがに腕力はオルギルの方がはるかに分があるため、リルは押し倒されるところだったが、自分からオルギルの体の下に滑り込むように入り、下から剣の塚で殴り込む。

「グアウ!」

すかさずウンガがボールのような物をオルギルの顔に当てた。

パン!

「グウアアアア!!」

ボールがぶつかり、はじけた。

そこから粉のような物がオルギルの顔に降りかかり、苦しみ始めた。ボールは刺激臭のする木の実から作られた塊。目に直接かかったため、オルギルは悶え苦しんだ。

「てやー!」

オルギルが一瞬硬直した際に、リルはオルギルの下から出て、すかさず剣の柄でオルギルのこめかみに強打する。

脳を揺さぶられ、オルギルはふらつき、思わずしやがみこんでしまった。

「ん?」

「どうした!リル!」

「なんか後ろの羽変だよ」

ウンガがリルの言葉に、オルギルの背についている4枚の羽の内、後ろの2枚を見てみると、前の羽とあまり変わらないが、まるで陽炎のように揺らめいていた。まるで黒い煙が羽の形をとってくつついているみたいに。

「確かに何か変だな」

「ちよつとあれ狙つてもいい?」

「何かわかるのか?」

「ん〜。勘だけど、あれ外した方がいいと思う」

「いいいぜ、お前の勘に従うよ」

そう言つて弓を構え、弦を引き絞り、矢を構えて狙いを定めた。正面から見て左側の後ろの羽。

そしてリルは西洋剣を両手で持ち、地面に平行になるように額の横につけて構え、正面から見て右側の後ろの羽を狙う。

「はっ!」

ウンガが矢から手を離し、通常の弓よりもはるかに強力な一撃が、オルギルの後ろ羽を根元から射抜いた。

「グアアウ!!」

「——!」

ザッ!

気づいたら、リルはオルギルを通過しており、残り3枚の内、後ろ羽が根元から切り裂かれた。

「ガアアアア!!」

二箇所羽があつたところから、黒い霧のような物が吹き出した。

オルギルは先ほどよりもはるかに苦しそうに悲鳴を上げて暴れだす。

次第に黒い霧がオルギルを包み込んで霧が晴れたとき、リルとウンガ、そしてアモンとイルナは思わず息を飲んだ。

その場にとどまっていたのは、オルギルではなかった。

全身は銀色に近い、真っ白な体毛。長く、強靱な四肢と蹄を持ち、大きな体躯でその場に佇む光景はまるで幻想のよう。その顔には、凛々しさと精悍さが醸し出されている。そして一際目を引いたのは、その背から伸びた2枚の真っ白い羽。

神々しさを出すその姿は、まさに天馬と呼ぶにふさわしい。

「カリオーン！オルギルはお前だったのか！」

「クウ」

「綺麗……。カリオーンってペガサスのことだったんだ……。」

滝の流れる湖の淵に佇むカリオーンとウンガ。二人の仲の良さそうな光景に、リルも思わず笑顔になった。

ガッ！ドゴゴゴゴ！

「離せ！光努！今すぐリルの居場所を」

「いややめろ！洒落にならんだろうが！世界を壊すつもりか！」

「大丈夫。表面を削るだけに止めとくから」

「十分危険だからな!?!いい加減にせんか」

ドゴオ!!!

「それで止められると思ったか？」

「いいだろう。俺もお前を全力で止めてみせる！」

「できるなら、やって見せろ！光努！」

互いに激しく好戦的になりながら、両者が激しくぶつかりあった。

いやいや、お前ら何やってんだよ！

「やつほーいー！」

「わあー！」

「すーいー！」

「クウー！」

カリオーンの背にまたがり、大空を翔けるリルとアモンとイルナ。

子供が一度は夢見る光景が今ここに実現していた。

そして人通り飛び回り、元の滝壺へと戻ってきた。

「この滝壺の裏にある洞窟。ここからなら、おそらく帰ることができる」

「うん、ありがとう」

背中に食材の入った風呂敷を背負って滝壺の裏にある洞窟の前に立つリル。

見送りに、ウンガにアモンとイルナ、そしてカリオンがリルの前に立っていた。

アモンとイルナは少し寂しそうにしていたけど、リルが二人の頭を撫でると、二人と

も嬉しそうに笑った。そんな笑顔をみているリルも笑い、ウンガにもお礼を言う。

「じゃあね皆。また機会があったら会おうね」

「ああ。歓迎するよ」

「じゃあね、お姉ちゃん」

「じゃあね」

「クウン」

リルは皆に見送られて、洞窟の中へと入って言った。

暗く、何も見えない洞窟の、奥へ奥へと……。

「あ、出口だ！」

洞窟から出たとき、外の光の眩しさに、リルは思わず腕で目を隠す。

再び開いたとき、そこはなんの変哲も無い公園。

並盛中の近くにある公園に、リルは立っていた。

「ここって、公園？戻って来れた！」

見覚えのある景色に、駆け足になる。よく見てみると、夕日も沈み掛けて周りはおれんじ色に染まっている。ふと後ろを見てみたが、当然のごとく、公園の中が見えるだけで洞窟なんてものは存在しない。リルは半ば予想していったのか、少し寂しそうな顔をしたけど、そろそろ帰らないかと思えば走っていると音が聞こえた。

「しやらくせえ!!」

「甘い！」

「何してるの？」

ピタリ。

リルの言葉に、今まさに激突しようとしていた光努とハクリが止まった。

「・・・・・・・・」

「何してるの？ケンカなんかしちやダメだよ？」

「リル!?!」

いきなり声を出して来た光努とハクリに思わずリルは吃驚したけど、二人が自分を探していたと知ると、自然と笑顔になった。

「じゃ、帰ろっか」

「ああ」

「皆心配してるからな」

三人で手を繋いで、後ろに伸びた影を作りながら帰路についたのであった。

余談だが、リルのもつて帰ってきた挽肉玉ねぎ卵を見た皆はたいそう驚いて不思議がっていたそうであった。

(そういえば、あの黒い羽ってなんだったんだろ?)

暗く夜に染まった並盛町の上空に、ソレは飛んでいた。

体はない、あるのは黒い漆黒の羽が1対あるのみ。

ふよふよと上空で滞空していた羽は、掻き消えるように、あつという間に姿を消したのだった。

まるで闇に溶け込むように、その場から消えたのだった。

『笑わない道化』

屋上に飛び出してきたのは、白い影。

屋上のフェンスの上にとった人影は、異様な人物だった。

真っ白いローブにフードを被り、そこから見える顔は素顔でなく仮面。

白い顔部分に、黒い三日月のような口。目の部分には青いダイヤと、赤いハートのマークが記されていた。

「はあく。外れた。一人くらい、始末できると思ったんだけど」

言葉を聞いた瞬間、その場の全員に何かが突き刺さるような感覚があった。

鋭く、それでいて冷たいような感覚、強大な殺気を惜しげもなく周りにぶつけてきた。明らかに、自分らを始末するつもりだと。

「来たな、”道化師”ジャンピエロ」

「そこにおわすは、沢田家光殿。まさかボンゴレ門外顧問様がこんなところにいるとはな。私はついてる」

驚いた風もなく、棒読みに近いような喋り方。明らかに家光もこの場にいることを知っていないながら攻撃を仕掛けてきている。

「ついてないの間違いじゃねえのか？」

そんなジャンピエロに家光は眼光を鋭く光らせ、いつでも対応できるように臨戦態勢をとる。そんな家光を見て、ツナ達も構える。

「いやいや、ついてるさ。お前も一緒に始末できるのだから」

ぞわっ！

ジャンピエロの瞳が怪しく光ったような気がした。

重い殺気があたりに充満してツナたちは一瞬息が詰まったが、すぐに対応するように標的を睨みつける。屋上の上はまさに一触即発の雰囲気を出していた。

だが、そんな殺気にはるかに慣れ親しんだ者達には、膠着状態などなかった。

「俺ら忘れてんじゃねーよ」

ベルが自前の細かな細工を施されたナイフを数本取り出し、ジャンピエロに向かって投げつける。真っ直ぐに目標の顔面に向かって飛んだナイフは、ジャンピエロに届く前に弾かれた。

ジャンピエロが軽く手を振って弾いたが、よくよく見てみると弾いたその手の指には、くるくると回る厚みの薄いリング状の金属が引っかかっていた。

雷雲から時々ゴロゴロとなる光に反射して、刃から異様な雰囲気が見える。

「ヴァリアーも抹殺対象なんだよね。そんなわけだし、お前ら全員死んでくれない？」

ジャンピエロの両手が素早く振るわれる。ツナ陣営とヴァリアー陣営に向かって、先ほどのリングと同じ物が飛んでいった。

「ちっ！果てるー！」

「はっ！」

獄寺がリングに向かってダイナマイトを投げるが、リングに触れた瞬間に切り裂かれた。た。

リングの回転と、刃がついているためにぶつかる物体は全て切り裂かれていく。

それを見た山本が山本のバッドを刀に変形させてリングを弾いた。

「おらあー！」

ヴァリアー陣営に飛んだリングは、山本と同じようにスクアーロの剣が弾いた。

「弾いたか。ま、それも予想通りだけど・・・ね」

そう言っただけの中から取り出したのは巨大なリング。まるでフラフープのような大きさの厚みの薄いリング。見た感じ、このリングにも刃が全体についているのが分かった。

そしてジャンピエロはそのフープを腕に掛けてくるくと回しつつ、唐突に、頭上へ

と投げつけた。

「!」

全員、一瞬上空のフープに視線が集まった。

そう、一瞬。

この一瞬、この場の人間の視界から、ジャンピエロが消えた瞬間だった。

「!くっ!」

滑るように山本の元へ接近し、両手に握っていたリングで山本に攻撃を仕掛けた。

キンキンキン!!

とっさには反応できなかった山本の刀と、ジャンピエロの手に持ったリングがぶつかる。

「甘い甘い甘い甘い甘い甘い甘いよ」

刀を振り下ろす山本の刀の上に乗る、リングを山本に向かって振るう。

「山本!」

「そいつあ、甘いぜ!」

足の裏でコンクリートを踏みしめ、上に切り上げるように刀を振り、ジャンピエロは宙を舞った。

そしてそのまま飛んでいったジャンピエロは、ヴァリアー陣営へと飛んでいった。

「こっち来たぜ、スクアール」

「う」お、おい！上等だあ！返り討ちにしてやる！」

獯猛な笑みを浮かべ、左手に装着された剣を構えた。

上から降ってきたジャンピエロは、体を回転して態勢を立て直し、直径30センチ程あるリングを取り出した。

「おらあ」

ガキーン！

全員目を開いて今映っている光景を見た。

スクアアロがジャンピエロに向かって突き刺した剣に素早くリングを通し、リングの内側に足を引っ掛けて踏みつけ、釣られて剣が引っ張られるようにして地面に突き刺さった。

「なにい!？」

「じゃあな」

再びリングを構え、スクアアロに襲いかかった。

だが、スクアアロは突き刺さった剣と腕を軸にして前に回転、そのまま足をジャンピエロへと振り下ろした。ジャンピエロも、腕でガードをして一旦距離を取った。跳び際にリングを複数投げつけて。

キキキキキーン！

剣を引き抜き、素早く振るったかと思うと、スクアーロの剣には合計7本ものリングが掛かっていた。

飛んできたリングを全て、剣に通して止めたのである。

「ひゅう。さっすがスクアーロ」

「けど、あの”道化師”も中々やるよ。スクアーロと戦いながらも、こちらには一切隙を見せていない」

マーモンの言う通り、現在進行形でスクアーロと戦っているが、ヴァリアー側にも、ツナ側にも、隙らしい隙を見せずに戦い続けている。

コオオオ！

「！」

スクアーロとジャンピエロが、同時にその場から飛び退くと、突如光の柱が飛んできて、先程までいた破壊した。

全員が光の飛んできた方向を見ると、屋上の貯水タンクの上にはいたのは、

「XANXUSか。いないと思ったらそんなところにいたとはね」

「う”お”おい！てめえ、今俺も一緒に狙っただろお！」

「うるせえよカスザメが。いつまでもやってんじやねえよ。それと”道化師”」

XANXUSが右の手のひらを上に向けながら”道化師”を睨みつける。

「?」

「おめえの言葉は嘘くせえんだよ」

右手からまばゆい光が放たれたと思つたら、頭上に迫ってきたフラフープ大のリングが消し飛んだ。全員の目をそらすために最初に”道化師”が投げたリングは、貯水タンクにいたXANXUSを狙って投げたものでもある。闇と雨にまぎれた銀色の刃物にXANXUSは気づいていた。

「お見事だね。ん?」

ジャンピエロが不意に上を向く。その行動にツナ達も警戒を続けたまま、上に視線を向ける。雨が降り続ける中、視界に妙な物を捕らえた。

「なんか黒い物が・・・」

誰かがそう呟く。

雨の中、そこだけ切り抜いたかのように黒い物体が降ってきた。

ドゴオオ!

上から降ってきたため、コンクリートの屋上に当たり土煙が出る。

「一体何が降ってきたんだ?」

「黒くてよく見えなかったけど」

「ていうかなんか煙多くね?」

当たりに立ち込める土煙いや、ただの煙のようなものまで混じって屋上全体を包み込む。だんだんとXANXUSのいた貯水タンクまで侵食して、屋上から下へと流れ出している。明らかに人為的に出しているであろう煙の量。この場の全員が、視界を煙に包まれた。

「十代目ー！ご無事でするか！」

「俺は無事だ！皆大丈夫か！」

「ツナーー！こっちは大丈夫だ！」

「父さん！」

「こっちもだ。ヴァリアー側も大丈夫っほいぞ」

「ボスー！！無事かー！！」

「るせえよ」

バキイ！

「ごふっ！」

「馬鹿かこいつ。おいスクアーロ」

「う”お”おい！どこに話してんだあ！俺はこっちだあ！」

「僕たちも全員無事みたいだね」

「たった今一人負傷したけどな」

ボフウ！

ツナが炎を纏った腕を振るうと、当たりに立ち込めていた煙が全て振り払われた。

その場にいるのは、ツナ達と門外顧問組織と光努、そしてヴァリアー達とチエルベツ口の人間ののみ。いつの間にかジャンピエロはこの場から消えていた。

「う”お” おい！あいつはどこだあ！」

「逃げられたみたいだな」

怒鳴り散らすスクアーロにベルはやれやれという感じに言う。

「さっきの黒いのはアドルフオだな」

「！それは本当か、光努」

「まず間違いないな」

光努は、落ちてくる物体の外見の微妙な特徴からアドルフオと判断した。家光たちがわからなかったのはただ単に見たことないから。そして、見送った光努の高性能な視覚が捕らえた。

落ちてきたアドルフオの巻き上げる土煙に紛れて、アドルフオはけむり玉を大量に巻いて、自分の手から大量の煙を噴出して、七輪の上にさんまをのせて団扇で仰いで、小麦粉を地面にぶつけて、煙を大量に増やして屋上を煙だらけにした。

（なんか変なの混じってたような。特に後半・・・ま、いいか）

「なんで邪魔をした。せめて一人くらい潰しても」

「いやいや、全然No problemじゃないだろ。All ster勢ぞろいじゃん」

「関係ない。私ならできる」

暗く染まった夜の道を、二人の人物が歩いていった。

仮面をつけて白いフードを目深にかぶったローブの人物。

隣にいるのは、先がボロボロの黒いマントをはおり、体中には黒いプロテクターつけられていた。顔には黒い帽子とマスク、そして目を覆うゴーグルのレンズが赤く光っていた。

対照的な色合いだが不審度はダントツでトップな二人。

”暗殺者” アドルフォと”道化師” ジャンピエロ。

見たら職質確実な二人が悠々と、並盛中から離れた道路を歩いていた。

「やるならやっぱり個別の方が、Me達も仕事がとつてもEasyだし。确实」
「まどろっこしいね。一気に纏めての方が、とつても簡単だと思うよ」

互の意見は正反対だけど、仲が悪いというわけでもなさそうな雰囲気。

「とりあえずStop。ウィーラが来るまでStopと言ったらStopだ」

「……了解だよ。来たら連絡しておくれ」

そう言うと、ジャンピエロはロープをはためかせ、その場からすぐにいなくなつた。
一人に残されたアドルフオは、暗い道路を歩いていた。

”棟梁”ウィーラ。Perhaps、来るのは……2日か3日くらいかかるか」
気づいた時には、そこには誰もいなく、ただ暗い闇だけが広がっていた。

『嵐の戦いは化かし合い』

雷の守護者の対決、結果発表。

勝者、レヴィ・ア・タン。

雷と大空のハーフボンゴレリングはヴァリアー側に奪われました。

最終的に勝負は乱入者によって微妙なところになったのだが、チエルベツロが言うには、“道化師”の攻撃をツナが助けたとき、レヴィの攻撃も一緒に助けたため失格とします。ということらしい。なんとまあ融通の聞かないというか、試合を中断しないのが奴らしいといえらしい。

「で、現在1勝2敗なわけだが、次に負けたらまさに崖っぷちだな隼人。ファイト！」

「てめえは俺にプレッシャーをかけたのか!?!」

「いや、ただ頑張れと言いたくて」

「嘘だろ！絶対わざとだろ！」

「それより急いだ方がよくね？」

時計を見てみると現在の時刻は21時59分20秒。つまり後40秒以内に戦闘の舞台である校舎の3階へと行かないと失格になって負ける。隼人の家庭教師のシヤマルが、隼人の必殺技が完成するまで戦うことを許さなかった。なのでギリギリ完成させて、今走って向かっているところ。それほど今回隼人の戦う相手は強敵。

ベル・フェゴール。

オリジナルの柄や刃に細工が施されたナイフを武器に扱うヴァリアーの中でもトツプクラスの殺しの天才。暗殺者集団のヴァリアーに自分から入隊したと言う変わり者で、噂ではとある国の王族の血を引いている本物の王子だとかなんとか。あの頭の王冠は飾りだと思っていたが、マジだったんだな。すまんなベル、自称天才じゃなくて一応天才だったのか。今度会ったら元王子って呼んでやるか。

しかし必殺技を完成させてその元王子と戦えるのに、遅れてしまったら洒落にならんな。今俺と隼人は校門を通ったところだ。すでに30秒切ったので後30秒で3階まで行けるか？

「くそ！正直ギリギリ着きそうだな」

「じゃあショートカットするか」

「ああ!?!」

「ちよつと揺れるぞ」

「おまー！何をおおおおお!!」

隼人の後ろ襟を掴んで、そのまま壁を走った。

「うおお！危な！」

「よし！間に合うぞ」

「今回は感謝しとくぜ！おらあ！」

隼人が校舎の壁の時計に向かってダイナマイトを当て、ちょうど長針が12のところに来る前に爆発させた。

ガシャーン！

「ツナ、届け物だ」

「10代目！獄寺隼人、行けます！」

「待たせたな、前髪長い元王子」

「よしそのケンカ買ってやる。遺書を書く暇なく惨殺してやる」

「できるものならやってみな。お前の王冠を高値で売りさばいてやるよ」

「上等」

光努とベルがお互いに拳とナイフを構え、いざ戦いの火蓋が切つて落とされようとした。

「て、オメエは戦わねーだろ！今回戦うのはオレだよー」

「したのだが、獄寺がストップをかけたので一時中断した。」

「今いいところなのに」

「地の文見ればそんな感じだけど、もう一度言う。今回は嵐の守護者の戦いだから俺が戦うの！わかったか！」

「お前・・・地の文とか何言ってるの？」

「うるせえよ！おいチエルベツロ！とつとと始めるぞ！」

若干傍観気味だったチエルベツロが、獄寺の言葉に無表情ながらもつとつとなつたような気がした。が、すぐに気を取り直したのか二人でバトル説明を始める。

今回フィールドとして用意されたのは、校舎の3階全ての廊下と教室内。

そして一番のポイントは、このフィールド内のいたるところに、ハリケータータービン

と呼ばれる機械が設置されてるといふこと。

1立方程の大きさの機械。側面4方向に噴射口が設置されており、ランダムに一点から超強力な風（具体的には教室の端から使えば机と椅子を全部巻き込んでガラスを吹っ飛ばして外まで押し出すくらい）が放出される。そしてこのタービンの内部には制限爆弾が設置されており、開始から15分以内に嵐のリングが完成して所持しないと順次爆発し、3階を全て破壊するという。

つまり、時間制限ありのデスマッチ。

「なんだ？今のガラス音は？人が人はいねーか？」

といつて現れたのは、シヤマル。

いつの間にかチエルベツロ二人の後ろに達、左右から二人の胸を鷲掴みにしながらどうとうと現れた。

もちろんそのあとチエルベツロの二人に制裁を加えられたの言うまでもない。

「トライデントシヤマル・噂では2世代前のヴァリアーにスカウトされ、それを断つた程の男……」

マーモンがそう言うが、そうには見えないとツナたちが思うのも不思議ではない。普段の行いが行いだからである。

「ただの変た……セクハラ親父かと思つたら、割とすごいやつだったのか」

「おい光努。お前言い直したみてーだが何も変わってないぞ」

「そうだったな、変態」

「誰が変態だ!」

” 跳ね馬のディーノ” に” アルコバレーノのコロネロ” そして” トライデントシャマル”。どれもマファイア界では知らぬものも少ない有名人達。

そう言った面々がボンゴレの元に、ツナの元に集まるのに、ヴァリアー側、スクアアー口も素直に驚いていた。

「まあでも、これで少しは楽しめそうじゃん。今日の勝負の相手」

王冠を載せ、目元が隠れ、楽しくなってきたとばかりににやりと歯を見せて笑うベル。一方ツナたちは了平発案の円陣くもうぜ、という話になってる。

最初は嫌がってた獄寺も、ツナの誰も欠けたくない、団結したいという思いを聞いている内に感極まり、現在入院中のランボの服しっぽを入れて円陣を組んだ。

そんな様子を見て光努は、

(隼人、「10代目10代目詐欺」とかあったら案外簡単に引つかかるんじゃないや・・・)

ちなみにランボの入院は、ツナの家族には歩いている時に雷が降ってきて当たったと言っているらしい。

あながち間違ってもいない。

「それでは、両者中央に集まってください」

今回のフィールドは範囲が広いので、設置された監視カメラの映像をモニターに移して観覧する。

その際、観覧席には赤外線感知式のレーザーを設置したという。

そして、ベルと隼人が向かい合った。

「お前、肩に力入りすぎじゃね？」

ポン、と気楽そうに隼人の肩を叩くベル。それに対して隼人は睨んで答えた。

「それでは、嵐のリング戦。ベルフェゴールVS獄寺隼人。勝負開始」

ピッ!

相手の出方を伺うため、小手調べとばかりに着火したダイナマイトを一つベルに向かつて放り、爆発した。

そして煙が晴れた時には、隼人を取り囲むように円形状にベルのナイフが、宙に浮い

ていた。

「！」

カカカカカカ!!

咄嗟に躲したが、先程まで隼人の立っていた場所には大量のナイフが突き刺さった。ベルの使用する、自前の装飾が施されたオリジナルナイフか。

観覧席にあるモニターだと画像が荒くて少し見えにくいだが、あれもベルの使うワイヤーとの応用技だな。カウボーイの投げ縄のごとくワイヤーを、隼人を中心に置いて投げつけ、あらかじめワイヤーにはナイフを備え付けておく。あとはワイヤーを引けば、投げ縄で相手を捕まえるように、ワイヤーに付いたナイフが中心へ向かって飛び交う。細いワイヤーを使用してるため、傍から見たらナイフが飛んでいるようにしか見えないな。

ま、慣れればすぐに見えるようになるが。

それにしても、ベルはフィールドをよく使ってるな。

ハリケーンタービンから送られる強風をうまく利用して、隼人ボムを吹き飛ばして防いでいる。隼人はボムを放り投げるから、相手に届いてから爆発までに少しだけだが時間がある。

その間に、ボムと自分の間にタービンの風の通路を入れる。それだけでボムはベルへ

と届かなくなる。しかも、デタラメに吹く強風を利用して、ナイフを風に通すだけで隼人まで届かせている。さすがはヴァリアークオリティーといったところ。まあワイヤーを使ってホーミング式に隼人にぶつけてるから少しずるいかな。

まあ気流を呼んでワイヤーもうまく使っているから、さすがベルというべきか。おかげで隼人は防戦一方だな。

タネのわかつている攻撃を喰らうのより、タネのわからない攻撃を喰らう方がかなり面倒だしな。爆発したら確かにダイナマイトは威力が高いが、当たればの話。それに比べてベルのナイフ裁きと、宙に浮いたり見えたり見えない隼人に当てたり、どこからともなく飛んだり、隼人からしたらわけがわからなくてたまつたもんじやないな。

もう隼人には何本かナイフが突き刺さっている。

このまま喰らい続けるのはまずいかもな。

「うしし、もう大当たり？嵐の守護者がこれじゃあ、お前のボスも知れてんな」
ベルの挑発ともとれる余裕の表れ。その言葉に隼人は思った。

(ぜってえ、負けねえ！)

隼人は座り込み、うつむき、考えた。ベルの攻撃手段を。

なぜ死角からナイフが飛んでくるのか、なぜ姿の見えない自分に向かってナイフを当てられるのか。

ベルはやりすぎた。あまりにも、気流を読むというのは理にかなってさすがと言いたいが、それだけじゃ説明がつかない攻撃をやりすぎた。ヴァリアークオリティと言っても限度があるからな。何かしらのタネがあるはずと考えたな、隼人。

「!」

モニター上の隼人が自分の肩を見た。気づいたな、ベルの仕掛けたトリックに。

証拠はありすぎてるからな。

「怒涛の攻めのシメは、針千本のサボテンにしてやるよ」

二十本程のナイフを扇状に構え、ばらまくように投げつける。全てのナイフは吸い込まれるように風にのり、隼人へと向かっていった。

ドストドストドスト!!

「(バ)・獄寺君!!」

「!」

パリン!

幾本ものナイフが突き刺さり、教室の中から窓を割って廊下に出てきたのを見て、ツナたちは驚いた。

それはナイフが突き刺さった無残な姿の隼人・・・ではなく、

「人体模型!」

ベルのナイフが突き刺さった人体模型が現れた
ズズズ。

「ひい、動いた！」

「バカ、よく見てみる。首に何か絡まってるぞ」

リボーンの言う通り、人体模型の首元に絡まっていたのはごく細のワイヤー。絡まった方と逆の方のワイヤーは、獄寺の手の中にあつた。

「これがためーの技の正体だ」

ベルの技、ワイヤーの使い方。

最初に隼人の肩を叩いた時、ワイヤーの付いた針を取り付けた。

ついでに針には、部分的に痛覚等を無くす局所麻酔が仕込まれてるから隼人はなんの違和感もなく動いていた。

あとはワイヤーにナイフを引っ掛ければ自動で隼人の元へ飛んで突き刺さるといふからくり。

廊下にて風の中対峙するふたり。

「ベルのワイヤーは知ってしまえば簡単なからくりだよな。というか敵の肩に付けるとか大胆なやつ」

「ていうか光努、あいつのワイヤー知ってたの？」

「無論。一度軽くバトったことあったからな」

「ええ！だったらそれ教えても！」

まあ教えても良かったんだけど、

「だって隼人だけ相手の技を知ってちや、フェアじゃないだろ？」

「え？獄寺君だけ？でも相手も獄寺君のダイナマイト知ってるし」

「ま、見てろって」

画面上の隼人は、新たなダイナマイトを取り出した。

「果てろ!!」

「それ、当たらないから」

なんのためらいもなく、隼人はダイナマイトを、風のが吹きすさぶ事も関係なしに、ベルに向かって投げる。

「ダメです！また風の壁にぶつかる！」

（行け！）

ダイナマイトの本体上部と下部から煙が噴出し、二度の方向転換をし、風を避けてベルにまっすぐ向かった。

「！」

「俺がへたうって、十代目に恥欠かすわけにはいかねーんだよ」

ドガガガガガガ!!
風の壁によって避けることもできず、ベルは爆発に巻き込まれた。

『考えず戦い考え戦う』

ベルの、タービンから発せられる突風を利用して、ボムを無力化するという作戦はさすがのもの。普通はタービンから風が来るタイミングを読むのもそう簡単にはいかない。それをやってのけるからこそベルは天才と呼ばれている。

だが今回はそれが裏目に出た。

隼人のボムを同じように無力化するために、自分の前後で突風が吹くタイミングを読み取り、それに合わせて動いて盾とする。たとえ前から後ろからとボムを投げられたとしても、風に流して無力とするような態勢。

が、そのため身動きが取れなかった。

体重が300キロにでもならないととてもじゃないが耐えられないような突風。

隼人の新技、二度の方向転換を可能にするロケットボムに意表を疲れたというのもあるが、ただ逃げれないというのもまた事実。

結果として、隼人の投げたロケットボムは、確実にベルフェゴールに命中した。

だが、その結果に喜ぶツナ達とは違い、ヴァリアー側は難しい顔をしていた。いわゆる「やってしまった」というような表情。その表情の訳は、すぐに分かった。

「あゝはあゝ あゝゝゝ!!」

常識が吹き飛んだ、理性がなくなったような狂気を孕んだ声。

爆煙の中から聞こえて来たその声を聞いたとき、隼人は何が起きたのかと目を見張った。晴れた爆煙の中から現れたベルフェゴール。怪我もして少し少ない量の血も流れている。にも関わらず、彼の顔に浮かんでいるのは苦悩の表情ではなく、むしろ逆。愉快そうに、快感そうに、狂ったように笑っていた。

「自分の血を見てから始まるのさ。プリンス・ザ・リッパ切り裂き王子の本領は」

そう言ったマーモンの声は、彼らは聞いたのだった。

ベルは自分の血を見ると狂ったように興奮し、狂人となって本領を發揮する。

ベルはとある王国の王子だったのだが、彼には自分に瓜二つの双子の兄がいた。そう、いた。その兄は、ベルによってメツタ刺しに惨殺されたという。

その時の殺しの快感が忘れられず、ベルは暗殺部隊ヴァリアーに入隊した。

ベルが自分の血をみて興奮するのは、自分が殺した兄の姿をその血に見るから。

幼少のころ自らが行った殺人。まだヴァリアーの修練などせず、任務などしたこともない、そんな子供が自らの兄を手にかけた。ベルの天才的と言われる殺しの才が現れた瞬間だった。

自分の殺した兄の影を、傷ついた自分の血から見る。

自分の幼少を振り返り、身体能力関係なしに最も天賦の才が冴え渡り、殺すことに最もたけた時代が蘇り、ベルの技は鋭さが増し、動きにまったくの無駄がなくなり、彼の殺人鬼としての本領が発揮される。

子供のように無邪気でむき出しの残虐性が、今のベルにはよく出ていた。

「ロケットボム！」

再び飛び交う突風をものともせず方向転換して回避し、ベルに向かってまっすぐ飛ぶボムの嵐。先ほどと同じ光景、だが結果は全く違った。

「！」

ふらりとしていたかと思うと、前に向かって駆け出す。

ロケットボムの隙間に体を入れるように走り、すれ違い様に目にも止まらぬナイフ裁きを持ってボムの導火線を切り裂く。さらに数本のロケットボムは、あえて導火線をそのままにして後ろに流す。

ダイナマイトという性質上、導火線を伝って中の火薬に火が届くまで爆発はしない。隼人はそこも計算してピンポイントで爆発するようにスピードや導火線の長さに火の強さ、相手に届く時間など変えて相手に投げつける。

そのため、今回のベルのように、爆発予想地点であった最初にベルの立っていた場所から前に向かって動くことで、爆発地点を自分の後ろに持つてくる。そしてベルが目の前を通っている突風に向かって跳んだ時、タイミングよく後ろで爆発が起きる。あらかじめ手をつけていなかったダイナマイトと、前にでた自分の近くで爆発する可能性のあった導火線を切ったダイナマイトも連鎖的に爆発し、爆風が生まれる。

ベルが跳んだと同時に起こったその爆発は、ベルを後ろから高く持ち上げるように、そしてそのまま隼人の元に向かう。

動きに無駄がなくなっている。

これがヴァリアーの中でも天才と呼ばれるベルの本領か。

「っっっっ」

前に進みながらナイフを投げつける。だが突風に阻まれ、さつきまでの隼人よろし

く、ベルのナイフは隼人の顔の横を通るだけで当たっていない。

バシユ！

(なに！)

が、ナイフに触れてないはずの隼人の顔には、行く本もの切り傷ができていた。

今のはナイフとワイヤーの応用技。ベルのオリジナルナイフの柄頭には小さな穴があり、そこに細長いワイヤーを通して投げつける。隼人の横をスルーして通ったがそのあと、隼人の後ろの突風にぶつかり横へと流れる。そのため、必然的にナイフが横に流れるのと同時にワイヤーも横に流れて、隼人の顔に当たって切り傷を生む。

ツナ達はまだ分かっていないのは、ベルの戦術をナイフとワイヤーの別々に考えていることと、最初のワイヤーが問題。最初のホーミングのタネを知ったため、ベルは隼人に攻撃を当てる為ワイヤーを使用した、という認識が生まれた。

つまりこれにより、「ベルは普段はナイフを使っているが、策に応じて様々な道具を使う」というような認識にもとれる。だからこそ、最初から知っている俺やヴァリアー連中と違い、まだまだ隼人の顔に切り傷が生まれたわけが分かっていない。

ベルの基本戦術が、ナイフとワイヤーを両方併用した戦術をとっているということあまり考えなかった。

そして、座り込んで思考をしている隼人の前に、疾走していたベルがナイフを手を飛

びかかってきた。

「どっかーん！血いー！」

血に濡れ、ナイフを持つその姿は、まさに狂気に満ちていた。

ピシ！

だが、隼人もただではやられない。

右手首のリストバンドに仕込まれた人差し指程の大きさのミニボムを、ベルと自分の間に入れ、衝撃に耐えるように腕をクロスにする。

ドゴン！

「肉を切らせて骨を断つ、か。小さいけど痛そう」

隼人の策略に、飛びかかったベルは小さい爆発をモロに喰らう。隼人もガードしたとはいえダメージは受けてるはずだ。

あのままだったら確実に隼人は殺られていたからな。多少の怪我は覚悟すれば、相手にもダメージを与えられる。

が、ベルは一度倒れたが、またすぐにむくりと起き上がっていた。相変わらず酔ったように楽しげに笑いながら血を流す。

脳内の快楽神経のエンドルフィンの多量分泌により、正気を失って痛みも鈍く、というか感じてないな。

隼人はベルと違つて傷つけばその分動きが鈍る。それに比べベルはかなり動けるが、やつとて不死身というわけではない。

どんなに意識が元気だろうと、怪我をすれば動かせない部位だつて現れる。つまり、だんだんと動きが鈍くなっている隼人か、しばらくは元気に動けるが、限界が来たら動けなくなるベル。早めに決着をつけないと、傷がすぐに動きに影響する隼人が不利だな。

ベルの攻撃のタネが全部見抜けてないから、隼人は一旦図書室に隠れたが、すぐに廊下側の窓から牽制するようにナイフが何本も中に放たれ、そこからベルが飛び込んで来た。

「飛ばば身動きがとれねえ、喰らいやがれ！」

ベルが空中にいる時を狙い、ボムを放つ。

明らかに避けることができないタイミング。だが、ベルがナイフを何本も投げると、あるものは縦に、斜めに、横にと、投げられた幾本ものダイナマイトがベルに届く前に切り裂かれた。

「！」

「ああ！また当たつてないのに！」

確かに不思議、だが隼人は考えている。さっきのベルの反撃は、明らかに切り口の方

向、切られた箇所など不自然な点が多すぎる。

あとはどうやって答えにたどり着くか。

「反撃開始いっつ!!」

ヒュヒュ!!

図書室に入り込んできたベルは、ナイフを何本も隼人に追いかけてながら投げつける。いくらか当たるが、外れるものもある。ひとまず攻撃をくろうのはまずいのか、隼人は逃げる。

「妙だと思わねーか？」

シヤマルの肩に座っていたリボンが言う。

「ああ、敵はわざと外してるようにも見える」

シヤマルの言う通り。さっきまで無駄のない動きだったベルなのに、隼人が避けようが避けまいが構わず投げている。かすったものも、外れたものも、図書室にある本棚に突き刺さる。

狭い本棚と本棚の間を逃げる隼人の動きが、急に止まった。

「獄寺殿！止まってはダメです！」

「速く逃げないと！」

「いや、これじゃ逃げれない」

「え!？」

モニターじゃ見にくいだが、今の隼人の周りには、大量のワイヤーが張られていた。一本一本がごく細の営利なワイヤー。まさに見えない凶器、刃物の檻。

うかつに動けば全身が切り刻まれるほどに凶悪なトラップ。いつこんなのを仕掛けたのかというと、先程からベルが無駄に投げていたナイフ。

図書室に入る前からベルのナイフの柄頭には全てワイヤーが取り付けられていた。そのため図書室に入る前に投げ入れたワイヤーも壁や本棚に突き刺さり、空中に設置、そのあとに隼人の投げたダイナマイトは、不自然な方向に切断された。全て空中に仕掛けられたワイヤーに触れたために切れたということ。

それと同じ要領で、逃げる隼人に投げつけ、余分に投げつけ、ついにはワイヤーで隼人を閉じ込めることに成功した。天才的な殺しのセンスに、常人に不可能なことを成し遂げる体技、そして獲物を確実に仕留める為の策をはる戦略。全てにおいて、ベルは確かに天才と言ってもいい。

「ししし、おっしま〜い」

見た目はボロボロだが、余裕そうに楽しそうに、隼人の敗北宣言をした。だがベル、それは早急すぎるぞ。

「お前がな・・・」

「?」

チヂチヂチヂチヂ。

何かの音が隼人の足元からする。

線状の火薬の糸が何本も隼人の足元から伸び、周りの本棚のしたまで伸びている。さつき立ち止まった隼人が落としたライターの花火が、隼人の足元にある火薬の線の大本を燃やしたことで、導火線のように本棚のしたへと火がうつる。

そして、

ドガガガガ!!

足元から爆発した本棚は傾き、倒れ、本棚に取り付けられていた為、ピンと張られたワイヤーは弛んでしまった。これでは切り裂くことはできないな。

隼人は途中から、ベルのワイヤーのトリックを見破っていた。

そのため、本棚を使ってトラップを仕掛けると予測し、あらかじめベルに切られたダイナマイトを持ち、火薬をこぼしながら逃げ回った。

そして隼人の策は、ベルの策を打ち破った。

「そして、このボムの行き先は」

ロケットボムを構え、一斉に投げつける。

だが隼人の手から放られるのではなく、一直線にある場所に加速して向かう。

「てめーのワイヤーに案内してもらおうぜ！」

周りに張られたベルのワイヤーに、フックをつけたダイナマイトを引っ掛ける。

全ての糸はベルから放たれ、策を作り出す。ベルによつて行われた行為は、今この場を持つて自らの首を絞めることになる。

最初のベルのナイフは、隼人に取り付けたワイヤーを伝つて突き刺さつた。今回はその逆、自らの体から出した糸を利用され、必ずベルのもとへ行くように糸を使われた。

咄嗟に糸を切り離すこともできず、全てのロケットボムは加速して糸を手繰り寄せ、ベルへと真つ直ぐに向かつた。

「これが、嵐の守護者の怒涛の攻めだぜ！」

ドガガガガガン!!

『沈黙と勝敗』

さすがのベルも、自らの限界を超えた攻撃を喰らい沈黙した。

その様子はモニターを見ていたヴァリアー勢からも堕ちたと言われる程に、嵐の守護者の決着は目に見えていた。

あとは隼人が、ベルの首にかけられている嵐のハーフボンゴレリングと自分の持つハーフボンゴレリングを合わせれば隼人の勝利だった。

だが、そうは問屋が下ろさなかつた。

「勝つ、オレ!!」

倒れたベルの首元のリングに、隼人が触れたとき、ベルもまた、倒れながら隼人のリングを掴み、飛びかかった。

「!!」

あきらかに力が入ってないが、隼人のリングを手に入れようとしている。

「ベルのやつ、まだやれるのか？」

「いいや、おそらく彼を動かしているのは勝利への本能、負けを認めない王子の本能だ」

「知れば知るほど異常なやつだ」

「お前らも大概だと思いがな」

「う”お” おい！よし、カッさばいてやる！」

「できるものならやつてみやがれ」

「ちよ光努、無駄に挑発しないで」

「だってあのロン毛が、」

「ロン毛言うな！」

そうこうしている間にも、隼人とベルの戦いはヒートアップ、まあ言葉の表現としてはあまり適切でないが、心境的にはそんな感じ。

実際は二人の力は対して残っておらず、床の上で転がり合いながらお互いのリングを奪おうと取っ組み合っている。

ベルはもはや本能だけで戦うという所業に出るため、出血で体力や力が落ちてくる隼人が不利。しかも時間が来たため順番にフィールドの内のタービンが爆発している為、およそ1分後には図書室が爆発するというチエルベツコの言葉。

それにより、シヤマルはリングを渡して引き上げる言う。

シャマルと隼人の修行で、一番最初に隼人が気づいたことは、己の命。今までは隼人はどこか己の命を軽視するような言動が多く見られた。

自分が多くの怪我をしようとするやうに遂げようとする。その姿勢は見事と言わざるを得ないが、隼人が怪我をして悲しむ人間だつて多くいる。

隼人には、それをわかつてほしいと、最初にシャマルは隼人に気づかせた。

その為、シャマルは隼人に逃げろといった。

いくら勝利の為とはいえ、命を散らせては元も子もない。

だが、シャマルの言葉を隼人は一蹴した。

確かに自らの命の重さを感じた隼人。

だがこの状況、ここで隼人が負ければ、奪われた雷と大空のリングと合わせて1勝3敗。全部で7戦がある状況では、先に4戦した方の勝ちであるため崖っぷちである。そこが隼人の意地になる理由。

ツナの右腕として、手ぶらでは帰れない。このリング戦において、ここで流れを帰る必要がある。それが隼人を突き動かすもの。

隼人は修行の最初で気づかされた、己の命について決して忘れてない。

くだらないことで、ただの喧嘩で、自分のことを軽く見て、命を捨てるつもりなどない。だからこそ、ここぞという時に、命を投げ出してもやることの為に、一番の使いど

ところで使う。死んでも引き下がれない状況、だからこそ隼人は、シャマルの言葉を聞かなかった。

「ふざけるな！何の為に戦ってると思ってるんだ!!」

その隼人の姿に、観覧席から声を張り上げるツナ。

「またみんなで雪合戦するんだ！花火見るんだ！だから戦うんだ！だから強くなる

んだ！」

ただの日常に戻るため、いつもみたい馬鹿騒ぎをするため、ツナは戦う。

だがそれは、みんな揃ってというのが、当たり前前の条件だった。

「またみんなで笑いたいのに、君が死んだら意味ないじゃないか!!」

「・・・10代目・・・」

ドガガアン!!

直後、無情にも図書室に置かれたタービンが爆発した。

観覧席に設置されたモニターには、カメラが壊れたのか映像が途切れ、雑音しか届かなかった。

「そんな・・・獄寺君・・・」

「・・・あそこみろ」

壁を支えに手をついて、爆煙の中からふらりふらりと歩いてくる影が、そこにはあ

った。

「獄寺君!!」

「獄寺!」

「獄寺殿!」

「タコヘッド!」

必死に歩き、観覧席の手前まで来て地面に倒れた。

赤外線センサーが解除されていることを確認して、ツナ達は次々に獄寺に駆け寄る。どうでもいいがなんで全員呼び方が一定しないのだろうか。

「すいませんー10代目……。勝負に負けるつてのに、花火見たさに戻ってきちまいました……」

倒れながらこぼす隼人。

その言葉に、ツナは本当によかったと喜んだ。隼人が無事でなにより。それはこの場にいるみんなが思っていることと同じだろう。

一方のベルは、爆発に巻き込まれたにも関わらずに手に入れたリングを、倒れながら掲げて心底喜んでるように笑っている。見苦しいような異常な執念も、あそこまで行くこと逆にあつぱれだな。

ふらふらになりながらかろうじて立ち上がり、武の胸ぐらを掴んだ隼人は、後は頼む

と言った。普通なら絶対に言いたくないだろうが、残りの雲と霧の守護者がこの場にいる状況では、武に頼むしかないからな。

「嵐のリングはベルフェゴールの物となりましたので」

「この勝負の勝者はベルフェゴールとします」

ヴァリアー側の3勝。これで次の勝負にツナ達が負けたら終わりか。

だが真の守護者を決めるのに戦わずして終わるといふのはいいのだろうか。

ボスなら守護者集めも一流でなくてはならない、みたいな？

割とどうでもいい思考をしていると、チエルベツ口から次のカードが知らされた。

「明晩の勝負は、雨の守護者の対決です」

武VSスクアアロ。ボンゴレの剣士対決か。

スクアアロにやられて修行を始めた時から、武は父親に剣術を習っているみたいだ。今はどれほどのものになってるかわからないが、スクアアロはそう安安と倒せそうにないで？

まあ武の表情は、楽しみで笑っている。それはスクアアロも同様。速く明日が来ないかって顔してるな。お互いにいろいろと思うことは違うけど、戦いたいというのは同じだからな。

「失礼します！レヴィ隊長！校内へと侵入した何者かが、次々と雷撃隊を倒していつて

ます！」

「何！」

侵入者？もしかして……。

「それで、あいつどんな感じ？」

「うん。すごく楽しそうだった」

並中からの帰り道、夜道を歩いているのは光努、そしてクロームに犬、千種の4人だった。

あのあと、校舎の中へと乱入してきた雲雀恭弥。校舎が崩壊している状態に激怒し、その場の全員（もちろんツナ達も含む）を噛み殺そうとしたが、リボーンの一言にとどまった。

また、骸と戦える。

その言葉を聞いたとき、チエルベツ口到校舎が完全に治ることを確認してその場を

去った。

雲雀がさったあと、追いかけてきた家庭教師のディーノに、スクアーロという男の話
を聞いたのだが、ツナたちは衝撃することになった。

そして現在帰路についているところ。

ちなみにクローム達は別の校舎の屋上から戦いを見ていた。

ついでに言えば雷のリング戦も晴れのリング戦も見えていたのである。

もちろん、戦いを見ていたのはこの3人だけでなかった。

「やっぱり動けないと骸も暇なのかな」

「今は、割と楽しそう。みんなとヴァリアーの戦いが見られるから」

クロームを介して骸の様子はわかる。クロームも完璧に様子を見ることができ
るわけでないが、心境的にどんな感じというのが伝わってくる。

復讐者の牢獄ヴァインデイチエという、脱獄の常習犯だった骸の力をもつてしても出るのが難しい牢獄

なのだから、動くこともままならず暇していると思う。

「それにしてもクロームの出番はもう少し後になりそうだ」

「つーか、次にあの山本が負けたら俺らの出番ねーじゃんかよ」

「山本武……勝てるの?」

「どうだろうな」

正直微妙。そう簡単に差が詰まるものでもないだろうが、武の成長幅も気になるところ。ふむ……。そういえば武の修行は見てなかった。明日はおそらく修行してるだろうし、見に行くか。

ところ変わって次の日。

武の家の道場目指して歩いている。

隣にいるのはリルとコル。今日スクアールが戦うって言ったら見に来ると言い出した。

さしあたり、対戦相手の武の様子を見に行くというとやっぱり見に行くと言った。

そんなわけで二人を連れてやって来たのは、武ん家の剣道場。

外からみて明かりが見えるのと、何人かの声が聞こえる。武にツナ、それにリポーンがいるらしい。

修行が終わったのか、それとも武の様子が気になったのか、まあなんにしてもいるな

らちようどいいや。とりあえずおじやましますと。

「よ、武。流派超えられそう?」

「またいきなり核心ついた! ていうか光努! それにリルとコルまで」

「やつほー」

「元気?」

「よう光努。そつちの子は?」

「俺のファミリーのリルとコル。仲良くしてくれ」

「よろしくね」

「よろしく」

「おう、よろしくな」

常時明るくフレンドリーな武なだけある。あつという間に打ち解けたという感じだ。

「ん? 武、その竹刀、竹刀か?」

文にしたらなんか変な質問だなと我ながら思うが、武の持っている竹刀。見た感じ普通の竹刀だが、なんか質感がもつと硬そう。

「ああ、これか? 鋼でできた時雨金時つてやつだ」

「鋼製か。どうりで」

「それだけじゃねーぞ。こいつは山本のバットと似たやつだ」

時雨蒼燕流とは、武が父親より習いし流派の名称。

武がもっている時雨金時は、普段は鋼でできた硬い竹刀だが、時雨蒼燕流を使うことで変形し、刃を見せて日本等の形となる。つまり、時雨蒼燕流専用の刀。

「それでどうだ、勝てそう?」

「そうだな、親父にさつきいいこと聞いたんだ」

「?」

「親父の時雨蒼燕流は、完全無欠最強無敵なんだってさ」

そう言う武の表情は、不安など吹き飛んだかのような、晴れ晴れとした自信に溢れたような顔をして笑っていた。

「じゃあ見せて見せて」

無邪気に、唐突にリルは言った。

どこから取り出したのか小太刀を取り出しながら。

「と言ってるが、どうする武?」

「と言われても、この子戦えるのか?」

「大丈夫だぞ」

武の問いに答えるリボン。

「リルとコルは剣士としては山本よりも経験高いからな。組手くらいいいんじゃねー

か

實際、武が劍術を習い始めたのはほんの一週間くらい前のこと。

それに比べると、年齢的にリルとコルは8歳とはいえ、正直いつから劍を振るつていたのかは知らないが1年以上上たしなんでいるのは事実。それ程の差がありつつ、武が自分の習った流派、時雨蒼燕流の型をモノにできたのは、ひとえに武の持つ類まれなる才能と、それを活かすだけの努力を怠らなかつたからである。

だがそれでも明らかに実践不足。犬と昔死闘したこともあり、咄嗟の状況判断にはかなり優れ、野球で鍛えた動体視力と反射神経も常人の比じゃない。このままスクアールと戦っても、案外怯えもなくすんなりと戦いはできそうだが、経験を積んでおくに越したことはない。今日の夜が戦いなので無理はできないが、それなりに訓練はできると思う。

「よし！じゃ、少しやろっか」

「やった！」

「じゃ、さっそく」

時雨金時と、リルと、いつの間にか入ってるコルの刀がぶつかった。

あまり無理はしないように見てないとな。

『魔の剣豪』

とあるマフィア関係の子供が多く通う学園があつた。

その中で名の通っている、一人の少年がいた。

彼はその圧倒的な剣の腕を磨いていた。

誰にも流派を教わることなく、西洋東洋世界中の剣術家を手当たり次第に襲い、決闘を申し込み、倒して勝利し、その剣術を自分のモノへと吸収していった。

後先考えず、まるで血の匂いに釣られていくような様は、まるで鮫のよう。

自身のスタイルはあくまで我流を貫き、剣士を倒すたびに新たな力を手に入れていった彼は、その剣技に磨きをかけ、どんどん強くなつていった。

その強さに、当時のボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーは、彼を隊へとスカウトした。その際、入隊の条件として少年は、その時のヴァリアーのボスである、剣の帝王と謳われたテュールとの決闘を条件とした。

テュールの強さをよく知る周りからしてみれば、彼の勝利を微塵も疑うことなどな

かった。だが、2日間の死闘の末、ついに少年は剣帝を倒した。

そして少年は、今までかき集め、力をつけてきた我流のスタイルを、一つの流派とも呼べるべき己の唯一の剣術へと完成させた。そしてヴァリアーへと入隊した少年は、常にトップを撮り続けたという。

その少年の名を、スヘルヒS・スクアーロと言った。

恭弥が帰ったあのと、デイナーからスクアーロの話聞いた。

上記に記載されたスクアーロの過去。その当時彼の通っていたマフィア関係の学校には、まだボスになる前のデイナーも通っていた。だからこそスクアーロには少し詳しい。

だがそのデイナーですら、スクアーロに関してわからないことがある。

スクアーロは、もともとヴァリアーのボスになるはずの男。

剣帝を倒したスクアーロが時期ボスだと誰も信じて疑わなかった。だが今のボスは

XANXUS。一体スクアーロの過去に何があったのか？XANXUSには、ディーノすら知らない何かがある。

そしてこれが今回のディーノの話で一番重要なのだが、スクアーロはいくつもの流派を潰してきた男。その為、流派を超えろという助言を武に与えた。

一体勝敗はどうなるのか？そしてこの特訓もどうなるのか。

キーン!!キーンキーン!!

「うおっと」

「とうー!」

「それ!」

リルとコルは左右から剣を振って、武は受けて避ける。

そのようなやり取りを繰り返していた。

「うわあ、3人ともすごい。山本も、なんか剣士って感じだね」

「さすが山本。この短時間でかなり腕を上げてるな」

「と言っても今は軽く流してるだけだからな。今夜が気になるところ」

「あれで軽くなんだ・・・」

ツナの見た限り、3人は割と速く動いている。

今回は訓練ということで、武はリルとコルの攻撃をひたすらに避けたり受けたりとし

ている。

「やっぱ真剣避ける方が（危機的な意味で）やる気になるよな。しかし二人の攻撃をこ
うも躲す武もすごいな。」

「そういえば、リボンってリルとコルの親父ってあったことある？」

「クルドか。昔2、3回あったことあるぞ」

「確かそいつも剣士なんだってな」

「というかイリス所属なのにお前が知らないのに俺は驚きだ」

「だって会ったことないし。『アヤメ』って基本世界中にいるらしいからな」

「ま、それもそうか」

「それでそのクルド？ 剣士だったら案外昔スクアア口と戦ったことあるんじゃないかと
思うんだが」

「確かに。あいつほどの剣士ならスクアア口も標的にしそうだな」

「そんなに強いのか？」

「まあな。イリスの『魔天剣豪』といえば、かなり有名だぞ」

「『魔天剣豪』か・・・」

「いつか会うことになるか。リルとコルの親父で師匠ってことか。」

「どんなやつなのだろうか。ていうか3人しかいないのに、『アヤメ』の連中ってまだ槍

時しかあったことないんだよな……。いいのかこれで？ボスとして？

「ま、それは置いといて。お前らストツプだ」

「ん？終わりか？」

「もつとやろ」

「うん」

「ほらほら、武は今日試合なんだから終わりだ。わかったか」

「はーい」

「なんか光努が二人の兄貴みたいだ……」

「まあ似たようなものだしな」

「それでどうする？流派を超えるんだろ？」

「ま、これでなんとかやってみるわ」

そう言って時雨金時を掲げてにかつと笑う。

ま、武らしいっちゃ武らしい。ひとまず不安はなさそうだな。

じゃ、もうひとりの対戦相手のところに行ってみてくるか。

「う”お”おい!!てめえ、どうやってこの場所を知ったあ!!」

「え? いや普通に最大限に情報網を駆使した」

「ふざけんなよ! つーか、なんでリルとコルもいやがる!」

「お茶ないの?」

「客人に対しての態度じゃないよね」

「当たり前だあ!!」

「何騒いんだよ、スクアアロ」

とあるホテルの一室。

ヴァリアーが借り切ったホテルのワンフロアの入口にいるのは、光努とリルとコル、そして出迎えに出てきたスクアアロ。スクアアロが何やら騒いでいると、奥にいたベルが出てきた。見た目は包帯が巻かれ松葉杖をついている。

先日の嵐戦のダメージがまだまだ抜けてないため、当然といえば当然の格好である。というか至近距離で大爆発に巻き込まれてもう立つてられるのに吃驚だけだな。

「よ、具合どうだ? もうダメ? そろそろ峠?」

「喧嘩売ってんのか?」

ちゃきりとナイフを構えるベル。

最近の殺し屋はなんでも荒事にしようとして困る。

「それで、何しに来たんだよ？ていうかそのガキ誰？双子？」

「リルだよ」

「コル」

「はっ、リルコルベルってなんか似てね？」

「心底どうでもいいが、結局何しに来たんだ」

「スクアアロからかいにきた」

「とつとと帰れえ!!」

スクアアロがさらに激しく騒ぎ立てる。

が、構わず上がり込んで近くにあったテーブルに腰掛ける光努とリルとコル。

そしてついでにベルも腰掛けてスクアアロは立ちすくんだままだった。

もはやスクアアロの怒りのボルテージはうなぎのぼりである。

「スクアアロ、静かにしないとボスがまた怒るよ」

どこからか降ってきたように現れて、机の上にぼすりと座ったのはマーモン。黒いフードをかぶった赤ん坊である。

「赤ん坊だ！わーい！」

「うわっ！何だこいつら！」

「ほーら、飴だよ」

「いらなよ！」

「わお、マーモン大人気じゃん」

「嬉しくない！というか白神光努！なんでおまえがいるんだ」

「対戦前のスクアーロ見に来た」

「……」

表情は見えないが明らかに呆れたような顔をするマーモン。そんな様子を見ているベルは笑い、スクアーロはさらに怒りを上げてきた。

「この二人はイリスのルルとコルじゃない。なんでこんなところにいるんだ？」

「マーモンその子供知ってるの？」

「まああのイリスファミリーで戦う奴らつてのは珍しい方だからね。とりわけ、子供なのに悔りがたして子供だからね、その二人は」

「その子供となんで光努が一緒にいるわけ？」

「そりゃ俺イリスのボスだからな」

「……」

時が止まったかのように静寂が包んだ。

目元が隠れて表情が伺えなかったベルとマーモンも、先程まで怒りの表情を浮かべ叫んでいたスクアードでさえ、目が点になつて口をぽかんと開けたような顔をした気がした。実際にそのような顔をしたわけではないが、そう思うほどに驚いていた。

イリスファアミリーとは、マファイア界においてボンゴレと何ら遜色ないほどの強さを保持つファミリー。だがすべてが同じようというわけでもなく、ボンゴレに比べたら戦う人間は、他のマファイアと比べても極めて少ない。

他にもマファイアよりも一企業としての方が有名なほど。

マファイア界において、一般企業としての方が有名なのだが、それでマファイアとして有名かと言われれば微妙なところ。

だがそれでも、勢力的にはマファイアとして十分なほど。

しかもイリスは、同盟を組んでいない。これは他のマファイアに助けられることもなければ、協力もできない孤立状態。だが言い換えれば、どのマファイアにも攻撃を仕掛けて来るかもしれない。

通常ならマファイアが同盟を組んでる所に仕掛けるなど自殺行為だが、受けるマファイア達も、イリスを完璧に迎え打てるかと言われたら微妙なところ。

それほどにイリスの『アヤメ』等、数少ない先頭部署は強かった。

そして現在、そのボンゴレ並のイリスのボスが目の前にいるボンゴレ暗殺部隊のヴァ

リアーの心境としては、

「嘘つけえ!! てめえがボスなんてあり得るか!」

「つくならちつたあマシな嘘つけ!」

「ありえない・・・」

という、わりかし当然の反応だった。

「有り得ないと言われるとは思わなかったな」

「だよね。光努ボスなのに」

「なんでだろ?」

「お前から自分の姿鏡で見てこいよ・・・」

今座ってるのは、中学生と小学生位の子供が計三人。とう考えてもマフィアのボスパーティーには見えない。ベルの意見もごもつとも。逆に初対面でこれがマフィアとわかる者が何人いるか。

「てつきり沢田綱吉の関係者かと思ってた」

「間違ってはいないな。クラスメートだし」

「だったら尚更こんなところにいるのが分からないね」

「とつとと帰れば?」

素性がわかったところでなぜヴァリアーのアジト（仮）にいるのか疑問に思うのも当

然。だってかなり意味ない行動をしているから。が、この事態を好奇と考えている奴が一人いた。

「いや早計だぜマーモン」

「ん？スクアアロー？」

にやり、と獯猛に犬歯を覗かせ笑うスクアアロー。剣士だけに（笑）

いつのまにか左手に剣を備え付け、構えている。

「同盟ファミリーなら殺つちまうと面倒になると思っていたが、そいつがイリスの人間だって言うなら話は別だ！今ここでカツ捌く!!」

チャキ

剣を構えて殺気を出してくるスクアアロー。

その様子に、ベルは怪我をしているため退避を始めていた。

マーモンもベルの頭の上に乗って一緒に退避を始める。

守護者同士の場外乱闘は厳禁という事と、同盟ファミリーであるキャバツローネや同じボンゴレの門外顧問たちは、殺り合うとなにかと面倒であったが、ボンゴレファミリーと同盟を組んでいないイリスなら殺つても問題ないというスクアアローの発想。安直だが特に問題ないのも事実。まあ実際はいろいろと問題だらけだが。

「スクアアロー」

「何だあ！」

「わかっているとは思うけど」

「う”お” おい！白神光努！あいつだけカツ捌く！」

「了解。行こうベル」

「ちよつとみてこうぜ」

野次馬根性丸出して笑って少し離れて座る。

スクアアールと光努、リル、コルが対峙した。

「行くぜ！う”お” おい！！」

「辛かってやるよ、スクアアール」

にやり、と光努もまた楽しそうに笑った。

『ツンドラ地帯にご用心』

俺の名前はベル・フェゴール。

ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーに所属している天才。そして王子。

だから何をしても許される。

けど王子だって痛いものは痛い。だから今は部屋の隅でマーモンと観戦してる。

スクアーロと光努の戦いを。

「う”お”おい！」

「ふん！」

真剣白刃取り。

スクアーロの振り下ろした剣を、両手で挟むようにして受け止める。

スクアーロの剣を止めるといふのは、敵ながらさすが昔ヴァリアー本部で暴れただけ
のことはある。が、相手がスクアーロの場合に限っては失策。

スクアーロの剣には仕込み爆弾が仕込まれてるから、相手が剣等で受け止めると爆発

を直に浴びる。

ビュビュビュ!!

予想通り、剣の刃の部分から小さな爆弾が光努めがけて飛び出した。

「それ、見たことあるぞ」

タン!

白刃取りをしたまま、床を蹴ってスクアーロの剣の上を通るように一回転して正面から来た爆発を避けた。

そのままかかと落としの要領で足を振り下ろしてスクアーロを狙う。

「あめえぞ!」

スクアーロは右手で落ちてきた足を掴んで受け止める。

「そつちもな」

ベキ!

スクアーロの足元の床が少し割れた。スクアーロが受け止めきれしていない?

まああいつの馬鹿力は厄介だからな。だがそれだけじゃなく、かなり身軽に動けるみたいだ。

「大丈夫かな、スクアーロ」

「ま、スクアーロなら大丈夫じゃねーの?」

正直スクアーロが負ける姿って思い浮かばないし。

まてよ？これでもし倒されたら次の作戦隊長って俺じゃね？

「う」お おい！ベル！なんか余計なこと考えなかったかあ!!」

「気のせいだ！」

戦いながらなんて勘のいいやつ……。

「そういうえばマーモン」

「どうしたの？」

「さつきなんでスクアーロにわざわざ標的確認みたいなのしてたの？あれ意味なくね？」

「ああ、あれね。リルとコルは狙わない方が面倒事が少なく済むってことさ」

「どうしてよ？」

「ベルは、『魔天剣豪』って聞いたことあるかい？」

「それって、確かイリスの『アヤメ』のリーダーじゃん」

「しかも、あのリルとコルの父親なんだって」

あの子供の父親か。それは知らなかったな。

イリスファミリーの『アヤメ』といえは、マファイア界において知らぬものなしと言われた戦闘部隊。たった3人しかいないため、その3人はマファイア界でも有名人ばかり。

そしてそのリーダーのクルドも『魔天剣豪』と恐れられる存在。

なるほど、あいつら狙うと奴が怒るということか。

「そりゃ、確かに面倒ってことか」

「ベルの考えてることは大体想像つくけど、考えが甘いよ」

「あん？」

「もしもリルとコルに何かあつたら、戦争が起こるかも」

「？それって」

「昔、『魔天』に一回だけあつたことあるんだよ」

「そーなの？どうだった」

「正直事前情報と比べていいやつだったよ」

「へえ」

それは意外な情報。マーモンの昔つてのがどれほど昔かは知らないが、『アヤメ』のリーダーと面識があるつてのにもびつくりだが、それ以上にマーモンの評価が割といいやつつてのもびつくり。

なんかどこが『魔』なのかわかんねーな。

「けど、」

「？」

「とんでもない親バカだった」

「……」

マーモンが珍しくなんだか疲れたような表情をして語っている。

「子供の話がすごく面倒だったよ。正直かなり疲れた」

マーモンがここまで言うとは。結構気になるところだ……。

「それで、実力は結局どうなわけ？俺は『アヤメ』って見たことないからさ」

「僕も全力を見たわけじゃないけど、あれは一言で表すなら……化物」

「……」

笑いつつ、俺の頬を一筋の汗が流れる。

まだ見ぬ強敵の恐ろしさと、戦うかもしれないという楽しみに笑ってるのかもしれないが、実際に戦うのは面倒だから避けたいところ……。

ま、触らぬ神に祟りなしくてやつだな。

「正直今の僕じゃ勝てないかも。……呪いが無いならどうかかわからないけど」

「ん？なんか言った？」

「別に」

どうしたんだ？

だけど、そうこう雑談してるあいだも二人は戦い続けている。

ていうかあの二人、確かリルとコルはどこいった？さつきまで光努の横にいたような気がしたが。

「わあい！かわいー！」

「よしよし」

「むむ！離せー！」

と横から声がしたから向いてみると、隣でマーモンが子供のおもちゃにされていた。よくある子供が抱きしめる人形みたいになつてゐるし。

さすがに力だけじゃかなわないからされるがまま。というか今更だがこの二人つて俺と同じで双子か。正直服装まで同じだったら見分けつかねー。

「ええい、離せー！」

「！」

あたりが一変してブリザードに包まれた。

やべ、マーモンが幻覚を始めたツンドラ地帯みたいなホテルの部屋。これ以上何か会つたらこつちまで被害被る。逃げるか。

「ん？」

服の裾が引つ張られる感触。後ろを見ると、俺よりも低い身長の子供。

こつちは確かコル。顔じゃ見分けつかないから服装で判断したけど間違いないはず。

ていうかなにこの手？逃がさないつもり？いくらけが人の俺でも子供に負けるつもりはないんだけど。

チャキリ。

「えつと・・・なに？」

「逃げたら、ダメ」

なんか日本刀を突きつけられてんだけど。ていうかまわり寒っ。マーモンドこいつんだ？というよりこれ偽物？偽物だよな？普通こんな刃物持たないって。え、人のこと言えないって？関係ないし、俺王子だし。

「う”お” おい!!おらああああ!!」

「らっ!!」

スパンスパンスパン!!ガガガガガガ!

壁が床が天井が、砕け削れ切り裂かれ、ホテルの一室は崩壊の一途を辿っていた。ベル、マーモン、リルとコルがあれやこれやとしている間、光努とスクアー口の戦いも無事じゃ済まなかった。

ヒュオ!!

「!」

ブリザード。吹雪が一瞬で部屋の中を覆った。

地面は凍り、どこからともなく雪の嵐が降り注ぐ。

一気に視界が悪くなった為、さすがのスクアー口と光努も一瞬攻撃を中断した。だがそれも一瞬だけ。

「う」お おい!!

「ふん!」

すぐに攻撃を再開した。

光努は拳を、足を匠に動かしてスクアー口の剣を払い、防ぎ、避け、攻撃を仕掛ける。パワーがあり、一撃一撃が重い攻撃。さらにスピードも高い。しかも肉体的にはかなり頑丈と来た。攻守ともに異常なバランスのとれた力を持った光努は、スクアー口の力をもつてしても手に余っていた。

(ちい、正直ベル達の話しか聞いてないからどんなものかと思いきや、こいつはかなり面

倒な部類だな)

弱点らしい弱点が見当たらない。

バランスのとれた者は、弱点が見つげにくい。

しかも光努の場合は、決定打を簡単に浴びせてくる。防御力がバランスよく高い者は、かなり厄介である。

「おらああ!!」

ザンナ・デイ・スクアーロ
鯨の牙。

スクアーロの剣技の技の一つ。

正面の空間を、全て削り取るように、剣を相手に大量に突き刺す技。

突くという技であるが、そのスピードと手数と威力は、まるで空間をかじりとる鯨の牙のようでもある。

「ふっ」

ダン! 地面を砕き、光努は後ろへと跳んだ。

そうすることで、スクアーロの剣の射程範囲から一瞬で外へと脱出した。

だがスクアーロも、追うように追撃を仕掛け剣撃を浴びせる。

後ろの壁に背中がぶつかつたとき、スクアーロの目がキラリと光つたような気がしたかと思うと、渾身の一突きを光努に向かって放つた。

「何い!？」

が、壁に突き刺さっただけ。光努の姿は、一瞬でスクアーロの視界から消した。

(どこだ!)

タン!

突き刺した形をとった剣の上に、光努が降り立った。

「くっ!」

その状態から剣の腹に手を付き、体を回してスクアーロの顔の左側から蹴りを放った。光努の蹴りは速く、しかも、スクアーロの剣は光努の手の下にあるため剣で受けることもできず、咄嗟に肩をすくめてかすめ、威力を緩和した。だが所詮それも気休め。モロに蹴りを受けて、壁まで吹き飛んだ。

「ぐああ!」

ドゴン!!

壁と言うよりもはや氷というような感じの壁。幻覚と侮るべからず、実力の高い幻術士の作り出す幻覚は、よりリアルに体現する。ヴァリアーの幹部であるマーモンが放つ幻覚は、そこらへんの術師の比でなく優秀。

さすがのスクアーロも、若干の寒さに少し感覚がわずかに鈍り始めていた。

だからというわけでもないが、壁を壊しながら喰らい、すぐに立ち上がったがダメー

ジは受けている様子。最初より動きが悪くなっている。

「よし、とどめさすか」

しかも光努が何か物騒なこと言い始めた。

『勘違いしてないか?』

激しいブリザードの吹き荒れる中、立ち上がったスクアードと光努は対峙していた。

「ちっ、マーモンの奴何してやがる！視界も悪いし。てめーは平気そうだなあ！」

平然と立ち尽くす光努に向かって叫ぶスクアード。

幻覚は、見破ることのできる人物もいるが、見えている以上何らか視界の邪魔にだつてなるし感覚に多少なりとも影響が出る。それは百戦錬磨のヴァリアーだつて例外ではない。

しかも今回は戦つてる最中、突如マーモンが幻覚を発生させたために、不意打ち気味にスクアードも参つている。術師と戦い幻覚に備えた戦い方などしていれば、多少の幻覚にも耐えられるし効かない。が、今回はそこまで余裕がなかったというのが事実。

ボンゴレ最強の剣士(?)のスクアードだつて幻覚が全く効かないわけでないのだから当然の結果。だからこそ、スクアードも疑問に思う。自分にはある、幻覚によつてわずかに乱れた動きのズレが光努には見当たらない。

「てめえ、なんで普通に動ける！」

「子供は風の子という言葉が」

「ねえよ!あるけど全く関係ねえよ!!」

「俺にはこの幻覚は、出来の悪い飛び出す3D画面程度にしか見えない」

「.....」

冗談だろ?

つまりちよつとすごいなーという程度で、本物のようなりアリティを感じず、ほとんど幻覚に対して効果がない。先日のベルと隼人の戦いではないが、動きの悪くなったスクアールと普段と変わらず動ける光努。しかも元の身体能力や耐久力等差が出ている。

「それにしてもこの吹雪、マーモンの幻覚か。何やってんだか」

呆れたようにため息をついた光努だが、それでも関係ないとばかりにスクアール口に向き直る。

「じゃあ面倒だし.....必殺技を使うか」

「必殺技だと!今さら!?!」

「実は昔知り合いに教わった必殺技があったりなかったり」

「おまえ設定作ってないか!?!」

「必殺技つてのは嘘。興味本位で一個教えてもらったのは本当だ」

「そんな近所の親父だが仙人だがに教えてもらった物が使えるか!」

「まあなんにしても次で仕留めるけどな」

「！」

腰を落とし、右足を前に置き、左足を後ろに引くような態勢を取る。

拳を前に突き出し、反対の手を、親指のみを曲げ、他の指を伸ばした状態の貫手を作り引いた状態を保つ。一定のリズムで吸われて吐いた息を、再び深く吸い込み、体をひねり、大地を踏みつける。

「黒道・空破断把」
こくどう からわりだつぱ

「雪だるま雪だるま」

「雪うっさぎ〜」

「.....」

目の前で文字通り雪だるまと雪うさぎを作っているリルとコル。

そんな姿を見つつ言葉が出てこないベル。

(あれ? 幻覚の雪でこんなん作れたっけ? 普通無理じゃね?)

マーモンの幻覚が作り出したツンドラ地帯のごとき吹雪の中、楽しそうに雪遊びをしているリルとコルを見つつ、自分も寒く感じてきたのかそろそろ自室に戻ろうかと思っ
ている時だった。

ドゴオオオオオ!!

一際大きな音が室内に響く。

周りは吹雪で視界が悪い中、その音は確かに響いた。そして自分の目の前に何か
切ったような気がしたと思ったら、すぐそばの壁が崩壊した。

よくよく見ると、崩壊した壁の中に刃が半分になった両刃の剣が見えた。

そしてさらによくよくと見れば、中に埋まっていたのは、先程まで戦っていたヴァ
アの作戦隊長であるスクアーロだった。

「まじっ…」

明らかに気を失っている様子。

しかも左腕につけられていた剣は中程からポツキリと折れている状態。

不意に、先程まで吹き荒れていた雪嵐が止み、元の部屋の様子が戻ってきた。

元というのは少々語弊があるが、実際は戦いの中で床や壁が崩壊し切り傷が生まれ
たりと若干原型が歪んでいた。

視界が晴れると、いつの間にかマーモンはいなくなっており、リルとコルもいなく、さらにまたよくよくと見れば、瓦礫に埋まっていたスクアーロもいなくなっていた。

つまり、ベルは一人で壊れた部屋の中に立っていた。

「つーか……今日のバトル、どうしょ」

タツタツタツタ!

あつという間に太陽も隠れ、月が綺麗に見える時間帯の道路はもはや暗い夜道と化していた。そんな道路を走っている影が三つ。

光努とリルとコルの3人だった。

少し妙なのは、光努が大きめの袋を2つ担いでいるということ。人が一人入れそうな袋を担いで歩いていると、シルエットだけならサンタクローズにも泥棒にも見える。

そしてそのまま黒道邸に帰ってきた。

「たっだいまー」

「あらお帰りなさい。今日は早いのね」

「たっだいまー」

リルとコルがバタバタと廊下を歩いてい手を洗いに行く。

奥からでて来た朝菜はすでに寝巻きに着替えている。

夕輝は幼稚園児なため、この時間まで起きているのは辛くもう眠っている。

そしてルイと灯夜は現在いない。

部屋に戻ってどっこいしょというように持っていた袋を二つ畳の上而降ろして一息つく。そして近くに設置されていたモニターのスイッチをいれると、画面が映り、そこには灯夜が写っていた。

「やつほ、元気?」

『お前は元気そうだな。こっちは今面白いことになってるぞ』

「面白いこと?」

正直光努は灯夜とルイがどこにいるかは知らないが、わかっているのは国外にいるということと、リング争奪戦の襲撃者を探っているということ。他にも用事はあるのかもしれないが、光努が知っているのは大まかにはこんな感じ。

『ボンゴレのアジトが何やら危ない感じなんだ』

「ボンゴレが？」

ヴァリアーがいないから狙われたとか？

でも独立暗殺部隊って用心棒ってわけでもないからこれくらいじゃ狙われない、というかやられないと思うが。

『家光がイタリアのボンゴレ本部に来てるんだが、9代目が何やら危ない状態らしい』

「9代目が？でも本部だろ？」

家光は、雷のリング戦が終わった辺りからイタリアへと渡った。さり際にXANXUSがさりりと言った言葉と、ヴァリアーの勝手すぎる行動を容認している9代目。何かあったと疑うのは至極当然のこと。だがその小さな懸念は、XANXUSの言葉によって大きな疑惑に変わる。一体9代目に何があったのか確かめる為、家光はイタリアにあるボンゴレの本部へと乗り込んでいった。

『というわけで、そっちの方は任せた』

「と言われてもな」

『そういえば今日の対決は誰だ？』

「ああ、雨の守護者の戦い。スクアードと武だ」

『スクアード、剣帝を倒したヴァリアーか』

「知ってるのか?」

『まあな。ボンゴレのヴァリアーはこのマフィアも驚異にしている奴らだしな』

「そうなのか」

『しかしスクアーロと戦うというのも災難。その武は知らないが、せいぜい今日は頑張るといい』

「いやー、それなんだけどさ」

『?』

と言って光努は2つの袋を開けて中を見せる。

中に入っていたのは、銀色の長髪に黒ずくめの服を着た男と、黒い短髪に並盛中学の制服を着た男。つまりスクアーロと武の二人。

「ここに二人いるんだよね」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

今日の夜には雨の守護者の戦い。

対戦者はスクアーロと武の二人の戦い。

そしてその二人は今さっき光努の持ってきた袋の中に入っていた。

「ちよつといろいろあつて拉致ってきた」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

無言だが、灯夜のめちやくちや疲れたような表情と、「ついにやっちゃったか」というような表情を見るに、さすがの灯夜もどうしようかと真剣に考えている。

ちなみに、なぜ光努が二人を拉致したのか。

先ほどの戦いでスクアーロの剣をへし折って気絶させた。が、その夜には雨の守護者の戦いが控えているためこのままではまずい。無理やり起こすというのでもいいのだが、光努的にはフェアでは無くなるということからまずスクアーロをばれずに持って帰る。

そしてそのあと武の家により、一人のところをこつそりと気絶させて一緒に持って帰る。さらに並中でステージを作っていた奴らを全てのもしてさらにステージを半壊させる。

対戦フィールドを壊したのは、チエルベツロが二人とも現れなかったのでこの勝負は引き分けにしますという言葉を使わせないため。現にチエルベツロの二人は、ツナ側ヴァリアー側の二つに、フィールド調整の為に雨の守護者の戦いの延期を通過した。対戦日は明日の夜。そして現在、光努の前には気絶している二人がいた。

「いやさ、やっぱり戦うのはフェアの方がいいしき、正直チエルベツロがなんとかしてくれて助かったし」

『そういう問題じゃないだろ。しょうがないやつだ・・・』

「ま、こういうこともあるってこと。さてと、俺はこいつら返してこないとな」

『もう少し大人しくしてくれ．．．』

「それで灯夜は今何してるの?」

『ああ、そういえば襲撃者の情報がわかってきた』

「本当か?」

『ああ。犯人は、プレギエーラファミリーの連中だな』

「プレギエーラファミリー?」

光努の聞いたことない名前。

イリスのマフィアのボスに就任して結構な日数の断つ光努だが、今のところこの世界のこととはイリスの企業関連の事中心で覚え始めているため、マフィア界のことについてはあまり多く知らない。この名前もまだ聞いたことのないマフィアの一つである。

『プレギエーラのボスは9代目の知人でな、隙を狙ってボンゴレを奪おうとするようなやつじゃないんだが』

「今まさに狙ってる」と

『そこのところも、一度プレギエーラのアジトに行つて調べてくるか』

「そつちも気をつけなよ。昨日はいなかったがまた墓造会の奴らが来るかもしれないな」

『そうだな』

「というかそのプレギエーラが墓造会つての雇つてるのか？」

『そうだとしたらやはりかなり妙だ。プレギエーラのボスは穏便な方だからな。戦いはあまり好まないたちなんだ。しかもボンゴレと同盟を組んでる』

「うわ、明らかに怪しすぎ。まあそこらへんも考えて調査よろしく」

『そつちも気をつけろよ』

「そうだな。こいつら返してきたら俺は出かけてくるよ」

と言いつつ光努はスクアードと武の顔に眠り薬を嗅がせる。超強力、テイラノサウルスでも一日眠ると言われる程の秘薬。どこから手に入れてきたのかはわからないが、りあえず使つて見る分にはかなり効いているようだ。元々鮫は匂いに敏感（特に血の匂い）だつていうしな（ここではあまり関係ないけど）

『?こんな時間にどこ行くんだ?』

「え?どこつて・・・あ、そうか。灯夜何か勘違いしてない?」

『勘違い?』

「雨の守護者の戦いは延期になったが、代わりに別の守護者の戦いはあるんだ」

正直に灯夜も光努の言い回しから今日は守護者の戦いが無いと思っていた。

が、そこまで驚くこともなく続けて会話をすする。

『別の守護者という』

「今日の戦いは、霧の守護者の戦いだ」

『霧の戦いだから体術で攻めよ』

霧の守護者の戦い、クローム髑髏VSマーモン。

雨の守護者の戦いがなくなったことにより浮上してきた守護者の戦い。

この戦いに置けるフィールドは、なんの仕掛けも無い体育館の中。

ボンゴレ霧の守護者の使命とは、無いものを在るものとし、在るものを無いものとする。この戦いで敵を惑わしファミリーの実態をつかませない、まやかしの幻影。守護者達はそれぞれ強力な幻術士。何もなくとも、何かを生み出せる。彼らの戦いには、特殊な装置など不要なもの。

体育館に現れた犬、千種たちを見てツナ達は驚きをあげたが、さらにそのあとにきた人物に驚いた。

この二人が来るのなら、当然やつが来ると思っていた。

六道骸。

かつてマフィア間抗争を起こそうと考えたが、ツナに倒され牢獄に入れられた男。

だが来たのは、一人の少女だった。

黒曜中の女生徒用の制服を身にまとい、少し特徴的な髪型と、見覚えのある三叉槍。そして、鬍髯模様のついた右目の眼帯。

「I l l ^我 m i o ^が n o m e ^名 e , ^は C h r o m e . C h r o m e . C h r o m e . 鬍髯^{トクロ}」
優雅に、流麗に、彼女はそう名乗った。

「クローム達は先に行っただし、もう始まってるかかな」

「というか、どう説明したんだ？あの二人」

あの二人というのは、スクアアロと武。

ツナ側ヴァリアー側と、両陣営は結構な騒ぎ用だった。

今夜戦うはずの二人がどこにもいず、連絡も取れないという状況。

どちらも不戦敗かと思ったとき、チエルベツ口から伝令が伝えられた。

「諸事情により、今夜の戦いを急遽、霧の守護者の戦いに変更します」

諸事情というのに気にはなつたが、ツナ達もヴァリアー達も、守護者が現時点でいない状況では好都合。あまり深く突つ込むことはせずに、その勝負を了承した。

そして現在、光努が拉致したスクアールと武の両名はそれぞれの家に寝かせてきた。スクアールの場合にはホテルだが、現在ツナ達ヴァリアー達は並中に集まっている為、気づかれることなく返却できた。ホテルにはヴァリアーの部下と思わしき人物が何人かいたが、全員蹴散らしてきて寝かせてある。

そして用事も終わり、今現在進行形で霧の守護者の戦いが行われているであろう並中に向かっているのは、光努。

柔らかそうな白い髪を揺らしながら、屋根から屋根へと飛んで移動をしている。そしてその頭の上に乗っている小さい影。

着流しに羽織を着て下駄を履いた和風な出で立ちに、銀色の髪。そして胸元に付けられた白いおしやぶり。光努の頭の上に乗っていたのはハクリ。謎の多き赤ん坊、光努と共に世界にやってきてから神出鬼没で消えたりいたりする人物。あまり描写されないが、現在は一応黒道邸に居候しているようだ。

アルコバレーノと同じようなおしやぶりをつけているが、ハクリの存在を知っているアルコバレーノは現在リボーンのみ。厳密に言えば、ハクリが現れたと同時におしやぶ

りに反応があったため、何かあったというのは全アルコバレーノが知っているところだが、正確に何がどうしたということまでわかつているのはリボンだけ。単に会う機会が他の人物にはなかったり、タイミングの問題だったのだが、ハクリが積極的にアルコバレーノに会いに行かないのも原因の一つである。

「いやはや、アルコバレーノが三人もいるなんて、ラッキーだな」

「まあ世界に7人しかいないアルコバレーノの3人がいるつてのは確かにラッキーといえはラッキーだな」

「ほらほら急げ。でないと試合が終わるぞ」

「了解。飛ばすぞ！」

屋根を踏みしめて、目的の並中へと光努とハクリの二人は向かった。

クローム髑髏とマーモンの戦いは、初っ端から高度な幻覚合戦と化していた。クロームが槍で地面を着いたとき、体育館の床は崩壊し、せり上がる。

通常ではありえないような崩壊の仕方をした体育館の床。幻覚を使っていると分かっていても、さすがと言わざるを得ないほどの幻術。

だが、これくらいは相手も予想の範囲内。

マーモンは自分のフードの中から大量の触手を作り出し、クロームの首を締め上げる。そうすると、さきほどまで体育館全土を崩壊させていた光景は煙のように消えてしまい、思わずツナ達も戸惑ってしまふ。よくよく見れば、マーモンに締め上げられているクロームの姿が映し出されていた。

だがそれもわずか。気がつくと、マーモンが締め上げていたのはバスケットボールの入った籠。クロームはマーモンの後ろに立っていた。

「！」

ツナも獄寺も良平も、あまりこういった奇想天外な幻覚に慣れていない彼らは、今起こったことも、何がいつの間にか起こったのかに理解するのに少し時間がかかった。それでもこの戦いは、戦いのプロであるヴァリアーから見ても見事である。

クロームの幻覚を破ったマーモンも見事だが、それを幻覚の罠で防いだクロームも見事。

息もつかさぬ騙し合い。滅多に見られない戦いだつた。

バキン！

クロームの実力が弱いものでないと確認したのか、マーモンのマントの下から何か金属が砕けるような音がしたかと思うと、中から短めの鎖が床に落とされた。

そしてマーモンの頭の上に乗っていたカエルが脱皮をするように割れ、中から出てきた動の長い巻き蛙が、自らのしつぽを加えて、まるで天使の輪つかのようにマーモンの頭の上で浮いた。

さらには観戦に来ていたりボーンとコロネロのおしやぶり、そしてマーモンのマントの下から現れたおしやぶりが、共鳴するように鮮やかに光輝いた。

「あの巻きカエルと藍色のおしやぶり。……生きてやがったのかコラー」

「やはりな。奴の正体はアルコバレーノ、バイパー」

青色のおしやぶりを持つアルコバレーノの一人、コロネロのつぶやきに、確信を突いた声。黄色いおしやぶりを持つアルコバレーノ、リボーン。

ここに、3人のアルコバレーノが揃った。

コロネロがマーモンの正体に驚いたのは、アルコバレーノのバイパーは、戦いの中で行方不明、つまり死亡したと聞いていたから。通常、アルコバレーノ同士が近づくと、お互いの持つおしやぶりが共鳴をして光り輝く。マーモンと最初にあつた時には何もおしやぶりに反応がなかったため、わからなかったが、原因はマーモンが使っていた鎖。

素材等は不明だが、あれを巻きつけることによっておしやぶりの機能を封じていたの

は確か。そしてその力を開放するということは、先程までの戦いの力以上の力で戦うことが可能になったということ。わかりやすく言えば錘を外して超スピードで動く悟○のような感じ。

おしやぶりを外したあと、地面から足を離して宙に浮いた。

マーモンこと、アルコバレーノのバイパーは、最強の赤ん坊である 虹 アルコバレーノ 一のサイ

キック能力を持つ術士。つまり幻術士でもあり超能力者。

今宙に浮いている状態は幻覚でもなんでもない、現実。

正体が現れたマーモンを前に、クロームはひるまなかつた。

「誰だろうと、負けない」

強気に槍を握り締め、マーモンに向かっていた。

ふよふよと浮いているマーモンに向かって槍を振るう。

マーモンはひらりと避けるが、クロームはそこから槍を匠に動かし、マーモンの移動地点を予想して槍を振るった。格闘術に関してはプロとは言い難いマーモンは、飛んできた槍を思わず喰らってしまった。

「むむー」

「まだ」

シヤッ！

「これは、幻覚じゃない？」

マーモンに巻き付くように現れたのは、大量の大蛇。

猛毒を持つていそうな危ない外見をした大蛇が浮いているマーモンに何匹も絡みついていた。

畜生道。

骸の持つ六道輪廻の能力の一つ。人を死に至らしめる生物の召喚能力。

だが、そこはさすがアルコバレーノ。すぐに蛇を振り払う。

だがクロームはすぐにさまマーモンに肉薄して追撃を仕掛けた。

マーモンはすぐに避けるが、振り下ろした槍が床に触れたとき、床が何箇所も膨れ上がり、そこから煌々と燃え上がる火柱が天井まで立ち上った。

火柱というか、まるで溶岩が吹き荒れたかのような柱。

傍から見ているツナ達も、実際にはないはずの暑さをリアル感じていた。

だが、火柱の中から何事もないかのように出てきたマーモン。

「確かに、君の幻覚は一級品だ。一瞬でも火柱にリアリティを感じてしまえば、焼け焦げてしまうように」

素直に関心するマーモン。一流の幻術士と言っても過言ではないクロームの幻覚能力。元々クロームの能力ではないのだが、それでもこれほどの練度で使いこなすのは普

通では難しい。だがそれでも、まだマーモンには届かなかった。

「故に弱点も、幻術」

一瞬で、燃え盛る灼熱地獄が、氷の柱へと変化を遂げた極寒地獄と化した。

空中から大量の氷柱が表れ、クロームに襲いかかった。

三叉槍を振るい、全ての氷柱を落とすクローム。ついでにマーモンにも攻撃をする
が、途中で止まってしまった。よくよく見てみると、自分の足元が凍りついていた。

幻覚を幻覚で返す。

脳の五感を支配する幻術の攻撃を、幻術で返されるということは、自らの知覚のコン
トロール権を奪われると同義。

「ふん」

が、クロームは槍の柄で足元の氷を砕いた。

「うそっ」

マーモンも唾然としている。

足を自由に開放し、マーモンに接近して槍で地面に打ち落とす。

自分の幻覚を全部でないとはいえ、破られたのに驚いた為、一瞬の隙を疲れた。

クロームが使ったのは、幻覚能力を集中させて、相手の幻覚の一部を壊すこと。

そして自前の格闘能力を持ってマーモンを打ち落とす。説明にするとあつという間

だ、そう簡単にできることでもない。

「いたた。だけど甘い。まだまだ僕の幻術の中だよ」

マーモンが手を動かしたかと思うと、地面から大量の氷柱が生えていった。

自分のいるところから広がるように、クロームの元へと、逃げ場をなくすように氷柱をはやしていった。

クロームは、自分の足元から氷柱が生えると同時に地面を蹴り、宙へと飛び出る。

そして一回転して優雅に氷柱の先端の上に降り立つ。

しかもそのまま氷柱の先端を蹴り、そこから別の氷柱の先端を蹴って一気にマーモンの元へと近づき槍を振るう。

か弱そうな少女が氷柱の上を苦もなく移動して攻撃したのに呆気にとられたマーモンだが、気を取り直して空を飛んで槍を躲し、槍が届かないであろう上空で停止する。

(だんだん知覚のコントロールが奪い返されている。術士としてはまだ僕には及ばないが、格闘能力と幻覚に対抗する力は高いね)

マーモンは、クロームの槍が届かないである上空で待機した。

それによって生じた余裕と、少しの思考がマーモンに隙を作った。

パキン。

クロームはその隙を見逃さず、自らの持つ三叉槍の先端を外し、ブーメランのごとく

マーモンに投げつける。

くるくると回転した槍の先端は、マーモンに辺り打ち落とすことに成功した。

「すごい！相手を押ししてるよ！」

「幻術というより肉弾戦で押ししてるのがなんか俺的に尺なんですけど……」

「ま、いーんじゃねーの？これなら勝てるだろ」

事実クロームが押ししているように見えてる現在、ツナ達観戦側は喜ぶ。

隼人の言うとおり、術士なのに格闘している点で妙というのわかるが、一応言っておくとクロームの幻覚能力は一流。観客から見ればか弱そうな女子だったが、幻覚を使うだけでなくマーモンも吃驚の格闘能力を披露するので割と驚くみんな。

犬と千種は当然だというようににやりと笑っている。

落とされたマーモンは、再び浮遊して再び幻覚を発動した。

ビュオ！

「うわ！寒っ！」

「さすがバイパー。こいつはやべえかもな」

猛吹雪。ブリザード。

吹き荒れる風と雪と氷が体育館を包み込んだ。

「はっ！」

負けじと、元に戻した槍で地面を突くと、そこから巨大な火柱が飛び出し、マーモンに向かった。マーモンも巨大なブリザードを作り出し、火柱にぶつける。

幻覚と幻覚のぶつかり合い。傍から見たら大規模な炎の渦と雪の嵐がぶつかり合い、自然災害レベルの映像が映し出される。ツナ達やヴァリアー達は、幻覚だということが分かっている。暑さと寒さに顔を歪ませる。同じ最強の赤ん坊と言われるの कोरोना とリボンでさえ、思わず吐く息が白くなってしまった。

その様子を、見ている影が二つ。

気配を断つという芸当をしているわけでもないが、なぜか誰も気づいていない。

だが、体育館の上方に位置する小窓から中を除く顔が二つあった。

「お、結構前線。さすが地獄巡りをくぐり抜けただけある」

「あの罫地獄か。けどマーモンもまだ全力じゃないぞ」

会話しているのは、用事を済ませて並中へとやってきた光努とハクリ。

一体どうやって上にある小窓から覗いているのかとも疑問に思うのだが、そんなことはひとまずどうでもいい。最強の赤ん坊と言われるマーモンことバイパー。

アルコバレーノとしての力を開放して戦っているが、まだ全力というわけでない。

だがそれはクロームも同じこと。この戦い、一体どうなるのやら。

「さてと、いつ出るつもりだ？ 骸」

そう言った光努の右目は赤く染まり、中には『六』の文字が記されていた。

『巡る輪廻街道まっしぐら』

（クフフフ。予想以上にクロームが成長されていますね。一体何をしたのですか？）

「なーに、ただ地獄巡りしただけだよ」

（それはただというには重すぎる気がするのですが……）

「前世に六道輪廻回ったやつが何を言う」

（それもそうですね）

ヴァインディテエ

六道骸は、基本的に復讐者の牢獄の最下層にとらわれている為、外の事を知る手段はかなり限られてくる。だが今は、クロームを介していくらか知ることができる。

クロームは、元々不幸な事故にあつた少女。

重要な内蔵を多く損傷し、もはや命は風前の灯だった。

それを救ったのが、六道骸。希にいる、骸と波長の会う人間とは、精神世界の中で会話を行える。偶然精神世界を散歩していた骸と、意識不明中だったクロームの精神が出

会った。

そして骸は、自らの力で作り出した幻覚の内蔵を彼女に与えて、その命を繋いだ。

その際に骸の能力である六道輪廻の力もいくらか彼女は使えるようになり、ヴァインデイツェ復讐者
にいる骸とも多少なら会話をすることができる。

が、動く分のエネルギーも幻覚に回しているとはいえ、それも常時できるわけでもない。
い。

そんな時にでたのが光努。

光努の精神世界に入り込み、そこから外を見るといふ提案。

骸は、光努とはなぜか波長が合う以前に、入り込むのに抵抗が全くといていいほど
ないらしい。余分な力を使わずに観戦するにはもってこい。もちろん、肉体的主導権は
光努から奪えないのであしからず。

それでも、光努の『六』の文字が入り赤く染まった右目が、爛々と輝いているようだった。
た。

「それで、クロームは結局勝てると思うか？」

（そうですね。勝てる・・・とはやはり言い切れないですね）

格闘家と幻術士が戦ったとき、通常なら幻術士が勝つ。

ただし、それはかなり荒っぽく見た場合。

通常なら、幻覚を仕掛ける前に倒すという方法、もしくは幻覚に理解のある格闘家であれば、相手の幻覚に対抗する術を身に付けることも、幻覚が通じないこともある。

幻覚を知らないのであれば、防ぐすべなく、知覚を全てコントロールされて敗北となる。

まるで、銃と剣が戦うのがごとく。

銃は剣より強しという言葉があるが、剣で銃弾を防ぐ技術があるものには通じない。

今回の場合を例えるなならば、マーモンが持つのはガトリング砲、クロームが持つのは、サブマシンガンと刀。使い方次第かもしれないが、正直勝つのはまだ難しいかもしれない。

それほどに、マーモンの幻覚能力は高かった。

(それでも簡単に負けるクロームではありませんし、もう少し様子見しましょう)

「それで、お前は どうする？ 出るか？」

(クフフ、もう少ししたら、ボンゴレ達を驚かせて差し上げましょう)

「スツゲー疲れるんじゃないのか？」

(アルコバレーノとも戦ってみたいですし、それに連中の驚く顔が見てみたい)

「アホか・・・」

(まあクロームならもう少し大丈夫でしょう)

「でも確か幻術を幻術で返されたらやばいんじゃないのか？」

（確かに、通常の術士同士の衝突の場合、幻術を幻術で返された時、知覚のコントロール支配される。だけど）

「だけど？」

（クロームは、まだ完全に支配されていない）

シューウウ。

「あれ？なんか霧が出てるような？」

不意にツナが言った。

他の面々も、周りを見てみると、まだまだかすかだがあたりに白いもやのようなものたちが込めているような気がした。

が、かなりかすかなのと、そこまで周りを見るほど余裕がある者は割と少ない。なぜなら、今も現在、クロームとマーモンの作り出した幻術合戦が続いたから。

だが現状、クロームが押されているように見える。

クロームの身体能力は格段に上がっていたが、幻覚と同時進行で使い続けている今、そろそろ体力が尽き始めていた。マーモンの幻覚を、幻覚と体術を合わせて破壊するという荒業を使っていたが、その分体力の消費も大きかった。

「！これは……」

「むむ？この霧は？」

だが、その二人をもつてしても、不可解な現象。

どこからか、霧のような白いもやが、だんだんとフィールド内に増えていった。

（お疲れ様です、クローム）

（骸様！）

（さすがに僕の作った幻覚の内臓じゃ、体力的にもきついでしょう）

（そんなことは……）

（少し休みなさい。後は——）

霧は深く表れ、クロームを包み込んだ。

一体何事かと思われる中、だんだんと霧が集まっていき、クロームの全体を隠し渦を巻く。

（——僕に任せなさい）

トーン！

霧の中から、棒の柄が出て床を突いたかと思うと、地面がひび割れていき、真つ直ぐにマーモンの元へと向かっていった。

「ムギヤー！」

霧に目を奪われていた為、モロに攻撃を喰らったマーモン。倒れてしまつたがすぐに態勢を立て直して渦巻く霧を睨む。

そして、霧がだんだんと晴れてきたと思つたら、中にいた人影が姿を現した。

特徴的な髪型の黒い髪。先程までいたクロームの影はなく、明らかにクロームより体格のよい、というか別物の体格の男性。黒い手袋に握られた三叉槍と、その右目は赤く染まり、『六』の文字が記されていた。霧が晴れた今、クロームは見当たらず、そこに佇む男は口を開いた。

「クフフ、随分いきがっているじゃありませんか。マフィア風情が」

霧の中から現れたのは、六道骸本人だった。

「骸も無茶をするな、ていうか過保護なこった」

視線の先にいるのは、氷漬けの骸。

足元から頭の上まで、すべてが氷漬けになり止まった状態の骸と、対峙しているマーモン。

骸の登場に、誰もが驚きを隠せなかった。

前に黒曜ランドで骸と死闘を繰り広げたツナや隼人はもちろんのこと、鉄壁と謳われた復讐者の牢獄から脱出したと噂される骸のことは、マーモン達ヴァリアーも驚くところ。だが骸は確かにここにいて、確かにしゃべっている。

その為、幻覚だと思われる骸の正体を暴くため、マーモンの幻覚によって氷漬けにされた。

そして無情にも、幻覚のハンマーを作り出し、氷漬けの骸を破壊するために迫ったマーモンだったのだが、

ズバン！

「おっ」

「！」

「えー！」

「!?」

地面から生えた植物のツル。氷漬けの骸に近づいたマーモンに大量に絡みつき、ツルの多くから蓮の花を咲かせた。

「クフフ、だれが幻覚ですか？」

一瞬で氷を溶かして自由を取り戻す骸と、ギリギリと万力のごとき力でツルに締め付けられ、苦しんでいるマーモン。

「なんて……力だ……。く……。苦しい！」

これはマーモンにとっても予想外。

骸は脱獄に失敗して、最下層の牢獄に今も投獄中という情報。その為、今いる骸はクROOMが作り出した幻覚であり、オリジナルとは程遠い偽物侮っていたのだが、今見せつけられた幻覚能力の強さは、明らかにクROOMよりも高い。

今この場にいる骸は、本物だと言わざるを得ない状況。

「さあどうします？アルコバレーノ。のろのろしているとグサリ……。ですよ」
「ムウ！ 凶に乗るな！」

蓮の花の咲いたツルを振りほどき、幻覚能力を解放するマーモン。

空中に浮いているマーモンの周りに、幾人もの同じ姿のマーモンの姿が大量に現れた。

「懦弱な」

ズバババン!!

骸の右目の数字が『四』となり、目に炎が灯ったかと思うと、見後な槍捌きを發揮して、大量に浮いていたマーモン自身の幻覚を一瞬で仕留めた。

「あの目の炎は！格闘能力かくとうスキルの修羅道だ！」

「ムムウ！あの女といいお前といい、格闘のできる術士なんて邪道だぞ！」

第四の道、修羅道。

自身の格闘能力を上げる力。

骸の六道輪廻の能力であり、術士の弱ウイークポイント点とも言える格闘能力を上げるため、対術士戦や、通常戦闘では割と重宝する能力。

その力は、最強の風紀委員長である雲雀とも、ほぼ互角の戦いができるだけ高い。

しかもクロームの場合は、地獄めぐりによつて格闘能力がさらに向上しているため、通常の骸が使う修羅道よりも格闘能力が高くなっている。これはさすがに骸も吃驚の成長ぶりだった。

「人間は何度も同じ人生を繰り返すのさ。だから僕は集めるんだ、金をね!!」
ぐにやり!

「わあ！床が！」

景色が歪んだ。もはや天井は天井でなく、床は床でない

窓も床も天井も、扉も何も関係なく、上下左右すべてがごちゃまぜになったような空間が出現した。もはや手加減をするほどの余裕はマーモンになかった。アルコバレーノとしての力を発揮して、体育館全体に強力な幻覚を仕掛けた。

「バイパーの奴、力全開だぜ、コラ」

「そーするしかねーだろーな」

床が床でなくなつたため、相棒の鷹のフアルコにつかまり宙を飛ぶコロネロと、それにつかまり一緒に浮いているリボーンの二人。

先ほどよりもはるかに強い幻術だが、リボーン表情には、危機や焦りなど微塵も感じられなかった。

「クハハハ、強欲のアルコバレーノですか。面白い！だが、欲なら僕も負けません」

そう言つて、地面とも壁ともつかない場所に三叉槍の柄を当てると、火柱が飛び出た。

360度ごちゃまぜの世界から、大量の溶岩が吹き出したかのような火柱に蓮の花。

上から下から左右から、斜め上から前から後ろからと、あらゆる場所から火柱が出現し、もはやツナ達だけでなく、ヴァリアー側もこの先程までの高度な幻覚合戦よりも遙かに高いレベルの幻覚に驚愕を隠せない。ベルやレヴィも驚きをあらわにしていた。

「とつたー！」

それでもなお、自分の姿の幻覚を弾丸のように骸に飛ばし、槍を回転させて受ける骸

だったが、隙間から小さなマーモンの幻覚が入ったと思つたら、だんだんと膨らみフードが広がり、骸を全身から飲み込んだ。そして外からマーモンの相棒の巻きカエルであるフアンタズマが、大量の刺を、マーモンの巨大なフードに飲み込まれ、動きを封じられた骸に向かってフードごと突き刺した。

「ああー！」

「骸さん!!」

ツナも、犬や千種も焦りの声を上げる。

だが、捕まえた当の本人から、一番の焦りの声が聞こえた。

「……バカなー！」

ブワア！

内側を突き破り、現れたのは骸。

大量の植物と、綺麗に咲き誇る蓮の花。

優雅に佇み微塵の焦りも見られないその姿。骸とマーモン。アルコバーレのとして最強と謳われた力をもつマーモンと、前世で地獄道を巡り身につけた幻覚能力を持つ骸。どちらも超一流の術士だが、二人の間には圧倒的なほどに能力に差がっていた。

「堕ちろ、そして巡れ」

『雲の戦いは快晴なり』

カチン！

骸の手には、いつの間にかとったのか、霧のハーフボンゴレリングが二つ合わせ、完全な霧のリングとなったボンゴレリングが乗せられていた。

「これで、いいですか？」

そう言ったかと思うと、さっきまでの渦巻いた空間が消えて、元の体育館の景色が戻った。

・・・・・・出て行くタイミング見逃した！どうしょ。

マーモンの姿は見当たらない。と思ったら、こっち来た。

マーモンはもはや戦うほどの力は残ってないが、逃走用の力を残していたらしいので、それで姿を消しながら逃げ出す算段だったらしい。

まあヴァリアアの弱者は消すという掟があるとは言え、そう簡単に死にたくはないだ

ろうしね。見たところ、マーモンは欲が強そう。

ていうか、わざわざこっちに来なくても、と思つてたら小窓から出てきたので、
「捕まえた」

「むう！白神光努！なんでここに!？」

「よう、逃げていいのかな」

「み、見逃せ！というかなんでお前はこんなところにいるんだ！」

ひとまず体育館から離れて校舎の屋上に立つ。

そして、もはや飛ぶ力すら残つてなさそうなマーモンを降ろして向かい合う。

「どうするつもりだ」

「え？いや別にどうも・・・どうしてやろうか」

「なんで言い直した！そのまま見逃せ！」

「で?..」

「?」

「いくら出す?」

(なににいい!!こいつ!この僕をゆるするつもりか!)

マーモン驚愕。金にシビアなマーモンがまさかゆるされるとは。

まあ光努にゆるするつもりなど対してないのだが(つまり少しはある)今のマーモンは

逃げられる程の力がなく（まあ全開でも光努とハクリの二人から逃げられるかどうかは微妙だが）まさに八方塞がり。このままヴァリアーに突き出されたら、マーモンの命危うし！

「まあ、別に金などどうでもいいんだがな。イリスは大企業。やろうと思えばいく

らでも金が沸く」

「こいつ最低だ！」

「まあ今のは冗談として、この後ヴァリアーに見つかったらやばいんじゃないのか？」

「うっ！」

「それで、どうするつもりさ光努」

「そうだな、ああそういえばマーモン。まだ聞いてないことがあった」

アルコバレーノに会ったら言おうと思っていたこと。半ば聞いた後の反応楽しみで聞いている節があるのだが。

「なんだ？」

「数ヶ月くらい前に、おしやぶりにすっごい反応なかったかい？」

「！」

マーモンにはあった。心当たり。

おしやぶりの機能を封じていたにも関わらず、眩い輝きがあったことを。

何かが来た。他のアルコバレーノ同様にそう直感した。一体何が来たのか、どういう意図なのか、全くわからないが、確かな存在を知った。

しかし、そのことを知っているのは自分と、どこかにいた他のアルコバレーノのみ。なんでこいつがそれを知っているのか？マーモンの中で疑問が占めてた。

今や戦える状態ではないのに、相手は自分しか知らないことまで知っている。

知らず知らずに、マーモンは光努に対して畏怖していた。

そりゃ相手が自分の個人情報なぜか知ってたら怖いよな。

「まあ元凶俺らなんだけど」

「そゆこと」

くるりん。

光努の後ろから一回転しながらカランと、下駄を鳴らしてマーモンの前に立つハクリ。マーモンは最初誰だこいつ？というようにいくぶかしかけていたが、その胸元の白のおしやぶりを見て、みるみる表情が驚愕に染まった。

「そのおしやぶりは!!」

コオオ!!

暗い闇夜に光が照らされた。

ハクリとマーモン、二人のおしやぶりが共鳴するように輝く。

「お前は、一体」

「神とでも言っておこうか」

「ふざけてるのか？」

「割とマジなのだが、まあ別にアルコバレーノが一人増えようがどうでもいいと思ってる」

「まあそういうえげげそうだな」

「いや、大アリだよ！」

もしかしたらというマーモンの希望。

どこからか現れたアルコバレーノのおしやぶりを持つ者。

もしかしたら、マーモンの求めるもの、アルコバレーノの呪いを解く手がかりがあるかもしれない。

「確かに、俺は手がかりを知っているといえげげ知っている（かも）」

「本当か！」

（なんか余計なの入ってたよな……）

「が、教えるわけにはいかない」

「何!?!」

ハクリの回答は、「ノー」。

「もし、俺を倒せたなら、教えてもいいが」

「やってやる！」

フードの中から大量の槍を出して、ハクリに飛ばす。

さっきの会話の中で、あるていど幻覚能力が回復した様子。

幻覚と分かっていても、リアルな質感の槍が大量に飛び出す。

「今のままじゃ無理だろ」

「！」

真後ろ。いつの間にか、マーモンの後ろにいたハクリ。いくら幻術士のマーモンとは言え、ヴァリアーの一員でありアルコバレーノのマーモンすら反応出来なかった。気づいたら後ろにいた。そう感じることでしかできなかった。

（あの炎を使うのは少しずるいけど、どっちにしろ今のマーモンは力を使い果たしている状態。無理だな）

「当身」

ビシリ！

「むぎやー！」

ドサリ。

瞬殺。まさに瞬殺。

まあ当然といえば当然の結果なのだが。

とりあえず光努はマーモンを袋に詰めて、よっこいしよと言うように肩に背負う。

「でもいいんじゃないの？呪いとか何か知らんけど」

「まあそのうち」

「負けたらどうするつもりだよ」

「ないだろ」

「……」

当然だろとも言おうように、悠々と自信を語るハクリ。光努から見ても、その自信は決して虚勢などではない、そうわかる。

一番身近にいたからこそ、一番長い時間を共にしたからこそ、わかる。

「じゃ、帰るか」

そう言つて、夜の闇に消えるように、二人の姿は掻き消えた。

「光努、前々から言おうと思つていたが、お前の神経を疑うびよん」

「今日ばかりは、犬に同感」

「ふ、二人とも……」

「ほう。その心は？」

「なんでこいつがいる（びよん）！」

黒道家の食卓。

朝の朝食を食べようと犬や千種、それにクローム達が食卓に着いたと思つたら叫びました。

そこにいたのは、すでに幼稚園に言つた夕輝を除いて、光努、朝菜、クローム、犬、千種、そして……マーモン。

昨日の夜に死闘を繰り広げた（後半圧倒したけど）相手が次の日の朝食で同じ飯の前に座っているのは、なかなか光景。というか普通はやらない、やるやつはどこかおかしいのかもしれない。

やった本人はなんのこともないように朝食を食べているのだが。

「あらあら、二人ともどうしたの？」飯が冷めるわよ」

「ただくびよん」

「いただきます」

動物の本能なのか、この家で一番偉いらしい朝菜の言葉には素直に従い食べ始める犬達だが、すぐにはつとなり食器を割らないように机の上に置いて手を机にバンとつく。

「て、違うびよん！」

「うるさいなあ」

「んだとお！」

さすがに自分がここにいるのもどうかと思っていたマーモンだが、光努に連れてこられたし、別に出て行けとも（家主の朝菜に）言われてないし、正直行くあても特に無いのでここにいるのだが、さすがに犬が騒いでいるのは面倒だったのか、ついぼろりと本音が漏れる。

「まあまあ二人とも別にいいだろ。戦っただけなんだし」

千種もよく考えてみる。

確かに死闘を繰り広げたが、結局最終的には骸によってボロボロに打ち負かされた。しかもこの戦いも、向こうは暗殺部隊に所属しているが、別にクローム（骸）を狙っているというわけでもないし、戦う理由ができたから戦っていただけであって戦いの終わつた今、戦う理由な無くなった。つまり別にいても問題ないんじゃないか？

なんかあれば光努がなんとかしそうだし、というか任せればよくね？

「まあ・・・いいか」

別にいいかという結論に達したのか、千種は黙々と朝食を食べ続けた。

クロームも別に気にしてないのか、黙々と朝食を食べ、もはや騒いでいるのは犬だけである。

そしていつの間にか食べ終わる朝食。

「じゃ、僕はそろそろ行くよ」

「もう少しゆっくりしていけばいいのに」

すぐにでも帰ろうとするマーモンに、光努はずっといればという風に引き止める。

光努的にも、家主の朝菜的にも特に問題はないのでいてもいいと言っているが、なぜかすぐに出ようとすするマーモン。

怪しげた光努だが、その理由は案外すぐにわかった。

ドゴン!!

「なんらびょん!」

「庭に何かいる!」

縁側にでて庭を見てみると、庭に生えていた草が燃え、土埃が充満していた。

その場所から何やらウイーンといった機械音がしているような気がする。

すぐに煙が晴れ、やってきた襲来者の正体を暴いた。

ガスマスクでも付けているかのような顔面に、ゴーグルのようなレンズの眼。

というか全く人間の面影のない機械じみた巨人。手は銃、体もでかく頑丈そう。どこからどう見てもサイボーグでできた黒服の襲撃者、ゴーストモスカ。

「もう来たか」

悔しそうに、マーモンがつぶやいた。

『ターゲットチェンジ』

ヴァリアー独立暗殺部隊ボス補佐・ゴーラモスカ。

煙を吹き出したりレンズの向こうには機械が見え隠れしている。

ヴァリアーの黒服を着ている為、一見したら大柄な人間に見えるが、よくよくと見れば機械の割合が多い。というかやっぱり機械にしか見えない。

「マーモン、あいつなんているのか心当たりないか？」

「あるよ。どうせ僕を始末に来たんでしょ」

「やっぱり」

プシュー！

口（？）から煙を吐きだしながら、ズシンズシンと人間らしからなう足音を出しながらこちらに向かってくるモスカ。

目的はマーモンの捕獲。弱者は消すというヴァリアーの理念の為、霧の守護者の戦い

で敗北したマーモンを消すつもり。と言ってもリング戦はまだ終わっていないため、終わるまではまだ生かすつもりでいるらしいXANXUS。けど捕らえる。

そして今、黒道邸に、モスカ襲来。

「マーモン、追い払えよ」

「無理だよ。あいつに僕の幻覚は通じないし」

「通じない？」

「モスカは、ボスが手に入れたサイボーグのロボットみたいでね、まあ言ってしまうえば強力な破壊兵器だよ」

「破壊兵器とか、勘弁してくれよ」

「どうしたの光努？あの人はお友達？」

「いやいや、どうみても違うビヨン朝菜」

「逃げたほうが・・・いい」

「よし、クロームと犬と千種は朝菜連れてとりあえず避難してろ」

「わかった」

ひとまず光努の指示でクローム達は朝菜を連れて奥に下がる。

マーモンも逃げようと思ったが、光努に掴まれて逃げられなかった。

「あいつの狙いはマーモンなら、場所を帰るか。兵器なら家が壊れるし」

マーモンを餌に、光努は縁側から飛び出し、モスカを越えて塀に脚をかけ、黒道邸の外へと飛び出した。

それを、ぐるりと首を回して見つめるモスカは、足元からロケットのように炎を噴射して、空中へと飛び出した。さすがロボットというべきか、現段階の科学力でよくもまああれだけのものができているとはすごい、と光努は思いつつ山の中へと入った。

「ここまでくればいいか。しかし、あれがボス補佐とか、XANNXUSの趣味？」
「誰も信用してないってことじゃないの。ロボットだし」

「ありえる・・・」

ゴウ!!

「来たー!」

空中から炎を出しながら、さながらミサイルのごとく迫ってきたモスカ。

銃口のある手の指を光努達に向け、問答無用で発砲してきた。

ガガガガガ!!

「危な!というか、いきなり発砲してきたぞ」

「こう、邪魔者を排除・・・みたいな感じ?」

「そうかそうか、俺が邪魔者か。いい度胸じゃねえか」

プシューー!

煙を履きながら、足音を響かせ、侵略者のごとく土煙の中から現れるモスカの瞳部分は赤く光っており、明らかに狙いを定めているよう。居場所の不明なマーモンの元へ来たことからリーダーなどの機能も搭載されていると思われる。つまり逃げても無駄。

「逃げないけど。マーモン、報酬とか出るこれ？」

「あーもう、わかったよ。報酬くらいあげるあげる」

「よし」

ボシユ！

ミサイル×4。中々に強力な武器が搭載されている、というか明らかに過剰すぎる。武器というより兵器。ミサイルにガトリング砲、それに荷電粒子砲。いやいや、それって架空の兵器で現段階じゃ理論的にできても実現不可能だろ。明らかにエネルギーが足りないし、他にもいろいろと問題が……エネルギー？いや、まさか。さすがに当たるとやばそう。

「せー」

バキイ！！

下からちょうど腕の関節あたりを蹴り上げ、右腕の肘から先を吹き飛ばした。

そして今度は反対の左腕の銃口をこちらに向けたため、ひとまず手でそらし、手刀で肩から切り裂いて左腕を引きちぎる。そしてモスカが動くより速く右足の膝を踏みつ

けて破壊し、しゃがみこんで足払いをするようにして、残りの左足も粉碎した。

「すごい！あつという間にモスカがダルマだ……」

「あとは」

バキイ！ブチブチ！バチバチ！ズバ！バゴオ！！

「これで、あらかたの兵器はなくなつたな」

あつという間の出来事だった。

マーモンは啞然としていた。やはりこいつは底がしれないと。

大量自立破壊兵器であるモスカに搭載されていた兵器は、両手両足含め全て千切り取られ、胴体の周りに会った砲台等は全て銃口を潰されている。

もはや残っているのは何もできない胴体と顔、つまりマーモンの言うとおり、もはやダルマ状態だった。

「これで、終わり！」

ボゴオオ！！

「！」

胴体から拳を突っ込んだ光努が、止まった。

どうしたのかとマーモンがやってきたが、光努はそのまま手を引き抜いて、開いた風穴に両手を入れてこじ開けるようにして胴体を開いた。

「むー！」

「これは！」

「みなさん、集まりましたね」

夜の並盛中学、そしてその校庭。

くらいが、野球の会場にあるようなライトがあちこちに設置されており、明るさには問題ない。そして集まったのは、ツナ側とヴァリアー側の全員、そして光努。

ちなみに怪我人も問答無用で収集されている。ルツスーリアはベッドに縛り付けられたまま、ランボも酸素マスクをつけたまままで気を失っているが、他の連中も包帯やら何やらで怪我しているが、全員が集まっている。

いないのは、ヴァリアー側の雲の守護者のモスカだけ。

リボンやディーノ、バジル達も見守る中、現れたチエルベツロの二人が口を開いた。「それではこれより、大空のリング戦を開始します」

「おかしいな、なんでこうなった？」

一人、光努は並中の中で最も高いと思われる屋上の給水タンクの屋上にあぐらをかいて座っていた。

あのあと、守護者は全員己が戦った場所にて待機、そしてXANXUSとツナによる戦いが始まった。

始まりは、光努の見つけた存在。

ゴラモスカの中から現れたのは、現ボンゴレボスである9代日本人であった。

見間違いかと思ったが、確かに9代日本人。一度会ったことのある光努にはわかった。そして9代目が現れたのを、とりあえずXANXUSに教えた。

理由としてはモスカを壊したからというのもあるが、他にもいろいろと気になること

があつたからだ。

9代目は知り合いの医者に任せてXANXUSの元へときたところ、XANXUSの怒りの矛先が光努へと向かった。父である9代目を、結果的には言え傷つけた光努に對して、敵を取ると宣戦布告した。

それをいつの間にか聞きつけたチエルベツコによつて、その仇討ちを大空のリング戦とした。

フィールドは校舎全体。

各守護者は己の戦つた場所（雨の守護者戦は行われる予定だつた場所にて集合した）に集まり、戦う。勝利条件は、全てのリングを集めること。

改めて分けられたツナとXANXUSのハーフボンゴリングを大空のリングにし、さらに守護者全ての6つのリング。

そして——イリスボスの証である、フィオーレリング。

戦国武将が相手の武將を倒した証として首を持ち帰るように、イリスのボスを倒して敵をとつた証として、フィオーレリングも手に入れる。それが勝利条件だつた。

「なんか、うまくすり替えられた感じだな」

マーモンにこつそりと聞いたのだが、元々XANXUSはツナにモスカ（9代目）を

破壊させるつもりだったらしい。

筋書きは簡単。

雲のリング戦で暴走させ、仲間を傷つけられた為必ずツナは飛んできてロボットであるモスカを破壊すると考えた。そして、モスカとともに中の9代目も一緒に傷を付け、その敵を息子のXANXUSが撃つ。それにより、XANXUSに否定的なボンゴレの上層部達からうまく信頼を得ようとする。

イ
が、その前に光努が破壊してしまった。その為、XANXUSは作戦を少々変更して、

リスへと宣戦布告をした。

「しかし、XANXUSと9代目か。何かあるな。・・・ま、考えるのはあとにして」

ゴウ！

「逃げるか」

どこからか、光の柱が襲来し、光努のいた給水タンクを破壊した。

ドゴオン!!

「やめろ！XANXUS」

叫んだのは、空中に佇む人影。

額にはオレンジ色の炎を灯し、その瞳はまるで全てを見透かすよう。

その両手にはめられたグローブの甲には、『X』のエンブレムがオレンジ色の炎と共に燃えていた。

沢田綱吉ことツナ。大空のリング戦を勝ち抜くため、戦っていた。

両の手から噴射される死ぬ気の炎によって空中を自在に動くことが可能なツナ。今いるところは、さきほどまで光努のいた屋上が見渡せる上の方。

そして煙が晴れて姿を現したのは、もう一人の大空。

黒い服をはためかせ、射殺すような鋭い眼光。どうやって屋上まで来たのか疑問だが、さきほど撃たれた攻撃はコイツのものであるのは間違いない。

X A N X U S。

ツナとX A N X U S、そして光努による戦いが始まる。
それと同時に、各守護者の戦いも始まろうとしていた。

ザザザ。

複数の足音。だが周りに気づかれないほどに静かに走る音を出している。

そこにいたのは、黒い集団。黒い服に身を包み、顔を隠すようにして仮面が付けられている。肌の出ている箇所が限りなく、というより全く無い。

明らかに、どこからどう見ても怪しい。そんな集団が走っている。

屋根を扉を、道路を身を潜ませながら通るその数は、およそ100人になろうかという人間（？）がいた。

夜の闇に紛れるようにして潜む大軍。

向かう先は、全員同じ方向。

向かっている先にあつたのは、並盛中だった。

『雨の戦い水を打つ』

時雨蒼燕流。

山本が、父親の剛から教わった、僅かな時間ながら磨き上げた剣技。

元々、戦国時代頃に生み出された殺人の剣。だが別に今は暗殺に使っているわけではない。守型四式、攻式四式の計八式の型を持つこの剣技は、状況に応じて使い分けるところができる。

山本は、守護者の戦いがないときは、ひたすらこの剣を磨いた。

ひたすらに竹刀を振り、教わった型を反復する。他にもいろいろとあつたトレーニングを、山本はひたすらに打ち込んだ。

それにより、わずか一週間ながらにして、剣士としての力をつけた。

だけどもまだ足りない。剣帝を倒した男、スクアーロ。

彼には、いくら剣士として才のあ山本といえど届かなかつた。

今のままだったら。

「あれは！」

「あれが山本の時雨蒼燕流、守式七の型。繁吹き雨」

大空のリング戦の開始と共に、各地で勃発した守護者の戦い。

場所によっては戦わずに別のところへ行くものもいたが、山本とスクアア口の二人は戦いあった。

なし崩し的に雨の守護者の戦いがなくなってしまったが、こうして戦う機会が得られた。どちらにしる山本は、スクアア口を倒してからでないとも出ることでもできなさそうな状態。ならば戦って、リングを手に入れようと考えた。

そして、スクアア口の剣を時雨金時で防御した時に打ち込まれた爆弾。

至近距離の爆発にも関わらず、煙が晴れたところにいたのは、水に濡れながら無傷の山本だった。

時雨蒼燕流の守式四式の内の一つ、『守式七の型、繁吹き雨』。

足元に流れる水を、刀で巻き上げて爆弾を包み込み、防御することに成功した。同時

刻にモニターで観戦していた他の守護者達も、その様子に喜んだ。

最初に襲来したヴァリアーのスクアーロ。

あの時は全く手も足も出なかったが、今の武は、スクアーロの攻撃を防ぐことに成功している。

「う”お” おい！ 図に乗るなよ、ヒヨっ子があ!!」

スクアーロが剣を振ると、仕込み爆弾が飛び出し、山本の両脇で爆発して左右の退路を絶たれすかさず正面から特攻を仕掛けるスクアーロに対して、山本は刀で足元の水で水柱を作った。水柱の影響で、完全に山本の姿が隠れ、スクアーロは水柱を切り裂いただけで済んだ。

時雨蒼燕流、『守式式の型、逆巻く雨』。

刀によって水を巻き上げて姿を隠し、身をかがめて刀で防御する技。

退路の立たれた攻撃に、山本は正しい選択をして技を繰り出し、防ぐことに成功した。ここまで見れば、山本もまだまだ荒いながら、スクアーロの剣技に対抗している。

だが、その様子を観戦しているディーノにはぬぐいきれないような不安が渦巻いていた。

光努 side

全てのフィールドは、校舎に付けられた大型モニターに映し出されている。しかもそれぞれに参加者達には、小型のカメラとモニターの搭載されたリストバンドが付けられているため、リアルタイムで他の守護者達の状態がわかる。

スクアールと武の戦っている状況も、ツナとXANXUSの戦いも、全て見える。というわけで、他の守護者の状況を伝えようと思う。

え？俺が今どこにいるかって？

グラウンドで勃発しているツナとXANXUSの戦いを屋上から見てる。

さつきはXANXUSに屋上からいたところを狙われたが、雲隠れして再び屋上に戻る。これが俗に言う・・・灯台下暮らし？

まあそんなこんなで、他にもこっそりと移動しながら実況をしておこうと思う。

それぞれの守護者の戦っているところには、宝箱が隠されている。

宝箱といっても、ほんの手のひらに収まるくらいの指輪のケース。

中に入っているのは、完全な形をしたボンゴレリング。それぞれの守護者の模様が

ケースには描かれている。

戦いながら、先にそれを見つけられることも重要。この勝負の勝利条件は、全てのリングを手に入れることだから。

「さてと、最初はどこを見るか」

そう言いつつ、屋上から下の階を窓から覗く。

そこには、爆発痕を残した廊下が見える。

さきほどまで、隼人とベルが軽く戦っていたところ。

だけどベルは一時撤退した。さすがに怪我をしたあの足じや、隼人のロケットボムから逃げるのも少々面倒だと思ったのか、下の階へと逃げていった。

そして隼人も、他の場所へと移動を開始している。

よくよくと見れば、廊下には嵐のマークが記されたケースが転がっているため、隼人とベルのどちらかが嵐のボンゴリングを見つけ持っていたみたい。

多方、ベルが逃げたあとに隼人が探し出したんだろう。

キイン、キイン。

・・・？金属音がする。

廊下の窓から下を見てみると、誰かが戦ってる姿があった。

大量のナイフを、自身の周りに浮かせているベルフェゴールと、両手にトンファーを握る雲雀恭弥。

両者共に武器を構え、二人で戦っていた。

「どつちが不利かといえば、普通に怪我してるベルだな」

だが、今のところ恭弥が不利に見える。

見たところ、恭弥はベルの戦い方を知らないみたい。

視認しにくい程に細いワイヤーとナイフの併用。ベルの投げつけるナイフは簡単にトンファーでガードしているが、そのあとに続くワイヤーの攻撃には対処できていない。現にワイヤーに触れた頬や腕に切り傷ができて、少なくとも出血をしている。

「そして、向こうの屋上では隼人とレヴィか」

怪我でまだ意識不明のため動けないランボのところに向かったか。よく間に合ったな。ま、なんだかんだ言って隼人も隼人だし。

そして相手がレヴィか。この場合どつちが勝つのだろうか。普通に接近戦だったら隼人負けるんじゃないか？武器ないし。ダイナマイトって遠距離だし。

あ、レヴィ負けた。

普通にパラボラ開いてロケットボムで撃ち落とされるとか、レヴィも浅はかだな。

パラボラなくなったら後は丸腰。ダイナマイトくらって一発だったな。
じゃ、俺はこつちに参加するか。

「俺もまぜろお！」

そう言つて、恭弥とベルの元へと飛び出した。

「!!」

タン。

3階から飛び降りたと思えないような軽い着地音。

一瞬戦いに気を取られて気づかないほどに静かだか、二人ともすぐに気がついてそちらにも注意を向ける。

そして人物を確認した瞬間、問答無用でベルのナイフが飛び交う。

パシ、パシ。

雲雀と光努、二人に向けて放たれたナイフは、二人ともいとも簡単に手で受け止めた。
「！」

「へえ、なるほど。ナイフにワイヤーがついてたんだ」

「恭弥ボロボロ。大丈夫？」

「余計なお世話だよ」

バシユ！

雲雀がナイフを掴むために一度手を離れたトンファアを再び両手で握り、何か操作すると、トンファアの下が開き、中から鎖と、先端には刺のような物がついている分銅が現れた。

ヒュンヒュンヒュン!!

そしてトンファアとともに回転させると、あつという間に周りに張られていたワイヤーを切り裂いた。

「・・・やつべ」

さすがのベルもままずいと思った。

ナイフもワイヤーも防がれる。かと言ってあの回転するトンファアと鎖をかくぐ

り攻撃するのも難しい。となれば、後はやることは一つ。

「バイビー」

これは逃げるのではない、戦略的撤退。

ベル的には、これだけ傷つければ勝ちも同然じゃん、だけどな。

「あ、逃げた。なあ恭弥」

「ふん」

「危な〜」

普通に光努を攻撃する。雲雀から見ればベルも光努も敵、というかここに居る奴らの大半は敵も同然だからな。するりと鎖とトンファーをかくぐり、恭弥とすれ違うようにして通り抜けていった光努は、ベルの元へと動いた。

「どこ行くんだよ、ベル」

脚も怪我してるため、できるだけ走ってるベルの横で並走する光努。

その顔を見ると、さすがのベルも「げっ」といった表情を出す。

「何しに来たんだよ」

「いや、いろいろと見て回ってるんだが」

光努は現在、他の守護者の状況を見て回っている。光努の持つファイオーリングも勝利条件の中に入っているため、通常なら光努も狙われるところだが、勝利条件は全ての

リングの奪取。そのため、他の守護者同士の戦いもあたりで起こっているため、光努は割と遠目から眺めているだけで済んでいる。

今のところ、他の守護者の状況は、

晴れの守護者の良平は校内を移動して、ルツスーリアは怪我の為動けない。

雷の守護者のランボは、レヴィにやられるところを獄寺に助けられ、レヴィは獄寺に倒される。

嵐の守護者の隼人はレヴィを倒してランボを助ける。ベル獄寺から逃げて、雲雀と少し戦ったあと撤退。現在は光努と一緒に移動中。

雨の守護者の山本とスクアアローは目下交戦中。

霧の守護者のクロームとマーモン体育館で戦っている。

雲の守護者の雲雀は、ベルと戦ったあとは校内を移動し、モスカはすでにいない。

そして、大空のボスであるツナとXANXUSは、今も戦い続けている。

相手をボスにしないため、己がボスになるため、負けられない戦いがある。

ドゴオン！

その戦いの余波は、遠くで観戦している者たちにもわかるほどに大きい。

「あの方角はグラウンドか。戦いは互角つてところか」

「互角？ あんな奴にうちのボスが負けるかよ」

「お前だつたら瞬殺だな」

「うわー、コイツムカつく」

怪我のためにある程度に走っているベルと、その隣を並走している光努。

大事な決戦とは思えないほどに緊張感のかけらのない会話。

「ところでベル。思うんだけどさ」

「ん？」

「もしもここにいて全員倒れたら、後継者争いってどうなると思う？」

「!!・・・確かに・・・」

「なんかさー、濡れ衣とか着せられたりしたしさ」

「・・・」

「9代目がモスカから出てきてさ、俺も個人的に割とムカつくしさー」

つー、とベルの頬を冷や汗が落ちる。

前にいるため顔が見えないが、ベルの超直感ほどではないが鋭い直感がかやばいという感じがしている。顔が見えないというのが逆に怖い。

「それに、大空のリング戦とか俺と関係ないし」

「……」

「お前ら全員、潰してもいいか？」

返答を間違えたら消される。こちらをちらりと向いている光努の顔には黒い影がかり、目だけ光っているような気がした。

が、それもすぐに元に戻った。ベルはほつとしたが、一体どうしたのかと思ったが、その理由はすぐにわかった。

「!!」

ベルと光努。二人は立ち止まってその場から飛び退いた。

その瞬間、上から降ってくる影が地面に突き刺さる。

鈍い輝きを放って地面に突き刺さっていたのは、真つ直ぐな両刃を備えた一本のロングソード。そしてその柄を持つ黒い影。

全身黒ずくめの格好に、顔には十字架を模して装飾の施されたような模様が描かれていた。明らかにチエルベツ口の者達でもない人物。明らかにボンゴレやイリスの間でもなさそうな人物。突如現れた襲来者は、見たところ、今この場にいるベルと光努を狙って剣を構えた。

「ベル、こいつお前の知り合いか？」

「いや、知らねえし。ん？あの模様って確か……」
「ザザザ。」

「!!」
複数の足音。

ベルも光努もむやみに動こうとしなかったが、気がつけば、先ほどの襲撃者と同じような格好の人物たちが複数、光努達を取り囲んでいた。

黒い出で立ちに全員同じ模様の入った仮面。そしてその手には、剣を握るものもいれば槍の者、もしくは弓矢という者達もいた。

「どうやら、敵なのは間違いないみたいだな」

その様子を、遠くから見ている影が三つ。

並盛中の外の建物の上から、様子を伺うように見ている。

「今日はどうしてもMe達にはInterestingな戦いになりそうだ」

全身黒ずくめ。黒いプロテクターを体中に付け、顔には黒いマスクとゴーグルに帽子。肌に見える箇所はなく、ゴーグルのレンズ部分のみ不気味に赤く光っていた。

「速く終わらないかな。あいつらだけで済めば楽なだけだ」

子供っぽい口調だが、その言葉に感情らしいものは入っておらず棒読みに近いような口調。真っ白いローブを着てフードを被り、その顔には、ピエロのような仮面がつけら

れていた。

「そりやとつてもD i f f i c u l tだ。役不足」

もとより部下たちには期待していないという言葉。

でもしつかりとは働いてくれそうという言葉。

「準備はいいかい、ウイーラ？」

横に声をかけると、隣で座っていた人物はどっこらせというふうに腰を上げて立ち上がる。頭にはバンダナを巻きつけ、そこからは黒い髪がこぼれており、後ろでひどくりにしている。黒いタンクトップ姿に、鍛えられたような浅黒い肌。腰に巻かれた太いベルトには、三本の槌が備え付けられていた。

顔の右側を隠すように付けられた茶色い木目の入った木の仮面に、反対側には赤い瞳が並中を見ていた。

「気は乗らないが、これも必然。行こうか」

『それフラグだ！』

「はあ」

ガガガ！

黒ずくめに仮面の人物。西洋剣を振りかぶり、思い切り振り下ろして校舎の壁をえぐる。獄寺は咄嗟に転がるように躲して、すかさずダイナマイトを取り出して投げつける。

ドゴオン！

黒服の目の前で爆発したダイナマイト。黒服を吹き飛ばす。

敵が吹き飛んだのを確認すると、まだ気を失っているランボを抱えて再び走り出す。その場にとどまっていると、先ほどの黒服がまたやってくるからである。

「くそー！ 体どうなってやがるんだ」

隼人にもわけがわからない。明らかにこのリング戦に関係のない人間が入り込んで

いる。

それも複数。

さつき倒した黒服の他にも、大勢の黒服が入り込んでいるらしい。ディスプレイ搭載のリストバンドを見るに、まだそう多く見つかっていないが、何人入っているかわかったもんじやない。ひとまず他の奴らと合流しようとして走っているが、不意に声をかけられた。

「タコヘッド！無事か！」

「芝生頭！こっちは無事だが、お前は……で、何敵連れてきてんだよ！」

怪我がまだ癒えておらず、腕を吊った状態の良平が向こうから走ってくる。が、問題はその後ろ。

先ほどと同じ黒服が、4人程追いかけてくる。手にはそれぞれ剣を持っている。

やっと誰かに会えたと思っていたのに敵と一緒にいてくるから。

「芝生頭、伏せろ！果てろ!!」

獄寺の言うとおりにその場に伏せると、獄寺はダイナマイトを投げつける。

そして、二度の噴射と角度変化よって、寸分たがわずに黒服の懐に入り込んで爆発をする。さすがにダイナマイト一個でも威力は高いらしく、死なない程度に吹き飛ばす黒服をみて、獄寺は思わず安堵の息を吐く。そして了平を睨みつける。

「てめえ！なに敵連れてんだよ！守護者ならそれぐらい対処しやがれ！」

「何を言う！ここは極限に協力する場面だろうが！やつらはまだまだいるぞ」

「ちつ、一体どうなってやがんだよ。10代目は大丈夫だろうか」

場面変わって別の場所。校舎の中にも死屍累々と、黒服が横たわっていた。そして悠々と歩いているのは、並中の制服をきた風紀委員長である雲雀恭弥。

武器のトンファーを振るい、襲いかかる黒服の攻撃をさばっていた。

キーン！！

雲雀の振るうトンファーと、黒服の剣が切り結ぶ。

すかさず仕込みトンファーから鉤爪を取り出して剣に引っ掛ける。そのままトンファーを振りへし折り、すかさず体に打撃を与える。そして体に顔にとトンファーの一撃が回り、黒服はノックダウンする。そんなことを繰り返していると、あつという間に廊下は倒れふしている黒服が溢れてしまった。

「僕の前で群れる者は、咬み殺す」

誰にも邪魔されず、一人、雲雀は並中の風紀を乱すものに、鉄槌を下していた。

ボンゴレの独立暗殺部隊隊長にして、ボンゴレ10代目後継者候補の一人、XANXUS。

彼はボンゴレ当主の9代目の嫡子であり、威厳実力ともにボスとしてふさわしい程の力を持っていた。

そんな彼の持つ力の一つに、憤怒の炎と呼ばれるものがある。

過去にいた歴代ボンゴレボスの中で、唯一素手で戦っていたボンゴレⅡ世が持っていたとされる死ぬ気の炎の一種。

ツナの使う死ぬ気の炎と比べ、圧倒的な破壊力を持つ炎。

鉄筋コンクリートの校舎の壁すらも容易に灰にできるだけの破壊力を持つ。ちなみに所々で光っていた手は全部この炎である。

そしてもう一つ。XANXUSは素手だったボンゴレⅡ世と違い武器を手にとった。それが、銃。

しかも、歴代ボンゴレで唯一銃を使っていたとされる、ボンゴレⅦ世の持っていたのと同じタイプの銃。

ボンゴレⅦ世は、歴代のボスの中で一際自らの持つ死ぬ気の炎が弱かった。

その為、銃の中に入っている弾丸の中に炎を蓄積させ、一撃の破壊力を増大させたと言われる。その仕組みを持つ銃を持っているXANXUSだが、その炎はⅦ世と違って破壊力抜群の憤怒の炎。それはつまり、破壊力に長けた炎を蓄積することで、さらに圧倒的に破壊力が高い一撃を出せる。

死ぬ気の炎を使って自在に宙を飛び、骸をも圧倒したツナの力をもつてしても、苦戦する程XANXUSの力は確かに強かった。

だが、ツナも今まで何もしてこなかったわけでない。

ツナが守護者の戦いの中も行っていた修行は、ある境地へといたる為の修行。

それが、死ぬ気の零地点突破。

死ぬ気の零、つまり死ぬ気でない素の状態。

そしてそれを突破するということは、零よりもさらに下、マイナスの状態になるということ。死ぬ気とは逆の境地へと至ること、ツナはその時初代が生み出した技とはまた別の技を生み出した。

その技こそ、零地点突破・改。

手のひらを前後に向け、両手の親指と人差し指で正方形を作るような構え。そこから手に集約された炎が、不規則にはためく。

ブラッド・オブ・ボンゴレ
ボンゴレの血。

ツナの超直感は見つけた。初代の使った技ではない。自分だけの零地点突破を。この状況は打破するために、XANXUSに勝つために、ツナは新たな技をみだした。

「本物の零地点突破に、そんな構えはねえ!」

「俺は俺の零地点突破を貫くだけだ」

叫ぶXANXUSに構え続けるツナ。

絶望的とも言えるようなこの状況なのに冷静な態度。その態度に業を煮やしたのか、XANXUSは銃口から炎を放ち高速移動をする。

XANXUSは憤怒の炎を、炎蓄積の機能を持つ弾丸の入った銃を使うことで、炎を飛ばして相手を攻撃することと、炎をジェット噴射のように使い、手のひらから炎を出して空を自在に移動するツナのように高速移動を可能にした。

ボツチョーロ・テイ・フィアンマ
「炎の蓄!!」

ツナの空中を円を描くように飛び回り、中央にいるツナに炎の弾丸を叩き込む。まるで炎でできた蕾のようなその光景に、観戦していたシャマルやバジル、ディーノからも焦りが感じられる。

いまディスプレイに映し出されている光景は、ただツナがやられ続けている光景にか見えない。だが、その状況とは別にXANXUSは内心余裕とまではいつてなかった。

(この絶望的といえる状況。あのツラ・・・あの目!!同じだ・・・あの時のおいぼれと・・・!)

暗殺部隊にいたXANXUSは知っている。

絶望した人間の目を。もう諦めた人間の目を。全てが黒く染まったようなその瞳を。だが、今日の前で痛みつけられているツナの瞳にはあきらめることがない。まだ勝つと信

じている目。絶望を感じていない、希望を持った目を。そして、どこか全てを見透かしたようなその瞳を。

「どいつもこいつも！俺に楯突くんじゃねえ!! 決別コルボ：ダッテイオの一撃!!」

一際大きな炎。二丁拳銃から放たれた、強大な一撃は、正確にツナめがけて放たれ、倒れそうなツナを飲み込んだ。

ドゴオ!!

「沢田殿!!」

激しい炎の塊が地面にぶつかり、辺りに煙が立ち込めた。少し怒りすぎたのか、少々肩で息をするXANNXUSが悠々と立っている。

確実に倒した。そう思ったXANNXUSだが、後ろではためく炎の音を聞いて即座に振り返った。

気づかなかった。

いつの間にか、XANNXUSの背後には、額とグローブに炎を灯したツナが迫っていた。

「次は俺の番だ、XANNXUS」

「やつー！」

「ふんー！」

火柱と氷柱。

二人が飛ばした柱がぶつかり合い、当たりに火の粉と氷の礫が飛び交う。

外から見た限りじゃ、そんな激しい戦いが繰り広げられてるとは夢にも思わない。

なぜなら実際に、そこにあるわけでないから。相手の脳を錯覚させ、ありもしない映像を映し出す。それが幻術。静かなる激しい戦い。

霧の守護者、クローム髑髏とマーモンが体育館の中で戦っていた。

お互いに幻術をかけあい、クロームは修羅道顔負けの格闘能力を発揮して、ほぼ互角の戦いを繰り広げていた。二人とも全力全開というわけではないが、それでも一流の幻術士らしく、派手に炎や氷、植物や雷やいろいろなと出しながら戦っていた。

床を見てみれば、すでに霧の刻印がされた箱が転がっており、完成された霧のボンゴレリングはマーモンの手の中にあつた。だがそのまま逃がしくれるほどクロームは甘

くなく、二人は戦っている。

ヒュ!

「!」

キーン!

不意に飛んできた物を、咄嗟に槍を使つて弾いたものを見ると、それはナイフ。しかも黒塗りで真つ黒に装飾されている妙なナイフである。触れてみてわかったが、今は幻覚ではない。確かに本物。けどマーモンが投げる気配など微塵もなかった。つまり、「誰かいる!・・・上!」

その言葉に、クロームと同様にマーモンも上を向くとそこにはそこだけ黒く塗りつぶしたような黒いものが天井にあった。

体育館の天井の鉄骨に脚を引っ掛けるようにしてぶら下がっていた。

先がボロボロの黒いマントを身にまとい、体中に黒いプロテクターを取り付けた黒ずくめ。黒い帽子とマスク、そして目元を覆うゴーグルのレンズ部分のみが、赤く不気味に光っていた。

「あいつは!暗殺者! アドルフォ! なんでここに!」

「やつとMe達揃ったから、お前らK i n n i しに来たんだよ!」

軽快そうに愉快そうに、アドルフオは脚を離して降ってくる。

すかさずクロームが槍を地面に突くと、燃え盛る火柱が床を突き破り飛び出して、落ちてきたアドルフオをあとという間に飲み込んだ。そのまま天井まで伸びた火柱は天井にぶつかり、まるで花が咲くように当たりに炎を炸裂させた。

「やったか！」

マーモンがそう言ったが、明らかに言っではいけない言葉を言った気がする。

燃え盛る炎の中から、ナイフがマーモンの元へと飛んできた。

肉弾戦が得意というわけでないマーモンだが、宙を飛べる為さつと回避する。

そして火柱を見ると、そこから黒い腕が、足が、体が出てきた。

マーモンから見ても一流と言わしめる幻覚から抜け出てきたのは、先ほど落ちてきた

全身黒ずくめの”暗殺者”アドルフオ。

「さて、楽しい楽しいTimeの始まりだ」

口元は見えないが、にやりと不気味に笑ったような気がした。

『祈りの紋章と最強の剣』

「Haっ!!」

ヒュッ!!

先に鋭い爪の付いた手をつくように、クロームの顔に打つ。

すかさずクロームは顔を横に向けて爪を交わすが、それを待っていたとばかりにアドルフオの目元が赤く光った。

ドシュ!!

「!!」

すかさず、反射的に自分の持つ三叉槍の槍頭部分を顔のそばに持つてくると、突然きた衝撃に思わず顔をしかめ、一旦後ろに下がって距離をとった。

「Oh! 躲されるとは、なかなかどうしてStrong」

見てみると、クロームにつきさそうとした腕の横から、少し歪曲した長さ50センチ程の刃が飛び出していた。よくよくと見れば、刃の飛び出して破れた服の周りや、他に

も普通の肌でなく、金属質な部分が見え隠れしていた。

「その手、機械？」

「That's right! この腕も足も全部ね。とてもD a n g e rだよ！」

カシャンという音とともに飛び出た刃をしまい、代わりにスクアー口風に手首からナイフを飛び出させた。両手ともに刃を備え、再び構える。

全身が機械で出来ているアドルフオ。その体内には複数の武器が仕込まれており、人間には到底不可能な動きで動く。

しかも全身が機械な分、幻覚が全体的に効きにくい。もしかしたら効かないのかもしれない。術師であるクロームたちにとつては、かなり相性の悪い相手とも言える。だが、ただそれだけ。

「幻術が聞かなくても・・・戦える！」

「そうこなくて、ん？」

ボゴボゴオ!!

突如地面を突き破り生えてきたつららに、アドルフオは一瞬で飲み込まれた。

「僕を忘れてもらっては困るね」

ふよふよと空中浮遊しながら飛んできたマーモン。クロームを狙っていないところを見ると、先に邪魔者を始末するつもりみたい。

「おーいマーモン！生きてるかー！」

「あ、ベル」

と、入口から普通に入ってきたベル。

「だけどマーモンとクロームがまだまだ無傷そうなところをみてにやりと笑う。」

「ししし。まだ終わってなかったのかよ」

「うるさいね。ちよつと邪魔が入ったんだよ」

「えつと、危ないよ」

「ん？」

ヒュルル！

と、どこからともなくということなく、普通に地面から生えていた氷柱からナイフがベルの元まで飛んでくる。すかさずベルは手に持った自分のナイフを使って弾くが、なんで氷柱から？という風に見る。

すると、氷柱にビシビシと日々が入り、そしてついには全て割れ、中から黒ずくめのアドルフオが再び姿を現した。

「One, Two, Three。一人増えたけど、やっぱりNo problem」

「ししし。コイツって、”暗殺者”じゃん。あのファミリーが雇ってたのか」

「あのファミリーって。ベルは敵の正体知ってるの？」

「さつき思い出した。さつきいた黒服達の仮面の模様、プレギエーラファミリーの紋章だ。光努に答え合わせもしたしな」

「プレギエーラファミリーだど！」

「間違いねえ。あの十字架を模した祈りの紋章は、確かにプレギエーラの紋章だ」

デイーノの言葉に同意するリボン。

大型のデイスプレイから見える襲撃してきたアドルフオや仮面をつけた黒服達。仮面の黒服達はみな一様に同じ模様を仮面につけている。

そしてその模様こそ、プレギエーラと呼ばれるマファイアの紋章。

「だが、あそこのボスのヴァスコさんは9代目の旧友で戦いなんて、というかプレギエーラにはそんなに戦力なんてないはずだぞ」

「確かに。しかも墓造会と繋がってるなんて。ありえねえな」

「それにプレギーエーラはボンゴレと同盟を組んでいたはず！一体なぜ拙者達が狙われているのですか!？」

「雷の守護者の戦いにいた”道化師”は、ボンゴレを潰すのが目的だったみてーだし、今いる奴らもそうだと思って間違いないな」

プレギーエーラファミリーは、典型的な穏健派と言われたボンゴレ9代目の旧友でもあるヴァスコ・プレギーエーラ率いるファミリー。

それゆえに、リボン達も分からない不可解なことが多い。

ボスのヴァスコは9代目と同じく穏健派。そしてそこまで大きいファミリーでもないため、戦力と呼べるほどのものをもっていないという事実。それなのに、今襲撃しているプレギーエーラの紋章を身につけた黒服に、明らかに協力していると思われる墓造会の”暗殺者”であるアドルフオ。

「イタリアにいる親方様は大丈夫でしょうか」

イタリアのボンゴレ本部に戻った家光を心配するバジル。ボンゴレが狙われていると思われる状況なら、今は手薄と思われるボンゴレ本部も狙われるかもしれないという不安。まだ家光からの連絡がないから一体どう言う状況というのかも分からない。

「家光のやつならきつと大丈夫だ」

「ああ。あの人は、抜けてきた修羅場が違うからな。俺たちは目の前のツナ達を応援す

るん」

「……はー！」

「そろそろ、向こうの戦いも佳境だな」

ブシュツ!!

山本の胸のあたりから左肩にかけて切り傷が入り、鮮血が舞った。

水柱を出してスクアア口の攻撃を躲そうとしたが、スクアア口もおなじ水柱をだしてお互いに視界が見えなくなった。そして先に武を見つけたスクアア口によって深い傷をつけられた。

山本とスクアア口の戦いは、徐々に武が劣勢を強いられている。

最初に攻撃を仕掛けたのは山本だった。

時雨蒼燕流攻式五の型。五月雨。

一 太刀与えるあいだに刀の持ち手を変えることで、軌道とタイミングをずらす変幻自

在の型。左手にもった時雨金時を、右側からスクアアロに振るう。

その時、一度右側に持っていた刀をそこで手を離し、刀だけを右側に置いたまま左手を振り抜く。そして左手を離れた刀を右手で素早くつかみ直して相手を切り裂く。

だが、スクアアロは無傷だった。

戦闘に関して一流のバジルから見ても、山本の刀を変える際に不自然な動作が見えなかった。なのに、スクアアロは山本の振った刀に合わせて身を引くことで、紙一重で交わすことに成功している。まるで、その技を最初から知っていたかのように。

そして山本は体を切り裂かれる。

デイーノの不安な予感は的中した。

「その時雨蒼燕流は、昔ひねりつぶした流派だあー」

スクアアロの放った一言に、デイスプレイを見たり聞いたりしていた他の守護者や観戦者も驚きを隠せなかった。

その昔、剣帝テュールを倒したスクアアロは、自らの剣の腕を確かめる為、強い剣士を探していた。その時、東洋にてあまり知られてないが、密かに継承されている完全無欠の暗殺剣があるという噂を聞いた。

そして現地にて、スクアアロは戦った。

時雨蒼燕流の継承者と、その弟子の三人。

そして、全ての技を受けて見切り、体に刻み込み、全て破った。

つまり、スクアアロは全ての時雨蒼燕流の技を最初から知っている。

「聞いてねーな、そんな話」

「！」

「俺の聞いた時雨蒼燕流は、完全無欠最強なんでね」

切り裂かれた肩の傷を抑えつつ、再び刀を構える。

それをみてスクアアロは心底愉快そうに、そして獲物を狙う鮫のように寧猛に笑う。

「う」お」おい！行くぞお!!」

こちらにも剣を構えて山本に突撃する。すかさず時雨金時を振るつたが、スクアアロは簡単に避ける。

（五月雨！）

先ほど振るつたのは右手のみ。左手で落とした刀をつかみ直し、再びスクアアロに斬りかかる。だが、スクアアロはそれをみて犬歯を見せてにやりと笑った。

ガギイン!!

「!!」

お互いに剣を一度ぶつけ合い、そしてスクアア口は剣を戻して再び構えて山本に切りかかろうとしたが、武は打ち合った状態から動こうとしなかった。

アタック・デイ・スクアア口
 鮫 衝 撃。

渾身のひと振りを衝撃波に変え、打ち付けた剣から相手に伝わらせ、神経を麻痺させるスクアア口の衝撃剣。その為山本はすぐに動くことができなかつたが、反対の腕で剣を持つていた手を思い切り打つことで硬直を解き、ギリギリスクアア口の斬撃を避けることに成功した。だがそれでも完璧にはいかず、腹部には浅くない切り傷が入り血が滲んだ。

「動き出したら止まらねえぞ!!」

そういつて再び特攻して、高速で剣を突き刺す。連続で繰り出された高速の剣撃に、山本は転がり込むようにして避けるが、武の後ろにあった柱がまるで発泡スチロールのように碎ける。

まるで空間そのものを削り取るかのような連続の突きの剣、ザンア・デイ・スクアア口 鮫 の 牙。

避けた先の山本にまでその剣は届き、やはり浅くない傷を与える。武のあちこちはすでに傷だらけ。しかもどれも重症。

すでに山本の体は悲鳴をあげ、満身創痍だった。

「どおしたあ!!継承者は八つの型を全て見せてくれたぜえ!」

スクアーロの言う継承者とは、かつて自分が倒した時雨蒼燕流の継承者とその弟子達のこと。決して弱いとは言わなかったが、それでもスクアーロを倒すには心もとなかったのも事実。そしてその継承者と同じ技を使う山本の相手は、攻略本を見ながらゲームでもしているようなもの。

それを分かっているため、スクアーロは余裕そうに笑って語る。

「継承者は最後に八の型、『秋雨』を放ったと同時に無残に散ったがなあ!」
「!?!」

そのスクアーロの言葉に、ボロボロの山本の頭に疑問が浮かんだ。

(『秋雨』?なんだそりゃ。俺が教わった八の型は『篠突く雨』……!!)
「なるほど、そーいうことか親父」

ある一つの結論に思い立ち、自分に剣を教えてくれた父親を思い浮かべていた。

まだ修行をしていた頃の話

一人、道場で剣を降っていた山本に声がかかった。

「よう。精が出るな武」

「おう、親父」

「どうだい。八つの型はモノにできそーかい？」

「ま、やるだけやるさ」

そういつて明るくにかつと笑う。

「でも今んとこ、一番しつくり来るのは八の型、『篠突く雨』かな。なじむつつうか、なんかしんねーけど打ちやすいんだよ」

「ほーう、やっぱ似るのかな。そうかいそうかい」

「?なんだよやけにうれしそうだな」

「篠突くは八つの中でも八番目にできた型だな。若い継承者が大事な友達を助け出すつて時にできた型らしいぜ」

「へえー、型にできた順番なんてあんのか」

「そりゃー当然さ。篠突くができたときは台風が迫っててな、突くように激しい雨の中だったって話だ……」

「ふーん」

ざっ！

「……何しに来た」

「いくぜ、時雨蒼燕流……」

そう言つて体を低くし、右手で時雨金時を握り、居合いをするかのように左手を柄に添える構え。そしてそのままスクアードに向かつて走りこむ。

「その構えは知ってるぞ!! さあ打てえ!! 秋雨を!!」

その構えを見て、心底愉快そうに、走ってくる山本に迎え撃つように自分も同じように特攻を仕掛ける。

(終わりだあ!!)

(時雨蒼燕流、攻式八の型——)

そして、互いにぶつかり合った

しのつくあめ
篠突く雨!!

山本の振るった剣を、スクアア口は避けることができず、モロに体にくらって多少の血反吐を吐いた。その様子をディスプレイから見ているツナ側ヴァリアー側、そしてバジル達から見ても驚きだったが、もつとも驚愕しているのは技を喰らったスクアア口本人だった。

「な．．．にい．．!?」

倒れ水面に伏したが、すぐに問題無いように起き上がり、武を睨みつける。

「貴様あ!!時雨蒼燕流以外の流派を使えるのかあ!?!」

自分の知らない技を使った。

そのことにスクアア口は信じられなかった。確かに昔継承者と戦った際、実際に技を受けて見切り、全てを理解した。その為避けることなど造作もなかったが、避けることができなかつた。否、元々自分の知っていた技と中身が違っていた。

「いんや、今のも時雨蒼燕流。八の型は、親父が作った型だ」

「!!」

時雨蒼燕流の継承者は、先人の残した型を受け継ぎ、また自らも型を生み出して、再び弟子へと伝えていく。その為、継承者が複数いると別の型が生まれ、型の違う分派が多く生まれると思うが、実際はそうではない。

自らを「最強」と謳い、あえて強者に狙われる宿命と、師から弟子へと型の継承をする際は立つた一度だけという掟。その為、才のある継承者が途絶えたときは、この世から消えることも仕方なしとされた、「滅びの剣」と言われる。

スクアアールの昔倒した時雨蒼燕流の継承者と、山本の父である山本剛は同じ師匠から一から七の型を教わり、それぞれが別の八の型を作った。

それが、攻式八の型『秋雨』と『篠突く雨』。

別々の継承者がそれぞれ違う『八の型』を生み出したため、スクアアールは『秋雨』を避けたつもりだったが、実際に武が打ったのは『篠突く雨』。

結果的に、スクアアールの考えていた技と別の技のためにモロに攻撃を喰らってしまった。だが、そのこととは別に、スクアアールは何やら解せないことがあった。

「う”お”おい・・・正直ここまではやるとは思ってなかったが、だからこそ今の峰打ちも解せねえ。真剣勝負を舐めやがって」

曰く、勝つために戦っている為、殺すためじゃないから。

真剣勝負の中では甘いとしか言い様がないが、それも山本らしいといえれば山本らしい。

そして、すでに八の型を使ったため、スクアア口は『篠突く雨』を見切った。

さすがに剣帝を倒したヴァリアアのボス候補。一度受けただけでその技を理解した。そして一から七の型はすでに知っている。状況だけ見れば、とても絶望的だった。

だがそれでも、いくら切り刻まれても、ボロボロにされても、底抜けに明るく笑い、こんな状況でも笑い、山本は再び剣を構えた。

「んじゃ、行ってみるか。時雨蒼燕流、九の型」

己の流派を超える為、時雨金時を握り締めた。

『劍帝』

時雨金時を、両手で握り締めて顔の横あたりまで持つていく。

そのまま少し腰を落として構えた。

その姿はまるで、バッターボックスに立つ打者のよう。

「なんだあ、そのふざけた構えは。野球でもするつもりか!」

「あいにく、野球しか取り柄がないんでね」

スクアア口の馬鹿にするかのような言葉に、山本はにかつと笑つて返す。

「山本のやつ、新たな自分の型を放つ気だぞ」

「なるほど。常に流派を越えようとする流派……もしそれが本当にできるのなら、確かに時雨蒼燕流は——」

——完全無欠最強無敵!!

「凶に乗るなよガキ!!俺の劍の真の力を思い知れ!!」

叫んだスクアアロが左手の劍を振るう。先ほどよりも速く、もつと速く、超高速で振るわれた劍は空間を切り裂き、足元を流れる水をもめぐりとり、床がさらけ出す。自分の目の前にあるものを全て切り刻み、その状態のままにして山本に向かつて特攻する。その昔、この技を使ってスクアアロは、三日三晩戦い抜いた劍帝との戦いに終わり
と告げた。スクアアロの最強の奥義。

スコントロ・デイ・スクアアロ
鯨 特 攻!!

まさに獲物を喰らおうとする鯨のごとく、スクアアロの山本が武に迫った。

だが、その姿を見ても意思は変わらない。

「時雨蒼燕流、九の型」

ザバア!!

「!？」

劍を振り、武が水柱を立ち上げると同時にその場から消えた。

その後をスクアアロが通過したが、すぐに別の場所に発見した。

前進に特攻したスクアアロの横方面に現れたが、スクアアロは劍を振りながら方向転

換し、山本に向かう。

超高速で剣を振るつたままの方向転換にはかなりの力と技量を有する。

獲物を追いかけるように自在に動きながら剣を振り続けることができるスクアーロを、さすが剣帝を倒した男というべきか。そして今そのスクアーロに立ち向かっている山本武もさすがと言うべき。

方向転換して前から突っ込んできたスクアーロの剣をかううじて受けるが、全て受けきれているわけでなく、ところどころ切り傷が走る。

受けているだけでこれだから実際に受けた日には切り傷程度じゃ到底収まらないと思われる。

そのまま後ろに下がり続けていく武が柱の影に隠れたが、そんなことなど問答無用にスクアーロが柱に向かつて特攻する。

だが、鋭いスクアーロの瞳が捉えた。

自らの剣が切り裂き、えぐりつつ後ろに飛ぶ水飛沫の中から剣を振りかぶった山本の姿を。

(逆(正)直(正)までやるとはな。だが――)

そう考えると同時に、スクアーロの剣が備わっている左手手首に切れ目が入り、中に機械でできたアームが現れて、左手首から先を通常ならできない折り方をして、剣の方

向を180度真後ろに変化させた。

「義手!?!」

「俺の剣に、死角はねえ!!」

前進に特攻する剣技の最中の後ろからの奇襲。普通ならこのまま後ろから攻撃を当たるところだが、誤算があつた。スクアーロは、左手を持たない剣帝テュールの技を理解するために己の左手を落として義手とした。その為、スクアーロの左手首から先は全て機械。さらに中に機械のアームを入れることで、左手が動かせる角度を180度反対側へと可能にした。剣を持つのではなく、固定しているスクアーロだからこそそのやり方だとも言える。

正確に、自分の後ろに見える山本の胸を貫いた。

「!!」

ザバア!!

大量の水。

スクアーロが武に剣を突き立てたと思つたらその姿はブレ、代わりに大量の水が止まったスクアーロに降りかかった。

スクアーロが切つたのは、水面に映つた武本人の影。

山本が最初に立ち上げた水柱。その柱をスクアーロの後ろに来るように自分が後ろ

に下がりながら移動する。そして水柱に自分の姿を映し出してスクアアローが切る。だが、それは水でできた偽物の為、本当の山本は水柱の方を向いて後ろを向いていたスクアアローの後ろ、つまり本来スクアアローが特攻していた方向から飛びかかる。

自分の切ったと思ったのが偽物だったこと。

今の自分の左手は一度手首から少し切り離して腕の方向と真逆に向けているため、すぐには元に戻せないこと。

そして、格好の隙ができたスクアアローを、山本が見逃すはずがなかった。

時雨蒼燕流、攻式九の型！

——うっし雨!!

振り下ろした時雨金時の峰を、スクアアローの頭上から放った。

武の上から振り下ろした懇親の一撃は、スクアアローを沈めるには十分だった。

(これが・・・敗北・・・)

そしてスクアアローが、山本武という新たな剣士に敗北した瞬間だった。

先ほど柱の隙間で見つけた箱を取り出す。

雨の紋章が描かれた箱を開き、中の物を取り出す。

そして武はカメラに向かって、雨の刻印のされたボンゴリングを見せて、にかつと笑った。

「勝ったぜ！」

「スクアアローが、負けた？」

「しし・マジかよ・・・」

「H A H A H A H A H A！」

「やあ！」

キインキイン!!

ベルのオリジナルナイフとクロームの槍と、マーモンの幻覚の氷とアドルフオのナイフがぶつかり合う。

今の状態はバトルロイヤルのような状態だが、状況的にアドルフオを先に倒すようにしている3人。その為1対3の状況なのだが、中々に倒せないでいた。

全身がプロテクターと機械の塊なのでナイフが刺さりにくく、さらには幻覚もかなり効きにくい。その為戦いはほぼ五分と五分。それに加え、腕がありえない方向に曲がりたり、体中から武器を取り出すため、クローム達からしたらかなり戦いにくい相手でもある。

空中から飛んでくるベルのナイフを正面から突っ込んで防ぎ、幻覚の中を突っ込んできて直接攻撃を当てにくる。

「ちつ。あの機械野郎。俺のナイフ刺さんねえし・・・」

「幻覚も効きにくい」

「本当に面倒な相手だね」

もはや辺りにはベルのワイヤーが張り巡らされ、床や壁には切り傷や刺し傷が所々にある。見た目だけは派手に壊し合ってるが、実際にはマーモンは戦っていないから他の3人で壊している。

今現在は、ベルのワイヤーのために両者大きな動きが取れず、お互いに止まった状態が続いていた。

「それでどうする」

「ああいう奴らなら、レヴィの雷攻撃のほうが効きそうだけだな」

「案外効かないかもよ」

「……………」

「どうするの?」

「さて……どーすつかな」

「ぐー」

ドガア!!

自前の銃から炎を噴射して宙へと飛ぶXANXUSに、両の手から炎を噴射させて同じように飛んできたツナの蹴りがあたった。

先ほどの激しい攻防と比べて、明らかにツナの動きが違う。観戦していたコロネロも、驚きの声を上げる。XANXUSに炎の弾丸を打ち込まれたと思ったら、気づいた時にはツナはXANXUSのそばにまで迫り、攻撃を繰り返す。圧倒していたXANXUSの高速移動をもものともしない速度で動き、各自に打撃を当てていた。

「この野郎! 炎の鉄槌!!」

二丁拳銃から大量の炎の塊を連射。尋常でない連射速度に、大量の炎が上空にいたツナへと直撃した。だが、直撃したと思つたら、炎がツナを中心に円形状に広がり、全ての炎が構えた両手の中央に集約され、ツナの額から多くの炎が燃え盛った。

ボア!!

先ほどよりも、さらに強大な炎をその両手と額に纏い、一瞬でXANXUSの元まで移動して殴り飛ばした。

「ちいー!」

かろうじて防御が間に合いガードしたXANXUSは、一旦距離をとって二人上空に佇んだ。

「この死にぞこないが!あのカスザメも負けやがって!」

XANXUSがその場で炎を噴射して移動した。だがそれはツナに向かってではなく、さらに上空へと駆け上がった。

「何をする気だ、コラ!」

さらに上空へと移動して、空中にとどまる。

そしてXANXUSは銃をある一箇所に向けて、炎の弾丸を放った。

「!!やめろ!XANXUS!」

一瞬、不可解なXANXUSの行動に遅れをとってしまった。小さなことだが、それ

は戦いにおいて大きな隙となる。そんな隙をもともしないように、XANXUSは雨の守護者のフィールドに炎を打ち込んだ。

ツナは向かおうと思ったが、もう一つのXANXUSの拳銃が炎を吹いた。

ツナと校舎、迫り来る炎に立ち止まったツナをあざ笑うかのように、XANXUSの炎の連射が雨のフィールドを破壊した。

「とりあえず、生きてるみたいだし。俺も外へ……ん？」

山本が足元を流れる水の上をバシャバシャと歩き、出口へと向かう。

一応スクアーロが倒れていたが、とりあえず水の中から出して瓦礫の上に寝かせたのでしばらくしたら身を覚ますだろうと思い、自分も他の守護者を手伝いに向かう。

その時だった。

光。

天井のヒビの隙間から、光が漏れた。

一体何事かと思つたが、その理由はすぐにわかる。

天井が崩壊した。外側から衝撃を加えたように、爆発した天井から瓦礫の雨をふらせた。そしてその雨は、山本やスクアアローへと降り注いだ。

「やべっ！くっ……スクアアロー！」

スクアアローはまだ気を失っている。

たとえさきほどまで戦つた敵だろうと見捨てない。

理由などない。目の前に危ない人間がいたから、反射的に動いただけ。

たとえ自分が傷ついて満身創痍な体だろうが、助けるために地を蹴り、手を伸ばした。だが無情にも、二人を覆うように瓦礫が降り注いだ。

「山本！」

眼下に見える瓦礫と化した校舎の一部。各守護者に配られた小型ディスプレイ付きのリストバンドを見ても、カメラが壊れたのか映像が写っていない。

上空からみても、瓦礫と煙が見えるだけで、人影が見当たらない。

通常なら大丈夫かもしれないなかったが、今の山本もスクアーロも満身創痍。

その命は絶望的だった。

もちろんそれは、そこにいたのが二人だけだった場合だが。

「危機一髪。XANXUSようしゃねー」

「ははは、まじ危ね……サンキュー光努」

「!?!」

破壊された校舎の屋上の縁に立ち、左手には気絶したスクアーロ。そして右手には、ポロポロながらも笑っている山本の姿があった。

「光努!」

「あのガキ。邪魔しやがって」

再び銃口を光努たちに向けたXANXUSだが、目の前には一瞬で移動したツナが立ちただかった。

「おまえの相手は俺だぞ。XANXUS」

両手の炎を燃やし、ツナとXANXUSが再び対峙した。

パキ！

ところどころ割れたガラスを踏み割り、廊下を悠々と歩く姿。

その体は多少傷ついて出血多量なのだが、そんなことなど関係のないように歩く。

両手に握られたトンファーと鋭い目つき。

雲雀恭弥は、侵入者を迎撃しながら並中校舎内を闊歩していた。ベルとの戦いで傷ついた体も、多少は回復し、止血も済んでいる。仮面をつけた乱入者の存在がいたが、問答無用で蹴散らしていた。

「……ん？」

が、唐突に、その場で立ち止まった。

パキ！

立ち止まったのに聞こえるガラスの割れる音。

雲雀の視線の先には、割れて廊下の上に落ちた窓ガラスを踏みつける存在がいた。

全身を白いローブで覆いフードを目深にかぶり、顔に付けられた仮面。白地に青いダイヤの目と赤いハートの目。そして黒い三日月型の口の模様が描かれたピエロのよう

な仮面。

その身に纏う雰囲気は、明らかに一般人とは異なるほどに鋭い。

”道化師” ジャンピエロ。さきほどまで戦っていた相手と明らかに格が違う相手が現れたことに、口角をあげ、自然と雲雀は狂喜した。

「ここにいる人はみんないなくなる。だから、私は君を壊すよ」

シャン。無感情な声で告げるその声に、ローブの袖から取り出したのは円形の薄いリング。見た限り外側に刃がついているのが見えることから、明らかに凶器。

「校内への不法侵入者の処罰は風紀委員の仕事。君を……咬み殺す」

野獣のような鋭い眼光。誰であろうと関係無い。来るものは全て地に伏せる。それが雲雀恭弥。自身の武器であるトンファーを構え、お互いに武器を前に出し、ぶつかり合った。

『驚愕、零地点突破』

ガッ！

何度かになるぶつかり合い。

ツナの振るう腕と、XANNXUSの防御の腕が空中でぶつかるが、弾かれたのはXANNXUSの腕。最初よりも、明らかにツナの攻撃力、スピードが共に上昇している。

だんだんと、XANNXUSがついていけないスピードになっていく。

「なるほど。それで『改』なんだな」

「？」

「ツナの奴、XANNXUSの炎を吸収するだけでなく、自分の力に変えてるんだ」

最初にツナが覚えた死ぬ気の零地点突破は、相手の技を吸収するだけの技。

自分の死ぬ気を一度零を通過し、マイナス状態にすることで、XANNXUSの撃ってきた炎を自分のものにし、炎を中和する技のはずだった。

だがその技は、XANNXUSの炎を吸収しきれずにツナは見た目に疲労が残ってい

た。

しかし、それも少し前までの話。

死ぬ気の零地点を超えるという、ある種の境地へとたどり着いたツナは、新たな自分の零地点突破を編み出した。

それこそ、*“死ぬ気の零地点突破・改”*。

相手の炎を吸収して中和するだけでなく、その炎を自分の力へと変える技。

XANXUSの銃の弾丸は、全て死ぬ気の炎の弾丸。その為、XANXUSが銃撃を放てば放つほどにツナはその炎を吸収し、力へと変える。

お互いに傷だらけだが、それでもXANXUSの方が疲労感が多い。力を回復させることのできるツナと比べ、自分のエネルギーの炎を弾として撃ちだす為、XANXUSの方が圧倒的に不利。XANXUSにはヴァリアーとして多くの経験もあるが、もはやその差などないようなものだった。

骸との戦いを経て、リボーンの特訓を経て、ツナは確実に成長している。

「ぐはあー」

炎を纏うツナの拳がXANXUSにクリーンヒットして吹き飛んだ。

地面から起き上がり、膝を立てたが、少なくとも出血もしている。

荒く息を吐きながら、その鋭い眼光は眼前で平然と炎を纏って立ち尽くすツナを睨ん

でいる。

「くそが、俺があんなまがい物の零地点突破に……くそっ！この、ド畜生が!!」

「!」

XANXUSの怒りの咆哮。

それと同時に、XANXUSの顔や全身に浮かび上がったのは、古傷。

額や頬に傷をもつXANXUSだったが、今は顔中覆うように傷が浮かび、服で隠れているが、おそらく全身にも同じような古傷が浮かび上がっているはず。

そしてそれと同時に、尋常でない死ぬ気の炎が、立ち上がったXANXUSの体から吹き出した。ここにきて、さらにその炎を増幅させて。怒りがXANXUSの力を吐き出す。

誰も寄せ付けない圧倒的な力を。

全てを破壊する圧倒的な炎を。

目の前に立ちただかるものを全てねじ伏せるように。

「おおおお!!」

お互いに推進力となる炎を吹き出し、先に攻撃を当てたのはツナだった。

向かってくるXANXUSの力も利用した炎を纏う左拳が、XANXUSの右頬に突き刺さる。

だがそれでも、関係ないとばかりに向かつてくるXANXUSに向かい、反対の右拳をXANXUSの体に叩き込んだ。

XANXUSの炎を吸収したことによりパワーが上がったため、その威力にXANXUSは思わず吐血するが、その眼光はさらに鋭く、ツナを睨みつけた。

「それが……どうした!!」
「!」

XANXUSの絞り出す声に、ツナの超直感は何を感じたのか、炎を噴出させて後ろに飛び、一旦距離を取ろうとする。

そんなツナに向けて、XANXUSは二丁の銃口を向けて炎を蓄積し、炎の弾丸を吐き出した。その光景を見れば、意味のない行動だとも見える。ツナは先程からXANXUSの撃ち込んだ炎を全て吸収して力に変え、そのパワーとスピードを上げている。その為、ツナは再び構え、吸収態勢に入ったが、そう簡単にはいかなかった。

「……!!」

ツナは飛んでいたXANXUSの炎を避けた。

零地点突破・改は万能ではない。

いくら相手の死ぬ気の炎を吸収して自分の力に帰ることができるとはいえ、限度というものが存在する。初めに炎を吸収し、次に力へと変化する。

当たり前のことだが、このことから最初の段階で吸収しきれないと、その場でツナが壊れてしまう。死ぬ気の炎にだって個々によって許容量があるため、それを超える量を吸収できない。

今XANXUSが撃ちだした炎の塊は、明らかにツナの許容量を超えていた為、ツナは回避せざるを得なかった。ここまでの戦いで疲弊しているにも関わらず、今もなおその怒りによって死ぬ気の炎を増幅させているXANXUSは、さすがにヴァリアーのボスであり、ボンゴレの10代目候補であるといえる。

ツナがXANXUSの弾丸を吸収できない以上、これで戦いは降り出しとも言えるし、炎をあまりにも出し切っているため、どちらかが先にダウンするかもしれない。

この二人の戦況はそろそろ最終局面へと迫っていた。

「カツ消す!!」

避けたツナを応用に、銃から最大級の炎を噴射して一瞬にしてツナに追いつく。そしてツナの方も、空中から炎を噴射してXANXUSへと接近する。

XANXUSは左の銃で噴射したまま、右手に渾身の光を放ち、ツナは迎え撃つように、右腕の炎を高め、お互いに手のひら同士で組み合った。ぶつかり会った手からは、ツナとXANXUS、二人の炎が溢れ、辺りを閃光となつて駆け抜けた。

ドガア！

向こうでは炎による激しい戦い。さらに向こうでは幻覚合戦刃物合戦の最中。

深夜の並盛中では多くの戦いが行われていた。

基本的な戦いは、ツナ達とヴァリアーの戦いだったが、今では第三勢力が加入して戦況を引っ掻き回していた。

プレギエーラファミリー。

そこまで大きく対して強い戦力もないファミリーだが、ボスであるヴァスコ・プレギエーラはボンゴレ9代目の旧友の年老いた男。それも温厚な人物であり、決してむやみに戦いを仕掛ける人物、ましてや同盟ファミリーであるボンゴレにたいして兵を送り込むことなどしない人物であった。

その為、現在進行形でプレギエーラの紋章をつけた仮面の黒服達を相手している者たちにとっては、疑問が占めるばかり。だが、それでも自分たちの前に立ちはだかるものは倒す。そうしなければこちらがやられる。

具体的な名前を挙げるとすれば、獄寺隼人と笹川了平の二人は、怪我人であり動くことのできないルツスーリアとランボを守るようにして襲撃者と戦っていた。晴れの戦いのあとに制裁を受けたルツスーリアは、まだベッドに縛り付けられたまままで連れてこられたために動けず、雷の戦いで強力な雷に撃たれたランボは、意識は何度か回復したがそれでも今はまだ昏睡状態。

かくゆう獄寺と了平も、決して万全の状態とはいかず、それぞれの戦いの傷がまだ残っているために、正直に言うところ二人を守りながら戦うのはきつかった。

「くそっ！ やっぱりしびてえ」

「極限に、厄介だな」

数が多い。

人海戦術という手もあり、多人数というのはたとえ実力がそこそこでも厄介なのは間違いない。ランボと、なし崩し的にルツスーリアも守って戦っている為、だんだん追い詰められている。

「！後ろだ芝生！」

「！」

疲労、痛み、怪我と疲れにより、了平は自分の後ろでゆらりと現れた黒服の敵に、一瞬だが致命的に遅れてしまった。

すでに振り向いた時には、剣を持ち両手で振りかぶっている状態。

鈍い光を放つ西洋風の剣が、良平に向かって振り下ろされた。

キーン！

だが、咄嗟に入った影が、振り下ろされた剣を受け止めた。

鐔元に描かれた燕をあしらった刻印の日本刀。柄を持ち腰を落とすように相手の剣を受け止めている、山本の姿があつた。

「山本！」

「よっ、獄寺に先輩。大丈夫か？」

底抜けに明るくさわやかな笑顔の山本が二人に笑いかける。

「それはこっちのセリフだ。思いつきりポロポロにされてたんじゃねえか」

獄寺の言うとおりに、眼前にいる山本はすでにスクアールと戦った後なためにポロポロの状態。着ている制服は所々に切り刻まれ、あちこちが山本の出血により血が滲んでいる。それにもかつと笑っているところが山本のすごいところでもある。

受け止めた剣を弾き、相手に刀、時雨金時の峰を当てて戦闘不能に追い込む。

「だけど、勝ったぜ」

「ふん。十代目の守護者なら当然だ」

「極限によくやったぞ」

といっている間にも剣と拳とダイナマイトで敵を戦闘不能にしてい

けが人だが、一人増えたことにより自分たちを囲うようにして配置していた敵のあらかたの始末は終わった。

ようやく一段落したので、獄寺も疲れたように息を吐く。

「それにしても何なんだこいつら。ヴァリアーか？」

「はあ!? 知らねーのかよ。並中にいたのに戦ってなかったのか」

並中のいたるところにいる黒服達だが、山本が見ていないのも無理はない。

山本とスクアアロの戦っていたフィールドである『アクエリオン』は、校舎の内部を1階から3階までブチ抜いて作られたフィールドに、大量の水が常時流れて下に溜まっていく雨の守護者専用のフィールド。その為構造上、密閉されているので黒服も入ってこなかったのだろう。

山本も、リストバンド型ディスプレイで外の様子がわかるが、ずっと見ていられるほどに余裕もなかったのが事実である。XANXUSの一撃で天井が崩壊したために出ることができたが、もしそうでなかったらどうやってフィールドから出たのだろうか。案外近くに扉があったかもしれないが、壊れてしまったので知っているものはチエルベツロのみとなってしまうたが、正直この話はどうでもよい。

「それで光努はどうした？」

「俺とスクアア一口を助けた後は獄寺達の居場所を教えてくれてどっか行っちゃった」
「何がしたいんだあいつ……」

光努の考えは読めない。

最終的にどうしたいかが分からない。

この戦いに勝つためには光努の持つファイオーリングとボンゴリングが必要。

そのためにいずれは戦うが、今はそれどころではないために全員から保留されている。その為、光努は今最も自由に動いている存在。

そもそも光努には勝利条件なるものがないために、自分から何かをする必要がない。ただ向かってくる相手と戦えばいいだけの話。それでも向かってくる相手がいなかったらどうしようもないとしか言えない。

いったい今どこで何をしているのやら。

「二人、二人……今のところ確認できるのは二人だけか」

屋上の給水塔の上。最も高い位置にいるのは光努。

特徴的な真つ白な髪を揺らしながら、己の腕のデイスプレイとその驚異的な視力によつて校内の様子を見ている。

その隣に座り込んでいるのはスクアアロ。だが好戦的というわけでもなく、まだ動きが鈍っているらしく今は回復中。山本から受けたダメージは人の急所でもある後頭部から攻撃をうけて脳を揺らした。大きなダメージというわけではないが、しばらくはうまく戦闘に参加できない。できないこともないのだが、脳が揺れて三半規管も満足でない状態だとバランス感覚もつかめず、勝つことは非常に難しい。

その為不本意ながら今は光努の隣で腰を下ろしている。

ちなみに別にスクアアロが自分からついてきたわけではなく、山本と共に助けられた際にまだうまく動けなかったために光努に連れてこられただけである。

「雑魚どもはあいつらがあらかた片したみてえだな。残つてるのは『暗殺者』と『道化師』の二人か？」

「クローム、マーモン、ベルの三人が体育館で『暗殺者』と交戦中。そこで三階廊下で恭弥が『道化師』戦つてるな。後はツナとXANXUSの戦いだけだ」

あぐらをかいて座っているスクアアロの隣で立ち、辺りを見ている光努。

方角的には校庭の方向を向き、見てみるとまるで蒸気のような煙が立ち上がっていた。何事かと思っていたが、わずかに見えた物に、光努は一瞬目を見開いた。

「……スクアアロ、あれ何か知ってるか？ほれ」

スクアアロが山本との戦いで壊れたリストバンド型のディスプレイの代わりに、自分の持つてるディスプレイをほうって渡す。

「？」

怪訝そうに受け取り、画面を見たスクアアロの顔には、驚愕の表情が浮かんでいた。手はわなわなと震え、冷や汗を流し、目を見開いている。尋常ではない驚き用に、渡した光努も思わず目をぱちくりとさせる。

「これは……！まさか……あの時の!!」

「スクアアロ？」

光努はもう一度、校庭の方を見る。

そこにいたのは二人の人間。二人の死ぬ気の炎を込めた手が衝突し、激しい蒸気となつてあたりを取り巻く。徐々に晴れていく蒸気の中から出てきたのは二人の人間。さきほど戦っていた二人なのだが、蒸気の中から現れたその姿に驚愕したのは、スクアアロだけではなかった。

校庭を埋め尽くさんばかりの蒸気の山。

ぶつかり合った二人を中心として渦を巻くようにして激しい蒸気が流れ、二人の姿は見えなくなつたが、徐々に晴れてきた。

そして最初に見せた顔は、XANXUS。

ツナの攻撃により、顔や体から血を流しながらも、蒸気の中から立ち尽くす。

その顔を見たとき、ある者は喜び、ある者は驚愕したが、XANXUSの口から漏れた言葉は、ツナに打ち勝った喜びの咆哮などではなく、信じられないものを見た反応だった。

その目線の先は、凍りついた右手があつた。

「そんな……バカな……！こんなことが!!」

少し離れたところにいたツナも、炎の消えている自分の右腕をみて、呆然としていた。

あの時、ツナは零地点突破・改を使えなかつた。

零地点突破・改は、手のひらを交互に向けるようにして、両手の人差指と親指で正方

形を造るような独特の構えを必要とする。そうしなければ、相手の死ぬ気の炎を吸収することも、ましては自分の力に変えることなどできない。

ツナとXANXUSのぶつかりあった態勢は、お互いの右手に炎を込め、手のひらで組み合う形だった。その為、ツナはXANXUSの炎を吸収することなどできず、しかもXANXUSの憤怒の炎の破壊力はツナの死ぬ気の炎を上回る。

一度XANXUSの憤怒の炎を破ることに成功したが、それは重力による落下と拳、そして自らの死ぬ気の炎を拳の一箇所に集中することで、いかに破壊力があるとはいえ、広範囲を消し飛ばす憤怒の炎を正面からぶち破った。

だが、今回の二人のぶつかり合いは、状況がまるで違う。

いくら炎を集中しようと、XANXUSの憤怒の炎は、その名のとおりXANXUSの怒りによりその威力を跳ね上げ、ツナの零地点突破・改をもつても吸収できないほどに強大な力を出した。しかも今回は組み合ったため、逃げることもできず、正面から炎を受け止める。

そのことを知ったヴァリアー達からしてみれば、当然のようにXANXUSの勝利は揺るぎなかった。観戦していたバジルやディーノ達でさえ、あきらかにツナの方が部が悪いのは目に見えている。予測するに難しくない結果であったが、出てきたのは全く別の結末だった。

「そうか。おそらく……これが初代のあみだした零地点突破」
リボーンの言葉に一同は再び驚く。

死ぬ気の逆の境地、零地点突破。その境地へと至ったボンゴレの血統は、その超直感から新たな技を編み出す。それは個々によって異なり、必ずしも同じ技が出るとは限らない。ツナの場合は、相手の炎を吸収して力に変える技となったが、初代ボンゴレが生み出した零地点突破は、相手の死ぬ気の炎を凍らせる技。

炎とは逆の状態、つまり冷気。まるで死ぬ気の炎を封じ込めるためにあるような初代の技。おそらく初代ボンゴレ一世は危惧していたのか、予感していたのかもしれない。死ぬ気の炎という強大な力を持つボンゴレが、お互いに争う日が来るかもしれないということを。

「なぜだ！ありえん！お前みてえなカスに、ボンゴレの奥義など……！」

認めない、信じたくない。自分の炎ごと凍りついた右手を呆然と、だがやはり信じられないものを見るように睨みつける。それに対し、ツナは何かを探るように、そして全てを見透かすような瞳でXANXUSを見ていた。

「その凍った右手に炎が灯されることはない。おまえの負けだ、XANXUS」

その言葉に否定できる者などこの場にしようか。

凍りついたXANXUSの手から炎が出ず、もはや戦いの結末など目に見えていた。

長いリング争奪戦も、終止符を打つ時が来た。

『棟梁と呼ばれる男』

それは、ボンゴレ史上最大最悪と呼ばれるクーデター事件。

現在から8年前、当時ヴァリアーのボスであったXANXUSは、ボンゴレ9代目に対して反乱を起し、他のヴァリアーのメンバー共々とボンゴレの本部を襲撃した。

若くとも、その当時ですでに実力は周りを遥かに凌駕していたXANXUSとヴァリアー勢によって、ボンゴレは大打撃を受けた。

だが最終的に、ヴァリアーは敗北し、XANXUSは8年間眠りに着いたとされていた。

だが、その真相には驚くべき事実が隠されていた。

XANXUSはただ眠っていたのではなく、ボンゴレ9代目の使用した、死ぬ気の炎を凍らせる初代零地点突破によって冷凍仮死状態にされていた。

ボンゴレを相手にするからに油断や満身は限りなく無かったが、穏健派と言われているボンゴレ9代目の戦闘能力はXANXUSの想像を超え遥かに高くほぼ互角の戦い

をしたが、まさかその9代目が初代の技を使うとは夢にも思わなかった。

炎を凍らされたらなすすべなどなく、XANXUSは抵抗もできぬままに全身を凍らされた。

その事を知っていたのは、XANXUSを凍らせた張本人の9代目と、戦いの傷で柱の影で動くことができず、たまたま意識が戻って話を聞いていたスクアアロだけだった。

「そしてその8年後、XANXUSは復活してまたボンゴレを乗っ取ろうとしたと」「ああ。だが、あのガキが初代の技を使うとは・・・」

眼前に凍りついたXANXUSを映し出すディスプレイ。

その光景にギリッと奥歯を噛み締め、自分の体調を無視してスクアアロは立ち上がる。

「どこいくんだ、スクアアロ」

「XANNXUSのところだ。嫌がるだろうが、奴を助けに行く」

左腕の手首から先は、先の爆発により壊れてなくなつてしまい、代わりに右手に急ごしらえの洋剣が握られている。ここに来る前に、光努がスクアアロを抱えて移動中に襲つてきた黒服から奪い取つてきた剣。すでにボロボロであり、使えばそのうち折れてしまいそうな剣であり、スクアアロの使つてきた物程の剣でも無いのだが、それでもないよりはマシと握り締める。

「奴は昔、9代目に凍らされて8年間眠りに付いた。また同じことにはさせねえ」
チャキリ、と握る剣を鳴らす。

「それに、妙なやつが近づいてるみたいだしな」

元々鋭い眼光をさらに鋭くさせ、周囲を警戒するように臨戦態勢に入る。

光努もスクアアロの言葉に、無言だが同意する。

この並中には、もう一人、光努も知らない奴が入り込んでいる。

しかも匠に監視カメラの間を縫つて移動しているため、ディスプレイにはまだ姿が映し出していない。

そしてその目的地は、戦いの状況と傾向、それに人が通つたと思わしき痕を調べたら、おそらく校庭、ツナとXANNXUSの元へと向かつている。

今の二人は派手に消耗し、XANNXUSに至つては片腕しか使えない状態。このまま

では二人の決着が着く前にやられてしまう。そうなっては困るので、光努もスクアーロの同様に立ち上がった。

「じゃ、最短距離で行くか」

光努がそう言うと、スクアーロを抱えてその場でしゃがみこみ、地面を強くけって宙へと飛び出した。

もはやなれたのか、スクアーロは特に文句を言わなかった。

それよりも、速く校庭へと付けるならむしろ好都合。屋上を飛び、壁をけって、光努とスクアーロは真つ直ぐに校庭へと向かった。

立ち尽くすツナと、右腕を凍らされたXANXUS。

二人が対峙するが、結果はすでに見えていた。

だがそれでも、まだ諦めようとしな。

銃を構え、炎を溜め、照準を合わせる。

ボロボロの体を動かして、ツナへと攻撃を向ける。

対するツナも、両手に炎を灯し、再び動こうとした時だった。

唐突に、二人は何かが近づいてくるのを直感した。

ツナとXANXUSは、同時にその直感に従い、その場から飛び退こうとした。だが、それをできるほどに、XANXUSは万全ではなかった。

その為、後ろから来た攻撃を避けることができなかった。

ドガア!!

「ぐう!!」

吹き飛ぶXANXUSだが、空中で態勢を立て直し、なんとか倒れずに距離をとることには成功した。

だが、ダメージが大きかったのか、そのまま膝をつく結果となってしまう。自分を攻撃してきたものを、鋭い眼光で睨みつけた。

襲撃者は、男。

浅黒い肌、黒髪をバンダナで抑え、黒いタンクトップという出で立ちに、顔の右半分は木でできたお面が付けられている。反対側から見える赤い瞳が、確実にツナとXANXUSの二人を捉えていた。

その手に握られているのは木槌。だが大きさが普通ではなく、柄だけで80センチ程

はあり、先端頭部の面はおよそ直径が30センチ。

通常の木槌とは全く大きさが異なり、その分一撃の威力も高く見える。

だがそんなことよりも、襲撃してきた人物に対し、ツナは戦闘態勢を取る。

XANXUSを攻撃したが、明らかにツナを助けたという雰囲気ではない。お前も標的だ。相手の目をそう言っている。

「何者だ」

すぐには襲つてこないの、まずは名前を聞く。

どこの誰ともわからないものに、邪魔をされる筋合いはない。

「俺は墓造会のウィーラ。『棟梁』のウィーラだ」

墓造会。

その名前に聴き覚えるのあるツナはもちろん、観戦していたリボン達も驚いた。

墓造会は、組織の所在地も構成人数も連絡手段も全く不明の組織。

いつの間にか現れて、いつの間にか消えてしまう。手がかりとなる物はないに等しかった。

だが実際には、その墓造会の者が今までに分かるだけで3人判明していた。

一人目が『暗殺者』のアドルフオ。

殺し屋として活動するアドルフオは、よく見かけて目撃情報も割と多い。『暗殺者』

なのに目撃場があるというのもどうかと思うだが、本人の性格も目立つ方だからかもしれない。

二人目が、「道化師」のジャンピエロ。

襲撃、破壊、やつは派手に動き、派手に破壊することが多いらしい。だがやはりいつの間にか消えている。目立つ格好だから見つけやすいのもあると思われる。

最後に、三人目となるのが、「棟梁」のウィーラ。

上記の二人と違って、あまり派手に動いているわけでない彼だが、その性格は割と真面目。なので相手との会話も成立させるし、今まで戦った者たちからの証言に、正々堂々と戦うのが基本らしい。

だが任務とあれば別。問答無用な冷徹な場面も見え隠れしている。

この並中に、判明している墓造会が全て揃ったことになる。いよいよ不可解となってきたプレグエーラファミリー。

どうやってこの三人を味方につけたのか。

「ウィーラ、お前たちの目的は何だ！」

「俺たちの目的は、お前らボンゴレの殲滅」

「！」

予想通りの答え。

だが、その言葉を聞いたツナは、両手の炎をさらに増幅させる。

しかし、次に聞いた言葉にストップした。

「だが、この任務もついでにすぎない」

「何!？」

「狙いは、ボンゴレリング」

「!」

ボンゴレリング。

かつてマフィアたちが、そのリングを欲するがために、血で血を洗う争いをしたと言われるボンゴレの秘宝。

「正直、プレギーエーラの連中を使うまでも無かったが、それも必然ということだろう」

「使う、だと?」

「今おまえの仲間を襲っている黒服の連中は、ただ操られてるに過ぎないプレギーエーラの構成員だ」

「何!？」

観戦していたリボン達も、ウィーラの言葉で納得が言った。

9代目同様の穏健派と言われるプレギーエーラファミリーが、なぜボンゴレを狙ったか。

そして、なぜ墓造会という誰も見つけられなかった組織を味方にできたのか。すべてが逆。

プレギーエーラが操っていたのではなく、墓造会にプレギーエーラが操られていた。接触してきたのも、おそらく墓造会の方からの接触。

そして戦えない構成員に対して、何らかの手段を用いて操作、下つ端の黒服に仕立て上げ、ボンゴレを襲わせた。

そして、奴らの狙いはボンゴレリングただ一つ。

「そのために、関係のないファミリを巻き込んだのか！」

「関係ない？それは違うな」

「何?！」

「竜の逆鱗とはよく言ったもの。やつらは、我が主の逆鱗に触れた。それだけだ」

「逆鱗・・・だと?」

竜には、自分の体にある鱗の中で、たった一つだけ逆さについている鱗が存在するという。そして、その逆さの鱗に人が触れたとき、竜は激しく怒り狂う。

つまり逆鱗とは、その者の怒りを買う行為をすること。

「主の逆鱗だと！確かに奴はそう言った。ということとは」

デイーノも驚いた。

そして、静かにリボーンは、だが鋭い気配を出しながら、口を開く。

「プレギーエーラは、墓造会のボスに何らかの接触をしたってことだな」

見つけれられない墓造会に関わることに成功した人物がいる。

だが、そのせいで奴らに操られたのなら、元も子もない話。

「おしゃべりが過ぎたな。お前らを潰しリングをもらおう。それが俺達の必然。邪魔はさせせん」

再び、手に持った木槌を構え、眼前のツナに向かって強大な威圧と殺気を放つ。

尋常ではない威圧感。明らかな強者の気配。

だがそれでも、負けるわけにはいかない。

「お前たちに、ボンゴレを潰させるわけにはいかない！」

ボウ！

両手の炎をはためかせ、鋭い気配を放つツナ。

コオ！！

距離をとっていたXANXUSも再び立ち上がり、残っている左手の銃に炎を込めた。

「邪魔する奴は、誰であろうとカツ消す！」

怒りが、XANXUSの力を増幅させる。

不甲斐ない部下に対しても、自分をコケにした年下の10代目候補に対しても、突然現れた別の敵に対しても、XANXUSは怒った。

その感情が、自分の力を上げることを知っている。

自分の炎を、何倍にも強くすることを知っている。

だから怒り、感情を燃やし、相手を見据える。

「カッ消えろ!!」

左の銃から放たれた炎、一丁しかない銃からしか出たとは思えないような巨大な炎の弾丸を形成し、あたりを炎で包み込んだ。

『さっきの借りはなしだ』

「しづといね、君」

「そういうお前も、ねー」

キーン！

ジャンピエロの手に持つ薄いリング状の武器と、雲雀の持つ鋼鉄製のトンファーがぶつかり、甲高い金属音を上げる。

チャクラムと呼ばれる、古代インドの敵を切り裂く事を目的とした投擲武器。

薄い円盤状の形に、中央には穴、外側には刃がついた武器。

だけど、ジャンピエロの持っていたチャクラムは、通常のチャクラムと少し違っていた。

通常、外側だけ刃がつき、中央の穴に指を引っ掛けて使う。が、やつの使っているチャクラムは外側と内側、両方に刃がついている。その為、ジャンピエロ本人も切れないたぬなのか、おそらく手を覆っている手袋も防刃製である。

身にまとっている白いローブの裾からいくつもチャクラムを取り出し、投げつけては雲雀はトンファーで防ぎ、そのまま持つて攻撃を仕掛ける。

身を捻るように、握ったチャクラムを振り回し、距離をとって投げつける。

トンファーを巧みに動かしまわし、攻撃を躲して攻撃を仕掛ける。

タッ！

床を蹴り、後ろに下がるように跳んだジャンピエロが、両手を振るうように動かすと、何枚ものチャクラムが上下左右、変化球のごとく雲雀へと向かっていった。

カシユ！

「甘（あま）よ」

キイン!!キイン!キイン!

トンファーの中から、ベルとの戦いで見せたギミック。刺の付いた分銅が先端に取り付けられた鎖。それをトンファーごと回転することで盾にし、チャクラムを防いだ。

しかもそのまま回転を維持し、ジャンピエロに向かって特攻する。

鎖を振り回すことでリーチも長くなり、遠心力で破壊力も増す。敵を倒すために問答無用で校舎の壁等を破壊していく。

「ついでついで」

無感情な声でしゃべるジャンピエロと反対に、雲雀は寧猛そうに楽しそうに口角を上

げる。

「安心しなよ、すぐに壊してあげる」

「その怪我で？それはどうかな」

再び手元に何枚ものチャクラムを指に挟む。

ジャンピエロの言う通り、雲雀の体には怪我が多い。

ベルフェゴールとの戦いで、ワイヤーとナイフによつていくらか切り刻まれた傷が意外と深く残っている。その為、体中のあちこちが切り傷で出血しているが、そんなことは関係ないとばかりに動いているのが雲雀。

一応応急処置で止血はしたが、出血でいくらか体力が落ちているのに、それでも動き続けるのはさすがの一言。だが、相手が相手だけにその力はいつまで持たせられるのか。

刺付き分銅を先端に付いた鎖を振り回し、勢いを付けてジャンピエロの顔面に向かつて飛ばす。素早く飛んできた分銅に、ジャンピエロは静かに手にチャクラムを挟んだまままで動かした。

ギャギャ!!ギン!!

「!」

自ら飛んできた攻撃に触れるように手を動かしたかと思つたら、直径20センチ程の

チャクラムを、針に糸を通すような正確さで分銅から通して鎖に引つ掛け、そのままチャクラムを殴りつけて壁へと突き立てた。

チャクラムの穴に鎖を通して壁に固定され、一瞬雲雀の動きが止まった。

その隙に、鎖を手でつかんだまま、雲雀に向かってチャクラムを振るう。

片方の鎖を掴まれたことにより、同時に片方のトンファアの動きが止まった。

カチリ。

だが、瞬時に掴まれた鎖とトンファアを切り離し、回転するようにして残りのトンファアと鎖を振り回し、チャクラムを落とす。

しかしジャンピエロの方も、雲雀の切り離した鎖を振り、雲雀の残りの鎖と絡ませた。

「えい」

切断！

鎖を掴んで詰め寄り、鎖を途中からチャクラムをふるって切断した。

短くなった鎖を切り離し、一度距離をとって再びトンファアを構える。

対するジャンピエロも、手に持った鎖を放り投げ、再びチャクラムを構える。

お互いに、最初の構えに戻った。

廊下の周りの壁や床は、切り傷と破壊痕が多く残り、お互いに対峙する。

最初と同じ光景だが、体力的にも、最初から傷のあつた雲雀が圧倒的に不利。

なんとかここまで耐えたが、それも雲雀の屈強な精神力と、意地でも相手を倒そうとする性格が幸いしたため。一歩間違えれば、すぐに相手にやられる状況には変わりない。

緊迫した空気の中、二人は同時に何かを感じ取った。

かすかだが、何か近づいてくる音。

二人して一層身構えた瞬間、二人の横の廊下の壁が吹き飛んだ。

「おらあああ!!」

「!」

乱射!

XANXUSの持つ銃の輝き。片腕はツナの零地点突破によって凍らされたが、残った左腕にしたのは必ずしも不足の事態とは言えない。

確かに攻撃の幅は両手よりも下がったが、その分より多くの炎を一箇所に溜め、放出することができるようになった。一発一発が両手で打つよりも遥かに強い炎を打ち出していく。

だがそれでも、不利なものには変わらない。

両手の銃から炎が出せないため、炎噴出による高速移動と攻撃の二つが両立できなくなった。

移動するか撃つか。一丁しかない銃により、選択するしかなくなる。

そして選択したのが攻撃。

攻撃は最大の防御のごとく、荒々しい炎があたりを包み込んだ。

一切の攻撃を許さず、満足に動けないために先に殲滅する。それがXANXUSの選択した攻撃の方法。

もちろん、その対象には「棟梁」のウィーラとツナの二人が入っている。

「厄介な炎の威力だな、XANXUS。だが、もはや動けなさそうだな」

ダッ!!

地面を踏み鳴らし、ウィーラが動いた。

XANXUSがお構いなしにと炎の弾丸を撃つが、躲しながらXANXUSに接近して槌を振り上げる。反応がやはり遅れたXANXUSだが、その間に人が割って入っ

た。

「させない!」

すぐさま炎を噴射してウィーラとXANXUSの間に入って立ちふさがる。

そのまま、本来XANXUSが受けるべきだった槌を受け止めた。

「どけ、まとめて潰すぞ」

(くっ!こいつ、なんて力だ)

ギリギリと押し切られそうなツナ対し、ウィーラはツナの後ろを見てつぶやいた。

「沢田綱吉・・・そこ、危ないぞ」

後ろから溢れんばかりの炎が突っ込んできた。

XANXUSに向かったウィーラと、二人の間に入ったツナ。

現在三人の位置は、まさに一直線に並んだ状態。

とすれば、XANXUSにしてみれば二人共まとめて吹き飛ばす大チャンス。

「くっ!」

咄嗟に“零地点突破・改”の構えを取り、後ろを向いてXANXUSの炎を受け止める。

その瞬間、ツナの腹部に横から衝撃が走った。

「!」

横からぶつかったのは、槌。

見なくてもわかる、ワイーラの振りかぶった槌によって、ツナは横へと吹き飛ばされた。

「XANXUSの心配をするとは、お人好しな奴」

そのままツナを無視して膝をついているXANXUSの元へと行く。

等のXANXUSは力を使い果たしたのか、銃を持った右手を降ろしたまま、膝をついてうつむいている。

手に持った槌を振り回し、XANXUSに詰め寄ったワイーラは、槌を振り上げた。

「XANXUS！」

吹き飛ばされたツナは、すぐさま空中で炎を噴出して方向転換し、XANXUSの方へと向かおうとしたが止まった。

うつむいたXANXUSから一瞬見えたその目。

どこまでも鋭く、野獣のようなその瞳は、まだ疲れ果ててなどいない。明らかに強い意思の見える目。

槌を振り上げたワイーラが、振り下ろした瞬間、転がろうようにしてXANXUSは避けた。地面へと槌を振り下ろし、轟音を響かせるその威力は強い。

だが、XANXUSは転がるようにしてそれを避け、そのまま銃をワイーラへと向け

た。

途中で攻撃をやめたのは、力を使い果たしてたのではない。

数を撃つても当たらず、自分で動くこともできないのであれば、当たる距離まで相手に来てもらえばいい。

そしてタイミングを図った。攻撃をした瞬間。大きく振りかぶり、攻撃した後の一瞬の硬直ができるのを待った。

そして、そのタイミングは来た。

周りが全てスローモーションのように見える中、すでに至近距離のワイーラへと照準を定めたXANXUS。

ワイーラが再び降ろした槌を振り上げようとするよりも速く、その引き金を引き、フルに溜めた炎を吐き出した。

ダアアン!!

燃え上がる炎の弾丸が、ワイーラの顔を直撃した。

否、そう見えた。

「!」

その顔は無事。咄嗟に首を傾げてかすめるだけにとどめた。

恐るべき反射神経。もはや、XANXUSには炎を打てるだけのエネルギーは残され

てなかった。

「これでジ・エンド。ま、必然だったな」

そう言つて再び槌を振り上げるウィーラに、XANXUSはぼそりとつぶやいた。

「……これで、さっきの借りはなしだ、ドカスが」

「！」

咄嗟に後ろを向いたウィーラは、空中に浮かぶ者に目を向けた。

円形状に巨大な炎を収縮し、その手の中に納める。

そして、勢いよく額から死ぬ気の炎を灯し、その両手は先ほどよりも遥かに高い炎が灯されていた。

「ああ。ありがとう、XANXUS」

(さっきのXANXUSの攻撃は、このためのものだったのか)

空中に佇むツナを見て、自然とウィーラの口元に笑みが浮かんだ。

XANXUSのフルチャージの攻撃は、ウィーラを攻撃するためのものではなく、避けるのを見越して、その後ろの空中にいたツナへと撃つたもの。

そして、そのツナが“零地点突破・改”によって、吸収するための炎。

しかも吸収したツナがパンクしないようにある程度の加減がされている。

XANXUSのように、荒々しく燃え盛る死ぬ気の炎。

だが同時に、落ち着きのある静かな炎。

矛盾しているようだが、そう思える程に強大な炎をツナは纏った。

「来い、ウィーラ。お前の狙いはボンゴレリング。俺が先に相手になってやる」

XANXUSではなく、自分と先に戦え。ツナはそう言った。

もはや戦えぬXANXUSへの矛先を、自分へと変えるように。

だが、

「沢田綱吉。必要なのはボンゴレリング。ハーフを持つお前と、XANXUSの二人のリング。先に、こちらをもらおうか」

ギイーン!!

再び振り下ろした槌に、何かがぶつかった。

咄嗟のことに、思わず目を見開いたウィーラとXANXUSの見たのは、二人の間にとって槌を剣で受け取める人間。

ヴァリアー御用達の黒ずくめの隊服に、左手の手首から先は義手が壊れなくなっている。反対の右手に握られた剣が、相手の槌の柄にぶつかり受け止め、その銀色の髪が風に揺れた。

「てめえ、スクアール」

「ようボス。随分と派手にやられたな」

スクアアロは、二人の間に入り込んでXANXUSを守った。

「スクアアロか、お前に用は無いのだが」

「う”お”おい！てめえに用はなくても、俺にはあるぜえ、
“棟梁”のウィーラ」
「ほう」

「うちのボスが、世話になったみてえだなあ！」

ギヤイイン!!

振り払った剣を槌の柄で受け止めて、ウィーラは一度距離をとった。

そしてスクアアロも、自身の持つ洋剣の具合を確かめつつ、構えた。

(さてと、どこまで持つか。しばらくもってくれよお)

スクアアロ自身の剣ではなく、急ごしらえの剣。その為、相手が相手だけに心もとな
いが、それでもスクアアロは戦う。

8年前の『ゆりかご』で、スクアアロはXANXUSを守ることができなく、XANXUSは氷漬けにされた。あの時自分が動けたのなら、XANXUSが9代目に凍らせることはなかったかもしれない。何もできなかった悔しさが残った。

だが、今はまだ生きてる。守ることができる。

XANXUSと比べるもなく、自身もボロボロなことは知っていた。

だが、それがどうした？

まだ動ける。剣を振るえる。XANXUSの前に立てる。

ならば、やることは決まっている。眼前の敵を倒す！

「……………」

それまで槌を構えていたウィーラだが、唐突に手を降ろし、くるりとスクアーロに背を向けて反対方向のツナへと足を進めた。

「う”お” おい！どこへ行きやがる！」

「あまり命を散らそうとするな。正直リングの持たぬお前と戦う必要性な無い。だから先にあちらのリングをいただく。もしもそのあとでまだ立ち向かう気があるのなら」

顔だけをわずかにこちらに向け、強大な殺気を放った。

「まとめて潰す！それが、俺にとっては必然だからだ」

「！」

押しつぶされるような重圧。これまで幾千もの殺気を受け、修羅場をくぐってきたが、こいつは確かに強い。

スクアーロの経験と野生の勘がそう思わせた。

地面に降り、炎を灯したツナは、ウィーラと対峙した。

「さて、待たせたな。沢田綱吉」

「ああ、行くぞ。棟梁、ウィーラ」

二人一気に接近し、それぞれの武器である、拳と槌を振りかぶった。

『希望の交差点』

炎を纏った拳を振うツナと、己の武器である槌、柄の長さも頭の大きさも通常より遙かに大きい槌を振り、ウィーラは攻撃した。

横からぶち当てるように振るう槌を、ツナは空中で身を捻って躲し、そのまま勢いよくかかと落としをお見舞いする。

が、それで簡単にやられてくれることもなく、引き戻した槌の柄でもってガードされる。

そこから再びツナの拳がウィーラを狙った。

観戦しているディーノやバジル達も固唾を飲む中、広々とした校庭での戦いが繰り広げられる。少し離れたところでは、膝をついて疲弊しているXANUXSと、そばに立つやはりこちらもすでにポロポロのスクアーロがいた。

ちなみに、もはやリング争奪戦が第三者の介入であやふやの中、本来ならば観客席にいるリボン達は援軍として途中から参加をチエルベツ口より許可されたのだが、彼ら観戦組を囲っていた赤外線センサーの檻が解除されなかった。

その為、やはり全員観戦するしかない状況。しかもこのセンサーは内側の攻撃を喰らうと大爆発するので、無理やりの脱出もほぼ不可能という状態。

この状態を作り出したのは、後々邪魔な奴らをまとめて始末しようかなと考えていたマーモンが檻に細工をしたのだが、今回は明らかにそれが裏目に出た。

まあマーモンの方も戦闘中なため、すっかりと自分が檻に細工したというのは忘れている状態なのだが。

とまあ観客席の様子が分からないままだが、それでも戦いは続く。

ボンゴレリングを狙うウィーラに、自分達を狙う敵を倒そうとするツナ。

一体どちらに戦いの分があるのか？

まったくもって怪我もなく万全な状態で現れたウィーラと、すでに先の戦闘で体力も落ちてボロボロ、しかしXANXUSUにもらった死ぬ気の炎で回復し、まさに不死鳥のごとく空中へと舞い上がったツナ。起動力は手の炎による推進力で抜群に高い。だが、正直なところ倒すのが難しいかもしれない。

XANXUSUのような炎の使い方できない以上、戦う方法はやはり炎を纏うグローブで殴り、後は蹴り飛ばすなどの体術。XANXUSUの時は空中で縦横無尽に駆け回り、上下左右と変幻自在に拳や蹴りを叩き込むことができたが、今回は相手は地に足をつけているため、少し攻撃方法制限される。

だが、相手も先のXANXUSのごとく空中を飛べるとは限らないので、やはりここは問題ないのかもしれない。

しかしXANXUSと違って今回のウィーラは、見た限り死ぬ気の炎を使わない。その為、ツナの編み出した“零地点突破・改”と、初代の編み出した“零地点突破”の二つの技は使えなくなった。言ってしまうえば、XANXUSには圧倒的に有効に効いたため、ほぼ確実に勝利を収めることができたが、ウィーラには使えない為、勝利が見えない。

基本的には零地点突破を使わずとも、同じよそこの不良や少々接近戦ができる位のマフィア程度なら、ツナのスピードを視認できずに軽くあしらえるが、ウィーラの身体能力や動体視力はかなり高い位置にある。

至近距離からXANXUSの炎の弾丸を避けたこともあるが、その槌を振り下ろす豪腕は並の力ではない。当たればただでは済まないほどに強い。

骸の人間道を破ったツナだが、ウィーラにも通じるのだろうか。

「ま、結局のところ、戦いの行方は神のみぞ知るところかな」

「・・・白神光努。てめえ、こんなところで何してやがる」

ギロリ、という擬音が文字となって見えそうなほどに眼光を鋭く光らせるXANXUSにたいして、いつの間にか背後からツナとウィーラの戦いを観戦していた光努は楽し

そうに笑った。

さつきまで一緒にいたスクアアローは、自分は関係ないとばかりに光努を無視して目の前の戦いを見ている。

「せっかくだし、今の他の状況教えとくよ。ずっと戦ってたし知らなかっただろ」

確かに、とおもうスクアアロー。

今のXANXUSに最初ほどに他を見ているほどに余裕はなかったはず。

他の場所で誰が誰と戦っているのかもほぼ分かっていないはず。

「さつきスクアアロー投げつけたあとで少し体育館見てきたけど、クロームにベルとマーモンで『暗殺者』のアドルフオと戦ってるみたいだ。で、恭弥と『道化師』のジャンピエロ。後は隼人と了平、それにルツスーリアとランボが一緒に行動してるな。あらかたの雑魚は途中でおいってきた武と一緒に蹴散らしたみたい」

「『暗殺者』と『道化師』まで来るとは、とんだ飛び入り参加だな」

舌打ちして不平を漏らすXANXUS。

確かにXANXUSの言うとおり、もはやリング戦がめちやくちやになっっている。

というかこのあとチエルベツ口のどうするつもりなのだろうか？

(つーか、今この話にレヴィの名前が出なかったがスルーなのかボスさんよう・・・)

ちなみにレヴィはそこらへんで転がっています。もちろん気絶してるし、誰にも気づ

かれなかつたのであろう。

さて、話は戻して眼前の戦いを見てみようか。

柄が80センチ程もあり、頭の面は直径30センチほどもある通常の大工道具に使われるようなハンマーと大きさがかけ離れている槌。ウィーラはその手に持った槌でもって、空中から縦横無尽に攻めてくるツナを迎え撃った。

「先ほどよりも速さと攻撃力が増してる。さっきのXANXUSの仕業か」

ウィーラの言うとおり、ツナはXNAXUSの炎を吸収して威力は上がっている。

もちろんスピードも。それでも攻撃を躲すウィーラはさすがといえる。

「なら、攻め方を変えるとするか」

スルリ。

後ろ腰に通していたベルトにさしてあつた槌を引き抜いた。

全部で3本腰にさしてあるうちの、2本目の槌。

最初の槌と違って、頭の大きさは面の部分がおよそ先ほどより小さい10センチ程。

柄自体は仕込み式なのか、振ると長さが代わり、長さおよそ2メートルほどにもなった妙なバランスを持つ槌だった。

ヒュンヒュンと風切りを音を出しながらくると回転させ、ツナの元へと近づいてくる。

「ふっ！」

「！」

一瞬で近づいたウィーラの槌を、空中へと飛ぶことでツナは躲した。

だが、空中へと逃げる前に、柄の端を持ってリーチを伸ばした長い方の槌を振るってツナを上空へと上げる前に撃ち落とした。

そのまま一瞬ひるんだツナに向かって、蹴りを放った。

「くっ！」

咄嗟に炎を噴射して後ろへと素早く移動したが、先ほどの攻撃のダメージがまだ残っているのか少しフラットとしている。隙を見逃さず、ウィーラは地面をけって追撃を仕掛けた。

長さや大きさの違う槌を巧みに振り回し、ツナを翻弄する。

空中にいると言っても、遠距離攻撃手段がない以上、攻撃の瞬間には相手に接近するしかない。ウィーラは接近戦に長けていた。炎を推進力にしたツナのスピードを、常人離れた反射神経でもって対応し、なおかつカウンターや攻撃すら仕掛けてくる。

「やばいな。思ったよりもツナは苦戦しそうだ」

「確かにな。相手が炎を使わない以上、肉弾戦しかないからな」

観戦場で観戦しているリボン、それにディーノやバジル達は苦い顔をする。

XANXUS戦では活躍した“零地点突破”も、今では使えない。

炎を織り交ぜた戦い方をする奴より、ある意味体術に秀でた奴の方がツナと相性が悪いかも知れない。が、ツナ自身も基本的に炎の推進力でスピードを上げ、炎を拳に纏っているためパンチの一撃一撃の威力も高くなっている。

だが、元の肉体のスペックを死ぬ気状態でオーバースペックにしているとはいえず、それだけで簡単に相手のスペックを超えられるとも限らない。

人には、身体能力や反射神経はもちろん、それまで戦ってきた経験など勝つために必要な要素はいくつもある。そう言った意味で考えると、ツナより相手側の方が分がある。

「沢田殿はこれまでの戦いのダメージも残ってます！これではいくら炎を回復したとはいえ、やられるのは時間の問題です！」

「確かに。時間的にもいつ死ぬ気モードが解けてもおかしくねーしな」

「それでも大丈夫なのは、ツナの気力とXANXUSにもらった炎のおかげか」

ディーノの言う通り。

長時間にわたり、死ぬ気状態を保てるようになったツナだが、さすがに限界が近づいている。まさにロウソクの上に揺らめく炎。そのうちふとしたことでも消えてしまいうようなほどに弱っているのも確か。

だがツナの気力が消えない限り燃え続けている。

「うおお！」

たとえ敵が格上だろうと、その身に纏う炎を燃やす。力をくれた者のために、大切な仲間のために。

「はっ！」

「ふん！」

ウィーラの槌と、ツナの拳が再度ぶつかりあった。

「う”お”おい、いつまで続くんだよ」

二人共遥かに強い戦いをしているが、決定打をいまだに打てていない。

そしてやはりツナが体力面的にも不利。

「さて、そろそろかな」

「う”お”おい！白神光努！何の話だあ？」

「クロームも多少気づいてたと思うが、もう来てるころか」

「なんの話だ？」

XANXUSの方も光努を睨むようにして尋ねる。睨むつもりなどないかもしれないが、眼光が鋭く殺気立っているので睨んでいるようにしか見えない。いや、本当に睨んでいるのか。

「それは、」

ドゴオオオオ!!

「「「!」」」

「お、やっぱ早かったな」

轟音がした瞬間、スクアーロやXANXUSはもちろんツナやウィーラの体が止まった。

光努を除く全員が音のした方を見ると、そこには、体育館の壁が崩壊している光景が見えた。

体育館の方角を見ていない光努の視界には、焦りの表情をわずかに浮かべるツナの顔が見える。

おそらく体育館にいるクロームを心配しているのだろう。リストバンド型のディスプレイを装備しているとは言え、ずっと見ているわけにもいかないし、今やカメラはほとんど壊され、今の時点では体育館は壁が破壊された際の煙で視界がディスプレイには写っていない。

何事かと思つてもしょうがない。

「けど、杞憂だけ、ツナ」

ボーン!

煙の中から黒い物が飛び出してきた。

くるくると回転して次第に近づいてくる物体は全員目で追ったが、その着地地点はツナと少し距離をとっていたウィーラのすぐそばだった。

回転しながら途中で止まり、バサリという音を立てながら黒い先のボロボロのマントを翻して静かにウィーラの隣の地面の上に着地した。

「とんだMonsterが来たよ。ウィーラ、Heがいるなんて聞いてないよ?」

顔につけたゴーグルのレンズが不気味に赤く光りながら、「暗殺者」のアドルフオは手に持ったナイフを地面に捨てた。よくよくと見ると、まるで飴細工でもするかのようにナイフの先がぐにやりと捻じ切られていて、もはや使い物になっていなかった。

「ありえない曲がり方だな。どうした?」

「どうもこうもないよ。ホント、今日はLuckyだかBadだか」

ジャキリと大量のナイフを取り出して自分が飛んできた場所、土埃の舞い上がる場所に向かってナイフを一齐に投擲した。

「暴蛇烈覇!!」

土埃を突き破り、飛んでくるナイフを全て受け止め、ひしゃげさせ、全て破壊したのは、直径1メートルはあろうかという巨大な鉄球。回転をかけられて飛んできた鉄球は、後ろに鎖がついていたため途中で止まって地面へと落ちた。その際ズシンという重

い音を響かせながら、校庭の土をへこませていた。

飛ばされた鉄球と共に、土埃が吹き飛び、その場にいた人物の姿が現わなくなった。オールバックにした黒い髪に、顔にある2本の切り傷のある体格の良い長身の男。

その手に握られている鎖の先には、さきほど飛んできた鉄球が取り付けられていた。「取り違えるなよ、ボンゴレ。俺は助けに来たのではない」

口を開いた男を見て、ツナの目は驚愕に見開かれた。

「礼を言いに来た」

「ランチアさん！」

かつて、黒曜ランドでの骸との戦いの際、ツナと戦った骸の影武者だった男。

かつて自らの所屬していた家族同然のファミリーを、骸の憑依弾によって操られ皆殺しにした経緯を持つ不幸のマフィア。

「蛇網球じやこうきゅう」と呼ばれる、鎖につながった鉄球を武器に、常人離れた怪力で飛ばす

男。だがその真の強さは武器に頼るでなく、肉弾戦によって発揮される。

昔の荒々しい死ぬ気モードのツナを一方的に退けるほどの実力を持っていたが、その頃は骸に操られ精神不安定な状態でもあった。だが、影武者としてツナ達の前に立ちただかつて山本達を戦闘不能にしたにも関わらず、ツナによってその内に秘めた優しさを見破られ、最終的には敗北した。

その後は、骸達と共に一旦復讐者ヴァインディチェに連れて行かれたが、元々ファミリー惨殺事件は骸の仕業なので割と速く釈放となった。

そして憑依されていた時の影響なのか、骸の言葉を感じ取り、リング争奪戦の場に駆けつけてくれた。

「「ボスー！」」

と、ランチアの後ろの崩壊した体育館の壁の穴から出てきたのは、さきほどまで中でアドルフオと戦っていたクロームとベルとマーモンの三人。

ところどころ切り傷や怪我が見え隠れしているが、致命傷とも呼べるほどに重症は見当たらないのにツナはほっとした。全員ボスと読んでいるが、もちろんクロームはツナに対して、ベルとマーモンはXANXSUに対して言ったのである。

「10代目ー！」

「うおー！大丈夫かー！」

「ツナーー！」

ついで別方向から来たのは、こちらもやはりボロボロだがひとまず動くには問題なさそうな獄寺と了平と山本の三人。

あと獄寺に抱えられて眠っているランボ。ルッスーリアの方は他の敵がもういないことからひとまず隠すように校舎の中においてきたそうだ。さすがにベッドごと縛ら

れて連れてこられたルツスーリアを抱えては移動できない。

「三人とも！無事だったのか！」

ツナが無事とわかり喜ぶ獄寺達。ツナの方も、三人が無事だと知って喜ぶ。

これでこの場に置ける、ツナ側の数が墓造会側の数を圧倒的に上回った。

まあツナ側とXANXUS側が共同しているわけでもないのだが。

喜びもつかの間、校庭に佇むウィーラとアドルフオを見て獄寺達も笑顔を潜める。

が、すぐに表情は変わった。

ボゴオオ!!

再び起こった爆発音に、今度はさつきより多い目線が爆発場所に向かった。

校舎の三階一部が崩壊している。先ほどと似たような状況。

さっきの体育館の壁の崩壊は、ランチアの蛇網球によって壊された。が、今回はあの

校舎の中にいる誰かによって起こされた爆発音。

煙の中から白い物体が飛び出し、壁をけて威力を殺し、地面について校庭に飛び出

す白い影。アドルフオとウィーラの近くに降り立った影は、その白いローブをたらい、

ピエロのような仮面をした姿でチャクラムを構えた。

「ジャンピエロ。おまえもか」

「うん、あんなのいるなんてホントに聞いてない」

“道化師”ジャンピエロは無感情な声だが、本当に面倒くさそうに呟く。

今造墓会のメンバーが3人とも校庭に揃った。

煙の校舎から誰かが降りてきて、こちらに歩いてくる。

「雲雀さん！」

ツナが叫んだとおり、現れたのは雲雀恭弥。

ボンゴレ雲の守護者にして、並盛中学風紀委員長。

しかしその体はお世辞にも軽傷とは言い難い。もしかしたらツナ側の中では一番重症かもしれない。両手に持つトンファーが特徴的。その鋭い目は容赦なく校庭に向けられている。

「ボロボロだな恭弥。今の爆発お前か？」

いつの間にか近くにした光努が楽しそうに雲雀に話しかける。

「・・・そこにいる彼の仕業だよ」

睨みつけるように殺気を放ち、後ろをむく雲雀。

音もなく、いつからそこにいたのだろう。気づいたらそこにいた。

スタスタと躊躇なくこちらに歩いてくる人影が誰か認識したとき、ツナ側は「誰だ？」という反応がほとんど。ヴァリアー側は「げっ！」といった本気で驚いてい

る反応がほとんど。

XANXSUですらそこにいる人物が、なぜそこにいるのか珍しく少し驚いている。いや、驚きよりも殺気の方が強いが。

あいも変わらず楽しそうにしているのは光努だけだった。

青黒い髪を揺らしながら、静かに音も立てずに歩いてくる影。丈の眺めの灰色のコートを来て身軽そうな格好。黒い手袋に包まれたその手に握られているのは、一本の槍。全長2メートル程はある、夜の闇に染めたような漆黒の槍。てっぺんから先まで全て真っ黒に染められたその槍は、見るものにとつては鮮やかな夜にも、不気味に広がる闇にも見える。

全員が見えるような場所に来た男はここで初めて声をかけられた。

「遅かったね、槍時。何してたの？」

「光努。少し別件で遅れてしまいましたよ。でもまだ間に合ってますよね？」

海棠槍時。

イリスフアミリーの誇る戦闘部隊『アヤメ』の男。

今やこの並盛中に、様々な組織関係が入り乱れていた。

状況的には、一体誰が不利なのか、誰が有利なのか？

ボンゴレ、ヴァリアー、イリス、プレギエーラ、墓造会。

リング争奪戦の終わりは、すぐそこまで迫っている。

『眞実を掘り起こす』

コツン、コツン。

大理石の床を踏む革靴の足音が響く。

どこかの廊下のような場所を歩いている男は、足運びに躊躇なく歩いている。黒いスーツに黒髪。

目の前に迫った大きめの両開きの扉を開くと、広い部屋に出た。

足音を響かせ部屋の中央ほどに歩いてきた男は、足を止めて周りを見渡した。

「それにしても、少し暑いな」

燃え盛る炎。崩れ落ちる巨大な柱に壁。

床はところどころ碎け、部屋にあつた高級そうな絨毯やカーペットは熱く、真つ赤な炎が燃え盛り、あたりを熱風の渦で包み込んでいた。

部屋の中央に倒れている人影。

男は倒れふしている人影に近寄り、呼吸脈拍火傷等、生きていることを確認する。

ひとまず生きていることがわかったのか、ほっとしたような表情を少し表に出し、周りを見渡す。見渡す限りに見える破壊の痕と巨大な炎郡。

ゴゴオ。

炎によって崩れかけている建物の天井が、落ちてきた。巨大な天井の瓦礫が男と倒れている人物を押しつぶそうと降ってくる。

瓦礫に気づいた男、だが倒れている人物を見捨てる訳にはいかない。

立ち上がったスーツの男は、右手に拳を作り静かに呼吸をする。

この状況でも、呼吸音に異常は見えない。まったく焦っていないような呼吸。

炎の中、わずかな酸素を吸い込み、再び吐き出す。

迫ってくる瓦礫に視線も向けず、無造作にも見えるほどに右手の拳を振るった。

その瞬間、迫った瓦礫は拳に触れ、落ちてくる重力に逆らうようにして真横へと飛んで行き、壁に当たる前に地面へと落ち、男と倒れている人物は無事だった。

男にとっては、壁まで飛ばすのは難しく無かったが、崩壊中の建物故に、壁を壊した衝撃で一気に建物が崩れるのを見越してその前に地面に落ちるように加減をした。

ひとまず二次災害がないことにひとまず安心する。

「さて、どうするか」

スーツの男、黒道灯夜は燃え盛り崩壊する建物の中、ため息をついていた。

ランチアと槍時が現れて、戦況はかなり変わった。

敵の戦力は、《棟梁》のウィーラと《暗殺者》のアドルフォ、そして《道化師》のジャンピエロの三人。対してこちらはボンゴレとヴァリアーの守護者勢（一部いない奴もいます）と、イリスファミリーの二人に北イタリア最強と言われたランチア。

校庭には、大空のリング戦の参加者と侵入者、全てが出揃った。

「どうしようかねー。これってMe達ピンチ？」

「そんなことないんじゃない。だってほとんど怪我人だし。でも大丈夫な人も結構いる」

「つーかランチアとか海棠とか、あんなMonsterとやってらんないよ」

「そういえばランチアって復讐者ウインディチェに捕まったって聞いてたけど」

「それは少し前の話だ。奴が檻から出てくるのは必然。だからこの場にいる」

「Ha、どうせならもうちよつと死^{Death}神達といれば良かったのに」

「だよー。アドルフオに同意」

「H A H A H A H A H A」

カラカラと笑うアドルフオ。ゴーグルやマスクで全身黒づくめの格好の為、表情はまったく伺えないが、声や仕草から愉快そうに笑っているのがわかる。同じく仮面に顔をかくして感情の見えない声でしゃべるジャンピエロの方も、心なしか少し楽しそうに笑っているようにも見えるし、ただ単に無関心なのか面倒なのかもしれない。そんな二人の様子をみてウィーラは嘆息している。

そんな雰囲気を見ているツナ側ヴァリアー側から見れば、明らかに異常な光景に見えた。

「なんなんだ、こいつら」

「ししし。人のこといえねーけど、こいつらも相当だな」

獄寺とベルの言葉に、無言だが同意するものは多い。

この緊張感のない空気。

明らかに自分たちが不利だとは思っていない。

数ではおよそ5倍の差はあるというのに、自分たちが負けると思っていない口調。確かに面倒くさいというのは本当かもしれないが、それでも勝つと思っている。

が、だからといって、ツナ達がすぐに負けるとも限らない。XANXUS達も同じ。そして、光努達とランチアに至ってはまるつきりに無傷。なにせ苦戦するような戦いも長引くような戦いもしていないのだから当然といえは当然。「で、どうするの？こいつら潰せばいいんだっけ」

「てめえはアバウトすぎなんだよ！ちったあ空気読めよ！」

「まあ間違つてはいないですけどね」

光努の軽い発言に獄寺が突つ込み槍時が苦笑いをする。

言いたいことはわかる。まあ確かにその通り。

そうすれば無事にリング戦再開、というふうになるのだから。

「それでどうするの、ウィーラ。奴らを本気で潰すのは割と面倒」

無感情なジャンピエロの声。けど墓造会の三人も、簡単にツナや光努達を潰すのは難しいと明言している。やはり実力者の三人とはいえ、この状況で余裕の勝利は難しいだろう。

顎に手を当てて、思案気味に顔を伏せた「棟梁」ウィーラだったが、ため息を一つついたと思ったら顔を上げた。その赤い瞳は、強大な威圧と殺気を秘めていた。

「しようがない。あまり使いたくなかつたんだが」

スルリ。

そう言つて腰のベルトから抜き取つたのは、3本目の槌。

大きさは他2本と比べて小さく変わった形状。頭が少し大きく、柄が短い。所々に寶石のような赤い石や緑色の石がはめ込まれ、装飾が施されている、少し古ぼけた感じの槌。だその全身には、同じように古ぼけた鎖が巻きつけられていた。

「まさか、これを使うことになるとはな」

ピシー！

ウィーラが呟くと、ひとりでに槌に巻きつけられた鎖に細かいヒビが入り光が見える。

その度に、だんだんとウィーラからの威圧感が増してくる。地面に膝をつくXANXUSでさえ顔をしかめる。

「しし・・・なんかやばくね?」

「あれは、まさか!」

ツナ達はあれが何か分からない。だがやばいものであるのは確かだと超直感や己の感覚が告げている。ヴァリアー勢の中では、マーモン、他にはランチアと槍時がその存在を知っていたのか、驚いていた。細かい筋のような光がはためき、予想のつかない威圧感が増してくる。

「槍時、あれ何か知ってるのか?」

「おかしいですね。あれを持っている者がいるなんて」
「あれ？」

「ボンゴレの死ぬ気の炎のように、マフィアにとってそれぞれ秘匿しておく技術や道具など存在します。あれはイリスが秘匿しているものの一つ」

強大なマフィアに限らず、大きな組織などには、切り札とも呼ぶべきもの、最終手段とも言うもの、隠す必要のある不利なことだつて存在する。

どこにだつて、誰にだつて、秘密にしておくことがある。

それは、イリスにとってはあまり公にしたくはないものの一つ。

「結局、あれはなんなんだ？」

「ジンギ神器」と、我々は呼んでいます」

「へえ。面白いじゃん」

光が生まれてくるソレを見つめ、光努は心底面白そうに笑う。まるで新しいおもちゃでももらった子供のような、楽しそうな笑顔。

電気のような、火花のような細かな光がましていき、次第に光が強くなる。

が、その時声が響いた。

『そのへんにしときーや、ウイーラ』

どこからか聞こえた。決して大声を出しているというわけでない。だが、エコーがか

かるように、全員に聞こえるような声が響いた。

「界羅^{カイラ}か。どうした」

ウィーラがどこからか聞こえる声に対して呟く。

会話が成り立つのか、という疑問など無意味。確かに全員に聞こえ、全員の声も向こうに聞こえる。

『それは無闇に見せてえーもんやない。自重しいや。一旦戻ってこい』

びくり。その言葉にウィーラの眉が一瞬動いたが、すぐにため息を付き、手に持った槌の光を収め、腰のベルトに戻した。辺りを照らす光がなくなり、再び夜の闇と月明かりが並中を飲み込んだ。

ちらり、と視線だけでジャンピエロに合図のようなものを送ると、ジャンピエロは自分の白いローブの袂から、黒く丸い物体を取り出した。

大きさは野球のボール暗い。その色は黒。

だが、ただ黒く塗りつぶされているような色をしていない。まるで、ブラックホールをそのまま球状にしたかのような、巻きつけるように漆黒の霧がぐるぐると中心にむかって渦巻いていた。

『ほならボンゴレとイリス勢の皆さん。こちらは退散するけど、追わんといてくれな』
声が聞こえてきたが、聞こえてきたのはその球体から。

唐突に、その球体の回転が増し、黒い霧が膨張して爆発した。

『また会おうや、ボンゴレの10代目くん、イリスの特異点くん』

黒い煙がウィーラ達3人を包み込むように広がり、次第に煙が一箇所に集まり、軽い音がしたと思ったら、その場にいた3人は影も形もなくなっていた。

あとに残ったのは、ツナ達とXANXUS達と光努達が残っただけだった。

「それで、このあとはどうなるんだ？」

唐突に言った光努の言葉で、我に返るツナ達。

途中から介入してきた第三者はいなくなり、残ったのは最初の参加者と途中から援軍に来たランチアと槍時の二人。二人に邪魔をする気はないだろうし、なら残りで戦えばいいだけの話だ。

「けど、ツナもXANXUSももう限界だろ？」

「・・・・・・・・」

無言のツナとXANXUS。

見てるだけで二人が限界とわかる。

疲弊するツナとXANXUS、さらにその守護者。そしてXANXUSの片腕は凍りついたままで炎もすでにガス欠状態。このまま戦えば、なんとか炎が残ってるツナが勝てるかなというところ。

マーモンとベルにスクアーロがいると言っても、数的にもツナ側に分がある。

結果は、すでに見えていた。

もちろんそれも、光努がどうするかによるけど。

「そういえば、是れはボンゴレの10代目を決める戦いでしたね」

「何を今更だな、槍時」

「それで思い出したのですが、XANXUSが10代目候補というのは不思議でしたね」
「?どうしてだ」

基本的に、ボンゴレのボス候補は初代ボンゴレの血を受け継ぐ者達から選び出され、その中の一人がボスを継承する。

血の繋がりを重視し、伝統を重んじるボンゴレファミリーならでは。マフィアにとってボスの選び方は様々だが、こういったこともあってボンゴレは格式高いマフィアとし

ても有名。中には強いものがマフィアのボスだったり、イリスのように例外的にボスが
いなかったマフィアも存在するが。

9代目の息子として知られるXANXUSも、当然ながら10代目候補の一人であつたのだが、槍時は別に何かを知ってるようだった。

「僕が言ってもいいのですが、どうですかXANXUS」

相変わらず鋭い眼光を槍時に向かって向け、殺気を放つXANXUSだったが、涼しい顔でスルーする槍時を見て舌打ちすると、重い口を開いた。

「てめえの知ってるとおりだ。俺と老いぼれとは、血なんて繋がってねえよ」

「！」

XANXUSの語る言葉に、ほぼ全員が驚愕した。

もしもその話が本当なら、XANXUSはボンゴレ10代目の候補ですらない。なら、一体なぜXANXUSが9代目の息子などに。

9代目もXANXUSが自分の息子であることを肯定していたことは、観戦場所にいるリボンやディーノも知っている事実。

だが、当の本人であるXANXUSから語られたのは、まったく違った真実だった。

『後始末は燃え盛る建物の外で』

イタリア某所の、とある小さな小さな下町の路地裏が始まりだった。

冷たい風が吹き、吐く息が白くなる中、石畳の上で三人の人間が会っていた。

男性が一人、女性が一人、そして10歳程の年齢の少年が一人だった。

コートやマフラーをつけた紳士と呼べるような身なりの良い初老の男性と、古着を着た下町の女性。そしてこちらも古着の服を着て、白い息を吐いている少年。

男性はこの場において、女性と女性が連れてきた少年と初めて会った。

少年は、自分の右の掌を上に向けてると、そこには光球状の炎が輝いていた。その炎を見た男性は、その少年に優しそうな笑顔を浮かべ、自らのマフラーを少年の首元に

丁寧に巻きつけ、言葉を出した。

——間違いはない。お前は、私の息子だよ。

それが、ボンゴレ9代目と、炎を宿した少年XANXUSの、最初の出会いだった。

「XANNXSU」

「同情すんな！カスが！」

ツナの言葉を、自らの声でかき消すXANNXSU。

「・・・俺には分かるぞお。おまえの裏切られた悔しさと恨みが、俺にはわかる・・・」

「カスザメが・・・てめーに分かるだと。知ったような口を・・・きくんじゃねえ・・・」

「いいや、わかる!!知っているぞお！」

「なら言ってみろ！俺の何を知ってる！ああ？」

XANNXSUの睨みつけるような視線と言葉に、スクアアロはしばし無言だったが、意を決したように口を開いた。

スクアアロの口から語られたのは、XANNXSUの出生。

イタリアの下町で生まれたこと。

生まれながらにして死ぬ気の炎を宿していたこと。

そしてXANXUSの母親は、そんな幼い自分の息子の宿す炎を見て、自分とボンゴレ9代目との間に生まれた子供だという妄想にとりつかれたこと。

全ては、貧困から生まれた不幸だった。

幼いXANXUSと出会った9代目は、何も知らぬXANXUSの炎を見て何を思っていたのか。彼はそのままXANXUSを穏やかな瞳で見つめ、自分の息子であるとXANXUSに優しく語りかけ、養子とした。その後のXANXUSは、9代目の息子とともに、威厳、実力ともに、文句なく10代目の次期ボス候補として立派に成長した。

だがある日、XANXUSは己の秘密を全て知ってしまった。

自分は、9代目となんの血の繋がりもないことを。

そして、ブラッド・オブ・ボンゴレボンゴレの血なくして、ボンゴレの後継者として認められない掟だということ。

XANXUSは9代目に裏切られたと思い、絶望した。

息子と言っておきながら、はじめから自分をボスにするつもりはなかったのだと。

激しく怒り、XANXUSの中にどす黒い感情が芽生えた。

スクアールがXANXUSに初めてあつたのもその頃で、一目見てかなわないと、その怒りについていくと決めた時だった。

そして半年後、XANXUSはボンゴレを己の力で手に入れるため、ヴァリアーで

クーデターを起こした。

そこからはリボン達も知つての通り、9代目に破れ、XANXUSは8年間の眠りについた。

それが、スクアアロがゆりかご事件のあとに調べた全て。わずかに残った意識の中で、XANXUSと9代目の戦いの際に聞いた会話の中で知った真実。

「9代目が、お前を殺さなかつたのは……最後までお前を受け入れようとしたからじゃないのか……?」

その言葉がつぶやかれたのは、ツナからだった。

すでに力を使い果たしたため炎は切れて、地面に膝を付きながら疲弊していたが、ポツリとつぶやいた。

ツナの言葉に全員が耳を傾け、XANXUSはツナを無言で睨みつけている。

「9代目は血も掬も関係なく、誰よりもお前は認めていたはずだよ。9代目はあんたのことを、本当の子供のように……」

「るせえ! 気色の悪い無償の愛など、クソの役にもたつか!! 俺が欲しいのは、ボスの座だけだ!」

血のつながりが必要なら、掬を壊せばいい。

今のボンゴレのボスを力で引きずり下ろせば、力によって自分こそが最強のボスとす

ることができる。それがXANXUSの考え、ゆりかごの目的。

新たなボンゴレを作り出し、最強のボンゴレを作ること。そのために必要なのは、力。全てをねじ伏せるほどの、圧倒的な力が必要だった。

「だが、XANXUSの野望もこれまでか」

光努の呟く言葉に、隣にいた槍時も同意する。

「ええ。この戦いは、綱吉君達の勝ちですね」

その言葉の正しさを証明するかのように、どこからかチエルベツロの二人が現れた。

「それでは、リング争奪戦の最終結果を発表します」

「判定の結果、XANXUS様の次期後継者候補の権利は剥奪されました」

当然といえば当然。9代目の息子でないということは、ボンゴレのボス候補として認められないのがボンゴレの掟。XANXUS側の存在ともいえるチエルベツロだが、それでも掟を破るような真似はしない。いや、むしろこの展開をまるでわかっていたかのような表情が、そのマスクをつけた無表情な顔からかすかに読み取れたような気がした。

「よって大空のリング戦の勝者は、沢田綱吉氏。ボンゴレの次期後継者となるのは、沢田綱吉氏とその守護者6名です」

その言葉に、XANXUSはすでに限界を超えていたためか、意識を手放した。

山本や獄寺、了平やクロームはツナの勝利の宣言に表情に笑みを浮かべた。

眠っているランボや、普段は無愛想な雲雀も、心なしか笑っているような気がした。

ツナも、了平の妹の京子にもらった手作りの必勝のお守りを取り出して握り、戦いが終わったことに嬉しそうに笑ったあと、その意識を手放した。

「10代目！」

「ツナ！」

獄寺や山本はツナに駆け寄り、状態を見てみるが、特に危険な状態でないことがわかってほっとした。かなりの傷があるが、致命傷はなく、全身疲労のせいで気絶したのだろう。

「皆さま、こちらをどうぞ！」

XANXUSの元にいたチエルベツロが一人ツナ達の元へ歩み寄り、その手にあるものを差し出してきた。

差し出したのは、XANXUSの持っていたハーフボンゴレリング。

ツナの持つボンゴレリングと合わせ、完全なる大空のボンゴレリングが完成した。

「ん？そういうえば他のリングはどうした？」

そう言つて獄寺は自分の持っている嵐のボンゴレリングを取り出す。

クロームは自分で持っていた霧のリングを取り出した。

が、他の守護者は取り出さない。というかリングを持っていない。

「あ、隼人。残り全部俺が持つてる」

といって光努がポケットから雨と晴れと雷と雲のリングを取り出した。

一体いつの間に入れられたのか。明らかに雲雀や山本が手に入れたあとにこっそりと奪ったと考えるのが妥当。もつと言えばスリ取ったともいう。

「正確には恭弥とすれ違つと時とか武抱えた時とかにこっそりと。晴れと雷は先に見つけた」

「いつのまに・・・」

「別におめえがリング集めても関係ねえだろ」

「なら聞くんが、この戦いで俺はどうしたら勝てる。ていうか俺に勝利条件よく考えたらなくね」

「・・・・・・・・・・」

確かに。と、この場のほとんどが思ったがあえて口に出さなかった。というよりかみんな一度は思ったけど自分が勝つかからいいかと思ってる。

「そして俺は考えたんだ。勝てないならどうしたらいいか。よし！全部のリングを集めよう」と

「いやおかしくね!?!」

「正直光努の存在は大空のリング戦ではまったくもって不必要ですしね」
「全部XANXUSのせいだし」

ちらりと光努がXANXUSの方を見てみると、ヴァリアー勢がどこからか持ってきた担架でこっそりとXANXUSを運んでいる様が見えた。運んでいるのはベルとスクアーロ。片腕で器用に運んでいる。

が、後後ボンゴレの者たちに連れて行かれるだろう。

9代目を重症に追い込み、モスカの中に入れたのだから当然。ただ9代目の性格上、死刑という罰はないはず。それだけ9代目も、義理とはいえ息子のXANXUSのことを認めていたのだから。

「さてと。あとは任せて、帰るか槍時」

「そうですね」

「ちよ、光努」

「リボンらにもよろしく言つといてな」

観覧席の赤外線解除に少々手間取っているため、ツナ達を残して光努たちは並中をあとにしたのであった。

「槍時、XANNXUSどうだった？」

「氷は溶かしましたので、問題ないでしょう」

XANNXUSの片手を凍らせた死ぬ気の零地点突破。

槍時が一旦別行動をとったのは、その氷を溶かす方法を知っていたと言っていたから。

「どうやって溶かすの？」

「死ぬ気の炎で溶ける。結構簡単ですよ」

死ぬ気の炎を凍らせるのに死ぬ気の炎で溶けるとか、矛盾してるな。

ま、先手に回ればいいことないってことなのか。

「大空のリング戦も無事に終了。あとは灯夜達か。そういえば槍時は来るのに遅かったけど何してたんだ？」

「街中にはプレギオーレとヴァリアアの兵隊が多くいますね。排除しましたよ」

「ヴァリアアもか。ふーん」

多方、戦いが終わったあとに部下を使って全員抹殺するつもりだったのか。暗殺部隊

のヴァリアー、というかXANNXUSらしいといえばXANNXUSらしいな。

「あとはランチアと途中で会って、並中に向かったのですよ」

その際にランチアと少し交戦してすぐに和解したのは余談である。

「灯夜の方は、今何してるかな」

墓造会によつて操られた、プレギーエーラファミリーの本拠地にいる灯夜。そしてそれをサポートしているであろうルイの二人。まだ、リング戦の後始末は残っていた。

ひとまず黒道邸に戻り、通信機器をつけてみたが、灯夜の方から連絡があつた様子はない。今まさに忙しいのか、もしくは、向こうの状況次第で、何かしらの対策が必要。あとは向こうからの通信を松の実だが、その通信は、割と速く来るのだった。

ドゴオ!

燃え盛る炎が陽炎を立ち昇らせる。

炎が大きな建物の中を巡り、壁や床を燃やし尽くす。

外側からでもわかる炎に燃やされた壁が、中からの爆発音に従って外側に吹き飛ばされた。

吹き飛ばされる壁の瓦礫とともに、人と思われる影が飛び出して燃えていない地面に着地した。

「勘弁してくれや。オレはそいつに用があつて来たんやけど」

着地した人影は、立ち上がって壊れた壁の方を見た。

赤みがかった髪色に、和服のような服を来た男。腰に巻かれた帯には、鞘に収められた小太刀が刺さっていた。笑っているような声を出しているが、その表情は分からない。笑しげに笑った狐のお面が、その男の顔を隠していたからだ。

「悪いな。この人に手出しするのは遠慮してもらおうか」

瓦礫を踏みつけ建物の中から人を抱えて男が出てきた。

黒髪に黒いスーツを着た男、黒道灯夜。肩に担がれているのは、あちこちに傷跡が見える少々年老いた男性だった。灯夜自身には、至って目立った傷が見られないが、着ているスーツの方は先ほどの火事の中を出てきたからか、ところどころ焦げ跡が見えるが、それでもほぼ無傷。

肩に担いだ男性を、火の届かない芝生の上に寝かせ、二人は向かい合って対峙した。

「その狐のお面、壊してやろうか」

「いきなりそれかい。物騒な奴やな」

くつくつくと喉を震わせ、愉快そうに笑う。

お面で表情は見えないが、やはり笑みを浮かべていることだろう。

「オレの用事は、その老体を始末することやったんやけど、面倒なやつがいてくれたな」

「そりゃ、残念だったな」

「本当なら時間通りスムーズに終わらせる予定やけど……もう時間やし、帰らしてもらうわ」

「この人はもういいのか？」

「本当なら始末したいところやけど、向こうも潮時やし。なにより時間切れや」

そう言つて懐から狐面の男が取り出したのは、黒い靄の入った丸い球。握り締め、破裂させると、黒い霧が男の周りを充滿し、その姿を包み隠した。

次第に濃くなり、ふと霧散した霧の中には、すでに誰もいなくなっていた。

周りの気配を探り、本当に誰もいなくなつたことを確認すると、灯夜は懐から携帯を取り出した操作した。

「まずは、ルイと連絡をとるか」

これで完全に、リング戦は終わったのだった。

『劇的に匠が作りました。』

ここはすでに廃墟となった黒曜ランド。

土砂崩れによつて、もともとあつた多くの植物園や動物園等、いくつも土のしたに埋まつてしまい、上の方に建つていた建物がボロボロとなつて残つていた場所。

が、その建物の少し前に崩壊してしまつたため、工業者が入り浸つて改築を行つていた。

「で、これが『新・黒曜ランド』だ」

「……………」

俺が指したもともとボウリング場がついていた最も大きい建物があつた場所を見て、隣にいたクローム、犬、千種の三人は呆然としていた。

なぜなら、目の前にあるのは、元々あつた建物と同じ。つまり、汚れ具合やひび割れ具合といったものもほぼ一緒。割れたガラスの再現度も高いなー、おい。

というかわざわざ同じように直さなくても。

と思つたけど、よくよくと窓枠に残つた割れたガラスを触つてみると固定されてる。しかも強化ガラスに変更されて先が鋭くなつてから、窓から侵入しようとしたら窓ガラスの破片に突き刺さつて危なつかしい。というか意図的にそうなるように計算して、割れた窓ガラス風に加工した強化ガラスを設置されている。

この建物を立てた人物、ルイに聞いたらイリスの建築業者と監督したのは知り合いと言つてたけど、予想よりもんでもないもの作つてそうだな。

ま、からくり屋敷みたいで 楽しそうだけどね。

「見た目は同じ、だが中はまったく別モンらしい」

ルイから説明書をもらつてきたら安心だな。というか説明書のある家つてのもどうかと思うのだが。

「えー、まずは正面から入つてみましょう、だつてさ」

正面に回つて見てみると、やはりボロボロ。だがよくよくと見ればボロボロの壁はそういうふう加工してあるだけで中身はとんでもなく硬い。何を使つてるんだか。鋼鉄製かよ。

「なんら。見た目全然変わつてねーじゃん」

「でもこれ、すごく丈夫だよ」

「見た目だけは廃墟らしいんだよ」

犬的には見た目そのままですまんさきそうだが、この説明書を見る限り、なかなか面白い反応が見れそうだ。

「クローム、千種。これ持ってる」

「これは？」

「・・・リング」

シンプルなシルバーのリング。リング全体を覆うような龍が彫つてあるのがポイント。

説明書きには、建物の中に入る前にはこのリングをつけましょうという注意事項がついていたからな。もしも入らなかつたら大変なことになるらしい。そんなわけで、

「犬、ちよつと正面から入ってみろよ」

「ひやつほう！一番乗りびよん」

犬も子供だなー、あはは。

ほら見てみろよ、正面から入った犬に向かって矢が放たれて地面が開き、中から燃えるような火柱（幻術ではなく本物）が立ち上って、かろうじて回避した犬が転がりながらこつちに戻ってきた。

「危うく丸焦げになるところだったびよん!!光努おお!!」

「だってつまんないって言ってたし」

「誰もこんな危険求めてねーびよん！」

「まあそう言うなって。この先はさらに超危険^{面白}」

「なんか字が変わらびよん！」

さっきのリングをつけてないものは不法侵入者として、入ろうとしたら罠が作動する仕組みらしい。

説明書を見る限り、今の犬が引つかかった罠はまだまだ序の口だそうだ。

一体どんな面し、いや恐ろしい罠があるんだろうかね。

「じゃ、犬もリング付け足し、中に入るか」

「中は結構前と同じ感じなんだね」

「ダメージ加工してそれっぽくしてあるけど全部新品だな」

ボーリング場や映画館だったところは割と造りはそのまんまで、備品とかは全部新品な物がついてる。無駄に金かかっているな、これ。わざわざ建物の外観に合わせて細工し

であるから無駄に金がかかって無駄に凝ってる。

「そして普通の部屋もあると」

他にも普通の部屋。具体的にはベッドと机と棚が設置してある簡易的、あとは好きに使って改造してもいいような部屋がいくつかある。しかも台所とか風呂シャワーも完備されているので生活する分にはまったくもって問題なく生活できる。なんてハイテクな廃墟だ。

「じゃ、ケーキでも食べよっか」

カラオケボックスのような部屋を一室借りて、机の上にケーキを置く。

白いクリームで覆って苺を載せたホールケーキ。シンプルだがシンプルだけにうまそう。

クロームと犬の目はケーキをみてキラキラ輝いてる。わかりやすい二人。

「今頃ツナ達は竹寿司でリング戦の打ち上げやってるだろうしな。どうせお前から参加と
かしないだろ」

「るせーびよん。あんな奴らと馴れ合わねーし。それよりケーキ食べていい?」

「犬……お預け」

「千種、それ何か違うよ」

そう言いながらサクサクケーキを切ってお皿に取り分けるクローム。

千種もさっさとジュースとコップを用意してるし、こいつら食う気満々だな。

恭弥も誘ったんだけど、来ればよかったのに。

ま、骸の拠点だった黒曜ランドなんて、恭弥にしたら死んでも自分からは来たくないだろうしね。まあ骸がいるよって言うなら喜んで殺意と一緒に飛んでくるかもしれないが。

「あ、そういえば」

そしてケーキを食べ終わって黒曜ランドを歩き、別のスペースへと歩いてきた。

「確かこの当たりに」

「?」

壁を触りながら歩いていることに疑問を持つクロームたち三人。

が、すぐにその疑問は驚きに変わる。

ガコン。

「で、このあと床が」

ゴゴゴゴゴゴゴ。

壁の一部が凹むと思ったら、床がスライドして地下への梯子が付いた穴が出現。なにこれ、からくり屋敷というより秘密基地。

三人ともなんかぼかーんとしてる。写メつとこ。

カシャ☆

「よし。お前ら行くぞ」

「……はっ！」

呆けた顔から帰ってきた三人は、地下に降りる俺に続いて地下へと降りる。

地上から地下10メートル程の空間。目の前にある鉄の扉を開けるとそこにあったのは、

「……モニタールーム？」

クロームの言ったとおり、いくつものモニターといくつものキーボード。後はよくわからない機械が大量に設置されている10畳くらいの部屋。

「ふむ。面白そうな部屋だな」

「わかるの？」

「マニュアルは読んだしな。ここから全てが動かせる」

全ての罫の作動はもちろんのこと、扉の開閉、ロック、機械の動作。

電気もテレビも、家電製品も簡単にすべてが操作できる。つまりここさえ入れば、この建物のすべてが乗っ取ることができる。

なんでこんな部屋作ったのかな。作ったやつは何考えてんだが。

まあここにいれば外も隠しカメラで全部わかるから対したものだよ。

この三人には使い方を教えておいたほうがいいが、犬は無理そう。千種も面倒くさいとか言いそうだから素直に聞くのはクロームだけか。

ならば、叩き込んでやろうじゃないか。最強の要塞の動かし方を！

「ただいまー」

「お帰り、光努」

黒道邸に帰って来て出迎えたのは、海棠槍時。

そういえば槍時はリング戦の最終日に来たけどその前は何してたんだろうか。日本中に行っているいろいろと仕事とかしてたらしい。数日でまわるとか、どうやって移動していたのやら。

今回は日本にいる期間が長いらしい。長いと言っても2週間も経ってない気がするけど。

「じゃ、早速出かけますよ」

唐突にそう言つて自分の持つていたバッグを背負う。結構大きめのバッグ、というかケースかな。何が入つてるのか。2メートル近いから大抵の物なら入りそうだが。幅は30センチくらいだけだ。

「出かける？随分と急だけどこに？」

「イタリア。灯夜さんから連絡がありましたよ」

「！……しゃあねえ。行くか」

向こうの様子はどうなつてるのか。

リング戦の後始末、プレギエーラファミリーがどうなつたのかも気になるし。

一体何があつたのやら。

というわけで、並中には少し休むと連絡して、イタリアに槍時と出発した。

『森の中の病室』

イタリア某所のとある病院。

病院というにはあまりにも人がいなさすぎな、妙な雰囲気を纏う場所。

草木で覆われた、森の中央に立つその病院。周りの草木が建物に絡まり、森の風景に溶け込んでいる。

そんな病院の一室には、周りと違って人の出入りがあった。

そしてその一室に向かう人影が二つ。

一人は、まだ中学性位の少年。

柔らかかそうな白い髪の毛に、口元にはかすかに楽しそうに笑みを浮かべ病院の通路を歩いている。

隣を歩いているのは、男性。縦2メートル程のバッグを背負った、青黒い髪に端正な顔立ちの青年。

二人は通路を横切り、一つの扉の前に立ち、特に躊躇なく少年はその扉を開いた。

最初に目に飛び込んで来た光景は、黒。

黒髪に黒いスーツを来た男性。そしてその前に置かれた白いベッドの上に寝ているのは、初老の男性。顔に刻まれた深いしわと、白髪の髪の毛にあごひげ。中々に年老いた男性が、その目をつぶりベッドの上に横たわっていた。

頭に巻かれた包帯や、腕や体から伸びる管が部屋の中にある機器に設置され、絶えず音を出しているのを見ると、至って健康とは言えなさそうな状態。

「よく来たな。光努、槍時」

黒髪黒スーツの男性、灯夜が部屋に入ってきた二人を見て口を開く。

「久しぶりですね灯夜さん。それでこの人は確か……」

ちらりとベッドに横たわる男性を見て、槍時はその顔を少ししかめた。

「ああ、この人がプレギエーラファミリーのボス、ヴァスコ・プレギエーラだ」

ベッドに横たわっていた初老の男性は、祈りの紋章を掲げたマフィア、プレギエーラファミリーのボスだった。

病室に備え付けられていたポットからお湯と茶葉を急須にいれ、緑茶の入った湯呑を机の上に人数分おいた灯夜は、ひとまず座るように二人に言った。

その言葉に従って、光努と槍時は机に座って、ひとまず一息ついた。

「この人が墓造会に操られたっていうマフィアのボスか。灯夜はこの人探してたの？」
「ああ。プレギエーラが行うには不自然な点が多すぎるからな。アジトに潜入したんだが」

プレギエーラのアジトに潜入した灯夜を待っていたのは、多くの敵の数。

日本での大空のリング戦のように、仮面をつけた黒服の格好ではなかったが、プレギエーラの構成員が操られ、敵となっていたらしい。

あまり戦闘が得意というわけでもないものの中には多く、顔見知りもいたが、こちらにはまるで気づかないかのように攻撃してきたらしい。

「話も通じず、ですか。敵が全員を操っていたのでしょうか」

「かもしれない。お前らのところのように手練、ファミリーの間人以外の奴はいなかったな。いや、一人だけいたか」

最後に見た、狐面の男を思い浮かべ、灯夜は無言になった。

「それで、このヴァスコさんって大丈夫なのか？あと他のプレギエーラの構成員って」
「まあ敵になったといっても、元々戦えるような奴らじゃないからな。気絶させるのは
そう難しくはなかった。厄介なのは周りだったな」

「周り？」

「ああ。行つた時は建物が炎に包まれていたからな」

「一体何があつた!?それって大惨事じゃん」

燃え盛る建物。

意図的に付けられたとしたら、一体誰が？

目的は？考えられるのは、操られて建物中に密集していたプレギエーラの一斉始末。

「けど、それってプレギエーラに恨みを持った奴らの仕業ってこと？」

「それは考えにくいですね。そもそもマフィアに恨まれる程の活動してないですし」

「プレギエーラって本当にマフィア？」

「そもそもマフィアとは違う」

プレギエーラの現当主、ヴァスコの趣味は、考古学。

不思議で謎な遺跡の発掘や、調査を主に趣味として、それ関係の仕事をしている。

その縁で集まった者達が構成員となり、出来上がったのがプレギエーラファミリー。

いや、それマフィアじゃないじゃん。と思つた光努だが、あえて口には、

「いや、それマフィアじゃないじゃん！」

口に出した。モロに突っ込んだ。

それってただの考古財団か何かじゃない！

「ヴァスコさん曰く、ボンゴレ9代目と旧友なのだが、ふとしたことがきっかけでマフィアと認知されたらしい」

「ふとしたことって……」

「それで他のファミリィから何かあるのを防ぐため、ボンゴレと同盟を組んで平和に遺跡発掘に精を出していたというわけですよ」

「……へえ」

マフィアらしいが中身はマフィアではなかった。

ということとはやはり恨まれることはなさそう。

「てことは、誰がアジトに火をつけたんだ？構成員？」

「いや、おそらく墓造会のやつだ」

「！」

灯夜の言葉に、槍時と光努は目を少し鋭くする。

もしもその話が事実なら、並中に来ていた3人意外にも、別のメンバーがいたということ。

今まで3人しか判明していない奴らのメンバーが、また一人明らかになったということ。

「実行したのは奴。俺が会った、狐面の男だ」

赤みがかった髪に、和服のような服を着た男。巻かれた帯に刺さった小太刀と、その顔につけられた笑ったような狐の面。

明らかに怪しい男。そして、このタイミングでプレギエーラを狙う物は、操つていて後始末をしようとしていた墓造会以外に存在しない。

「また狙うってことはないのか？」

「ありえなくない。やつは時間切れと言っていたからな。時間ができたら来るかもしれないな」

「だとしたら、その前にいろいろ聞いとくことがあるんじゃないの。この寝てる人に」

そう言つて光努はベッドで眠るヴァスコを見る。

だが灯夜はベットをちらりとみてため息をつく。

「そうしたいところだが、ヴァスコさんが目を覚まさないんじゃないよ」

「やはり。ここにいたから想像はしてましたが。他の構成員の方々は？」

「何も覚えていない。みんな同じ反応だったな」

「何も覚えていない・・・か」

大空のリング戦で言っていたウィーラの話が本当だとすると、このファミリーは、正体不明の奴らの正体を探る糸口を掴んだ、いや、このファミリーの性質を考えると、掴んだというより掴んでしまったと言った方が正しいのかもしれない。その情報を知ったばかりに、争いに巻き込まれるとも知らずに。

「目を覚ませば、何かわかるかもしれないんですけど。いつまでこの状態ですか?」「わからないな。正直問題はなさそうなんだが、どうしても目が覚めない」

一種の植物人間状態。

その為、情報はここで打ち止めとなってしまうた。

「結局、また振り出し。正体不明の敵ってことか」

「ま、得体の知れないってのはわかったがな」

「それは何もわかってないってことですよね」

灯夜のやれやれと言う言葉に槍時が軽く突っ込む。

湯呑の中のお茶もなくなり、全員一息ついた。

「そういえば灯夜と槍時に聞きたいことがあった」

「どうした?」

「神器^{ジンギ}って、何か知ってるよな」

「棟梁」が持っていたそうだな。まあそのうち教えるつもりだったしな」

「簡単に言ってしまうえば、オーパーツのようなものでしょうか」

「オーパーツとは、Out of place artifactsを略して『OPARTS』。意味は、「場違いな工芸品」。その時代にありながら、その時代の技術力では到底作ることでできない物のことである。」

「神が作り、地上に落としたりとも言われる物の数々。多くは武器の形で現代に残っていますが、実際に存在する神器とも呼べる物は、わずか3つほどですよ」

「この広い世界には、まだまだ多くの謎が存在する。人の手が作ることでできない謎の物質。ボンゴレの死ぬ気の炎も、人智を超えた力を持つていたが、イリスの秘匿する神器と呼ばれる物も、人智を超えていた。それが得体の知れない何かということは、並中で『棟梁』のウィーラが見せた物からも推測できる。」

「ふーん。この世界はなかなか面白いな」

「本当に楽しそうに、子供のように無邪気に笑っている光努を見て、槍時もふつと笑い、上着の内ポケットから何かを取り出して光努に放り投げた。」

「おっとーこれは、手帳？」

「その手で受け取ったのは、少し古ぼけた小さい手帳だった。」

「前にここに神器があると考え、その地図をいくつか隠したんですが、よかつたら見つけてみては？面白いと思いますよ」

「へえ、じゃあここに神器があるかもしれないってことか。いいの？」

「見つけたら教えてくださいね。僕も神器にはまだまだ興味がつきませんから」

槍時の言葉にオツケの合図をして、槍時の手帳を自分の懐にします。その様子に灯夜は少し嘆息したが、光努の楽しそうな顔を見て、穏やかに笑みを浮かべた。

それと同時に、病室の扉が開いて廊下から人が入ってきた。

長めの金髪を首元で結び、白衣を羽織った青年。

疲れたようにてくてくと歩きながら机によって、倒れこむように空いた椅子の上の座った。

「あー、疲れた。ここまで来るのに疲れた」

「どこに行ってたかと思ったら。何してたの、ルイ」

「よう、光努に槍時も早かったな。俺は久しぶりに動いたから疲れた」

机にぐだつとしながら、灯夜の入れたお茶を飲んで一息つくルイ。

灯夜と共にイタリアに渡っていたルイは、灯夜のサポートをしていた。

基本的にすぐに疲れやすいルイは、表立って誰かと戦ったりといったことはしない。

基本は裏方作業を行う。その為、今回の灯夜のサポートは、電子関連のことを処理していた。

セキュリティや罠の解除、屋敷の見取り図の用意、監視カメラのハッキング。ノート

パソコン一台あれば建物を乗っ取れるほどに、機械工学に関してだったらルイの技術力は光努を上回っている。

事実、プレギーエーラのアジトにいた構成員意外にも、本来なら備え付けられていたセキユリティシステムは、全てルイによって無効化され、灯夜はスムーズに屋敷の中に入る事が可能だった。

「それでルイ。この人大丈夫なのか？」

「ヴァスコさん？俺は医療系は専門外だから別の人に任せてる。ていうかここの院長」
「院長？この病院って人がいたのか？」

「まあ院長と言っても本職違うし、この病院も別荘みたいな病院だから普段は使ってないけど、頼んだら来てくれた。今はいないけど」

「まあ確かに森に飲み込まれてる病院だしな」

特に表記してなかったが、光努と槍時がこの病院に来るまでに横切った森の中、割と多くの猛猛な獣が存在した。

もちろん全員肉食獣。病院に来るものは怪我をしたもの。だが怪我をした体で獣のうろつく森を横切らなくてはならないと言う矛盾の道筋。

人が来ないというのも当然。逆に人が来ない場所というなら良い選択をしているともいえる。

まあそれでも光努や槍時達なら野生の動物ごとき恐るほどでもない。逆に動物が避けるほどである。

「しかし、これじゃ収穫が少ないな」

残念そうに言う光努。何かわかれば対策もできるが、結局はほとんどわからないままだったのだから、当然といえは当然である。

「そうでもない。まだ調べる手が無いわけではないからな」

「そうなのか？」

「ああ。しばらくは槍時と俺で調べるから、二人はイリスの屋敷に戻つてろ」

イリスの屋敷は、イリスファミリーの総本部とも言えるべき建物。敷地内には数多く建物が存在し、ルイが主任を努める技術舎もそこに存在する。

「あそこも久しぶりだな。ちよくちよく行つてたけど」

並中に通う関係上、日本の黒道邸を一応の拠点としているが、それでもイリスファミリーボスとしての仕事は少なくなく、定期的に日本国外に出ることがある。それで時々イリスのアジトに帰ってくるのが時たまにある。その度に、敷地内の建物にいる人と楽しく親交を深めているのであった。

「そうだ。光努、屋敷に戻つたら、少し俺に付き合わないか？」

「？ルイから何か言うなんて珍しいね。何するつもり？」

そう言うと、ルイは楽しそうににやっとした笑みを浮かべた。

普段見慣れた疲れた表情のルイにしてはかなり珍しい表情。

一体何事かと思ったが、次のルイの言葉で少し驚いた。

「光努、一緒にタイムマシン作ろうぜ」

『よし!これは十年弾だ!』

イリスファミリーの屋敷。

広大な敷地内には、一番大きな建物の母屋。周りには倉庫や技術者、他にも数多くの施設や森や川などが存在する中々に広々として快適な場所。

敷地内で森林浴やピクニックができるくらいにすごい場所である。

母屋と技術者などの人が働くところには、備え付けで寝泊り可能な部屋も用意されているため、そこで働く者は同時に住むことも可能となっている。

他にはヘリポートや球技場、公園や図書館と言った施設の多くも存在する。

一般のマフィアと違い、企業でもあるイリスファミリーは、様々なことに幅広く手を広げているため、それに対応するべく多くの施設を取り扱っているのである。

一応マフィアの本部とも呼べるし、世界中にある傘下の企業の上に立つ本社とも呼べる場所。

そこが、イリスファミリーの屋敷。

母屋となっている屋敷の中は、主に仕事をしていた灯夜や、一緒にいたリルやコル達がいざばらくの日本旅行をしているため、他の建物に比べて少しがらんとしている。それでもしっかりと掃除が施され、いつでも使用可能状態を維持しているのは中々に、イリスお抱えの使用人達は優秀である。

そしてそのがらんだようになってきた母屋に歩いてくる人影が見えた。

「よっしー着いたぞー、ルイ」

「おう、ご苦労」

リヤカーに乗ったルイを引きながら母屋まで来たのは光努。

敷地内に入るときにいる守衛さんが、リヤカーの光景に若干苦い顔を．．．特にしないでもいつもどおりだねと笑っていたは大抵ルイはこんな感じと認知されているからである。逆に普通に歩いて来たら驚かれる。

ちなみに、イリス敷地内には、その施設を管理する人など存在する。敷地内から入るときは基本的に門の横についている守衛室にいる守衛さんに声をかけるのが常識。まあ最初の光努の場合は問答無用で上から降ってきたのだが。

「それで、どこ行けばいいんだ？」

リヤカーから降りたルイと一緒に母屋に入って歩く。

一階ホールに入ったが、誇りっぽさなど微塵も感じさせない手入れが行き届いてい

る。

「ひとまずオレの私室に行くか」

昔光努の発案で長距離移動手段装置を作っていた場所である。最も、移動手段に長距離大砲を用いた装置はボツとなつて破棄されたのだが。

2階が上がつてルイの私室に入り、そこからさらに中にある壁際の扉を開く。

「けどタイムマシンなんてどうやって作るんだ?」

「安心しろ、そこはツテがある」

ルイの私室は廊下から入つた部屋の中には机とベッド、クローゼットにソファ。広々として中々に快適な空間が広がっている。そして入つた扉と別の扉が壁際に設置されており、その奥には大量の機械とパーツ、モニター等、後はいろいろな物が

置いてあるまさに技術主任という感じの部屋である。

その第二部屋の中でガサガサと何かを探しているルイ。光努はその間、第一部屋のソファに座り、ケーキを食べながら紅茶を飲むという優雅なティータイムを過ごしている。

(それにしてもルイよく動くな。趣味(?)の範囲だと普通以上に動くから不思議だよなあ)

普段はすぐに疲れてぐったりとしているルイだが、こと自分の分野になるとありえな

いほど動く。徹夜もするし走るし重いものだって持てる。18歳という年齢なら割と普通だがルイ的にはかなり珍しい光景である。

「お、光努！ あったぞ」

「（むしやむしやむしや）クリームうま」

「ケーキは置いといて、ほら」

コトリ。

ルイがおいたのは、銀色の鉄の箱。少し大きめの長方形の箱の形。鍵が掛かって丈夫な箱に入ってる為、割と嚴重に管理されていたらしい。その割には探すのに時間がかかったような気がしたが、そこは光努はあえて突っ込まないでいておいた。

というか全部が鉄のため結構重量がある気がするが、よくルイ持ってきたなとも思ったが、こちらも突っ込まないでおいた。

「それで鍵は？」

「これ」

そう言つて懐から出した鍵の束を取り出して、そのうちの一つを一発で取り出した。全部似たような形の鍵ののによく簡単に見つけるなー、と光努は思ったが、自分もできるからそうでもないかと思う。

「それで、こん中って結局何が入ってるの？ こんな頑丈な箱に入れてるなんてさ」

「どれ、開けてみるか」

カチリ。

鍵を外して中を開くと、中に入っていたのはミサイル。正確にミサイルのような形の弾丸らしきもの。だが大きき的にはバズーカのような物の弾かもしれない。つまりは小型ミサイルということ。

箱の中で丁寧な布にくるまれていたソレは、光努から見てもなんの変哲もない弾にしか見えなかった。

「核爆弾?」

「そんな物騒な物のわけないだろ」

「といってももはや爆発物危険物にしか見えないうんだから」

「まあ爆発物だし危険物だからな」

「それは言ってよかったのか?」

本当に爆発物だった。

「これは10年バズーカの弾だよ」

「10年バズーカの?」

10年バズーカ。そのバズーカで撃たれたもの、正確にはバズーカの弾に当たったものを10年後の世界に飛ばす謎のアイテム。代わりに10年後の人物をこちらに連れ

て来るといふ。つまり、当たった人物は10年後の自分と入れ替わる。

効力は5分間だが、それでも想像上のような夢アイテム。

どういう原理でどういうふうにも召喚するのか一切不明の、やはり謎アイテム。

かなり小さなマフィア、ボヴィーノファミリーに代々存在するというアイテムで、ボングレの死ぬ気の炎のように、基本的に門外不出の品である。

が、このアイテムはツナ達は頻繁に見かける。

ボヴィーノファミリーの少年ヒットマンであるランボ（5歳）は事あるごとに、10年バズーカを使ってはいけないというボスのいいつけを忘れて乱射しまくり、10年後の自分を召喚したり10年後のイーピンを召喚したり、一般人にはなぜか公にならないでいるがマフィア関係者には丸分りに公である。

「でもなんで持ってたんだ？」

「うん。ちよつとボヴィーノにツテがあつてね、一つだけこつそりともらつてきた」

「こつそりど？」

「ああ、こつそりと」

「………いいのかそれ？」

「まあ門外不出とか言つても結構一般人の目に止まつてるからいいんじゃないのか？」

「いいのかそれって」

まあよそはよそつてことではあえて多くは語らないが。

「それでこれ調べてタイムマシンを作ろうと」

「そういうこと。というわけで俺は技術舎から少し機材運んでくるから少し待つてろ」

「一人で大丈夫か?」

ルイ一人だと母屋から技術舎まで到達できないのに。

という言葉葉を光努は出す前に飲み込んだ。

「技術舎の連中に手伝ってもらうから平気だ。あと迎えに来てもらうし」

「……」

「ま、光努はボスらしくそこで待つてろ」

「へーい」

そう言つて部屋から出るルイを見送つて、自分はいつの間にか冷めた紅茶を少し見つけたあとに一気に飲み干した。ケーキはすでに空っぽ。

新しい紅茶をカップに入れて少し飲み、再び机の上に置く。

机の上にある鉄の箱に入った十年弾（光努命名）を手にとつて眺めてみる。

「特に変わったことはないよなあ」

この小さな弾に当たると10年後の自分と交換するということのも中々に考えにくい。もしも10年後の自分がいなかったとしたら交換はできないが自分が10年後に行く

だけになりそうだな。

指の先に乗せてくるくと弄びながら、10年バズーカの考察をする光努。

タイムトラベル、と言つてしまえばいいが、理論的に10年後の行くというのは現代の技術ではどう考えても不可能。

だが、世の中には偶然の産物と呼ばれるものも多く存在する。

実験をしていたらたまたま出来てしまった。ありえない組み合わせをしたらとんでもないものができた。そう言つた偶然が重なり合い、億兆分の1の確率で出来たのかもしれない。

「とまあ、いろいろと考えても、今の理論で組み立てるのは難しいよな」

あくまでいまの、だが。

「ま、そういうことでも、何年かしたらあつさりと理論的に説明できる時が来るのかもしれないな」

ポンポンと弾を弄び、楽しそうに笑う。

まだ見ぬことに、知らないことに、わからないことに。

だが知つていけばいい。考えればいい。

まだまだ時間はあるのだから。

「おっし」

少し思考が逸れたためか、つい手に持った弾を床に落としてしまった。

そう、この光努にしては珍しいわずかな失敗。

それがこのあとの戦いへの扉を開ける鍵だとは、さすがの光努も知る由もなかった。

「光努、待たせたな．．．つて、光努?」

ガラガラと台車に乗せた機械を部屋に運んできたルイは、部屋の中に入っておかしなことに気づいた。

光努がいない。いるはずなのに、いない。

ケーキの皿は空っぽ。だが、カップに入った紅茶はまだ湯気が立っているため、入れてからそう時間が立っていない。ケーキを取りに行ったのかと思つたが、ケーキならこの部屋備えの冷蔵庫の中に入ってるから、わざわざ出るとは考えにくい。

「一体、どこいったんだ」

ぷつりと消えた光努を探しに、台車は部屋に置いておいて部屋を出た。

少し予想外のことだったが起こつたため、ルイは気づくことができなかつた。

机の下に落ちている鉄の箱を。そして光努と一緒に、その中に本来入っているべきはずのものが、影も形もなくなっていたことを。

『キャラクター紹介』

キャラクター紹介（イリスファミリー）

名前：白神光努（しらがみ こうど）

年齢：不明（見た目14くらい）

職業：イリスファミリー2代目、並盛中学2年

身長：168cm

体重：58kg

趣味：散歩

最近のマイブーム：教わること

ハクリと共に別世界から来た少年。

白い髪の毛と、楽しそうによく笑っているのが特徴で性格は基本的に楽観的。

楽しそうなおことがあったら遊び感覚で周りによく突っ込む。別のところから来たからか、少しこちらの常識が欠けている時がある。

何かあれば力技で解決しようとする節もあるが、頭はいい。

身体能力は遙か高く、腕力脚力、ほぼ全ステータスが怪物級。

銃弾を避ける、真剣白刃取り、コンクリを拳で砕くなどは朝飯前にこなす。

並中に在籍しているが、イリスの仕事もあるため時たまに海外に出る。

それ以外は灯夜がノートP C I台で仕事をできるようにまとめているのであまり出かける必要はなくなっている。

名前：ハクリ

年齢：不明

職業：アルコバレーノ(?)

身長：40cm

体重：3.5kg

趣味：旅行

最近のマイブーム：建築

光努とともに異世界から来た人物。

銀色の長めの髪の毛の人物で、元の姿もあるが現在は白いおしゃぶりをつけて赤ん坊の姿でいる。昔この世界に来たことがあるらしく復習者ウインディチエや他に知り合いがいるらしい。こちらに来てからは復習者ウインディチエのところに泊まっていたらしいが黒曜編以降は国道邸の屋根裏を自室にしているらしい。ハクリ曰く、今の状態で白いおしゃぶりをはずしたら大変なことになるらしいが、実際は不明。こつちに来てからは和服が気に入っている。

名前：黒道灯夜（こくどう　とうや）

年齢：29歳

職業：イリスフアミリーボス代行

身長：190cm

体重：88kg

趣味：鍛錬、釣り

最近のマイブーム：

光努が現れるまでイリスファミリーをしきっていたボス代行。

黒髪に黒スーツが基本スタイルの見た目はできる男という感じ。

20代という若さでイリスをまとめていただけ合って実力は高い。

基本的に光努たちと自分の家を拠点にしているが灯夜自身は仕事であちこちに出かけることが多くある。重要な案件があると並中を休ませて光努をあちこちに連れ出す。

一家の大黒柱で妻、朝菜（27歳）と息子、夕輝（5歳）の3人家族構成。

名前：ルイ

年齢：18歳

職業：イリスファミリー技術主任

身長：177cm

体重：60kg

趣味：ゲーム作り

最近のマイブーム：タイムマシン作り

面倒事を嫌い、よく倒れよく寝るイリスの技術主任。

背中まである金色の髪を後ろで結った髪型に白衣を常備している。

飛び級で数年前に大学を卒業しているため、いま時点で学校には通っていない。

日本の温泉目当てでわざわざ光努達と一緒に日本まで来た。

光努が学校に行っているあいだは基本的に家でゴロゴロしているが仕事はちゃんとしている。技術主任をしているだけあつて機械工学等の技術力は高く、ノートPC一台あればビルの機械系統を掌握すると豪語するほどにハッキング能力も高い。

名前：リル（姉）／コル（弟）

年齢：8歳

職業：イリスファミリー所属

身長：120cm

体重：18kg

趣味：稽古

最近のマイブーム：占い／落とし穴作り

イリスファミリーに所属している子供。

肩まである黒い髪の毛の同じ容姿をした双子の少年少女。

性格はリルの方が明るく活発的で方向音痴、コルの方は少し大人びて冷静な感じ。

小学校に通っていないが勉強は色んな人に教えてもらっているらしい。周りの大人や年上がほとんど頭がすぐくいやつらだから二人も結構頭はいい。日本では小学校に通っていないいつも遊んでいる。最近は仲良くなつたフウ太と一緒によく遊んだりしている。

父から剣を習っており、今の体の大きさにあっているということ二人とも小太刀を常時携帯している。

名前：海棠槍時（かいどう そうじ）

年齢：26歳

職業：イリスフアミリー『アヤメ』所属

身長：182cm

体重：75kg

趣味：ダーツ

最近のマイブーム：ヘリコプターの操縦

イリスフアミリーに所属の男。

青黒い髪をした端正な顔立ち。

イリスに唯一ある戦闘部隊『アヤメ』に所属する槍使い。

メインウェポン主武器は槍で、高い硬度の黒い槍『黒星』くろぼしをよく使用する。一人でマフィア一つを潰せ

るほどに戦闘能力は人間離れしている。

口調が基本丁寧語で性格はツナにいい人といわれる程にマフィアの中では常識人。

いろいろと忙しいため、世界中を飛んでいる。最近は比較的日本に多く足を運んでい

る。

未来編Ⅰ 『10年後』

『知っているけど知らない場所』

目の前が真っ白になった。いや、真っ黒？

よくわからないが、暗闇に全身を包まれたような気がした。

それに妙な浮遊感。深海の奥へ奥へと沈んでいくような感覚。

そしてだんだんと意識が沈んでいく様な、そんな気がする。

昔、どこか似た感覚に襲われたことがある気がする。

そうだ、確か……。

別の世界へと行く時のような、そんな感覚だった。

目を覚ますと知らない天井というフレーズをよく聞くが、そんなことなど普通あるかないか、そもそも起きた時点で天井を見つめてる人は割と少ない気がするのは自分だけだろうか。

知らない天井と起きた瞬間に認識できるのは、きつとその人物が起きた時から頭がと目が冴え渡っている高血圧の人間なのだ。

と、ここまで前置きをしておいたが、今日の前に見えているのは、もちろん知っている天井。

というか、ルイの私室の中みたいだ。

ソファの上に寝転がっていた体を起こし、周りを見渡してみる。

確かに天井も壁も机もソファもルイの私室であることに間違いはない。

が、どうにも少し埃っぽい気がする。

他にもおかしい点といえば、机の上にあった皿とカップ、紅茶も存在しないし、鉄の箱もなくなっている。そしてさらに変な点もある。ルイの私物の機械が置いてある第二部屋を見てみたが、そこには機械のきの時もなく、何も無い空間が広がっているだけだった。

「なんだ、この古びた感じは同じ部屋なのにまるで……」

何年も人が使っていないかのような。

「ま、探索すればわかるか」

ひとまず光努は部屋を出て、廊下を歩く。

特に廊下も変わったところはなさそうだし、外から見た景色も特に変わった……と

ころ……は……。

「おいおい、何だこれ？」

通常、廊下から見える景色は、正面広場と技術舎、倉庫と他にも森や公園など多くの建物が広がり、門まで見えるはずだが、今の景色は。

「全部壊れてやがる」

崩壊して瓦礫と化した技術舎。森も燃えた跡が目立ち、地面には爆発の痕がいくつも目立つ。ふと見渡しても、あちこちに破壊痕、戦いの跡が残っているのがわかる。一体何があったんだ？

よくよくと見れば、この母屋の半分位も崩壊している。ルイの部屋のあった場所と数カ所はなんとか無事だった場所だったみたいだ。

「どう見ても10年後だよなあ、……」

俺の落とした10年バズーカの弾、十年弾（光努命名）の暴発によって、多分10年

後に飛ばされた。最初に目を覚ましたときはそうだと思っただが、だんだんと自信がなくなってきたな。本当に10年バズーカだったのなら、その効力は5分だけのはず。もかかわらず、俺が目を覚ましてからすでに5分以上の時間が立っている。

考えられるのは、

① 十年弾の故障

② じつは10年バズーカの弾じゃなかった

③ ハクリが暗躍してた

④ 自分の知らない何か

そうだな・・・③は自分でふと思いついたが多分ないな。あいつは基本的に傍観しているやつだし。

②というのも多分ない。ルイが持ってきたものなら本当に10年バズーカの弾だったんだろうな。面倒くさがりだが、自分からやることに妥協はない。楽しそうに、問答無用で用意するからな。

①というのも、今の俺にはわからないな。故障してどうなるか、そもそも詳しいことすらあんまり知らないしな。だがありえなくはない。

④に至っては考えてみたがまったくわからないな。

「やっぱり現時点で必要なのは、情報か」

知っている場所、来たことも見たこともある場所でも、まったく知らない場所。ならば、この10年後の世界を知らないとな。

そう、最初にこの世界に来た時のように、情報を集めただけだ。

窓の外から見える景色に、白い点が見えた。

総勢は10名程。全員同じような服装しているな。

肩にシオルダーアーマーを備えた真っ白な上着。肩に何かの紋章のようなのが見えるが、どこの紋章かは見たことない。それ以前に興味があるのは、奴らの足元。

奴らは全員、空を飛んでこちらに向かってきている。足元から、赤い炎や黄色い炎を噴射しながら飛んでいる。ツナが手から死ぬ気の炎を噴射して飛行するかのごとく、おそらくあれは、死ぬ気の炎。ボンゴレかと思っただが、どうやら違うみたいだ。

「なんにしても、ここにいる時点で敵だな」

この破壊されたイリスファミリーの本部。そこに入り込むものは、敵。情報を得るためには、多少の犠牲もやむ得ないな。

光努は廊下の窓を開き、窓枠に脚をかけて力をこめ、外へと跳んだ。

ミルファイオーレファミリー、第13バルサミーナ隊。

隊長である男、バッテリースタは、部下を引き連れて上空を飛んでいた。

ミルファイオーレファミリーの開発し所有しているF^{フレーム}シユーズは、ツナのグローブと同じ原理で持ち主の死ぬ気の炎を足元のシユーズから放出し、空中を飛行が可能な靴である。

隊長1名と部下9名の計10名。B^{ランク}級の隊長であるバッテリースタは、特筆すべき性格はあまりないが、仕事は真面目な方だった。今回きた彼らがやってきた場所は、イリスファミリー跡地。

一度滅ぼしたその場所にわざわざ一部隊が来たのには、もちろん理由があった。

常に敵を探そうとするミルファイオーレの優秀な通信部のモニターに情報が、巨大なリング反応が突如出たらしい。

通常ならありえないくらいの反応。その時近くにいて、ちようど動ける部隊が第13部隊だけだったため、急な出撃となった。

しばらくの移動を経てたどり着いたのは、もはや抜け殻となつてミルファイオーレにとつてはなんの価値も見いだせないような壊れた土地。

眼前に迫った破壊痕のイリスファアミリー。

特に変わった様子があるわけでもなく、相変わらず錆びれている。本当にこんなところに巨大なリング反応があったのかと思うバツテイスタと部下達だったが、ひとまず地上に降りようとした時に気づいた。

固まって空を飛行していた10名の間、11人目の人影がいつの間にかいた。

その影は、まだ少年だった。

柔らかそうな白い髪を風に揺らしながら、楽しそうに笑みを浮かべた表情と裏腹に、その瞳は鋭く敵を見つめている。さっきまで何もいなかった場所に突如表れた少年は、その口を開いた。

「なあ、あんたらの事教えてくれよ」

「はい、はい」

すぐに行動に移った部下達。否、移ろうとしたその刹那、光努の右手が一瞬で一人の

首元に伸びて触れたと思ったら、がくりと首が傾き、意識を手放した。

「なっ……このやろうっ！」

どこからか取り出したのか、槍を構え、後ろから光努を突き刺そうとした。

だが光努は、伸ばした右手と逆の左手を背中にまわし、槍の先端を掴み取った。万力のような光努の力で握られた槍を、彼はわずかたりとも動かすことができなかった。

そのまま体を回転させて、槍の上に脚を乗せて立ち、そのまま槍を伸ばしたままの男の顎を加減しながら蹴りつけ、その意識を刈り取った。

この間わずか3秒。

そのまま光努は自分で気絶させた二人を掴み、そのまま重力に従って地面へと落ちていった。

呆気にとられたバツティスタと残りの部下7名だったが、すぐに自分たちに襲いかかった襲撃者を再確認し、足元の炎を噴射して落下していく光努を追いかけた。

彼らが追いつくより速く、地面へと着地した光努。

高さは20メートル程の高さを飛んでいたのだが、そんなことなど関係ないように光努は難なく地面を砕きながら着地し、気絶させた二人を地面に寝転がらせた。

そして地面の上に立つ光努の眼前に、空中からどんどんと人影が降りてきた。

「おーい、いっつちいっつち」

手を振って笑う光努に対して若干肩透かしをくらったが、それでも全員地面に降り立ち、バツテイスタは隊長として一步前に出て、光努に対して口を開いた。

「少年、お前は何者だ。それと、部下を返してもらおうか」

「俺は光努。そういうあんたらは何者だ？マファイアか」

「我々はミルファイオーレファミリー、第13バルサミーナ隊。俺は隊長のバツテイスただ」

「第13部隊。結構でかいな。ミルファイオーレもやつぱり聞いたことないな」

光努の言葉に、バルサミーナ隊のメンバーたちは呆れている。この時代において、ミルファイオーレの名前を聞いたことのない人間がいるとは思わなかった。だが一般人ならマファイアに関してわからなくてもしょうがないかもしれない。ということはこいつは一般じかという疑問も頭に浮かんだが、どう見てもさっきの行動は一般人の範疇を軽く超えている。

つまり、

「隊長、さっさとリング回収して帰りましょうや」

ボウ！

「！・・・へえ」

部下の一人が拳を握り、少し力を込めるような感じがしたと思ったら、その指にはめ

られていた黄色い宝石の付いたシンプルなリングから、黄色い鮮やかな炎が生み出された。

ただの炎ではなく、キラキラと光とともに燃える黄色い炎を見て、光努は心底面白そうにしていた。

そのまま槍を構えると、槍の先端が黄色い炎に包まれた。

昔見た、超^{ハバ}死ぬ気モードのバジルが、己の武器に死ぬ気の炎を灯した時のように。だがこちらは、死ぬ気モードにもならず炎を産み出し、武器に灯した。どうやらあのリングの力によるところのようだ。

「その炎、死ぬ気の炎か。どういう原理でリングから出てんだ？」

「リングも知らんとは呆れたやつだ。さっさと貴様を始末して回収させてもらおう」
他の者たちも同様に、それぞれの武器に様々な炎を灯しながら構える。

バッテリースタは部下達の好戦的なことに少し嘆息していたが、元々そういう任務。邪魔するものは排除する。それが任務の全て。その為、バッテリースタも炎をだそうとした時だった。

「お主ら、あまり人ん家に土足で上がらんでもらえんかのう」

「！」

ゴウ!!

言葉の方向に振り向く間も与えられず、バッティスタとその部下達の足元が赤く染まったと思ったら、彼らを人のみにする真つ赤な火柱が荒々しく天へと燃え上がった。抵抗しようとするも、ありえない炎の嵐の中、部下達は何もすることができずにどんどん倒れていった。

光努は彼らが炎に飲まれるその光景に呆気にとられるも、声のした方向にゆつくりと顔を向ける。

そこには、男が一人いた。

全身軍服に使われるような国防色とも呼ばれる深緑に近い色の服に身を包み、足元と手には真つ黒なブーツにグローブ。頭を覆うように巻かれたバンダナに抑えられた白髪と、その顔に刻まれたシワから、およそ60歳を過ぎるほどに高齢であることが伺える。白い顎鬚と、口に加えて火がつけられているタバコ。その瞳は、とても老齢とは思えないほどに鋭く、とても威厳に満ち溢れていた。

男はズボンのポケットを探ると、そこから取り出したのは、
「コンバットナイフ？」

ヒュン！

「うおつとー！」

一瞬、男の姿がぶれたと思ったら、光努の目の前でナイフを振る態勢に入っていた。

眼前に迫ったナイフを、咄嗟に体を反らせるように曲げると、顔の前をすぐにナイフが通過していった。その際、風に揺られる光努の前髪の手先が、少しナイフにかすって切り裂かれた。

「ん？避けられるとは、お主やるのう」

（この爺さん、速いな・・・）

光努に刃物を向けて、よけられも止められもしなかったものは、かなり少ない。

男の振るう刃の速度、一足で光努に近寄ってきたことといい、どう見ても一般人とは思えないほどだった。

「面白くなってきたな」

そんな男を見て、光努は楽しそうに笑った。

『古きを侮るべからず』

対峙した光努と突如現れた男。

男の仕業によって、ミルファイオーレファミリー第13バルサミーナ隊は燃え盛る赤い炎に包まれ、取り残された光努と、その手にナイフを持つ高齢の男が互いに距離を取る。

チリチリと突き刺すような殺気ををぶつけられているが、光努は特に気にした様子もなく男を観察している。

くるくるとナイフを弄びながら、男も光努をじつと見ていたが、不意に視線をそらし、燃え上がっている火柱に目を向けた。光努も見ると、火柱の中から何かが飛び出し、光努と男を襲いかかった。

「これは？」

飛んできのは、一筋の青い炎。水のようなその蒼海な色の炎は、レーザーのごとく真つ直ぐに飛んできて、光努と男のいた場所の地面へとぶつかった。すぐに回避した二

人だったが、ぶつかつた地面を見てみると、綺麗に炎の形に丸い穴が空いている。

赤い炎を突き破り、空中へと躍り出た者に、二人は視線を向けた。

バツテイスタ。この部隊の隊長である男。

火が消化され、部下たちは全員地面に倒れふしている。隊長である彼も決して軽傷とは言えなかつたが、それでもまだまだ戦えるような様はさすが隊長を任されているだけあるとも言える。

光努が目を見張つたのは、あの炎の中を無事に出てきたバツテイスタに大してではない。彼のその周りを、空中を泳ぐ魚たちだつた。

全長はおよそ40センチ程、タイと似たような平たい体型に、下顎が上顎よりも前に出て上方に突き出すように尖つた口。おそらく、テツポウウオと呼ばれる魚。

よく知られているのは、口に含んだ水を発射して、葉に止まつた昆虫を撃ち落とし餌とする行動が有名な魚である。

その魚の数がおよそ10匹。そしてバツテイスタを上空にとどまらせているFシューズから噴出されている青い炎と同じ炎を、全ての魚がその全身に纏つていた。

空中に佇むバツテイスタの周りをゆらゆらと泳ぐ青い炎を纏う魚たち。

なかなかその光景は優雅に見えた。

「私の雨射手魚は、その口から雨の炎を超高速のレーザーのように放出し、敵を仕

留める。なぜ貴様がここにいるかわからないが、見つけた以上仕留めさせてもらおうか！やれ！」

その掛け声と同時に、周りを泳いでいた魚達が、3匹ずつ光努と男の方に向けられて、その口から青い炎を吹き出した。

「なあ、あんた」

「ん？なんじゃ」

「雨の炎とか言ってたけど、それって死ぬ気の炎と同じもの？」

「そんなこともしらんかったのか。正しいリングをつければ、その者の属性の炎が出る。結構常識的な話じゃが。お主一般人か？」

「うーん、ここからへんの常識には詳しくないんだよ」

ビシュ！

お互いに会話をしているが、炎の高速レーザーはそのあいだにも降っている。

自分の身を守るように4匹バツティスタはその身の周りに配置して、残りの6匹を2分割して光努と男の二人に差し向けている。たった三匹とはいえ、その威力やスピードはなかなか速い。にもかかわらず、まるで遊んでいるかのように二人は避け続け、なかつ互いに会話すらしていた。その光景に、バツティスタは戦慄していた。

（あの子供はわからないが、あいつはまずい！早めに片付けない！）

「しようがないのう。お主はまあ敵でもなさそうじゃし、今回はわしがなんとかしてやろう」

「まじか、サンキュ。まだ情報不足だから助かるよ」

「カツカツカ。まあそこで見ておれ」

男が懐から取り出したのは、指輪。赤い宝石のついて装飾の施された指輪を、右手につけ、そのままその手でナイフの柄を握る。そしてリングの宝石が光ったと思つたら、赤い炎がナイフを刃を覆つて燃え上がった。

「嵐の炎か！」

「じゃ、小手調べじゃな」

懐から取り出したのは、黒い弾。というかどこからどう見ても、

「手榴弾！」

ピンを口で引き抜き、上空へと放り投げる。

だがバツティスタは、自分のところに来る前に、自分の周りの魚に命じて空中の手榴弾を打ち抜いた。だが光努は見えていた。手榴弾が打ち抜かれる寸前、男の口角が笑っているのは。まるで、いたずら成功した子供のよう。

ポーン！

(！・煙幕か)

打ち抜いてから気づいたバツティスタだが、すでに遅く、あたりは煙に包まれた。真つ白な煙幕によって、この場にいるものの視界が白一色に染まる。咄嗟にバツティスタは自分の魚を自らの周りに近づけ、対処できるように陣形をとったが、遅かった。気づいた時には、自分の横には地面から飛び上がった男がいた。

ドゴオ！

男が放った蹴りが、的確に魚と槍を抜けて、バツティスタのボディへと入り込む。

近接戦闘を想定した防弾仕様の上着を来ていたおかげか、ダメージを多少分散させることには成功したが、そのまま森の方へと飛ばされる。

煙幕の中、魚を踏みつけるようにしてバツティスタの方へと向かった。

飛ばされたバツティスタだが、すぐに足元の炎を噴射して態勢を立て直す。空中から森の中へと飛ばされたがとくに問題のない。少し遅れて自分の魚がこちらに戻ってきた。

「煙幕とはな。旧時代の兵器を使うとは」

「あまり昔の道具を馬鹿にするもんじゃないぞ、若造」

「ふん！」

手に持った炎を纏った槍を声のした方に振るう。

甲高い音とともに、木の上に立っていた男のコンバットナイフによって防がれた。

その瞬間、魚の口から圧縮された雨の炎が男に向かって打ち出された。

だが男は、ぶつかる寸前に離脱し、木の上を巧みに動きながらバツテイスターの周りの木の上を走る。

(速いな。だが)

バツテイスターは冷静に目で相手を追うのをやめ、10匹の雨アルチエーレ・テイ・ピオウジヤ射手魚を、体の周りを取り囲むように、全匹周りを向くように円状に配置した。

雨テイ・スコ・テイ・ピオウジヤの円盤!!

雨のレーザーを吐きだしながら魚が円状に高速回転したその姿は、全てを切り倒す丸ノコのようにもあつた。周りにあるバツテイスターと同じ高さにあつた木は、全て回転した雨の炎によつて切断された。

切り裂かれる木の中で、バツテイスターは妙な物を見た。

切断された木と一緒に、切断された四角い箱のようなもの。だがそれが何かわかつた瞬間、視界が光に包まれた。

ドゴオオ!!

「爆発か。罨を仕掛けていたは、あの爺さんやるな」

森の外から中を見ていた光努。

光努の驚異的な動体視力が捉えたのは、木の上を走る男が動く間に、バツテイスターからは見えない角度に箱を、おそらく爆発物質を木に設置するところだつた。

それを知らずに周りの木ごとに切断した為、バツティスタは爆発をモロに浴びたはず。

「しかし、この敵の隙について追い詰めるような戦い方……。どこかで見たことあるよな」

再び爆発音。いくつか爆発物質を仕掛けていたらしく、森の中から死ぬ気の炎ではなくりアルな炎が燃え上がった。

木の焦げる匂い、黒い煙。目を凝らしてみれば、まだかすかに青い炎が見える。だがそれでもバツティスタの雨アルチエーレ・ティ・ピオツジャ射手 魚の数が3匹しかない。残りは地面に倒れている。

「しかし、死ぬ気の炎を纏った生物が爆発くらいで7匹も一気にやられるか？ いや、違うな」

見ると、2匹くらいは至近距離爆発でやられたらしい焦げ跡が見えるが、残りの5匹は切り傷と、対象を燃えつくそうとしている赤い炎が魚に纏われていた。いや、纏われてるといふより普通に燃やされてるな。

あの切り傷を見る限り、さっきの赤い炎を纏ったナイフで切りつけられたらしい。爆発の中で空中を泳ぐ魚を切るとはな。

ポフン！

煙の中から飛び出して来たのは、すでに満身創痍なバツテイスタ。

荒い息と爆発後の傷が目立つ。あと一階爆発を受ければ普通にやられそうなほどに。「ん？あいつまだ動けるみたいだけどういのか？」

いつの間にか横に戻ってきていた男に光努は言う。

ナイフはしまい、左手には何か黒い箱みたいな物を持っている。

反対の右手でタバコを口にくわえ、リングから出した炎で火をつける。中々に斬新な炎の使い方だなと光努は思った。

「もう仕掛けは済んでるからのう。後はこいつで」

そう言って掲げたのは左手の黒い箱。だがよくよくと見れば、一つだけスイッチのようなものがついていた。そしてバツテイスタは気づかない。自分の体にいつの間にか取り付けられていた小型の箱に。

「終わり」

カチリ。

スイッチを押したとき、上空のバツテイスタから爆発音がした。空中のやつは爆発に包まれ、そのまま墜落して森の木の上に落ちた。

あの状態ならとりあえず死んではいなさそうだけど。

「随分えげつないことするんだな」

「面倒なのはゴメンでな。ひとまずさっさと終わらせもてらった。それより、お主も来るか？ここにいたら少し面倒じゃよ」

「面倒？」

「一部隊が来たにしては10人は少なすぎる。おそらくもうそろそろ増援が来る頃じゃろう」

「じゃ、面倒だけど潰せばいいんじゃないの？」

「お主は結構過激じゃな。あんなのほっとくに限るんじゃよ。ほれ」

ひよいと投げて横したのは、鎖。10センチ程の小さな鎖を光努は受け止め、しかし何かがわからないが頭に疑問符を浮かべる。

「わしも巨大なリング反応を見てこつちに来たんじゃ。多分お主がリングを持つてる人物じゃろうし、それを巻きつけておけ。リーダーに映らないから敵に見つからなくなるぞ」

「なるほど。むき出しだとここだとすぐに見つかるとか。じゃ早速」

首から鎖で下げていたフィオーレリングを取り出し、手早く鎖を巻き付きた。

「そのリング、フィオーレリングか？」

「そうだけど、知ってるのか？」

「ふむ、なるほど。お主、もしかして白神光努という名前か？」

男の言う言葉に、光努も目を細める。

リングだけでなく、名前も知っているとは。だがイリスファミリーのボスということ
は考えればそこまで不思議ではないのかもしれない。

「確かに、俺は光努。だけどそんなこと知ってるあんたは一体」

「話はあとじゃ。敵がぞろぞろ来たみたいじゃし、気づかれる前にひとまず隠れるぞ」
そう言つて男と光努の二人は、母屋の跡地へと向かった。

どこかのホテルのような一室。

巨大なビルの高い位置に備え付けられたその広い部屋からは、ガラス張りの窓を覗い
て外の景色がよく見える。

部屋の扉が自動で開き、外の廊下から部下と思われる男が一人歩いてきた。

「白蘭様！ホワイトスペル第13バルサミーナ隊より情報が入りました」

高級そうなソファや机やモニターなど、快適に過ごせそうな家具が置いてある中、窓

際で立つて外の景色を眺めている人物が一人。

ところどころはねているような白髪に、左目の下ついている三つ爪のマーク。肩に何かの花を模したような紋章の付きの肩当ての付いた真つ白な上着。楽しそうに笑っているその顔はまだ若い青年だった。

手に持った袋から、白いマシユマロを取り出し、口の中に頬る。

甘さの広がる柔らかい感触を楽しみながら飲み込むと、部屋に來た部下の方へと向き直った。

「やあれオ君、ご苦労。早速だけど、その情報つての見せてくれないかい」

「はっ」

笑みを絶やさないう、白蘭と呼ばれた青年が言うのと、部下の男は手にもった端末を操作する。すると部屋に備え付けられていたモニターからはイリス跡地の映像が映し出された。

壊れているイリスの母屋や技術舎。そして倒れている部下。さらに、そこに映し出されていた、男。白髪をバンダナで留め、手に持ったナイフ、口にくわえた火の付いたタバコ。顔に刻まれシワから、およそ60歳くらいに見えるほどに高齢な男がそこには写っていた。

「へえ」

その姿を見た瞬間、白蘭の目が少し細く鋭くなり、その口角がわずかにつり上がった。楽しそうに、面白い物を見つけたかのように。

「彼がいたんじや、バルサミーナ隊じゃかなわないだろうね」

「？白蘭様。この老兵は一体・・・」

「ああ、レオ君は新入りだから多分知らないだろうね」

部下の無知さも当然と言わんばかりに軽く話し、手に持った袋に手を入れてがさりと音を鳴らしながら新しいマシユマロを手取る。

マシユマロを手で弄びながら、白蘭はさらに楽しそうに笑って言葉を出した。

「たった3人だけしかいない、イリスファミリー第一戦闘部隊『アヤメ』の一人、獄燈籠^{ごくとうろう}」

『十2』

「いたぞー！こつちだ、手を貸してくれ！」

一人の声に、他の仲間が集まる。

全身真っ白い装束に身を包んだ人物たち。

ミルフィオーレファミリー第13バルサミーナ隊の部下達である。

最初に来た10人は、一応の偵察に来た者達。その中には、敵が出たときに対処できるように隊長も一緒にきたが、それでも彼らは倒されてしまった。

地面に倒れふしている自分たちの隊長と部下達を担ぎ上げ、ひとまず連れ帰る。

つまり撤退。一応の探索をしたが、出てくる物は破壊されたイリスファミリーの跡地だけ。もはや敵はここを去ったと考えるのが妥当だろう。

さて、それでは光努たちは一体どこへ行つたのか？

その答えは、割とすぐ近くにあつた。

イリスファアミリーの敷地内、元母屋となっていた破壊された建物。その一階ホールの階段横。そこに付けられていたのは、目立たないような隠し扉。そこから伸びている地下への階段を下りている影が二つあった。

コツンコツンという音を響かせながら、先頭を歩いている男。

白髪と白い顎鬚。頭を覆うバンダナをつけ、口には火のついたタバコを咥えている。顔に刻まれたシワ、鋭い眼光。年齢的には60歳を超えてそうな初老の男性だった。年齢とは裏腹にその身体能力や実力は相当高いが。

先頭で立ち、手には旧式のランプを持ちながら歩いていた。
後ろで歩いていたのは少年。

柔らかそうな白い髪に、楽しそうな笑み。周りを見ながら楽しそうしているのを、男の後ろからついてくるように歩いている。

「へえ、イリスの地下にこんなところがあったんだ」

「元々地下倉庫のような場所だったんじやが、緊急時に使えるように数年前にわし
が改造して作ったんじやよ」

光努がイリスファアミリーに来てから結構な時間が過ぎたが、全体的に見ればイリスの本拠で過ごした時間よりも日本で過ごした期間の方が長いかもしれない。正確にはわからないが、それでもイリスの敷地内や母屋を全て探索するには短い期間だったのだら

う。

地下に降り立ち扉を開けると、そこに広がっていたのはホテルのスイートルームのような部屋だった。ソファに机にTV、小型のキッチンなどもついて部屋で過ごす分には快適に過ごせそうな場所。

壁際を見てみる、いくつか扉があるから他にも部屋があるのだろう。

「そっかいや名前を聞いてなかったな」

ふと思いつ出したように光努が男に言う。光努の名前は名乗ったし、元々相手も知っていたから問題ないが、敵から身を隠すつもりだったため、話をあとにしたために男の名前を聞きそびれてしまった。

「わしは獄燈籠ごくとうろう。ま、みんな籠ロウと呼ぶからそう呼ぶとよい」

そう言いつつ、獄燈籠は部屋にあった扉を一つ開くと、そこにも別の部屋。

シンプルな机に壁に設置されたモニター。部屋の周りをぐるりと囲うような柵には多くの機械が載っていた。

「(ハ)ハ(ハ)ハ」

「通信室つてところかのう。こつちから連絡をとる」

「連絡か。誰にするんだ？」

「まあ見ておれ」

カチカチと機械をいじると、モニターの電源が入り、いくつかの回線が開いてどこかと通信を始める。

モニターが映り、どこかの光景が映し出された。中々に快適そうな室内。どこのホテルのスイートルームだこれ？というような室内。というかさつき最初に入った部屋と同じ構造してるのか。

『籠じゃん。そつちから連絡してくるなんて珍しいが、どうしたんだ？』

部屋に備え付けのスピーカーから声が聞こえてくると同時に、モニターに映ったのは、一人の男。

長い金髪を後ろで一つにくくり、背中に垂らしている20代後半程の大人の男性の姿。白衣を来てメガネをかけたその男は、モニター備え付けのレンズからこちらの様子を見て少し驚いたような表情をした。

『……おまえ、光努か？』

こちらにもモニターに映った男の顔に少し驚いたが、楽しそうに笑って、たった少し前まで顔を合わせていたはずの男に向かって口を開いた。

「こつちからしたら、さつきぶりだな、ルイ」

モニターに映っていたのは、最近顔を合わせたけど全くの別人。

10年後のルイだった。

ミルファイオーレファミリー本部の一室にある広大な会議室。

中央に設置された巨大な会議用の机の周りを取り囲むように、壁際に飾られた鮮やかな大量の花の中、机を囲うようにして置かれている椅子の数は、18個。

片側のエンドに座る男は、白髪に左目の下の三つ爪のマーク。愉快層に笑っている表情のまだ若い男の名は、白蘭。このミルファイオーレファミリーを統べる、若きボス。

椅子を埋めるように座る複数の人物たち。誰も座らない椅子もあったが、遠くにいるためこの場に来れない者のために用意された、円柱状の機械が椅子の前の机に置かれている。その機械の中から、ホログラムによって遠くにいる人物の姿が映し出されて会議に参加できるようになっている。

そして、欠席者を含め、計16人が会議に参加していた。

この時代において、最も強大な勢力を誇るミルファイオーレファミリー。

その中は、全部で17の部隊に分かれている。そして、滅多なことでは開かれない、全部隊長会議の参加者15名（内2名負傷の為欠席）と、ボスである白蘭を含めた16人。これが、今回の会議の参加者。

議題は、『タイムトラベル』について。

この部隊長会議に持ち込まれた情報にあったのは、『過去のボンゴレファミリーがこの時代にタイムトラベルした』ということ。

だが、その内容を見ても、納得できる人物など、この中には多くなかった。

いきなり突拍子もないようなおとぎ話をはなされたような感覚。一部鋭いものや、タイムトラベルに関わる者達を除き、ほとんどの部隊長は信じられない思い出いっぱいだった。

「正ちゃんが頑張ってくれたからできたんだけどね。そりやもう、10年バズーカを莫大な時間をかけて研究してさ」

楽しそうな白蘭の言葉に、正ちゃんと呼ばれ、ホログラムとして参加していたメガネをかけた青年は特にコメントをすることなく無言だった。

むしろそのことよりも、後に言った単語の方にみんな反応した。

「10年バズーカですと！しかしあれは言い伝えレベルの架空の兵器のはず！」

確かに。当たれば10年後に行ける、などと言われても信じる者の方がごくわずかか。

実際に見てみないことには、常識が頭に固まった大人たちでは考えにくいのが現状。

「それを言うならボンゴレの死ぬ気弾だって言い伝えだと思われてたし、ボックス匣だってつい最近までは夢物語だったろ？」

「むう……」

白蘭の言うとおり。そう言ってしまうれば確かに、存在しないと思われていたものが実際はしっかりと存在していた。

ボンゴレと関わりのあるツナ達や骸一味、光努達から見れば死ぬ気弾もさほど珍しくないが、他の接点のないマフィアから見れば、やはり言い伝え。また聞きした程度の噂程度。実際には存在しないと思っても特に不思議ではない。

他の部隊長から、なぜ白蘭は過去のボンゴレファミリーが来るという重要案件を一部の人間としか情報を共有していなかったのか、と問うたが、その答えは明確単純。

「そんなのこの様子を見ればわかるだろ？ タイムトラベルの話をしたところで、君達信じないから」

あつけらかんと楽しそうに笑いながら言う白蘭に、質問した部隊長も押し黙るしかない。

けどもう一つ疑問が浮上してきた。

ミルフィオーレは、すでに大々的にボンゴレ狩りと称して、ボンゴレファミリーをほ

ぼ壊滅に追い込んでいる。

にもかかわらず、なぜわざわざボンゴレファミリーを過去から呼ぶ必要があったのか？

だが、その疑問に答えたのは一人の部隊長だった。ホログラム装置から除く細い目つき。おかつぱ頭にメガネという、どこかで見たことあるヘアースタイルをした男は、愉快そうに軽く歌っていた。

「リング、リング、ボンゴレリング♪」

「な！ボス、まさか！」

「うん。やつとわかつてくれたみたいだね」

狙いは、ボンゴレリング。この時代のボンゴレリングは、ツナ達自身の手によってすでに碎かれていた。戦いを好まず、血で血を争うのを嫌った現代のボンゴレ10代目であるツナが、真意は分からないが、おそらく争いの種になるくらいならと、自らの決断で碎いて永久的に消滅させたのである。

その為、白蘭がとった策というのが、ボンゴレリングを持っている時代のボンゴレファミリーを、ボンゴレリングごとこちらに呼ぼうということ。

白蘭が机のスイッチを押すと、天井から下がって降りてきたのは、石版。

装飾の周りに彫られた石版には、円を描くように付けられた、リングをはめるような

くぼみ。2種類のタイプのリングのくぼみがそれぞれ7つ。そしておしやぶりの形のくぼみがさらに7つ。計21のくぼみには、すでに5つのおしやぶりがはめ込まれていた。

「それに、バルミサーナ隊の報告で、いいことを聞いたよ」

「そういえば、バツティスタ殿は負傷して欠席ですが、それと関係が?」

本来なら部隊長会議には、第13バルサミーナ隊の隊長であるバツティスタも出席の予定だったのだが、今回は獄燈籠によって負わされた負傷により欠席となった。

ちなみにもうひとりの欠席は、第3アフエランドラ隊の隊長、電光の^{ガンマ}γ。ミルフィ

オーレにて白蘭直下、最強の精鋭しか持てない7つのマーレリングの一つ、雷のマーレリングの保持者にして6弔花の一人。現在は日本のメローネ基地にいたのだが、ボンゴレ側の守護者との戦いで深手を負って今回の会議は欠席となったそうだ。その際にγの用意した情報の中に、10年前のボンゴレの姿を確認したという情報が入ったため、今回の部隊長会議が開かれたと言える。

「うん。出先で『アヤメ』と当たっちゃったらしくてさ。でもそれと引き変えに送られてきたのは、とびきりの情報だよ」

『アヤメ』の言葉が出た瞬間、他の部隊長達も目を見開いたが、白蘭が全員の手元の端末に映した写真を見て、驚きからすぐに疑問符を浮かべた。

端末に写っていたのは少年。柔らかそうな白い髪に、楽しそうな顔をした、およそ中学生くらいに見える少年だった。

「ボス、この少年はいつたい？」

「ああ、この子の資料はかなり少なかつたからね。多分見たことはないだろうけど、聞いたことはあるんじゃない？10年前に現れた、イリスファミリー2代目ボス」

「！この少年が、イリスのボスだ?!?だがたしかイリスのボスは、10年前に行方不明になつたと聞きました」

「そうなんだけど、なんでかここにいるんだよね。おそらく、ファイオーレリングを持つて」

「我々のマーレリングや、ボンゴレリングと同等の威力を持つと言われている、あのファイオーレリングをですか!?!」

「そ、そしてこれも目的。僕が欲しいのは究極権力の鍵、トウリニセツテ 7・。そして、アルトラドウエ 2」

再び机のスイッチを押して天井から降りてきたのは、先ほどの7つのマーレリングと7つのボンゴレリング、そして7つのおしやぶりはめ込む石版よりも、ふたまわり程サイズの小さな石版。

もう一つの石版同様にその石版にはおしやぶりとリング、それぞれ一つずつ窪みがつけられていた。

『現状把握、そして対策』

10年後の世界において、マフィアの頂点に立っていたのは、白蘭率いるミルフィオーレファミリー。

彼らの目的は、7・^{トゥリニセツテ}と呼ばれる強大な力を秘めたリングとおしゃぶりを手に入れること。

7つのボンゴレリングと、7つのマーレリング、そして7つのアルコバレーノのおしゃぶり。

その為、ボンゴレリングを狙った彼らは、全てのボンゴレを殲滅するべく、ボンゴレファミリーの人間の他、彼らと関わりの深い者達にまで、その手を広げていった。それにより、ボンゴレはほぼ壊滅状態。今やミルフィオーレに見つからぬように、彼らは今もどこかで活動を行っていた。

しかし、ボンゴレリング自体は、すでに10年後のツナの手によって砕かれ、この世

に存在しなくなっていた。その為、白蘭は10年前のボンゴレフアミリーを現代に呼び出し、彼らの持っているまだ砕かれる前のボンゴレリングを狙おうと画策した。

アルコバレーノのおしやぶりは、ほとんど手中にある。

この時代の技術力をもってすれば、最強の赤ん坊と言われたアルコバレーノを限定的に無力化する術すらも作り出すことが可能のため、彼らはあっさりともルフィオーレにやられ、おしやぶは奪われてしまった。

すでマールレリングに関してはミルフィオーレが現時点で所有しているため、いま時点で半分のトゥリニセツテは我が手中にあるといつてよい。

しかし、白蘭が欲した究極権力の鍵には、後二つ知らざる鍵があった。

それが、アルトラドゥエ 十 2 と呼ばれる、もうひとつの鍵の存在。

一つのおしやぶりと、一つのリング。

白いおしやぶりと、フィオーレリングの存在。

マフィア界においても秘中の秘。そもそもこの世界において知っている人間自体がわずかしかないため、白蘭がこの存在をどうやって知ったのかが謎だったのだがそれはいい。

問題は、この時代においてフィオーレリングとおしやぶりの二つが存在しないという問題。10年前に、フィオーレリングの保持者であるイリスファミリー2代目ボスであ

る少年が、リングとともに突如行方不明となった、その為、どこにいいのかわからないイリスのボスを探し白蘭は、イリスファミリーも攻撃対象にいれ、彼らを殲滅した。

イリス本拠地の破壊痕からわかるように、大々的に攻撃が行われ、本拠地がなくなつたイリスファミリーの他のメンバーは世界中に散っていることだろう。

しかし、攻撃を続け、捜索を続けた白蘭も、どうしてもフィオーレリングを見つかることができなかった。

そして考えたのが、ボンゴレリング奪取の作戦と同じ。過去のイリスファミリーのボスを連れてきて、一緒についでくるリングを奪うという選択肢。

そしてやってきたイリスファミリーのボスである少年を見て、白蘭は自分の中に再び野望への道筋がみえたことに喜んだ。

今現在、イリスのボス、白神光努はそんな白蘭の目をどうやってかいくぐり、過去に戻ることができるのだろうか？

「ふーん。それで、イリスファミリーはもれなく壊滅したと」

『ま、そういうことだな』

ルイの説明に、納得したような、納得していないような声で光努は感想を漏らす。

「でもおかしくね？ こういう荒事のためにいる『アヤメ』の連中はどうしたんだよ。全員やられたなんてことはないだろ？」

「そんなわけ無いじゃろ。イリスの『アヤメ』は常に最強じゃて」

イリスの『アヤメ』は抑止力。あまりにも戦闘員の数の少ないイリスファミリーの唯一の戦闘部隊。もしも攻め込まれたとしても大丈夫なように、それぞれ戦闘員は強大な力を持っているので安心。というふうには本来ならなるはずだった。

「だったらどうして本拠地がボロボロに？」

『そのアジトは一旦諦めた。オレの判断でな』

光努の疑問に答えたのは、モニターに映って通信を行っている10年後のルイ。

『籠と槍時とクルドがいれば基本は問題がない。が、人間1日で世界のどこへでも行けるわけではないからな』

「てことは、つまり・・・」

『うん。攻め込まれた時に都合悪く誰も近くにいなかった』

「アホか！」

「というか基本的に連絡手段が鳥に手紙をくくりつけるというこの時代においては旧時代の連絡手段しか持ち合わせていない『アヤメ』のメンバーを収集、連絡を取ることにすら基本的に不可能に近いはず。戦える人間のいないところで攻め込まれたら普通にやられるのは当然といえば当然である。」

「というかこんなんでよく今まで大丈夫だったなとも思う。そういえば今までは良いタイミングで帰ってきた、とか言ってたな。」

「しかし戦闘部隊がないのであれば、責め放題じゃね？普通に光努は思った。」

『まあそれ以外は灯夜がいればそれで終わったが、灯夜も現在遠くにいるから帰って来れない』

「そんなわけで、わしらもあちこちに潜伏中ってわけじゃよ。見つかったら面倒な敵がわらわら狙って来よるし」

「今だにイリスファミリーはミルフィオーレの狩りの対象。悠々と外を歩くとあつと今に敵に囲まれるのが現状だった。」

「敵の狙いは、このフィオーレリングってことか」

「鎖の巻きつけてあるリングを取り出し、嘆息する光努。」

「そういえば俺が行方不明ってことだけど、一体どういうことだ？」

光努の疑問も最も。光努は10年前に行方不明になったらしい。だが、10年前の光努はここに居るため、今のところ行方不明にはなっていないはず。

『光努。お前がいなくなったのは、昔俺がお前に10年バズーカの弾を見せたその日だ』
「!その日って・・・」

俺がタイムトラベルをしたから行方不明になった？

いや、でもおかしい。同じように今までタイムトラベルをした10年前にはランボやイーピンもいたけど、ここにはしつかりと10年後のランボ達だっている。

そもそもここは10年後の世界なのだから、10年後の自分だっっておかしくない。

ただたんに本当にこの時代の光努は行方不明なのか、それともどこかに消えてしまったのか。

もしくは、最初から10年後の白神光努という存在などなかったのか。

「おかしな話だよなあ・・・」

「ま、そういうことは後にして、過去に戻ることを考えたらどうじゃ？」

それもそうだな。まだ情報不足なことより目標をもつ。

その過程で何かしらのヒントが得られるかもしれない。

「そういえばルイ。白蘭の狙いがボンゴレリングならツナ達ももしかしてこっちに来て

るのか?」

『そのようだ。実はつい最近ミルフィオーレの6甲花の一人の電光のYが雲雀恭弥に倒されたという情報を得た』

「恭弥に?それって10年後のってことか」

『そのようだ。さらにYは、そこで過去の沢田綱吉を見たとき、報告しているらしい』
「10年前の、か・・・」

この時代に置ける沢田綱吉は、既に死亡となっているらしい。

ミルフィオーレとの争いをやめるため、交渉の場にて条件として一人でやってきたボンゴレ10代目を、ミルフィオーレ側は一切の交渉をせずに射殺したらしい。

「ツナ達も帰れないでいるのか。オレの行方不明の日付と今日の日付を計算すると、およそ今は9年10ヶ月半ってところか」

10年バズーカなのに10年たっていないとはこれいかに。

「そんで、どうやった帰れるかルイに心当たりはないのか?」

『と言われてもな。オレの知り合いでタイムトラベルに詳しい心当たりは正一くらいかな』

「正一?」

『5年くらいに少し知り合ったやつでな。俺と同じで機械系に詳しく、確か最近はタイ

ムトラベルについて研究してたつて聞いたな』

あまり外に出ないから人との関わりが少ないんじゃないかな、と思つていたルイの生
態だったが、光努の予想より結構なパイプがあつたらしい。

確かにルイは技術主任を勤めているだけあつてその筋じゃ割と有名人らしい。同じ
ような仲間をどこかで見つけてもあまり不思議ではないな。

「おお、いい情報じゃん。その正一つてどんなやつ？ていうかどこにいるのさ」

『ミルフィオーレファミリー第2ローザ隊隊長の6弔花やつてる奴だ』

「思いつきり敵じゃねーか!!」

『でも正直直接戦うタイプじゃないから、一対一なら話聞いてくれんじゃね?』

「一部隊長が敵と一対一になるわけないじゃろ」

「あ、籠もやつばそう思う?」

でも確かに他の手がかりが思いつかない。というか手がかりにすらなつていないが、
案外10年バズーカのこと詳しいんじゃないか?

ボヴィーノファミリーに聞くという手もあるが、ランボに持たせているという時点で
そこまで詳しく知らなさそうだからあえてスルーする。

こうなつたらミルフィオーレだろーがなんだろーが利用するものは利用するに限る
な。

「で、入江正一ってどこにいるんだ？」

『少し前に日本来たから、今のところはまだ日本にいるな』

「日本か。じゃあ俺も行こうかな。どうせツナ達も並盛りにいるだろう？」

あ、でも10年バズーカは10年後の自分と今の自分の位置を入れ替える道具だから、10年後のツナ達の居場所によっているところが変わるか。

でも確か電光のγが倒したのは雲雀恭弥。ということは、恭弥がいるなら並盛かもしれない。そしてγがツナ達を目撃したのもその時らしいから、やっぱり全員並盛りに来てるのかな？

『当たり前。どうやら過去のボンゴレファミリーは日本の並盛に潜伏してるらしい』

「じゃ、日本に行つて入江正一のところに殴り込みに行くか」

「お分割と過激じゃのう。まあ待て。行くのはもう少しあとでも良いじゃろ」

今にも飛び出して行こうかと思われる光努を、獄燈籠はなだめる。

「なにかあんのか？」

「まあよく考えてみい。イリスファミリィは基本ミルフィオーレの抹殺リストに載ってるんじゃ。なのに公共機関を普通に使つて大丈夫じゃと思うか？」

ふむ、確かにそう言われればそうだ。どこにミルフィオーレの人間が潜んでいるかわからない状態じゃ、うかつに外に出るのは危ないかもしれない。

もしも顔写真とか手に入れているのであれば、見ただけで一発でわかる。白髪の子供なんてそもそも目立つし。もったも、むこうが光努という存在をどれだけ知っているか分からないが。

「実はもうすぐミルフィオーレの部隊が日本へ行くらしくての、そこに便乗してこつそりで行こうと思うんじゃないよ」

「お、マジで？そりゃいいや。でもどうやってのるんだ？変装とか？」

「ま、そんなところじゃの。それより、やつらが動くまでまだ時間があるんじゃないかの」
「そうだな」

「ごそごそとポケットを探り、獄燈籠が取り出したのは、手のひらサイズの立方体の箱と、赤い宝石のついたシンプルなりんぐ。

「さっきの地上での戦いでも、ボックス匣とリング、結構興味あるんじゃないか？」

にやり、といって楽しそうに笑う獄燈籠。

そんな顔につられるようにして、光努も楽しそうに笑った。

「もちろん、超興味ある♪」

リングから出た炎。炎を纏った魚や武器の数々。空を飛ぶ手段。

これだけ見て、光努に興味がわかないわけない。

とりあえずの情報収集としてルイに現状を聞いて考えていたが、それでもずっと気に

なっていたのは当然だ。

自分も同じようにやってみたいと思うのも、子供の性なのかもしれない。

ひとまずルイとの通信を終えた光努と獄燈籠は、通信室を出てスイートルーム風の部屋に戻り、別の扉のところ。

『修行場』と書かれた扉へと入っていったのであった。

『よくわかる匣講座』

匣ボックスとは、10年後の未来の世界において、マフィア間において最も主流となっている最先端の兵器。この匣と呼ばれる兵器は、死ぬ気の炎の中に送り込むことで開くことが可能となっている。

用途は様々。小さな匣の中から大きな物体、もしくは大量の物を出すことが可能となっているため、動物を模したアニマル匣が多数、その他にも道具を携帯できるように作られた匣も多く存在する。

このアニマル匣によって出てくる動物達は、普通の動物とは違い、注入した死ぬ気の炎を動力として、通常の動物ではありえない破壊力をもつ戦闘能力を誇る。

光努が出会ったバッテリースタの持っていた魚型のボックス兵器も、テツポウオの水を飛ばす性質を、死ぬ気の炎をレーザー状に飛ばす性質として、虫を取るのとは別物の破壊力を生み出した匣兵器となった。

普通の刀剣や重火器もまだまだ使われているが、匣一つあるだけで戦力がガラリと変

わることもざらにある。ミルフィオーレが10年後の世界において最大勢力となっているのは、この匣兵器の多量保持、そしてリングの所有が大きな原因。

このリングとは、ボンゴレリングやフィオーレリングなど、マフィア代々伝わるリングを指す。伝統あるリングの他にも、マフィアの間には実に多くのリングが存在する。

10年前まではボンゴレ内で秘匿された死ぬ気の炎だが、10年後の世界では実によく見かける。これは、マフィアが持つリングから死ぬ気の炎を出せるということが発見されたことに起因する。

人間の体には、目に見えない生命エネルギーが、波動となって体内を駆け巡っている。波動には7種類あり、リングにも7種類ある。

大空、嵐、雨、晴れ、雷、雲、霧。

自らの持つ波動と、つけたリングの属性が一致したとき、同じ属性の死ぬ気の炎を出すことができる。

大空の波動を持つ者が大空のリングをつけたとき、リングから大空の属性の死ぬ気の炎を生み出すことができる。同様に、自分に合ったリングをつければ大丈夫。

が、たとえリングをつけてもそう簡単に炎を出せるとは限らない。

炎を出すのに必要なのは、覚悟。

死ぬ気を炎に、自分の覚悟を炎に変えるイメージ。人によって多少異なるものの、そ

の根幹は同じ、自分の覚悟を死ぬ気の炎にする。

そして生成した炎を匣に入れて使用する。

「10年後なのに随分と進歩してるんだな」

「じゃが、この匣にはいろいろと謎が多くてのう。普通に考えたらいま実用化されているのも中々におかしな話なんじゃよ」

「どうしてきゃー」

「理論自体は4世紀も前からできていたんじゃ。じゃがこれまで多くの研究者が作り出そうと画策したが、ついでできなかつたそうじゃ」

匣の元となっているのは、4世紀前の生物学者である『ジエペット・ロレンツエニ』が残した343の設計書。ジエペットの考え出した匣は、当時では技術的に追いつかず、全てが机上の空論として誰からも見向きもされなかつたが、現代の三人の科学者、イノチェンティ、ケーニツヒ、ヴェルデの三人がその設計書を徹底的に解析し、さらに自分たちの持つ技術を集め、マフィアに伝わるリングから発せられる死ぬ気の炎が動力として最適ということを発見し、わずから5年で試作型プロトタイプを開発したという。

そして今では資金調達のため、多くのマフィアに作った匣を安価で売っているという。

「それでどこがおかしいんだよ。開発者が頑張つて作ったってことだろ？」

「この開発段階が味噌なんじゃ」

「？」

「かつての偉人たちは、己の身の回りに起きた些細の出来事から、画期的な大発明をすることに成功した。そう言った偶然が、匣開発だけで何度も起きてるんじゃよ」

偶然という言葉で片付けてしまえばいいが、あまりにも偶然が頻発すると、何者かの意図が関係してくるのではないかと思ってしまう。

それほどにおかしな偶然が多様に起こっているのが匣の不思議の一つであった。

「確かに不思議だな。でもそんなの関係なしに使ってるんだよな、みんな」

「ま、それもそうなんじゃがな」

からからと笑う獄燈籠。手に持っていたマジックのキャップを閉じ、ホワイトボードをひとまず片付ける。ちなみにこれは光努に匣とリングの講義をするのに使っていたのである。

「そんなわけで、光努もしばらくこの時代にいるのなら、リングと匣を使えるよう

になったほうがいいじゃろう」

「このフィオーレリングでも炎って出るの？」

「それは代々イリスに伝わるリング。お主が選ばれたのなら問題ないはず。後は覚悟を炎に変えるだけじゃよ」

「ちなみに籠はどんな炎と匣持ってるの？」

「わしか？わしは、ほれ」

ボウ!!

手に持った赤い宝石のついたリングから、真つ赤な炎が燃え上がった。

死ぬ気の炎は属性と色が別れ、大空の炎ならオレンジ。

嵐は赤、雨は青、晴れは黄色、雷は緑、雲は紫、霧は藍色。

獄燈籠の灯した死ぬ気の炎は赤いため、これは嵐の死ぬ気の炎であるということ。

「そのリングもどつかのマフィアのリングだったりするの？」

「ま、リングというよりこの宝石部分がマフィアに伝わるものの一部を加工してリング

状にしたもの。ま、リングにもいろいろあるから。このリングはC級リングってとこ

じゃよ」

「リングにも級リングとかあるんだ」

同じリングでも、それぞれ大きく価値が変わってくる。

ボンゴレリングはマフィアのリングでも最高峰の精製度A級リング以上のリング。もしも

ランク付けるとしたらSS級ダブルエスといったところだろうか。

「ほれ、光努も炎を出してみい。はじめはそこからじゃ」

「フィオーレリングを付けるのは何気に初めてだな」

光努は右手の中指にファイオーリングをはめる。

(覚悟……か)

ボウ!!

光努が静かに目を閉じて、再び開いた瞬間、炎が吹き出した。

リングを中心に、溢れんばかりの炎が修行場を埋め尽くさんとばかりにん溢れ出ている。

獄燈籠も驚いた。

自分がそこまで動じないタイプだというのは知っている。

自分を驚かそうとするのにはそう簡単にはいかないと自覚しているが、それでも今回ののはかなり驚いた。

光努がいきなり炎を出したことに、溢れんばかりの炎を出したことに、放出した炎の色が、透き通るような真っ白だったことにも。

(この炎の色は、大空の7種類の炎ともどれも違う。光努、お主は一体……)
白い炎の中佇む光努は、獄燈籠の方を向いて楽しそうに笑った。

「な、これでいいのかわ？」

「……カッカッカ! 面白いのう光努。お主は10年前も謎が多かったと灯夜に聞いたが、10年後のこの時代においてもお主は謎だらけじゃのう」

自分の懐から、ナイフと匣を取り出して、獄燈籠は笑いながら閉じていた目を開いた。その瞬間、開いた眼光から、相手を射殺さんとする程の威圧感が放たれた。

リングから真つ赤な嵐の死ぬ気の炎が燃え上がり、ナイフの刀身にも赤い炎が燃え上がる。荒々しく、全てを喰いつくさんと燃え盛る嵐の炎。

「その白い炎、わしに見せてみる。少々この時代の戦いを見せてやろう」

光努は全身で威圧感を受けながら、己の右手で拳を作る。激しく炎を燃え上がらせるその姿は、まるでリングから発せられる炎が、拳を通つて腕を伝い、全身で白い炎を纏っているかのようだった。

「いいぜ、来いよ！もともとここは修行場、『アヤメ』の力見せてもらおうか」

大胆に不敵に。光努も獄燈籠もお互いにやりと笑い、激しく衝突した。

「ぐはあ」

どさどさ。

突如物陰から現れた人物により、首筋に通る神経を的確に強打され、たまたま歩いてきた人物は意識を失った。

その為道端には、全身真っ白な服装に、覆面をした人物が二人ほど倒れていた。

倒された二人共同し格好なため、所属している組織が同じ人間、なおかつ肩についたシオルダーアーマーの紋章から、おそらくミルフィオーレファミリーの人間だと容易に推測することができた。

二人を襲った人物も二人。

軽々と人間二人を一人が持ち上げて、近くの倉庫に連れ込み一旦扉を閉じて鍵を締める。

10分ほどしたとき、倉庫の扉が開いて出てきたのは、先ほど倒れた人物と同じ格好をした二人だった。

おそらく襲った人物に、服だけ奪われたといったところだろう。倉庫の中ではミルフィオーレに所属する二人の部下が眠らされている。

代わりに白装束を来た人間は、他にも同じ格好をした集団とまぎれ、ミルフィオーレのマークの入った飛行機乗り場が集まった。

「なあ、隊長と副隊長ってどうした？」

「ん？知らねえのか？隊長はファーストクラス。副隊長はビジネスクラスだよ。そ

んで、部下の俺らはエコノミーってわけさ」

「随分とわかりやすいな」

一応この飛行機もミルフィオーレの所有物なのだが、そこはしっかりと階級ごとに飛行機のシートも分かれているらしい。

ミルフィオーレには兵の戦闘能力やその他もろもろで階級がつけられている。

その中でもA級の階級を持つ者はわずか6人。その6人を6弔花としてマーレリング保持者としている。

一応C++級から上位を、とりあえずの即戦力と考えているらしい。

部隊数が全部で17部隊もあるミルフィオーレファミリーだが、そのうちA級が6人しかいないため、他の11部隊の隊長達は全てA級以下、B級やB++級の者達で構成されている。今回この飛行機を利用する一部隊の隊長は、A級。雨のマーレリングを持つ男。

第8グリチネ隊長、グロ・キシニア。

白蘭に「下種なのに強い」と言わせるほどに下種な性格をしているらしい。

白蘭が、日本の6弔花がひとり倒されたため、戦力増強に向かわせるために呼んだぞうだ。

部下たちは隊長とはシートのクラスが違ってエコノミーなため、同じ飛行機内でも個室である隊長と副隊長と違って別の部屋に入ってシートに座る。

「いやー。楽しみだな、籠」

「あまりはしゃぐとばれるぞ、光努」

周りに聞こえない程度に呟く程の会話をする二人に周りの者たちは気づくことなく、飛行機は離陸し、日本へと進路を向けていくのであった。

『黒曜ランド迎撃態勢』

飛行機で第8グリチネ隊が日本へと飛び立って早数時間。

飛行場からおり、メローネ基地へとやってきたグリチネ隊は、支部長をしている入江正一と面会、その後はひとまず待機となった。

そして次の日、第8グリチネ隊の隊長であり、雨のマーレリングを持つ6弔花のひとり、グロ・キシニアは、とあるところから情報を経て、黒曜町に来ていた。

グロ・キシニアの得た情報というのは、黒曜ランドにて、クローム髑髏がいるという情報。

ミルファイオーレはボンゴレ狩りとして、ボンゴレの守護者も積極的に見つけ出して始末しようと画策しているが、グロとクローム、もしくはグロと骸は浅からぬ因縁とも呼べるようなことが存在した。

グロと骸は一度戦っており、骸が敗れたという情報。

が、骸は10年前からいまだに一復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄入っているため、

戦ったのはおそらく骸が憑依した誰かという結論もある。

だが、グロと骸が戦ったのはグロ本人から発せられた噂話なので、信憑性は高い。

しかし、それでも骸はまだ生きているという結論。

その根拠は、イタリアの空港でクロームが生きているのを目撃したという情報。

クロームは昔失った内蔵を、骸の幻覚能力を使って代用して生きながらえているため、骸がやられ死亡したのなら、クロームも内蔵を失い死亡する。片方しか生きていないというのは、中々に考えられない状態。

グロ・キシニアは、クロームが黒曜ランドに潜伏しているという情報をどこからか入手し、特にメローネ基地の支部長である入江正一に報告することなく、独り占めするために部下にも内緒で単独で行動して、黒曜ランドへとやってきた。

すでに10年以上も前から廃墟になったテーマパーク。ボロボロの廃墟に足を踏み入れながら、グロ・キシニアは一番大きな建物の入口に来ていた。

少し長めのおかっぱ頭にメガネをかけた顔。ミルフィオーレホワイトスperlらしく真っ白な装束に身を包んでいるが、肩や腕に毛皮をあしらえ、マントもつけていることから中々に自分好みに改造が施されている。馬上鞭を持ったその手の指には、青色の楕円形の寶石に、畳まれた羽の装飾が施された、雨のマーレリングがはめられていた。

「くくく、ここにクローム髑髏がいると思うと、中々に胸躍る」

白蘭曰く、「下種なのに強い」グロ・キシニア。部下から見てもこの人下種だと思われるくらいに下種である。上の言葉を吐いてる間にも、結構顔は下種くなっているのは余談である。

その為、

カチリ。

「ん？」

自分を圧倒的有利だと思っている生物は、油断もする。

ゴウ!!

突如床から立ち上った火柱（まじもんの炎）が上に立っていたグロを包み込んだ。

否、包み込んだと思ったが、間一髪転がるようにして火柱を避けることに成功した。

が、結構ギリギリで咄嗟に動いたため、しばし四つん這いになって呼吸を整える。

「く・・・くくく。この私に対してこのような仕打ち」

が、ゆらゆらと立ち上がりながら薄らわらいを浮かべる。笑っているがメガネの奥の瞳は全然笑ってない。むしろ不気味にみえる。

「いいだろう、クローム髑髏よ。徹底的にやってやろうじゃないか」

ボウ!

「開匣!」

カチ！

マーレリングから燃え上がらせたのは、雨属性の青い炎。

海の波を思わせるような装飾の匣に炎を注入し、匣の中から出てきたのは、フクロウ。
グーフォ・デイ・ピオツジャ
 雨フクロウ！

鋭い嘴と鉤爪。バサリと羽を広げ、身に纏った美しい青い炎が、グロと違って中々に優雅な佇まいを見せる。

ドドドドドドドド！

その瞬間、死ぬ気の炎に反応してなのか、壁から穴が現れ、中から飛び出して来たのは、矢。それもただの矢ではなく、鏃に真つ赤な嵐の炎が纏われた矢。

通常の矢よりも圧倒的に破壊力の高い矢。

嵐の炎の特性は「分解」。

人体を分解して破壊しようとするその威力は、触れたらやばいものだが、相手は普通の人間ではなかった。「下種だけど強い」と言わしめるほどに、グロは戦闘能力が高く、強かった。

グーフォ・デイ・ピオツジャ
 雨フクロウが鳴き声を上げた瞬間、大波が矢の炎を全てかき消した。水に酷似した雨の死ぬ気の炎を波に変え、全ての矢と炎を迎撃した。

「この程度の罫など造作もない。しかし、これならクローム髑髏がいるという情報も期

「待てきそうだな」

ここでグロはいくつか勘違いをしていた。

まず、この罠は基本的に侵入者防止用に最初から自動で仕掛けられているので、この罠が作動してもクロームがいるとは限らない。

しかし今回に限ってはあながちグロの予想も間違つてなかった。

そしてもう一つは、そう簡単にクロームに勝てるとは限らないということ。

一階の正面入口にいるグロを見下ろすように、3階の窓から見る人影が一つあったことに、グロ・キシニアはまだ気づかなかった。

少し前に、クローム髑髏は10年後の世界に来ていた。

特に何かするというわけでもなく、黒曜中の制服を来て学校指定の鞆を持ち、道路を普通に歩いていたとき、突如振つてきた10年バズーカの弾に当たり、飛ばされてきた。

気がついたときにいた場所は黒曜ランドの中。10年後の世界とわかったのは、自分

の部屋に飾ってあったカレンダーを見たらすぐにわかった。間違えてかけたにしては年数がずれすぎている。

よくよくと見れば周りも少し違っている。どうしようかと思い、ひとまず知っている場所だが、知らない場所なために動き回るのも良くないと思い、黒曜ランド内にて普通に生活をしていく。

幸いにも黒曜ランドを改造したとき、保存食なども大量に置いてあり、なおかつ10年後の自分を買ってきたか、新鮮な野菜やお肉等も冷蔵庫に入っているため、食べることはあまり困らなかった。というか困るところが全くなかった。せいぜいこれからどうしようと思うくらい。

そんな生活を数日していたら、来訪者があった。

第一印象は、何か変な人。

第二印象も、何か変な人。というかあまり近づきたくない雰囲気の人。

第一印象よりも評価が下がったのは相手が相手なだけじゃない。

妥当な判断である。

敵か味方も分からないが、多分敵だなと思った。特に理由があったわけではないが、部屋備え付けのTVに自動で映る監視カメラの映像を見ていると、それは勘であっても間違いないと思った。

最初の罠である『火炙りの刑』を間一髪ながら避けた。見た感じ油断していたらしいが、それでも避けるのだからそれなりに動ける人らしい。

ちなみにこの名前は考えたのは千種と犬があーだこーだいつて考えた。犬が『○○の刑』とかかつこよくねと、本当に唐突に言ったのは確実に余談である。骸↓六道輪廻↓地獄↓刑罰？とか頭の中で微妙な連想した犬に関しては本当に余談である。

次の罠である『火串の刑』、炎の付いた矢も迎撃された。

けどその迎撃方法が、クロームの予想を超えていた。

青い炎のフクロウ。突如現れた大波。

見たことのない道具を使い、見たことのない技を使った。リングから出ている炎もわからない。いろいろとわからないことだらけ。

あれほどのよくわからないが強大な力なら、すぐにここまで来るかもしれない。

もつとも、クロームは正面からここに来るまでどんな罠があるかよく知らないけど。

「あ、そうだ。確か……」

グロが正面から入ろうとしている間に、クロームは黒曜ランド内の一室に入る。

そして探るように壁を触ると、ある一箇所の壁に触れてぐつと押す。手のひらに収まるくらいの壁が押し込まれ、

ガコン！ゴゴゴゴゴ！

床がスライドし、隠し穴が出現！そして下の梯子を降りて、正面の扉を開く。

「！」

中の部屋は、機械が積まれ、配線が壁を這い、数多くのモニターが壁に設置されていた。

が、10年前のその光景にプラスされ、多くの本が積まれ、何か書かれたメモが大量に落ちたり壁に貼り付けられたりしていた。新品の部屋でなく、使い込まれた感のある部屋にここ10年になっていたのに、クロームは少し驚いた。

ひとまずモニターの全電源をオンにすると、各場所に付けられた監視カメラが作動し、黒曜ランドの中を映し出す。

ひとつのモニターに映ったグロ・キシニアの姿。

周りをゆつくりとフクロウを飛びながら、正面入口の罟を突破したらしく、一階ホールに入ってきた。

キョロキョロとあたりを見渡すようにして床を踏んで歩く。その度にいろいろと降ってくるが、手に持った馬上鞭を振るって迎撃する。たまに本当に危ない鉄球（蛇鋼球くらいの大きさ）が飛んでくるときは本気でフクロウと一緒に回避していた。

「あ、あれって」

クロームがポツリとつぶやいた視線の先のモニターに映っていたのは、一階ホールの

壁際の棚上に置かれていた500ミリのペットボトルサイズの、コルクで栓をしてあるガラス瓶。

中に入っているのはなんの変哲もない小さなビー玉。

昔犬が一時期綺麗なビー玉集めに凝った時のものである。

懐かしいことを思い出して、自然と微笑ましい表情になるクロームだった。

「くそ、邪魔だー！」

ガシャーン！

罨を避けた拍子に壁際にぶつかり、振り払った手が瓶にあたって床に落ちて砕けた。

「……………」

ピツ。

ためらわず机に並んだキーボードのスイッチを一つ押すと、グロのいた床がパツカリと開き、下へと落ちていった。

「く、ぬうん」

が、咄嗟に穴の淵を手で掴んでなんとか這い上がってくるグロ。その上をくるくると飛んでいるフクロウ。ひとまず無事であったグロ・キシニアを見て、クロームは少し残念そうな表情をしたが、すぐに何かを意気込むように拳を握った。

「よし、頑張つて追い返そう」

仲間の物を壊す者は、撃退あるのみ！

「おお、中々に部隊長殿は善戦してるな」

「あの魔の正面玄関を突破するとは、性格は腐つとるが伊達に6弔花やっておらんのか」
「魔の正面玄関って何？」

「中々に面白いじゃろ？」

「だな♪」

黒曜ランド周辺の森の中。背の高い木の上から覗いていたのは、光努と獄燈籠。

既にミルフィオーレの部隊服は処分して、普通の格好に戻っている。

潜入した部隊の隊長がたった一人で出かけたのでこっそりつけてみれば、中々にラッキーな展開にであった。

グロ・キシニアVS黒曜ランド+α。

「さっきの落とし穴の罠は、モニタールームから手動で動かさないと作動しない仕掛け

の一つ。いまあの黒曜ランドは誰かいるな」

「ほう、知つとるやつか？」

獄燈籠の質問に、光努は楽しげに笑って答えた。

「多分知ってるぜ。なんせ、あいつらの中であの仕掛け操れるのあいつくらいだしな」

モニタールームの操作方法を教えた少女を思い浮かべながら、再び観戦モードに入つた光努達であった。

『赤い壁作動』

黒曜ランド中央施設の屋上に座っている光努と獄燈籠。

小型のモニターをいくつか並べ、そこから室内に置ける監視カメラの見た映像を光努達も見ている。

「けどよく監視カメラハッキングとかできたよな」

「何を言つとる、別にハッキングなどしておらんぞ」

「そうなのか？」

「この場所の仕掛け作ったのわしじゃし」

「え、まじで？」

ルイがイリスの建築業者を使い、知り合いが監督をしたといったが、その知り合いって獄燈籠だったのかと光努は思い出す。

イリス母屋周辺に作ってあった罾も獄燈籠製だったし、罾関係の詳しいのか。

自分で作ったのなら見るのも造作もないよな。この場所の罾を素通りするためには

要な、シルバールリングに龍の模様が彫っていあるドラゴンリング（仮称）ももちろん持っているため、光努と獄燈籠は畏を素通りして屋上まで来た。このリングをつけていなかったら全ての畏が作動するため、屋上にすら入れないのである。

「けどこの畏郡はどんなもんなんだ？ミルフィオーレのA級も倒せるのか？」

「ま、それはわからないの。畏なんて人の隙をつくものが多いからの、人によつて簡単にかかるし」

「それもそうか」

「しかし、あのフクロウだけじゃ今後の畏は突破するのは難しいがのう」

「へえ、何仕掛けたんだよ」

「わし特性の嵐の炎を練りこんだ、仕掛け満載じゃよ」

「おっかねえな」

死ぬ気の炎チャージするシステムも搭載されているらしく、獄燈籠の嵐の炎を練りこんだ破壊力抜群の兵器も入っているらしい。そのほか、よくわからない仕掛け満載。普通なら目的地にたどり着くのは困難を極める。

が、そこは6弔花の一人と名高いグロ・キシニア。

一件あり得なさそうな事柄や、予想外の事態が起こっても、冷静な判断力によつて正しい対応を考えつくことができる男。

伊達に強いと言われていないのである。その為、飛んでくる罨も冷静に回避し、着々と目的地まで進んでいた。

もちろん、たまに全力で回避せざるを得ない罨も存在するのだが、今のところ間一髪で回避に成功している。

「しかし、相手がグロ・キシニアじやと、ここに住んでるクロームって子には大丈夫じゃろうか？」

「そこは多分大丈夫だろ。クローム強いし……ん？」

一瞬、モニターに映っていた雨グローム・デイ・ピオツジャフクロウを見ていた光努は、一瞬視線を止めた。

(いま一瞬だけど、フクロウの炎の色は変わったように見えたんだが……気のせいかな)

相変わらず青い雨の炎を纏ったフクロウを連れているグロが、モニターには映っていないだけだった。

カコン。

グロの踏みしめた床が凹むと、何かのスイッチが作動したような乾いた音が響いた。その瞬間、カタカタと壁の一部が開き、筒のようなものが出てきた。

「なんだか嫌な予感がするな」

グロの予感は当たった。

筒の中から発射されたのは、銚。それも高速回転しながら嵐の炎を纏って飛んできた銚は、寸分なくグロを狙っていた。

「くーいけー」

そう命令すると、フクロウは一声鳴き、水に酷似した死ぬ気の炎の波を作り出して、嵐の銚を包み込んだ。

これで問題なく消化完了。後は威力が弱まったのを自分が打ち落とせばいいだけとタカをくくったグロが薄らわらいを浮かべたが、その認識は甘かった。

バシユツ!!

「何い!?!」

銚が波の壁を突き抜けてきた。もちろん嵐の炎は纏ったまま。

これで防げると思っていただけに、反応が遅れたグロだが、咄嗟に避けたのはさすが

の一言。だが攻撃が肩に少しかすり、右肩の毛皮が全て燃え落ちて少し血が吹き出した。

「ぐっ！」

そのまま後ろまで飛んでいったが、そこにはちようど開けた、というかガラスが割れてなくなつた窓があつたため、特に何も壊さずに外まで飛んでいった。その後森の木を削り倒していったのを見てグロは少しぞつとしたのであつた。

そして壁の筒から第二射が装填されつつあるのを見て慌てて次の部屋へと続く扉を空けて、中に入って扉をしめた。一瞬締め出されそうだったフクロウもドアの隙間から入ってグロと一緒にひとまずほつとしていたのは中々笑える光景だつた。

ピクピク。

グロには、興奮したりすると右側頭部の血管をピクピクさせるといふ癖があつたのだが、この黒曜ランドに来てからも、罨が飛び込んでくるたびに動かしつゝ。その度に落ち着かせ冷静になることができるグロだが、だんだんと我慢の限界が近づいてきていた。

クロームがいるのはただの廃墟。だからすぐにクロームの元まで来れると思つていたのに、待っているのは罨ばかり。苛立ちや予測不可能なことに直面しても、すぐに冷静さを取り戻して冷静に対処を行える。

が、こうも罨だらけだと、だんだんと冷静に対処してきたグロの堪忍袋の尾も切れかけてきた。

そしてこう結論をだした。

「まとめて壊してやろう!」

ボウ!!

雨のマーレリングから青い炎を一際強く出し、取り出した海の波を思わせるような青い匣に炎を注入した。

匣の中から飛び出すように出てきた生物は、その大きさから出た瞬間に壁を壊し始めた。

「何、あれ? イカ・・・かな?」

モニターを見ていたクロームだが、グロのいた部屋は小さめなため、出てきた生物の全体像がカメラだけでは把握できず、白い物が写りこんでいるのがわかり、なんとなく生物がイカではないかと推測した。

そしてその推測は正しく、全身白く、さらにその人間を優に超える巨大な生物は、ダイオウイカとも呼べそうなイカであった。

が、窮屈そうなイカはその10本の触手を振り、部屋の壁を破壊していった。

壁を壊した先の廊下から、嵐の炎を纏ったクナイが大量に飛んできた。壁を壊したこ

とで仕掛けられていた罾が作動したのだろう。

「そんなもの、この雨クラーク・デイ・ピオツジャ巨大イカにはきかん！」

雨の死ぬ気の炎を回転するように10本全ての触手に纏、嵐の炎の付いたクナイを叩き落とした。

通常の雨の死ぬ気の炎を纏うことに加え、回転を加えることで破壊力と防御力をさらに増幅させている。しかもその数が10本あり、1本1本が巨大なため、大抵の攻撃手段に対応することができる。

ホワイトスペルの6弔花は、白蘭よりメイン匣とサブ匣の二つを授けられており、ググリーフ・オン・デイ・ピオツジャ口の持つ雨フクロ口グリーフ・オン・デイ・ピオツジャはサブ匣にあたり、大抵の相手はこの匣一つで済ませることができ。そして切り札とも呼ぶべきボックスがいま開匣した雨クラーク・デイ・ピオツジャ巨大イカ。切り札とい

うのは伊達でもなんでもなく、まさにメイン匣にたる力を備えていた。

黒曜ランドの罾を一つ簡単に迎撃できたことに、先ほど苛立っていたグロも気分をよくし、再び笑みを浮かべながら足を動かし始めた。

「待っておれ、クローム罽褌」

部屋の天井付近から羽を広げて羽ばたく姿から後ろから巨大イカを従え、歩くグロをじつと見つめる目があったこと、をグロはまだ知らなかった。

「どろしよろう……」

クロームは思案していた。

黒曜ランドの罠や機械を全て作動させることが可能な装置と、中の監視カメラが全て見ることが出来るモニターが大量に設置されているモニタールームの中で、一人クロームは思案げに指を顎に当てていた。

フクロウも強力だったが、それ以上に強力な兵器が出てきた。

防御力も高そうだし、なにより攻撃力も高いため、壁を突っ切って来ることも容易に可能だと思う。罠があるとは言え、チャージしてある死ぬ気の炎も無限大ではないはず。このままで黒曜ランドの罠も炎尽きて“地獄の方がマシな程に危険な罠”から“ただの危険な罠”になってしまう。

タイヤ付きの椅子の上に体育座りでくるくる回りながら、黒曜ランドの3D図面にピコンピコンと移動するグロの位置を見る。

確実にこちらに迫っている、とは言わない。

そもそもグロはクロームがどこにいるのかも分かっていないのだから当然といえば当然。位置的には近づいているといえれば近づいているが、このまま行けばグロは2階に上がりそうなのでやはり遠ざかりそう。

その間に何かしらの対策を立てないと、端から端まで建物を破壊してしまおうという強硬手段に出ないとも限らない。そうなったらとてつもなく困るので、どうにかしなくてはならない。が、現状よいアイディアが思い浮かばない。

「この装置の中で、あの生物に対抗できそうなのは……」

① 『自爆』……黒曜ランド全爆破。後には平らな地面のみ残った。

② 『針山業火の刑』……黒曜ランドは全て針で出来ているのであった。

③ 『撃退ロボMUKURO・SIX』……よくわからない。

画面に映る三つの文を眺めながら、無表情になるクローム。

できれば③が見たいなと思ったが、よくわからないので一旦保留、後は①と②は危ないからちよつと使ったらダメかと思う。

「うーん……やっぱりどうしよう」

ガチャ。

「！」

その時、突然モニタールームの入口の扉が静かに開いた。

いきなりの扉が開く音に、クロームは身をこわばらせる。静かだった室内に、いきなり入る人影。扉を開けるまで、ここに降りてくる気配や音すら全く立てなかった人物は、躊躇なく歩いてくるとクロームの前に立ち止まった。

「・・・誰？」

深緑色の服装に、白い顎鬚と白髪の頭に巻かれたバンダナ。

顔に刻まれた深いシワから、60代をすぎるほどに高齢だと思われるが、その瞳は鋭く、全くの衰えとは無縁だった。懐から一冊の小さめの本を取り出し、黙ったクロームに差し出した。

クロームは疑問符を浮かべながらも、恐る恐るというふうになんか本を受け取ると、相手の老人はそのまま入口へと戻り、扉を閉めていった。

その光景を見ていたクロームはぼかんとした表情をしたまま、渡された本を握っていたことが今のは幻覚でもなんでもないといいことを実感していた。

「あ、おかえり籠。何してたの？」

「ん？ちよつと嬢ちゃんに説明書を渡してきた」

「説明書？」

屋上に座つてモニターを見ていた光努のところへ、獄燈籠が中から出てきた。

先ほど、正確にはグロが雨クラゲン・テイ・ピオジャ巨大イカを出して壁を破壊したあたりから、獄燈籠の目が少し細く鋭くなったと思つたら、少し出かけるといつて黒曜ランド内に入つていつてすぐに戻つてきた。

「あの小僧とスルメを潰せる罍の動かし方を書き記した、わし特性の本じゃ」

「え、何？もしかして自分の作つた罍とかランド壊されて少し怒つてる？」

「なんじやろう。発動前の罍を壊されると、無性に壊した奴を壊したくなるのう」

「こえーよ！それ冗談だよな？」

「冗談じゃ」

「.....」

カツカツカと笑いながらどっこいしよと座る獄燈籠。

どうやら冗談というは本当らしく、愉快そうに笑っている。

「じゃが、嬢ちゃんに渡した本の内容は本物じゃぞ。ちよつと見ものじゃな」

「楽しみだな。どんな罍仕掛けてあるんだ？」

「その前に」

ガコン。

屋上の床の一部を開くと、そこには機械がむき出しになっており、中央には小さな丸いくぼみがあった。どこかで見たようなこの窪み。もしかして……。

「きゃっ」

懐から取り出したのは、全身が透明感のある真紅のリング。東洋の竜が円を描き、自分の尾を加えているようなデザインのそのリングは、どこか不思議な雰囲気が出ていた。

リングを自分の指にはめ、かすかに笑うと、

ボウ!!

溢れる程の嵐の炎が吹き荒れた。

真っ赤な炎に、嵐のような黒い波紋が揺らめく。嵐の波動が、炎の当たらないコンクリートの屋上の床をチリチリと焼き付け、その余波の中にある光努は、相変わらず楽しそうに笑ったままだった。

そのまま炎を、先ほどあけた中の窪みに注入した。

「ハレは……」

「僕の炎を定期的に注入せんと動かない装置もあるからのお。たまくここにきて炎を

入れていくんじやよ」

「へえ。それで、どんな罠クロームに教えたんだ？」

「そうじやのう、危険じゃけど自分には危険が及ばないような罠かのう」

まあたしかに自爆装置とかは相手を倒せても自分もやられるから論外だしな。

だんだんとグロがかわいそうになってきた光努だが、これもしょうがないかと思えば再び観戦モードに入ってしまったのであった。

少し開けた部屋のなかに出たグロだが、歩いた瞬間にどこかのセンサーが作動したのか、ピピっという電子音がした。

性懲りもなく、と思ったグロであったが、何か地響きのような唸り声が出たと思ったら、その罠の正体はすぐにわかった。

「壁が突っ込んでくるだど？しかもあの壁は、」

全身が嵐の炎に纏われている。嵐の炎を纏った赤い壁が、正面からグロに迫ってき

た。

「ふん、やれ！ 雨巨大イカ！」
クラークン・デイ・ピオツジャ

触手に回転をくわえた雨の炎を纏わせ、壁に向かって炸裂させる。

ギイイーン！

「何?！」

壁に突撃をくわえたイカの触手が、跳ね返された。

予想以上に硬い素材。耐死ぬ気の炎用の素材がおそらく使われ、死ぬ気の炎を軽減し、なおかつ衝撃にも強い壁を使つてあるのだろう。

くわえて纏われている嵐の炎で攻撃した相手に炎を飛ばし、カウンターを仕掛けている。現に触手で攻撃をしたイカに嵐の炎が少し燃え移り、苦しんでいたが、すぐに雨の炎によつて鎮火させてグロの周りでうねうねと触手を問題ないというふうに動かす。

だがそうこうしているあいだにも壁が迫ってくる。

引き返す、という手もあるのだが、グロのプライドがそれを許さない。

というよりそれ以前に、このような状況でもグロは余裕の表情をしていた。

「ふつ、この程度で、私の攻撃を防げるとでも? やれ！」

グロのその声と同時に、雨の死ぬ気の炎を激しく燃え立たせた巨大イカは、10本の触手の先を一点に集め、ギウルギウルとドリルのように回転させた。

一点に集めた触手と雨の死ぬ気の炎が、通常の何倍もの破壊力を生み出す。

嵐の炎の赤い壁にぶつかつた攻撃は、いびつな音を立てながら、壁を削り取り、ついに壁を貫通していった。

「はっはあ……この程度、当然な——」

最後までその言葉は続かず、グロはその場に倒れた。

なぜ倒れたのか、自分でもわからない。体を動かそうとしたけど、全身がしびれるようになり動かすことができない。炎を出すこともできなくなつたため、次第に巨大イカも力が衰えていった。薄れゆく意識の中、自分の目の前に立つ人物と、その肩にとまる生物をかすかに見た気がしたが、グロの意識は闇のなかに沈んでいった。

『戦いは既に始まっている』

パツ！

「くっ、眩しい……ここは？」

目を覚ましたグロ・キシニアは、突如顔の前から降ってきた眩しいばかりの光に目を細めた。降ってきたというより、上から光が来たことから、自分が寝かされている状態ということ把握した。服装は最初と同じ白装束。せいぜいマントが外されていないくらい。そしてもう一つわかったのは、自分は何か台のような物に固定されていること。一切に身動きがとれない状態。まるで病院の手術台のような場所だった。

周りを見渡すと、上からライトで照らされているから周りは暗く、何か機械のような物が大量に設置されている。ふと見てみると、小さな机の上にトレーが置かれ、その中に自身の匣と雨のマーリングが入っているのが見えた。

状況が全く理解できない。

いくら予想外のこと起きてもすぐに冷静な判断できるグロだが、さすがにこれは予

想外の様相外。自分の最後の記憶を探るが、暗く霞がかっているように記憶がはつきりしない。

かすかに覚えているのは、自分の前に誰かがたつていたということだけ。だがそれも、暗く、記憶が曖昧で誰がいたのかも覚えていない。

「目を覚ましたか」

声のした方に、唯一動く顔を向けると、そこにいたのはひとりの人物。

目を覆うゴーグルをして白い帽子を被り、大きめのマスクを付けて着ている服は……手術衣。

白い手袋したその手は、自分の胸のあたりで指先を上に向けて掌を自分に向けてような、いわゆる手術前の人間の行うポーズをしていた。

動けない自分。

理解できない現状。

そして、となりに立つ手術する気満々の人間。

(超怖ええええ!!)

リングも匣も全て没収され、もはや次に想像できるのは、拷問尋問、脅迫という物騒な単語しか思い浮かばない。

顔が見えないのが一層恐怖を駆り立てる。

そして手術衣を来た人物は、隣の台の上のメスを手に取り、キラリと光るメスを構えたのだった。

そして、手術室の隣の部屋では、

「……ねえ光努、あの隣りの部屋で何してるの？」

「籠か？ さあ、自分の罫を壊した奴に嫌がらせでもしてんじゃねえか？」

「だがあの状態は極限に相手も不憫に思えるな」

白い丸いテーブルの上に乗っているティーカップから甘い香りのする湯気が立ち上っている。澄んだ紅色の紅茶から立ち上るいい匂いが、部屋の中の雰囲気と和ませているような気がした。隣の部屋との温度差はかなりあるのだが。

丸いテーブルの周りに座ってる人数は3人。

一人は目は少年。柔らかそうな白い髪をして楽しそうに笑っている少年。髪色と対

照的な黒いパーカーと青いジーンズという特筆すべき点の無い服を着ている少年。その右手には、透き通るような白い宝石と装飾の施された指輪がつけられていた。

二人目は少女。ショートの黒髪と後頭部で少し逆立たせたような、どこかの南国のフルーツを思い立たせるような特徴的な髪型。右目に付けられた黒字に髑髏のマークの付いた眼帯。黒曜中学の女子用制服を着用して右手には、霧の刻印のされたシルバーのリングをつけていた。

三人目は男性。スポーツ選手のような短髪と、鼻に貼られた絆創膏が特徴的なおおよそ20代程の大人の男性。黒いスーツを着用し、隣の部屋で横たわる人物に同情するような表情をしながら紅茶を飲み干した。

ガチャリ。

隣の扉の上の手術中というランプの点灯が消え、扉が開いて中から出てきたのは、迷彩柄の軍服を着てバンダナで頭を覆った男、獄燈籠（推定60歳以上）だった。

白いテーブルと一緒にあった空の椅子にどっこいしょというふうに座り、自分も机の上の紅茶を飲み干して一息付いた。

「ふう、人仕事後の紅茶はうまいのう」

「なあ籠。グロに何してたの？」

「ん？二度と戦うことのできないようなトラウマを植え付けていた」

「思ったより黒いことしてた！」

「カッカッカ。半分冗談じゃ」

(・・・半分?)

クロームは少し首をかしげたが、光努と了平はあえてスルーすることにした。

先ほどの描写でお気づきかもしれないが、一人目光努と二人目クローム。

そして三人目は、笹川了平。しかも10年後の世界にて大人となつた了平である。

今はボンゴレに所属しており、しっかりと昔と違つて現状も全て理解している。

今回この黒曜ランドに来たのは、クロームをボンゴレ基地へと迎えにきたということ。そしてここに来てクロームだけでなく、光努と獄燈籠とも会つて現在は休憩しているのであった。

「ただちよつと細工しただけじゃよ」

(極限に気になる内容だが・・・)

(何したのか聞くのが怖い・・・)

(・・・あとで見てみようかな)

了平とクロームはあえて気にしないように新しい紅茶を入れて飲み、光努はチラリと手術室の扉を見てから二人と同じように紅茶に手を付けた。

「それで、了平はこれからボンゴレアジトに行くんだっけ」

「うむ。元々クロームを迎えに来て行くつもりだったのだが、お前たちも来るか？」

ツナ達も極限に大歓迎だろう」

「そうだな、ちよつといこうか。籠はどうする？」

「そうじゃのう。グロ・キシニアを処理してからわしも行こうかのう」

「よし！極限に決まったな！」

「ちよつと待つてください」

声が聞こえた。だが、この場にいる光努、獄燈籠、クローム、了平の誰とも違う声。声のしたところは、テーブルのすぐ脇に備え付けられた、T字型の立てられた木の棒に止まっていたフクロウからだった。

しかもそのフクロウは、藍色の炎を纏っており、その右目の部分は赤く染まり、中に“六”の文字が刻まれていた。

「どうしたんだよ、骸」

六道骸。

肉体は復讐者ヴァインディチエに捕らえられているが、その精神は特定の人物のみに憑依して一定時間

内ならその人物の肉体を媒介に実体化することも可能となっている。そしてこの場にいるフクロウは、元々グロの匣兵器である雨フクロウグーフォ・ディ・ビオッジャであつたが、前のグロと骸との戦いの際、骸の持つ憑依する鍵キとなる三叉槍によって傷を少し付けられ、その時から骸

が憑依していたのであった。黒曜ランドで匣から出されてから、前半は意識はフクロウそのものだったが、後半の意識は骸にほぼ乗っ取られ、グロがやられたのを気に精神を表に出したのだった。

通常は匣兵器に憑依など考えられないが、そこは骸曰く「出来てしまったものはしょうがないです」らしい。

「途中から絶対に僕のことを忘れていたでしょう」

「そ・・そんなことはないぞ」

「うん、そんなことはないぞ」

「ならなぜ目をそらすのですか！しかも光努に至っては棒読みですよ！」

「骸様、私は忘れてないよ」

「ああ、そうですねクローム。クロームに忘れられたらさすがの僕も泣きます」

「今更だがフクロウと会話って中々シユールな光景だな」

「光努、君はわざと話の腰を折ってますよね？そうですね？」

「いや、大真面目に言っただけだ」

「なお悪いですよ！」

「まあまあ、お前たち。極限に一旦落ち着け。誰も忘れてないし話の腰は元々曲がつる」

「それはそれで問題があるのだが」

ひとまず全員でボンゴレアジトに行くということで話はまとまった。

別に黒曜ランドのリング反応がミルフィオーレにバレたとかそういうのは全く関係無い。元々この黒曜ランド全体は死ぬ気の炎の反応が外に出ないように改造されているため、この中で匣兵器を使おうがリングから炎を出そうが外に漏れることは決してないのである。

「ところで骸、そのフクロウの姿ですつといるのは無理だろ？」

憑依ができてしまったのだが、元々シンク口率だつて高くないし、骸も匣兵器を憑依したのは初めてなのでまだ長い時間、しかもどの程度乗っ取れるかがわからないのである。

だが、骸は感覚からもう少しの時間で憑依も解けてしまうだろうと予想していた。

「クフフ、よくわかりましたね。正直もう終わりですね。本当はグロを簡単に倒すように細工したのですが、使うこともなかったですね」

ヴァインディチェ
復讐者の牢獄にいる骸が使うのは、肉体的な体力でなく精神的な力。

その為、強敵を少ない労力で倒すようにしてグロのフクロウを配下においたが、その必要もなくなりこれだけ長く会話に使うことができたのである。

けど、そろそろタイムリミットが近づいてきた。

「ま、また何かあったら連絡してこいよ」

「クフフ、そうですね。今度はお土産でも持ってきましょうかね」

「骸様……」

「クローム、あまり無理はしないようにしてくださいね」

「はい」

「クフフ、それではそろそろ」

すうつとフクロウは瞳を閉じ、倒れこむように木の枝からふらりと落ちるところを、クロームが咄嗟に受け止めた。抱きとめたフクロウを見ると、すやすやと眠っていた。

骸が離れた今でも、藍色の炎が少し見えてることから、もうグロのグリーフォ・デイ・ピオツジャ雨フクロウとは別物と思っても良いらしい。

フクロウはすやすやと寝ているが、匣に戻る気配は特に見せない。

「匣に入らないとか、どこのピカ○ユウ……」

「ん？どうした光努」

「いや、なんでもない。それより早速ボンゴレアジト行こーか」

「うむ、そうだな」

目指すは、現時点ボンゴレの日本アジト。

ミルファイオーレの手もまだ届かない、並盛町の地下施設。
今現在そこいるのは、10年前のツナ達だった。

『好奇心が突き進む』

現在、ボンゴレの地下アジトにいる10年前の世界から来た人物は、ツナ、リボン、獄寺、山本、ランボ、イーピン、京子、ハルの7人。

クロームと同じく、突然過去から連れてこられたこの7人は、いくらか危機を乗り越え、ミルフィオーレの敵をなんとか撃退し、10年後の雲雀達の協力も経て、ひとまず過去へ変えるためにすることの算段がついた。

獄寺が10年後の世界に来たとき、10年後の自分が残っていた鞆を調べ、中に入っていたのは、自分にしか読めない暗号で書かれた手紙だった。

この10年後の獄寺の残した手紙が過去への手がかり。

その手紙に書かれていたことは、この時代の入江正一を消す（物理的に）ことで、全ては元に戻るという文面。

この文面から、過去へ変えるために、ミルフィオーレ第2ローザ隊長である入江正一を倒すことを目標として、その日からこの時代の戦い方を学び、力をつけ始めた。

リングの使い方、匣の使い方。この時代において知ることは生きることにつながる。幸いにも、ボンゴレ門外顧問組織に所属するラル・ミルチがツナたちのコーチをしてくれるとのことだったので、ツナ達は師事した。

途中ミルフィオーレのA級隊長である「電光のY」に山本と獄寺が負傷されたが、10年後の雲雀によって撃破。それから数日、今では傷も完治し、再び修行に精を出していた。

そしてある日、イタリヤから来た秘匿回線。

そのコードを解析し、通信を開いた瞬間、

『ふっお おおい!!』

ボンゴレアジト全体に響き渡る特大の音声が響いた。

出ていたのは一室のモニターからの音声のはずなのに、映っている人物の声が圧倒的にデカすぎるためにうるさいくらいに音が聞こえていた。

モニターを直接見ていたツナ、獄寺、山本の三人。リボンとラル・ミルチ。メカニックのジャンニーニに雲雀の部下の草壁哲也。全員の耳がキイインとなったのは当然といえれば当然である。

廊下でランボとイーピンの相手をしていた10年後のフウ太も、洗濯をしていた京子とハル、料理をしていたピアンキも、それぞれが別々の部屋にいたにも関わらずに聞こ

えてきた突然の大声に一瞬硬直して何事かと思った。

モニターに映っていたのは、全身黒い服装を身にまとった男。

男性にしては長すぎる髪の毛に、獐猛な肉食獣のような鋭い眼光。高級そうな部屋の中に映って大声を上げながら笑っていたその顔は、ツナたちのよく知っている人物だった。

『首の皮は繋がってるかあ!?!クソミソカスどもお!!』

「スクアアロー!」

山本の嬉しそうな表情。

モニターに写っていたのは、ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアー所属の作戦隊長である、スベルビS・スクアアローだった。

『いいかガキどもお!今はそこを動くんじゃねえ!わかったかあ』

『もうすぐ分つかりやすい指示があるから、それまでいい子にしてろってことな!お子様達♪』

「ナイフ野郎!」

ソファに座ってくつろいでモニターに映っていたスクアアローの後ろからひよっこりと顔を出したのは、少し髪が伸びていた10年後のベルフェゴールだった。相変わらず目の見えない髪型にしししと笑っている。

すぐにモニター内でスクアア口とベルが口喧嘩を始め、だんだんとヒートアップして本気でナイフと剣で乱闘を始め、そのうちに通信が切れたのにツナ達は呆れていた。

「相変わらず荒っぽい連中だぜ……」

「でもわかりやすい指示って……?」

「あの方のことでしょうね、イタリア帰りの、」

ジャンニーニの言葉と同時に、ツナ達は入口に気配を感じた。

スポーツマンらしい短髪に、鼻に貼られた絆創膏が特徴的な男性。

黒いスーツを来て肩にバッグをかけた、笹川了平が立っていた。

「笹川了平、推参!」

「芝生!」

「お兄さん!それに……」

ひよっこりと了平の後ろから出てきたのは、特徴的な黒髪にドクロのマークの入った

黒い眼帯を右目に付けた黒曜中の制服を着た少女、クローム髑髏だった。

「クローム!」

10年まえのクロームが来たことに驚いたが、それよりも見たところ怪我也見当たらず、無事に来たことにツナはほっとして喜んだ。

「それだけじゃないぞ、ツナ。ん?クローム、あいつはどうした」

了平の言葉に自分の後ろを見て少しキョロキョロとしたクロームだが最終的には首をかしげた。

「?さっきまでいたんだけど……」

「ねえお兄さん、あいつって……」

ツナの質問に、了平は笑って答えた。

「光努のことだ、ツナ」

一方そのころ、光努はどうしているかといえば。

「へえ、結構広いな」

いつの間にかボンゴレアジト探検にはまっていた。

どこに通じるかもわからない廊下を楽しげに笑いながら歩いている。

途中までは了平、クロームとともに歩いていたのだが、光努の興味をそそる構造だつ

たのか、好奇心が勝ってしまいつい別行動して楽しくアジト探検に勤しんでいた。ボンゴレの地下アジトは未だに6割程しか完成していないが、それでも最新鋭の設備を投入し、これで半分かという程に広大な基地を地下に作ることに成功していた。未だに並盛町の地下にあるアジトにミルフィオーレが気づくことのないよう、様々なカモフラージュや仕掛けが多く設置されており、このアジト内なら黒曜ランドと同じで死ぬ気の炎を使っても外に決して漏れることのない構造になっている。

「なんかいろいろ部屋があるけど、さすがボンゴレってどこか」

次々と廊下の扉を開いて出てくる場所に笑う光努。

「なんだかそのうち敵とエンカウントでもしそうな予感。」

「ん？人の声。ていうかこの声って……」

ゴウンゴウンという洗濯機の回るような音がする部屋の中から、声色からして多分女性の声が聞こえてくる。前に立つと自動で開く扉に、ハイテクだなーという感想を考えながらなかに入ると、光努の思った通りの人物が中で洗濯物の入ったかごを持っていた。

「よー、京子。久しぶり」

「あれ、光努君?!それも、もしかして10年前の?!」

心底驚いたように目を丸くして驚いていたのは、茶髪のショートヘアの少女。光努と

同じクラスでツナが想いを寄せている了平の妹、笹川京子であった。しかもその姿は光努の知っている姿、つまりこの時代より10年前の時代からツナ達と同じようにタイムスリップしてきた姿であった。

「なんだ、こつち来てたのか。ツナ達だけかと思っただけだな」

「私もびつくりしたよ。光努君確か海外に言っただけでしばらく学校休んでたのにね」

灯夜に呼ばれたため、しばらく国外に出て森の中の病院や、他にもいろいろな場所に行っていた光努。基本的にまだまだ学校は長期休みでもないのだから、その間は普通に休んでいたのである。

光努がいない間にツナ達10年後の世界に来たらしく、その間並中ではツナ達の行方不明騒ぎがあったの言うまでもない。光努も行方不明という噂がたったのだが、その時光度はまだ10年前の世界にいたので行方不明でもなんでもなかったのだ。

「ちよつといろいろあつてな。こつち来てから結構経つのか？」

「えつと、確か2週間ちよつと・・・かな？」

「結構前からだな。俺はまだこつち来て4日くらいたつかどうかつてとこだ」

「そうだったんだ」

「何なんでしょう。タイムスリップの話をしてるのに会話の内容が妙に日常的なの

は・・・」

どう見ても時間移動をしている者達の会話でないことに、京子と一緒にいたハルは若干呆れた表情をしていた。

ちなみに、京子と一緒に洗濯をしていたのは三浦ハル。ツナ達の並中とは別の緑中に通う同い年の女子で、黒い髪をポニーテールにしているのが特徴。現在はツナに片思い中の、ちよつと天然が入った少しドジな普通の少女である。

「えっと、京子ちゃん？その人は？」

「あ、そうだね。ハルちゃん、光努君とは初対面だったね」

別の中学でありながらツナ達とよく会って交流もあるハルだが、光努とは初対面だった。

「ツナ達のクラスメートの白神光努だ。光努とでも呼んでくれ、よろしく」

ひとまず京子とハルに、今良平とクロームが来ているという話をすると、二人は飛ぶようにして一旦光努と分かれてモニタールームに向かった。

この危険な世界において、自分の肉親戻ってきたことに喜んでいるということを、光

努も感じ取っていた。

二人と別れた光努は、新たに廊下を歩いていった。

「京子にハル。それに聞いた限りだとランボにイーピンか。思ったよりもこっちに來てる人数が多いな」

たまたま近くにいたから良かったものの、遠くにいたとしたら一体今頃どうなっていたのやら。だが案外光努達の知らないところで10年前の人物が來ていたりするかもしれない。10年バズーカに当たったものは、あくまで10年後の人物と時代を入れ替わるだけで、場所までは同じになれないからしょうがない。

「ん？」

所構わず角材やダンボールが廊下のあちこちに置いてあつたボンゴレアジト内。そんな廊下をあてもなく進んでいく光努は扉があつたので開いてみると、まるで別の作りの空間が広がっていた。

さつきから見慣れた光景と違って、少し中華風にも見える和風建築の廊下が向こうには広がっていた。同じ基地内なのになぜに廊下の途中から扉一枚挟んでここまで違う作りののだろうかという疑問も一瞬だけ持ったが、それよりも好奇心が光努を突き動かして廊下を進み、手近な部屋の襖を開けた。

「おっ」

「ん？」

襖を開けた先にあつた部屋は、床一面に敷き詰められた畳。灯夜の家も畳だつたため、懐かしい匂いを光努の鼻腔がくすぐり、中央に座っていた人物を見て思わず声を上げた。

黒髪に黒いスーツを着用し、鋭い目をした20代程の男性。知らない人物だが、光努の記憶が昔のその人物を探し出し、おそらくコイツだろうという予想を既に立てて確信していた。

「よ、恭弥」

故に問題なく、軽く手を上げて楽しげに笑つた。

「……白神光努」

そこにいたのは、10年後の雲雀恭弥だつた。

『隣の修行は面白そう』

笹川了平とクロームの二人がボンゴレアジトに来たことで、ツナ達を含めアジトにいたメンバーは皆一様に喜んだ。

了平がこのアジトに来たのは、今や壊滅状態に陥られたボンゴレ上層部からの指令を持ち帰ること。

10年前のツナ達がこの時代に来たという情報は、とある筋からヴァリアーへ伝えられ、ちょうどそこへ一緒に居いた了平にも伝えられた。このことを知るボンゴレと同盟ファミリーのトップ達が、10年前のツナ達を戦力と数え、指示した指令とは、『5日後にミルフィオーレファミリー日本支部の主要施設の破壊』。

ツナ達にとつては急な話だが、この機を逃すと、次にいつミルフィオーレに有効な手立てを打てるかわからないのが現状。だがこの指示も、ツナ達にとつてもの目標、過去へ帰る為の目標と偶然にも一致している。

過去へ帰る為に倒す目標は、入江正一。

そして今回の指示で攻めるミルフィオーレ日本支部の支部長が、入江正一なのである。

この戦いが、過去へ帰ることにつながるかもしれない。

ツナの決断によって、ミルフィオーレのアジトに攻めるかどうかが決められる。

本来はボンゴレの上層部が決めたことなので、このアジトのも例外なく作戦参加なのだが、了平は日本でのボンゴレアジトのことは、主であるツナが決めるべきだと本部に強く推薦した。10年前とは違い、極限な熱血なのは変わらないが、全てを知り、理解し、正しい選択肢を考えることのできる大人へと成長したことに、リボンも笑みを浮かべていた。

返答の期限はずばり本日中。

それまでにツナはこれからを考え、決めていく。

過去へ帰る為、仲間を守るために、この戦いをするべきなのかと。

「5日後の殴り込みとかやるな。何？結局やるの？」

「ちよ！それって俺には責任重すぎるんだけど！」

「でも本日中に決めるんだろ？」

「いきなりそんなこと言われても……て、光努！」

いつの間にかツナの隣で座っていたのは、まさしく光努そのもの。相変わらずの白髪

と楽しそうな笑みが特徴的な少年。ツナ達はいきなり現れた光努に対して多種多様な反応を示していた。

ツナ、獄寺、山本の、光努とよく面識のある者達からしてみれば、自分たちのよく知っている10年前の光努がいることに驚愕。

ビアンキ、フウ太と、光努と多少の面識のある者達も少し驚いたふうにしていた。

そして、ラル、ジャンニーニと、光努と全く面識のないものは、誰だ? というような反応をしていた。

「光努!」

「てめ! 光努! なんでここに!」

「よ、久しぶりだな、隼人に武。みんな揃ってると10年後とは思えねーな」

「んなわけねえだろ!」

「うん、冗談だ」

「このやろう!」

「まあまあ獄寺。それにしてもおまえ10年前の光努だよな?」

「そうそう。いろいろあつてこつち来たんだ」

相変わらず底抜けに能天気で明るい笑顔の山本と、こちらも相変わらず敵対心丸出しの獄寺であつた。

「沢田、そいつは誰だ？」

声を発したのは、ラル・ミルチ。背中ほどまである黒髪に、右目の横に奇妙な痣のある女性。沢田家光率いるボンゴレ門外顧問組織の人間。

アルコバレーノ出来損ないと自称する人物で、10年前の時点ではリボンやコロネ口達と同じ赤ん坊であった。今では普通の大人の女性へとなっているため、アルコバレーノの呪いというものがどういものか分かっていないツナ達にとっては、疑問が占めているが、この時代において疑問だらけなのでもはやどうでもよくなってきたらしい。

最も、アルコバレーノの呪いに理解のある光努はそれがどういいう状態化を説明がなくともなんとなく察していた。

「えっと、10年前から来たオレのクラスメートの光努だよ」

「白神光努だ。光努とでも呼んでくれ」

光努が言うのと、ラルは少し思案げに顎に手を当てて、何か思い立ったように口を開いた。

「光努？お前もしかして、10年前に行方不明になったイリスファミリーの2代目の白神光努か？」

「あれ？よく知ってるね」

「一時期マフィア間では有名だったからな。現れたイリスのボスがまた消えたってな」
「ははは、確かに」

「それを機に多くのマフィアがイリスファミリーに突っ込んだが、瞬殺されたのも有名な話だ」

「ばつかだなあ、イリスがそう簡単に落ちるわけないのに」

「でも今はボンゴレと同じで壊滅的だろ」

「リボーン、もっとオブラートに包んでくれよ。まさにその通りだけどさ」

「だろ」

はははと笑いあう光努とリボーンに、ラルはジト目で見ている。

正直イリスのボスといっても、ラルから見ればただの中学生にしか見えない。どこをどう見たらあのイリスのボスになれるのが全く思い浮かばないが、その手にはまったフィオーレリングを見て、少し目を細めたのだった。

「恭弥もいるし了平とクロームも来た。これでボンゴレの守護者勢ぞろいだな」

「雲雀さんにも会ったの？」

「さすが10年後の恭弥。昔よりおとなしかったよ。ちよつと話すだけですぐにこつち来た」

（二人が戦わなくてよかったあ!! ナイス雲雀さんの10年間の成長!）

光努と雲雀の二人が戦っているのを2回程目撃しているだけあって、この場所で戦えば何が起こるかわからないので、ツナが内心かなりホツとしていたのは本人のあずかり知らぬところである。

「それよりツナ、今から修行だろ。俺もまぜてよ」

「え?でもリボーン・・・」

ボンゴレがミルフィオーレのアジトを強襲するのであって、特にイリスの光努は修行とかをする必要はないのではというツナの考えだが、正直修行しても特に問題ない。この世界で生き延びる確率が高くなっているのもむしろ修行したほうがいいともリボーンは思っていた。最も、光努がそう簡単にやられるとも思っているのだが。

「いいんじゃないか。ラル、ツナと一緒に少し光努見てやってくれ」

「別にいいが、使えるのか?」

元軍人の教官だったためか、鋭く威圧感のある視線を光努に向けるのだが、当の本人は楽しげに笑ってたままだった。

「おお、広いな」

ツナとラル、リボンと一緒に光努がやって来たのは、広い広いトレーニングルームの一つ。シンプルな作りだが広さは並中の体育館よりも遙かに広い。しかもトレーニング用になっているため、多少の攻撃でもビクともしないように頑丈な作りとなっている。それでもやりすぎると壊れるには壊れるのだが、それは仕方のないことである。

「白神光努、おまえの力を見せてもらおうか。沢田、準備はいいか」

ごくりと、錠剤を飲み干した瞬間、ツナの額には、オレンジ色の炎が灯された。

ツナが飲んだのは、死ぬ気丸。

リング争奪戦の後、イタリアに帰るバジルから選別にもらった錠剤。飲むことで死ぬ気状態になることができる家光手製の丸薬である。

そして両手に付けたグローブ。黒色と銀色の生地に、手の甲には、大空のボンゴレリングと同じ形のボンゴレの紋章を宿したグローブ。

Xグロ^{イクス}ープ^{バージョン}Ver. ^{ボンゴレリング}V.R.!

この時代で10年後の雲雀の協力もあり、ボンゴレの試練を乗り越えることで到達したツナの新たな力。

全てを見透かすような瞳。拳を握るグローブから燃える炎は、鮮やかな澄み渡ったオレンジの炎。人数の限りなく少ない貴重な炎、大空の属性の死ぬ気の炎。しかも通常より遥かに純度の高い炎である。

死ぬ気の炎は、炎そのもの大きさによって力が変わるのでなく、その純度によって力を増す。例として上げれば、電気に酷似した雷の死ぬ気の炎は、その純度が増せば増すほどに鋭く、炎単体での攻撃力が遥かに高くなる。混じりけのない澄みきったような炎の色は、光努も思わず見入ってしまったくらいに綺麗だった。

「XANXUSとの戦いよりも、炎が強いな」
ぞくり。

相変わらずの楽しそうな光努の笑みだが、強い炎を纏うツナを見て笑う光努の瞳に、一瞬だがラルは威圧感のような物を感じた。なんの変哲もないただの少年にしか見えなかった為、ツナと戦うことでどの程度の力を持つか図ろうとした。だが、得体の知れない力を、ラルは感じていた。

自身の右手を掲げ、両者戦闘態勢に入ったことを確認し、その手を振り下ろした。

「始め！」

その瞬間、ツナの姿が消えた。

両手から放出される大空の炎。その威力が高いため、普通のものには一瞬でその場か

ら消えたようにしか見えない。ツナと距離をおいて対峙していた光努に、ツナの攻撃が叩き込まれる。そう思っていたラルだが、その予想は全く別の結果によつて裏切られた。

一瞬でツナが消えた次の瞬間、目を見開いたラルの瞳に映った光景は、光努によつて胸ぐらを掴まれて床に叩きつけられているツナの姿だった。

(何だ、今のは……)

ツナのXグロブの進化形態であるVer. V. R. は、7属性随一の推進力という割る大空の炎の純度も上がり、前のXグロブよりも遥かに強い推進力が得られる。

ツナはまだ完璧と思う程扱いがうまくなったというわけではないが、それでもこの時代のミルフィオーレのC級の人間を倒せるくらいには強い。さすがに雲雀程の相手と戦えば、超スピードで動こうが、まだぎこちなさの残る動きの超スピードな為、容易に突っ込めばカウンターを仕掛けられる。

(あいつが沢田のあのグロブを見たのは今が初めてのはず！にも関わらず、あれを一目で見切ったのか!?)

ラルとリボーンは、消えるツナの姿と、接近した後にはぶれた光努の姿を捉えた。

炎を放出し、一瞬でツナが光努の正面に移動した。そのまま炎を纏った拳を光努に叩き込もうとしたが、光努はふらりと地面へと倒れ込んだ。

当然光努へと向けたツナの拳は空振り、ちょうど体制的には、ツナと光努と地面が並行に横になる形。地面から少し離れて倒れている途中の光努。その上で拳を突き出した状態のツナ。

その瞬間、光努の右手がツナの胸ぐらへと伸びて掴み、自分の体をひねるようにしてツナを引き込み、お互いに態勢を入れ替えてツナを床へと叩きつけた。

この全ての工程を、わずか一瞬で全て行ったことに、ラルは冷や汗を流していた。

(沢田がまだグローブの扱いに慣れてないとはいえ、あいつ、一体何者だ?)

ボウ!

地面に叩きつけられたツナだが、両手の炎を後ろに放出することで体を起こし、光努の手を振り払って上空へと飛びだして滞空した。

(一度骸が憑依した状態で戦ったことがあるが、案外これが初めてだな)

——光努本人と戦うのは。

反射神経や動体視力、身体能力は、10年後の雲雀並にカウンターを仕掛けてくる。先ほどの一撃でそれを感じたツナは、最初のように無闇やたらと、推進力を生かして突っ込み攻撃することをやめた。

滞空したまま、両手と額にさらに激しい炎を纏わせ、静かに光努を見据える。

「今度はこっちからいくぞ、ツナ！」

「来い、光努！」

『白い綿毛』

「はあ!!」

ビュッ!

ツナの死ぬ気の炎を纏った拳が光努の顔に吸い込まれるように放たれたが、それを首をかしげること回避した光努は、今度はツナに拳を放った。

すぐさま炎を噴出して後ろへと距離をとり、そのあとを追うように光努は床を蹴ってついて行つたが、今度は上へとツナは方向転換。光努もやはり後を追うようにして上へと跳び上がる。

だがそれを向かえ打つように、ツナは上へと飛んだ体制から体を縦に回転させるようにして、踵を思い切り跳んで来た光努へと叩き込んだ。

それでもそう簡単に当たるべくもなく、腕をクロスさせてガードしたが、そこは地面から離れているため踏ん張れず、そのまま重力に逆らつて床へと飛ばされたが、光努は難なく着地した。

「どうだラル。光努は」

「異常だな。あのグローブにまだ慣れていないとはいえ、炎も使わず身体能力だけで互角に戦っている。いや、あいつはまだまだ余裕そうだな」

最初は驚き、冷や汗を流したラルだが、ツナと光努の戦いを見ているうちにとりあえず慣れ、冷静に光努を分析し始めていた。

「身一つであれだけ動ける人間など、風を思い出すな」

「俺もだ。光努の腕力や脚力はすげーからな」

風とは、赤いおしやぶりを持つアルコバレーノの一人。

108の拳法を編み出した武道の達人であり、イーピンの師匠でもある人物である。

「しかし、見れば見るほど異常だな」

ツナの拳を手のひらで受け、そのまま掴んで床へと叩きつけようとする。

一人一人持ち上げるほどに腕力が高い光努にとっては、腕一本でツナを振り回すことも可能だったが、ツナは死ぬ気の炎の推進力を利用し、自分の体が光努の真上に来た瞬間に掴まれていない手から炎を放出させて逆にツナの方から向かい、光努に拳を叩き込む。

が、すぐにツナの手を離して後ろに跳んで距離を取ると、ツナの拳はそのまま床を碎く結果へと終わった。

先程から起こっているのは、お互いに避けて攻撃を叩き込むということ。空中へと逃げるツナに攻撃を仕掛けても、ツナほど宙を自在に飛ぶすべを持たないため、やはり攻撃がどうしても当たりにくくなる。それでも上空からのツナの攻撃を避けて受けてカウンターを仕掛けているのはさすがの一言だった。

「死ぬ気の炎は実際の炎のように熱を持ったエネルギー。にもかかわらず、素手で受け止めて平然としているとは、本当に人間か？」

「それは俺も思ったんだけどな。でも事実、あいつは一人の人間だろ。ただちよつと規格外みたいだけだな」

その時、トレーニングルームの扉が開いて誰か入ってきた。

ツナと光努の戦いを見ていたラルは、ちらりと扉へと向けたが、そこにいた人物を見た瞬間少し目を見開いた。

「獄燈籠!? なぜお前がここにいる?」

タバコの煙を吐きだしながら、歩いてくる獄燈籠がそこにはいた。

やることがあつたため、光努と了平とクロームがきたタイミングよりかは少し遅れてくることになり、ついさつきボンゴレアジトへと到着したのだった。

ラルとリボーンのところまで来て、ツナと光努が戦っているのを見て面白そうに目を細めた。

「ほう、あれが噂の、ボンゴレ10代目か。見たとこ10年前のようじゃが、中々どうして強そうじゃのう」

「ちやおつす籠ロウ。久しぶりだな」

「リボーンか、懐かしいのう。この時代にお前さんらは、もういないからな」

昔の友人に会えた喜びか、リボーンを見た獄燈籠の表情は本当に嬉しそうだった。

反対にラルは少し苦い表情をしていたのだが、その様子にリボーンは笑っていた。

「おい、俺を無視するな」

「ラルか、前に見たときよりも、相当無理しとるみたいじゃな」

「！」

「地上には非ノン・トゥリニセツテ7・線線が充満しとるのにな。ここは大丈夫みたいじゃが」

そう言つて鋭くラルを見る獄燈籠に、ラルも無言で睨み返す。

非ノン・トゥリニセツテ7・線線とは、アルコバレーノにとつて有害な物であり、この10年後の世界では大気

中に照射されているため、地上を歩くだけでアルコバレーノの体は呪いで蝕み、最終的に死にいたる。アルコバレーノのなりそこないであるラルも、リボーン達程ではないが有害なため、既にその体は呪いに蝕まれていた。

「余計なお世話だ。お前は どうしてこんなところにいる」

「なに、光努と一緒に日本に来たんじゃよ。ところで、あの二人は何をしとる？」

「光努の実力を見たくつてな、ツナとバトラせてんだ」

「ほう。じゃが、うちの光努に勝てるか？」

「今のツナじゃまだまだじゃねーか？」

「リボーン、そこは沢田を援護するところじゃないのか？」

「ボロクソ言つて指導するのが俺のスタイルだ」

「鬼かお前は」

「お前さんは人のこと言えないじゃろ」

「お前もな」

さてと、というふうにして獄燈籠が懐から取り出したのは、赤い色にアヤメの花の模様があしらえられた匣。その匣を見た瞬間、ラルとリボーンの目が少し細待った。

「何をする気だ？」

「ふむ、突然の攻撃に対応する訓練、とか面白そうじゃろ」

「面白いな」

「あまりやりすぎるとなよ」

全くもつて反対の色を見せないリボーンとラルに、自分で言っておきながら若干呆れたふうな獄燈籠。しかしスパルタのラルをもってやりすぎるといふ獄燈籠も獄燈籠であった。

竜をあしらった赤いリングをはめて、真っ赤な色の嵐の炎を灯した。

リングの上で揺らめく小さめの炎だが、その色は真紅色に燃え盛り、純度の高さが伺える。決して派手な炎ではないが、ラルやリボンもその炎を、獄燈籠の実力を肌で感じていた。

バシユ!

炎を匣に注入し、開いた匣から飛び出した嵐の炎の塊が、ツナと光努の戦いの中へと突っ込んでいった。

「!!」

突如自分達のところへ突っ込んできた炎の塊に、ひとまず戦うのをやめて二人共後ろに下がるのと上空へ行くことで距離を取った。さつきまでいた場所で炎の塊が停滞したが、本体がギルギルと渦を巻くように回転すると同時に、細かい嵐の炎の塊が当たりに飛び出した。

「うお!危ね」

飛んでくる細かい炎を避ける光努。大量に降ってくる炎を、的確に見切り、避ける。ツナも自身の炎を前にだし、大空の炎を噴出することで炎を受け止めた。

だが、

(炎を突き破ってくる!)

ツナの炎を突き抜けて、体まで飛んでくる炎。ひとまずその場で防御するのをやめ、上空を飛び回って炎を避けた。

そして避けるツナの瞳に映った炎の中身を、ツナは確かに見た。

(これは・・・羽!?)

よくよくと見れば、嵐の炎を纏った羽が辺りの壁に突き刺さっていた。

「つうか、あれって鳥か」

光努の言うとおり、嵐の炎の塊となつてツナと光努の間に位置していたのは、大きな鳥。

赤みがかった羽が所々にある全体的に黒い、独特の色をした鳥。実際にいるかどうかはともかく、匣用に付けられたカラーかもしれない。羽を広げた大きさは優に2メートルを超えるほどに巨大な鳥は、その鋭い瞳と嘴に鉤爪、威風堂々とした姿をしていた。

「鷲!」

アクイラ・テンペスタ

「嵐 鷲のフゼじゃ。ほれお前ら、一度ストップ」

パンパンと手を叩く獄燈籠の元に、大鷲が飛んで腕に止まる。

羽をたたみ、堂々としたその威厳溢れる姿は、まさに鳥の王者と呼ぶにふさわしい風格だった。

獄燈籠のストップ宣言に、ひとまず地面に降り立ったツナと光努は、リボン、ラル、

そして獄燈籠の元へと近寄ってきた。

「よう籠。用事は終わったのか？」

「終わった。じゃから行くぞ」

「了解♪じゃあな、ツナ」

「光努、どこに行くの？ていうかその人だれ？」

「獄燈籠つつつて、イリスファミリーの『アヤメ』だよ」

「それって確か、槍時さんと同じような人ってこと？」

「そうそう、そんな感じ」

「すごいざつくばらんな説明じゃな。まあ確かに確信だけ付いとるが」

ツナと獄燈籠は初対面。だが、光努の説明で2度あつた海棠槍時を思い出す。

1度目はコンビニ強盗の中、2度目は大空のリング戦に来たとき。

そしてそこからツナの頭の中では、じゃあ獄燈籠も常識的な人じゃないかな？という結論に至つたが、さつき問答無用で攻撃を仕掛けた時点でその考えは捨てたのだった。

何か失礼なことを考えたのを見破られたのか、フゼが獄燈籠の腕の上からツナにギリという鋭い目でツナを見ると、「ひい！」という風に怯えたのにラルが呆れたのは余談である。

「光努、籠。おめーらこのアジトから出るのか？」

「うん。日本にはルイがいるらしいからそっち行く」

「外はミルフィオーレだらけだけど、おめーらなら大丈夫だな」

「なんならわしが地上焼いてこようか?」

「そうだな、それもいいかもな」

「ちよーラル! 何物騒な同意してるの! ダメに決まってるじゃない! 籠さんも何言ってるの!」

どうでもいいが、獄燈籠さんというのだと何か言いにくいのでツナはボンゴレの超直感を駆使して直感的に呼びやすい籠さんと呼ぶことになったのだが、本当にどうでもいい。超直感の無駄遣いである。

鷺のフゼを匣に戻り、獄燈籠は自分の懐にしまう。そして光努と一緒にそのままトレーニングルームを出ようとする。

「ちよー! リボン大丈夫だよね!?! 本当にしらないよね?」

「大丈夫だ。籠は強^{つえ}ーからミスはしないはずだぞ」

「いやいや、誰もそんな心配してないよ!」

ツナの声も虚しく、光努と獄燈籠はトレーニングルームを、ボンゴレのアジトを去るのであった。

曲がったような木が生い茂り、少し不思議な雰囲気を持つ森の中、草を踏みしめる足音がする。

少し薄暗く、まだまだ時間帯的には速い時間。そろそろ明るみだして朝になりかけてきているのだろう。夜露で葉が少し濡れ、朝の風が中々に寒そうな雰囲気を出している。

そんな中歩く人物が羽織っている服が、風でふわりとはためくが、その人物は特に止まることなかった。

どこかの山の頂上だったのか、少し森の木々が開けた場所から辺りを見たとき、太陽がかすかに日をだして日の出に差し掛かったことを理解し、少し眩しい太陽光に目を細めた。

紫色の宝石の付いたシンプルなりリングをはめた右手と反対の手で、ポケットから匣を取り出した。リングから紫色の炎、つまり雲属性の炎を出し、匣へと注入する。

匣が開いて出てきたのは、白い綿毛。匣を植木鉢のようにして、出てきたというより

は咲いたというような言葉が合う。紫色の雲の炎を微かに、よく視認しなければ見えな
いほどに薄く、全体的に炎をおびている。

茎を手にとって息を吹くと、綿毛は細かくバラバラに飛び、風に乗ってあたりへと散
らばった。ふわふわとゆっくり飛んでいく綿毛を見つつ、見ていた人物はその長く後ろ
で一つに結われている頭を少しかいた。

ピッピッピッピ。

携帯端末が着信を告げたのを確認して、取り出した。

メールが来たのを確認し、端末を操作して映し出された文章を見た。

「ようルイー……これからそっち行くからよろしく☆by光努」

金色の長めの髪に、羽織られた白衣。

飛び散った綿毛を見ながら匣をポケットに戻し、だんだんと太陽が登っていく様を見
ながら、これから来る楽しみに、思わず微笑んだ。

『獲洞山、そこは入口であった』

ドオオン!!

突然の音に、小さな小鳥や大きな鳥も、森から空へと驚いて飛ばたいていった。ギギギという歪な音がすると同時に、倒れた大木が他の木や草を巻き込む。近くで様子を見ていた小動物も、鳥たちと同じように一目散に逃げ去った。

自然災害か、人為的手段か？

通常倒れそうにないような木だが、根元の方からぼつきりと折られている。

そう、折られている。

自然の力でもなく、明らかに人の手によつて、ありえないことだが、人の拳によつて大木が折り倒されていた。

その張本にである人物が、自身の右手の拳を振りかぶつたままの姿勢で止まり、そのそばに、その拳を避けたと思われる、首をかしげた体制で止まっている人物がいた。

柔らかそうな白い髪に、右手にハメられて白い石の付いたリングが特徴的な少年。その表情は少年らしくない、無表情だった。

そしてもう一人は高齢の男性。白髪をバンダナで多い、深緑の軍服のような服を着たスタイル。その眼光は年齢とは売って変わり、鋭く生き生きとしている。

拳を振ったのは少年。

そして避けたのは男性。

少年は白神光努。男性は獄燈籠

二人の何があつたのか？何か確執があつたのか？

それを知るのもはこの場において、本人たち以外誰もいないのであつた。

話は遡ること数時間前。

ボンゴレの地下アジトから出てルイのいるイリスの日本アジトへと目指す光努と獄燈籠の二人。

基本的にリングを使わなければミルフィオーレファミリーも、リーダーなどで拾えず、地上を普通に闊歩することができると、二人は歩いているミルフィオーレの人間に見つからないようにするだけでひとまず簡単に並盛町を出た。

そのあとは基本的に公共機関を特に使わず、徒歩とあとは走るといふ原始的な移動手段によつて移動した。光努は場所を知らないため、基本的に獄燈籠に道案内をまるなげ。しばらく走り続けること数時間、着いた場所はどこかの山の中だった。

先ほどまで普通の山道だったのに、だんだんと木が曲がりくねり、何やら童話のなかに入り込んだような不思議な雰囲気醸し出す森の風景へと変わった中、光努はどこかで見たことあるような、引つかかる感じを覚えた。

割と前に、ここに来たことがあるような気がする。

光努は自分の気のせいかと思つてその考えを切り捨てようとしたが、山道のなかにぼつんと立つあるのものを見てその考えをやはり拾い直した。

山道のなかにぼつんと立っていたのは、鳥居。

なんの変哲もないはずなのに、どこか不思議な、この森と同じような雰囲気を出すその鳥居に、確かに光努は見覚えがあった。

そう、それは割と前、大空のリング戦よりも前、ヴァリアーが日本へと襲来するよりももつと前の話。

灯夜の家にクローム、千種、犬の三人が居候させているとき、犬がどこからともなくもつてきたチラシに乗っている、幻覚強化のトレーニングを受けたことがある。その際にチラシに載っていた場所に来た光努とリルとコルと黒曜組の3人だったが、その場所で割とひどい目にあつたのを子供のリルとコル以外はともよく覚えている。

まさにその場所の入口にたつていたのが、山道にぼつんと建つた場違いな鳥居だつた。

不思議な感覚の雰囲気、曲がりくねるような木の森の中。

間違いない、ここは確かに、黒曜組特訓の際にきた場所だと、光努は確信した。

「なあ、籠。ここつてどこだ?」

「ん?ここか?ここは『獲洞山』かくどうさんといつてのう、わしの山じゃ」

「は?お前の山?」

光努の質問に対して、帰つてきたのは予想外の答え。

このどこぞの場所ともしれない山は、まさか獄燈籠の所有物だつたとは。

「わしが大量に罾を仕掛けた、一種のテーマパークのようになつとるぞ」

「罾、ね。それつてもしかして幻覚トレーニング用の罾とかあるか?」

「ほう、よく知つとるのう。他にも格闘能力向上とかもできるぞ」

「.....」

思い返せばあの黒曜組の特訓。

光努は常常あの最中に思っていた。理不尽に危なすぎるくらいに罠。

光努に傷をつけるほどに罠としてのレベルは遥かに高かった。

にもかかわらず、最終ゴールに到達地点で特になにもなく、あっさりと帰ることでもなるともやり残した感が残り、不満だけが微妙に残るという感覚。

光努はあの時、主催者ぶん殴ると思ったが、今日の前に主催者がいた。とくればやることはもちろん一つ。

「せい!!」

「おっと」

ドゴオオオン!!

鳥居を目に入れた瞬間、間髪いれずに獄燈籠の顔めがけて拳を振るったが、とっさの攻撃だったにもかかわらず、獄燈籠は光努の一直線な拳を、首をかしげることで躲したが、代わりに後ろにあった大木がばつきりと折れて倒されてしまった。

ここで冒頭の文に戻る。

「いきなりなんじやい。危ないじゃろ」

「実はな、籠。俺は昔クローム達と一緒にこの幻覚強化トレーニングに来たことがあるんだ」

「この幻覚コースに？」

「そして俺はここをクリアしたときこう思った、主催者ぶん殴ると！」

「それって理不尽じゃないんじや・・・」

「というわけで、一発だけだ安心しろお!!」

「ぬおつと！」

ビュン！

風きり音を残し、再び獄燈籠の顔に向かつて拳を振るうが、今度の攻撃も紙一重で躲される。今回は後ろに木があったわけでもなかったので普通に空を切っただけで終わった。

「さてさて、わしと無関係じやろ」

「何か最後の文章がイラッと来ました、まる」

ちなみに最後の帰り道に載っていた文章は、『おめでどう。これで君も最強に一步近づいた。帰りは燈籠の下にある階段から帰ってね☆』である。

命懸けで登った山の頂上でこれは腹立つ。特に最後の☆がイラッとくる。

「ほら、俺もたまには殴りたい衝動に駆られてき、この右手がどうしてもって」

「絶対嘘じやろ。お前実はどうでもいいんじやろ」

「うん、実はどうでもいいが・・・何かこう・・・違和感があるから、殴ってすつきり、

「みたいなの？」

「それでわしを殴るのはお門違いじゃろ」

「ほら、よく言うじゃない、部下の責任は社長の責任と」

「それを言うならわしの所属してる『アヤメ』のボスってお主じゃからお主の責任じゃ」

「……………」

「……………」

その時、一際強く吹いた風に乗ってきた白く、細かい物体が光努と獄燈籠の間を横切った。

「綿毛？」

ふよふよと浮いている綿毛を目で追い、視線と反対から足音が聞こえた。

「ほら、二人共。遊んでないで速く来いよ」

サクサク、という草を踏みしめる音とともに、木と木の間から姿を見せたのは、およそ20代程の男性だった。男性にしては長い鮮やかな金色の髪を、首の後ろあたりで一つに縛って流している髪型に、顔にかけられた縁のないメガネ。来ている真っ白な白衣が、風に揺られて裾がふわりと広がっている。

最後にあったのは数日前だったのに、なぜか懐かしく感じる。その人物が自分のしっぺている人物と同一ながら、別の人物とわかっていたから。それでもやはり、久しぶ

りに会ったということに、笑いがこみ上げてきた。

「ルイ！相変わらずだるそうだな」

「そういうお前も相変わらず楽しそうだな、光努」

イリスファミリー技術主任ルイ。獲洞山にて、光努と再会した。

「お、懐かしの鳥居」

「ここが入口になってんだよ」

黒曜組特訓の際に、入口として用いられた鳥居。

山道のなかにぽつんと立っているため、違和感はありません。大きさがおよそ2メートルと、家の扉ほどのサイズしかないからさらに違和感だらけ。

ルイが柱の一つに手を当て、カパツという軽い音とともに一部が開き、中には1〜9の数字のスイッチが載っているパネルが設置されていた。その中の数字を、高速で指を動かして入力する。ものの2、3秒で入力は終わったが、確実にこれ2桁以上入力しただ

ろとも思ったが、あえてスルーする。そうすると、鳥居の下の地面がスライドし、地下へと続く階段が現れた。

「イリスのアジトって地下にあったのか」

「まあ山の中は全部アジトになってるからな」

「それってどんだけ広いんだよ・・・」

「そのためにもわしの罠を幾らか撤去しなくてはならなくなつたんじゃがの、残念じゃ」
(それ大正解だな)

獄燈籠のつぶやきに光努は一瞥してスルーし、ルイに続いて地下への階段を降りていく。

「そういえばルイってメガネしてるけどどうして？悪くなつたの？」

「ん？これはメガネらしからぬメガネ。映像ディスプレイだ」

「というと？」

「最近の技術力は、コンタクトに映像を映し出すことも可能となつておつてのう。ルイのつけているメガネも、中々に多機能じゃよ」

石のレンガで作られたような通路を歩いていき、しばらく歩くと、開けた空間が現れた。そしてそこにあつた物を見て、光努は若干呆れていた。

(イリスの母屋がある！マジか！)

出口にでて目に入ったのが、イリスファミリーの本拠地で、少しの間光努が暮らしていた母やだった。形的には『口』の形の建物。中には芝生と一本の木が生えている中庭がついているはずだが、ここはどうなっているのやら。

それよりも、この空間の母屋の向こう側や横に、別の建物がいくつも見えるから、もはやアジトというより軽い地下都市になっているのに驚きである。

「いや、苦勞して山をくりぬいた甲斐があるというもの」

(どうやったんだろう、これ……)

驚愕、呆れを通り越して若干ドン引きの光努であった。

「ま、とりあえず中に入るか」

ひとまずルイの言葉に従って、懐かしの母屋へと入っていったのであった。

番外編『RJP、つまり……』

「リアルジュラシックパーク
RJPだー！」

焼き付けるような太陽が照りつける中、原始的な巨大な植物が生い茂る森の中で、少年は叫んだ。

白い、柔らかそうな髪をしている少年。

背丈も手足も小さいその姿は、年の功10歳にも満たないほどに幼い子供。今で言う
と幼稚園に通っていてもおかしくはないほどに小さい。

来ているのは作務衣のような和服のような服。服に入った幾何学模様を見ると
どこかの一族の民族衣装のようにも見える。

幼いその顔には、じりじりと照りつける太陽にあたって暑いのか、少し汗をかいているがとても楽しそうに笑っている。頬が膨らんで咀嚼をしているようなので、何かを食べているようだ。

ズズズ・ズズズ・ズズズ・ズズズ・ズズズ。

何かを引きずるような音。それも重量のあるものを引きずるような音。

少年が歩くに連れて地面に跡が残る。けど少年の後ろからではなく少年がの左手に握られているものから跡が出ている。

頑丈そうな鱗に覆われた巨体。簡単に木を切り裂きそうな爪。

強靱な顎と牙。意識はなく引きずられたまま。尻尾を少年は掴み引きずっている。明らかに子供が引きずれる体重ではないのだが、少年はなんの苦もなく引きずっている。反対の手には果実。りんごのように赤い果実。まるで小さい赤いパイナップルのような果実。小さくかじられた痕があることから、少年が先程から咀嚼しているのはその果実のようだ。

シヤクシヤク。

「あま〜い♪」

「お？でかいの仕留めたな」

声がした。

少年が上を向くと、巨大な木の上に人影があつた。

「みてみてー！」

少年が嬉しそうな顔をして勢いよく果実を持つ手を木の上に向かって振る。

人影はそれに答えるように木の上から飛び降りて少年の前に降り立つ。

少年より大きい人影。Tシャツを来て、七分丈のズボン。素足にサンダルを履いて頭には麦わら帽子をかぶつた男。

太陽を遮るようにして目深にかぶつた麦わら帽子からは、白銀の長い髪が溢れている。後ろで一つに括つたその髪、そして服装。その男の格好はこの場所に置いて明らか
に異様だった。

そして少年も。というより、この場所に人がいるのがすでに異様。

周りに異常な大きさの植物が生い茂り、獐猛な爪や牙を持った動物、というには凶暴
そうな生物。つまり恐竜とよばれる生物たち。

ここは、恐竜の住む世界だった。

パチパチ。

焚き火の中にある薪が爆ぜる音。

「♪~~~~♪~~~~」

「ほら、もう少しだ」

少年は鼻歌を歌いながら待ち遠しそうに体を揺すっている。

男はそんな少年に声をかけながら手を動かす。

焚き火の上にあるのは木の枝に刺さった肉。先ほど少年が引きずっていた恐竜の尻尾から切り出した肉である。

男は木の枝に刺した肉を二本持つて焚き火の上からくるくると回しつつ肉を焼いていた。男の足元には何枚もの葉っぱの上に乗った色様々な木の实。全て砕かれて粉状になっている。

男は片手で肉を焼き、もう片方の手で粉状の木の实をつまんで肉にふりかける。そんなことを繰り返して肉に少し焦げ目が付いたら焚き火から離れた。

「よしできた！ほら」

「やったー！」

男が枝についた肉を少年の方に投げると少年は両手で掴む。

「いったただつきまーす！」

そう言つて肉にかぶりつく。硬そうな鱗や皮膚などは取り除いて焼かれたので肉は柔らかくなり、男のふりかけた粉で味と香りを付けられた肉は香ばしい香りを出す。少年は夢中で食べてあつという間に自分の分は食べ尽くしてしまった。

「おかわり！」

「おいおい、食べ過ぎだぞ」

男は自分の分の肉を食べつとなりをチラリと見ると、巨大な骨が土の上に横たわっていた。少年はその体に似合わず、かなりの大食漢のようだ。

10メートル程もあった恐竜の肉の大半は少年の腹の中に消えていた。

少年は身軽だった。

大樹に脚を付けて跳び、恐竜の背を踏みつけ進む。途中にやってきた生物達は、少年を捕らえることができずにいた。決して鈍いわけではない。少年のスピードと反射神経が動物以上にずば抜けており、全て躲して進んでいた。

少年が向かっているのは川。肉の次は魚が食べたいと思つたのか、男に魚を獲つてくると言つて駆け出した。

森を抜け、広大な草原を駆け抜け、川に到着した少年。

すぐに川の中に飛び込んだ。

一足で跳び、川の中にあつた岩の上に飛び乗り流れる川を覗く。幼い澄んだ瞳を開き、注意深く水の中を見る。

川の中には魚が多く泳いでいる。少年は手を伸ばして取ろうと思ひ手を止めた。

水の表面に振動があつたとき、波紋が水の中に広がり魚はすぐに気づく。人に強い風が当たるように、魚は何かくると察知して素早く逃げる。

だからというわけではないが、少年は本能的にむやみに水に手を入れるのをやめた。すぐに逃げられるから。だから少年は手から力を抜いた。

力を抜き、スピードを上げるため。水面の振動を察知して逃げる魚よりも早く手を動かして魚を獲るために。

ヒュツ！パシヤ！

一瞬。少年の振り上げた手が一瞬ぶれたと思つたら水面か水しぶきがたち、反対側の手があつた。

少年は一瞬で川の中に手を入れ、魚が動くよりも早く魚の腹を掴み、水の中から押し出した。熊が川で魚を取るような態勢。だけどそれよりも明らかに早く、少年は魚を取つた。

ヒュツ！パシヤ！

ヒュツ！パシヤ！

ヒュツ！パシヤ！

ヒュツ！パシヤ！

それを何度も繰り返すと、魚を飛ばした川辺には大量の魚がピチピチと陸の上で跳ねていた。少年は満足したのか、岩から跳んで川辺へと脚をつけ、魚を大きな葉に包んだ。少し長めの木の枝に、袋状にして魚を入れた葉をつるでしばり、満足そうに歩き出した。

否、歩こうとした。

ドオオオン!!

少年は背後、川のある方に振り返った。

いきなり起こった巨大な爆音。

少年が川を見ると、驚愕して瞳を見開いた。

川が消えていた。

先程まで川のあった場所には大きなクレーターができており、川の水は蒸発していた。巨大なクレーターにはしゅうしゅうと蒸発した川の水の蒸気が立ち上り、中央には真っ赤に燃える少し大きめの石があった。

「これ……隕石？」

隕石。宇宙に漂う個体物質、岩などの物が惑星に飛来した物を言う。

大気圏で燃え尽きるものも多いが、中には物質としての形を保ったまま落ちてくるものもある。この隕石もその一つだろう。

だがそれで終わりではなかった。

キラッ。

少年の異常なる視力ははるか上空が見えた。飛来してくる燃える岩。こちらに向かってくる。

少年はすぐにその場を離れるが、少年が先程までいたところに再び隕石が飛来した。

ドオオオオオオン!!

先ほどよりも大きい岩は、あたりに衝撃を放った。少年は踏ん張って飛ばされぬようにしたが、まだ終わりではなかった。

明らかに以上に、空から飛来してくる物質は多かった。

ドオオオオン! ドオン!! ドオオオオオオン!!

あちこちで爆発音が、木々が焼ける音が、生物の鳴く音が聞こえてきた。

少年がすぐに先ほど男と別れた森の中に戻っていかうとしたとき、

「生まれ。もう火の海だ」

男は現れた。上空から鳥類に乗ってきたのか、巨大な影はそのまま過ぎ去っていった。小さな人影が上から降って少年の行く手を阻んだ。

「流星群か? 見る分にはいいが、喰らう分には面倒だな」

ドゴオオオオオオオオ!!

「!!」

先ほどの隕石と比べ物にならないひとときわ大きい爆音が辺りに響いた。

少年と男は同時に同じ方向を見ると遠くに見えたのは山。

それは火山。煙をだし、山の頂上からは溶岩が漏れ出てきていた。

「隕石が火山にあたって爆発したか。ここももうすぐ焼け野原だな」

「どうするの？」

「さすがに隕石はお前にはまだ危ないし、ひとまず」

ドオウ!!

男が手を少し顔の当たりに掲げると、その手のひらに一瞬にして石のような物が現れた。現れたというには少々語弊がある。ギョルギョルと高速で回転し、真っ赤に熱せられていくことから、この拳大の石も空から降ってきたということ。

それを受け止めて平然としている男は、一先ず手に収まった石を捨てて、少年を持ち上げて自分の肩に乗せた。

「逃げるか♪」

「うん！」

地面を砕きながら上空高くへと飛び上がり、空中に滞空したと思ったら、男は宙を蹴って横へと跳んで行った。正確には、跳んで来た隕石を蹴って宙を移動しているのがある。そんなことを繰り返しながら、上空を駆けていき、隕石到達地点から割と離れたところまで跳んで来た。

スタリという、はるか上空から直で地面に降り立ったとは思えないような着地音を出しながら、どこかの山の頂上へと降り立った二人は、一先ず少し歩き、男は大木を折つ

て横におき、その上に二人共腰掛けた。

目の前、山の向こうの風景はもはや真つ赤に燃え上がり、空は火山灰で黒く染まりつつ、空から赤い光がどんどん地面へと落ちていく。その度にドーンドーンという大きな音がし、物騒な光景がどんどんと出来上がっていくのだが、少年の方は無邪気に笑って割と楽しそうだ。

いや、男の方も結構楽しそうだ。

「たーまやー」

「? たーまやー!」

男の言った言葉を聞いて、少年は意味はわからなくとも無邪気に楽しそうに同じ言葉を叫ぶ。そんな光景をみて、男は穏やかに微笑むのだった。この場において男のセリフも正しいとは言えないのだけれど、それを指摘する者はこの場になかった。

特に止まる気配の見えず、範囲を拡大し続ける流星群を見てる二人は、だんだん飽きてきたのか、よっこらせというふうにして丸太のから降りて、地面の上に立った。

「よし、じゃあ次どこいこうか」

「うーん……海!」

「よし、じゃあアトランティス大陸でも行こうか」

「わーい」

二人が会話をしているさなか、男が見える範囲外に、ソレは迫っていた。

再び軌道上より、直径10メートル級の隕石が迫った。大気圏を突入し、全体的に赤く染まり高温の熱を纏ながら、空気を焼いて降ってきた隕石は、寸分違わず、神のいたずらが、少年と男の元へと跳んで来た。

パン！

男が手を叩いたと同時に、隕石が衝突。

山を凹ませ、地面をえぐり、あたりの木々を吹き飛ばして燃やしながら、地面を潜った隕石は大規模な地殻変動起こす。

だが隕石がぶつかったのは地球だけだった。

誰にぶつかるもなく、地球を壊す。

隕石が衝突する直前にいた二人だったが、手が叩かれた瞬間に、まるで最初からその場にいなかったように消えてしまった。

あとに残ったのは、隕石が落ちたクレーター。

この地球上も、あと少しで生き物が住めなくなるだろう。

恐竜は絶滅し、そのほかの生物も滅びる。そこから新たな生物が生まれ、発展していくのに、一体何年何百年、何万年何億年とかかるのだろうか。それは誰も知ることのない。先の未来のことなど誰も知らない。知っていないからこそ、その時に頑張れる。可

能性ということ、奇跡ということ、不思議なことを信じていることができる。

あとはその邪魔をしないようにするだけ。この世界はこの世界に任せる。

既にこの世界には誰もいなかった。

彼らはまたどこかへと行く。

旅行と称して、知らない場所、未発見の場所、空想上の場所、そんな不思議なところへ行く。

どこにだって行ける。

だって、彼らを止める者など、誰もいないのだから。

『まだ壊滅はしてないさ』

「ん？綿毛？」

ふよふよと光努の目の前をよく切るようにして飛んでいる綿毛を目でおい、そのまま開けた扉から外（地下なのに外？）へと飛んでいったのを見送った。そんな様子を見ていたルイが、「あ、そうか」というふうに関口を開いた。

「光努はまだ知らなかったな」

「ん？何が？」

ルイが懐から取り出したのは、紫色の下地に、白いアヤメの花のあしらった模様が付けた匣。

「さっきの綿毛は、ソツファイオーネ・ヌーヴオラ雲 綿 毛。俺の匣の試作品だ」

「試作？」

「多数増殖監視装置。それがこの匣」

ソツファイオーネ・ヌーヴオラ

雲 綿 毛は雲属性の炎が内部をとおり、傍目には普通の綿毛にしか見えない少々変わった匣兵器。綿毛の一つ一つが監視カメラになっており、くつついた場所から他の場所を監視することができる。

そして、雲属性の匣の特徴は“増殖”。

匣から出してから風に乗って普通の綿毛のようにあちこちに飛んで行き、くつついた場所からさらに同じ綿毛を増殖させ、そこからさらに風に乗って飛んでいく。そんなことを繰り返し、一度の開匣で多く、遠くに監視カメラを運ぶことができるという、監視目的の匣である。

花となる過程を吹っ飛ばしていることに若干の疑問があるか、そこは匣使用ということとで納得することにした。

だが、これにはいくつか欠点がある。

「欠点？」

「まず一つに、普通の綿毛よろしく、耐久力がほぼ無い。普通に潰れるし、鳥に食われることもある」

「なるほど」

「そして二つ目の欠点は、移動手段が風だより」

「つまり思い通りの場所に設置できないと」

しかも無風状態なら運ばれもしないし、風が弱ければ広範囲に広がらない。

まさに普通の綿毛の特徴そのままである。しかも場所によつては本当にどうでもいいことしか監視できない。

「そして三つ目の欠点」

それは、増殖能力が多すぎるということ。

最初に大量の綿毛が空を飛び、一つ一つがさらに大量に増殖させ、とんでもない数のカメラが次々に製造される。優に1000を超える監視装置だが、それを最終的にルイ本人が見るのは、ひとつのディスプレイからである。つまり、こんなに多く見てられるわけがない、ということ。分割してみるのも難しいし、一つの映像を切り替えて見るのも効率が悪い。

「ま、まだまだ改良の余地ありかな」

そう言つて匣を懐にしまった。

「ちなみに、この匣は一度ばらまくと回収は不可能だ」

「え、それつて匣として微妙じゃね？」

「しかも炎が切れるとただの綿毛になるという地球にやさしい設定だ」

「まあ確かに優しいな」

「だが一度開匣すれば、多分3日くらいは持つ」

「すげえ！」

「限らない省エネ設定だからな」

普通はそれだけで持つのか？という疑問だった。

廊下の扉を一つあけ、中は中々に高級ホテルの一室のような部屋。

人まずソファに座った光努、ルイ、獄燈籠の三人は、どこからか持ってきた紅茶を飲み、一息付いた。

「さて、まずイリスの壊滅とそれに伴う被害なのだが」

「うん」

「意外と被害が少ない」

「少ない？」

壊滅、という言葉の割に被害が少ないとはこれいかに。

ミルフィオーレファミリーがイリスファミリーを攻めたのは事実だが、攻撃された場所は2つ。

一つはイリスの母屋、他にも技術舎等が建っている本拠地。そしてもう一つが、日本の黒道邸。

「灯夜の家もか」

「そう、ミルフィオーレが狙ったのは、マフィアとしての部分だけだったんだ」

元々大企業であるイリスファミリーは、そもそもマフィアらしい部分の方が割合が少ない。

なので戦う対象としては、戦力があると仮定されている二つを狙うのが当然だった。だが、ミルフィオーレが破壊したのは、既にほとんどがもぬけの殻となっていた二つの場所。

黒道灯夜は、事前にミルフィオーレが来ることを知り、家を残して家族共々日本を一旦離れ、避難させた。

本拠地にいたルイは、こちらでも事前ミルフィオーレが来ることを予想、その場所にいたスタッフたちを日本へと送り、ここ、地下アジトへと拠点を映した。

他のファミリーメンバーは、『アヤメ』もそうだがほとんどが世界中を飛び回っていたので襲撃には合わなかったが、一先ず全員の無事は確認。

未だに世界中を飛んでいるものと、日本にいる元とで、イリスファミリーは別れた。残った企業的な部分は、ミルフィオーレが吸収合併とでも言うのか、会社を乗っ取り、一先ず従来通りに会社は動くことで特に問題もなく、せいぜい会社名が変わったくらいであった。

そうして結果として、イリスに残ったのは、もはや日本のアジトのみだった。

「なるほど、もはやイリスは壊滅的だね。ほとんどが企業の部分だっただけに、マフィア

の部分壊滅しても全体的に見ればボンゴレと比べて確かに被害が少ないといえるな」
「ま、言えるだけで実際には被害は被害。今このアジトの他の建物には、元々本拠地にした奴らもいる。あとはあちこち飛び回っているやつらだな」

「そして、今やミルフィオーレが世界一のマフィアとなりました、と」
「そういうことだな」

10年後は面倒だな。どうやってイリス復活させるか。いや、まだ壊滅したわけじゃないけど」

「こつちのことより、お前は過去に帰る方法を調べた方がいいんじゃないのか？」
ルイの言うこともごもつとも。

イリスとボンゴレの情報を合わせたところ、やはり光努も入江正一の元へと向かうのが、一番過去に帰る近道になるそうだ。

ボンゴレ上層部が決めた、日本に置けるミルフィオーレ支部のメローネ基地へと攻め入るのは、あと4日。もしも行くとしたら、ボンゴレがせめて基地内がバタバタとしている時に行ったほうがいいというのはおおよそ予想がつく。

「ま、確かに単独で行くよりはそのほうがいいかもしれないな。メローネ基地は広いし敵も多い。負けるとは言わないが、戦わないに越したことはないからな」

「あとは、ツナが行くかどうか決めるだけだけど、多分昨日の時点で決めてると思うから

連絡してみるか。ここからボンゴレアジトに連絡できるか？」

「造作もないな」

ノートパソコンを用意してカタカタと操作する。少ししてこちらに画面をくるりと向けると、ロード中という画面が数秒した後、驚くツナの顔が映し出された。

「よう、ツナ。1日ぶり」

『光努！どこにいるの?!』

相変わらず軽い光努の挨拶に、よく驚いた表情を見せるツナ。そんなツナの顔を見るのが中々に面白いなと思っている光努だが、一先ず本題に入ることにした。

「結局どうした？メローネ基地襲撃」

『うん、やつぱり、行くよ』

「いいのか？」

『敵のアジトに行けば、まだわからないことの手がかりもつかめるかもしれない。それに』

モニター越しにでも分かる。臆病な性格ながらも、その目には戦いの決意を、覚悟を宿していた。

『俺はやつぱり、こんな状況でみんなにいて欲しくない。もちろん、光努もだよ』

「・・・ふっ、お前らしいな。ツナ」

じつはこの時、ボンゴレ側では、クローム髑髏が急に容態が悪くなっていた。

何が起こったのか、クロームの幻覚の内蔵が崩れ始めた。このことを意味するのは、クロームの内蔵を厳格で補っていた張本人、六道骸になにかあったと考えるのが妥当。

今現在は、クローム自身の持つ幻覚能力を、霧のボンゴレリングの力により増幅させ、自分自身で自分の内蔵を補うという、まだまだ応急処置程度だが、それでも命の危機は脱出した。

しかし、それでも状況がよくなったとは言えない。骸に何が起こったのかということも、ツナは敵のアジトに行けば手がかりがつかめるかもしれないと考えたのである。

「それでだツナ、俺も敵の基地襲撃するからよろしく」

『・・・やっぱり行くんだ』

「あれ？驚かないのな」

『うん、まあ光努の言いそうなことだからだんだんと驚きに慣れてきたよ』

確かにいつまでも驚いていたらキリがない。

「ま、当日は現地集合。それまで修行頑張れよ」

『うん。光努も頑張つてね』

そして通信を切った光努は、室内を見渡して、そういえばというふうルイに質問する。

「籠は？いつの間にかいなくなってたな」

「籠はいろいろやることがあるからな。それより光努。俺たちもさっさとはじめろぞ」

そう言つてノートパソコンを閉じて懐にしまい、立ち上がつて部屋を出る。光努もついていくようにして部屋を出て、二人して廊下を歩く。

外の景色が地面の中という光景に、光努は珍しく、楽しさ半分呆れ半分といった心情だが、その表情は中々に楽しそうに笑っている。

「それで、このあとは？修行？」

「何言つてる。お前をここに読んだのは調べるためだ」

廊下をしぼらくあるき、一つの扉の前に立ち止まり、中を開く。

その中は、中々に広々としていて、機械が山のように積み重ねられている。他にもジャンク品の大量に入った箱があつたり、床や壁が配線をしてあつたり、よくわからない巨大なカプセルがあつたりと、まさに研究所といつても差し支えないような部屋が光努の目の前に広がっていた。

「さて、籠からおまえの修行場での話は聞いている」

「そうか」

「ここではお前の持つている、白い炎を調べる」

光努のファイオーレリングから発せられた白い炎。

どの属性のも当てはまらず、どんな特性があるかわからない。この時代において死ぬ気の炎を使うことと使わないことでは、戦力に確実に差がでる。自分の力を知り、完全に使いこなすことができなければ、いくら光努とはいえ、やられるのは時間の問題かもしれない。

ならば調べるまで、解析するまで！

「おまえの炎に少しだけだが心当たりもあるしな」

「心当たり？」

全く知られていない、というかあるかどうかかもしれない炎の存在に心当たりなど、なぜルイが持っているのか。

疑問の占める光努に向かって、ルイは言葉を出した。

「ハクリだよ」

「ハクリ？　そういえばあいつこの時代って」

「ハクリも行方不明だ、10年前からな」

「！　それってもしかして・・・」

「まあそれはあとでいい。今回の調べによる目標は、」

カチリ。

キーボードの一つを押すと、大型のディスプレイに映し出されたのは、何かの設計書。

動物のような、おそらく生物かもしれないようなイラストや、古ぼけた文字の羅列。単体では意味のなさない文字列が、薄汚れた？に書かれていた。その横にキーボードで打ったような文字も多く見られる。

よくわからない設計図だが、その中で光努も知っているような形を見つけた。縦も横も奥行も、全て同じ長さの立方体の箱のイラスト。

随分古い設計書だが、これがなんの設計書か光努は理解した。

そして光努が思った通りの言葉を、ルイは口にした。

「目標は光努、おまえの匣の完成だ」

『不可能を可能に』

「さて、ここにいくつかの設計書がある」

キーボードを操作して、ディスプレイに映し出された画像を一先ず閉じ、どこからか取り出したのは、薄汚れて茶色く変色した紙の束と、ぴつしりとした真っ白い封筒に入れた手紙らしきものと、クリップで止められたA4の紙の束を取り出して、ルイは言った。

「設計図？これ全部？」

どこからどう見ても設計書ではないようにしか見えないものであるが、一応設計図らしい。というかなんの設計図かもよくわかっていない光努に、ルイは笑いかけた。

「ジェペットの残した343編の設計書を元に、アニマル匣が作られたのは知ってるな」
「ああ。確かそのあとにヴェルデ達が装備とかのオリジナルの匣を作ったんだよな」

槍や刀、トンファーなどの武器を取り出すような匣や、テントランプなど、サバイバル用品などの匣などの多くがヴェルデ達が新たに作ったものである。

「実はその343編の設計書の他に、一般には知られていないがもう2編、ジエペットの残した設計書が存在したんだ」

「初耳だなそれは。けどその設計書も既に完成してるんだろ？」

「いや、その設計書はヴェルデ達が、制作不可能と判断して破棄された設計書だ」

イノチエンテイ、ヴェルデ、ケーニツヒ。匣を作り出した彼らは、ジエペットの残した343編の設計書を元にしてアニマル匣を作り出した。設計書はジエペットの時代と比べても、まだまだ問題が山積みとなっており、やはり誰にも見向きされなかった。

それを解決した技術力、頭脳を備えた三人は、オリジナルのアニマル匣を作り出した。実際は他にもいくつも問題があったのだが、偶然にもできた、というような言葉が似合うような偶然が多々起こり、結果として匣は無事に完成することができた。そのことに続き、多くのオリジナル匣も作り出した。にもかかわらず、天才的な科学者である彼らが不可能の烙印を押した設計書が、知られていないだけで2編、存在した。

「なんでそんな設計書をルイが持つてるんだ？」

机の上に置かれた古ぼけた紙の束を見ながら、光努はルイに最もな疑問をする。

三人の科学者が自分たちで不可能とした設計書。彼らにしてみれば、自分には無理とということを言ったこと。天才的な科学者であるがため、自分ができないことを公表することは自分たちのプライドにも関わり、あまり考えにくい。

その為、人知れず破棄したというのは当然といえば当然だ。だが、破棄されたにもかかわらずにルイが持っているのは、やはり不可解。だがその疑問は、案外簡単なことで解けるものだった。

「簡単なことだ。俺も匣作りしてたからな」

「ルイも!?!それって・・・」

「そう。イノチエンテイ、ヴェルデ、ケーニツヒ。俺はあいつらを知ってる。あいつらの匣作りを、俺も手伝ってた」

イノチエンテイ、ヴェルデ、ケーニツヒの三人によつて匣は作られた。

表向きはそうだったが、細かいところを説明すればその匣の製作過程には、彼らに協力した幾人かの人間もいた。ただの雑用だったり具材の調達係だったりと、様々な人間がいたが、ほとんどのものは彼ら三人の会話や研究についていくことができない者たちばかりだった。

だがその中には、彼らの研究を理解できる者もいた。

イリスファミリー技術研究主任、ルイ。

彼も、匣制作に携わっていた人間の一人だった。

「ジェペットの残した設計書を解読し、ほとんどの匣制作を可能にした。だけど、天才的な科学者のあいつらが頭をひねっても、度重なる偶然の産物とも呼べる成功が重なって

も、ついに製作できなかつた2編の設計書が残つてる」

「けどさ、今さのその設計書を持ち出してもどうしようつてんだ？ルイも匣作りしてたなら設計書を持つていても不思議じゃないけど、まさか自分なら作れるつていうのか？」

「そうだ」

迷いなく、即答するルイに光努は少し驚いた。

その目は自身に溢れてる、というよりかは、何か確信をしているような目だった。

「ヴェルデといえば、『ダ・ヴィンチの再来』つて呼ばれたアルコバレーノの一人

だろ？そいつらに作れないものが、なんで作れる？」

イタリアのルネサンス期を代表する芸術家、『レオナルド・ダ・ヴィンチ』。

有名などころで言えば、『最後の晚餐』や『モナ・リザ』などの絵だが、ダ・ヴィンチはその他にも、生物、音楽、科学、発明など、多方面で多くの業績を残し、『万能人』の異名で親しまれるほどの偉人。その再来とまで云われるヴェルデだが、そのヴェルデ本人の頭脳はその時代の先を行く頭脳。三人よれば文殊の知恵というが、ヴェルデ級の頭脳が三人集まり作り出したにもかかわらず、彼らの全員が匙を投げた。

「343のアニマル匣を作り出したにもかかわらず、なんで残りの2つは作れないと言つたかわかるか？」

「?技術的に不可能だったんだろ」

「いや、ほとんどの問題はクリアできた。まあ確かにいくつか問題もあったが、最大の理由はそのじゃない」

「最大の理由?」

「やつらのいた時代においても、この時代においても、匣の製作に使える物がなかったのが最大の理由だ」

匣の製作過程において、ジエペットが設計書を作ってから何世紀も放置されたのは、机上の空論、つまりその時代においてオーバテクノロジーということもあつたが、動力となるものの強大さなども問題としてあつた。

ヴェルデ達はこの問題において、高密度のエネルギーである死ぬ気を使うことでクリアしたが、この炎が発見されなければ、まだまだ匣は実用化には程遠かつた。

簡単に言ってしまうえば、彼らが製作不可能と判断したのは、「死ぬ気の炎なしで匣を作り出せ」という程に無理難題だった。

もしかしたら先の未来、その難題を可能にする動力や技術が発見されるかもしれないが、その前に彼らは変死してしまつた。死後残つた設計書は、彼らと共に匣制作に携わつたものの手に密かに渡つていた。

「あの頃のヴェルデ達と、今の俺とでは違うことがある」

「違うことか。その使える物つてのが手に入ったってことか」

「そういうこと。光努、おまえのことだよ」

「俺？」

「籠から修行場で出したお前の炎の話を聞いたとき、作れると思った。ま、まだ詳

しく調べないとわからないけどな」

わからない、といったけどルイはなぜか確信していた。

獄燈籠に話を聞いて、映像を見た。

光努がファイオーレリングから、溢れ出すような、真っ白な透き通るような炎を出した映像を。

部屋を埋めるような強大な炎もそうだが、その純度の高さも伺えた。前例がない炎であるため、純度によって何が変わり、炎にどんな特性があるのかはまだ何もわからない。だが、混じりけがなく、透明感溢れるような純白の炎をみて、とてつもなく純度の高い炎だというものは、すぐに分かった。

これならあの設計書を、三人の科学者が不可能とした、あの匣を造ることができる。

「ま、その間はいくつかある匣を持っていくといい。多分お前なら使いこなせるだろ」

「（ここにも幾らか匣があるのか？）」

「いろいろとあるからな。研究の傍ら、新しい物も作れたしな」

このイリスのアジトには、最先端技術もかなり持ち込まれ、ルイ独自のルートから持ち出された謎の機器の数々も存在する。何かしらの製作するにはうつつけの環境が備わっている。

「じゃ、とりあえずはじめるか」

満月のよく映る夜。

既に人は寝静まり、しんとした静かな夜の中、並盛町は全身を黒く染め、月明かりだけが町を照らしていた。

その静かな町の上空を、音も立てず飛ぶ人影が見える。一人や二人ではない、何十何百という数の人物が、並盛町上空より、目的地を定めて向かっていた。

並盛の南西。住宅地の外れとなっていて、特に建物があるわけでもある、地面が見える更地となっている場所を目的地に、人影は進んでいた。

全身黒づくめの人物と、白づくめの人物。

色の違いこそあれ、その出で立ちには全員同じ。ガスマスク常備の覆面に、暗闇でも周りを見渡せる暗視ゴーグルも備わっている。左肩に付けられたアーマーには、Xのよう
に組まれた花の紋章が付けられていることから、この何百といえる人数は、全てミルファイ
オーレファミリーの人間。しかもそのすべてが、C級以上という戦力的には高い部隊。
そんな部隊が更地となつた場所にやってきて、嵐属性の匣、嵐モグラタルバ・テンベスタにより、その場
所を分解し掘り勧めていった。

事の発端は、第8グリチネ隊のリーダーである、グロ・キシニアがメローネ基地へと
帰つてきたこと。

少しボロボロになり、基地へと戻るなり意識不明となつた。入江正一は、そんなグロ
と面会しようとしたが、何をしようと、グロが目を覚ますことはなかつた。

だがつい先日、グロが目を覚ました。

そして起きたグロは入江に対し、黒曜ランドでクロームと交戦してやられ置き土産
に発信機を置いてきた、と証言した。

調べたところ、発信機の反応は確かにあり、その地点が更地となつている、建物がな
い場所に反応があつた。このことから入江正一は、ボンゴレのアジトが地下にあるとい
うことを突き止めた。そして部下を用意し、装備を整え、並盛町の人々が寝静まり、動

いても誰にも見られない時間帯に大部隊を派遣して、地下への穴を掘り始めた。

そして真夜中の丑三つ時頃から初め、空がだんだんと明るくなり始めた頃、嵐モグラは地面を掘りきった。その下にあつたのは、鉄の塊。つまり、地下にあるシエルターのような物の天井にぶち当たつたということ。ミルフィオーレも知らない地下施設、十中八九ボンゴレのアジトで間違いないと、入江正一は確信した。

そして一気に殲滅すべく、A級やB級辺りの何人かはメローネ基地の防衛もあり残しておき、それ以下C級以上の者たちで部隊編成をしてボンゴレのアジトへと攻め込んだ。

もぐらで掘り終わつたあとは爆薬を用意し、鉄の天井を一気に爆発させた。

空いた大穴より部隊が入り込み、下にあつたのは広大な広間。特に何かあるわけでもなく、ただただ広い空間が広がつていたことに戸惑いがあつたが、突如入り込んだ穴を塞ぐように鉄格子が出現した。これにより、中に入ったミルフィオーレの部隊は閉じ込められう形となつた。

コツンコツン。

鉄格子の上を踏みしめる靴の音が響く。ミルフィオーレの部隊が上を見上げた時、鉄格子の隙間から落ちてきた物を受け止めた。小さな機械、発信機。グリチネの花をモチーフにして作られた第8グリチネ隊の隊長であるグロの持つていた発信機である。

「弱いばかりに、群れをなし」

男の声。

ミルファイオーレの部隊を見下ろすように鉄格子の上に立つ人影は、男。黒いスーツを来て、手に持ったのは金属製のトンファー。そして、そのトンファーを覆うようにして燃える雲属性の死ぬ気の炎。

「咬み殺される、袋の鼠」

まるで獰猛な肉食獣のように鋭い瞳は、ミルファイオーレの部隊を見下ろし、トンファーに纏った雲の炎をはためかせ、その身に秘められた強大な殺気が突き刺すように、下の人間達にに向かって向けられた。

「わ、畏だ!!」

そこで彼らは気づいた。発信機をたどってきた場所は、ボンゴレのアジトのありかではない。自分たちを閉じ込めて一網打尽にするために、ボンゴレ側によってわざと発信機を置かれたということ。まんまとミルファイオーレはハメられてしまった。

そしてその前に立ちふさがるのは、ボンゴレ最強の守護者である雲の守護者、雲雀恭弥。

そしてその頃、ツナ達はミルファイオーレのアジトに向かっていた。

今時点でほとんどの戦力がメローネ基地にいないこの状況が、何よりの好機。

雲雀が大舞台を足止めしているのを無駄にしないため、一人雲雀を残すのは苦渋の決断だったが、ツナはメローネ基地へと攻めることを決意した。

「開けてくれ、ジャンニーニ！」

『了解！Fハッチ開口!!』

通信機器から聞こえたジャンニーニの声と同時に、ツナ達の正面の、地上へ出るためのハッチが開いた。

ツナ、獄寺、山本、了平、ラル。

彼ら五人は、この時代のボンゴレの為、過去へ変えるため。

過去からきた仲間の為に固めた決意を胸に、敵のアジトへと襲撃を開始した！

『未来編Ⅱ 『メローネ基地』』

『ツナ側襲撃ダイジェスト』』

ボンゴレ基地への襲撃と、メローネ基地への襲撃。

ミルフィオーレが発信機を頼りに襲った場所は、ボンゴレの地下基地より2キロ程離れた倉庫建設予定地。誘い込まれたミルフィオーレの部隊は、待ち伏せていた雲雀がたった一人で相対していた。

そしてそれと同時に、ツナ、獄寺、山本、了平、ラルの五人は、ミルフィオーレの地下基地へと侵入を開始していた。

メローネ基地は、並盛町のショッピングモールの地下に作られており、そこに通じる地上へのダクトの一つより、中へと侵入する。入江は多くの兵隊をボンゴレ襲撃に送り込んだため、今のメローネ基地は通常状態よりかなり手薄。この機会を逃せばチャンスはもうないだろう。

今回メローネ基地へと侵入経路を得られたのは、とある情報のため。

どこからか雲雀のアジトのサーバーに送られてきた情報とは、メローネ基地の図面。そしてもう一つ、特殊施設のデータ。

白くて丸い、なんの装置かもわからない謎の装置。

まったくもって不明の装置だったが、意外なところから出た言葉でこの施設の重要度が増した。

ツナが、夢でこの装置を見たと言った。

白く丸い装置の前に立つ入江正一。それが、ツナが見た夢の内容。

ただの夢だ、といってしまうのは切り捨てたが、案外それが一番重要な事かもしれない。入江正一と全ての謎を解く手がかりになるかもしれないとリボーンは考えた。

考え事をしていたからなのか、修行のせいなのか、人は神経が研ぎ澄まされているとき、希に不思議なことがあるという。リボーンの想像では、今回のツナの予知夢じみた出来事も、その不思議なこと、何かを感じ取ったのかもしれない。

敵の重要施設に間違いがないため、ターゲットにも組み込まれた。

ツナ達の襲撃により、目標はまずメローネ基地の警備システムの破壊。

それによりリングの探知やシステムがダウンし、基地系統が混乱したのに乗じて、主要な施設をいくつか破壊するのが目的。そして入江正一の元へと襲撃するのも目的。

ボンゴレ全体的な襲撃目的としては主要施設の破壊が目的だが、ツナ達にとつては過去へと帰ることが目標。つまり入江正一と白くて丸い装置の元へと行くのが目的。果たしてツナ達は、過去へと帰ることができるのだろうか。

ダクトを進みながらツナ達は移動していたが、武器倉庫にて敵と交戦した。

ミルフィオーレ^{アラツタツコ}の異名を持つ切り込み重装兵、デンドロ・キラム。

巨漢の男で、身の丈にあつたランスを取り出してツナ達を攻撃した。

雷の炎の特性である“硬化”により貫通力の高められたランスと、その巨漢と力を生かした必殺の一突き。本来なら敵はなすすべなく突き崩されるのだが、そうは問屋がよろさなかつた。

死ぬ気状態のツナのグローブの炎熱、そして自分の後ろに放出した目視すら難しい炎により、デンドロの槍を片手で正面から受け止めた。デンドロは押すことも引くことも

できなかつたため、槍を捨てて匣兵器を取り出した。

ツナとしては、この程度の相手に正面から勝てないようじや、入江正一の元へとたどり着けない。そう考え、相手の匣兵器が出るのをわざわざ待つということをした。

そして出てきたのが、エレットロ・チンギヤール 雷 猪 ！

雷の炎を纏った猪の突破力は、デンドロの約5倍。

正面から跳んで来た猪のツノを掴んで受け止めようとしたツナだが、さすがに両手で掴んでは、足の踏ん張りだけで止めるのは無理だった。だが、片手で掴み、片手で後ろに炎を噴出することで、エレットロ・チンギヤール 雷 猪を止めることに成功した。

そのまま猪の腹に膝を打ち込んでデンドロと共に転倒させ、ツナは構えた。

ブラッド・オブ・ボンゴレ ボンゴレの血。ボンゴレの超直感が編み出した、ツナのグローブの新たな使い方、新必殺技。

ツナのグローブには、2種類の炎が存在する。

最初のツナの得たノーマルグローブは、ツナの意味によって炎の出力を上げ、細かな制御が可能となっている、いわば『柔の炎』。

バージョン・ボンゴレ・リング Ver. V. R.の炎は爆発的に攻撃力、推進力が高い炎。ノーマルグローブ程に扱やすいわけではないが、ここ一番のパワーでは使える、いわば『剛の炎』。

柔の炎で後ろに向けて炎を放出し固定し、剛の炎を敵前方に向かって打ち出す。

グローブに纏った炎を、XANXUSのように打ち出せないかと思案したツナが、自分が誰かに支えられているということを実感し、そこから編み出した技。

イクス・バーナー
X・BURNER!!

打ち出された純度の高い剛の炎は、一瞬でデンドロ本人と雷猪の二人を倒すことに成功させた。

次に戦った相手は、マジシャンズ・ドール魔導師の人形の異名を持つ不吉な殺し屋、ジンジャー・ブレット。

ド。ファミリーが滅亡するような抗争では何度か目撃されていると呼ばれる人物。黒いとんがり帽子とマントという、魔法使いのような出で立ちのジンジャーは、ラーノ・チエル・セノーニョ晴クモによって、ラルを苦しめた。

弾丸のごとく打ち込まれたクモの卵。ラルは掠るだけですんだが、その時打ち込まれた超微粒の卵は、ジンジャーの合図により、成虫となって肉体を突き破り飛び出す。

晴れの炎の特性は「活性」!

それにより、卵だったクモは一斉に活性化して、成虫まで成長した。なすすべなくやられるかと思われたが、ラルはまだ終わってなかった。

自らの持つアルコバレーノの呪いを強め、寿命を削ることと引き換えに、自身の持つ黒い渦の見える灰色のおしやぶりが、突如青い輝きを見せた。

まばゆいばかりのおしやぶりの輝きとともに、ジンジャーの晴クモの卵を無効化し

た。

アルコバレーノとなったとき、肉体の構造が狂い、流れる波動が元々のものと変化して霧と雲の属性となったラル。

コロネロはラルの身代わりとなってアルコバレーノになったため、青いおしやぶりを手に入れたが、本来ラルが受け取るはずだったその青いおしやぶりの属性は雨。

全身に雨の炎を纏うという、通常なら考えられない荒業をしたラル。

雨の属性の炎の特性は、*“鎮静”*。晴クモの卵を鎮静させ、活性を抑えた。

そしてラルの炎の鎮静力と特攻、*“匣兵器の雲”* スコロペンドラ・デー・ヌーヴオラムカデによって、ジンジャーを倒すことに成功した。

だが、倒したと思われたジンジャーは彼の操っていた人形。誰も本当の姿を見たことなく、殺したことの無いジンジャー。ひとまず退けることに成功したが、ジンジャーは置き土産に警報を鳴らし、ツナ達が基地へと侵入したことを入江正一へと報告した。

だがそれでも立ち止まらない。警備システムを破壊したツナ達。

当初予想していたパターンとして行われた、メイン通路の封鎖。入江正一の指示によって行われた封鎖により、移動パターンの変更があったが、そのためには囚役が敵をひきつける必要があった。これを買って出たのが、ツナ。

元々はラルがその役目だったのだが、ジンジャーとの戦いで命を縮める程の力を使っ

た為、すでにラルは戦いに参加できないほどに疲弊していた。
機動力の必要とする囹役として、ツナは一人残ったのだった。

「なぜここにこいつらが、ボンゴレがいるんだ!!」

通信司令室にて、入江正一は目の前の現状に対して叫んだ。

ジンジャーからの通報により、ツナたちが進入したことをしった入江だが、ミルフィオーレ側の現在状況はなかなか芳しくなかった。

ツナたちは、通った部屋の監視カメラに、ジャンニーニの開発した疑景フィルター、ようは監視カメラの映像を通常通りに見せるフィルターを取り付けて自分達が来たという痕跡を隠していた。そのためカメラ映像を確認している入江は、まんまと出し抜かれて侵入されてしまった。

何とか近くにいる部下を向かわせようとしたが、C級以上の兵隊はほとんどがボンゴ

レ襲撃にまわしたため、近場にいる兵隊が少なかったが、幸いなことに一人いたことが確認された。

ブラックスペルB級のスパナ。

入江と同じ機械系に強い技術者であり、彼のチューンしたミルフィオーレの人型兵器であるストウラオモスカは通常のもスカと比べて入江曰く、一般車両とフォーミュラマシン程の差があると言われる。

B級とされるだけあり、その戦闘能力は、本人が高いわけでないが、モスカを製作して戦わせるという点において、高い戦闘能力を保有していた。

そのため、ボンゴレ迎撃に入江は、スパナを向かわせたのだった。

「んっ！」

そのとき、監視カメラの映像をいじっていた入江は、一つカメラに止まった。

ツナたちとは別の場所にあるカメラ。そのカメラには、倒れている部下が見える。

そしてそこに入ってくるように映し出された人物を見て、驚愕に目を見開いた。

そこにいたのは、少年。白い髪に楽しそうな笑みを浮かべた少年。

「なぜ、ここいつもここにいるんだ！白神光努！！」

「とまあ、ここまで簡単にダイジエストを聞いたけど、実際ツナが一人で囧、ラルは戦闘不能。隼人、武、了平の三人は敵の施設破壊に勤しんでいると」

「ボンゴレ基地にいるリボンに聞いた話じゃと、そのようじゃな」

「じゃあ俺らはどうしようか」

「ひとまずその入江とやらの所に行くのがベストじゃろ。基本的な目標としては」

「それもそうだな。あっちの目的はそのうち達成するとして、先に正一の方に向かうか」

「まあ後は適当に施設とか破壊すればいいしろう」

「よし、地図もないから適当に進むか」

「行き当たりばったりじゃのう」

二人の人物が、ミルフィオーレの兵隊ごと、扉を吹き飛ばして中の施設へと入る。

中へと入ってきたのは、白くやわらかそうな髪を揺らした少年。その表情は楽しげに笑っており、その顔の無邪気さと反対に、無造作に振りぬいた拳が扉と兵隊を吹き飛ばした。

隣にいたのは、白髪にバンダナ。顔にしわの刻まれた老齡の男。

軍服のような服を着用し、ライターを取り出してタバコに火をつけ、一服していた。

「警報が鳴ったし、ツナたちのほうはバレた見たいだな。俺らもカメラに映ってるだろ

うけどな。なあ籠」

「その割りに楽しそうじゃな、光努」

白神光努と獄燈籠。

イリスファミリーも、メローネ基地へと襲撃をはじめた。

『光努VSニゲラ』

「まずい、まずいぞー！」

入江正一は困惑していた。

警備システムがダウンしたため、部下との通信は個人個人にしか通信することはできず、いくらか監視カメラの映像も止まっていた。

だが、その中でまだ使えるカメラも存在する。

そして、その内の一つに映っていた映像を見て、入江正一は驚愕し、困惑した。

カメラに映っていたのは、白神光努と獄燈籠の二人。

二人してカメラの方を見て、ついでに光努は手を振ってるため、二人から見れば監視カメラが作動しているのはお見通しなのだろう。そんな軽い表情と仕草の光努に、入江はさらに困惑するのだった。

もう一つの困惑要素は、獄燈籠。光努よりも、むしろこちらのほうが入江の不安を掻き立てるものだった。

この場合、情報の無い者よりも情報のある者の方が、ある意味恐ろしい。

イリスフアミリーの第一戦闘部隊である『アヤメ』といえば、この時代においてもファイア間において関わらぬが吉と言われる程。ボンゴレが壊滅されたとしても、その独立暗殺部隊が脅威となっているように、イリスが壊滅したとしても、やはりイリスの戦闘部隊もミルフィオーレから見ても脅威である。

情報不足で戦闘能力が測れていない光努より、獄燈籠のほうがある意味危険である。ボンゴレの突然の襲撃。イリスの襲撃。迎撃できる部下がほとんどいない。

指揮官の入江も、なかなか大変な状況に置かれていた。

「あの場に誰かいないのか！」

「それが、ボンゴレアジト強襲にC級以上は割かれて」

「それはさつきも聞いた！奴らの近くに誰かいないか！」

ちなみに、ツナ達を見つけたときも部下に誰かいないかと聞いて同じ答えが返ってきたのは余談である。

「入江様！第3トレーニングルームに、ブラックスペル “鬼熊使い” ニゲラ・ベアバングル氏がいいます！」

「本当か！よし、奴なら素直に動いてくれそうだ」

第9ジラソーレ隊所属のブラックスペル、ニゲラ・ベアバングル。

“鬼熊使い”の異名を持つ猛者である。スキンヘッドに、顔につけられた刺青。その異名どおりの匣兵器を使う男であり、戦力的にはこのメローネ基地において上位の戦闘能力を有している。

メローネ基地の指揮権を百蘭から許可してもらった入江であるため、指示を出せば基地内の人間は動いてくれるだろうが、C++級以上の戦闘能力の高い上位の人物であればあるほど癖も強くなり、何をしでかすか分からない人物もいるため、不安材料がいくつもある。その点で言えば、ニゲラは素直に指示を聞いて、余計なことはいらないでくれるという安心感もあった。いつてしまえば性格がまともなほうであるということ。

「入江様、片方がニゲラ氏のいるトレーニングルームへ、もう片方は別れて行動するようですよ！」

部下のその言葉にモニターを見てみると、光努のみがトレーニングルームへと入るところ。獄燈籠は別のルートでどこかへ行くようだ。ちょうど近くにいるのはニゲラのみ。

光努本人の資料はほとんど無いが、ファイオーレリングを手に入れるにはどうしても始末知る必要がある。その為入江の判断は、ニゲラがトレーニングルームで光努を撃破してから獄燈籠の所へと向かわせる。獄燈籠と先に戦ってからどうなるかが分からない

以上、まずは倒せるところで倒すのがよいだろうという考え。

「よし、ニゲラに迎撃指示を。フィオーレリングの回収が最優先事項だ」

「はっ！」

強力な人物がたまたま光努達の近くのトレーニングルームを使用していたことをひとまず喜び、入江はニゲラに、光努を先に迎撃するように指示を出すのだった。

「さてと、ここはどこののか」

適当に歩いていった通路の扉の一つを開き、中へと入る。

広々とした空間が広がり、所々に黒い大きな立方体の鉄の塊のようなものが、障害物のようになっているところどころに置かれている。

少し手で触り、こんこんとノックしてみたところ、どうやらかなり頑丈な鋼鉄製。部

屋の広さと結構な頑丈な障害物が置かれていることから、たぶんトレーニングルーム化何かだろうとあたりをつけた光努だが、まさにその通りとは本人は知る由も無かった。

「止まれ、少年」

どこからか聞こえてきた男の声とともに、障害物の後ろから会われたのは、黒い服に身を包んだ男。肩につけたショルダーアーマーの模様から、やはりミルフィオーレの間。上下黒い服に身を包み、スキンヘッドの頭に、顔につけられた刺青。鼻の横と顎につけられた棘のようなピアスが特徴的な男だった。

「俺はニゲラ・ベアバングル。悪いが、君のフィオーレリングは回収させてもらう」

「ミルフィオーレの人か。そこらの部下よりできる人みたいだけど、目的はフィオーレリングか」

ミルフィオーレの目的は、ボンゴレリングとアルコバレーノのおしやぶり。そして、フィオーレリングである。

ボンゴレを襲撃したのもそのため、そしてツナたちがメローネ基地へと襲撃したとしても、その目的は変わらない。むしろ向こうから来たと考えて、迎撃し、リングを全て奪い取る。入江に指示されてきたニゲラも、フィオーレリングの回収を最優先事項として支持された。

(フィオーレリングは・・・おそらく首から下げてるチェーンがそうだな)

ニゲラの考え通り、指に何も無いのを見たが、首元にちらりと見えたチェーンを見て、そこにリングがあると考えた。

「よし、代わりにあんたのリングをいただくう」

「何？」

「逆武蔵房弁慶つてな。俺がまけたらリングをやるう。ただし、あんたが負けたらそのつけているリングをいただく」

そういつて光努はびしっという効果音がつきそうに、ニゲラの右腕に指にはまっている、紫色の宝石のついたリングを指差した。

「生意気だな。その威勢も今のうちだけだぞ」

ボウ！

右手のリングから燃え上がったのは、紫色の、雲属性の死ぬ気の炎。

取り出した匣に注入すると、中から炎の塊が飛び出した。

「グオオオオ!!」

地面に降り立った炎の塊が晴れ、咆哮とともに現れ出てきたのは、巨大な熊。

茶色い毛並みに、鋭い目つきと牙。その両手に備わった、全てを切り裂くような強力な爪には、雲属性の死ぬ気の炎が激しく灯されていた。

「アン・オルツ・デイ、オルコ
鬼熊！」

自分の異名どおりの匣兵器である鬼熊を出したニゲラ。凶暴そうな熊は炎を帯び、なかなか強力な匣兵器だった。

「ふむ、熊か。久しぶりにみたな。匣兵器だけど」

「残念だが、見るのはこれが最後になるかもしれないな。行け！鬼熊！」

「グオオオオ!!」

巨体の割りにすばやい。炎の纏われた爪が、光努を襲った。

ドゴオオオ!!

障害物に劣るが、割と頑丈に作られているはずのトレーニングルームの床を砕く威力。

砕けた破片と土煙が、光努のいた場所を充満させた。

その様子を静かに見ていたニゲラは少し嘆息して口を開いた。

「あっけなかったな。後はリングを回収するのみ」

「だれのリングを回収するって？」

「！鬼熊の一撃を逃れただど？．．．そこか！」

ナイフを取り出し、リングから伝導させた雲の炎を纏わせ、鬼熊の横にある障害物の上に向かって投げつけた。

だが、そのナイフは、障害物の上に立っている光努の手によって受け止められた。

「次は、俺の番だな」

パキイン！

指でつかんでいたナイフを砕き、鋼鉄の塊の上から床に降りる。そして前方にいる鬼熊を見つめた。

無造作に歩く。まるで何も警戒をしていないような、自然体で歩く。

ニゲラはその姿に警戒をしたが、一瞬、その姿がブレた。

「！」

ドオオオン！！

気がついたら、鬼熊の腹を正面から殴りつけている光努がいた。

踏み込みが早かった。まるで踏み込んだと認識するのが遅れた。それほどに早く、静かに、光努は移動して殴りつけた。

「だが、甘いぞ！鬼熊！」

「グルルルウ！」

「へえ」

よくよくと見れば、光努の拳を、炎を纏った両手で受け止めている鬼熊がいた。

動物特有の、野生的な反射神経。全力で無かったとはいえ、光努の一撃をとめるとは、なかなかどうして敵の匣兵器も強力。だが、

「ふう、はっ！」

ドゴオオオオオン!!

「グアア！」

床を砕くほどに足を踏みしめ、体をひねりこむようにして、すでに前に出した拳に再び力を乗せ、鬼熊を吹き飛ばした。中国拳法に置ける寸勁とも呼ばれる、至近距離から力を乗せて相手に打ち込む技術。

悲鳴を上げた鬼熊は、その場か吹き飛ばされ、トレーニンブルームの障害物に体をぶつけた。鬼熊の巨体が吹き飛ばされるのに、ニゲラは驚愕に目を見開いた。

自分の異名の匣兵器をまだまだ10代の子供、それも炎も使わずに吹き飛ばすなど。まるで夢を見ているかのようだった。

「……まだだ。まだ行けるな！鬼熊！」

「グ・グオオオオ!!」

ニゲラが自らのリングの炎を燃やすと、鬼熊の両の手の炎も激しく燃え上がり、部屋を響かす咆哮と共に、その巨体がさらに膨れ上がった。

雲属性の死ぬ気の炎の特徴は、*増殖*！

自らの肉体増殖により、鬼熊は巨大であり、強大な力を増殖させ、光努を睨みつけた。しかし反対に光努は、楽しそうに笑っていた。

「さすが、〃鬼熊使い〃だけある。すげー熊だ。なら、こっちも少し手の内さらすか」
そう言つて取り出したのは、リングと匣を一つずつ。

黄色い宝石のはめ込まれ、装飾の施されたシンプルなリングと、木のような絵柄の書かれた匣。光努の取り出したその二つを見たとき、ニゲラの目が細まった。

「イリスに置いてあつた匣の一つだけど、使ってみるか」

リングを右手にはめ、光努は炎を吹き出した。

（あれは、晴れの炎！なんと！という大きさだ）

黄色く、キラキラとした晴れの炎が、光努の周りを取り巻くような強大さでリングから溢れていた。そしてそのまま左手に持った匣に向かつて、晴れの炎を注入し

た。

「開匣、フォレスト・パージ迷いの森」

その瞬間、トレーニングルームは光に包まれた。

『メローネ基地始動』

まぼゆい光が、トレーニングルームを包み込んだ。

ニゲラと鬼熊は、突然の光に目を覆うように腕で隠すが、前を見ようとすると、
そして光の中に、何かを見た。

ザワザワザワ!

(あれは……木の根!?)

ニゲラの見たのは、茶色い苔むした木の根。ざわざわと床を這い、障害物を囲う。さらには、地面には草が生え、いつの間にかニゲラと鬼熊の足元には、カーペットのごとく草が敷かれていた。そして、天井まで届くような大木がいくつも生え揃い、ツルがぐるぐると巻き、花や植物がいくつも咲き誇る。

光がやんだとき、ニゲラは目を疑った。

そこには、広大な森が広がっていた。

しゃがみこんで足元に生える草に触れる。確かな草の手触りが、触感として手にあたる。

「幻覚ではない。これは一体……」

「イリスが作り出した、フィールドボックス匣シリーズの一つ。迷いの森フォレスト・パース」

上空より降りかかった声のした方を見ると、多く生える大木の枝に座っている光努の姿があった。

イリスの作り出した、フィールド匣シリーズ。

基本的に動物、武器、道具などの物が匣の中から取り出せる。

だがこの匣は、イリスが独自に作った試作型の匣兵器の一つ。

簡単に言ってしまうえば、簡易的にフィールドを匣から取り出すという物。

この匣の場合は、匣用に改造されている植物の種が大量に入っており、晴れの死ぬ気の炎の「活性」により急成長させ、一瞬にして森のフィールドを作り出す匣である。

自らの得意分野、障害物がある方が力を発揮するタイプ、水が流れている方が戦いが有利なタイプと、自分によって得意なフィールド、相性のよいフィールドが存在する人物は幾らかいる。

そんな人物用にフィールドを作り出す匣を、イリスによって開発されたのである。

だが、まだまだ試作段階であり、問題もあるため、実用化には至っていないかったはずだったのだが。

「ま、せいぜい部屋を改造するくらいかな」

「部屋を改造だど!?ここはトレーニンブルーム。その一室を、深い森に変えるなど…」
「ほら、熊だから森の中かなって。よっと」

枝から降りて草の上に着地する。

獲物を見つけたためか、鬼熊は激しく両手の炎を燃やし、激しく吠えて光努に向かつていった。周りの木々を、その豪腕で折り倒しながら光努に突っ込むが、そう簡単には行かなかった。

ピシッ!

光努が右手に握った物を親指で飛ばす。弾丸のごとく飛ばされた丸いものだったが、ただの粒ではなかった。

飛んでいる間に、めきめきとして中から草が生え枝が生え、巨大な大木となつて鬼熊に向かった。その全体には、晴れの炎が纏われていた。

「いきなり大木になるだど!なんて活性化、受け止めろ!」

光努が先ほど飛ばしたのは、木の種。

晴れの炎を纏わせ、活性化によって一瞬で大木まで成長させた。

このフィールド内に存在する多くの植物や種は、最初から晴れの炎が多く流れており、通常より遥かに高い活性化、成長力を持つ。そこからさらに光努が晴れの炎でブーストさせることで、飛ばした種を大木にするという荒業をしてのけた。

だが、さらに巨大となった鬼熊は、その手の炎をさらに増幅させ、正面から大木を受け止めた。少しばかり威力に押され、地面を少しえぐったが、なんとか踏みとどまり、大木を受け止めることに成功させた。

「が、それも一瞬だ」

すでに、光努が拳を引いた状態で、鬼熊の受け止めた大木の後ろに跳んでいた。

「しまっー！」

ドゴオオオ!!

後ろから大木を殴りつけ、鬼熊ごと吹き飛ばした。

後ろにいたニゲラ事巻き込んで、トレーニングルームの壁を崩壊させたのだった。

「あれが、白神光努か」

メガネの奥の瞳を鋭くさせて、モニターを見ていた入江がつぶやいた。

ニゲラとの戦いは最初から見ていたが、光努が匣を使用してからは、植物に邪魔されて監視カメラを作動させることができなかったが、光努の戦いを見ることはできた。

(今見た限り、驚異的なのはあの身体能力か)

光努の身体能力は、人間離れている。ニゲラの鬼熊は、入江の目から見ても強力な匣兵器。にもかかわらず、無傷で完封する光努の実力は、入江の予想を超えて高かった。(それとイリス独自の匣兵器。炎は僕とおなじ晴れの炎か)

フィールド匣はイリスが独自に開発した匣兵器であり、入江も詳細を詳しく知らない匣である。モニターで見た限り、幻覚などでなく、間違いなく本物の森が形成されていく様を見てみると、使い方次第では中々に驚異的な匣だと思った。

他にどのようなシリーズがあるのかというのも疑問だが、それよりも入江が不可解だったのは、光努自身のことだった。

(まさか彼が晴れの炎とは。フィオーレリングを使っていないが、少なくとも晴れの波動が流れているということ。つまり複数の炎を扱えるってことか)

冷静に光努を分析している入江だが、冷静な分析とは裏腹に現状は非常にまずかった。

光努のフィオーレリングを取りに向かわせたニゲラはやられてしまった。

ツナは用水路でスパナと交戦したが、その後の音信不通。行方がわからなくなっ

まったのが入江にとっての誤算。

そして、ホワイトスベル “白の殺戮者” の異名を持つ、ランク上位のバイシヤナと、笹川了平が交戦し、バイシヤナが敗北した。

とある一室に入った了平、獄寺、山本、ラルの4人だったが、そこで待ち構えていたのはバイシヤナ。彼の持つ嵐セルベ・テンベスタ、蛇と呼ばれる巨大なツチノコ型匣兵器。全身の鱗に嵐の炎を纏い、攻撃してきた敵を破壊する。

嵐属性の炎の特性は、“分解”！

通常、拳でも打ち込もうなら、逆に拳が嵐の分解力で破壊されるはず。だが了平は、超高速活性能力の持つ晴れのグローブを備え、その得意の拳でもって、嵐の分解をもつてもせずに、バイシヤナを圧倒して倒した。

これでこのメローネ基地内で戦力として数えられるのは、6名。

ミルフィオーレ6弔花である、γと幻騎士とグロ・キシニアの三人。

γの弟分である、太猿。

“妖花” アイリス・ヘプバーン。

“魔道士の人形” ジンジャー・ブレット。

グロに関しては、つい先日目を覚ましたにもかかわらず、傷らしい傷は全て完治して、戦闘に問題なく参加出来るとのことであった。

ラルの倒したジンジャーは人形であったため、無事な本体もしくは人形がまだ残っているため、戦力として数えることが可能である。

しかし、戦力として数えることができても、すぐに敵の元へと送り込めるかと言えば否である。

ボンゴレ側の目的は、白くて丸い装置のある入江正一の研究室。先ほど了平達がバイシヤナを撃破した展示室は、研究室からさほど遠くない場所。

このままではそこに誰かが到達する前に、了平達の方が先に研究室へとたどり着いてしまう。そうなってしまうてはもう遅い。

その為入江は、自分の持つ奥の手を出すことにした。

二人の部下のみを引き連れて通信司令室から離れてやって来たのは、嚴重な管理のさ
れている一室。

中は広々とした空間と、下の方に機械の配線が多く伸びた部屋。中央の円形上の広い
台座の上には、床から伸びた2つの操作盤のような物。

片方は球体を動かして操作するようなタイプの機械に、もう片方には、匣が最初から
置かれているのではなく、すでに盤と一体化していた。

入江は右手にはまったマーレリングから、眩い晴れの炎を噴出し、部屋に備わってい
た匣に注入した。

白蘭と入江、あとは二人の部下以外その存在を知らない兵器。

いざという時の、最終切り札である匣兵器。

「さあ、目覚めてくれ。僕の匣、メローネ基地」

ウイン！

正面のモニターに映し出されたのは、この基地の全て。

このメローネ基地は、よくよくと観察すれば、縦横高さの全てが同じ長さの立方体で区切ることでできるといふ、特殊な構造をしていた。

そして各階には、同じように立方体の何もない空間が空いている。

つまりメローネ基地とは、立体のパズルの匣兵器。

入江がコントロールルームから晴れの炎を送り込むことで、基地全体に張り巡らされたコケの成長を利用し、立方体の格ブロックを空いた空間へ上下左右に動かすことのできる兵器。

これにより、入江は好きな部屋を、好きな場所へと動かすことが可能となる。

敵の行く手を動かして、別の場所へと送る。敵のいる部屋を動かして、目的と逆の部屋と繋げることも可能である。

新たに監視カメラを復旧させ、了平達のいる場所を見つけた入江は、メローネ基地を操作して、了平と獄寺、山本とラルの2組に分断させ、研究所と反対の方向へと部屋を移動させた。

そして了平と獄寺の二人のいる場所には、ちょうどYのいた訓練室を繋げ、三人は交戦していくのだった。

山本、ラルのいるところには、開いた扉を閉じ、閉じた扉を開き、二人を誘導して、幻騎士とぶつけた。

これで今のとこボンゴレ側は、行方知れずのツナを除いて、ミルフィオーレの敵と交戦したのだった。

「あとは、白神光努と獄燈籠の二人か」

そういつてカメラに映っている光努を見る入江。そばには倒れているニゲラもいて、ニゲラのリングをもらっている光努の行動に、少々不可解さもあつたものの、さほど気に求めなかった。

その時、入江の端末に通信が入った。

『入江様！こちら第二ゲートですが、入江様に面会したいという人物がいらしてますが』
基地への入口の一つである第二ゲートの部下が画面に顔を出して報告してきた。面会、という言葉に、そう言った予定がないことを知っている入江は不可解な客と、今や

それどころではない状況に少々いらだちを覚えた。

「後にしてくれ。今はそれどころじゃない」

『いえ、それが、白蘭様より紹介状を預かっているとのことです……』

「白蘭サンの？」

白蘭には、ボンゴレが攻めてくる情報を話してある。今この現状も、知っているはずにもかかわらず、白蘭の紹介状を持ってきた人物ということは、白蘭が何か意味を持って入江の元へ送り込んだということ。

(けどこのタイミングで、白蘭サンは一体誰を?)

このタイミングで送り込むなら、戦力となる人物というのが一番考えられる。ボンゴレ襲撃に対抗できるだけの人物を。

「わかった。直接会うのは今は無理だが、通信をつないでくれ」

メローネ基地のほとんどの人間も知らないコントロールルームにいる為、直に会うのに離れるわけにもいかず、かといってこの場所に連れてくるのもまずいため、少々礼儀をかくがモニター越しでの会話を希望するのだった。

そしてモニターに映し出されたの人物を見て、入江は目を見開いた。

赤みがかかった明るい髪色に、和服のような服を来た男。腰に巻かれた帯には、鞆に収められた小太刀が一本刺さっており、反対側には、楽しげに笑った狐の面がつけられて

いた。口元には笑みを浮かべ、細い目と相まって、その表情はとても楽しそうに見えた。『いや、すまんのう。急に邪魔してもうて。けど現状人手不足らしいし、ちようどよかつたんかな?』

男は頭をかきながらはははと軽く笑っているが、反対に入江は少し冷や汗を流していた。

タイミング的にはジャストタイミング。

白蘭の先を見る力に少々驚いたが、それよりも連れてきた人物に驚いた。

一体白蘭はどこからこんな人物とコンタクトをとったのか、と。

「ああ。来てくれてありがとうがいよ、カイラ界羅」

『白銀の装甲は、黒き銃弾を遮る』

ビキビキ、パキイン!!

「おっと」

光努の持っていた、木のような絵柄の書かれた匣、フォレスト・パース迷いの森の匣に亀裂が走り、ついには崩壊してしまった。

倒れているニゲラはその光景に驚いたような表情をしたが、反対に光努は少し嘆息するような表情をしていた。

「うーん、やっぱり試作品は一回限りか。しかも中身はそのままだし」

砕けた匣の破片を袋に詰めてポケットに入れる光努。

一つのフィールドを作り出すといっても、やはりそう簡単にはいかないのが現状。一回限りで匣は大破、そして中からでたフィールドはしまうことができずそのままという、なんともはた迷惑な匣兵器である。

「なんだ・・・その匣は・・・」

ダメージがまだ抜けていない為、起き上がることはできないが、意識はかろうじて取

り戻したニゲラが光努に語りかける。

「まだ試作だけど、結構面白いだろ？」

「はは・・・とんだ面白さだな・・・」

「じゃ、もう少し実験でもしてみるか」

そう言つて倒れているニゲラに近寄り、その手から雲のリングをひよいと抜き取る。

何をするのかとニゲラは思ったが、そのまま光努は自分の手に雲のリングをはめた。

ボウ！

(・・・これは、雲の炎!?)

光努がはめたニゲラの雲のリングから吹き出したのは、ニゲラと同じ雲属性の死ぬ気
の炎。

そして光努が懐から出したのは、葉っぱのような模様の描かれた新たな匣。

そのまま雲の炎を、匣の中へと注入した。

「迷いの森、アップデート増殖」

その瞬間、中から飛び出したのは、雲の炎の纏われたウニのようなもの。

「実際は、ただの針の集合体なだけだけどな」

パチン！

光努がリングのはめられた指を鳴らした瞬間、全方位にわたり針が飛び出した。

絶妙な角度で飛び出した針は、光努とニゲラの二人には当たらず、周りの木々や草花に刺さっていった。

その瞬間、針に纏われた雲の炎が植物に吸い込まれていき、脈打つようにしてめきめきと成長と分裂を繰り返していった。

「今のは……」

「ん？ フィールド匣には別の属性による付加をかけることで、さらにアップデートすることができんだ」

晴れの炎の特性である“活性”による植物の急成長。

そして、雲の炎の特性である“増殖”。

通常、フィールド匣は最初の植物の成長までで終わるものだが、別のアップデート用の匣を使うことで、成長した植物をさらに増殖させ、フィールドを広大かさせることができる。

ただやはりこのアップデート用の匣も、一度限りの匣であり、言い方が悪ければ使い捨てとすることができ。まあ試作品なのでここが限界といえれば限界なのだが。

「この部屋での成長にとどまった植物は、さらに増殖成長を繰り返して、最終的にはメローネ基地全体を森にする」

「何?！」

「予定なのだけど、多分そこまでいかないだろうな。この広さだとせいぜい3ブロックくらいを森にするくらいかな」

(それでも十分恐ろしいが……)

一先ずメローネ基地を動かす関係上、強度的には普通の植物より少し強いくらいの植物群の為、部屋と部屋を動かすには都合はきたさない。3ブロックというところと広さ的にはかなり広い。今だ完成してなくて助かったと、ニゲラは内心少しほっとしたのであった。

「じゃ、これ」

「これは？」

コトリと、ニゲラの倒れている横においたのは、250mのペットボトル大の小瓶を置いた。中に入っているのは、黄色みがかかった蜂蜜だった。

最初から持っていた、というよりは、この森の中でとってきた蜂蜜。

「この森で獲った蜂蜜。晴れの炎が練りこまれてるから飲めば早めに回復するとおもうよ。じゃあな」

戦った自分にここまでする光努に少し唾然としていたが、去っていった光努を見て、穏やかに笑みを浮かべるニゲラだった。

雷のマーレリングを持つ6弔花の一人である、電光のγは、油断をしなかった。並盛神社にて、10年後の雲雀恭弥と戦い敗れたが、それがγの全力と言えれば否だった。

10年前の獄寺と山本を圧倒し、戦力的には優位に立っていたためなのか、己の実力に絶対の自信があったためなのか、その後の雲雀恭弥と戦ったとき、油断もあった。

ボンゴレ最強と謳われる雲雀だが、ボンゴレリングの持たない状態でγを簡単に圧倒できるかといえば、否である。ミルフィオーレの6弔花というのは、そこまで伊達ではない。

油断をしていたから負けた、というには若干難しい程にγも全力だったのだが、それでも自分の持てる力を出し切ったといえ、やはり否。

だが、メローネ基地の移動によってγと鉢合わせた、了平と獄寺の二人。

二人が対峙したとき、もはやγには一欠片の油断もなかった。獄寺は、以前に出会っ

たγと今のγとで、どこか雰囲気が変わっている事を感じた。

「女神が微笑んだのさ」

そう言ったγと了平との対決は、すぐに終わりを告げた。

γの武器であるエレットロ・ビリアルドは、一本のビリヤードのキューと、ビリヤードの9つの玉の組み合わせの匣兵器。キューとビリヤードの玉全てに雷の炎が纏わせ、玉を直接相手にぶつけることもできるが、宙を飛ぶ複数のビリヤードの玉と玉同士を雷の炎で繋ぎ、広範囲にわたり、鋭い雷の炎によって相手を倒す。

雷の炎の特性は、「硬化」！

炎単体で鋭い雷のごとく燃える雷の死ぬ気の炎は、純度が高くなれば高くなるほど鋭く切り裂き、その硬度を増す。

了平は飛んでくる玉を避けることには成功したが、広範囲で周りを囲む玉を雷の死ぬ気の炎で繋ぎ、中に入る相手を攻撃する技、『エレクトリック・タワー』によつて全身を切り裂かれた。

この技を避けるには、雲雀の行ったように玉を避けながら一直線にγの元に向かうか、玉の放電しない範囲まで離れること。

そして、放電する雷の炎をなんらかの形で防御すること。

獄寺は、倒れる了平を守るように匣兵器を展開させた。

黒い骨が円を描くように複数作られたような、異様な形状をした匣兵器。独特なデザインとその匣は、三人の発明家の中で、最も芸術家肌だったイノチェンティによるオリジナル。

見た目によくわかる真つ赤な嵐の炎を纏われたその匣は、γの雷をほぼ完璧に防いだ。

SHIELD A.C.A.I.と呼ばれる、10年後の獄寺の考案した匣兵器。

異様な形状をした複数のシールドを、自分を囲うようにして展開し、了平を破ったエレクトリック・タワーを完全に防いだ。

だが、その光景に違和感を覚えるγ。

嵐の炎の盾で雷の炎を完璧に防ぐ、という芸当をしてのけた獄寺。

だが本来、炎単体での攻撃力は高くても、防御力がそう高いわけでない嵐の炎。にもかかわらず、雷のマーレリングとγの覚悟が合わさった高純度の雷の炎を、通常なら防ぐことは不可能。匣兵器の力、と言ってしまえば簡単だが、それにしても不自然な点がいくつもある。

まあ、まだまだ獄寺の匣の兵器を全て理解したわけでないのだから、わからないのが当たり前。

戦いは、ここからが始まり。

己の覚悟をかけた二人の戦いは、始まった。

「獄寺隼人はγと戦い、山本武は幻騎士か」

コントロールルームで、獄寺とγとの戦いを見ながら呟く入江正一。各地でボンゴレとミルフィオーレの戦いが始まってから、襲撃から劣勢に立たされていた入江の不安や焦りはだいぶ拭えた。メローネ基地を予想より速く使うことになるとは思わなかったが、その甲斐あつてか、その後の進捗は悪い状況ではない。

いくらボンゴレの守護者といっても、まだまだ中学生。

ミルフィオーレのA級の6弔花と戦い、ただで済むわけない。とりわけ幻騎士は、入江曰く白蘭の懐刀。戦いにおいてはかなりの信頼を置ける人物である。

「沢田綱吉は、まだ見つからないのか」

「はっ！只今捜索中であります！」

ブラックスペルB級のスパナが作り上げた4体のモスカ。 囚役を買ってでたツナは、その4体モスカとの激闘を繰り広げた。最終的には用水路に落ちて行方不明、というスパナの報告を受け、入江はツナの捜索をすでに開始していた。

だが、いまだツナは見つからず、モスカの戦闘記録データをサルベージしているが、それも今だ時間がかかりそうである。

「獄燈籠に関しては、界羅が行ってくれたからよしとしよう」

白蘭の紹介で来た界羅は、入江がどうしようかと思っていた獄燈籠の元へと回された。正直入江はこの界羅という人物を、全面的に信用しているわけではなかった。にもかかわらず、このメローネ基地で敵の迎撃に努めさせるのには、それにたる信頼があった。

そしてもう一つ、その実力も高かった。

「最後は、イリスファミリーのボス、白神光努か」

正直光努の扱いに関してはどうしようかなと思っている入江。

「鬼熊使い」と呼ばれるニゲラは、自他共に認める強者。だが、光努との戦いにおいてはほぼ一方的にやられた。結果的に光努は無傷で圧勝した。

今このミルフィオーレで残っている戦力は、
妖花“アイリスと マジシャンズ・ドール 魔道師の人形”ジ

ンジャー、*“嵐炎”*の太猿、そしてグロ・キシニアの四人。

一体誰を向かわせたものかと思案する入江だが、通信機から唐突に呼ばれた部下の言葉に思考を一時中断させた。

「どうした」

『そ・・それが・・』

返答に困っている様子。いや、むしろ言葉の端々からどこか焦っているようにも聞こえる部下の声色に疑問を持ちながら、部下がいるであろう地点の監視カメラの映像を開いた。

しかし、その映像を見たとき、入江はその表情を驚きに染めた。

通信をしてきたホワイトスペルの部下が通路に立っている映像。手には実弾のサブマシンガンを持っていることから、匣を支給されていない下級の兵隊であることが伺える。

基地内の警備だけなら匣を扱える兵士でなくともよい。リングと匣を扱える相手には少々心もとないが、刃物や銃も立派な装備であるため、ある程度の戦いで使用されている。

問題なのは、その兵士と少し距離を空けて相対している人物。いや、人物と呼んでいいものなのか。

「甲冑……だと!？」

全身を、銀色のプレートアーマーで覆った姿、正しく西洋の騎士甲冑。

だが、この場においてまったくそぐわないその格好が、立派な西洋の騎士のイメージと逆に不気味な雰囲気を放っている。

顔を全身をフルフェイスで隠し、手や肩、足、胴など、人の肌の見える部分がまったく無い甲冑姿。その左手には上部が平で下部が鋭い五角形の鉄の盾を携え、その腰には洋風の剣が刺さっていた。

少し動くだけでガチャリとなる音。部下である人物は実弾を放つが、全身を覆う甲冑の前には全くの無意味。だんだんと近づいてくる甲冑の音が、部下である男に恐怖を与えていた。

重量があろう甲冑を着ているにもかかわらず、重さを感じさせないなめらかさで動く騎士は、銃弾を正面から受けて部下の前に達、盾の持っていない右手を振るったと思うと、部下の男は倒れ気絶した。

その光景に唾然としていた入江だが、それもつかの間。別の部下からの通信が入江の耳に届いた。

『入江様！支給応援を！』

「今度はなんだ！」

カメラを操作して、先ほどと同じように部下がいるであろう部屋のカメラを開いた。そこに写っていたのは、槍を携えた下級兵士の姿と、相對している、鎧武者。

胴は黒光りする鎧で囲まれ、袖、籠手、手甲と腕を覆う鎧。足や腕を見渡しても、やはり人肌の見える部位がない。

面具、つまり顔を守る用の仮面のような物を兜と共につけているため、顔も全くわからない。その腰には、日本刀が刺さっていた。

先ほどの騎士もそうだが、この武者も十分に異常なる雰囲気を持っていた。

手に持った刀を、居合のように抜くと同時に、部下である人物が持っていた槍は、柄と刃でバラバラに分割され、滑り寄った武者の一撃で部下は気絶した。

騎士と武者。正反對のような同じような人物の映像を見た入江は、驚愕していた。

「なんなんだ……こいつらは……」

甲冑と鎧をならし、移動を再開する二体の映像を、驚きのまま見つめるのだった。

『襲撃者激闘開始』

「うわああー！」

「怯むな！撃てえ!!」

ミルファイオーレホワイトスペルの下級兵が、その手持った黒く塗りつぶされたような配色のされたマシンガンの銃口を、眼前の相手に向かって撃ち鳴らす。

下級兵は匣やリングを持たないが、通常の相手では銃があれば十分に制圧できる。

今となつては時代遅れと言つてしまつても差し支えないが、かと言つて匣を支給すれば誰もが自在に使いこなせるのかといえばな、そう簡単にはいかない。

その為、相手に向けて撃つという、比較的に誰で扱える銃や刃物類が下級兵には支給される。実際は銃を扱うにあたり、様々な手順や使い方があつたのだが、そののはミルファイオーレの科学力。使いやすい銃を開発したりする事などは朝飯前である。

が、その銃の高性能さも、相手が相手では豆鉄砲のごとく、防がれてしまうのである。

ガガガガガガ！

眼前の敵は、弾丸を物ともしないで正面から突っ込んでくる。

鮮やかなシルバーの色に、赤い十字架の意匠が施された鉄製の盾を、自分の体を隠すようにして構え、銃弾を全て受け止めるといふ荒業をしながら、ミルフィオーレの兵隊を一撃で地面に伏していた。腰の刺さっている、洋風の剣を抜かずとも、その手を覆うガントレットの一撃により、なすすべなく相手を伏せる。

「これでもくらえー！」

ガシャリという機械音を鳴らしながら、担ぐようにして兵が持ってきたのはバズーカ。

狙いを迫り来る眼前の騎士に定め、トリガーを一気に引き抜く。くぐもった爆発音を出しながら、銃口から飛び出した小型ミサイルが火と煙を出しながら、騎士に向かって飛んでいった。

甲冑自体が割と体積があるのと、この場の通路には床や壁に配線やパイプが通り、通常よりも狭い通路の為、多少の隙間があったとしてもこの場でミサイルを避けるのは不可能。兵の誰もがそう思っていたが、結果は驚愕だった。

腰から抜いた剣を、目にも止まらぬ速さで振り、小型ミサイルを真つ二つに切り裂き、わずかな隙間から後ろに流してそのまま特攻を仕掛けてきた。

後ろでミサイルが爆発する音を最後に、詰め寄った騎士にやられたミルフィオーレの兵隊は、全て地面に倒されてしまった。

佇む盾と剣を備えた騎士は、静かに倒れた兵を一瞥すると、そのまま先へと進んでいった。

「ボンゴレとイリスに騎士と武者か。今日は千客万来だな。はっはっは」

明るい不敵そうに聞こえる言葉と裏腹にその表情はかなり引きつっている入江正一。

後ろに板2人の部下も「ああ、入江様にご乱心だわ」という感じにあわあわしているが、そんなことも目に入らないくらいに入江の目の焦点は結構ボケていた。別に目が悪いからボケているわけではない。

「まずは、この近くにいた奴らをピックアップして、送り込む」

少しボロボロだったが、伏せた目を上げた入江は、再び冷静に思考を開始した。

この辺の状況の切り替えはさすが、伊達に晴れのマーレリングを持つ6弔花であり、

メローネ基地の指揮官という立場をやっていない。

基地のカメラ情報を探り、現在近くにいる兵を見ると、いい具合に分かっていた。光努のいる区画から3ブロック程離れたところにいるのはジンジャー。人形とはいえず、結果的にはラルを戦闘不能状態まで追い込むほどに実力の高い。光努の足止め、もしくは撃破するにもなんとかなるかもしれないという期待も一応はある。だがニゲラがやられた手前、どう転ぶかも今わからないというのも現状である。

一先ず光努のところに向かわせて、ファイオーレリング回収させるのはジンジャーに決定。すぐに指示を出す入江に、他の二体を考える。

今見た限りの映像だと、下級兵をいくらつき込んでも倒すのは不可能そう。かと言って、このままにしておくのもまずい。

今、あの二体の元に行ける人物で、近くにいる人物は……………。

「あの二体の元へは……………奴らを行かせるか」

その頃光努は、通路を突き進み、またもや新たに発見された部屋へと入っていた。

「さっきから地震があるし、何か配置が変わってるっぽいな」

それもそのはず。全てのブロックが立方体に作られ、パズルのごとく移動が可能なメローネ基地だが、何分全ての部屋が同じ構造、通路に至るまで同じ見た目をしているわけでない。

どこかしら移動を繰り返すと、見た目でマッチしない微妙な部分が出てくるはず。途中で網目の床が、ある一点から白い床に変わっている、なんてことも多少はある。そのことから光努は、先程から頻繁に起きている地震と結びつけ、基地自体が移動しているのでは？と考えているがまさにそうである。

「これほど基地を頻繁に動かせるとなると、一度に全部見る必要があるからな。多分監視カメラとかは復活してるかもな」

少々嘆息しているが、その表情は逆に楽しそうに笑っている。この状況下においても、光努は光努であった。

目の前にあるノブをひねり、鉄製の扉を空けて中に入る。特に躊躇もせずに入っているくさまは、無謀とも見て取れるが、光努の場合にはその際に判断力、対応力、適応力がずば抜けているため、たいていの状況下での攻撃の回避などが可能となっている。

なので、

ドドドドドド!!

「おっと」

上方よりも飛んで来た攻撃を、横に飛ぶようにして回避した。その際に被弾した扉はひしやげてしまい、もはや開けられそうになくなっていった。

室内を見てみると、天井付近にいた人物を誰かと答えるのなら、魔法使い。

シルバーの髪色に、真っ白いトンガリ帽子とマントを羽織り、その手に持っているのは、箒。

見た目だけは、童話の中に出てくるような魔法使いのような風貌の少年がそこにいた。だが、いきなり攻撃する分、童話よりも現実の方がずっと厳しいのではあるのだが。

彼の名、ジンジャー・ブレットは、第8グリチネ隊、つまりグロ・キシニアが隊長として率いる部隊の副隊長である。その魔法使いのような見た目と、自分の分身の人形を自分の代わり操り戦わせる為、魔道師マジシャンズ・ドールの人形の異名を持つ殺し屋である。

襲撃したボンゴレチームのラルに撃破されたが、その撃破されたジンジャーは人形であつたため、こうしてまた新たなジンジャーが出現したのである。

「やあ、君が白神光努くんだね」

「そういうお前は一体誰？飛ぶのに箒は使わないのか？」

どういう原理で浮いているのか、魔法使いのような風貌のジンジャーは箒を手には

持っているが、そんなもの関係なしに天井付近をふわふわと滞空している。

まあ、今の時代死ぬ気の炎を動力に使えば、いろいろな方法で空を飛べるし、そこまで深く考えていない光努だった。

「あはは、何を言ってるのか。箒っていうのは掃除に使うものだよ。こうやって、君を掃除するのにね」

箒を光努に向けてるように構えると、中から飛び出して来たのは先ほどと同じもの、箒のようなものがいくつも飛び出し、光努の方へと向かっていった。

「なんか変な感じがするな、おまえ」

床を蹴って鋏を避ける光努。そのまま壁に足を付けて、態勢を変えずに壁を駆け上がっていった。床と天井、距離が離れていたにもかかわらず、壁を駆け上がって蹴った光努は、あつという間にジンジャーの前まで到達していた。

「しまったー！」

光努がジンジャーの元まで行くのに、わずか数秒。

その間にも攻撃していたにもかかわらず、全て避け、縫うように移動した光努は、一旦打ち終えたのか、一度空中で停止したままのジンジャーの元へと跳んだ。

そのまま光努は拳を振り抜き、ジンジャーへと振り下ろした。

「………なぐんちやつて☆」

「！」

バサリ！

マントを両手で広げると、マントの奥の方から何かきらりと輝くような複数の光が見えた。

その瞬間、光努に向かって大量の弾丸のようなものがマントの中から飛び出した。

さしもの光努といえど、空中では身を翻し、多少は避けることもできるが、いかにせん、なぜこんなにあるのか？と思うほどに大量に放たれた物は、光努を包むようにして打ち込まれた。しかもそれだけでなく、周りの壁の一部も開き、そこから白い、蜘蛛の糸のようなものが光努に向かって飛び出していった。

そのまま左右からぐるぐると巻かれた光努は、全身糸でぐるぐる巻きになり、繭のような姿へと変わってしまった。

「いっちょあがり♪そういえば自己紹介がまだだったね。僕はジンジャー・ブレッツド………って言っても、聞こえないか☆」

ゴゴゴゴゴゴ！

「うおっ！また地震だぜ兄貴」

「ああ。入江のやつ、面倒な仕掛けしやがって」

入江の動かすメローネ基地に対して悪態をつく二人の人物。

片方はまだ若い、紫色の長髪をした少年。もう片方は、金髪の顎鬚に褐色の肌をした体格の良い男性。

二人共、ミルファイオーレブラックスペルの証である黒い服に身を包んでおり、胸に付けた階級章から、第3アフエランドラ隊の隊員であることが伺える。

第3アフエランドラ隊は、γが隊長を努める隊でもあり、基本的にミルファイオーレのブラックスペルの人物たちは、若干気性が荒いのが特徴であり、この二人も例外ではなかった。

いちいち配置が変わり、自分達の持つマップが使いものにならなくなったため、普段から不満げに思っていた入江に対するいらだちが如実に態度に現れていた。

ウィーン。

二人のいる、頑丈に作られたコンテナの並ぶ訓練室にある、二箇所ある入口の一つが

開き、二人がそちらに視線を向けると、そこからは同じ黒い服に身を包んだ人物が、およそ10人程歩いてきた。

「あ、太猿さんに野猿さん！」

「なんだ、てめーらか」

よくよくと見れば、同じ第3アフェランドラ隊の部下である男たち。

驚いたような表情をしていることから、太猿は大体の経緯がわかった。多方、メローネ基地の構造が変わった為、いつもどおりに入ろうとしたら別の場所にて、なおかつ上司もいたから驚いた、といったところだろうか。

「俺ら部屋に戻ろうと思ったんですけど、ここって訓練室ですよね」

「ああ、入江の野郎がごちゃごちゃ配置変えやがったみたいだからな」

一先ず中央ほどに固まる全員だが、基地の配置が変わっているので無闇に動くかこころでしばらくじっとしているか、どうしたものかと相談する。

が、その思考は部下の入ってきた反対の扉が開くことで一度中断させた。

ガギヤリという音を鳴らして入ってきたのは、彼らにとつて異常な物。

兜、面具で顔を全て隠し、腕、胴、足、全てにおいて和風の鎧によつて隠され、その腰には日本刀が刺さっているスタイルに、彼らは一体何事だという驚きの表情だが、約一名反応が違っていた。

「兄貴！見てみるよ！あれって確かジャツポーネのSAMURAIってやつだぜ！かけえ！」

野猿だけが瞳をキラキラさせて現れた鎧武者を指差してはしゃいでいた。

まだまだ成人もしていない少年であり、出身地は国外なため、日本的な文化や、少年の心を掴みそうな先頭装束にはとても楽しそうに反応しているのであった。

となりに立つ太猿も、野猿のような理由でというわけでないが、その口角をにやりと上げていた。

「なるほど。入江の野郎はこいつをどうにかしろってことか」

基地の構造が入江の自由自在になっているのなら、この出会いも偶然ではない。おそらく偶然いた自分たちと鎧武者を戦わせて、不安要素を排除しようとしたことだろう。部屋と部屋を繋げばそれも造作もないことである。

入江の思い通りになるのは気に食わないが、太猿もそろそろ戦わずに謹慎しているのにも飽き飽きしていた。この瞬間だけは、入江にも少しは感謝していた。

「さて、覚悟してもらおうか。侍さんよう」

太猿、野猿、以下10名の隊員。

ブラックスペルを前に、鎧武者は静かに佇んでいたが、その腰の刀の柄頭に手をかけ、わずかに戦闘の意思を見せるのだった。

メローネ基地の構成人図は多く、その為いくつも訓練室が存在する。

他にも匣兵器用の実験場や、機械系統をいじることのできる整備室なども、複数存在する。

そんな訓練室の一つ、壁や天井、床などから白い鉄柱がいくつも生えているような構造をした広々とした部屋。

自動扉が開き、廊下側から出てきたのは、銀色の塊。

全身に甲冑を纏い、大きめの盾と洋剣を携えた、この場所に異彩を放つ存在。あたりを見渡しながら訓練室の中央ほどに入ってきたとき、その場から飛び退いた。

ドゴオン！

飛び退いた場所にどこから飛んで来たの物体を、警戒するように距離をとった。床から巻き上がった土埃の中から飛び出して滞空したのは、青い雨の炎を纏った小さめの

塊。

「来た、来た、やゝつと来た」

コツリと靴音を鳴らし、鉄柱の影から出てきた。

少し長めのおかつば頭にメガネの男。

ホワイトスペルの真つ白い服装に、毛皮のついたマント。馬上鞭を持ち、青い石にたたんだ羽をあしらった指輪、雨のマーレリングをつけたその人物は、まさしく、第8グリチネ隊の隊長、グロ・キシニア。

「新しく頂いた匣を試すには、ちようどいい」

にやりと笑うと、その手にはめられたマーレリングから青い雨の炎を放出したと思うと、鉄柱の影から飛び出してきた複数の青い塊が、回転しながら滞空した。

「さて、どう料理してやろうか」

『空洞の騎士』

雨属性の匣兵器である、ヒオツジャ・ステツレ・マリーネ雨ヒトデ。

およそ20匹程の小型ヒトデ郡が匣から飛び出し、雨の炎を纏って回転しながら相手に向かっていく攻撃兵器。一発一発の威力も高いが、ヒトデ達はそれぞれ合体することもでき、巨大ヒトデになって破壊力を増して突撃することも可能である。

まあそれも、匣を使う物の使い方次第なのだ。

「さて、その仮面はがしてやろう」

いたぶれる標的を見つけたことに、グロのテンションは微妙に上がっている。すごく上がっていないのは相手が相手、無骨な甲冑だからであろう。これがクロームのような少女ならテンションは最高潮だったろう。

上空に滞空している雨ヒトデを、回転させながら甲冑姿の騎士に突っ込ませる。

対して騎士は、その手に持つ大きめの盾を巧みに操り、飛んでくるヒトデを防ぐ。

ただ正面から受けるのではなく、角度を付けて受けることで、ヒトデの攻撃を受け流している。

その為多数のヒトデの攻撃を受け流すことに成功している。

（ほほう、なかなかの手練。だけど、甘い！甘い！甘いぞー！）

グロが思う通り、受け流すことはしたが、ヒトデは匣兵器であり生命体。受け流したそばから再び回転して攻撃を仕掛けてくるため、受け流すだけはきりがなかった。

その為、騎士は腰に指した剣を抜いた。

柄頭に紅い石がはめ込まれて少しアクセントのある点以外、シンプルな両刃の西洋剣。

（……いっ……）

歴戦の猛者ともなれば、相手の力量を図る眼力が備わってくる。そうでなくとも、一定の相手となれば、その力がわずかな所作からこぼれ落ちる。

腰に刺さった剣を抜いた騎士を見たとき、グロの認識が少し変わった。

「いいだろう、やってやろうではないか。ヒオッジャン・ステツレ・マリネ雨 ヒ ト デー！」

マーレリングから放出する雨の炎でもってヒトデを操り、滞空するヒトデに指示を出す。

20匹あまりの雨ヒトデが騎士をぐるりと囲うようにして上空を漂い、グロの合図と共に、一斉に騎士に向かって弾丸のごとく雨ヒトデが飛び出した。

ドドドドドドー！

「これで終わりか……ん？」

床を破壊して土煙を出しながら、中から飛び出して来たのは甲冑を付けた騎士そのまま。盾を持つていないことから、盾を犠牲に雨ヒトデを全て避けたと見える。

甲冑と剣には特に傷らしい傷が見えないから、実質は無傷で避けた。

「だが、まだ終わらないぞ」

額の血管、右目の周りをピクリとさせながら、グロは自分に向かってくる鉄の塊を見ながら、再びリングの炎でもって雨ヒトデに指示を与える。

土煙がまだ立ち上る中、20匹の雨ヒトデが飛び出し、背後から騎士を襲う。

再び強力な炎を纏った雨ヒトデが、騎士に向かって飛んできたが、剣を持った騎士はその重そうな体をひねり、後ろから迫る雨ヒトデが当たる瞬間、剣の先でもって雨ヒトデの中央を貫いた。

さすがのグロも驚愕したが、それだけに収まらず、さらに飛んで来た雨ヒトデを回転しながら、剣の先で刺したそばから新たに突き刺す。

途中からグロに向かわず、床や壁からとどころ生える鉄柱を蹴り、三次元的な動きをしながら雨ヒトデを避け、避けたそばから雨ヒトデを突き刺し、剣がもはや団子の串状態になっていた。

(雨ヒトデがこうもたやすく、しかし解せんな・・・)

雨ヒトデには、雨の死ぬ気の炎が纏われている。

強度という点においては雷の死ぬ気の炎に比べて劣るが、それでも死ぬ気の炎を纏つてなおかつ回転している生物。ただの剣でもつてそう簡単に貫けるとは思えないにもかかわらず、簡単に突き刺して動きを止める。

(………試してみるか)

剣に突き刺さっていた雨ヒトデと、残り半数となっていた雨ヒトデが全てバラバラと崩れるように落ち、一箇所に集まり固まると、一匹の巨大な雨ヒトデとなった。

全ての雨ヒトデが一匹に集約された分、その纏う雨の炎も強大となった。

ギルギルと回転をし、青い筋を描きながら騎士へと飛んで来た。

騎士は相対するように、剣を振り、巨大雨ヒトデに向かって振り下ろした。

パキーン！

「！」

振り下ろして巨大雨ヒトデとぶつかった剣が、折れた！

無骨な甲冑姿の人物が、わずかに反応を見せた。

折れた剣を持ったまま、ヒトデを回避する。だがそんな回避も長く続かない。

剣も盾もなくなつた為、残るは全身に纏う甲冑のみ。

「さてその鉄くず、はがしてやろう」

にやりと笑い、馬上鞭を振り、巨大雨ヒトデは高速で回転していき、甲冑のみとなつて手ぶらの騎士へと突っ込んだ。

ドゴオオン!!

避けることもできず、鉄の甲冑に突っ込んで、騎士を共に壁を砕いていった。

土埃の中から転がるように、銀色のガントレットが転がり、鉄柱にあたつてその動きを止めたのだった。

「よしーよくやったぞジンジャー」

眼前のモニターに映る、繭のごとく糸でぐるぐる巻きにされ、中身が全く見えないほどにくるまった光努と、そのそばにふわふわとたたずむジンジャーの姿が映し出されていた。

入江の目的はフィオーレリング。これであとは光努からリングを奪えば、ジンジャーの任務は完了となる。

正直ジンジャーで勝てるか微妙だと思っていた入江だが、予想に反して簡単にジンジャーが捕まえてくれた。だが、簡単に捕まえたという点に入江は、違和感を覚えていたが、一先ずよしとした。

他のモニターに映る人物たちを見て、入江は再度思考の渦に身を寄せる。

ここからが正念場。一つを制しても他が壊滅させられたらどうしようもない。

獄寺、γの二人は激闘を繰り広げ、どちらも互角の戦いをしている。

二人共中距離攻撃が可能な人物であるため、死ぬ気の炎と匣兵器が派手に飛び交っている様がモニターによく写っている。

山本、幻騎士の二人の戦いは、幻術と剣術の戦いだったのだが、すでに終了した。

山本の時雨蒼燕流を駆使し、幻騎士に剣を抜かせ、幻術を破ることに成功した。だ

が、山本の見破った幻術は、幻騎士の使う幻術の本の一部。最初から幻騎士は、鋼鉄製の障害物が多大にある匣兵器用実験室を、広々とした空間へと霧の匣によつて幻覚を重ねて作り替えていた。

山本は幻騎士に対して、スクアアロの剣技の一つである、アタック・デイ・スクアアロ衝撃 鮫を当てることで、剣を通して幻騎士に衝撃を与え、さらには雨の鎮静の炎も練り込み、麻痺させることに成功した。

その大きな隙を逃さず、山本の編み出した大技、特式十一の型であるスコントロ・デイ・ロインディネ燕 攻によつて幻騎士に特攻を仕掛けたが、幻覚ではない、実際の部屋にある鋼鉄製の障害物にぶつかった。

予期してない障害物の出現に、自分の技の特攻力も相まって、自らの技にやられた山本は、そのまま崩れ落ちてしまった。

これで戦いの行方がわからないのは、獄燈籠と界羅。
太猿率いるブラックスベルと鎧武者。

そして………

「グロと騎士。だがこの戦いもそろそろ終わるかもしれないな」

グロの匣兵器の集合体である、エフォルメ・ヒョウジャステツレマリネ巨大雨ヒトデによつて、甲冑の騎士は壁まで突つ

込まれた。

強度があつた訓練室の壁を、甲冑ごとえぐつた為、さすがにただでは済まないはず。意識が回復したばかりのグロを前線に出したが、今見た限りだと油断のようなものは見えず、冷静に相手を潰そうという意思も見られた。実力は高いのだが、性格に難ありなのと、相手によって油断するのがグロの悪い癖でもあるのだが、この調子なら大丈夫そう。さすが6弔花と言える。

だが、入江はこのあとすぐに、驚愕することになるのだった。

「~~~~~」

グロは鼻歌を歌いながら気分よく、ヒトデがバラバラになって集合体となった巨大雨ヒトデが突撃した様を見ていた。

グロが、骸に盗られた(?)雨グロフォ・ディ・ピオツジャフクロウの代わりに手に入れた雨属性の匣兵器、雨

ヒトデはバラバラになって合体したが、そのあとまたバラバラになるのは無理なのであ

る。

だがその分、巨大となつて頑丈になり、雨の炎も強大に纏い、相手を回転しながら突っ込んで粉碎する。

所詮鉄の塊の甲冑では分が悪かつたのだろう。

今マフィア間で死ぬ気の炎が乱発する時代では、鉄の武器や防具はそこまで驚異的ではない。過去死ぬ気の炎を纏い、その炎熱によつて骸の三叉槍を容易に捻じ曲げたツナだが、それほど死ぬ気の炎単体でのエネルギーは強い。

直に熱を持ち、様々な特性のある炎。

その炎を動力源とした匣兵器は、まさにこの時代における最先端の兵器。

「さて、入江殿に報告する前に、朽ちた鉄くずの中身でも拝もうか」

雨の炎を纏つた馬上鞭を振りながら、コツリと靴音を鳴らしながら鉄柱の間を移動しながら壁際まで歩く。

砕けた壁の欠片がコロコロと転がり足に当たるが、そんなことはお構いなしに歩く。

土埃の立ち上る壁際によると、カランと何か蹴つたと思つたが、よくとくと見れば銀色の鉄の塊。ヒビの入つたガントレットが転がっていたが、それを見たグ口の口角は釣り上がり、一層楽しくなつてきた。

「ど〜れどれどれ」

馬上鞭を振り、ぶわりと土埃をはらう。

中から飛び出してきた巨大雨ヒトデは、雨の炎を纏ったままくるくと周りつつ、グロの頭上で滞空した。そしてグロは、巨大雨ヒトデが出てきたところに目を向けた。

横たわる鉄の甲冑。甲冑の足は床の上に投げ出されるように置かれており、そこにながる体はえぐれた壁の中にもたれ掛かり、肩腕のみ肩から伸びており、反対のうでは肘から先が外れている。

ヘルムや全体はひしゃげ、もはや哀れな程その姿を変えた甲冑が横たわっていた。だが、そんなことよりも、グロはある一点にのみ、視線を向けていた。

「何!？」

確かに騎士は横たわっていた。ところどころひしゃげ、破損し、えぐれている。

だが、首下から胴体にかけて甲冑の正面が破壊され中が見えたが、本来ある中身がそこにはなかった。

横たわっていたのは、完全に中身が空洞となっていた甲冑だった。

「中身がないだ?!? どういうことだ!？」

トン。

(「……後ろ!」)

軽い音がしたと思つたグロは後ろを振り向いた。

音のした音源を探り、後ろにそびえる多数の鉄柱の一つに目を向けた。そしてそこいたものを見たとき、グロの目が驚愕に見開いた。

軽い靴音を鳴らして鉄柱の上にとつたのは、一人の人物だった。

ふわりと、広がるように袖のない膝下まである薄紫に近い真っ白な上着の裾が広がり、ブーツのつま先が鉄柱の上をつき、その場に降り立つ。

柔らかな黒髪に、リボンで結んだ少し短めのポニーテールの髪型。

手の甲から二の腕まであるアームガードに備え付けられた甲と腕についた銀色のプレートアーマーが部屋の光を反射させる。

その指には、背中に宝石を付けたダイヤフォルメされたドラゴンが、自らの羽を下に向けて円を描いたような、独特でありながら可愛らしいデザインの、色違いのリングが二つはめられていた。

まだ10代後半ほどの年齢に見えるその顔は、幼さの残る女性的な顔立ち。

その表情は、鉄柱の上からグロを見て、楽しげに笑っていた。
「貴様……『シャガ』のリル！」

イリスファアミリー第二戦闘部隊『シャガ』の一人、リル！

「よし！反撃開始だね♪」

『グラジオラスの花言葉』

イリスファミリーには、戦闘できる人間が少ない。

元々が企業ということもあり、戦える人間は『アヤメ』の3人と数人の人間のみに。

それはこの10年後も例外ではなく、むしろこの10年後になってからイリス自体も崩壊気味のため、全体の割合で考えれば戦闘できる人間の方が増えた。最も、この割合というのも、企業崩壊で非戦闘員が減ったため、必然的に割合が増えたというだけで、人数が少ないには変わらない。

だが、その残り少ない者達が、それぞれ個々の実力の高さを示している。

だからこそ、イリスはそう簡単に崩れることはなかった。

10年前から存在する、イリスファミリーの戦闘部隊『アヤメ』。

だがこの名称は少し変化があり、現在は、イリスファミリー第一戦闘部隊『アヤメ』。

そう、第一。

およそ数年前ほどに、イリスの戦闘部隊は一つ増えた。

それが、第二戦闘部隊『シヤガ』。

『アヤメ』のごとく、所属している人数はたった3人しかないのだが、この3人も曲者、高い実力を兼ね備えている。

その内二人は、若干10代でありながら、多くのミルフィオーレの人間を地に沈めて来たという。

そしてその中で一応ながらもリーダーをつとめているのが、リル。

『アヤメ』のリーダーでもあるクルドの娘でもあり、剣と炎を教えられた少女。

10年前より成長した少女達が、メローネ基地で暴れる、

鉄柱の上に立ったリルは、足を曲げてその場にしゃがみ、膝の上に肘をつけて手で顎を支える。

澄んだその瞳に写っているのは、床の上でこちらを見ているグロと、そばのえぐれた壁にもたれかかる無残に壊れた甲冑の姿だった。

「んー、あの甲冑結構気に入ってたんだけど」

ちよつと残念、というふうのため息をつくりル。

対するグロは、まさか鉄の塊の甲冑から出てきたのが、こんな少女とは思わなかったのか、驚愕に普段から冷静な表情が珍しく崩れていた。

「貴様、リル！なぜ『シャガ』がこんなところにいる！」

イリスファアミリーの『アヤメ』と『シャガ』は、この時代ではバラバラとなつている。イリスの本拠地が崩壊したことで、そこにいた者達が散り散りになり、技術舎の人物たちなど、非戦闘員の者たちは日本にある『獲洞山』のアジトへと移動をする。

戦えない彼らは、どこかミルフィオーレ等、敵の来ない場所で一箇所に集まるのを吉とした。

現に、今の現在まで獲洞山にいる彼らは全くミルフィオーレに気づかれていないのである。入江も地下のボンゴレアジトの存在を全く知らなかったため、まさか山の中にイリスのアジトがあるとは思っても見ないのだろう。

だがあくまで非戦闘員の者たち。

戦える者たちは一人でも割とたくましく生きているため、あちこちで活動をしている。その為、彼らの人数が少ないと言っても一箇所に集まることはごくまれなのであった。

「うん、待ち合わせかな」

「待ち合わせだと?」

「その前に、グロにはやられてもらおうけどね」

ピクリ。

グロの右目周りがピクリと動く。

見た目には冷静だが、内心では炎のごとく怒りがグロを燃やしていた。

実は割と昔、リルとグロは会ったことがある。当時まだリングもそこまで主流でなく、己の体技と武器のみの世界だったのだが、そこでグロはやられた経験を持っている。その為、相手が相手だけに戦闘のポルテージも色んな意味で上がっているのだった。

だが、ふつと炎を消し、冷静な思考を開始する。グロの強みは、たとえ奇想天外のことが起こっても、冷静に対応する力。

確かに予想外のことがおこったが、当初の予定では甲冑を破壊して撃退すること。な

らば自分のすることは、甲冑の中身であるリルを倒せば済む話。

「いいだろう。貴様の企みも、潰してやる。やれ！」

巨大雨ヒトデがグロの頭上から回転し、雨の炎を纏いながら鉄柱の上のリルに向かって突っ込んでいく。

バチイイ!!

だがその行く手は、突如現れた緑色の光によって阻まれた。

緑色の石が背中にはめられた、デイフォルメされたドラゴンに、羽を下に向けて円を描くような独特な形状のリング。そこから発せられたのは、辺り鋭く、眩しい位に発光するような、電気に限りなく酷似した炎。

（雷の死ぬ気の炎によるバリア？だが、あれほどの純度と規模の炎を出すなど、あのリングは一体！）

雷の炎は、死ぬ気の炎の中で一番の硬度を持つ為、リングそのものから発せられる炎単体で攻撃を守る盾として使用できる。

しかしそれも、持ち主の持つ覚悟の力と、リング自体にも高い精製度が必要となる。

雲雀はボンゴレリングを持たないため、匣を開くのに必要な雲の炎を発するのに、C級のリングを上回る炎をだしてリングを使い捨てることになったが、炎を盾にする場合放出し続ける必要がある。強度のないリングだと、雲雀の二の舞になる。

その為、純度の高い炎を放出するリングを持つリルに対して、グロは少し舌打ちして
いた。

（あそこまで炎を出すとはな。γ並の威力。だがそれもいつまで持つか）

スパアアン!!

「何!」

目の前で見えた光景は、真つ二つにされる巨大雨ヒトデ。

しかもそこからいくつもの剣線が通り、一瞬にして巨大雨ヒトデは細切れとなつてしまつた。

そこにたたずむリルの手に持っていたのが、どこからか取り出した一本の剣。

反対の手に、蓋の開いた匣が握られていたため、おそらく匣の中から出したのだろう。

細かな装飾の施された、両刃のついた西洋風の剣。刃の表面を伝うように雷の死ぬ気の炎が纏われ、その剣でもって巨大雨ヒトデを切り裂いたのだと示していた。

（雷の炎の特性を利用した「硬化コーティング」か。こつともあつさりヒトデを切り裂くとは・・・）

ただ単純に剣と炎の威力だけでない。持ち主の剣の腕も遥かに高い。

魔天剣豪、通称「魔剣」と呼ばれる『アヤメ』のリーダー、クルドの娘だけある。

「だが、剣一本で私は止められない。いたぶつてやろう!」

雨の炎を注入し、匣を開いて中から出てきた巨大生物。

クラークン・デイ・ピオツジャ

雨巨大イカを展開し、その10本の足が蠢く。

巨体の為、鉄柱の隙間を縫うように動いている足が、雨の炎を纏って敵を見定める。

グロが合図すると同時に、雨巨大イカの足がうねり、鉄柱の上のリルに向かって攻撃を仕掛けた。

タン！

鉄柱から跳びだし、周りの鉄柱を蹴りつつ、飛んでくる雨の炎が纏われた足を避ける。

自分の周りに何本か待機させ、グロは半分以上の足を飛ばしたが、周りにある鉄柱を巧みに蹴り、素早い動きでもって足の隙間を縫うように移動し、巨大雨イカの足の届かない所へと着地する。

(先ほどより早いだよーいや、これは当然の結果か)

ずっとリルがつけていたのは、重量のある鉄の甲冑。にも関わらず、雨ヒトデの攻撃を受け、剣でもって突き刺した為、甲冑のなくなった今はもはや動きが別人のようである。

「さてと、こつちもなんとかしなきゃね」

グロと少し離れた位置に立ったりリルは、匣を取り出した。

西洋の剣でもってXを描くような模様の匣。

雷の死ぬ気の炎をリングから放出し、匣へと注入した。

中から飛び出した4つの物体は、くるくると回転しながらリルの上を滞空し、回転を止めて炎を纏ったその姿を見せた。

鏢元に、翡翠のような石がはめ込まれた、両刃の剣。刃の中に白い花が描かれている4本の剣が、雷の死ぬ気の炎を纏って滞空していた。

「これは、4本の^{グラディイオロクアットロ}グラジオラスって名付けられた匣兵器。剣の匣」

一説に、花開く前の蕾が剣のように見えることから、ラテン語の^{グラディウス}剣にちなんで名付けられた花、グラジオラス。

バチバチとほとばしる緑色の閃光を放つ、グラジオラスの花の描かれた両刃の4本の剣は、中々に幻想的な雰囲気を出していた。

「剣の匣兵器だと？初めて見るタイプの兵器・・・」

「でも、イカの足はまだあるから、もう一つ開匣♪」

バチイイ!!

再び匣を開くと、中からさらに同じ剣が4本飛び出した。

「8本もの剣だと！だが、^{クラークン・ディ・ピオツヤ}雨巨大イカの足は10本！まだ足り

ないぞー！」

水に酷似した雨の炎を、竜巻のごとく回転させるようにして巨大イカの足に纏わせ

る。

だんだんと、巨大イカが足をうねうね動かしながら近づくとグロ。対するリルの周りを、ヒュンヒュンと8本の剣が飛び交う。

「心配しなくても大丈夫だよ」

ボウ！

反対の手にはめられた、デイフォルメされたドラゴンを模した色違いの、紅い石のはめられたリングから放たれたのは、真っ赤に燃える嵐の炎。

（雷と嵐の二種類の炎だど?!）

二種類の炎に驚くグロだが、リルはそのまま嵐の炎でもって開匣した匣から出てきたのは、シンプルな両刃の剣。その刃には、嵐の炎が纏われていた。

右手に握られた、雷の炎を纏う洋剣。

左手に握られた、嵐の炎を纏う洋剣。

2本の剣と、リルの周りを飛び交う、8本の雷の炎を纏った剣。

「さしずめ、10本のグラジオラス、かな」

そう呟くと、床を蹴ったリルは、グロと巨大イカの元へと向かった。

グロは対応するようにして、巨大イカに指示をだし、10本の触手を巧みに動かし、リルを迎撃せんとばかりに攻撃をする。

ザシユ!

「ん、これは!」

グロが驚愕したのも無理はない。

迎撃するべく飛ばした巨大イカの10本の足が全て、一本一本の剣でもって針に糸を通すがごとく、正確に突き刺されていた。

しかも、嵐の炎の纏われた剣の突き刺さった足は、嵐の“分解”でもって燃やされていた。

「馬鹿な! 巨大雨イカの足が!」

クラークン・デイ・ピオツジャ

「巨大雨イカは、炎自体の鎮静作用はほとんどなくて、物理攻撃が攻撃手段なんだよね。だからこそ貫けるし、燃やせる」

パシイ!

足を一本燃やし尽くして落ちた嵐の炎の纏う剣を手に取り、グロに向かっていく。

「知ってるグロ? グラジオラスの花言葉を」

雷の死ぬ気の炎でもって「硬化」のコーティングを施された剣で容易に突き刺された巨大イカの足は固定され、さらには雷の炎によってダメージはさらに倍に喰らわせている。

他の匣もなく、もはや戦えるのはグロ自身の肉体のみ。だが、体術だけとなると圧倒的にグロの方が分が悪い。

「く、くそおおお!!」

馬上鞭を振るうグロだが、リルの振るう剣によってバラバラに切り裂かれた。

「グラジオラスの花言葉は、勝利！」

頑丈なコンテナが障害物のごとく置かれている訓練室の一室には、たたずむ人間と、疲労する人間、倒れている人間の三種類がいた。

コンテナや床の上に投げ出されている人間は、全てブラックスペル、第3アフエランドラ隊の部下とされている人間達。紫色の長髪の少年、野猿も床の上に投げ出され、嵐の炎を纏う匣兵器である黒鎌ダークサイズも柄と刃がバラバラに切り裂かれている。

2、3人の部下がかろうじてだがまだ戦え、太猿ともどもに、Fシューズによって訓練室上方に飛んで滞空していた。その手には全員武器を所持し、太猿は野猿と同じ黒鎌ダークサイズをもって嵐の炎を纏っていたが、その炎は弱々しく、その表情は疲弊して、荒い息を肩でしていた。

「くそーなんでてめーみたいのがこんなところに！」

目を引くのは、床に転がる鎧。

兜や胴など、嵐の炎でもってメラメラと燃やされている鎧のパーツ。

そして周りに散らばって燃える鎧の中央に佇むは、一人の男。

柔らかな黒髪と考えの読めない表情に、その手に持った一本の刀。

刀には、緑色に発光する鋭い雷の炎がバチバチと纏われ、その人物の周りには、同じく雷の死ぬ気の炎が纏われた4本の剣が床に突き刺さっていた。

「イリスの『シャガ』に所属してるコルが、なぜこの基地に！」

手に持つ黒鎌ダークサイクスを振り、嵐の炎を床にいるコルに向かって飛ばす。

同様に部下達も、晴れの炎や雲の炎を纏った武器を持つて炎を飛ばす。

訓練室の為、対匣兵器でも頑丈にできているのだが、それでも威力があるのがわかるように、まとめて飛ばされた炎はコルの下で爆発を起こす。

だが、爆風の中から飛び出してきたのは、無傷なコル。

そのままコンテナを蹴り、上空にいる太猿の他の部下の元へと飛び、目にも止まらぬ斬撃でもってFシューズを破壊した。

「うわあ！」

そのまま墜落する前に、刀の柄頭でもって強打させ、意識を刈り取って床に落とす。そうするうちに、ついには残りは太猿のみとなってしまった。

「おらあ！そう簡単に、やられるかあ!!」

黒鎌ダークサイクスを振り嵐の炎を飛ばすが、コルが一瞥すると、床から剣が一人でに抜かれ、2本の剣がクロスをするようにして飛んでくる嵐の炎をあつさりと防いだ。

「この基地に来たのはただの待ち合わせ、気にするな」
そう言うコルに、太猿はもはやなすすべがなかった。

『10年間の空白』

「ん〜」

細い指でつままれたのは、楕円形の石がはめ込まれ、たたまれた羽の意匠が施されたリング。つまり、マーレリング。

自分の瞳に近づけて、天井の照明に透かして見ているように、つまんだリングを掲げていた。

「雨のリングだし、コルにあげよつと」

ポケットに雨のマーレリングを入れたリルは、後ろを振り向いてとことこと歩いた。

歩いた先にいたのは、グロ。いや、いたというには訂正がある。床に投げ出されて大の字で倒れていた。メガネが割れて、そばには大破した匣が転がっていた。

グロの顔のそばまできてしやがみこみ、グロの顔を覗き込んだ。

ペシペシペシ。ツンツン。のびい〜。

「(意外と伸びる・・・)うーん、籠ロウのかけた暗幻アンゲンはまだ解けてなかったみたい。」

よいしょと立ち上がり、剣のしまわれた4つの匣をしまう。

西洋剣を出す匣が二つと、『4本のグラジオラスグラディオラス』の匣が二つ。この時代になると、コ

ンパクトな匣からいろいろな物が出せるだけ、携帯にとっても便利なのである。

最も、匣に入ることのできない武器も、この世界に存在するのだが。

「えっと、みんなの居場所はっ」と

ポケットから取り出したのは・・・ただの木の枝。

そのまま床の上に立てて置き、そつと木の枝から指を話した。

独りでに倒れる木の枝は、まっすぐと扉の方へと倒れた。

「よし、あっちだー!」

そのまま駆けていき、訓練室の扉から廊下へと出て行ったのであった。

「……………はああく」

入江正一は、そろそろ頭の容量がガタガタになりかけてきた。

ボンゴレの突然の襲撃にも、いきなりのことにかなり驚き焦った。

ミルフィオーレの人間もだんだんとやられ、自分の最重要な研究室へと真っ直ぐに向かつてきているのにもとても焦った。

だが、メローネ基地を起動させ、部屋を移動させることで研究室から遠ざけるだけでなく、信頼できる戦闘能力を持つ兵隊をぶつけることにも成功した。その焦りも抑えられ、冷静になってきた入江。

だが、次に来たのが光努達イリス勢。

光努と獄燈籠の二人にも焦った。

光努の情報ほとんどなく、過去の戦闘記録もデータとして残っていない。最も、光努がわかりやすい所で戦うということ自体少ないということもあるのだが。

その点、イリスの戦闘部隊と名が高い『アヤメ』に所属している獄燈籠は、ある程度にデータもあり、その実力が伺える。だからこそ、誰を当てるかにも考え、どうにも攻めあぐねていた。

幸い、二人は分かれて行動したため、光努の方には近場にいたニゲラ・ベアバングルを送り込むことでとりあえずの対処とた。

獄燈籠の方も、ちようどやってきた界羅に相手を任せることで、一先ず全ての襲撃者に対して入江は安心する。

が、ここでまたもやってきた襲撃者。

鉄の甲冑を付けた騎士と、和風の鎧を備え付けた武者。

その正体は、イリスファミリー第二戦闘部隊『シャガ』のリーダーであるリルト、その双子の弟であるコルの二人。できてまだ5年と立たない戦闘部隊だが、その実力は、ミルファイオーレでも知るところとなる。

襲撃者、襲撃者、襲撃者と三回も続くと、入江もさすがにまいってくる。

実はこのあとにまたボンゴレ側のクロム、草壁、ランボ、イーピンの4人が侵入するということもあつたが、それも入江の悩みの種の一つ。

しかし、『シャガ』の内一人は来ていないようだが、残りの二人がいるのに、入江は再び焦る結果となる。A級のグロ、C++級の太猿と他野猿に部下10名程を二人に差し向けたが、結果は無残としてやられてしまった。

(あの剣は見たことのない匣兵器だ。多分イリスのオリジナルだろう。だが、問題はそ

こではない。彼女達は、劍技をほとんど使っていないかった)

リルとコルの真骨頂は、父親より習いし劍刀術。山本の時雨蒼燕流のように、彼女達も自分たちの劍術がある。匣だけを使ううちは、まだまだ本気でないということ。

(幻騎士を向かわせるか? いや、それでは研究所の警備がいなくなる・・・)

光努と戦っているジンジャーを除けば、今現時点で無傷で残っている者たちは、わずか二人。

幻騎士と“妖花”アイリスの二名。

だが、幻騎士は現在研究所の警備態勢に入り始め、アイリスは入江の命によりスパナと共にいるツナを発見し、交戦を始めていた。

実を言うと幻騎士が山本を倒したあと、研究所の警備に入るまでにいろいろとあったのだが、ここではあえて割愛。後に語る時が来るだろう。

アイリスには、死荃隊と呼ばれる直属の部下がいる。いや、部下というより、ただ相手を殺そうとするだけの兵隊人形と成り果てた、元人間。

元々ミルフィオーレの人体覚醒部にいた研究者たちであったが、助手であったアイリスをみんなで喜ばせようと、自ら進んで人体実験の被検体になり、最終的にはもはや言語すら忘れ、攻撃能力の覚醒した兵隊と化した。

改造された肉体が、全身を覆う特殊なスーツと、アイリスの持つ鞭から発せられる雲の炎によって異常な体質変化を起こし、雲の肉体増殖を起こす。

自らの筋繊維、骨格、全てを増殖させることで、スピード、パワーを増殖させ、人体を超越する力を発揮する。

「一先ず沢田綱吉はアイリスに任せて、今はジンジャーの方が」

そうつぶやき、画面に映るジンジャーを見る。

ふよふよと浮きながら、前に置かれた糸でもってぐるぐると巻き付かれた中身が光努の繭が見えた。

「ジンジャー！ファイオーレリングの回収だ！」

『了解入江隊長☆』

入江からの指示を受け取り、早速ジンジャーも命令実行に移る。手に持つ箒を構え、ぐるぐる巻きとなった繭に目を向ける。

そしてそこにあつたのは、破れて空っぽの中身がよく見える状態の繭だった。

……空っぽ？

「……あれ？」

その瞬間、自分の後ろに気配を感じた。

咄嗟に振り向いたときにはすでに遅く、目の前に叩き込まれたのは、足。

ドゴオオ!!

「所詮は糸の塊。簡単に破ることなど造作もないな」

軽く地面に着地し、楽しげに笑うのは、光努。

いつの間にか繭の中から抜け出して背後からジンジャーに奇襲したのであった。

「おかしいな……ライノ・チエル・セノーニョ 晴 ク モの卵をくらって無傷とか。ていうか

傷がないから体内まで届かなかったの？……馬鹿な！」

「そういうお前も意外と頑丈だな」

頑丈は当然も当然。元々が人形を操るジンジャー故に、人形そのものが頑丈に作ることも可能なのである。最も、それでも見た目はまるで普通の人間のように（格好は普通ではない）なのではあるが。

「次は叩き潰す、人形くん」

既に光努は、ジンジャーが偽物だと見破っている。

対した眼力、洞察力。どこをどう見たのか知らないが、もはや光努には手加減するつもりなど毛頭なかった。問答無用で破壊しそう。

「ふ、白神光努。なぜ君はここにきた？」

だが、対するジンジャーはにやりと笑い、質問をしてきた。

「なぜ？お前らのボスの仕業だろ？」

「その通り、つまり、君はこの場所に呼び寄せられたということ」

「その心は？」

「この部屋は、君を撃退するように改造されているってことさー」

箒を横風に振るうと、箒の中から黄色く輝く晴れの炎の塊が飛び出した。そして壁にぶつかると同時に、壁の一部が開いて、黒光りする、少し細めの砲台が突き出てきた。

中が黒く染まる放題の中が、だんだんと黄色い光が貯められていき、レーザーのごとく晴れの炎が放射された。

「レーザー？しかも、追尾式か」

少し避ける素振りを見せただけで、レーザーの角度が光努の方へと変更した様子を見て、自分方へと向かってくる追尾式ホーミングタイプだと判断した光努は、後ろの壁際の方まで退

避した。その際、地雷式に設置されていた罠が発動し、炎爆発が起こったが、なんでもないようにほぼ無傷だったことにジンジャーも呆れていた。

壁に当たる前に一度止まり、レーザーが飛んできて、タイミングを見計らって飛び上がることで、レーザーが移動する前に壁にぶつかって攻撃を止めることに成功した。

「ま、それくらいはできるよね。でも、空中に飛ばば避けることは、」
ダン！

そのまま光努は壁を蹴り、水平に壁を走った。

重力を無視するようにした動きをしてのける光努だが、その光景にジンジャーは、なんら焦ることがなかった。

「それも、予想通り☆」

パチン！と指を鳴らすと、光努の速度がぐんと落ちた。

「!?これは、糸?」

壁の隙間を見てみれば、晴れの炎を帯びた小さなクモ。たくさんある壁の隙間にクモが糸を吐きながら、確かにそこにいた。

最初から光努の動きを阻害しようとする糸ではない。小さく長い糸が何重にも重なり、光努の動きを鈍らせるほどに頑強な糸へとなっている。

ちりも積もればなんとやらというが、まさにその通りに、光努の動きは確かに阻害さ

れていた。ただの糸でなく、晴れの炎を帯びて活性能力も高く、多少のちぎれはすぐに修復されるというおまけ機能付きなので余計面倒である。

(ここら辺全部一掃する必要はあるけど、少し面倒だな。どつかにリング落ちてないかな)

少し動きが止まった光努に、好機と判断したジンジャーは、再び指を鳴らすと、壁がさらに開いてレーザー用の砲台がいくつも突き出てきた。

レーザーなんて物がこの時代でもよく使っているというわけでないが、入江による基地全体に張り巡らせた晴れの炎と、ジンジャーの晴れの炎と匣兵器がかけあわせてレーザーらしきものが完成したという。実際には実験段階の武器だが、今のところ有用に使えているため、ジンジャーも入江もラッキーだと思っていた。

キーン！キーン！

「！」

笑っていたジンジャーの耳に、何か甲高い金属音が響いた。

音のした方向、光努を閉じ込めるように固く閉じてロックをかけられ、なおかつ表面には、床や壁と同じように晴れの炎の纏われたクモの糸も這わせている入口の扉。扉へと目を向けた瞬間、何かが扉の向こうから飛び出してきた。

ザシュ!

「な! 剣先!」

扉の向こう側から両刃の剣と思わしき先が突き刺され、そのまま横に移動して扉を切り裂き、抜いてまた刺して縦に切り裂きを繰り返していく。

そしてあらかた向こうまで貫通した切り傷が出来た時、派手な爆音と共に扉が吹き飛ばされた。

そのまま扉の向こうから現れた人物を見て、ジンジャーは驚いていた。

「すっごい晴れの炎だらけ。扉開かなかったし、誰か戦ってるのかな」

ジジジ、という細かい音を鳴らす、緑色の雷を纏った両刃の剣を片手に持つ人物。

柔らかな黒髪を、リボンで少し短めのポニーテールにしている、その表情は楽しそうに、入った部屋を観察していた。

『シヤガ』のリル!?! なんてこんなところに! っていうかさっきまでうちの隊長と戦ってなかった!」

もちろん知っていると思うが一応言っておくと、ジンジャーが副隊長を努める第8グリチネ隊の隊長はグロ・キシニアである。

そして、その隊長のグロを倒して今部屋に入ってきたのが、リルであった。

キヨロキヨロと部屋を見て、ジンジャーと光努に目を向けたリルは、嬉しそうな笑顔

になった。

「おい光努ー！ やっほおー！」

剣を持ってない方の手をぶんぶん振りながら、普通に光努の元へと歩み寄ってきた。

「——て、そんなことさせるか！」

パチン！

驚いたがすぐになんとか持ち直し、ジンジャーが指を鳴らすと、壁の砲台から晴れのレーザーが飛びだし、リルの下へと一直線へと向かった。

対するリルは、雷の死ぬ気の炎を剣の表面から先端に這わせ、一直線に飛んできたレーザーを、正面から突き破った。

一点に集中された雷の炎による強力な硬化力と、リル自身による剣さばき。その二つが重なったとき、飛んでくるレーザーすらも容易に突き崩した。

そのままリルは懐から少し太めの針を取り出して指のあいだに挟み、そのまま周りに手を振るようにして投げつけた。

（あれは、雷の炎……まずい！ 砲台が！）

ジンジャーの雷の炎の纏われた針が砲台の中に寸分違わず入り込むと、内側から爆発し、砲台は使い物にならなくなった。

啞然とするジンジャーをよそに、リルは駆けていき、光努の元までやってきて、勢い

よくその首筋に腕を巻きつけるようにして抱きついた。

「光努！」

「リル、でかくなつたな！」

光努からしてみればリルと会うのは数日ぶりだが、リルから見れば、10年前にいきなり行方不明となり、それ以降10年間会うことはなかった。

10年ぶりの再会を果たしたリルは、花のような笑顔で嬉しそうに笑っていた。

『とりあえず切ればいいと思うよ』

10年前、一人の少年、白神光努が突如行方不明となった。

イリスが総力を上げてその搜索をしたが、ついぞ見つけることができなかった。

そこから10年。

ミルフィオーレが現れてイリスが狙われたりもしたが、そんな時でも光努の搜索を行っていたが、やはり見つけることはできなかった。

当時8歳であったリルとコルは、自分たちの所属するイリスのボスであり、とても慕っていた光努が、大好きだった光努が突然いなくなりとても悲しんだ。

『シャガ』となってあちこちに出かけるのも、行方不明となった光努を探そうとしてのことも多くあった。

そして光努が行方不明になって10年後、光努は再びイリスに戻ってきた。

光努とジンジャーの戦いに割って入ったリル。

入った時にジンジャーの仕掛けた晴れのレーザー砲台だが、剣と針と炎でもって全て破壊することに成功していた。恐ろしい技術力に唖然としているジンジャーだが、それをやつてのけた張本人のリルといえば

「懐かしい〜♪」

「ははは、昔はあんなに小さかったのにな〜」

光努の首に腕を回して抱きついたリルが、光努と共にくるくると楽しそうに回っていた。

その表情は華やかであり、本当に嬉しそうだった。

が、よく思い出してみよう。

この場所は敵の基地の真っ只中だということ。

二人が回っているというその光景を眺めているジンジャーが、ふよふよ浮いていることを。

リルによって晴れのレーザー砲台は破壊されたが、まだこの部屋の中には晴れの匣兵器である晴ラーノ・チエル・セノーニヨクモがあちこちにいて、晴れの炎を帯びた糸を出していることを。

「ふむ、リル。一先ず話はあとだ、先にあいつ片付ける」

そう言って光努は回していたリルをおろして懐から何かを取り出した。

全体的に赤い色に、丸い輪っかのような模様が付けられた匣だった。

「光努、それは？」

「うん、ルイの作った匣だな。リル、嵐系のリング持つてるか」

「これ使つていいよ」

そう言って渡したのは、デIFOオルメされた、背中に紅い石のはめ込まれたドラゴンに、翼を下に向けて円を描いているという独特のデザインをしたリングだった。

「Dリングつて言つてね。全部で8つあるんだけどそれは嵐系のリングなの」

D、つまりドラゴンD r a g o n。

イリスファミリーが所持していた、『龍炎石リョウエンセキ』と呼ばれる特殊な鉱石を加工して作られ

たリング。作られたリングは全部で9つあるが、その内全部種類が同じでなく、8つのリングは嵐、雨、晴れ、雲、雷の5種類程に分けられているという。

ちなみに、獄燈籠の持っていた東洋の童を模した紅いリングも、嵐系のDリングの一つである。

リルの持っているもう一つの色違いの緑色のデIFOオルメドラゴンのリングも、雷系のDリングである。

「じゃ、少しかりるぜ」

ボウ!!

Dリングを指にはめ、そこから迸るように真つ赤な嵐の死ぬ気の炎が吹き出した。

「嵐の炎だとー!」

その光景にジンジャーが驚いているあいだにも、懐から取り出した匣に、嵐の炎を注
入した。

中から飛び出してきて出てきたのは、光輝く赤い球体。

最初から球体というよりも、いくつもの赤い輪が合わさり、球体の形となっている物。
フォンという微かな音を鳴らしながら、球状に設置されているいくつもの赤い輪がく

るくると回転し、静かに赤い光を放っていた。

「綺麗。それにしてもルイ、また変わったの作ったの？」

「この匣は面白い感じに使えらしいぜ。今の状況ならびつたりだ」

キイン！

光努の手の上でくると環を回している赤い球体。そこから環が広がって光努とリルの周りをくると回るように大きくなり、光努とリルを中心として、いくつも環が広がって、薄く赤い光が部屋全体を包み込んだ。

「真紅の輪」
オリソンテ

ポオウ!!

薄く赤い光の波動が当たった箇所から、嵐属性の死ぬ気の炎が発火した。

発火した、というよりは、その範囲は強大すぎる。

証明を照らせば部屋全体が明るくなるように、赤い光が広がった先は広い訓練室全て。いくつもの赤い円環状の波動に触れて、壁や床は光努とリルのいたところを丸く切り取るように浅く嵐の炎が張り巡らされた。

「これは……！」

一瞬で部屋が真っ赤に染まったことに驚愕したが、次に驚愕したことは、自分のマントにも燃えた嵐の炎を取ろうとマントをはためかせた途端、あつという間に自分に群

がっていた嵐の炎は霧散してしまった。

よく見ても、先ほど炎の浅く燃えていたところは火傷ひとつない。炎が浅すぎて簡単に消し飛んだんだろうと考えた。

「光努。ジンジャーの炎がすぐに消えちゃったよ?」

「この匣は、炎を限りなく薄くして、広範囲に満遍なく広げることができるんだ。そして、赤い波動に触れたものは嵐の炎で燃える」

光のごとき赤い波動として、幾重にも重なった円環状態から広がるように、辺り一体に行き渡らせることのできる匣兵器。波動に触れたものは、全て最初に注入した嵐の炎によって燃え盛るが、そうそう都合のいい匣ではない。

「最も、この程度の炎は少し動けばすぐに消える。が、動けないこの部屋はどうなると思う?」

「……しまった!」

動けば簡単に炎は散ってしまう。

その為、生物に対してあまり有効ではない。

が、この匣の真骨頂はそこではなく、動くことのできない物体にはそのまま作用し、浅く薄い炎からだんだんと無生物を分解燃焼し、最終的には波動に触れた全ての物体を燃やし尽くし、その中の生物も破壊する。

壁の隙間にいた晴ライノ・チエル・セノーニヨ ク モも、匣兵器自体の炎はすぐに霧散したが、その隙間の壁を燃やしている嵐の炎によって、全てやられてしまった。

「僕の晴ライノ・チエル・セノーニヨ ク モが！」

ジンジャーが悔しがるが、それだけでない。

床や壁、天井すらもはや真つ赤な炎によって燃え盛り、だんだんと威力が増していく為、最初から仕込まれていた罠などは、隙間から中に入り、分解破壊を繰り返し、この部屋に仕掛けられていた罠の数々はもはや使い物にならなくなっていた。

この匣は、最初に使用した者とそのすぐそばにいた者の周りからスタートするため、最初の炎は当たらないが、その後はだんだんと燃えてくるため、自爆技とも言える。

しかし、この匣の効果を知る者にとっては、そこまで致命的な自爆技とはならなかった。

「ふっー！」

光努がしやがんで足払いをすると、その風圧でもって、光努とリルを中央とした周りの嵐の炎だけを霧散させた。

「リルサンキュ。よし、罠も燃えたし、この部屋から出るぞ」

「うん！」

リルに嵐のDリングを渡し、光努は足に力を込めて、空中をふわふわ浮いて燃え盛る

嵐の炎に包まれた部屋の中央にいたジンジャーの元へと、一足で跳んだ。

ガギーン！

「あくあ、やられちゃったな」

「どうせ人形だろ。本体はどこだよ」

つぶやき、目をうつろにさせているジンジャーと、ジンジャーの胸の中央から背中まで手を貫通させている光努の姿が、そこにはあった。

さきほどまで人と同じ姿だったのに、今のジンジャーは口元や瞳が人形のそれに近づいている。

もはやここには、ジンジャーはいなかった。

「僕の本体を見つげる前に、君には消えてもらおうけどね」

「何?」

ジンジャーが言うと、自分の腕と足でもって光努にしがみつき、万力のごとき力で固定する。

そしてよくよくと見れば、ジンジャーの体から煙のような物が上がっていた。

「もちろん最終的に僕は自爆すると思つて、火力は多めにしといたよ☆」

「そんな気遣いいらねえ! つーか自分が自爆すること想定するなよ!」

だんだんと吹き出す煙が黒々とし、その手足がうねうねと伸びて光努が掴まぬとも絡

まってきた。正直気味が悪い。

「リルー！ちよつとこれどうにかなんねー？」

「うーん。切り刻んでみる？でも切った時に爆発するのも困るし、いつそ燃やすとか？」

「それって密着してる俺も確実に燃えるよな？」

密着してる中で爆発すれば、そうそう無傷ともいえないだろう。しかもご丁寧に向こうはこの自体も想定して火力多めとか言ってるので、いったいどうなるのかがわからない。

「ふむ、ならば切りながら止めればいいと思うよ。雨の炎の特性は“鎮静”だしね」

ズバァン！！

頭から一刀両断されたジンジャーが、切り裂かれると同時に澄み渡るような青い炎に包まれ、ボロボロと崩れ落ち、その活動を完全に停止させた。

「鎮静作用の炎を練ったから、爆発は遅延したよ。速く離れないとね」

ジンジャーから解放された光努は、床に降り立ち、ジンジャーを切り裂いた人物を見た。

柔らかな黒髪。青系統の色のコートを着込み、その腰に刺さった黒塗りの鞘に、手に持った日本刀の刃を収め、パチンという音を鳴らした。

「コル」

光努が呼ぶと、こちらを振り向いた。

「光努」

リルの双子の弟であり、姉と同じく『シャガ』に所属している少年。刀を収めた手を広げ、てくてくとゆっくりと光努の元へと向かった。対する光努も少し手を広げるようにして歩み寄る。

ガシイ！

そして二人してハグした。

リルと同じく、10年間行方知らずの光努と再会を果たし、コルもやはりすごく喜んでいるのであった。

「えっと、二人共。速くしないとジンジャー爆発するよ？」

コルの両手を持ってくるくと回っていた光努とコルはピタリと止まり、3人共ザッザと歩いてリルの壊した扉から外に出、廊下をしばらく進んだところで遠くから派手な爆発音が聞こえたと思ったら一先ず足を止めた。

「よし、じゃあ今後の作戦会議でもしようか」

「うん！」

『ツナ側襲撃ダイジェスト②』

光努、リル、コルの三人が、グロ・キシニアに太猿野猿とブラックスペル、さらにジンジャーブレッドを各自撃破していた間、ツナ達ボンゴレ側とミルフィオーレ側でもいろいろと動きがあった。

山本を倒し、そのまま止めをささそうとしていた霧のマーレリングを持つ6弔花の幻騎士。

だがその時、二人のいた匣兵器実験場の壁を外から破壊して殴り込んできたのが、10年後の雲雀恭弥。

囷となつてミルフィオーレの部隊を相手にしていた雲雀だが、全て片付けてさつそうと現れたのであった。もちろん、助けに来たというわけではなく、個人的な目的で来たのは言うまでもない。

10年後のボンゴレ守護者たちは、ミルフィオーレの最重要抹殺対象に指定されてい

るため、もちろん雲雀恭弥を知っている。その為、現れた雲雀を始末すべく、自分の匣を展開した。

雲雀は過去の経験、骸に幻覚でやられた経験から、初対面で特に恨みの無い幻騎士と相対したとき、術師ということで割と好戦的になつていたのは余談である。

幻騎士の霧属性匣兵器である “スベットロ・ステイブランキ” 幻海牛^{ハクカイウ}は、自らの頭の映像を、小さな海牛を使つて幻覚として顕現させる匣。

霧属性の炎の特性は、“構築”！

訓練室を、周りが植物のフィールドに幻覚で構築した。

が、そんなことにも何ら焦る素振りを見せない雲雀。

幻騎士の幻覚は自分の考えるイメージを投影する為、映像処理の間に合わない負荷を与えれば、周りの幻覚は壊れる。雲雀の雲属性匣兵器である “ホルコスビーン・スレーヴオラ” 雲ハリネズミ^{クモハリネズミ}を2体展開し、周りの幻覚を攻撃し始まる。しかもその状態から、雲雀と幻騎士本人達によるトンファーと剣の鏢迫り合い。

さすがの幻騎士といえど、雲雀と高レベルの戦いを繰り広げながら、幻覚のフィールドを構築し続けるのは至難の技だったらしく、次第に幻覚フィールドは崩れ始め、匣兵

器である幻海 牛の姿が雲雀の目に映るところとなった。

スベットロ・スデイブランキ

幻海 牛は、海牛本体が幻覚を構築する能力を備えながら、単体で爆発物として相

手にぶつかると誘導兵器として使用できる。その為、幻騎士の戦術は、幻覚によつてその姿を隠した海牛を相手に向かってぶつける、「見えない爆弾」。

だがこれを、雲雀はリングの炎を使うことによつて回避している。

リングの炎を薄く広範囲に広げ、見えなくなつたとしても実態として存在する海牛が炎に触れた瞬間、リングの炎の揺らぎによつてその方向を特定し、ハリネズミで防御、または回避することに成功していた。

今でこそお互いに対した傷もなしの高い攻防をしているが、この均衡はすぐにでも崩れる。

この戦いの肝は、やはり匣兵器。

海牛による攻撃をする幻騎士と、ハリネズミによつて防御する雲雀。

だが、雲雀は生来から持つ強すぎる波動の為、精製度C級以下のリングを使えば、一回匣を開くだけでリングが砕けて使い物にならなくなつてしまふ、いわゆる使い捨て。

この時代には、精製度A級以上のボンゴリングが無い為、雲雀は基本的に戦闘では

C級以下のリングで戦っている。

それでも相手をほぼ圧勝できるのは、雲雀の天才的な戦闘センスとその実力の高さ故である。

だが敵がそんじょそこらの有象無象でなく、ミルファイオーレ最強の6弔花であると、そうも簡単にいかないのが現状。リングが全て亡くなつた時、匣兵器も使うことができず、幻騎士が火力面で圧倒的なアドバンテージを得る。いくら体術に優れている雲雀といえど、このままではやられる。

だからこそ雲雀は、強行的な手段を使った。

それこそが、ホルコスピロー・ヌーヴオラ「裏・球針態」と呼べる、雲ハリネズミの匣のもう一つの使い方。

匣が壊れるほどに強大な炎を注入することで、その匣本来の使い方と別の使い方をする、雲雀の匣に隠された機能。だが、この匣を使うに当たり強大な炎を使うのだが、雲雀のもつリングはそれほどに強大な炎を出すことができないほどに精製度が低い。その為、現時点で残っているC級のリングを2つと、D級のリングを3つ同時にはめて、同時に炎を出すことで、リングの耐久力以上の炎を出すという荒業をしたのけた。

雲雀の手元からハリネズミが光となって広がり、雲雀と幻騎士の二人だけを包み込み、ドーム状の球体となって広めの戦闘フィールドを形成した。

白く輝き、巨大な針に囲まれた半円状の球体のフィールド。その場にいるのは幻騎士と雲雀の二人のみ。

「裏・球針態」とは、戦う人間意外を、匣兵器すら排除する、絶対遮断空間。

密閉度の高い雲の炎によって作られたドームは、敵に背を向けて破壊に専念するか、作り出した張本人である雲雀を倒すしか破壊する方法は無い。

ここからの戦いは、雲雀と幻騎士。己の体技による戦い。

雲雀の武器は、一対のトンファーのみ。

そして幻騎士の武器は、四本の両刃の剣。

これを幻騎士は、あろうことか両手両足で巧みに操った。

足で掴んだ剣を地面に突き刺し軸とし、蹴り上げるように反対の足で掴んで剣を振り、逆手に持った両手の件でもって相手を串ぎそうとする。

そんな変幻自在な剣さばきを、雲雀は両手のトンファーでもって受けた。お互いに一撃も譲らぬ戦い。

体術だけで言えば、幻騎士の技術は雲雀に匹敵した。

それだけに、ある一つの小さな要素が勝敗を分ける。

それが、幻騎士の持つ霧のマーレリング。

リングは死ぬ気の炎を生成し、それを武器に灯すことで、その武器を強化することができる。強化と言っても、その炎の特性にもよるのだが、あるとないではその差が出る。高度の低い霧の炎でも、一点に剣に集中させれば、鋼鉄のトンファアを焼き切ることができる。

次第に雲雀が防御をするとき、トンファアがどんどんと焼き切れ、短くなり、次第に雲雀の全身に切り傷が増えてきた。

自分が圧倒的に優勢、にもかかわらず、幻騎士には拭えない違和感があった。

雲雀の表情は、立場に合わない表情。不敵に、笑っていた。

全身に切り傷が走り、自らの血にまみれた姿。匣は使えず、リングも武器であるトンファアも全て碎けてしまった。誰が見ても不利な、もう一息で終わる状況にも関わらず、その目に宿る光は幻騎士を見据え、自分の死など予感もしていない、不敵な目。

止めの渾身の剣撃と同時に、崩壊する裏・球針態。

崩れ落ちた瓦礫の山。土埃が立ち込める中で幻騎士は立ち尽くす。ひらひらと飛んでいる鳥を見つけたが、よくよくと見れば雲雀の鳥であったヒバード。雲雀の好きな並

盛中の効果を歌いながら、パタパタを飛ぶのを幻騎士は見送る。

だが、ヒバードが高度を下げて土埃の中へと入ろうとしたとき、中から伸びた手の指へとその足を止めた。

煙が晴れたその姿を幻騎士が見たとき、驚愕に見開いた。

瓦礫の上に座る人物。黒髪に黒い学生服を方から掛け、その袖に付けられた『風紀』の二文字の入った赤い腕章。その右手の中指には、雲の刻印の記されたシルバーのリングがはめられていた。

「君……誰？ 僕の眠りを妨げると、どうなるか知ってるかい？」
幼さの残る顔立ち。

ボンゴレリングを持った10年前の雲雀恭弥が、そこにいた。

光努とリルとコルが戦い、雲雀と幻騎士も戦っている間、もつと言えば獄寺や山本が戦っていたときからだ。ツナはどこで何をしてたか？

その答えは、ブラックスペルのスパナに監禁されていたのであった。

まあ監禁といつても、結果的には匿ってもらっていたというのが正しい。

囚役を買って出たツナに対し、技術者であるスパナは自分の作り出した4体のモスカを使い、ツナを戦闘不能に追い込んだ。代償として4体のモスカは再起不能に大破されてしまったが、操縦者であるスパナは無事。

なら、なぜスパナはツナを助けたのか？

その答えは、「X・BURNERを完成させる」こと。

技術者には変わり者が多いと聞くが、スパナも例外なく、自分が丹精込めて造り、沢田綱吉を倒せると判断したキングモスカを破壊した。ツナのX・BURNERの技に興味を持ち、その技がまだフルパワーで撃てない欠陥技ということを知り、是非ともフルパワーの完成したX・BURNERを見たいと思って、開発に力の貸すのだった。

先程まで戦い、敵であったスパナの申し出に最初は戸惑っていたツナだが、だんだんとその言葉が本心からであり、スパナにも信頼を置くようになっていった。

X・BURNERの欠点とは、炎の不安定さ。

支えとなる柔の炎と撃ちだす剛の炎のバランス。このバランスが味噌であり、例えば剛の炎が柔の炎より強すぎると、支えが足りずに逆に後ろに自分が吹き飛ぶ。

このバランスがびったりと一致したとき、前方に強大な剛の炎が打ち出せる。

しかし、そうそう簡単に行くこともできない。柔の炎と剛の炎では、炎の出し方が異なり、そもそも同じだけ炎を出すのが難しい。だが不可能ではないが、それは炎が弱い時。強大な炎を放とうと思えば思う程、その炎の出力バランスが難しく、撃つのが困難となる。

それを解消する為にスパナが提案したのが、コンタクトディスプレイと呼ばれる最先端技術。

コンタクトやメガネに直接ディスプレイを映し出し、戦闘の補助を行うような技術であり、既に実用化されて、ボンゴレ側というと獄寺もコンタクトディスプレイを使用しており、ディスプレイ上に標的の位置を探ったりにも使える。

この技術を使ってツナのグローブと連動させることで、ディスプレイに左右のグローブの炎の出力が表示するように作るのが目標。

これを使えば、左右の炎の強さを視認でき、バランスが取りやすく、フルパワーが打てるというスパナの予測。さすがミルフィオーレが誇る技術者だけあり、その予測は真に正しかった。

だが、そう簡単にできるはずもなく、スパナが開発中のところへやってきたのが、妖妖“アイリス・ヘップバーン。アフロヘアーという女性にしては変わった髪型をした女性であり、入江の命令により、死茎隊と呼ばれる部下を引き連れてツナとスパナのいる第4ドッグへと殴り込んできた。

アイリスの雲の鞭によって肉体増殖を繰り返す死茎隊は、もはや人間の原型からかけ離れ、その戦闘能力はスパナのキングもス力を遥かに凌ぐ。

だが、キングモスカと死茎隊の違いは、生物であるかないかということ。

生物に対してなら、ボンゴレの血統が受け継ぐ超直感が冴え渡る。

自分の為にコンタクトを作り続けるスパナの為、ツナは死ぬ気状態になって死茎隊と戦った。

超直感を使い、死茎隊を翻弄し、互角の戦いを繰り広げるツナ。

だが、死茎隊は一人ではないため、その攻撃の余波がスパナまで届く。

壁や天井の破損。機械の爆発。スパナは元々技術専門の為、自分で戦う力を持たないため、なすすべなく怪我が増えるが、その手は止まらず、一心に作業を続ける。

ボロボロになりながらも完成させたコンタクトを、スパナはツナへと託した。

薄れゆく意識の中、スパナは見た。上空に滞空しているツナと、その瞳に宿る自身の傑作の姿を。

「眠るのはまだ早いで、スパナ。おまえの見たがっていた、完璧なX・BURNER^{イクス・バーナー}を見せてやる」

ツナの瞳に映るのは、括弧のような形の上下一對のスロットルバー。

右手の炎を上、左手の炎を下のバーに映し、そこからさらに剛の炎なら赤色、柔の炎なら緑色となってバーを塗りつぶしていく。

敵の攻撃を避けながら、炎の出力と同時にスロットルバーが赤や緑に埋まっていく様子を見て、コンタクトが正常に動くことを確認する。

「オペレーションX^{イクス}」

『了解シマシタ、ボス。X・BURNER^{イクス・バーナー}発射シークエンス開始シマス』

ツナがそう呟くと、機械音がヘッドホンから流れ、ディスプレイに表示されていたスロットルバーにプラスされ、両手の位置によって変動するターゲットの印と、バーのゲージを繋ぐラインが出現する。「オペレーションX^{イクス}」の掛け声で、自動的にX・BURNER^{バーナー}の発射スタンバイへと移行する。

両手の炎の数値によって変動するバーとライン。両手のバランスが取れるとき、それは上下のバーを繋ぐ線が一直線となるとき。

X・BURNER^{イクス・バーナー}を打つ方法は、その一直線になるようにバランスを整え、相手に放出

すること。

右腕を後ろに向け、柔の炎を放出し、デイスプレイでだんだんと上昇するバーを見つ、その数値が15万 F ファイアンマホルテージ Vとなったところで固定した。

そして拳を握るように、左手のグローブのクリスタル内に、剛の炎を溜める。溜められた炎はゲージとなって、スロットルバーを赤く染め上げる。

対するアイリスたちは、迎え撃つように死茎隊の増殖され強大となった肉体をもって互いに壁のように組み、ツナの攻撃に受ける準備を整えた。

『ライトバーナー炎圧上昇、20万 F ファイアンマホルテージ V！』

ヘッドホンの音声と共に、最高出力を叩き出した右手の炎を固定したまま、左手のクリスタル内の剛の炎をさらに充填する。

『レフトバーナー炎圧上昇、20万 F ファイアンマホルテージ V！ゲージシンメトリー、発射スタンバイ！』

瞳の中のゲージがMAXの数字を叩き出し、上昇したバーの先端を繋ぐラインが一直線を結んだとき、瞳の中央にXの模様が浮かび上がった。

「うおおお!!」

イクス X・BURNER!!

ツナの左手から放たれた渾身の炎。

強大な炎は前方の敵を、壁を、全て飲み込み、一瞬で目の前の空間をかき消していった。

ディスプレイの指示通り、両手の炎が最高出力でありながら、最も安定の取れた出力を叩き出し、ぶれることなく、完全なるX・BURNER^{イクス・バーナー}を、ツナは完成させた。

その威力は、耐炎製の壁で作られているにも関わらずに、ツナ達のいる第4ドッグから3ブロック先を一瞬で消滅させるほどに、強大な威力を顕にしたのだった。

『休息と現状把握』

丸く、白いテーブル。その周りを囲うように置かれた、同じカラーリングの白い椅子が全部で3つ。テーブルの上に乗っているのは、お菓子と紅茶。

3段重ねの皿の乗ったティースタンドには、茶色や白にアクセントの加えられた少しカラフルなクッキーがた並び、机の上に置かれたティーカップの中から立ち上る湯気と、鮮やかな紅い色をした紅茶。食器には細やかな装飾が施されており、Xを描く花のような模様がつけられていた。

そんなカップを取り、一口中の紅茶をすする。

静かに音を鳴らし、皿の上にティーカップを置いた人物、白く柔らかそうな髪を揺らし、楽しいな雰囲気を出しているが、少しため息を吐くようにして、言葉をだした。

「さてと、これからどうしようか」

誰に問うたとういうこともないが、隣に座っている人物、柔らかな黒い髪。若干無表情にも見えるその表情。隣から聞こえるその問に答えた。

「ん？目的は入江正一のところに行くはずじゃないのか？」

「いや、そうなんだけどさ」

苦笑する白髪の人物に対し、反対隣の人物、柔らかな黒髪に、ティースタンドの中のクッキーをつまんでさくさくと食べている人物は答える。

「わかった！どこにいるのかわからないでしょ。コルもそう思うでしょ」

「ふっ。なんだ、よく分かつてるじゃないか、リル」

「光努、そこはあまり威張って言う事じゃないと思うけど」

中々に楽しげに談笑していたのは、光努、リル、コルの三人。

少し広めの一室で、食器棚が多数置かれた倉庫のような部屋。

机にお茶とお菓子を載せ、椅子に座って談笑している三人の足元では、大量のミルフィオーレの兵隊が崩れ落ちていたのだった。

ジンジャーとの戦いを終わらせ、一先ず訓練室から出た光努達三人。

一先ずどこかで話でもしようかと思つた部屋が倉庫のように食器棚が大量に置かれているが、倉庫らしい割には意外と清潔で広い部屋。

入ると中にいたのが、ミルフィオーレの兵隊十数名程。何やらダンボールを持っていたので入り用な物を取りに来たのだろう。

一先ず光努達三人は入口から覗いて中にいる人物を確認したら、一瞬だけアイコンタクトをして扉からこつそりと侵入し、割と穩便に静かに、後ろから氣絶させた。あるときは後ろから強打を与え、あるときは雷の死ぬ氣の炎をスタンガンのごとく当てて、叫ぶ暇もなく床の上に沈めたのだつた。

しかも倉庫だからなのか、監視カメラがついておらず、隠れるにはなんともつてこないところをピンポイントで見つけた三人であつた。

その後、部屋の中にあつたテーブルと椅子を用意し、食器棚からティースタンドとティーカップにポット。そして非常用に置かれていた天然水のボトルと小型ガスコンロとガスポンベを使用して紅茶を沸かす。ちなみに紅茶葉も棚に置いてあつた。しかも棚の中には何やら高級そうなお菓子もあつたのでついでに並べる。

ティーカップやお皿にミルフィオーレのXを描く花の模様が付けられているのは流石だなと思ったのは余談である。

さくさくとティータイムの準備をし終えた光努たちは、敵地とは思えぬ程に寛いでいるのであった。

「しかし、現実的にどうするか。この基地つてもはやマップがデタラメだろう？」

「ミルフィオーレの部下の持つてるマップだって、新しく部屋を動かしたら意味なくなっちゃうしね」

「ていうかここがどこだかもよくわかっていないからな」

まず言うておくが、この三人は別に方向音痴というわけではない。いや、約一名は方向音痴だがそれは今はいい。

にもかかわらずにこの場所で停滞しているのは、やはり入江がメローネ基地の構造を変えているから。

どこがどこに繋がっているのかわからないのであれば、入江がいるであろう場所につけない。ちなみに、現時点で入江がいるかもしれないと思っっているのは専ら白くて丸い装置の置かれている入江の研究室である。

「ま、こんな時の為にうちの作戦参謀（仮）いるんだけどな」

「なんで（仮）なの？」

「なんでって、別にうちに参謀とかいないから」

「……………」

ゴソゴソとポケットを探り、小さめのノートPCを取り出す光努。

単行本のコミックスサイズという手頃な大きさのPCを開き、カタカタと操作するこ
としぼし、画面上に映った人影を見て、リルやコルは喜びの声を上げた。

「ルイ！」

『元氣そうだな二人共。光努も無事みたいだな』

画面に映ったのは、長めの金髪をし、白衣を羽織った男性、ルイ。イリスファミリーの誇る頭脳であり、光努の持ってきた匣のほとんどを作った張本人である。

PCに備わっているカメラから、こちらの様子もむこうに見えているらしく、リルとコルの姿を見て向こうも笑っていた。

「さっそくだけどルイ。入江正一の研究室の場所がどこか知りたいんだよ」

『ふむ、ボンゴレに送られてきたメローネ基地の図面と、おまえたちの歩いたルート。そしてボンゴレ側からこちらにも流れた戦闘状況などを考察した結果』

「結果？」

『研究室はここから4ブロックくらい先のところにある』

「割と近っ！」

広大なメローネ基地内であれば、4ブロックというのは割と近い。一体どういうルートを通ったらそんなところへ来るのか謎である。

PC画面に3Dのメローネ基地の画面が浮かび上がり、そこに赤く塗りつぶされたブロックと、青く塗りつぶされたブロックが見える。どうやら赤いブロックがターゲットとなる研究室で、青ブロックが現在の光努達の居場所を指しているようだ。

他にもオレンジのブロックや紫のブロックも存在する。

『ボンゴレ側に入った情報だと、雲雀がその紫のブロックで幻騎士と対峙したそうだ』

「幻騎士って、確か6弔花の霧の剣士って言ってたな。二人共知ってるか」

「うん。幻騎士って剣を4本使って戦うんだよ」

「4本って、どうやって持つんだよ」

「手と足で掴んで持つんだって」

「何それ見てみたい」

剣士、という言葉に反応したリルとコルだが、二人共幻騎士を知っているようだ。口ぶりからして直接戦ったことは無いようだが、戦いは見たことある、もしくは聞いた事はあるってところだろうか。

霧のマーレリングで幻覚を操り、四肢を使って剣を振るう。聞いただけで中々に面白そうな敵だと思ひ、光努は割と楽しげな表情を浮かべるのだった。

『ちよつと待つてろ。少しボンゴレ側の通信に混ざつてくる』

「よろしく。ツナ達どうなったのか聞いといてくれ」

『わかつた』

といつて一旦切れるルイ。向こうの方でボンゴレと通信すれば、現在のツナ側の状況がつかめるだろう。そうすればいろいろと動きやすい。敵がどれくらい減つてるかも重要なことだしね。

「そういえばここつて6弔花がたくさんいるつて聞いたけど、幻騎士とグロの他に誰がいるんだ?」

「あれ?光努知らなかつたの?目的の入江正一も晴れのマーレリングを持つてる6弔花だよ?」

「あ、そうだつたんだ」

6弔花と言つても、全員戦闘ができるわけではないのか。そんなことを考えている光努だつた。

言つてしまえば6弔花とは、ボンゴレの守護者と似たような役割の人物。ボンゴレの争奪戦では血で血を争う戦いを行つていたため、マーレリングの守護者もそんな感じのやつらばかりだと思つたら、技術畑出身でおもいきり指揮官タイプの入江のような人物もいるのであつた。

「あ、そうだ。マーレリングといえば、コルにこれあげる」

と言つてリルが取り出したのは、グロを倒したら手に入れた雨のマーレリング。

コルにあげようと持っていたものだが、すっかり忘れていて今思い出したのである。

「マーレリングか。雨のDリング持つてるけど、もらつとこ」

もらえるもんは一先ずもらつとけ、と言うように雨のマーレリングを手にとつてしげしげと眺める。

よくよくと見ればコルの指にも、指に体を巻きつけるようにして背中に青い石のはめ込まれた、竜を模した蒼いリングがつけられていた。

コルの持つている、雨系統のDリング。特にいくつもリングをける必要性も無い為、そのままポケットにリングをしまおうとしたコルだが、光努が途中でストップをかけた。

「コル、少しそれ見せてくれ」

「?いいよ、はい」

弧を描くように放るリングを、光努は片手でキャッチする。そうそう投げてもいいものでもないのだが、割とその扱いは使っていた本人が本人なだけ結構軽かった。

「ふーん、雨の・・・マーレリングねえ」

興味深そうに見ていた光努だが、なぜか、その瞳の奥では、どこかつまらなさそうに

している光が見えたが、気のせいだったのか、すぐにそんな気配は霧散してしまった。ピンと親指ではじくように放るリングを、今度はコルがうまくキャッチして、そのままポケットにしまった。

「それで、ここの6吊花はこの3人か」

「あともう一人いるよ」

「まだいるのか。なんで白蘭は、自分のいない日本なんかマールリングの過半数を置こうとするのか、よくわからないな」

「僕も同感」

「最後の一人はγって言って、雷のマールリングを持つてる人だよ」

その名前を聞いたとき、光努が一瞬ピクリと反応したが、次第に笑いに笑っていた。「ふうん、γねえ。そういえば、この時代のジツリヨネロファミリーってどうなってるんだ?」

「あれ? 知らなかったの? ミルフィオーレって元々白蘭がボスだったジエツソファミリーとジツリヨネロが合併してできたんだよ?」

「合併?」

「そ。けど結果的には合併というより、ジエツソに吸収されたという方が正しいだろうけどね」

コルの言葉に確かに、と納得する光努。

合併となつていているらしいが、今の白蘭の独裁政権、マーレリングの所持など考えると、何らかの手段を用いてジツリヨネロを手に入れたようにしか見えない。

元々のジツリヨネロファミリーを知っている、光努だからこそその考えだった。

二つのマフィアが合併したあとは、元々ジェツソの連中はホワイトスベル、ジツリヨネロの連中はブラックスベルとしてミルフイオーレで活動をしているのである。

なので、幻騎士、太猿、野猿、他ブラックスベルの人間は、大多数が元々がジツリヨネロの人間である。あとから入った者もいるが、合併時何があつたのか、この二つのファミリー間のわだかまりは意外と深く、組織内でも定期的に揉め事があるくらいである。

「ジェツソファミリーに白蘭ね。この時代には不思議がたくさんだな」

「私達からしてみれば光努の方が不思議だけどね」

「僕もそう思う」

「はっはっは、お前らは正直だな」

パツと、画面から消えていたルイが戻ってきた。

「おかえりルイ。どうだった？」

『どうやらボンゴレ側でもいろいろとあつたみたいだな』

ツナがスパナに匿われていた事と、10年前の雲雀の出現。

そして、10年前の雲雀が開いた、今まで10年後の雲雀が使用していたコピーでなく、オリジナルの雲ホスコルビーノ・スライゾラハリネスミの暴走により、その場に居合わせた雲雀、獄寺、草壁、クローム、ランボ、イーピンが行方不明となったこと。

ちなみに、獄寺はγと引き分け、そこをメローネ基地に侵入したクローム達によって救出されたのである。

「ふむ。ということとは、ボンゴレ側で無事が確認できてるのはツナだけか」

『でも今は幻騎士と戦ってるみたいだけどな』

「あ、やっぱ無事じゃなかった」

スパナと共に、研究室まで飛んでいくツナの前に立ちふさがったのが、メローネ基地最終防衛ラインの幻騎士である。

ここを突破すれば、研究室まで後一步のところである。

ちなみに、雲雀の匣兵器が暴走して大量増殖したため、壁を大量の針が貫通して部屋が固定され、研究室が動かせなくなっている為、入江も研究室を動かせず、ツナとの間に幻騎士を配備するしかなかったのである。

『よし、ただいまの戦闘を実況中継してやる。映像は無いがな』

「なんだか楽しそうだねルイ」

『おっと、ツナと戦っている髑髏の騎士は、ツナのX・Bイクス・Uパー・Rナー・Nナー・Eナー・Rナーを正面から霧の大剣でもって切り裂いた！』

「思いつきすぎいい展開になってる！」

『ツナ、その攻撃を白羽取り、しかも炎を吸い取った！』

「ちよ、何重要な場面軽く中継してるの！」

結構な重要な場面。炎を吸い取ったということは、ツナのゼロ地点突破・改。相手の死ぬ気の炎を吸い取り、自分の力を増幅させるツナの編み出したボンゴレの奥義。

剣を持っていることから幻騎士らしいが、髑髏というのが気になる。

『どうやら幻騎士は、オッサ・インプレッション骨 残 像のヘルリングに精神を食わせ、大幅にパワーアップして

るみたいだな』

「ヘルリング?」

ヘルリングは、死ぬ気の炎が発見されるよりさらに昔より存在した、6種類の「霧属性」最高ランクの呪いのリング。

リングそれぞれによって違う呪いが施されており、身につけるものにはその呪いがまわりつくという。さらにはそのリングに自分の精神を食わせるという、地獄との契約を行うことで、絶対的な力を手にい入れることができるという。

しかし精神を食わせるということは、使用者の人格が変わることも、理性を失うこと

もありえる、極めて危険なリングである。

「だけど、いくらボンゴレ10代目といえまだ中学性。幻騎士がそこまでするほどか？」

「ないな。確かに過剰戦力すぎるのだが」

「？」

『リボーンの話だと、どこか幻騎士は、途中から動きが悪くなってるらしい』

「動きが？」

『どうも、最初の方の幻騎士程の冷静さがなくなってるらしい』

「どちらが劣勢か、優勢か。という質問を投げかけても、中々に答えにくい状況が、いまのツナと幻騎士。」

普通に叩けば、10年後の雲雀並に強い幻騎士に分があるのだが、どうも幻騎士の様子がおかしいらしい。そうなってくると、戦いの行方がさらにわからなくなってくる。

「よし、じゃあとりあえずみんなで研究室行くか」

「と言って立ち上がってカチャカチャとティーセットを片付ける光努に、リルとコルは少し疑問符を浮かべている。」

「一体どういう話の流れで「じゃあ」になったのだろうか、と。」

「いいの？ ツナ結構危なくない？」

「平気平気、ツナは強いし大丈夫だろ。それより、そんな状況なら入江正一は多分そつち

の戦いに釘付けだし、俺らはこっそり研究室まで行こうぜ」

どこからか取り出したバッグにひよいひよいと食料を詰める光努に対して、二人共若干呆れていたが、その表情は中々に楽しそうに笑っていた。

「やっぱり光努だね」

「じゃ、僕らも行くか」

大胆不敵に、全てを見透かしたように、笑う光努と共に、リルとコルも立ち上がる。無責任に見えるが、無責任じゃない。大丈夫だと思っっているからこそ、自分は自由に動ける。

「さてと、先に研究室でツナを待つか」

そう言つて光努達は、部屋を出るのだった。

『君達を待ってた』

元々幻騎士は、γと同じジツリヨネロファミリーに所属する人間。だが、とある経緯からその忠誠は、絶対的に白蘭へと誓っていた。

その為、白蘭がマーレリング欲しさに、ジツリヨネロを潰してというお願いを、幻騎士はためらいもせずに御意と受け取った。

手順は簡単。

とある剣士と戦い、重症の姿でアジトに戻り、ファミリーの人間が油断したところで打つというもの。

もちろん実際に怪我を負うわけではなく、幻覚でそのように見せるだけ。

そしてファミリーの人間に重症を装い、全員が心配顔で自分の近くに寄ってきた時、

いざ作戦を結構しようと倒れふした振りをしている中、剣をつかもうとしたその手を、小さな手が抑えた。

後ろで一本に結われた黒髪に、左目の下にある五弁花のマーク。そしてその胸には、オレンジ色のおしやぶりが首から下げられていた。

その小さな少女は、ジツリヨネロのボスでもあり、そして幻騎士を氣遣うように、その手を優しく包む。

結果として、幻騎士はファミリーの人間を誰ひとりとして手をかけることはできなかった。

まだ幼い自分たちのボスである少女。

だがその瞳に宿る光は、どこか全てを知っている、見透かしているような瞳に、強い意思の力、苦悩と覚悟を映した瞳だった。

結果としてミルフィオーレは二つのマフィアを合併して作られたが、ジツリヨネロを滅ぼすことを、幻騎士は、まだまだ幼い自分たちのボスの瞳に気圧されてできなかった。

そして今、目の前で自分が戦うツナの瞳に宿る光。表面で顕になる、覚悟の光。

その瞳を見るたびに、自分が白蘭の命を実行できなかった、悪しき記憶が蘇る。そんなこと、あつてはならない。

真の忠誠を誓う為に幻騎士は、あの瞳を克服するべく、自分の精神をヘルリングに食

わせるのだった。

ヘルリングに己の精神を喰わせ、その力を何倍にも増大させた幻騎士。

だが、ヘルリングに精神を喰わせた代償なのか、どこか頭に血が上っているようであり、過去の記憶がフラッシュバックして、自分のへの失態を罵る。

あの時、殺すことができなかつた。

ジツリヨネ口を、ボスを、滅ぼすことができなかつたと。

冷静さを欠く自分の戦闘能力を補うように、幻覚によつて卑劣な手を、ツナの仲間の幻覚にツナを殺させようとする。

誇り高きジツリヨネ口の騎士が、ヘルリングの力により別人のようになる。もしくは、これが幻騎士の本性だったのか？それは誰もわからない。

だが、自分の大切な仲間を使った攻撃に、ツナは、幻騎士を許さなかつた。

幻覚は本人の生命と繋がっている、という幻騎士の言葉が真実かわからないため、ツナは温和に幻覚を防いだ。自分の首を締めようとしてくる仲間たちだが、その手を凍らせることで、それを防いだ。

霧の死ぬ気の炎でもつて作られた幻覚の為、ツナの死ぬ気の零地点突破初代エディシオンによつて凍らせることができる。

そしてその間に、時間を稼ぐことが出来た。

ツナの後ろには、すでに柔の炎でもって、強大な支えが出来上がっていてもあ。

その炎の大きさは、アイリス達を倒して3ブロックを消滅させた炎圧の20万ファイアンマF

ホルテージVよりもさらに上、25万まで上昇した。

その数値は、スパナの予想していた最高出力よりも遥かに高い数値。

対する幻騎士も、自身の分身を作り出し、炎の最大出力でもって、正面から斬りにかかった。

イクスX・バーBURNERナー ハイパーイクスプロージョン超爆発！

幻騎士に向かって放たれた、強大な死ぬ気の炎。

対抗する幻騎士も、炎を正面から受け止めることに成功したが、それも長く続かず、ついにはその剣にはヒビが入り、鎧すらも破壊され、幻騎士はその強大な炎に飲み込まれた。

幻騎士を飲み込んだ炎はそのまま天井を突き破り、さらには次の階層をも貫いた。そして最後まで破壊つくした穴から見えたのは、白くて丸い装置だった。

スパナと共に両手の炎でもって飛び上がり、ツナがやってきた場所は、自分たちの目的だった場所。この場所へ来るために、この基地では戦い抜いた。それがここ、白くて丸い装置のある入江正一の研究室。

「まさか、幻騎士を倒すとは計算外だったよ、沢田綱吉」

立ち尽くすツナとスパナの元へと聞こえた声の先にいたのは、一人の男と、そのそばに付き従う二人の女性。

二人の女性は、ツナも見覚えがある。ホワイトスペルの服装に、褐色のはだと目元を隠すような黒いマスク。ツナ達がリング争奪戦をした際、審判をしていた女性、チエルベツロ。

そしてその二人の前にたつようにしているのが、少しくシャリとした髪型にメガネを

掛け、ミルフィオーレホワイトスペルの服装をした男性。その右手にはめられた指輪は、楕円形の丸い石に、暈むような両翼の意匠を拵えた指輪、晴れのマーレリング。

入江正一。

いまツナ達が目的とした、過去に帰る手がかりを持つ人物が、眼前に立っていた。

その姿を見たとき、ツナは拳を上げ、グローブに炎を灯したが、入江のストップの発言で拳を抑えた。入江の目線の先には、大きく透明なケースのような機会に入っている、獄寺や山本、雲雀にクロームに了平、ランボ、イーピン、草壁、ツナの仲間が全員眠らされて入れられていた。

「彼がないが、先にこちらが来てしまっただけはしょうがない」

ピッ。

手元のリモコンを操作すると、ケースの中のガス、おそらく眠りガスを排気口から摘出し、次第に中で眠っていた全員が目を覚まし出した。

ケースの壁はナノコンポジットの壁で覆われており、頑丈な作りのため名から出るの

は難し。それにくわえ、既に彼らのリングや匣は回収されており、入江の見せる左手の中には、ボンゴレリングだけでなく、他のリングも全て乗せられていた。

「かまわん！ 貴様の手で装置を破壊しろ！ 沢田！」

目の前に目的があるのに、人質のため破壊できなかつたなど、ラルは望むべくもなく、ツナに声を上げる。

だがその言葉を聞く入江は、どこか呆れたような表情をしていた。

「全く、お前達の無知ぶりには呆れるばかりだぞ。この装置を破壊すれば困るのはお前達だぞ」

その言葉の意味をツナ達が考える前に、白く丸い装置が開くと同時に、その中を見た入江達以外の全員が驚愕した。

「この装置に入っているのは、この時代のお前たちだ」

10年バズーカは、本来当たった人物を10年後のその人物を入れ替える。

その理屈で行けば10年前のツナ達はこの時代に来、この時代のツナ達は10年前に行く。だが、入江が膨大な時間をかけて作り出した装置により、本来この時代の人物が10年前に行くところ、分子状に分解してこの時代のこの装置の中に留めることに成功していた。

「この時代のお前たちが過去に戻って余計なことをされては、トウリニセツテ7・ポリシーに乱れが生じるからな」

10年バズーカによって、ツナ達をこの時代に呼び寄せたのは、入江。

この時代の科学技術を使い、本来なら当てるのも難しいような相手にもバズーカを確実に当てていった。リボーンでさえも、この時代にある非7・ノシ・トウリニセツテ線線を照射すれば、身動きがとれなくなる。

「でも、どうして?なんでそんなことしてまで、俺達をこの時代に連れてきたんだ!」

当然の疑問。なんでわざわざ10年前のツナ達を連れてきたのか。そのことが、ど

うしてもわからなかった。ツナ達がくるメリットなど、あるのだろうか。

「簡単なことだ。白蘭サンがこの世界を手中に収め、もう一つの世界を創るために、ボンゴレリングが必要だからだ」

ボンゴレリング。過去にツナ達が勝ち取り、この時代には既に無いもの。

「この世には、力を秘めた数多くのリングが存在するが、『マーレリング』『ボンゴレリング』『アルコバレーノのおしやぶり』各7つの計21個を、トゥリニセツテ7・トゥリニセツテと云う」

そして7・トゥリニセツテの原石こそ、世界を想像した礎。

「そしてあまり知られていないが、この7・トゥリニセツテとは別の、世界を守ると言われる2つの存在がある。それこそ『ファイオーレリング』と『白いおしやぶり』」

「世界を!?!それにファイオーレリングって、光努の持つてるリングー!」

「この二つを+アルトラドゥエ2と呼ぶ。もつとも、この存在を知っている人間はごくわずか。そのアルコバレーノすらその存在については詳しくないだろう」

入江の言うとおりに、確かにラルには、その二つの存在について詳しくない。

ファイオーレリングのことは知っているが、それが強大な何かという認識はなかった。さらには、白いおしやぶりに至ってはその存在もほとんど知らなかった。

だが、リボーンはその存在を知っている。しかも、通常のおしやぶりやリングとは違う、どこか不思議な力があることを、リボーンは知っていた。それも、光努達のことを知っているからわかったことだろう。

「白神光努、ハクリ。この二人はここにはいないようだが、先にボンゴレリングの回収を進めさせてもらおうか」

そう言うと、チェルベツロの一人は拳銃を取り出し、リモコンのスイッチに手をかけながら、銃口をツナに向けた。

「沢田綱吉、大空のボンゴレリングを渡しなさい。さもなければ守護者達は毒殺します」

ケースの中に睡眠ガスを入れていたように、毒ガスに変えられたら、彼らにとってはなすすべなくその命を終える。ツナがいくら素早く動けるといっても、スイッチに手を

かけて今にも毒ガスを動かせる状態では、なすすべがない。
この一手で、ツナを選択肢は迫られる。

リングを渡すか、守護者の命と引き換えに奴らを倒すか。

だが、入江を倒したからといって過去に帰れるとは限らない。装置の中の人物が10年後のみんなだとすると、やはり壊すこともできない。

かと言ってリングを渡しても、全員無事に帰れるという保証も、やはりなかった。なおかつ、リングが最も重要なものという話を聞いたばかりで、そんなものを白蘭に渡したら、どうなるのか想像に難くない。

もう一度言おう。

ツナには、なすすべがなかった。

ピシイ！

もつともそれは、この場で無事でいるのが、

ピシピシ!

ツナだけだった場合。

バキーン!

「「「!」」」

入江やツナ、チエルベツロにスパナ達はガラスの割るような音を聞いたとき、とつさにその方角に目を向けると、そこには、後ろからヒビを出しながら、崩壊する守護者達を入れたケースが破壊される光景が映っていた。

同時にケースにくっついた換気等の機械もバラバラに切り刻まれ、投げ出されるように床の上に落ちた守護者達の前にたつように、後ろから現れた人物は笑っていながら歩いてきた。

「これで、交渉の余地はあるよな? 入江正一」

柔らかそうな白い髪を揺らしながら、割れたガラスを踏みつけてやってくる少年。楽しそうな笑顔を浮かべ、その瞳は入江の元へと真つ直ぐに向いていた。

そのチャラリと揺れる首にかけられた鎖には、白い石の埋め込まれた装飾の施されたりリング、フィオーレリングがかけられ、部屋の光を反射して光っていた。

「白神光努、いつの間に・・・」

入江の口からつぶやかれた言葉に、チエルベツ口の女は我に戻り、手に持った拳銃を光努に向けた。

だがその瞬間、どこからか飛んで来た銀色の針が拳銃の銃身に突き刺さり、赤い炎を上げて拳銃を燃やし尽くした。

「そんなの人のボスに向けたら、ダメじゃない」

切り裂かれ欠けた機械の上に腰掛ける人影が二つ。

二人して同じ柔らかな黒髪と、少しの違いがあるが同じような顔立ち。

少女の方は黒髪をリボンで結び、少し短めのポニーテールにし、少年の方はその腰に、

黒塗りの鞆に収まる日本刀を携えていた。

「『シヤガ』のリルとコル！君たちも白神光努と合流してたのか」

入江の言葉に、ツナはフウ太と遊んでいた小さなリルとコルを思い浮かべ、もう一度目の前に二人を見て驚いていた。

確かに見れば面影がかなりある。しかもここまで似た顔立ちをしているから姉弟、双子ということも結構わかりやすい。

「くっ、入江様！」

入江を守るように前に立つチエルベツ口の二人。

この状況を見れば、一目瞭然。まさに形勢逆転。

守護者達からはリングと匣を没収したが、今だこの場に残る人数の差と戦えるツナの存在。そして新たに乱入してきた光努とリルとコルの存在。

チエルベツ口の二人も入江も、元々そこまで戦闘をするタイプではない。

だからこそ捕まえた守護者を人質に交渉というなの命令を執行するはずだが、人質が

いなくなつてしまい、入江たちはどうすることもできなかつた。

チエルベツ口の二人も歯噛みし、入江と光努達の間、盾のごとく立ちふさがる。

後ろの入江は顔を伏せ、よくよくと表情が見えないが、立ち上がった入江は右手に持つそれを使った。

ズガガアン!!

「入．．江．．様？．．．」

鈍い銀色の銃身。そして銃口から見える煙が、たつた今使用したばかりの拳銃であることを示している。

入江の右手に握られた拳銃から放たれた弾は、自分の目の前にいた二人、チエルベツ口の背中へとうたれ、そのまま二人は崩れるように地面へと倒れ込んだ。

出血のないことから、おそらく実弾ではなく、眠らせるのが目的の麻酔弾などを使用したのだろう。

だが、なぜ入江はこの二人を撃つたのか？

この場の入江意外、全員が驚いていた。光努でさえも、入江の行動に頭に疑問符を浮かべている。

「ふう、もうクタクタだよ。一時はどうなるかと思った」

深いため息と共に、入江は自分の着ているミルファイオーレホワイトスペルの上着を脱ぎ捨て、少し整えられていた髪をクシャリとかくように手でいじる。

さきほどまでの緊張の張り詰めたような空気が消えて、どこか砕けたような雰囲気が出ている。

「沢田綱吉君と、ファミリイ仲間の皆さん。そして白神光努君に、『シャガ』のリルとコル」

どさり、とまるで足が疲れているかのように、床へと座り込み、再び深く疲れたような息を吐く。

そしてその口から出てきた言葉に、この場の誰しもがやはり驚きを隠せなかった。

「よくここまで来たね。君達を待ってたんだ。僕は、君達の味方だよ」

『4人で計画したゴール地点』

「俺たちの、仲間!?!」

ツナや獄寺を始め、守護者達は入江の言葉に驚いた。

敵だと思い、過去からここへ来た原因を作り出したといつてもよい人物である入江正一。だが本人の口からでた言葉は、自分たちが想像していたのと全く逆だった。

「普段僕の行動は、監視カメラと部下とで24時間白蘭サンに筒抜けだったけど、こうして君らが基地をめちやくちやにしてくれたから、ミルフィオーレと関係の無い立場で話せるよ」

やつとこの時が来た、待っていた。そういうような入江の口調。とつさのでまかせにしては入江自身はすごく安心してリラックスしている様子。

その入江の口から語られることは、まるでツナ達の予想もしてなかったこと。

ミルフィオーレはボンゴリングとフィオーレリングを手に入れるため、過去であらゆる画策をして、この時代にツナ達を連れてきた。

そこまではミルフィオーレの意思だったのだが、そこから入江を目的としてツナ達が攻めるようになったのは、全て入江個人が秘密裏に仕組んだことだった。

それもこれも、ツナ達を鍛え、短期間に強くなってもらうため。

だがそう簡単に信じられうこともなく、それは作り話だという獄寺たちだが、よくよく考えればおかしい点はいくつもある。

わざわざ誰かと戦わせる、なんてことをしてリングを回収するのではなく、閉じ込めてガスを使うなど、他にもやりようによつては簡単に捕まえられるはず。基地が自由に動かせるのに、ここまでツナ達が全員まだ無事、というのも中々に奇跡的である。

段階的に戦わせ、だんだんと経験を積ませ、短期間で成長させる。

それが入江の考えた成長方法。

「随分と危ない方法を使うな。というかその中つて俺も入ってるの?」

「……………」

光努の疑問に入江はなぜか黙って目線少しずらしている。

「あの……イリスのみんなには悪いけど、ここの戦力を削ぐのに使わせてもらったよ」
「それってどういうこと?」

ツナの質問に、入江は少し乾いた笑い声だしてポツリと語る。

「実際綱吉君達が戦うにしても、途中までは良かったけど後半はこっちの戦力の方が圧

倒的に高かったからね。だからグロやジンジャー、太猿達は綱吉君達とぶつかる前にイリスの彼らに倒してもらおう予定だったんだよ」

ツナ達が攻めた時には全員は無傷でほぼ問題なかったが、ツナはずつと匿われていたので別として、他の獄寺、了平組と山本、ラル組は、A級のγと幻騎士をぶつけただけで2組は戦闘不能状態。やってきた10年後の雲雀も、その後幻騎士に結果としてはやられる。

このまま同じA級のグロや、やってきた界羅、他にも残っているジンジャー、太猿達を使えば、彼らは弱ったツナ達を全員始末してくれただろう。メローネ基地の構造を使えばぶつけるのもたやすい。だがそうなつては、入江の計画が台無しになる。

だからこそ、イリスのメンバーが攻めているとわかったときは、驚き焦りもしたが、チャンスだと思ったのも事実である。

ツナ達が戦えない相手を、代わりに倒してもらおうと。

「だとしても解せねーな。この時代のリルやコルはともかくとして、お前は どうして光努も戦力として数えられるんだ？ 確か昔の光努の資料はほとんど残ってねーはずだぞ」

リボーンの言うとおり、光努は10年前に行方不明になり、それ以前の資料としては限りなく少ない。名前と存在は記されているが、その戦闘能力に関してはほとんど資料

に出るほどに明らかになっていのも事実である。昔は有名なところでボンゴレ10代目を決めるのリング争奪戦の大空戦には参加していたが、そこまで強敵と戦った、というわけでもないのだから当然と言えば当然である。

「確かに、10年前から来た光努君にはどんな力があるか僕は知らない。でも連れてくる必要があったのは事実だよ。それにできれば戦力外の間人はいたほうが良かった」

「どういふことだ」

「戦力ではないイーピン、笹川京子、三浦ハルを連れてきたのは、君たちの成長へとつながるから。守る物がある強くなれる。そのために必要だと判断したんだ」

その言葉を聞いたとき、真っ先にツナは動いて乱暴に入江の肩を掴む。ツナらしくないその行動が、逆にツナが心底怒っていることを証明している。

「そんな理由で！もしも京子ちゃん達に何かあつたらどうするんだ！獄寺君達も、成長の前に戦闘で死んでたかもしれないんだぞ！」

ツナの言うことも、もつともだ。現に、獄寺や山本はγや幻騎士との戦いで、それぞれ死にかけた。

だがそんなツナの怒りを知らない入江ではない。

むしろ、彼はこれこそが唯一の方法だと考えて行っていた。

「僕だって一生懸命やってるよ！これは、君達が思ってる程、小さな問題じゃないんだ!! それにこの計画は、この時代の君の意思でもあるんだ、綱吉君!!」

「オレの!?!」

入江一人で全て決めたというわけではない。この時代に置ける極わずかな人間とだけ計画。

その内の一人が、10年後の沢田綱吉だった。

「この計画を知っているのは、僕と10年後の綱吉君と10年後の雲雀君。それに10年後のルイだ」

「ルイ!?!」

かなり聞き覚えのある名前に光努とリルとコルが反応する。

10年後のルイといえばこの時代のルイ。そもそもルイは入れ替わっていないからそのまま。

というか結構最近通信していたはずだが。

「光努君に関する詳しいことを知ってるのは、ルイに聞いたからなんだ」

確かに、それなら納得。

資料として残っていない光努の戦闘データだが、当時の彼を知っている人間なら、その力は語ることができる。

そこそこの戦いを見たツナと雲雀もいたが、二人より長い時間共にいたルイなら、その実力をよく知っている。

他にも光努に関しては戦闘データ以外にも謎が多いが、ルイに聞いたというならそれなりに納得できる。

「あいつ、そんな話一言も聞いてないのにな」

「誰にも明かさないように計画したからね。悪気はなかったから攻めないでやってくれ」

特にそれらしい話をせずにはいたルイを弁護する正一。

そう言われればいろいろと不可解な謎も割ととける。

入江は過去の自分を使って10年バズーカを当てたが、当時海外にいた光努にはどうしようもないはず。その為にこの時代のルイが多分意図的に過去に干渉して光努をこの時代に来るように仕向けたのかもしれない。リング戦の後に、イタリアに飛んで、珍しくやる気のルイが10年バズーカの弾を見せる。その頃ツナ達も10年後と入れ替わったのなら、タイミング的には出来すぎてる。

光努も過去へ帰る目標を入江正一に定めたのには、ルイの言葉もあった。元々こうなるように計画していたのなら、光努が入江へ向かうようにさりげなく誘導していたのかもしれない。

「ふむ、帰ったら聞き出さないとな」

「私もルイに聞いて来たから一緒に聞こうつと」

「右に同じ」

何やらしい笑顔を浮かべる光努達3人に、入江はあわあわしているが割とどうでもいい。

というかルイも結構無責任に押し付ける。いや、負けることはないと確信していたのかも知れない。なんだかんだで、イリスの人間は光努の力や技術に信頼を置いているからである。別に信頼を置いているのはそれだけというわけではないが。

「10年後の綱吉君は、関係の無い仲間が巻き込まれるのは反対していたが、最終的には過去の自分達の成長のため必要だと判断したんだ」

「ツナが了承したつて？考えにくいな」

「そーだ！10代目はチビを巻き込んだりしない！」

獄寺の言うとおり、ツナが関係の無い人間を巻き込むとは考えにくい。

そのことは先程入江の言ったとおり。おそらく本当。だとすれば、本当に10年後のツナにとつては、この計画は苦渋の選択だったのだろう。

「あー、もう！それくらいやばい状況つてことでしょ！話の流れで察してくれ！」

ツナの事を皆知っているため、中々に信じにくい内容だが、入江も本当の事を言つて

いる。なので若干入江も逆ギレ気味である。

「全てを賭けて対処しないと、君達も仲間も全滅なんだ！下手すれば、人類の危機なんだぞー！」

人類の危機、とは穏やかでない。話のスケールが一気に大きくなってきた。

「それは、これから来る戦いつてのと関係あるんだな」

「リボーン!?!」

「オレは信じてやっても言いと思うぞ。今のところ、オレの感じていた疑問とつじつまは合うからな」

突拍子もない話の数々だが、つじつまの合う、真実味を帯びた話。

それぞれ考えていた小さな疑問の数々か、入江の話の中で答えが出されていた。

リボーンの信じるという言葉に、獄寺も押し黙るしかない。

「一先ず皆信じてくれるという方向性で話が纏まったため、入江も若干ホツとしていた。」

「ありがとう。そうだ・・・君たちの敵となるのは・・・白蘭サンだ！」

白蘭！

ミルファイオーレファミリーのボスであり、この時代に置ける絶対的な独裁者。

トウリニセツテアルトラドゥエ

7・^{トウリニセツテアルトラドゥエ}と10の全てを手中に収め、この世界を支配しようとしている、まるで漫画やゲームに出てきそうなラスボスのようなことをしている男。

自分に従わない者は容赦なく始末する冷酷さ。彼がこの世界を手に入れたとき、一体どんな地獄絵図が出来上がるのか。白蘭の人となりを知っている人間からしてみれば、考えるのは簡単であつた。

「だとすると一つわかんねーな。なんで今まで白蘭に手を貸してきた？」

リボーンの問題も確かに。

トウリニセツテアルトラドゥエ

白蘭が7・^{トウリニセツテアルトラドゥエ}と10を集めるのを目的としているのであれば、過去からツナ達を連れてこなければ、ボンゴレリングは手に入らない。光努の持つファイオーレリングも、この時代にあるかどうかかわからないため、過去にそのまま置いておけば白蘭が野望を果たすことはできないはず。

にも関わらず、入江が10年バズーカを研究してツナ達を過去から連れてきたのは、理由があつた。

まず、自分の力など借りなくても、おそらく白蘭は自力でツナ達を過去から連れて来る手段を見つけたということ。ただ早いか遅いかの差。

そして、入江がこの方法にこだわった理由は、白蘭を止めるため。

入江は語る。この時代でしか、白蘭を止める方法がないということ。

「今の時代で倒すしか、白蘭サンの能力を封じる手はない！」

「能力!？」

白蘭の能力。

入江がここまで回りくどく、危険な計画をみんなで立案し、実行したのは、全てこのため。世界のため、人類の危機のため、白蘭を止めるため。

壮大すぎて嘘のようなだが、この事態は本当に深刻な事態なのだった。

「説明すると長くなるが……あつ！忘れてた！」

唐突に入江が、何かを思い出したように大声を上げた。

そうするとリボーンに対し、何かボンゴレ基地へと連絡があつたのか尋ねたが、疑問符を浮かべたりリボーンは特にないと答える。

その答えを聞いたとき、少しがっかりとしたが、すぐに持ち直して再び向き合った。

「君たちがここへたどり着くことが白蘭サンを倒すための一つ目の賭けだった。それを第一段階とすると、クリアすべき第二段階があるんだ」

「第二段階？」

「知ってるだろ？今日は全世界のミルフィオーレにボンゴレが総攻撃を仕掛ける大作戦にでるって」

確かに知ってる。

ツナ達がメローネ基地へと襲撃したように、世界各地にあるミルファイオーレ支部へとボンゴレの残った戦力が攻撃を仕掛けている。実はこの攻撃はボンゴレだけではなかった。

「それも計画の一部だったのか」

「そうだよ光努君。ちなみにこの攻撃にはイリスも参加してるんだよ」

「イリスも?」

「人数はかなり少ないけど、個々の戦闘力が高い彼らなら、6弔花のいない支部くらい少人数で壊滅できるからね。正直助かるよ」

元メローネ基地の指揮官としてその言葉はどうなのだろうかと思っただが、あえて口に出さないでおいた。

「彼らの心配はしてないが、クリアすべき第二段階というのはボンゴレ側の戦闘。一番の鍵は、イタリアの主力戦」

イタリアの某所。

広大な森が広がるその場所には、ポツカリとした場所。深い森の中の中央程にある、木々の生えていない場所には、一つの古城が建っていた。

全体的に石畳で作られており、古めかしいが立派な城として建築された建物。中からところどころ黒い煙が立ち上り、どこか攻められたあのような場所。

立派な古城の突き出るいくつもの塔の上方には、この場を占拠したと主張せんばかりの旗が掲げられていた。

Squadra killer autonoma di Vongole IX!!

荒ぶる黒い獣をあしらった漆黒の旗が、夜の風に揺れてバタバタとはためく。そして近くには小さめの白い生地でもって、何か書かれた旗が一緒になびく。

Io non riconosco il X attuale! と描かれた旗だつた。

「んまあ、素敵な旗! レヴィつたら、ここまでしてボスのご機嫌とつたりして〜」

「ししし、いつまでもムツツリしたおやじだぜ」

「ていうかあの旗、手書き感半端ないからもつとうまく作れば」

「むっ!」

古城のバルコニーとなるような場所で、数人の人物がいた。

全員がお揃いの制服に身を包み、一癖も二癖もありそんな人物たち。

男性にしては長い長髪に、左手首に固定された両刃の剣を携え、鋭い眼光を持つ人物。

モヒカンのようなカラフルな髪型と、夜に関わらずかけられたサングラスの人物。

髪を逆立たせ、口と顎に長い髭を持った、背中に8本の剣のようなものを刺した男。

目元を隠すように、少しはねたような髪型と、その頭の上に乗せられた小さめの王冠が特徴的な男。

カエルのように見える大きめの黒いかぶりものをし、無表情で外を見据える男。

男。
ゴーグルの付けられたツバ付きの帽子をかぶり、大きめの長いバッグを肩に背負った

「うゝおゝ おい!!そろそろおっぱじめるぜえ!!」

彼らは獰猛な獣。独立暗殺部隊ヴァリアー!!

未来編Ⅲ 『VARIA』

『We are VARIA!』

イタリヤ戦線。

ツナ達が日本支部であるメローネ基地を襲撃した日、全世界のボンゴレとイリスがミルフィオーレに襲撃を開始していた。

ボンゴレの他にも多くの同盟ファミリーがこの作戦に加担し、ミルフィオーレもそれを迎撃すべく動いている。場所によってはボンゴレが優勢にミルフィオーレを追い詰める所もあれば、ミルフィオーレの戦力に苦戦を強いられる所も存在する。

ミルフィオーレの支部が多く存在すると言っても、どれもこれもが最高戦力を備えているというわけでない。ただでさえ、日本のメローネ基地に6弔花が4人も配置しているため、残りはB級以下で戦力を整えるしかない。別にB級以下が弱いというわけでない。

いが、割と戦力の低い支部なら、ボンゴレの他の同盟ファミリーでも、イリスの『アヤメ』の一人でも行けばすぐに壊滅する。

この戦いも入江達が計画した中に含まれているが、すべてが勝てると思っというわけでない。不確定要素も多く、いくらかは賭けとなつて入江はあとは信じることしかできない。

とりわけ入江が重要視しているのが、イタリアにおけるボンゴレ連合ファミリーとミルファイオーレの戦い。

ボンゴレ連合ファミリーはミルファイオーレに奇襲を仕掛けたが、ミルファイオーレに逆に奇襲を早期に察知されてしまい、圧倒的戦力の前にボンゴレ側は追い詰められたように見えた。

だが、XANXUS率いるボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーの奇襲により、わずかに0分という短い時間でミルファイオーレ指揮官を暗殺し、拠点としていた古城を占拠してみせた。

しかしこれにより、隊員が32名しかいないヴァリアーは、古城の四方を圧倒的兵力のミルファイオーレ勢により囲まれ、窮地に立たされることになったのだった。

石造りの古城。

そのバルコニーの一つに固まっている数人の人影。

黒とクリーム色の2色のカラーに、肩に付けられた『V A R I A』の文字。

毛皮の付いたフード突きのお揃いのコートは、その者たちが同じ組織に所属する人物だと示している。

「んもう！嫌になっちゃうは、籠城戦なんて退屈よ！ディフェンスなんて、性に合わないわ！」

モヒカンのようなカラフルな髪型に、夜でも問題無いようにつけているサングラスに、女性口調が特徴の男。個人的に戦いののに、受けてに回っているこの状況をあまりよく思っていないのか、若干不満げな声を出している。

「残った連合軍も当てになんねーしな。こんなことなら跳ね馬日本に向かわせるんじゃないかな」

ししし、と歯を出して笑っている男。ところどころ跳ねて目元を隠すような髪型と、

頭に乗せられた小さめの王冠。この状況を楽しんでいるのか相変わらず笑っている。

「何を弱気になつておる！この程度の的、我が手にかかれれば造作もない！」

自身満々に答える、逆立つ黒髪と髭の生やした男。背中には八本の剣のような物を指している男。

「レヴィさーん。だったら一人で造作もなくやつちやつてくださーい。見てますんで」

そんな男の声に受け答えるかのような別の声。黒い大きめのカエルのようなかぶりものをかぶり、無表情ながら横目で会話に参加しているが、その声は棒読みに近い喋り方で、心底どうでもいいような感じがする。

「そうだな。いつそあたつて砕ける感じで突つ込むといい。後で形式的に悲しむから心配するな」

微妙に気だるげに割と容赦なく答えた男。ゴーグルのかけたツバ付きの帽子の中に黒髪を収め、大きめの長いバッグを肩にかけていた。

「フラン！考魔！貴様らあ！！だが、地形上攻めてくる地点は限られている！決して悪い状況ではない！！」

「だが」の使い方おかしいだろ。変態雷親父」

「ぬおう！貴様！今なんといつた！」

レヴィの言葉に、辛辣に毒舌を吐くカエルのかぶりものをしてしているフラン。その言葉

にさらにレヴィが憤慨するが、言った当の本人は森の方を見ながら「キレイな空だなー」とどこ吹く風でスルーしている。

「で、みんなの配置はどうするの？スクアアロ作戦隊長」

モヒカンサングラスのオカマ、ルツスーリアが黙って様子を見ていたスクアアロに尋ねる。XANXUSがこの場にいない今、立場的にはスクアアロが一番偉いのである。ちなみにXANUSは今頃食事でもしている頃であろう。

「うむ……。レヴィとルツスーリアは城で待機。何かあればサポートだ。考魔こうまは城から敵を片付けろ。オレは東の抜け道を守る。南はベルとフラン。雑魚は好きに連れてけ」

固めて動くのは得策ではない。古城で敵を待つのも、兵力の数が多岐にわたるフアミリーにはまずい戦法。レヴィの言ったこともあながち間違っておらず、この古城のある地形は、森の広がる大地の一部が深く凹んでおり、またそこに森が広がりその中央に古城があるという構造の為、崖のない入口から入る確率も高い。

さすがに作戦隊長。的確に指示を投げる。

が、この配置、主に組み合わせに、ベルは若干不満げに顔をしかめた。

「げ、俺がフランのお守りかよ」

「嫌なのはミーも同じですー。あいつ嫌なタイプですのー。前任のマーモンの人の変

わりだとかでこんなかぶりもの強制的にかぶせられるのも納得いかないしー」

ベルとフランの組み合わせは、双方個人的にあまり好ましくないらしいが、作戦隊長の指示の前では問答無用なのである。

「ていうかー、それなら考魔先輩も前任者の格好してくださいよ。ミーだけなんて何か嫌ですしー」

「あらフラン、それはダメよ。そんなことしたら考ちゃん、ごつつい機械人間になっちゃうわよ」

「俺の前任者が非常に気になるが、せつかく弁護してくれたからあえて聞かないでおくよ」

その前任者のバージョンアップされた後継機が、ミルフィオーレ側でうじゃうじゃと動いているが、あくまで余談である。

「スクアーロ作戦隊長。作戦中にあのカエル死ぬかもしれない。．．．オレの手によつて」

そういうベルはわずかに殺気を放つていつでもやれるぜとばかりに手をぶらぶらとさせていた。

「ぎげんなガキイ！新米幹部はペーパー幹部が面倒みに決まってるだろー！」

「俺もうペーパーじゃねーし。だったら考魔とフラン組ませろよ。こいつまだまだペー

ペーだろ」

「別に俺はフランと組んでもいいけど。ベルのオリジナルナイフをこの城から数百メートル単位の的に当てられるなら話は別だけど」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フランと組んで直に敵を切り刻みに行くか、フランと離れて城でお留守番。

ベルの中でフランと組みたくないが、留守番も嫌だなというメリットデメリットの天秤がカタカタと揺れる。

「まあ無理だと思っから諦めるんだな」

「カッチーン。いまの言葉はちよつと頭に來たぜ」

スツ！そう言つてベルは袖から何本ものナイフを取り出して構える。

ベルが自分専用につつたオリジナルの形状をしたナイフ。体のいたるところに忍ばせていつでも戦闘対戦万全だと言わんばかりである。

「なんだ、やるか？」

チャキリ。両腿のホルスターに収められた拳銃の片方を引き抜き、構える考魔。

銀色のラインの入った漆黒のリヴォルバー銃。

互いに同じ年だということもあるが、剣と銃ということで微妙に相容れないような空気と、ヴァリアーでは日常的な殺気の混ざった空気が二人の周りを取り巻く。

「う、お、おい!!ガキども!喧嘩してねえでとつとへ行けえ!!ベルはフランとだあ!異論する奴はかつさばくぞお!」

が、作戦隊長の怒鳴り声でさつと霧散して、若干不満げながらも渋々とナイフと銃をしまい、動き始める面々であった。

森が切り開かれている東側の守りを固めるため、スクアア口は木々の枝に足をかけて跳び、移動を繰り返していた。

長い髪とヴァリアー隊服である黒とクリーム色の二色のコートを揺らして移動していたが、その常人離れた五感が何かくると察知して、一旦木の枝に足を止めた。

上空から迫る、というよりは何かは落ちてくるような音。

木々の葉や枝にぶつかり、ガサガサと音を立てて地面に落ちたのは、自分と同じ隊

服に身を包んだ構成員32名しかいないヴァリアーの部下であった。その顔あ体には傷があり、どうやら負傷している様子。

「報……告します……」

「なんだあ！誰にやられたあ!!」

かすれるような声色に、中々にダメージを受けた様子。

「XANXUS……様です。肉が食べたい……らしいのですが……用意できず……」
「なんだとお!?最高級のラム肉を持ってきたはずだぞお!」

「それが……牛肉を食べたかった……らしく」

ヴァリアーのボスであるXANXUSは、食通でありわがままな傍若無人であるため、自分が欲しいものは問答無用でもってこさせる。持ってこなかったら即抹殺である。

が、そこは長年付き合ったスクアーロ。XAMXUSがどんな食事を好み、欲しているかなど、そんなことは想定済みである。

「和牛のサーロインも持ってきたはずだあ!!他のコンテナをよく探せえ!!」

どしやり!

再び木々を揺らして上から降ってきた人影は、別のヴァリアーの部下。

そちらの部下も傷が目立ち、ポロポロの状態。スクアーロの言葉に答えたのは、こち

らの部下であった。

「それが隊長……ファイレ肉を食べたい……とのことで」

「そいつも持つてきたはずだあ!!」

そしてまたも降つてきたボロボロの部下。

地面に突つ伏したがなんとか顔を上に向け、語った。

「それが……手が滑ったとかで床に落として……」「こんなもの食えるか」と……
ブチ!

怒りのストレージが溜まりに溜まっていたスクアアロだったが、三人目の部下の言葉
についにキレた。

「あんのクソボスがア!!このクソ忙しい時にい!!」

と、その時、スクアアロの後ろから迫ってくる刃と人間。

全身真っ白な白装束に身を包む、ミルフィオーレホワイスペルの人間。

Fシューズを装着して、死ぬ気の炎の推進力により空を飛行し、森の木々を縫うよう
に飛んできた兵隊は、その手に持つハルバートをスクアアロに向かって振り上げた。

「う。お。おい……。俺は今、虫の居所が、悪いんだあ!!」

右手にはめられてリングから、雨の炎を放出し、ヴァリアアのマークの入った匣に炎
を注入した。

中から飛び出すように現れたのは、凶暴な表情と、その口に備えられた全てを噛み砕かんとするばかりの強靱なる牙。

全身で雨の炎を纏われた巨体は、ヒレを動かし宙を泳いだ。

スクアール・グランデ・ピオツジャ

暴 雨 鮫 !!!

自らの名を冠する獰猛なる鮫の匣兵器は、一瞬でミルファイオーレの兵隊に迫り、その牙をもって噛み砕け、あつという間に仕留めてしまった。

『炎出して飛ぶって結構目立つよね』

「おー、スクアアロ隊長は随分とご機嫌斜めのようだ。たった数人しかいない敵に対して匣兵器を使うなんて」

丸いレンズの向こう側を覗く、闇のような漆黒の瞳。

細長い筒のような機械を手で持ち、古城より少し遠くにいるスクアアロの姿を見ているのは、城からの攻撃命令を出された、一蔵実考魔《くらみ こうま》。

ゴーグルかけたツバ付きの帽子をかぶり、両腿のホルスターに収められた、それぞれ黒と白の色合いに同じような銀色のラインの入った2丁拳銃。そして肩に背負った、

1. 5メートルはあろうか長めのバッグ。

「あら、どうしたの考ちゃん。スクアアロがどうしたって?」

となりにいたルツスーリアは、考魔の口からでたスクアアロの名前に興味津々である。

「さっきここから飛んで言った部下が今日のボスの料理当番だから、どうせまたボスがわがまま言つて隊長ブチギレたんじやないかと」

冷静に分析してボスのわがまま加減とスクアーロの怒りを語るが、まさにどんぴしゃりの答えだったことはこの場の人間にはわからないのであつた。

「考魔！貴様、ボスを愚弄するか」

「だったらレヴィが料理当番したら。どうせぶつ飛ばされるのがオチだけだ」

ボス絶対！のレヴィは、ボスの問題点を上げる考魔に対して睨みつける。

が、この程度の睨みはヴァリアーの全員（部下意外）には慣れっこなので、特に萎縮することなく、むしろその後のなりそうな予想をする。

「貴様！」

ボスのことになると割と沸点の低いレヴィが怒りの声を上げるか、それもスルーする。

ヴァリアーにとつてはこの程度普通である。

「面倒だから眠らせていいか？」

「考ちゃん、さすがにそれはまずいわよ」

だんだんと面倒になつてホルスターの銃に手を伸ばす考魔をルツスーリアがなだめる。

「まあいいか。じゃあ俺は上から迎撃するから、あとはよろしく」
 「は〜い、任されたわ〜」

ヴァリアーの占拠した古城の、塔の一つの屋上部分。高さが割とあり、そこから眺めると当たり一面林海となつてよく見渡せる。

もつとも、明るい時ならいざ知らず、今はどつぷりと太陽も静まる夜。通常よりもさらに視界の悪い状態だが、あまりそこは関係ないようだ。

一人座る考魔は、先程から背負っていた1メートルを有に超える程に長く大きめのバッグを降ろし、その中を開くと、さらに四角い黒塗りのケースが、中から出てきた。ケースを石造りの床に置き、その蓋に手をかけて開くと、中に丁寧にしまわれていた物が頭になる。

銃身、マガジン弾倉、ストック銃床、スコープ照準器など、いくつもの部品のが綺麗に蓋にも並べられており、考

魔は一つずつ手にとっていた。

ガシヤリ、ガシヤン！

機械音を出しながら、次々と部品を組み立てていくと、その全容が明らかになる。

全身が夜の闇に溶け込むかのような黒塗りの色合いに、所々でアクセントに銀色のラインが走っている。このカラーリングは考魔の持つ銃の片方と同じ。

全長がおよそ1.5メートルはあろうかという、通常より長めの狙撃銃だった。

ところどころ、通常の狙撃銃では見られない部品が多々ついているが、その銃身と見た目は、長距離の標的を狙撃することを目的として作られた銃。

ストツクを脇に挟むようにし、片膝立てて構える。

スコープを覗いた先には暗い森が広がっているが、所々には点々とした赤い目印が、丸いレンズの向こうに映っていた。

「ミルファイオーレの連中は、自分たちが圧倒的に有利と考えてるから、Fシユーズで炎を出しながら近寄ってくる。見つけやすい」

死ぬ気の炎を探知する、炎熱感知式の照準器。

ミルフィオーレファミリーの兵隊は、Fシユーズに死ぬ気の炎を灯しながら噴射して、その機動力を活かした飛行移動を行う。

機動力も高く、空を自在に飛ぶ為戦闘にはもってこいだが、それだけで勝てるほど甘くない。とりわけ相手の位置がまだ把握しきれていない森の中にいるとき、敵が死ぬ気の炎を探知する術を持っているのなら、そしてその敵が、遠距離からの攻撃を可能にする人物であれば、ミルフィオーレの兵隊は圧倒的に不利。

自分たちがすでに、狙いを定めるスコープのど真ん中に位置するとも知らずに、森の中を突き進む。

「じゃ、手始めに」

カシャリ。

ケースの中に入っている、いくつもある弾倉の一つをはめ込み、狙撃銃を再び構え直す。スコープ越しに接近してくる敵の姿を確認し、その指を引き金にかけた。

コオオ！

そして中指にはめられた、盾のようなデザインをした、ヴァリアーリング。

ボンゴレⅡ代目の残した至宝『虹の欠片』を加工して作られた、文句なしの精製度A

級のリング。ヴァリアーのボスと幹部にそれぞれ与えられたリングであり、各属性分のリングが存在する。

引き金にかけた指にはまるヴァリアーリングから、紫色の光が立ち込める。

それと同時に、狙撃銃の各所にあしらわれたラインが、ヴァイオレット紫色に薄く発光した。

「炎爆発弾！」

タアン――

ほぼ無音の狙撃音と同時に、スコープ越しの視界が、炎の爆発によって明るく染まった。

「ベルセンパーイ。なんか割と近くで爆発が起こってるんですけどー」

森の木々の枝から枝へと飛び移り、南の崖の切れ目地点に近づいてきているベルとフランの二人組だが、突如聞こえた爆発音に反応して移動したままフランが、自分の後ろ

から走って殺気をぶつけてくるベルに声を投げかける。

「多分考魔の野郎の狙撃だけど、俺も巻き込まないだろうな」

「センパイ、ミーもいますよー。俺らですよー」

「るせ、クソカエル。とつとと死ねよ」

ヒュヒュ!

ざくりざくりとフランの背中にベルのナイフが突き刺さるが、まるで出血などなく、ただ突き刺さったままで問題ないように走り続ける。やられた人間のリアクションではないため、投げた張本人のベルは若干不満そうである。

しばし枝の上を走るが、しばらくしたら崖の切れ目が見えたため、二人は一旦枝の上でストップした。一先ずここで敵を待ち伏せるようである。

「ベルセンパイ。背中に刺さったこの趣味の悪いナイフ抜いていいですかー?」

かにもオリジナルだぜって主張してる形状が恥ずかしいんで」

枝の上にしやがんだまま後ろにいるベルに、自分の背中に突き刺さった10本以上のナイフを見せるフラン。相変わらず怪我などなく、本当にただ刺さっているだけという感じ。

「.....綺麗に磨いて揃えて返せよ」

「それは嫌ですー。こんなものこんなもの」

ポキンポキンという軽い音を鳴らしながら、背中のナイフを引き抜いて両手で二つに折り曲げて木の上から地面に落とす。その光景を見たベルに怒りマークが見えたのは、当然といえば当然である。

「てんめっ」

故に、ベルは右手のヴァリアーリングから真つ赤に燃える、嵐の炎を放出した。

その炎を見たフランの反応はといえば、今度は怒りが収まるように折らずにそのまま木の下に捨てる。

その光景にさらに怒りのボルテージを上げたベルは、取り出した匣に嵐の炎を注入した。

ヴァイゾーネ・テンベスタ
嵐ミンク!!

少し大きめの尻尾に長い体躯と小さな手足と耳。

イタチ科の生物である動物のミンク。まるで持ち主のように牙を出してしししと笑い、目を隠すように頭の毛が少し伸びている。面構えも本当にベルそっくりである。

耳と尻尾に嵐の炎が纏われており、匣から飛び出したミンクは後ろからベルの肩にかかるように長い体をベルの首に巻きつけた。

「それ以上捨ててみ。おまえ燃やす」

「じょーだんじょーだんですよ．．．あつ」

本格的に匣兵器を出して怒りを表現するベルに、今度はしつかりと、降参と言わんばかりに掌を広げて持ち上げて横に振る。

が、その手にはさつきまでベルのナイフを握っていたため、手を広げて振ったので必然的にナイフは折れはしなかったが、そのまま木の下へと落下したのであった。

「カチーン。死ねよ」

その声と同時に、嵐の炎を纏ったミンクがフランめがけて飛び出す。

狙われたフランはしつしと手を振って追い返そうとしたが、問答無用で突っ込んできた為、当たる前にその場で大きなカエルの頭を抱えてしやがむことで、その上をミンクが通過していった。

「があー！」

「ぐあー！」

が、ミンクが飛んで行った先で聞こえた呻き声。

その方向を見てみると、木の影に隠れて様子を伺っていた、全身白装束のミルフィオーレの兵隊2人が、ミンクの体当たりを受けて、嵐の炎が燃え移っていた所だった。

「おお、ベルセンパイ。敵がいるのに気がついてたんですねー。ごくごくまれにですが、

本当に天才かもって思ったり思わなかったり」

相変わらず不躰な後輩のフランの物言いだが、「かも」がついていながら自分を天才と呼ぶのにベルは笑って機嫌をよくする。

「ししし、天才に決まってんじゃん。だって俺——王子だもん」

その言葉と同時に、一斉にミルフィオーレの兵隊、およそ30名程が飛び出して襲い掛かってきた。

そのままFシューズで飛行しながらこちらに向かつてきたが、ベルの肩からミンクが飛び出した。

特攻を仕掛けたミンクは、その小さな牙の揃った口を開いて威嚇しなら進み、森の木に自分の体を一瞬摺り寄せるようにしながら通り過ぎ、そのたびにそこから嵐属性の炎を発火させる。

嵐ヴァイソウネテンベスタミンクは、自らの体毛を対象にこすりつけ、その際の摩擦熱によって嵐属性の炎を発火させることができる。

そのため、敵の攻撃をかくぐり、敵を囲うように森の炎を発火させ、嵐の炎が木の全身を燃やし、それが燃え移る。

ミルフィオーレの兵隊は嵐の炎の危険性を理解しているため、滞空したまま触れないように周りに指示をだしたが、時すでに遅し。炎の中から飛び出したミンクが、周りが

炎のため止まっている敵の体に体毛をこすりつけ、さらに発火させることで燃やし、ついに森の一角と敵を、真っ赤な嵐の炎でもって燃やし尽くした。

ファイアンマ・スカルラツタ
紅蓮の炎

結構な勢いで森の一部を燃やす炎。

もはや山火事にならないか心配になるほどに燃える炎を見て、環境破壊とか大丈夫かなど考えるフランであった。

『四方迎撃態勢に入る』

俺の名前は蔵見^{くらみ}考魔^{こうま}。

ボンゴレの独立暗殺部隊ヴァリアーに所属するとりあえず幹部。

死ぬ気の炎の属性は雲。精製度A級の雲のヴァリアーリングを所持している。

主武器は2丁のリヴォルバー。

白いリヴォルバーと黒いリヴォルバー、それぞれ銀色のラインのあしらった拳銃。

その他には狙撃銃と爆薬・・・いろいろと使用する。

別に自己紹介がしたいわけではないが、前に登場したときは本当に少しだったから軽く紹介しておく。ラツシユの方が前線で光努と戦っていて、後方支援をしていた俺はほとんど姿を見せなかったしな。

どういいう経緯でヴァリアーに入ったかはあえて省略するが、ヴァリアーに入ってからよく後方支援型前線担当をしている。

支援が前線かどっちかって？

後方から敵をガンガン倒すという、狙撃手にあるまじき後方支援度外視の役割であり。いや、狙撃手ならこれが正しいのか？

ヴァリアアの占拠した古城の高い場所、塔の一つの屋上で狙撃銃『黒い塔』を構えて狙いを定める。通常の狙撃銃のように実弾を込めて撃つことももちろん可能だが、それに加えて死ぬ気の炎をチャージしてそのまま炎の弾丸を発射することができる。

が、基本的には改造弾丸を使って相手を殲滅する。狙撃銃しか使わないといろいろと攻撃に制限がつくが、それでも多分問題ない。

一応弾丸にチャージされた死ぬ気の炎のエネルギーを使って着弾点から大爆発を起こす。『炎爆発弾』ファイア・マ・ボムを使って、固まってこつそりと移動するミルフィオーレの兵隊を巻き込むように打ち落とす。

ミルフィオーレの兵隊は基本的に隠れて移動もするが、移動手段はFシューズで死ぬ気の炎を普通に放出して飛行しているので極めて見つけやすい。

死ぬ気の炎の探知装置を付けた照準スコウの為、たとえ視界が悪くとも見つけることはできる。もつとも、この程度の夜の暗さなら見るのは難しくない。しかも今回攻めてきているミルフィオーレの兵隊は全員ホワイトスベルで真っ白な格好をしているので、夜の闇でも結構目立つ。

上方から見てみると、現在周りで戦闘中なのは、スクアアロ作戦隊長。

結構なキレ具合なため、既に凶暴な暴スクアアロ・グランデ・ビオッジャ雨 鮫を匣から出して敵の兵隊を切り刻

んで噛み砕きまくっている。スクアアロの読み通りに南と東に敵がきたが、俺達ヴァリアー側が迎撃をしたため、兵隊の数に物を言わせて四方から攻めてきた。

東はスクアアロが守り、南側にはベルとフランの二人。

と説明していたけど、南側を照準器スコوپで見ると、青い巨大な塊が見えた。多少距離があるため、ここから見たら大きさは小さく見えてるが、実際に近くにいるベル達から見たら巨大に見えるはず。青い雨属性の死ぬ気の炎を纏った・・・象？

キリキリと倍率ダイヤルを回し、小さく見える青い塊に視線を近づけると、その全容が見えてくる。長い鼻、大きく広がる両耳。太く大きい手足と巨体に、白く長めの牙。

うん、どこからどう見ても象。エレファント。

さしずめ、エレファンテ・ビオッジャ雨 象と言ったところか。実際の名前は知らないが、ミルフィオーレ

の匣兵器だな。

そばの木に立っているのは、ベルとフラン。ベルの方は嵐属性の匣兵器、嵐ヴィンネ・テンベスタミンクを開匣しており、フランは特に匣を使っていない。

相対しているのは、タキシードを来た壮年の褐色の肌とスキンヘッドに髭という、見た目は執事風の男。そのとりにいるのが、高級そうな椅子に座っている・・・ベル

?

ベルによく似ている人物。目元を隠すような髪型のせいで顔の全容はわからないが、ベルも同じなので双子じゃないかと思うくらい似ている。せいぜい髪が跳ねてるかストレートかの違いくらいしか見当たらない。頭にかぶっている王冠も同じ。

確かベルには双子の兄がいたと聞いたことはあるが、昔ベルが抹殺したとも聞いていない。だとしたら、あの人物は。

『スクアア口隊長。6弔花南に来ましたー』

その時、フランからの通信が入った。

6弔花。ミルフィオーレの誇る6人のマーレリングの保持者。

おそらく、あのベルもどきが6弔花。

『それが驚いちゃいましたよ。バカなセンパイの、死んだはずの兄貴でしたー』

『何言ってやがる!!』

『どーも生きてたらしいんですよ。ごっついで執事つきで』

ふむ、いまのフランとスクアア口の会話でなんとなくわかったよ。

確かにあそこにいるのが、ベルの殺したはずの兄貴であり、ミルフィオーレの6弔花の一人。そのそばの男は執事。そして象は執事の匣兵器であり、ベル兄の周りを取り囲むように飛んでいるのは、ベル兄の匣兵器。

嵐属性の炎を纏った、複数のコウモリの姿。

さしずめ、嵐ビレストレック・テンベスタコウモリといった所。

さて、どうするか。

『考ちゃーん、ちよつといい?』

「ん? ルツスーリア。どうした?」

階下にいるルツスーリアから通信が入った。

『北にきた敵さんにはレヴィイが向かったけど、西の方からも大量に攻めてきたの。迎撃に行ってくれないかしら。私、けが人がたくさん来て動けなくなつて』

そういえばさつき爆発が聞こえたな。

北側の見張りを行っていたヴァリアー隊員がやられた為、城に残っていたレヴィイが向かった。

レヴィイの匣兵器である、トルベディネ・フルミネ雷 エイは、炎を全身に纏うことにより飛行が可能となつ

ている。その為、レヴィイはエイの下に張り付くようにして飛行し、同じく飛行するミルファイオーレの兵隊を迎撃しに出向いた。ちなみに、なぜ下に張り付いて上に乗らないかと言うと、レヴィイのバランス感覚が悪いため、エイの上うまく乗れないのである。

他はサーフィンのごとく華麗にのれるあたり、やはりレヴィイは鈍重なのかもしれない

な

城にいたもう一人、ルツスーリアの匣兵器である、晴クジヤクは、その尾羽から照射される晴れの炎によって、傷の高速治癒を可能にする。城に残りサポートの任を受け持つルツスーリアの役割は、負傷して来た隊員の治療。32名しかいないため、使い回しという言い方はおかしいが、なるべく死なないに越したことはない。

そうなると、南、東、北へとヴァリアー幹部が向かったが、西には誰も向かっていないため、のこる城に残っている俺が行くということになる。

ここから狙撃するという手もあるが、何分敵の数が本当にキリがないほどに大量の為、もしかしたら取りこぼしが出来て城に攻められるかもしれないから、直接出向くしかない。まあ、一掃する方法もあるが、今は用意がないからしようがない。

「わかった。西は俺が迎撃してくる」

『お願いね〜』

構えていた『黒い塔』を手早く解体してケースにしまい、バッグに入れて肩に背負う。そしてそのまま塔の屋上の床を蹴り、壁を伝ようにして下へと降りる。

所どころで壁を蹴って威力を殺し、そのまま下の方まで来ると、壁を蹴って近場の木の枝を踏み、枝から枝へと跳ぶ。城から少し離れたところで一旦立ち止まり、背中に背負ったバッグを木の下の下へと置く。

さすがに自分が直に戦うとなると、あのバッグは邪魔になるから置いておくしかな

い。万が一城に攻められたら見つかってしまうから、城から少し離れた森の中に隠しておくことにした。

一応バッグには防犯機能がついているため、他の人間には触れず、あとで回収しやすいからあれで問題ない。さっさと西のミルフィオーレを迎撃して、ベルとフランのフォローに回りたい所だが、ミルフィオーレは何分人数が多い。スクアーロですら湧くように出てくる敵に面倒だと思ってるらしいからな。

枝から枝へと跳びだし、森の中を突き進むと、光が見えた。

Fシューズから死ぬ気の炎を放出して森の中を飛行移動する、ミルフィオーレの兵隊達。

炎を出していると、暗がりの闇でも見えやすい。元々ヴァリアーの人間は夜目がきくから、出してなくても問題はなかな。

眼前に敵を見据えた俺は、両腿にベルトで固定されたホルスターから、銀色のラインのあしらわれた黒と白、2丁のリヴォルバー銃を両手に持つ。

敵を前に、冷静に思考して分析をする。敵の数を、敵の武器を、敵の移動手段を、敵の位置を、敵の情報。頭を働かせながら、全てを殲滅するべく、両手のリヴォルバーの引き金に指をかける。

多対一だが、関係はない。

「さてと、軽く撃ち合うか」

俺は、眼前の敵の大群へと飛び出した。

マーレリングの保持者でありベルの兄であるジルの匣兵器は、ビビストレットロ・テンベスタ嵐コウモリ。

コウモリは超音波を発し、物体に反響定位させることでその物体の位置を特定する。コウモリのそれはかなり精度が高く、種の中には水面の微細な振動を感知して、水中の魚を取る種も存在するという。

だが、嵐コウモリは超音波を発するのではなく、オシデ・スーベル・ファイブマ超炎波と呼ばれる、特殊な目に見えない嵐の炎を、超音波のごとく発し、物体に反射させるのではなく、そのまま吸収させる。

嵐の属性の炎の特徴は“分解”の為、嵐の炎が吸収して蓄積された物体は、その物体強度の限界を超えた時、破壊される。

ジルは匣を開匣した瞬間から、この炎を放射しており、目に見えない炎を喰らい、会話の最中にだんだんと炎が蓄積され、ベルとフランの二人は内側から組織が破壊され、だらりと崩れるように木の下へと落ちていった。

地面に血しぶきを残す無残なベルとフラン、二人の光景を見たジルは笑い、
エレファンテ・フォルテ・ピオツジヤ

巨 雨 像を開匣した執事のオルゲルト共に、城を落とすべく、進路を城へと向けて移動を開始していた。

「げほっ」

「ふー」

二人の人間の声が、静かな森に響き渡る。

疲れた、というような声と共に、地面の下から出てきたのは、ベルとフランの二人。

先程ビビストレット・テンベスタ嵐コウモリの炎によつて組織が破壊され、木の下の地面へと落ちた二人だが、

よくよくと見ればその形は崩れ、最終的には霧のごとく、跡形もなくなつてしまつた。

「霧の幻覚か？」

「当たり前です。ミー達、相当スプラッタな死に様だと思ひますよ」

「てんめつ」

ベルの言葉にイエスで返答するフラン。だがベルに蹴り飛ばされる。

先程倒されて木の上から落とされたのは、途中からはフランによつて作り出された幻

覚。

本物のふたりはこつそりと地面に潜り、ジルとオルゲルトの二人が先へ行くのを待つ

ていたようである。

ビビストレット・テンベスタ嵐コウモリの目に見えない嵐の炎を全身にくらつて吸収し、グロツキー状態になりか

けていた二人だったが、限界に達する前にフランの幻覚とすり替へたのである。

ジルのテンションは高く、自分が圧倒的に勝つたという優越感もあつたが、6甲花を

騙す程の幻覚を作り出すフランは流石と言える。

顔や服に付いた土を払い、口から少し吐きだしながら、やれやれというフランに対し、

ベルも服を叩きながら若干お怒りである。

ベル、フラン、ジル、オルゲルトの4人で同時に匣を開匣したが、フランのみ匣を開匣しなかった。その理由をフランに尋ねたところ、頭のかぶりものが邪魔でポーズが決められないから開匣できなかった、というものである。無表情で淡々と語る為、嘘か本当か判別がつかなかったが、結果的にこの時の長い会話中に嵐コウモリの炎を喰らっていたのである。しかしこのあとフランの幻覚に助けられたのだが、チャラとなるかは微妙である。

けどフランがわざわざ隠れて城へと二人を向かうように仕向けたのは、個人的な興味があったからである。

「怒りんぼのうちのボスですよ。ヴァリアー内暴力凄まじいし、いつも威張ってるけど、本当に強いのかなーって思うんですよー」

「弱かったら俺がとづくに寝首かいてるっつもの」

こんなことを真面目に言うあたりがさすがヴァリアーである。

「でも先輩のアホ兄貴とどっちが強いか見てみたいじゃないですかー」

「ん……うーん」

フランの言葉に、考えるベル。

確かに見てみたい。

自分が殺し損ねて生きていると思つたら結構な地位についている兄と、自分の所属する化物ぞろいの暗殺部隊のボス。どちらも一癖も二癖もあるし、このイタリア戦線において互の陣営の大將となる人物。是非とも戦つてるところが見てみたい。

「っっ、同感♪」

ベルは、土の少し入った口に歯を出して笑い、楽しもうとするような愉快そうな笑顔を浮かべていたのだった。

『座した強者』

崩壊する古城。

瓦礫の山。

崩れ去った古城の姿が、森の中央に無残にもさらされていた。

雨の巨大匣兵器である、エレファンテ・ソルテレ・ヒョウジャ 巨雨象の超重量匣兵器3体による、上からの押し

つぶし攻撃により、一瞬で城はただの石の塊と化した。

上空からその光景を見て、高笑いをするジルと、その隣に静かに佇むオルゲルト。

一瞬でヴァリアアの仮拠点の古城を潰したことに、心底愉快そうに笑う自分の主を静かに見守るオルゲルトだが、突如眼下の瓦礫の山という光景に違和感を覚えた。

何か動いたような影が見えた気がした。だがそれよりも、土埃がもうもうと立ち込める瓦礫の山だったのだが、だんだんと視界が晴れてきた中、瓦礫と瓦礫の間から人の気配を感じた。

怒気、殺気、威圧。

それらが混ぜ合わせたような鋭い視線がこちらに向けられていた。

散乱する瓦礫の中にあつたのは、高級そうな椅子と、その手前に置かれる机。

そしてそこに深く座る人物。体を預けるように背もたれにもたれ掛かり、肘掛けに左腕を置き、机に足を置いて、右手には赤いワインの入ったワイングラス。

ワイシャツに黒いネクタイ、他のヴァリアー幹部と違って首元に毛皮のついていない隊服を方から掛け、傷跡のある顔の、黒髪の間隙から覗く目には、なんとも言えない威圧の光が宿っている。

かつて、ボンゴレ10代目となるべくして、沢田綱吉と死闘を繰り広げた、独立暗殺部隊ヴァリアーの隊長。

X A N X U S !

ワイングラスを持つ右手が輝き、それと同時に手に持ったワイングラスが独りでに砕け散る。

自らの怒りを表しているかのようなその光景と、獰猛な猛獣のような眼光は上空に佇む二人を鋭く見ていた。

「ボスとベル兄が交戦し始めたか」

通信機から漏れる音に耳を傾けながら、考魔はリヴォルバーに弾丸を込める。

ボスはうるさいという理由で自分の通信機を潰したが、瓦礫の山となった古城には倒れているヴァリアーの隊員も何人かいるが、その際にそやつらの使用していた無事の通信機も幾らか存在する。

ボスからの音声は拾えなくても、周りにあるいくつかの音声を組み合わせるその場の状況はある程度理解することができる。

まあ理解するといつても、単純にボスVSベル兄＋執事という対決なのだがな。

ガンガンガン！

「ぐあああー！」

「くー！攻めろお!!」

「うおおお！」

ガンガンガン!!

あの程度であれば、ボスなら勝つのも難しくないだろうな。

ビレストレット・テンベスタ

嵐コウモリは広範囲に特殊な嵐の波動を放射できるが、そこまで自分を守る程に強い炎を出せない。あくまで敵に向けて放つ炎。しかも嵐コウモリ自体はあまり強くない。遠距離攻撃ならすぐに倒せそう。というのが俺の客観的な感想だが、もしそうならボスの銃なら簡単に倒せる。

死ぬ気の炎を込めることのできるボンゴレVII世の銃の威力は、折り紙つきだからな。

ガンガンガン!!ドゴオオオ!!

「がああ!!」

コオオ、ドガン!

「うわああ！」

「がはあ！」

ボスの手に宿る憤怒の炎は、リングの炎とはまた別種類の死ぬ気の炎。その特徴は、圧倒的な破壊力。素手から放つ光球型の憤怒の炎は、十二分に威力は高いが、銃弾に圧

縮して放つことで、さらに威力と応用性をあげ、高速移動すらも可能にするという。もつとも、そこまで俺自身も詳しいわけではないがな。

ズガン！ギューイン！ドドドドドドドド！！

「「ぐああああ!!」」

けど、話を聞いていると、執事意外二人とも座ったまま戦うらしい。

随分と余裕だけど、大丈夫なのか。座ったまま戦うのは王子の特権らしいが、そんな戦いはしたくないな。座ったままで戦うとか、ベル兄つて肉弾戦があまり得意じゃないのかもな。

リアルファイトしたら隣の執事の方が勝ちそうだ。実際は無いだろうけど。

片手で白い銃を打ちながら、弾切れを起こした黒い銃を一旦ホルスターにしまい、ポケットから取り出した弾丸を宙にばらまき、素早く黒い銃を抜いて薙ぐよう振り、一瞬でシリンダーに弾丸をフルに装填する。そのまま両手で線を描くように反対方向へと銃弾を放つ。

その度に紫色の炎の纏われた弾丸が敵を打ち抜き、地面へと落とす。

わらわらと出てくるミルフィオーレの兵隊に対して、片方の銃の引き金を引くと、銃口から飛び出す丸い紫色の光。敵の元へと行く前に光が一際強くなり、一瞬で無数の小

さな光の散弾となり、大量に飛行する敵へと雨のごとく小さな炎の弾丸が迫り、次々と兵隊を撃ち落としていく。

すでに森の木の下には、気を失うミルフイオーレの兵隊が、死屍累々と大量に倒れふしていた。

かすかに聞くと、どうやらボスを激しく怒らせたらしいな。

沢田綱吉。

その名前を聞くたびに、ボスはその時を思い出し、怒りがこみ上げる。

ヴァリアー内では10年前にあったリング戦のことは禁句になっているらしく、俺とフランはその当時にその場にいなかったが、結構面倒な状況になっていたらしい。

けど最終的に中学生にボス候補の座を奪われた、というのであれば怒りもごもつても。

もつとも、ボスにはボンゴレの血が流れていないため、元々候補でなかったらしいが。昔骸を倒し、ボスを倒した沢田綱吉。

まあ骸を最終的に追いつめたのは光努らしいが、そこは割愛。

一度見てみたい。この時代では見る機会は数回だし、10年前の姿は見たことないからな。

ザザザ！

通信機に溢れる雑音の中から音を拾う。

巨大な岩の塊が砕けるような音に、唸りをあげる猛獣の声。

この声は、明らかに奴らの象とコウモリの声じゃない。

ということはボスの匣アニマルか。大空の属性の波動を持つボスの匣。そもそも大空の波動を持つ者が圧倒的に数が少ないため、俺自身もあまり大空の匣を知らない。

持っているのは、せいぜいボスとキャバツローネの跳ね馬、そういえばイリスにも一人いたな。

ガンガンガン！

わらわらと出てくる敵だが、あらかた西の地点の敵は片付けたし、城の方へと戻るか。それまでにまだ戦っていてくれれば、珍しいボスの匣兵器が見れそうだ。

『ガオオオオオオ!!』

一際大きい猛獣の唸り声が聞こえた。

「これは、間に合いそうにないな。ん？」

視界の隅に見えたのは、黒く移動している物体。なにやらキラリと光ったと思ったら、ベルの王冠だ。城に戻るところみたいだけど、次々出てくる兵隊に面倒してららしいな。

せっかくだし、合流するか。

恐怖。

圧倒的な力の前に、ベルの双子の兄であり、ミルファイオーレの6弔花、嵐のマーレリングの保持者であるジルは、恐怖を覚えずにはいられなかつた。

ベルとフランを瞬殺して（実は幻覚だったけど）、そのままのノリでヴァリアアの拠点の古城を破壊し、ボスであるXANXUSとの戦闘にまでは案外楽にこぎつけられた。

ここまでは、よかつた。

だが、XANXUSの匣兵器は、想像以上に強力な力。

レオネ・デー・チエーリ
天空ライオン！

真っ白な立髪と体毛に、その鋭い眼光に宿る王者のような風格。

世界でも4種しか存在しない大空のライオンシリーズの一つ。

多くの匣兵器は、程度はあれど複雑な構造を極めている。

その為、匣によってはコピー可能なものもあり、ミルフィオーレはそういった匣を量産して多くの兵隊達が活用している。

が、種類が少なく、極めて複雑な構造を持つ大空のライオンは、能力や構造に謎が多く、未知数な部分が多々あるという。

そのうちの一体が目の前に現れたことに驚きはしたが、驚いたのはそのことだけではなかった。

オルゲルトの巨^{エレファンテ・フォルテ・ビオツジャ}象は、XANXUSがベスターと命名したライオンの咆

哮と共に、その体を石に変えて崩壊した。

大空の炎の特性は、”調和”！

全ての均衡^{バランス}が取れ、矛盾や綻びの無い状態を示す。

天空ライオン^{レオネ・デー・チエーリ}は、大空の”調和”の特性を備えた雄叫びが特徴であり、その雄叫びを受けた相手は、周囲の環境と同化させる特徴を持つ。

その為、瓦礫の山と同じように、その体を石化させた象だったのだが、それだけでは終わらなかった。石化したあと、調和するどころかヒビがはいり、ボロボロと綻び始めた。

一時はジルの嵐コウモリの超炎派による静かな攻撃により、XANXUSとベスターに傷を負わせ、石化が解けたものの、次の瞬間、ベスターの鋭い咆哮とともに、その姿を石に変え、さらにはボロボロの瓦礫と化した。

そして、自らにわずかとはいえ傷を与えたジル達に対して、XANXUSは本気で怒りを覚えた。

その瞬間、顔中に傷跡が浮かび上がり、全身にも同じように傷跡が浮かび上がる。

昔、クーデター時にボンゴレ9代目に付けられた傷。XANXUSの怒りが頂点に達した時、その傷は浮かび上がる。かつてボンゴレボスの座を奪う戦いをした沢田綱吉も、怒りで力を増幅させるXANXUSには、遥かな苦戦を強いられた。

ジルとオルゲルトがさらに驚いたのは、ベスターの全身にも黒い模様が浮かび上がったこと。

タイガーパターンと呼ばれる横縞の模様であり、白い体毛の所々に浮かぶ黒い模様は、体や顔、手足の全身に渡り発現し、その姿を変えた。

「ベスターは、ライオンでもトラでもねえ」

そう言うXANXUSの言葉に目の前の動物を見るが、その特徴はどちらにも酷似しながら、どちらとも違う特徴の二つを併せ持つ動物。すぐには出てこないが、オルゲルトにはその動物に少し心当たりがあった。

希に、ライオンとトラの種を超えた異種交配により、その2頭の特徴を併せ持つ別種の子供が生まれるということ。虎の模様を持つライオン。

これこそ、XANXUSの匣兵器！

リクレ・テンベスタ・デイ・チエーリ
 天空嵐ライガー！！

そこからの攻防は、もはや一方的だった。

ジルの匣兵器である嵐レビストレット・ニンベスタコウモリは、XANXUSとベスターの360°を包囲し、最大炎圧によって倒そうとしたが、それよりも速く、炎の塊がコウモリ達に飛び、一瞬で全滅させられた。

自らの持つ死ぬ気の炎が弱かったため、圧縮して放つという新技をして驚異的な攻撃力を叩き出した、ボンゴレVII世と同タイプのアートマッチク拳銃。そこからはなたれた炎によって、嵐コウモリは一瞬で全滅した。

銃口から硝煙の放つ拳銃を構えるXANXUSに、ジルにはもはや太刀打ちできる力は残っていないかった。

オルゲルトと巨エレファンテ・フォルテ・ヒオツジャベリカーノ・デイ・ヒオツジャ雨象と雨ペリカンは、雨の炎を纏った防御も虚しく、ベスターの雄叫びとともに石となり、瓦礫の山とどろかして崩れ去った。

そしてその余波は、後ろにいたジルにも届き、その身を固い石へと変えていく。勝ち目が無い、かなわない。そう思うジルには、もはや王位正統後継者の王子のプライドなど、どこにもなかった。

白蘭と話をつけてやる！

ボンゴレのボスの座が欲しいだろ？

ミルフィオーレボンゴレ支部のボスにしてやる！

今以上の戦力を手に入れられる！

沢田綱吉を倒せる！

しかし、ジルの必死の誘惑の言葉も、XANXUSの耳には全く届かなかった。

「俺が欲しいのは、最強のボンゴレだけ。カスの下につくなど反吐がでる」

ピシピシ。

XANXUSの言葉のあいだにも、ジルの石化は進んでいく。

「内部にどのような抗争があろうと、外部のドカスによる攻撃を受けた非常時において
は、ボンゴレは常に——」

その手に構える銃に炎をこめ、光の輝きが強くなる。そして照準を、上空にいるジルに向けて、その引き金を引いた。

「一っ!!」

放たれる弾丸が、炎の筋を描きながら敵を貫き、煌々と輝く爆炎となって、炎を散らしたのだった。

終ぞ、座したままのXANXUSの足を、地に付けることは叶わずに。

『小休止』

「お」

「あ」

森の向こう、城の方角で、輝かしい大空の炎の光が照らし渡った。

ヴアリアーの人間であれば、あの炎が誰のものかわかる。

絶対的な強者、XANXUSによる、炎の弾丸が、敵に止めを刺したその瞬間であった。

敵の大將を討ち取ったということを理解し、信じられない思いのミルフィオーレの残党兵と、勝利を喜ぶヴアリアーの隊員達。

が、この場にいるベルとフランの二人は、若干残念そうだった。

「ちっ、もう終わっちゃったよ。見たかったなあ。大空の匣って超レアだしよ」

「結局、わらわら出てくる敵の相手してて間に合いませんでしたからねー」

ため息をつくベルと、そのそばで無表情気味にしゃべるフランの二人。

野次馬根性満載の王子様は、どうやら天空ライオンを見てみたかったようだが、数だけは無駄に多かつたミルフィオーレの兵隊を潰しまくってたら、先にXANXUSの戦いの方が終わってしまった。

兵隊はあらかた片付けたが、そのせいで遅れてやはり残念そうにしているベルだった。もはやテンションが微妙に下がっている。

「おらあぁー！」

隙だらけ、チャンス！とばかりに後ろから攻撃を仕掛けるミルフィオーレの兵隊。

もつとも、ベルにはどこにも隙やチャンスなどが全くなかったのだが、相手が相手なだけしようがないと言えるだろう。手元の袖からナイフを取り出して、しゃがんでいた態勢から起き上がろうとしたが、直前で思い留まった。

瞬間、横から飛んで来た無数の紫色の光弾が、ベルとフランを避けるように飛び、襲いかかるミルフィオーレの兵隊を吹き飛ばした。

「なんだかがっかりした顔だな、ベル」

枝から枝へと飛び移って姿を現したのは、黒い下地に、銀色のラインのあしらわれたリヴォルバー銃を持った考魔だった。他にミルフィオーレの人間がいないことを確認すると、くるくるとリヴォルバーを回して大腿のベルとに固定されたホルスターにし

まった。

「てめつ、こんなところで何してやがる。西側は終わったのか？」

「こつちは片付いた。二人が見えたから来てみたが、どうやらボスの戦い見れなくて残念、つてところか」

「さすが考魔センパイ。まさにその通り、ベルセンパイもレヴィさんとおなじボス大好きらしいですよー」

「あんな変態親父と一緒にするな！このカエルが！」

ザクザクと、オリジナルナイフを投げてフランのカエルのかぶりもの越しに頭に突き指す。が、それでも平然としているフランにベルはやはり不満気である。

「でも良かったんじゃないですか、ベルセンパイ」

「あん？何がだよ」

「ほら、ボスつて、周りを見ないというかー、関係ないというかー」

「・・・だからなんだよ」

回りくどい言い方をするフランに、だんだんとイライラとしてくるベル。考魔は杖に腰を下ろしてフランの話の静かに聞いている。

「ミー達もそばにいたら、巻き込まれたかもしれないじゃないですかー。ほらただでさえ、敵はセンパイの兄弟ですしー。まとめて、ドカーン、と」

手を広げて大きさに言うフランだが、当のベル本人はなんだか本当にありそうで頼に一筋の汗が流れていた。

「確かに。こんな暗がりです、顔とかかなりそっくりな双子の兄弟。もしこれでやられても、「敵と間違えた」、と言っても通じそうな話だよな」

うんうんと納得するように冷静に呟く考魔。

その言葉に、さらにだからだと冷や汗を流すベル。フランも考魔も、冗談半分で言っているのだろうか、XANXUSの性格を知っているベルとしては、妙に本気で信憑性が高かった為、足取りが少し重くなった。

「……………もう少し、ゆっくり行くか」

ベルはそう言いつつ、若干城へと向かう移動速度を落とすのであった。

一方、古城跡地の瓦礫の山の中では、先ほどと全く同じ体制でいるXANXUS。静かに、深く椅子に座って楽な姿勢で目を閉じていた。そばにいたのは無傷のルツスーリア。

「どうやら古城の破壊と同時にメガネ（サングラス？）を落としたらしく、あたりが見えないまま瓦礫の山を歩いて、先程見つけたらしい。」

「あえてもう一度言おう、XANXUSが戦闘中も目が見えないまま歩いて、無傷で戻ってきたらしい。古城が壊れた際も全くの無傷とは、さすがXANXUSとルツスーリア。ヴァリアーの幹部とボスなだけある。」

「さっそくXANXUSの傷を発見して、自分の匣を開匣して治療しようとするのだが、やはりというか当然というか、「構うな」の一言であった。」

「ほっとけルツスーリア。この程度でどうにかなるほど、やわなボスじゃねーよ」

「瓦礫の欠片を踏みつけて声をかけてきたのは、いつの間にか戻ってきたスクアアロ。おせえぞ、ドカス」

「そんなスクアアロに労いの言葉をかけるべくもなく、もちろん悪態をついたのであった。そんなことにいちいち起こっているスクアアロもキリがなく、元々こういう人間とわかってるからXANXUSの悪態に特に苛立つ反応を示すべくもなかった。」

「他の連中が、思ったより役に立たなくてな」

「それって、」

「ミー達のことですかー」

スクアーロの言葉のすぐ後に聞こえた二人分の声。

見てみると、積まれた大きめの瓦礫の上に腰掛けていた、ベルとフランの二人がいつの間にか戻ってきていた。

「事実だろうが！敵をあつさりを通しやがって」

「それについてはー。ベルセンパイがお兄さんより弱かったってことで」

「俺の方が強いって、の」

ザクリ。

の、のタイミングで自前のオリジナルナイフをフランに突き立てる。例によって平然としているフランであった。

「でもあつさり通したのは事実だから説得力ないぞ」

見てみると、別の方向からやってきた考魔。

ベルとフランと会ったときには持っていなかった長めの大きなバッグを背負ってることから、西側の敵を迎撃に行った時に森の中に隠したバッグを回収してきたのである。

スコープ越しだがベルとジルの戦いを見ていた考魔は、割と辛辣な意見をベルにする

のだった。

「てめ、考魔。おめーこそ、城からの迎撃が役目なのに何出張ってんだよ」

「敵が多いのだからしょうがない。四方から囲まれたのだぞ」

「そいつらを城からぶつ倒すのがてめーの役目だろ」

「それならベルの役目は南に現れた6弔花を倒すことじゃなかったのか？ いや、さすがに兄貴に勝つというのは難しかったな。すまん」

「この野郎………狙撃銃なんてガラクタ使ってる奴に言われたたかねーよ」

「ガラクタ？ ……聞き捨てならないな」

ベルの言葉に、考魔がびくりと反応を示す。

明らかに悪いと思っていない考魔の謝りに対して、ベルから殺気が漏れ出し、手元に用意したナイフをだし、ヴァリアーリングの光とともに、真つ赤な嵐の炎を纏わせる。

「バラバラに解体してやる」

対する考魔は、ホルスターから白地に銀色のラインの入ったリヴォルバーを抜き、ヴァリアーリングの光とともに、ヴァイオレット紫色に銃身が発光する。

「綺麗に風穴開けてやろう」

考魔の目が少し細くなり、ざわりとした殺気がわずかに漏れる。

「あれ？ 考魔センパイ少し怒ってますかー？」

「考ちゃんが怒るなんて、珍しいわねえ。フランも覚えときなさい。考ちゃん自分の銃けなされると怒るから」

「ベルセンパイと同じですねー。ナイフ捨てたら怒りましたしー」

「二人共々、ほどほどにねえ」

お互いにナイフと銃を構え、殺気を放出する。

そんな二人をよそに、反対側から体を引きずるようにやって来たのは、割と重傷なレヴィだった。

「ボス……」

「まあ、レヴィったら、ズタズタのボロボロじゃないの」

「俺の……ことは、いい。ボスさえ……無事……なら」

ボロボロの傷だらけの自分のことよりボス絶対。ヴァリアー内でも珍しく、かなり度を越す忠義心。ここまできると一周回ってレヴィがなんだかすごく見えてくるから不思議である。が、そんな忠義もボスがボスだけに報われないものであった。

「健気よね」

「でも、情けないですよねー、レヴィさん。……やっぱり見掛け倒しかー」

「なぬー！」

無表情ながら結構辛辣で毒舌を吐くフラン。だがヴァリアー幹部全員が戦い、レヴィ

が確かに一番ズタズタのボロボロの傷だらけなのだからしようがない。さすがヴァリアー幹部内でも一番鈍重と言われるだけはある。攻撃力だけなら高いのだが。

その後、ルツスーリアの晴クジャクによつて傷を治したが、この晴クジャクは体組織を活性化させて治療を施す為、傷も治るが一緒に髪や髭、爪も思い切り伸びる。

その為、治療後はいつそうむさい容姿になったのは言うまでもなかった。

「さてと、残りの残党を片付ける前に、日本のガキどもにこつちの戦果を報告するか」
戦うベルと考魔を置いておいて、スクアーロはため息を吐きながら通信機を用意するのだった。

メローネ基地の入江正一の研究室。

怪我をした者達にはキャスター付きの移動ベッドを用意して寝かせ、一先ず落ち着く。入江の話聞いてとりあえず敵意は無いことはわかったが、それでも腹の虫が収ま

らない人間もいる。獄寺と雲雀がいい例で、せめて入江を一発は殴りたいと思っている。いや、思っているというかむしろ言っているが、ツナはストップをかけているのであった。

「ちよ、見捨てる気?!」

そんな中、割りと焦る入江の声と、その後ろで怒気をふくらませて佇む獄寺と雲雀の二人。そして前に立つ両手を広げてストップをかけてるツナ。背を向けた入江は正面を向いて小さめのノートPCを操作している。そして画面には、テレビ通信をしていたのか映像が映っていた。

長めの金色の髪を後ろで縛った髪型に、ディスプレイ搭載のメガネをかけて白衣を着た大人の男性、ルイ。その表情はどこか面倒そうにしていた。

『見捨てるとは人間きが悪いな』

「だったらルイからも説明してよ!なんか僕だけ怒りの対象が向いてるんだけど!」

『いや、だって俺ボンゴレ達の邪魔してないし』

「いやいや、そういう計画だったんだから仕方ないじゃん!フォローしてよ!」

『別にいいじゃないか。減るもんじゃないし。・・・それに面倒だ』

「ルイ!君って人は!!ていうか今ほろつと本音漏れたよね!」

わやわやとしやべる入江とルイの二人。

その光景を見ている光努、リル、コルの三人は中々愉快そうに笑っていた。

「はは、ルイは相変わらずだな」

「でも結構面倒くさがりは改善したんだよ」

「そうなのか？」

「それに肉体的疲労も結構軽減されてる。灯夜に昔少し鍛えられた」

「灯夜に!?!なんかとんでもない事を知ってしまった気が・・・」

一先ずこの後の状況は他の戦いの行方によって方針が決まるため、しばらく休息しているのであった。

「！」

「どうした、リボーン」

そんな折、ツナの持つヘッドホンに内蔵された機能によって、ホログラムとしてその光景を見ているリボーンの変化に、隣にいた光努は訪ねた。

何かあったのかと思っただが、予想よりもいいことだったのか、リボーンはにやっと笑ってそのことを告げた。

「たった今ジャンニーニからイタリアの主力線の情報が入ったぞ。XANUXSが敵の大

将を倒したみたいだ」

その報告に、一同は喜んだ。

しかし入江はまだまだ不安の表情。ミルフィオーレの兵隊はとにかく数が多い為、たとえ大将がやられたとしても、別の大將を立ててさらに攻め込んで来るかもしれない。現に最初の指揮官は瞬殺されたが、新たにジルを指揮官に立てて攻めてきたのだから。が、さらにリボンがボンゴレ基地に來た追加の報告として、敵が撤退を始めたということを知って、今度は入江も喜んだ。

「これならいける！ボンゴレの戦力は想像以上だ！主力部隊を追い込むなんて！」
「急に興奮しやがって……」

結構なはしゃぎようで喜び、急にテンションが高くなった入江に隣の獄寺は若干ジト目である。

そんな様子を見ているリルだが、隣の光努がどこから用意したのか、ビデオカメラを回して入江を映していたので、リルは不思議そうな顔をした。

「何してるの光努？」

「ん？いやなに、普段と違う姿を映したらあとでいい思い出になるかと」

「光努って結構サディストだよな」

「リルからそんな言葉が出るとは、これも時間というものか」

しみじみとそんなことを光努だが、この世界ではリルとコルの二人は18歳なので本

当に時間が経っているのである。

と、こっちよりも入江のテンションが高いのは事実。

その喜びのように、ツナも顔を綻ばせる。メローネ基地はボンゴレの手に落ちたといっても良い。そしてイタリアでの主戦力の戦いはボンゴレ側の勝利で終わった。

あとは、白蘭を倒すだけ。

「いいや、ただの小休止だよ」

天から聞こえてくるような、周りの広さに関わらず、響くような声が聞こえた。上機嫌そんなその声と裏腹に、入江の背筋は凍りつき、冷たい汗が流れてきた。その場の全員は、いきなり出現した人物に対して、一様に警戒の色を強めた。

跳ねるような白髪のと、左目の下の三つ爪のマーク。真っ白な服に身を包み、目を細めて楽しそうに笑っている姿は天の使徒にも見えるが、地獄の悪魔のようにも見える。

「イタリアの主力戦も、日本のメローネ基地も、すんごい楽しかった」

——白蘭。

ミルフィオーレのボスにして、この時代の支配者。
ついに彼は、その姿を現したのだった。

『成長した君達への贈り物』

時同じくして、イタリア戦線の場合にも白蘭が現れた。

現れた白蘭はぼやけ、透けているようなホログラムの映像だった。倒された敵の持つ通信端末等から映し出しているにすぎず、本人がここにいるわけではない。

だがこの世界の支配者の存在感は、ツナ達その場にいるものに驚愕を呼び込んだ。

『ボンゴレやイリスの誇る最強部隊の本気が見れちゃったりして、前哨戦としては相当有意義だったよね♪』

飄々とつかみどころの無い笑顔でしゃべる白蘭に対して、前哨戦という言葉にいくぶかしげる。前哨戦、ということなら、この後に本当の戦いが控えていると、暗に言っている。

白蘭は知っていた。

入江正一が、自分を騙していると。

まさかボンゴレ側に組みしているとは思っていなかったが、入江が敵になるのは白蘭の中では想定内の範囲内だった。

『しつかし正チャンもつくづくもの好きだよね。こんな中学生に、世界の命運を預けちゃうなんてさ』

世界の命運？ スケールが大きすぎる、というには、白蘭の言葉は真実味を帯びていた。「世界の命運なんて。白蘭っていうのは世界の支配者だったのか」

と、そんな話の腰が折れるような無遠慮な発言をした光努を、白蘭は相変わらず飄々と楽しそうに見た。

『やあ、君が白神光努君だね。はじめまして』

「ああ、はじめまして、白蘭」

ただの会話。初めて会った者どうしたから、なんらおかしくない会話。

にもかかわらず、周りの空気が異常に重くなった気がしたのは、気のせいだろうか？ どこか白蘭の瞳には、品定めするような好奇心の色、わずかに警戒するような色、考

えの読めない色がうごめいていた。

『そうだ、君達イリスにも関係ある話だし、ちよつと聞いてくれないか?』

「イリスにもねえ。続けてどうぞ」

『うん♪じつは本当のところ、このまま戦力を思い切り投入して、君らを殲滅させることは簡単なんだよ』

白蘭の言うとおり、壊滅寸前のファミリーを潰すのに、ミルフィオーレの兵隊は数が多い為、人海戦術という手が割りと使える。

『でもここまで楽しませてもらったし、信頼してた副官に裏切られたとあつちや、リーダーのプライドに関わるだろ? だからそろそろちゃんやろーと思って』

そうやって白蘭は楽しげに笑って細まったその瞳を開き、全員に告げた。

『沢田綱吉君率いるボンゴレファミリーと、白神光努君率いるイリスファミリー、そして僕らのミルフィオーレファミリーの、正式な力比べをね』

正式な力比べ。白蘭の口にした言葉に、全員が驚きと疑問符を浮かべる。

『賭け金は7^{チツ}・^ブと十^ブ。2^{トウリニセツテアルトラドツエ}。時期的にもピッタリ。新世界を祝うセレモニーさ』

「待つてくだささい白蘭サン。そう簡単に行くでしょうか?」

白蘭の言葉を若干遮るように、入江が話す。

その表情には先ほどの驚きや焦りはなりを潜め、どうにか現状を冷静に再分析して自信を持ち直したといったところである。

その自信の根拠は、マーレリングを持つ6弔花。

6弔花の内、イタリア戦線のジル、メローネ基地のγ、グロ、幻騎士、そして入江正一。この5人が既にボンゴレによってやられた。正確には入江はやられてないが、ボンゴレ側についてたので同じような事。それにより、すでに7つのマーレリングの内5つを失っているということになる。

だが、そのことを告げても、白蘭は相変わらず飄々とした態度を変えなかった。

『うくん。ま、それが本物ならね♪』

バキン!!

「!!」

白蘭の言葉の終わりと同時に、入江の指にはめられた晴れのマーレリングが、音を立てて砕けた。その光景を見たコルがポケットから取り出したのは、グロから拝借した雨のマーレリングだが、入江の手のマーレリング同様砕けていた。

『もちろんそれもランクAのステージ石なんだけど、
7・トウリニセツテはもつと特別♪』

今までマーレリングと思っていた物が偽物だったことに、入江は驚愕していたが、光努、リル、コルのイリス組は内心、ラッキーA級の石ゲットとか場違いな事を思っていたのは内緒である。

「だったら本物のマーレリングはどこにあるんだ？」

『いい質問だね、光努君♪実は正チャンには内緒で他に組織してあるんだよ』

その言葉の終わりと同時に、ホログラムの白蘭の背後に現れるように、空間投影型の映像が映し出された。全員が見えるように映しだされた巨大な映像は6つに分割され、それぞれに別の人物が映し出されていた。

鋭い眼光を持つ、無精ひげと、燃える炎のような赤髪の男。

波打つウェーブの髪型をした、顔に傷跡のある男。

ミントグリーンの髪の長めの髪を、後ろで縛り、シルバーのピアスを嵌めた優しげな雰囲気の男。

膝下まである、海のような水色の髪色をして、静かに眠る幼い少女。

深く黒いローブをかぶり、鬼のような仮面をした人物。

そして、その身を拘束具で縛り、この中で最も異常な雰囲気を出す、怪しく瞳を光ら

せる人物。

普通の人にも見えれば、明らかに異常な人物にも見える6人のの人物。怪しげな雰囲気は、本当に人間かと疑わしくなるような人物も存在している。

映し出した映像を背に、白蘭は気分よく高らかに告げる。

『彼らが本物のミルフィオーレファミリー6人の守護者にして、真のマーレリング所持者、真6弔花♪』

白蘭は語る。

ただ腕っ節の強い人間を集めても、たかが知れている。なぜなら、この時代における戦いの重要な要となっているのはリングの炎。そしてリングの炎を生成するのに必要なのが、より強い人の「覚悟」の力。

だからこそ白蘭は探した。

ただ強いだけの人間でなく、常人離れた覚悟を持つ人間を。マフィア内とは言わずに、世界中から探し出して、見つけ出した。

『世界は広いよねー。例えば彼』

そう言って映像の中の6人の内の一人、赤髪の男を示す。

その男の映像と、その隣に映し出されたのは、山に囲まれた緑豊かな町の姿だった。

『ご覧のように大自然に恵まれた大変美しい故郷の出身なんだけど、「覚悟を見せてくれないか?」といったとたん——故郷を捨ててくれたよ』

言葉を切ると同時に映像も切り替わり、その映像を見たとき、ツナ達は息を飲んだ。

白い雲の浮かぶ青色の空は、真っ黒に染まり、緑の木々の生い茂る豊かな山は全て頂上から赤い炎と溶岩を吐きだし、麓の町は粉々に壊滅していた。森は燃え盛り、もうもうと黒い煙と灰を、周りの山々は空へ向かって立ち上らせている、地獄絵図の姿がそこには映っていた。まったく異なる光景だが、その形、場所、信じられなかったが、最初に見た映像と同じ場所だということを、否応なしにツナ達は悟った。

「!?吹き出したマグマの中に何かいるぞ!」

映像を注視して獄寺が叫ぶと同時に、映像の一部が拡大された。

燃えるような赤髪の男が、まるで露天風呂にでも入るかのようにタオルを頭に載せ、溶岩の中に体を沈めて岩に体を預けていた。しかもいい湯加減ならぬ溶岩加減なのか、口笛を吹きながら入っていた。

もはや真6弔花は、人間の枠組みを超えた存在だと示していた。

(黒い空、噴火する火山……か)

そんな中、光努の目に映るのは、空と山の二つ。どこか不思議な、懐かしさを出すような光が、光努の瞳に映っていたことに気づくものは、誰もいなかった。

『更に彼ら一人一人には5000名の部下と、選りすぐりのA級兵隊ソルジャー100名を与えてるからね』

楽しそうに笑いながら言う白蘭だが、その事實は驚愕の一言。

今までA級は、マーレリング保持者の6人しかいなかったにもかかわらず、幻騎士やY級の兵隊が真6弔花に100名ずつ、計600名いると言っている。

片手の指にも満たないA級に苦戦させられたツナ達としては、その数値は遥かに絶望的、さらにはその上の真6弔花の存在まである。

(真6弔花一人でメローネ基地を超える部下と戦力を所有してるのか。今更ながらミルフィオーレの兵力は圧倒的だな)

壊滅前のボンゴレ以上の兵力。もともと戦闘する人間の少ないイリスと比べれば天と地程の差がある。そう考えると、白蘭が大海戦術を使ってこないというのはある意味ラッキーなことなのかもしれない。今はまだ大丈夫、という意味でのラッキーだが、「白蘭サン！力比べて、一体何を企んでるんですか!!」

『昔、正チャンとよくやった“チョイス”って遊びを覚えてるかい？あれを現実
にやるつもりだよ』

“チョイス”？その言葉に疑問符を浮かべる者がほとんど。光努も記憶からその単語の意味が、“選択”を表していることを理解するが、その名に該当する遊びを知らな

かった。

だが、それで遊ぶという白蘭の言葉を聞いた入江だけが反応を示していた。

『詳しいことは10日後に発表するから楽しみにしててね♪それまで一切手を出さないからのんびりするとい』

10日後。長いようで短い1週間と3日。

10日が過ぎたら、戦いが始まるということ、白蘭は楽しみに笑って告げた。

『君らとはもつと話していたいけど、君達はもう逃げないとね。そろそろメモローネ基地は、消えるから』

「消える?」

『正しくは基地に組み込まれた超炎リング転送システムによって移動するんだけどね』

超炎リング転送システムとは、死ぬ気の炎を膨大な動力源として、物体を他の場所へと移動させる、端的に言ってしまうえばテレポーターションシステムである。

しかし、死ぬ気の炎を使うミルフィオーレの最先端科学といえど、完璧な移動ができるわけではなく、まだまだメモローネ基地程の巨大な質量でなければできないことと、莫大なエネルギーと時間がかかるため、一生に一度見れるかどうかの装置である。

『楽しみだね、10日後♪』

そう言ってホログラムの姿を消す白蘭と同時に、基地の奥から目もくらむような閃光

が立ち上ってきた。見たことのに輝かきだが、先ほど白蘭の言っていたテレポーターシヨンということを全員がすぐに直感した。

しかも、今からどうあがいても逃げようがないことを。

「皆、大丈夫だ！どこかに掴まれ!!」

光を眼前に、そう叫ぶ入江の言葉と同時に、研究室ないの人間は力の奔流を受け詰めるように、その場に伏せるものもいれば、壁やなどに掴まれその身を固定させた。

そして光がいつそう輝きを増し、メローネ基地は目もくらむような莫大な閃光によって包み込まれた。

光が晴れると同時に見た光景は、入江正一の研究室と、本来基地のあった場所。

文字通り、そこにすでに基地は存在しなかった。

むき出しの地面の断層と、本来メローネ基地があるべき場所には、巨大な空洞ができ、闇に紛れるように空洞のそこは真っ暗な色が広がり、深い深い穴を形勢していた。

構造上壁際にあつた研究室は、地面にめり込むようにして取り残されていた。

「極限に……はどこだー!!」

「あれつて、10年前の了平?」

場の雰囲気こそぐわぬ元気な声。短めのスポーツ刈りに鼻の頭に貼られた絆創膏。並盛中の制服をきて両手にバンテージを巻いたその少年は、笹川京子の実兄、笹川了平だった。明らかにツナ達の知っている10年前の姿。その証拠に、右手の拳の指に嵌められた指輪、日輪の太陽の刻印が施されたシルバーのリング、晴れのボンゴレリングを備えていた。

この研究室が移動しないで取り残されたのは、了平が現れ、ボンゴレリングが7つ揃ったことよつて結果が作り出されたから、と入江に説明された。

了平がこの時間このタイミングで交代するのも計画のうちだったらしく、入江の裏切りを見抜いた白蘭と同じで入江も白蘭のしそうなことの何割かは見抜いていたようだ。

「しかし大変なことになりましたね。あの6吊花より上の戦力があると、いまの我々でどう戦えと……」

が、雲雀の側近である草壁は深刻そうな顔をして、皆の疑問を代弁する。

戦う、といったが、正直彼らは通常の6弔花だけでも結構手一杯だった。後10日で、一体どうすればいいのだろうか。

普通に考えれば、戦力としても圧倒的な差があるため、無謀な戦い。

それはリボンも感じていることだった。

だが、入江はそうは思っていないかった。

「成長した君たちなら彼らと渡り合える！君達の成長なくして使いこなせない、新たな力。今こそたくそう、ボンゴレボスから君達への贈り物だ、心して受け取ってくれ!!」壁のスイッチを動かすと、白く丸い装置の中央部分がゆっくりと開いた。その中は光の輝きに包まれていたが、そこから飛び出した7つの者は、それぞれボンゴレのボスと守護者となるツナ達の手元でそれぞれ止まった。

各属性の色にちなんだ、橙、赤、青、紫、黄、藍、緑の7つの炎の塊は、静かにその姿をツナ達の手元で表した。

格式高いボンゴレの紋章の刻まれた、匣！

この時代のツナ達が、10年前の自分たちに向けた贈り物。きつと使いこなせると信じて、後を託す証。

ボンゴレ匣！

煌々と燃える炎と共に手の中に収まる匣は、澄んだ彼らの瞳に写し出されいた。

未来編Ⅳ 『戦間期』

『忘却の彼方の怪物』

穏やかな雲が浮き、青い空が広がる本当に平和な空。

何が起ころうというわけでもなく、静かなその場所は、並盛中学。

そして並中の校門の前に、3つの人影が立っていた。

一人は少年。柔らかそうな白い髪と、楽しげに笑う表情。

白いパーカーとブラックのジーンズ。首からチェーンに通した真つ白な石と装飾の施されたリングが、鎖に巻き付かれ、太陽の光を浴びてきらりと光っていた。

もう一人も少年。端正な顔立ちと少し長めの黒髪に、無表情だが少し眠そうにしている。水色のシャツにダークブルーの上着というラフな格好。右手の中指には巻きつけるような青い竜を模した指輪と、左手の中指には同じような形で少し形状の違う緑色の竜の指輪が、両方とも鎖に巻きつけられて嵌められていた。

3人目は少女。艶やかな黒髪を少し短めのポニーテールにしており、ふわりと吹く涼しげな風にサラサラと揺れている。薄い桜色の長袖上着と、赤いキュロットに、膝下まである茶色のブーツ。これから来るのが楽しみなのか、少し鼻歌を歌いながら微笑んでいた。

もちろんこの場にいるのは、光努、リル、コルの三人。

全員戦闘服、というわけではなく普通に私服。まあ結構私服で戦闘している人員の方が多いのでどちらともとれるのだが。空を眺めながら校門の上に座る光努と、珍しく特に武器らしい武器を持っていず、校門に背中を預けるリルとコルの二人。

いや、校門に明らかに刀か剣と思われる細長い包みが立てかけられていたから無装備というわけではないらしい。

光努はフィオーレリングを首から下げているが、リルは今日是指に嵐と雷のDリングを嵌めていなかった。

特に物騒なこともなく、穏やかな日差しをしたでじつとしていた三人だが、驚異的な聴覚力を持ち、かすかな音の響きを捉えた三人の耳は、全員で同じ方向を向いた。

「あ、見えたー！」

リルの言葉に少しすると、ドッドドッドと腹のそこに響くような低い音が鳴り響き、向こうから走ってきたのは、一台のバイクに乗った人間。

ヘルメットで顔が見えないが、金色の長い髪を風になびかせ、光努達の前まで来たバイクは止まり、その背の人物は地面に降りてヘルメットを脱いだ。

中にしまわれていた金色の髪がこぼれ落ち、少し鋭い瞳を三人に向けると、ふっと笑った。

「全員無事そうだな、光努、リル、コル」

「久しぶり、ルイ」

「といつてもメローネ基地潜入前に通信はしたけどね」

懐かしむリルとコルの言葉。

イリスの戦闘部隊『シャガ』として活動してあちこちを転々としているので、当然ずつと同じ場所にいるというわけではないリルとコル。が、昔の『アヤメ』と違って携帯端末は持ち合わせているので、いざという時は通信が可能になったのである。過去の例から学ぶことができるのは人間の美徳である。

懐かしむリルとコルの後ろの光努だが、校門の上から地面に降り立ち、相変わらず楽しそうな笑みを浮かべながら、その表情と裏腹に――
両手の拳をバキバキと鳴らしていた。

「よう、ルイ。さっそくだがお前に聞きたいことがあるんだが」

「うん、私も聞きたいことあるの♡」

「僕も、右に同じ」

ガチャリ、ガチャリと、細長い包をそれぞれ一本ずつ手に持ち中から取り出したのは、黒塗りの鞘に収められた日本刀と、金色の装飾の施された両刃の西洋剣。

リルは洋剣、コルは刀を手に持ち、それぞれ抜き放つ。ただ抜くにしても一切の淀みなく、円を描くかのような華麗な抜きは、彼らの剣士としての実力の高さがにじみ出ている。

通常のマフィアなら泣いて土下座をするほどに実力の高い三人だが、相対するルイはいえば、こめかみあたりをポリポリと書いて若干面倒くさそうな視線したあと、バイクに乗ってエンジンを掛け、

「じゃ、先に言ってるから」

フルスロットルで光努達の前から走り去って行ったのだった。

三人ともバイクに追いつくくらいはわからないが、異様に運転技術が神業すぎるルイを途中で捕まえることは叶わず、再開したのは目的地についてからだった。

「「ルイイイ!!」」

白蘭との邂逅を終え、メローネ基地が転送されてボンゴレ匣を手に入れた後、ツナ達は地上へと戻った。わずか一日にも満たない時間だが、メローネ基地との戦いは激しく皆疲弊させているため、詳しい戦いの話は後日としてツナ達は基地へと戻ったのである。

光努達はそのまま研究室に残り、早急にルイに説明を求めするため、直接呼び出したのが先ほど。ラフな私服に着替えた光努達の前に現れた、バイクでやってきたルイであった。そしてその目的地となっている場所では、二人の人間が忙しそうに作業に勤しんでいた。

カチャカチャカチャ。

キボードの音が鳴り響く音がする。

メローネ基地跡地、広大な空間の中にぽつんと地に埋まるように存在する入江正一の研究室がそこにはあった。その広々とした場所で機械をいじっているのは、この部屋の

主である入江正一とメカニツクのスパナ。

この二人は、メローネ基地が超炎リング転送システムによってどこかへと飛ばされてしまい、むき出しの白くて丸い装置を隠すためにいろいろと探っている途中だった。

その他にも機械を正常に作動させるためにもすることがたくさん、白蘭との決戦に備えて、しなくてはならないことも多々ある。

ツナ達はそれぞれ修行して戦闘能力向上と、匣兵器を完璧に使いこなせるようにならなくてはならない。入江とスパナのふたりは、メローネ基地と切り離された装置が壊れないようにもしなくてはならない。

この装置の中には分子状に分解された10年後のツナ達が入っているため、もしも誤作動で全員がこの時代、もしくは10年前の時代に行ってしまうえば大変なことになる。10年前に行つて何か余計なことをすれば、未来であるこの時代が狂つてしまうかもしれないし、10年後のこの世界に現れ、10年前のツナ達ともしも出逢えば、会うはずのない人物との邂逅は、時空を壊し世界を消してしまう可能性がある。

そんなことにさせない為にも、入江とスパナの二人は一先ず装置をどうにかする必要があるのであった。

取り残された壁に付けられた通路から、靴音がしたため手を動かしながらも目線と意識をそちらへと向けたが、やってきた人物を見て入江は喜ぶように声を上げて手を止め

た。

「ルイ！結構早かったね」

「予想外の事態に急ぐ必要があつてな」

後ろで一括りにした長い金色の髪を揺らしながら、白衣のポケットに手を入れ、少し面倒そうな表情をしていたが、入江を見ると少し笑つたのだった。

「ルイって、イリスの？・・・初めて見た」

入江と一緒に作業中だったスパナは、ルイの姿を見て驚いていた。

技術的な分野に置いて、ルイはかなりの有名人であるため、純粹に技術者のスパナはルイの登場に驚いていた。10年前といえば、入江だつてまだ中学生。技術者の一旦さえもなかつた程であり、その頃からルイはマフィア間で有名だつたため、今の時代でもさらに名が知れている。もつとも、それは純粹な技術者の間だけで、ほぼ壊滅のイリスファミリーということもあつてマフィア間の評判は良いものだけでなかつた。

「そういえばルイ。光努君達は？リルやコルも一緒に来るつて聞いたけど」

「・・・そんなことより例の話進めようか」

「ルイ、今ごまかしたよね」

入江の純粹な疑問に、目線をそらすルイ。

が、ルイの後ろから手がのび、その肩をぽんと叩いた。

「まあごまかしたくなるのもわかるが、正一の話は聞かないとなあ、ルイ」

「そうそう。せっかくこここまで来たのにね」

「潔く諦めるんだな」

ルイの肩に手を載せる光努と、後ろにいるリルとコルの二人。

さすがイリスのボスと『シャガ』の二人。ルイの予想よりも速く追いついてきた。

「三人とも随分と早かったな。正一、一先ず休憩してから話をしようか」

そう言うルイと正一の会話の横で、せっせとお茶の準備をしている光努達。畳を数畳用意して真ん中にちゃぶ台を置いておせんべい等のお菓子を置いている。

（このセットどこから出したんだろ。というかなぜ和風？）

スパナはその光景に若干呆れていたが、和風のテイストが好きで親日家なスパナとしては、結構このセットに喜んでいたので特に口出しはしなかったのであった。

一先ず全員手を止め、ちゃぶ台を囲むようにして座る光努達。湯呑のお茶を飲んで一息つき、早速というふうには光努が切り出した。

「さて、まずはじめに……ルイ！ 貴様だ！」

「ねえ光努。会議中はそのキャラで通すの？」

「いや、ただやってみただけ。それでは正一とルイが計画した内容を包み隠さずに話してもらおうか」

「といつてもな。10年前のお前とツナ達を呼んでメローネ基地を壊滅させてその勢いで白蘭倒そうぜ、つてことだしな」

「すつごい簡単に説明しちやつたけど、そんなのでいいの?」

「リル、多分ルイは説明するのが面倒なだけだよ」

「ざっくりでも説明するだけでもこの10年で成長したんだな。俺は少し感動した」

「光努君、それは少しルイに失礼だよね・・・」

「うちもそう思う」

だが光努の知っている10年前のルイと、リルとコルの知るこれまでのルイの記憶を総合して、「やつぱりマシになったよね」と思うのはイリスの者にとつては当然と言えば当然、日欧茶飯事である。

「けどさ、白蘭倒すためにツナ達を成長させたのはわかるが、俺は必要だったのか?」

光努も戦いはしたが、決して成長したと言えない。最初から身体能力も怪物級の為、成長したとわかるほどにすぐに成長するわけでもない。成長したといえ、リングの炎と匣を使えるようになった、というくらいだろう。が、使えるようになっただけで、それを自らの戦いに組み込むということは特にしていない。

「いや、光努君。白蘭サンを倒すには、君の力も必要なんだよ」

そう言う入江の瞳は、真剣そのものだった。

その瞳の光に、光努は楽しげに笑みを浮かべた。

「じゃ、白蘭の指定した『チヨイス』について教えてもらおうか、正一」

まだまだ年端もいかなない中学生にしか見えないが、あぐらをかき座り、楽しげに笑うその姿。一種の威圧めいた感覚を感じるその姿は、一ファミリーの長と呼ぶにふさわしかった。

「うん、わかった」

『俺も聞くぞ』

ちゃぶ台の上に声と共に現れたのは、黒いスーツと帽子のマフィアスタイルのリポーン。本人でなく、ツナが入江との通信ように置いていったヘッドホンから照射されるプログラムである。

結構なりアル再現に、ボンゴレの技術力の高さもなかなかのものである。

「ようりポーン。ツナ達は どうしてる?」

『もうヘトヘトみてーでし、今日は眠ってるかもな』

「そりゃほんのの数時間前に戦ってたんだし、若い子だからしょうがないよねえ」

「まだ中学生だしな」

微笑ましい者を見るような表情のリルとコルの二人だが、二人もいうほど年をとっていないので光努や入江は微妙な表情をしていた。

『そう言うお前たちや光努は随分と元気そうだな』

「「だつて苦戦する程戦つてないし」」

「あはは、メローネ基地の元指揮官としてはひやひやだったんだけどね……」

そう言つて苦笑いする入江。確かに指揮官が基地を蹂躪される様を見るのは悪夢以外の何者でもないだろう。メローネ基地という匣兵器があつたとは言え、いろいろと問題があつたのも事実である。

「そういえば三人はいつからメローネ基地に来たんだい？ 綱吉君たちとは完全に別行動だったろ？」

ツナ達が攻めてきたが、光努達は完全にツナ達とは別行動で別の入口から侵入してきた。どうやらツナ達と示し合わせた、というわけでなく、ツナ達は光努達が来るということとは知らなかつたらしい。

実を言うと、光努がルイの元へと行きいろいろとしている間に、気づいたらツナ達襲撃されてツナ達襲撃しに行つた、やっべえ出遅れた、という感じである。

ルイがいたのに、というのだが、ルイは自分の興味対象があると周りが軽く見えなくなる為、割りと出遅れる形で光努達は出発したのである。

そんなルイを入江にしては珍しくジト目で見るが、当のルイ本人は済ました顔でお茶をすすっていた。

「ま、よくあることだ」

「ルイ！それで何か問題があったらどうするのさ！」

「大丈夫だ。光努は強いし、それに籠もい……ん？」

「ん？」

「あ」

「あああ!!」

ルイの言葉に、光努の声、リルとコルの気づいたような声と、それに続くように入江の叫び声。

スパナとリボーンは疑問符を浮かべているが、事情を知るルイ達イリス組と基地内を見ていた入江は、本来ここにいるべき人物がいないことに今の今まですっかり忘れていた。

そして入江は、渾身の叫び声を上げた。

「しまったあ！獄燈籠をメローネ基地に置いてきたあ!!」

最高級スイートホテルのような一室。

華美ではないが、落ち着いた調度品の品々は高価な物。備え付けられたソファや机も細かい細工が施されており、ひと目でこの部屋に合う程に良い物である。

壁の一部は全面ガラス張りに、外の街並みがよく見える。広々とした町並みの屋根が見えることから、この場所がかなりの高所に設置されていることがわかる。

そんな部屋の中央程に設置されたソファに座り、机に足を乗せて少々行儀が悪いが、楽に座っているのは一人の青年。

跳ねるような白髪と、左目の下の三つ爪のマーク飄々として楽しげに笑い、左手に持った袋の中から白いマシユマロを取り出し、口の中に放り込んで甘さを楽しむ。

ミルファイオーレホワイトスペルの上着と、右手の中指に嵌められた、雫の形の石に、広

げる天使の羽のような意匠の施されたリング、大空のマーレリング。

ミルフィオーレを続けるボス、白蘭は楽しげに笑い、目の前の空間に投影されたモニターを見ていた。

モニターに映し出されていたのは、どこかの海に浮かぶ直径5キロ程の人工島。

規則的な丸い形をしており、平で何も無い、ミルフィオーレがその科学力を使い作り出したただの海に浮かぶコンクリートの塊だが、今のモニターに映し出されている島には平とは程遠い、様々な物が山と積まれていた。

瓦礫の山、というには少々規模が大きすぎる。直径で2キロに渡る巨大なコンクリートや様々な鉱物が、高さ数百メートルと積まれ、まるで夢の島のように。よくよくと見ると、巨大な立方体のコンクリートブロックが所狭しと落ちている。どこかで見たような大きさと形。

「こうして見ると、メローネ基地って結構大きかったんだ」

白蘭の言葉通り、モニターに映るのは、崩れたメローネ基地。

超炎リング転送装置によって飛ばされたメローネ基地は、落としても特に問題ないところに落とされ、今は巨大な瓦礫の山となっている。

飛ばされた瞬間、入江やツナ達意外にも多くの部下が中にいたが、今はどうなっているのかわからない。白蘭にとっては、部下が減ろうとしても、そこまで大した問題に考

えなかった。相変わらず楽しげに笑ってお菓子を食べる姿は、まるで冷徹な素顔を笑いの仮面で隠す悪魔のように見える。いや、本当に楽しそうに笑っているのかもしれない。だが今の白蘭は、面白いテレビでも見る子供のように笑っていた。

視線の先にあるモニターに写っているメローネ基地の残骸から、突如火柱が上がった。

真つ赤に燃える火柱。ただの炎でなく、その特性により全てを分解し、破壊する嵐の炎。

火柱が立ち上って消えると、その場所から大穴があいており、そこから人影らしく姿が二つ出てきた。白蘭はリモコンを操作して、その人影が映るように拡大すると、そこに映る人物が目に見えてきた。

頭を覆うバンダナと、その下の白髪。シワの刻まれた老齡の姿とは反対に、その動きに一切の好きもなく、身体能力は化け物じみていた。軍服のような服装に、竜を模した赤いDリングを嵌めた右手にはナイフが握られ、刃には嵐の死ぬ気の炎を纏っている。

そしてその後ろでは、赤黒い色の羽を広げる空の王者、嵐の炎を纏う大鷲が、眼前の敵をその鋭い眼光で睨んでいた。

大穴を間に、彼らの眼前に立つ人物。

赤みがかった明るい髪色に、和服のような服を着た男。腰に巻かれた帯には、短めの

黒塗りの鞘とその鞘に収められていたであろう短めの刀、所詮小太刀と言われる刀を握っていた。腰の鞘と反対側の帯には、樂しげに笑う狐の面。その表情口角を上げ、その細い目と相まって樂しげに笑っているようだった。

その足元には、威嚇するように四肢を大地について息を放ち空の鷲を睨む目と、とがったような耳に、美しい金色の毛並み。その姿はまごうことな気一匹の狐だったが、異様なことに本来一本しかない尾の数は、あろうことか9本あり、相對する鷲と同じ嵐の炎を纏っていた。

「ふうん。あれが、イリスの誇る第一戦闘部隊『アヤメ』の獄燈籠ごくとうろうと、墓造会の天狐てんこ”界羅かいらの匣兵器か。興味深いねえ」

樂しげに笑っているが、白蘭のその視線は鋭く、眼前の二人と戦いを分析するように見ていたのだった。

『真紅の大鷲VS九尾の狐』

赤みがかつた明るい髪を揺らし、目を細めて笑っている界羅に対し、獄燈籠は後ろの

嵐アキラ・テンベスタ 鷲のフゼに命じた。そうすると、所どころ黒い色の混じった全体的に赤色の羽を

羽ばたき、嵐の炎の纏われた羽が相手に向かって飛ばされた。

一つ一つが鋭く、破壊力の秘めた嵐の炎で纏われた羽は、十分な凶器となり得る。その上、広範囲に向かって飛ばされる羽は、避けるのすら容易ではなかった。

「避けるのは面倒やね。紅、コウ迎撃」

「カー！」

牙をむき出し、コウと呼ばれた狐が威嚇するように吠えようと、嵐の炎の纏われた九本の尾が振るわれ、そこから飛ばされた無数の火球が羽とぶつかり、派手な爆発音と共に二人の間で爆炎が広がり、もうもうと煙が両者を覆うように噴出される。

「全部迎撃するとはのう。それにその生物、一体なんじゃ？」

眼前で獄燈籠とフゼに対して威嚇する嵐の炎の纏われた九尾の狐。

この世界における匣兵器は、全てにおいて地球上に存在する生物の形をなしている。これは地球上の生物だけ造っているというわけではなく、地球上の生物を元にしか造れないということ。さすがに今の科学技術でも容易でなくその為、人の想像が生み出した物語の中のドラゴンや、空想上の生物などは造ることはできない。匣を使うものにとつては常識のことだが、今獄燈籠の目の前にいる生物は、通常の狐でなく、尾が九本存在する、いわゆる九尾の狐。

世界各地の伝承や神話に残る、場所によつては悪しき存在とも、幸運の象徴とも呼ばれる妖狐。伝説としてはいくつも存在するが、その証明が成されず、年月を経た狐が化学化したとも言われる存在。しかし、通常妖怪と呼ばれる生物は地球上に存在するといえ、ば言い難い。

科学の世界においてはあくまで人の想像、もしくは別の何かがあったにそう見えただけの架空の生物扱いだが、眼前にいる生物は確かに九尾の狐と言うにはふさわしかった。

だからこそ解せない。こんな匣兵器が存在するのかと。

「生物は長い年月を経て進化するものやけど、それは必ずしも正しい進化だけや無いっ

てことや」

「進化じゃと?」

「おしゃべりは割りと好きやけど、俺もこんな場所に連れてこられて少し面倒思ってるや。悪いが、さっさと帰りたいとも思ってる」

そう言つて瓦礫の山の上からあたりを見渡す。

こんな場所とは、メローネ基地のことではなく、移動した先のこの人工島のこと。

この島へとやつて来たのは、白蘭に頼まれて日本まで来た界羅にとつても予想外のことだったらしい。獄燈籠にも予想外で、光努達と後で落ち合う予定だったリルとコルは大丈夫だろうかと思つたが、この程度でくたばるほどにやわではないと知つているので、一先ずその心配は置いておいて、眼前の敵を見る。

ミルフィオーレ側にも意外と強い奴がいる、と。もつとも、この人物がミルフィオーレ側に完全についているかと言われたら微妙なところだが。

「つーわけで、やること済ませたるか」

バゴオオオン!!

その瞬間、獄燈籠が右足のミリタリーブーツの踵を少し浮かせ、地面を踏み鳴らした

その時、獄燈籠の背後の方で激しい爆音が鳴った。

そして爆音の方向を見た界羅の頬が、少し引きつった。

「おいおい……出鱈目やなあんだ」

獄燈籠の背後から界羅に向かって、メローネ基地の一区画が飛ばされてきた。

メローネ基地の構造は全体の縦の直径がおよそ2キロにその中に含まれるのは、一辺300メートルの立方体が多数組み込まれている。その区画の一つ、300メートルの立方体の塊が、爆音と共に飛ばされてきた事実には、さすがの界羅も少し笑顔が引きつっていた。

（この基地に入った時から、あらかじめいくつか仕掛けはしておいたってどこか。にしても、こんなやり方するなんて、予想異常に危ないやつぢやな、獄燈籠！）

巨大なコンクリートや耐炎製の壁等で構成された塊を飛ばすという常軌を逸している獄燈籠。だが、界羅は少し顔を伏せたとはい、再びあげたとき、細かった目をわずかに広げて笑っていた。

その瞳は、燃える炎を閉じ込めているかのような紅い瞳をしていた。

膝を少し曲げて足に力を込め、右手に持つ小太刀を構える。そして小太刀の刃を伝うように、真つ赤炎が煌々と燃え盛り、刃の表面を伝い取り囲むようにぐるぐると回転している。

そして迫り来る巨大な塊に向かって、地面を蹴って飛び出した。

「天火流、てんかりゆう 炫毘古！」かかびこ

莫大な炎を回転させて纏わせた刃を突き出し、前方のメローネ基地の一ブロックに刃を突き立てる。

その瞬間、激しい閃光と共に、瓦礫の崩れる音。ブロックに亀裂が入り、そこを炎が伝う。その瞬間からポロポロと分解されていき、最終的にはブロック全体が炎によって包まれた。そして炎を纏うブロックの反対側から、突き破って出てきたのは、和服のような服の袖をひらりと揺らし、小太刀を突き出している、無傷の界羅だった。

そして、ガラガラと崩れ落ちて山となったブロックの上に降り立った。

「いやあ、中が空洞で助かった。ラッキー☆」

楽しげに笑う界羅と、上からの瓦礫を全て避けて界羅の足元に来たコウを見る獄燈籠。

（ふむ、この基地の訓練室に使われとる耐炎製の壁じゃったんじやが、簡単に突き破るとはのう）

死ぬ気の炎が主流の時代の為、耐死ぬ気の炎用の素材だって開発されている。今回吹

き飛ばされたブロックの中は訓練室で頑丈な作りとなっており、壁全体は耐炎用の素材で死ぬ気の炎と斬撃打撃による抵抗力は高い。にもかかわらず、界羅は簡単に刺突技によつて貫通させた。炎の規模や純度もそうだが、その剣の扱いもはや化け物じみていた。

獄燈籠は地を蹴り、界羅に肉迫する。瓦礫の上という不安定な足場にもかかわらず、その速度は速い。その手に持つナイフは正確に界羅の喉元に向かわれたが、その前に小太刀によつて防がれ、激しい火花を発した。

キーン!!

すかさずナイフを振るうが、界羅は少し足を動かし最小限の動きで交わして小太刀でもって受ける。小太刀は元来、他の刀と比べてリーチが短いため、その戦い方は自然と剣術と体術の中間程に位置し、どちらかといえば体術寄り。その為、刀よりも近接戦には長けている節がある。界羅は手に持つ小太刀を、炎を纏わせながら上から獄燈籠に向かつて振るつた。

「天火流、石折!」
いはやく

峰の部分に手を添えて炎と共に獄燈籠の上から斬撃を振り下ろす。獄燈籠はその刃

をナイフでもって受け止めようとしたが、刃が触れる突然でその軌道を逸らし、小太刀をこすらせるようにして斬撃を受け流した。そして振り下ろした小太刀が地面へと到達した瞬間、地面に一文字の深い斬撃の後が走った。先ほどの耐炎製の瓦礫の山にもかかわらず、深い斬撃は瓦礫の中へと沈んだ。

その瞬間のわずかな隙に、炎の纏われたナイフを突き刺すように界羅にむけたが、咄嗟に小太刀を手元に戻して峰で受ける。だがその威力に、後ろへと吹き飛ばされた。

瓦礫の山の上から吹き飛ばされたが、一回転するようにして着地し、九本の尾を揺らしたコウが心配そうに擦り寄ってくる。そんなコウに、界羅は笑いながら頭を撫でた。

「キューン」

「俺は平気や。それより、予想以上やな『アヤメ』つてのは。少しおもしろくなってきたなあ」

そう言つて細い目を更に細め、楽しげににやりと笑った。

「さすが♪どちらも十分に怪物級だね。それにしてもあの狐くんだけど・・・」

モニターに映る様子を見る白蘭。二人の戦闘技能にももちろん興味津々だが、それよりも気になったのは、界羅のそばにいる九尾の狐。

実を言うと、空想上の生物を匣で再現することは、可能か不可能かで言えば可能である。昔から、架空の生物は何かの生物が進化した姿、もしくは複数の生物がかけ合わせられた姿とも言える。ドラゴンは爬虫類に羽をはやして進化させた姿、という考えもある。だがそう単純にできるほど簡単でなかったのが匣兵器だが、ミルフィオーレの最先端科学はそれすらも可能にしている。

といっても、さすがに大量生産可能というほどに簡単な代物でなく、そうそうなんでも作れるわけでない。ミルフィオーレにだってそんな匣は1つくらいしか存在しない。にもかかわらず、目の前にいる狐。

そもそも本当に匣兵器なのか、それとも本物の妖怪か？

古来より妖怪が住まう、とは言うが、本当に見たものなどいない。ただの人が想像しただけなのか、それとも実在するのか。

考えればキリがないが、一先ずあの狐は本当に匣平気なのか、最初から二人の戦いを見ていたわけでない白蘭なので、そこまで安易に判断はできないが、目の前のモニターに映る生物に好奇心を向ける。

「やつぱり彼を連れてきて正解だった。おかげで彼にたどり着くまでに結構兵隊がやられちゃったけど、いいもの見れたしね♪」

墓造会は、ミルフィオーレファミリーに入ったというわけではない。だが、いくらかの取引や条件等で、戦力を少し借りている。

10年前から得体のしれない墓造会だが、白蘭の能力によってある程度だけだが分かり、接触をすることに成功した。もつとも、この成功になるまでいろいろと問題などが大量にあったことは言うまでもない。おかげで白蘭の言うとおり、ミルフィオーレの戦力の一部を削られるハメになったというが、それはまた別の機会の話。

「しかし、やつぱりあれは彼らが持つてるのかな……」

一瞬、ぞつとするような笑顔と、威圧のある瞳を貼り付けた表情を出したが、すぐに霧散させてさきほどまでの楽しげな笑みを浮かべた。

「ま、今はいつか。しかし、彼らが戦ってるんじや、あそこに兵力は送り込めなさ

そうだし。もう少し見てようかな♪まだまだ10日もあるしね」

そう言って、手元の袋からマシユマ口を取り出して一口食べ、机に置かれている

ジュースを一口のむ。

楽しんで笑う白蘭は、再び深くソファに座りなおすのだった。

場所は戻ってメローネ基地跡地。

畳の上でちやぶ台の周りを囲む光努、リル、コル、入江、スパナ、そしてツナのヘツドホンから照射されるホログラムのリボーンの計6人。

いつも明るる者も中にはいるのだが、今は微妙に空気が沈んでいた。

その原因は獄燈籠。

光努と共にこの基地へと侵入し、入江は丁度白蘭の紹介で来た界羅と基地を動かして戦わせた。二人の戦いも見ていたが、他の所でもっと重要な事、ツナの発見やリルとコ

ルの出現等もあり、すっかり獄燈籠と界羅の二人の戦いをほうっておいたが、その為、途中からすっかりと忘れていた。

そしてメローネ基地が転送され、今に至ってようやく思い出したのである。

「……君たちが来て舞い上がって、すっかり忘れていたよ。あの二人の事」

顔を伏せて語る入江だが、その頬を冷や汗が伝っていた。

「メローネ基地はどこに飛ばされたのかわからないのか？ 正一」

「いや、僕も超炎リング転送システムがあるとは知らなかったし、白蘭サン的事だから邪魔にならない海の上の無人島とかに転送したんじゃないかな。メローネ基地って大きいから場所によつては大惨事だし。さすがにそこまで白蘭サンもしいと思っからさ」

確かにメローネ基地は現在ミルフィオーレの作り出した人工島に落とされているが、さすがに入江正一、どんぴしゃり。長年白蘭と一緒にいただけのことはある。お互いの性格や思想は結構理解しているみたいだ。それがいいことなのかどうなのかは知る由もないが。

「でも籠だし、大丈夫じゃないの？」

リルが割と無邪気に言うが、光努やコルからしてみれば確かにそう思う。

光努は獄燈籠と一週間程しか一緒にいなかったが、その実力の高さは割と理解した。

刃物や銃火器の扱い、他にも罨作りに関してはトップレベルである。さすがイリスに

設置されている罾や、黒曜組特訓で行った獲洞山の凶悪な歯車の罾を仕掛けた張本人といえよう。それにその身体能力も光努から見ても常人を遥かに超えていた。

本当に老齢なのかと思ってしまうほどに。

入江も確かに『アヤメ』である獄燈籠の強さは理解しているが、それよりも入江は、界羅のことが不安の一つだった。

「彼と戦っている界羅っていうのは、墓造会の一人で『天狐』と呼ばれているんだ。彼らの実力は、光努くんなら知ってるんじゃない？」

そう言う入江の言葉で光努が思い出すのは、かつてボンゴレ10代目候補を決めるリング戦に乱入してきた3人の人物を思い浮かべる。風のように現れて、風のように去っていった、『暗殺者』アドルフォ、『棟梁』ウィーラ、『道化師』ジャンピエロの3人。「といつても、俺はアドルフォしか戦ってないからな。結構面倒だけど、籠なら倒せない事ないんじゃないか？」

もつとも、神器を持っていたウィーラならどうなるか、神器というものをそこまで知らない光努には判断できないが。

「界羅は墓造会の中で二人いるNo. 2の内の一人。はつきりと言ってしまうえば、6甲花よりも強いよ」

6甲花といつても、入江のように完全に戦闘タイプ出ない人間もいるため、一概に何

とも言えないが、それでも入江の言葉には説得力があり、実力の高さは伺える。

「けど墓造会って10年前は謎だらけの組織だったらしいけど、この時代はもうほとんど解明されてるのか？」

「いや、白蘭サンがどうにかしてコンタクトをとったらしいけど、僕もそこまで詳しいわけじゃないんだ」

この時代で起こっているありえないことの数々は、白蘭が原因と入江はツナ達にも言った。確かに、この時代に置いて科学技術によって全てが説明がつく、というわけではない。奇跡、偶然、など、ありえているが、ありえない出来事。この墓造会とのこちらからの接触も、本来はありえないことの一つであった。

どういう手段で居場所を掴み、連絡をとって、さらには一人借りる、なんてことはほとんど10年前ならほぼ不可能に近かった。

「へえ〜。白蘭って結構すごい人だったんだね」

素直に感心しているリルだが、入江はなんと答えていいものか苦笑いしている。

「けどどうする。籠ならそうそう負けはしなないと思うけど、どうにかして回収しないと」
コルはそう言うが、現状中々難しい。獄燈籠が今どうしているかもわからないし、どこにいるかもわからない。沈黙する彼らの中、ルイの操作するノートPCのキーボードの音だけが広い部屋に響いた。そして唐突に止まったキーボードの音とともに、ルイが

顔を上げて黙っていた口を開いた。

「よし見つけた」

『どーしたんだルイ?』

「籠を見つけた。太平洋に浮かぶミルフィオーレ所有の人工島にいるな」

「はやつ!」

いつの間にやら、入江も驚き、ルイが反転させて皆に画面が見えるようにPCを置くと、そこには世界地図の太平洋に浮かぶ赤い点と、そこから伸びる小さな画面には、獄燈籠と界羅の二人が瓦礫の上にいる映像が映っていた。

「二人が来たとき、念の為に発信機をつけてあったんだ」

「てことは俺にもついてるのか?」

「もち・・・いや、籠だけだ」

「今絶対にもちろんって言おうとしただろ」

「うわあ、本当に太平洋のど真ん中。こんなところに島なんてあったっけ?」

「多分、白蘭サンの作った人工島だね。この瓦礫はおそらくメローネ基地みたいだけど、ていうか二人とも戦ってるの!?!転送されてからも!?!」

入江はとて驚き、よく驚くなくと思っっている全員だが、確かに驚きである。転送してから戦い続ける二人に、というかまだ決着つかなかったのか。

「しかし、これが界羅か。顔を晒してる奴は初めて見たな」

光努のポツリとしたほんの感想だが、入江は少し目を細めた。

(確かに、10年前はまだ隠さざるを得なかったみたいだしね)

ノートPCを見ながら、さてどうしようかと相談する皆。

場所はわかったのはいいが、ここから2500キロも離れた人工島。通常の手段ではそこまで行くのにどれだけ時間がかかるか。

「皆、その心配は大丈夫だ」

大丈夫、というルイ。その言葉は嘘でもなんでもなく、本当に大丈夫、既に手は打つてあると言わんばかりに自信に溢れている言葉。冷静な表情でそう言うルイは、キーボードを操作している手と反対の手で携帯を取り出し、その画面を見せた。

画面に移されている、『灯夜』の2文字。

「すでに連絡はした。時期に迎えがつく」

『太平洋まで迎えに来て』

太平洋。

世界三大洋の一つであり、他の大西洋、インド洋と比べたら面積が一番広い。地表の3分の1を占め、なんと世界の陸地より広いとか。

1520年に、探検家のフェルディナンド・マゼランが、世界一周の途中で南アメリカ大陸南端の海峡を抜けて太平洋に入ったとき、海が荒れていた大西洋と比べて穏やかだったことに「*El Mar Pacificum*」と表現したことが、太平洋という名の由来だとか。

そんな豆知識はどうでもいいが、今のこの海は穏やかな波をたて、その空は所どころ浮かぶ雲と、蒼海の海を映し出したような青空が広がっている。うみねこも優雅に飛び、まさに平和な海そのものであった。

ゴウ!!

海の上を飛ぶうみねこの上を、一瞬黒い巨大な影がよぎった。

だが特に騒ぐ素振りも見せず、優雅に飛び続けるうみねこ。野生の生物に一切の警戒心も抱かせず、それほど素早く、巨大にもかかわらずに一瞬しかうみねこのそばをよぎらなかつた影。既にうみねこのいた場所を遙かに通り過ぎ、その海の上を雲に触れながら超音速で飛行していた。

全体が黒く塗りつぶされ、所々に白いラインの走った異様な形状の漆黒の機体。飛行機というより、この形状は明らかに戦闘機。

嘗て戦時中、アメリカによって開発された高高度戦略偵察機、ブラックバード。

このご時勢、なぜこんなものが存在しているのか、そんな機体に乗っているのは、一人の男だつた。

亜音速で進む機体。次第に前方に見えてきたのは、島。

島というより、瓦礫をそのまま海の上に浮かべたかような歪な形状、というより本当に瓦礫が積まれた島。瓦礫の山の下が平らなコンクリートであることから、最初から存在する島でなく、人の手によって人工的に作り出された人工島であることが伺える。

風と空気を切り裂き、上空を飛ぶブラックバードは、真つ直ぐにその島へと向かうの

であつた。

白蘭は、ポツプコーンを取り出しながら映画気分で獄燈籠と界羅の二人の戦いを、ミルファイオーレ本拠の一室で見ていた。

メローネ基地を超炎リング転送システムによつて人工島に飛ばしてからも、基地の中から外へと出てきて戦い続けていた。激しい戦いを繰り広げているにもかかわらず、どちらにも衰えるようすの見当たらない、底なしの体力。

「うーん、僕も人のことは言えないけど、彼らもたいがい常識はずれだね」

本当に人と人の戦いなのかと疑いたくなる程のデータラメぐらい。世界の支配者であるミルファイオーレのボスの白蘭にここまで言わせるとは、中々に凄まじい。

『白蘭様、失礼します』

そうしていると、別のモニターが現れ、そこに部下と思わしき男が白蘭に通信を開いた。面白い番組を見ている時に母親に呼ばれた子供のように若干面倒くさそうにしていた白蘭だが、すぐに飄々とした笑顔に戻り、モニターとの通信を行う。

「どうしたんだい？」

『はっ！実はメローネ基地に未確認飛行物体が接近しております！』

「未確認飛行物体？んん、モニターに映してよ」

『はっ！』

部下の映っていたモニターが消え、代わりに別のモニターが映る。

メローネ基地と言っているが、部下が指しているのは、瓦礫の山となって戦場とかがしている元メローネ基地の事。基地を中央に置いたと思われるレーダーがモニターに写り、そこにピコンピコンと赤い点滅が近づいていく。

そして小さなモニターが隣に映り、そこに写っていたのは、異常な形状をした真っ黒な戦闘機。

「あれは、ブラックバード？。確かイリスの所有物だったけど……うん♪あれはほうって置いてもいいよ」

『迎撃しなくてもよろしいのでしょうか？』

「うん。10日は手を出さない約束だからね。それに、どうせお迎えにきただけだし」

そう言ってレーダーから目線を外し、再び戦い中のモニターに目を向けるのであった。

ガアン！ガアン！！

対峙する獄燈籠と界羅だが、獄燈籠は腰の後ろのベルトに備え付けられていたホルスターから一丁の拳銃を手にとった。

獄燈籠が手に持った自動拳銃は、オートマチックピストルデザートイーグル。

自動拳銃では最大の50口径であり、アサルトライフル並の威力を持った弾丸を吐き

出すことが可能であり、威力は極めて高い。

界羅は迫り来る弾丸を、小太刀に滑らせるようにして受け流して躲す。

だが、弾丸が瓦礫の隙間に入ったとき、そこか赤い炎を含む爆炎が打ち上がった。

獄燈籠は、ナイフや銃、爆弾等の様々な武器を使い相手を翻弄しつつ、高火力で攻めるスタイル。小型の爆弾を、戦いの最中瓦礫の隙間に落としておき、あとから打ち抜き爆発をあげる。しっかりと界羅が爆弾の入った瓦礫の上に来たのを確認した上での発泡と、界羅がそれを受け流すことも予測して跳弾先を爆発物地点に送り込むなど、その技量は高かった。

大口徑デザートイーグルの弾丸をあつさりを受け流す界羅も、十分化け物じみているといえれば化け物じみているが。

迫り来る爆炎が、界羅を飲み込もうとする。

「天火流、かかざん 火火斬！」

揺らぐ炎と炎の隙間。全てが炎の塊と思える爆炎に、その小太刀の刃を滑らせるように差込み、神速の太刀筋によって、その爆炎を切り裂いた。

「せやっ！」

小太刀を振り、通常の刀よりも短いリーチなどものともせず、爆炎を細切れにしていき、小さくなって空気に触れる炎の塊は、すぐに霧散してしまった。いくつもの爆炎

を、体を回転させるようにして小太刀を振り、炎を切り刻む。

（火を切り裂く剣技。天火流とは、聞かぬ名じやのう）

長く生きてきたが、獄燈籠の知識の中には様々な戦いの知識がある。その中には、剣や槍、弓矢や薙刀など多くの武器の流派などもよく知っている。だが、この世界には、伝統とともに代々受け継ぐ昔ながらの流派もあれば、才ある個人が独立に作り出した新たな流派も存在するため、自分の知らない流派があつたとしてもなんらおかしいことはいない。

「クアア！」

九尾の狐のコウとお互いに威嚇して牽制していた大鷲のフゼが、獄燈籠に何かを知らせるかのようにならぬように一声鳴いた。

その声を聞いた時、獄燈籠は懐から匣を取り出し、蓋が開くと同時にフゼは炎の塊となつて匣の中へと収納された。その光景を見た界羅は、楽しげに笑みを浮かべる。

「おいおい、匣しまつてどうないしたんや。降参か？」

口角を上げ、小太刀をチャキリと構える。威嚇対象がいなくなつたコウは、その四肢で大地を掴み、獄燈籠に向かつて身に纏う炎を揺らしながら威嚇を行う。

実力が拮抗するような相手だと、匣の有り無しで勝敗が変わる。だが獄燈籠はそんなことを知らないわけではなく、ただ必要がなくなつたからしまつただけ。

「いや、割りと早い、迎えがきてのう」

「?.....!!」

突如、二人を覆うように少し広めに降りかかる黒い影。

いきなり現れた影の出現に、界羅とコウは上を見上げると、そこには滞空している機械。

異様な形状をしている、所どころ白いラインの入った全身漆黒の戦闘機。

「なんでこないな物がここに?.....あんたの所のか」

界羅の質問に、獄燈籠は無言だが笑ってその質問に肯定の意を返す。

そうすると、戦闘機の下の一部が開き、そこからすると先端に輪っかが備え付けであるワイヤーが獄燈籠のそばまで降りてきた。

輪っかに足をかけ、ワイヤーを掴むと、ゆっくりと上へ上と上がっていた。

「コウ、邪魔したれ」

「クア!!」

吠えるコウの尾から野球ボール大の風の炎の塊がいくつも飛び出して、ワイヤーで上昇中の獄燈籠の元へと迫る。が、器用にワイヤーに手を掴んで動いたまま火球を避ける。まるでサーカスの曲芸師のようでもある。

「コウ」

パチンと軽く指を鳴らして指示すると、コウの瞳が鋭く光ったような気がした。すると、飛び出していった火球が空中で停止して、一斉にワイヤーで上昇中の獄燈籠へと向かっていった。

（あの火球、操ることができるのか。結構厄介なやつだったんじゃないなあ。さて、どうしたものか）

「ネロ、落とせ」

ワイヤーの伸びる開いたハッチの奥から、男性の声が聞こえた。そうすると奥の暗闇から赤く光る瞳が火球を睨み、白く光る牙の奥から、地の底から響くような咆哮が当たりに響き渡った。

「!!……はは、やってくれよったなあ！」

笑い声をあげる界羅の瞳に映るのは、石となつて落ちる火球！

少しばかり驚く光景に魅入ってしまった、気づいたら獄燈籠は戦闘機の中へと収納されたが、さほど気にする様子もなく、主の期待に応えられなかったからか少し落ち込み気味の表情をしているコウの頭をなでる。

滞空していた戦闘機は一瞬でその姿を消し、空気を切り裂きながら人工島から離れていったのだった。

「ふふ、ええもの見させてもらったなあ。次に会う時が来たら、楽しみや♪」

人工島の瓦礫の山の上。誰もいなくなつたその場所で、界羅は一人楽しそうに笑うのだった。

「いやはや、随分と早かつたのう」

「ルイからの場所の割り出しが割りと速く終わつてな。太平洋のど真ん中だから見つかるのも楽だつたしな」

操縦桿を握つて前を見ながら隣に座る獄燈籠と会話しているのは、大人の男性。

黒髪と黒い瞳に、黒いスーツを着た男。10年前からその出で立ちは変わらず、どう見てもこの場で戦闘艦を握っているような仕事をする人間とは思えないが、事実普通は戦闘機を操縦する者の方が少ない。

当主がいなくなったイリスファミリーにおいて、ボス代行を務める男、黒道灯夜。

「しかし灯夜、その格好でここまで来たのかい」

「ん？俺はいつもこの格好だが」

「そう言う意味じゃないんじゃないか」

ちなみに、通常戦闘機を乗るに当たり、超加速する分には多少の問題ないが、急旋回をしたりすると激しいGがかかり、かかり方の方向によつては人間の脳にうまく血が回らず、視界がブラックアウトすることもあるので、下半身に空気を当てて上半身の血の量を増やす為の耐Gスーツというものや酸素マスク等の装備が通常必要なのであった。

もともと、某国には無装備でそのまま戦闘機に乗って急旋回などのアクロバット飛行をするチームもあつたりなかったり。

それでも普通はスーツで操縦はしないのである。

「それでどうじゃ。光努は無事にリルとコルと合流できたのか？」

「ああ。ルイから連絡あつたからな。尤も、籠がまさかこんなところに取り残されているとは俺も思わなかつたがな」

「はっはっは、耳が痛いもう。確かに戦いに夢中だったのは認めるがな」
カラカラと笑う獄燈籠。

確かに、立場的には光努の方が役職が上だが、年齢的にはどこからどう見ても獄燈籠の方が引率者。なのにその人物がいなくなるなど、本末転倒である。灯夜もなかなか呆れている。

「まあいい。俺たちはこのあといくつか寄るところがあるから、光努達と合流するのはもう少しあとだな」

「ふむ、では行くとするかのう」

灯夜と獄燈籠、二人を乗せた戦闘機は、雲の上を駆け抜け、次の目的地まで飛ぶのだった。

「お、灯夜から連絡だ。籠は無事に回収したそうだ」

ノートPCのキーボードを打つルイの言葉に冷や汗を流していた入江はホツと安堵の表情を出す。

ミルフィオーレの索敵圏内に戦闘機で突っ込んで獄燈籠を回収するという話を聞いたときは、普通に迎撃されたりしないかと入江も心配したが、どうやら白蘭の言っていた10日間手を出さないとするのは確かに本当である。別に信じていなかったわけではないが、やはり疑心暗鬼になってしまうのはしょうがない。

「そっか、じゃあ当面の問題も解決したことだし、」

どっこいしょという風に光努は立ち上がる。そして湯呑に残っていた微かに湯気の残る茶を一息に飲み干し、ちゃぶ台の上に湯呑置いた。

「光努くん、何処へ行くんだい？」

「ん？まあチヨイスの話も聞いたし、寝る」

「え？光努くん、君って寝るの？」

「・・・正一、俺をなんだと思ってるんだ」

光努が寝るといふ発言に心底驚いたような表情に光努は呆れた声を出す。

別に光努は不眠不休でいつまでも動き続けられるぜ！というわけではない。確かに

体力など無尽蔵で底があるのかもどうか怪しいほどだが、それでも寝るときは寝るし、食べるときはきちんと食べるのである。一通りチヨイスについては入江に聞いたので、光努も夜中から戦いに参加したから今日はもう寝ようかとしても別に不思議でない。ツナ達ボンゴレ側も絶賛爆睡中のはずである。

「ふわあ、私も寝ようつと」

「僕も寝るよ」

ぞろぞろと立ち上がって荷物を持ち、出口に向かう光努とリルとコルの三人。ルイは別に戦っているわけでないし、まだやることもあるらしいので今のところは入江達と一緒にいるそうだが。

「ルイ、詳しいことは明日聞くからよろしく」

「ああ。今日は三人ともゆっくり休め」

「どこで寝よつか」

「僕は布団で寝たい」

「じゃあ恭弥の所が一番近いからそこで寝るか」

何やら堂々とお邪魔してなおかつ布団を借りる気満々の相談ごとに、聞いている入江はあははと苦笑いをするのであった。

『青空の休日』

チヨイス！その意味は、『選択』。

チヨイスとは、その名の通り選択をするゲーム。

まず2軍に別れ、戦いの基盤、戦上となる土地フィールドを選択する。

それぞれ実際に戦う者となる兵士ユニットを複数選択し、チームを作る。

この二つは開戦前には選択しておき、もしも選択した兵士ユニットの数を揃えることができなければ、その時点で不戦敗という結果になる。

土地フィールドの形は様々、砂漠や森や廃墟といろいろあるが、大きさは直径10キロと決められている。

次に、互いの兵隊の本陣となる基地ユニットを選択し、選んだフィールドに設置する配置を選択する。この基地ユニットは、50立方メートル以下なら自分の資金で好きに設計して作り、使用することが可能である。

そして全て選択し終えたら、兵隊ユニット同士が戦闘を行い、勝敗を決める。

この時の勝敗には、いくらか複数存在するルールを選択する。

そして勝者は報酬として、敗者の所有物から好きなものを一つ選択して奪うことができる。

まさに、限られた範囲内での戦争、局地戦を再現したゲーム。

これが、大学時代に入江正一と白蘭の二人が作って遊んでいたゲームであるチョイス。

もともとはボードゲームであったのだが、入江が思ったよりもゲームにのめり込んでしまい、武器や土地、設定を多く増やすぎた為にボードゲームからコンピュータゲームになっていき、最終的には、フィールドを自走する巨大要塞が画面の中を走り回るといふ、何とも言えないことになったという。

今回このチョイスでイリス、ボンゴレ、ミルフィオーレの戦いを行うに当たり、現実には当てはめるとする。

実際に戦闘を行う兵士ユニットは、それぞれのファミリーの人間。光努やツナ達と、匣やリングで武装した兵隊。

フィールドの大きさである10キロは、丁度並盛町がすっぽりと入るほどの広範囲。もしもこの場で戦闘を行うとしたら、リング争奪戦のフィールドである並中より遙かに広く、それに伴う機動力も必要となってくる。

「らしいけど、意外と考えるのが面倒だな。10キロとか範囲広すぎ、白蘭もなんでチョイスなんての作ったのだろうか。よしスターだ」

「作ったのは正一でしょ？あ、そういえば二人で作ったって言ってたね。やった、金のキノコだ」

「しかもそのあと正一がのめり込んだらしいから設定が増えたとも言っていた。あ、抜かれた」

場所は、ボンゴレの地下アジトの隣に存在されている、雲雀恭弥率いる風紀財団のアジト。ボンゴレ基地と違い和風建築な箇所が多く、今いる部屋の中も全て畳が敷かれている。扉は障子と、なかなか和風テイストで落ち着いた雰囲気。

恭弥の趣味がよく出ている。

そんな場所にいるのは、俺とリルとコルとルイの4人。

ルイは机の上にノートPCを置いてカタカタと何かの作業をしているが、俺とリルとコルの三人は隅に置いてある大型のブラウン管テレビでテレビゲームをやっていた。

この室内に対してわざわざこのテレビをおいたのかと思うと、なかなか恭弥も拘っ

ている。四角いオレンジ色のゲーム機から伸びるコードの先のコントローラーを両手でもち、忙しく指を動かしてボタンとスティックを動かしている。

ちなみにやっているソフトはマ○オカートのダブルダッシュである。

この時代だと結構貴重らしいが、コルがなぜか持っていた。

宇宙空間に漂う虹色のコースの反転したミラー版で対戦をしている。

「て、おい！今羽根つきのコウラ飛ばしたの誰だよ！ゴール前で転倒したぞ」

「はい、わったし〜♪やった、1位！」

「二人共早いね」

1位が決まって軽快な音楽がテレビから流れてくる中、少々残念そうにするコル。

画面では大いにリルの選んだ『姫チーム』がコースを悠々と滑走していた。

ゴール直前で妨害された瞬間に抜かれたよちくしよう。

「それで三人とも、チョイスはどうするつもりだ？」

カタリ、とキーボードの手を止めてルイが聞いてくる。

確かに、どうしようか。戦う兵隊ユニットは俺らが行くけど、もしもチョイス時点で

自軍の兵が揃わなければ、おそらく白蘭は通常通り不戦敗扱いにするだろう。

一体どの程度の兵士ユニットの数が決められるかもわからないが、そこは常識的な数

値のはず。まさか自分が困らない一気に100人で戦う、なんてブツ飛んだことはしな

いだろうと正一も行っていたから。性格は結構冷徹だけどチョイスには誠実だったてね。

一 先ずゲームの電源を切って、ルイの座る机の周りを囲むように俺たちも座る。ついでに壁に設置されている桐箆箆からお菓子を取り出して机の上でくつろぎ始めた。

「正一の予想だと、今回現実でするチョイスは3軍で戦うんだよな」

イリスファミリー、ボンゴレファミリー、ミルフィオーレファミリー。この3ファミリーが戦うに置いて、チョイスはこの時だけ変則的になるだろうと入江は予測した。

通常、正一と白蘭が自分たちで暇つぶしに遊ぶように作ったゲームの為、1対1が基本のゲーム。が、あくまで基本ということなので、3人でやれないこともないというのが正一の意見。確かに普通に考えれば、尤も現実的なのはそうだろう。

ただ決闘が、バトルロイヤルになったと考えれば楽だ。

「当面の問題は、基地ユニットか。自分で作れと言ったけど、どうしようか」

「そもそもどこに作ればいいのかもわからないよね」

戦うフィールドを選択すると^{チョイス}言っても、どこで戦うかも知らない。

よくよくと考えれば、10日の準備期間があるといつても、わからないことが多すぎる。情報の提示が少ない。

まあでも基地作って兵士用意すればオツケーらしいから、10日以内で基地を一先ず

作るとするか。

「基地の方俺が作っておくから、リクエストがあるなら聞かすぞ」

カタカタと相変わらず指を高速で動かしてタイピングをするルイ。なんか10年後のルイがなかなか頼もしく見えるな。10年前もこれくらいやってくれるならいいんだけど。技術力はすごく高いけど面倒くさがりなのが問題だよな。いや、別に10年まえのルイがダメというわけではないのだが。なんか知らないが10年後のルイは割りりと作業に積極的だ。なぜか？興味の範囲でも増えたのかな？

今回は基地ユニットを担当してくれるなら、こっちは兵士ユニットらしく装備を整えるところか。といっても、俺は整えるような装備など、今はフィオーレリング以外に持っていないのだが。

「でも基地って実際に使うの？」

戦士がそれぞれ戦うということは、基地はあってもなくても同じではないのか、という意見も出るが、戦争になると拠点は割りと重要にもなる。が、短期決戦になるのであれば、拠点というより作戦司令室を作るという感じ。指揮官となる人物が、前線に出ている兵隊に指示し、全体図を見ながら作戦を立てる場所、という意味での拠点。

が、指揮官といっても部隊のリーダーを率いて全員で前線というスタイルもある。となれば、基地はあってもなくてもいいような気がしてきた。尤も、戦いが長期戦になる

というなら寝泊りできる用意も欲しい所だが、割りとどうでもいい。あとはどんな形でどんな機能をつけるか。戦場になるのなら頑丈性や攻撃性を高めた拠点があつた方がいいいな。

「ま、そつちはおいおい考えるところとして、ツナ達の様子でも見てこようかな」

「ツナ達？ そういえば今日はお休みらしいね」

リルの言う通り、メローネ基地襲撃の次の日なのだから、さすがに今日も修行ではツナ達が持たない。逆に修行してたら賞賛する。

リルとコルとルイが和室でゴロゴロしているのを横目に、魅を開けて廊下を歩いていくのだった。この部屋のある恭弥のアジトとボンゴレアジトは頑丈な扉一枚を隔ててつながっているの、廊下の先にある扉を開けて一歩進めばあつという間にボンゴレ基地。

なんで恭弥は群れるのが嫌いなのにわざわざ繋がるように作ったのか、というかどつちが先に基地を作つたんだ？ 並行してか？ 念の為か？

とまあ考えてもしようがないので普通に歩く。

歩いていて思ったが、今日はやけに静かな気がする。

元々広い基地だし、人がいないところの方が多いといえは多いが、いつも廊下を走り回るランボやイーピンもない。と思つていたら、司令室から人の話し声が聞こえた。

司令室といっても、俺がそう思っているだけで違うのかもしれないが。会議用の長机と大きめのモニターが壁に設置されているから会議室から司令室でいいよな？

中を開けて入ると、その中にいたのは4人の人間。

メカニックのジャンニーニと、情報収集担当のフウ太に、机の上に置いてある機械の上に乗っているリボン。そしてバジル・・・バジル？しかもよく見れば10年前のバジル。多方ツナ達と一緒に10年バズーカでタイムスリップしてきたのだろう。

「よーバジル。一週間ぶりくらい？いやもうちよつとか」

「光努殿！こちらに来ていたでござるか」

どうでもいいが光努殿って言いにくくないかな。どどつて繋がってるし、でも俺は名前のほうがいいからほっておくけど。

「昨日は見なかったから、今日この基地に来たのか？」

「ええ、拙者は10日程前にこちらに来て、スペインからつい先日日本に到着したのです」

聞けばこの時代に来たとき、そばにあったのは匣とリング一つずつと自分のパスポートがあっただけ。そしてもう一つそばにあったのは、『助太刀の書』と呼ばれるボンゴレの死炎印の付いた昔の手帳のようなもの。

中にはこの時代における匣兵器とリングによる戦い方と、このボンゴレ基地までの

ルートが記されていたので、なんとか道中のミルフィオーレの兵隊を撃退しながらここまで無事に来れたらしい。

しかしルートの書いた地図があつたとは言え、来た先でパスポートと匣だけでスペインから日本まで来いとは、なかなかスパルタな。門外顧問組織に属しているバジルじゃなかつたら不可能だつたぞ。いや、バジルだからこのルートを10年後のツナたちは選んだのか。10年後のツナと恭弥はいないことだし、バジルの代わりに正一とルイをとつちめてやろうかな。うん、そう考えると何か楽しくなってきた。

「お前も苦労してんだな」

「えつと光努殿？どうしてそのセリフでそんなに楽しそうな笑顔を浮かべてるのでござるか？」

「ああこつちの話だから気にするな。それよりどうだ、チヨイスについて何か進展あつたか？」

「まだだな。今は入江とスパナとジャンニーニがチヨイス用に機動力と基地を開発中だぞ」

機械の上に乗っていたリボーンがぐるりと飛び降りて椅子にぼすりと座る。

どうやらこの機会、ホログラムとしてツナのヘッドホンから映像を投影するための機

械らし。さつきまで正一とスパナのところに映像を送っていたそうだ。

「光努達はどうするんだ？ チョイスは基本2人プレイだけど、今回は3人プレイみたいだからな」

「ああ、基地の方はルイに任せてる。あとは、兵力と装備でも整えるかと思ってる」

戦う兵士の数がどれだけ必要かもわからないからな。常識的な範囲で揃えるところ。ま、兵士をどうやって選択するかはあらかた想像尽くし、いざという時には裏技あるからそこはいつでもなるからよしとするか。

「そういえばツナ達は？ 見たところほとんどいないようだけど、地上でも行ってるのか？」

「ああ、今日は休みだしな。あいつらは羽を伸ばしてるぞ」

「光努兄は、さつきまで何してたの？」

椅子に座るフウ太。そういえば10年後のフウ太はでかくなったな。普通にツナよりもでかくなったし。俺の身長超えたし、リルやコルもいつの間にか俺と同じくらいだから、子供の成長は速い速い。いや、10年たってるからこれが普通か。

「リルとコルとマ○カしてた」

「……あ、そうなんだ。楽しそうだね（というか随分懐かしいゲームを）」

フウ太、笑顔を浮かべてるけど呆れるなら呆れてもいいぞ。

別に今ゲームをしても本当に意味はないからな。

「じゃ、俺も地上行つてこようかな」

「どこに行くのでござるか？」

「そうだな、恭弥が並中にいるだろうし、並中でも行くか」

ついでに言うと、ツナ達も何か並中によりそうな気がするからもしかしたら合流できるかと思つているが、そうそう偶然が起こることでもないだろう。

恭弥のアジトには誰もいなかったから、恭弥が並中にいるのはほぼ間違いないな。もはやあそこはあいつの家だ。

「つーわけで、まったなく」

ひらひらと手を振り、司令室を退室するのであった。

「青い空、白い雲。穏やかな空に、並中は変わらんないな。10年たっても増改築してないとは」

校門、校舎、校庭、中庭。

どこもかしこも10年前と同じ外観。対して壊れもせず、風化もせず、そこにたち続けている。

そういえば10年前にリング戦で一回ポロポロになったからその時に頑丈に工事でもしたのかな。まあ無事に立っているのはいいことだ。

さて、恭弥のことだし、いい天気だから多分屋上で寝転がってるだろうな。

と校舎内の廊下を歩いていると、向こうの角から見知った人物が歩いてきた。

もじやもじや頭に牛柄の服を来た子供であるランボ。

中国服に辮髪に細目の子供であるイーピン。

顔に大きめのゴーグルを付けた、隼人の姉である10年後のビアンキ。

ポニーテールにした黒髪に、毛皮の付いた上着と、白いワンピースを来た少女のハル。微妙に接点薄いチームがやってきた。

が、この4人がいるということは、他のツナ率いる並中組は自分の教室である2年A組にいるはず。よし、俺も行こうつと。

というわけで体を反転させて向かおうとしたら、後ろから肩を掴まれた。

「あら、そう逃げることもないんじゃないの？」

「光努さんじゃないですか。こんなところで何してるんですか？」

「……よー、ビアンキにハル。何って、俺もこの生徒だからな」

「はひ！そうだったんですか!？」

「なんだ、ツナ達に聞いてなかったんだ。ツナ達いるか？」

「あの子達なら、今は自分の教室を楽しんでるわ」

よしじゃあ早速やつらのところに乗り込むか。どうせならサプライズ感を出したいよな。よし！そう思い、早速自分の教室へ行こうとしたら、

「て、ストーツプ！光努さん！どこから行こうしてるんですか!？」

「え？どこって、インパクトのある登場がしたくてさ」

「それでなんで窓の外に行こうとしてるんですか!？」

愚問だな、至極単純なことだ。窓側から教室にはいる。な、簡単だろ？

「全然簡単じゃないですよー!！」

「意外だ、ハルはなんとなくだかもっとブツ飛んだ性格だと思っていた」

「結構あつてるわよ、光努」

「あ、やつぱり?」

「二人とも、ハルをなんだと思ってるんですか……」

ジト目のハルは置いておいて、鍵を外し窓を開ける。

開けた窓から、外の心地よい風が中に入ってくる。本当にいい天気だ。

窓枠に足をかけて、右手で窓枠の上を掴み、足に力を込めて窓から飛び出す。

後ろでハルが何か行っていたが構わん、そのまま右手を掴んだまま宙返るようにして窓の上にある校舎の出っ張りに足をつける。そしててくてくと校舎の壁沿いに歩き、ある地点に泊まって軽くジャンプし、別の出っ張りに手をかけて上がり、再び窓枠を蹴つてそのまま屋上の金網に手をかけて、屋上まで来る。

やっぱり高いとその分風が強いからいつそう気持ちがいい。恭弥がここで寝るのもわかるな。と思つたら向こうの屋上で恭弥が寝転がっていた。本当にいるとか、わかりやすいよな恭弥の動きって。

さてと、早速2年A組の上であろう場所に来と。

そのまま屋上の金網を超えて下に飛び降りる。そして窓の上にある校舎の出っ張りに足の甲を乗せて逆さにぶら下がり、窓の上の方から顔の半分ほどを覗かせて中を見ていると、自分の席に座っているツナと隼人と武と京子の4人がいた。

私服で教室にいるっていうのがなかなか面白い光景。

カラカラと気づかれないように窓を開き、窓枠の上に両手をかけてそのまま回転する要領で教室の中へと飛び込み、音と気配を立てずに軽やかに教室の後ろの方に着地し、

そのまますくつと立ち上がる。そして前を向いて座っている後ろの席の京子と武の横を通り過ぎ、

「!!」

そのままツナの横をも通り過ぎ、

「!!」

隼人の真後ろに来て、その肩を少し強めで掴んだ。

ちなみにこの間、音は一切出していない。

「よっ」

「うわあああ!!」

ガタガタガシャーン!!

自分以外他の3人は席に座って、席から立ち上がる音が一切していないにもかかわらず、肩に置かれた手に隼人は予想以上のリアクションをしてくれた。

机の上に片足を乗せて椅子を漕いでいた態勢も災いし、椅子から転げ落ちて机を倒し

ながら床の上に落ちて頭をぶつけた。

・・・うん、少しやりすぎたかな。

最初は普通に飛び込もうと思ったが、みんなして普通に座ってるからあえて一番前の隼人を驚かせてみたよ。

「隼人、ナイスリアクション！」

ブチ！

親指をグツと立てて隼人の顔の前に持つてくると、隼人の頭の中で何か切れたような音がした。

「てめえ！何しやがる！ていうかどっから湧いて出やがった!!」

「人を虫みたいに言うとは失礼だな。普通にその窓から音も立てずに入っただけだ」と

「この野郎！果てやが」

「うわああ！獄寺君ストロップ！それはまずいよ！ていうかそれ懐かしいね！」

隼人の取り出すダイナマイトを見てツナが止めに入る。

というか止める中にちよつと感想を入れるとは、ツナも少し成長したんだな。

あんまり嬉しくない成長だけど。

「光努！なんか久しぶりだな」

「といつても昨日ぶりなんだけどな。京子は何日かぶりだな」

「うん、久しぶりだね」

笑いかけてくる武と京子の二人。ツナは隼人を抑えるために慌て、隼人はダイナマイトを振り回しながら何か喚いているが、楽しそうだしいいか。

「あ、光努おかえり。丁度夕飯できてるよ」

風紀財団の地下施設であるアジトに帰ってきた光努が、最初にゲームをしていた和室の中へと入ると、畳の部屋の真ん中に置かれている木の机の上には、なかなか美味しそうな献立が並んでいる。味噌汁ご飯に魚と冷奴という風に、ザ・和食という食事が3

人分並んでいた。

机には既にリルとコルが席についている。

「あれ、ルイは？」

「先に向こうに行つたよ。僕らはもう少しこっちにいるけどね」

そう言うと、丁寧 hands を合わせていただきますといい、箸を手にとつて食べ始めるコル。リルも続いて同じようにいただきますをし、光努もそれに続いて座つて食べ始めた。

「今日は私が作ったの、美味しいでしょ」

「お、マジで美味しい。昔のリルの料理イメージって爆発オチだからな。方向音痴だったし」

「それって関係ないよね？ていうか今は方向音痴じゃないし」

「光努、一応言っておくけど今のは嘘だよ。正確には嘘ではないが自覚はしていない」

「うん、わかつてる。……味噌汁うまつ」

「二人共ひどい……えい、コルのお魚もーらい！」

「させるか、てい」

「やっ」

カカカカカカカ。

無駄に高度な技術で互いに魚を取ろうと繰り返す。だんだんと箸を持つ腕が残像を残すほどに素早く動き始めてきた。さすがリルとコルの二人。無駄に技術と身体能力の無駄遣いである。姉弟喧嘩というにはなかなか微妙ましい物を見るようにしながら、巻き込まれるのは面倒なのでスルーしようと思っっている光努は、普通に食事を続けるのだった。

「そういえば光努どこ行ってたの？」

「んあ？並中だよ。丁度ツナ達と合流した」

「ふーん。みんなどうだった？久々の休日みたいだったし」

そう言われ、ツナ達を思いだす。

過去へと帰る事を目標にして、メローネ基地に襲撃したが、結果、まだ未来に囚われのまま。次の戦いが本当の戦い。

みんな元気になっていたけど、戦いが終わっていないことに、どこか氣力を空にしている節が見えた。それもそうだ。俺のように別世界に慣れている奴の方が特殊で異常。普通は自分の知らない世界に来て不安にならないやつなどいないからな。

けど、並中に来たツナ達はみるみる元氣になっていく氣がした。元々表情は笑っていたが、心が満ちているという氣がする。何気なく過ごしていた日常が、たまらなく楽しいことだったと気づいたんだ。失ってから初めてわかるといいうが、その通りだな。

これでまた、明日から頑張れそうだな。

朝霧が深い森の中。

いきなりの場面転換だが、この場所はどこかの森の中。少なくとも日本国内であることは間違いない。木の根が地面を生い茂り、時間帯はまだ朝早く、おそらく午前5時前後であるからか、太陽もまだ少し低い。それに加えて霧が深く森の中を渦巻いている為、太陽の光も地面にまで届きにくく、周りは割りと暗い。時折聞こえるカラスのガアーという鳴き声が、暗い森の中にいつそう不気味な雰囲気を出している。

が、そんな雰囲気の中、そんなことなどお構いなしに楽しげに会話が聞こえた。

「昔こんな感じの霧だらけの森に入ったことあったんだけどな。歩いていたらその時霧の向こうから赤く光ったような瞳が見えてな、それで結構気になって近づいて行ったん

だよ」

周りの雰囲気よりも軽く話をする光努。

柔らかなような白い髪を揺らし、黒い上着を羽織りスタスタと木の根を踏みしめて霧の中を突き進む。

「うんうん、それで？」

楽しそうに笑いながら、話の続きが気になると急かす少女、リル。

艶やかな黒髪をリボンで短めのポニーテールに結び、丈夫そうな膝下程まであるブーツで地面を無数に這う木の根を器用に避けながら、光努の後ろを歩いている。

「なぜか荒い息遣いが聞こえてな、どう見ても小動物つて感じでもなかったんだよ」

「（しゃくしゃくしゃく）それで、結局なんだったんだ？大型動物？」

「あ、コル。私にも○まい棒一本ちようだい」

「俺も」

「コーンポタージュと辛めんたいことシユガーラスクがあるけど」

「なんでそのチョイス？私シユガーラスク」

「俺コーンポタージュ」

「ほい」

リルの後ろを歩いているのはコル。

柔らかな黒髪と、他の二人と違い、背中には少し大きめのバッグが背負われている。手に持って食べていた○まい棒とは別の○まい棒をバッグから出して前の二人に放る。うまくキャッチした二人はしゃくしゃくと食べ、先に食べ終わった光努は話を再開した。

「うん、テイリジノサウルスぽかった」

「けほっ！光努、それって確か恐竜だよね？」

「確かーメーター近い爪の長さを持つ、肉食恐竜だったと思う。名前の意味は、刈り取りをする爬虫類」

「多分それ。いや、結構爪が鋭くてさ、森の木をばっさばっさと」

「え、光努。それって実体験なの？」

「そうだけど」

「.....」

驚きと呆れの表情をする二人だが、光努の話だとそれもありそうだなあ、と思えてしまうのがすごいところ。まあ昔から光努は別世界に言っていたのを知っているリル達なら、納得するのは割りと早かった。

「それに羽で飛んでくるから結構手間取った」

「羽!?それって恐竜の話じゃなかったの？」

「あいつら早くてき。それに上空から火吐くから危うく山火事だ」

「火!? ねえ光努は何と戦つてたの!？」

「お、そろそろ見えてくるぞ」

光努が霧で視界が定まらないにもかかわらず、前方を見据えて楽しげに笑う。木の根の這う地面を歩き、森と霧の中に現れたのは、寺。

寺の周りにくつついて囲うような縁側がつけられ、反るような瓦の屋根。和洋建築の寺だが、通常大きな寺なら三門や他にも本殿、法堂、僧堂等いくつかの建物が門の中に組み合わせて置かれているが、そんな高尚なものでもなく、御神体を祀る本殿がぼつんと、森の中に溶け込むようにして置かれていた。

こんな不気味な森の中に建てられている為、木でできたその外観はどこどころボロボロと朽ちており、いつそう不気味さに拍車をかけている。

前方に不気味な寺を見据えて、光努、リル、コルの三人は目の前に立ち止まり、光努は楽しげに笑みを浮かべた。

「さて、宝探しと行くか」

『四神の扉・前編』

少し古ぼけた手帳を手にとって中を眺め、眼前のこちらも古ぼけている小さな寺を見据える。よくもまあ、これだけぼろぼろなのに潰れたりしないのが不思議なほど。

光努、リル、コルの三人は寺の中へと続く扉の前へと立った。

「この扉の向こうにあるの？」

「らしいな。情報不足でこの先の情報はないが、まあなんとかなるだろう」

そう言つて光努は扉に手をかけて開こうとしたが、手をかけたまま止まった。

その様子に疑問符を浮かべたコルは質問する。

「?どうした、光努」

「いや・・・開かない」

観音開きの扉をとつてを両手で持ち、開こうとしたがその扉はビクともせず、開かなかった。光努が少し力を込めてみるが、それでもビクともしない。

（鍵がかかっている……ってわけじゃないかな。全く動かない）

扉に鍵が掛かっている状態であれば、多少なりとも隙間があるため、ガタガタと揺れたりさせることくらいはできる。だが、光努が取っ手を動かしても、物音一つせず、まるで完全に寺と接着されているかのようにであり、すべてが一体化しているかのようにもあつた。

「……光努、ちよつとどいて」

そう言うコルは、バッグの中から取り出した、一本の日本刀。

黒塗りの鞘に収められた、程よい長さの刃。抜き放った峰は黒々とし、刃は鋭い銀色の光を放っていた。光努とリルは扉から少し離れるように移動し、コルはゆつくりと扉の前に立ち、日本刀を握ったまま、短く息を吐いた。

「——ふっ！」

ギヤアイイイーン!!

目にも止まらぬ速さで腕を振り、刀の切っ先を、扉と扉の間の隙間に突き刺すようにして刺突を放つ。

だが、少し触れたと思つたら、甲高い音を出しながら火花を放出し、はじかれるようにして刀を扉から離し、少し離れるようにして刀を鞘に収めた。

「堅い。というより、はじかれた感じ」

「コルの一撃で壊れないなんて、この扉って」

コルの剣撃なら鉄板だろうと貫く。にもかかわらず、まったくびくともしない扉。リルの言葉に、光努は当初この世界にきたときのことを思い出した。

脳裏に浮かぶのは、どこかの深い巨木の生い茂る森の中。

全体が石作りの不思議な洞窟。100年以上も前から存在するにもかかわらず、とても綺麗に仕上がった、明らかに不自然な場所。

光努の蹴りでも石は砕けることを知らず、その場にとどまる。通常有り会えない現象は、光努が手を触れた時だけ、独りでに開いたのだった。

この場所も同じような場所ではないのかと思ったのだが、先程光努は手を扉に触れたが、開く様子はなかった。

（ハクリの仕業か？なんにしても、あそこで必要だったのは………炎！）

首から下げたファイオーレリングを外し、チェーンを抜き取る。そして右手にリングを嵌めて、少し息をつく。

次第に、ファイオーレリングの中央部にはめ込まれた純白の石が輝きだし、石と同じ純白の炎がリングから吹き出した。

純白の炎がリングに灯り、白い光があたりを照らす。その炎を瞳に映し、リルとコルは魅入っていた。

「これが、ルイの言っていた光努の炎」

「……綺麗」

白い炎を放出したまま、扉に手を添えると、白い炎が扉全体を包み込んだ。

焼けているわけではない。水が染み込むがごとく、白い光が包み、その扉は少し古びた音とともに、独りずに開いた。

そして伸びているのは、奥へ奥へと続く廊下が見えるのだった。

「よし、開いた」

「便利だねえ」

「しかしこの仕掛け、昔ハクリに連れられた場所にもあつたな。どんな攻撃にも耐え、決して開かない場所」

岩盤を砕く脚力を持つ光努の蹴りにも耐える仕掛けと呼ぶのかわからない石の部屋。

ハクリがアルコバレーノと同じであれば、この時代に存在する非^{ノントウリニセツテ}7・線の影響を受け

てる可能性もある。だが、おそらく光努が存在しないこの世界において、おそらくハクリも存在しないというのは妥当。だとしたら、この時代のおしやぶりはどうなっているのか。案外もしかしたら、ハクリも光努と同じでこの時代に来ていたりして。

(ま、ハクリは何をしでかしても不思議じゃないけどな)

少し自由すぎる友人にため息をついた光努だが、まだ犯人と決まったわけではないと思

い、割りとすぐに気を取り直して、眼前に出現した廊下を見据える。光努達の目的は、おそらくこの先まっすぐに存在する。

「よし、行くか」

光努が扉をくぐり中に足を踏み出し、リルとコルも寺の中へと入っていたのであった。

ギイイ。

鶯張りのように、どこか古びた木の音。ちなみに鶯張りとは、古来の城や屋敷など、木造建築の建物において、侵入者を知らせる為にあえて廊下を踏むと音が鳴るように作られた仕組みのことである。床となっている木は相当年数を経ているからなのか、建物自体もかなり古いためなのか、歩くたびに時々ギイという音になる。

コンコンと、光努が歩きながらノックをするかのように壁を叩く。至つて普通の木の音が聞こえる。

ガンガンと、木で出来た床に突き立てるように、コルは日本刀の切っ先をぶつける。が、わずかにも突き刺さることなく、ただ鉄が木に当たるといふ音がするだけ。

キンキンと、リルは小さなサバイバル用のダガーナイフで壁をつつく。しかしやはり木でできた壁に傷がつく素振りは見えなかった。

「これどうなってるの？」

穴があかないどころか、傷すらつかないのは不思議。一体どういうわけなのか。どこから見てもただの古びた木の床と壁の廊下しかないのに。本当に不思議である。

(ハクリなら、何か知ってるかもしれないんだがな)

今や小さな赤ん坊の姿の友人、ハクリの姿を思い浮かべながら、光努は少し嘆息していた。

ただまあ行き止まりというわけではないので、壊れない通路を歩くしかない。引き返すという選択肢は、もちろん光努達には存在しなかった。どうか進む気しかないし。

「はあ、どこもかしこもこんな感じなのか。面倒だ」

「あ、ほら見てよ。ドアが見えてきたよ」

リルの言うとおり、両開のドアが薄暗い廊下の先に見えてきた。

扉には、『彩の間』のプレートがつけられ、とりあえず躊躇する理由もないので、普通に扉を開き中へと入る。結構余簡単に中へと入るが、もちろん罨には全員注意している。

「?????」は・・・」

少し開けた場所。例よつて廊下と同じように木でできた場所だと思つたが、よくよくと見れば木の模様が ついて いる だけ で 壁 や 床 は 鉄 で 出来 ている らしい。そして入つてきた木製の両開きのドアとは別に、前方には4つの扉があつた。扉にはそれぞれ生物のレリーフが彫られており、竜に虎、鳥と亀といった、どこかで見たことあるような生物。「青竜、白虎、朱雀、玄武。え、何?ここつてダンジョンだったの?」

扉に掘られていたのは、四神とも四聖獣とも呼ばれる4匹の獣。

それぞれの方位を司る獣であり、中には中央を守る黄竜や麒麟なども存在するが、ここにはいないようである。

「光努知らなかつたの?罨あり、戦いあり、謎ありのハイテクアトラクションだよ」

「そして奥には素晴らしい宝が眠っている、らしい」

「俺が聞いた話と結構違うような・・・」

やけに楽しそうなりルとコル。こういつた場所には過去にリルとコルも行つたこと
はあるかどうか別として、少し聞き覚えがあるそうだ。曰く、罨だらけのところもあれ
ば、謎が仕掛けられているところ、番人がいるところもあるそうだ。

ということとは、ここは一体……。

「あ、見て見て光努。ここに何か書いてあるよ」

と言つて光努を呼ぶリルの声。見ると後ろ、入つてきた木製の扉を閉じたら、そこ
は何か文字が掘られていた。

〔血の器 水を浸して 葉が浮かぶ その衣を纏い 汝の元へ 示す導き 天へと誘
う〕

どこか不気味さのある文章。

意味があるのかないのか、不思議な文章。

古めかしく、掘られた溝に埃の溜まつている文章は光努が思うに、おそらくこの先へ
進む扉を示しているものと思われる。いや、光努でなくとも普通はそんな気がするだろ
う。

「変な文章か。この謎を解いて、先へ勧めと。中々面白い趣向じゃないか」

思ったよりも楽しそうであり、光努はいつものように楽しげに笑みを浮かべる。好奇心を瞳に宿し、口元は笑って文章を見据える。

この文章の中に、次への扉の手がかりが。青竜の扉、白虎の扉、朱雀の扉、玄武の扉。この扉の内正しい扉はおそらく一つ。

「もしも間違った扉開いたらどうなるんだ？」

「そりやもちろん、その先には罠と罠と罠と罠だらけの通路が伸びてるに決まってるじゃない」

「そして最終的には長い距離を進んでいながら行き止まり、とか」

「うへ、そりや面倒だ」

最後に全部の通路がつながっているならまだしも、行き止まりであれば最悪行き先不明の長い距離を行ったり来たりしなくてはならない。いくら体力が怪物級の光努達でも、面倒なものは面倒。そして限度というものが存在する。出てくる罠のレベルも知らないし、獄燈籠級の罠が出てきたらさすがに面倒。

「やっぱりこの文章を解かなくてはならないのか」

「まあ根拠はないけどね」

「いや、このパターンは必ずこの文章の中に手がかりがあるはず。それがお約束！」

「お約束って何？」

「ところでお前らって頭良いのか？」

光努の質問。普通に考えればリルとコルの二人は時期と年齢的に高校3年くらいだと思われるが、実のところどうなのか。そもそも10年前にも小学校に通っていないので通知表のようなわかりやすい学力表などもちろん見たことない。というわけで頭がいいのか悪いのか。謎を解こうと思えば学力以外にも推理力や閃きといったことも必要だが、見分ける判断材料が学力しか思い浮かばない。一応10年前はルイや灯夜とかに勉強を教わっていたらしいので、同年代よりかは成績はいいらしいが。

「こう見えて私、シャーロックホームズは全巻読んだよ」

「僕はアルサーヌルパンを読破した」

「だから!? だから二人共立派な頭脳派だともいいたいのか! いや俺もそのシリーズ好きだけだよ」

「でも実際学力と違って閃とかって人それぞれじゃない。直感とか第六感とかと同じでさ」

「まあそうだけど」

「気づく人は気づくし、気づかない奴は気づかない。まあ一先ず考えてみない?」

「それもそうだな」

果たして一体正しい扉はどれなのか?

後半へ続く！

『四神の扉・後編』

前回までのあらすじ！

やって来たのは、木々の生い茂る深い霧に囲まれた森の中に、ぼつんと存在していた古い寺。そしてその中へと入ることに成功した光努とリルとコルの三人。

見た目と中身は古ぼけた寺であるにもかかわらず、光努達の攻撃によっても全く傷のつくことのない建物で謎が多かったのだが、あえてそこは置いておいて先に進む光努達。

そしてまっすぐに中の廊下を進んで現れたのは、四つの扉。

荒々しく哮る竜。

咆哮が聞こえてくるような虎。

羽ばたく姿は威風堂々とした鳥。

蜷局を巻きその場にとどまる亀。

青竜、白虎、朱雀、玄武の4匹の生物がそれぞれ彫られた四つの鉄製の扉。そして入ってきた扉に書かれていたのは、謎の文章。

〔血の器 水を浸して 葉が浮かぶ その衣を纏い 汝の元へ 示す導き 天へと誘う〕

前半は俳句のようにも見えるが、それにしても後が字余りすぎる。

根拠はないが、おそらくこの文章にはどの扉へ入ればいいかの手がかりが隠されている。

もしも間違った扉に入れば、それはそれは恐ろしいことが待っているはず。その為、謎を解くため頑張る光努達であった。

四聖獣のレリーフがそれぞれの付けられた鉄製の4つの扉の前に立つ光努、リル、コルの三人。謎の文章に目を通し、いざその灰色の脳細胞をフルに活用させ、文字の中に隠された謎を時かかった。

「じゃあ謎も解けたし、行くか」

が、すぐに終わった。

「早っ！展開がすごく早いよ！読者に一切の説明ないの!？」

「リル、その発言はメタ発言だよ」

「コル、お前もな」

リルに突っ込むコルの二人を横目に、さて先へ進むうかなと軽くスルー気味に扉に手をかけようとしたら、再び後ろからリルがストップをかけてきた。

「ちよつと待つてよ！本当に説明なし!?!せつかく正しい扉をわざわざ考えた読者達の期待を裏切る気なの!?!光努はそんな人じゃないでしょ」

「ええ、別にいいじゃんか。きつと読んでる読者もそこまで気にして見てないって。せいぜい『あ、ここで終わりか。次の更新いつかな』くらいしか思っていないだろ。きつと謎まで深く考えてないって」

「光努がそれ言っているの!?!」

もはやこの物語の主人公の言葉とは思えなかった。

「わかったよ、じゃあ説明するよ」

やれやれというふうに言う光努。けどもともと冗談半分本気半分だったのか、割りとあつさり折れる当たり光努も結構冗談多めだったらしい。

「鍵となるのは扉表面に付けられた『彩の間』。つまりキーワードは『色』だ」

この部屋へと入るために入ってきた両面扉に付けられたプレートに書かれたのは、『彩の間』の文字。

彩とは彩^{いろど}る事。つまり配色の事。

この建物に入って目にしてきたものの中で、扉の裏に書かれた文章以外で唯一存在していた文字。つまりこの文字が謎をとく鍵となる言葉。

「血の器、水を浸して、葉が浮かぶ。血は『赤』、水は『青』、葉は『緑』を表している」と

「ううん」と

「赤と青と緑。その色って確か」

「そう、いわゆる三原色と呼ばれる色だ」

三原色とは、原色となる色を組み合わせて、混合することで、様々な種類の色を作り出す色の組み合わせ。ただ色といっても、光の色や絵の具の色などもあり、赤、青、黄の三原色は絵の具によって混ぜ合わせる色の三原色。印刷機に入っている、いわゆるマゼンダ、シアン、イエローとも言う色である。

三原色と言っても、基本的な組み合わせがあるが、それでも他にいろいろと組み合わせがあり、橙、緑、紫の3種類の組み合わせも存在する。

今回の三原色である赤、青、緑の3つは、光の三原色、RGBとも呼ばれる色で、テレビやモニターなどのディスプレイは、この3種類の色でもって画面を映している。

画家が絵の具でこの三色を混ぜることで黒色を作り出し、強力な光としてこの三色を掛け合わせることで白色を作り出すという。

「血の器に、水と葉を入れる。これはそれぞれの色、『赤』と『青』と『緑』を一箇所に集める、つまり混ぜ合わせるという意味。そしてこの混ぜ合わせによってできるのは、白か黒のどちらか」

「ていうことは、色的には白虎と玄武。けど正しい扉は一つじゃないの？」

「そ、ここで必要なのが続きの言葉。『その衣を纏い』の部分。白い服ないし黒い服を纏うということ」

なるほどと思うリルとコルだが、ここでも疑問。

そもそも扉にあるのが四聖獣の獣。当然服を着ている奴らなど存在していない。

この手がかりだけではまだわからないのでは？という疑問もあつたが、光努はそんなリルとコルを見て楽しげに笑っていた。

「白虎は白帝、朱雀は炎帝とも言われたり、四神はしばしば他の言葉にも使われてんだ。ちなみに○帝っていうのは俳句の季語のこと」

他にも青竜なら青帝や、玄武なら冬帝なども存在する。

それぞれの方角を表すと同時に季節も表す四神達。

確定した情報はなく、その存在は人が聞けばすぐに思い浮かべるイメージの姿もあれば、他にいろいろな姿で描かれる。

「玄武は一般に長い脚の亀と、それに巻き付く蛇の絵柄で描かれることが多いが、他にもいくつか考えられるイラストがある。その一つに、玄天上帝というのがあつてな」

コッソ。

靴音を響かせ、鉄製の扉の一つの前に立つ光努。

そこに居が枯れていたのは生物。

脚が長めであり、甲羅を背負い、蛇が巻き付く聖獣の姿。

「玄天上帝の姿には、黒服の男が描かれている」

トン、と玄武の描かれる扉を押すと、奥へ奥へと続く道が姿を表した。

「そして示す導きは、天へと誘う。さて、行くか」

先ほどの部屋と違って最初の木製の廊下を歩く光努達。

やはりギリギリとした音が鳴るが、それでも全く壊れるような構造をしておらず、なぜか傷すらつかない為、普通にコツンと長い廊下を歩き続ける。

明らかに最初に見た寺の大きさよりも廊下の長さの方が長いと思われるが、廊下の構造自体を気づきにくいようにわずかに下斜めの構造にすることで、途中から地上ではな

く地下へと続く道になっていられるらしい。地上なら建物の大きさだけ限りができるが、地下ならば邪魔がなければ無限に道を作ることができる。

「光努って頭よかつたの?」

「その質問俺もしたんだけどなあ。まあいいか悪いかでいえばいいぞ。見聞きしたら忘れない程度にはな」

「それって結構いいってことだよな」

「知識だけあつてもしょうがないがな。人は応用してなんぼだろ」

はははと軽く笑う光努。

人は知識を吸収し、それを応用することができる。知識に人の発想、思考、転換、様々な要素が組み合わされば、それが謎を解明して、新たに知識を得ていく。

玄武の扉に入り、長い廊下を特に苦もなく歩く三人であった。

ちなみに、他の扉を試しに開けてみたら、白虎の扉を開けた瞬間上からギロチンの要領で薄い刃が落ちて危うく人様に表現できない事態になるところだったので、他の二つは開けないでおいたのだった。無駄に寿命を縮めたくないし。

「けど結構簡単に解いたね。もつと時間がかかるかと思つて早く来たけど、取り越し苦労みたい」

歩きながらそういうコル。確かに速い。まだ日も登りきつていないような時間帯で

ほとんどの人間はまだ夢の中のような時間。光努達もちよつとはやく来すぎたかなと思つたが、ちよつとどころではなかつた。

ちなみに寺に入つてからここまでわずか10分である。

「けどすごいよね。もういつそ探偵とかになつたら？面白そうじゃない」

「場所的に探偵とは少し違うんじゃないか？学者とか陰陽師とか、寺とか遺跡だとそんな感じの職種を思い浮かべんが。それに・・・」

（昔、もつとすごいのをいたしな）

「?どうした光努」

「いや、なんでもない。それより先を急ぐか」

目的の地まで、もう少し？

「あー、楽しい楽しいピクニック気分だな。よし、そろそろ弁当でも食べるか」

「光努、言葉が棒読みになつてるよ。正直に面倒になつてきたつて言つてもいいよ」
「そう言うコルも面倒になつてきたよね〜」

かれこれ2時間程歩いたが、未だに廊下が終わらない。

何もないというのは構わないが、こうも何もないと逆に罨くらい出てこいよと思つてきた光努たちであつた。

「見れば見るほど木ばかり。長いよ！いつまで歩くんだよ！もう20キロは歩いてい
ぞー！」

明らかに普通に歩いただけで行けるような距離ではないが、特に気にしない気にしな
い。

「と思つていたら、扉が見えた」

光努の言うとおり、目の前を見てみると、木の扉が廊下の先には確かにあつた。

ここまでわりと長い道のりだったが、疲れてはいないがようやく見えてきた別の景色
に光努達は内心微妙にほつとしていたのであつた。

ちなみに全く説明をしていなかったが、当然廊下等に光源は無い為、みんなで見えた目
旧式のオイルランプをもって光源としている。このランプは見た目炎を灯すタイプの
物だが、中に灯っているのは持ち手の死ぬ気の炎であり、炎エネルギーを光として増幅
させて通常の炎よりも周りをよく照らすかなり高い技術力が使われている見た目旧式

ランプである。

目の前にある両開きの扉。なんの変哲もない扉だが、だからこそ、その先にある物の存在感を、光努達は肌で感じていた。目の前に立つ光努は目を少し見開き、楽しげに笑みを浮かべた。

後ろのリルにランプを預けながら、両手で目の前に扉に触れ、力を込めた。

「よし、開くか」

重々しい扉を開く光努。

古い扉だからなのか、ギイイという一際大きな音がなりその先を見せてくる。

扉の向こう側は、大きさは思っていたよりも小さめの、6畳程の部屋だった。

廊下と同じように、全てが木でできている立方体の部屋。床や天井には何もなくながらんとどうしているが、そんなことなど気にならなかつた。一際存在感を放つ物質が、その部屋にある。

正面の壁に備え付けられていた、刀掛台。

存在感を放つ物質は、壁に掛けられていた2本の刀。

柄に巻かれた柄糸が血のように濃い真紅の刀と、夜明けを思わせるような紺碧の柄糸の刀。

両方黒塗りの鞘に収められ、静かに壁に掛けられている。

見た目は普通の刀にしか見えない。だが、ただの刀出ないということは、光努にはもちろん、劍士であるリルとコルも理解している。リルは光努のように楽しげに笑い、コルも珍しく笑みを浮かべ刀を見ていた。

「これが、お前たちの探しものか」

「うん！本当にあつた♪」

楽しげに笑い刀を見るリルと、静かに刀を見つめるコルの二人は、光努の横を通り抜けて壁際に寄る。リルは真紅の柄の刀、コルは紺碧の柄の刀へと、それぞれその手を伸ばした。

（さすが超一流の劍士。刀を前にして二人の存在感が跳ね上がったな。ま、ものがあるだけにしようがないか。精製度A A A級神器、天國刀）

トリプルエー
天國^{アマクニ}。

かつて平安時代頃に存在していたとされる刀鍛冶の名。

彼の打った刀はどれも精度の高い刀であり、皇室御物の、遙か昔、八尺を超える大鴉の羽から出たと伝承されたと言われる小烏丸と呼ばれる刀が存在するが、それは天國が作ったと言われる刀。

だがこの人物、出身、経歴、素性、には謎が多く、ほとんどのことが解明されておら

ず、ほんとにそんな人物がいたのかすら不明である。

小烏丸に刻まれるはずの銘が無く無名であるため、やはりそれが誰の手によって作られたものなのか、憶測の息を出していない。

だが一部の人間には解明の手立てが見られているらしく、小烏丸は天國が作り出した刀であるということが分かり、今目の前にある2本の刀も同じ。

同じ天國の刀だが、違いがあるとすれば、その刀の作られた用途。

美と戦。飾り宝として掲げる為に作られたのが小烏丸。そして戦闘に適し、天國の戦いの技術が込められた刀こそ、神器天國刀。

同じ製作者でも、神器と呼べるほどの力は、小烏丸にはなかった。

だが今日の前に存在する刀、2本の天國刀には、人を魅了する美術工芸品とはまた別に、人の意識に突き刺すような威圧と存在感を、鋭い刃のように吹き出していた。

リルとコルの二人が刀をそれぞれ手に握り、一息に抜き放った。

少し反るような刀の刃。抜き放ったと同時に閃光が光る。

いや、よく見ると閃光ではなく、緑色に光る雷の死ぬ気の炎。

そして刀から吹き出すように、蒼炎の雨の炎と、真紅の嵐の炎が、部屋の中で踊るように吹き出した。まるでその手になじむように、あるべきところへと収まるように三種の炎が揺らめいていた。

(すごいな。神器は人を選び、相性があると聞いていたが、まるで刀が喜んでいるようだ)

一息に抜いた刀を二人は鞘に収めると、炎は霧散し、後に残ったのは、ランプの炎の光だけだった。

「それが神器か。一回しか見たことないけど、間近で見ると迫力がすごいな」

「私たちも持つのは初めて。見たことはあるんだけどね」

明るい笑顔を向けて、楽しそうに話すリル。

二人の今まで戦闘時に使用していたのは、特に普通の西洋剣と日本刀。神器がイリス内の秘匿事項といっても、その存在場所があまり多くなく、そう簡単に手に入るものでもないため、こういった自分の専用武器というのが初めてのリルとコルだった。

だからこそ、新たな武器を手にした二人はとても楽しそうだった。

いそいそとリルは端が輪っかのように巻かれた革のベルトを取り出し、刀の鞘に輪を二つ通して、肩から腰に斜めがけするようにして刀を背負うのだった。コルは既に用意していたのか、刀を挿す場所の拵えたベルトをしており、自分の腰に刀を挿した。

「結構すんなり手に入ったけど、その刀大丈夫か？」

「ん、特に問題なさそう。持ってみてわかったけど、本当に人が作ったものこれ？」

「神器、なんて大げさかと思っただけど、僕も納得したよ」

「お前ら目がプロの鑑定家みたいになってるぞ」

若干呆れ気味の光努だが、なんだか新しい玩具をもらった子供みたいに笑っている二人を見てな、なかなか微妙笑ましい気分になったのであった。

「さてと、じゃあそろそろ帰……ん？」

楽しそうに刀を持つ二人を横目に、光努はスタスタと歩いて、刀の無くなった刀掛台の前に立つ。そしてじつと見つめ、右手を伸ばして刀掛台の横の壁を少し指でなぞる。

（部屋が薄暗いから普通じゃ醜い微妙な隙間。それに少し木目があつてない。この後ろ、もしかしたら……）

指をわずかな黒い線のような隙間をなぞり、一辺一センチ程の正方形の切れ目の用な物を見つけた。そのまま押せるらしく、指の先でもって力を少し込めると、後ろに動きカタンといった音がした。

どこからか、カタカタカタといった木出来て歯車が回る用な音が聞こえたと思ったら、ぐらりと刀掛台が壁の一部とともに前に倒れ、その後ろに人がぐり抜けそうな四角い穴が現れた。

「隠し扉……この奥があるの？」

「二先ず、二人はそこにいろ。もう一部屋みただから、ちよつと言ってくる」

一人でいくと行ったのは、隣にもう一部屋あるだけのようであり、なおかつ隣の部屋

からは、全くと言っていいほど危険な感じがしなかったから。

この部屋に入る前に感じた存在感は、間違いなく天國刀2本の存在感。今なお現れた隠し扉の向こう側には、本当に空っぽの感じがした。

「さて、鬼が出るか蛇がでるか」

四角い穴をくぐり抜け隣の部屋に入る光努。

やはり灯りもなく暗い場所だったが、光努はランプをもって中を照らすとその場所に少し目を見開いた。

およそ先ほどの部屋より小さい、4畳半程の小さな部屋。だが薄汚れ、切り傷などが多く刻まれており、さつきまで歩いてきた廊下や、刀の置いてあった部屋と比べると明らかに古びてボロボロとした場所。

だが、そんな古きなど光努は全く気にもせず、他のところに目を止めていた。

「この場所は……」

真つ白い和紙のような紙に、梵字フラフマンのような文字の書かれた護符。

梵の創造した文字の意を持つ梵字が刻まれた札や、崩し文字を墨でもって刻まれた札。円などの図形をいくつも込めて書かれた札。

壁や床、天井には大量の札が貼り付けられていた。

まるで何か悪霊でも封印されていたかのような札の数々。

その異常な光景には不気味さが見え、そして部屋の壁際には、桐でできた細長い箱が置かれていた。そこにも部屋と同じように、不可解な文字や図形の羅列の札がいくつも貼られていた。

(これは、明らかに刀を納める刀箱。しかしこの札は・・・)

足を曲げてしゃがみこみ、桐の蓋に手をかけて、一息に中を確かめるべく、蓋を持ち上げた。

「空っぽだと？」

そこには空虚に、何もなく、ただ箱だけとなった刀箱が置かれているのだった。

『すべてを知ることとはすべてを許すことになる』

スタリ。

音がほとんど立っていない着地音。

見渡す限りのビルやデパート、住宅街の並ぶ景色が、ここは街中だと示している。

太陽はもう沈み、あたりの灯りがチカチカと光、上から見てみるとなかなか綺麗な光景。こういう光景を100万ドルの夜景というのか。

まあさすがに日本ではそこまでの夜景と言うとよっぽどの物しかないが。どうしてもいけど100万円の夜景と100万ドルの夜景って言葉比べたらなんだか円の方が安っぽい気がするのはいのせいだろうか。まあ確かにドルより円の方が安いといてば安いのだが、心底今はどうでもいい。

どこかのビルの屋上から屋上と飛び、着地した黒い人影。

夜であることと、高所の為に吹く風に髪を揺らし、その柔らかそうな白い髪は夜の闇の中でも目立ち、したから立ち上る街の灯りを微かに反射させていた。

その少年、光努は楽しげに笑い、屋上から屋上へと全くおそれもせず、一足で屋上の縁に足をかけて跳んでいた。

光努はビルの屋上からだんだんと小さなビルヘデパートへと高度を下げていき、次第に地上に近づいていく。

そして光努の後ろからついてくるようにする黒い影が二つ。

二人とも、夜の闇を溶かしたような艶やかな黒い髪に、互いに似たような刀。柄糸が真紅の刀と、紺碧の刀をそれぞれ腰と背に下げ、光努と同じように軽快に跳んでいる。

少女リルと、少年コルの二人。二人共新しく手に入れた武器に雰囲気を楽しそうにし、光努と一緒に地上へと降り立つ。

この場所は、並盛町。

さきほどまで探し物をすべくいくつかの場所へとあちらこちらに行っていたのだが、一先ず終了し、三人はボンゴレ基地へと帰ってくるべく、戻ってきたのだった。

「確かこの辺にあつたはず」

リルとコルとともに、並盛中の比較的人通りの多い通りから目立たないようなビルとビルの隙間に入る。

そして入つて数メートル歩くと、ゴミバケツやらなんやらと障害物もあつたが、目線先には目的の物、自動販売機があつた。

1925年ごろにアメリカで開発され、1960年代以降に日本で復旧し始めた機械。

今やあちこちに設置されており、硬貨もしくはお札を入れてボタンを押すだけで飲料をだすという何とも便利な機械。

世界最初の自販機が現れたのは紀元前215年と本当に大昔。もちろん機械もなく、構造はごくごく単純だが、確かに「硬貨をいれると一定量水がでる」という事を可能にするなど、古代人の知恵というのは中々馬鹿にならない。

今となつては日本に多く普及した自販機だが、ちみにこの自販機一台で一家庭に匹敵する電力が必要なのでそう考えると全て含めて結構な電力にもなるんだなあとと思う。それに自販機というほとんど飲料だが、今ならお菓子なども売つてるし、海外には赤

い果実の名前みたいなメーカーが製作した携帯音楽プレイヤーを売っている自販機があつたりなかつたり……。とまあそんな自販機語りは置いておいて、本来電子マネーをスキヤンするためのところに懐から取り出したカードを当てると、ピピっという電子音が鳴り響いた。

そうして少し離れると、独りでに自販機が横にスライドし、下へ下へと続く階段が現れた。

よくもまあこんなに秘密基地っぽいのを作ったものやら。

もうわかると思うがこの下にあるのはボンゴレの地下アジト。並盛町内の様々な箇所に入り口が設置されており、人通りの少ない神社や森の中、逆に人の多い商店街の隙間などにもこのようにカモフラージュされて設置されているのである。

ちなみにさっきかざしたカードはこの自販機にのみ反応して入口を開ける専用カード。出かける前にジャンニーニにもらったいわば合鍵。難点はこの自販機からでしか使えないということかな。

リルとコルと共に階段を下りると、上の方で自販機が自動でスライドして戻る光景が見える。そして階段の下まで降りて、正面の扉にこれまた設置されたカードリーダーに同じようにカードをスキヤンさせ、パネルに手を当てるとドアが左右で自動で開いた。

一応この場所にも俺やリル達でも認証して入れるようにしてもらったので、出入りは

自由自在である。

しかしボンゴレやっぱハイテクだな。ミルフィオーレもたいがい技術力がずば抜けてるが、一般人が生きる表の世界と比べたら、マフィア等が仕切っている裏の世界は本当にぶっ飛んでる。こういうので特許とかとつたら一生遊んで暮らせそうだけど、死ぬ気の炎とかは秘匿事項で公にできないからそれもしょうがない。

まあそんなことは関係のないことだし、死ぬ気の炎や先端科学がなくても、人類は全然進化して生きることが可能だから、無理やり上に上げる必要なんてない。まあ今に追いつくには、もう少しばかり時間が必要だけど。

とりあえずボンゴレ基地についたし、あーよかった。本当によかった……うん、本気で、マジで。

「ふう、なんだか私ほっとしちやっただよ」

「僕も同感。あれは本当に面倒だった」

微妙に疲れが滲み出てるリルとコルの二人。もちろん俺も結構疲れた。

なんでかって？

実は寺の中で刀をとって帰ろうと一本道の廊下を戻ろうと思ったら、ありえないくら

いの凶悪大量のトラップが作動してやがった。

獲洞山の幻覚トレーニングのような恐ろしい罠だけでもあれなのに、一本道という性質上、なかなか避けるのが難しかった。しかも壁や床は全く壊れないし。罠で跳んで来た槍とか剣とかは壊して止めることが可能だったんだが、それでも動かし方は本当に面倒。

およそ20キロを超える罠の道を帰ってくるのは、なかなかスパルタな旅立ったなあ。しかもそのあとまた出かけた。

リルの言うとおり、なんだか並盛町が見えたあたりでほっとしたし。

「しかし無事に戻ってこれてよかった。ツナ達何してるかな」

最後に見たのは一昨日だからな。一昨日聞いた限りだと昨日はバイクの練習するつて言ってたし、今日辺りもう修行を再会してるかもな。

「じゃ、私たちお風呂入ってくるね〜♪」

「おう。じゃあ俺は飯でも食べようかな」と

一旦リルとコルと別れ、俺はそのまま食堂まで歩いていく。

と大食堂に近づいてくると、人の気配。水道の水を流す音と、食器が触れる力チャカチャとした音。

ということとはここに今いるのは……

「よー二人共。なんか食べるものあるか？」

その声をかけて、背を向けて流しで作業をしていた二人は驚いたようにしてこちらを向いた。

「はひー！光努さん！」

「光努君！久しぶりだね」

「2日ぶりくらいか。夕食の残りとかある？」

京子とハル。ボンゴレ基地における生活担当。

炊事洗濯をツナ達の代わりに担う、まさに縁の下の二人だった。

「いやー、助かった。正直昨日は食べるの忘れててさ。板チョコ2枚と〇まい棒しか食べなくて」

「一体どこで何をしてたんですか？」

「……チョコって栄養価高いよな。すげーよ」

「なんで目をそらすんですか!？」

丁度夕飯の残りが残っていたらしく、ポリタンをご馳走になっていた。

このナポリタン、もともとイタリアのナポリで作られた料理を、日本が独自に進化させた料理らしいが、そうなるとルーツはイタリアだが一応日本料理と言えないこともないんじゃないだろうか。見た目的に日本ぽくないけど、日本らしくない日本料理なんてざらにあるし。マ○オだって日本製だし。あ、これは料理関係ないか。

「りよつとリルとコルと一緒にトレジャーハントしてたんだ」

「なんでしよう。ハルは会って間もないですが光努さんがどんな人かわかって来た気がします」

「光努君っていろいろすごいんだよね」

「京子ちゃんそれで済ませちゃうんですか!？」

ああ、こうしてると昨日までの地獄めぐりみたいな宝探しが嘘みたいだー。本当に和むよ。

「そういえばリルちゃんとコル君は？一緒に帰ってきたんでしょ？」

「二人は先に風呂言ってる。俺はお腹すいたし何かあるかなあってこつち来たんだよ。いっつそさん」

丁寧に手を合わせてごちそうさまをする。

そういえばこの二人リルとコルと知り合いらしい。10年前の時点でフウ太と遊んでいる時に何度かあったことがあるらしい。そして結構仲がいいらしい。

一先ずお茶を飲んで一服と、ふう。

「そういえばツナ達は？見た限り夕食食ってないんじゃないか？」

そう思ったのは京子とハルの二人が先程まで洗っていた食器。

この二人が食器を洗ったあととは基本的にすぐに水気を拭いて片付けず、自然乾燥で乾かしている。にもかかわらず、洗い終わった食器の数をみると、このアジトの人数より少ないし、使われている箸はツナ、隼人、武、了平の物が洗われておらず、使われてもいない。以上のことからやつらまだ食べてないんじゃないか、というのが案外すぐにわかったよ。

食器の数と大きさに、他のやつら、リボンやジャンニーニ、ビアンキにフウ太達はここで食べたんだろうけど。

「.....」

ツナ達のことを聞いたただけだが、どうにも二人の表情は少し暗く、気まずそうにしている。

「どうした？ツナ達と何かあったのか？」

共同生活の中でトラブルは避けたほうがいいんだがな。

ただでさえチヨイスの期限が迫っているというのに。

「……ねえ、光努君。光努君は知ってるんだよね」

「何がだ」

「ミルフィオーレとかビヤ克蘭とかのこと。みんなが私達に知らない事情を隠していることは知ってるの。そのこと、光努君も知ってるの？」

（……予想外のことを聞かれたな。けど、なるほど。そういうことか）

さつきツナの名を出して二人が気まづくなつたことと、京子達が夕食を食べたのにツナ達は食べてない。とすれば、この二人がいましていることといえは、

「炊事洗濯、家事のボイコットつてところか」

「!!……うん」

少しうつむき、いつもと違って暗い表情を見せる京子。隣のハルも言い当てたのに驚いていたが、次第に表情は暗くなる。

「私たちも、一緒に戦いたいの。守ってもらうのはすごく嬉しいけど、何も知らないまま、みんなが怪我していくのは……辛くて」

マフィアなんて何も知らない、不自由などない生活をしてきた京子とハル。正一曰く、戦うためではなく、ツナ達が強くなるために守るためにこの時代に呼ばれた二人。

ツナ達が守ろうとするのは当然だけど、さすがにこの世界に来てしまった以上、二人の知らない事情が増え続けた。

だからこそ、二人は不安になったのだと思う。自分たちが何に狙われているのかも分からない。なんでツナ達が怪我をしたのかも、わからない。

守られるだけでは、二人とも我慢できないのだろう。

この問題、この場で俺が言うのは簡単だが、それだけじゃ解決しないよな。

「確かに俺も知ってる。全部な。ツナは多分、大丈夫ってだけ言っただらろうな。信じ待っててくれって」

「ツナさん、本当にハル達を守ってくれているのはわかってるんです。でも、やっぱり何も教えてくれませんでした」

「だろっな」

「どういうことなの？」

その理由は、巻き込みたくないから。

知ってからでは遅い、知らなければよかった。そう考えることはいくらでもある。知らずに過ごしていれば、こんなことにはならない。後々そう考えて情報を知ってしまうことだってある。そういう自分を、ツナ達は恐れている。そして全てを教えて、自分達に対する見る目が変わることも。

ま、ツナの事だから、好きな京子に自分はマフィアだっていつて怖がられたりもしたくないって思いも、ちっとはあるんだろうけど。

ツナのほとんどは、平和な日常の中にいる二人を、危ないマフィアの世界に巻き込みたくないってのが一番強そうだな。

知りたいという二人の気持ちわかるが、けど・・・、

「知ってからだど、後悔はできないぞ、二人共」

「!!」

珍しく少し真剣味を帯びた光努の言葉に、少しびくりとした二人。

「ツナは知って自分がいくつも危険な事に巻き込まれたことがある。だから二人には知らずにいて巻き込んで欲しくないっていうのは本音だろう。まあツナは知ろうと思つて知つたわけじゃないんだけどな」

リポーン情報の方からやってきたらしいし。

「まあでも、俺は知つても大丈夫だと思つてる。知れば命を狙われるってほどでもないし（というかこの世界ではもう狙われてるか）」

「だつたらー！」

「けど、それを決めるのはツナ。ツナが言わなかったのに、俺が勝手に言うのはまずいだろ」

そう言つて席を立つ光努。

ちらりと見てみると、やはり京子もハルも不満そうな表情をしていた。

「まあそう落ち込むな。どうせ、すぐに折れるかもよ」

「どういうことですか？」

ハルの疑問を背中に受けて扉を開けようとした光努は立ち止まり、振り向いて楽しげに笑つた。

「お前らも知つてるだろ。ツナは、思つてるよりもずっと優しい奴だつてこつた」

一瞬その言葉に呆けたような二人だったが、すぐに吹き出してくすくすと笑つた。

「あはは、そうだね」

「ま、でもたまにはこういうのもいいんじゃないか。ボーコット結構。たまには怒つてゐるってアピールしないとあいつらわからねーしな。それよか、あいつら料理とかできんのかねえ」

「ハルには全然イメージできないです」

「それは失礼だよハルちゃん。でも、栄養バランスとか大丈夫かな」

あいつらのことだからカップラーメンでも食べてそうだな。

「今日のところは食事は俺が何とかするから心配するな。他のことはやらせるけど」

「ふふ、光努君も優しいね」

「何を言う。俺もツナ達と一緒に情報隠してる奴だぜ？」

「でもありがとう。少し元気出てきたよ」

完全復活、というわけではないが、笑顔になった二人を見て光努はフツと笑い、ひらと手を振りながら大食堂を後にするのだった。

「あいつらは、もつと話し合うべきだな」

「小食堂はここか。うん、気配からしてツナ達の中だな」

さてどうしようか。

選択しは二つ。

①はげます。

②けなす。

さてさてどうしようか。京子とハルには多少フォローしたからそうそう冷たくならないと思うけど、ツナ達もフォローしたほうがいいのかいな。

いや、男子だし②でいいか。①は京子達に使ったし。

というわけで中ヘレッツラゴー！

「よう久しぶりー。お前らボイコットされたんだって?」

「光努!」

「てめえ、2日ぶりに会って最初に言う言葉がそれかよ!!」

「武と了平も元氣そう、といつても、今は腹ペコ状態みたいだな。京子達に聞いたよ」

「ははは、事情は知ってるのか。笹川達どうだった?」

笑っている、けど空笑いって感じだな。武らしいといえば武らしいが、やっぱり困っているらしい。

「まあもうしばらくボイコットは続けるかもな」

「はあ、やっぱりか」

「安心しろ。ちゃんと頑張れって言っておいた」

「おい!なんでてめえは火にガソリンブチ込むようなことしてんだよ!!」

「つつても、火つけたのはお前らだけどな」

「「「うっ!」」」

光努の的を射た発言に、思わず押し黙るツナ達。

「ところでお前らなんか食べたのか?といっても、見ればわかるか」

光努の視線の先にあるのは、食べ終わつたと思われるカップラーメンの空となつた容器と割り箸。男の一人暮らしの食生活ってこんな感じだろうかと思ふ光努。

というかお前ら料理できなかつたのかよとも思う。

ちなみに、実際に頑張つて料理をしようとしたが、ツナは言わずもがなまつたく分かつたらず、獄寺は料理の本を細かく読みすぎてまつたく進まず、了平もアウトで武はそこそこ、でも寿司オンリー。しかも材料の場所がわからないという。

「この現代つ子どもが。そんなんでサバイバルする時にどうするつもりだよ」

「いや、別にサバイバルする機会なんてそうそう」

「ツナ、お前はリボンにあつてからどれだけ予想もしてないことにあつたか数えてみる」

「.....」

そう言われて苦い顔をするツナ。当然と言えば当然である。

「はあ、とりあえず料理は今日は俺が作つてやる。京子達に許可はとつてきたからな」

「お、光努つて料理出来んのか?」

「まあ対したものは作れないけど。どうせカップラーメンじゃ量も栄養も足りないだ

ろ。少し待ってろ」

そしてかれこれ15分後。

「ほら、七面鳥の丸焼き」

「あれえ!?!光努おかしいよね!よく知らないけど明らかに15分じゃできない料理が出てきたんだけど!!」

「だが沢田よ、料理のことはよくわからんがなかなかうまそうではないか。どれ」

「あ、馬鹿芝生。どうせまだ生焼けだ!腹壊すぞ!」

獄寺の静止を聞かず、了平は手を伸ばして七面鳥の一部を切り取ってパクリと豪快に食べる。もしやもしやと七面鳥を食べ、そして閉じていた目をカツと開いた。

「うおおおお!うまいぞおお!!」

「な、んな馬鹿な(パクリ)……。うまい。皮はぱりつとしているが、中はすぐにはぐれるこの絶妙なバランスぐあい。しっかりと火が通ってやがる……。なんでだあ!?!」

「ちよ、獄寺君!」

「どれ俺も(パク)。おお、うめえ。光努料理うまいんだな」

「対したものじゃないけどな」

「いやいや、十分対してるよ!ていうかどうかやって作ったの!?!」

「ツナ、料理くらい作れないと将来苦労するぞ」

「ええ、これ料理っていうか、本当にどうやって作ったの!？」

「この時代の技術をふんだんに使いまくった」

「この時代の技術すげえ!!」

ツナが突っ込んでるあいだにも獄寺と山本と了平は七面鳥を食べる。そんな光景を見ながら光努は楽しげに笑っていた。

「ほら、ツナも食べないと全部食われるぞ」

「ああ、ちよつと3人とも、待ってよ」

「安心してください10代目、俺がとつてありますから!」

いい笑顔で七面鳥の部位をとつた皿を差し出し、親指をグツと立てる獄寺。

なかなかに用意がいい獄寺に、光努はこれも右腕の仕事なのかなあ、だとしたら右腕っていうより使用人とか執事みたいだなあ、と割りとどうでもいいことを考えていたのだった。

『よし、修行に混ざろう』

チヨイスに向けてツナ達は修行を行う。

そのためにツナ達にはそれぞれ家庭教師がつけられて修行方法がそれぞれに決められる。そしてイタリアからやってきたのは、キャバツローネファミリーのボス、跳ね馬のデイーノ。

今回は全員の全体を仕切る家庭教師、いわばまとめ役兼、雲雀の家庭教師。

ツナは一度ボンゴレ匣を開口した際に、中から飛び出したのは竜にも見えるような炎の塊の怪物。だがそれは匣本来の姿ではなく、デリケートな大空の匣兵器が間違った開口をした際に飛び出した物。その為ツナは、正しく匣を開口できるまで一人であると言い渡された。

獄寺は最初は修行ではなく、匣初心者である了平とランボの二人に未来の戦いを教える教師役。当初不満だらけの獄寺だが、もう教える立場ですごいというツナの素直な賞

賛で一発オーケーをだし、二人と共に図書室に入ったという。

クロームは、この時代にはいないマーモンが残した幻覚強化プログラムによる特訓。そして山本は、パス。まだ彼の家庭教師が到着していないということで、しばし一人での特訓となった。

以上がボンゴレツナ達の特訓風景。

だがまあ一日目じゃそうそううまくいくはずもなく、他にも合間にいろいろと修行以外にもやることはたくさん。チョイスのフィールド直径10キロ内移動用のバイク練習もその一つ。果たしてツナ達の特訓はどうなるのだろうか。ポイコットも続くなか、修行2日目に突入するのであった。

「それで、ディーノは恭弥の修行視てんだ」

「そういうこつた。それより、お前らはどうなんだ？」

「どうつて?」

「修行だよ。チョイスに向けて、何かしらしてんだろ?」

そう言つて笑つてゐるのは、少し長めの金髪に、首筋から左手にかけて刺青をした男、デイーノ。

キャバツローネファミリーのボスであり、この時代においてボンゴレと共にミルフィオーレに立ち向かう同盟ファミリー。今はイタリアからやつてきて、ツナ達の修行の家庭教師の総指揮兼恭弥の家庭教師を買つて出ているのであつた。

ソファの正面に座る光努に話しかけ、対する光努はソファに体を預けながら少し退屈そうにあくびを噛み殺した。

「といつてもな。俺は修行しようにもまだ匣ができてないしな。リルとコルは今更修行、つて感じだし。なあ?」

そう言つてデイーノと光努が対面して座るソファと机の隣側、別の丸いテーブルと椅子に座つてゐたは、リルとコル。机の上に乗つてゐたのは、鉄板と爪楊枝。一体これで何をしてゐたのかわからないが、光努はそんな二人の方を向いて同意を求めるようだった。

「そうだね。やることと言つたら新しい武器の慣らしくらいだけだ」

「相性が良かったからかな。そう時間はかからないと思う。すぐに物にできそうだよっと」

カン！

軽い音がしたと思ったたら、視線は机の上に置かれている鉄板。

そこには綺麗に深々と、爪楊枝が刺さって貫通している光景が見えたのだった。もちろんコルが持っているのだから、コルが突き刺したのだろう。

「会話しながらお前は何してんだ」

「ん？一点集中の修行。ほら、名刺で割り箸とか割るじゃない。アレみたいなもの」「いや、結構なことやってるぞ今」

見てみると鉄板の厚さは薄い紙ではなく、3ミリはあるぞ。しかも板状にもかかわらず綺麗に突き刺さっているし。

そんな光景にディーノは少し笑みがひきつるのであった。

「そうだ！ねえディーノ」

目にも止まらぬ素早さでもって腕を振り、普通の爪楊枝をコルが持つて構えた鉄板に綺麗に突き刺したリルは、隣に位置されているソファに座るディーノの方を向いた。

「ん？どうした、リル」

「そういえば武って今家庭教師いないんだよね。てことは多分修行内容は一人で型の繰

り返しとか筋トレとかだよね」

「まあそれはそうだが……リル、おまえまさか」

「ちよつと修行手伝つてこようかな。経験値稼ぎ、みたいなの？」

「あー・・俺は構わんと思うが、後が怖いぞ？」

山本には今家庭教師がついておらず、自主練状態。その為、ボンゴレ匣を使つての修行もお預け。その理由は、この時代の2代目剣帝と呼ばれ恐れられる、ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアー所属のスクアアロがボンゴレ基地に、山本を鍛え上げるために向かっている途中であるから。その為、デイーノが山本に下手なこと教え用なら、スクアアロは容赦なく剣戟を浴びせるだろう。「跳ね馬あ!!てめえ、余計なことをしやがってええ!!う、お、おい!!」とか言いながら。

その為、デイーノとしては、スクアアロが剣士として山本の一番の理解者であり、最も家庭教師に適していることも知り、一旦山本の修行は保留としているのであった。

なのでもしもリルとコルが何かしようならスクアアロが起こるんじゃないのか? というのがデイーノのちよつとした心配である。

「大丈夫だよ。別に何か教えるわけじゃないし。どうせ武も暇してるだろうから気分を一新して、戦えば経験値アップ間違いないし♪」

「というわけで、僕らは武のところ行つてくるから」

ガタガタと椅子から立ち上がるリルとコルの二人。

爪楊枝の大量に突き刺さった鉄板を片付けて、壁に立てかけてあった刀を持った。さて行こう、と思つたら部屋の扉が開いた。

中へと入ってきたのはビアンキ。基地内には獄寺がいるため、顔には少し大きめのゴーグルがかけられていた。確か今はクロームの特訓を手伝っているはず。

「あらリル、ここにいたの」

「ビアンキじゃない。どうしたの?」

「ちよつとクロームの修行を手伝って欲しいのだけど、頼めるかしら?」

クロームの修行に付き合っているのは、イーピンとビアンキの二人。

基本的にクロームの修行方法は、今はいないアルコバレーノの一人であるバイパーとマーモンの残した幻覚強化プログラムによる幻覚能力の向上と、格闘能力の向上という全体的向上トレーニング。あとは他の守護者と同じようにボンゴレ匣の修行。ビアンキ達が手伝っているのは、格闘能力向上。しかし丁度いいところに格闘戦が得意な剣士であるリルがいたため声をかけたのである。

ちなみになぜコルではなくリルであるかといえ、全員女性だから当然の選択肢と言えは当然である。

「いいよ、じゃあ私行ってくるね」

「じゃ、俺も恭弥のところに行く。光努、お前は どうする?」

「そうだな、あと残ってるのは隼人達にツナのところか。よし、隼人のところ行ってこよ」

理由はなぜか、組み合わせが獄寺、了平、ランボだからきつと面白そうだなと思つてのことである。

そして一旦、リルはクロームの、コルは山本、そして光努は獄寺の元へと向かうのであつた。

(時雨蒼燕流、攻式八の型——篠突く雨)

ヒュヒュヒュ!!

ボンゴレ基地内ではあまりない和式の板張りの道場で、空気を切り裂く音が聞こえ

た。

ボンゴレ雨の守護者、時雨蒼燕流の継承者でもある、山本武。

今は家庭教師がいないため、ボンゴレ匣の修行はお預け。自己鍛錬に勤しんでいた。

手に持った時雨金時を振り抜いて停止したと同時に、周りに置かれていた巻藁は、真ん中から綺麗に真つ二つに切り裂かれた。静かに山本は息を吐くと同時に、手に持った時雨金時は、証明の灯りに照らされた銀色の刃から竹刀へと戻った。

時雨蒼燕流の型を一通り済ませ、最後に自分が最も得意とする型を終わらせ、そばに置いてあつたスポーツタオルをとって汗を吹く。爽やかにスポーツドリンクを飲む様はなかなか野球少年の山本に似合っていたのだつた。

「精が出るな。調子はどうだ？」

「ん？おお、コル！まあまあつてところだけど、どうしたんだ？」

入口からやってきたのは、木刀を何本か籠に入れて背負つたコル。

コルが来たのに少し驚いたようだったが、山本は楽しそうに笑つてスポーツドリンクを床に置いた。

「一人で暇してるんじゃないかと思つてな。修行手伝つてやろうかと」

「まじ？コル、相手してくれるのか？」

「まあ炎を使うのは危ないから、ほら」

コルは背に背負った籠から木刀を一本取り出し、山本に放った。難なく山本はキャツチし、代わりに時雨金時を壁際に立てかけた。

「武は剣士との経験値がスクアーロと幻騎士くらいしかないからな。少し経験値あげたほうがいいかと思って」

よくよくと考えれば、本当に山本は剣士になり立てにもかかわらず、ヴァリアアの剣帝、10年後の時代最強と名高いミルフィオーレの幻騎士。今まで戦った剣士は、戦うしかない状況が状況とはいえ幸か不幸か、確かに大物と戦ってばかりなのであった。そう考えると経験値はかなり高い。もちろん、序盤で中ボスに当たるRPGならそく瞬殺されるはずなのだが、そこは最初のレベルと成長率が高い山本であった。

「そういえば、コルって強いのか？俺コルの剣とか見たことないけどさ」

二人共メローネ基地にいたとはいえ、全く別の場所にいたので互いに剣を見たわけではなく、10年前の時点で山本は子供のコルとしか、しかも多少しか会ったこと無い為、剣士としてどうなのか未知数なのであった。

「そうだな、実力はわからんが、戦い方なら、スクアーロと幻騎士の中間くらいかな」

そう言つて籠を降ろし、中に入った木刀を2本抜き取り、くるくると手で回しながら握り、両の手に持つて構えた。

「中間、なるほど。二刀流……ってことか」

幻騎士は四刀、スクアーロは一刀。二刀流の相手とはまだ戦ったことなく、相手の実力も未知数。しかし、構えるコルからにじみ出る剣気。同じ剣士として、対峙してわかる。リング戦でスクアーロと戦った時のような、幻騎士と対峙したような、リボンとの修行のような、そんな気分。

だが、それはいつもと同じだ。そんな状況だとは言え、山本は常に勝つ気でいる。勝てると思い、己の剣を最強と信じ、剣を振るう。

目に真剣の用な鋭さを纏い、にやりと笑う山本。そんな山本を見て、コルも珍しくふつと笑う。

二人共普通の木刀。リングや匣など使わない、純粹な身体技能と剣による模擬戦。

だが二人から発せられる雰囲気は、普通の模擬戦で済ませるには中々に迫力があつた。

互いに木刀を構え、床を蹴ってぶつかり合うのだった。

一方光努は、図書室で勉強中の獄寺、了平、ランボの元へとやってきたのだった。

獄寺は基本的に理論派なので、デーノから了平とランボにリングや匣などのことを教えてやあつてくれと言われ、鉛筆とノートを使って図書室で勉強が始まったのであつた。

昨日は了平が匣兵器の漢我流を勝手に出し、ランボに至っては偶然にもボンゴレ匣を開口してしまい、最終的には3人は訳も分からずボロボロになって気絶したのであつた。

そして今日は昨日のリターンマッチとして、再び図書室で勉強……のはずだったのだが。

「ぬおおお!!内容が頭に入つてこん!タコヘッド、やはり体を動かすべきだあ!!」

獄寺と正反対の肉体派、脳筋とも言われる程に勉強が苦手な良平は、開始3分で既に限界に達していたのだった。もちろん5歳のランボも、鉛筆を持つまもなく床に寝転がってゴロゴロしているのであつた。

「てめえら!!ちつたあ勉強しやがれ!そんなんじや、今度のチョイスで戦えねえだろう

「があ!!」

「だが!俺は極限に勉強が苦手だあ!やるなら実践あるのみ!さあ、特訓所に行くぞお!!」

「生徒のてめえが決めるんじゃない!!」

方針が逆の二人なので、当然と言えば当然、中々噛み合わないのはしょうがない。

そんな様子を隣で眺めてるリボーンは、優雅にコーヒープレイクを楽しんでいたのだった。

とそんな時、図書室の扉が開いて誰か入ってきた。

「よ、調子はどうだ隼人、了平にランポ。あ、リボーンもいたか」

「ちやおつす光努。獄寺も、家庭教師カテキョウとしては、まだまだだな」

「理論派と肉体派と子供だし、しょうがないんじゃないか」

「ま、それもそうだな」

「光努、てめえは何しに来やがった。ていうか修行しなくてもいいのかよ」

「いや、みんなどうしてるかなと思って。了平、調子はどうだ」

「おう、光努か。タコヘッドに教われと言われたのだが、極限に何を言っているのかさっぱりわからん」

「てめえ!!」

これは平行線じゃないのか、と光努は思ったが、隣のリボーンを見ると、面白いだろう？でも言うように笑っていたので、じゃあ見学でもしてよいかないかい始めた。

「けど隼人さあ、匣のこと教授するなら開いた方がつとり早いんじゃないのか？わかりやすいし」

「いいや、こういうのはまず理論を学ばなくちゃだめだな」

「炎を灯して匣に入れば開く。でいいと思うけど」

「おお、極限に光努の話はわかりやすいな」

「てめえ、芝生頭!!」

まあ子供でもわかるように教えれば、了平も理解できる。

覚悟からリングに波動が流れ、波動とリングの属性を一致させることで、ある一定量の炎を放出できる。覚悟の力とリングの精製度により、それは大きく跳ね上がり、様々な匣を開くことが可能。ただ重要なのは、匣とリングの属性を揃え、なおかつ匣を開くためには物によって一定量の炎を必要とする。そして開いた匣からは、炎を灯した動物や、武器や防具などを出すことが可能であると。

とまあこんな説明をしても、百聞は一見にしかずという言葉があるとおり、了平の場合は一度開けてみれば感覚で理解できる。別に頭が悪いというわけでは、いや学校の成績という意味ではそこまでよくないのだが、実際に動いて理解し、判断を直感に任せる

節が多々あるので、こういう時は細々した勉強よりかは大雑把に匣開けと行ったほうがわかりやすいのであった。

「と、俺は思うんだが、隼人はどうだ」

「……まあ、確かに芝生みたいな脳筋はそれがベストか」

「タコヘッド！極限になんかけなされてる気がするぞ！」

「というわけで、実際にやったところを見せたほうがいいぞ。お手本というやつだ」

なるほどと、獄寺は思う。それなら二人に説明（見せるだけだが）しながら、自分の

匣の修行もできてなんと一石二鳥！

「よしてめえら！訓練所に行くぞ！ついてこい！」

「うおおお!!極限にトレーニングだあ!!」

「わーい、ランボさん遊ぶんだもんね」

気分が一転して図書室から出ていく三人を後ろから見ている光努は、手元で口を隠しながらふつとほくそ笑むのだった。

「うまく誘導したな、光努」

「誘導とは人間き悪いな。了平達にはあれがいいと思つたし。ま、俺も少し動きたいなと思つたのは事実だけだ」

リボンと話す光努の視線は、楽しそうに獄寺を見ていた。

「模擬戦も立派な訓練だしな。それに了平と隼人、タイプが違う奴と戦ってみたいし♪」
(うまく乗せられたな獄寺。でも、俺も見てみたいし、まいっか)

隼人と了平は、それぞれ遠距離と近距離のプロ二人。修行するにはうってつけなのであつた。

『光努VS獄寺～人形争奪戦～』

ボンゴレ地下基地の誇る訓練室の一室。

やってきた光努、獄寺、山本、ランボ、リボーン。

なかなか広々としている訓練室に、入ったランボは楽しそうに騒いで走り回っているのを見て獄寺は苦い表情をしていたが、一先ず意識から外して平と光努の方を向く。

そして光努が懐から取り出したのは、右手に握られた短い3本の木の棒。

「この中に一つだけハズレがある。ほら二人共、引いた引いた」

そう言つて獄寺と平は光努の手から一本ずつ引く。

その際了平は当然のごとく雄叫びを上げながら引いて、獄寺は隣の了平の声を遮るように耳元をお塞いだのはよくある日常。そして結果、二人の引いた物とは……、

「うおおお!!極限にハズレだああ!!」

「よっしやー!ぎまあ芝生」

「なんだとタコヘッド！」

「ほらほら、お前らが戦うなよ。了平はハズレだから壁際で見学だ」

「うぬう、極限に残念だ」

組み合わせは、光努VS獄寺。

いざ、開幕！

ちやおつす、俺の名はリボン。

ダメツナの家庭教師カテキョウやってるヒットマンだ。

チヨイスに向けてツナ達は修行を始めたけど、ボイコットのことも会って微妙に浮かない感じがしてたな。ツナが京子達に全部話すまで、俺の読みだともう少しだけど、その間の仲介に光努とリルとコルが入ってくれたから、ボンゴレ基地内の全体的な空気が

少し軽くなっておりがてーな。

イリスの奴らもチョイスに参加だけど、光努達のパワーはほとんど完成されている、
 というか元から高過ぎる程に高い。見たことねーけど光努が本気マジに殴れば、了平の
 極限太陽級のパンチも出せそうだしな。リルとコルは10年後のリルとコルだから、
 正確に全部見たわけじゃねーけど既に修行を改めてやることない位に練度もたけーし。
 ただ新しい武器を手に入れたっていうのが少し気になるな。

ま、今は二人の戦いでも見てみるかな。

「さて、じゃあどうやって戦うかだけど、隼人どうする？」

「考えてねえのか、普通に模擬戦じゃダメなのか？」

「よし、俺に任せろ」

「リボンさん！何かいいアイデアがあるんですね」

「もちろんだ。ルールは簡単だぞ」

ピッ。

手に持ったリモコンのボタンの一つを押すと、訓練室の両端の床が開き、下からせり
 上がって出てきたのは、人形。

デイフォルメされたツナ人形と光努人形が一つずつ、中学の体育館並に広い訓練室の
 端と端、対面するように置かれた座った人形。

もちろんこんな時の為に用意していたミニツナ人形とミニコウド人形の2体。ちなみに他にもいろんな種類があるけど、時間もねーし今回はパスだ。

今回は二人のガチンコバトルじゃなくて、チョイスの軽い模擬戦のようなもの。ルールは簡単に、互いに獄寺はミニツナ人形、光努ならミニコウド人形をそれぞれ守り、相手の人形を手に入れば勝利だ。

「へっ、分かりやすくしていいーじゃねえか」

「俺も異論は無い。はじめるか」

互いに離れ、人形のそばに立つ。

光努は自然体に構え、獄寺はボンゴレリングに嵐の炎を灯した。

「あと、こいつもだ」

ピッ！

別にリモコンのスイッチを押すと、訓練所の床や天井、壁からブロックが大量にせり上がり、あつというまに訓練室は障害物だらけのステージになった。

この訓練室には様々なギミックが仕掛けてるからな、障害物の他にも罠とかもいろいろあるけど、今回は障害物ブロックだけでいいな。

そして罠に載せていたレオンを銃に変形させて持ち、天井へと向けた。

「じゃ、スタートだ」

パン！！

銃声が鳴り響くと同時に、獄寺は自分の匣兵器、S I S T E M A C A I を展開させた。左腕に固定する髑髏型の砲台、赤炎の矢（獄寺命名）と、腰に付けられた大量の赤色の匣の数々。

獄寺は嵐、雨、雷、雲、晴れの5つの波動を使用できる。腰に付けられた匣には、それぞれ別の炎の特性を備えた炎の弾丸、そして盾の役割を施す、歪な環の形状をした、複数の炎によるシールド。

もともとのダイナマイトのスタイルのように、中遠距離に特化した獄寺の匣兵器。

「果てろー！」

ガガガガガガガ！！

連続で発射されたのは、嵐の炎＋晴れの炎の弾丸。活性により、不規則に炎の速度を変え、障害物の裏側に、光努のいるであろう場所へと正確に弾丸が打ち込まれた。

正直に言っちゃおうと、このステージとルールは獄寺に有利なように設定されてる。

今の獄寺なら、障害物の隙間を縫うように相手に打ち込むことも可能。獄寺の学習能力はもともとたけーし、流石このS I S T E M A C A I もほとんど自力で会得しただけあるな。

メローネ基地での電光のYとの死闘を経て、技が洗練されてやがる。

今回は嵐ガット・テンベスタ猫の瓜は匣のままだけど、それでもやはり有利。

爆発がおき、爆風があたりを占める。

(手応えがねえな。どこだ?)

獄寺の両目にはコンタクトディスプレイが装着されている。

戦いは、いかに相手を先に見つけるか。獄寺の匣兵器はその性質状、大きな爆発による煙や音が辺りに充満する。その為、相手を見つめるため、コンタクトディスプレイには相手を探知し、見つける機能も付いている。獄寺の表情を見るに、まだ光努を倒せてねえみてーだな。

ボン!!

予想通り、爆煙の中から出てきた光努。障害物の上に大胆にも立ち、その手には自分が守るべきミニコウド人形が握られていた。

「あれが、隼人の匣か。じゃ、俺も少し迎撃するか」

ボウ!!

光努が懐から青い石のはまったリングを取り出して右手にはめると、青い雨の炎が放出された。

メローネ基地の情報では、光努は晴れの炎、嵐の炎、雲の炎を出したと聞いたが、雨の炎もか。獄寺と同じ、もしくはそれ以上に複数の波動が流れてるのかもしれない。見たところ、炎の純度と放出量はかなりたけーな。

光努は雨の炎を放出したまま、懐から取り出したのは、匣。

泡の用な模様が付けられた、青い匣。

見たことないタイプだけど、おそらくイリスファミリーが独自に作り出した試作型の匣兵器だな。確かメローネ基地では光努は5つ匣を持っていたらしいが、あれもその内の一つかもな。

炎を注入し匣が開いて中から飛び出してきて空中に停止したのは、直径1・5メートルはある球体。

青い光を纏ながら煌々とあたりを照らすその姿は、まるで夜空に登る月みたいであり、なかなかキレイだった。もう一つ匣から出てきた物は光努の腕にくるりと巻きついた。見てみると、そこには青い腕輪が巻き付けられていた。

「さて行くか、イリスの試作型匣兵器その4、『スプリット・メーカー十五月』！」
まるで指揮をするかのように、青い腕輪の嵌った腕を振るう光努。そうすると、月のような青い球体に、ピシリと亀裂のような光の筋が入った。

カアン!!カアン!!

木と木がぶつかり合う音が聞こえる。

ボンゴレ地下基地の一つ、和風で板張りの道場。

ここでは二人の男が戦っていた。

(時雨蒼燕流特式十一の型、ベツカタ・デイ・ローンゲイネ燕の嘴!!)

山本がメローネ基地での戦いの前の訓練の時、スクアーロから自分が1000人の剣士

と戦い力を証明する、『剣帝への道』というDVDが送られてき、山本はそのDVDを全て見た。剣士と剣士との戦いは、剣士と戦う機会の少ない山本にはピッタリであり、そこからいくつか新たな剣を編み出した。

その一つが、スクアーロのザンナ・デイ・スクアーロの牙 同様に、鋭い突きを一瞬で放つ技、ベツカタ・デイ・ローン・デイネ燕の嘴。

獲物が真剣だろうと時雨金時だろうと木刀だろうと、山本は山本。木刀とは思えない剣戟を、コルに向かって浴びせていた。

コルは両手の剣を巧みに動かして受け、後ろに下がることで回避するが、

山本は追撃するように剣戟を保ったまま、コルに向かう。剣を振る手を止めずに突き進むとは、さすが山本といったところか。

鋭い突きがコルへと追った。

対するコルは、左手に持った木刀を、右肩の後ろの方まで腕を縮め、振り払うように振るった。

「コード・サード夜ノ型参、げってんせん月天山！」

カアアアン!!

「なっ！」

コルが左手で振り払うように振るった木刀は、山本が突き出した木刀の切っ先に、正確にその柄頭をぶつけた！

自分の技が一瞬で止められた事に山本は一瞬止まってしまったが、その一瞬が命取り。コルにはもう一つ、木刀が握られている。

そのまま右手に持った木刀を振り、山本の左脇にぶつけた。

「ぐー！」

咄嗟に木刀を止まった体を動かして、脇に持つていくことに成功したが、防御するには遅く踏ん張れず、そのまま持ち上げられ壁際へ吹き飛ばされた。だが運動能力の高い山本。そう簡単に飛ばされたままにならず、吹き飛ばされた先の壁を蹴って、うまく床へと着地した。だがダメージが残っているのか、片膝を突く。

「はは……すっげー！」

自らの剣の柄頭を、相手の刃先に当てて止める防御技。

柄と刃が一直線になるように、丁度真芯で捉え、なおかつ相手が突き出して力の乗る前の絶妙なタイミングで打つことで、相手の攻撃を止めるだけでなく一瞬の硬直を生み出す。

相手の剣の動きを冷静に見極める観察眼と、柄頭に正確に当てる技術が必要とされる技。

それに加え、本来一刀用のこの技は、二刀を扱い一刀の相手に対して行えば、空いたもう片方の剣で硬直した相手にダメージを与えられる。

まさか突きに特化した技を、同じ木刀とはいえ木刀の柄で止められるとは思わなかったのか、山本は驚いたようだったが、すぐに楽しそうに笑い、視線を鋭くコルを見つめる。

（あそこから間に合うとは。まだ中学生とは思えないほどに運動能力と反射神経が抜群に高い。さすががこの時代のボンゴレの二大剣豪）

流石ヴァリアーのスクアーロとの戦いを勝ち抜いただけのことはある。

が、コルもそうそうやられてやるつもりもない。

今度は、こちらから仕掛けてみよう。

「コードセカンド、ざんかほうせん
夜ノ型式、斬華鳳仙」

光努が腕輪の嵌った腕を、指揮をするかのように振るうと、宙を漂う青い球体が動き、同じように光努は地面を蹴って障害物の上へと出てきた。

（わざわざ標的になるように出てくるとはな。罠かもしれないねえが、やってみるか）

獄寺は視線を鋭くし、通常弾頭の嵐の弾丸を飛ばす。

晴れ+嵐程の大きな加速はないが、その分嵐本来の分解を生かした威力が高めの弾丸。一直線に、障害物の上に躍り出た光努に向かっていった。

「が、甘いぞ隼人」

バツ！

光努が腕輪の嵌る腕を振るうと、直径1.5メートルはあろうかという青い球体が動き、光努の前に現れた。

「回転！」

光努の声と共に、青い球体が高速回転をし、正面から獄寺の嵐の弾丸を正面から受け止

めた。回転された球体にぶつけられた炎の固まりは、辺りに散らされ威力を殺し、最

最終的に全ての炎が分散させられて防がれた。

「分断」
スプリット

さらに光努から発せられた言葉とともに、青い球体に光の筋がピシリといくつも走った。青い光を放ち、なかなか幻想的な光景の中、青い月はバラバラに、まるでパズルのピースのように分離した。

「おお！なんだすごいが、極限によくわからん。あれも匣兵器なのか？」

「そうらしいな。けど、俺もあんな変わった奴は始めてみるぞ。あれがうわさの、試作型イリス製匣ってやつか」

光努がルイからもらった試作品は全部で5つ。

晴れ属性の深い森を呼ぶ、フィールド匣『迷いの森《フォレスト・パーツ》』

フィールド匣専用の雲属性『アップデート匣』

嵐属性の広範囲殲滅型匣兵器の『真紅の輪』
オリゾンテ

そして今回使用したのが、雨属性の防御用変形盾型匣兵器、『十五月』
スプリット・メーゼ

「この匣兵器の特徴は、相手の攻撃を『受け流す』ということ」

球体がバラバラとパズルのピースのように分割される。

中は空洞となっており、バラバラになった球体は、光努の周りを取り囲みくると廻る。

(なるほど。球の表面に当てることで攻撃を逸らす事に特化した匣兵器。あの球体自体は15のパーツに分かれて動かせることは、獄寺には相性悪そーだな)

15に分かれたパーツは全て「逸らす盾」の役割を持ち、基本飛び道具を使う獄寺とは相性が良い匣とも言える。だがこれはあくまで試作型、しかも他に類を見ないタイプなだけに、使い手の技量しだいでは良くも悪くもなる。

ダン！

障害物の上から足に力を込め、光努は飛び上がった。周りに破片ピース盾を展開させたまま、光努は跳躍し、障害物を次々と蹴って獄寺に迫った。

「果てろ、晴れ+嵐！」

ガガガガガガガガガガ!!!

連なった弾丸をセツトし、連続で晴れと嵐の炎を纏った弾丸を放つ獄寺。

晴れの「活性」により不規則に加速する弾丸は、吸い込まれるように動いている光努に向かっていく。だが、

キイイーン!!

「なにー!」

「甘い、グラブ・ジャムーンより甘いぞ隼人!」

獄寺の連続で打ち込んだ晴れ+嵐の弾丸は、光努の周りを取り囲む破片盾（ピース）によって止められたのではなく、受け流された。元々が球体だったのが15のピースに別れた盾なので、その表面は平ではない。丁度よい角度を調整し動かすことで、受けるのではなく、受け流す。

光努の周りの破片盾（ピース）によって後ろに受け流された弾丸は、後ろの方で派手に爆発した。

「おお! 情けないぞおタコヘッド! 「うるせえ芝生頭!!」とところで “くらぶジャブ” とやらはなんなのだ? ジャブの一種か?」

「クラブジャブーンだぞ了平。インドの甘いお菓子のことだ。それよりも」

（獄寺の攻撃をこうも受け流すとはな。かなり使いにくそーな匣だが、さすが光努だな。使いが絶妙すぎるな）

利点としては、受け流すことで勢いが削がれず、そのまま突っ込めること。事実光努は獄寺から攻撃を受け続けているが、匣展開前の最初の攻撃と違って立ち止まらず、速

度を落とさずに障害物の上を渡り歩いて、目的のミニツナ人形まで迫ってくる。最も、獄寺の不規則な速度の晴れ+嵐の弾丸を完璧に受け流すことは、光努の非常識な程に高い動体視力があつてのことだが。

バシユ！

獄寺が、匣から別の弾丸を取り出し、フレイムアロー赤炎の矢にセツトした。

(別の弾丸か。だけど、)

構わず突つ込む！

光努は床を蹴り、構える獄寺に向かっていく。

構えた獄寺は、静かに光努をみる。瞳のコンタクトディスプレイは、光努をロックオンしていた。

(ここだ！嵐+雷、フレイムサンダー赤炎の雷!!)

獄寺の弾丸で、最も攻撃力の高い炎の弾丸。 “分解”の嵐と “硬化”の雷。雷を纏った炎は、光努が空中にいるわずかな時を見逃さず打ち込まれ、空中なので回避することもできず、吸い込まれるように迫った。

「さすが、いやな所攻めて来たな隼人。だが、ハーフ半月！」

カシヤカシヤカシヤン!!

破片盾と破片盾同士が合わさり、光努の前に半球が出来上がった。

そしてそのまま半球でもって、獄寺の赤炎の雷を正面から受け止めた。が、ただでは受け止めず、半球を高速回転させて、炎の威力を散らし始めた。

(やっぱり光努の反応ははえーな。流石と言いついてーけど、獄寺のあの弾丸を、雨の炎を纏つてるとはいえ、正面から全部受け止めきれるとは考えにくい。けど、一瞬でも止めることができたんなら)

そう、一瞬でも止められたら、後はよければいい。

半球の回転と薄く纏われた雨の炎の「鎮静」により、獄寺の弾丸の中で最も攻撃力の高い赤炎の雷と光努との間にいれ、一瞬でも攻撃を受けることに成功した。

避けた後は自動追尾機能は無いらしく、一度よければこつちのものでもいうように、光努はそのまま獄寺の下へと向かう。受けた半球は、直にまたバラバラになって攻撃を後ろへと流し、再び光努の周りへと舞った。

(さすがに赤炎の雷は連続でだせねえけど……予想通りだ!)

獄寺の目が光つたような気がした。

獲物を誘い込むことに成功した、狩人のように。

(…何か来そうだ)

逆に、野生的な獣のように、何かが来ると光努は直感した。

そしてついに二人の距離は、およそ数メートルにまで縮まった。

光努の周りには展開された破片盾と、自分で直に持っているミニコウド人形。

赤炎の矢と、複数の匣兵器。そして黒い骨を模したフープ状のシールドを複数周りに展開し、後ろにはミニツナ人形が座っている。

新たな弾丸を装填して、光努へと向かって打ち込んだ。

一筋の光の入った、紫ヴァイオレット色の弾丸。

(この炎、まさか！)

光努の予想通り、獄寺の打ち込んだ弾丸は、雲十嵐の弾丸。

特性は、「増殖」と「分解」！

光努へと向かった弾丸は、途中で無数に増殖して枝分かれを繰り返し、一瞬で広範囲を線のような弾丸で埋め尽くした。

点として動いた弾丸と比べ、一点から枝分かれし続ける雲属性の「増殖」を備えた獄寺の攻撃。受け流すということは、ほぼ不可能に近い妙手の弾丸だった。

(手応えはあったはず。けど、あいつがこれくらいでくたばるとは思えないな……)

獄寺は容赦なく見つめる。ブツ飛んだ性格と戦闘能力を誇る光努のため、その警戒も正しい。しかし手応えはあった。あとはどの程度のダメージを与えられたのか。数

メートルとはいえ、結構な近距離。光努が地を蹴り飛び出した瞬間を狙ったのだ、空中から横へと跳んで逃げるのはほぼ不可能のはず。

カラン、カラン。

爆煙と共に獄寺の足元に転がってきたのは、光努の周りに展開されていた青い破片盾（ブルーサンダー）の数々。赤炎の雷を受けた半球状態はさすがに保てなくなつたのかバラバラとなり、15の破片盾（ピース）があたりに散らばる。

それを横目に、獄寺はまっすぐに雲の弾丸を飛ばした先の爆煙を見つめる。

「!!」

だが、獄寺が驚いたのは、確かによれないタイミングで攻撃をしたにもかかわらず、光努がそこにはいなかった。

（いない！光努の奴は!?!? 上!）

獄寺が上方を向くと、天井に足をつけ、こちらを見る光努の姿があった。

「てめえ、いつの間に!」

（使い方がうまいな、光努）

リボーンは横から二人の戦いを見ていたため、光努が何をしたのかわかった。

（光努の奴、球をわざと自分にぶつけて上に逃れたな）

咄嗟に、半球をつなげて自分にぶつけ、しかもそのまま勢いよく飛び上がり、一瞬で獄寺の雲の弾丸の範囲から逃げ出した。

「地がなく宙で動けないなら、足を置いたための地を用意すればいいだろ」
 にかつと笑う光努に、獄寺はも若干苦笑いする。なかなかにてたらめなことをしてくる。

けど、そうそう何度もうまくいくはずない。

「その足を置いたための地は、今は使い物になってないみたいだぜ。果てろー!」

上空にいる光努に向かって、赤炎の矢を構える獄寺。

だがその様子を見た光努は楽しそうに笑って言葉を紡いだ。

「フエンズ柵圍!」

コオ!!

「しまっ!」

獄寺が驚いたのも無理はない。足元に散らばっていた破片盾ビースが一斉に飛び上がり、獄寺を球に閉じ込めた。

既に炎が切れたと思い、全く警戒をしてなかった。

シールドをはる暇もなく、一瞬で炎を灯した破片達は獄寺を取り囲み、先程まで獄寺の立っていた場所には、一つの青い球体が残ったのだった。

獄寺は一人、暗闇の中に包まれた。

（くそ、まだ炎が残っていやがったのか。盾としてはこの匣兵器は強度が低いみたいだし、フレイムサンダー赤炎の雷で突き破る！）

ガシャン！

髑髏の口に弾丸を装填し、腕を上げて上を見据える。

赤い光と緑の光、嵐と雷の炎が纏われた。

「果てる!!」

ドゴオオン!!

受け流さなければ、意外と強度の低いこの球。それに加え、破壊力抜群の嵐+雷のため、容易に内側から青い球は爆ぜた。

ようやく炎が切れたのか、あたりに破片を飛び散らせ地面に落とす。

爆煙の中、獄寺は光努の居場所を探った。既に上にはいなく、気配を探ると、驚く程近くから気配がした。

が、時すでに遅かった。

獄寺の振り向いた後ろには、守るべきミニツナ人形をもった光努がいた。獄寺がこちらを向いたのを無言で確認すると、親指と人差し指を立ててミニツナ人形の頭部に当て、銃を打つような仕草をして、楽しそうに笑った。

「BANG!」

「そこまでだぞ」

軽やかな二人の間に降りてきたリボン。

旗へと変身させたレオンを持って、光努の方に向かってバツとあげた。

「この勝負、光努の勝ちだ」

「だからさ、近距離の戦いもなんか考えた方がいいだろ。最後のあれ、失敗すれば自分も爆発してたぞ」

「つつてもなあ。俺のSシIスTテEテMマAマ.シCシ.エAエ.アIイについた近距離対策はシールドと

瓜くらいだしな。」

「瓜？ああ、あの仔猫か。そういえばあれって進化系があるんだってな。猫の次が豹になるとか。なんでライオンじゃないんだろ？」

「ライオンはすでに使われてるみたいだからだろ」

「それよりシールドってあれ近接戦でも使えるのか？強度とか」

「嵐と別の炎を複合してるからそこらの盾、少なくともさつき光努が使った球体よりは強度は遥かに高いはずだ」

「でも抜けられたらどうするんだ？隼人丸腰、いや実際には武装してるけど、全部遠距離攻撃で爆発物だから自分も巻き添え喰らわないか？」

「……そう言われとそうだな。まあそうそう近づかれることなんてないからな。嵐の守護者の使命は鳴り止まない怒涛の責めだからな」

「俺は近づいたぞ」

「てめえはもはや人じゃねえ。サイボークか何かだ」

「隼人ひでえ」

「それに今回は瓜も出してないし、機動力のホバーも対して使ってなかったしな」

「まあある程度機動力があるなら相手から離れるのも難しくないか。それで離れて攻撃を飛ばすと」

「全員お前みたいに機械仕掛けの足じゃねえんだよ」

「誰が機械仕掛けだ。どこを見てもバネなんてついてないぞ」

「そうは見えねえけどな」

「やっぱひでえ・・・」

わいわいと食堂の机の一つに座って談笑(?)している光努と獄寺の二人。

別の机で食事をしている了平とランボと一緒にいるリポーンは、そんな様子を見て楽しそうに笑っているのだった。

「お疲れー。あれ?リポーン、光努と獄寺君何してるの?」

「戻ったかツナ。修行の後の反省会だな」

「珍しい組み合わせだね」

基本的に獄寺がツナ以外にはほとんど喧嘩腰の為、割りと仲良く(?)話している光景はなかなかツナから見て珍しい。現にツナが入ってきたことにも気づいてないくらいに、夢中に話している。

「ま、こういうものたまにはいつか」

いつもと違って光努とよく話す獄寺に、ツナは微笑ましいような表情をし、自分も夕食の席に着くのだった。

『I want to see your smile』

並盛町の地下に存在する風紀財団地下本部。つまりこの時代の雲雀のアジト。

そんなアジトの一室、純和風の部屋の畳の上で、携帯片手に本を見ながら寝転がっている人物が一人。

座布団を枕にうつ伏せに、手元にポテトチップスのコンソメ味を手にとってパリッと食べ、本をペラりとめくる。なかなか広いだ態勢のその人物は、肩と耳で携帯を挟み込み誰かと話しているのか、楽しそうに笑っていた。笑うたびに、柔らかそうな白い髪がふわりと揺れる。

「そうそう、俺らまだ少しこっちいるから。．．．で、どうすんの？．．．あ、それでいいのか、ナイスナイス。気がきくじゃん」

寝転がって寛いでいる少年は、白神光努。

イリスファミリーの2代目ボスにして、ファイオーリングを持つもの。

たまに表記しておかないとなんだか忘れそうなので、あえて表記しておこう。

と、ガラリと麩を開けて入ってくる新たな人物。

イリスフアミリー第2戦闘部隊『シヤガ』所属、コル。

柔らかな黒髪に、黒いシヤツと七分丈のパンツというラフな格好。スポーツタオルを首から下げ、少し髪が濡れていることから、さつきまで風呂に入っていたことがわかる。

「おう、そんじやまたなー」

ピッ！

携帯の通話終了を押し、うつ伏せの状態から光努は起き上がってコルの方へと向き直った。

「おかえり。武どうだった？」

すでに修行が終わった光努達よりも、コルと武、リルとクローム達の修行はもう少し続いたらしく、さきほどコルもリルも終わって風呂に入って戻ってきた、ということらしい。戻ってきたのはコルが先でリルはまだクローム達と風呂中らしい。

「さすがこの時代の剣豪。本当に中学生と疑いたくなるボンゴレフアミリー。あ、そんな特集とか組んだテレビ見てみたいな」

「あ、俺も見てみたい。人のことは言えないけど」

さすがリボンにヒットマンの才能がある言われるだけある山本。昔作られた並喧嘩の強さランキングが雲雀に次いで2位なだけある。ちなみに3位が獄寺らしい。

そんじよそこらのマフィアじゃ相手にならないくらいの野球で培っただけとは思えない運動能力を持っていたが、それがヴァリアーとの戦いの為に時雨蒼燕流を覚え、本格的に剣士になり始めてから更に強化された。

もはや中学生と思えない。10年前の時点でスクアアロに並び立つ剣士と称されてもなんらおかしくない。そう言われたいのはスクアアロを倒したという事実ができた日と、剣士としてのキャリアがかなり浅い為である。

「炎なしで木刀だけの模擬戦だったけど、さすが武。それでも強かったよ」
「おーさっすが。どうだった」

ふむ、と上の方を見ながら思い出すようにするコル。ちやぶ台に乗せた、さつきまで光努の食べていてポテトチップスに手を伸ばしてパリツと食べる。

「スクアアロの100本ビデオを見たらしいし、あれで匣と炎を併用したら強いぞー。幻騎士との戦いは、術士との戦いをもっと知ってれば違ったかもな」

メローネ基地での山本VS幻騎士。

最終的に山本が敗北したのは、幻騎士の最初から展開していた幻術、匣兵器のスベットロ・ステイブランキ幻海牛を見破ることができなかった為。障害物が大量に設置された訓練室を、何

もないフィールドに見せられた為、突進して障害物にモロに顔面から激突したという。「実力が出しきれてなかったからな。剣術と匣と炎の使い方はセンスあるんだが。まあ

幻術に関しては苦手なやつが多いし。光努はどうするんだ？」

「俺？俺あんま幻覚効かないし。少ししたら目が慣れる」

骸との戦いの時も、何度か地獄道の幻覚を見たら後半はほぼ効かなかったという。

(……幻覚って目が慣れる物だっけ？)

そんな光努の発言に、コルは割りと不思議に頭に疑問符を浮かべるのだった

「幻覚が無い分、スクアールとの戦いはまだ大丈夫だったな」

「あれはすごかったらしいね。ぜひとも見たい。ボンゴレリング争奪戦がDVD化されてないかな」

「皆欲しがりそうだな(ボンゴレの機密満載だし)」

ガラリ。とそんなこんなで雑談していると、魅が再び開いて新たな人物到来。

入ってきた少女はリル。コル同様、少し濡れた艶やかな黒髪に、着ている浴衣が和風な部屋とマッチしている。柄が鏝柄なのはなかなか彼女らしい、というか女性用の浴衣にその柄はどうかと思う光努なのであった。右手にタオル、左手に何やら箱を持っていた。

「ただいま」

リルは押入れから座布団を用意して座り、手に持っていたタオルはコルと同じように首にかけて、もう片方の手に持っていた箱は机の上に置いた。

「あれりル。その箱何？」

「うん、ルイから宅配便が届いたの」

「へえ、何届いたの？」

言いつつ、この地下アジトにどういうふうに住配便が届いてリルが受け取ったのかが非常に気になる光努だが、そんなこと考えてたらキリがないなあ、と思いつつリルの話を聞きながら、コルが用意した湯呑の中のお茶をすすする。

「ルイ編集のメローネ基地の戦いダイジェストDVD BOX 『BUTTLE OF MELONE 《バトル・オブ・メローネ》だつて」

「ぶほおー」

思わず吹き出す光努。

(なんてすごいタイミング、ルイ！)

「そういえばリル。クロームどうだった？」

DVDの中の一枚（山本VS幻騎士）をテレビで見ながら、今日の修行風景を聞く光
努。

リルはクロームの修行をビアンキとイーピンと共に手伝つたのである。

幻覚能力はマーモンのプログラムを使用しての修行として、基本的に近接戦闘の格闘能力の向上を担当していた。格闘能力ならビアンキやイーピンよりリルの方が高いので適役であった。さて、それではいったいクロームはどうなったのか。

「近接格闘のレベルが3から8くらいになったかな」

「いや、微妙にわかりにくいんだけど。というか最初0なの？」

「レベル0は構成員レベルには余裕で勝てるくらいからのスタート。レベル10なら銃弾を余裕で避けるくらい」

「最低ライン高！それで最終的にはどうなるんだ？」

「レベル15なら熊も一撃！そしてレベル20なら一人でマフィア制圧可能（素手で）！」

（ということは後少しでクロームは銃弾なら余裕でよけられるレベルになるのか。一体何の特訓したんだろうか……）

軽くコルがドン引きしていたが、そんなことはお構いなしにリルはリモコンでテレビを操作しているのであった。

「それにしてもこのDVDどうやって撮ったんだ？ルイいなかったのに」

「これ？光努一回獲洞山に行った時にルイの雲綿毛見たでしょ？」

「ああ、なるほど。あれ使ったのか」

極少の綿毛型の監視装置である雲綿毛。ソツファイオートネ、ヌーゲオウ、フオレストスタバ、バシ

実は光努の開いた『迷いの森』の匣兵器の中にいくつか種が仕込まれていたらしく、雲のアップデート匣を使用して開花、増殖と同時に辺りに散布するという仕組みだったらしい。

そんなこんなでできた1000を有に超え映像と、実際に戦った者の証言とメローネ基地の監視カメラのハッキング映像と、あとはルイの編集技術と多少のCGを組み合わせ、なんとDVDBOXが無事に完成しましたと。

「あれ？今の説明なんか変なの混じってなかったか!？」

「え、そうかな？」

きよんとするリルだが、光努は内心あれえ〜と思っている。決して光努がおかしいわけでないが、微妙にリルとコルの価値観がずれているだけである。人よつての犯罪ラインがなかなか違うのがまた面白い。何が正しくて何が悪いのか、それを考えるの

は本人なのか、周りなのか。

「そういえばみんなでお風呂入ってたんだけどね」

光努の疑問はそのままテレビを見ていた光努、リル、コルの三人だったが、リルが思い出したように光努とコルに話しかけた。ちなみにテレビ画面には、10年後了平VSバイシヤナの戦いで、丁度アッパーカットを了平が決めたところだった。

「京子とハルがボイコット一旦休戦するみたいだつて」

「ありや、こつちが先に折れたのか？」

「なんだかんだ言つても、二人共ツナ達心配してるからね。このままだったら二人が先に罪悪感で潰れちゃうよ」

元々、ツナはそうそう隠し事ができるような性格ではないし、京子達もボイコットなんてするような人物ではない。こうなつてはやらざるを得ないとはいえ、無理をしているには変わりないため、どちらも折れない限り、このままだと全員がいつか爆発してしまふそうだ。

「ツナは微妙。ちよつときつかけでもあれば話しそうだけどなあ」

「そのきつかけ作り、明日ビアンキがこつそりするんだつて」

嬉しそうなリルの言葉。リルもコルも、同じ場所で生活しているのに別々の生活をしているということとはあまり良いとは思ってないからか、隣のコルも笑っている。

「てことはボーイコットも明日で終わりか。そりゃ丁度よかった。ナイスタイミング」
「え、なんで？」

「明日になつたらわかるわかる。じゃ、そろそろ寝るか」

光努の言葉に疑問符を浮かべるリルとコルだが、明日になればわかるというのであれば待とう。

リモコンを操作してディスクを取り出し、DVDをしまつて、今日は一先ずおやすみ。

そして次の日、光努はボンゴレアジト内を歩き、作戦室に向かっていた。

デイーノが来てゐるらしく、他のやつら、ツナ以外はすでに集まつて修行風景を聞いているようだ。ちなみにツナはビアンキの策略にうまくはまっている。

ビアンキが安全で大丈夫と京子に地上に出て買い物を促し、ツナには京子が怒って出て行つたと言つて後を追わせる。修行ばかり、たまには息抜きも必要とのことだとビアンキも考え、リボンもそれに同意したのであつた。

今頃何してるかなあ、とか考えていたら、前方にツナを発見した。

その表情を見てみると、どこか憑き物が落ちた用な、少し晴れやかになつていふような気がした。多方、全部話したんだらう。でも少し浮かなさそうなのは、みんなに黙つて全部話したことに、ちよつと罪悪感。けどすぐに報告しに行くところだなあと、光努は思った。

「どうしたんだ、ツナ。全部話して一先ずつかえが取れたつて感じだな」

「光努。よくわかつたね」

「ビアンキにそそのかされたんだつて？それで京子追いかけて全部話してついでに帰つてハルにも全部話してみんなに報告しに行くところか」

「本当によくわかつたね！もしかして見てた？」

「ツナの行動はわかりやすいからな。ちよつと聞けばあらかた想像がつく」

「そんなに？」

「まあそいつの性格がわかれば、そのあと何するかなんとなく想像つくだろ？まあそんな感じ」

「そうそううまくいかないと思うけど……」

「それで、どこまで話した？」

ツナが京子とハルの二人に話したのは、今までのことを全て。

マフィア、ボンゴレファミリーの10代目候補であるということ。黒曜ランドの戦い、リング争奪戦の戦い。そして今回の、メローネ基地の戦い。京子達の中で疑問だったことを、全て話したそう。並盛中生が襲われた戦いの真実も、スクアーロに襲われた時のことも、相撲大会のことも、いや相撲大会はマジで信じていたようだ。嘘が下手すぎる了平も了平だが、すんなりと信じる京子も京子だなあと思う光努なのだった。まあそれも、兄妹そろって純粋なのだというのも感じるのだった。

「でも京子ちゃんにヒントをもらって匣こいつのことが少しわかった気がしたよ」

そう言うって見せたのは、オレンジ色の、大空のボンゴレ匣。

最初に開けた時は、炎の塊の竜の用な異形の怪物が現れ、死ぬ気状態のツナをも圧倒していたのだが、ディーノ曰く、それは匣の間違った姿。正しく開匣できるまで、ツナは修行に家庭教師をつけず、一人で修行だったのだが、今回の件で何かを掴んだらしい。「いいなあ、匣。俺も欲しいな」

「光努ってたくさん匣持つてるって聞いたけど」

「全部試作テスト用だし、俺専用ってわけじゃないからな。どうせならイリス匣とか

作ってくれてもいいのにな」

「あはは。まあ、ルイに言ってみたら？」

「言ってるよ。けど、もうそろそろだつてさ」

ほぼ完成しているという、ルイからの連絡もあつた。あとは、仕上げを御覧じろつてね。

「けど、本当に話して良かったのかな？」

「なんだ、今更後悔してるのか？」

「そういうわけじゃないけど」

自分から話しておいてだけど、これからマフィアのこのに京子達は少なからず関わる機会が出てくるだろう。基本一般人の二人はそうそうかかわり合いにはならないと思うけど。

「話したあとは、二人の様子どうだった？」

「・・・二人共、笑ってた」

そう言つてツナの脳裏に浮かぶのは、笑つて気にしないでという、ありがとうという京子とハルの二人の表情だった。

「だったら、そのためには頑張らないとな。知つてもなおお前を受け入れて、笑つてくれるんだから」

「光努・・・うん、そうだね」

ツナも笑う。光努も笑う。

笑ってくれてる二人の為に、全てを知った二人の為に。

ツナ達がそれぞれ生活する居住スペースや、食堂キッチンと同じ地下7階にある食料庫。一先ず買い物をした食材はここに置き、後々料理の際にここから持っていかれる。

前はミルフィオーレが街を監視していたため、満足に買い物にも行けず、基本的に基地内にある家庭菜園でできた野菜などを使って料理をし、食料庫に貯めたりしていたのだが、メローネ基地の戦いが終了し、ミルフィオーレの監視の目がなくなった今のこの

時は、外に普通に買い物に言つて、必要な物を揃えることができる。

当たり前前にできることと思つていても、いざ外を歩けない状況からまた普通に外に出れる状況になると、何とも自由で安心する。だからこそ、夕飯の買い出しなんてことだつて、普通に出かけられる。

そんな食料庫に向かう人物。後頭部でポニーテールに結つた柔らかな黒髪を揺らしながら、そこにいた人物へと声をかけた。

「おかえり、京子」

そう言われて後ろから歩いてきた人影に気づいたのか、買い物をしてきて手に持つ食材を入れていた手を止めて、後ろを振り向いた。

「あ、リルちゃん。ただいま」

10年前の時点で、リルとコルはフウ太と遊んでいるとき、何度か京子とハルの二人と会つたことがあるらしい。もとより人懐っこい性格のため、すぐに京子達と仲良くなつた。だからなのか、10年後のリルとコルと会つたときはかなり驚いていた。

「ツナに、全部聞いたんだつて？」

「……うん。話してもらつたよ。今までのこと、全部」

話してもらえて良かったのか、少し微笑んでいるけど、内心は落ち込んでいるのが、リルにはわかつた。

「私達のことでも聞いたの?」

「えっと、それなんだけどね」

イリスファアミリーというマフィアに所属していて、光努がボスでリルとコルも一緒のファミリーらしい、という話はツナから聞いたが、実際にツナがイリスファアミリーで知っていることというのは意外と少ない。

灯夜やルイ、槍時、獄燈籠といった面々とはツナは面識もなく、戦っているところに光努のみが突っ込んで黒曜戦やリング争奪戦も戦っていたため、本当に他のイリスファアミリーメンバーと接する機会が、リルとコルに多少あつたかな、くらいである。

いや、槍時とルイと獄燈籠は会つたことあつたが、京子が知らなかつたから説明のしようもないか。

結果、ボンゴレファアミリーに関することは言われても、ツナ自身があまり知らないイリスファアミリーの情報は微妙に表面だけ伝わつたのであつた。

「あはは。そういうえばイリスとしてつていうより、昔は光努が一人でツナ達のところに行つたから知らなくて当然か・・・」

若干苦笑いするリル。

まさかそんなところでツナの説明が詰まるとは思わなかつた。

「イリスファアミリーつていうのはね、マフィアつて言うけどどちらかといえば企業、つま

り会社なんだよ」

「会社？てことは光努君って社長さんなの？」

「うん、そう。並中に通つてた時の光努つてたまに休んでたりしてたでしょ？あれつて会社の用事だったの」

「あ、なるほど」

思い当たる節があるのか、納得という表情をする京子。

定期的に灯夜によって連れ出されて日本国内国外飛び出るため、並中をたまに休むとということがある。学校ではどういふ説明がされていたのか、クラスメートには割り印象的だったらしい。そりやそうだ。

「マフィアだけど、会社なの？」

「うん。光努も社長だったけど、ツナと同じマフィアのボスつてことだよ」

「・・・そう」

マフィアのボス。

その言葉が、自分が生きてきた中で創作の中でしか聞かないような言葉だと知っている。自分の周りにはいるということは、全く知らなかった。

兄である了平がリング戦の時に、何かしているということを知っていたが、その時は

了平の相撲大会をしているという言葉を信じた。

兄は、何も危ないことをしていないと。メローネ基地での戦いも、ツナ達が過去へ帰るために何かしているのと知っていたが、命の危険がある戦いをしていたということを目分達は知らなかった。

「バカだよ、何も知らないのに。また戦いがあるって言ってたのに、家事をボイコットなんて」

京子の表情は落ち、大きな瞳は潤んでいる。

自分たちの代わりに、過去へと帰るために、修行する。それなのに、料理もつくらず家事もボイコットをする。何も話してくれなかったからできたことだけど、全てを話してくれた今、一気に罪悪感が込み上げてきた。

「みんな・・すごく、辛かったんだろうに・・」

頬を伝い、その瞳には大粒の雫が流れ落ちていた。

そんな京子に、リルは柔らかな微笑みを浮かべ、そつと抱きしめた。

「・・・リルちゃん？」

「京子は悪くないよ。ハルも、ツナも、誰も悪くない」

京子はリルの胸に顔をうずめ、リルは京子を優しく撫でる。

「ただツナ達はみんなを心配して、京子達もみんなを心配していた。もちろん光努も、私も、コルも、すごく心配していた」

優しい音色の声に、京子は瞳を閉じて、涙を流す。

「もう心配かけないように、明るく振舞ってたけど、今はいいよ。泣いたっていいんだよ」

「リル・・・ちゃん・・・うん」

「ボイコットも終わり。またみんなのために、栄養つけてあげよ。支えてあげて、みんなを。戦いはまた過酷になるかもしれないけど、京子達が笑顔でいてくれれば、みんなも頑張れる。だから、笑って京子」

その言葉に、京子はこの時代にはいない、まるで母親のような声に、涙が頬を伝う。

「・・・うん！」

そう言った京子の表情は、華のような眩しい笑顔に。

いつの間にか頬を伝っていた涙は、治まっていた。

『当然100点満点の採点で』

光努とツナ、二人で作戦室の中に入ると、すでに集まっているらしく、雲雀の家庭教師をしていたディーノ、それにリボン、獄寺、山本、了平、ジャンニーニ、フウ太、コルと男共が揃っていた。

「おうツナと、光努も一緒か。調子はどうだ？」

近況報告を入ってきた二人に尋ねるディーノ。

ツナは一先ず京子にヒントをもらい、自分が一度暴れさせたボンゴレ匣はもう大丈夫と言うと、流石と皆いつて獄寺は当然のごとく褒め称える。

これまで匣が正しく開匣できるまで一人で修行のツナだが、正しく開匣できれば修行の幅が広がる。というより、開いてからが本格的な修行の始まり。当然チヨイスをするにあたって他にもいろいろとやることがあるのだが、もちろん同時並行である。

「光努は何してるんだ？」

「俺か？ツナ達の修行を手伝っているのさ☆」

「なあツナ。なんだかすごくいい笑顔で言ってるよ嘘っぽく見えるんだが、俺だけじゃないよな？」

「つーか、絶対わざとわざとらしく言ってるんだろ。まあ間違っちはいいないが」

「ディーノの言葉に代わりに獄寺が答える。

とりあえず光努がツナ達の修行中に、何をしてたかといえば、獄寺と戦うのとどこかへ出かけること。あれ？そう考えるとあんまりツナ達の修行手伝ってないな。

「ま、こっちはこっちでやることもあったし」

「そういえば光努どっか行ってたね。どこ行ってたの？」

「ツナ、覚えておけ……チョコレトの栄養価はすげー高いぞ」

「ねえ、その話をなんでしたの!?光努一体どこ行ってたの」

その時、ツナの肩を後ろから叩いたコルが、おもむろに口を開いた。

「ツナ、世の中には知らない方がいいこともあるんだよ」

「コル、どうしちゃったの!?なんか光努みたいなんだけど!」

「まあまあツナ。そういえばコル、ルイはどうした？」

「一足先に向こうに行っちゃったよ。僕らもあとで合流予定」

コルの言う向こうとは、イリスファアミリー本拠地。正確にはこの時代は跡地である

が、先にそこに向かったルイ。だがルイだけでなく、獄燈籠も灯夜も今はそこにいる。チヨイスに向けて動いているのは、ツナ達だけではなかったということ。

「そうか」

コルの言葉にふっと笑うディーノ。一先ず修行の様子は上々。チヨイス戦闘期もそろそろ半分になってきた。あとはこっからスパートをかけるだけ！

『ラン♪』

そんな時、部屋に設置されたモニターから音が流れた。

『ラン♪ラン♪ラン♪ラン♪ラン♪ラン♪』

鳴り響く、テレビの子供向け番組の用な音に何かと思ったが、ジャンニーニの様子からこれがテレビ放送などではないことがわかった。

「何者かに、回線をジャックされてます!!」

作戦室の壁のモニターには、パ○クマンの用なキャラクタがふよふよと漂い、だんだんと数を増やして画面中央へと集まっていく。

『ランランランラ〜ン、ビヤ克蘭♪』

その掛け声と共に画面中央に現れた花から現れたのは、デIFOオルメされたキャラクタ―となっているが、間違いない。白蘭！

映像がひびを入れて割れて、普通のモニター画面の映像に切り替わり、そこに写っていたのは、美味しそうなパフェを食べている白蘭の姿だった。

『ハハハ、どう？面白かったかい？』

メローネ基地でホログラムとして登場したそのまんまの姿。スプーンを加えてパフェを美味しそうに食べている姿は、なかなかに彼らしい。

「30点かな。パ〇クマンの動きとかなんか微妙。背景も動かないし、音が悪い。特にキャラがすごく微妙かな」

「光努が結構ダメだししたあ！っていうかキャラって白蘭本人だよな!」

『ハハハ、厳しいな光努君は♪結構自信作だったんだけどな』

割りりと辛辣な光努の意見に、特に気にしないというふうに楽しげに笑うモニターの中の白蘭。

「てめえ、一体何の用だ!」

『ハハ、そうとつつかないですよ。チョイスに関しての業務連絡さ』

獄寺の言葉に白蘭が返した言葉は、チョイスの業務連絡。

光努も思っていたが、10日後としか言っていないのに場所や時間等もつと細かい部分を全く聞いていない。しかもチョイスのルールも入江が想像しているだけでそれが正確なのかどうかも全然わからないという、連絡放棄もいいところである。

『というわけで、日程は6日後のお昼の12時。場所は並盛神社に集合ね』

どんなことをいうかと思えば、並盛神社と並盛町内の場所を指定してきた。

日時はともかく、まさか場所が近場を指定するとは思わず、ツナの顔に同様が走った。

「まさか、並盛で戦うの!!」

『んー、どうだろうね。とりあえず必要な準備して仲間は全員連れてきてね。少なくとも、過去から来たお友達達は全員だよ』

「!!」

その言葉に、ツナ達は反応する。

過去から来た仲間。ということとはつまり、ツナ達だけでなく、京子やハル、非戦闘員である彼女らもチョイスの場に呼ばなくてはならないということ。

そしてそれは、マフィアのことを全て知られてしまうということ。

(といってもすでにツナから話を聞いて全部わかっているのだが、隼人達はまだそのこ

とは知らないんだっけな)

といういろと何げに知っている光努は慌てふためくツナや獄寺達を見て若干傍観気味。ツナは普通に戦いの場に呼ぶのに驚いている。

戦いの場に呼ぶのは光努も気は進まない方だが、それと同時に特に問題ないと思っ
ているのは、選択したプレイヤーのみが参加するゲームであるチョイスなら、おそらく参
加しない限りは危険な目には合わないだろうと思つてのこと。

『みんなで来ないと、君たちは失格だからね』

「そんな！」

白蘭の無情な宣告に、ツナは愕然となる。

『光努君も、イリス側もちゃんと来てね。ちゃんと君以外の、過去からきたお友達と一緒
にね』

「.....」

その言葉に、コルは少し眉をひそめる。

(過去からきたお友達？光努意外にも、イリス側の誰かが来ているということ?)

「あ、そうだ。光努も並盛神社に集合なの!？」

ツナからの最もな質問に、ああそういえばと他のみんなも光努以外は思い出す。

まあボンゴレイリスで基地ユニットは一つで合同とかいうのは、ありえない話でない

が、今更そんなことをいうのか？という感じで答えを待つてると、予想外の言葉がモニターから流れた。

『光努君らイリスファアミリーは同じ時間のイリス本拠地集合だよ。ていうか、光努君には説明してあつたと思うけど』

「「「「え!?」」」」

全員一斉に光努の方へと向いた。

見られた当の本には俺？というふうにしていたが、その顔に真剣味を帯び、白蘭の映るモニターのままに立つ。いきなり光努にしては珍しい表情に作戦室の中にいたツナ達は、白蘭の言葉に光努を見ていたことも忘れ、二人の始まる会話に片付をのみ、そして光努は口を開いた。

「おい、日本時間で12時つてことは向こうだとちょうど日が昇るくらいだろ。もつと遅くならないのか？」

ドドドド!!

ツナ達は盛大にズッコケた。

「てめえ、今はそんなことはどうでもいいだろうが!!」

「いや、今言うのはどうかと思うが一応間違つたことは行つてないぞ・・・今は別に聞きたいことがあるけど」

痲癩起こした獄寺だが、さすが10年後のデイーノ。大人な対応で獄寺の肩に手を置いて一先ずなだめる。当然、納得はしていないのだが。

『綱吉君たちの方が君らイリスと比べて平均年齢が低いんだから、時間くらい合わせてあげたら?』

「えー」

『ていうか僕も同じような時間だしいいでしょ』

「それもそうか」

「結構あっさり納得した!」

割りとすぐに納得にツナ驚愕。条件がイーブンなら、まあ納得せざるを得ないか。

というか自分の時間を知らせずにツナ達にお昼の12時という中々いい時間帯を指定するとは、案外白蘭もいいところがあるのか。いや、案外前日はアジア圏内に泊まるとかして時差をごまかすかもとも光努は思った。

『じゃ、あとは当日に。修行頑張つてねえ』

「あ、ちよつと待つ」

プツン!

ツナの静止も聞かず、白蘭は笑顔で手を振りながら一方的に通信を切った。後に残ったモニターには、最初に開いていたジャンニーニの作業が画面が後に残り。ツナ達は唾

然とするのだった。

「で、光努はいつ白蘭と話したの？」

無言の空気の中で最初に言葉を発したのは、コル。

ジト目で光努を睨み、珍しく少しご立腹の様子。若干漏れ出ている威圧感に、思わずツナがびくりとってしまった。

「正一に直通電話ホットライン番号聞いて昨日の夜電話してたんだ」

そう言われてコルが思い出すのは、昨日の夜に風呂上りで雲雀のアジトで見た光景。光努がくつろいで誰かと携帯で電話していた光景。

(あれか……)

誰と話しているかと思えば、まさか白蘭と話していたとは。

それにリルが今日京子とハルの二人にツナが話すかもって話をしたとき、光努はちようどいいタイミングと言っていた。

(なるほど、白蘭が業務連絡するってことも知ってたのか)

後に残ったのは、ジャンニーニがキーボードを打つカタカタカタという音のみだった。

「チヨイスの日程に関してイリス側はどこに基地とか作ればいいかわからなかったし、白蘭に聞いてみたら今日業務連絡するって言ってたんだ」

まさか不明点があったとはいえ、敵のボスに直接電話するとは。光努の命知らずというか、度胸があるというか、こういうのを馬鹿か大物というのか。別に裏で白蘭と手を組んでいたというわけではないので、若干1名の疑いの眼差しが解かれた。他は信じていたか理解してないかのどちらかである。

「それにしても、どうやって回線に侵入したんでしょうか？」
ジャンニーニが呟く。

かなり高度な技術の詰め込まれたボンゴレ地下基地だが、システム構築を担当しているジャンニーニに気づかれずにまさか堂々とハッキングしてくるとは。相手の力量はなかなか計り知れない。この時代最大のマフィアとしては当然といえば当然の標準装備のだけけれど。

さて、結局なぜ高度なボンゴレセキュリティをくぐり抜けることができたのか？

答えは至極簡単。

「セキュリティがザルなんだあ。アマチュアどもが」

ツナでもない。獄寺でもない。山本でもない。

作戦室の扉が開き、そこから聞こえた声に全員がそちらを向いた。

どこかで聞いたような声に、あるものは警戒を、懐かしさを与えられ、その声を発した人物は容赦のない瞳で部屋の中を睥む。

毛皮の突いた全身黒い服装に、腰まで届くかというストレートの銀色の髪。鯨のような獯猛な瞳に、上着の肩に縫い付けられた紋章は、ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーの紋章。鈍く光る両刃の剣を左に固定したその姿は、紛れもない人物。

嘗てボンゴレ10代目後継者争いボンゴレリング争奪戦、通称リング戦で雨の守護者として戦った男、スヘルビS・スクアアロ。

この時代においてはヴァリアーに所属したまま、100人の剣豪を破り2代目剣帝の座を不動にしたという、ボンゴレ2代剣豪の一角。

現れたスクアアロは、いつものように若干不機嫌そうに現れて、相変わらず悪態をつく。山本はスクアアロの姿に、懐かしさが込み上げてきた。

・・・・・・・・なぜか右手で体長1メートルを超えるマグロを持っていたが。

「土産だ」

そう言つてデイーノに右手のマグロを差し出し、デイーノはそれを受け取つた。

デイーノですらわからない、なぜにマグロ？という疑問を持ったが、スクアアロに余計なこと言つて切りかかられるのも面倒なので、黙つたままにいたつた。

スクアアロはそのまま一直線に山本のそばに向かい、その問答無用で拳を叩き込ん

だ。

「ぐはあ!!」

拳拳拳、蹴り拳蹴り蹴り拳!そのまま連打!

一瞬で何発も喰らい、血反吐を履き、ついには気絶してしまった。

そのまま倒れ込むのをスクアーロは肩で担ぎ、そのまま戦室を出ようとする。

息はあるようだし死んではないことはわかるが、それでも多少重傷なのは変わりない。

「このカスは預かってくぞ」

そう言ってデイーノを睨み、デイーノはそれを無言で肯定した。

ツナ達はいきなりのスクアーロの行動に目を見開き啞然とし、スクアーロに食ってかろうとしていたが、デイーノにストップをかけられる。

剣士として、山本のことを最もわかっているのは、スクアーロだと。コルやリルも同じ剣士だけど、死闘を繰り広げた者だからこそ通ずる何かがあるのだろう。荒っぽい行動はスクアーロらしいが、それでも鍛える価値があると考えての行動。

そのままさっささとどこかへと連れて行こうとした。

「随分と荒っぽいねスクアーロ。ところでうちのパパ見てない?」

微妙に素知らぬ顔をしていたコルが、去ろうとするスクアーロに言葉を投げる。

「・・・コルかあ。あいにくあの野郎は見てねーが、お前はこいつに余計な事してねえだろうなあ」

ギロリ、という擬音がつきそうな眼光でコルを睨みつけるのに、ツナは自分が見られてないがびくりとする。が、とうのコル本人は素知らぬ顔をしている。

「何もしてないけど、やっぱり見てないか、残念」

スクアアローのNOという言葉にはあとため息をつくコル。

「お前の父親ってどこにいるかわからないのか？」

「そりや携帯持ってないし」

「へえ・・・」

(そういえば昔聞いたが、『アヤメ』に所属しているやつらは全員携帯を持っていないから連絡取りたい時に取れなくてかなり困ると。あれって今も続いてたのか・・・)

そんなことを考えて呆れる光努。

獄燈籠は元々ナイスタイミングでこっちに來たらしいし。あとは伝書鳩でも飛ばすくらいかなあ・・・。

「白神光努お。6日後、せいぜい白蘭に潰されないことだなあ」

「俺よりツナはいいのかよ」

「はっ！知ったことかあ！」

「ひどっ！」

「ま、無様な姿はさらさないことだな」

無愛想ながら激励を送りながら、スクアア口は作戦室から出ていくのだった。

後に残ったツナ達、しばし呆然としていたが、さてと、というふうになら出ようとする。が、デーノが呼びかける。

「光努、どこいくんだ？」

「いやなに、白蘭の業務連絡も終わったし、そろそろ向こうに帰ろうかと思ってさ」

「向こうっていうと、イリスにか」

「日本でやることも終わったしな。あとは、修行でも頑張るかなあ」

こきり、と首を鳴らして軽く伸びをする光努。

ここからはボンゴレはボンゴレで、イリスはイリスでそれぞれやることがある。

目的は同じだが、メンバーが違うとまたやり方も違ってくる。修行が必要か必要でないか、ということなのだが。

今回は一体別れだが、次に会うのはおそらくチヨイスの日。

「ツナ、修行頑張れよ」

「うん、光努もね」

二人で激励を送り、光努はコルと共に、作戦室から出ていくのだった。

『ああ懐かしき我が故郷(?)』

時間は午後9時頃だろうか、空は黒い闇色に染まり、雲が晴れたところにはポツカリと金色の月が顔を出していた。

今夜は満月、だがべつに狼男が吠えたりもしなければ、自転車に宇宙人に乗つけたシルエットも見えない。そんな暗い月明かりの道を歩いていたのは、こんな時間に歩いているのはおかしいような人物。

月明かりに反射する真っ白な髪は夜風に揺れ、その下の表情はまるでハイキングにでも来ているかのように楽しそうに笑っている。

が、その内心はありえないほどにドン引きしていた。

「俺はイリスを舐めていた。いや、イリスというより灯夜と『アヤメ』達だ」

こんなことを言っていた少年は、そのイリスファミリーのボス、つまりトップ、No.1の白神光努。並盛中学2年生。彼は今、自分の所属しているファミリーにドン引きし

ていた。それはなぜか？

今彼の目の前にあるのは、山が縦に真つ二つになっている光景だった。

「なありル、コル。俺は今夢を見ているんだろうか。夜だし」

「そんなにおかしいかな？ ねえコル」

「特におかしくないと思うけど」

（だめだこいつらあ！ イリスの性か!?!）

小さい頃からイリスファミリーだった二人だからなのか、大抵のことでは驚かない強靱な精神力が身に付いたのだろう。いや、これは普通のマフィアでも驚くぞ。X A N X
USだって口をあんぐりと開くはずだ。というかただ常識が欠けてるだけだ。

・・・さすがにそこまではないだろうが、驚くのは間違いないはず。

ここは獲洞山。

獄燈籠所有の山をくりぬいて、中に軽く地下都市のようなこの時代のイリスの拠点を築いた山である。中にイリスの本拠地にある母屋がそのままあるのを見たときは、光努ですらなかなか驚いた程。

他にもいくつか建物があったらしく、獄燈籠作の傑作である。

そしてその山、縦に真ん中から真つ二つに割れているのが今の現状だった。

「はあ……で？あれに乗ればいいのか」

珍しく少し疲れたような光努のその視線の先に見えるのは、その真つ二つに割れた山の中央にそびえる先の尖った巨大な円筒形の物体。

それは太平洋を横断するほどの超長距離を飛翔する大陸間弾道弾。

通称、ICBMと呼ばれる大陸弾道ミサイル。

大陸から大陸へと撃ちだすことが可能なこのミサイルは、射程距離が果てしなく長く、日本から飛び出せば、アメリカ、オセアニア、ヨーロッパ、どこへでも飛ばすことが可能となった驚異的なミサイル。

10年前の時点で人類の技術の進歩はなかなか周りが思うよりも遥かに高いが、この時代ではそれがなかなか顕著になっている。といっても、定期的に大規模に戦いをするマフィア間だけかもしれないが。

一先ず光努には目の前にあるものが何かわかった。

通常ミサイルに搭載する核弾頭等、幾らか本来の破壊目的の部品がほぼ取り除かれ、代わりに搭載機能が設置された改造ミサイル。

ようはこれに乗れば簡単に海外に行けると。

(つーかこんなの飛ばして大丈夫なのか?)

レーダーとかに引つかかるんじゃないのか、という心配だが、まあ今更だからどうでもいいかとも思った。きつとレーダーごまかすことくらいはお茶の子さいさいだろうし、まあご都合主義ということだ。

「ここからイリス本拠地までは、多分20分くらいじゃない」

「つーか、これどつから持ってきたんだ? 明らかに一ファミリーの軍事力じゃないだろ。いや、今はただの乗り物だけだ」

「灯夜が昔廃棄されるの買って改造したんだって」

「うわ、予想通りの答え」

そういえばイリス所有の超音速戦闘機のブラックボードも灯夜が軍から買って改造していたとか言ってたなあ、と結構前のことを思い出していた光努だった。

「しかし、まさか獲洞山がイリスの日本拠点兼ミサイル発射台になっていたとはな」というかその為にまさか山を改造したのか?

だんだんと呆れを通り越して関心すらしてくるから不思議である。

10年前の時点では、まだ獄燈籠が作ったトレーニングマシン(マシン?)があるだけで普通の山だったはずなのに、この10年でやつとしたら一体どうやったのだろうか? 案外山を一回消し飛ばして全部作り直したのかもな。

．．．．．なんだか本当にそう思えてきた。

「さて、じゃあ早速乗り込むとするか」

と云って近づくと、ミサイルの一部が開いてスペースが現れる。特に中で操作盤とかハンドルが無いから中で操作する必要も無いみたいだし、中で座って固定してそのまま待つだけ。さて、出発！

「で、リルとコルは乗らないのか」

光努はミサイルに乗り込み、固定されたというのに、なぜかリルとコルは外から眺めるように光努に笑って手を振っていた。

「だってそれ一人用だし」

「私達はあとから灯夜に迎えに来てもらうから気にしないでね」

リルがめちやくちやいい感じに笑って手を振っているのを見ると、このミサイル大丈夫かと思えてくる。

（本当にこれ大丈夫か？飛ぶだけ飛んで爆発とかしないだろうな．．．）

そんな光努の考えが伝わったのか、リルとコルが大丈夫、とでも言うようと励ましてきた。

「実はそのICBMにはちゃんと燃料入ってるけど、あと搭乗者の死ぬ気の炎も使つてついでに落下時はかなり衝撃入るけど」

「光努なら大丈夫だよね」

やっぱり全然励ましてなかった。

「お前らそれ知ってたなー!」

「じゃ、いつてらっしゃーい!」

ガコン。

リルが手元のレバーを下げると、ゴゴゴゴゴという地鳴り声が響き、光努が何か言う前にミサイルの搭乗口が閉まり、ガツチリと固定され、微細な振動と同時にミサイルのしたの方から何やら音が大きくなってくる。

リルとコルは二人共離れたところから、サングラスを取り出し装着。

次第にミサイルの下部から強大な炎が噴出した。

薄いオレンジ色の炎を噴出し、次第にミサイルは徐々に高度を上げ、ついには、夜空に向かつて飛んでいったのだった。

「じゃ、灯夜が来るまで待とうか」

「うん、そうだね」

二人は操作盤を操作して山を閉じ、地下の、すでに誰もいなくなった母屋へと入って

いくのだった。

壊滅的ダメージを受けたイリスファミリー本拠地。

光努が当初この時代に来た時には既に、母屋はほぼ全壊、他の技術舎などの建物はほとんどが潰れて木が倒れたり地面が陥没したり被害満載。

一時は光努と獄燈籠がいた場所だったが、二人して日本へ行ってからまたがらんどうになつていたイリスファミリー。

そんなことがあつたイリスファミリーの本拠地にて、一人母屋の屋根の上に佇む人影があつた。

『レーダーが捉えた。そろそろ来るから備えろ』

「はいよ、了解」

屋根の上の人物は、耳に付けたインカムからの通信に答え、寝転がっていた体を起こして軽く伸びをする。

鍔付きの迷彩柄の帽子をかぶり、そこから出ている金髪の髪。

同じ迷彩柄のズボンと前を開けた上着にブーツという、太陽の出ている時間帯ならかなり目立つような格好をした男。

屋根の上に立ち、その海を思わせるような蒼い瞳は太陽の登った水色の空に向かって視線を伸ばし、視界に妙な物が入った時に少し目を見開いた。

白い煙を出しながら高速で落ちてくる物体。

ここからは細長いが実際近くで見ると結構太い、円筒形の物体間違いなくこちらに接近してきた。

「なあルイ。あれこつち向かってくるけど大丈夫か？せつかくのイリス拠点がボロボロになるんじやねえか？」

『大丈夫だ。ちゃんと問題ないところに落とすようにプログラムしてあるからな。見てみる、そろそろ来るぞ』

ゴゴゴゴゴゴゴゴ!!

空から壮大に煙と音を出して降ってきたミサイルは、イリスファミリー本拠地の広大

な敷地の中にある、割りと広めの池の中へと突っ込んだ。

ドバシヤアアーン!!

盛大な水しぶきをあげて、池に衝突するミサイル。

爆発物は全く積まれていず、池に着水した為に特に大・爆・発、というふうにはならず、にすんで内心少しほっとしているのは余談。

かなりの高所まで水しぶきが飛び、イリスファミリー本拠だけ少し雨のようになっていた。

屋根の上から全身で雨を受けた男は、楽しそうに笑い池を見ていた。

「いやー、涼しいなあ。つーか、あの池って結構深かったのか。ミサイル全体沈んだんだけど、あいつ大丈夫か？」

屋根から飛び降り、地面に着地する。

そのままスタスタと池に向かったとき、池の内側から何かが爆ぜた。

水面を突き破って水の中から飛び出して来たの物体は、まっすぐに男の元へと飛来してきたが、男は普通に横に交わして飛来物は地面にめり込んだ。

「これは、さっきのミサイルの部品か？」

男は知らなかったが、飛んできたのはミサイル搭乗口の扉のハッチ部分。そしてそれが水の中から出てきたということとは。

ドバン!!

続いて、水の中から何か飛び出した。

今度はものではない、動きからして間違いなく生物、それも人だ。

くるくると太陽を背に回転し、すたりと地に降り立った。

「あー、ひどい目にあった。ていうか前にもこんなことあったような。つーか本当に20分くらいでついたよ」

ぼたり、と髪から雫を垂らし、服の水を絞る。

プルプルと頭を振って少し太陽をまぶしそうに見つめ、自分が今いる場所を再確認した。

「何日ぶりだったけな。イリスファミリー」

見渡す限り広がる敷地。

大きめの池、近未来的な建物の技術舎。いろいろと収納されている倉庫や、普段はあまり使わないような蔵。宿泊施設の用な建物もあれば、実験場のような建物、体育館に、大きめの深い森や小高い丘。

そして中央にそびえるのが、母屋と呼ばれる拠点。

口の形のような作りに、中庭には大きめの木が植えられている、光努がここに来てからしばらく住んでいた場所。

懐かしいその場所には、帰ってきた、という光努にとっては本当に懐かしい実感が湧いていた。

「——つて、全部治ってる!?!」

見渡す限り見えるもの。それは、元のイリスファミリー。

「確か、前に見たときはボツロボロのほぼ全壊だったのに、こりやどういふことだ？」
辺りを見渡してみれば、確かに見覚えのあるイリス本拠地。

最初にこの時代に来た時に見た時は、母屋がほぼ全壊に近かつたにもかかわらず、光努の眼前に見える建物は確かに時間でも巻き戻つたような治り具合。

けどよくよくと見れば、確かに復元跡が多々ある。

新しくしたばかりのような石畳。周りの多くの建物も、作り終わって完成したばかりのように綺麗に仕上がっている。しかし一度獄燈籠と光努によるミルフィオーレ第13バルサミーナ隊長バツテイスタの戦いにより、爆発したり燃えたりしたはずの森まで復元されてると、一体どのようにして直したかが気になる。まあ晴れの炎の活性を利用したり、普通に木を植え変えたりすれば大丈夫かと思うのだが。

それにしても、この場所を最後に見てからの期間があまりにも短すぎる。せいぜい2週間がいいところじゃないかと思ひ、それだけでここまで修繕できるものなのかと疑問に思つた。

「いくらイリスでも、限度つてもものがあるだろ」

人のことを言えた義理ではないが、なかなかブツ飛んだ事をしているであろうイリスの人物を思い浮かべ、若干苦笑するが、それでも内心はかなり面白がつている。

そうこう思っていると、光努は後ろから気配を感じた。

「俺も同感だぜ。最初来た時は驚いたしな」

光努の後ろから投げられた声に、光努は反応する。

それは昔、まあいうほど昔というわけではないが、何ヶ月か前に光努が参戦した黒曜ランドへの襲撃と骸討伐任務。

そしてそこで光努が戦った人物。

金髪と蒼瞳、軍人のような服装をした2本の機構ナイフ使い。

この世界に来てから、光努の肌をわずかとはいえ傷つけた2人目の人物。

「たしか、ラツシユ・ギナ。だったよな？」

振り向いた光努の目の前にいる人物、ラツシユは笑った。

「よく覚えていたな、光努」

イリスの母屋内。

外の景色同様に、中は修復したばかりのように綺麗な空間。そんな屋敷の中の一室に、二人の人物はいた。

広めの部屋の中央に位置された丸いテーブルに向かって椅子に座っている人物と、そのそばで立っている人物。二人は同じように壁と外を繋ぐ大きめの窓を眺めていた。

暗い部屋の中に、窓からの光が伸びて机の上を照らす。

「光努が来たみたいだな」

机のそばで立っていた長い金髪を後ろで一つにくくっている人物が口を開いて、椅子に座る人物に声を欠けた。白衣のポケットに手を突っ込み窓を見ているが、外から入る太陽の光のまぶしさにわずかに目を細める。

椅子に座る人物に特に反応がないのを無言で確認すると、特に気にした風もなく、別の言葉を投げかける。

「二応迎えが行ってるが、行ってこないのか？」

その言葉に、椅子に座る人物は少し反応した。

その人物は、小さかった。

年齢で見ればおよそ小学校に通ってもおかしくないような年齢の見た目。

ワイシャツと黒いスラックスに革靴、ベストにネクタイ、帽子をかぶった、どこかのパーティーに出席しても問題ないような、身なりのよい服装。

窓から降り注ぐ太陽の光が、帽子の中から溢れ出る長めの銀白色の髪に反射してキラキラと輝いている。見た目の年齢の低さ故か、少年のようにも少女のようにも見える顔立ちの子供は、外を眺めて小さな口を開いた。

「せっかくだし、待ってる」

そう言った子供の表情は、楽しそうに笑っていた。

『知った気配と似た表情』

なぜかベホ○ミではなくザ○リクを使ったように復活を果たしたイリスファミリーの広大な敷地のある本拠地。これは一体どうゆうことなのか？存在自体が不思議な光努も、もちろん不思議に思うことだってあるのだ。

「つってもなあ、俺も少し前に来てみたらこうだったしよう。正直なんで直ってるのかはさっぱりわからん」

(ちっ、使えない)

「あー！お前今使えないとか思わなかったか!!」

「(大丈夫、思っていない思っていない) 案外鋭いんだな」

「言ってることと考えてることが逆じゃねーかー」

思っていたよりラツシユの情報分割りと、というか全くなかった。

わかったのはラツシユも知らない間にできていたということらしい。

光努は思案するが、出てくる案はありそうで無い案、突拍子も無い案、とまあ考えてみたけど所詮予測の域を出るわけない。後ろでわーきゃー言ってるラツシユを聞いて、光努はスタスタと歩いていくのだった。ふと思いき直したように止まった。

「そういえばお前なんでこんなところにいるんだ？骸の一味だろ」

「今更!?それを今更いうかよ」

そういえばと、割りと遅いと思いつ出した光努の言葉に突っ込むラツシユ。

光努の記憶しているラツシユという存在は、黒曜ランドで戦った人物。骸の一味とい考えている。が、そういえば別に最初から骸の仲間じゃなかったけなとも思い、じゃあここについても特に問題ないのか?とも思った。

「ラツシユってフリーじゃなかったのか?」

「それは10年前の話だろ。今はお前と同じイリスファミリーだ」

「へえ、役職とかあるのか?偉い?」

「『シヤガ』、それが俺の所属してる隊の名前だ」

イリスファミリー第二戦闘部隊『シヤガ』。

第一戦闘部隊『アヤメ』に次いで数年前に作られたい部隊であり、所属している人数は、『アヤメ』と同じくたった3人。

その内の二人はリルとコル。父を『アヤメ』のリーダーに持つ双子の剣士。

この『シヤガ』の部隊のリーダーは姉のリルの方が勤めている。

光努と獄燈籠のメローネ基地襲撃の際に助太刀に行つたリルとコルだが、もうひとり、メローネ基地とは別にこちらの本拠地の方へと来ていた人物。

ラツシユ・ギナ。

彼は『シヤガ』に所属する三人目の人物。

嘗て、相棒と二人で軽く傭兵をしていた頃に骸と知り合い、雇われる形で骸一味に時的に入った。その後、光努に敗北したあとは特に何かすることもないので、黒曜ランドからすぐに離脱。その後の消息は光努も知らなかったのだが、まさか先に10年後の未来で再開をするとは思わなかった。

それも、『シヤガ』のメンバ^{スナイパー}ーとして。

「そういうえば、もうひとり狙撃手の考魔^{スナイパー}っていなかったか？」

驚異的な動体視力身体能力を誇る光努に対して、近接担当のラツシユと遠距離担当の考魔の二人の連携により、攻撃を当てた。

一つ一つ効力の違う銃弾を扱った、正確無比な狙撃手^{スナイパー}。

もちろん、今どこにいるかといえ、当然知っているとおり。

「あいつはボンゴレのヴァリアーに入ってるぞ」

「ヴァリアー!? XANXUSのいるヴァリアーか」

「そうそれ」

10年前のボンゴレリング争奪戦以降、ゴーラモスカが破壊され欠番だった独立暗殺部隊ヴァリアーの雲の守護者。が、そこに入ったのがラツシュの相棒だった狙撃手兼銃使いである蔵見考魔。

しかしあの時戦った二人がそれぞれ未来でイリスとボンゴレに入るとはなあくと感じ深くなる光努。まあ一回戦ただけだが、拳を合わせれば皆盟友だぜ！ 実際合わせたのはナイフと拳と銃弾だけだ。

「それで、今この母屋には誰がいるんだ？」

「さあ？」

「は？」

「俺の役目はここに来る奴らを潰すことだからな。正直お前がここに来たら別にやるこ

とがある。つー分けであとはよろしく。母屋にルイもいるし話聞いとけ」

ラツシュの意外なほどにあっさりとした回答。

元々ラツシュは修繕などの目的でイリスの本拠地に来る予定だったが、予想を上回って治っていたため、一先ず壊れないようにやってくる奴らを撃退していた。

白蘭が10日間の休戦期間を設けたため、ミルファイオーレが静かになったこの期にイリスに攻めるマフィア、もしくは別の組織なども少なからずあった。まあ目的するには十分な物が本拠地には存在するから当然といえは当然だが、せつかく直つたのに壊されたらたまつたものではないので、『シヤガ』のラツシユを見回りにつけたのであった。

そして、じゃつというふうには手をあげて、さつそうと去っていくラツシユを見て、光努は呆然とするのだった。

「ただいまー」

ドオン！

両手を押し出し、イリスの母屋の扉を開く。

装飾の施された木の扉は軽々と開き、中から外へと向かう空気がわずかに光努の頬をかすめる。

視界に広がる広間、絵画の掛けられた壁、細かい装飾の施された柱や天井、2階へと続く階段。

ここに来た時は、この場所はほとんどが崩壊していた。だからこそ、久しぶりに見るこの場所を、懐かしいという感情が光努を突き抜ける。

「さてと、ルイはどこにいるかな」

眩き、光努の足が床の上に乗った。

———
ストン！

その時、軽い物が落ちた用な音がした。

ふと音のした方に視線を上げると、音がしたのは2階へと続く階段の上段付近。座っている人の影。天井の窓から入る太陽の光に照らされてそこに座っていたのは、まだまだ幼い顔立ちをした、小学生くらいの子供だった。

綺麗なパーティー会場にそのまま出席しても大丈夫なような身なりのよい、白いワイシャツに黒いネクタイとベストにストラックス、茶色い革靴といった服装。

頭に被っていた帽子から溢れる銀白色の髪が、太陽の光を浴びてキラキラと輝き、その下に薄く光る金色の瞳が、玄関の前に立ち止まる光努を見つめていた。

まるで自分を見ているかのような子供の楽しそうな表情に、光努は少し目を見開いた。

俺は、この気配は知っている。

この子供は見たことがないと、光努は断言できる。

だが、この子供から発せられている気配は、知っている。

この時代にはいないが、10年前には確かにいた。

なぜなら、自分と一緒にこの世界へとやってきたのだから。

光努は少し近づいておもむろに口を開き、確認の意を込めて問うた。

「お前、ハクリか？」

その声が耳に入ったとき、クスクスと座っていた子供は少し笑い、次第に声を大きくして楽しそうに笑った。広い部屋に子供の小さな笑い声が響いたが、不快な感じは特にせず、なぜか少し心地良いと光努は感じた。

ひとしきり笑ったあと、目元に少し溜まった雫をぬぐい、楽しげな表情のまま口を開いた。

「やあ、光努。結構すぐにわかったな」

おかしように、何かを企んでいるかのような笑った表情。

ハクリは階段の上で立ち上がり、軽く足で床を踏み鳴らして宙に舞い、一回転して軽やかに光努の前に降り立つ。身のこなしが明らかに身の軽い子供、だけでは説明がつかないが、それもハクリなら当然か、そう光努はすぐに完結する。これくらいなら、なんでもないことだから。

「その姿は見たこと無いが、どういう理屈だ。お前、この時代のハクリじゃないだろ」
存在しているが、存在していない人物。

10年前の時点までは確かにいたはずなのに、その地点からこの10年後の未来に存在が消えた人物。その人物が、光努とハクリの二人。

つまり、この場に存在する少年の姿のハクリは、10年前の時代からやってきた存在ということ。

「当たり前。この時代に俺は存在しないし、光努も存在しない。そこらへんは気づいてたんじゃないのか？」

「やっぱりか」

ルイから聞いた話を思い出す光努。

光努が行方不明になったのが、およそ10年前のある時期。

そして失踪日を少し詳しく調べてみると、ボンゴレのリング争奪戦の後、より正

確には、イリス母屋ルイの私室で10年バズーカを暴発させた日。

この10年後の未来は、光努の消えた日からそのままこの日まで続いた未来。

「光努にはいくつか話しておこう。ルイの知る、白蘭の事を交えながら」

光努、ハクリ、ルイ。

三人がイリス屋敷の一室で広々とした机に向かいながら、目の前に置かれたカップに注がれた紅茶を飲む。

「光努は、パラレルワールドって知ってるか？」

特に脈絡なく唐突に言ったルイの言葉に、光努は少し驚きながらも肯定した。

「同じ世界だけど、待ったく別の可能性の平行世界っていうやつだろ。それは知ってるけど、急にどうした？」

別の世界、といっても光努達が元いた別の世界とはまた別の世界。

もしもこうだったら、もしもこうしていれば、そういった可能性の先には、いくつも未来が存在するという考え方。一つの次元にはいくつもの世界が存在するという考えた、パラレルワールドという物。

例に挙げてみれば、ツナがりボーンと出会う未来と、もしもリボーンと出会わなかった未来。そのまま進めば将来はマフィアのボスになっていたかもしれないし、落ちこぼれ人生を進んでいたかもしれない。別の可能性の世界が同時に別の次元に存在するというのが、パラレルワールド。

その数は可能性を考えればきりが無く、万とも億とも、さらに多いとも言われる。

「正一から聞いた白蘭の能力。それは、同時刻にいる全パラレルワールドの自分と、知識と思惟を共有できる能力」

「パラレルワールドと?」

可能性を全て検証し、知ることができるとなると、恐ろしい。

人の可能性は無量大と言うが、それだけでなく重要なことは世界の可能性。

軍事技術に発達した世界があれば、医療に発達した世界、もしかしたらどこかのSFのように空飛ぶ車が世間を闊歩する世界なんてものもあるかもしれない。

その時代その世界にいないことは本来知ることのできない。パラレルワールドの情報を共有できるとなると、白蘭の持つ情報、技術は膨大。まさに、この時代での不可能な出

来事も、他の可能性の平行ワールドの情報を使えば可能に変えることもできる。

例えば、この世界にある不治の病すら、もしかしたら他の平行ワールドの一つには、奇跡的に治療方法が確率されて風邪程度の普通の病気となつている世界があるかもしれない、など。

「この世界以外、他の平行ワールドのボンゴレファミリーは、全部壊滅しているらしい」

「なるほど。それで10年前のツナ達呼んで倒してもらおうとしたつてことか。ボンゴレリングを持っている、あのツナ達を」

「マーレリングを持つ白蘭を倒すためには、同じ7トゥリニセツテの一角であるボンゴレリングが必要ということ。

「それに正一の話だとあのボンゴレ匣は、この世界にのみ奇跡的に作られた匣らしく、他の平行ワールドには存在しないらしい」

「だから白蘭を倒すにはこの世界しかないつて考えたのか。7トゥリニセツテが全て奪われ、ボンゴレが壊滅した他の世界じゃ倒すことは不可能と思つて」

話を聞いていた光努だが、思つたより驚きは少なかった。元々自分が常識とは外れていたためか、白蘭が平行ワールドの自分と知識を共有できると言われても、そうそう驚きはしなかった。けどあくまでそうそう、というだけで、少なからず驚いたのは事

実である。

「後は、光努の持つフィオーレリング。通称、アルトラドゥエ 十 2 と呼ばれる物の存在」

「そういえば白蘭も言つてたが、その十 2 つてのはなんだ？このフィオーレリングの事つてのはわかるが。他にもあるのか？」

「これだよ」

そう言つてハクリが胸元から取り出したのは、チェーンに掛けられたおしやぶり。透き通るように真つ白なおしやぶり。不思議な光を宿すそのおしやぶりを、光努はなんだか久しぶりに見た気がした。

「十 2 つていうのは、フィオーレリングと白いおしやぶりの二つの事。トゥリニセツテ 7・ と同じ

世界の至宝というのはわかるが、正直これがなんなのか。世界を救うものなのか、もしくは破壊をもたらすものなのか。白蘭はこれも狙つてるから光努も呼んだんだが、それでもこれを持つという事は、光努には可能性があると正一は考えたんだろう」

「可能性？」

「ツナ達と同じ、白蘭を倒す可能性だ」

他のパラレルワールドには無い、この世界だけの力を手にしたツナ達。それと同様に、光努にも他のパラレルワールドには無い力が備わっていた。それはすなわち、白蘭の支配下に存在しない、可能性。

「可能性、^{アルトラドゥエ} + 2か。そういうえばハクリ、その姿は結局どうなってるんだ？ 10年前の時代から来たのなら赤ん坊の姿のはずだろ？」

「ああ、これかい？ 光努は、^{ノントウリニセツテ} 非7・線^テ 知って知っているかい？」

「そういうば、と光努はハクリの言葉を聞いて思ひ出す。

この世界にはミルフィオーレによつて待機中に^{ノントウリニセツテ} 非7・線^テ と呼ばれる物質が照射されている。どういう原理か不明だが、アルコバレーノにのみ効果がある有害物質のようなもの。一説には、^{ノントウリニセツテ} 匪の研究の際に偶然できたものだとかどうとか。案外、この^{ノントウリニセツテ} 非7・線^テ という物質も、白蘭が自分の能力を駆使して作り出したものかもしれない。

とにかく、10年前の時代からこの時代に来るまで、ほとんどのアルコバレーノは^{ノントウリニセツテ} 非7・線^テ によつてまともに戦えず、無残にも亡くな合つていった。

今この時代でかろうじて残っているのは、自分をアルコバレーノのなりそこないと言う、ボンゴレ門外顧問所属のラル・ミルチと、10年前から来て大人しく^{ノントウリニセツテ} 非7・線^テ シヤットアウト機能のあるボンゴレ地下基地にいるリボーンとあと一人くらい。

ラル・ミルチは、アルコバレーノとして受けた呪いの量がリボーン達と比べて少なかったため、10年前の時点ではリボーン達と同じ赤ん坊であつたにもかかわらず、この時代では普通の大人の女性に成長している。

アルコバレーノにしか効かないというのであれば、アルコバレーノに近いラルには少

なからず効果のあるということ。だからこそ赤ん坊のままではなく、成長することができたのだが、徐々に命を蝕んでいく。しかしそうになると疑問が湧き出てくる。

「ハクリ、お前非7・線ノントウリニセツテ大丈夫なのか？正式でなくても、一応アルコバレーノだろ？」

白いおしやぶりを持つ、アルコバレーノ。

呪い、ハクリにとっては正確には強力な制約だが、それでもおしやぶりを持ったアルコバレーノであることには変わりない。

にもかかわらず、この場のハクリは平然としている。

確かに今の技術力なら非7・線ノントウリニセツテをある程度防げる装置を作ることができる。現にボングレ地下アジトには、出入り口に非7・線ノントウリニセツテをシャットアウトする装置を設けて、中でのリボンとラルの生活には支障を来さないようにされている。

だが、光努が見たところ、このイリスの屋敷にはそう言った装置が付けられている気配がない。そもそも機械的に出入り口が管理されているわけでもない普通の扉だったし、まさかこの広大なイリスファミリーの敷地全体をシャットアウト、なんてことは今の技術力をもってしてもおそらく不可能。できるのはせいぜい密閉された空間の出入り口でシャットアウトするくらい。

なら、今この場にいるハクリは一体。

「呪いが少なく成長したラルだが、俺はそれと似ている。ある程度元に戻ることで、自分

にとつて有害な非7・線ノントウリニセツテを克服した。だから、俺には非7・線ノントウリニセツテは通じない」

にい、と目を細めて笑うハクリに、光努は懐かしさを感じる。かなりむちやくちやな説明だが、どこか納得してしまふ。

何をするにも抜かりなく、問題を潰し、頼もしさを背負う。

「しかし、光努もなんとなくわかってたんじやないのか、これのこともあるし」

そう言つて樂しげに笑い、自分の差し出す手のひらに乗せた物を見せると、光努とルイも、少し驚いたが理解したのか、笑つて肯定した。

キイイーン!!

その時、空気を切り裂く音、鳥の鳴き声のような高いエンジンの音。

窓の外を見てみると、視界に見えるは、屋敷の前に降り立つ飛行物体。

歪な形状と翼を持つ、全身が真っ黒に染められており、所々に白いラインが入った機体。

「お、リル達も着いたみたいだな」

少し時間がかかったが、思ったよりも早かった到着。

光努がこちらに来る前には既に日本へと向けて出発をしていたらしく、光努出発後に割と早く到着。さすがにICBMミサイル程早くこちらに到着できなかつたが、それでも普通の

公共手段より何倍も速い到着である。

「さてと、灯夜達が帰ってきたことだし、作戦会議でも始めようか。チヨイスを制す、作戦会議。それと、まだ話してない情報を出すか」

全てを話し終えていない。チヨイスに参加する彼ら彼女らが帰ってきたのだから、話
はここからが本題。秘密を解き明かす。

ハクリは、その小さな見た目に反してなかなか頼もしそうに、そして楽しそうに笑
うのだった。

太陽がまだ昇には少し速い、薄暗い時間帯。

広大な敷地を誇るイリスファミリーの母屋の上空あたりを、不思議と雲が風とは別の

方向へと流れ、まるで台風の目でも作り出しているかのように黒い雲の渦を作り出していた。

まるで天変地異の前触れか、だがそんな渦の中央から出てきたのは、巨大な人の顔。ところどころはねているような白髪と、左目のしたの三爪のマークの青年。まぎれもなく現れたのは、ミルフィオーレファミリーのボス、白蘭の顔そのもの。

そこから光の柱を照射して地上を照らすと、遠くにいる白蘭本体と表情がリンクしているのか、口角をあげて笑い、照らした先にいる人物たちを見つけてその巨大な口を開いた。

『やあ、待っていたよ、イリス諸君。さあ、チヨイスの会場へ招待しよう！』

上空の雲が渦を巻き、中央から覗かせた白蘭の顔だが、実際はホログラムとして投影されており、宙に浮かぶその本体は、メローネ基地全てを別の場所へと一瞬で瞬間移動させた、超長距離移動装置、超炎リング転送装置。ホログラムに隠れて見えないが、その実態はリング状の歯車がいくつも連なった形を持つ巨大な装置。

この装置が、今回のチヨイス会場までの乗り物。

白蘭の視線の先、地上に向かって照らすように照射されている光の柱の中には、一つ

の建物、そして数人の人物達がいた。

その先頭に立って装置を見上げているのは、まだ中学生程にしか見えない少年。

風に吹かれて揺れる、柔らかな白い髪。楽しげに笑った表情の少年の姿。白を基調とした半袖の上着。手首と肘の中間ほどまである白いグローブには、基本的に己の身一つで戦い抜く少年にしては珍しく、防御に使用するような手甲のような防具が備わっている。

腰からぶら下がるチェーンに取り付けられた、月と太陽を虹で結んだ円を描くような紋章の刻まれた純白の匣。そしてその右手の指には、これまでの戦いの中で付ける事になかった、白く透き通るような石がはめ込まれて装飾の施された、見るものを引く輝くような指輪が嵌められていた。

見た目は中学生でも、その待とう雰囲気は数々の修羅場をくぐり抜け、さながら無人の野をゆくがごとく超えてきた少年。一つの組織をその背に背負い、大胆不敵に戦い歩いてきた少年の瞳はまっすぐに、投影された白蘭を見つめていた。

「さて、はじめるか。チョイスを」

少年、白神光努は、楽しそうに笑った。

未来編V 『チヨイス』

『チヨイス開幕』

日本時間、PM12:00

並盛神社の境内より、ボンゴレフアミリーはチヨイスの場へと旅立った。

上空の雲の中から顔を覗かせた超炎リング転送装置。その効力は、高密度エネルギーである死ぬ気の炎を使用することで、多人数を一度に長距離へと一瞬で移動させることができる、最先端科学技術の結晶。パラレルワールドの技術をふんだんに使ったとしても、実用化できたのはつい最近。

いくら可能性の世界といっても、所詮可能性の世界。

確かにありえない事象を起こすことも可能だが、限度というものが存在する。いくら技術力が高くて、さすがに火星に住むまではいかないのと同様、いわゆるテレポーターシオンシステムであるこの機械も、そうそう簡単に使える代物でないのである。

メリットとして長距離を移動できるが、デメリットとしてはエネルギー不足。

500万ファイアンマホルテージFVという、メローネ基地で戦ったツナのフルパワーの

X・BURNER20倍の炎エネルギー。メローネ基地の3区画を消し飛ばしたツナの技。その20倍など普通なら不可能と言いたい所だが、そんな心配は入江の杞憂だった。

ツナ達は、ボンゴレリングに炎を灯し、ボンゴレ匣を開匣した。

ツナ、獄寺、山本、ランボ、了平、雲雀、クローム。

10年前の時代からやってた、若き10代目ボンゴレファミリー。

白蘭も驚いたことに、彼らの出した炎の数値は、システムの貯蓄限界値の1000万ファイアンマホルテージ

FV オーバー。正常に作動した超炎リング転送システムは、ツナと守護者、そして入江や京子達非戦闘員達を連れて、光の中に包まれた。

瞬間、浮遊感とともに、次にツナ達が感じたのは地面に降り立ったような小さな衝撃。

そして目のまえに広がる光景を見て、瞳を丸くした。

そこに見えたのは、ビル。

コンクリートでできた、よく見かける建物。

そのビルが、所狭しと視界一面に立ち並ぶ。超高層ビル群の中へとそびえ立つビルの一つ。その屋上へと、ツナ達は転送された。

この場所は、フィールドの選択チョイスによって決定された場所。

ツナ達が転送される前に、見事1000万まで死ぬ気の炎を吐き出したことによりご褒美と称して、白蘭によってフィールドのチョイス権がツナに与えられた。大量に用意されたカードの中から一枚選び、それがフィールドの場所となる。そしてツナが選んだカードこそ、『雷のフィールド』。

チョイスフィールド

雷のステージ「超雷炎硬層高層ビル群」

「やっ、ようこそチョイス会場へ」

転送後、煙が晴れるようにしてツナ達に掛けられた声。聞こえた声は、ツナ達にとつては聞き覚えのある声。気楽に話す声に、同じようにその表情は楽しそうに笑っている姿。白髪と左目の三爪のマーク。見る人が見れば救いの手を差し伸べる天の使いにも見えれば、ある人物から見れば笑いかけて地獄に落とそうとしてくる悪魔にも見える。

その男の持つカリスマ性でもあり、残虐性でもある。

白蘭は、ようやく会場へときたツナ達に、気軽に笑いかけた。

後ろには、一度ツナ達の前に映像として見せた、^{リアル}真6弔花を引き連れて。

「出た！白蘭と真^{リアル}6弔花!!」

超炎リング転送システムに炎を灯した時の死ぬ気モードが解け、ついに自分たちの前に現れた白蘭達に対して、ツナは若干怯え気味に叫んだ。

今までの騒動、すべての元凶とも呼べる人物が、今日の前にたっているのだから当然の反応といえれば当然であった。

「ここで戦闘をするからね。いいロケーションだと思わないかい？」

まるで子供が玩具を自慢するように、周りを指し示す白蘭。

ツナとしては、その言葉に不安気。並盛町で戦わないというのはよかった、だからといってこんなビルが立ち並ぶ人が多そうな場所。そんなところで戦えるわけないとい

うが、その心配もなく、白蘭は笑って回答する。この場には、自分たち以外誰もいないと。

確かにそう聞くと、周りからしてくるのは人混みのざわめきでも、車がクラクシヨンを鳴らす音でもない。ただただピルの隙間を風が吹く音だけだった。確かに無人。不気味な程人の気配が欠けているのだった。こういったフィールドを用意できるあたり、さすがミルフィオーレ、もしくはさすが白蘭と言うしかないのだろうか。

「じゃあさっそくチョイスを始めようか」

にこりと笑う白蘭に、ツナ達は緊張感に包まれる。

ついに、世界の命運を、というのは大げさなのかその通りなのか、少なくとも自分達の未来が、過去がかかった命懸けの戦いが、これから始まろうとしている。

この戦いに負けたあと、どうなるのか想像するのに難しくなかった。

「白蘭……」

だが、ツナ達はそれを承知の上で、この戦いに参加した。今まで修行してきた。

平和かどうかわからない。また何かに巻き込まれるかもしれない。

けどこんな未来ではない、確かに平和な日常があった10年前の過去に帰るため。

「白蘭さん、始めましょう。チョイスを」

入江正一。最も白蘭と近くにいた男。

自分が招いた責任は、自分が拭う。まだ中学生であるツナ達を戦わせるのに抵抗があった。いくら10年後のツナの承認を得たとはいえ、大人である自分があまりにも一人では無力だった。だけど、入江はツナ達の戦いを見て、決意をみて、修行を見て、その力に可能性を見出した。

白蘭という強大な力に立ち向かい、打ち勝つことのできる可能性を。

いつもの少しおどおどした入江の態度ではなく、覚悟を決めた男の顔。
真剣な眼差しで、開戦の合図を待つのだった。

「うん………つて言いたいところだけど、もう少し待ってね」

「え!？」

明らかに戦うムードだったために意表を突かれた入江は、若干こけそうになったが、なんとか態勢を立て直した。

「びや、白蘭さん!」

「早とちりだなあ正チャンは。まだみんな揃ってないじゃない」

ハハハと軽く笑う白蘭。

入江は白蘭の言葉に再確認する。

沢田綱吉率いる、ボンゴレファミリー。

そして白蘭と真^{リアル}6 弔花で構成された、ミルフィオーレファミリー。

……あれ?

そう思つて思わず口に出そうとした瞬間、視界がまばゆい光に遮られた。

清々しい青空の一部から、丸い光の柱がツナ達白蘭達に向かつていきなり降り注いだ。突然の事態に、一体何事かというボンゴレファミリー側。

「な、何これ!」

だが対称にミルフィオーレ側は特に慌てふためく様子も見せず余裕綽々。白蘭は待つてましたとばかりに上空から降る光の柱を、少し目を細めながら見つめて、楽しんでうつつぶやいた。

「やつと来たね」

バシウウ!!

この光は、ツナ達が来るときにも使用した、超炎リング転送システムの光。

視界がまばゆいばかりの光一色の中、何かがツナ達のいるビルの屋上にぶつかるような音が響いた。降りぶつかる、光と煙が晴れたとき、その場にはボンゴレとミルフィオーレとは別の、最後の役者が揃った。

先頭に立っていたのは、ツナ達と同じくらいの年齢に見える少年。

ビル風が、柔らかそうな白い髪を揺らし、その表情はどこかで見えたことあるような、この状況ではなかなか頼もしい程に楽しそうに笑っている。その少年にしては珍しい防御目的なのか、両手に嵌められた少し長めの白いグローブと、甲と腕に付けられた手甲。そしてその右手の指に嵌められていたのは、白く透き通るような石がはめ込まれた手装飾の施された、見るものの目を引く輝くような指輪だった。

「さつきも綱吉君に行ったけど……ようこそ、チヨイス会場へ。光努君♪」

楽しそうに笑う白蘭に、光努は同じように笑って答えた。

「実際に会うのは初めてだな、白蘭。まあ今日はお互いに勝負でもしようじゃないか」「ハハハ、光努君は好戦的だなあ。ま、悔いの無いようにしようか」

表面上は笑ってるが、明らかに自分が勝気満々の二人、ツナと違って光努の性格上、白

蘭に大して怯えるという選択肢がまったく持っていないのだが、ただの少年とは思えない、神をも恐れぬ度胸と迫力に、白蘭の隣リアルの真6弔花である桔梗も少し苦笑い気味になるのだが、それに気づくものはいなかった。

この時点で、チョイスの参加メンバーが全て揃った。

ツナ達ボンゴレ側は、ボスのツナ、そして守護者である獄寺、山本、ランボ、了平、雲雀、クローム。そして家庭教師、サポート要員であるリボン、入江、スパナ、ジャンニーニ、ビアンキ、フウ太、バジル、デイーノ、京子、ハル、イーピン。こうして表記してみるとツナと守護者含めて18人とは意外と多く感じる。というか実際に多い。守護者の3倍はある。しかし大きなマフィア間の視点で見れば、とても少なく平均年齢も低い。

対するミルフィオーレ側は、ボスの白蘭。そして真6弔花リアルである桔梗、ザクロ、ブルーベル、デイジー、トリカブトの計6人。ボンゴレ側と比べて、この場にいるミルフィオーレ側はなかなか少ない。というかマーレリング保持者が少ない、足りない。マーレリングはボンゴレリング同様に、大空属性のボスのマーレリングと、それを守護する守護者に与えられている6つのマーレリングに分けられている。と考えると、ミルフィオーレはやっぱ一人足りない。これでどうやってチョイスをするのだろうか。

イリス側は、更にすごい状況だった。

ボスである光努にリルとコル、灯夜、ルイ、ハクリの6人。しかも同じ数だが、基本戦闘に参加しない面々もいれると、ミルフィオーレ側よりも少なかった。本当にチョイスができるのかどうかという点では、ミルフィオーレには負けていなかった。

「なはーんだ、ちびっ子ばかりじゃない。こんなのせくくんぶ、ブルーベル一人で殺せちやうもんね」

白蘭の隣で聞こえた少女の笑い声。真^{リアル}6弔花の一人であり、膝下まである海を思わせる水色の髪色をした雨のマーレリングを持つ少女の名は、ブルーベル。異彩を放つ真^{リアル}6弔花の中では、まだ少女ということもあり嫌でも目立つ。だが、馬鹿にしたように笑い、その手を振り上げると、腕が雨の炎に纏われ変形し、肘から先が雨の炎の槍のようになつた。

その人間離れた光景に驚くツナ達だったが、次の瞬間、何か異様な者がその腕に巻き付き、今にも攻撃してきそうだったブルーベルが強制的にストップさせられた。させたのは後ろにいる、雲のマーレリングを持ち、ミントグリーン長めの髪を後ろで縛り、シルバーのピアスを嵌めた優しい男。真^{リアル}6弔花のリーダー、桔梗。

「ハハン。慌てないでブルーベル。白蘭様が楽しみにしておられた祭りなのですよ。ゆつくり楽しみましょう」

一見常識的な柔らかな口調なのに、有無を言わさない迫力のようなものが感じる。し

ぶしぶといった表情だったが、ブルーベルはおとなしく後ろに下がったのだった。

「さすが人知を超えるところだけある。変わってるのが多いな」

「え、それ光努が言っちゃうの?」

ブルーベルと桔梗のやり取りをみて、光努の感想は案外あっさりしていた。まあ光努を驚かそうと思ったらそんなじよそこらの驚かし方ではなかなか驚かない。自分のことを棚にあげての発言に、隣にいたリルは若干ジト目で突っ込むのであった。

「それじゃあ皆揃ったことだし、次のチョイスをはじめよーか。綱吉君、光努君、こっちきなよ」

そう言つて白蘭が取り出したのは、ジャイロルーレット。

高さ30センチに直径20センチほどの円筒形の形に、下に持ち手のついた形。

中には不規則的な数字の羅列の歯車が8つ通っており、縦に全ての歯車のひとつが見えるように、8つの窓が2箇所につけられていた。

白蘭がルーレットを少し操作すると、そこから伸びた光が空間に文字と図形を投影させた。全員が見やすいようにと投影されたのは、それぞれのマフィアの紋章と、その下に守護者の属性6つ、さらにそのしたに『□』の記号の計8つ。それがそれぞれボンゴレ、イリスが1つずつ、ミルフィオーレが2つ現れた。

「普通はチョイスって1対1なんだけど、今回は変則的にボンゴレ、イリスが同盟みたい

なものじゃん？だから戦いをフェアにするために僕も2チーム作ることにしたんだよ」

ミルフィオーレとボンゴレ、イリス。この3チームが戦おうとすると、誰がどう見ても敵対関係にあるミルフィオーレが不利にしか見えない。実際は不利かどうかは分からないが、それでも戦いの条件を揃えるには3チームというのはキリも悪いため、4チームにすることでルールを作りやすくした、というのが実際のところ。

「そういうことなら・・・仕方ないですね」

「おい入江！てめえそれでいいのかよ！」

「白蘭さんもチョイスには不正はしないから、僕らも公平フェアにしないと・・・」

しづしづ、といったような、どこか葛藤したような表情の入江。誰よりも人一倍白蘭を倒したいという思っている入江だが、それと同時に白蘭を信頼している部分もある。長い時を共にしてきたからこそ、白蘭の性格をよく知っている。もちろん、それは白蘭も同じであるため、互いに油断はできないのもまた現状である。

「というわけで、最初に僕と真リアル6吊花中心のミルフィオーレチームと、綱吉君率いるボンゴレチーム。次に基本部下中心のミルフィオーレチームと、光努君率いるイリスチームの参加人数を決めようか」

ジャイロルーレットは、それぞれの属性の参加者を決める為のルーレット。ステージチョイスの選択の次は、戦いの人数の選択チョイス。不正の無いように作られたらしく、歯車を回すこと

で不規則に勝手に数字が止まるといふ構造である。それではいざ早速、というところで、白蘭の前、ツナの隣にいた光努が口を開いた。

「そうだ白蘭。一つ確認しておきたいんだが」

ふと思ひ出したように、光努が白蘭に話しかけた。内心では白蘭がすぐそこにいる状態に、平常時のツナはびくびくとしているのにたいして、なかなか光努は落ち着いている。度胸があるのか無謀なのか、見習つていいものなのかどうなのかと、どちらにしろツナは心の中で光努を賞賛しているのだった。話しかけられた白蘭は、機嫌よく質問には答えてくれる。これでいてなかなか話好きな面、マフィアのボスらしくないけど、自分が楽しむことは心得ているらしい。

「ん♪なんだい光努君」

「こつちにはボンゴレやミルフィオーレと違って守護者なんてものもないし。チョイスのルーレットで出たそれぞれの数字、その属性の炎が出せる奴が参加でいいか？」

そもそもボンゴレリングやマーレリングは、大空の属性のリングをボスに、その他の6つのリングはボスを守護する守護者が持つものと決められている。が、フィオーレリングはそれ一つしか存在しないため、その属性の守護者が参加、というのはいささかイリスには当てはまらないための確認。普通に考えて炎を出せればオツケーという、一応の確認である。当然、白蘭も最初からそのつもりだったのか、気軽にオツケーの返事を

返した。

「うん、いいよ。ま、元々守護者のいないイリスにはそのつもりだったしね」

その言葉に、光努は少し俯きながら若干笑みを浮かべるが、そのことに気づくものは誰もいなかった。

確認も終了し、チョイスの掛け声と共に、ジャイロレットにリングの手を触れて数字の歯車を回した。

「「チョイス」」

カラカラと回るジャイロレット。

緊張感に包まれる中、数字の羅列の並んだ8つの歯車が、それぞれ不規則に、しだいのその回転を止めていった。白蘭、ツナ、光努。全ての歯車を回し終え、周りに投影されていた4つの表には、それぞれに止まった数字が記されていた。

「これで決まったからね。バトル参加者♪」

ボンゴレファミリー

大空『1』・晴れ『0』・霧『0』・雲『0』・雨『1』・雷『0』・嵐『1』・□『2』

ミルフィオーレ 『パフィオペデュラム』 (真^{リアル}6吊構成チーム)

大空 『0』・晴れ 『1』・霧 『2』・雲 『1』・雨 『0』・雷 『0』・嵐 『0』・□ 『0』

イリスファアミリー

大空 『0』・晴れ 『0』・霧 『0』・雲 『0』・雨 『0』・雷 『2』・嵐 『0』・□ 『0』

ミルフィオーレ 『ガロファール』 (他部下によるチーム)

大空 『0』・晴れ 『0』・霧 『0』・雲 『1』・雨 『0』・雷 『1』・嵐 『1』・□ 『0』

『バトルロイヤル14』

ボンゴレファミリー

大空『1』・晴れ『0』・霧『0』・雲『0』・雨『1』・雷『0』・嵐『1』・□『2』
 ミルフィオーレファミリー『パフィオペデュラム』(真^{リアル}6吊構成チーム)

大空『0』・晴れ『1』・霧『2』・雲『1』・雨『0』・雷『0』・嵐『0』・□『0』
 イリスファミリー

大空『0』・晴れ『0』・霧『0』・雲『0』・雨『0』・雷『2』・嵐『0』・□『0』
 ミルフィオーレファミリー『ガロファール』(他部下によるチーム)

大空『0』・晴れ『0』・霧『0』・雲『1』・雨『0』・雷『1』・嵐『1』・□『0』

これがジャイロルーレットによつてたたき出された、チョイスにおけるそれぞれの属性を持つものの参加人数。

「ふうん。ボンゴレは大空1名に嵐と雨も1名。いい引きしてるじゃない」

表示されたルーレットの結果に満足しているのか、ただただ面白がっているだけなのか、白蘭は考えの読めない笑みを浮かべながら感想を漏らす。

「属性によつての人数も、合計も違うんだな」

「うん、それがチョイスの醍醐味だよ♪けど光努君は、あんまり引きが良くなかつたみたいだね」

イリスファアミリー参加人数は、雷属性が2人。

ボンゴレが5人チームと、ミルフィオーレが4人チームと3人チーム。

イリスファアミリーが一番少ない。なにげに5、4、3、2と数字が揃っているのが癪である。

「ところであの一番下の『□』は何属性だ？無属性とでもいいたいのか」

「よくわかつたね光努君。一番下は無属性つてことで、リングを持たぬ者を示してるんだ。だからボンゴレ側は2名、選出してね♪」

リングを持たぬものは、いわば非戦闘員。普通に戦うこともできるが、リングがないと匣も使用できないので、この時代ではほぼ非戦闘員扱い。その為に守護者以外の人物たちを白蘭は呼んだのだろう。京子やハル、ピアンキやフウ太達の中から2名も戦場へと送らなくてはならない。

が、この組み合わせの参加者は、意外とすぐに決まった。

入江発案による参加者は、計5人。

大空のプレイヤーが、ボンゴレフアミリー10代目ボス候補、ツナ。

嵐のプレイヤーが、ツナの右腕、獄寺。

雨のプレイヤーが、時雨蒼燕流の剣士、山本。

無属性プレイヤーが、元ミルフィオーレA級指揮官、入江。

そして同じく元ミルフィオーレメカニック、スパナ。

晴れのマーレリングのレプリカが壊れたことで、リングを持たなくなった入江は特別に白蘭がオツケーを出して無属性としての参加を許可された。

基地の中には、作成したメカニックにしかわからないコンピューター制御や、様々な仕掛けなど多々ある。その為無属性として入江とスパナが参加できるということは、確かにツナはなかなかについている。これでもしも無属性がいなかったら、使い方が分からずに基地機能は麻痺して本当に使い物にならなかったかもしれない。そうなれば使用できる機械も限られているが、それでも戦う術は一通り想定して訓練しているので、一応は問題ないのであった。

余談だが、同じメカニクなのにスパナが選ばれてジャンニーニが選ばれなかったのは、フウ太はいいの？というふうに聞いたが、とうのジャンニーニ本人は、戦いに参加しなくてよくなってなのか、とてもいい笑顔でオツケーを出したのであった。

さて、問題は光努率いるイリスファミリーなのだが。

「じゃあ私だね」

「いや僕だね」

「お姉ちゃんに譲ってよー」

「弟に譲ったらどう？」

「はあ……。リル、コル、一先ずストップだ」

「じゃあ決着つけよっか」

「そうだね」

カシャリ。

リルとコルの二人は、互いに抜刀するかのように日本刀を片手でもち、もう片方の手で柄を握って刃をわずかに抜く。リルは笑ってコルは無表情。だけど二人から流れ出ている剣気は剣士としての実力の高さが伺える。そして、いざ激突、と思ったらストップがかかった。

ゴス！

「くくく!!」

「俺の話を聞け」

灯夜の拳骨が二人の頭に落ちた。思わずしゃがんで悶絶する二人を見て灯夜はため息をつき、光努は隣でその様子をみてマイペースだなくと、やはり人のことは言えない感想なのだった。しかし剣を持っているリルとコルの二人に拳骨を落とすとは、灯夜もなかなかやるようである。

「じゃあじゃんけんで決めよっか」

「よし。せくのっ」

「じゃんけんぼん!」

結果、リルはチョキでコルはチョキ。

ちなみにイタリアのジャンケンにはグーが石、チョキが鋏、パーが紙と考え掛け声は「サツソ、カルタ、フォルビーチェ」というらしい。最も、だからなんだというわけではないのだが。二人はあいこだったので、そのまま二度目のじゃんけん。そんな二人を尻目に光努は隣にいた灯夜に話しかける。

「なあ灯夜」

「ん？なんだ光努」

「今更だけどなんでうちのファミリーこんなに少ないんだ」

本当に今更、光努以外はリルとコルと灯夜とハクリしかいないという。

「ふむ。いくらチョイスとはいえ、イリス本拠地を留守にするわけにも行かないからな。籠は残ってもらってラツシユは別の任務。しようがないだろ」

「世界の命運を欠けた戦いだというのに悠長だね」

「正直俺は世界よりもイリスの方が心配だ。いろいろな意味でな」

「すごいな灯夜は」

なかなかブツ飛んだ考え方。だが案外、光努のまだ知らないことが、イリスファミリーにあるのかもしれない。心当たりが無いわけでも無いのだから。未だにジャンケンを継続しているリルとコル。

しかし本当に属性が合わなかったらどうしていたのだろうか。基本的にチョイスは参加人数が揃わなかったその時点で不戦敗というルールなのだが、そう考えると参加できる者がいる属性に当たったのはラツキーと言える。しかしメンバーが決まるのはもう少し時間がかかりそうだ。光努の反対隣にいたハクリが面倒になってきたのか、欠伸をし始めた。

「光努君。イリスファミリーの参加メンバーは決まったかい」

そうすると、ボンゴレの方はもう決まり、ミルフィオーレも最初から決まってるかのようだったので、白蘭は光努達の方へと話しかけてきた。

「ん？あ、少し待ってくれ。もうちよつと」

「早くしてよね！このちびっ子〜」

白蘭の服の裾にしがみついて後ろからこちらを見ていたのは、長い水色の髪をした少女、ブルーベル。真6弔花の中では最も小さく唯一の女性だが侮るなかれ、これでも雨のマーレリングを持つ守護者なのだから人智を超えた能力を有している。だがだからといっても、性格は年相応。光努を敵を見るような目で睨んで子供らしく「い〜」つとしている。ああ、そういうえば光努は元々敵だったな。

「俺よりでかくなつてから出直してくるんだな。ちびっ子」

にやり、という擬音がつきそうな笑みを浮かべてブルーベルに笑いかける光努は、なかなかいい性格をしている。言われたブルーベルはめちやくちや睨んできた。

「なによ！そつちだつてブルーベルよちちつさいのいるじやないのー！ねえびやくらん！」

そう言ったブルーベルの視線の先には、確かに身長的にはブルーベルより小さい小学生サイズのハクリがいた。年齢的にはどうかかわからないが。

白蘭は、ブルーベルの視線の先のハクリを見ると、どこか冷徹な視線が一瞬だけ見え

たが、それと同時にいつそう楽しそうに笑った。

「ふうん。君が白いおしゃぶりのアルコバレーノ、ハクリ君かあ♪はじめましてだね」
語りかける白蘭とそれに応えるように白蘭を見るハクリ。

その金色の瞳は不思議な色を秘め、その瞳を覗き込んだ白蘭の後ろにいたブルーベルは、自分でもなぜかわからないが、一瞬びくりとした。白蘭は大丈夫とでも言うようにブルーベルの頭にポンと手をおいて、ハクリに笑かける。

「一体、どうなってるんだらうね。本当に……」

「白蘭……お前の目的は、これだろ？」

そう言つて首から下げて服に入れていたチェーンを取り出し手見せたのは、透き通るような真っ白いおしゃぶり。それを見た瞬間、白蘭の瞳をすこし見開いて口角を上げると、その雰囲気は、まるで獲物を見つけた猛獣のようだった。

「ちゃんと持ってたみたいだね。安心したよ♪」

さつと猛獣のような雰囲気を霧散させて、いつもの気さくな笑顔を浮かべた白蘭だった。そうこうしていると、さつきまで続いていたリルとコルのじゃんけん勝負が終わったように光努の元へと二人共やってきた。

「あ、光努。決まったよー」

「おう、結局どっちが出るんだ？」

「うん、私だよ」

にこやかに笑っているリルと、隣ですこし残念そうにしているコル。

そんなコルに少し光努はくすりとしながら、笑みを浮かべて白蘭の方へと向き直った。

「よし、白蘭。こっちは決まったぜ」

イリスファミリー参加プレイヤーは、計2人。

雷のプレイヤーは、イリスファミリー2代目ボス、光努。

二人目の雷のプレイヤーは、イリス第2戦闘部隊『シヤガ』リーダー、リル。

この二人が、イリスから参加するチヨイス参加者。

「んん？光努君って雷のプレイヤーとして参加できるのかい？」

予想外だったのか、白蘭が光努の示した参加者に疑問の声を上げる。その疑問はツナ達も同じだったのだろうが、リボーンはなんとなく予想はしていたのか、少し笑っていた。

「ああ。言ったよな、守護者の概念のないイリスは、属性の炎を出せれば参加オツケー、つてな♪」

そう言った瞬間、光努が左手に嵌めた緑色の石のはめ込まれたリングから、ほとぼしる閃光のごとく、緑色の雷の炎が放出した。リングの周りで燃えるように炎を小さくしているが、その純度は高く、空気を裂くような鋭さが目に見て取れた。その炎に、白蘭は楽しくなってきたといわんばかりに、楽しそうに笑った。

「これは僕も予想外だったけど、まあ言ったものはしょうがないしね。うん、オツケーだね。リルちゃんはもちろん、雷のプレイヤーとして参加は大丈夫だよ」

光努のことはともかく、リルのことは知っていたらしく、笑っているけど少し警戒するようなりル。だがそれと同時に、少し安心したような表情。参加できる事に対する安堵ではない。白蘭にさえ知らない事があるというのがリルの安堵の正体。情報能力がおそらくこの時代一の白蘭だが、やはり光努に関しては知らないことが多い。

はたしてそれが、この戦いのキーとなるか。

「じゃあ、こっちの参加者も発表しようかな」

ミルフィオーレファミリーチーム『パフィオペデュラム』の参加プレイヤーは4人。

雲のプレイヤーは、最も頼りになる、真6吊花の優しいリーダー、桔梗。

晴のプレイヤーは、殺したいほど生きる屍、デイジー。

霧のプレイヤーは、真実を語る幻影の巨人、トリカブト。

そして二人目の霧のプレイヤーは、どこからともなく現れた、忍び装束にお面という怪

しげな雰囲気を持つ術士、通称猿。

「おい白蘭。もう一つのミルフィオーレチームはどうした!」

目ざとく獄寺がつつかかってくるが、確かにその通り。あたりが見渡せるビルの上。にもかかわらず、一体用意したと思われるもう一つのチームはどこにいるのやら。

「じゃあそろそろ紹介しようか。ミルフィオーレチーム『ガロフアーノ』」

ヒュウウウウ!!ドゴオオン!!

白蘭が言葉を出した瞬間、その隣に何か降ってきてビルの屋上へと衝突した。特に壊れたところは見当たらないが、降ってきたのは高さ1辺3メートルはある立方体のコンテナ。頑丈に作られているらしくひしゃげた様子もない。ただ普通と違うところがあるとすれば、コンテナだがそこには人がでは入りできるような、ノブのついた普通のドアが設置されていることだった。

(ビルもコンテナも無事……か。丈夫なビルだな)

降ってきたコンテナに対してそんなことを考える光努。そしていきなり降ってきた

コンテナに何かかと思つたミルフィオーレ側以外だが、コンテナのドアノブ回り、開いた内側から誰かが出てきた。

扉をくぐり抜けて出てきたのは、身長2メートルはあろう大男。漢装ハンチュウゾウと呼ばれる中国の漢服を身に纏い、そこからにじみ出る雰囲気はその巨体と相まって歴戦の猛者を思わせる佇まい。そして光努達の目を引いたのは、その顔には猿同様に仮面が、それも東洋の龍を模した立体的な仮面だった。

「彼は龍ね♪」

龍と呼ばれた男はその場で仁王立ちしたまま腕を組み、どつしりと構えたのだった。

「白蘭は自分の部下の姿を隠す趣味でもあるのか？」

「え、あれじゃない？ 楽しみはあとでとっておこう、みたいな」

「何が楽しみなんだ。あれか、仮面をとったあとの敵が驚く顔が楽しみとか」

「白蘭悪趣味々」

「光努君にリルちゃん。僕を捏造しないで欲しいなあ」

さすがに聞き捨てならなかったのか、それでも面白がっているのか、苦笑しながら一応否定しているのだった。

スッ……

「!!」

唐突に、いつの間にいたのか、ツナ達は気づけなかったが、龍と呼ばれた人物の隣には、頭から黒いシーツのような物を足元までかぶり、顔の部分には髑髏のアップリケが刺繍されていた人物が、はじめからそこにいたかのように現れた。

「なんだこいつ！いつの間にも！」

「ひい、髑髏!？」

「ハハハ。彼は私の部下。『死神』……………とでも呼んであげてください」

思わず怯えたツナだが、桔梗が簡単にいきなり現れた人物の説明をする。気配を完全に絶つて現れた為、そして最初の龍のデカさと威圧感でインパクトがあつたこともあり、思わず驚いてしまう。特に何かしやべる風でもなく、ただただ立っているだけ。しかしそれは隣の龍も同じであり、もしかしたらあらかじめ登場シーンでは無言でよろしく、とでも白蘭に言われているのかもしれない。さもありえない話でないし。

「じゃあ最後にこの子で終わりだね。この子は、そうだねえ……………。『緑鬼』とでも呼んでね」

そう言つて白蘭の隣に、最初に降つてきたコンテナから出てきたのは、およそ中高生位に見える少し小柄な少年だった。銀色の髪に、黒い上着とジーンズという私服。顔には緑色の鬼のお面、しかも節分の時期に豆をスパーで買ったからおまけで付いてきそうな紙製のお面をつけて頭にバンドで固定していた。絶対に白蘭が適当に持つてきたも

んだ、とその場のほぼ全員が同じ意見をだしたのだった。あとせめてちゃんとしたお面あげてやれよ、と。

しかしこれでようやくプレイヤーが出揃った。

ミルフィオーレ『ガロファアーノ隊』の参加プレイヤーは3人。

嵐のプレイヤーは、面を被った漢服を纏う巨漢の男、龍。

雲のプレイヤーは、刺繍の施されたシーツをかぶる異様な出で立ち、死神。

雷のプレイヤーは、紙製の面をしたおそらく少年、緑鬼。

明らかに本名でなく、パフィオペデラムの猿と同じ通称、もしくはコードネーム。

ただのあだ名かもしれない。適当な記号かもしれない。とにかく面と見た目からとっただけで、実際の中身とはおそらく関係ないものだと思う。

そして登場人物からだんだんと顔を隠すクオリティが低くなっていくことから、絶対白蘭が用意したけどだんだん飽きてきたな、というような感想をほぼ全員が思ったのであった。

なんにしても、ようやくボンゴレ、イリス、ミルフィオーレの役者が揃った。

「さーで、いよいよ一番大事な勝敗のルールだけど、数あるチヨイスのルールの中から最もシンプルかつ手っ取り早い、ターゲットルールでいくよ」

ターゲットルール。

それぞれの陣営、チームで一人、敵の標的ターゲットとなる人物を選び、先の相手の陣営の標的を倒したほうが勝ちというシンプルルール。標的を倒すというルールの特性上、標的さえ残っていればいくら他のメンバーがやられてもなんら問題なし。しかしどのような場合でも、先に標的が倒された方が敗北となるのだ。

「本来と違って今回は4チーム、だけど実質2対2だから、先に相手それぞれの陣営の標的を2人仕留めたら勝ち、っていうルールだけど、構わないよね正ちゃん?」

つまり、ボンゴレとイリス、ミルフィオーレの2チームで1チーム1人標的を決める。通常チヨイスは1対1での戦いだが、今回はそこにそれぞれ1チームと1人標的が加わっただけ。それ以外のルールはそのままなので、やはりシンプルなルール。ごちゃごちゃしているより遥かに分かりやすいし、なんら不備も無い為、これを入江は了承したのだった。

「ああ、そうそう。標的はさっきのルーレットですで決まってるから」

「そうなの?」

「うん。ルーレットボードを見てごらん。炎が灯ついているところがあるでしょ。それがターゲット」

見てみると、空間に投影されているルーレットの結果表。ボンゴレは無属性、ミル

ファイオーレパファイオペデュラムは晴、イリスは雷、そしてミルファイオーレガロフアーノは雷のところに炎が灯っていた。その瞬間、白蘭の手の中にあるジャイロルーレットから光の筋が4本現れてそれぞれお飛び出した。白蘭曰く、標的ターゲットとなる属性が2人以上いるとき、ルーレットが自動的に選ぶ。

そして光の筋が飛び出され、ぶつかつた人物は4人。

ボンゴレの入江正一、真6吊花のデイジー、ガロフアーノ隊の緑鬼、そして、イリスの白神光努の4人だった。

それぞれ胸に、光のラインでできた十字と円の組み合わせの標的ターゲットマーカーの炎が取り付けられ、そこから突如炎が放出された。

「うわぁーなんだこれはあ!!」

他のプレイヤーと見分けがつくように設置された炎。それに加え、死ぬ気の炎はその人物の持つ生命エネルギー。その為この炎が灯っているという事は、生きているということの証。つまりこの炎が消えたとき、敗者となる。突然自分の胸から炎が現れた事に、入江は思わず膝をついて驚く。それに比べてミルファイオーレ側のデイジーと緑鬼は全くどうじた様子の無い直立不動状態。これはどっちを見習うべきか。人間をやめたいなら後者を見習うことをおすすめする。さて、では光努は一体どっちなのだろうか？

「……………」

無表情だった。

「そっちは光努君が標的ターゲットか。残念だったね♪」

全然残念そうでなくむしろ楽しんでる白蘭。リルは特に反応を示さない光努に疑問符を浮かべた。

「どうしたの光努？大丈夫？」

「いや………なんか、こう………すっげー違和感のようなものが、さ。わかるかな」

意外とターゲットマークから漏れ出る炎がお気に召せなかったらしい。それでもなんら支障を来さないのだが。

「待て白蘭。生命エネルギーである死ぬ気の炎をこんなただ流しにしちまったら、あつという間に体力を消耗してブツ倒れちまうぞ」

リボーンの言うことも最も。しかしそれこそが、このチョイスという戦いのタイムリミット。この標的ターゲットの炎の炎は、本体の生命エネルギーが2%以下になると消える仕組み。つまりそこまで体力が消耗してしまえば、炎は消えて敗北となる。このチョイスという戦い、どちらの標的ターゲットを先に仕留めるかという戦争と同時に、誰が先に倒れるかのデスマッチでもある。

「ま、炎消費しただけで倒れそうなのは、今のところ正チャンだけ見ただけどね♪ね、光努君」

(…………やばい、否定できない)

人智を超えたと謳う真6弔花のデイジー、それに無尽蔵に体力のある光努。緑鬼も通常よりも遙かに死ぬ気の炎が強いらしく、確かに見た限り体力的には入江が一番低い。

元々技術者であるのは言わずもがな、ミルフィオーレの元6弔花といつても立場役職は指揮官。逆にこれで肉弾戦等お手の物だったらちよつと怖い。まあだからといってすぐに倒れるほどやわというわけでもないのだけだ。

「どんな理由があつても、この標的ターゲットの炎の炎が消えたら、その時点でそのチームは負けだからね」

少し目を鋭くさせ、念を押すように言う白蘭。そこには冷徹に、有無を言わさない迫力が秘められていた。何があつても、炎が消えれば、その時点で敗北だと。

「さて、この盛大なチョイスの報酬は、全てのマーレリングと、全てのボンゴレリング、すべてのアルコバレーノのおしやぶり。それに加えた、フィオーレリングと白いおしやぶり。新世界を創造し、光と闇の狭間を見せる奇跡の至宝、トゥリニセツテアルトラドゥエ 7・+と 2だ！」

白蘭の言葉と共に上がった花火が、空一面に光のリングとおしやぶりの姿を映し出し、これから起こる戦いの狼煙となつて、全員の瞳に映し出したのだった。

ミルファイオーレパファイオベデュラム基地

「デイジーは我々が守るべき “キング” なのですから、そこでのんびり待っていてください」

「……………うん」

胸に標的ターゲットマーカーの炎の炎を灯したデイジーは、明るい場所にいるということに少し落ち着かないながらも、ビルの壁面に取り付けられた吹き抜けになっていくシンプルな造りのミルファイオーレの基地ベースユニットの玉座で座っているのだった。

「通信機器が全員チーム内のみですから、適度にガロファーノ達と合流しつつ殲滅しますよ」

ハハン、と優雅に微笑み殲滅宣言する桔梗。

猿の報告により、他の標的ターゲットマーカの炎をリーダーにキャッチしたらしく、それを確認した彼らは、優雅に余裕そうに、戦いのフィールドへと飛び立つのであった。

ボンゴレ基地。

「ボンゴレ、ファイ！」

こういった戦いでは恒例化しつつある、円陣が組まれていた。

ツナは頑張る、という表情をしながら。山本は楽しそうに。獄寺は若干引いてる。スパンナは無表情で、入江は驚いていた。なかなか全員バラバラな表情で円陣を組んでいる。

しかしそれでも心情は同じ、絶対に勝つと信じている。

一先ずツナの許可が出たことで、チョイスを知り尽くし指揮官経験のある入江と、スバナがボンゴレ基地でレーダーや地図を見て戦略を立てて指示をし、ツナと山本が基本攻撃、獄寺が防御で落ち着いた。ちなみにこのフィールドの地図は全員に開始前に配られているのである。

「よっしゃ、行くぜ」

「うん！」

全員配置につき、ボンゴレ基地の扉が開いた。

ミルフィオーレガロファアーノ基地

「さてと、敵の場所もわかったことだし、それでは行くとするか」

どこかのビルの壁面に取り付けられたファイオペデュラム隊と同型の基地ユニット。その中で外を見据える龍の面をかぶった巨漢の人物、通称龍は威厳たつぷりに外を見据

えて、顔だけ振り向いて後ろの二人に声をかける。

「さっさと終わらせませうか。標的ターゲットですし、君はここで待っていてくださいね」

「……わかった」

黒いシーツの髑髏、通称死神の言葉に、紙製緑の鬼の面を被った通称緑鬼は、静かに返事をするのだった。

イリスファアミリー基地。

どこかのビルの屋上に建っている、見た目は木でできた少し大きめのおしゃれなログハウス。明らかに周りの風景に浮いている基地の前で、光努とリルは風吹く中で辺りを見渡していた。

「じゃ、早速行くか」

「あれ、光努も行くの？」

「当然。せつかくの戦いに、不参加なんてなしだ。位置も把握したし、さてどつちから行くか」

レーダーに映る合計3つの光。互いに標的ターゲットを見据え、戦場へと歩を進めるのだった。はたして、この戦いの勝者、いつたい誰になるのか。

『龍よ穿ちて蛇困い』

移動手段。

直径が10キロメートルもある高層ビルのそびえ建つ広大なフィールド。

その為移動手段が徒歩で行こうというのであれば、相手のところに行くまでに無駄に時間がかかってしまうし、いざという時に大きく動くこともできない。

そこでボンゴレ側が用意したのは、死ぬ気の炎を原動力とし、炎リーダーに引つかからないように設計されて改良された2輪バイク。

ビルが立ち並び、道路や信号機などの設置されたこのフィールドだが、人は参加者がい一切いないため、手を振って自由に走り回れる。止まることがなければ、単純計算で時速60キロで走れば10分で端から端まで移動可能である。

最も、実際はビルの並びは一直線ではないので多少時間がかかるが、足よりかは十分に早いのは確かである。しかしバイクという移動手段を考えたが、もしもフィールドが森とかと考えると、このコンクリートジャングルのステージは好都合。

参加者ルーレットの時もそうだったが、ツナの引きは意外といいのかもしれない。

一方、ミルフイオーレ側の基本移動手段は、^{フレイム}Fシューズによる空中移動。

シューズから持ち主の死ぬ気の炎を放出し、その推進力を利用して宙を自在に移動する手段。放出の炎によってはかなりのスピードも出すことができ、空を飛ぶことで三次元的な動きも可能なため重宝されている。

こういう時には、ボンゴレ側と比べて戦いの際に、バイクを降りずに戦えるという利点も存在する。パフィオペデュラム隊も、ガロファアーノ隊も、基本相手陣営に乗り込む際はこの移動方法を使用する。

そして、イリスファミリーの二人は現在、爆走していた。

ビルとビルの間にあるコンクリートの道路を、光努とリルの二人を乗せた車が、通常ならスピード違反確実な速度で走行していた。

パガーニ・ウアイラという、ホワイトのカラーリングのイタリアのスポーツツカーに乗り、時速200キロで爆走していた。

「はやっ！というか光努って車の運転できたんだ」

「ああ、灯夜に教えてもらった。今なら自転車から戦闘機までなんでも操縦できるな」
「運転する機会あるのそれ？というか免許は?!」

「ここって私有地みたいなものだしいいんじゃないかね？」

前後を走る車がないため、本当にのびのびと走る光努とリル。

実を言うとあのログハウスの中にはこの車がパーツごとに収納されていた。匣技術を用いてそれぞれ小さく収納されており、さらにはルイによつて魔改造が施されていた車は、すぐに組み立て可能なようにされていた。

しかもそのまますぐに乗っても問題なく、さらには炎レーダーも搭載しているので、ほかの死ぬ気の炎の位置がすぐにわかる。

「最初に3つに分かれた3点は、真6弔花だろうけど、今は別の点とぶつかってるから、多分ツナ達の誰かが戦ってるんじゃないか？」

光努の言うとおり、今現在、ボンゴレ側のツナと、霧の真6弔花であるローブに面を被った巨人、トリカブトが戦っていた。

電子機器をも翻弄する幻術の使い手。その力は並の術師を上回り、匣兵器と併用することですらに高度な幻術を作り出している。

今のツナはバイクを降り、X^{イクス}グロープによる炎の推進力により、互いに空中戦を行っていた。もちろんそこまで詳しいことを光努達を知るわけはなかったが、光努の予想は一応あたっていた。

「！光努、こつちに向かつてくる反応があるよ」

「ふむ。この光は、真6弔花の誰かか。このままいけばもうすぐにぶつかるな」

ミルフィオーレ側は全員、全く大胆不敵に向かつてくる。入江は自分の胸の死ぬ気の炎を解析し、ターゲットマーカー標的の炎と同種の炎を備えた自立飛行のデコイ囃口ロボットを辺りに放つ。

そのおかげで、現在のレーダーに映る入江の炎は10以上。どれが本物か行ってみなければわからない状況では、妙手と言える。それに比べてデイジーと緑鬼は特に隠す素振りもなく、ツナや光努達からしてみれば標的が分かりやすくてありがたい。

しかしこれがミルフィオーレの自信と実力の表れでもある。

「と思つたらもう一つ、こつちに接近してくる。やっぱこのマーカーが目印か」

そう言つてハンドルを握る光努は、自分の胸に灯る炎をちらりと見る。

「リル、一旦2人に別れるぞ。各自迎撃して近い方の大将獲りに行くぞ」

「了解♪」

そう言つと、リルは自分側の扉を開き、そのまま外へと跳び出した！

すぐにリルの姿は光努の視界から消えて、光努は問題ないとも言つたようにまっすぐに前を見据える。

「さてと、最初に来るのは、どいつだ？」

そう言う光努の視線の先、道路の真ん中に仁王立ちしている人物がいた。

立体的な龍の面をかぶり、身長2メートルはあろうという巨漢の男。

ミルフィオーレガロファアーノ隊、通称龍。漢服を身に纏い、威風堂々としたその人物は、左手に匣を右手にリングを構えた。構えた赤い石の嵌められたリングから、真つ赤な嵐の炎が放出し、手に持つ黒と白のカラーで構成された太極図の模様匣に、炎を注した。

そして炎と共に飛び出してきた物体を手に取り、くるくると振り回して構える。

柄の長さが身長と同じくらい、2メートルはあり、先の部分には、こちらは1メートルに幅は30センチはあろう、巨大な大きさと重量を兼ね備えた少し湾曲した刃。一般に青龍偃月刀と呼ばれる、日本でいう薙刀に近い武器だが、その大きさは一般のそれを遥かに凌ぐ大剣だった。刃には嵐の炎が纏われ、突進してくる光努と車に向かって、その刃を振り下ろした。

斬!!

そして、車は龍を通り過ぎた、その身を縦に二分割して。

(マジか!)

思わず驚く光努だが、驚いている場合ではないすでに二分割した車は壁に激突寸前

だった。

ドゴオオオン!!!

そのままビルの壁にぶつかった車は炎上し、龍の後ろではふた筋の煙が上がったのだった。

通称龍は、青龍偃月刀を片手で持ったまま肩で担ぎ、空いた手で自分の顔についている龍の面を外して、その握力のままにバキリと握り潰した。

その顔は、およそ40代くらいに見える。右目に黒い眼帯をつけ、猛獣のような鋭い瞳。黒い髪と顎髭に、口角をあげて獰猛そうな笑みを浮かべていた。

「まずは一勝、と言いたい所だが、そうそう簡単にはいかんだろう。なんせ、儂の瞳がお主らの実力が高いと言っておるからな」

柄を持つていない手で親指を自分の眼帯にピシリと突きつけ、後ろを振り向きにかりと笑う。先ほどの獰猛な笑みと一転して、まるで子供のような笑い顔。

真つ二つにされてビルに激突した車は炎上したまま。そんな光景を見つめたまま、面をとった通称龍は少し腰を落とし、柄を持つていない方の手を自分の顔の高さ程に上げると、腕に向かって衝撃が走った。

ドオン!!

気づいたら、そこには龍のあげた腕に蹴りを入れている光努の姿があった。

「いきなりとは、やってくれるな。あの車高かったらしいんだがな」

足をあげてる光努の姿は、まさかの無傷。

スローモーションで再生すれば、縦に真つ二つになった車、そして運転席にいた光努なのでぶつかる前に外へと飛び出したのであった。結構スピードが出ていたにもかかわらず、特に無傷なのはさすが光努といったところ。

といってもこれくらいならツナや、やろうと思えば山本や獄寺だって特に問題ないのである。やつらは着々と人間をやめつつあったのだ。ちなみに余談だが、光努達の乗っていたパガーニは億を超えるらしい。

「はっはあ！ようやく現れおったな。まずは一勝、決めさせてもらうぞ、白神光努!!ぬうん!!」

光努の蹴りを振り払い、そのまま両手で青龍偃月刀を振るった。通常とは異なる大きさと重量を兼ね備えたその武器は、まっすぐに空中にいる光努に向かって振り下ろされた。

ドゴオオン!!

武器そのものも重量が高いのもあるが、使用するこの人物は単純に腕力もかなり優れ

ている。振り下ろした偃月刀は容易にコンクリートの岩盤をえぐり、辺りにコンクリートの破片と共に土煙が充満する。だが、偃月刀を振り下ろしたまま、土煙の中で、龍はいくぶかしげていた。

（手応えがない。空中では移動できぬはずだが、今何をした？一瞬だがまるで、宙を蹴つたように見えた………何か仕掛けがあるようだな。だが、面白い！）

刃をつかんだり蹴つたりしたわけではなく、どうやって逃れたのか、龍から数メートル上方の宙にいる光努に向かって視線を向けて、猛獣のように笑う。

光努もただではやられないつもりか、不敵な笑みを浮かべていた。

「光努殿の蹴りを受け止めるとは」

余裕綽々に、というわけでないが、通称龍と呼ばれる男は片腕で光努の蹴りを受け止めた。バジルは少しだけ模擬戦をしたからか、光努の実力はある程度わかっている。そしてそのでたらめさも。だからこそ敵の行った挙動に驚いていた。だがその隣で、

デイーノはその戦いの光景ではなく、面の割れた男の素顔を見て驚いていた。

「あの男、まさか秦捧日か！」

「ちっ。面倒なのがいたな」

ボンゴレサイドの観覧席にいるデイーノが、光努の映像を見ていたとき、画面に現れた龍の素顔を見て、驚きの声が上がった。

同意するように、いつの間にか紛れていたスクアアロも舌打ちをする。

ちなみにこのスクアアロ、ボンゴレ基地にこっそりと潜伏して暴れる機会を伺うという、思いきり妨害する気満々のとんでもないことを考えていたのだが、桔梗に殺気を気づかれたので大人しく観覧席にいるのである。

口では暴れると言っても、家庭教師として山本の戦いを見るつもりなのは見え見えだった。これが俗に言うツ「う。お。お。い!!うるせえぞおお!!」まあこの話はまた今度で。

「あの御仁、見た限り中々の強者でござったが、デイーノ殿はご存知なんですか？」

「ああ。あいつは秦捧日シンホウジツと言ってな、中国マフィア間を用心棒として渡り歩く、『崩龍』の異名を持つ猛者だ。しかし、あいつがミルフィオーレに入っているとはな。お前も知ってるのか、スクアアロ」

「ああ。ヴァリアアも、あいつがいるところに攻める任務にはあんま受けねーな」

弱者は消す、という理念のあるヴァリアアの任務は、プロとして絶対勝利を求められる為、基本的に成功確率が90%を超えた時に行う。それ故に、ヴァリアアの任務は確実に遂行され、ほとんどの任務に失敗はなく、通常人間に不可能なことも達成させる悪魔の所業から、『ヴァリアー・クオリティ』と呼ばれる。

しかし、数ある任務の中には、名のある実力者のいる所、他にも有名どころのマフィアのいる所でいくつも任務を受けない、つまり成功確率がシユミレート段階で90%を下回る所も存在する。そういうときにこそ、ヴァリアアの幹部にとつても一筋縄じゃないかない人物と戦う機会が出てくる。実際には戦ってみなくては分からないが、任務失敗するかもしれない、という可能性を考慮して任務を無効とすることもあるという。その話を聞き、バジルは驚愕する。

「まさか、そんな人物がミルフィオーレの参加者側にいたとは……」

今現在、ツナが交戦している霧のマーレリング保持者、トリカブトも、かなり強力な術士。機器をも翻弄し、観覧席の画面からでも幻術の映像を映し出すほどに強力な幻覚と、雷の炎を纏うウミヘビの匣兵器を併用することで、空中戦をするツナを追い詰めていた。真6甲花だけでもかなり厄介だというのに、それに加えて選ばれたA級の兵士達ですらディーノ達も聞いたことがある程に実力者。これどこまでボンゴレとイリスの力が通じるのか。

心配するバジルの顔を見て、デイーノはふっと笑った。

「心配するな、バジル。光努はそう簡単にやられねーし、ツナも成長している。見てみる。ツナのほうはそろそろだ」

そう言われ、バジルはツナが戦っている画面を見るが、そこには驚きの光景が映っていた。

黒いウミヘビ。

基本的に霧のマーレリング保持者の術士だが、獄寺のように複数の炎を使用でき、雷の炎を持つトリカブトの使用する雷の匣兵器。雷の炎でコーティングされて通常のコンクリートの20倍程に硬化されている雷ステージのビル群だが、同じ雷の炎を纏う海蛇の大群は、砲弾のようでも槍のようでもあり、容易にビルを貫通してツナへと突撃する。

さらに空中戦ならではの三次元的な動きにより、空中のツナを四方から海蛇が格子状に囲った。

「幻魔、ウミヘビ方眼」
レーベ・センベルテ・デイ・マーレ

ツナの周りを取り囲む線状になったウミヘビが、立体の方眼のごとく立ち並び、だんだんと間隔を狭めてツナを潰そうとしてくる。このままいけば、ウミヘビ自体には雷の炎により硬度と鋭さが増しているため、線状にバラバラになつてしまう。いくら機動力が高くても、自分より狭い間隔であたりを囲われたら、出ることすらかなわない。

その時、ツナの腰にぶら下がるボンゴレボックスが独りでに揺れる。まるで、自分に任せろ、とでもいうように。ツナはそれを信じ、ボンゴレ匣を開口した。

「ナッツ、頼む！」

純度の高い、オレンジ色の大空の炎を注入され、ボンゴレ匣から飛び出した炎はツナの腕に収まった。

その姿は、小型のライオン。タテガミはオレンジ色の大空の炎がうねり、額にはバイザーのような鎧。そしてその額に、ボンゴレの紋章が刻まれた、一匹のライオンの姿だった。

レオネ・デイ・チエーリバージョンボンゴレ
 天空ライオンVer.V!!

XANXUSのと同じ大空のライオンシリーズの一つ。

だが、ボンゴレ独自の技術が付加され、細部の形状が通常のレオネ、デイ、チエリ天空ライオンと異なるのだった。

喉をならし、唸り声を響かせ、百獣の王にふさわしい猛々しい咆哮を放つと同時に、咆哮の先のウミヘビが全てピシリと固まり、ただのコンクリートと化した。

大空の石化によつてすぐさまそこからコンクリートになったウミヘビを破り、ツナとレオネ、デイ、チエリ天空ライオンのナッツは、ウミヘビの檻からの脱出に成功した。

天空ライオンには、咆哮と共に大空の調和により、対象を周りの属性と同じにすることが可能。ウミヘビを周りのビルと同じコンクリートにすることで、普通なら雷の炎を纏つて突破できないながらも、ただのコンクリートにさせることで、ツナはウミヘビを打ち破る事に成功させたのだった。

脱出し、すぐさま炎をグローブから放出して、ビルの前にいるトリカブトに向かう。だが、接近した瞬間、トリカブトの後ろのビルにヒビがひとりでに入り、一瞬にして大量のウミヘビがビルの中から外へと飛び出してきた。

「くっ！」

不意を着いた攻撃に、ツナに切り傷が走る。

だがそれだけで終わらず、一瞬怯んだツナの前後左右、全方位をウミヘビが囲んだ。

(避けるのは無理か……)

弾丸のごとく飛んでくるウミヘビの大群。数が多いのに加えて素早く、攻撃力も高い全方位からの攻撃。直ぐに避けるのは不可能と判断したツナだが、その目は諦めている目ではない。その判断の先には、次への突破口がすでに見えていた。

「ナッツ、カンピオ・フォルマ形態変化、モード・ディフェンサ防御モード」

その瞬間、ツナの腕にいるナッツが雄叫びをあげて、額のボンゴレの紋章が光り輝く。そしてだんだんと瞳を鋭くさせ、その体を変化させた。

だが、その間にもトリカブトの攻撃の手は止まらない。周りから飛んで来たウミヘビにツナは避けることができず、突き刺さる大量の黒いウミヘビは、最終的にツナを中央に添えてウニのようになってしまった。ツナの姿がウミヘビに囲まれ消され、その生存は絶望的になった。

「さ……沢田殿……」

瞳を見開き叫ぶ観覧席のバジル。京子やハルも、顔色を青くして画面を食い入るよう見つめる。

デイーノ達も難しい表情をする中、デイーノの肩に乗っていたリボーンは、唐突に口を開いた。

「ボンゴレ匣つてのは、匣アニマルそのものが武器になる、ボンゴレが独自に開発したも

のなんだ」

形態変化。

それがボンゴレの技術が埋め込まれたボンゴレ匣の特徴。

基本的に匣アニマルは、単体で挑ませる、もしくは使用者とタッグを組んで戦う、というようなもの。だが、ボンゴレが独自に開発したこの兵器は、匣アニマルを武器へと変形させて、使用者が実際に身につけることで戦闘を行うシステム。

そして、このボンゴレ匣の変形により現れる武器は、初代ボンゴレファミリー、つまりボンゴレ一世とその守護者の使用していた武器が元となっている。

ツナの天空レオネ、デイ・チェーリライオンの変化形状、それは……、

バサアア!!

突き刺さるウミヘビを容易に打ち払い、中央にいたツナの姿が現れ、その身に纏われていたのは、大空の炎のと灯された、漆黒のマント。

全てに染まりつつ、全てを飲み込み、抱擁する大空、――一世のマント《マンテッコ・デイ・ボンゴレプリーモ》!!

『一隻眼の龍と隠者の死神』

カンビオ・フォルマ
形態変化。

ボンゴレが独自に開発し、ツナ達の持つボンゴレ匣のみに組み込まれた次世代機能。嘗て、ボンゴレを作り出した男、ボンゴレI世が纏っていた物を参考にしてツナのボンゴレ匣、ナッツが変形したのは、全ての飲み込むかのような漆黒のマント、I世のマント《マンテツロ・デイ・ボンゴレプリーモ》！

その力は、触れた物を周りの物質と同化させる大空の“調和”の力。トリカブトが放ったウミヘビの大群は、全て調和により周りと同じコンクリートになり、ツナに攻撃を通すことなくポロポロと崩れていった。

「ボンゴレI世のマント！」

「ふう〜ん、匣アニマルが武器にねえ…」

攻撃の回避に成功したことにバジルは喜び、白蘭はツナの新たな力に少し興味深そう

につぶやく。

唯一、白蘭が他のパラレルワールドを覗いて情報を集めようと、決して知ることのできなかつた存在。それが、ボンゴレ匣。この時代のみならず、ボンゴレにとつては唯一白蘭に対抗できる手段。

宙を飛ぶツナは、バサリとマントを翻して、マントにくつついたコンクリートの破片を振りはらう。そしてすぐさまマントは縮み、元のナツツの姿となってツナの肩の上に乗った。

「次は俺の番だ」

一気に、両手から死ぬ気の炎を噴射させ、その推進力によって目の前にいるトリカブトへとツナは向かった。

「哀しき者よ……」

「お前がな」

喉笛を食いちぎらんとばかりに、トリカブトはツナへと向かっていったが、推進力ではツナの方が優っている。攻撃を交わし、ビルの壁面に足をつけて再び炎を噴射。そして背後からトリカブトの後頭部へと肘を入れる。さらに立て続けに拳、手刀。

止めと言わんばかりに、右の拳に炎エネルギーを貯め、一直線にトリカブトにむかつて振り下ろした。

ドゴオオオ!!

頑丈さが売りの、雷の炎でコーティングされたビルを突き抜け、道路へとぶつかり派手に土煙を巻き起こした。今のは怪物相手に加減なしの威力。さすがに無傷とはいかないだろう。

「ボンゴレと交戦中の敵の炎反応消滅」

「よくやった綱吉君!」

基地でレーダーを確認していたスパナからの報告に、入江は喜ぶ。人の生命エネルギーたる死ぬ気の炎。その反応は、たとえ幻覚を使おうが消すことは基本的に不可能。まあ科学技術を使えば増やしたり消したりも出来るのかもしれないが。一先ず相手の反応が消えたことだが、それでもまだ勝ちというわけではない。

この戦いのルールは、標的と定めた一人を倒さない限り勝負はつかない。逆にいえば、相手側はいくら戦闘員が負けても勝負には負けないのである。

そして相手側の標的は晴れのデージーと、雷の緑鬼。

この二人を倒さない限り、チョイスの勝負は続行のまま。

「正一、他の戦況はどうなってる?」

『うん、どうやら他のところでも戦いが始まっているみたいだ』

入江の目の前のモニターには、炎反応が二つ重なる部分が二つある。ただし、どちら

も自分たちで作った発信機を持っていないということは、ボンゴレサイドの人間ではない。それに加え、ミルフィオーレ側は基本的に二人行動をしないので、おそらくイリス側とミルフィオーレ側の誰かが戦っているのとおそらく妥当。そしてその入江の予想は通り、現在、とある場所の道路の真ん中で、二人の男が戦っていた。

「ぬうんー！」

ドゴオオン!!

漢服を身に纏う巨漢の男、捧日は、手に持つ嵐の炎を纏った偃月刀を振り下ろして、堅いコンクリートの道路を砕いた。通常、刃の部分で切り裂くところだが、捧日の使い方、斬るといふより相手を砕かんばかりの威力を出して振るっている。

「甘ん」

偃月刀を躲した光努は、足を振り上げて相手の顔面を思い切り狙う。岩をも砕かん光努の脚力にとって、滑り込ませて偃月刀で防いだにも関わらず、最初と違って今度は後

ろへと押されてしまう。自分より明らかに重量の優っている相手を吹き飛ばすとは、さすが光努といったところだった。

「あの捧日という方、確かにパワーも高いですし身のこなしも流石といったところですが、あまり光努殿が苦戦しているようには見えませんか」

観戦していたバジルが小さな疑問を投げる。

実力的にはミルファイオーレA級かそれ以上と思われる捧日。しかし、いざ戦いを見てみると、まだ光努の方が優っているように見える。捧日の攻撃は全て躲かれ、光努の攻撃は躲せず受ける。綺麗に受け止めることができたのは最初だけで、後は光努の威力に後退を余儀なくされていた。

「当然かもな。捧日と光努はどちらも似たタイプだからな」

バジルの質問にディーノが答える。

「似たタイプ？」

「ああ、両方とも、己のパワーに自信がある近接格闘タイプだ。だが、今見た感じ、スピードは体重の軽い光努の方が勝ってる。さらに、そんな重量差をもつものでもないほどに、光努のパワーが強い」

同じような特徴を持つ人間が戦った時、勝つのはどちらか？

それは、その特徴が強い方が勝つ。単純に、力の強いもの同士が戦えば、より力の強

いものが勝つ。今回のような戦闘においては、二人のパラメーターはほぼ同じような比率で高い。ならば、戦闘で勝つのは数値の高い方。このままなら順調、かと思いきや、スクアーロがディーノを睨んで口を開く。

「う、お、おい、跳ね馬。だがよお、向こうはまだ外してねえぞ?」

「……ああ。俺もそれが気がかりだ」

「お二方、それは一体どういう……」

だがその疑問をバジルがぶつける前に、画面場で動きがあつた。

「うおりやあ!」

瓦礫。というには大きすぎる、コンクリートの塊を、光努は躊躇いも辛さもなく、投げ飛ばした。

「その程度、甘いわあ!」

ズガン!

手に持つ偃月刀に嵐の炎を込めて、捧日は飛んで来た塊に向かって鋭い突きを放つた。まるで豆腐にでも刺すようにズブリと突き刺さり、刺さった箇所からビシビシとヒビが広がり、目の前の塊を粉碎した。

獯猛ににやりと笑みを浮かべるが、目の前にいた光努がいなくなっていることにふさがっていない左目を開いて驚く。だが、直ぐに顔を横へと向けと、先ほどと同じように、

コンクリートの塊が飛んで来た。

「何度やつても、同じことだあ！」

ピタア!!

『?!』

目の前の光景に驚いたのは、捧日だけでなく、観客席にいたメンバー達も一様に驚いた。同じように偃月刀突き出した捧日の攻撃は、飛んできが塊を粉碎するかと思われたが、偃月刀を伸ばしきった数センチ前で、飛んできた塊は止まった。

さらに、今度は刃先が触れてもいないのに、塊どんどんとヒビが広がっていき、一気に粉碎して瓦礫が捧日へと襲いかかった。

「あ、あれは!?!」

「ふ、流石光努だな」

「リボン殿、光努殿は一体何を？」

飛んで来たコンクリートの塊が急に動きを止めて粉々に碎け散った。ならば、意味することの一つ。

「あいつは、コンクリートの塊を投げて、捧日が突く前に一度止めて、自分の拳で碎いて瓦礫を浴びせたんだ」

「な、そんな無茶苦茶なことって……」

「ま、光努だからな」

ガラガラと瓦礫を大量に浴びる捧日は、腕を顔の前に持つて行つて瓦礫を防ぐが、壊した張本人はどこへ行つたのか。瓦礫と瓦礫の隙間へと体を忍ばせ、捧日の後ろにその身を動かしていた。

「あ、光努殿後ろをとつたでござるー」

拳を握りしめて、光努は背中から捧日の体を打ち抜いた。

だがそこで、驚くべきことが、起こつた。

土煙が立ち込め、瓦礫が周りに浮かんでいるスローモーションの世界の中で、観客達も、光努も驚いた。自ら後ろから振り抜いた拳だが、あろうことが、捧日は避けた。それも、ギリギリかすらないというところで、完全に見切つて避けた。

先の戦闘の中で、光努はこの状態でよけるのは不可能だと思つていた。しかし、光努のその考えは覆された。そしてゆっくりと動く世界の中で光努は捉えた。捧日の右目を塞ぐ眼帯が外され、その下の瞳が明らかに。驚くべきは、その瞳の中に二つの虹彩があつたということだつた。

「ふんー」

攻撃をかすつた捧日と光努の位置は、今はほぼ密着した状態。捧日は驚く光努ににやりと笑ひ、体を回転させながらその拳を光努の体へと叩き込んだ。

ドゴオオ!!

体をくの字に曲げて、一直線に光努は離れたビルの壁面まで飛ばされ、派手にぶつかり土煙をあげたのだった。

「こ、光努殿が!」

「まさか……あいつが殴られて飛ばされるところは初めて見た!」

その光景に驚いたのは、バジルやディーノだけではない。リボンやスクアール、そして別の場所で観戦しているルイも驚いていた。

「やはり、捧日のあれがでたか」

「あれ……か。灯夜は知っているのか。捧日の、あの右目のことを」

「あれは、重瞳だ」

「重瞳?だがあれは……」

「ああ、本来ならそんなのは想像上の物、もしくは何かの病気か何かだが、あいつのはそんな偽物じゃない」

重瞳。

古くは中国の貴人の特徴として知られていた異形の瞳であり、いくらかの歴史的人物、例えば「西楚の霸王」と謳われ、秦を滅ぼした項羽も、この瞳を持っていたといわれる。他にも、日本の歴史においては、豊臣秀吉や平清盛も重瞳だったといわれるが、こ

ちらにかんしての信憑性は低く、中国の歴史においても実際に本当かどうかは定かではない。

だが、この場にいるこの男に関していえば、本物。

病名としても似たような物がある瞳だが、捧日の持つこの瞳に映るは、立体的な視点と、神掛かった動体視力。そこから映し出すのは、先を見通す瞳。

目がいい、なんてレベルをはるかに超える、コンマの世界を、捧日の瞳は映し出す。飛び交うコンクリートの瓦礫の破片、微量な粒子が幾兆とあたりを揺らめく土煙。

そのすべてを視界に収め、そこからゆらりと揺れるわずかな変化を見つめ、光努の死角からの奇襲を察知することに成功させた。

(だが、この瞳は長時間は使えん。そうそうに蹴りをつけるか！)

捧日は、偃月刀の塚を握り、光努が飛ばされた場所へと地を蹴りだし、勝負を仕掛けた。

「仕掛けに来たな。あいつからしてみれば、早々に蹴りをつけたいところだからな」

「デイーノ殿、それは一体どういうことでごさるか？」

「捧日の瞳は確かに厄介だ。ガトリング砲も見切れるし、剣も槍もすべて紙一重でかわしてカウンターを打ってくる。だが、左右違う瞳の見え方というのは、ずれた波長が脳を酷使させる」

捧日の右目は世界をスローモーションのように捉えるが、左目はそれほどというわけではない。無論、常人よりも高い動体視力を持つてはいるが、それでも右目と比べると圧倒的なずれが存在する。

片方ずつ違う見え方をする、本来ならありえない捧日の視界は、長時間見続けることで瞳とそれを処理する脳に多大な負荷がかかってくる。そのため、捧日が重瞳をさらして戦うことができるのは、およそ10分、しかもだんだんと負荷がかかるため、普段通り動けるのはそれでも短くおよそ5分といったところ。つまり、捧日は次の攻撃で決着をつけるつもりだ。

ちなみに、片目を閉じるという選択肢もあるが、それでも普通は見ない瞳を使つての行動時間はやはり10分が限界。しかも今回はわざわざ死角を作つて勝てる相手ではない。

捧日の視線の先には、ガラガラとコンクリートの破片を落しながら土煙を立てるビルの壁面が移る。そして、その中にいる人物は、少し惚けて空を仰いでいた。

「ふむ、ここまで飛ばされたのは初めての経験かもなー」

光努は、まるで日向ぼっこをしている老人のような猫のような、珍しい体験をしたためか、心なしかいつもよりも楽しそうだ。それもそのはず。この世界において、光努を吹き飛ばす、それも己の肉体を使つて拳で殴り飛ばしたものだ、存在しただろうか。

「いや、さすがに驚いて反応が遅れたが、あいつのことはわかった」
ゆらり。

体を持ち上げて、スタリと地面に軽やかに降り立つ光努。そのまま右拳をぎゅつとにぎりしめ、楽し気に笑った。体は無傷、精神異常なし、視界良好。

あとは相手を、叩き潰すのみ。

「それじゃあ、蹴りつけるか」

フオオン。

地の底から響くような重低音ではなく、吹くような静かな音。

ボンゴレ側の移動手段、ジャンニーニが改造したこの時代のボンゴレ10代目のコレクシヨンの一つである自動二輪バイク。

全体をマモンチェーンと同じ素材で作る事で、原料となる死ぬ気の炎の反応を消し、

なおかつジャンニーニ開発のサイレンサーをつけて音を通常のバイクより格段に抑えて静かに走行が可能となっている。

そして現在、ボンゴレ側雨の守護者、山本武は一人バイクに乗り、高層ビル群の間を走行していた。

ツナはトリカブトを撃破して、再びバイクに乗って移動を開始。獄寺も同じように移動している。バイク内の死ぬ気の炎は外へと漏れ出さない為、敵のレーダーに映らず移動が出来る点がすばらしい

今の時代、マフィア達の中で死ぬ気の炎が主流となり、そのために敵の攻撃に必ずといっていいほど組み込まれる死ぬ気の炎を探知するレーダーも無論開発されたが、ハイテクだけに、こういったマシンは隠密行動に向いている。

もしも戦闘組の三人の誰かが標的として指定されていたら、このバイクの移動も簡単に察知されてしまうので、そう言う意味では非戦闘員の入江が標的というのも、ある意味良かったのかもしれない。無論、最後の結果次第でもあるのだが。

「?なあ、少し離れたところで誰か戦ってるみたいだぜ?」

敵の標的を目指して走行しつつ、炎レーダーを見ていた山本が通信機に向かって声を上げる。

確かに見てみると、現在移動中の自分のポイントを中央に、すぐそば、といっても数

百メートルは離れてはいるが、二つの点が重なっている。

基本的に、ミルフィオーレ側は、パファイオペデュラム隊もガロファアーノ隊も、固まって行動しない。

自分達の実力に圧倒的の自身のある彼らは、各個撃破の方針をとり、入江と光努のマークを目印に移動をしている。その過程で敵と遭遇したならば、個人個人で倒すことを基本指針として入る為、通常二人一緒にいることはない。ということ、いま炎レーダー内で二つに重なるポイントは、誰かと誰かが戦っているということ。しかも、自分達ボンゴレサイドの誰もその点とは違うということは、戦っているのはイリスとミルフィオーレの戦い。

『うん、どうやらイリスとミルフィオーレが戦ってるみたいだ。戦っているのは、おそらくイリスのシルと、真6吊花側の誰かだと思う』

山本の疑問に、予想よりも詳しい入江の回答に驚く。

入江とスパナの開発した炎レーダーは、誰が誰かわからなくなならないように、レーダーの反応一つ一つにマークすることができる。

最初にチョイスが開始された時点で、入江は全ての標的にマークをつけた。無論、通常ならどれがどの標的かはわからないのだが、入江は思考する。ミルフィオーレ達は、皆Fシューズを多用し、死ぬ気の炎を常に放出しながら移動している為、最初から炎反

応をはじき出す。

つまり、最初の時点で炎反応が複数あるのだが、入江が着目したのはその数。

みな戦闘員の数が、チームによって違うという状況を、入江は変更点とし、それぞれのチームを導きだした。

それは最初は仮定段階であつたが、これまでの戦闘データによって、明確にチームを分析する。

標的となる人物は基本基地から動かず、リーダーの反応も常に固定の為、戦闘員だけ抜き出せば、パファイオペデュラムは3人、ガロファアノは2人、イリスは1人となる。つまり、最初の標的の反応から分散した炎反応が3人の者ならパファイオペデュラム側の誰か、2人ならそこはガローファアノ側の誰かという可能性が高いことになる。

確信がもてたのはツナとトリカブトの戦い。

入江は常にマークしていた敵の炎反応を頼りにして、ツナに奇襲させて戦いに持ち込んだ。そして最初に3人から分散した反応の一つがトリカブトと知ったとき、自分の考えは仮定から事実が変わる。

そうすれば、残りの2人の分散反応はガロファアノ、そしてそれ以外の反応はイリスの二人となる。もともと光努はじつとせず、戦闘に絶対に参加すると見越した上での判断。その判断は正解であり、今も戦っている。最初から光努のマーク反応はマークし

てあったので、それ以外で出現した反応があるとすれば、それはもうイリス側のリルの反応に他ならない。

戦略、知識、対策、思考。

伊達や酔狂で、仮とはいえ6弔花を任されてはいない。入江正一という男は、チョイスを作り、知り尽くしただけでなく、この戦いにおいては頼りになる参謀であった。

『だが山本君。敵の炎反応が今はトリカブトの消失ともう一つ、おそらく故意に消している反応が一つある。十分に注意してくれ』

通常ならありえないことだが、自分から炎反応を消す、つまりは死ぬ気の炎を使わない移動手段をしているという人物が、レーザーを見て一人いるというのはわかる。何か問題が起こったのか、それともそうせざるを得ない状況、そのほうが都合がいい場合などいくらでもパターンをあげればきりが無いが、レーザーに映らないということは奇襲に注意。無論これは、相手側にもいえること。

ボンゴレ側の人間は皆レーザーに映らないバイクに乗っているので、近くで微かな音を拾うか視認しなくては奇襲を警戒するしかない。

「!?なんか妙な感じがする。一旦切るぞ」

『一分かった。気を付けて』

唐突に、山本はバイクを止めて地面に降り立つ。

その手に持つのは時雨金時。視線を鋭くさせ、瞬時に意識を臨戦態勢に切り替えるさまは、剣士として、一流の技量がうかがえる。

具体的に何かを見つけたわけではない。音が聞こえたわけではない。しかし、山本の直感がこの場は少し危険だということを告げていた。

(周りに人影はない。……………風切り音?! 上か!)

とつさにその場から飛びのくと同時に、上空から降り注ぐそれは、硬いコンクリートの地面へと突き刺さった。

「これは、ナイフ?」

山本が少し不思議そうな声を出して見つめたのは、ナイフ。

見たところ、なんの変哲も無いようなナイフが10本ばかり、先ほどまで山本がいた場所へと突き刺さっていた。雷のステージの為に硬度の高い地面だが、わずかだが刃から揺らめいている死ぬ気の炎を見て、山本はすぐに上空を見る。

見てみると、今度は数十本のナイフが、まるで雨のごとく降り注ぎ、太陽の光にキラキラと反射していて見た目だけは一瞬綺麗だと思ったが、洒落ならない状況というのを再度確認して、時雨金時を構えた。ボンゴレリングから伝導した蒼海な雨の炎を刃に纏わせ、降り注ぐ雨に向かって振りぬく。

(時雨蒼燕流、攻式八の型、篠突く雨!!)

キイインキイイン!!

目にも止まらぬ連撃、振りぬく刃に雨の炎が軌跡を作り、降り注ぐナイフを弾き飛ばした。

山本にとっては、上空からのナイフの雨を刀一本で弾くというのはさほど難しくもない。そのため、この攻撃をはじめつつ、周りの気配を探り警戒を怠らない。

だが、太陽の光の反射する飛び交うナイフを何度か弾いた瞬間、一瞬だが、山本は捉えた。野球選手として、剣士として、高い動体視力を持つ山本は、一瞬だけ自分の目の間のナイフの刃に映し出された黒い影を視界の端に追いやり、勢いのまま自身の背後に刀を振りぬいた。

キイイン!!

鳴り響く金属音。

山本の背後にいた人物は、両手に持ったナイフでもって、時雨金時の一撃を防いだ。その日本のナイフには、紫色の雲の炎が纏われている。

「お前は、確か『死神』とかいう」

山本の攻撃を受けたのは、白い髑髏のアップリケのついた黒いシーツのようなものかぶった、手抜き間が半端なく漂うミルファイオーレガロファーン隊、死神。

手に持ったナイフから、先ほどの攻撃はこの人物がやったということがわかる。

しかし見れば見るほど妙な人物。まるでお化けの仮装をしているようで、山本は場違いにハロウィンみたいだなーと思っただけのは余談である。

「ボンゴレ雨の守護者ですか。特に悪気はないですが、ここで倒れてください」

チヨイスバトル、山本VS死神、開幕！

『ホワイトロードチェンジ』

「光努、お前にこれ貸してやる」

そういつて、黒道灯夜は、縄で縛られた巻物を渡した。

「今時巻物つて、ていうかこれ何？」

さすがに光努も巻物は珍しいらしく、灯夜から受け取った物をまじまじと見つめる。芯に包まる紙は、手触りからなかなか高級そうな和紙。割と昔のものらしいが、それにしても劣化が少ないのでやはり良いものなのだろう。さて、ではこの中に一体何が書かれているのか？

「この中には俺の使う『黒道流』について記されている」

黒道流。

名前からわかる通り、黒道灯夜の使用する武術。

嘗て灯夜のご先祖様が、さまざまな困難な状況に立ち向かう為に編み出した技やら修行法やらを書き足したと記される幻の巻物。この流派の特徴的な例としては、別別の人

間が同じ事を同じ学び方をして、最終的に会得する物が人によって変わるといふ。

嘗てのご先祖は、自分で出来る修行法、自分では出来ないが、こんな人間なら出来るといった、机上の空論のような修行法や技などを記し、ある種のカードゲームのように多くの技からいくらかを取めて、免許皆伝者は自分の流派を名乗るといふ。

もともとは別の名前の流派であったそうだが、灯夜は自身が取得可能な技を覚え昇華させ、一つの『黒道流』として体得した。

この巻物のご先祖の作った流派の元々は、『無道流』ともいわれているらしい。進む道無く、自身が道を作るといふ。

「そっういえば、前にスクアーロに一個使ったことあったな」

黒道、空破打波。

ボンゴレリング争奪戦の最中、雨の守護者の戦いが行われる日に光努とスクアーロが戦闘を開始して、結果光努が勝ったのだが、そのときに使用したのが灯夜に教わった技の一つ。その頃はただの興味本位で一つだけ教わっただけで、何かしようというわけはなかった。

しかし今回はチョイスという、マフィア間の戦争のようなことが起こる為、準備を整えて損はない。

「考えてみれば、灯夜の本気って見たこと無いな」

楽しみに笑う光努。だが確かに興味はある。

29歳という若さで、一強大なマフィアのボスの代理をこれまで行ってきた黒道灯夜。

事務能力は確実に高いだろうが、それと同様に、その身に詰め込まれた力は想像を超えるだろう。楽しみに笑う光努を見て、灯夜もふと微かに笑みを浮かべる。

「なんなら、組み手をしてやろうか？その巻物を体得するまで、倒れるまで付き合ってるぞ？」

こきりと手を鳴らす灯夜に、光努は口角を上げる。

「へえ、面白そうじゃん。いいぜ、この『無道流』、チョイスまでに俺の物にしてやるよ！」

不適に笑う光努は、結び目を解き、巻物の中を開いた。

一直線に、地を蹴り特攻を仕掛ける少年、白神光努。

その瞳に映るのは絶望でも悲壮でもない。好奇の色。楽しげな表情を浮かべる少年に、真正面から対峙する捧日は、背筋にぞくりとした悪寒のような感覚を受けた。

(この小僧！)

だが、獯猛に口角を上げて、捧日は右目でもってギロリと光努を見つめる。自分に対して真正面から挑むことに、少々疑問を抱く、妙な違和感を覚える、だが、それはそれでこちらとしても都合。自分の力をもっとも發揮できるのは近接戦闘であると、捧日は理解しているから。

注意深く光努を見つめる。光努の一挙手一投足を見逃さんと、見つめる捧日の瞳に、光努の次の移動が映った。

大地を蹴り、跳躍することで上空へと躍り出る。すかさず、寸分の狂いも無く、ちょうど光努が自身の真上に来るタイミングでもって、手に持つ嵐の炎が纏われた青龍偃月刀を天空へと突き上げた。だが――

(これは、加速した!?なんだ、あの板は!?)

光努の動きは見慣れたので驚きはしないが、移動手段の無い空中でもう一度加速したことには驚いた。

もう一つ驚いたのは、加速して光努がいなくなった場所に、小さな、ほんの小さな白い、板の破片のようなものが見えた。すぐに霧散してしまつたが、捧日はすぐに光努の移動場所へと体をひねる。

一度目の跳躍で捧日の上へとやってきた光努は、二回目の跳躍でもつて、捧日の後ろを取つた。

いくらスローモーションのように捧日が見えていようとも、虚を突かれ、ありえないと思つていた移動方法を行つた光努の方が、先手を取つた。すぐに振り向くが、光努はすでに拳を握つて構えに入つている。

(くっ、この状態から防御に間に合うか……いや、間に合わせる！)

とつさに上へと突き出していた偃月刀を手放して、軽くなつた身体でもつて体をひねつた。

光努の拳はすでに放たれている。捧日は自身の右目の捕らえる世界の中で、光努と自身の体の間に、己の両手の平を滑り込ませることに成功した。ここで防御をすれば、もう虚を突かれることは無い。もう一度偃月刀を手に取り、仕留めるのみ。

(よし！)

口角を上げ、己の勝利を確信した捧日は、微かに呟かれた言葉を拾つた。

「成功したと、思つたか？」

——トン！

拳を振るい、受け止めた二人の攻防。だがその様子を観戦していた者達は、その光景に違和感を覚える。ぎりぎりのように見える攻防の中で、割とすぐに違和感を発見する。

音が小さい。

腕力に定評のある二人の人間がぶつかり合ったにしては、拳の触れた音があまりにもか細すぎた。その理由は、受け止めた捧日には理解できたが、同時に驚愕する。

(なっ……やつ、力を込めてない!?)

己の手のひらに触れる光努の拳。だがそこには一切の力も込められて折らず、本当にただ触れているだけ。若干、捧日の方が、防御する為相手の力に対応する為に、力を光努の方へと向けているくらい。光努と実際に戦いここまで来たために、力のこもらぬ拳に、捧日は二度目の虚を突かれた。

「白道、はくどう幻無白打！」げんむはくだ

いくら見えていようと、ゼロ距離からの攻撃は、避けようがない。

ドオオオオン!!

触れる光努の拳が捧日を打ち抜き、硬化されたビルの壁面へとその身をぶつけた。蜘蛛の巣のようにコンクリートに罅を散らし、破片を撒き散らす。

(ははっ、この小僧! やってくれたな! 最後まで手の内は全てさらせずだが、後は残りの奴らに任せるか!!)

いっすすがすがしいほどに、笑いながら意識を沈めていく捧日は、光努の全力を引き出せてなかったことに残念に思ったが、結果として満足していた。マフィアの用心棒として渡り歩き、さまざま人物と戦ってきたが、己の肉体のみでここまで戦える者は数えるほどしかいなかった。それも、年端も行かぬ少年ならなおさらだ。

後は自分のチームメイトに任せて、静かに意識を沈める。

(唯一気になるのが、あやつのみか。光努、お前ならあるいは……………)

捧日は自分のチームの大将である少年のことを少し心配そうに思い出しながら、倒れ伏すのだった。

ミルファイオーレガロファアーノ隊、『通称龍』秦捧日。

チヨイスリタイア。

「びゃくらーん！やられちゃったじゃないのー」

海を思わせる水色の長い髪を揺らし、ソファに座っていたブルーベルは白蘭に抗議の声を上げる。中にはもちろん、自分がチョイスに参加出来なかった不満も入っているのは言うまでも無い。

「あはは、さすがに光努君相手じゃA級は分が悪かったみたいだね。弱くはないんだけどなあ〜」

自分のチームが一人脱落したというのに、まったく残念と思っていないかのように笑う白蘭。本当に残念と思っていないのだろう。

一人二人減ろうとも、自身の勝ち揺らが無いという圧倒的な自身。同様に、一人二人減ろうと関係ないという、冷徹な一面が見え隠れしていた。

「メローネ基地の戦いである程度知ってたけど、今回は匣は使わなかったみたいだね。まあメローネ基地でも試しに使っただけで戦いに組み込んでなかったしね。代わりに、

面白い兵器は使ったけど」

光努がメローネ基地で使ったのは、全てルイの作った試作品の匣兵器。しかも、戦いがある程度進んでから試しに使ったくらい感覚。つまり、戦いにおいて別に使っても使わなくても問題なかったという。

(パワータイプかと思いきや、思ったより技術も持つてるね。それに、なにやらチョイスに備えていろいろ仕込んできたみたいだし、楽しみだね♪)

メローネ基地の戦いを見ていた白蘭は、今回の光努の戦いを見て、どこか動き方が少し変わったような気がした。無論、それでもでたらめな動き、パワーなのは相変わらずだが。

「ねえびやくらん。あっちは大丈夫なの？」

「ん？ああ、彼らね。うくん、ある程度予想はつくけど、どうなるかわからないからね。ま、楽しんでみようよ」

別のモニターで別の場所にて戦う者達を見て、白蘭は笑みを浮かべる。

その笑みは、楽しげに笑う子供のような笑みなのか、それとも、何かを企みほくそ笑む、悪魔のような笑み。それを知るのは、本人以外、知る由も無かった。

光努と捧日の決着がつく頃に、戦う人影が増えるチョイスフィールド内。

山本武と死神の邂逅と同時に戦闘を開始する二人だが、その前に戦う人影があった。

ビルとビルの間を飛び回り、広範囲に渡り己の力を誇示して攻撃する手を休めぬ人物。それに相対し、攻撃を受けて防ぎ、自らも攻防を繰り返す。

ビルとビルの間を移動していたのは、一人の少女。

後頭部でまとめた柔らかな黒髪を揺らし、その手に持つは一本の洋剣。

白銀の刃に太陽の光を反射させるシンプルな洋剣を持つているのは、イリスファミリーのリル。腰には鞘に納められた刀を挿し、ブーツの上から脛と足の甲を覆う様にプレートアーマーを纏い、その足が踏みしめるは、緑色に閃光弾ける雷の炎を纏った空を飛ぶ洋剣だった。まるでスケボーのごとく器用に乗り回し、華麗に飛び回っていた。

4本のグラジオラス。
グラディオロクアットロ

リルの持つ、自立飛行機能の搭載された4本の洋剣を呼び出す匣兵器。イリスの独自開発したこの匣兵器は、自立飛行のオートモードと、自身が操作するマニュアルモード

の二種類のモード変換機能が備わっており、マニュアル機能にすればバランス感覚の良い物なら上に乗って空中移動を行うこともできるといえるのである。

四本で一組のこの匣兵器を、リルは一本を移動手段に、もう3本を自身の周りに滞空させていた。うろろろと不自然に動き回る剣は、急に方向を転換しながら、リルの斜め後ろへと移動して滞空した。

ドオオン!!

瞬間、滞空していた剣が爆発した。

否、剣が爆発したわけではなく、剣に爆発する何かがつぶかった、というのが正しい表現。しかしそれらしい爆発物質は目に見えないため、その表現も正しいかどうか定かではない。

しかしリルはさほど気にした様子も無く、楽しみに飛び回っていた。

「まったく、危ないよね〜」

突如、ビルの外壁を突き破り、うねうねとうごめく巨大な樹の根が生えてきた。きたかと思えば、爆発する剣を抜けて、リルの元へと根を伸ばす。

「おっと」

割と余裕そうに、剣を蹴って跳躍し、根をかわす。さらには根の上に立ち、そこから加速し、ビルの壁面を走る。そのまま壁面から何本もの樹の根が串刺すようにしてリル

を攻撃するが、驚異的な速さで疾走するリルを捕らえることは出来ず、走り去った後ろの方で樹の根がうごめいていた。

ズン！

「！」

リルが走る前方、壁面を再び突き破り、大樹が生えてきた。さながら世界樹、というのは言いすぎだが幾本もの樹が絡み合ったような大樹がうねり、今度はリルは回避せず、手に持った剣に雷の炎を纏わせ、振りぬいた。

キイイン！！

甲高く響く金属音。

同時に、藍と緑の閃光が辺りに煌く。

純度が高く鋭い雷の死ぬ気の炎を纏うリルの剣と相對するのは、少し幅広の大剣。持ち手は全身に霧の炎を纏う堅牢な鎧を身に纏い、その威圧感はまだで一つの要塞のようでもあった。

鎧と鎧の間から見える、体中に傷跡のある男は、鋭い眼光で持つて自身の前にいるリルを睨みつけている。

「思ったよりすごい幻術だね、幻騎士」

キイイン！キイイン！キン！！

互いに剣を振るい、一瞬間の間に数度切り結ぶ。ひときわ強く打ち付けたと同時に距離をとり、空中を漂う剣の上に足を置いて、壁からはやした樹と同化する幻騎士と対峙した。

「減らず口を。お前はまだ、自分の剣を見せてないだろう」

冷徹に相手を睨みつける眼。

顔に傷跡が浮かぶ男、幻騎士は、幻術の中から抜け出てきた。

「なっ！あの男は、幻騎士！」

「とんでもねーのがまぎれてやがったな」

観覧席で驚愕するバジル。

リルの目の前にいるのは、メローネ基地で山本が戦い敗北した、おそらく名実共にミルフィオーレーと名高い剣士、元ジツリヨネロファミリーの幻騎士。

その後、入江の研究室前の最終防衛システムとしてツナの前に現れ、苦戦の末にツナのイクスバーナーによって倒されたはず。その証拠に、鎧と鎧の間に見える肌には、大怪我の後らしき縫い目が見えていた。

だがまさか、チヨイス戦いの霧のプレイヤー『猿』として参加しているとは、誰も夢

にも思わなかった。

「確か、あいつ綱吉の炎をもろに食らったはずだが、復活早いな」

モニターを見ていたルイも少々驚いている様子。メローネ基地の三ブロックを一瞬で消滅させたツナの大技を食らったのだから、当然といえば当然。それですぐにチョイスに参戦できるとは、幻騎士の生命力がすごいのか、ミルフィオーレの医療技術がすごいのか微妙である。

「イリスファミリーが誇る剣士リル。どんなもんかと思いきや、己の剣も見せずに何のつもりだ」

「何のつもりも何も、このチョイスのルールは標的を倒すことだよ。だったら、その他の人と戦ってもしようがないと思うけど」

「早計だな。お前に戦う気が無くて、見える敵は全て切り裂く」

幻騎士の瞳が光ったような気がした。

その瞬間、リルの周りに浮いていた剣が空中を飛び交い、リルの周りでいくつも爆発が起こった。

「あの剣、またお前が作った新兵器か、ルイ」

「ああ。死ぬ気の炎はもちろん、自身の周りからの攻撃を感知してオートで防御するシールドモード。目に見えない幻騎士の幻スベットロ・ステイブランク海。牛すらも防御する。ま、100%と

いうわけではないが、せいぜいが85%つとところか。あとはリル次第だな」
 それでも十分驚異的。

炎リーダー、熱源、軌道、音、空間、その他、様々なリーダーとセンサーが搭載された剣。幻騎士の匣兵器である幻スベットロ・ステイブランク海牛は、幻覚を構築するだけでなく、海牛単体が攻撃力を持った爆発兵器。

幻騎士の常套手段として、幻覚により姿を隠して相手に爆発海牛を打ち込むという戦法をよく使う。だが、機器をも翻弄する幻騎士の幻覚に対抗して、機器の性能を向上させたルイのセンサーは、通常回避が難しい海牛を防御することに成功していた。

「ふん。スベットロ・ステイブランク幻海牛を防いだ位では、俺には勝てない！」

ふっと、幻騎士は言葉を残してその姿を分裂させる。霧の炎を全身に纏い、一度に4人に分裂した幻騎士は、前後左右からリルを取り囲み、一斉に剣を振り下ろした。

トンッ！

剣が振り下ろされる直前、リルは跳躍して躲し腕を振るうと、滞空していたリルの剣が一斉に4人の幻騎士を貫いた。

(一斉に切りかかってきたから軌道は読みやすかったけど、あの様子じゃ全部幻)

再び剣の上に載って上から見下ろしリルの予想通り、あまりにもあっけなく剣に貫かれた4人の幻騎士は、サラサラと砂が崩れるようにその形を崩す。

（幻覚の中に身を隠したみたい………いた！）

周りの木々は質感も、スベットロ・ステイブランキ幻海牛を使用して構築している為ほぼ本物に近い。にもかかわらずリルは、自身から離れた場所へと一直線に向かい、その手に持った剣に硬化の閃光のような雷の炎を纏い、音速の剣をふるった。

キイイーン！

幻覚の木々の中から姿を現した幻騎士は自身の持つ、匣製作者、ケーニツヒの最高傑作と言われる霧属性最強の剣、スベットロ・スバダ幻剣を振るい、リルの剣を受け止めた。

「ふん！」

ギイイイイーン！ドオオオン！！

「おっ？！」

幻騎士の剣劇と、同時に起こるスベットロ・ステイブランキ幻海牛の爆発。

リルは弾かれるようにして後ろへと飛び出し、ビルの壁面を蹴って道路へと降り立つ。爆発直前に後ろへと飛んだのでリル本人には怪我は見当たらないが、短く息を吐き、右手に持った剣を見て、少々驚いたように目を見開いた。

視線の先には、真ん中程から綺麗に折れた剣が見えた。

（幻騎士のあの剣、思ったよりも強い。さすがケーニツヒの名剣。やっぱり普通の剣じゃ炎があっても強度がたりなかつたみたい………）

天才的な匣職人ケーニツヒは、イノチェンティ、ヴェルデの二人と比べ、武器の作成に力を入れたとされ、幻騎士の現在身に着ける装備も彼が手掛けた作品。近接格闘用の鎧は堅牢だが軽量で動きやすく、その手にある剣は幾重にも斬撃を分裂させることができるといわれるケーニツヒ傑作の名剣。そんなよそこの剣とは比べ物にならない力を誇る。

(スクアアールも武も剣自体にはあんまり興味なかったしなく、私は結構あの剣もいいと思うけど)

同じ剣士なれど、スクアアールは相手の技術や強さ戦闘に興味があり、刀剣自体にはそこ

まで興味はない。そして山本は自身のもつ時雨金時が一番と考えているので、やはりあまりほかの刀剣自体にも興味ない。

ただこの時代においては失われたボンゴリング以外の雨系リングと時雨金時の相性が悪かったため、そこそ強めの日本刀を多少は探していたが。

「ま、しょうがないか」

そういつて楽し気に笑うリルは、自身の腰にささる刀に手をかける。左手で鞘を押え、右手で柄に手をかける。夜の闇を塗り付けたような黒い鞘に納められた、真紅の柄糸が巻き付けられた一本の刀。

（あの刀。戦いの最初から腰に挿していたが。わざわざ匣兵器の刀とは別に持っているとは、一体……………）

リルが刀に手をかけたことで、幻騎士はわずかに瞳を鋭くして警戒する。

この時代、皆匣に己の武器を収納するのがほとんどだが、それでもなお匣に収納していない武器を所持するものもそこそこいる。そういった物は決まって、匣開発以前の、自身に愛着のある武器を使う物、もしくは、特殊な武器を使用するもの。山本の時雨金時もその一つ。時雨蒼燕流専用に使われ代々受け継がれた刀。

そしてリルの持つ刀は、遥か千年以上昔に作られたまぎれもない名刀。

「やっぱリルは真打登場、みたいなの？ 刀だけに」

「……………面白くない」

冷静に感想を述べる幻騎士の声は、誰に聞かせるなく風に乗って消えるのだった。

『紅い刃を少女は振るう』

神器、それは人知を超えた力を秘める、神が作り出したとされる道具の総称。

イリスファミリーが見つつけ出して、他のマフィアや組織に触れ回ることがないように独自に情報遮断をした秘匿物質。

無論、そのすべてが歴史の紐を解けば、誰でも聞いた覚えのあるような逸話があったり、製作者は永遠の謎とされていたり、その物にまつわるおぞましい話がついてきたりと、諸説あるが実のところ、その実態はほとんどが謎に包まれている。

イリスファミリーはそういった謎を解明することも生業としている。

驚異的な頭脳と力を持つイリスファミリーが総力を挙げたとしても、そうして見つけた神器の総数は、わずか4つ。

ボンゴレ同様に長いイリスの歴史を遡っても、どれも一筋縄ではいかない。そしてその中には、どう考えても知識と力だけでは手に入れることができない物すらあった。まるで誰かがそこにそっと置いたかのように、何者かの意図がそこに介入していたかのよ

うだった。

シャン！

抜き放ったのは、銀色に光る刃。刃こぼれの一つも見当たらない、素人にもわかる名刀。一瞬、刃から抜き放った威圧感に、モニター越しにはいえ観戦していたバジル達は息を飲んだ。

「リル殿のあの刀。あれは一体……」

わざわざ匣として持ち歩いていない刀を持っていたので違和感があったが、その存在感は並みの刀では出せない存在感。バジルのつぶやきに、後ろにいたスクアーロは獯猛そうに口角を上げた。

「あれは、アマクニトウ天國刀だあ」

「天國刀？スクアーロ、お前はあの刀のことを知ってるのか？」

「まあな。昔クルドの野郎に少し聞いたただだが、確か数百年以上昔の刀鍛冶が作ったとされる刀だあ。その力は、イリスの神器に匹敵するといわれるな」

「な、数百年前の刀！そんなものが」

「う、お、お、い！面白れえもんが見れるぞ。あいつらの使う、剣技はなあ」

そういうスクアア口の顔は、いつもと違って若干楽しそう。その様子に、どうやらリルの使う剣技を見たことがある様子。

「そうだな、俺も久しぶりに見るな。10年前はクルドしか使ってたからな」

「リボン殿も、リル殿の剣を知っているのですか？」

「ああ。あいつらが使うのは、変則二刀流の剣刀術、『デュアルコード』」

リル、コルの使う剣は、『デュアルコード』と呼ばれる基本二刀流の剣術。

しかし、その中には一刀流で使う剣技も含まれている。

嘗て、遙か昔東西にその名をはせた二人の剣士が、己の技を持ち合い、一つの流派として統合させたといわれる剣技。

その型は『壹』と『陸』の合計6種類。

それぞれの二人の剣士の特徴を反映させた剣技は、『壹』『弐』『参』を夜の型、『肆』『伍』『陸』を朝の型と分類された。

その中で、『壹』と『陸』は、それぞれが夜と朝の奥義とされる技。そして『弐』と『伍』が、夜と朝の一刀技と二刀技と分けられる。

山本と模擬戦をしたコルが使用したのは、『夜ノ型参・月天山』コルドサイド。これは一刀流での刀の使い方を主とする剣。

「そしてもう一つ、あいつらの剣には自分達で編み出した剣、7番目の剣が存在する」
画面に映るリルは、楽し気に笑い、幻騎士と対峙していた。

「じゃあ幻騎士、続きしようか」

鞘から抜き放った天國刀。チョイスが始まる10日の間に、光努とコルとともに手に入れた一振り。神器というわけではないが、その力は神器級。

真正面から対峙する幻騎士も、警戒の色を高める。

瞬間、リルから一筋の光とともに、真つ赤に燃え上がる死ぬ気の炎が辺りに揺らめく。

溢れ出す、リルの刀を持つ手にはめられた嵐のDリング。そこからほとぼしる嵐の炎は、周りの幻覚すらもチリチリと燃やしていく。その純度、さらに炎圧共に、もはや常人の域をはるかに逸脱しているような気がした。だがしかし、その炎がリルを中心に綺麗な球体状になる。次第に、その炎が縮んだと思つたら、すべての炎が一瞬でリングへと納められたしまった。

わざわざ自分で出した炎を、再び戻すなど、幻騎士としてふざけるなどといった行為だが、次の瞬間にその表情は驚愕へと変わった。

「漆ノ型、彩式・紅赫刃！」
セブンスコード、サインキ、コウカクジン

まるでそこに、血を垂らしたかのように、見えない何者かが塗りつぶすように、リルの持つ天國刀が根元から徐々に赤く染まっていく。

その光景に観覧していた者達は驚きながら、すぐに刀の切っ先までその刀身を真紅に染め上げた。

(なんだ、あの刀の色は……)

幻騎士も見たことがない技。

嘗て、イリスファミリー第一戦闘部隊『アヤメ』のリーダーであるリルとコルの父親であるクルドと戦った時には見ていないであろう技。

警戒するに越したことはない。自身の周りにある幻覚をざわざわと揺らめかせ、リル

の襲撃の前に、誘導爆発物質の幻スベットロ・ステイブランク海牛を突撃させた。

通常なら幻覚で姿を隠した海牛は見ることができないが、リルはそこから来るのがわかっていたかのように、その場を跳躍した。

「何!？」

さらには、滞空していた剣を足場にさらに跳躍、そしてさらに滞空してた別の剣を一本取り、雷の炎を纏った。両手に持った嵐の刀と雷の剣。

リルは一直線に、幻騎士のいる場所の上空から攻めてきた。

(俺の居場所が分かるだ?!?だが、その程度、もう一度へし折ってくれる!)

ビルの壁面の樹木、幻覚の中から抜け出てきた幻騎士は、自身の持つ幻スベットロ・スバダ剣を振るつ

た。相対して、リルは左手に持つ、雷の炎を纏る洋剣に力を籠める。

「朝ノ型伍、ドゥウシャートウヅオートルデオン降り注ぐ双雷!」

左手に持った洋剣を、右から左へと振り払うように振るう。瞬間、リルの持つ雷の洋剣と、幻騎士の幻剣が交差する。

だが、鏝競合いも一瞬、すぐにバキリと剣が中ほどから再び折れてしまった。

硬化の特性のある雷の炎を纏っているとはいえ、先ほどから爆発を受けすぎた洋剣。流石に限界が来たのだろう。だが、リルの瞳は、それすら見越した攻撃を見据えていた。

(右手の刀だと!だが、もう一度防御を——)

左手の剣を振り払い、受けられたら同時に円運動のように右手の剣を振り払うリルの剣。

二刀流で初めて使える連続斬りの技を、幻騎士は再び受け止めようとしたが、瞬間、リルの右に持つ刀身が赤く染まる天國刀を見て、背筋にぞくりとした悪寒が這った。

(あの刀、受けるのはまずい!!)

とつさに、幻覚から抜け出したその場を離脱する。

それと同時に、リルの右手にある天國刀が、幻騎士の先ほどまでいた場所を切り裂く。

『!!』

離脱した幻騎士は、自身の背後を見て驚愕した。

スベットロ・ステイブランキ
幻海牛

の攻撃で多少の穴があつたとはいえ、雷の炎によって何十倍にも硬化されたビルは一棟、横一文字に斬りさかれていた。

切り裂かれたビルは崩れ、次第に倒壊して瓦礫を噴出した。

ビルが倒壊したことで、幻騎士は道路に降り立ち、同様にリルも剣を蹴って道路に降り立ち対峙する。降り立った幻騎士は、注意深く油断なく、リルの天國刀を睨みつける。対してリルは、剣が交差するような模様の描かれた匣を手にとつと、中ほどから折れた剣が二本と、滞空していた二本の剣が中へと収納され、リルは匣をしまう。手に持ったのは、赤い刀身の天國刀のみ。

「なるほど、その刀。強大な死ぬ気の炎を圧縮して刀身に籠めている、というわけか」
警戒するような幻騎士の言葉。

リルは自身の持つ嵐の死ぬ気の炎を刀身に圧縮して籠めることで、爆発的な力を実現している。嵐の特性の“分解”は、圧縮により極限まで高められ、触れるもの全てを“分解”し、切り裂く力を発揮する。

通常の刀であれば、こんな無茶な炎の使い方をすれば刀事態がボロボロになって使い物にならなくなるが、それを補うだけの強度と切れ味を誇るのが天國刀。さすが、神器級と呼ばれる名刀。

リルの炎によって、刀身は真紅に染め上がった。

普通に纏うだけでなく、外部に漏れださないようにと精密的に炎操作も含まれている。傍目には焼き鏝のようにも見えるが、逆にそれが刀身に触れるやばさを物語っている。

(あの刀では、幻覚スベットロ・ステイブランキこと幻海 牛も切り裂かれる。面倒だな)

雷の炎で硬化されたビルすら容易に両断する天國刀の威力は、幻騎士の匣すらも容易に切り裂くであろう。つまり、防御はほぼ難しい。自身の持つ幻剣で受け止めることもできるかどうか。

(ならば、近づかせなければよい話)

幻剣を握り直し、静かに幻騎士はリルを見据え、霧の炎を練りこんだ。

「すごいです！まさか十年前のリル殿がこんな強者に成長しているとは」

驚嘆の声を上げるバジル。最も、十年前でもそこらの構成員よりかは強いリルとコルであったが、実はバジルはリル達とはほとんど面識が無い。中には面識あるものもいるが、実力はどうか？と言われたらそこまで特筆すべき解答ができない。

「当然だあ。あの親バカのガキだからなあ」

若干不機嫌そうなスクアールと、先ほどの言葉にバジルは疑問を投げる。

「スクアールはリル殿の父親と面識あるよう聞こえるが、戦ったことがあるのですか？」

実はデイーノとリボン、他多数も気になっていた質問にバジルが聞いたので「よし、よく聞いた！」みたいなことを思ったのは余談である。十年前から割と気になっていたことだが、スクアールは昔強い剣士と戦いまくったという話を聞いたので、ならば有名

どこのの剣士は全部コンプリートしているのではないか？その中には当時イリスファミリー唯一の剣士のクルドも含まれているのか。という疑問である。

「確かに戦ったことあるが、10にも満たねえガキの頃の話だ。今やれば俺が勝つ」「とか言ってるけど、実際のところどうなんだろうね。そもそもパパどこにいるか知らないけど」

「だがスクアアロとクルド殿の対決は拙者も見たいです」

「俺もみてみてーぞ。どっちにしろどちらかボロボロなるしな」

「おいおいリボン。それもそうだが随分とひど……………コル!?お前どこから出てきたー！」

デイーノが驚いた通り、いつの間に会話に参加していたのはコル。

揺れる黒髪。左手に、蒼海を思わせる柄糸の巻き付けられた刀を握り、静かに佇む刃のような少年。画面で刀を振り回している少女と同じ顔だちをした少年コルは、周りが驚いている最中、マイペースに無表情を貫いていた。

「それで、スクアアロはパパといつ戦うの?」

「いやいや、そんな話はしてただけど!それよりコル、お前どこから!ここってボンゴレの観戦室だろうが!」

「なんだ知らなかったの。イリスとボンゴレの観戦室って同じ建物だよ?」

その言葉に愕然とするディーノ達。確かに観戦室から直接フィールド内に干渉することはできないため、別にイリスとボンゴレが一緒でも問題ないといえれば問題ないが、まさか同じ場所で観戦していたとは夢にも思わなかった。

ちなみに、場所はボンゴレ観戦室のすぐ隣の部屋。部屋から出れば給湯設備も整っている、割と快適な観戦室だが、一度でて廊下を歩いて隣の部屋に行けば、イリスの観戦室に入ることができるのである。ちなみに造りは基本どのファミリーも同じである。「ちなみにルイはそのソファで寝転がってる」

「うわ、本当にいたー」

少し部屋の端にある対面式のソファ。背中を向けた側に寝転んでいたのも、こちらからは見えなかったのはしようがないが、いつの間に入ったのやら。

こんなところでも寝転がっているのはルイらしいといえばルイらしいが。

ガチャリ、と唐突に扉が開き、誰かが入ってくる。この場にボンゴレ側は全員そろっている為、おのずと何人かは誰が来たのか予想がつく。

「なんだコル、それにルイも。こんなところにいたのか」

黒髪に黒いスーツと黒い瞳。少々呆れたような声を上げつつ、よどみなく歩く男性、

黒道灯夜は、中ほどまで歩きそこにいるメンバーを見渡す。

リボン、バジル、デイーノ、スクアーロ、フウ太、ビアンキ、ハル、京子、イーピン、ジャンニーニ。そして戦闘していない守護者の了平、ランボ、雲雀、クローム。

(今更だけど本当にボンゴレ側は人多いな)

自分たちの観戦室には自分を含めてコル、ルイ、ハクリの計4人しかない状況なので、やはり少し呆れている。

対して、灯夜を初めてみる面々が割と多いので、皆一様にどういう反応をすればいいのか困るものもいる。若干何名か、灯夜を殺意的ににらみつける人物もいるが。

「俺をにらむのはいいが、いいのか？今モニターは少し面白いことになってるみたいだが」

その言葉に、モニターの戦闘に目をやるとモニターには、二人の人間の戦闘が見えた。しかし次の瞬間、確かに少し面白い事態に発展した。

(なんか、妙だな)

山本武は、少し違和感に苛まれていた。相対したミルファイオーレガロファアーノ隊の死神。シーツをかぶった妙な姿、下手なお化けの仮装のような姿は確かに妙。だがそんな違和感ではない。先ほどから、山本と死神は幾度となく斬りあう。

といつても、死神の持つのはナイフのみ。シーツの中からナイフ類の刃物を投げ続け、山本はそれに対して避けて弾き死神に刀を振ると、死神はナイフで防御する。それの繰り返し。

最初にナイフを雨のように振らせて切りかかってきたのには驚いたが、それ以外は普通に対処が可能。左程苦戦、という程でもない。

死神の動きも、素早いわけでもトリッキーなわけでもない。確かに山本の刀を受け止めるほどに身体能力も高い。それに雲の炎も純度が高い、何よりこのチョイスに参加しているだけあってその実力の高さがうかがえるが、どうもそこまで強い感覚が見えない。

攻撃が単調、しかしなぜか、だんだんと死神がイライラしているような気がした。

「……………やっつてられませんよ!!」

「はっ」

いきなり叫びだしてナイフをばらまく死神。口調は丁寧だが、どうにも限界だという感じがひしひしと伝わるような言葉だ。

「だいたいなんですか！このシーツは！マントでもフードでもなくてただのシーツですよ！しかもこの罫縞、模様が入ってるのではなくただ縫い付けてあるだけ！手抜きにも程がありますよ！」

「え、あ……ああ、まあ………お気の毒に……」

いきなりのことに、山本もなんて反応すればいいのか困った。山本にしては珍しい反応である。ばらばらとナイフを幾本もシーツから落とすつ、腕が自身の顔あたりのシーツを握る。

「龍も倒れた今、この布も必要ないですね」

握るシーツに力を込めて、一気に振り払った。

ドゴオオオオン!!

いや、振り払う直前、死神の隣のビルの壁面が爆ぜた。もはや雷の炎で硬化されているとは思えないほどにたやすくコンクリートが爆発し、死神は瓦礫の山に埋め尽くされた。一瞬の間に起こったその光景に、山本は本当に珍しく啞然としていた。

「お、おい死神ー、無事かー」

しかし返事はない。ただの屍のようだ……………。

いや死んではないが。

再び、ビルが破裂する、それと同時に、夕焼けのような真紅の閃光が見えた。

「うおっと、危ねえー！」

とつさに飛びのいた地面に一文字の切り傷が走ったが、綺麗にコンクリートが両断されているのを見て少しぞつとした。それと同時に、コンクリートを突き破って巨大な木の根がうねうねと現れた。

後ろへと跳び、木の根から距離を取り刀を構える山本。眼前の少し離れた道路の中央からは、バキバキと地面を突き破り大樹が現れた。

「ふん、貴様も俺に再び出会うとは、運の無い奴だな」

低い言葉と共に、大樹の周りに立ち込める霧。サラサラと何かが溶け込むように、大樹の中から出てきた人物に、山本は驚愕に目を見開く。

「お前は、幻騎士！」

「九死に一生を得ておきながらこんなところで惚けているとはな。止めを刺してや—

—っ！」

コードサード、あかつきはつくう
「夜ノ型参、紅月抜空」

ズバアアアン!!

言葉を途中で止め、その場を飛びのくと、地面から生えた大樹は一瞬で真ん中から両断され、さらには真紅の炎によって燃やし尽くされた。

「あれは、嵐の炎!」

「誰かと思つたら、武やつほー。何してるの?」

驚く山本の上から聞こえる声。上空から壁を蹴りつつ降りてきたのはリル。

柔らかな黒髪を揺らしながら、ブーツに固定されたプレートアーマーをカシヤリと揺らし、軽やかに降り立つ。その右手に握る刀の刀身は異様なほどに紅く染まっていた。

（血……てわけじゃねえな。あの赤い刀。なんかやばそうだ）

流石山本、といつても山本でなくても、普通の刀でないのは見ただけでわかる。

それに、先ほどの幻騎士の幻覚であろう大樹を一刀両断して燃やし尽くした光景を見ただけに、敵じゃなくてよかったと内心ほっとしたのは内緒である。

「俺はさつきまで死神つてやつと戦つてただけど、つーかあいつ大丈夫か? 絶対今の爆発に巻き込まれたと思うけど」

山本の言葉にふむ、というふうにリルは空いた左手を顎に当てて辺りを見渡す。今見える敵は、目の前で幻覚と共にある幻騎士ただ一人。

つまり、

「ナイス武！一人撃破だね♪」

「え、ちよ、そんなんでいいのか!?ここやりーって喜ぶところか!」

「偶然でも倒せたんならラッキーじゃない?」

「あ、あくうん、まあそうかもしれないな」

割とあつさり納得する山本だった。

「納得しないでください!あと私はまだ生きてます!」

その言葉と共に、ビルとビルの間から姿を現したのは、黒いシーツを被った死神だった。

見たところ、といつてもシーツを被ってるので全体が見えるわけではないのだが、これと言って戦うに困るような負傷はしていない様子。不意打ちのごとき爆発を食らってしつかり無傷で逃げ延びるのは流石の一言だった。

「あ、確か死神。今見ても手抜き間半端ないよねあの格好」

ぐさりと突き刺さるような一言を会ってリルは思い切り出した。無論リルからしたら別に悪気があるわけではなく事実を言っただけなのだが、むしろそれがタチが悪い。心なしか死神が小刻みに震えているような気がした。若干お怒りなのかもしれない。

「今度こそ外しますよ?いいですね?今度は邪魔しないでくださいね?わかりましたか!」

「それじゃあ幻騎士、第二ラウンド始めようか」

チャキリ。

「ふん。山本武もろとも切り刻んでくれる」

「二人とも話を聞いてください！」

（あー、俺どうしたらいいかな……）

やはりめずらしく、若干外から山本は少し乾いた笑みを浮かべながら、静かに一人空を仰ぐのだった。

『爆弾を投下してきやがった』

一触即発の雰囲気にも包まれるビルとビルとの間の空間。

幻覚の中に立ちこちらをうかがう幻騎士。

天國刀を手に持ち正眼に構えるリル。

時雨金時を刀に変化させ構える山本。

三つ巴の対戦が、始まろうとしていた。

「……………なありル、何か忘れてるような、ていうか絶対わざと忘れてるよな!?!これツツ
コんだほうがいいのか!?!」

「これぞ必殺、ほっといたら作者が忘れていつの間にか敵が減ったの術!」

「必殺技でもなんでもねえ!ていうか今の発言危ないぞ!」

「貴様らいつまでふざけてるつもりだ」

冷静な発言の幻騎士の言葉に二人は言葉を止めて再び対峙する。

そして、先ほどの攻撃と崩壊によって土ぼこりが晴れた先で、シーツを被った人物がこちらを見ていた。おもむろに、シーツに手を伸ばして取り払う。

バサリ。

ひよろりとした印象を与える細身の男。

丸い眼鏡の奥の瞳は細く、一見したら気の弱そうな印象を与える。茶色いハンチング帽の下のアッシュグレイの髪を揺らし、どこかで見たような身なりの良さそうな服装をした死神は、皮の手袋に包まれた手には、雲の炎が纏われたナイフが握られていた。

「もつと顔がシャレコウベとか黒いローブとか大鎌とか想像してたけど思ったより普通だね」

「ちよ、リル。せつかく話をまたいで姿見せたのにそれはなくね!」

「いいですよ、山本武」

「え、死神? いいのか?」

「あなたより先にそちらの剣士を消すことにしますから」

「やっぱ怒ってたあ!!」

目が細いから一見したら笑っているように見えるが、全身から噴き出すオーラには怒りの色が染まっている。どこからともなく大量のナイフを指の間に挟んで取り出し、リ

ングの炎を伝導させて刃に雲の炎を纏った。

ヴァリアアのベルも同じような武器だが、こちらのナイフはベルのナイフ程小さいわけではなく、どちらかといえばサブバルナイフに近い形状。一体その服装のどこに隠していたのかと知りたくなるような量を取り出し、両手で持って刃を向ける。

「改めて、私の名前はアラン・バロー。以後お見知りおきを」

死神、アランと名乗った男は、人の好きそうな笑みを浮かべて丁寧に自己紹介をする。その名前に聞き覚えがあったのは、やはり観戦室にいたメンバー。

「あいつ、アランだったのか」

「デイーノ殿のお知り合いで？」

「あいつはフランスのジュールファミリー所属のアラン・バロー。『死神アラン』と呼ばれる暗殺者だが、基本的に穏やかな性格だ」

「しかし死神の正体が死神とは、白蘭もひねりがないな」

「灯夜、それを言ったらかわいそうだよ。事実だけど」

顔がわかれば簡単にわかる敵の正体。しかしそれはそれだけ、敵の正体がデイーノ達でも知っているほどに有名な実力者ということ。どうも先ほどのやり取りでそんな感じが見えないのが残念だが。

そしてデイーノ達を知っているということは、無論、入江正一も知っていた。

『山本君。その人は元ジュールファミリーの『死神』と呼ばれる殺し屋だ。確か主に暗器を使用するらしいから気を付けて』

「お、入江か。ああ、確かに今どこにそんなにあるんだよって感じでナイフ出してるから少し驚いたところだぜ」

「匣兵器じゃなくて普通に（？）取り出したからもはや手品だね」

「ところでリルさあ、ちつと相談あるんだけどさ」

唐突に山本が、隣のリルに笑いながら話しかける。その表情は楽しそうに、なんだかわくわくする少年のよう、いや少年なのだが。時雨金時を握る手が少し強くなっている。まるで、戦いたくてしょうがないかのように。

「まあ気持ちわかるけどね。いいよ、死神は私が相手しとくよ。でも大丈夫？」

眼前の幻騎士。

鎧と大剣を携えて、メローネ基地で山本と戦った時よりはるかにパワーアップした状態。が、それは何も幻騎士だけではない。このチョイスの為に、皆修行を施した。

この時代の剣帝と謳われた、スクアードと共に、剣を手にとり修行をした。

「ああ、大丈夫だ」

手にもった時雨金時が、山本の一振りですり抜けた竹刀状態から銀色の刀身へと変貌させる。

そのまま幻騎士の方へと視線を向けた。

「お前が来るのか、山本武。だが、目の前にいる獲物を2匹逃すほど俺は甘くない。貴様らはここで終わりだ！」

最初の一手は幻騎士の剣だった。

幻騎士の持つ幻^{スベットロースバダ}剣は、斬撃を分散させる力を持つ霧属性の匣兵器。

数度にわかれる炎を纏う藍色の斬撃。上空からのその斬撃は、その場にいる者達全員へと降りかかった。

ドゴオオ!!

地面のコンクリートを容赦なく粉碎し、あたりに爆発音と煙が充満する。

「やれやれ、幻騎士は加減しないので困りますね。私まで巻き添え食らうところでしたよ」

上空から破壊痕を眺める死神、いやアラン。

肩をすくめながら、ミルフィオーレの例にもれず、足元から死ぬ気の炎を噴射するFシューズによって空中を移動する。ひとまず巻き込まれないようにというのと、敵と味方の、幻騎士は自分を味方と認識しているかは不明だが、とりあえず位置の確認に辺りを探る。

基本暗殺を専門とする殺し屋のアランは、気配を断つという技術が優れている。

それも、同業者の中でもトップクラスに周りと溶け込むようなその技術力は、山本や

幻騎士にも気づかれない自信がある。事実、最初の山本との邂逅では、彼に近くにいることを悟られずに奇襲に成功していた。

だが炎を移動手段に用いて戦闘を行う今回のような大規模な戦いには少し不便。炎を感知するレーダーさえあれば、居場所が分かってしまう。そのため、アランは通常なら油断なく構えるところだが、そこまで臨戦態勢に入らない。

根拠は、自分が今いる場所。つまり上空。

爆発した際の煙を見下ろせる高度にいるアランのところに行こうと思えば、空を飛ばなくてはいらない。そして敵の情報の中で、空中移動を可能にしている人物は、ボンゴレ10代目のツナのみ。

他の者達は、今回のチョイスで使用したバイクがあるが、あれでは空は飛べない。イリス側もどちらも陸路を移動し、リルの持つ自立飛行剣の匣兵器も幻騎士によって壊された。

つまり、今この瞬間だけはアランはあまりしない油断を軽くしていた。

そして、その油断に隙ありとばかり、背後のリルが剣を振るった。

「!？」

シャツ！

とつさに屈み刀を避けた、しかし不可解なのは音。あまりにも静かな刀を振る音。

アランは避けると同時に、何本かナイフを投げた。不意の攻撃にこの反応は流石と叫ぶところ。無論、相手の刀の軌道上に投げたので、そのままぶつかるかと思つたが、聞こえた音はぶつかるような金属音が響かなかつた。

距離を離れてみると、自身の投げたナイフが炎事、綺麗に中ほどから切り裂かれている。驚くべきは、リルの赤い刀身の天國刀の切れ味は、限りなく異常なほどに高まつていた。嵐の炎を渾身まで凝縮させたリルの『彩式』。

うかつに近づけば防御もままならない。

「やれやれ、厄介な相手ですねえ。それに、面白いものを持っていますね。その靴、どういう仕組みですか？」

アランの視線の先にいるのはリル。自分と同様、ビルとビルの間の高所にいる、つまり滞空手段を持ち得ている。その場に立つリルの足元には、六角形の赤いプレートのような物が宙に固定され、その上に立っていた。

「ルイが作ったイリス兵器。名前はFシューズに習って、^{タレット}Tシューズつてところかな」
足のつま先でコツコツとたたく。そこそこの強度がありそうなプレート。

(なるほど、おそらくは死ぬ気の炎を燃料に靴から滞空機能のプレートを出す装置、つて

ところでしようか。そのまま滞空させ、足場にして空中移動を可能にする)

アランの推論はほぼ正解していた。

ルイの作り出した滞空移動手段であるTシューズ。

今回のチョイスにおいて、リルと光努は同じ装備を二つ装着している。

その一つはこのシューズ。

使用者の死ぬ気の炎を使い、足場を出現させる靴であり、なかなかどうして便利な代物。近接戦闘する物が地上で戦うなら、こちらのほうが役立つ。

光努も同じ靴を装着していた。捧日の虚を突く空中移動を可能にしたのは、このシューズの力。足元にプレートを作り出し、そこを足場にしてその場からさらに加速する。知らぬものであるなら、予測していない攻撃の軌道になすすべなくやられるだろう。どちらかといえば近接戦闘の方が使いやすいかもしれない。

ではFシューズと比べたらどちらがいいか？

実を言えば、Fシューズのほうが使いやすい。出力調整だけでスピードを出し、Tシューズと比べれば炎を噴出したりする間があるため、細かい小回りはTシューズの方がきくのだが、使いやすさならこちらが使いやすいと、使用者の実力にもよるがツナのグローブ並みの機動力を発揮する。

現に、この広大なチョイスフィールドを、ミルフィオーレの兵隊ユニット達はこの靴

一つで縦横無尽に動き回っていた。これに対抗していたのはボンゴレ側のバイクとツナのグローブ、それに例外としてイリスの車くらいである。

ならTシューズは弱いかと言われたら、そうでもない。それはあくまで使い手次第。そして足場を作るタイプにしたのは、その必要があったから。

古来より中国拳法その他武術には、大地の力を練りこむ方法が存在する。足を踏みしめ、その気を体を通して拳に送り込む。踏み出しが大事と言うのは様々なことに共有する。

そして、光努とリルには空中を無尽にかけるFシューズやグローブよりも、自分の足の力をダイレクトに伝えて動くこちらの方があっていた。

「やれやれ。面倒なことに、なりましたね」

ボウ！

そういうと、アランは自身の手に嵌められたAランク相当の雲のリングから、紫色の炎を灯す。そして取り出す匣に、躊躇なく炎を注入し、リルへと向けた。

「こういう時は、物量ですかね」

その瞬間、アランの手の中の匣から、まるで大量の水を吐き出すかのように、刃といふ刃、暗器の数々がいきなり飛び出した。

「うおっ」と

ガガガガガガガガ!

一つ一つが雲の炎を纏い、瞬間増殖を繰り返す暗器の匣は、瞬く間にビルの壁面に銀色の刃の壁を構築した。しかも突き刺さったそばから刃が炎と共に匣の中へと戻り、また吐き出すを繰り返す。

中身は普通のナイフやら手裏剣やら鋌やら普通に暗器らしいが、繰り返し続ける匣兵器というのは珍しいタイプ。絶え間なく飛ばされてくる暗器を避け続けるリルは、アランと下の戦況を見つつ思考していた。

(この匣兵器、どこかで見たことあるような、それとも聞いただけのような。どこだったかな?)

と思っただけ微妙にずれたことを思考をしていた。

観戦室にて、ルイは少々面倒そうな瞳で戦闘する人物たちを見ていた。

(あのアランの匣兵器、そういえば昔俺が作ったやつだな。久しぶりに見た)

やはり面倒くさそうな瞳をするルイ。

デイルロット・スバツダ
『円環暗器』と命名する、昔ルイが作り出した雲属性の匣兵器。

その力は、雲属性の増殖を生かしつつ、それを利用したサイクル兵器。

一度に炎を纏い飛ばした刃を、炎を用いて再び回収し、また飛び出させる。固定砲台にしては一つ一つの火力が低い、それを物量で補い波で押し寄せるようにして刃を生み出す匣兵器。

既存の法則的な匣と違い一風変わった、特異な匣兵器を作ることを得意、というより好んだルイの匣兵器は、その性能も他の匣兵器とは違い妙な物が多かった。他の匣と比べて違うのは、複雑な構造をしているという点。

大空の匣兵器はコピー不可と言われる程の複雑な構造をした匣兵器だが、こちらとは色が違う複雑さ。構造的にはシンプルだが、その機能が妙な特異性を用いて所有者に絡みつく。

つまり普通の使い手には使いづらい匣ということ。

普通なら使おうと思わず、シンプルな量産型の匣など使えば簡単に戦力を作れる為、好き好んで難しい匣兵器を使う物などいない。戦力に使えるかも曖昧な匣兵器。そもそもルイが作った匣は、周りに流通しない。

ミルフィオーレと違ってイリスファミリーの権威はこの時代においては限りなく低

い。なので匣を作っている技術者がいると分かれば、どこぞのファミリーに連れていかれるのは必須であるのだから。

(そういうえば、昔自分に合いそうなのないかと言われて作った記憶があるな)

実を言うと、イリスファミリーとジュールファミリーはそこそこの友好がある。そしてルイはアラン本人とも友好があつた。ほかのイリスメンバーも、アランに限らずほかのファミリーの名の知れた人物も個人的な友人がいるものは少なくない。

(実はあいつ知り合いであの匣俺が作ったんだよねー、とか言ったらボンゴレ側にいろいろ言われそうだな。面倒だし黙つとこう)

面倒そうな瞳を伏せて、再びソファにごろりと寝転がる。

灯夜の特訓で多少の体力がついたとはいえ、研究実験などならともかく、ただ見ているだけというのはどうにも退屈というのが本音。世界の命運がかかっているというのにはわかるが、戦いの場にはいない者達は祈るしかない、信じるしかない、見守るしかない。「そういうえば、アランの持つてるあの匣ってルイが作ったんじゃないやなかつたか?」

そう思つてたら灯夜が爆弾を投下してきやがった。

灯夜の言葉に突き刺すような鋭い視線が寝転がるルイに向かって突き刺さる。

普段からごろりとしているルイだが、こうもあからさまにほかのファミリーの人間から見られと流石に居心地悪い。中には一般人の少女も交じっているというのだからな

おの事。

「確かに作ったが、あの匣はそんなに強い物じゃないぞ?」

「そうなのか?」

「ああ。匣の中に納まった100の暗器が絶え間なく射出され、ぶつかつたら匣に戻つて再び射出するだけの匣だからな。そんなに複雑な物じゃない」

「ルイ、聞いた限りでも結構厄介な気がするんだが……」

デイーノの言葉に隣のバジルもうなずく。絶え間なく行われる怒涛の攻め。

ボンゴレ風の守護者を体現したかのような匣だが、これは雲の増殖があつて初めて成功する試作品のような物。

そしてそのため、中にはいくらかの欠点が存在する。

「まず第一に、武器の強度はそこまで強いわけじゃない。あそこのビルに突き立つけどそれだけ、普通の刃物よりちよつと強いくらいだ。間違つてもリルの刀に傷はつけられない。まあ人には危ないが」

「だがそれを補つて物量で攻められるだろ?あれだけの量ならそれなりに脅威だぞ」

デイーノの肩に乗るリボーンの言葉に再度確認する。

死ぬ気の炎を纏う武器を持つものならば、普通の武器は然程驚異的ではない。炎単体の熱量もさることながら、特性を活かせば武器の単体だけなら威力を何倍にも引き上げ

ることができる。現に、武器がなくともその熱量だけで、ボンゴレ10代目候補沢田綱吉は、六道骸の持つ槍を捻じ曲げた。

対抗するには、同じく死ぬ気の炎を纏うか特殊な武具を使用するしかない。対抗する両者の持つ獲物にもよるが。いくらなんでも、サバイバルナイフでチェーンソーを受け止めろと言われたら無茶というしかない。

しかし相手がチェーンソーを持つと、遠距離から大量のナイフを投げつければ効果も期待できる。

「が、そこであの匣の欠点その2だが」

「欠点その2?」

「ああ、実は……お、武と幻騎士が交戦中だ。それにしても武の匣、面白いな」

少し視線を細めてディスプレイを見るルイ。面倒そうな表情だったのだが、なんだかおもしろいものを見つけた子供のような顔をしている気がする。と言っても、普段から無表情のルイなので、付き合いの長い者でないとそこまで微妙な変化はわかりにくい。

急遽話が転換され、一度は画面に視線を集めた。

幻騎士は戦慄していた。

一度自分が圧倒し、下した対戦相手。二度目となる此度の戦いに慢心が無かったといえ、嘘になる。最終的に罠のようにひっかけた幻覚に貶めた幻騎士により、山本武は敗北した。そこに至る過程の剣技には、確かに中学生とは思えない錬度と気迫が籠っていたことに少々驚いたが、あくまで中学生にしては、と斬り捨てた。

まだまだ匣兵器もうまく使えず、

スベットロ・ヌディブランキ
幻海

牛を使わずとも山本と幻騎士の間にはまだまだ実力差が生じていた。そこからたった10日足らずという短い期間。

然程大きな成長は臨めないだろうと高を括っていただけに、今の幻騎士の心境は耐え難い物が渦巻いていた。

「へへ、待ってたぜ！」

自身の眼前に立つ男の姿を。

大胆不敵に笑い、勇敢に足を踏み出し刀を振るう。

最初の一撃だけでは倒せないと踏んでいたが、まさかこうも無傷で剣撃を防がれると思わなかった。

幻覚の中心にいて山本より高い位置にいる幻騎士を見上げるようにして立ち、笑みを浮かべている。その手に持つは、時雨蒼燕流継承者に与えられる刀、時雨金時。そして反対の手に持つは、異様な刀。

異様という程異様な形というわけではない。鐔と柄のみの、刀身の無い刀。

指の間に挟むようにして二つ持つ。そして異様な部分は、空虚な刀身の代わりに、澄んだような雨の蒼炎でもって作られた刀身。

異様というよりは、どこか神々しい印象を与える。

そしてその山本の傍らに立つのは、一匹の犬。

口元に啞えた山本の持つている同じ刀身の無い刀から雨の刃を作り出し、その背には刀を納める為に用意された空白の三本の鞘。おそらくその鞘の中身は、啞えられた刀と山本の持つ二本の刀。そしてその額には、弾丸を模したボンゴレの紋章が刻まれている。

あきらかに、自分が戦った時と違う。

何がこの男を変えたのか。たった10日という期間に、何が起こったのか。

尋常ではない剣士としての気迫が、相対するだけで突き刺さる。

幻騎士の頬を、わずかに冷や汗が流れた。

「リベンジできる、こん時を!!待ってたぜ!!」

澄んだ瞳で己の敵を見る。

ボンゴレ10代目雨の守護者、山本武。

最強無敵完全無欠の流派をその身に背負い、愛刀握り炎を纏う。

一度受けた敗北の、剣士の雪辱果たす時!

『蒼い燕と紅い桜』

丑三つ時、という程の深夜ではないが、狼が遠吠えしそうな満月が輝く夜。

暗い帳が下ろされた山の中に、一筋引き寄せられるような赤い光。

パチパチと弾けるような火の粉が飛ぶ、焚火の灯り。

そして焚火を囲う二人の剣士。

ボンゴレの二大剣豪、山本武と、

スベルビ

S・スクアアロの二人だった。

時は遡るチョイスが開始されるまでの期間中。

スクアアロに拉致された山本は、山の中で剣の修行に励んでいた。しかし、修行をずるにあたり、スクアアロは山本に二択を迫った。

剣を選ぶか、野球を選ぶか。

中学生の山本にとって、野球は真剣に打ち込める一つの物。

己の全力を振り出し、汗を流せる競技。それだけの才能と努力を、山本は熟した。

なら剣はどうだろうか。

ヴァリアーと戦うことになり、必要に迫られ父に教えを乞うた時雨蒼燕流。

本来なら平和に生きる山本には必要のない剣だったかもしれないが、真剣な刃を握りしめ、山本は一角の劍客として立ち上がった。

野球も剣も、今の山本にはなくてはならない物だった。

だが、それが山本の剣を鈍らせる原因にもなっている。

スクアーロはそれがわかっていたからこそ、迫った。

剣士になり切れない甘さを抱える山本を、本物の剣士にするために。

「てめーには両方を同時にこなす才能がある!!だが剣はこなすもんじゃねえ、懸けるもんだあ!!」

スクアーロは幼少より、剣の道を突き進んだ。決して脇に反れず、目の前に現れる強敵を斬り倒し、己の剣を完成させた。そのスクアーロから見たら、野球と両立しようとする山本は甘すぎて、苛立たしいのだろう。自身を倒し、この時代でも剣豪と謳われるからこそ。

今の時代の山本の甘さは、それも本人の一部と思い黙認した。

しかし中学生である山本には、覚悟を決めさせる必要がある。

だからこそその問答だったが、山本からの答えはすぐに帰ってきた。

「それならもう決まってる、剣一本で行く」

自身の持つ劍、時雨金時を握りしめ、力強く宣言した。

山本は、メローネ基地の戦いにおいて、幻騎士を倒す自身はあった。決して驕りでも慢心でもなんでもなく、それだけの修行もこなしたと自負していたから。そしてみんなで過去へと帰るつもりだったが、結果は惨敗。最終的には無事だったものの、過去へと帰ることができなかつたし、自分は人質になつてしまつた。

幻騎士に負けた時、暗く沈む意識の中で、山本は後悔した。

父の時雨蒼燕流の名を汚してしまつた。

仲間の為、全力を出せていなかつたんじゃないか、と。

「でも不思議なものでさ、劍だけで行かつて決めたら気がスツて楽になつてさ」

そう言つてごろりと寝転がり笑う山本の言葉は、胸の痞えが取れたかのような晴れ晴れとした表情だつた。

その後、あくまで劍のみでやるのは過去に帰るまでという期間を決める山本に、スクアールは再度苛立たし気に怒鳴りつけるのだった。

ガキイイ!!

「!!ぐうっ!」

山本の振るう時雨金時が、幻覚の中を移動する幻騎士を捉え、幻覚の外へと引きずり出した。

完璧に自身の匣である幻スベットロ・ステイブランキ海 牛と同調した幻騎士だったが、一撃二撃三撃と、立て

続けに剣撃をあてに来る山本に、流石に偶然と片付けるには出来すぎていた。確実に、この男は自分の居場所を察知していると。

山本の持つ雨のボンゴレ匣の中身は、大きく3つに分かれて入る。

収納されているのは、カーネ・デイ・ピオツジャバージョンボンゴレ雨
ロンディネ・デイ・ピオツジャバージョンボンゴレ雨
燕 Ver. V.
犬 Ver. V.

そして三本の刀身の無い雨の刀。

技術的な面で言えば、今回の戦いのためにスクアーロとの特訓の為に山本は驚異的な

成長力を見せつけた。

10年後の雲雀恭弥は幻騎士との戦いにおいて、己のリングの炎を用いた戦術で幻覚を破った。リングに灯された炎を薄く、自身を覆う程に広範囲に放射することで、幻覚の中の紛れ込ませた目に見えない幻^{スベットロ・ステイブレンキ}海牛が炎に触れた瞬間、炎の揺らぎによって、その存在を察知した。

無論、炎を薄く放射する技術と、炎の揺らぎを察知して対処できるだけの反射神経があつて初めてできることだが、その点でいえば山本は問題が全くない。

もう一つ、幻覚が驚異的に思ったのは、ボンゴレ匣の刀身の無い刀。

当初は幻騎士に雨の炎で作りに出した刃を見せていたが、その真価は持ち主の死ぬ気の炎を放出できるという点。刀の形を作り出すだけでなく、炎を放出できるその推進力は、ツナのXグロープに引けを取らず、片手に時雨金時を、片手で炎を放出し、器用にも幻騎士の幻覚を縫うように飛び回り、剣を浴びせた。

幻覚の中に溶け込む幻騎士を見つけたのは、雨燕の炎を空中から散布し、幻海牛を雨属性の沈静によって幻海牛の行動を鈍らせた。幻海牛は鈍るが、幻騎士は変わらず同じ速度。あつてると本人は思うが、同調していかないわずかなずれ。そこが幻騎士の居場所。

この修行で山本が手に入れたのは、幻覚を見破る術、ボンゴレ匣による新たな戦術。

そして剣一つでいくと決めた、剣士としての覚悟だった。

(どうなってる、この男……以前の山本武ではない!!)

焦燥を表に出さないが、幻騎士は斬りつけられた箇所を抑えて愕然とした。

遙か各上との戦いを乗り越えた山本は、その力を伸ばした。自身の流派を、剣士としての技術を。その威風堂々たる姿は、まさにボンゴレの剣豪と呼ぶにふさわしかった。

「二択を迫られ剣を選ぶってのは、初代雨の守護者そのものだな」

「初代ボンゴレファミリーの雨の守護者。確か超一流の剣士と聞いたことがあるな」

「ディーノの肩の上から呟くように紡がれたりボーンという言葉に、隣の灯夜が同意を示した。」

「ああ。奴の剣は世紀無双と言われ、その才能は誰もが認めるところだったが、本人は、何より音楽を愛し自分の剣を一本も持たなかったという」

だがある時、異国の友であるボンゴレ^{フリーモ}I世のピンチを聞きつけた初代雨の守護者は、

なんの躊躇もなく、己の命より大事な楽器を売り払い、武器と旅費に変えて助けに向かったという。

友の為に、全てを捨てることを躊躇わなかった。

楽器と引き換えに奴が作った武器は、三本の小刀と一本の長刀だったという。

「小次郎、カシオ・フォルマ形態変化！」

山本の言葉と共に雨燕、小次郎はくると飛び回り、その身を蒼い炎に包み、さながら流星のごとく急降下をして、山本の時雨金時とぶつかった。澄み渡る蒼い光が辺りに広がると同時に雨燕の形状が時雨金時と同化し、その姿を変貌させた。

長く天を突きさすように伸びた刀身。

鏢の部分にはボンゴレイ世の紋章を、左右に広がるように燕の羽をあしらった意匠の施された、一本の長刀。全身にいきわたるようにして纏われた雨の炎は、高い純度を誇る澄み切った蒼炎だった。そして左手には、雨の炎の刀身を出現させた三本の小刀。

これが、山本武のボンゴレ匣。

全てを洗い流す恵みの村雨と謳われた、朝利雨月の変則四刀!!

「おや、向こうの戦いも佳境ですね。では、こちらはどうしましょうか？」

穏やかな笑みを浮かべる死神、アラン・バローは、手元の匣を指でいじりながら、ピルの屋上で静かに立っていた。場所は山本と幻騎士が戦っている場所のすぐ隣のビル。
そ

して眼前には、真紅の刀を持つイリスの剣士、リルが相対していた。

「そうだね。せっかくだし下の戦いでも見てみる？それとも兵士ユニット減らしたいから気絶してくれる？もしくは見逃してくれる？」

世間話でもするようなりルの言葉に、相変わらず笑うアラン。

実を言うと、リルとアランは顔見知りである。白蘭率いるミルフィオーレにジュールファミリーが吸収され、さらにはミルフィオーレによってイリスが半壊状態に追い込まれる数年前まで、普通に知り合いであったので、さてどうしようかと考える。

普通に戦いの舞台なので戦うことには特に二人とも躊躇いというのは存在しないのだが、下の戦いも面白くなってきたのでちよつと見ていたいというのも本音。リルとしてはほつといて敵の大将を取りたいというのもあったが、流石にミルフィオーレに属す

ことになったアランは、そうそうやすやすと通してやる義理はないと匣とナイフで威嚇をする。

(さて、このまま立ち止まってくればいいのですが)

アランとしても、リルがこの程度の威嚇で立ち止まるような性格でも、実力でもないということはよく知っている。だからこそ、対応を間違えないようにせねばと考えている。そうでないと、自分はおそらくこの少女に太刀打ちできないであろうから。

(やれやれ、もし昔ルイに聞いたあの話が事実だとすれば、白神光努よりも厄介かもしれないですね)

表情には出さないが、内心少し冷や汗。しかしだからといって、絶対に負けるというてやるつもりもない。あくまで可能性の中の話。そうでないのなら、自分にも十分に勝機は見える。

「それよりアランさあ、その匣使わないの?」

「さて、どうしましょうかねえ」

ぼんぼんとアランは手で匣をもてあそぶ。

デュロット・スバダ

円環暗器を使ったのは、最初の一回のみ。その後屋上まで誘導させそのあと閉じてからは、まだ使用していなかった。お互いに数メートルの距離を開けてにらみ合っているから、という理由もあるといえはあがあるが、それ以外にも理由はある。

(この匣、驚くほど燃費悪いですからねえ……………)

そう、ルイの言っていたもう一つの欠点とは、燃費の悪さ。同一均等に死ぬ気の炎を匣内の暗器に分配され、それを燃料に飛び出させるこの匣だが、その後回収するときにも炎を使用する。そして、飛び出す力に使う炎よりも、匣に戻す力に使う炎の方が強くなるのは必然。そして匣を開いている間は滝のように暗器が飛び出す、それと同時に自身の炎も匣に直接吸われるという特異な匣である。

だが、それに対応する案も、当時のルイは考案した。

「開匣」

アランの言葉と共に別の匣に炎を灯して現れた雲の炎は、ぐるぐると渦巻きながらアランの左腕に巻き付いた。炎が晴れた個所に現れたのは、黒々とした指抜きグローブに、厚めの手甲のようなものが備わった形状。ひじ程まである手甲グローブだが、見ただけで変わっているとわかる形状は、手の甲に一か所、そして腕部分に二か所、半円状の窪みがあるという点だった。

ただの意匠ではなく、まるで何かをはめ込むかのように誂えたような窪み。

「それは……………手甲？にしては妙な形だね。その窪み、何を入れるの？」

(やれやれ、もしかしたらルイから聞いていたのでしょうか。しかし、だからといって対処できるものでもないですけどね)

相対するリルに対して、口元に笑みを浮かべる、アランだった。

「おっと、ちよつとまずいかもしれないな」

やれやれという風にソファから起き上がるルイは、画面を見て少し目を細める。おどけた口調とは反対に、先ほどの面倒そうな瞳から一転して、少し真面目な雰囲気を漂わせたことに、ボンゴレ側も驚いた。

「どういうことだ、ルイ?」

リボンが尋ねると、ルイは上着のポケットをこそりとあさり、指で弾くようにして小さな物体をリボンに放り投げた。部屋に備えの照明の光にかすかに反射した物体をリボンはうまく手に取り、見てみる。

小さなビー玉のような、透き通るようなガラス玉のような “何か” だった。

「こいつは……死ぬ気の炎か?」

「!?死ぬ気の炎だ?!」

リボーンの呟いた言葉に、ディーノは驚愕の声を上げる。少なからず、他の者達も同様に驚いたように表情を変える。

「まあ死ぬ気の炎と言っても、入っているだけでその玉の素材はボンゴレの死ぬ気弾のような物。ほかに近い物でいえば、綱吉のグローブの甲にあるクリスタルを参考にしたな」

つまり、端的に言えば死ぬ気の炎をチャージしておける玉、といったもの。

ツナを持つグローブは甲のクリスタル内に炎を溜め、強力な炎を一気に放出することができ、それがイクスバーナーと言われる技になる。そしてそのクリスタルを参考に作られた、ルイは灯玉とうぎょくと呼ぶ石。死ぬ気の炎を蓄積する機能を持つ、死ぬ気の炎バーションの充電池といったところだろうか。

「まさかルイ、あれもお前が作ったやつなのか?」

「お、ディーノするどいな。まあ正解だけど。あのグローブには付属品がついてるはずだ」

「付属品」

「その灯玉と同じものが、あと三つある。それも、それよりサイズがでかい奴がな」

「何?」

「あのアランの持つてる円環暗器デユロツト、スバダは、単体じゃ燃費が悪いから一回か二回使えば上々

といったところだ。だけど、灯玉とグローブを使えば、その欠点を多少軽減できる」

ミルフィオーレの元6弔花、電光のγは、自身のアニマル匣用^{バツテリ}に使う蓄炎匣^{バツテリ}を持つていたが、アランの使用するのはいわば、人用の蓄炎匣^{バツテリ}。

「しかし大丈夫だろうか」

「確かに。リル殿は刀一本。あの物力は厄介です…」

ルイの言葉に同意するように、バジルもうなづく。

もしも聞いた通りなら、アランは灯玉によって炎を増強してくる。そしてそうしてしまえば、燃費の悪い物量任せの匣兵器の欠点が補われる。休みなく発射される大量の暗器類は、近接戦闘者にとっては脅威かもしれない。

心配そうにするバジルの顔を横目に、ルイはかすかに口角を上げて笑みを浮かべた。
(ま、心配なのはアランの方だけだな)

カチリ。

アランが取り出したのは、不思議な光を話す紫色の宝玉。ルイに灯玉と呼ばれる、透き通る水晶のような、炎を蓄積できるクリスタル。この色は、紫色の雲の炎が蓄積されているからこそその色。無論、やろうと思えば別の種類の炎も蓄積することは可能である。しかし、複数の色を詰めることはあまり薦めない。中で化学反応（科学？）を起こすかもしれないから。

ルイが持っていたビー玉サイズよりも大きい。ゴルフボール大の大きさの灯玉を取り出し、手の甲にはめ込んだ。さらには、二個目の灯玉を取り出した、腕の窪みの一つにはめ込んだ。

キーン！

その瞬間、灯玉から紫色の雲の光が溢れ出した。

「なるほど、つまり炎のブースト装置ってわけだから、その匣を最大限使え」と

「ええ、あなたには悪いですけど、私も仕事なもので。しばらく眠ってもらいますよ」

さらにグローブのつけた右手に嵌められた雲のリングから、あふれるような炎が噴き出し、匣へと注入した。

「開匣、デュロットスバダ円環暗器、オーバーブースト！削れ、穿て、突き刺せ。立ち

はだかる障害に、刃を突き立てろ！」

匣の輝きに呼応するように、灯玉の光が匣へと注ぎ込まれている。

自身の持つ炎を補うために作られた灯玉。

開く匣の中から、瞬間増殖を繰り返す幾千もの刃が飛び出した。

「これは、ちよつと……」

屋上の地面をけり上げて、刃を躲すリルだが、暗器の物量ははるかに凌駕する。

避けた先を回り込むようにして、刃を打ち込む。リルは手に持った天國刀を静かに握り、一気に振りぬく。

ガギイイーン!!

目にもとまらぬ斬撃。飛び出された暗器は一瞬のうち、リルに触れる間もなく一瞬で破壊される。リルの刀にとつて、多少つよいだけの刃物の暗器群は恐れることもないが、それはあくまでそれが単体である場合。破壊も想定されて押し寄せる、圧倒的な刃の本流。破壊したそばから、大量の刃が飛びかかってきた。

(入る！)

そうアランが思った瞬間、バチリと弾け飛ぶ閃光。

一瞬の光と共に、持続的に現れた翡翠のような緑色の閃光は、まぎれもない高純度の雷の炎。

リルの左手にはまる雷のDリングから放たれる雷の炎が、飛んでくる刃を受け止めた。

高純度の雷の炎は、それ単体で下手な盾よりもはるかに強い。雷に酷似した死ぬ気の炎は、純度が高まるごとにその硬度と鋭さが増す。

(やはり防ぎますか。ですが、あまり得策には思えないですね)

すでにリルの右手には、圧縮された嵐の炎を刃先に伝わらせる『彩式』が使用され、さらには左手から高純度の雷の炎の盾。どちらも炎圧を高めなければ使用することもできず、緩めればその瞬間に刀は戻り、盾は突き破られる。人は最高速度を長時間維持できないように、炎圧を、それも複数も保ち続けるのは至難の業ではない。

「じゃあ、こっちやめよ」

だが、リルは一瞬で盾を消す選択肢を即答した。何の迷いもなく、左手の炎を消し、その場を蹴って回避行動に再び出た。走りながら天國刀を振りぬきアランの刃を弾き飛ばしつつ、縦横無尽に駆け回る。

(驚異的な判断の速さ。躊躇いなくその選択を即答できる胆力は驚嘆に値しますが、その選択は正しいですか?)

眼鏡の奥の瞳をわずかに開き、アランは視線を鋭くする。だがリルは、口元に笑みを浮かべながら、高く跳躍した。何を?とアランは思ったが、リルは足元に瞬間的にプレートを出現させて宙を蹴り上げる。刃を避けつつ空中を移動したリルは、道路を挟んだ反対側のビルへと降り立った。

その光景に、アランは円環暗器デロット・スパダの匣を閉じて、思案氣に顎に手を当てる。

（あの距離、届かないことはないですが、その分威力が削がれそうですね。リルなら防げるくらいには。灯玉の炎も減ってますし……やりませうか）

コオオオオ!!

三つ目の灯玉を手甲にはめ込み、アランの腕が光輝いた。灯玉からあふれるような紫色の炎。天へと突きさすような光の本流に、思わずリルは手で顔を覆うが、同時に楽しそうに笑った。まるで今この場にはいない、自分のファミリーのボスである少年のように、楽し気に笑った。

道路を挟んで距離が開いているにも関わらず、屋上から灯玉が3つはめ込まれた手甲の手でもって匣を開き、流星群の如き紫色の刃が広がった。

「死神ラモール・デ・ラムの刃!!」

速度、威力、どれをとっても、先ほどの比ではない。

何度もサイクルルをかけて使う匣兵器を、一点に炎を集中させての砲撃。おそらく今の刃には、リルの炎の盾を突き破る威力をも出すだろう。道路を挟んでのビルとビルの間は距離があるが、それをものともせず炎を注ぎ込んだ刃は狂氣の刃。死神の刃は、アランの前方に位置する少女の喉元に迫った。

「死神の刃は標的に悟られずに相手を刈り取る。けど、立ちはだかるのが神であろうと、

私の道は防がせない。あなたを倒して、前へ進む！」

淀みない流水のような動作。片足を半歩ずらし、腰を少し落とす。

刀を振ると同時に炎を解除したと思つたら、円を描くようにして左手の鞘へと納められた。右手は柄に、左手は鞘に。

まるで体が一本の刀になったかのように錯覚させるほどに、清廉された動き。この動きを、何度となく行つたのだろう。無駄を極限までそぎ落とし、その先を追及した技。深く吸い込んだ空気を短く吐き、右手の嵐のDリングを光らせる。

神速の斬撃を放つ、抜刀術の構え。眼前に迫る脅威、死神の刃。正面でもってリルは、己の刀を握りしめた。

その凶刃が迫る瞬間、リルの口元から小さく言葉が紡がれた。

「夜ノ壺・紅桜」
コードワン ベにぎくべら

壺の型は奥義の型。

唄うように紡がれた言葉は空気に溶け込み、迫る刃を視界に納める。

振るう太刀筋は円を描き、一瞬の間も無く刀を抜き放つ。

死神の視界は、紅い閃光に包まれた。

『剣士と神と悪魔と』

初代雨の守護者、朝利雨月と同じ、一本の長刀と三本の小刀。

にじみ出る気迫は先ほどの比ではない。ボンゴレ匣の性能を限界まで引き出した山本は、幻騎士を前に威風堂々たるその姿を見せていた。だからこそ、幻騎士も己の全力をぶつけるに値すると判断した。

「よかろう、貴様を全力で葬るに値する剣士と認めてやる……だが後悔するなよ。これで俺に、情けはなくなる!!」

瞬間、幻騎士に嵌められた骨オツサ・インプレッション。残像のヘルリングから、禍々しくも強大な霧の炎が噴き出した。幻騎士に纏わりつくような霧の炎は次第に幻騎士を包み込み、一瞬の間と同時にほじけて中身を浮き出しにした。

幻騎士の姿は、まさに髑髏の騎士と呼ぶにふさわしい姿。

体も手足も、鎧でさえも、幻騎士の姿を一つの生命体として、凶悪な生物を誕生させた。ヘルリングに己の精神を喰わせるこでなしえる、凶悪なまでの戦力倍加。

宣言通り、幻騎士にもはや一切の情も情けもなくなるだろう。

先ほどからの冷静な幻騎士とは一転、荒々しい雄たけびを上げる幻騎士。だがその雄たけびにはどこか悲痛な叫び声まぎれていた。

ヘルリングの戦力倍加の代償は、己の精神を悪魔のリングに喰わせる事。

精神とは理性、自分を自分たらしめる枷を崩壊させ、全てを力に注ぎ込む悪魔との契約。

雄たけびを上げる幻騎士は、自身の中でくすぶる感情を叫びだす。

「ぬう、力が溢れてくる……だが、なぜだあ、なぜ認めてくれぬ!!なぜトリカブトが霧の真6弔花なのだ!!俺の方が優れているのに!!神を!!白蘭様を守る霧の守護者は!!誰より俺が適任だというのにいい!!」

先ほどまでの、普段の幻騎士から考えられないような魂の叫び声。驚く面々だが、それはヘルリングに精神を喰われた証拠。周りが見えていないかのような叫び。

「俺は今虫の居所が悪い!!ギッタギタにぶっ殺してやる!!」

本当に同一人物かという程の言葉遣い。見た目の凶悪さとその言葉は、本当の死神のようでもあった。だが対峙する山本には恐怖という感情は全く見えなかった。

「……いいことを教えてやる。沢田綱吉に負けたのは俺の実力ではない。あの時は奴の瞳に惑わされ、半分の力も出していないのだから!!」

つまり、今の幻騎士の実力ツナと戦った時の倍以上は高いと言っている。

その言葉に最初に同意した、観戦室のリボーン。

「まんざら嘘じゃねーぞ。あん時の幻騎士は明らかに動きがおかしかったからな」

思い出されるメローネ基地でのツナと幻騎士との戦い。相手を情に訴え罠にかけるような卑劣な手段を用いたが、鈍る動きを補うためだったのかもしれない。いや、本心からだったのかもしれない。

どちらにせよ、純粋に戦闘できる状態でなかったのは確かだ。

「そうだな。幻騎士なら綱吉との戦いに罠で嵌めるより、普通に戦った方が強いだろうしな」

ソファで寝転がるルイも同意する。あの時の戦いを見ていたのは、リボーン、入江正一、そしてこっそりと覗いていたルイと実況を聞いていた光努とリルとコルのみである。だからこそ、リボーンの言葉に同意もする、コルも同様の意見だった。

「ツナとの戦いは、戦い方がいつもの幻騎士と違うっていうのもあったけど、それ以前に思っていた以上の動きに見えなかった。キレがないし、無駄が多い。冷静じゃなかったことを差し引いても、どう考えても全力じゃなかったのは目に見えていた」

同じ剣士だからこそ、剣のわずかなブレや動きで、その者の実力なのか、それとも手を抜いているのか、あるいは全力が出せていないのか。おそらく違和感のような物が渦

巻いていたのだろう。

「山本殿は大丈夫でござろうか？」

「大丈夫じゃない？ 凶悪に凶暴に力が倍加してもう勝てない、なんてこと、武は全く思っていないみたいしね」

モニターに映る山本の表情は、不適に笑い、小刀を三本片手の指で挟み込み、もう片方の手で長刀を握り構える。

なにも恐れることはない。最初に戦った時の自分ではない。

「そうこなくつちや、面白くねーって」

「うぬう、減らず口の青二才が!! 剣撃と幻スベットロ・ステイフランク海牛の二重攻撃を喰らえ!!」

太刀筋を分散させる幻剣による剣撃と、実態のある爆発性の幻海牛の攻撃。全身の鎧と剣から霧の炎を噴き出す幻騎士を見て、山本は雨犬の次郎をボンゴレ匣の中へと戻した。成長性は高い次郎だが、形態変化できるのは雨燕の小次郎のみ。戦闘は基本的に山本が行い、そのサポートに徹するのが雨のボンゴレ匣。次郎を匣に収納した山本は、長刀を構える。

幻剣を振りぬく幻騎士の剣撃は、霧の刃となって幾重にも山本へと向かう。

同時に、幻海牛によるミサイルを間に挟むように生成し、宣言通りミサイルと剣撃の二重攻撃が行われた。広範囲にわたる攻撃とその威力は雷の炎で硬化されたビルに着

弾し、罅を作り、瓦解させる程。おそらく一つでもまともに当たれば致命傷になるだろう。

その中で山本は、静かに呟いた。

「時雨蒼燕流、守式四の型、ごふうじゅうりゅう五風十雨」

瞬間、山本の姿が掻き消え、先ほどまでいた場所に剣撃とミサイルの被弾による激しい爆発音が鳴り響く。本当に消えた、そう思うようだが、消えたように見える程、超高速での移動。

五風十雨は相手の呼吸に合わせて剣を躲す回避奥義。

中学生とはいえ熟練された山本の技は、ボンゴレ匣の推進力を足されることで幻騎士の剣撃をすべて寸分たがわず回避して見せた。

だが幻騎士は、己の姿を10に分身させる事で、さらに剣撃を増やした。10倍の斬撃と幻覚のミサイル。

「究極 幻 剣 舞!!」
エクストラダンツァースペクトロスバダ

全てを切り刻み、飲み込むかのような幻覚と斬撃の嵐。容易にビルの壁面コンクリートに傷をつけ、山本へと迫る。いくら山本へといえど、全て避けるのは難しいかもしれない。

だが山本は、怯むことなく小刀から雨の炎を噴き出し推進力にし、真正面から剣撃の

中へと飛び込む。

「時雨蒼燕流、総集奥義！」

握る刀に力を籠め、決意の瞳と共に剣撃の嵐を突き抜ける。

山本がスクアール口との修行によって生み出す新たな力、新たな技。

湖のような澄んだ純度の高い、蒼炎の雨の炎。

剣を選んだ山本の覚悟は、その剣と炎を次の段階へと押し上げた。

時雨蒼燕流をわずかな期間で取得し、瞬く間に新たな型を生み出す山本の才気は並みの物ではない。野球と両立することもできたが、この時代限定とはいえ、その才と努力を剣のみに注いだ成長力は、爆発的だった。

蒼い刃を振り払い、時雨金時から大海のような炎が吹き渡った。

時雨^{じうのか}之化^か!!

その瞬間、あたりは静寂に包まれた。

全ての時が止まったかのような、そこには何も存在しなかったような一転した静謐さ。

だが確かにそこにある。飛び交う霧の斬撃も、幻騎士の匣から現れた実態ある確かな

ミサイル群も。一瞬の間で起きた違いは、そのどれもが、止まっているという点。

正確には、限りなく停止に近いほどにゆっくりとした動きになっている。

純度の高い死ぬ気の炎を纏う匣兵器は、その炎の特性を強く反映させる。

雨属性の特性である『鎮静』は、その動きを、移動を、全てを鎮める。

時雨之化は、山本の持つ形態変化した長刀と、小刀3本を用いた奥義。全ての雨の炎の刃を振るい、相手の攻撃にぶつけ、その動きを停止へと近づけた。

それだけの力を持つ匣兵器も驚異的な力を持つが、それを操る山本の剣技があつてこそその奥義。ただの使い手ではこうはいかないだろう。剣撃を止められた幻騎士は、驚愕の思いだった。

「おのれ、小癩な!!あのガキどこへ消えやがった!!」

山本を探そうと前へ出ようとするも、目の前にあるのは自身が放った霧の斬撃。硬度の低い霧の炎とはいえ、幻騎士がヘルリングによる戦力倍加を行い、渾身を籠めて放った連撃。当たれば一撃必殺たり得る威力を發揮するが、止まってしまえば無駄に硬い邪魔な壁でしかなかった。

「く、己の剣撃が邪魔になるとは!!分裂してはパワーが足りぬ!!どこだ!!」

分散すればそれだけ攻撃の幅が大きくなるが、その分自身の炎を分け与える分攻撃力が低くなる。むろんそれでも十分に高いが、自分で打った剣撃を破壊するには分身のままで心もとない。自分以外の9の分身を全て集めて剣撃を破壊しにかかる。

「確かに俺はあんたに一回負けた」

声が聞こえる。強い意志を秘めた声音。

幻騎士が声の方へと向けると、剣撃の中を突き進む一人の影。雨の炎を推進力に、長刀を構える山本の姿が、そこにはあった。

「だがそれは俺の未熟のせいだ、親父のくれた時雨蒼燕流はいつだって——」

完全無欠、最強無敵だ!!

真正面から向かってくる山本に愚かだと思いつながら迎え撃とうとする幻騎士。だが思うように体が動かない。それどころか、山本の速度は先ほどより格段に速くなっていた。いや違う、

「奴が早いのではなく、俺が遅いのだ!!」

足元を見れば、劍撃を伝つて雨の炎が、足元から幻騎士に浸透していた。

停止に近づいた劍撃同様に、幻騎士の動きは劍撃程極端に止まつてはいないものの、その動きは明らかに遅くなつていた。もはや、山本の真正面からの攻撃も、避ける事すらできなかつた。

「ゲゲエ!!」

空を突き抜ける一筋の彗星の如く、雨の炎が一閃する。

己の流派の名を守る為。己の力の無さの敗北の雪辱を果たす為。

そして仲間と共に、勝利を手にする為に。

時雨蒼燕流攻式八の型、篠突く雨!!

劍を振りぬく山本と、背後で消える霧の炎。

切り裂かれた幻騎士は、その凶悪な姿を元に戻し、霧の炎が解除されて倒れ伏す。

己の劍を振り切つた山本は、静かに笑みを浮かべた。

(やったぜ、親父)

(ふん、まずまずだなあ)

山本の勝利に、スクアア口には出さないが、口角を上げる。

多少の時間とはいえ、自分が修行をつけた弟子のような物。口に出せばディーノ辺りがからかいそうなので何も言わないが、内心では楽し気に笑っているのであった。

「ほんと、中学生とは思えないよね」

ぼつりと呟くような声を、スクアア口は聞いた。

モニターを見ているコルはいつも通り無表情にクールな印象だが、その瞳はどこか好氣的に、どこか楽しそうに。内心では抑えられないような闘争心がわずかににじみ出ている。コルにしては、珍しい光景に少しスクアア口も驚く。

(はっ、あいつも面倒なのに目をつけられたなあ。ま、過去に帰れば関係ねえことだけだなあ)

瞳を閉じて笑うスクアア口。コルはこの時代の人間。そして山本は10年前の時代の人間。この時代の山本もスクアア口と互角以上に戦える剣豪だが、この時代で成長した10年前の山本と比べればどちらが強いだろうか。

同じ時空で同じ人間が出会うことがないので、叶わぬ戦いであろう。

願わくば、今の時代が白蘭の支配の時代でなければ、大手を振って剣の戦いを申し込めたのかもしれないが。この時代だからこそその成長も、また事実。

「幻騎士、トリカブト、捧日。敵3人を撃破した今、残るミルフィオーレ側の兵士ユニットは桔梗、アランの二人か。状況としてはこちらが優勢だな」

「こつち側はまだ誰もやられてねーしな。確かに順調と言えば順調だな。だが……」
順調すぎる、というのがリボンの気がかり。

それだけならいいのだが、何か見えない手に引かれているような気がしてならない。気のせいだとよいのだが。

おそらくミルフィオーレ側の大将は前線に出てこないだろう。入江の放った罠はミルフィオーレ2チームによりほぼ破壊されたが、残りだけでも戦っているアランは別として、桔梗を惑わすくらいは機能するはずだ。その間に、空いたこちらの陣営で敵の大将を仕留める。

「そういえば、アランはどうなった？ 確かりルといなくなったが」

ボンゴレ側の観戦室であるため、基本的にいくつかの戦闘が行われていたらボンゴレ主体で映されるので、イリス側は少し映らない場合があるので疑問に思ったディーノだが、隣のコルが呟く。

「大丈夫だよ、デイーノ」

「コル？」

モニターに向ける視線。画面上に、ひらりと何かを通り過ぎる。

「あれは、紅い……花びら？」

一面に、紅い花びらのようなものが画面を横切った。瞬く間に、視界を埋め尽くすような赤い花吹雪。滞空する山本も、上空から降り注ぐ紅い花びらに、思わず目を引き付けられた。

「奥義の壺が、紅い桜の嵐が吹いた。もう、終わってる」

目の前には、青い青い雲が適度に浮かぶ晴れの空が見える。

同時に、空を彩るような真紅の花びらが見える。

しかし目の前を通りすぎるそれにかすかに触れてみると、瞬く間に霧散してしまつた。花びらに酷似していたが、それは小さな嵐の炎。なぜそんなものが視界に見えるの

か疑問に思ったが、すぐに先ほどの光景を微かに思い出し、納得する。「そうか。私は、負けたようですね」

自身の腕には粉々に破壊された手甲グローブ。倒れて動かない自分の体はビルの屋上に投げ出され、傍らに転がる灯玉は、中ほどからきれいに切り裂かれ、破壊されていた。

死神、アランは瞳を閉じて深く息を吸い、深く吐く。

体を起こすが、手のひらには壊れた匣があるのみ。風にさらされ、破片が空へと舞った。

やれやれ、という風に思ったが、背後でコンクリートを踏みしめる軽い音が聞こえたのでそちらを振り向くと、少女はこちらを向いてた歩いてきた。ビルとビルの間を渡ってきたのだろう。

刀を納刀した状態で歩き、屋上に座るアランの隣にしゃがみこむ。

「大丈夫アラン？ 多分大怪我はしてないと思うけど」

「はは、確かに軽いけがはありますが重傷はないです。やられておいてなんですけど助かりましたよ、リル。加減してくれたのでしよう？」

艶やかな黒髪を揺らす少女、リルはぎつとアランを見たが、特に重症があるわけではなく、匣含めた武具が壊され軽い裂傷があちこちにあるのみ。自分で攻撃しておいてだが

ほつとするのだった。

夜ノ型コードワン壺、べにざくら紅桜。

壺ノ型は奥義の型。

嘗て、この変則二刀流の剣刀術の元となった2つの流派の片割れ、刀を主に使う一刀の剣士が使ったとされる奥義の一つ。その正体は、神速の抜刀術。

抜刀術とは、鞘に刀を納めた状態から一気に抜き放つ剣技。達人ともなれば、相手に抜かせたことすら気づかせず、対象を斬り捨てることも可能。リルの使った抜刀術は、さらに炎も応用した上位版。

嵐の炎を刀を納めた鞘の中で圧縮させ、まさに密閉された空間に炎を詰めたかの如く爆発させ、神速の抜刀を放つ奥義。その威力は通常の抜刀術よりはるかに強大。さらには、凝縮した嵐の炎の威力により、自身の周りの空間すらも切り裂き、嵐の刃は遠くの標的を圧倒的な破壊力で切り裂き、納刀する。

その際、爆発的に広がる火の粉が桜の花弁のように見えたことから、紅桜の名前が付いたと言われている。

嘗て、初代イリスと共に過ごした4人のファミリーの一人だった剣士は、この技によつて

真紅の刃を打ち出し、目の前に迫る脅威を刀の一薙ぎで切り払ったと言われる。

近接での威力が最も高いが、そのままやれば相手を斬り捨てる恐れがある為、距離をとったことと、それによりアランの最大攻撃力の技を引き出してぶつけ、威力を軽減させた。だがそれでも高い威力。匣は大破し、アランもしばらく動くことはできないだろう。

「さてと、じゃあ私は下に戻るけど、アランは安静にね」

「はは、この状態では動けないですよ」

割とマジで相手を倒す気だったこの二人だが、終わってしまったえば友好的。

元の知り合いだろうが基本倒すことに躊躇いの無いのは流石マフィア同士といったところだろうか。しかしそれで加減をしようと考えるとは、甘いのか甘くないのか微妙なところである。

「あ、そうだアラン」

そういつて唐突に思い出したようなリルは、懐から取り出した物体を手ではじき、緩やかに弧を描いて仰向けに倒れるアランの腹の上に乗せる。

ちらりと首を動かしてみようと、黒びかりする腕輪のような物だった。

「それ、一応持っておいてね。念の為」

意味深な言葉を残しつつも、無言で同意を示すアラン。

動けないアランをその場に残して、リルはビルから宙へと踏み出し、山本の元へと降り立った。

山本の剣を受けた幻騎士は、コンクリートの上で倒れ伏していた。

纏った鎧はところどころ砕かれ、満身創痍な体は指一本と動かせる状態じゃなかった。

山本に受けた一撃が強力であったというのものもあるが、同時に雨の炎による鎮静作用と、ヘルリングに精神を喰わせた為に起こるダメージも深刻だったのだろう。

だが山本も、命は奪わないように打った。

マフィアだけど、人殺しではないのだから。

放っておいても、傷が原因で死ぬ心配はないだろう。

幻騎士はその選択に甘いという、この時代の剣帝スクアードと同じ感想を持つが、今

は

大人しく負けを認めるのだった。だがその瞳の意志は不動の岩の如く揺るがない。必ず与えられた任務は遂行するという固い意志を秘めていた。

『強運ですな幻騎士。我々は、ミルフィオーレ一の剣士を失うところでした』

唐突に幻騎士の通信機から聞こえる冷静な声音。

ミルフィオーレパファイオベデュラム隊、雲の真6弔花、桔梗。

『あなたの話は聞いています。ミルフィオーレ結成の立役者であり、白蘭様の影の右

腕。あらゆる隠密作戦を成功させ、今回のような重要な戦いには必ず最前線に収集される、白蘭様が最も頼りにする男』

通信機越しに、幻騎士を賞賛するように言葉を並べる桔梗。

皮肉などは含まれない、当然の事実として述べる言葉。

最終的には作戦は成功ではなく少々変更になったが、幻騎士がいたからこそ、マールリングが手に入り、ジェツソファミリーとジツリヨネロファミリーが統合されたと言ってもいいかもしれない。そう考えると、ミルフィオーレ結成の立役者というのも誇張でなく、さらには白蘭の懐刀として、メローネ基地でも入江のサポートを任され最終防衛ラインを務める信頼と実力も備えている。

これなら確かに、幻騎士が影の右腕というのも納得。

幻騎士は倒れ伏しながらも当然だとばかりに、白蘭は全てを見通し、自分こそ奇跡を与えるにふさわしい人間だと信頼していると、語っている。

だが、それを聞く桔梗の口元にはその言葉にはない、幻騎士に対し嘲るように、薄く笑みが張り付けられていた。

パキ！

突如幻騎士の耳に響く乾いた音。

何かが割れるようなその音は次第に数を増していき、音源を探る幻騎士は瞳を見開いた。

自身の纏う霧の鎧に罅が入り、無数の植物が顔を出している事に。

横目で見てわかる紫色の雲属性の炎が纏われた植物。そしてそれを見た瞬間、幻騎士はこの植物を仕掛けた人物を理解した。

今まさに、通信回線で幻騎士と会話をしていた男。

『ハハン。悪く思わないでくださいね。役に立たぬ時はいつでも消せるよう、雲の炎で増殖する雲カンパヌラ・ディ・ヌーブオラ 桔梗 梗を鎧に仕込んでおいたのです。白蘭様の命でね』

「!!白蘭様が!?!嘘をつくな、桔梗!!」

『嘘ではありません。白蘭様のお考えです。あなたを猿として扱う時から指示されていたのです』

驚愕する幻騎士に、涼しい顔と声音で語り掛ける桔梗。

それに対して、白蘭と通信し確認したいという幻騎士は、ルール上選手と観覧者の接触を断つチエルベツロによって、無情に聞き届けられなかった。

その時、上空にてその光景を見守っていた幻騎士を倒した調本人、山本武は、固唾をのんで見ている中で、隣にリルが降り立った。

「今の状況、幻騎士倒したみたいだけど、あの雲の炎は誰の？」

「リル！いや、俺も分からねえ。幻騎士の幻覚じゃねえし、雲の炎なら………さっきのARANって奴のか？」

「いや、あの草はARANの物じゃないよ。ARANの炎は既に切れてるし、考えられるとしたら………同じチームメイトの雲の守護者、桔梗」

じつと視線を鋭くして考察するリル。

このチョイスバトル内で参加する雲の炎を持つ者をたどり潰していけば、必然的に答えを見つけるのはそう難しくない。

ARAN・バローと桔梗の二人。

ちなみに光努と獄寺の二人も雲の炎を灯せるが、当然の如く選択肢には入らない。

そして幻覚を見せる術士が両方倒れている以上、現実には炎を出せるのは現段階で無傷な桔梗くらいだ。

しかし不可解なのは、なぜチームメイトに対して自身の、おそらく匣兵器を使っているという事。

(了平の晴ゴテみたいなの治療目的の匣ならわかるけど、雲の匣兵器でそんな匣はあまり聞いた事がない。それになんとなくだけどミルフィオーレ的にはチームメイトを回復とかし無さそう。ていうか見た目明らかに苦しんでるし、それで倒れた仲間に使うとしたら目的は………幻騎士の始末)

その結論に至った瞬間、リルはその場を跳び出して幻騎士のそばへと降り立った。

「幻騎士!」

「がっ、ぐああああ!!」

そばに来たリルは苦しむ幻騎士を見て刀に触れようとした手を止めた。

(桔梗の葉の浸食が思ったより広がっている!これだと私の刀じゃ幻騎士ごと燃やしちゃう!)

リルの刀は良く斬れ、高純度の嵐の炎は対象を圧倒的な分解力で燃やし尽くす。

桔梗の葉を全て斬ろうと思うと、おそらく幻騎士事斬りつける。さらに全てを取り除こうとして燃やそうとするならば、これも幻騎士すら燃やしてしまう。

「リル！幻騎士は大丈夫か!？」

リルが飛び出したのを見て、山本も隣に降り立つ。

だが横たわる幻騎士を見て、表情を複雑に歪ませた。

そして覚る。

おそらく、自分にできることは無いのだと。

——ねえ、幻騎士君。神様って、無情だと思わないかい？

体内をかき回されているような激痛の中で、幻騎士は過去の記憶を思い出していた。

わずかなフラッシュバックのような音と映像。もしかしたら、これが走馬灯という物なのかもしれない。そう幻騎士は感じていた。

数年前、一流の剣士である幻騎士は剣の修行の遠征中、立ち寄った街で流行していた病に侵された。

それだけでも不運な事なのだが、さらに絶望的な不運という要素が二つ。

一つは、発症してから進行が速い急性疾患だということ。

既に2日たっただけで指先一つ動かすことができず、ただ寝転がって瞳を動かす事しかできなかつた。

そしてもう一つが、この病が现阶段で治療法が確立していない不治の病だということだつた。

残りの時間を、体一つ動かさずに、ただただ死を待つだけだつた幻騎士。

そんな時に、白蘭は現れた。

—— 神様つて無情だと思わないかい？ 決して、いい行いをした者を長生きさせるわけじゃない。

その場所が不治の病原菌に侵された隔離スペースだというのに、まるで道端で世間話でもするような格好と表情と声音の白蘭の言葉。

幻騎士がその言葉に耳を傾けたのは、動くことが一切できずわずかな五感が残っているのみだつたからのと、幻騎士自身も、自分にこの境遇を与えた神を呪う程の悲しみと憎しみを抱いていたからかもしれない。

——— だけど、僕が神ならそんなことはしない。僕は尽くしてくれた子には、それだけの見返りをしてあげるよ。

そつと幻騎士に近寄る白蘭は、誘惑するような声色の言葉を紡ぎ、静かに語る。

——— 君の病気を治してあげよう。後は自分で考えなよ♪

その後、幻騎士の身に奇跡が起こった。

体がボロボロと崩れ落ちそうな激痛と出血、病原体の作用で体一つ動かせなかったというのに、まるで夢だったかのように全てが消えた。

あろうことが、自分の意志で起き上がり、ぐるぐると撒かれた包帯を外せば、そこには先ほどまで死へ向かうだけだった己の肉体が、生気を帯びた健康な状態で目に入った。

白蘭は、その時代に存在するはずの無かった不治の病の治し方、ワクチンを幻騎士に授けて救った。

幻騎士は悟った。

一時は自分を病に陥れた神を呪ったが、自分の主は他にいたのだと。

その日より、幻騎士は力のすべてを新たな神、白蘭に捧げ、絶対の主として忠誠を誓った。

そして神の為、あらゆる任務を遂行したのだった。

幻騎士は白蘭を信じ続ける。

たとえ後に白蘭が、幻騎士を裏切る事になろうとも。

「ぐああー！白蘭様が俺を殺すはずが無い！！凶ったな、桔梗！！」

この状況でなお、桔梗の言葉を信じず白蘭を信じて疑わない幻騎士。

彼は恐ろしく純粹だった。故に、命を救われた白蘭を慕い忠誠を誓ったが、その純粹

さは白蘭によつて黒く染まり、見えるはずの真実に曇りをかけてしまう。

白蘭の創造するゲーム盤の上には、すでに幻騎士という駒は存在していなかった。

小さな器は白蘭の命じるまま思うように動くが、簡単に掌で割れる。

観覧席から幻騎士を見る白蘭の表情には、悪魔のように笑みが浮かばれていた。

しかしそれでも、幻騎士は白蘭を信じて疑わない。死の病から生還した時のように、

自分に奇跡を与えてくださると。

既に動く事すらままならぬ、激痛が全身を駆け巡る。まるで嘗ての病のような光景だったが、不思議と幻騎士は穏やかな心境だった。

死の恐怖など、もう怖くない。

一人剣の修行に明け暮れていた昔とは違って、幻騎士は悲しむことも、憎むこともしなかった。なぜなら、自身の心に根付く柱の存在があつたからこそ。

自分には、神がついているのだから。

「ならそんな神、天上から引きずり降ろして俺がぶん殴つてやる」

その瞬間、山本とリルと幻騎士の視界は、澄み渡るような純白の光に染まった。

『FIRE OF WHITE NIGHTS』

辺りを包み込んだのは、日の光のような純白の光。

敵意や害意など一切感じない、むしろこの上なく暖かなぬくもりに包まれるような光が、一瞬で山本、リル、そして幻騎士の視界を支配した。

その光は、観覧席で見っていた者達の視界にも入った。

同時に、白蘭は楽し気な笑みを浮かべた。時として残酷に見える、ようやく面白いおもちゃを見つけた、無邪気な子供の用に。

「あの光………はは♪あれが噂の特異点の正体かあ。流石に、初めてみたよ♪幻ちゃんも、最期の最期でいい仕事してくれたね」

「……………びゃくらん？……………!？」

画面が白い光で染まった瞬間、白蘭は心底楽しそうに笑い、隣に座るブルーベルは不思議そうな顔でキョトンと、そんな白蘭を見ている。

無邪気に笑う白蘭だが、その表情は次第に、見る者の首筋に鋭利な刃を突き立てるよ

うな、独裁者のような笑みをわずかに覗かせた。

「さあて、この後が楽しみだ♪」

一陣の風と共に現れたのは、一人の少年だった。

その場にいる者も、観覧席からモニターで見ている者も、目の前の人物の登場に、程度の差はあれど一様に驚きに身を包んだ。

柔らかく暖かい雰囲気身を纏い、文字通り降って湧いたように現れた少年は、倒れ伏した幻騎士を見て目を少し細めた。その表情は、少年としては珍しく笑みは鎮められ、感情の読みにくい無表情を貫いていた。

そしてその右腕には、イリスファミリー当主の証であるファイオーレリング。そして進むのは、透き通るような純白の光を生み出す、真っ白い炎だった。

突如現れた少年に対して、リルと山本は同時に声を上げる。

「光努!!」

イリスファアミリーに突如現れた2代目当主にして、フィオーレリングの若き継承者。絹のような柔らかそうな白髪を揺らし振り向いたリルと山本の姿を目にした瞬間、口元に笑みを浮かべた。

「よう、リル、武。二人とも無事みたいだな」

「はは、なんだ。光努、だれかと戦ってたって聞いたけど、そっちこそ平気そうだな」

基本的にチョイスルールでは、4つに分かれたチームそれぞれは、敵側味方側に2チームずつが明確になつてはいるが、基本通信機の範囲はそれぞれのチーム内、つまりイリスならイリス内で、ボンゴレならボンゴレ内、そしてミルフィオーレもパフィオペデラム隊とガロファアーノ隊のそれぞれでしか使えないので、イリスの現状をボンゴレが知る術は基本的に現場での情報交換以外ではない。

その為、通常最初にリルと別れた光努の状況を知る事は山本には出来ないが、様々な戦いの情報を手に入れた入江の推測を元にして、今現在ミルフィオーレ側の誰かと戦っている、という事はすぐに分かったのだった。

ちなみにリルとは会っていたが、長話をする余裕なく戦いが始まったので、特に細かい情報交換はしていないのである。

「俺は平気だ。二人も平気そうだ。だが、平気そうじゃないのが一人いるな」

そういつて見つめたのは、倒れ伏した幻騎士。

既に鎧はボロボロに砕け、桔梗の葉がゆらゆらと揺らめいている。

幻騎士も、突如現れた光努の登場に、驚きに瞳を見開いた。

「お前は……………白…神……………光努…。白蘭様が……………気にしている……………イリスの…当主か……………」

掠れた声の幻騎士の言葉。

そんな幻騎士のそばにしゃがみ込み、光努はその表情をのぞき込む。

不安や怯え、恐怖や憎しみなど一切ないような、清々しい程に穏やかな表情。

もしかしたら、これが本来の幻騎士の姿なのかもしれない。しかし、その表情を映し出す体は、無残な姿になっている。

「なあ、幻騎士。これがお前の望んだ人生の終着点なのか？桔梗……………いや、白蘭に殺される事が」

「違……………う。白蘭…様……………は…俺を救つ……………て……………く下さる。奇跡……………を…与えて……………下さる」

（純粋な瞳。本当にそう信じてるんだな。だが、現実は残酷だ。白蘭はこの状況でお前を救うことはしない）

状況的に観覧席の白蘭が手を出せないというのもあるが、白蘭が真6弔花という組織を守護者につつた以上、もはや幻騎士は用済み。もつと言えば、マーレリングを手に入

れた時点で、白蘭にとつての幻騎士の存在価値はほぼなくなつたといつてもいいかもしれない。それでも仮の6弔花という役割を与えていた以上、忠誠心や実力は信頼していただけるだろう。

しかし、そもそも白蘭が幻騎士を救つた理由も、ジツリヨネ口のマーレリングを手に入れるのに一番都合がいいかもしれないという思惑があつたのかもしれないが、それは流石に白蘭以外は誰も分からない。

だが今この状況は、明らかに白蘭の仕組んだこと。

幻騎士と桔梗の会話を聞いていなくても、光努には分かつた。

純粹故に、どこまでもその人生は、神とあがめる者の為に歪に狂わされてしまつた、悲しき劍士。

「信じる者は救われる……か。俺はそれもいいと思う。信仰は人それぞれだから。信じる者の為に人は頑張れるし、強い覚悟が生まれる。だが、今信じた瞬間に死ぬ状況なら、そんな信仰潰してやる。お前は死を望んでいない、まだ生きたいはずだ」

幻騎士の口から虚ろのように漏れる言葉は、忠誠の為に己が死ぬ事を本望とする言葉ではない。

必ず自分を救つてくるという言葉。その根底に込められた願いは、きつと自分を助けてくれるという信じる信頼の心と、まだ自分は生きていたいという渴望。

「だから今回は神に継るのはやめろ。俺が代わりにお前を生かしてやる。そしてお前が生き続けられたのなら、そんな神は捨てる。お前の信じる神は俺が地に叩き落してやる」

光努から感じるのは怒りの感情。それと同時に、満ち溢れる希望の光。嘗てここまで光努が感情を露わにしたことがそうあったのだろうか。

おそらくイリスの人間であろうと、これほどの光景は1度か2度あるかどうかという所なのだろう。

リルは遠き小さな頃の自分を思い出していた。

イリスファミリーの屋敷で、カルカツサのマファイアが攻めてきた時の事を。

光努と初めて会った時の事を。そして光努の怒りを、あの時初めて見た事を。

「リル、武、刀を構えろ。お前らの嵐と雨の炎、少し使うぞ」

「けど光努、どうやるつもり!? 桔梗の葉を燃やし尽くすなら、幻騎士事一緒に巻き込んでやう。このままじゃ……」

「安心しろ。その為に俺がいる。俺には、これがある」

安心させるように穏やかに語る光努の言葉と共に、右手に嵌められたフィオーレリングがさらに激しく光を放った。

強い光、だが眩しいとは感じない。

まるで人体にとって必要な要素であるかのように、暖かな光が周りの人間の全身を覆う。

そして右手に纏われた純白の炎ごと、光努は右手を幻騎士に触れた。

その瞬間、光努の白炎はまるで生きているかのように、倒れ伏して動く事ができない幻騎士の全身を包み込んだ。

その光景は、観覧席にいた者達にも良く見える。

光努の炎が幻騎士を暖かく包み込む。

だがその炎を初めて見る者達にとっては、驚愕の一言だった。

「あの炎。そうか、あれが本来の光努の持つ属性の炎って奴か」

「どういう事ですか、リボンさん？」

「光努の今までの戦いを見てみると、晴、雲、雷、嵐、雨の匣を使っていた。確かに獄寺も同じように複数の波動を持っていたからありえない話じゃねーが、それは光努の持つファイオーレリングのどの属性とも違う炎。しかし今回、ファイオーレリングからようやく炎をだして見せた。もしかしたら、俺も見つめた事がねーあの炎に、これまでの光努の秘密が隠されてるかもしれねーな」

「しかしあの炎は、大空の7属性のどの炎とも違います！あれは一体！」

「知らないのも無理はない」

バジルの声に答えるように呟いたのは、隣に立っていた男、黒道灯夜。

「本場であるイリスも、あの炎に関しては殆ど知らなかった。初代イリスの古い文献の中に多少記述されていたのを、少し見た事があるくらいだ。10年前の時点で知っていた

のも、ボンゴレだと9代目くらいだろ。それでも微かな噂程度だがな」

「けど、これまでの戦いで光努は一度も見せた事ねーな」

「それは、今だ光努の前に強敵が現れなかった、ただそれだけの話だよ」

空気に溶け込むような言葉を投げかけた人物は、いつの間にか近くに来ていた。

特徴的な銀白色の髪色と、黄金色の双眸。およそ小学生程にしか見えない整った出で立ちをした少年、ハクリは、誰の目に止まる事もなく、いつの間にかそこにいた。

その言葉の端からにじみ出る雰囲気と表情は、画面に映る白髪の少年のように、実に楽し気に笑っていた。

「ハクリ、おめーもいたのか」

「ははは、ひどいなありポーン。俺だつて一応イリスのメンバーなんだよ？ 寧ろいい方が不自然じゃないか」

「イリスのメンバーにしては、おめーがまともに出てきた所なんて見た事ねーがな」
痛いところを突いてくるリボーンの言葉のナイフ。

だが無論、ハクリはそれを躲そうとしないで甘んじて受け入れる。当然の事だから。ハクリは基本的にどこにでもいるが、どこにもいない。

何者の戦いにも思惑にも一切干渉せず、一步引いた所、いや寧ろまったく別の空間から経過だけを傍観しているような佇まい。

光努は用があれば最前線に出向くが、ハクリはそうはいかない。

いや、ただ単に、ハクリが出向く様な状況が訪れていないだけかもしれないが。

今は少年の姿をしているハクリだが、その首からはリボーンの物と同型の白いおしや

ぶりをチェーンに通してぶら下げていた。

リボンから見た見たハクリの印象は、よくわからない奴。

悪い奴ではないというのは光努を見ていたなんとなくわかるし、一度会話をした時も腹の中に何か抱えているような感じはしなかった。

怪しさは確かにあるが、害意や敵意といったどす黒さは、少なくともリボンは感じなかった。

確かに情報が少なく素性も知れない為警戒をしているが、それでも早急に敵対するような事など無いと思っている。家庭教師である自分と同じように、光努のそばに入れど、その戦いや行動に対して横からちよつかいはしてくることはないというのも分かった。

どうも状況を、心より楽しんでる雰囲気。

この世界の滅亡を掛けたチョイスという場においても、実に愉快そうに。

「それよりもモニターを見なよ。光努はこれだけの人の前で、あの炎を使ったのは初めてだ。状況が状況だけど、光努もサービスが過ぎるな」

くつくつくと喉を震わせている楽し気なハクリ。

どうにもうさん臭さがにじみ出るような気がするが、見た目同様に、無邪気な子供、とというような印象をリボンはわずかに持った。

どこか似ている。白神光努も、ハクリも。

「あれは原初の炎、特異の炎。ただの人間にはあの炎は出せない。あの炎を出したのは全世界の歴史上、光努を除けば一人しか存在しない」

少し引つかかる物言いだがその言葉に、リボーンは一人思い当たる節を見つける。

その者は光努同様に、唐突に長い歴史上にぽつんと現れた人物。

謎の多い素性もあるが、様々な分野に精通する知識と手腕、そして何より強い力を持ち合わせたまま再び唐突に姿を消した人物。

「イリスファアミリー初代ボス………か」

「流石リボーン。その通りだよ。そして君らは運がいい。普通ならお目にかかれないあの炎を、こんなに近くで見れるのだからね」

澄み渡る光を具現化したような、何物にも染まっていない純白の炎。

溢れ出す炎の波動は辺りを白く照らし、光努の周りの空間だけまるで別の空間であるような印象を与える。

「あれこそ、全てを新たな色で染め上げ、また自らも様々な色に染め上がる。ファイオーレリングに認められた物が宿す特異の炎。例えば世界が混沌の暗闇に飲まれようとも決して

沈まない純白の光の象徴と称し、初代イリスはその炎をこう呼んだ、『白夜の炎』と」

暖かい、安心するような温もりの中に、意識が揺蕩う。

白く眼に優しい光を全身に浴びて、まるで深い湖の中で浮かぶような感覚。

重力の一切から解放されたような、そんな心地よさが全身を伝う。

先程まで感じていた激痛の一切が和らぐ不思議な感覚に思い当たる事があるとすれば。

そうか、俺は、死んだのか。

揺らぎ漂う微睡みの思考の中で、幻騎士は意識を動かす。

噂に聞く天国……いや、自分が逝くのなら、おそらく地獄なのだろう。

我が主の為悔いなく行動したとはいえ、自分はそれだけの事をしてきたのだから。

しかし最期の最期で惨めに死んでしまうなど、なんて笑えない。

このまま俺は、どこか見知らぬ暗い底へと沈んでいくのだろうか。

だが不思議と怯えや恐怖は感じない。

先程の激痛の中と比べれば、今この瞬間は実に心地よく感じたから。そう思つて、幻騎士は身を投げ出す。何者にも逆らおうとせずに。

——お前はまだ死を望んでいない、生きたいはずだ。

再び幻騎士が微睡みの中に意識を鎮めようとした瞬間、声が聞こえた。一体誰の声だったのか。

力強い声。空いた胸の内に響く様な力強い声。

俺は、生きたかったのか？

——神に縋るのはやめろ。俺が代わりに、お前を生かしてやる！

お前が、神の代わりに、俺に生を与えると？奇跡を与えると？

そんな事が、お前には出来るのか？神の奇跡と同等の奇跡を。

そんな事をして、何をしようと言うのだ。

——お前が生き続けられたのならそんな神は捨てろ。お前の信じる神は俺が地に

叩き落してやる！

その言葉にどれだけの信頼感があるのだろうか、俺は知らない。

素性のあまり知らない相手、たいして会った事も無く、剣を交えた事も無い相手。だが分かるのは、その言葉には確固足る芯がある。

何者にも動かすことができない、自分自身で立ち立てた強靱な芯が。

俺にも曲げる事のない、生涯支え続けると誓った芯があった。

病で死を待つ体に生きる力を与えた神に従う、忠誠という芯が。

俺は生きたかった。

剣士として様々な強敵とまだまだ戦いたかった。

剣士として死ぬならまだしも、何もできずに朽ちていくなどごめんだ。

もしも、お前が俺に再び生を与えるというのなら、俺はしぶとく抗い生き続けよう。生涯支えると誓った芯は、2度目の死と共に捨てよう。

そして剣士として再び生きられたら、その時は——

規則的な呼吸の音が、同時に大氣中にわずかに振動を与える。

空気を切り裂く滑らかさを刀身に宿す、一点の曇りもない刃の日本刀。

横に並ぶ二人の人物は、互いに己の最も修練を積んだ構えを作り出し、鋭い剣気を全身にみなぎらせる。いつでも来い、というべき万全の構えだが、その表情は構えとは裏腹に、少し戸惑いが浮かぶ表情。

立ち並ぶ山本とリルの二人は、目の前にいる光努に尋ねる。

「えっと、本当にいいの？」

「ああ。そのままやってくれて構わない。手加減なしだ」

「俺も気になってんだが、いいのか？」

「平気平気。武もリルも、気にするな。その為に俺がいるからな」

自信満々に語る光努の言葉。

他に頼る術が無いというのものもあるが、同時に光努に信頼を寄せる二人は、それぞれの役割を自覚して構えなおす。

リングを伝い刀身に燃え移ったのは、全てを荒々しく燃やし尽くすような紅蓮の炎と、静謐に澄み渡る蒼海の炎。

同時に構える二人の視線の先には、全身を純白の炎で包み込み横たわる幻騎士がいる。

一瞬瞳を瞑り短く息を吸い込み、止めたと同時に瞳を開く。

「朝コトドフオスノ型デシユトニーク肆チエルヴエナ・紅ニ色ニ傘ニ」

「時雨蒼燕流攻式八の型・篠突く雨！」

迸る剣閃。雨と嵐の二重の炎の渦が、横たわる幻騎士を包み込む。

同時にパチパチと弾けるように、まるで生き物のようにリルの嵐の炎が桔梗の葉を分解し、山本の恵みの雨の蒼炎が炎を消していく。

幻騎士を包み込む純白の炎に混ざり溶け合うように蠢き、次第に嵐と雨の炎を消えていく。後に残るは白く輝く炎のみ。しかしそれも、すぐに霧散した。

さらさらと砂のように溶けて消えていく霧の鎧、剣、兜。

山本とリルの二人が固唾を飲んで見守る中、次第に霧散した霧の炎の中から現れた人影に反応する。

既に鎧が剥がれ落ち見せたのは、その場に横たわる幻騎士の姿だった。傷はある、少なくとも血液も流している。

武器は崩壊し、匣も大破した。

満身創痍のその姿だが、光努は小さな鼓動と呼吸音を聞き取る。

「幻騎士!!」

山本とリルは降りぬいた刀を納めて、すぐさま幻騎士の元に駆け寄る。

生気は少なくやはり間近で見ても傷は多いが、確かに生きている。流れてしまい少なくなつた血液が流動し、微かに鼓動しているのを脈拍でもリルは確認した。

「ふう。結構ぎりぎりだけど、とりあえず生きてるよ」

「まじか………!」

リルの言葉に、山本は驚く。

もはや半分以上諦めかけていたにも関わらず、ぎりぎりだが幻騎士は確かに生還した。

これを奇跡と言わずに、なんと言うか。今は、先程の絶叫が嘘のように、穏やかに意識を失っている。

「ま、とりあえず草は全部除去できたはずだ。重症だが死ぬ事は無いだろ。命あつての物種。文句は言わせないけどな」

あつけらかんとそう言い放つ光努は、楽し気に笑つた。

重傷ではあるが、ひとまず峠を越えた事に安堵するリルと山本を見て、光努はくすり

と笑う。右手に嵌められたファイオーレリングは、そんな光努の心情を表すかのように、きらりと光ってた。

光努は少し短く息を吐き、地面を踏みしめて、パキリと指を鳴らして、楽し気に笑った。

「さーてと、そろそろ大将戦を始めるか」

『雷様は鬼というのが一般的』

幻騎士との死闘を終えた山本。

そしてアランを倒したリルト、合流した光努。

真6弔花の桔梗は、入江正一の炎をトレースして作り出した^{デコイ}罠を一つ一ついまだに潰しており、獄寺は大将、つまり入江正二を守る防衛ラインに陣取り敵を待ち構えている。

状況を見るならば、圧倒的にボンゴレ&イリス側が有利な状況。

基本動かない大将（光努はもはやスルー）を除けば、動ける兵士ユニットは敵側は桔梗のみ。

いくら真6弔花といえども、1人で二人の大将を守る事など不可能。ボンゴレ&イリス側はまだまだ脱落者なく、全員がほぼ万全な状態で戦闘に臨める。

兵士ユニット同士がぶつかれば、圧倒的に数においてもこちらが有利だ。

幻騎士が脱落した今、入江正一はここが勝機と悟った。

その為、山本が通信可能なタイミングを見計らい空気を読んで通信を行う。

『あー、山本君? とりあえず大丈夫そうだから連絡したけど、次の指令いいかな?』
念の為の確認。通信端末越しの会話でなんとなくの察しがつき、幻騎士が無事だとい
うのは入江の方にも伝わった事だろう。

山本はすぐさま通信を取る。

「お、入江! 幻騎士は助かったぜ! 光努のおかげだ!」

『会話でなんとなくわかったけど、驚いたよ。一体どういう方法を使ったか気になるけ
ど、実は山本君にはこれから敵の大將の一人、デイジーの元へと行って欲しいんだ。綱
吉君と一緒に空中から攻める!』

「あ、武その通信機ちよおつと貸して。すぐ終わるから」

「ん? あ、ああ。いいけど、ほら」

『あれ、山本君?』

あつけらかんとごくごく自然に、横から会話を挟み込んで通信機を借りる光努。

通信機の間こうで入江の声が聞こえるが一旦無視し、カチカチと弄ったと思ったら、
すぐさま山本へと返した。

疑問符を浮かべる山本を横目にして、自身に装着した通信機を再びカチカチと弄る
と、わずかなノイズの後にクリアに音声を拾った。

「よー、正一。今から攻めるところか?」

『光努君!こつちの通信を傍受したのかい!?いったいどうやって』

「直接弄つて同期させただけだ。それよりそつちが今から狙うのは、真6弔花のデイジーの方か?」

わずか数秒でボンゴレとイリスの通信機を合わせ、入江の思考を読む光努の手腕は見事と言わざるを得ない。入江は一瞬驚くが、光努の言葉に思考を切り替え、ボンゴレ作戦参謀の顔を見せる。

『ああ。ここからだと一番近い。桔梗が囹に翻弄されている今、ミルファイオーレの兵士はいない。今なら綱吉君と山本君の二人で攻めれば敵の大將を落とせる』

「じゃ、こつちはもう一人の大將、緑鬼の方に行くか。リル、幻騎士に箱付けとけ。コードは他と同じで『C』でな」

「りようかーい♪」

「それじゃ、俺は先に行つてるぜ」

そう言うと、光努はその場で深くしゃがみ込んだ。光努にしては珍しい予備動作だが、その足先は大地を砕かんばかりに力を圧縮させ、飛び出した。

文字通りに硬いコンクリートを砕きながら弾丸よりも早く飛び出し、ビルの壁面を蹴りだし壁を駆け上がって、あつという間に高層ビルの屋上まで到達する。そのままTシューズにより宙を蹴りつけた。

その様子を驚くように見ていた山本だったが、すぐに自分も小刀を構え、雨の炎を噴き出し空へと舞い上がった。

一人残されたリルは、そんな二人の様子を眺めた後、楽しそうに割り、倒れたままの幻騎士に向き直る。

「さてと、私も仕事仕事」

「びゃくらくん！こつち絶体絶命じゃん！みんなやられちゃったし、桔梗しか残ってないじゃない！どうするのさあ！」

バタバタと、実に子供らしい仕草で叫ぶブルーベルは、隣に座る白蘭の肩をがくがくと揺らしている。白蘭本人はされるがままとははは笑っているが、手に持った袋からマシユマロがぼろぼろと零れ落ちていた。

「ねえ、びゃくらくん！」

「ははは。ブルーベルはせっかちななあ。今とつてもいいところじゃないか」

「あんなにボロボロなの？」

「幻ちゃんが生き残ったのは想定外だけど、代わりに光努君の炎が見れたしよしとしよう。あれは世界広しといえど、ここでしか見られないからねー」

くつくつくと喉を鳴らし、楽し気に笑う白蘭の姿。

白蘭にとって幻騎士が死のうが生きようが、構わず自身の中では問題は無いらしい。それよりも、先程画面に映った白い光に目を奪われた。

しかしブルーベルは、そんな白蘭の言葉にも態度にも不満があるのか、頬を膨らませて口を尖らせている。

「にゅにゅうう。ただの炎じゃない。びやくらんなら、他の世界であんなのいくらでも見た事あるんじゃないの？……ちよつとだけ、白くてきれいだったけど」

「ははは。実はそうでも無いんだよね。綱吉君も山本君も獄寺君も、あそこにいる正ちゃんも桔梗もブルーベルも、僕は他のパラレルワールドで何回も見た事がある。直接であれ間接であれ、ね。けどね、光努君は見た事が無いんだ」

「にゅにゅ？それってどういうこと？」

「つまり、真正正銘、白神光努という人物は、全てのパラレルワールド、ついでに全ての過去未来において、今この世界この時代のこの場所にしか存在していないって事」

「え、それって………なんなの？」

「なんなんだろうねえ。本当にね」

怪しく笑みを浮かべる白蘭だが、その内心では全てがわかっているわけではない。

パラレルワールドの扉を開き、可能性の力を得た白蘭でも、分からない事は探せばまだまだ存在する。だからこそ、今このチョイスが開催されているのだから。

しかしブルーベルはそんな言葉の理解が微妙に遅れたのか、分かりにくい話より今の現状を語る。

「それよりもー！もうすぐデイジー達やられちゃいそうじゃないー」

「あはは、それは大丈夫だよ。あのミルフィオーレの基地ユニットは吹き曝しで簡単な造りだけど、二つともとある機能がついているのさ」

「とある機能?」

「デイジーの基地ユニットのテーマは『守り』。チャージ蓄積した死ぬ気の炎で、外敵から身を守るバリアを作ってくれるのさ。と言っても、少しの間の足止め用だけ。そしてもう一つ、緑鬼君がいる基地ユニットのテーマは、ずばり『攻め』。見てごらん。今面白いところだからさ」

白蘭が楽し気に語ると同時に、画面に映る戦況が傾きだした。

それはまさに、白神光努が駆け抜けている映像。

そしてその最中、画面が緑色の閃光に包まれた。

ビルの屋上を駆け抜ける光努の瞳がまずとらえたのは、光だった。

自身の顔に影を作りだし、光努の周りを照らし出すような、エメラルドを砕いて散りばめたような緑色の光。発光元を探し出そうとすれば、それは案外早く見つかった。

駆け抜ける光努の真上。

太陽の光を押しつけて、弾ける様な緑色の閃光。

見覚えのあるその閃光に、いや炎に、光努は空中でTシューズにより足場を作り、跳躍してその場を90°曲がって、一気に離れた。

その瞬間、真上から襲来した閃光は先ほどまで光努がいた場所に降り注ぎ、真下のビルに穴をあける。

硬化されたビルをたやすく貫くのは、光の雨。

それも、同じ緑色の閃光を眩いばかりにまき散らす、雷の雨だった。もっと正確にいうのなら、雷の炎による無数のレーザー。

嘗てツナ達がメローネ基地で倒したデンドロ・キラムの雷砲撃とは比べ物にならない程強力な攻撃。おそらく、当たればただでは済まないだろう。

次第に、ビルの上階はたやすく吹き飛ばされ、風が吹く事になる。

その映像に、観覧席のメンバーは各々驚きの声を上げる。

「な、なんですか!?!今の攻撃は!」

「上空からの雷の炎によるレーザー? 消去法で行くのなら、今の炎はガロファーン隊の

大将、緑鬼の攻撃って事になるな」

バジルの驚きに推測を述べるデイナー。

今回のミルファイオーレチームのメンバー全員と照らせば、雷のメンバーは一人しか存

在しない。それが、チームガロファーン隊の標的、ターゲット緑鬼。

無論可能性を挙げれば他のデイジーや桔梗が雷の炎を使ったかもというのはあるかもしれないが、そんなことは推測するまでもなく低い可能性なので余裕で却下する。しかし不可解なのは、光殿周りに敵影らしきものが見当たらないという事。敵は一体どこから攻撃したことになるのか。

「敵の大将の位置は動いていないな。最初の場所からは一步も離れてないな」

ソファで寝転びながら、手元の端末を弄るルイが報告をする。

戦場で使われているのと同種のタイプのレーダーを携帯しているのだろう。すでに

これまでの戦闘で入江同様、どの炎反応が誰の物かはすでに全て把握している。それによれば、今この時点で攻撃犯人と思われる緑鬼の位置は、最初の基地ユニットから移動をしていない。

つまり、ルイの持つレーダーが確かなら、およそ3キロ先から光努に向かって砲撃を放った事になる。

「そんな距離から、攻撃か可能なのですか!？」

「う、お、おい！ヴァリアー^ちでも難しいぞおそれは。ボスの射程だってせいぜいが数十メートルぐらいだからなあ。できるのは、考魔の狙撃だなあ」

その時、空気を読んだかの如くタイミングで、画面の一つが切り替わり別の映像が映し出される。

それは一つの基地の映像。

シンプルな構造から突き出した無数の砲台。備え付けられた無数の弾頭。

その形は確かに、兵器と呼ぶに相応しかった。

「な、なんだあれは!？」

「まるで要塞だな」

リボーンの言葉通りに、それは要塞。

ただ普通の要塞と異なるのは、防御という存在を一切無視した、超攻撃型の要塞。

攻撃は最大の防御。無数の砲台に囲まれるようにして中央の台座に座っているのは、通称緑鬼。しかしその顔から鬼の面は外れ、本来の顔がさらけ出されていた。

まだ幼さの残る、およそ中高生くらいの少年は、ビル風に吹かれ銀色の髪を揺らしている。自身の周りに展開させた、空間に投影したのスクリーンを無数に操作し、そのエメラルドのような瞳に映るは、どこか遠くの虚空を見つめているかのようだった。

「イリスファアミリー標的ターゲット、白神光努を補足。これより殲滅する。雷エレクトリック・フォルトツツアの要塞、起動」
 ぼつりとつぶやかれた言葉と同時に右手を操作すると、突き出した砲台の一つの角度が修正される。レーダ上に映る光努を狙って、砲台の中からぱりつと漏れ出す雷の炎。閃光をため込み、一瞬の間に膨れ上がって外へと飛び出した。

ドオオオ!!

抑えられても漏れ出す激しい発射音。おそらく半径5キロ圏内にいけば聞こえていたであろう爆音を響かせ、雷の閃光はビルの隙間を抜けて上空へと躍り出る。

上空へから一際閃光と共に折れ曲がり、ビルの上を飛ぶ光努に向かつて、鉄槌のような砲撃が振り下ろされた。

「確かに威力は高そうだが、そんな分かりやすい奴には、そう簡単に当たってやらないぜ

？」

足元のビルを蹴り、一足で道路を挟み隣のビルへと飛び移る。

着地すると同時に光が降り注ぎ、先ほどの足場のビルのおよそ上から4階は倒壊した。

当たればただでばすまないであろう威力。

しかし光努にとっては、躲す事など造作もなかった。

大振りの攻撃に予備動作が大きいように、強大な砲撃は激しい閃光を纏い光を空に映し出す。それは敵にとっては、とても分かりやすい攻撃の合図。

確かに威力と範囲は広いが、分かる攻撃なら光を確認してからでも、そこそこ反射神経が高く機動力のある者であれば、避ける事はたやすかった。

光努は同じように、再び情報から振り下ろされる雷の砲撃を躲そうとした瞬間、微かに音を拾った。

(この音は………何かが崩れる音?)

驚異的な光努の聴覚が、コンクリート、おそらくフィールドのどこかのビルであろうが崩れる音を聞いたが、それでも躲すという選択は変わらない。が、すぐにその音源の場所が分かった。

地面現れた、別の雷の砲撃によって。

「!? うおつとー」

咄嗟に、体を逸らして砲撃、雷のレーザーを躲す。

流星に上からと見せかけて下からの攻撃に光努も少し驚いたのだろう。

先程光努の聞いた崩れる音は、下から打ち出されたレーザーがビルの壁を砕く音。

しかし、それでも不意のレーザーを躲すのは流星の一言だが、上空から落ちてくる砲撃はまだ健在だ。

仰向けのような体制で空からふる光に包まれた雷の炎を見て、光努が思った感想は。「あ、綺麗だな」

ドゴオオオオ!!

激しい粉塵を放ちながら、高層ビルの一つが吹き飛んだ。

「な、なんですか！あの馬鹿げた砲撃は！」

「ビルの一つが吹き飛びました！」

「あれは、エレットウリコ・フォルテツア雷の要塞」

驚く面々にぽつりとつぶやいたのは、ルイ。

その表情はルイにしては珍しく、少々驚いたといった表情だった。

いち早く反応したのはリボンだった。

「ルイ、知ってるのか？」

「正一からもらったミルファイオーレの匣資料を見ていた時に見かけた開発中の兵器だったはずだ。まあ、何年も前のだから今できている事には驚きはしないが、あんなのを操縦できる奴がいるつてのが驚きだな」

「どういふことだ？」

「コストがかいんだよ。製造コストもそうだが、使用コスト、炎の量がな。本来なら動かすのに1000万FVは軽く必要だ」

軽く言うその言葉に、バジル達一同は驚愕に表情を染める。

超長距離移動手段の超炎リング転送装置でさえ、500万FVあれば片道だが動かせるというのに、それより軽く倍は必要だという。馬鹿げた話だが、事実目の前には使用した映像が流れている。

「ミルフィオーレで開発中のこいつは要塞の名の通り、普通なら数十人単位で操作するのを前提とした兵器だ。一人で動かす事は想定されていない」

「しかしルイ殿！あの緑鬼は一人で操作しています！」

「それだけ、あいつが化け物だってこつたな」

リボーンの言葉を事実通りに受け止めるなら、通称緑鬼は、一人でボンゴレファミリー守護者全員に匹敵する炎圧を誇る事になる。

そこから生まれる強力な砲撃の数々、間違いなく大量破壊兵器と呼ぶにふさわしい。「予定では、超炎リング転送装置を使って戦場に投下して、辺りを殲滅する。っていう事をやるつもりだったみたいだけどな」

一番のネックである持ち運びという点も、匣技術が流用化されて簡易的になったが巨大な物もまだ多く、そんなものでも一瞬で長距離に移動できるなら、確かに有利この上なく、容易な大量破壊が実現する。

「白蘭も恐ろしい事を考えるな」

「それに、3Dレーダー追跡、光弩のマーカ―信号キャッチ、追尾、本来殲滅目的のあの兵器が一人に向けられるとか、本当に馬鹿げた話だ」

「そんな事、大丈夫なんですか!?!」

「ま、勝機が無いことも無い」

「?」

「おそらく、あの緑鬼本人は戦わないタイプだと思う。体内炎圧量は高いが個人戦闘力
はあまり高くないって奴は珍しくない。おそらくその典型だ。それにどっちにしても、
近接戦で光努に勝てるやつはそういない」

「まあ、確かに」

「う、お、おい！同感だあ、！」

ルイの言葉に、ボンゴレの中で、光努と実際に戦った事のあるバジルとスクアアロが
同意する。力、速さ、反応速度、白神光努という人物は、どれも怪物と呼ばれるレベル
だ。スクアアロは戦った時の事を思い出しのか、若干不機嫌そうな表情を見せる。

「つまり、相手に近づけば光努の勝ち、って事か」

ディーノは実にルイの言葉を分かりやすくまとめてくれた。

おそらくだが緑鬼は遠距離での攻撃方法しか持ち合わせが無い。

ならば、奴が光努を打ち落とすのが先が、光努が相手の元へとたどり着くのが先か。
大将どうしのガチンコ勝負。

「しかし、あの威力はおかしいな。先ほどと同じくらいの威力なのに、ビル一棟を破壊す
るっていうのは不可解だ」

「それに光努殿が見当たりません！っていうかさっきのは直に当たったのでは!?!」

今更ながら悠長に会話をしていたことに気づく。

光努はあの場合で上からの砲撃を避け異様とした瞬間、下から現れたもう一つの攻撃、雷のレーザーに足を止められ、そのまま上からの砲撃が振り下ろされた。結果、ビルが一棟爆発された。

しかしデイーノが不可解だといったのは、その威力。

一度目の砲撃ではビルの上からおよそ4階が吹き飛んだ。

にもかかわらず、同じような攻撃は今度は地面まで到達し、ビルを崩壊させた。同じ攻撃になぜこうまで威力に差ができてきたのか。

「それはビルの方に問題があるな。ほら、映像をしてみる。光努は無事だ」

イリスファミリーのナンバー2、黒道灯夜が言葉を紡ぐと同時に、皆が画面へと視線を集める。そしてそこには、屋上、ではなく、コンクリートの道路を疾走する光努の姿が映し出されていた。

イリスファアミリー二代目当主、白神光努は、堅い地面を蹴りだし、爆発的な速さでビルとビルの間を道路を疾走していた。

ビル一棟が崩壊した程の直撃を受けたにも拘わらず、光努の体はわずかな汚れが着いた程度であり、本人にも服装にもほとんどの無傷と言つても良かった。

観覧席にいたりボン達疑問に思っていたが、本来ビルの上階4階程しか破壊する事ができない程の威力の砲撃に対して、一棟まるまる崩壊させることができたのは、単純な話だ。

威力が足りないのであれば、対象物の強度が変われば結果は変わってくる。

光努は下からの細かいレーザーを海老ぞるように躲したと同時に、上からの追撃に対して、下へと向かった。

体を捻り、拳を打ち出し屋上を破壊し、ビルの中へと入っていった。

その後、まるで地面を突き進むモグラのように、ビルの中を階段など使わず、フロアの天井を床を連続で破壊し続け、崩壊が自身に迫る前に一階まで到達。そのまま外へとでたという、言ってしまうえば何とも単純だが、何ともでたらめだからくりだ。

到底人間技とは思えない。

まあ、今のボンゴレファアミリーならツナや山本、獄寺も同じ方法、もしくは別の回避

手段を用意できるだろう。そう考えると実に化け物じみたファミリーになりつつある、ボンゴレ10代目とその守護者達。

しかし相手もこちらに負けない怪物揃い。真6吊花に至っては白蘭直々に人間をやめている宣言をしている。一筋縄ではいかない。

「といつても、部下の方はまだ人間はやめてないみたいだけどな」

走りながらそう溢す光努の脳裏に思い出されたのは、倒した敵チームの秦捧曰。

流石ミルフィオーレでA級と呼ばれるだけあり、一般の枠を超えた存在。しかし、それと同時に一部だけ人間とは思えないような力も持っていた。

人間をやめていないが、人間らしくない部下のチーム。

そう考えると、幻騎士は人間の性能的にまだまともな部類に入るのではないかと思つたが、思想が途中で狂つたので光努はさりげなく却下するのだった。自分で治しておいて若干ひどいが、まあ事実だったのでしようがない。今は分からないが。

そうこうしている間にも、ビルを貫通するような細長い雷のレーザーが所狭しと打ち込まれており、光努に向かって吸い込まれるように打ち込まれるが、それを前々へと進み、光努は的確に躲しながら相手の元へと近づいていた。

フラインドショット
(目隠し射撃の割に精度いいな。レーザー頼りじゃこうはいかないけど、予兆があるから避けやすいな)

ビルを突き抜けて攻撃してくる為、必ず雷が見える前に建物崩壊の兆しが現れる。

と言っても、本来そんな兆しと現れる雷のレーザーに大した誤差は無いので、光努の持つ並外れた動体視力があればこそ気づけるのだが。

ふと、炎反応を感じするレーダーを確認すれば、自分と相手の位置がいつの間にか1キ口を優にきつていた。

このままいけばあと数分以内に相手の元へと辿り着くだろう。

(の、はずなんだが。なんだ、この違和感は……………)

何か見落としてないか？誰が見ても文句なしに順調なはずなのに、どこか引つかかるような感覚。

観覧席でリボンも思っていたことだが、順調すぎる、というのが違和感の起点。

そこから思考を増やしていけば、だんだんとおかしな点が浮き彫りになっていく。

(敵の大将を仕留めれば、問題ないと思うのだが……………)

流石に、大将を倒した後で、「やっぱなし」というような事は白蘭でも無いだろう。最も、実力行使でうやむやに、なんてことになったり他にも可能性はあるので絶対とも言い切れないが。

負ければ全てを失うような状況。

にもかかわらず、白蘭の表情は一ミリも崩れない。

まるで、自身が勝事を確信しているかのような佇まい。

その裏には、何が潜んでいるのか？

どす黒い思惟の渦が足元に迫るような感覚を感じながらも、光努は突き進むのだった。

「おかしい」

入江正一は、頬に冷や汗を欠きながら思考し、黒い違和感に襲われていた。

「どうした、正一。今のところ順調だと思うけど」

元ミルファイオーレ専属メカニックのスパナは、自作のスパナ型キャンディを啜えながら、カタカタと忙しくキーボードを操作している。二人とも技術者として一流の腕を持つているだけに、例え目の前にめぐるましく画面が動き手元を動かそうと、同時並列に思考も会話もできる。それでなお、手元は実に正確である。

「いや、確かに順調だが、おかしいのはそこじゃない。順調なのがおかしい。」
「?どういうこと?」

「そもそも、この戦いのルールは、二人の標的ターゲットを先に撃破した方が勝者となるチーム戦。つまり、デイズと緑鬼、そして僕と光努君の4人だ」

「まあそうだな」

このチョイスという戦いにおける根本的な基本ルール。

具体的な撃退方法は、標的となる人物の胸に設置されたマーカーから漏れる炎を消失させる事。そして消失させるには、その人物の生命エネルギーを2%以下にする。

端的に言えば気絶させたり重傷を負わせたり殺害すれば炎は消す事ができる。

死亡前提の0%にしなかったのは、戦うボンゴレ側やイリス側に対するルール上の公平さの為であろう。

「僕達ボンゴレは、まず僕のマーカーの炎を抽出してサンプリングし、デコイ罠ロボに炎データを送り、リーダー上にいくつも僕のマーカー反応を作り出し攪乱する作戦を実行し、それは成功した」

「確かに。おかげで真6吊花の桔梗は罠を破壊する為足止めが成功してる」

「まあね。それに加え、ミルフィオーレ、イリスは共に何もしていない。まあこれは圧倒的な自信の現れ、という点では両者ともに似ているからね。標的が人間離れしている

し

若干苦笑いする入江だが、スパナも全くもって否定できない。

よく知らないが、普通の人間ではない、というのだけはよくわかるという、なんとも言えない信頼だった。

「光努君だからおかしくない戦法だったけど、逆にその戦法がおかしかったんだ」

「戦法が？」

「正確には、その戦法に対する、ミルフィオーレのアクションがおかしかったんだ。具体的に言えば、ミルフィオーレ側のパフィオペデュラム隊、真6弔花達は、一度も光努君を狙っていない」

その言葉にスパナは少し目を見開くが、確かにおかしな話だ。
考えてみれば子供でも分かる。

狙いがわからない入江を狙うより、狙いが分かりやすく一人しかいない光努を狙う方が実にやりやすい。細工も何もなく、光努は単体で戦闘に出ている。

だからこそ、やろうと思えば、スタート同時に全員で総攻撃を仕掛ける、というやり方だつてできたはず。にもかかわらず、光努とまともに戦ったのは、ガロファーン隊の捧日ただ一人。アランや幻騎士はリルや山本と戦っていたのもあるし、トリカブトはツナと交戦していた為とも言える。

トリカブトが最初に入江の罠を初めて見たので翻弄され、ツナに襲撃されたのでこれ
はしようがないと言えるが、その後の桔梗の言動は不可解だ。

入江の罠が複数ある、というのが分かった時点で、桔梗は先に光努を倒す方へと行け
たはず。

戦闘タイプの光努と技術者タイプの入江と比べ、入江の方が遥かに倒しやすい、とい
う

のが理由であるのならわかる。

制限時間の無いルールであるなら、わざわざ最初に強い方を足す必要も無い。

その為、可能性の中で別段光努を責めない事に不思議も無いのだが……………。

(それにしても、真6弔花達が光努君に対して無関心すぎる。どちらにせよ倒すなら、何
かしらのアクションを起こしてもおかしくないはずだし……………)

まるで、に自分達が手を下す必要など無い、とでも言っているかのような佇まい。

(けど、あの緑鬼だけで光努君が倒せるとは思えない。それに、その緑鬼事態も、まるで
攻めるなら好きに攻めろと言わんばかりだ)

たった一人の固定砲台、緑鬼。確かに外から見れば強力無比で一人でも大丈夫のよう
に見えるが、相手が相手なだけに、この闘いにおいては無謀に見える。何か、別の思惑
が転がり込んでいるかのよう。

(くそ、一体どうなってるんだ………)

不可解な言動、不可解な行動。

いくら入江正一といえど、相手の全てを筒抜けにできるわけでは無い。

入江も光努も、奇妙な違和感を抱えながら、チヨイスは最終戦へと進む。

『災いの女神は微笑む』

光努達が未来にやってきて数日。

あつという間に始まったチヨイスは、あつという間に最終戦。

標的はボンゴレの入江正一、イリスの白神光努、ミルフィオーレのデイジーと緑鬼。

今だ現在どの標的も倒されず、倒されたのはミルフィオーレの部下のみ。

標的は二人倒されたなければならず、一人だけ倒しても無意味。

そしていくらか時間が経過して、現在の現状を語ってみよう。

光努が緑鬼と対峙している間に起こったことは大まかに二つ。

一つは、桔梗が入江の作り出した囷を全て破壊した事。

今まで破壊し続けていたのがただの遊びだったかのように、一瞬とも呼べるようなわずかな時間で、桔梗は複数あった囷を全て破壊して見せた。その為、いまリーダー上で見えている炎は入江本人の炎のみ。これにより、桔梗から入江の位置がまる分かりとなる。

無論それはボンゴレ側も同じなので、言い方は悪いがここまで戦闘に不参加だった獄寺が防衛にあたる。今回の獄寺の役割はディフェンスなので、決してさぼっていたとか敵を見つけれなかったとかそういう理由はないことを、獄寺の名誉の為に一応明記しておこう。

桔梗と獄寺が衝突するのも時間の問題となったが、他のボンゴレメンバーである山本とツナは今現状何をしているか。

二人共、共に空を飛行し、一番近いデイジーの撃破に向かっている。

光努達が緑鬼を担当するといったので、こちらは確実に倒すために二人を投入した。

しかし、途中ツナの周りを炎反応が、1.5キロという広範囲で包み込み、ツナは閉じ込められた。

原因は、トリカブトの作り出した幻覚空間。

倒す目的ではなく、閉じ込める目的。例え彗星の如きスピードだろうと切り抜けることができない霧の防御壁。強固壁なら突き破ればいいが、感覚を狂わす幻惑の壁は、ツナ自身気づかずにあらぬ方向へと誘導し、その場をぐるぐる回るように足止めした。幻覚だったのなら光努なら破る事ができたかもしれないが、もしかしたら敵はそこすら見越していたのかもしれない。

一度炎反応の消えたトリカブトが再びツナの前に現れるとは、ツナ本人も夢にも思わ

ず、幻覚という見えない攻撃をうまく喰らってしまった。

これにより、戦況は今優位な状況から、ぎりぎりの状況へと変わってしまう。

山本が標的であるデイジーを狙うが、ツナが足止めされる。

桔梗が入江を狙い、獄寺が防衛をする。

そして光努が緑鬼と戦う。

なるほど、入江が戦うことができないという事を加味すれば、この状況は優勢とはいいたい。確かにボンゴレ側とイリス側は共に兵士ユニットを失っていないが、標的を抜いた元々の戦える総数を考えると、ボンゴレ3、イリス1、ミルフィオーレ3、2という、4対5という微妙な結果。そう考えるなら、この数字がとりあえずだが、4対2まで変わった事に対して流石というべきだろう。

そしてここまで表記していなかったイリスファミリーのリルなのだが、現在進行形で光努を追いかけていた。用事が少しあったので出遅れたが、二人で標的を仕留めるのはボンゴレもイリスも同じ考えだ。

しかしながら、いまだ光努に追いつけないでいる。

二人ともツナや山本のように炎を推進力とした空中移動ができるわけでは無いが、素

の身体能力が高いのに加え、光努は怪物級の身体能力と宙を踏むTシューズを使い、リル飛翔する剣の匣を使い、二人に負けない程のスピードでの空中移動を可能にしている。

光努は敵の攻撃を避けて移動し、地面を砕き爆発させて、驚異的な速度で疾走する。その速度は、後から迫るリルを引き離すほどに。

まるでリルが来るのを拒むかのように、一人砲撃の雨をかくぐり前へと進。それでもまるで問題無いように突き進めるのが光努のすごい所だし、独断専行をするのに疑問には思わない。

しかしながら、今回チームメイトであるリルをある種無視した行動に、疑問を覚える者は少なくなかった。ボンゴレチームで言えば全体指揮をしている入江がそうだし、観覧席のリボンやディーノなど、他にも数名同じ事を思っていた。それでも明確に口に出していないのは、それに対して強いデメリットが存在しないから。

一人だと光努が勝てないかもしれない、というのは、ボンゴレ側だと少しだが、イリス側に立っては誰も思っていない。

故に、この戦況は——どこかおかしい。

イリスファアミリーによる、個人通信。

光努によってボンゴレイリス相互通信が可能となった通信機だが、個人個人で通信を行う回線をイリス側の二人は残している。

ピピ。

『あ、光努？今どの辺りにいるの？』

『標的から1キロ地点って所か』ドゴオオ！ドオオン！ドドドドドド！

『あ、そうなんだ。まあ光努も標的だけ。大丈夫そう？すごい光が見えてるけど』

『まあ確かに全部当たったら痛そうだが、避けるのは難しくないしな。多分問題ない』
キュイーン、ドオオオオン！！

『そう。こっちはだいたい終わったけど』

『そうか。とりあえずリルは標的3キロ圏内の外からこっち見ててくれ。敵の射程はだ

いたいそこらへんみたいだからな』ドン！ドン！ドン！ドン！

『うん、了解（背後の音すごいなあ……………）』

『あ、あとこっちで何かあったら、とりあえず正一の所でも行ってやれ』ドゴオオ！ドン！

『……………うん』

『じゃ、あとはまかせた。リル』

ぴ。
ぽ。

通信は、最後にそこで途切れた。

光努が緑鬼を襲撃している最中、残った兵士ユニット、ミルファイオーレパファイオペ デュラム隊の桔梗とトリカブトの二人はじりじりと迫るように、確実にボンゴレ側を追

いつめていた。

入江の作り出した囿を全て破壊し、彼の元に迫っている。

リーダー越しでもわかるような動きに、防衛する獄寺を一瞬で捌き、一気に迫る。

このチョイスという闘いのルールは、あくまで標的である入江、光努を仕留めるというこの一点に限る。その為、戦う必要のない戦いをあつさりと終わらせることができれば、その効率は格段に上がる。

桔梗の匣である雲カンパネラ・デイ・ヌーヴオラ 桔梗を気づかれないように一瞬の攻撃と共に獄寺の匣に取

り付け、増殖した桔梗の蔦で匣の炎注入部分に蓋をする。

単純だが、そうしてしまえば匣兵器を使用できず、匣兵器を使用してこそその獄寺の戦闘力は激減する。

これにより、防衛ラインをあつかりと突破した。

やはり今まで手を抜いて遊んでいたのか、と思うような桔梗の動き。

いや、事実今まで手を抜いていたのだろう。今か今かと待ち構えるギリギリのその瞬間まで、舞台を盛り上げようとするエンターテイナーのように。

しかし甘いマスクの裏に宿るのは、冷徹なる暗殺者のような顔。

破壊された基地から朦朧としながら逃げ惑う入江の姿を見る目は、氷河のように冷たい。

その瞬間同時に、ツナの炎が、トリカブトの幻覚空間を破壊した。

本来なら山本と共にデイジーを狙う作戦だったが、入江の危機はすでに通信機から聞こえていた。

入江の元へと向かう。

そう言ったツナの瞳は、強い決意の光を宿していた。

一つ気がかりなのは、光努との通信が繋がらない、という事だけだった。

通信の回線を遮断し、光努は遠くにいるリルを見るように顔を向けるが、すぐに楽し気に微かに笑い、正面へと向き直る。

(さて、リルの方は大丈夫だろう。例え攻撃が来てもあれがあれば問題は無い。それよりは……)

柔らかく、踏み砕かぬように光努は地面を歩く。

硬いコンクリートに近い材質で造られた足場を歩き、10畳程のスペースにやってきた光努は、頭を掻きながらも楽し気に笑みを浮かべ、正面を見る。多少の汚れは目立つが、傷らしい傷は一切見当たらない、無傷。

この場所までくるのに、まるで戦場かと思われるような砲撃の雨を抜けてきたが、光努にとつては避ける、受ける、流す、様々な技術を駆使し、無傷で来る事に大した問題は無かったようだ。

ようやくやってこれた事に少し喜び、口角を上げたまま口を開く。

「さてと、ようやくご対面だな、緑鬼」

ミルフィオーレガロファアノの基地ユニットで、対面する二人の標的^{ターゲット}。

イリスの白神光努と、ミルフィオーレの緑鬼。

ビルの壁面に備えられたミルフィオーレの基地ユニット。

上下左右正面に取り付けられた砲台はすべて破壊され、各種武装は全て光努の手によつて潰されていた。もはや打つ手の無い状態。

ルイの推測通り、ここまでやって来た光努が基地を破壊するのにそう時間はかからない。予想通り、緑鬼は単体じゃ戦えない。

玉座に座り無反応を貫く緑鬼の前へと立つ光努。

その顔を見たとき、光努は少し驚いたように口元を少し丸くした。

不安を塗りつぶしたような灰色の髪を垂らし、その下の表情に浮かんでいるのは無。何かを見ているようで何も見えていない、虚空を見つめる瞳には何も移さず、無感情なまでの無表情を、まだ幼い少年の姿が作り出していた。

10年後の世界では珍しいと思っていた子供、それも思ったよりも幼い、中高生くらいかと思つたら案外小中くらいと言つてもいいのではと思うような少年の顔立ちに、光努は少し驚く。

この時代の人間であれば光努より実年齢は低いだろうが、見た目だけなら二人とも似たような年齢に、中学生くらいには見えた。

あの兵器の要塞匣を操っていたのが、まさかこんな少年とは光努も思つていなかったのか少し驚愕するが、それもすぐに終わり表情を戻す。真6弔花側にはブルーベルという少女もいたのだ。今更ミルフィオーレに少年少女がいた事にはあまり驚きはしない。

しかし、攻撃手段を全て破壊して正面に現れたにもかかわらず、少年は反応らしい反応を見せずに少し俯いていた。

偽物か?とも思つたが、彼の胸のメーカーから灯る、閃光のような雷の死ぬ気の炎を見て、確かにこの人物が標的であることを確認した。

「俺は白神光努。光努とも呼んでくれ。お前は、なんて名前だ?」

自然体、しかしどんな体制からでも打ち返す自信のある光努は相手に名を訪ねた。

余裕から来る物ではなく、単なる光努の好奇心。なぜこの少年はチョイスに参加しているのか。なぜミルフィオーレにいるのか。

ツナ達のような過去から来るなど特異な状況でも無ければ、子供が戦いに参加することは、基本内。ミルフィオーレファミリーのメローネ基地でもイタリアでも、光努は子供が戦う状況を見ていない。

それだけ、死ぬ気の炎を使いこなす為となる覚悟を、そう簡単に持てないから。

なら、目の前のこの少年は、どんな覚悟でもってこの場に立っているのか。

「……………ロルフ。……………名前は、ロルフ・ミーガン」

ぼつりと、呟くようにして発せられた言葉。

少年、ロルフは、視線を合わせずに、自分の名を語った。

「なあロルフ。お前もう匣は持っていないのか？この大砲だけで終わりか？」

「終わり。白蘭様からは基地ユニットれ以外の匣は持たされてない」

基地ユニット同化型の匣兵器。

おそらく嘘は言っていない。しかしそうなると、ロルフは最初から手ぶらで戦いに臨んだ、という事になる。

「でも、もう一つあった」

そうやって、緑色の石の嵌った指輪リングをした右手を動かし、すつと差し出すようにして見せられたのは、小さな箱。

匣ではない、宝箱のように上部の丸まった形状をした、手のひらから少し零れるくらいのおおきさの、確かに箱だった。

「!?……………なんだ、これは」

複雑な文様が絡み合う形状。どう見てもただの箱にしか見えないのに、光努はどこか不思議な感覚に包まれた。ぞくりとした背筋を撫でるような凶悪な感覚と、どこかで感じた事があるような不思議な違和感。

パリイ!

その瞬間、ロルフの右手からパチリと一筋の閃光が煌めいたと思ったら、宙に線を描くように緑色の線が走り、鮮やかな雷を作り出した。その場に落雷が落ちたのかと錯覚したような強烈な光。

しかし眩い視界の中で、光努は少し目を見開いて現状起きている事に驚いた。

ロルフが自分の意志で行っている事は間違いない。

しかし右手に嵌められたリングから炎が出ていたと思ったが、よくよくと見れば、手のひらに乗せられた箱自体がわずかに白く輝き、雷の炎を放っていた。

「ロルフ、まさかそれって……………。」

「起動・ハンドラの疑似匣」
オーブン
スカートラ・デイ・バンドラ・メタ

緑色の光は次第に薄くなり、白い輝きが辺りを照らした。
光努の言葉と伸ばした腕は、吸い込まれるように光の中に消えた。

誰がこの光景を想像したのだろうか。

燃え盛る太陽のように照り付ける日輪の下、超硬化された灰色の世界で行われた戦いの行方は、遂に終わった。

崩壊する建物に囲まれて、不敵な笑みでその光景を見下ろす男。

赤黒い鮮血の絨毯に、無残に倒れ伏す男。

必死に生き延びようとする逃走の血の跡。

この姿を第三者にとってはどう見えるか、無様と言えるだろうか。

否。これは紛れもない生き延びようとする執念の証。絶望的な状況でも、決して希望を捨てない人の可能性。

だがそれをか細く小さな人の手で掴めるかは、神のみぞ知る。

そしてこの場に置いて、勝利の女神は微笑まなかつた。

極光なる神を押しのは、暗い深淵より腕を伸ばしてこちらをつかみ取ろうとする悪魔。

するりと世界へと滑り込み、無情に告げる声が灰色の街全体に響いた。

『勝者、ミルファイオーレファミリー』

未来編Ⅵ 『最終決戦』

『白と黄と橙』

元メローネ基地指揮官、入江正一の人生は、波乱万丈と言つても過言ではない。

それも本人にその意思はなく、ただただ自身の運命という道筋が、突発的な事故の連続で出来上がってしまったという、ある意味被害者のような人生。

事の発端は10年前。

当時中学生だった入江正一の元へ突如降つて来たのは、10年バズーカの弾。

マフィアとは全くの無縁であり、ごくごく平凡な、それこそリボンと出会う前の沢田綱吉のように、そこまでダメではないが実に普通の生活を送っていた入江正一。

実はツナの住む沢田家とは割と近いご近所さんだったのだが、そうそう沢田家に巻き起こる騒動が他の家に飛び火する事は無い。それはリボンも注意していたことなので、実際に沢田家居候組が大幅に街に迷惑をかけた、という事はあまり無い。

しかし、小さな小さな、それこそ火花のような災難が、入江正一を襲った。襲った、と言ってもそれは本当に小さな出来事。

ある日ランボが入江正一の家に飛び込んでしまい、それを普通に助けた。

ただ親切で子供を助けただけという、入江正一の人生に置いて大して波風を立てないような出来事。

事実、入江正一が沢田家と関わったのはそれきり。しかもランボとだけ少し会った程度であり、ツナヤリボーンとは直接的に何かをしたわけでは無い。

それ以降も何かしらの関わり合いなど無かった。

しかし、そんな入江正一の元に運命の悪戯か、一つの小包が届いた。

どういった情報網かは不明だが、現在はボンゴレに移籍したが当時ランボの所属していたボヴィーノファミリアから、ランボが迷惑をかけたお礼、という事で小包が入江正一の元へと届いた。

中にはイタリアのおいしい食材などが入っており、全くもって普通のお礼の品々に入江一家は喜んだが、それと同時に入っていた物ある。

それが、お礼と同時に入っていた、ランボ宛の小包。

渡すタイミングが無く入江の部屋に終ぞ置いたままにされていた包みだが、ひよんなことからその中身を一つ落としてしまった。

つまりは、ランボ宛てに寄こされた10年バズーカの弾。
それに被弾した入江正一は、人生初めての小さな波乱、5分間だけのタイムスリップ
を味わったのだった。

—— 1度目の。

小さな小さな、まるで箱の中のような世界。

白い白い、まるで極光の中に浮かぶ不思議な世界。

ここはどこなのだろうか、どこかなのだろうか？

ふわふわと雲の上に浮かぶような不思議な感覚。しかし硬い地面を踏み砕く様な感
覚。

まるで久しぶりに味わったような、初めて味わったような、どっちともつかない感覚。

しかしながら、深い深い記憶の海を探してみれば、この感覚に覚えがある気がする。確か前に、もつと前に、もつと前に……。

「あ、そうだ。骸に憑依された時だ」

そこで白い少年、白神光努は目を覚ました。

ただただ白い空間に立ち尽くす光努。

絹のような柔らかそうな白い髪が揺れ、その表情に映すのは楽し気な笑み。

苦笑いでも狂気に打ち震えたような笑みでなく、小さな子供のような純粋な笑み。

何もわからない。何も知らない。どうすればいいかはまだ分からない。

しかしそんな光努の心境は絶望に染まらない。

目が覚めたら世界が白く染まっていた。

そんな経験はそう多くないが、似たような経験は多い。だからか、光努はこの世界に適応し始めていた。

「ここは地球か、なんて質問は今更か。見た所何もないただ白い世界。地平線も水平線も見えず、空も地面もわからない。ただ立っているって事だけは分かる。ここは、どこだ？」

ふむ、と顎に手を当て思案するが、そう長続きはしない。

元々見たただけでおかしなところ、以外の情報が何も無い。そもそもこの世界は白いの

で、いくら周りを見渡そうが意味がない。思考すべきは、この世界にやつて来た経緯の方。

「あの匣のせいだ。……やれやれ、白蘭の事を少し甘く見ていたというか、どこを探して「アレ」の手がかりをつかんだのか。まあボンゴレの死ぬ気の炎だつて10年後にはマフィア中で広まつてるからな。広まるのはいいが見つけてくるのは問題か。それで、実際どうなのか、お前は知ってるか？ ロルフ」

「……知らない。白蘭様のする事が人に分かるわけない」

大海原のような白い世界に立ち尽くす光努の後ろで、三角座りをしながら見えない何かを見るように虚空を見つめる灰色の少年ロルフ・ミーガンは、ぼつりと呟いた。

光努はそんな少年の様子を見るに、不思議な感覚に陥る。

どうにも、感情が読めない。というより、感情を浮かべていない。

本当に、何も考えていないような、何も感じていないような。

この状況に陥った事に対して、まるで外側から映像でも見ているような気楽さ、というより蚊帳の外のような心境。危機を感じていないし、困っている様子でもない。

「お前はこの状況に不満も何も無いのか？ 俺は結構不満あるぞ。チョイスはまだ終わってない。いや、もう終わってるかもしれないな」

そういつて自身の胸をちらりとみる光努。そこには、何も無い。

この世界に來た時から、光努の胸のマーカ―は消え、死ぬ氣の炎の噴出を抑えている。それはつまり、チヨイスバトルにおいて光努の存在が除外された事を暗に意味していた。

しかしそれは、座りつくす少年ロルフも同じこと。

緑鬼事ロルフ。彼の胸に灯されたマーカ―の炎も、光努と同様に静かに沈黙していた。

「はあ。せつかく匣も作ってもらったのに悪いな。どうなったかな。勝ったか、負けたかどうか。残りの標的のデイジーはともかく、正一が先に負けたら終わるし、というか俺とロルフのは消失扱い……………に決まってるよな」

自問自答したため息をつく。

つくづく自分は、どこかに飛ばされる系の攻撃を喰らいやすいなと光努は思う。

骸の精神世界しかり今回の事もしかり。

しかし、それでも光努はさして落胆した様子は見られない。

「なあ、ロルフ。お前ってなんでミルフィオーレ入ったんだ？もともと他のマフィアで白蘭に吸収されたとか？」

「……………拾われた。路地裏で一人でうずくまっていたときに、声を掛られた」

ぽつりと、呟くように語るロルフ。

雨風にさらされた建物と建物の間の路地裏。

一人虚空を見つめ、もはやこの世界に立とうとさえ思わなかった小さな少年のもとに、傘を差した白い悪魔がやって来た。

——やあ、君がロルフ君かい？君の持つ才能を、僕の為に使ってくれないかい？

あけすけと力を貸してくれという甘い言葉。

ロルフには、その言葉の裏に隠された男の冷徹さが見えた。例えどんな手段を使おうとも、毒蛇のように必ず獲物を丸のみにせんとする醜悪さ。

人の顔色をうかがってきた少年にとって、もはやこの場で廃れようがどうなろうが構わない。しかし、どんな形であろうとも、まだ自分に必要な所があるというのであれば、動くこうと思った。

例え相手が、自分を利用するだけだとしても。

「どうせ白蘭様はこの戦いが終われば用済みにするはず。だからここにいるし、結果は変わらない。この結果に不満は無いかって聞いたよね？」

ぞつとするような、氷を正面から浴びせたような冷たい瞳と言葉。

10代の少年がだしてはいい雰囲気ではない。絶望した人間が、この世界に何の希望も見いだせない人間が持つ暗い暗い、混沌のような色だった。

取ってつけただけのような敬称に、真6吊花のような忠誠心は欠片も無かった。

「無いよ。あの世界から消え失せる。早いか遅いかの、違いだよ」

いずれ自分はいなくなる。それが早まっただけ。

だから、ロルフは何も不満など無い。

自分に対して、氷河のように冷徹に冷たく、何も思っていないのだから。

縋るような感情は無い。

自分に必要性が無いと判断したのなら、この少年は躊躇なく自身の世界を終わらせる決断を下すだろう。

だからなのか、光努は深い、深いため息を吐いた。

そして右腕を挙げたと思ったら、徐に振り下ろす。

ゴスツ！

「……………痛い」

少しの衝撃に、さするほどではないがロルフは苦言を申し立てる。

光努的にはこづく程度だったが、存外響く様な拳の振り方は見た目にそぐわずそこそこの威力があった。

「何が不満は無い、だ。不満たらたらそんな顔して。お前の場合には不満が無い、じゃなくて不満を持つ事を諦めてるだけだろ。人の原動力を全否定するなよ。好奇心がなくなれば人は停滞して退化する一方だぞ？」

ありすぎるのも問題があるのでは？

と、今はいない光努の近くのイリスファミリーの人間が言ったような気がした。

そして頭の中に現れた人影をうるさいと光努は一蹴した。

「しかし白いな、周り。何も無いし、そろそろ出たくなくなったな」

「……無理だよ。この世界は壊れない。神様が作ったこの世界は、誰にも壊せない。白蘭様はそう言ってたよ」

神様、という単語に、光努は楽し気に口元を歪めた。その変化に疑問を持ったのか、口ルフはわずかに眉を寄せた。

出られない、そう言った直後にする人間の表情ではない。

その表情に映すのは、希望——ではない。

ただの好奇心。これから起こる事が楽しみでしようがないというような、無邪気な子供のような、悪戯を思いついたような、口ルフにとって不可解な表情。

何を考えているのか、少年には読めない。

不意に、光努は星でも見上げるかのように、天を仰いだ。この白い世界で天地が存在するかどうか疑問の余地があるが、まるで何かに惹かれるようにして、光努はそこを見つめる。

「あれは、光？」

見えるはずのない光。

危険な感覚は光努は感じない。まるで、こちらを呼んでいるかのように、道標を誰かが残してくれたかのような、不思議な光。光努はその光を見て、楽し気に笑みを浮かべた。

「なあロルフ、賭けようぜ？」

「賭ける？何を言い出すのかと思えば。この何も無い世界では賭け金も景品も何も無い。無駄な事を言いたいです」

不満も興味も無い、しかし光努の言葉には答えてくれる。

まるでプログラミングされたロボットの様に。

鉄仮面を崩さないロルフに害した様子など無く、光努は口角を歪めて、再び無邪気に笑った。

「賭けようぜ、俺とお前の人生」

「……………」

その言葉に、ロルフに感じなかった感情の波が、わずかに見え隠れしたような気がした。

1度目のタイムスリップの時、入江正一は白蘭と出会った。

順当に歴史が進めば入江が到達したであろう、広いアメリカの大学のキャンパス。

しかしその頃の白蘭は、言ってしまえば普通だった。

特筆すべき特徴が無く、ただただ入江と出会っただけ。

白蘭からすれば、本来いるであろう10年後の入江より幼い入江を見て、本人の弟と勘違いしたらしいが。

なんてことはない、5分間だけの小さな夢のような未来旅行。

白昼夢かと思ったが、確かに入江は理解した。自分がタイムスリップしたという事を。

しかしその結果に、入江は不満だった。

夢を見る年頃の中学生。

10年後の本人を見ると考えられないが、当時の入江正一は将来、ミュージシャンになりたかった。その為、入江は教科書を全て燃やし進路調査に「ミュージシャンになれ

なきや死んでやる！」と記載するという、実に若氣の至り溢れる強硬策に出た。

それが実際に実を結ぶかは定かではないが、入江の作戦は成功した。

2度目のタイムスリップをした時、入江は大学にはいなかった。

確かにミュージシャンになっていた。外国の小さな町中で演奏をしていた。

しかし、金銭のトラブルを抱えてギャングに追われているという、少年が思い描いた

未来とはかけ離れたどろどろとした光景だった。

当然ながら、そんな光景を許せるはずがない。

夢中で逃げ出した入江正一の元に、再び偶然が降りかかった。

白髪青年、白蘭との出会い。

可能性の世界なのではないとは言えない。

だが、本来ならありえない幾兆分の1という確率の偶然が重なり、その後の入江の人生を変える事となる。

——君とはどこかで会った事がある………違う場所………違う世界で！

本人も自分の言葉が信じられないのか驚いたように、虚ろのように言葉を紡ぎ出す。

入江にとって、この世界における白蘭との邂逅は初めて。知り合いではないのだから

あつたばかりの入江の事を知るはずが無い。

しかし、次の言葉に入江は愕然とする。

——場所は……大……学。君の名は……イ……リ……エ。

驚きではなく、ぞわりと精神を逆なでするような恐怖が入江の全身を駆け巡った。知らない自分を知る知らない男。

これが、入江の2度目のタイムトラベルの顛末。

この出来事がきっかけに、白蘭は自分に秘められた能力に気が付く。

己が可能性の世界であるパラレルワールドを覗き、その知識を得るといふ、常人とはかけ離れた力。

それを正しいことに使えば世界は何世代も発展するかもしれないが、白蘭は自身の目的の為、世界征服に利用した。

あつという間の出来事。

入江はそれ以降何度タイムトラベルをしても、白蘭に支配された世界しか見ることができなかつた。

最強の兵器、最高の医術、最大の情報。

時代における最先端の技術を独占できるのなら、この世界を支配することも難しくない。

だからこそ、入江は自分の力ではなく、過去の人間の力を借りるといふ方法でしか、白蘭の支配を解ける可能性を見つけてる事が出来なかつた。

つまりは、ボンゴレリングと、フィオーレリング。

それに、この世界は他のパラレルワールドとは違って、すべてが白蘭の支配下となつていない世界。

過去入江とツナが唯一接点を持ち、奇跡的にボンゴレ匣が生み出される世界。だからこそ、入江はこの世界に賭けた。

もう一つの可能性は、白神光努とフィオーレリングの存在。

既に他のパラレルワールドでは最も早く白蘭が手にしたフィオーレリングと白いおしやぶりの二つを、この世界ではいまだ見つけられないでいる。

入江の計算した7兆9千9百9十9億9千9百9十9万9千9百9十9のパラレルワールドには存在しない、もう一つの特異点。

だからこそ、この世界に賭けた。

白蘭を唯一倒せる可能性として、入江は。

10年前の過去のわずかな情報でも、圧倒的な怪物として語られる白神光努を。

そして1番成長率があり、1番の可能性を秘めていた、沢田綱吉を。

小さな鼓動を打つ、今まで語る事を伏せていた入江の独白を聞いて、ツナの心情は悲

壮

感に包まれた。

選ばれた時代と、選ばれたツナ達。

「負けちゃった。そんな……そんな大きな意味があるなんて知らず……」

「そ、君たちの負け♪僕のこんなによくわかつてるのに、残念だったね正チャン」

倒れた入江を開放するツナ達の前に現れたのは、白蘭。

この日の為にデザインしたお揃いの隊服を揺らし、その表情は楽し気に笑っている。

まるで当然の結果と言わんばかりに。

既にボンゴレ側、イリス側もフィールドに集まり、チョイスが確実に終了した事を知らせる。桔梗により命の炎を摘み取られた入江正一は、一命はとりとめたが荒い息と少なくない血液を流し、横たわっている。

山本はデイジーを同じように殺さないまでも、ターゲットマーカが消える程には仕留めたが、デイジーは死ねない^{アンデットボディ}不死身の肉体を宿しているという馬鹿げた理論を振り

かざし、ターゲットマークカーは蘇生した。

コンマのズレも無く、同時同着と思われた結果は、ボンゴレ側・イリス側の敗北で勝敗が付いた。

白神光努と緑鬼こと、ロルフ・ミーガンの二人は、ターゲットマークカー事レーダーから消失した。

「白蘭さん……光努君は……どうしたんですか……」

息切れに、皆が質問しようとしていたことを聞く正一。

その言葉に、一層楽し気に口角が歪められた白蘭は、楽し気に笑う。

「ああ、彼らね。一番面倒そうなのが一角が歪められた白蘭は、楽し気に笑うよ。あ、言っておくけど彼らが生きていようがどうだろうが、フィールドからターゲットトマークカーが消えたから、君たちの敗北は覆らない。トリカブト」

サラサラと砂が集まってくるかのように、何も無い空間から現れたのは幻覚の巨人トリカブト。静かに幽鬼のように佇むトリカブトの手の平の上には、宝箱のような形状の小箱乗せられていた。

緑鬼、ロルフが持っていた物。

光努達が消えた後に残されていた、箱だった。

「これを作るのに苦労したよ。何せ情報がほとんどなかったからね」

「まさか……！白蘭さん、それは……」

「パンドラの匣、か」

「灯夜さん！」

入江の言葉に繋いだのは、黒道灯夜。

黒スーツを着たイリスファミリーボス代理のナンバー2。

黒髪を揺らし、同色の闇のような黒い瞳を鋭く細め、トリカブトの手の箱を威圧的に睨んでいた。

「白蘭、その情報をどこで見つけた？」

「やだなあ。イリスの黒道灯夜。君くらい僕の事を知っているなら、簡単でしょ？」

にやりと笑う白蘭は、悪戯をした子供のような顔。

確かに、入江の話聞いた今、ツナ達もわかる事。

つまり、パラレルワールドの知識。

この時代の接点が無くとも、並行世界での経験を生かせば、不可能と思われるいくつかの事象を可能にできる。それが、白蘭の能力。

「なありボーン。パンドラの匣って？」

「神話で、パンドラつつー女が好奇心から開いた、神々が災いを詰めた箱の事だ。それにより世界に災いが蔓延したが、箱の中にはわずかな希望が残っていたって話だ」

「けど、それってつまりおとき話みたいな物だろ!? でもあいつの持つてるのは——」
 (おそらく、あれがイリスの神器……………)

ツナの疑問に答えたりボーン。

リボーン本人もあまり見た事が無いが、そこにあるだけで空間を削り取るような異質な感覚を、似たような感覚を浴びた事がある。イリスにある、他の神器とその所有者に。「ねえ灯夜、ターゲットメーカーが消えた時点で負けなら後で蘇生しようがその時点で全員同一で消えたんだから引き分けになったりしないの?」

「リル、お前身もふたもない事を言——っ!」
 「ま、どつちでもいいけどね」

若干灯夜と他数人も思った事だが理に適っているような理にかなっていない微妙な理論。しかしその言葉にコメントした灯夜の言葉は、彼女の表情を見て途中で詰まる。

何時も快活なリルの瞳は座り、明らかに異常な無表情をこの場でも貫いている。

様子がどう見てもおかしい。まあ灯夜にとっては、その理由はだいたいわかるのだが。

何も持たない左手を持ち上げようとして、灯夜に肩を掴まれ止まった。

「それは今はやめろ、リル。お前もだ、コル」

「……………」

同時に、反対の手で肩を掴み抑制する。

隣のコルも、リル同様に、この結果に不満と怒りと、複雑に感情を歪ませているらしい。リル同様に腰の刀に手を伸ばしたのを、止められた。

少し不満げに、二人の姉弟は灯夜を睨むが、渋々と従う。

二人も、灯夜の真意を測りかねている。

この結果に対して、何か思う所があるのか。

そして現在の、光努の行方、つまりは、あのパンドラの匣に対しても。

「さてと、約束通りボンゴリングとフィオーレ、ああ、もうフィオーレリングは頂いてるね。本人付だけど。後はハクリ君のおしやぶりだね。君たちは、どーしようかなー」
「待ってください、約束なら僕らにもあったはずだ……。覚えていますよね？ 大学時代僕とあなたがやった最後のチョイスで僕が勝った……。だが支払う物がなくなっただあなたは言った。「次にチョイスをするときは、ハンデとして好きな条件を飲んであげる」と」

奥の手と言わんばかりの入江が切ってきた言葉。

虚ろな瞳の中でも、入江の中にはまだ希望の光が燦つている。

「僕はそれを今執行します。僕は、チョイスの再戦を希望する!!」

「悪いけど、そんな話覚えてないなあ」

「なっー！」

間髪入れずに入江の話を否定した白蘭は、裁判の判決を下す閻魔の様だ。

おそらくこの状況で嘘でもはったりでもない入江の言葉だったが、無情にも白蘭は知らないと言定した。

入江が過ごした白蘭という人間は、チョイスという戦いにおいては誠実だったと彼は語る。

おそらく大学時代の数々のチョイスの対戦がそうであつたのだろう。無邪気に遊ぶような子供の様にして、何をしてよいかの区分はきつちりと分ける。そうでないと、ゲームが楽しめないだろうから。

しかし、今の白蘭は笑いながら、倒れている入江を無情に見下ろす。

食い下がる入江の言葉に対しても、ムシが良すぎる、無い話は受けれない。そういつて言葉を取らない。

確かに、今この場で証拠が提示できるわけでもない。

記憶頼りの口約束。入江は記憶の中でしか突破口を見いだせなかつたが、その約束はバツサリと斬り捨てられる。

無い話は受けれない。

この状況なら入江が嘘を言っていないという事はおそらく誰でもわかるだろう。

しかし、白蘭の言葉に対して反論し、入江の言葉に正当性を持たせる術を、彼らは持つていなかった。

こういわれてしまえば、入江も黙る事しかできない。

「無い話を受けれられない。ミルフィオーレのボスとして、正式にお断り♪」

「私は反対です、白蘭」

余裕たっぷりに入江の奥の手を、粉々に粉碎した白蘭に間髪入れずかけられた声に、その場の全員が驚く。

イリスでもボンゴレでも、ましてや真6吊花でもない第三者ならぬ第四者の声。

柔かい鈴を鳴らしたように響く声色は少女の声。

威風堂々たる歩を進める人物の姿があらわになると同時に光が二つ生まれた。

リボーンを持つ黄色いおしやぶりと、ハクリの持つ白いおしやぶりと。

このおしやぶりが光る条件は、他のアルコバレーノとの共鳴。

何も恐れる事の無いような、柔らかな微笑みと共に現れるまだ10代と思われる少女。

自身のマフィアの伝統ある白い帽子とマントを羽織り、左目の下の五弁花と共にその姿を見せた。

首から下げられた、暖かい光を放つ橙のおしやぶりと共に。

「ミルフィオーレブラックスペルのボスである私にも、決定権の半分はあるはずですよ」
黒髪を揺らし、すべてを見通したような瞳。

幼さの残るあどけない顔立ちとは裏腹に悠然と歩くその姿は、まさに一つの組織の長に立つにふさわしい風格が見て取れた。

だがその姿に、白蘭は苦虫をかみつぶしたような表情でじろりとにらむ。

「ユニ……………貴様……………」

初めてかもしれない。

余裕綽々だった白蘭の表情を歪ませて、わずかに焦りを齎したのは。

『アルコバレーノの特異点』

ユニという少女の肩書はいくつかある。

元ジツリヨネロファミリーボスにして、ミルフィオーレブラックスペルのボス。

リボーンとも面識があり、おじ様と慕う7^{トウリニセツテ}を管理するアルコバレーノのボス、大空のアルコバレーノ。

これらは全て、前任者の母であるアリアより受け継いだもの。

その重圧に負けず、一組織の長であろうと、全てを包み込む大空であろうとして奮闘した。彼女の手柄から魅力なのか、最初は反対していたγも心を許し、ユニという少女は、確かにジツリヨネロファミリーの中心となりうる器を有していた。

しかしその精神は、白蘭の手によって壊された。

精神安定剤、といえば聞こえはいいが、用は劇薬、毒物だ。

ミルフィオーレ結成前のユニ率いるジツリヨネロファミリーと白蘭率いるジェツソファミリーのボス同士の会談において、守護者抜きのみ二人だけの場で白蘭はユニに劇薬

を投与し、入江曰く精神を壊されていた。それにより二つのマフィアは統合されて、ミルフィオーレファミリーが誕生した。

いふなれば、ユニは白蘭の操り人形にされていた。

しかし、今日の前に立つユニの姿は、感情を表に表す生きた人間の証。

入江もユニが自ら口を開く姿を初めてみたのか、暖かな光と炎を宿した、堂々たる姿に驚きを顕わにする。

全てを見通すようなその瞳には決意と覚悟を宿し、白蘭の支配下を終わらせようとする考えは、入江と同じだった。

ユニは自らその口を開き、考え抜いた結論を白蘭に告げる。

「入江さんと白蘭の間の約束は本当にあった事。しかしそれを反故にするのでしたら、私は、ミルフィオーレファミリーを脱会します」

『!』

いきなり現れたブラックスペルのボスに、ミルフィオーレファミリーの脱会。

ユニという少女の事を知らない者からしてみれば、一体どういう状況なのかまるで意味が分からなかった。

さらには、ボンゴレ、イリスの二人に助けを求めてきた。

いくら大空のアルコバレーノと言えど、その肉体は普通の少女に過ぎない。暴力的手

段を使われたら、赤子の手を捻るように捕まってしまうは自明の理。

ユニが助けを求めたのは、自身の身柄と、仲間のおしやぶり。

この時代において殺され、白蘭の元へと集められた、アルコバレーノ達のおしやぶり。それを手にしたとき、ユニは一際おしやぶりに輝きを灯した。

いくら白蘭が他のパラレルワールドで集めようとも、決して灯せることのなかった輝きを。眩いばかりに照らされた虹の輝き。

その輝きを見たとき、明らかに白蘭の瞳の色が変わった。

「やはり僕には君が必要だ！ さあ、仲直りしようユニちゃん！」

「こないで！ もうあなたに、私達の魂を預けるわけにはいきません」

頑なに白蘭を否定するユニだが、そんなことはお構いなしだった。

細められた白蘭の瞳は、本気の瞳。どこに逃げようとも、地の果てでも追いかけて自身の目的を果たそうとする。

貪欲に、アルコバレーノのおしやぶりとユニの魂を手に入れようと、手を伸ばす。

ズガアアン!!

「リポーン！」

「おじ様ー」

静寂を切り裂く様な一際強い銃声の音。

わずかに目を細めた白蘭は、伸ばした自身の袖口に、小さく丸く削り取られた焦げ跡を見た。アルコバレーノ、リボーンによる早打ち。

一瞬の間も無く、いつ銃を抜いたかも分からないコンマの間に、リボーンは牽制の一発を放った。その表情には影を照らし、ひょうきんな雰囲気は消え失せていた。

「凶にのんなよ白蘭。てめーが誰でどんな状況だろうと、アルコバレーノのボスに手はだすんなら、俺が黙っちゃいねーぞ」

明らかに殺気の込められたリボーンの視線と言葉。

最も、リボーンの言動よりも、ツナはユニがアルコバレーノのボスだという事に驚いていたが。

「ナイト気取りかい？ 〃アルコバレーノ 虹の赤ん坊〃 リボーン」

「白蘭様、ご安心ください。ユニ様は我々がすぐにお連れします」

瞬間、その場を飛び上がった桔梗は、攻撃性のある雲 カンパネラ・デイ・スノウオーラ 桔梗を一度に複数本、あくまで傷を付けない牽制や捕獲の意味合いを込めて投げつけた。

無論、それを見て黙っている者達ではない。それも、比較的好戦的なスクアークと雲雀は、我真つ先に戦闘だと言わんばかりに飛び出そうとしたが、直前で思いとどまった。

桔梗の投げた雲の炎を纏われた、カンパネラ、デイ・スーヴオラ雲 桔 梗が、ユニの元へと向かう途中で突如、その勢いを消して、同時に炎をも消しながら地面へとほとりと落ちたから。

「これは……」

まるで見えない手に握りつぶされたような手品のような手口。

攻撃を行った桔梗も何が起こったか分からずに涼し気な笑みを少し響めて驚愕を表した。

「桔梗の花言葉は『気品』『従順』『誠実』。『気品』はあると思うけど、従える相手が相手だけに、まさに悪に『従順』で『誠実』、だね」

いつの間にか、幽霊のようにその場に立っていた事に気づいたのは何人いたのだろうか。

太陽の光を吸い込み反射させる銀白色の髪を揺らし、幼い風体からは想像もつかない存在感を発する少年。黄金色の満月を詰め込んだような金色の瞳でもって、まるで天上からすべてを見通すように、この場の全員を視界に納めていた。

その胸元には白いおしやぶりが、アルトラドゥエアルコバレーノの特異点が光を帯びていた。

「あれ、意外だな。君もナイトかい？ + 2の片割れ、白いおしやぶりのアルコバレーノ、ハクリ君」

「いやあ、せっかくだしそれらしいことしようかと。それにこの世界における7トウリニセツテ・バ

ランスは大いに崩壊気味じゃないか。俺が今更何をしても、誰も文句言わないでしょ」

この場にはいない白い少年のように、楽し気な笑みを浮かべるハクリ。

相対する白蘭も似たような表情だが、その瞳は鋭く威圧的に睨んでいた。

「あなたが、アルトラドゥエ 2の一角、ハクリ！」

「やあ、ユニだったね。初めましてだけど、やはりよく似ているね。それよりイリスの皆が聞きたがつてるんだけど、光努君が今どうしているかどうか、君はだいたいわかっているんじゃないかい？」

「光努が無事か分かるの!？」

ハクリの言葉にいち早く反応したのは、リルとコルの二人。

一瞬の間にユニに詰め寄ろうとしたが、その寸前で灯夜に首根っこを掴まれたので、ひっぱられたのは言うまでもない。その光景に、ユニ本人は少々苦笑気味だったので、一瞬だけ空気が緩んだ気がした。

しかし一転して、真剣身を帯びた瞳に切り替える。

「フィオーレリングの継承者、白神光努さんは無事です。今はこの世界とは切り離された別の世界に飛ばされているので、おそらく戻ってくるのに少々時間が掛かると思いますが」

その言葉に、ほっと安堵の域を吐くリルとコル。

表面には出さないが、灯夜とルイの二人も同じ面持ちだろう。横やりがいくつも入ったが、光努の事に関しては聞きたい事が多かったので、ハクリに対して心の中で賞賛を送るのであった。

しかし、その言葉に対して笑みを崩さず、疑問を投げかける人物が一人。

「なぜそんなことがわかるんだい？ ユニちゃん。君は光努君と会ったことも無ければ見た事もない。その話にはなんの信憑性も無いよ？」

白蘭の言葉も最もだ。

10年前の時点での接点も無く、未来に来てから光努が一人だけで動いた事はメローネ基地とチヨイスの戦いの時だけ。その中で、ミルフィオーレブラックスペルボスであるユニと接触機会は0だ。信憑性は無いと語る白蘭の言葉。

だがユニが語る言葉は多くない。しかし白蘭にとって確信を着く様な言葉を、毅然と語った。

「白蘭、私もあなたと同じように、別の世界へと翔べるようです」

「!!」

その言葉に白蘭を初めとして、多くの者が驚愕に表情を染める。

決してはったりでも誇張でもない。その言葉を語る口に震えは無く、その瞳に揺らぎは無い。毅然とした表情で語るその少女は、アルコバレーノのボス、大空のアルコバ

レーノ。

「保証してあげようか？ ユニ。まあそんな必要ないのは分かり切ってるから聞くのは時間無駄だと思うけどね。だろ？ 白蘭」

「ふうん。僕の事分かつてるみたいじゃない、ハクリ君。なら、この後僕が何をしようとしてるかもわかるんじゃない？」

「チョイス勝利の景品、ボンゴレリングの徴収、かい？」

「それに、君の白いおしやぶりもつけてもらうよ♪残った者達には、トゥリニセツテアルトラドゥエ 7・²と+ 2を回収したら消えてもらおうかな♪ま、その前にユニちゃんはこっちに戻ってきてもらうけどね」

微笑みのまま、絶望を宣言する悪魔の言葉。

全てをどす黒い欲望で包み込もうとする白蘭。

だが、深い闇を突き刺すように、光を灯す。ユニはその言葉に、屈しなかった。

「ボンゴレリング、フィオーレリングは、あなたの者じゃないです、白蘭」

「ん？」

「ボンゴレリングはボンゴレファミリーの物。おしやぶりはアルコバレーノの物。それは真理です。それを、あなたは安易に手に入れるために景品としてチョイスを開催した。私の魂がある限り、トゥリニセツテ 7・²の一角である大空のアルコバレーノとして此度のチョイ

スは認めません」

確固たる意志を秘めた言葉。誰にも覆すことは許されない世界の理。それが真理。

それを捻じ曲げることは許されない。

「よつて、チョイスは無効とします！」

ユニはチョイスの結果を無効とし、ボンゴレとイリスの元へと身を寄せる決断を下した。白蘭の手段は邪道。正当なる手順など必要とせず、人間同士の考えだけで所有権の移動を行う賭け。

一見ルールという枠で縛り正当性を出したように見えた勝負だが、世界の至宝たる

トウリニセツテ

7・の決定権を決める権限は、ツナにも白蘭にもなかった。故に、ユニは大空のアルコ

トウリニセツテ

「7・は選ばれたファミリーの物。そして+

アルトラドゥエ

2は人が選べる物ではありません。あ

れは、そうであるべき物なのだから」

「ちよ、ちよつと待つて……無効つて事は……」

「ボンゴレとイリスの皆さんは、ボンゴレリング、ファイオーレリング、そしておしやぶりを渡さなくていいんです」

「プ、ハハハハ」

自分が不利になるような宣言をされたにも拘わらず、白蘭は心底おかしそうに笑う。

何がそんなにおかしいのか。しかし白蘭は、ユニという少女を知っているからこそおかしいと思える事だつてある。

「確かに、大空のアルコバレーノには7・トウリニセツテの運用に関して特権が与えられてるらしいけど、僕を怒らせるのはどうかと思うよ？ボスのユニちゃんが裏切つたとして、残されたブラックスペルがどうなつてもいいのかい？」

足元から迫るような凶悪な言葉。

ユニがボスであるブラックスペル事、ジツリヨネロファミリーの者達は、ユニを敬愛している。それはミルフィオーレとなつた今でも変わらない。故に、過去吸収合併のいざござがあつたブラックスペルと白蘭率いるホワイトスペルは今でも不仲だつた。

だからこそ、白蘭の人質宣言はユニに精神的なダメージを与えるのに適している。

ユニという少女は穏やかに、底抜けに優しい少女。

彼女を慕うジツリヨネロファミリーの人間達を、彼女を見殺しにできない。

そう思つての白蘭の言葉だが、ユニの言葉は逆だつた。

「みんなは、分かつてくれます」

仲間を見殺しにするような発言に、ツナは驚愕する。

しかし、皆がツナと同じような反応をしてはいなかつた。

そうしなければならぬ理由。

ユニという少女が、何を思い何を考え、この決断を下したのか。苦渋の決断だったのだろう。

だがそれでも、この世界の理を守るために、彼女は今この場に立つ道を選んだ。

それを理解しているからこそ、イリスの灯夜もルイもルルもコルも、彼女を守るという選択肢に異論はなかった。

後は、ボンゴレファミリー10代目、沢田綱吉の決断。

(あの目、この子………覚悟してる………こうなるって分かってたんだ)

それはボンゴレに伝わる超直感なのか、ツナの人の気持ちを労わる優しさなのか。

ユニの瞳に宿る深い悲しみと、強い覚悟を、ツナは感じた。

庇うようにユニの腕を掴んで、ツナも覚悟を決めた表情で言葉を紡ぐ。

「来るんだ！俺たちと一緒に！みんな、この子を守ろう！」

「ツナ君！」

「ツナさん！」

「よし！よく言った！」

「ああ！」

「ハイッ！」

ツナの呼びかけに、固唾を飲んで見守っていた守護者達も満場一致の同意を示す。

次第に、ミルフィオーレから不穏な空気が漏れてきた。

「白蘭様、ユニ様を連れ戻す為の攻撃許可を」

「……………うん」

白蘭の言葉を皮切りに、鬨いの火蓋が切られた。

交戦許可を取った桔梗に向かって、刃状の爆発物質を飛ばし、爆炎と共に雨の炎を纏った、凶悪な面持ちの生物。スクアアローの匣兵器である海のギャング、スクアアロー・グランデ・レネツジャ 暴 雨 鮫 だった。それと同時に、鮫の背に乗っていたスクアアローが、上空にいた桔梗、トリカブト、ザクロに向かって斬りかかった。

一気に始まる攻防。単純な戦闘力だけならわからないが、この場を撤退する意志で統一したボンゴレ、イリス勢からしたらあながち不利でもない。

白蘭はユニという少女を無傷のまま捉えたい為、必然真6弔花の攻撃パターンは火力があまり強すぎない物に制限されてくる。それに比べ、今戦っているスクアアローや雲雀、獄寺達にとつて、相手は手加減の必要すら生ぬるい相手。全力で攻撃できるなら、まだこちらは逃げやすい。

「そ、それで！どこに行けばいいの!？」

「それなら、皆さんをここへ運んだ超炎リング転送システムが近くに來てるはず出す」

ユニの言葉に無事だったスパナとルイが調べてみると、確かに現在、大破したボンゴ

レ基地の上空に金属反応を見つけた。

後は、同じように炎を送り込めば、ツナ達は元いた場所へと帰れる。

「ちよつと待つてろ。今はイリスアジトに座標が登録されてるから並盛に変更する。先にユニを連れて並盛に行け」

カタカタと手元の端末を操作しながら会話するルイ。一つしかない超炎リング転送システムは、一度目は並盛からこのチョイスワールドを繋ぎ、システムを変更して二度目イリスアジトからチョイスワールドへと登録した。その為、今のまま使えば最後に移動したイリスアジトへと行くことになる。

無論、そうしないのは、ミルファイオーレの持つ戦力という物や地形の有利不利などを考えたとき、海外のイリスアジトよりも日本の並盛に退避した方がユニにとつても都合だからである。

ついでに言えば今はメローネ基地が消えてから、並盛を汚染していた非^{ノシ・トゥリニセツテ}7・線の影響がほぼ激減されたのも理由の一つだが。

「ていうか、よくルイそんなのできるね!？」

「大したことない。チョイスの最中に軽くハッキングしてこつちで少しだけ操作できるようにシステム構築を済ませただけだからな」

「……………すげえ」

淡々と語るルイの言葉に、同じ技術者としてスパナは驚きの表情をする。

同じイリスフアミリーのリル達や、ディーノ達はずっとソファで寝転がって何を弄っていたかと思えば、そんなこととしていたのかと、驚き半分呆れ半分だった。

次第に爆発音が派手になり、足止めが成功している中ボンゴレの皆は基地へと入り、上空に浮かぶ転送システムを確認した。

「俺達は並盛に行くが、お前達も来るんだろ？ 灯夜」

「いや、どっちにしる足止めする必要もあるだろうし。元々、俺は並盛には行かないつもりだ」

リボーンの言葉に否定の意を表す灯夜。

確かに誰かが足止めをする必要がある。しかし、請け負ってくれるのはありがたいが、それをイリスフアミリーだけに押し付けるといふ事になるのは、話を聞いていたツナとしても避けたい心境だった。

「大丈夫大丈夫。どうせ白蘭達には用があるしね」

そう行つて気楽に笑うリルだが、その用というのはパンドラの匣の事だろう。

光努の居場所はおそらくであるがあそこで特定されている今、この場から逃げるといふ選択肢はリルとコルにはなかった。

ユニはボンゴレに任せておけばいいというので、ならばとイリスはイリスで好きにで

きる。足止めは頼まれるのではなく、自らが望んだ事だった。

「お前達を並盛に送ったら、俺は今度はイリスに戻る。超炎リング転送システムの目的地を変更するのは今はこっち側にはルイしかないから、ルイも並盛には行ってもらう」

今の時点だと、ルイはあくまで近くに超炎リング転送システムがある時に目的地変更が行えるだけ。その為、移動先である並盛と一緒に行くことには賛成だが、灯夜達がわざわざ残る必要も無いのではとリポーンは思った。イリスへと帰るつもりなら、一度並盛に全員で帰り、そこから直接イリスまで行けばいいのでは、と。

しかし、まだこのチョイスフィールドに用があるからこそ、灯夜はここに残る選択肢をした。

が、あくまでそれは灯夜のみ。

「リル、コル。お前らはそのまま並盛に行け。ここは俺が引き受ける」

「ちよ、灯夜！」

「いいから聞け。どうせどっちに行っても変わらん。詳しい話はルイに言っただけから、今は従え」

鋭い視線でリルとコルを見る灯夜。ツナ達には灯夜の真意は分からないが、同じ時を過ごしたリルとコルには、その言葉の裏にある何かを感じ取れる。これが、ボスがいな

い間にイリスを支えた、黒道灯夜という男。

根拠のない言葉は吐かない。

二人はやはり渋々といった様子だが、納得するのだった。

その時、ビルの角を曲がって、雨の炎を纏う荒々しい巨大鮫に乗って飛んできたのは、スクアール、雲雀、獄寺の三人だった。

雲雀の匣兵器である雲ホルコスビーノ・スズヅオラハリネズミの棘を増殖させ、空中に危険地帯を作り出して真6 吊花の足止めに成功したようだ。

「よおし、出せえ！」

だが、それでも諦めない執念を持った男が一人。

炎の推進力を得て、白蘭がスクアール達の後方から迫って来た。

グオオオオオオオオ!!

その時、地の底から響く様な獣の方向が、辺りに響き渡った！

「え、ちよーな！今度は何!？」

「落ち着けツナ。この声、どつかで聞いた事あるな」

その瞬間、右隣に位置されていた高層ビルの1階がピシピシと音を立て、その色を変質させていった。見た目だけでなく、その材質までもが、石となった。

「これって！」

「う、お、おおい!!こいつあ、ボスと同じ!」

迫る白蘭を見つめながら、灯夜は右手を伸ばし、一部が変質したビルを指した。
「リル、コル」

その言葉だけで理解したのか、リルとコルの二人は腰に挿した刀に手をかけて、腰を落とした。一瞬の内に鋭く呼吸を吐き、腕を振るう。

風を切るような刃の一閃が、鋭い炎を吐き出した。

「夜ノ型参《コード・サード》・抜空!!」はっくう

鞘に貯めた炎を、刃に乗せて空へと撃ち出す剣術。

空気を切り裂き、石化してもろくなったビルの一階を突き抜けて行った。

唐突だが、ジエンガという玩具がある。

スワヒリ語の「組み立てる」の意である「クジエンガ」に由来するこの玩具は、直方体のパーツを3つ並べ、向きを90ずつ度変えて積み重ねてタワーのように並べた後は、順番に一本ずつ引き抜き頂上に置き、先に倒した方が負けとなる比較的簡単な玩具。普通なら倒れにくい上方のパーツを引き抜く所だが、もし一番下のパーツを無理やり引き抜いたとしたらどうなるか?

無論、すべてのタワーが崩れ落ちる。

唐突に説明したが、今の現状を語るとしたらこんな感じだろうか。

ビルの一階を風化させて、それを切り裂き崩す。

ツナ達の目の前には、崩れ落ちる高層ビルという、映画の中でしか見ないような爆破テロのような光景が映り、一同唾然としていた。

瓦礫の中に白蘭が飲まれていった事にも、一同ドン引きだった。

「よし、じゃあ今のうちに行くか」

「リボン動じなさすぎ！え!?白蘭大丈夫なの!？」

「心配するな。これくらいでくたばるなら苦勞はしない。それよりも、早く行け、沢田綱吉。ここは俺達に任せろ」

「俺、達?！」

グオオオオオ!

重々しくも軽やかな足音と共に、灯夜の目の前に降り立つように現れた漆黒の獣。

大地を踏みしめ、その場所に闇が模ったかのように、見る物を竦ませる様な咆哮を放つ威風同党たる百獣の王。

黒いライオンが、ランランと瞳を輝かせて瓦礫の山を睨みつけていた。

「あれは！^{レオネ・ディ・チエーリ}天空ライオン！けど、俺のと違って黒い!？」

「黒いライオンは実在するぞ。生物の体内で形成されるメラニン色素の中でも黒褐色のエウメラニンの量が過剰になるとああいう黒い固体になる。逆に色素が欠乏すれば白いアルビノになるけどな」

「ルイ!? えつと、ごめんよくわからないんだけど……………」

「相変わらずダメツナだな」

「リボーン!」

「う、お、おおい!! 家のボスや沢田と同じ激レアな大空のライオンシリーズの一体だあ! まさかイリスの灯夜が持っていたとはなあ!」

構造が複雑すぎてコピーが不可能の大空のライオンシリーズは現存するのは色違いの4体。1体は不明だが、残りの所在は判明している。

白の固体はボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアアのボスであるXANXASの手に。しかも通常体と違って、大空と嵐の炎を同時に注入することで進化したリブレ・テンペスタ・ディ・チエリ『天空嵐ライガー』として敵を大空の調和と嵐の分解で粉砕する。

橙の固体は、同じくボンゴレが独自の改造を施して、現在はツナの持つレオネ・ディ・チエリ『Ver. V』となり、ボンゴレ匣として生まれ変わった。

そして黒の固体は、イリスファミリーの黒道灯夜の元にあった。

通常体そのままというわけではなく、イリスで多少の改造を受けた事で、通常の天空

ライオンと比べ広範囲にわたり大空の調和の炎を繰り出す事が可能となった固体でもある。ビルの1階の中央で叫べば、自身の360度周囲ワンフロア全てを、石化させられる程に。

「速く行け、沢田綱吉。瓦礫程度なら、白蘭もすぐに出てくるだろうからな」
「でも、やつぱり一人でなんて！」

一人残すことに最後まで抵抗を示すツナの言葉。

それがツナの優しさでもあり、甘さでもあるのだろう。

自警団だった本来のボンゴレとして相応しい、他所を慈しむ心。

その心に、灯夜はわずかに口元を緩ませたような気がした。

「別に奴ら全員と戦おうというわけではない。手頃な所で離脱する。心配せずに行け」
「わかりました、気を付けて下さい！………みんな！」

ツナの言葉と共に、リングが灯した莫大な炎が空へと撃ちあがり、超炎リング転送システムへと衝突した。

一際強い光を放つたと同時に、天上から降りた光はツナ達を包み込み、瞬間、このチョイスフィールドからその姿をかき消した。行先は、日本並盛町。

全員が消えたのを見届けた同時に、灯夜は短く息を吐く。

そして自身が落としたビルの瓦礫の上を見つめる。

その瞬間、瓦礫の中央程が破壊され、白蘭が飛び出してきた。

「やれやれ、綱吉君達の寿命がただ伸びただけ。君が一人残る必要は全くなかったんじゃないかい？ 黒道灯夜。本当に僕らを足止めできるつもりかい？」

いつの間にか、瓦礫を乗り越え真6弔花も白蘭の隣に集まってきていた。

全員一致で、不敵な笑みを浮かべて灯夜を見下ろす。この戦況で、どちらが有利かなんて一目瞭然だった。

「ハハン！ やつてくれたお礼に、消えてもらいますよ、黒道灯夜」

言うが早いのが、桔梗の手より放たれる殺傷能力を秘めた桔梗の花。入江を貫いたのと同種の狂気の刃は、まっすぐに灯夜に何本も向かう。

「！ネロ、待て」

灯夜の隣の黒いライオン、ネロが唸り声を上げようとした時、何を考えてか、灯夜は静止の声を上げた。

むざむざと当たりに行くような不思議な言動。だが、桔梗の花は灯夜に当たる直前で、まるで見えない何者かに息を吹きかけられたように炎がかき消され、地面に無害にぼとりと落ちてしまった。この光景を、灯夜は見た事ある。

同様に、桔梗も同じ光景をつい先ほど見た。

「お前も行ったのかと思ったが、どういう心境の変化だ？ ハクリ」

「いやいや、イリスのボス代理が一人で立ち向かうのもあれかなって。ほら、光努君がお世話になったたまには穴埋めしてあげようかなと」

さも当然とばかりに、いつの間にかこの場にいるのは、ハクリ。

白おしやぶりを身に着けた、アルコバレーノの特異点。

てつきりボンゴレ、というよりユニについて並盛に行ったのかと思つたが、この場に残つたらしい。同じことを思つた真6弔花も、白蘭も少し驚いていた。

「ユニちゃんと一緒に行かなかつたのは不思議だけど、どちらにしても君のおしやぶりをもらうつもりだつたし、まあいいかな」

「白蘭。どうしてユニを狙う？見た所お前はボンゴレリングよりもユニを捉える方を優

先した。お前の目的はなんだ？」

トゥリニセツテ

7・に順位は無い。それに、トゥリニセツテ7・ではなく、その持ち主を捉える必要性は基本的に

無いはず。そうであるならアルコバレーノだけでなくボンゴレ守護者もだが、その必要性は皆無。

現にこの時代のツナはミルフイオーレとの会談で撃たれている。最も、入江が銃弾を特殊弾に変えて仮死状態にしただけで実際に死んだわけではないのだが。

ならば、白蘭がおしやぶりだけでなく大空のアルコバレーノであるユニ本人を狙う理由と葉何か。

「まあ、いいいや、教えてあげるよ。僕は他のパラレルワールドでは、全ての7・^{トゥリニセツテ}と^{アルトラドゥエ}」

「+ 2をコンプリートしてるんだ。けど、どのパラレルワールドでもただ集まっただけで、僕を新たな世界の創造主にするような偉大な力は発揮してないんだ」

「何?」

「(ま、そうだろうね)」

一人、ほくそ笑むハクリだが、その姿は隣にいた灯夜にも、瓦礫の上にいる白蘭達にも見えなかった。底しれない無邪気な子供のような、そんな笑みを。

「けど、今日見た目もくらむようなおしやぶりの輝きを見て確信したよ。7・^{トゥリニセツテ}を覚醒

させるには、魂を持ったユニが必要だ!おそらく、同時に+^{アルトラドゥエ}2の秘密も解き明かされる。だから、邪魔しないでもらおうか」

そう言った白蘭のからは、笑みが消えていた。

ぞつとするようにその瞳は冷たく、暗い闇のような狂気を見るものに与える。まるで人の形をした欲望の塊、怪物のように。

「ハクリ君はともかく、君には用は無いから消えてもらおうか、黒道灯夜」

その言葉と同時に、真6吊花の桔梗、ザクロ、トリカブトの三人が、足元から炎を噴出して灯夜に向かった。

「ハハン!」

「バーロオー！」

桔梗は雲の炎を、ザクロは嵐の炎、そしてトリカブトは霧の炎を、それぞれのマールリングに纏い仕掛ける。遠距離攻撃は無効化された桔梗の花の件もあり、今度は直接的に攻撃をしかけるつもりようだ。

「そうか。まあ、俺はお前達とは戦わないけどな」

「!!3人共、今すぐこっちに戻って来て」

「!!:!!」

桔梗、ザクロ、トリカブトの三人が白蘭の言葉を聞きその場で炎を逆噴射し、白蘭の隣へと移動したその時、天から降り注ぐ光が灯夜とハクリの二人を包み込んだ。

いつの間になっていたのやら。二人の上空には、一度消えた超炎リング転送システムが浮かんでいた。同時に姿が見えたと同時に、一際強い光と共に、灯夜とハクリの姿が掻き消えた。

後に残ったのは、白蘭と真6吊花だけだった。

「白蘭様、どうしてあのまま追わなかったのですか？」

「どうせ彼らの事だから、転送システムの行先をイリスファミリーに設定してるだろうからね。ユニちゃんがいらないんじゃないか行く必要もないしね」

白蘭の推測通り、灯夜とハクリの二人はそのまあいリスファミリーのアジトへと転送された。あのまま桔梗達が灯夜の近くにいたのであれば、同じようにイリスファミリーへと送られただろう。ユニがいるであろう並盛とは離れた場所だけに、そちらへと行くことは避けたかった。

しかしながら、白蘭の目的の一つでもある白いおしやぶりはハクリと共に行ったのであれば、そのまま捕まえに行くという方法もあった。

しかしそうしなかったのは、ボスである白蘭の意向だった。

「ちよおつと小細工されたけど、直に転送システムが戻ってきたら僕ら全員だけで並盛に行つてユニちゃんを連れ戻して、ボンゴレリングを回収に行くよ」

少数精鋭にしたのは、標的がユニという少女だったから。

白蘭は見た事がある。いくつものパラレルワールドでユニという少女が亡くなる所を。

そのどれもが、罪もない一般人をミルファイオーレが消そうとしたその瞬間、庇うよう

に立ち尽くす姿だった。故に、今回は白蘭は失敗しないように、なるべく罪なき一般人を巻き込まないように注意を払う。

あくまでなるべく、だが。

「しかしやられたなあ。つい質問に答えちゃってたけど、転送システムが来るのを待ってたか。してやられたね、黒道灯夜」

「それで白蘭さま、白いおしゃぶりはどうするのですか？」

「ああ、それなただけだね。向こうにユニちゃんいないし、好きにやろうかなあって思ってたよ」

持参していたマシユマロを一口食べ、上着から通信端末を取り出した白蘭は、この島にはいない部下に連絡をする。

「ああ、もしもし？僕だけど、やっぱり例の作戦よろしく。行先はイリスファミリーだから、絶対に捕まえてね」

手短かに用件だけ伝えた白蘭は、楽し気な表情を浮かべまま、そのまま通信を終了した。

いまいち会話の中身が見えなかった桔梗だが、そんな様子が表情から伝わったのか、白蘭はくすりと笑う。

「ああ、イリスのハクリ君を捕まえておしゃぶり回収してって頼んだだけだよ。残りのA級兵士591人全員で」

「は？」

一瞬何かの聞き間違えかと思ったが、白蘭は一層楽し気に笑ってその言葉が効き間違えないと悟った。

真6弔花には選りすぐりのA級の兵士が一人につき100名与えられているが、その全員、チョイスで減った分を除いて向かわせたと白蘭は語った。

若干、若干だが、桔梗がイリスファミリーに同情したのは、キャッチコピーに優しいという言葉の入れてもらった、彼だけの余談だった。

『二つ目の誤算』

某所、イリスファミリーアジト。

時刻は夕方前。

川や森、様々建物が立ち並ぶ広大な敷地の中央程には、母屋と呼ばれる屋敷が存在していた。

一度ミルフィオーレファミリーに粉々に破壊された敷地だが、どういう手段を用いたのかは不明だがチョイス開催前に光努が来た時には、すでにこのありさま、まるで時間も巻き戻したかのような不自然さで元に戻っていたという。

そんなイリスファミリーの敷地内で歩く影が二人。母屋の前で、何かに備えるように立っていたのは、イリスファミリーが誇る戦闘部隊の二人。

第一戦闘部隊『アヤメ』、獄燈籠。

第一戦闘部隊『アヤメ』、海棠槍時。

イリスファミリーの戦力という部分を一手に担っていた人物。

たった三人しかいないにも関わらず、10年前の時点で他のマフィアに脅威を与え続けていた戦闘部隊のメンバーがこの場に2人もそろっているとみると、10年前の時点ではなかなか珍しい光景だった。

しかしながら、深い皺を顔に刻み、歳を重ねたような老人である獄燈籠は、まるで日向ぼっこでもしているかのように、母屋前の階段に座り、暢気に空を仰いでいた。

隣にお盆に乗せられた緑茶と和菓子があるのを見れば、普通の好々爺といった印象を与えるが、その視線は歴戦潜り抜けてきた怪物の瞳。一時も油断という物が、微塵も感じられなかった。

「そろそろ戻ってくる頃合いでしょうか。無事であればいいのですが」

そう言って獄燈籠のそばにたたずむ男は、海棠槍時。

青み掛かった黒髪と、端正な顔立ちをした優し気な雰囲気を与える男。主に槍を使用した戦闘術を披露する、屈指の実力者。一度イリスファミリーが崩れていた時は、他の『アヤメ』と同様に世界中を飛び回っていた。

ボンゴレがミルフィオーレに総攻撃を仕掛けるときには、イリスの『アヤメ』も同様に各ミルフィオーレの支部を破壊して回ったという。

足元に置かれた2メートル近いケースには、愛用している槍が収められていた。

「かか、そろそろ灯夜が戻ってくるじやろ。光努はパンドラに捉えられてしまったそう

じゃがのう。かっかっか」

そう言つて、自身の耳につけられたワイヤレスのインカムをトントンと指で叩く。

まるで心配している、という風に見えず豪快に笑い飛ばす獄燈籠に、槍時は少し苦笑気味だが、大方その意見に同意の意を示した。

「ミルフィオーレのバンドラですか。光努を閉じ込めるといふ事は、劣化級レブリカでは無理でしょう。おそらく疑似級メダの物でしょうか。なかなかどうしてミルフィオーレの技術力、如いては白蘭の能力も侮れませんね」

少しながらため息を履き、光努の事を心配する。

比較的、アヤマの中では常識的な部類に入る槍時。マフィア関係とわかつてもツナにいい人と言われるだけのことはあつた。

別段他のアヤマが血も涙もない奴ら、というわけではないのだが、槍時が最も常識的な感性を持ち合わせているというだけの事だつた。

「おやっ…」

その時、正面の森の中より風のように現れた影が、二人の前に降り立つた。

片方は赤黒い雄々しい翼を広げ、制空権を支配する空の王者。嵐の炎を纏つたその姿は、獄燈籠の匣兵器でもある嵐アクワイラ・テンペスタのフゼだつた。

もう一つの影は、地面を駆け抜ける蒼い影。

蒼み掛かった体毛を揺らし、細くも大地を踏みしめる強靱な脚力と、凶悪な犬歯をのぞかせる猛獸。それは澄み渡るような雨の炎を纏う、一匹の狼だった。

「おや、フローズにフゼ。どうかしましたか?」

海棠槍時の匣兵器である、ルーボ・ディ・レオツヤ 雨 狼 のフローズだった。

低く唸り声をあげるフローズだが、槍時の足元にやってくるるとじやれつくようにすり寄る。こうしてみると狼というより、ご主人に懐く犬のようにも見える。

獄燈籠は伸ばした腕にとまったフゼを見ると、少し瞳を細くして状況を理解した。

「ふむ、どうやら戻って来たようじゃな」

その言葉と同時に、上空から太陽の光とはまた別に、天から降り注ぐ架け橋のような光が母屋の前の広場に降り注いだ。視界を防ぐほどの真つ白な光が晴れたと同時に、その場にいた人物は槍時と獄燈籠の二人の元へと悠々と歩いてきた。

「おや、灯夜さんにハクリ。お帰りなさい。状況はどうですか?」

光の中より現れたのは、黒い髪に黒い瞳、黒いスーツを身にまとう男、黒道灯夜と、その横で佇む銀色の少年、ハクリの二人だった。

「光努は消えて、リルとコルとルイは並盛に置いてきた。直に白蘭がこつち側にミルファイオーレの兵隊を差し向けてくるだろうから、並盛のカタが付くまでの辛抱だ」

「そちらは無事に終わる保証はあるのですか? ポンゴレ10代目とその守護者と言って

も、10年前から来た中学生なのでしょう？」

槍時の疑問は最もだ。

尚且つ彼は過去のボンゴレファミリーがこの時代でどのような成長を遂げたのかは知らない。故に、その判断に間違いはないのか、そう問うた。

彼らが失敗すれば、なし崩し的に全てが終わる状況。

ちなみに、光努が消えた発言に関して事情を聴いているのであえてスルーしている。

「チョイスを見て思ったが、ボンゴレ達もボンゴレ匣も決して弱くない。連携もうまく取れている。例え正面からぶつかったとしても、勝機はある」

ミルフィオーレの全容を見たわけでは無いが、それでも対抗できない事は無い。灯夜はそう判断した。尚且つ、一人一人ならまだしも、連携を取れば、その力を何倍にも高める術をボンゴレ達は有していると。

もう一つ言えば、イタリアのボンゴレ本部より日本に飛び立った部隊が一つある、という情報もあるのだが。

「ところで灯夜さん。その手に持っているのは何ですか？」

先程から気になっていたのか、疑問を口にする槍時の視線の先には、3本の鎖を持つ灯夜の右手。そしてその鎖の先には、地面をゆっくりと引きずられてくる、3つの棺桶が置かれていた。黒々としているが、中央にイリスファミリーの紋章が備えられている

ので、ここで造られた物というのは分かる。では、何が入っているのか？

最もリルヤコル、ルイ達は無事というのは先の会話で理解しているので、槍時も獄燈籠も、なんとなく予想できたのだが。

「怪我人だ。医務室にいつはいるか？」

「ええ。こんなこともあるのかと準備万端で待ち構えてもらってますよ」

「ありがたい。一人危ない奴がいるから手早く中に入れるぞ。敵が来るのも時間の問題だしな」

「ええ………！複数の炎反応。この自分を隠そうとしない大胆不敵な出方は、ミルフィオーレでしょうか？」

「意外と早いな。真6甲花は日本に行ってるから、残りの兵隊をこっちに向けたんだろ。狙いは、このおしゃぶりだな」

灯夜そういつて親指で指した所には、ハクリと、胸元で光る白のおしゃぶり。

「ハクリはどうするのですか？このままここで標的になるつもりですか？」

「いや、正直いてもしようがないし。俺は少ししたら並盛に行くから、あとよろしく」

「自由ですなえ………」

やれやれ、という風のため息をつく槍時。

この時代に置いてハクリは光努同様に10年前から忽然と姿を消している。その為

普通ならハクリという人物と接した時間を持つ者は果てしなく少ない。当時から世界を飛び回っていたアヤメの一人である槍時や獄燈籠も。

しかしながら、実を言えば10年前の段階でもハクリは光努とは別行動をほとんどとっていたが、その際に何度かアヤメと交流を深めていたこともあるという。

「所で、ラツシュとクルドの姿が見えないが？この位置からして屋根の上か？」

「ええ。ミルフィオーレが来るのは予想できてましたので、ラツシュに呼びに行つてもらいました」

イリスファミリーの母屋には屋上が存在しないので、高い所に上りたいのであれば屋根の上上がるしかない。上階の天窓から外へとでた男は、屋根のへと身軽に降り立つ。

帽子、服装を迷彩柄で染め上げて、腰には2本のナイフ。光に反射する金色の髪をう

なじで縛り流した男、ラツシユ・ギナは、屋根の上からこちらに向かう小さな炎の光を
確認した。

元傭兵であり、現在はイリス第二戦闘部隊『シヤガ』の一員。

目元につけられていたゴーグルを外して帽子の上へ上げ、敵の正体に苦い表情をす
る。

「うへえ、なんだあの数。一国でも滅ぼすつもりかよ……………ミルファイオーレ容赦ねえ
……………」

果てしなく面倒くさそうに、苦言を漏らす。

自身の匣を手元で弄びながら、屋根の上を落ちないように歩いていく。

棟の上を乗り越え、反対側を見たとき、下の方で座っている人影を見つけた。

「クルドさーん！敵来ましたよー！座ってないで準備してくださいって言ってみました
よー！」

風に掻き消えた言葉に反応したのか、人影はわずかに体を揺らした。

一本の刃のような気迫が、一瞬だが辺りの空気を切り裂いた。

バタバタと風に揺れるコートと、後ろで縛られた髪が揺れている事にも構う事なく、
項垂れているように俯いている。

その腰には2本の剣を備えているが、同じ物ではなく、鍔があしらわれた黒塗りの鞘

に納められた日本刀と、装飾の施された洋剣。

言葉だけにすれば普通だが、その剣を納める鞘に刻まれたのは、不思議な模様。どこかの失われた文字のような、その場に存在するのに、見た物を本能的に竦ませる様な、暗い闇を秘めたような不思議な剣。おそらく人が手に持つてはいけない部類の異なる異種の剣を纏い、大空の下で黄昏た男は、少しだけ息を吸い込むと同時に、盛大に息を吐く。

「はあ……………寂しい」

イリスフアミリー第一戦闘部隊『アヤメ』リーダー、リルとコルの父親にしてイリス最強の剣士。

クルドは、静かにため息を吐いた。

片道500万FVという莫大な消費量コストを有する超炎リング転送システムには、貯蓄チャージシステムが存在する。

簡単に言えば、炎を溜めて好きな時に使用できる。

足りない分はミルファイオーレ側が用意するとして、光努達イリスファアミリーがチョイスフィールドに来るにあたって、およそ1000万FVの炎をつぎ込み移動したことにより、残りの500万FVは転送システムの中に残ったままである。

つまりには、この時点で炎を供給する必要なく片道の移動が可能となっている。

これに加えて、ツナ達が並盛に帰還した時点で転送システムには1000万FVをつぎ込んだことにより、ツナ達が並盛に帰還した時点で転送システムには1000万FVがそのまま残されていた。

当然そこから500万FV使いチョイスフィールドに戻るが、その後、最後に残った500万FVを使い、灯夜は無事に自分から炎を供給する事なく、イリスファアミリーへと戻ったのである。

簡単に図にするのならば、

【光努達イリスファアミリーが炎を供給し、チョイス場所へと移動】

イリス（10000万FV供給）↓（5000万FV使用）↓チヨイス（残り5000万FV）



【チヨイス終了後、ツナ達が炎を供給して、ユニを連れて並盛へと帰還】

チヨイス（10000万FV供給、計15000万FV）↓（5000万FV使用）↓並盛（残り10000万FV）



【システムが単体で並盛からチヨイス場所へ移動】

並盛（残り10000万FV）↓（5000万FV使用）↓チヨイス（残り5000万FV）



【灯夜とハクリがイリスファミリーへと帰還する】

チヨイス（残り5000万FV）↓（5000万FV使用）↓イリス（残り0）

といった具合だろうか。

寧ろ分かりにくかっただろうか？

結果、チヨイスフィールドに取り残された白蘭達は、早急に転送システムを回収し、並

盛に向かおうとするだろう。ユニを捉えにやってくるのも時間の問題である。

問題であるといったが、実をいうとすでに並盛に来ていたりするのであるが。

ただで返すつもりはなかったのでもルイが転送システムに不具合を与えて置いたら、ぎりぎり並盛まで行くことには成功したが転送システムは爆発し、白蘭と真6弔花は並盛の町に散り散りに落ちてしまった。

「というわけで、俺はこの辺りで隠れてるけど、お前らはどうする？ ツナ達の所へ行くのか？」

「んん………どうしよっかな」

「迷う所」

現在、森の中で唸っていたのは、ルイ、リル、コルのイリスファミリーの三人であった。

ツナ達と一緒に転送されてきたのはいいが、どうにも別の場所へと落とされてしまったらしく、さらには衝撃で通信機器が破壊されてしまった。そのままボンゴレアジトに向かおうとした矢先、アジトの入り口が爆発して煙を排出したため、ひとまず森の中で身を隠していた。

ボンゴレ側と連絡が取れない。

その為、三人は街を見渡し、炎の気配からどこに行くかを議論していた。

「今の所炎反応があるのは、ボンゴレアジト、並盛中学、この二つかな。アジトの方は何だか嵐っぽい気配」

「ルイ、どこに全員いると思う?」

「おそらくだが、どっちもないだろう。多分ユニ達はどこか別の場所へ徒歩で移動中だな」

人のなりと状況を理解していれば、次にどのような行動をとるかはある程度絞られていく。そこから選択肢を一つずつ消していけば、消去法で答えが導き出される。

「おそらくツナ達は戻ってきてから一度アジトに戻つただろう。むしろそれ以外にどこか行く必要は皆無だからな。しかし今現状アジトの中で爆発が起きているとなると、誰かが戦っている。問題は、誰が戦っているか」

「分かるの?」

「いや、流石にわからん。しかし地下の密閉されたアジトに全員で籠っていることは考えにくいから、敵が強襲して誰かが足止めに残って戦つたと思うのが自然だろう」

無論不明点は多々ある。秘匿性の高いボンゴレアジトを見つける方法など。

しかしこの際敵がどうやってアジトの場所を発見したかは問題ではない。

敵の奇襲によって、次にツナ達と敵がどう動くかだ。

「で、並盛中学の方だが、これは多分恭弥だな。というか絶対に恭弥しか無いと思う。」

こつちも戦つてゐただけだな。かといって全員ここにいても考えにくい」「どうして?」

「転送システムが戻つてから真6甲花が散つたとき、一つは並盛中学の方へと落ちた。そうなるかと恭弥はそこ目がけて一直線に向かうはず。一人だと心配だからつて家庭教師だつたデーノも多分一緒にな。だとしたら、アジトから逃げる為とはいえ今敵がいるであろう場所に全員で向かうとも思えない。現時点ではボンゴレの守護者と真6甲花のどつちが勝つか分からないからな」

「まあわざわざカモがネギ背負つていくようなものだからな」

「とすれば、この辺りにボンゴレの誰かの案で、別の隠れ家候補を見つけ今も向かつている、と考える方が自然だ。無論全員のステータスを考えてと自身の足での移動でだ」

「その別の隠れ家候補つて?」

「そこまでは知らん」

ルイがわからないのも無理もない。

この頃ツナ達は、三浦ハルが「知り合いの不動産屋のおばあちゃんの所に行こう」と提案してそこに向かつているという、ある意味無策で見つけるのがほぼ不可能に近い逃走手段を用いていたので、流石のルイもわからなかつた。ツナ達を見つかけようと思つたら、本人に聞くか、気配をたどるくらいしか方法が無い。

ちなみに、彼らにゆかりのある自宅や病院などの建物は、基本ミルフィオーレのデータにリストアップされているので、元メローネ基地指揮官だった入江が仲間にいる以上、選択肢としては最初から視野には入っていないのであった。

「ボンゴレアジトに合った炎の気配が町の方に向かってる。多分嵐の炎、それにこのスピードの移動だと、多分ミルフィオーレのFシューズを使ってる」

「ていうことは、移動しているのは嵐のマーレリングを持つ真6弔花、ザクロ」

ある程度実力の付いたものであれば、自身以外の周囲の炎反応を感じすることもできる。無論その炎が何の炎であるかなど細かい種類は、通常ならわからない。

しかしリルとコルは、教えた師が原因が、イリスという環境が幸いしたのか不明だが、自身と同じ属性の炎であれば、ある程度わかるといふ。

そこから推測し、見えない敵の正体を看破して見せたのは流星と言えるだろう。

答え合わせをする者はいないが、確かにボンゴレアジトには、一人残って足止めを買って出たスクアアロと、一番乗りで奇襲してきた真6弔花のザクロが対決し、その戦いを制したザクロが今、逃げたツナ達の気配を辿り町へと向かっていた。

スピードは速く、リル達が話している間にも炎反応が揺らめき、町中で立ち止まっている事が分かった。

おそらく、ツナ達の気配を感じた場所にたどり着いた、といった所だろうか。

「じゃあこの辺りに行けばツナ達がいるって事か。ついでにツナ達がいれば真6弔花も寄ってくる。よし、じゃあ私ちよっど行ってくるよ。コルはどうする?」

「そうだね。ボンゴレアジトの方も少し気になるから見てくるよ。足止めされた奴つてこののを考えると、可能性としてはスクアアロとかが一番高いと思うから」

ツナは基本的に味方が一人で立ち向かうという状況を好まない。それだけでなく誰かが傷つくという事を好まないという事であり、そう考えると味方を一人置き去りにする選択肢は皆無に等しい。

そんな状況下で誰かを足止めに置くとしたら、強制的にツナを黙らせられる人物が残った可能性が高い。無論信頼を元にしてツナ達を背に送り出す可能性もある。

その場合山本や獄寺もいるが、やはりその可能性よりかは、ツナに問答無用で意見が出せ、なおかつ真6弔花とも単独で渡り合えそう者を選ぶ方が高い。その人物とは、リボン、雲雀、ディーノ、スクアアロの4人だ。

アルコバレーノのリボンは必然ユニと行動を共にすると考え、前述のルイの推測通りに雲雀とディーノが並盛中学に行ったと仮定すれば、必然消去法でスクアアロが最も適役、可能性が高い選択肢と考えられる。

もちろん確実と言えないあくまで推測だが、コルのもう一つの根拠は、ボンゴレアジトから雨の炎も感じた、というのもあった。

そしてその推測も、当たっていた。

「じゃ、それで行くかうか。二人とも、とりあえずこの通信機持つていけ。今直したから、ツナ達見つけたら周波数合わせておけ」

「うん、了解」

「じゃ、行つてくる」

言うが早い、二人は地面を蹴つて森の中を走り出す。入り組んだ森と草の中にも拘わらず、すり抜けるように走る二人は風の如く。器用に木の根を踏みしめ加速し、草を抜けて枝を蹴る。二人とも腰に刀が差しているにもかかわらず、それが木に引つかかるような事もなく、二人の足取りは実に軽快に動いていた。

ボンゴレアジトから脱出したツナ達は、ハルの提案によつてとある不動産屋にやつてきていた。知り合いのおばあちゃんとやらの経営しているそうだが、既に亡くなつてい

たという。まさかのミルフィオーレの標的、と思われたそこに住んでいたおばあちゃん
の息子と言う男曰く、穏やかに天寿を全うした、らしい。

その男、通称川平のおじさんのおかげで、ツナ達は窮地を脱した。

だが、その川平のおじさんという人物に関しては謎が多かった。

初対面のはずなのにツナ達の事をよく知っていたり、白蘭や真6弔花の事、ザクロと
いう相手の名前すらも。

それに加え、川平不動産にやって来たザクロに、幻覚のような不思議な術を気づかれ
ないようにかけて、あたかもツナ達が遠くを移動しているように、感覚を感わした。い
ないはずの敵につられて、結局ザクロは富士山の方角へと猛スピードで飛んで行つた
が。

人間を超えたと豪語する真6弔花の実力は決して伊達ではない。

にもかかわらず、その人物を感わす手腕。

謎の人物、川平のおじさんという謎がツナ達の中では残ってしまったが、結果的に助
けてもらったのは事実だ。

ザクロがいなくなると同時に川平という人物はどこかへと行ってしまった。ちよつ
と旅に出るからお店は好きにしてい、という言葉を残して。

窮地を脱したツナ達だが、ここで新たな朗報が通信機越しにディーノから入った。

ボンゴレ孤高の雲の守護者、雲雀恭弥が、チョイスで標的を務めた真6弔花のデイズを並盛中学で倒したという知らせを。

流石雲雀、という言葉と共にツナ達はその知らせに喜んだ。

ザクロがいなくなり、デイズが倒される。これにより、訪れる可能性があったであろう、当面の危機が去ったことに。

現状真6弔花に位置がばれていないと考えると、ここでボンゴレアジトの様子を見にくるという者が現れる。

山本、スパナ、ピアンキ、ジャンニーニという、意外と非戦闘員が入ったメンバーだった事に、他の一同も幾分か驚いていた。

山本は残ったスクアールが心配で、ピアンキは忘れ物を取りに行くと言って、ジャンニーニには自身が構築したボンゴレアジトが心配で、そしてスパナは、何かモスカに制作役立つ部品は無いかを探しに、三者三様ならぬ四者四様の理由を胸に、こっそりと川平不動産から外に出た。

だが、その時わずかに開けた隙間より、真6弔花の一人、霧の巨人トリカブトの侵入をゆるしてしまった。ランボがソファの下に隠され、大胆にもランボの姿でユニの隣まで近づかれた。

咄嗟にクロームとユニが不快な違和感を感じたが、時遅くユニの背後にトリカブトが

現れた。無論そのまま外へと出すつもりなど無かったが、中に現れたトリカブトに意識を持つていかれたせいも、外から入り口のドアを破壊する攻撃に対処できなかった。

今上空では、桔梗、ブルーベル、そしてユニを抱えたトリカブトの三人が滞空していた。

「ハハン、作戦成功です」

「さあこつからは、このブルーベルが相手よー」

真6弔花には、偽のマーレリング所持者であった元6弔花と同じように、サブ匣とメイン匣の2種類が存在する。雲のマーレリング保持者である桔梗の持つ雲カンパネラ・デイ・ヌーヴオラ 桔梗

や、雲雀に倒された晴れのマーレリング保持者である太陽リノチエロシテ・ニアル・セレーノ サイもこれに当たる。

そして、雨のマーレリング保持者、ブルーベルの持つ匣兵器は、雨カタツムリキオツチヨラ・デイ・ピオツジャ。他

の匣アニマルのような生きて動く生物型ではなく、カタツムリの殻が複数飛び出し、対象に衝突すると同時に爆発する、幻騎士の幻スバットロ・ヌテイランキ 海 牛のような爆発兵器。

桔梗とブルーベルが匣兵器の火力をツナ達にぶつけて、その間にトリカブトが白蘭の元へとユニを連れて行く。

ザクロのように力任せの強襲ではなく、ユニが逃げられないように、あらかじめ白蘭の能力を使って場所を特定し、忍び込みやすい幻覚使いのトリカブトを潜入させ、あとの二人で援護する。

ちなみに、白蘭はパラレルワールドから知識を共有するに当たり、能力開花当初と比べて一度に一つの事くらいしかわからず、本来なら本部の最深部で行う儀式を森の中で行った。その際はトリカブトが見つからないように幻覚で隠し、白蘭はその甲斐あって、川平不動産という場所を特定したのだった。

まさに、作戦通り。

そんな彼らも、二つ程誤算があつた。

疾風の如く空を飛来し、ユニを抱えるトリカブトを突き破つて攻撃を加えた者の姿。トリカブトが霧となつて消えたと同時に、空に投げ出されたユニを受け止めたのは、鋭く淡い光を放つ、雷の炎を纏つた黒い2匹の狐だった。

「コルル……………ビジエツト……………？」

惚けた様なユニの背と足に手を回し、悠然と降り立つ騎士のように抱え上げた人物は、静謐な声音で問いかける。

金色の髪をなでつけ、黒いスーツに身を包んだ、雷のリングを持つ男。

「お怪我はありませんか？……………姫」

元ミルファイオーレファミリーブラックスペルの6弔花にして、ジツリヨネロファミリーの雷の守護者、ガシマ電光のY。

そして同じく彼の弟分達でもあった、太猿と野猿の二人も、自身の敬愛する姫を守る為、武器を手に空の上へとその身を躍らせた。

「ブラックスペルだと！奴らはメローネ基地の転送時に死んだのではなかったのか！」
桔梗も驚いた。

メローネ基地が超炎リング転送システムによつて飛ばされた時、中にいる人材に関しては殆どが死亡したものとされていた。最も正確に確認したわけでは無く、無人の人工島に落としたので、崩壊に巻き込まれたらどうしようもない。そして海のと真ん中で、やはりどうしようもない。そう思われていた。

しかし、γ達はボンゴレとイリス達との戦いの後、転送を予想していたのか、メローネ基地からいち早く脱出に成功していたのだ。

そしてミルフィオーレの拠点がなくなつた為、並盛に今の今まで潜伏していたという。

このままいけば白蘭の注文通りにユニを無傷で捕獲できたものを、想定外のγ達に邪魔されて面白く無いのか、ブルーベルは分かりやすく不平不満を顔に出していた。

「何やってんのトリカブト！ユニを取り返すのよ！」

「γの技は全て知っているはず。一人でできますね？」

こくりと、無言で桔梗の言葉に頷いたトリカブトは、霧の炎を纏い、γとユニの元へ

と飛び出した。

だが、それをみすみすと見逃すような太猿と野猿ではない。嵐の炎を纏う大鎌を手
に、飛び出したトリカブトに向かつて、一閃振り下ろす。

「がはっ!」

「うわっ!」

だが、まさに霧の如く、するりと二人の鎌をすり抜けるようにした通り際、トリカブ
トの武器が二人の体に浅くない傷を作り出した。

無論、そうしたトリカブトの姿は無傷。

「ちいっ! ネレ・ヴォールビ 黒狐!」

γの掛け声とともに、黒狐のコルルとビジュツトは鋭い雷の炎と共に、回転しながら
突撃を仕掛ける。

だが、それすらもトリカブトはあつさりと通過していった。まるで削り取られたよう
な二匹の体に残る破壊の痕。そしてそれを成し得たトリカブトのローブの裾からは、高
い唸り声をあげる二つのチェーンソーの刃をのぞかせていた。

「くそっ!」

ぱちりと小さく光が弾けると同時に、γの手にしたリングから緑色の閃光、雷の炎に
よるバリアが展開された。だが、その光景に桔梗は失笑を隠し得ない。

「ハハーン！そのランクのリングでは役に立ちませんよ」

死ぬ気の炎の威力は、その人物の覚悟の強さに比例する。

だが、それが十全に発揮されるかどうかは、その人物の持つリングの強さにもよる。

例え超人的な覚悟を有した人物がいても、持っているのがC級のリングでは、その炎の力は半分も発揮されない。炎の強さは勝っていたが、強いリングを持たない為に幻騎士に追い詰められた10年前の雲雀がいい例だろう。

γの覚悟と実力は並大抵ではない。6弔花時代は偽物とは言え、白蘭曰く「ランクAのすげー石」が使われたマーレリングを使用することで、炎一つとっても研ぎ澄まされた鋭い盾と矛にできた。

だが、今持っているリングはそれに及ばない、よくてBー級のリング。

例え優れた銃を持っていようとも、ただの銃弾では鉄板は撃ち抜けない。

ある程度の攻撃は防げて、黒狐を一撃の元に伏したトリカブトの攻撃を防ぐには、心もとなかった。

先程の黒ネレ・ヴォールビ狐も、精製度B以下のリングでは100%の力は引き出せない。精製度が

A級のリングがあれば、結果はまた違ったかもしれないが。

真6弔花の作戦における誤算の一つ目は、γ兄弟がこの場にいた事。

彼らの奇襲により、ユニを取り返す事に成功した。

そしてもう一つ、先制を撃たれたボンゴレ達は、γ達が戦っている間に態勢を立て直し、上空へと駆け上がったツナがトリカブトに一撃を入れた。

オレンジ色の流星のように、気づけばγとユニの目の前に。

全てを見透かすような瞳を真6弔花に向け、大空の炎を纏う拳を握った。

その姿に、ユニは無意識のように呟いた。

「……………いつも眉間に皺を寄せ、祈るように拳を振るう。あれが……………ボンゴレX世！」
デーチモ

前述したとおり、真6弔花には誤算が二つあった。

一つはγ兄弟がいる事を察知できなかった、というより想定していなかった。

そしてもう一つの誤算とは——

ザシユ！ザシユ！ザシユ！ザシユ！

鈍い音が響き、対空していたツナ、γ、ユニ、桔梗、ブルーベルは驚愕の表情をする。

下にいたりボーン達も同様の表情だった。

目の前には、4本の剣に貫かれた、トリカブトの姿があった。

だが、その体はさらさらと砂のように空間に溶け込み、再び塵が集まり別の場所へと出現する。流石霧の真6弔花といった所だろうか。その体は無傷だったが、わずかにローブの裾が切れていた。

いきなりの事に驚いたが、精神的に追撃するようにツナの隣にすたりと降り立つ影が現れる。

足元には赤い六角のプレートが出現し、強固な足場を構築している。

夜の闇を溶かし込んだような黒髪を、後頭部で結び上げふわりと揺らし、腰に差した黒塗りの鞆に納められた刀をかしやりと揺らした。

黒曜石のような瞳は、まっすぐにトリカブトを見つめていた。

「見つけた！トリカブト！」

イリスファアミリー第二戦闘部隊リーダー、リル。

剣で相手を串刺しにするという割とショッキングな予備動作の後の登場に、皆一様に驚いた。一番最初に我に返ったように、隣のツナが声を上げた。

「リル！」

「あ、ツナやつほー。悪いけど、トリカブトの相手もらうよ。間違いない！懐からまだ

「心配がする。パンドラの匣の心配が！」
そう言うが早い、リルは手に剣を構え、トリカブトに向かって跳び出した。

『幻惑の瞳に映る炯然たる剣』

イリスファミリーにおいて技術主任の立ち位置に着くルイという男は、嘗て匣開発に携わる3人の天才達の手伝いをしてきた。その事もあり、イリス製の様々な試作の匣などを作り出してきた。

その一つである、『飛翔する炎剣』。

使用者のリングから注ぎ込まれた炎を糧として、触れずに自動で飛び交う匣兵器。元6弔花であるγの持つエレットロ・ベリアルドも、使用者との非接触で玉を操作してキューで打つ匣。似たタイプであるが、ルイが作ったのはそれに加えて自身で操作できる手動操縦、センサーから対象を割り出し自動で迎撃する自動操縦の二種類、さらに攻撃、防衛などの種類を随時変更して操る剣。

リル達が使っているのは単体の名称ではなく、複数の剣が収納された匣兵器であり、ラテン語で剣の意味を持つグラデイウスを由来とする花からつけられた、『4本のグラジオラス。剣の本数に応じて名称を変更しているだけであり、単体は同じもの。』

この匣兵器の有用性は高いが、欠点も存在する。

その一つとしては、剣本体の硬度だ。

いくつかの機構を組み込んだため、攻守の利便性の代わりに刀身の硬度が通常の洋剣と比べて著しく低下した。

その為、ルイはこの匣を雷の匣兵器として流用した。

雷の炎の特性である「硬化」により、刀身の硬度を引き上げる。しかしそれでも通常の洋剣と同程度か少し低いくらい。

随時ルイがメンテナンスを行っているが、それができない連続した戦いの中だと、剣にも疲労が蓄積されていく。

結果、幻騎士戦でも起こったように剣の倒壊が起こる。

そしてそれは、トリカブトの闘いでも引き起こされた。

バギン。

砕け散る剣の破片が、太陽の光を反射して空に投げ出される。

中から火花を散らし、砕けた刀身の先と、手放した柄がクルクルと一直線にコンクリートに落ちて砕け散った。

「やつぱり、チョイスで無茶させちゃったかな」

少し悲しそうな光を目に細め、手に握る洋剣に力を籠める。2本の雷を纏った剣は、トリカブトのチェーンソーに砕かれてしまった。一つの匣の中には4本、残りは両手に持つ2本のみ。

足元のプレートを踏みしめ、全身のバネを使つてゆらゆらと陽炎のように揺らめくトリカブトに向かって跳び出した。

「哀しき者よ」

ぶわりと、トリカブトのロープの裾がさらさらと崩れていく。

すでに彼の術中の中なのか、今まきに見ている者が幻影なのか。

だがリルは、飛び出したと同時に体を丸め、反転しトリカブトが見える方向へと足を延ばしてプレートを踏みしめた。そして、そのまま弾丸の如く、体を態勢を逆転させて先ほどまで自分がいた方向へと再び飛び出す。同時に、手の中の一刀突き出した。

「朝ノ型肆・鉄の螺子！」
フォースコード ヴィザ・シデーロス

肆ノ型は一刀の型。

手の中で高速回転する剣は、穿孔機のように空間を削り取る。何も無い虚空を突き崩すように穿たれた剣だが、何もなかった空間に紅い火花が散ると同時に、剣の先にチエーンソーの腹で受け止めたトリカブトが現れた。

「ほう。トリカブトの位置を見抜きますか。中々どうしてイリスの剣士とやらもやりますね」

少々感心したように声を上げる桔梗だが、それでもその表情になんら焦りは浮かばれず、硝子のように涼しい余裕の表情。暗に、その程度では勝てない、そう語っていた。防がれた事に対してリルは特に気にしていない様子。

だが、今まさにこの瞬間、攻撃を受けたトリカブトは、本体をさらしたことになる。リルの手の中で、Dリングから発せられる鋭い雷の炎。

ツナ達には嘗て戦った6弔花時代のγを思い出させる純度の高い炎。イリスが誇るリルが所有する雷のDリングは、精製度はA級の至宝中の至宝だった。

リングの炎を刀身に伝播させ、両手に持った剣を縦横無尽に振りかざす。

「朝ノ型伍・十三本の槍!!」

伍ノ型は二刀の型。

さらに言えばこの技は、両手の剣による13連撃の技。

とりわけ、通常なら平行な地面の上を想定してある技ではあるが、空の上という状

況では、縦横無尽に駆け回れる。

「はあっ！」

ヒュオオン!!

風を切る音が聞こえるよりも早く、リルの剣がトリカブトに吸い込まれるように振られる。だが、先制の2撃を、トリカブトはするりとわずかに体を動かすようにして綺麗に躲した。いや、躲したという言葉も怪しい。

剣から逃げたというより、剣の届かない位置までわずかに動いて止まる事の繰り返し。し。

まるで、最初から剣の動きが、間合いが、速度が、全てが分かっていたような動き。わずかに目を見開いたリルだが、剣の握りを強めて再び剣を振るう。

「まずい！リル！ダメだ！」

状況を見守っていたツナは、突如静止の声を上げる。

だが、すでに始まった連撃を止める事は出来ない。リルは立て続けに3撃4撃5撃6撃と剣閃を重ねていくが、そのこと如くを、トリカブトは躲す。するりと縫うように、ひらめくローブにすら触れずに、雷の余波にすら届かず、躲す。

(当たらない！攻撃が、読まれている!?いや、読まれているというより、すでに知っている!?)

次第に終局へと至る剣の連撃。

11連撃を終了した時点で、トリカブトにはかすり傷すら見えなかった。

回数を重ねるごとに、まるで見えない黒い沼にどろりと足を取られていくような感覚。

止めとばかりに、手元の剣に雷の炎を増大させ、リルは最後の2撃を放った。

その刹那。

するりと剣と剣の間をゆらりと幽霊のように動き、手元で低く獣のように唸り声をあげるチエーンソーを、トリカブトはすれ違い様に振るった。

ザシユツ!!

「あ……くうー！」

「リル！」

溜まる場所の無い空の上で、紅い鮮血が舞った。

咄嗟に、リルはトリカブトを蹴り倒すようにして背後に飛び出し、くると回ってツナの横に降り立った。しかし、出現させたプレートの上に足を付けると同時に、片膝をつく。

「リル！大丈夫か!？」

「ツナ……平気だよ。剣じゃないけど、斬られたのは久しぶりだなあ」

あはは、と平気そうに笑うが、傷口を見たツナは愕然とする。

壊れた剣を手放して左手で右の脇腹を抑えているが、その箇所からはジワリと赤い染みが滲み出し服を染め上げてきた。

「さつき真6弔花のデイジーを倒した雲雀さんと一緒のデイーノさんから連絡があつた。あいつらはみんな、白蘭からパラレルワールドで出会った俺たちの技の知識を与えられている」

つまりは、自身の攻撃が既に相手に知られている。

その時その時で思考の変わる型の無い無型の攻撃であれば、動体視力と反射神経で対処するしかないが、手順の決まっている型のある技に関しては、時間があれば攻略することは難しくない。

どんなに速いボールを投げられるピッチャーがいるとしても、それがまっすぐに来ると分かっているのなら、バッターにとってホームランにする事は難しくない。

いわばかつての山本とスクアアロのような関係だ。

ボンゴレリング争奪戦で、時雨蒼燕流と戦って攻略したことのあるスクアアロは、山本の自然な技を紙一重で見切り躲し切って見せた。それにより、ただでえ不利な状況へ

と突き落とされる。結果として山本は勝利したが、それまでに受けた傷はスクアー口と比べて圧倒的に多かった。

だからこそ、リルの変則的な13連撃を、ただのかすりもせずにとりかブトは躲し切ってみせたのだ。さらには、そこにカウンターを乗せる事もできる。

「はあ、はあ……なるほど。どうりでおかしいと思った」

「リル、下で治療してもらえ！浅くは無いはずだ！」

その言葉にリルはちらりと自身の傷を見る。確かに浅くはない。致命傷とは言わな
いが、ほうつて置けばまずい類の傷だ。ただの切り傷ではなく、チェーンソーの一撃と
いうのも響いている。イリス製の耐炎防弾防刃製の服に身を包んでいるが、それでも全
て無効にできるわけではない。せいぜい、届かせる刃を少々緩和させるくらい。

だが、リルは傷口に手を当てたまま、ゆらりと立ち上がった。

「ツナ。悪いけどここは譲れないよ。あそこに光努が囚われている匣があるっていうの
なら、今取り返すしかない」

「だが、お前の攻撃は全て読まれている！」

「その通りですよ、イリスの剣士よ」

ツナの言葉に同意するように上から投げかけられる涼し気な声音。

ふわりと浮かんでいるのは、真6弔花の桔梗だった。

「そのボンゴレX世デーチモや、守護者ならわずかとはいえ可能性はあるかもしれませんが、あなたには無理です。イリスで我々に太刀打ちできるものなど、白神光努くらいでしょうか。最も、彼は今我らの手中の中にいますがね」

くつくつくと喉を震わせ、嘲笑う桔梗。

だがその通りだ。下にいたりボーンも、ツナとリルの後ろでユニを抱えるγもその言葉に反論は出せない。攻撃方法が全て知られている以上、対抗できるのは白蘭の知らない攻撃、武器、技。つまりは、この世界にしか作られていないボンゴレ匣と、この世界にしか存在しない白神光努という人物。

だからこそ、ツナはリルに休むように言うが、リルはその場を動かない。

深く息を吸い、ゆつくりと吐き出す。荒くなっていた呼吸を、5秒程かけてゆつくりとした元のリズムムへと戻していく。

そして、空にいる桔梗に向かって口を開いた。

「一つ、忘れていた事があるよ」

「何？」

「ミルフィオーレの人は、この刀については知らないんじゃない？」

そういつて、左手で左腰に刺さった刀、天國刀に触れてかしゃりと揺らす。

コル、光努と一緒に、日本の秘境、とある山中の廃寺の中に封じられていた2刀の内

の一本だ。

その問いに桔梗は思わず無言になる。

質問に対する沈黙は肯定の意と取られる場合がある。

返答の無い答えに、リルはわずかに口元に笑みを見せた。

だが、桔梗も、だからどうした、と言わんばかりに微笑を浮かべる。

「ハハン。確かに、その刀に關して我々は情報を持ちえませんが、しかし、チヨイスで見た限りそれは高純度の炎に耐えうる強固さは賞賛しますが、それを除けばただの刀。例えどんな剣を持つとも、それを扱う者があなたである以上、我々には通じませんよ」

「リル、やはりここは俺が」

「ねえツナ。私が今持っているのは、この刀だけじゃないんだよ？」

どこか、ツナにとってそこそこ身近だった、10年前のリルを思い出させるような悪戯っぽい笑みを浮かべたリル。

右手を突き出すと同時に、袖に隠れて見えなかった物、右手の手首に巻かれた物が、ツナ達の視界に入った。

きらりと光るシルバーチェーンのブレスレットだが、アクセントにつけられていたのは不思議な物体だった。立方体の黒い何か。不可思議な紋様が表面を這う箱型のアクセント。

記憶の底をひっかき、確かチヨイスの開始時点からつけていたブレスレットだという事を、ツナは思い出した。チヨイスの時、リルとコルには共通の装備が二つあった。

一つは足元からプレートを作り空を駆けるTシューズ。

そしてもう一つ、このブレスレット。

瞬間、ブレスレットに備えられた立方体から、色鮮やかな紅蓮の劫火、嵐の炎が噴き出した。

「これは……！」

あのブレスレットは匣から出てきた兵器ではない。マフィアに伝わるリングでもない。

にもかかわらず、強い死ぬ気の炎が灯されている。それが意味するに、あのブレスレットはただのブレスレットではない。

「光努の存在が白蘭の未知だというのなら、光努が引き起こしたこの時代の出来事は、全て白蘭にとって未知の出来事になる。って、事なんだよね。そして、これがもう一つの答えだよ」

一際ゆらりと激しく燃え上がった嵐の炎は、一瞬の内に収縮し、ブレスレットの黒い立方体の中へと吸い込まれる。その瞬間、眩いばかりの閃光が空気を貫き、並盛町の上空に駆け巡った。皆が腕で光を直接見ないように顔を覆い、桔梗達も目を細めて眼前を

睨む中で、リルはかすかに笑ったような気がした。

「起動・オーバーン スカートランド・デー・バンドラ・レブリカバンドラの劣化匣。天地開闢を斬り開いて、流れる光芒で闇を裂け！」

空気を突き放し、眩いばかりの光が辺りを包んだ。

その場に太陽が降って来たのかと思うような極光の嵐。

だがその光は、次第になりを潜め、一点に収縮されていく。

その光景に、リポーンはなるほど、納得し同時に感嘆する。

（確かに、光努という存在がボンゴレ匣同様に、他のパラレルワールドに存在しない物だとしたら、その人物の行動全てにおいて、白蘭にとつては予想外の結果に代わる。つまり、今のイリスファミリーの人間達は、光努という未知の存在と共にある事で、白蘭にとつて予想外の力を持っている可能性が高い）

例えるのなら、光努という存在がいたからこそ手に入れることができた力、とか。

もしそうならそれこそが、イリスにとつてのボンゴレ匣になりうる。

次第に平たい円盤状に収縮した光は、ぐるぐると渦を巻く。円盤状の光の正体は、一本の細い光の回転。その勢いが衰えていくと同時に、現れた光の正体がなんとなくではあるが見えてくる。

黄金の柄に包まれて、前衛的な文様の施された装飾。同時に見るものの瞳に吸い込ま

れるような神秘性を纏い、その存在感は圧倒的に、その場の者を斬り裂くように威圧する。まだ空に残る太陽の光に反射した刀身をキラキラと回転させて、次第に緩やかに光を解いた物体は、その姿を現した。

「……綺麗」

ほつりと誰かが漏らした言葉は、その場の人間の心情を的確に表した。

神々しいという言葉で包みたくなるような柄と刀身。光が収まると同時に劍の全容が現わされて、誰かから感嘆の息が漏れる。

目の前に出現した劍の柄をリルは握り込み、一息の元に空気を切り裂いた。

「森羅万象の敵を討て！ 『クレイブ・ソリッシュ』！」

右に日本刀を、左に洋劍を。

リルの変則二刀劍デュアルコルド術の、本領発揮の瞬間だった。

「なんだ、いきなり剣が現れたぞ?!」

その光景を、川平不動産の前で見っていた了平や獄寺を初めとした全員が驚いていた。リルのブレスレットが光輝いた瞬間、光の中から現れた神々しい一本の剣。匣を開いた様子もなく、一体何をしたのかと。

その疑問には、リボンが答えてくれた。

「リルの身に着けているブレスレットは、パンドラの匣だぞ」

「え!?それって光努君を閉じ込めるのに白蘭さんも作ったやつだよな?」

「まあ白蘭は能力使って作ったみてーだが、元々パンドラの匣、如いては神器はイリスの専売特許だ。別に持ってても不思議じゃねーだろ」

「リボンさん。そのパンドラの匣っていうのは具体的にどういう物何ですか?まさか神話の伝承通りに中に災厄と希望が詰まってるわけじゃないですよ?」

ボンゴレ陣営の中で、比較的学校の成績もよく知識もある獄寺が質問をする。事実学校のテストは楽勝だと100点満点の解答をたたき出せるほどで、なぜそれで参謀ではないかといわれると、喧嘩っ早い性格とどこか抜けているところがある為である。

「実際はどうだか知らねーが、あのパンドラの特徴は少しだけ聞いた事があるぞ。なんでも、持ち手の死ぬ気の炎に反応して、物体を収納放出できるって物だそうだ」

リボーンの嘯み碎いた説明を聞いた各人の反応で、理解できたものは同時に驚く。「な、それってまるで……」

「ああ。構造や中身は別物だが、根本的な所は匣兵器と同じだ」

死ぬ気の炎を利用した収納と、中の物体を取り出す技術。

そう、それはまるで、今この時代の根幹となっている、匣兵器そのものだ。

「確か噂程度に聞いた事ある。匣兵器の設計図を作ったジェペットは、何か参考にした物があつたんじやないかって、匣兵器開発当初の学者の間で議論が一時期あつたらしい」

マフィア間の情報収集を担当していたフウ太は、思い出すように記憶の引き出しを開ける。人間は何か新しい物を作り出そうと思つたら、その元となる者が何かしら存在する場合がある。

それは全てが同じというわけでは無く、本来自然の中でしか存在しない物を、人工的に再現したりする。代々人は動物や虫などの構造や動きから、新たな機械を創造したり閃いたりする時も多い。

同様に、当時の学者たちは、ジェペットは何かを参考にしたのではと考えた。

具体的には、匣兵器同様の何かが彼の時代に存在したのでは。いわゆる、オーパーツと言われる程の何か。そうでなくては、数世紀も進むような発明をそう簡単にできる

わけがない。そう考える者も多くは無いが匣開発者の中にはいたのだった。

そしてその可能性が高い物が一つ存在した。

それが、イリスの神器、その中の一つである、『スカイトラ・デイ・パンドラパンドラの匣』。

なるほど確かに。

もしかしたらジェペットは、人間の生命エネルギーである炎に反応して動くパンドラの匣をヒントに、匣兵器の設計図を作ったのかもしれない。

最も、それを確かめる術は存在しない為、憶測の域を超えないのではあるが。

「なるほど。ありえねえ話じゃねーな」

無いと斬り捨てるには信憑性の高そうな噂。

「しかし、それで中身が剣一本というのは割りに合わないのでは？大層な物らしいが、あれでは普通の匣と変わらない気がするぞ」

了平の最もな意見。同様の意見を持った者達が多いが、逆にその意見は違うという考えの者もいる。リボンと、入江の二人だった。

それは、リルの取り出したあの剣の存在を知っている、いや、聞いた事があるからだ。

「この世界には、匣に納めることができない武器もあるんだよ。それだけ強力な物って事だね。だから、あのパンドラの匣で収納できる物に関しては、普通の武器とは考えない方がいい」

「つーことは、あの剣はただの剣じゃねーって事か？」

「そうなるよ、あれは一体何なんでしょうか？」

バジルの眼前で行われる空の戦いは、光と共に煌いている。

見た目だけなら普通の剣。しかし纏う存在感はこの場の群を抜いて際立っている。

「あれは神話の時代、多くの怪物を打倒し、悪しき魔神を滅ぼした神器。『炯然たる剣』、

またの名を——」

ギイイーン！

一際甲高い金属と金属がぶつかる音と同時に、空に舞う銀色の破片。

その光景に、入江達は自身の記憶の底を叩かれたようにその名をつぶやく。

詳しくは知らないであろう。だが、その名を耳にしたことはあるはず。

抜けば刀身は、三度世界を廻り煌々と光を照らしたし、悪しき絶望の闇を切り開くと

謳われた光の武器。

「——光の剣クラウ・ソラス！」

『舞い散る緋刃の白騎士』

それは空を踏みしめ光を纏い、風のように舞う天女のようなようだった。

紅蓮の劫火を纏う刀身を翻し、空気を焦がして一閃を振るう。

だが圧倒的な光と対を成すのであれば、それは暗く深い深淵でどす黒く蠢く闇その物。

黒き幻影の巨人は、その身を膨張させて、黒い闇を作り出す。無論それは、匣兵器

『霧ウミヘビ』ネツピア・センベルテ・デイ・マーレによって作り出した、幻覚の空間。

機器をも翻弄すると言われるトリカブトの幻覚能力に加え、それを増長させる霧の

匣。さらにもう一つ加えるのは、『雷ウミヘビ』エレットロセンベルテ・デイ・マーレ。

トリカブトがツナとの戦いの時に使用したのは、この二つの匣兵器。

炎の違う2種類の同種の匣は、薄く纏われた炎を注視しなくては見分けがつかない同型の匣。故に、霧ウミヘビと自身の幻覚に紛れ込ませ、雷の硬化によって硬質化させ、鋭い槍のように雷ウミヘビ本体を投擲して対象を刺し貫く。それが、トリカブトの基本ス

タイルだった。その間、自分は同じように霧の幻覚の中で静かに、獲物を待つ狩人のように、息を潜めて待つ。

ある意味二者一対の匣兵器。そして同時に、手元にある炎を纏えるタイプのチェーンソーで、近接戦闘も行う。

通常術士は幻覚能力を磨き、自身の肉体を疎かにする者の方が多いと聞くが、超一流の術士は、あらゆる状況を想定し、幻覚なしの攻撃方法を模索する。

現に、ボンゴレ霧の守護者六道骸やミルフィオーレ元6弔花の幻騎士も、剣と槍ではまた別だが、同様に達人と呼べる体術を修めている。

トリカブトも、遠距離中距離の霧の幻覚と匣兵器併用による対応、そして接近された時の攻撃手段。確かに、真6弔花と呼ぶにふさわしい実力を秘めている。

しかし、今日の前で行われている光景を見れば、その考えが霞む。

ツナとの戦いで見せられた力が、跡形もなく砕かれているのだから。

「朝ノ型伍・大樹折り！」
フィフスコッド ウェストリー・ストロム

伍ノ型は二刀の型。

一刀を逆手に、一剣を順手に。

同時同一方向からの二連撃は、刀身から漏れ出す赤い火の粉をまき散らし、正面を突き破らんと迫り狂うウミヘビの大群を、一刀いや、二刀の元に薙ぎ払った。

正面から碎きバラバラと撃ち捨てられ、瞬間、生物の根幹を破壊しようと、紅蓮の炎が焼き尽くしていく。

さらには、逆手の刀を瞬時に順手に持ち替えて、両の手を広げるように構える。

紅い光をちりちりと映すその眼光は鋭く猛禽類のように、眼前のみならず、自身の周囲にまで十全に気配をいきわたらせていた。

「夜ノ型式・斬華鳳仙！」
コードセカンドさんかほうせん

まるで大空を駆け抜ける鳥のようだったと言うだろう。

同時に、炎と共に舞い踊る鳳凰の如く。

嵐の炎を纏う二刀が翼のように、その場でステップを踏むように、回転しつつ周囲を警戒し、的確に自身に迫る黒刃を切り裂いていく。

まるで自身の周囲が全て見えているかのような振る舞い。背後から来た攻撃すら刀を背に回して視認する事なく反撃し、天地をひっくり返しまた一撃一撃。

遠くで狙うトリカブトを、まるでじりじりと追いつめるように一匹ずつ。

次第に数を減らしたウミヘビは、全て迎撃された。

（トリカブトのウミヘビを全て迎撃！先程の剣だけではああもいかなったでしょう。あれがイリスの神器……ですか）

あたかも嘲笑うかの微笑。だが、桔梗の頬には、わずかに冷たい冷や汗が流れる。

人は未知に恐怖する物だ。一寸先は闇という言葉があるように、それが何かわからない時、人は恐れを抱く。しかし桔梗は恐怖しているわけでは無い。だが、リルとその手の剣から、底しれない何かを感じ取っていた。

匣兵器の中に入った剣では、強度が足りず途中で崩壊も必死だったが、それを可能にしたのが二振りの剣。天國刀アマクニトウと、炯然ケレイソウリツシユたる剣。

(だが、我々はその技も知っている。それはトリカブトも同様。そしてウミヘビがやられた今、あれをやりますか？トリカブト)

「哀しき者よ」

地獄の底から響く様な、トリカブトの声が聞こえる。

右手の指に詰め込まれた、霧のマーレリングから噴き出す霧の炎。

そして左手で自身の上半身を開くと同時に、その下の素肌を見せた。

手を見てもわかる、到底人の肌とは思えない赤褐色の肌。そして本来刻むべき心臓のある旨の部分に、ミルフィオーレの紋章の記された匣が埋め込まれていた。

「あの面、やつぱり。それに胸に……匣!？」

異形なトリカブトの姿に驚いた表情を見せるリル。

トリカブトはそのまま、自身の胸の匣に炎を注ぎ込んだ。

当然、普通の匣の様に蓋が開く、なんて事は無い。極大化した藍色の光が球体状に、ト

リカブトを中心に膨らみ、弾けた。

飛び交う霧の炎の中で、リルは刀と剣を容赦なく構える。

「ツナ、アレ何か知ってる？」

「リボーンの通信で今聞いた。並中に現れた真6弔花も使った奥の手、修羅開匣しゅらかいこゆうと、言う
そうだ」

修羅。

その言葉を脳裏にこびり付け、炎が晴れると同時に現れた異形に、皆一様に瞳を見開き驚愕を表情に宿す。

だらりと手を垂らし、鈍い眼光は辺りを射貫く。

だが最も異形と言わざるを得ないのは、霧でできた様な二対の羽と、さらさらと崩れそうな触覚。まるで蝶か蛾のような丸みを帯びた形状の羽だが、見ただけで委縮しそうな模様。目玉がいくつもあしらい、黒々とした模様に染め上げた、見る者の背筋を撫でるような不気味な形。

その姿は、明らかに人間の範疇を超えている。

全員の視線が、修羅開匣によって異形の変貌を遂げたトリカブトに集中する。

だがその瞬間、トリカブトの周囲の空間がぐにやりと歪んだ。

「これは、幻覚！」

「この幻覚、チョイスの時よりも強い!!」

修羅開匣とは、人間と匣兵器の能力を掛け合わせたミルファイオーレ独自の匣。

直接人間の体内に埋め込まれた匣に炎を注ぎ、自身の肉体と元となる匣兵器そのものが融合し、強力な炎と力を発揮し、他者を蹂躪する。

雲雀に倒された、晴れの真6吊花であるデイジーの場合は、トカゲと融合された修羅開匣。晴れの炎の特性である活性は、主に傷の治癒など、細胞の活性に使われる場合が多いが、デイジーのそれは傷の治癒なんて生易しい者ではない。通常の活性に加え、トカゲの尻尾の自切と再生能力を掛け合わせ、腕を切断されようとも一瞬で元から再生する程の能力。

それを雲雀は、再生スピードを上回る雲の増殖により、圧倒的な力で敵を拘束した。

雲雀のボンゴレ匣であるハリネズミロールの形態変化は、カンピオフォルマ初代雲の守護

者、何者にも囚われず我が道を行く浮雲と謳われた、『アラウデイの手錠』。

ただの手錠と侮つたのは、デイジーの決定的な敗因だっただろう。

自身の手を、足を、体を、首を、全てを大小様々な手錠で、自身の肉体を切り離すすらできず、再生するスピードすら上回る雲の増殖により、締め上げられ破れた。

今のトリカブトに掛け合わされたのは、蛾の擬態。

蛾の持つ擬態能力を進化させた、トリカブトの目玉を見た者は、五感を奪われ、真実

を見失う。見るだけで幻術に掛かるといふ、初見では防ぎようのない能力。

現に、能力を知っていた桔梗とブルーベルはトリカブトの開匣前から瞳を閉じて、幻覚空間から逃れて悠々と飛んでいる。

今のツナ達は、天地上下の感覚が狂わされ、地上にいたりボーン達は自身が今どこに立っているのかすら曖昧となっている。

足元に空が、頭上に町が、右に雲が、左に空が、ぐにやりと歪み視界に入る者が全て信じられなくなる世界。すでにトリカブトの姿など、虚空の中に溶け込み消え失せる。

歪む霧の視界は、ツナの超直感すらも封殺する。

(ハハン、後はイリスのリルを倒し、ユニ様の確保の報告を待つだけです)

ザシユツ!

つい少し前に聞こえた、何か突き刺すような、切り裂く様な鈍い音。

気が付けば、リルが先程までいた場所には、さらさらと罅と共に崩れ落ちるTシューズのプレートのみが残っており、後方、ユニとYのやや横の位置で、リルは虚空を突き刺すように剣を振りかざしていた。

「!?」

ガギイ!

何か硬い感触にぶつかったと思ったら、何もない歪んだ空間からトリカブトの仮面が

わずかに覗き、またすぐにその姿をかき消した。

「何!？」

思わず目を開き、桔梗は今起こった現状を把握し、同時に驚愕する。

トリカブトの幻覚は元々超一流、さらには修羅開匣によつてそれが何倍にも強化された。

同じ真6弔花としても、喰らうのは、対処方法があるとしても勘弁してほしい所。

ちなみに真6弔花式トリカブトの修羅開匣幻覚対処方法は、360度容赦なしの全方位攻撃が一番手っ取り早いらしい。

だが、リルはその位置を把握した。

天地すら歪ませるトリカブトの幻覚を、何らかの手段を得て破った。

(これは予想外ですね。イリスで我々の相手になるのはせいぜい白神光努とハクリくらいだと思つていましたが、少々認識を改める必要があります。本人が、というよりは、あの神器の方がこの場合問題でしょうね)

視線を鋭くし、じつとリルの手元の剣を見つめる桔梗。

わずかにも、刀身に時折陽炎のように炎が不規則にはためく。

(おそらく、幻覚を破った種はあれにある)

不意に、リルは何か反応したように、右手の炯然たる剣を逆手に、自身の正面より

もやや右斜め上の方へと腕を上げ、劍の腹を盾に見立てるようにして構える。

ギイイン！

その瞬間、甲高い音と同時に劍に衝撃が走り、陽炎のような靄と同時に、劍の腹にぶつかるトリカブトの腕と面がわずかに見えた。だが攻撃が失敗したと分かると、再び霧にまぎれ、何もない空間へと姿を画す。

自身からの先制の攻撃と、相手の攻撃に対する後の先の防衛。

一度目ならまぐれと片付ける事もできたかもしれないが、リルは二度も行動を成功させた。

「あなたには見えているというのですか、トリカブトの姿が」

呟くように語り掛ける桔梗の言葉は誰に聞こえることなく空に消える。だがまるでその言葉に反応するように、リルはわずかに笑みを浮かべた。

ぱちりとわずかに耳に残る音と同時に、リルの手にある2本の劍、炯然たる劍と天國クレイブ・ソリッシュの刀身に、純度の高い雷の炎が同時に纏われた。

薄く、だが閃光は研ぎ澄まされたように鋭く、無数の名刀を纏うようだった。

リルは足を曲げ、一足の元に空の上、さらに上へと飛び出した、遙か上空へ来たところで、天に向かって2本の劍を構える。

迸る緑色の電流。

斬り結んだ2本の閃光が、あたりを照らした。

「朝ノ型伍・十字劍！」

劍を交差させるように構え、一息に振り抜く。

空に捧げる十字架のように、あたりを十字に飛び出した雷の閃光が煌き、まるで夜空に輝く一番星のようだった。

見えない何かにたいする攻撃。そしてその攻撃は、当たった。

ギヤイイーン！

どこに隠れていたのか、誰も検討のつけられないトリカブトの本体が、切り裂かれた劍と炎を避けきれずにまともにくらい、空に打ちあがる。

（あの技は私も知っている。トリカブトも同様に。それを喰らうという事は、予想だにしない攻撃の範囲と威力！）

知っている攻撃で避け方を知っていた、だからこそ当たった。

白蘭によって技の攻略法を伝授された真6弔花は、相手の攻撃技に対して、ギリギリのラインで、わずか触れるか触れないかという所で精妙巧緻に避ける事ができるだろう。

それは相手の技のタイミングと場所さえわかれば、たとえ目を瞑ったとしても、予定通りの場所へただ体を持っていくだけでよい。

だが、その攻撃にわずかなブレがあれば、結果は変わってくる。

本来なら超一流の達人たちにはそんな物は存在しない。それは型に対する真つすぐな姿勢を否定するものではなく、良い意味でのブレ、異彩。

揺らぐわずかな炎の瞬き。通常より明らかに巨大で長い剣。

そしてただの剣なら纏うだけで碎け散りそうな、雷雲を呼び起こすような嵐の奔流を纏う強大な炎。

可能性の中でなら、リルという少女の剣を避けることは難しくないだろう。

だが、今リルの手元にある2本の剣は、白神光努という8兆分の1の存在のみという異常なる特異点によってもたらされた宝剣。

例え他のパラレルワールドにその存在があろうとも、リルの手元に来る事ができたのは、この世界のみ。故に、全ての可能性の世界を覗いた時、同じリルという人間であろうとも、今この世界のこの場にいる少女こそ、その中で最も強い固体と言える。

トリカブトを切り裂き打ち上げたリルは、くるりと宙で一度周り、再びツナとユニ、γの近くにすたりと軽やかに降り立つ。

ボンゴレに伝わる優れた第六感、超直感を持つツナにも見つける事が出来ないトリカブトを、ほぼ一方的に切り裂き圧倒するその光景に、ツナ同様3人とも驚いていた。

「リル、トリカブトの場所がわかるのか？」

「分かるって言うか、感じるといふか。トリカブトって、少し人と違うから」

それを言うなら、真6弔花は全員もれなく人間をやめている宣言をしているのだが？ そんな疑問をツナは飲み込んだが、リルは特に気にした様子もなく辺りに気配を張り巡らせる。

周りを見渡しているわけでは無いので、視界に捉えている、というよりは、その気配を感覚的に感じ取っている、という方が近いのだろうか。

その時、ツナは妙な物を見た気がした。

ピクリと、まるで意志があるかのように、リルの手に握られた^{クレイブ・ソリッシュ}炯然たる剣がわずかに動いたのを捉えた。リルが剣を動かしただけかもしれないが、ツナにはなぜか直感的に、剣が自分から動いたように思えた。ありえないことだが、この超直感が外れた事は無い。

先程のリルがトリカブトに剣戟をたたき込んだことにより、周りをぐにやりと歪ませていた修羅開匣の幻覚は、徐々に薄まっていた事も幸いしている。

「……あっち」

そうほつりと呟くと同時に、リルはその場から跳び出した。

その方向は、先ほどツナが視界の端に捉えた、剣がピクリと動いた方向だった。

「あれは、神器・炯然たる剣の力の一つです」

ふと、ツナの背後、Yに背と足を支えられて抱えられたユニの言葉から、先ほどのツナの疑問に答えるような声が聞こえた。

「炯然たる剣は世界に蔓延る魔性を打ち砕く古の宝剣。それは闇に対して、多大なアドバンテージを得る事でしょう。そしてその力は、リルさんの持つ闇に対する感覚を極限まで高めている」

「闇に対する感覚？」

それが何を意味する事なのか分からない。

しかしユニの視線は、空を駆け抜けるリルに固定されている。

その瞳は、リルという少女の姿を捉えているだけでなく、その存在を見極めるかのような瞳だった。

「それにおそらくですが、あの剣にはまだ見せていない力があるはずですよ」

ツナはユニという少女の事を詳しく知っているわけでは無い。だが不思議と、その言葉はすんなりと、ツナの心の内へと入り込み、信じさせられる。それは悪い意味など一切なく、その少女の不思議な雰囲気と真剣な眼差しが、そう思わせているだけかもしれない。

い。だが、その言葉に偽りが無いことは、ツナは直感的に悟っていた。

ギイイーン!!

ツナとユニの会話を中断するような甲高い音と同時に、再びトリカブトが全員の視界に映りだした。

「夜ノ型参・終墮^{ついでん}天!」

炎を纏う2本の剣閃が、円を描くように一撃でトリカブトの本体ではなく、背中に生やした2本の羽を容赦なく切り裂いた。

トリカブトの幻覚のトリガーとなる羽の目玉模様。一瞬で霧散させられた今、辺りを歪ませていた力を失せ、既にツナ達全員、正常な視界と感覚を取り戻していた。

もはやトリカブトには、避ける力すら残っていないのかもしれない。

「にゅー! 一体どうなってるの! トリカブトやられちゃってるじゃん!」

「ふむ……手伝いましょう。今トリカブトがやられると、ユニ様奪還に少々手間がかかります」

真6弔花の中で戦闘能力だけを見るならば、桔梗にとつてはトリカブトという存在は、正直に言えばいてもいなくても問題ない存在だった。それは桔梗の隣で騒ぐブルーベルも同様。それだけ、自身の戦闘能力に絶対の自信があるからともいえる。

だが、ユニという無傷の捕獲対象がいるとなると、圧倒的な殲滅力はむしろ愚策。気配を断ち惑わせられる隠密能力の方が、この場合欲しい戦力の形。

だからこそ、トリカブトに加勢しようとした時、咄嗟にその場を立ち止まった。

ズガガガアン!!

まるでレーザーのような、黄色い閃光のような銃弾が桔梗の前をわずかに掠めた。

下を見て見れば、バジルの匣兵器である雨デルファイノデイビオツシャイルカに乗ったりボーンが、殺気を込めた銃口を桔梗に向けていた。

同時に、桔梗の前に瞬間的に現れる人物。

「どこに行くつもりだ。ここを通るなら、俺が相手になるぞ」

澄み渡るオレンジの炎を額と拳に纏い、悠然と桔梗の前に立ちふさがる影。

ツナは全てを見透かすような瞳を向けて、堅く拳を握り込んでいた。

「……ボンゴレX世デーチモ」

涼し気な笑みを消し、眼前に立ちふさがるツナを見て、桔梗は呟いた。

互いに炎を噴出し、対面するツナと桔梗。

だがその瞬間、桔梗の背後で一人動いた。

「にゅにゅー! いっけー!」

雨のマーレリングを持つ真6吊花ブルーベル。

手元の匣から跳び出した雨カタツムリが、空を駆けるリルの元へと向かう。

だが、彼女の元へと行く前に、眼下の地上から跳び出す無数の炎を噴き出す弾頭が、全て手前で迎撃した。

「何!？」

桔梗はその光景に地上を見れば、こちらに向けて構える獄寺の姿があつた。

「邪魔は……させねえよ!」

中遠距離専門の獄寺と言え、ツナ達のいる場所は民家の屋根より遙か上。そこまで炎の弾丸を飛ばし、尚且つ迎撃できる技術となると、先ほどの負傷も踏まえると流石の一言だつた。

どうあつてもリルの邪魔をさせない。

その意図を体現するボンゴレの連携に、桔梗とブルーベルが小さな苛立ちを募らせる中、全員が不思議な感覚に駆られ、不意に同じ方向を見た。

空の上にいるリル。周りには誰もいない。

いや、本来ならいるであろうトリカブトが、おそらくその姿を残った幻覚能力で隠しているのだろう。だがリルは、何もない空間を薙ぐように手に持った炯然たる剣フレイム・リッシュを構える。

そして、全員の度肝を抜く様な行動に出た。

「せーのっ!!」

握りを強めた柄から手を離し、上空へと投げ飛ばす。

あろう事か、わざわざ武器を手放す暴挙にでた。

『なっ!!』

これには敵である味方であるツナ達はおろか、敵である桔梗たちも驚きに表情を染めていた。

だがリルに何か問う必要も無く、妙な事態に気づいた。

パチパチと鋭い、雷の炎を耐電する^{クレイブ・ソリッシュ}炯然たる剣は、上空から落ちるようなことなく、クルクルと回り続けている。一際強い発光と同時に、その動きをピタリと止めた。

見えない何者かが触れた用に、見えない何物かに導かれるように、触れられていない宝剣は閃光と共に、一直線に、独りでに、何も無い一点に向かって跳び出した。

「な！剣が独りでに動いた！」

誰かが叫んだだろうが、この場の全員の言葉を代弁している。

文字通り、触れることなく剣が一人で、意志を持っているかのように動いていた。

本来なら異常な光景。だが、ツナを含め、この場にいる全員は、あのように勝手に動く剣に、意外と見覚えがあった。

「あれはまるで、イリスの『4本の^{グラディエイオーロ・クアットロ}グラジオラス』」

イリスファミリー技術主任のルイが作り出したとされる、使い手の意志で操作ができる自動飛行剣型の匣兵器。斬り裂く事も防御する事も、上に乗り移動することもできる万能型だが耐久力に難のある匣。

チヨイスの時には皆見たが、まるでそれだ。

だが、その中でリボーンは、その逆かもしれないと考えた。

最初に見たからこそ、目の前の炯然たる剣クレイブ・リッシュが似ていると考えたが、本来神器は人の歴史を遙か遡った先を起源に持つ。そしてイリスが管理する神器の一つである事と、匣兵器とパンドラの匣の件。

(もしかしたら、ルイはあの神器から『4本のグラジオラス』グラデイル・オロ・クアットロを考案したのかもしれないな)

ありえない話ではない。むしろ、その方が可能性は高いかもしれない。

リボーンはさらに思考しようとした矢先、再び訪れる鈍い音。

ザシュ！

何も無いと思われていた一点に向かい、何かに突き刺さるような音と共に空間に固定された宝剣は、一瞬深い霧の炎に包まれた。だが同時に、やはり一瞬で霧が晴れると同時に、剣に貫かれるトリカブトの姿顕わになった。

「あ……………ぐ……………が」

言葉にならない言葉をわずかに発するトリカブト。

独りでに動き、霧に隠れたトリカブトを感知して自動で攻撃する。

これでは本当にリルの匣兵器と同じ、いや、おそらくそれ以上の能力を確実に秘めているだろう。そうでなくては、神器などと言われない。

もしかしたら先ほどのトリカブトの修羅開匣による幻覚も、リルが感知したというように、炯然たる剣自らがトリカブトを探し出して攻めていたのかもしれない。

後で本人に確認してみよう、そう思ったリボン。

だが一つ気になるのは、リボンも聞いたユニの言葉。

(闇に対する感覚……か)

しかしそれに関しても、リボンには思い当たる節があった為、今は深く考えないのであつた。

そして、宝剣を打ち上げトリカブトを空に縫い付けたリルが開いた手に持った者は、

「何？匣だと!？」

驚いたのは桔梗。

ミルフィオーレの集めた情報の中では、リルは剣の匣以外には持ち合わせは無いはず。

この時代だと割とポピュラーであり最も強いとされるアニマル匣を、リルは持ち得て

いない。それは双子の弟であるコルにもいる事だが、それなら何の匣かという事。

太陽と月と星を虹で結んだようなイリスの紋章が刻まれた、純白の匣。

リルのDリングから迸る紅蓮の嵐の炎が、匣に注入された。

「開匣、『白夜の騎士！』」

嵐の炎が注入され、匣が開くと同時に飛び出した物を見た時、それが何かなわからなかった。なんと形容すればよいのだろうか。

ただただそこに現れたのは、一つの灯火。

美しく、全てを染まりそうな色の無い、一切の揺らぎの無い純白の炎。

だがそれは、本来ならそこにあるはずの無い炎だった。

「な、あれは！・白神光努の白夜の炎!!」

気のせいかとも思ったが、あれは見間違うはずない。

透き通るような純度の高さすらも瞳で分かる、澄み渡る純白の白夜の炎。

皆が驚く中で、白夜の炎に向かってリルは天國刀を、さながら鍛冶師のように、一瞬の躊躇もなく突き刺した。

実態の無い炎をするりと突き抜けると同時にその炎を刀に纏う。そしてその炎に呼応するかのよう、リルの持つDリングから迸る嵐の炎が絡み合った。

紅蓮の嵐の炎と、純白の白夜の炎。

本来混ざり合うはずのない二つの炎が一つとなり、リルの刀に纏われ輝きを放つ。

それは暖かい光。

赤と白、二つが混ざり合い色合いを変えた炎は、美しい光の柱となって辺りを包み込んだ。その光は次第に収束し、リルの手元に収まる。

煌々と燃え上がる緋色の炎。

合わさる二つの炎が、新たな力を生み出した。

チヨイスの時に見た、全てを分解し燃やし尽くす焼き鏝のような紅蓮の剣ではない。

見るも鮮やかに、桜のような美しさを持った緋色の剣。そうでありながら、どんなものでも斬り裂けそうな、鋭い威圧感がにじみ出ていた。

驚愕に次ぐ驚愕の嵐。

しかし、皆が驚く中で、リルは足元を踏みしめ疾風の如く空を駆け、トリカブトの元へと迫った。

「セブンスコード漆ノ型・はくどうさいしき白道彩式・ひおうじん緋桜刃」

宝剣に抑えられた幻影の巨人は、微動だにできない。

何物にも抜け出せない枷に貫かれ、迫り狂うは緋の斬撃。

振るう刀は流麗に、大気を振り切り駆け巡る。

一直線に迫つたリルの剣は寸分の狂いもなく、トリカブトの面を両断した。

崩れ落ちるトリカブトと同時に、リルはふらりと、糸が切れたようにその場で倒れ込む。何もない空虚な空の上へと倒れ込み、下へ下へ落ちていく。

それでも、彼女は満足そうだった。

その手には、トリカブトのローブから取り出した、スカートラ・デイ・バンドラ・メタパンドラの疑似匣メタが握られていた。

「やっと、取り戻したよ、光努」

その表情は晴れやかに、柔らかい微笑みを浮かべる。

そして同時に、瞳を静かに閉じて、風に舞う木の葉のように、落ちて行つた。

『あなたは一体何?』

最初に白神光努という人物に合った時、第一印象は、一体何?だった気がする。それもそのはず。

太陽の昇る青空を突き抜け、雲を突き抜け、灰色のコンクリートでできた建物を崩壊させて、空から降って来たのだから、そう思うのも無理はなかった。

子供心に、一体何?という感情が一杯だった。

崩壊した建物の瓦礫の上から無傷で出てきたときも、一体何?だった気がする。

そのすぐ後、私は双子の弟のコルと一緒に、光努に挑んだ。

灯夜がやれって言ったのもあつたけど、純粋に興味もあつたから。子供ながらに剣を扱っていたこともあり、そうそう負けるつもりも無かつた。

けど、結果としてはあつさりとおしらわれた。

全ての攻撃を余裕で躲かれ、普通に気絶させられる。

灯夜やパパ、槍時や籠意外でこんなにあつさりやられたのは、初めてだった。

無論、ルイは当時から身体能力が格段に低かつたので、最初から除外している。

それなりに戦える自信があつたこともあり、コル共々灯夜からその後光努がイリスの

ボスになると聞いて、反感を覚えた。

まあその時は本気で嫌っていたというよりかは、負けたのが悔しかったから反抗的になつたのが感情のほとんどだったと思うけど。

同じ気持ちだったからか、コルと一緒に再び光努に戦いを挑んだ。

結果としては、これもあつさりど躲され一撃も入れらなかつた。

実力差がかけ離れすぎている、そう考えた事も、よく覚えている。

その後だった。

当時ルイ達技術舎にある新技術のデータを狙ってきたカルカツファミリーの戦闘員達がイリスに攻め込んできたのは。

正直あの程度の戦力なら、私とコルの二人でも撃退できたかもしれない。まあ実際によれば数と武器があるから無傷とはいかないかもしれないけど、最終的に全員制圧する事も実力的にはおそらく大丈夫だったと思う。

けど、ちようどいたから光努も共に戦ってくれた。

手足を無謀に振り回し、それでも一騎当千の膂力を誇る光努の攻撃に、カルカツサの兵隊はなすすべなく吹き飛ばされていく。綺麗に吹き飛ばぶから実は見えて結構爽快だったかな。

ほぼほぼ敵が蹂躪されたので、後はもう隊長の人を光努が倒すだけ。

けど、恐るべき事にその隊長がした行動は、自爆。

広範囲の数メートルを一度に爆破消滅させる高出力の爆薬。

無論、そんな物を今いる場所で起爆させれば、部下の人はもちろん光努もコルも私も、全員消えてしまう。

流石に刀の種類とか剣筋ならまだしも、子供の頃は爆薬に関してはそのなりに詳しくなかつた為、すぐにその非常事態に気づくことはできなかった。それに気づくことができたのは、その爆弾が爆発した後だった。爆発はしたけど、私達は無傷。

およそ人が視認できる限界を超えた様な動きを見せた光努によって、起爆するまでのコンマの時間に、光努は爆弾を打ち上げた上空で爆発させた。

私達を、守ってくれた。

それも、私たちがさっきまで光努を攻撃していたにも関わらず。

光努からしたら子供の猛攻（普通の子供じゃないけど）なんて怒りの対象じゃないけど、私たちの的には割とマジだったのもある。

それでも、守ってくれた。

脅かされそうな命に対して、初めて光努が敵に対して怒りを見た瞬間だった。

ほぼ初対面だったから初めて見た事は疑問じゃないけど、その後過ごしていく中で、光努が怒った所は一度も見た事が無かつたから、あれはすごく珍しい光景だと後々わ

かった。

その時からだった。

白神光努という人物が、自分の中で大きくなっていったのが。

イリスファミリーの正式なボスとして、というよりは、自分の上にいる存在として子供ながらに認めた瞬間だったのかもしれない。

それからだったか、よく光努にコルと二人で懐いたのは。

灯夜達大人組程年齢が離れていなかったというのもあるかもしれない。

子供らしく場や空気を引っ掻き回す事もあったが、光努はそれを楽しそうに笑って流したり構ったりしてくれた。

光努が来る3年前、ママがルイと技術主任を交替してからイリスの母屋にいる事が少なくなった。パパは元からあっちこっち行ってたけど、一番灯夜と一緒にいる事が多くなった。

灯夜は構ってくれるし、イリスの敷地の技術舎の人や他の人達も遊んでくれるから、寂しくはなかった。けど、どこかぼつかりと穴が開いたような感覚。

子供のには両親不在というのは中々に堪える出来事だ。

戦闘力と精神力は一般の子供より高くても、やっぱり日に日に寂しさは少しずつ募っ

ていく。たまに帰ってくる事もあったけど、再び出かけるときはまた同じ感情が芽生える。

そんな空虚な穴を、光努が埋めてくれた。

遊んでくれた、一緒にいてくれた、笑ってくれた。

だから、光努がいなくなったと分かったときは、すごく悲しくて、すごく泣いた。あまり感情を表に出さないコルも、このときは珍しく涙を見せた。

だから、10年後の今再び出会えた時は、私もコルも喜びに満ち溢れた。

ミルフィオーレの日本支部に攻め込む準備をしてと言われる段階で光努の存在は教えてもらったけど、実際にメローネ基地で会えた時は感極まった。私達が最後に見た光努の姿がそこに、10年前の姿のまま迎えてくれた。

過去から来た存在だってことは知ってる。

本来この未来にいるはずのない存在だってことも知ってる。

けど同時に、光努本人だっていう事は、嫌でもわかった。

振るうその力を、溢れる自信を、澄み渡る強い意志と炎を。

ミルフィオーレとの戦いの真つ最中だっていう事は分かっていたけど、それでもチョイスが始まるまで光努と再び過ごした日々はすごく楽しかった。光努はいつも心底楽

しそうに笑っているけど、それは別に内に不安や寂しき、負の感情を隠しているからじゃない。本当に、今という瞬間を楽しそうに生きているから。

だからなのか、私達も楽しかった。

知らないことが知れて、新しいことを体験できて。

チヨイスの最中で、光努が再び消えたことには憤慨した。コル共々一瞬思考がぐるぐる渦巻き視界が紅く染まり、我を忘れそうになったけど寸前で灯夜が止めてくれた。正直止めなくても別によかったけど、その後はなし崩し的に並盛に行つて、ツナ達を見つけてトリカブトと戦った。

そして、ようやく光努を閉じ込めた元凶、パンドラの匣を取り戻せた。

けど、そろそろ意識が途切れてきた。

傷をそのままにして炎もふんだんに使い神器も使ったから、当然と言えば当然だった。

このまま落ちたらどうなるのかなあ。そんなことを考えるけど、私の中ではそれほど危機感は抱いていない。というより、危機感が考えられないといった方が正しいかもしれない。

それよりも、今は喜びに満ち溢れていたから。

暖かい感情に身を包み、私は重力に従って動かない体と共に、並盛の町へと落下して

いた。

「リル!!」

叫んだツナの手がわずかに空を切り、リルは上手く力の巡らない体を宙に投げ出し、高所からの落下を続けている。

傷口から流れ出る血が粒となって空に散らされ、既に炯然たる剣はクレイブ・ソリッシュその姿を光の粒子に変えて、リルのブレスレットに備わった、スカイトラディバンドラレブリカバンドラの劣化匣に吸い込まれた。

体力と炎を使い果たして落下するリル。

上手く四肢に力を入れられないが、その胸に抱きとめた、ミルフィオーレによつて作られたスカイトラディバンドラメタバンドラの疑似匣だけは、大事そうに抱えたままだった。

「マズい……。ツナ！リルにはもう力は残って無いぞー！」

リボーンという言葉を聞かずとも、今のリルの様子を見れば誰が見ても一目瞭然だ。

そうでなくても、あの傷で動いていたという事事態が異常だ。それだけ、彼女にとつて譲れない戦いだったという事だろう。

ツナが炎を放出し、リルの元へと一目散に飛び出そうとした瞬間、目の前を紫色の炎が纏われた雲カンパネラ・デイ・ヌーグオラ 桔梗が高速で通過し、ツナはその場に強制的に止められる。みれば、雲のマーレリングに鮮やかな炎を宿した男、桔梗が微笑を浮かべていた。

「ハハーン！放っておけば無残に散る者を、わざわざ助けに行かせると思いますか？！」
「くっ！」

桔梗の涼し気な言葉に、悔しそうな表情をするツナ。

真6弔花の優しきリーダーを称するだけあり、柔かな佇まいの中にも隙が見当たらない。今背後を見せたのなら、問答無用で背中を貫いてくるであろう鋭い殺気。

そうこうしている間にも、リルは落下を続けていた。

だが、後数秒で皆の五感に感知されるであろう迫りくる人影を、誰よりも早くツナの超直感は捉えた。ツナのわずかに動いた視線と動作に、相対していた桔梗も、何かが迫ってくるのに気付いた。

並盛町の屋根よりわずかに高い位置を、空間を踏みしめ高速で移動する人影。

一際強く空を蹴ったと同時に、音速を超える弾丸のように上空へと飛び出した影は、落下するリルを受け止めた。

炎を纏う匣アニマルに乗ることも無く、炎を噴出することも無い移動方法。こんな事ができる人物は、そうそういない。

「そんな怪我でよく動いていたね。あんまり無茶はしないでよ、リル」

「……あれ?……コル」

わずかに残る意識の中で、リルは自身が誰かに抱えられて空の上にいる事がわかった。

やれやれとため息交じりの表情の中で、彼にしては珍しくわずかに笑みを浮かべた表情をしていたのは、リルの実弟、双子の弟であるイリスファミリー第二戦闘部隊『シヤガ』の一員、コルその人だった。

腰には蒼い柄糸を巻き付かれた、リルと色違いの天國刀を差し、指に嵌められた龍を模した雨と雷の二対のDリングを填めた手で、リルの背と膝裏を支え颯爽と現れた姿は、まるで物語に出てくるヒーロー然としていた。

「必死はいいけどリルが死んだら元も子もない。人の事は言えないけどね。まあでもとりあえず、お疲れ様」

リルの胸に抱えられた匣に目を向けて、姉を労うように微笑みを浮かべた。

「コル!リル!大丈夫か!」

リルを抱えて空中に佇むコルの元へと、ツナはやってくると共に声を荒げる。

しかし、腹部を血で染めながらも、わずかに残つてゐる意識の中で微笑みを作りながらひらひらと手を降るリルの姿に、ツナは安堵の息をつく。

しかしコルは、ツナは先ほどまで桔梗に足止めされていたがどうやったのかと疑問に思つたが、見てみると、桔梗と、じたばたと暴れながら抱えられているブルーベルの二人は、遙か遠くの方へと向かい、既にこの場を離脱していた。

その際、縦に一刀両断されて面を切り裂かれたトリカブトを抱えながら。

(あれは、真6弔花の桔梗とブルーベル。それにトリカブトか。リルの炯然たる剣クレイブ・ソリッシュと衝突したの呪具の気配、トリカブトのあの面か。やっぱりその類。なるほど)

ここに来るまで感じた気配と、現場の状況により、コルはこの場で起こつた事態、リルとトリカブトの戦いの全容をおおよそ把握した。その場にはいなかったが、神器や匣等、ツナ達の知らないイリスの事情を知っていたから、というのもあつた。

何はともあれ、当面の危機は去つたといつてもいいだろう。

敵の目的であるユニは守り切り、尚且つ敵の戦力であるトリカブトを落とす事に成功した。そして、光努がとらわれたパンドラの匣も取り戻した。

抱えたりルに負担を掛けないように、コルは緩やかに、ツナ達と共に地上へと降り立つのであつた。

「んー、デイジーにトリカブトまで、やられちゃったかー」

日本国内某所に設置されている、ミルフィオーレ所有の高級ホテル。

その最上階スイートルームの一室で、白蘭は部下の結果報告に対して、一欠片も不満を表情に出さずに、楽しそうに答えた。

しかし、その姿はチョイスの時と比べて随分変わった。本人は変わっていないが、額には熱冷ましの冷却シートを貼り、口には体温計、そして毛布に包まりふかふかのソファに寝転がった、まるで病人のような出で立ち。

まるで、でなく、病人ではないが体力が著しく低下している事は否定しない。

ツナ達が急遽潜伏先に指定した川平不動産を探す為に、並盛に来てから一度並行世界を覗いている。これには昔と比べて一度に一つの事くらいしか知る事が出来ず、一度に多くの体力を消費する。

パラレルワールドの自分と思惟を共有できるといつても、入江が知っているのは白蘭が能力を発現して早い時期の時。時間を重ねるごとに、その能力は着実に衰えていた事

までは知る由もなかった。

しかしそれは、ユニには感覚的に伝わっていたようだったが。

「バーロオー！ やつぱりあの不動産屋にいやがったのか!!」

白蘭の前で、膝を付きながら苛立たしげに加減して床を殴っているのは、嵐の真6甲花である男、ザクロ。

白蘭が調べるよりも早く、ボンゴレアジトにてスクアーロを下し、残留した気配を辿って川平不動産を発見した事に関しては流石の一言だが、その後上手く川平不動産に住む通称川平のおじさんによつて騙され、富士山までいもしない敵を追いかけて、今さつき帰つて来たばかりという。その結果に、ブルーベルはけらけらと笑い転げていた事にさらに腹を立てたのだが。

「それで、ボンゴレ匣はどう?」

「はい。チョイスの時とデイジーの闘いの記録を確認しましたが、驚きこそすれ然程の脅威とは思えません」

実際に対峙したわけではない桔梗の意見。

確認できたのは、ツナのボンゴレ匣と山本のボンゴレ匣、そして雲雀のボンゴレ匣。

全員を確認したわけでは無いが、そのおおよその性能。アニマル匣としての力と、ボンゴレ独自の技術、カンピオフォルマ形態変化を確認しての桔梗の評価としては、問題なし。

例え自身の目の前に発とうとも、勝つ自信の表れの言葉だった。

「ふーん、そう。それで、リルちゃんが使ってたってという神器はどうだい?」

もう一つ白蘭が気になるのは、トリカブトが敗北したという、イリスの神器について。

リル自身も深手を負ったとはいえ、単独で真6弔花を仕留めたという力。

トリカブトがリルの剣術の技を理解し攻略してなお、それを超える力を見せてきた。

「確かに神器には驚きました。全容を表したわけでは無い可能性もありますが、それでも、こちらも現段階では脅威とは思えません。トリカブトやデイジーも我々の中では弱い部類です。それにこれは憶測ですがイリスのリルは、トリカブトにとってはおそらく最悪の相性だったと思います」

「まあね。なんせ、彼女はアヤマのリーダーである『魔剣』の娘だからね。トリカブトの面と同じような呪具に対しては、僕らよりも理解があるかもしれないしね」

ほぼほぼ予想通り、というような白蘭の楽し気な言葉。

トリカブトを見出した張本人である白蘭であり、この世界で最も情報を持っているといつてもいい男である。だからこそ、この二人がぶつかつたと聞いて、おおよその推測もできていたのだろう。

「神器も、所詮僕が作ったのはパンドラの匣のオリジナルを模倣した、精々精度60%程の出来だしね。本物はやっぱり面白いね。ま、聞いた限りじゃ、リルちゃんはもう戦線

離脱みただけどね」

超再生能力を有するデージーならまだしも、あくまで肉体的に常人であるリルに対して、トリカブトが与えた傷は決して浅くない。遠目からでも、明らかな戦線離脱はすぐにはわかった。逆にこれで戦線に出てくるようなら、もはや彼女が人であるかどうか疑う必要が出てくると言ってもいい程。

「ま、次は僕も行くことだし、全然悲観しないでもいいよ。それに今回の戦闘で、ユニちゃんを手に入れる為の最後の手段が必要だってはつきりしたしね」

そう言うと、備え付けの電話機の受話器を取り、数度ボタンを打ち込みある場所へとコールする。そして出た相手に向かつて、楽し気に表情を浮かべて用件を伝えた。

だが、その内容に、桔梗、ザクロ、ブルーベルの表情から一切の余裕が消え、愕然とした表情が生まれた。

「30分前に復讐者ヴインディチェと取引は済ませてあるから、急いで彼をこっちに送り届けてよ。あ、彼の扱いには気を付けてね？」

その言葉を咄く白蘭の表情を楽しそうだが、その瞳は怪しく光っている。

まるで人の悪事を黙って見過ごす悪魔のような狡猾さ。鋭く獐猛に光る野獣のような瞳。

それでも、人の皮を被って、やはり楽し気に笑みを浮かべた。

「最後の真6弔花、GH^ゴOST^{スト}のね♪」

明るい薪の暖かい色合いが、わずかにその場の空気を和ませたような気がした。離脱した敵を深追いする事はせず、爆発騒ぎの町はそのまま放置。

そうしてやって来たのは、森の中。

それも、一番最初、未来に来た時ツナがいた森の中だった。

底だけ地面を繰り抜いたような森の中にある岩肌の上に皆思い思いに距離を開けて座り、一様に疲弊したような雰囲気が見て取れた。

今のこの場にいる人間は、ボンゴレ10代目候補ツナと家庭教師リボン。

守護者である獄寺、クローム、ランボ、了平。同じボンゴレのフウ太、門外顧問組織

の

ラルにバジル。そしてイーピン。さらに一般代表である京子にハルだった。

さらには元ミルフィオーレブラックスペルボスである大空のアルコバレーノユニ。

同じく元指揮官であった入江。そして互いに一部確執がありそうな雰囲気でも対する、元ブラックスペルでユニと同じジツリヨネロファミリーのγ、太猿、野猿。

そして最後に、イリスファミリー第二戦闘部隊『シャガ』のリーダーであるリルト、同じ一員で双子の弟であるコル。そして、技術主任であるルイだった。

そこその人数ではあるが、ボンゴレ側は雲雀や山本などいくらかいない戦力もある。しかしながら、単独で真6弔花のデイジーを下した雲雀と、一緒にいるデイーノに關しては心配はいらない。そして山本とスクアアロの方ではあるが、これに關してはコルが様子を見てきてくれた。

曰く、スクアアロは重症だがとりあえず生きてる、とのことだった。自身の技が既に完全攻略されている相手との対戦など自殺行為も甚だしいにも關わらず、生き延びることができたのは流石スクアアロと言った所だろう。事情を知っていれば、無傷で生還する事もできたかもしれないが、既に後の祭り。

一先ずコルの報告からスクアアロとボンゴレ基地の様子見に行った山本、ジャンニーニ、スパナ、ピアンキは無事とわかっただけ、ツナ達は安堵の表情を浮かべるのだった。ちなみにボンゴレアジトには、一般人にばれないように様々な工作が事前にジャンニーニによって行われているそうなので、先の真6弔花との対戦の際の爆発事件に關し

て例え警察が捜査したとしても、地下アジトなどばれる心配は無いとの事だった。

さてここで全員、この場に誰がいるかを語ったが、人数的にはともかく、心身共に万全という事は、実に無い。

何とか真6甲花の強襲を防いだが、その代償に、複数怪我人が発生した。

了平の持つ匣兵器である晴ゴテは、晴れの炎の特性である“活性”を用いて、触れた人体の細胞分裂速度を飛躍的に向上し、切り傷擦り傷かすり傷程度であれば物の数秒で感知させる治療匣だ。しかし、それはあくまで小さな傷のみ。人体に影響を及ぼすレベルの、骨に入った罅や重度の切り傷、内臓に関する影響、そういった重症に対しては、この匣だけでは流石に心もとなく、手元にある救急箱を使つての応急手当が現状、最も有効な手段となっている。

見れば、痛みを死ぬ気で我慢しながら叫ぶ了平が、妹である京子に手当されている光景があった。そしてもう一人、傷ついたリルの腹部の手当てを、同じ女性であるハルとイーピンが担当していた。

「あいたつ！あー、傷が染みるう」

「はひー！血がいつぱいで若干ぐろつきーです！イーピンちゃん、とりあえず消毒してガーゼ貼つて、あと包帯です！」

「あー」

脇腹の傷の手当という、必然的に上半身にある程度露出させる為、男性が多い事もあり人の死角となる岩の裏で治療していた3人だが、了平程リルは暴れる事なく、筒がなく応急手当は終了したのだった。

血で汚れた服は処分して、コルがボンゴレアジト——正確にはボンゴレアジトから通じる雲雀のアジトの、光努とリルとコルが借り受けていた一室——から持つて来た服に着替え、ひとまずリルは皆の前に姿を現すのだった。

「あ、リル！傷は大丈夫?!」

一早く、目に留まったツナがリルの様子を確かめるべく声を掛けた。

「あ、うん。とりあえず大丈夫大丈夫。いやー、こんなに傷ついたのはすごい久しぶりだね。もしかしたら初めてじゃないかな」

あははと、相変わらず明るく話すリル。

しかし、傷口は包帯などで止血して塞いだといつても、多量の出血に若干ふらつき、薪の炎しか明かりが無い為分かりにくいのが、その顔や見える肌はわずかに白く血の気が引いていた。

ついでに言えば、炎をほとんど使い果たしたという事もあり、体力方面でもかなり疲弊していた。

そんな様子のリルを、いつの間にか背後のコルが膝裏を蹴り、肩を引いて柔ら

かく、これまたいつの間にか引いたシーツの上に座らせて、そのまま寝かせた。

入江やラル同様に、寝かせられたリルは、抵抗しようとしたが、無論今のリルでコルに力づくで勝てるわけもなく、なすすべなく寝かせられるのだった。

「とりあえず寝て。晴ゴテである程度治療ができたといつても完全に塞がったわけじゃないし、血は戻ってこないからね」

淡々と言つてはいるが、リルの肩を押さえつけているコルには有無を言わさない迫力を感じる。リルは動けない事に少し不満気だが、弟が心配して看病(?)してくれてるという事に、不満と同時に内心割と喜んでいたのであった。

「ま、怪我人はおとなしく喰つて寝る事だ。ほれ、籠にもらつた携^レ帯^シ口^ヨ糧^ンだけど喰つとけ」

そう言つてルイは、飲みやすいように器に移し替えられた具の少ないシンプルなスープをリルに渡した。

「あ、ありがと」

少し暑いので一口一口と冷ましながら飲み、ほうつと一息つくくと心身共に温まると同時に、人の優しさに包まれたようでとても暖かい光景だった。

しかしそこで、驚愕するような言葉が飛び交う。

「ていうか、ルイ!? あれ、いつからいたの!? 自然にコルとリルと一緒にいたから気づかな

かった!!」

「何言つてんだ。森に着いた時からいたじゃねーか」

「それよりルイ! 君今までどこにいたんだい!」

驚くツナの言葉に呆れた様子のリボン。

ルイが登場したことで、少なからず反応したものはいたが、驚愕という程でもない。ツナの場合はただ気が付かなかつただけである。

実際には森に来た当初から、まるでこの場に全員来ることが分かっていたように森にいた。

寧ろ、本当に驚いたのは入江。

ルイという人物を、おそらくこの中でリルとコルを除いて一番よく知っていたからこそ。

「リルとコルと別れた後、歩いてここまで来たんだよ。どうせ町中でドンパチやって、最後には人を巻き込まない所に行くと思つたからな。それに、川平不動産の所で戦つたのは通信機越しでも知つてたから、そこから近そうな場所、森の中で、そういうえツナのスタート地点に設定したのはここだと思つたから、来てみたんだ」

(なんとという驚異的洞察力)

その場の何人が同じことを思つただろうか。

現状のわずかな情報から推測とわずかな勘でそこにたどり着くとは、イリスファミリーの技術主任という肩書は決して伊達ではない。

リルとコルも、通信機はあったが色々あってルイに森に行くという事を伝えていなかったというのも、彼に對する信憑性を上げていた。

同時に、若干何名か洞察力が高すぎて逆にドン引きするもいたりいなかったり……。
「それで、パンドラの匣は開きそうかい」

そう問いかける入江の瞳は真剣だ。決してさつきまでふざけていたわけでは無いが、この質問の回答によって今後の戦略の立て方が変わってくる。

問われたルイは、リルがトリカブトから回収した宝箱のような形の匣を手元でくると弄びながら、悩まし気のため息を吐く。

「無理だな。基本的にパンドラの匣は外部から簡単に開く物なんだが、これは白蘭が作ったからな。機材があれば変わるが、ここじやあ今開くのは難しいな」

ある程度の携帯端末なら常備してはいるが、相手がレプリカとは言え神器の一つとなると、それ専門の機材を用意する必要がある。

かといって、ここからイリスの日本支部(仮)の山に行く余裕など無い。結果的に、この状態のまま開かない、という結論を出さざるを得なかった。

さて、ここで白蘭打倒計画を10年後の雲雀、ツナと共に打ち上げた入江とルイの二人だが、このペアとはまた別に、いくらか確執のある者達はいた。

まずは、獄寺とγ。

嘗て、ミルファイオーレファミリー日本支部メローネ基地で激闘を繰り広げた二人。

未来に来た当初ではγに山本共々ズタバロに圧倒され、次に基地で戦った時は互いの主に対する覚悟をぶつけあつて、結果引き分けとなつた。

互いに敬愛する主、獄寺ならツナ、γならユニがこの場にいる為、流石に争うような事はしない。獄寺はそれでも睨みを聞かしているが(デフォルトかもしれない)、γは対照的に大人の余裕からなのか、笑みを浮かべてやんわりと獄寺の言葉に答えていた。

そんな兄貴分とは違って、若干血の気の多そうな太猿と野猿は、入江に対して恨みがまし視線と挑発的な言葉を送つてはいるが。裏切り隊長、とは二人の弁だが、結果的に今この場を見ればどっちもミルファイオーレを裏切っているので、どっちもどっちだなあ、とスूपを飲み終えたリルは一人内心で呟いていた。

しかしながら、彼女の双子の弟コルに対しても、実は太猿と野猿は恨みがあるかないかといえば、実はあつた。

そう、メローネ基地で勃発した『騎士武者騒動』。

別にどこの記録にも残っていないのでこんな名称誰も使つてないが、当時イリスファ

ミリー第二戦闘部隊に所属するリルとコルは先行した光努と合流すべく、後から基地へと潜入した。

その際、リルは西洋風の白銀の騎士甲冑を、コルは和を尊ぶ出で立ち鎧武者を着こみ潜入した。単純な防具としての目的もあつたが、相手にインパクトを与えて怯んだ隙にガンガン攻め込むという意味合いも込めて、この格好で向かう二人。

まあ流石にずっと来ているのは邪魔なので、きりのいい所で普通に脱ぎ捨てる予定だつたのだが、その際鎧武者姿のコルは太猿と野猿、他彼らの部下達複数と交戦した。

そして、結果的にコルは無傷で圧勝し、彼らを戦闘不能に追い込んだ。

ただの逆恨みだが、それでもやはりやられたという事はまだ彼らの記憶に新しい。

故に、恨みの視線をコルに、一部その鉢合わせの状況を、メローネ基地を操り作つた入江にも向けるのだった。

「昨日の敵は今日の友、今日の友は明日の敵。まあ巡り合わせが悪かつたって事で、水に流せ。僕は雨の属性だし」

「ぬかせ！それを言うなら俺は嵐だ。コル、てめえにやられた分はいつかきつちり返してやるからな！」

「太猿は短気だな。いいよ、いつでも相手してあげる。どうせ勝し」

「うへー、お前相変わらずな奴だな」

表情は変わらないくせに妙に自信溢れる言葉。

そんな言葉に心底面倒くさそうな表情で不平を漏らす野猿。

そんな彼らの様子に、ツナや獄寺達は一つ疑問を持った。

「あのさ……コルと太猿達って知り合いなの？」

「コルがつていうより、私も知ってるよ。イリスとジツリヨネロは昔から何度か交流があるからねー。まあミルフィオーレに統合されてから会う機会はめつきり減ったけどね」

意外と中の良さそうな3人に対するツナの疑問には、リルが答えてくれた。

これはジツリヨネロに限らず、イリスファミリーと交流していた様々なマフィアは、ミルフィオーレに吸収統合された事によっておおよそ疎遠となった。ボンゴレのように、ミルフィオーレに狙われる理由が多分にあるファミリーとの交流が今の時代はだいたいだが、例えミルフィオーレに吸収されて敵対しようとも、個人個人で交流が残っている場合もある。

最も、その中でルイと入江と雲雀とツナ、つまりはイリス、ミルフィオーレ、ボンゴレが内通していたなど、とんでもない交流が密かにあったなど、今となっては信じられないのだった。

「ほら、コルも太猿も野猿も喧嘩しないの。せつかくみんなで白蘭つぶそーとしてるんだから、仲良くしよーかふっ!」ブシュツ!

「おい!怪我人は安静にしてろ!」

「あー!リル!血が出てる!」

「わー、まっかつか」

「アホ牛!騒ぐんじゃねえ!」

「大丈夫大丈夫。思ったよりも大した傷じゃけふっ!」ドバツ!

「いやいやいや!チェーンソーで脇腹抉られたってかなり重傷だからね!」

「はひ!再びぐるつきーです!京子ちゃん!タオルタオル!」

「はい。あとユニちゃん、水取ってくれる?」

「あ、はい。リルさん、大丈夫ですか?」

「あー、大丈夫大丈夫——」

「後の展開が目に見えるからそれ以上はやめてー!」

東の間の休息。

暖かい団欒の中で、苦労という言葉を表情に込め、ツナの叫び声が夜の森に響くのだった。

『一番大ピンチ大賞授与』

母アリアより、大空のアルコバレーノを襲名したユニには、母と同じ、代々大空のアルコバレーノに受け継がれる短命の呪いと同時に、先を見通す力、不思議な力が備わっていた。

それは短い寿命の中で年々衰えている為、今この状況のユニも数年前と比べてそこまですの事を見る事は出来ない。そうでなければ、川平不動産に侵入したトリカブトも察知することができたのだが。

しかし、数年前からユニには、とある光景が、決して変わる事のない未来の情景が見えていた。

森に佇み、仲間と言葉を交わす光景。

まさに、今の光景を、ユニは遙か昔から予知していたという。

そしてこの予知には続きがある。

白蘭との決戦。

後数時間後にやってくる夜明けと共に、最後の戦いが始まる。

白蘭も、ユニのように自身の能力が衰えているからこそ、表面上は出さないが必死になつてユニを捕獲しようとして、次の戦いに全力を懸けてくる。

今まで最大のピンチではあるこの状況だが、実は当時に最大のチャンスでもあつた。

白蘭は同時時間軸の並行世界に存在する自身の思惟を共有する能力を持つている。

しかしそれは言い換えれば、全ての並行世界に存在する白蘭という人物は、全て同じ人物であるという事。

当たり前のことに聞こえるが、本来並行世界は可能性の世界。

入江が未来を変更して10年後に行つた時に、大学生の未来とミュージシャンの未来があつたように、同一人物であろうともそれはもはや別の人生を歩んだ別人だ。

しかし、白蘭は違う。

同じ思考回路を有し、同じ考えを思いつき、同じ決断をする。

それは本来繋がらない白蘭の本体が、横繋がりとなつている。

つまり、並行世界の白蘭を一人倒せば、それだけで全ての並行世界の白蘭も同じように打倒されるという事だつた。本来なら他の並行世界の自分が死のうが、さらに別の並行世界の自分とは一切関係ないが、白蘭は違う。

並行世界を覗けるという能力があるからこそ、彼はたつた一人の人物として全ての並行世界の上に立っている。

ただ一人。

この世界の白蘭を倒すことで、全ての並行世界が平和となり、恐ろしい未来の来ることない現実が戻ってくる。

そうしたら、当初の目的通り、過去へと帰ることもできるのだった。

ユニのその言葉を聞いた時、過去からやって来た者達は一様にして同じくほっとした安

堵と、喜びの表情を浮かべたのだった。

「ふにゃあ!!」

「ギャウウ!!」

小さな獣の転がし合い。

正確に言えば片方が一方的にもう片方を攻撃して、攻撃された方はびくびくと怯えて

いる。

澄んだオレンジの天空の炎を纏う天空ライオンVer. Vと、荒々しい赤い嵐の炎を纏う嵐猫Ver. Vの二匹だった。
ガット・テンペスタバージョンボンゴレ
レオネ・デイ・チエーリバージョンボンゴレ

無論、攻撃している方が嵐猫の瓜。獄寺のボンゴレ匣だった。

「こら！瓜！なんて恐れ多い事を！」

ご主人と違つて、匣アニマル達は自由本坊。

本来ならありえないような光景、瓜がナッツに喧嘩を売るという構図は中々に面白い。対するナッツは、まるでツナの性格そのもののように、戦闘時以外である今はびくびくと怯えて、ツナに飛びつき後ろに隠れている。

「こいつ、戦う時以外はめちやくちや臆病なんだ……」

「ツナみたいだねー」

「うっ！」

「つまり普段はダメつて事だ」

「ひどい！」

リルの軽い発言が若干ツナの胸に突き刺さるが、当然の如く無情に追い打ちをかけるリボン。

殆ど二重人格じゃないのか、と思うようなツナの普段バージョンと戦闘バージョンだ

が、実際どうなのか怪しい物であった。

「それじゃあ、とつとと始めてくれ」

そう言ったYのそばからは、彼の匣アニマルである黒ネレ・ヴォールビ狐、コルルとビジエツトが現れる。

この場にいる匣アニメルはナツツと瓜だけではない。

ラルの所有する雲スコロペンドラ・デイ・ヌーヴォラムカ、デのザムザに、バジルの所有する雨デルファイノ・デイ・レオツジャイルカのア

フィン。

了平の所有する晴カングーロ・デル・セレーノカールVer.V、漢我流。

クロームの所有する霧グリーフォ・デイ・ネツビアフクロウVer.V、ムクロウ。

そしてランボの所有する雷ブーファロ・フルミネ牛Ver.Vの牛ぎゅうどん井。

これほどに匣アニマルが一堂に会する事などめつたにない。精々ツナ達ボンゴレファミリーがチョイスに向かう時、転送システムに炎をぶつけるのに見たくらいだろうか。

こんな場所でなぜツナ達だけでなく、Yも匣を展開しているかといえ、今後の作戦の為。

バジルの匣であるアルフィン、ブレインコーティングという技が存在する。

実際のイルカは脳化指数と呼ばれる脳重量が人に次いで高く、潜在的に知能が高いと

されているが、匣アニマルの雨イルカは実際に知能が高くなっており、その知能を生かした雨イルカ独自の技術がブレインコーティング、またの名を「ボックス間コンビネーション発動システム」。

高い演算能力を持ち、脳波を飛ばして匣アニマル間の知能を繋ぐ事ができる。簡単に言うのなら、自身の考えを一瞬で相手に伝えられる。

口頭で伝えるより、ジェスチャーをするより、相手が自身の考えを一瞬で理解してくれるという事は、通常の連携よりも、より高度な連携を可能し、さらには時にコンビネーション技や必殺技を生み出すという。

この事を、使用者のバジルもツナに作戦参謀を任された入江も、γが言うまで今の今まで忘れていたという。

「あー、猫じやらし持つてればよかった」

そして、ここまでの匣アニマルを見たリルの感想が、これである。

「あ、そこに生えてたけど使う？」

「やった！流石コル！ほーら、おいでおいで」

「ふにやう!?!……ふ、ふしやー!」

いつの間にかその手に猫じやらしを握っていた弟を賞賛し、リルは手元に寄せてパタとふる。

だが、なぜか瓜は一瞬驚いたのかびくりとしたと同時に、徐々に珍しく獄寺の方へとたじろき威嚇の構えを取った。

「うおっ！瓜どうした？」

獄寺も、普段は自分に爪を立てる瓜が自分の元へと来る事に驚いていた。

「意外だな。お前は動物に好かれやすい方に見えるんだがな」

そんな光景を見て、岩にもたれかかっていたγの言葉。

嘗てイリスとジツリヨネロに交流があったため、γも少なからずリルとコルを知っている。と言つても、最後にあつたのはおよそ数年前なので、今現在のリルをどの程度知っているかはわからないが、安静にしている今の状況と本人の性格などから、どちらかと言えば好かれやすい方と推測したのであった。

そして、その推測は少なからず当たっている。

リルはどちらかと言えば動物に好かれやすい方だ。

にもかかわらず、匣アニマルたちは一応にリルに近づこうとしない。いや、リルだけでなく、コルにも。

「どういふことだ？」

「多分これの性だと思ふよ。天國刀。あと、リルの場合は手首のそれもね」

かしやりと、座っている為自身の横の地面に置かれた天國刀を鳴らすコル。そしてそ

の指先には、リルの手首に嵌るプレスレット、スカートラディバンドラレブリカバンドラの劣化匣。

そして原因となるのは、おそらくその中で眠る神器炯然たる剣。クレイブ・ソリッシュ瓜をはじめ、匣アニマルがリルとコルに妙に近寄らない原因はここにあるだろう。

匣も神器も炎を扱った武器と捉えるのであれば、神器の存在は匣の上位格ととれるから、という推測もあるが、実際の所は分からない。

ただ、避けられたリルはしゅんとなつてはいるが。

「ところで、結局リルが使った神器つてのはどんなもんなんだ？」

思い出したようなリポーンの言葉だが、事実作戦会議とブレインコーティングなどの話題ですっかり忘れていた。

リル自身の技量も超一流と言えるが、それにプラスして持つ装備も異常。トリカブトを単独撃破する程の、神器の力とはいかほどな物か。

クレイブ・ソリッシュ「炯然たる剣、またの名をクラウ・ソラス。多分一般的にはこっちの方が聞き覚えがあると思うよ」

「確かに」

「うん、俺でも聞いた事あるよ」

少し珍しい部類のツナの発言だが、おそらくゲームか何かのワードで出てきたのである。一般的に神話系統に出てくる単語は使いやすい部類だからか。

「これは光努と一緒に、チョイスが始まる前の期間で取って来た物だ。それは天國刀もそうだけど……本当に面倒だった」

途中から、なぜかすぐ疲れた様な表情をするコル。

表情変化に乏しい彼にしては珍しく、隣のリルも笑ってはいたが、当時の事を思い出したのか、若干苦笑いになっていた。

そんな光景に、意外な所で京子とハルはそういえばと、チョイス前の期間に出かけた光努達が帰って来た時、光努も妙に疲れた様な様子だったのを覚えていた。彼曰く、トレジャーハントに行ってきたというが、とんでもないお宝を探していたらしい。

「神器と一口に言っても様々だが、クレイブ・ソリッシュ炯然たる剣の力の一つは自動攻撃。そもそも、俺の作った『飛翔する炎剣』は、こいつを元にした匣だからな」

リボーンの推測通り、似たタイプの武器と思つたが、やはりリイは神器を参考にしたらしい。

そこで一つ疑問だが、この神器を手に入れた時期とリル達が『飛翔する炎剣』の匣である『4本のグラジオラス』ヴオーラ・スパータ・デイ・ファイアンマを使用した時期が一致しない。神器を入手した時期の方が遅いのに、匣があるとはどういうことか。

だがその疑問も、すぐにリイが答えてくれた。

「元々イリスにあつた神器の文献を見て参考にしたからな。まあその後光努達が

クレイブ・ソリッシュ

炯然たる剣を手に入れてきたから少し精度あげられたけど。……実は精度上げなかった通常の匣で幻覚は破れなかつたかも、とは口が裂けても言えないな」

「いやいや言っちゃつてるよ！ていうか私それ初耳なんだけど!」

「あれ、声に出てたか」

「すごい分かりやすくしゃべつてたよ。ていうかルイ！一歩間違えたらリルチョイスで大ピンチだったよ!」

「一番大ピンチ大賞だったお前が何を言っている」

「うぐっ!」

あまり自覚していないルイの言葉が入江に突き刺さつた。

実際に入江には風穴が空いたのだが。

「い、いや！それを言うなら光努君だつて今まさに大ピン……あ」

「……………」

ずーん、と擬音が付きそうな勢いで、リルとコルの二人のテンションがガタ落ちした気がした。

思わずしゃべつた失言に気づいた入江だが、すでに遅かつた。和らいだけどあまり触れない方がいいワードもあつたのだ。

だが、そこに凜とした、柔らかな声音がかかつた。

「光努さんなら、大丈夫です。リルさん、コルさん」

白い帽子とマントに身を包んだ少女、ユニだった。

その言葉は自信をつける為に作り出した言葉などでなく、彼女にとつては確信の持てる言葉。それは先を見通す力を持った、ユニだからこそ言える事なのだろう。

力が衰えていると言つても、いまだ全て消えたわけでは無い。その瞳は見えない空間のそのさらに向こう側を覗き、起こりうる未来を予知していた。

「私はいくらかの未来が予知できませんが、それとは別に、確信をもつて言える漠然とした未来もわかります。それが、白神光努という人物が、再び私達の前に現れるという事」
「てーことは、光努の奴あのパンドラの匣からどうにかして出てくるって事か」

「はー」

ユニの皇帝の言葉に皆安堵を、中でもリルとコルは実に嬉しそうだ。

もう一つ、その言葉の中に含められた意味に、ルイはふむと思索する。

（ユニの前に、てことはまだ白蘭に捕まる前。つまり夜明けの開戦から始まって、戦いの途中で光努が出てくる、って事か）

すつと目を細めるルイは、普段の面倒そうな表情など一切なく、技術主任としての顔を出している。そして、ユニの言葉の中から、本来無いはずの情報を引き出す。

ただし、それが本当に正しいかどうかかわからない。それでも、時期を推定し光努の出

現予想を立てられるというのは、流石だった。

「ユニ、今の所予知はもう視えねーのか？」

「いえ、おじさま。本来なら今の予知は無かつたと思いますが、おそらく白神光努という人物が未来に来たから起きた影響だと思えます。わずかながら視えたんです。そしてもう一つ視えた予知では彼が、私達の誰かの命を、運命を救ってくれる」

『!』

「けど、分かるのはそれだけで、どういう結果に終わるのか、誰を救ってくれるのか、それは今の私にはわかりません」

小さくなる言葉と、わずかに哀しそうに目を細めるユニ。

漠然としている、としか言いようがない。誰かしらの危機を救ってくれる白神光努。

だが、この後白蘭達との最後の戦いがあるから、誰が一番危険かはわからない。むしろ全員もれなく危険と言いたいところ。

ユニの予知は必ずやってくる。

それは皆が実際に経験したわけではないが、この場の誰もが疑っていない。

誰かの危機を救う、それは裏を返せば、誰かが危機にさらされるという事。

その事を理解していたのは、入江やルイ、リボンにラル。だが、口には出さない。

もしそうだとしても、その予知を覆すことができないのは理解している。寧ろ、それ

を踏まえて作戦を立てる必要も出てくる。

といつても、最も危険な役割を用意するつもりなんて毛頭ないし、助けてくれるの前提で危険にさらすつもりも無い。

彼らの作戦の上で前提となるのは、誰も欠ける事無く、戦いに勝利する事。それを念頭に入れ、新たに作戦会議が始まるのだった。

「そういえばリル、クラウ・ソラスはトリカブトの位置がわかるのか?」

「多分分かると思うよ。というよりあの子には幻覚は効かないと思うし、トリカブトの位置教えてくれたの」

「なあコル、あれって剣の話をしてるんだよな?」

「そうだよ。実は神器っていうのは誰でも扱えるわけじゃないんだ」

リボンとリルの会話にて、リルの言葉が妙な事に突つ込む獄寺。まるで剣に意志があるようなリルの言葉。

しかし、彼女の実弟であるコルには、その言葉の真意はある程度理解できていた。ある程度、というのは、彼が神器を保持していない事が起因する。

「神器は世界中に封印されている。封印を解く方法は神器によつて異なるが、封印を解いたものには使えない。だから、炯然たる剣もリルにしか使えない」

「なるほど。専用の武器、まあ俺らのボンゴレフレインソリッシュ匣みたいな物か。しかしそれなら納得だな。幻覚が見破れるんなら、トリカブトに攻撃を当てるのも難しくねーだろうしな」

納得したような獄寺。

基本的に幻覚は機械を欺け無いとされているが、超一流の術士は機械をも欺く。

だが、その幻覚でさえ、神器を欺くことはできなかつた。それが、トリカブトの敗因の一つ。

そう、一つ。

「ああ、それと、そもそもトリカブトって僕やリルにとつてはそれなりに相性がいい相手だったのもあったね」

「えっと、どういうことだい?」

「トリカブトの面は呪具の一つだよ。いつてしまえばヘルリングとかと同種の物体。あ

それは遙か昔に存在した術士が、己の魂を仮面に移して長い年月を生き抜く呪いの面。だからあの面を壊せば、トリカブトは消滅する。逆に言うなら、あの面を壊さない限り、トリカブトは消滅しないんだよ」

その言葉に、一樣納得すると同時に妙な不気味さを味わう。

ヘルリングは理解している。幻騎士が使用していた霧の最高峰のリングでもあり、精製度は優にA級。だが、その特異性は自身の魂と精神をささげてリングに喰わせ、絶大な力を引き起こす契約の指輪。6つあるリングには、どれもそのリングを生み出した術士やそれに準ずる者達の呪いが降りかかっており、持っているだけで効力を発揮するといふ。

コルの説明に思い出されるのは、去り際の桔梗とブルーベル。

トリカブトがやられたと同時に回収してその場を離脱したが、その手に掴まれていたのは割れたトリカブトの面と、耳なし芳一のように文字を体中に刻まれた僧侶の姿。

あれはトリカブトの面を被せ、トリカブトの魂がこの世界に顕現する為の触媒、生贄にされていたという。

他人の体に乗っ取り時を生きる幻影の巨人にぞつとしながらも、すでに本体の面は切り裂く倒された事にほっと一息つくのだった。

そしてそういえばと、獄寺はコルに尋ねる。

「だがよお、トリカブトの仮面とやらが呪いのアイテムだつてのは分かったが、それとお前達の優位性はどう関係あるんだ？」

「そいつは、こいつらの父親、『魔天劍豪』通称『魔劍』のクルドにある。そうだろ？」
獄寺の疑問に言葉を挟み込んだのは、γ。

しかしながら、γはリルとコルとは過去に面識があつても、実はその父親、『アヤメ』のリーダーには面識が無い故の確認を込めた疑問符を付けた言葉だったが、その推測は正しかった。

「俺もあつたことにはある。あいつの『魔劍』という字名はただ化け物のような剣技を持つからではない。実際にあいつは、魔劍と呼べる物を所有している。それもおそらく、コルが言つた呪いの呪具の一つであろう物をな」

「寝たきりだつたラルの言葉に、リルとコル以外は驚きを顕わにする。

聖劍や魔劍などそんなもの、作り話の中だけにしかないと思つていたが、実際にヘルリングという呪いの呪具が存在するとなると、あながち作り話と斬り捨てられない。

事実聖劍とは別だが、神器と呼ばれる剣も存在する。それに、ラル・ミルチという人物は基本冗談は言わない性格だ。

「ラル、リルとコルの父さんにあつた事あるの？」

「ああ。昔C E D E Fチェデフの仕事で対峙した事がある。正直敵としては関わり合いになりな

くない部類の相手だな」

ラルの所属しているボンゴレ門外顧問組織。

とある状況下で彼女は『アヤメ』のリーダークルドと、まともに対峙した経験が過去にあった。

この場所にいる人間の中で、おそらく対峙した事あるのはラルのみ、会った事だけあるというのなら、リボンもそうだが、会うと対峙するはまた別。

実際は、対峙してすぐに誤解とわかり戦ったわけでは無いのだが、その数舜の間で、ラルに冷や汗を流させたと言う。

「つまり、こいつらは子供の頃から呪いアイテムに囲まれて今では呪いアイテムセンサーみたいな感じになったって事か」

獄寺が若干瞳をキラキラさせながら、ラルが言いたい事を簡潔にまとめた。

意外と宇宙人や地底人にUMAなど、不思議な道具や都市伝説などのオカルト系に對して大変興味を持っている獄寺の為、呪いのアイテムという単語に反応したのだろう。

最も、脱線した会話をしてこないなのでこの場の誰もそこに突っ込む者はいないのだが。

ちなみ、リル達が両親と過ごしていたのは光努が来るよりもつと前の話。数年とはいえ、呪具の近くで過ごしていれば、それなりに耐性などが付与されるといふ事だろう。

さらに言うのなら、リルの神器はその感覚を増幅させる。光の属性を持ったクレイブ・ソリッシュ
炯然たる剣は、闇を纏う呪いの面にとつて持ち主をリーダーに変える程の力を持つ。

「まあここらへんはトリカブトに一番効いたけど他の人にはどっこいどっこいだね。見た感じもうミルフィオーレに呪具は無いだろうし」

「例えそうだとしてもリル、君は負傷者だから前線に参加させるつもりはないけどね」

「一番の負傷者が何言ってるのさ正一」

「今は君も似たような物でしょ。ついでに言えば獄寺君、バジル君、了平君、ラル・ミルチ、それに太猿に野猿も負傷者だから前線での戦いは無しだよ」

その瞬間、入江に全員からブーイングが飛び交った。

全員戦闘に入りたいというのは一致しているが、参謀の入江はそれを冷静に分析した。この場所に来るまでも来てからも、平静を装っていた者達の内面を、寝ていたにも関わらずに冷静に見抜くのは、流石にメローネ基地の指揮官だっただけの事はある。

ラル・ミルチや了平、太猿に野猿など最初からダウンしていた者、トリカブト戦で攻撃を受けた者などは分かるが、獄寺とバジルも、トリカブトがユニを連れて店から出る直前、背後からうけたブルーベルの爆発による傷が残っていた。

しかし、例え傷があろうともそれで戦意が消えてなくなる玉じやない。

それに負傷者を全て下がらせれば、防衛ラインを張る事すらできなくなる。

この作戦において、敵の最終目標であるユニのいる場所では戦闘が発生しないように、その前、ミルフィオーレとボンゴレイリスの間での戦闘が望ましい。

攻撃の余波の届かない位置。

しかし、現在負傷していない前線で戦える者を出すのであれば、ツナ、γ、コル、この3人だけとなる。

流石にこの3人で真6弔花各個撃破をするのは無理がある。敵には白蘭もいるし、最後の真6弔花とやらもいるのだから。

「少なくとも、この3人の内一人はユニと一緒にいてほしい。というわけで、綱吉君お願ひするよ」

「え!?俺!?で、でもそれじゃあ他の皆は真6弔花と戦いに行くんでしょ!」

「大丈夫。戦うといつても、基本的に初撃で落とすように作戦を組むつもりだから」

理由としては、先も述べたようにこの場の大半が怪我人だから。

真6弔花は全員無傷な為、正々堂々と決闘形式のような戦いでもしようものなら、確実にこちらが敗北する。

しかし怪我はしていたも覚悟が薄れる事は無い。

故に、本体の状態とは関係ない匣兵器の破壊力を最大限に生かし、敵を仕留める。ユニを狙い白蘭達が攻める側であり、反対に防衛する側であるこちらとしては、奇襲しや

すいのが幸いだった。

「後はどういふペアにするかだけど……。真6弔花はおそらく3手に別れて、3方向から攻めてくると思うんだ」

「という事は、俺達も3チームに別れてそれぞれを迎え撃つ、と」

「だったらY兄貴！俺は兄貴達と同じチームで行くぜ！」

「ちよ、野猿。それは——」

「ああん?!」

「そ、早計過ぎるから……。もうちよつと、よく考えた方が……」

元々が気が弱い気質だからか、野猿の威嚇に若干言葉が尻すぼみに小さくなるが、それでもしつかりと言う辺り彼の子供の頃からの精神的な成長がみられる。

いや、いい年した大人が子供に威嚇されている時点で少々情け無いが。

「一人は俺が担当する。雲ムカデは敵を捕獲するのに向いているからな」

「けどラル！その体調じゃ……」

「沢田、お前はユニを守っている。動く分には問題ない。それより捕獲した後は、圧倒的な火力で敵を即殺する必要がある」

「だとしたら、確実に仕留める為には遠距離で攻撃できる一番高い火力……。獄寺君の赤炎い矢と、Yの黒狐フレイルムアロー、後はコルの剣術による遠隔斬撃だね」

遠距離で攻撃できる物なら、野猿と太猿による嵐の炎を飛ばせる黒鎌、そしてリルの
グラディオロ・クアットロ
4本のグラジオラスがあるが、威力という点では先の3人に劣る。

戦力を均等に分配するか、それとも火力を一点に集中し確実に仕留めるか。

「じゃあ隼人とγはラルと一緒に仕留めてきなよ。あとリルも。僕は一人足止めとかして
てるからさ」

「ちよ、コル！それってコルの負担大きくない!?それにリルも行くの!」

「どつちにしろ負傷した隼人やラルも出るなら、火力は多い方がいい。動かないだけなら問題ないでしょ。ていうか止めても行きそうだし。それに、僕達ならどの敵に当たるか分かるからね」

「どういうことだ?」

「僕だったら雨と雷、リルだったら嵐と雷みたいに僕らは主となる炎かどうかが気配で分かるんだ」

迫る炎を感じ取る事ならこの場のだいたいができる事だろうが、その種類を見極めるとなるとほぼ不可能に近い。

しかし、リルとコルに関してはそれは自身の炎と同種かどうかと限定されるが、判断がつけられる。

リルとコルの主は2種類あり、これは珍しいタイプでもある。獄寺のように複数の属

性を持つ者は多くは無いがそれでもいる。しかし大半が獄寺のように、主となる属性と、それより炎圧が低い複属性の炎に分けられる。2種類の炎が同炎圧で扱えるとなると割と珍しく、それによって二人は、剣術と環境などの影響か、それぞれ2種の属性を把握できるという。

つまりは、現状雷の真6弔花の姿を見せないとしたら、迫るブルーベルとザクロの位置が把握できる。

「そんなわけで、リル達はザクロお願い。僕はブルーベル止めてるから」

必然的に、後は太猿野猿組が桔梗の迎撃に向かう。無論、ここには残りの戦力、失敗した場合の戦闘担当でバジルと了平が入る予定だ。

しかし、コルの足止め発言には皆一様にあまり肯定的ではない。

「コル、止めるって言ってもどうするつもりだい？分かってると思うけど、相手は君の技を攻略してるんだよ？」

「リルとトリカブトの戦いは少し見たけど、天國刀てんこがあれば少なくとも完全攻略はされなくなる。だからまあ止めてる間に、他は仕留めてきて助っ人きてね」

コルは無傷で今現状、万全の状態で挑める戦力の一人。イリスの『シヤガ』に所属する戦闘部隊の一員。とはいえ、必ず真6弔花を一人とはいえ止められる保証は無い。

だからこそ、後は信頼するのみ。

誰が負けて、誰が勝つかは誰にも分らない。
作戦会議は始まったばかり。

ここから、さらに深く考えを張り巡らして行く。
後数時間、夜明けの決戦は近い。

イリス、ボンゴレ、ミルフィオーレ。

長い未来の戦いは、今最終局面を迎えようとしていた。

『夜明けの決戦』

濛々と立ち込める粉塵と火の粉が渦を巻き、ひび割れた地面に降りかかりある種地獄絵図を作り出していた。

中ほどからへし折れた大木、地を抉られ反乱する池の水。瓦礫の破片の山と化した建物。

そして、死屍累々と倒れ伏す人々。

槍が刺さり、折れた剣が刺さり、斧が刺さり苦無が刺さりジャマダハルが刺さりレイピアが刺さりバスターソードが刺さり胡蝶刀が刺さりカトラスが刺さり小太刀が刺さりグラディウスが刺さりメイスが刺さりフラベルジェが刺さり三節棍が刺さり鎖鎌が刺さりトマホークが刺さりトライデントが刺さりランスが刺さり釘バットが刺さり蛇矛が刺さり手裏剣が刺さりブーメランが刺さり弓矢が刺さり火縄銃が刺さり吹き矢が刺さり寸鉄が刺さりナックルダスターが刺さり薙刀が刺さり鞭が刺さり木刀が刺さ

り鉄扇が刺さり鉞が刺さりナイフが刺さりフォークが刺さり簪が刺さり鋏が刺さりカッターが刺さりタクトイカルナイフが刺さり……。

もはや武器と人が一様に倒れ伏し、地面が視えない程に溢れかえっていた。

そんな阿鼻叫喚な光景とは裏腹に、辺りは鮮やかにカラフルに彩られていた。

しかし、いい意味で鮮やかではない。黄の炎、青の炎、紫の炎、藍の炎、赤の炎、そして橙の炎。

色とりどりの炎が辺りを燃やし、樹を燃やして地面を燃やしてゆらゆらと陽炎を作り出していた。

瞬間、激しい爆発音が辺りの空気をびりびり刺激する。

空中での爆発、地表での爆発。

同時に火花散らしてぶつかる金属音。

「おや？息が荒くなってますが、大丈夫ですか？ラッシュ」

「これが大丈夫に見えますか!?俺あんたらと違って常人なんですけど!!」

「何を言うか。戦闘部隊における奴に常人なんておらんで。鍛え方が足りんのじゃ。ほれ、そこまで来てるぞ」

獄燈籠の言葉の先で、ドスドスと地響きを鳴らしながら迫り狂う生物。

炎を纏った雲ゴリッラ・ヌーヴォーラゴリッラは腕を振り上げ、猛々しい咆哮をまき散らす。さらには、雲の特

性である増殖により、その体軀は倍以上に膨れ上がっている。元ジツリヨネ口の雲の守護者であるニゲラの匣兵器である鬼熊を彷彿とさせる巨大なゴリラは、まさにキングコングと言うべきか。それが3体。

まるでミサイルの如き拳を振り上げて放つ。

「うおおつと！危ねえ！リックク！」

振り下ろされた拳を間一髪で回避したラツシユの叫んだ声と共に、背後から黄金の流星が跳び出し、雲ゴリラへと突撃して弾き飛ばす。

黄金色に見えたのは、キラキラと輝く晴の炎。鋭い流星のように、超スピードで跳び出した影は、手前の雲ゴリラを突き飛ばしてドミノのように倒し、クルクルと回転してラツシユのそばに降り立った。

小柄ながら、大地を踏みしめる黄褐色の体毛に覆われた四肢。狐のような狼のような体軀だが、また別種の種族。

晴の炎を纏ったラツシユの匣、晴コヨーテ・セレーノコヨーテのリックク。

順応性の高い匣であり、コヨーテ特有の鋭い視覚や嗅覚。そして晴の炎によって活性化した身体能力は、有に時速100キロを超えるスピードで相手を翻弄する。

最も、今の使い方は超スピードによって力を増幅させた突撃戦法チャイナなのだが。

「ナイス、リックク！」

カチツ!

迷彩柄の服装に包まれた、まるで軍人かと思うラツシユの腰のポーチから取り出されたスイツチを鳴らすと同時に、倒れた雲ゴリラの地面が爆発し、紅蓮の劫火が包み込んだ。

イリスフアミリーの敷地内には、獄燈籠によつて設置された数々の罠が存在する。この爆発とスイツチも、その一つ。

蓄積した炎を使用した強力な炎式遠隔操作型地雷。

急所に一撃もらつたすぐ後の大爆発。流石の雲ゴリラも、ひとたまりもなかった。

「あー、死ぬかと思つた! ていうかいつ終わるんだこれ!!」

「まあ敵がいなくなるまででしょうね。次きますよ」

「槍時さん結構余裕ですね!? 明らかに俺より動いてるのに!」

「まあ大方罠で迎撃できてる部分もありますからね。それに向こうで皆さん頑張つてますし」

そう言つた視線の先は、すでに焼野原となつた元森林のさらに向こう、まだ無事な方の森林地帯。しかし、緑色の海のところどころかが爆発音と煙が上がっている事から、そこでまだ戦いが終わつてないことがすぐにわかつた。

「次くるぞー」

こちらもラツシユと違つて余裕そうな声色の獄燈籠の声。

そしてその声を聴いた瞬間、3人の場所が一気に影で覆われた。一瞬月が消えたのかと錯覚するような暗闇。既に夕焼けが落ちたにも拘わらず、月明かりを隠す巨体。

飛行船が上空に現れたかのように見えた光景に、ラツシユは瞳を見開き驚く。

「おいおい、アレなんだよ」

頬に冷や汗を流すラツシユだが、よくよくと見ればそれは飛行船などではない。

大空を悠然と泳ぎ、身に纏うのは澄み渡る雨の炎。そして巨大な眼が、ぎよろりと眼下のラツシユ達を視界に納めた。

「おや、これは珍しいですね。バレーナ・デイ・ヒオウツヤ 雨 鯨 ですか。いつみても大きいですね」

「槍時、お主はこいつの対峙経験はあるのか？」

「そうですね。前にミルフィオーレの支部を潰した時に2頭程落とした事があるくらいでしょうか」

「はっは、相変わらずじゃのう、お主は。わしは爆撃機くらいしか落としたり事ないんじやがな」

「この二人とんでもない事言ってるな!？」

ラツシユの叫びに呼応するように、足元のリックがやれやれとでも言いたげにため息を吐く。

そんな状況でも、敵の攻撃は続いている。ラツシュ達の任務は、母屋に対する攻撃を防ぐ事。その上で、敵を排除する。

ふと槍時は、真上にたたずむ雨鯨ではなく、すでに暗くなつた東の空を物憂げに見上げた。

(さて、リルやコルにルイ……それに光努は、大丈夫でしようかね)

東の大地で戦う者達の姿を心配しながら、手に持った槍に力を籠める。

心配しても始まらない。こちらは、こちらの仕事を片付ける。

瞬間、槍時の槍からは、極大の雨の炎が噴き出した。

夜明けは、最後の戦いの合図。

地平線より昇る太陽が森を照らし出し、木々に隠れ住む鳥や動物達は活発に動き出す。

視界が晴れた森の中で、4つの人影は乱れず足を取られず、寄り道する事なく目標と定めた地点へと歩を進めていた。

「そろそろ目的地だ。リル、敵の気配はあるか？」

「少し嵐の感じが近づいてくる。アタリみたいだね」

「本当にわかるのか……」

瞳を閉じて、瞑想するように嵐の気配を察知するリルに、獄寺は驚いた声を上げる。既にコルと別動隊はそれぞれ桔梗、ブルーベルを迎撃に向かった。

迫る気配に呼応するように、おそらく通過するであろう位置へと罾を仕掛ける。

一秒、また一秒と時間が経つにすれ、自然と手に持った匣と、リングを填めた拳に力が入っていくのを感じた。

それぞれが匣を手を、リングを確認。獄寺は先の川平不動産にて背中を痛めた為、固定砲台としての役割を果たすため、自分の腹部と背後にもたれかかった木を縄で縛りつけて固定していた。無論、すぐに切つて外せるようにラルの手にはサバイバルが握られている。

「最終確認だ。まず俺がザムザで敵を一瞬足止めする。その隙にリルとYが両側から奇襲をかける。そして——」

「止めは、俺の赤炎の矢だな」

「そうだ。絶対に外すなよ」

「へっ！誰に物を言つてやがんだ。お前らも、しくじるなよ」

大胆不敵に笑う。

若干の緊張は残つていようが、覚悟はとうの昔にできている。

後は敵を、待つのみ。

草むらと木の陰にそれぞれ身を潜め、獲物を待ち伏せる狩人の如く、静かに時が来るのを待つ。さながら戦場の狙撃手か、それとも獲物を狙つた猛禽類のような。

「……来たー」

小さく呟かれたリルの言葉は、獄寺、ラル、γの全員の耳へとするりと入る。

一瞬で緊張感が高まると同時、炎を噴出する独特の音が聞こえてきた。

ミルフィオーレは人外を称する自信家な強者の集団だが、それが原因で隠れてこつそりと進むという事をあまりしない。レーダーがあればすぐに感知されそうな炎を噴出した移動手段にもなんも抵抗なく、たとえ見つかったとしてもただ潰せばいい。そう考へ、それを実行できるだけの戦力を単騎で備えているからこそだった。

だが、この状況下においては、最も奇襲がしやすいと言える。

人間を超えた、と豪語する真6吊花だが、実際に行つてしまえば、能力面では常人とは比較にならない力を有してはいるが、本質的には普通の人間とは変わらない。

つまりは器用さや知識、覚悟の質や戦闘センスなどではなく、人として手を動かす足を動かし、脳が働き心臓が動く、そういった生物的に当たり前の要素は、変わらずそのままだったという事。

確かにザクロはマグマの風呂に入り、ブルーベルは肉体を雨の炎に変質させ、デイズーは不死身の体を有してはいるが、それは全てが炎が元での発現。特に雲雀にやられたデイズーは、晴の炎が体内を駆け巡り永続的に細胞を活性化させている為、傷は全て瞬時に修復し死なないというからくりが存在する。これはザクロやブルーベルにも言える事で、それぞれ自身と対応する炎、この場合嵐の炎と雨の炎を肉体的に扱った恩恵に授かっているだけと言える。

そんな彼らだが、心臓を壊されたら死に、脳を破壊されても死ぬ。呼吸ができなくてももちろん死ぬ。

こういった、人としての弱点は基本的にそのまま。

デイズーの場合は何れでも怪しいが、マーレリングを外せば普通の人間に戻るという事が既に雲雀によって証明されていた。最も、超回復を持つデイズーに対しての手段であつて、他の者にはこの手段を使い必要はあまり無い。

結局何が言いたいかと言うと、初撃で重要な器官、簡単に言えば心臓を穿つ事が出来れば、一瞬で相手を倒せる。

ピン！

一番の乗りにもユニ元へと向かうつもりだったザクロは、森の木々の間をすりと潜り抜けて飛ぶ最中、体が何かに一瞬触れた。ピンと張り巡らされた、肉眼では目視しにくい透明な細い糸。それ単体では何の効果も持たないただの糸だったが、それはただの合図に過ぎなかった。

(いまだー！)

バシユツ!!

「!?」

ただ目的に向かって真つすぐと飛び続けていた故か、ザクロは一瞬で自身を縛り付けた巨大な雲ムカデ、ザムザの存在に気づけなかった。

同時に、反応して言葉を発するよりも早く、飛来する4つの物体。

前方からは、雷の炎を纏い高速回転するコルルとビジェット。

後方からは、雷の炎を纏い独りでに空を飛び交う4本の西洋剣。

剣は枷のように四肢を縫い付け、コルルとビジェットはザクロの胴体を吹き飛ばした。その直後、獄寺の炎の矢が突き刺さり、文字通り風穴が開いた。

いや、風穴という言葉すら生ぬるい程の痛々しき。これが映画のワンシーンだとしたら確実にR15指定が入るような残酷な描写。確実に致命傷となる一撃を成功させた。だが、それでもザク口を即死させる事はできなかった。

あろうことか、確実に不意を衝いての奇襲にも関わず、それは冷静な判断によるものなのか、それとも野性的な直感によるものなのかは定かではないが、ザク口は体をわずかに逸らし、確実に重要な心臓と頭を避けていた。

致命的な状況に置いて、ザク口は血反吐を吐きながらも、にやりと獯猛そうに口角を挙げた。

強靱な生命力を用いて、二の腕に突き刺さる剣を無視して壊れた機械のように腕を無理やり動かし、マーレリングから発せられた風の炎を、胸の匣に突き立てた。

「俺は、デイジーやトリカブトとは、格が違うぜバーロー!!」

瞬間、球場に広がる嵐の炎が、ザク口の全身を包み込んだ。

一度見たことがある極大な炎の変化現象、修羅開匣。

「あいつ、胸の匣に炎を！」

「確かトリカブトは蛾、デイジーはトカゲだったらしいけど……」

「どんな虫人間やら動物人間やらが出てくるんだ？」

炎の風圧で舞い上がる土煙の中で、油断するまいと備えている4人に、地獄の底から

響く様な声が聞こえた。

「バーロー！虫や動物だあ？デイジーやトリカブトと同じにするな」

ぶわりと振り払われるようにして煙が霧散し、その中央から現れた人物に、皆それぞれ驚愕に瞳を丸くする。

かろうじて人型の面影は残ってはいるが、その出で立ち人は人であつたころよりも一回りも大きく、手足は肥大し大木すら紙切れのように引き裂けそうな凶刃な爪。

瞳をぎよろりと動かして、鋭い犬歯の生えそろつた口角を挙げて、全身から強い嵐の炎を噴き出した。

元々匣の埋まっていた左胸の刃ミルフィオーレの紋章を、そして右手のマーレリングは、不気味に嵐の炎の光で輝いていた。

「あれって、本当に動物?！」

「いや、そんなレベルじゃねえ！」

明らかに異常な出で立ち。

トリカブトはまだ虫らしさが残されているようだったが、これはその比ではない。人である部分を差し引いたとしても、こんな生物見たことが無い。

「あたりめーだー、バーロー。俺に掛け合わされた匣兵器は確かに地球上の生物だが、6500万年以上も前の怪物だあ！」

T—R E X、またの名をティラノサウルス。

嘗て白亜紀末の生物大量絶滅に至るまで、約300万年間生態系の頂点に君臨し、地球上に存在した史上最大級の肉食獣としておそれられた、恐竜。

本来なら匣は地球上に存在する生物でしか作れないが、白蘭の持ち込んだパラレルワールドの科学技術を駆使したミルフィオーレの技術部は、地層に眠る太古のDNAより、現存しない生物を匣に掛け合わせることに成功した。

まぎれもない、ザクロは今ティラノサウルスと一体化した、まさに怪物と称すべき異形へと変貌を遂げた。

「さあ、T—R E Xの圧倒的なパワーを味わいなあ!!」

嵐の炎を噴出し、爆発的な推進力で疾風のように駆け巡ったザクロは、一瞬でリル達の背後に回った。

「!？」

一足気ついたリルは、自動操作の炎剣を間に挟み込み防御態勢を取るが、ザクロの豪腕の前に成すすべなく砕きつた。

バラバラに砕かれた炎交じりの銀と紅の破片が宙をキラキラと舞い、リルの視界に入る中で、ザクロの腕はさらさらに加速し、嵐の拳撃を放った。

ドゴオオオ!!

人の肉体など、風圧だけで吹き飛びかねない衝撃が辺りを蹂躪する。

ラルのザムザも紙を引きちぎるように粉碎され、コルルとビジエツトも＼共々一撃のもとに地に付す。リルも衝撃に吹き飛ばされて、森の一本に激突され、肺の中の空気を吐き出し、同時に傷口が開いたのか、わずかに血を吐く。

「リルーくそっ！」

左腕に備わった鬮體の口より、炎の矢を放つも、ザク口は正面から全て掌で受け止めて見せた。

修羅開匣により、肉体的に人を超えたザク口の皮膚は、生半可な炎なら素手でも受け止められる程。その皮膚は、まさに恐竜ダイナソースキンの皮膚と形容すべき、頑強なる鎧のような、恐竜の鱗のような堅牢な防具。

今の状態の獄寺の炎なら、防御せずとも全身で受け止められると豪語する程。

あくまで今の状態なら、だけど。

「瓜、カンビョフオルマ形態変化！」

咆哮にも負けない声を張り上げ、瓜は光と共に輝きだした。

ツナのグローブとナッツフレイムテローが合わせるように、山本の小刀と小次郎が合わさるように、獄寺の左腕の固定砲台赤炎の矢と瓜フレイムテローが合わさり、強大な炎の波動を噴き出した。

嘗て、ボンゴレファミリーの前身となつた自警団は、ボンゴレI世と彼の幼馴染であり右腕であつた初代嵐の守護者が共に設立したという。

仕事では使い慣れた拳銃を使用したか、I世からの直接の依頼には、彼から譲り受けた武器を使い負けなしたつたという。

それこそが、荒々しく吹き荒れる疾風と謳われた、Gの弓矢アーチエリ！

左腕に固定されていた赤炎フレイムアローの矢と合成した事により、固定型の弓へと変貌を遂げた獄寺のボンゴレ匣。

嵐の炎の出力は段違いに高くなつたが、それでもザクロの皮膚を貫く事すら変わらな
い。だが、獄寺のボンゴレ匣の真価はその程度ではない。

嵐の炎を薄く纏う弦に指をかけ、引き絞る体制のまま固定すると同時に、徐々に湧き
上がる強大な炎の波動をザクロは感じ取つた。

「何？！パワーを溜めてやがる!!」

きりきりと引き絞られた弦と共に、炎の矢となつて内部に蓄積し、次第に威力を増加
させていく。

「くらえ………果てろ!!」

Gの弓矢は、大空の7属性随一の破壊力を持つ嵐の炎を蓄積し、対象に放出する武器。

紅蓮の矢は竜巻のような回転と共に、一筋の流星の如く、ザクロに向かつて放たれた。咄嗟に左手で顔を庇い、肩で流すように受けたが、銃弾や炎すらも余裕ではじき返すザクロの皮膚が、がりがり鈍い音を立てながら、徐々に削られていく。

ただの直感だが、先ほどと同じように馬鹿正直に受けなかつたザクロの判断は正しかった。もしも油断して己の力を誇示する為にあえて受けたとしたら、奇襲時の二の舞になっていたと思われる。皮膚をわずかに削られた事には驚いたが、ザクロはこれで獄寺の矢の危険性を理解した。

初撃を回避したザクロに対して、獄寺は二の矢を放つが、それを飛び上がるようにして躲される。わずか一メートル程という至近距離にも拘わらず躲されたのは、ザクロ自身の間離れした反射神経もあるが、獄寺の先日の傷が響いているからだ。

獄寺は背中を負傷したことで人体の稼働領域を大幅に制限されている。そんな中で上に左右に動くザクロを捉える事は、一筋縄ではいかなかった。

故に、獄寺はある種捨て身の戦法に出る。しかしそれは自身を犠牲にする戦法ではなく、喰らった攻撃を転じた反撃の一手。

矢を避けられたと同時に、上空へと蹴り飛ばされたが、そのまま弓矢を眼下の大地に立つザクロに向けて、連続で射出する。

先程の溜めの矢ではないが、矢を細く鋭く貫通力を増大させ、ザクロの両腕に二本ず

つ突き刺した。

「がああ……てめえ……ふん……」

が、それをあろうことか、ザクロは自身の身に纏う嵐の炎で相殺し、破壊した。

獄寺もこれで仕留められるとは思っていなかったが、あつさりと破壊された事に瞳を鋭くする。しかし、獄寺の狙いは別にあつた。

「バーロー、ぶつ殺してやる……」

引き出そうとしたのは、ザクロの怒り。

ザクロという人間は、桔梗と違つて冷静沉着という面が当てはまらない。チョイス時にだらけた姿という、少々気分屋なのは誰の目にも明らかだ。だからこそ、彼に対して速射性の高い攻撃をちまちまと、それでいて自信のある肉体に、プライドと共に傷をつけて突き刺し、怒りのボルテージを底上げするような戦法取る。

怒りという感情は理性を支配し、野獣のような獰猛さを引き出す。凶暴性と威力を引き上げる結果となるが、単調になればたとえ強力無比な攻撃もあたらければ意味がない。

加えて機動力が落ちている獄寺は、ザクロ自身に至近距離に突つ込んで来てもらうことで、逆転の一手を待っていた。

絶対的な絶望の中での冷静な駆け引き。

だが、敵はそう甘い存在ではなかった。

「至近距離でぶつばなせば、勝てるでも思ってたんだろ？」

(!?読まれてやがる……)

流石は真6弔花といった所か、この戦闘中の状況下でも、冷静に相手の策略を看破する慧眼は見事と言わざるを得ないだろう。

故に、ザクロは現状獄寺が最も対応できない攻撃方法、背後からの攻撃を選択した。

背中を傷つけた獄寺は、一瞬で背後に回るザクロに対して、腰を捻る必要がある背後に向き直るといふ動作がどうしてもワンテンポ遅れる。そしてそのワンテンポの遅れがあれば、ザクロにとつては敵を引き裂くには十分な時間だった。

「あっけなく死ね……!?!」

ドツ!

一瞬、ザクロは自身の動きが阻害されたことに対して硬直した。

形容すべき事でも無いかもしれないが、獰猛なる肉食獣のような瞳をぎよろりと動かし違和感の部分を見てみれば、自身の足の甲と地面を縫い付けるようにして、一本の刀が突き刺さっていた。全身を血で濡らしたかのような、真っ赤に刃を燃やす一本の刀。血濡れというよりは、焼き鏝といった表現の方が似合っているだろう。

しかしザクロが驚愕したのは、生半可な炎や鉛玉など物ともしない己の皮膚を貫く刀

の鋭さと、背後からとはいえ自分が奇襲されたことに気づかなくなった事だろう。

背後を見れば、膝を地面に就きながらも、刀を投げつけた態勢のリルが目に入る。

この場合は相手の投擲の正確さや気配の消し方などに賞賛を送るのではなく、冷静になりながらも目の前の獄寺に集中させられたことによる己の迂闊さを呪うべきだろう。この硬直で、目の前の獄寺に対して決定的な隙ができた。

尚且つ、形態変化した瓜のアシストによって、固定弓の一部から炎を噴射し、強制的に背後を振り向かせられた獄寺は、心の中で瓜と、ザクロの一瞬の硬直を引き出したリルに感謝の言葉を送り、視線を鋭くして眼前の敵に、渾身の一矢を放った。

空間を削りうねりを挙げる昇竜、トルネード・フレイムアロー赤竜巻の矢。

隙を見せたとは言え、ザクロは既に攻撃態勢。全てを破壊する嵐の炎を纏う全身と爪を振るい、二人の攻撃がぶつかった。

ドゴオオオ!!

遠目からでも分かる程に、木々を破壊し草むらを燃やし尽くす。

抜群の分解力を持つ、強大な嵐と嵐のぶつかり合い。両者とも肉体的なスペックはともかく、単純な火力だけなら獄寺の炎の矢はザクロに匹敵する。

一撃でも当てられたら一瞬で肉体を分解する程の強烈な炎。その戦いの余波は、彼らの周りの木々を一瞬で燃やし尽くし、辺りを焦土に変える。

パチパチと黒く炭の塊へと変貌を告げた森の一角で、膝を着いたザクロは右手で、触れようと思つた所に何もなく、何も無い空をきつた。

「ぐああ、あ、くそお、腕があああ！あのガキ、バアアローオー!!」

左腕ごと左半身を吹き飛ばされたザクロが、空気をびりびりと震わせるような叫び声を放つていた。

ただの人間であれば致命傷必死の獄寺の一矢だったが、ザクロの咆哮は苦しきなど微塵もなく、自身の体を振り抜いた敵対者に対する怒りの感情が大きかつた。

それは、ザクロがまだまだ余力を多分に残し、動き回る分にも問題ない事を暗に物語つていた。流石に、恐竜の匣を掛け合わせたザクロは、人類も生物をも超越した生命力を有している。例え半身が吹き飛ばされようとも、それで戦闘不能になる程やわな生物ではなかつた。怪物という評価は正しい。

だが、たとえ怪物だとしても、もう半身を吹き飛ばされたのなら、流石のザクロも倒せるだろう。

それがわかつているからこそ、倒れ伏しながらも、獄寺は再び弓を構えていた。

獄寺の矢と違い、爆発の余波などザクロにとつてはぬるいシャワーを浴びるような威力だつた。しかし、獄寺はその威力でさえも己に多大なダメージを与える。結果として森の一部は焦土となつたが、同時に獄寺も地に伏す結果となる。

だがそれで諦めるような精神力を、獄寺隼人という少年は持ち合わせていない。今だ天を仰ぎ牙を剥き出し、咆哮を挙げるザクロに照準を定め、弦を引き絞った。

「ぐあああ!!」

(これで……果て——!)

だが、獄寺は引き絞った右手を止めざるを得なかった。

なぜなら、怒髪天を衝くザクロの直線状に、リルが倒れているから。

もしも今の態勢でザクロを射貫こうなら、背後のリルをも貫通してしまう危険性がある。ぎりぎりザクロのみに当てるように炎を調節する事も可能かもしれないが、次に仕留めなくてはおそらくチャンスは無いだろう。頭を狙うという選択肢もあつたが、的が狭まればそれだけ命中率も下がるし、できる事なら右半身を狙いたい。だが、それだとやはりリルに当たる。それに頭程高い位置は、地に付したままでは狙えない。

思いとどまる獄寺だが、今度はその硬直が隙となつた。

「てめえら、まとめて消し飛ばしてやる!!」

残つた右腕を掲げると、次第に周囲の温度が一度ずつ上がったように錯覚する程に、高純度の熱量が蓄えられていく。

片腕を失いフルパワーは出せないでも、その威力は人を消す飛ばすには十分すぎる程に、マグマのような炎を形成した。

「マグマインフアンマート
烈火マグマ!!」

右腕の獄炎が、倒れ伏す獄寺、リル、γ、ラルへと襲い掛かる。

地に倒れる全員を襲い掛かるように操られた炎は、全てを焼き払う天の火のようでもあつたという。

迫りくる業火を瞳に映し、獄寺は悔し気に奥歯を噛みしめる。

(くそっ………なんだ、あれは)

だが、自分の瞳に映る一つの違和感に、思わず瞳を見開く。

視えるのは辺りを赤く照らす紅蓮の炎の光——だけではなく、もう一つの光が視えた。

荒々しい嵐の炎の光ではなく、全てを照らし、導となるような極光。

光輝く“それ”を、地に落ちていた物を見つめ、獄寺は訝し気に思うと同時に、すぐに現状を理解し、わずか微笑んだ。

(まさか、あれは——)

瞬間、一瞬にして焦土に変えられた森の一角は、目もくらむ炎の光に包まれた。

『リターン・バトル・ミュージアム』

「くらええー！ボンバ・アンモニーター！」

人の身の丈を優に超えるであろう、巨大な雨の炎に纏われたぐるぐると渦を巻いたアンモナイト。正確には高純度の雨の炎を圧縮して作り出したのだろうが、匣兵器と掛け合わさった彼女の技は、その一つ一つが通常の匣兵器を軽く凌駕する。

眼下に見える新緑の木々を無視し、空を踏みしめ駆ける人物は、自身の周りに展開された4本の剣を掴み取り、巨岩とも形容すべき巨大なアンモナイトに向かって両手でもって投擲した。

全身をバネのようにしならせ、間髪入れず撃ち放ち持ち替えさらに撃ち放たれた4本の剣は、吸い込まれるように雷の炎を纏い、巨大なアンモナイトに向かって正面から白銀の刃を突き立てる。強靱な威力に鰐元まで刺さった4本の剣は、刃の先から蜘蛛の巣のような罅を散らす。だがそれでも、巨岩のようなアンモナイトを全て破壊するまでには至らない。根元まで突き刺すことができたのは、使用者の炎の威力と技量の高さ所以

だろうが、必要ならばあと数撃、もしくはは強力な一撃を当てる必要があるだろう。

その追撃の一撃を、連続的に行われた攻撃の最終段階を、左手を腰の刀の鞘に、右手を柄に手をかけ、自身の命を脅かし迫る物体に対して、渾身の斬撃を放った。

「朝ノ型伍・劍の銃弾」
フィフスコード
ソート・ブレット

本来ならナイフや暗器の類を投擲し、止めの斬撃を放つ劍技だが、今回はあろうことか全て一般的な長さの劍で補うという防御に出た。

突き立てた劍ごと斬り裂くように、点と点でつけられた傷を斬撃で繋ぎ、巨大なアンモナイトは空中分解を果たした。先の劍はただ投擲しただけにあらさず。アリの穴から堤も崩れるというように、一撃一撃を破壊へとつなげる一穴とし、最終的に巨岩でさえも粉碎する劍技。

自信のあつた攻撃をほとんど苦も無く迎撃された事に対して、攻撃を仕掛けた少女は憤慨した様子で腕を振り回す。

「にゅにゅう!?!もおー!何なのよお!さつきから邪魔よ!」

鬼の形相と形容すべき怒りに心情を染めているが、どうにも少女の幼い顔立ちが多少変わつても微笑ましさを感じてしまうだろう。しかしその感情任せに繰り出される攻撃は、とても可愛らしいさとは無縁の凶悪さを秘めている為、まともに受け止めることは勧めることはできない。さながら一人一人が無尽蔵にミサイルを撃ち出す爆撃機に

例えるような心境だろうか。

相對する少年は、そんな少女ブルーベルの怒りに對して、どこ吹く風と、表情を変へることなく淡々と、少女の一挙手一投足を見つめていた。

「それは良かった。邪魔になつてゐるのなら、足止めは成功してゐる事になるからな」
この声が聞こえてゐるかはわからないが、自身に言い聞かせるように言葉を紡ぐ少年、コルは、振り抜いた天國刀をパチリと鞘に納め、再び自然体に構へる。

相對するのは、真6弔花の雨のマーレリング保持者ブルーベル。

おそらく真6弔花の中では一番幼いであろう紅一点の少女ではあるが、その愛らしい見た目に反して爆発物を放つてくる危険極まりない匣を使用してくる。だが、そんな匣兵器は彼女にとつてただの小手調べにも等しい。今の姿を見れば、とてもただの少女とは呼べないだろう。

否、ただの人間とも言えないだろう。

蒼海を思わせる水色の髪を、空に揺れる波のように流し、深海のようなマリンプールの瞳は強い意志を秘め、對峙するコルを睨みつけてゐる。

だがそんな顔立ちや表情など二の次、真に驚くべきは彼女の下半身にあるだろう。上半身は通常の肉体にも拘わらず、腹部より下は2本の脚——ではなく、するりと大空を蹴り上げ泳ぐ力を秘めた尾びれ生えそろつてゐる。その姿は、まさに童話に出てくる人

魚姫と言つても過言でないような容姿。魚の足、という風には少々語弊があるかもしれないが、大まかな所で言えば間違つてはいない。

明らかに人間を超え、人間と別種の生物が掛け合わされた姿。

真6弔花の修羅開匣、そしてブルーベルに掛け合わされた匣兵器は、シヨニサウルス。約2億2000万年以上も前に生息していた、最大の魚類として知られる魚竜の一種であり、現存する最大級の13メートルに及ぶジンベイザメを優に超える、およそ固体によつては20メートル越えもあったといわれる生物だ。

ここで安堵しておくのが、ザクロのように全身をもしシヨニサウルスの特徴が合わさっていたのなら、中々に悲惨な結果になつただろう。シヨニサウルスは細長い顎が特徴でもあり、もしも人魚風ではなく半人魚風になつたとしたら、彼女の顎骨が大変な事になり、思わず失笑物の一幕があつたかもしれないが、それはこの次元世界において存在しない事実なので割愛しておこう。

イリスファアミリー第二戦闘部隊『シャガ』のコルと、ミルフィオーレ真6弔花のブルーベル。

それぞれが強大な雨の炎を操り、片や刀を、片や全身兵器へと変貌し、森を足元に置いた空中戦を行つていた。

この二人がぶつかることはコルにとっては必然の事だつた。

昨夜の作戦段階で決まっていた事であり、二チームがそれぞれ桔梗、ザク口の撃破を担当し、その間に浮いたブルーベルがユニ元へ向かう事と、他の真6弔花に手助けする事を阻止するために、コルが足止めを買って出た。

リルとコルの二人は、自分と同じ属性の炎の気配を常人よりも遥かに高く感知できる。その為、コルにとって空を飛んで来るブルーベルを特定する事は左程難しくなかった。

準備を整え普通に木々を掻き分け歩き、森の中から空を見上げて待つていれば、優雅に鼻歌でも歌っていきそうな少女ブルーベルが飛んで来るのがすぐにわかった。途中でキヨロキヨロとしていたのと、気配がうろろうろとしていたのをコルは感じ取り、道にでも迷ったのかと考えていたのは余談である。

まずは牽制に一撃放ち、後はなし崩し的に戦闘に入る。実に簡単な結果と言える。

戦闘開始後すぐに修羅開匣を使ったブルーベルだが、別に追い詰められたからの奥の手というわけでは無い。いわば修羅開匣させて、ようやく真6弔花を戦いの土俵へと上げたと言えるだろう。

しかし、ここまで二人とも互角の攻防を繰り返していた。といっても、ブルーベルの飛び道具をコルが迎撃する、という攻防の繰り返しではあるのだが。

修羅開匣したブルーベルは言わずもがな、コル本人も本当に人間かと疑いたくなるよ

うな戦い方をしている。おかげで、眼下に見える森の一部一部の木々が消し飛んでいる。主にブルーベルの爆発物の攻撃の余波のせいではあるのだが、それをいなすコルも大概だ。

「むうーもお、砕け散れえー！爆発巨大鸚鵡螺化石！」
ボンバ・アンモナイト・ツガンテ

掲げた右腕より、まるで炎をくべて膨らむ気球のように、巨大なアンモナイトが出現する。先程コルに撃ち出した物の倍、山でも見ているのかのような巨大さ。

強大な高純度の雨の炎を纏い、ブルーベルの合図と共に、コルに向かって影を落とす。巨岩、なんて言葉は生易しい。幾多の生物を圧殺せんとする暴威を、コルは静謐に、ただ無表情に見つめていた。

感情が無いわけではない。

この状況に危惧してはいないわけでもない。

だが、焦っては剣が鈍る。

わずかなズレは命がけの状況下では命取りとなる事を、コルは知っている。故にコルは、澄み渡る大海の如く、心を落ち着かせる。

(巨大な岩も同然の兵器。簡単に本体に攻撃が届かない以上、攻め方を変えるしかない)

パチン！

親指で鐔を押し、鯉口を切つてすらりと神器級の刀、天國刀を抜き放つ。

まるで夜露に濡れた様な滑らかな刀身は、鏡の如く眼前の脅威を映し出す。こうして空から振り下ろされる巨大な物体を見てみると、まるで隕石のように錯覚するが、隕石と書くのだから、あながち間違いでも無いだろう。

瞬間、コルの右手の指に嵌るDリングから、溢れ出すように蒼海色の雨の炎が吹き出す。蜷局を巻いた水竜を模した蒼い指輪は、イリスの龍炎石を加工して作られた精製度A級のリング。

ブルーベルに引けを取らない、高純度の雨の炎コルを球体状に包み込むと同時に、一瞬で収縮してリングへと収まった。

(?あれって確か……チョイスでイリスの女もやってた……)

ふと、ブルーベルの脳裏に思い浮かぶチョイスの光景は、白蘭と、やられる同僚、そして白いマシユマロだが、映像の中で見たイリスファミリーのリルも使っていた剣技。
デユアルコード セブンスコード サイシキ コウカクジン
 変則二刀剣刀術、漆ノ型・彩色・紅赫刃。

圧縮した高純度の炎を全て刀身に隙間なく載せ、炎を纏うだけ以上の切れ味と特性を誇る、炎の刃を作り出す秘技。その効力は、リルの紅赫刃で幻騎士の幻覚匣を一刀両断できる程に強力。ただしそれは、特性が分解である嵐の炎の為、破壊力という点が極限に増幅されたというのもあるだろう。最も、そうでなくとも炎を圧縮して載せるだけでも、この剣技の威力は計り知れない。

だが、コルの持つ刀はそれだけにとどまらなかった。

青い絵の具を垂らしたように、刀身を蒼海色に染め上げる。本来ならリルと対を成す、『彩色・蒼碧刃』サイシキソウヘキジンという技だが、今はその炎の放出が留まる事を知らず、コルの身の丈を数倍超える、まるで雨の炎で作りに出した巨大な刀が出現した。

ここまで来るのに、わずか数秒。ブルーベルはその展開速度の速さにも驚いたが、何より澄んだ水が形どった刃の色合いの鮮やかさに、一瞬見惚れてしまった。

「漆ノ型・彩色改・蒼碧水紋魔太刀！」
セブンスコード サイシキアラタメ ソウヘキスイモンマダチ

一本の刀を芯として、炎で作りに出した巨刀。本来一般的な刀を使用すれば、純度の高い炎の圧縮に耐えられず、一瞬で形状崩壊必死な技を音を上げる事なく受け止めるのは、流星に神器級と言われるだけある天國刀。頑丈性は折り紙付きだ。

全く重量を感じさせない音速の剣は、まるで豆腐でも斬り裂くが如く、迫りくる巨大なアンモナイトを、容易く両断して見せた。

だが、それだけでは不十分とコルは考える。彼一人の身の安全を考えるのであれば、両断すれば後は横に流しておしまい。自分は無傷でいられるだろう。だが、もしも森の中に誰かがいる時の事を考えると、このまま止めるのはコル的に却下した。故に、振り下ろした刃を返し、再び連撃を叩き込む。

小さなゴマ粒を斬り裂けというのなら多少神経を使うかもしれないが、目の前にある

のは人の背の数倍はある巨岩だ。斬り裂き細切れにする事は、大して難しくなかった。空気と共に切り裂いて、翻した刀でさらに切る。この淡々とした数度の切り替えしによつてバラバラに切り刻まれた瓦礫の破片は、パラパラと当たつても重症にならない程度に雨となり、足元の森へと降り注ぐのだった。

本来爆発性のあるブルーベルの攻撃ではあるが、彩色はその炎の特性を極限化して斬撃に載せる。そして雨の沈静によつて、切断と同時に爆発性も抑えられた。

さらにそのまま、正眼に構えるように切つ先を天に掲げ、一息にブルーベルへと巨大刃を振り下ろした。

コードソード
リゆういっせん
「夜ノ型・流一閃！」

迫り狂う極大の刃。まさに先程の攻防の再現。だが今回は攻守が逆転し、ブルーベルが見上げる側へと立たされていた。

彼女にとって大抵の攻撃は恐れるに足らないだろう。

修羅開匣時、掛け合わされた匣兵器の影響により手に入れた防御特性によるものだ。だがしかし、眼前に巨大な刃が迫り狂う光景を見ると、流石に一瞬だがびくりとなつてしまうのは仕方の無い事だった。実際は不明だが、外見年齢や精神年齢という点で言えば、おそらく彼女が一番幼いであろう事は明白だからだ。

しかしブルーベルは自身満々に、にいつと笑い、右手を掲げて防御態勢を取る。

「へへーん、バリエーラ・メドゥーサクラゲ・バリア」

ブルーベルは自身を中心にした球体状に、雨の炎による防壁、俗にいうバリアを展開できる。その硬度は頑丈、単純な銃弾やミサイル、炎なら余裕でガードできるだけの力を備えている。それ故に、ブルーベルは迫る攻撃に対して当然の如く防壁を選択したわけだが、なんとなくだが己の内に悪寒のように駆け巡る嫌な予感を感じ取った。

（あれ？これ防げるかな？……いやいや、私の防壁は鉄壁よ。これくらい——）
ギイイイーン!!

巨大な雨の刃と雨の盾のぶつかり合い。

が、その拮抗はじりじりと徐々に食い込むと同時に、一瞬で砕け散った。

「にゅにゅ!」

一瞬のせめぎ合いも、圧倒的な物量差で押し切られたらひとたまりもなかった。

ブルーベルも驚き目を見開く。そしてやばっ、というような顔をしたが、意外と余裕そうに迫る刃をするりと躲した。まるで海を悠然と泳ぐ人魚の様に……様というよりはまさにその通りにしか見えないのだが、まるで空を泳ぐように軽やかに動く。

思ったよりも危機感無く避けた事に得意げに表情を浮かべるが、通過した刃が森の一角を切り崩していく光景を見て若干青ざめたのは内緒である。

「べ、別にあれくらい余裕で受けられるし！ていうかあの程度わざわざ受けてあげるま

でもないっていうか、今のは手加減したんだから！」

「何を言ってるんだ？」

「うるさい！くらえ！」

「つゝ」

小型の爆発アンモナイトを飛ばし、それをコルが一瞬で斬り捨てる。わずかに手がぶれ

たように見えたと思つたら、一瞬の内に鞘から刃を抜き放ち、納刀する。

またもあつさりと言撃された事に、ブルーベルのフラストレーションは溜まつていく一方。

しかしながらコルも、どうしたものかと思考するのだった。が、思考は一瞬の内に中断させられる。

割と近い森の一角より立ち上がる、爆炎とも形容すべき強大な炎と光。ブルーベルも思わず同じ方向を向き、一体何事かと考える一方、誰かが戦っている事をすぐに理解する。

木々を燃やす紅蓮の炎、嵐の炎。

それがわかれば、コルは誰が戦っているのかすぐに理解した。

出来れば向こうに行きたいところ。だが、ここで加勢に行ける程に、敵は軟な人物で

はない。あれでいて、警戒する事なくこちらにプレッシャーを与え続けている。

が、よくよく見てみれば、ブルーベルの方も視線だけでだが爆発地点を気にしている。どうやら、理由は多少違えど二人の考えは同じと思つていい良だろう。

ならば、

「!!」

視線が一瞬交差すると同時に、互いにその場を跳び出して、爆発地点へと一目散に走った。正確にはブルーベルは走つてはいないが、この際そこはどうでもいい。

互いに攻撃を繰り返しながら、目指す地点へと近づいていくのだった。

一方その頃、ボンゴレイリスを攻める為、夜明けと共に特攻を仕掛けた真6 弔花の3人目の桔梗は微笑を浮かべ、眼下の光景を前にして、己の力の強大さを再確認していた。

その見た目は、とてもただの人間とは思えない程に、他の真6弔花同様変貌を遂げている。

額と両肩に雲の炎を纏う角を生やし、背後に流した毛先が伸びだして、幾重にも増え続ける首長竜のような頭を作り出していた。確かに頭は恐竜の頭に見えるだろうが、あのような生物は見たことが無い。異形も異形、異常も異常。

彼の修羅開匣に掛け合わされた生物は、約1億1000万年前に生息していた、ティラノサウルスと並び最大級の肉食恐竜と恐れたスピノサウルスだ。

棘トカゲの意味を持つ属名があり、その名の通り背に棘突起のような骨格が形成されており、生態では帆のように形どっていたと推測される肉体をしていた。だが、今眼前の桔梗の姿を見ると、その様子は全くもって異なる。

桔梗曰く、雲属性の炎によって変形増殖を繰り返し、もはや原型を留めていないという。

自身の毛先から跳び出す首長の恐竜の頭は、それぞれが全て増殖によって生み出されており、たとえ破壊されたとしても単純に何度でも増殖を繰り返す事ができるという。まさに、無限に頭が増え続ける八岐大蛇とでもいふべき異形の生物。

故に、真6弔花最強を自負する。

それがただのはつたりでもなく、確固たる事実だという事は、相対するものには否が

応でも理解させられた。

当初ユニを狙って飛行する桔梗を、太猿の持つ、他者の炎を狙って追尾攻撃を仕掛ける嵐の匣兵器、ダークスライサーの対空地雷によって狙い、そこからさらに太猿野猿兄弟の持つ黒鎌ダブリッサイスの炎撃の追撃を当てるという奇襲作戦はうまく成功した。だが、攻撃が成功した事と、敵を倒したという事は同義にはならない。

避ける必要も無いとでも言いたげ、余裕そうな微笑を浮かべる桔梗の姿に舌打ちする太猿達だった。

本来なら奇襲時に仕留めたかったが、そうならなかった場合の保険として同行した、バジルと了平の二人で直接相手を叩くという戦闘。

だが、桔梗へとたどり着く前に、彼の匣兵器、雲ヌーヴェヴェロキラオラ・ヴェロキラプトルプトルによって苦戦を強いられた。

ミルフィオーレの科学力が成せる、唯一無二の恐竜型匣兵器。通常のアニマル匣よりも遙かに強力であり、雲ヴェロキラプトルは複数のヴェロキラプトルを召喚し、速度、攻撃力、防御力とバランスよく高く、曰く最新装備の軍隊一個師団以上の戦力を誇るとい

う。

ほぼ怪我人で構成されたメンバーでもあり、敵の匣が予想以上に強力というのもあり、じりじりと苦戦を強いられた了平達だが、この戦いの場にリボーンの指示で連れてきたランボのボンゴレ匣によって助けられた。

10年前の時代に置いて、ランボが最も心を許した人物にもう一度会いたいという子供の心を刺激し揺さぶるというリボーンの作戦を了平はリボーンより伝授させられていた。

つまりは、ランボがよく懐いていたツナの母親に会いたくないのか、その言葉で了平はランボを一括した。

跳馬、キャバツローネファミリーボスデイナーは、雲雀恭弥の持つ死ぬ気の炎を生み出す覚悟が、彼にとつての怒りと同義であると考えた。

それと同様、ランボのツナの母に会いたいとおいう思い、子供の純粋なわがまは、ランボ自身の覚悟を引き出し、眩いばかりの雷の炎を生み出させた。

そしてその結果開いたボンゴレ匣による、カシオ・フォルマ形態変化。

初代雷の守護者は大地主の息子であり、若く世間知らずで臆病者であったという。だが、I世はあえて彼に先陣を切らせた。それはI世が、彼の持つ底知れない力を知っていたから。臆病者でありながら誰よりも先頭に立って戦う。その矛盾が現れた匣こそ、

激しい一撃を秘めた雷電と謳われた、ランポウの盾シールド！

盾と言われて侮るべからず。ランボの持つ雷の炎を耐電し、まるで角のように意志をもつて突き出された雷は、堅い皮膚の上から雲ヴェロキラプトルを貫き、一瞬の閃光と共に全滅させてしまった。

この光景には、流石の桔梗も驚く。まさか自分の匣が、年端もいかない子供に破られたというのだから。最も、ランボはこれで氣力を全て使い果たし、静かに眠りについたのではあるが。

そして、部下である恐竜たちを排除した今、ようやくご主人たる桔梗が優雅に攻撃の意志を見せた。

その後起きた事は言うまでもない、修羅開匣である。

そしてそれに対抗する手段も、あまり多くは無い。

故に了平は、己の切り札、ランボ同様に匣兵器による形態変化カシビオ・フォルマを行つた。

それは、初代晴の守護者と同じ武器、同じ状態を表す匣兵器。

嘗て無敗伝説を築き上げる程のボクサーだった初代晴の守護者は、リング状で誤つて対戦者を殺めた。その後は拳を封印し神に仕える仕事に就いたが、I世の危機に際して、己に3分間の時間制限を設け、見事その拳でファミリーを救つたという。

明るく大空を照らす日輪と謳われた、ナツクルの極限ブレイク！

それは漢我流から撃ち出された晴の光弾をわざと自分に浴びせて、最高状態のコンデイションに持ち込む一種のドーピング技。

晴の活性の炎により、了平自身の神経系、筋力等の肉体強度を超活性させ、通常の10倍以上の身体能力を実現する。普通の間人であればその超活性の負荷に耐えられない所だが、コロネロから何億人に一人という強靱な細胞を持つというお墨付きをもらった了平なら、その負荷に耐えられる。最も、初代晴の守護者の状態を表したこの匣は、流石の了平でもってしても3分間しか肉体が持たないというデメリットが存在する。

つまりは、了平は形態変化してから、3分以内に敵を撃破しなくてはならない。

この状態なら桔梗に匹敵しうる、身体能力のみであれば圧倒するスペックを誇る事は最初の攻防によって証明された。

後は了平の攻撃力が桔梗を戦闘不能にするのが先か、桔梗の無限増殖を繰り返す毛先から生える首長竜による防御能力が3分持ちこたえるか、その勝負だった。

ある特殊な条件下ではある者の、両者のパワーバランスはある種拮抗しているといってもいいだろう。

そして今、その結果が現れようとしている。

「はあ……く、くそう！ぐ、ぐあああ！」

「ハア、ハア。あなたが怪我をしていなければ……危なかった。しかし……超活性の反動が来ているようですね」

互いに打ち込み守り、3分という枠組みを超えた様に感じる程の密度を誇る両者の攻防は、すぐに崩れ去った。

了平は端から見ても満身創痍の出で立ち。晴の活性によって無理やり体を動かしていたにすぎず、塞いだはずの傷が次々と破れ、少くない量の血液を流す。すでにポロポロとフォームも崩れ去り、超人的な能力を得た代償に、リミットの3分を過ぎた事により、肉体が悲鳴を上げていた。

一方桔梗の方は、防御に回した恐竜は全て迎撃されたにもかかわらず、雲属性の特性である増殖によって再び群を率いる。結果を見れば、桔梗は最初の数撃以外全て恐竜で受け止めた為、さらには恐竜も増やし直し、減った戦力は0。と言っても、桔梗自身了

平の力には驚かされ、わずかながら焦り、冷や汗を流した。

一個人の身体能力という点だけ見れば、桔梗がこれまで戦ったどの人間とも、生物よりも強かったと確信をもつて言えるだろう。先ほど彼が言った通り、了平が傷さえなければ、もしも3分というリミットも無ければ、負けていたのは自分の方だと思える程に。

だが、見ただけで分かる。了平はもう、戦う事は出来ない。例えできたとしても、とても真6弔花を打ちとれる力を出せるとは思えない。

ボンゴレ匣が出た以上、これ以上の手は了平には残されていなかった。

「さ、そろそろ幕引きと……あれは？」

優雅に空の上に佇む桔梗は、ふと強大な炎反応と、さらにはこの場所からでも見える、森の一角が視界に映った。

「ブルーベル？それに、あれはイリスのコル!? あちらは……ザクロですか」

少し遠くに見える情景。といっても、森の中というのもありそこまで詳しい景色が見えるわけでは無い。だが、その状態を、景色を変える程の威力を有する力の持ち主を、即座に桔梗は理解した。焦土と化した森の一角は、ザクロの炎、それも修羅開匣によって得た威力の物だろうという推測。

そしてそこからそこそ近い森の上空で、巨大な雨の炎を纏う巻貝、アンモナイトと、こちらも相対する巨大な雨の炎で形成された刃。両者がぶつかり、頑強性と爆発性に優

れたアンモナイトが、なすすべなく切り裂かれ沈黙していく光景がよく見える。桔梗事態の視力や動体視力が良いというのもあるが、あれだけ巨大な物であれば遠目でもわかりやすい。

「何、コルだと!」

「おや、気になりますか、笹川了平。安心してください。どうやらまだあちらの戦闘は続いているようです。最も——」

ブルーベルの絶対防御は完全に攻略できてないようですが、口には出さないが、心の内で嘲笑を浮かべる桔梗は、表でも優雅な微笑を浮かべる。

正面から全てを防御するクラゲバリア（バリエーラ・メドゥーサ）を破ったコルではあるが、それはまだ完全とは言えない。ブルーベルの真の絶対防御があるが所以か、コルは今まで一度も、ブルーベルの一定範囲内に近づいていない。故に、桔梗はその光景に笑う。

例え攻撃で互角の戦いを繰り広げられようと、躲し続けるのにも限度がある。ならば、防御能力が高い方が圧倒的に有利。

ドゴオオオオ!

瞬間、遠目に見えた森の一角、木々を黒い炭の森へと変貌させた焦土から、極大の火柱が立ち上った。

全てを焼き尽くし、全てを分解し、全てを破壊し灰へと帰る強い嵐の炎、紅蓮の劫火。

地獄の鎌が開いたかのような熱量が、桔梗達のいる場所へとわずかに熱風を届ける。だがそれも、桔梗は涼しい笑みで受け流す。

(ハハーン。あれはザク口の炎。ならば、あちらはもう終わりですね)

その時、バキバキと木々がへし折れる鈍い音が耳に響く。何かがものすごいスピードで飛んでくる、いや、飛んでくるというよりも、吹き飛ばされてくる、というほうが正しいだろうか。

その音は了平や、地上にいたバジルの耳にも届いていた。森を見渡せる位置にいた桔梗だからこそ、木々が倒れこちらに突っ込んでくる物体に気づいたが、特に何をするまでもなく、跳び出してきた影は桔梗の足元で佇む恐竜の一体にぶち当たり、そのまま首長竜の首がくの字に折れ曲がり、反対側の木を巻き込んで衝撃をもたらした。すぐに桔梗はその恐竜を切り離し新たに分裂するが、そんな機械的な作業をしている最中でも、笑みは崩れない。

「ハハーン。ザク口が随分と派手に暴れているようですね。感触で人型だというのは分かりました。見てみなさい、あなたのお仲間の末路を」

間違っても、匣兵器ではない、何か己の恐竜に当たった感触に桔梗は瞬時に理解した。

故に、その事を目の前の了平達に教えてやれば、予想通りに表情を驚愕と悲壮に染め

上げる。そして桔梗を含め、森を突き抜け、恐竜を巻き込み、湖の反対側で土煙を立てながら止まった物体へと視線を向ける。

これも桔梗の策略の一つ。

やられた仲間を見せ動揺を誘い、あつさりとその場を抜ける為の。物量差でごり押しもできたが、白蘭が待ち、すぐにユニを連れ戻したい以上、できるだけスムーズに行けるならその方が良いと考えたから。動揺させ、ボンゴレイリスが側の士気を全体的に下げ目的。

士気が上がれば戦争に勝ち、士気が下がれば戦争に負ける。

まるで子供のような精神論根性論だが、覚悟という人の心の強大さで炎の力が決まるこの時代では、あながち間違っていないとも言える。そして尚且つ、この作戦は仲間との結束が強ければ強い程、効果的だ。

だがそれも、桔梗が予測した通り、やられたのがボンゴレ、もしくはイリスの誰かだったら、だが。

「く、がはあ！……この、バアーロオオー!!」

「な！ザクロ!?! 一体これは……!?!」

常に冷静に、微笑を浮かべる優しいリーダーのキャッチフレーズの桔梗にしては珍し

く、驚愕し狼狽する。

絶対という言葉を使う事を厭わない己の自信が、ガラガラと崩れ去る音が聞こえる。一騎当千の人外集団、真6弔花の実力が疑われる状況。

赤黒い皮膚に身を包み、嵐の炎を纏う人型の異形、テイラノサウルスの力を得た修羅開匣状態のザクロが、桔梗視線の先で木々をへし折り、抉れた地面に横たわりながら天空に向かってあらんかぎりの怒涛の叫び声を上げていた。

デイズーに及ばないが、ある程度の再生能力を有するザクロではるが、それでも獄寺に削り取られた左腕は完全に完治していない。

無い左腕を使わず、右腕だけで立ち上がろうとする。

そんな満身創痍な姿に、桔梗は叫び、声を掛ける。

「ザクロ！一体何があったのですか!？」

「くそお！桔梗！あいつが——」

ズガアアアアーン!!

ザクロの言葉を途中で遮り、再び轟音。

木々をバキバキと折り倒し、ザクロに追撃を加えたのは、一本の木。そう木。

緑の葉を宿し、深い年輪を重ねた大木……が、地面と平行に飛んできてザクロにぶち

当たった。

どう取り繕って説明をしようとも、遠回りな言い方をしようとも事實は変わらず。真6 甲花の桔梗でさえ非常識と認める攻撃手段。

やられたザクロ本人だって、あんな馬鹿無茶な戦い方はしないだろう。

しかし桔梗が驚愕したのは、ザクロの最後の言葉の真意。

その時、鋭敏な聴覚を誇る桔梗の耳に、草むらを踏みしめる足音が聞こえた。

(ありえない！ “彼” が出てくるにしても、早すぎる！)

ザクロが吹き飛ばされてきた方角、現在ザクロの方に視線を向けている桔梗の死角となる湖の反対側から聞こえてくる足音が近づくと共に、桔梗の頬を冷や汗がたりと一筋流れる。

ありえない、そう心の中で眩きながら、その圧倒的な存在感が背筋を圧迫する感覚、修羅開匣した影響もあり野性的な感覚が自身の中で警報を鳴らしている。

「あー、パンドラの中って何も無いから逆に疲れた。出てみたらナイスタイミングか……いや、遅すぎたか？ま、とりあえず間に合ったみたいでよかった。一応間に合っ

るよな、どう思う?……真6弔花、桔梗」

「……白神……光努!」

吹きすさぶ微風に柔らかく白髪を揺らし、大胆不敵に、その場に立つのは我一人と言わんばかりに堂々たる姿を、その周りだけ別の空間と錯覚するような圧倒的な存在感を。

この世界に降り立つ特異点、イリスファミリーボス、白神光努は、楽しそうに笑った。

『白虹のワールドブレイク』

木々をへし折った爆風に揺られながらも、まるで大地に根を張ったようにその場から飛ばされることなく、悠然と立ち尽くす姿を、この場にいる人物、桔梗、了平、バジル、太猿、野猿は瞳を見開き見ていた。

闇夜の欠片も見当たらない柔らかかそうな白い髪を揺らし、危機的状况に置いても一ミリも歪むことの無い楽し気な笑みを浮かべた少年。

吸い込まれそうな白い石を詰め込んだ指を詰め、佇む姿は堂々たる物だった。

だが、彼らが皆驚いている理由は、本来囚われていると思われていた少年がいつの間にか出てきていた事に対して。

そしてもう一つ、その出で立ちを特に目を引き、様々な感情を他者に与えていた。チヨイス開始時と変わらぬ服装だが、その身に纏うのは純白。

全てを塗りつぶすかのような、澄み渡る純白の炎の形を取ったコート、いや、コート

の形をした白炎をその身に纏っていた。

炎の繊維で編み込まれたような、ゆらゆらと陽炎のように揺らめく炎の服。

異様でありながら、どこか神々しくも思えるその姿に、思わず皆一様に動きを止めていた。

だがすぐに、遠くから聞こえる爆発音と共に、惚けた意識が強制的に覚醒させられた。

己の眼下に佇む桔梗は光努を睨みつけ、微笑を抑えて言葉を吐いた。

「白神光努、一体ど「光努ではないか!? 極限に心配したぞ!」

「光努殿! 身体は無事ですか!? その纏われている炎のような物は!」

「てめえが白神光努だと! どっから出てきやがった!」

「おい、お前燃えてるぞ? 大丈夫か?」

「あー、一辺に喋るな。今そんな場合じゃないだろ。ていうか桔梗の言葉遮るなよ、聞

いてやれよ。ほら、あいつ唾然として固まってるぜ」

唾然としているかはわからないが、出鼻を挫かれた為、それでも桔梗にしては珍しい

無表情で全員の会話を見ていた。

本体の桔梗は空の上でじつと佇んでいるが、毛先から伸びだした恐竜達は妙にうろろうとしてるので、見ていたこちらとしてもなんとも言えない。

「しょうがない、上の桔梗も含め全員気になることがあるだろうから簡単に説明してや

る。よく聞いておけ」

本来ならユニ奪還の為、問答無用で桔梗は全員に攻撃を加える必要があるが、やはり出鼻を挫かれ、大きな意志にペースを持っていかれたように、どうにも攻撃するタイミングを模索していた。しかし、白蘭の策によってパンドラの匣に封じられた白神光努がどのような経緯で脱出し、さらにどうしてこの場にいるのかという疑問を持っているのも、理由の一つだった。

早すぎる、そう思っていたのが、白神光努をパンドラの匣に閉じ込めてから出てくるまでの期間が、早すぎるという事。これは数値としては、人としてあきらかにおかしい部類に入るのだった。

「バジル、今つてチョイス終わってどれくらいだ？」

「あ、はい。ちょうど半日と少々でしようか」

「半日か、思ったよりも遅れたな。もう戦い始まつてるし」

「遅れた、と言いましたか、白神光努」

「ん？」

聞き捨てならない、というように、桔梗は光努を見下ろし睨みつける。

塵芥な一介の兵なら、思わず竦み上がってしまうような桔梗の瞳を、光努は平然と受け流して上空へと顔を向ける。

「ありえませぬ。スカートラ・デイ・パンドラパンドラの匣は白蘭様が神の叡智を元に模倣された悪魔の一品。隔絶された世界へと存在その物を飛ばす匣。それを、わずか半日で出てくるなど、一体何をしたというのですか」

静かに語るが、その言葉の節々からは、ありえない、という感情が明らかに？きだされてる。

だが桔梗の言葉に間違いは無い。

隔絶された別の空間へと、人であろうと閉じ込めるパンドラの匣。それは出口の無い空間でもあり、出てくる、という行為自体が不可能な造りとなつてはいるはず。無論白蘭も、元々閉じ込めるだけで解放するつもりなど毛頭無く、設計上も出口が無いように制作した。

故に、この事態は桔梗の中では異常事態に入る。

「どうして、ときたか。それならちようどいい。そろそろ向こうもこつちに合流するか——」

ゴオオウウウ!!

「光努（殿）!!」

突如、水面を焦がし大地を抉り、上空の桔梗を見上げていた光努を飲み込むように、獄炎が噴き出した。まるで威嚇する炎の大蛇のように、光努の全身を覆い隠し、背後の

木々をなぎ倒し、天を突きあげ火柱が立ち上った。突然の光景。了平もバジルも、同時に叫ぶが、すでに目の前には炎が広がっている。

対称に、桔梗はあまり驚いた様子もなく、自身の眼下、ちようど光努の立ち位置から見て湖を挟んだ反対側に視線を動かした。

「ザクロ、無事でしたか」

「くそっ！あの野郎、不意打ちで吹き飛ばしやがって、バーロオー！骨まで燃え尽きろお！」

「……まあ大丈夫そうですね。左腕の完治はもうすこしでしょうが」

悪態を着きながらも、自分をなぎ倒した者へと叫び声を挙げたのは、赤黒い皮膚に包まれ、全身を牙と爪によって狂気と化した嵐の真6弔花ザクロ。どうやら光努によって吹き飛ばされ、さらに追撃とばかりに大木を投げつけられたにも拘わらず、とりあえずは大丈夫そう。流石真6弔花というべきが、頑丈性が違う。

そして、先程の炎を出した犯人。全てを破壊し尽くす嵐の炎を、さながら火山のように噴出させる烈火マグマは、光努を飲み込み周りを破壊する。

流石に左腕はまだ完治していないが、あの程度の火力であれば余裕でだせる辺り、ここいらも明らかに人間、生物としての限界を超えている。

避けたそぶりも見せず、不意打ち気味に炎を喰らった光努だが、桔梗はそんな姿を訝

し気に見つめる。

だが、不意に強い爆発音が響き、こちらに向かっている音が聞こえた。徐々に聞こえる音だったが、すぐにその姿が森の向こうより現れる。

「にゅにゅー！もう！あいづらすっごい邪魔ー！桔梗、ザクローー！」

「ブルーベル……と、これは随分と団体さんのお連れですね」

微笑を浮かべる桔梗の視線の先には、空を泳いで来たブルーベル、そしてその背後で動く複数の影。

「ししし、喰らえー！」

軽快に笑う声と共に、ブルーベルに向かって放たれる細かな物体。よくよくと見れば、光に反射して飛び出す一点物と思われる形状をした金色のナイフ。しかも、嵐の炎を纏い殺傷能力を強化した一品。だが、ブルーベルは迫るナイフの雨を、展開した雨の炎によってあっさりと防いでしまった。

あつという間に似たような攻防が2度3度と続いたが、一際強い攻撃と共に両者は距離を取り、ブルーベルは桔梗の隣にふわりと降り立った。

そして隣に来たブルーベル……ではなく、桔梗は彼女と戦っていた者達を見て少し驚いたように瞳を見開く。

「あれは、ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアー、そして——」

雷を纏うエイ、トルペティネ・フルミネ 雷 エイの上にバランスよく立ち、歯をのぞかせて笑うベルフェゴール。

雷を纏うパラポラを、双剣のように持つ男、レヴィアタン。

そして大地に降り立ち、黒と白のコントラストに彩られ、威風堂々たる王の風格をその身に纏う、リクレンベスタディチエリ 天空嵐ライガー。

そのそばに佇む男は、嘗てツナとボンゴレの座をかけて争い、圧倒的な炎と力によって追い詰めた、最凶の暴君。

「——XANXUS」

人を貫けそうな程に鋭い眼光と、憤怒に包まれているかと思間違うかのような濃密な殺気を身に纏い、手元には相手を殲滅する手段、二丁の拳銃をその手に握りしめていた。「ら、纏め話を……と思つたら、もう合流したのか。XANXUS。ヴァリアーの仕事は早いなあ」

ボウウンと、大地を抉る紅蓮の炎をかき消して現れたのは、その身に白炎のコートを纏う光努の姿だった。

不意打ち気味に獄炎を当てられて思わず狼狽……する事なく、異様な程に楽し気に笑い、異常な程にあつさりと炎を振り払い、その場に存在する白神光努という人物には、欠片程の怪我也見当たらなかった。

余裕で先ほどの途切れた会話の続きを話す光努のその姿にはザクロは舌打ちする同時に、戦慄する。左腕が完治していないのでフルパワーというわけでは無いが、それでも人を消し去るのに余裕のある凶悪な一撃。にも拘わらず、光努の姿は無傷そのものだった。

「あ、白神光努！てめー、王子の俺を置いてさっさと行きやがって。レヴィと一緒に追いかけるのが面倒くさいのなんのって」

「何を!？」

「ようべル。とりあえず一言言っておこう。」

「ん?」

「お前とレヴィ、ベスターに紹介分の量で負けてるな。ドンマイ☆」

「うるせえよ!？」

割とどうでもいい若干のメタ発言をしながらも、やはり楽し気に笑う。一瞬ベルフェゴールに侮辱されたレヴィを華麗にスルーした光努だが、この場に置いてレヴィという人物の立場は驚くほど低いので、この場合彼には気の毒だったと言うしかないだろう。

数舜して、刀を鞘に納めた少年コルが、木々を蹴って威力を殺し、上空より光努の隣へと降り立った。

「あ、光努。こっちは全員無事だよ。今はルツスーリアが見てくれている。直に来ると思

うよ」

ザクロによって負傷された獄寺、リル、ラル、γの4人は、道中現れたヴァリアーの一人、ルツスーリアに看病されている。

看病、と言つても、ルツスーリアは別に医者では無い。

ルツスーリアの持つ匣兵器、晴クジヤク（パヴォーネ・デル・セラ）は、飾り羽により治癒活性の晴の炎を照射し、炎の触れた人体を治療する治癒匣。

無論戦闘用ではなく、この匣兵器は治癒系の晴の匣の中では最も炎を散らす範囲が広く、了平の晴ゴテと違って、一度に複数人の複数箇所も同時治療できる優れたものである。すぐに戦闘に参加、というのは流石に厳しいだろうが、動けるようになるまでおそれく時間はかからないであろう。元々追っていた重傷はともかくとして、ザクロ戦で受けた傷は基本的に殆どが軽症の為もあるだろう。

さて、これで真6弔花が3人そろって、さらにはボンゴレ、及びイリスの両陣営も集結しつつある。

「じゃあ、いらいらで少し説明しておこうか。パンドラの匣の脱出について」

何かのゲームタイトルに使えそうな言葉を選びながら、光努は口を開く。元々桔梗も気にはなっていた事だし、この場に全員いるというなら都合がいい。ツナやユニ達はまだまだ当初の地点に滞在したままで、リル達は合流してはいないが、そこは通信機という

文明の利器がある為、さしたる問題は無かった。

それでは、一体光努はどうやってこの場に参上したのかについてだが。

「出口を教えてもらったんだ。正確には道標と、俺の出来る出る方法」

もしもこれが森で迷子になった、どこかの都市部で道を間違えた、というような話なら納得できる事ではあるが、今の状況下においてこの話はおかしな点が多すぎる。

パンドラの匣に關してそこまで詳しくないボンゴレサイドの者であるのなら、誰に？という疑問が真つ先に出てくるが、ミルフィオーレサイドの真6弔花はそうはいかない。

元々そこまで頭は使う方ではないザクロやブルーベルはともかくとして、桔梗の中で起きた疑問符は他の者よりはるかに多く大きい。

まず誰が、というのも考え物だが、出口がある、という言葉にも疑問の余地あり。道標という言葉にも疑問、そして脱出方法も疑問。

結果として、全ての言葉に明確な回答が得られなかった。

あまりにも簡単に、簡潔に語りすぎて、重要な要素が言葉の中から確実に抜け落ちて
いる。

だがこれには、光努にも事情があった。

「誰が、というのは半分くらいしかわからないな。それにそこに誰かいたってわけでも

ないし」

曖昧な答えだが、光努としても説明に窮する内容である事がなんとなくではあるが伺える。

だがそれでも、それだけで納得しないだろう事は光努も最初から理解している。

故に、ゆらゆらと揺らめく炎の衣服を揺らしながらも、光努はびしりと人差し指を立てた。

「実はな——」

白い白い、三千世界をも塗りつぶすような真っ白な空間で、二人の人物が歩いていた。道、と呼べる程、舗装された道路も、踏み荒らされた獣道も、この白い世界には存在しない。まるで自分が浮いているように錯覚し、広い床で歩いているようにも感じる。実際の所は分からないが、ただ白だけの空間ではそれは考えるだけ無駄な事なのだろうというの、なんとなく直感していた。

しばらく歩いてみると、後ろのロルフがぼつりつ眩く。

ただただか細いつぶやきではあるが、遮る物の何もないこの空間では、妙に耳に響く声となって聞こえる。

「どこに向かっているの？」

「ん？目印。えっと、次は……向こうだな」

「どこにあるの？」

「見えないか？ほら、あそこ光ってるだろ。蜜柑か檸檬なら蜜柑っぽい。オレンジ」

「なんで例えが果実？それに全然見えない」

「そうか」

すぐ後ろをついてくるロルフと平坦な会話をしつつ、チカチカと光り、こちらにおいておいでよと手招きしているかのような光を指す。

……この言い方だと最終的に食べられそうだから表現を変えよう。

天から差す光に向かって、俺達は突き進む！いぎ！

……うん、やつぱり考えるのはやめよう。

神器、スカートラ、ディ、パンドラパンドラの匣は、神々が災厄を閉じ込めた匣を開き、人間界に災いが降りかかるといふ伝承で語られる神器。開くと不幸になるといふ物体は、たとえ目の前にあつても使いたがる人間など基本的にいないだろう。だがこの伝承は、パンドラの匣という物

質のとある一面だけを捉えた伝承。

語り口を変え、書き手を変え、視点を変えて見てみれば、この匣の本来とは別種の特異性が際立って見えてくる。

この匣は、世界全土を災禍に引き込む災いの匣。ただ俺からしてみれば、気になるのは災いではなく、それを押し込めておいたと言う匣の方だ。

世界全土に流布する現象を閉じ込めて置けるという事は、視方を変えれば、匣の中に世界が一つ入っている、と解釈もできる。

そう考えれば、この中に閉じ込められるという状況がどれだけ壮大な事なのかもわかる。

分かりやすく言つて、誰もいない、何も無い、存在しない世界に置き去りにされた様なものだった。いわゆる独裁ス〇ツチ状態？違うか。

全くもつて、デパートの迷子アナウンスが可愛く思えるような出来事だ。実際そんなレベルではない。

果てがあるかも分ならず、何を目印にしたらいいのかもわからない。

確かに、閉じ込めておくには果てしなく最適だと言わざるを得ないだろう。最も、規模にしてみれば学校の飼育小屋から脱走した兎一匹に対して陸海空自衛隊を呼び出すような馬鹿げた話だけだな。まあ俺は自分がなんの変哲も無い一般人、なんて思っ

るわけでも無いけどな。

「なあロルフ、お前日本には行った事あるか？」

「……ない」

「和菓子とか和食って食べた事ある？何がうまかった？」

「……羊羹」

「羊羹……羊羹かあ」

意外と普通の物をお気に召したんだな。まあ羊羹うまいし。

「よし、じゃあ今度羊羹食わしてやる。居候してる所の朝菜菓子も作れるから羊羹きつとうまいぞ」

「……別にいい」

「よし、却下だ。いや、楽しみだなあ」

「……」

拒否権など与えない。そうでなくてはこの手のやかからは全ての事柄に対して「別にいい」で済ませるからな。ロルフはこのパンドラに閉じ込められてから、自分の人生をあきらめている。しかしそれは本人も納得している。

元々白蘭について来たのも、何もする気は無いが、言われたら考えず言われたままに動き、言われなければ何もせずの垂る、自殺志願者のような理論を胸に抱えてた為。そ

の理論で行けば、この匣に俺を閉じ込めた時点でロルフのお役は御免、つまり命令する者がいないなら、ロルフは何もしない。

全くもって、テンションが下がりがまくって自己嫌悪に泥を塗りつぶして闇の穴に落した自己中心の塊だ。自分の考えを貫く姿勢はいいが、それが死に向かった姿勢はまっぴらだ。子供なら子供らしく、もっと夢を見て欲しい所。

最も、そうならないような人生を送って来たというのだから、頭から否定するのも違うと思う。

だから俺は、ロルフと賭けをした。

この白い世界で死を選ぶロルフと、生を選ぶ俺の賭け。

生きる事、つまり脱出する事ができたら、俺の勝ち。脱出できなければ、ロルフの勝ち。ここで仲良く二人ともくたばるしかない。

ロルフに対して支払われる報酬は何もない。この何もない世界に閉じ込められ続けるという罰は、与えられるが。

言つて素直に聞かないのであれば、その相手の内に打ち付けられた鉄の釘のような芯を

揺さぶり、引き抜かないといけない。

ロルフは元々心に硬い釘を刺しているが、この世界に來た時点で新たに「脱出は不可

能”という釘を心に差している。

一本でも抜いてやれば、心は揺れる。その波を徐々に大きくしていく。

「はあ、これもそれも白蘭のせいだ」

次に会う時は死なない程度に殴ってやろう。

幻騎士の分と俺の分とロルフの分の最低3発。後は後の状況によるって事で。無論顔面でな。

そうこうしていると、ロルフには見えてないらしいけど、俺の目にはチカチカと見えていた光の道標が、急に途絶えた。

ただ白いだけの世界に絵の具を垂らしたようなわずかな異変だったが、それが無くなるとなんと簡素、というよりは、本当に何も無い世界が見える。

白く白いだけの白い世界。そもそもこれを世界と呼べるかもわからない。立っているのは地面なのか。それすらも分からない。しかし、目印があったから歩いてきたけど、それが無くなると困るな。手探りで周りの空間を見てみたけど、それらしいものは何も見当たらない。

(さて、どうするか)

当然だが諦めるという選択肢は俺の中に存在しない為、打開策を探す。

不意に、何かが光った気がした。

一瞬だが、鋭く突き刺すような、純白の光。同じ白い空間だから分かりづらいだろうと思つたが、不思議と自分の中にずり入り込んでくるかのように、その光は明確にわかつた。ふと背中への気配がわずかに変化した感覚がして振り向けば、ロールが少しだけ瞳を見開いていた。

「何、それ……ファイオーレリング」

その言葉に、自分の指に嵌るリング、ファイオーレリングをふと見ると、中央にはめ込まれた透き通るような白い石が、まるで意志を持つているかのようにわずかに光輝いていた。石だけになんつって。……すまん、忘れてくれ。

——ハハ、面白い事を言うなあ。

「!？」

声が聞こえた。

ただし、そこに誰かがいるという、空気に響く様な声じゃない。いうなれば、幽霊とか神の啓示とか、超常的な不思議な声。

普通ならありえないような音だけど、この場所自体がありえない場所なので、案外無い事も無いかもしれない。

——案外この場所にだけ生息する野生の声とかかもな。

——面白い事を言う。だけど、それは大きな間違い、なんてことは知っているだろう？

まあそうだな。流石に言っていてありえないねこりや、という感じだ。

「ていうか、俺誰と喋ってるんだ？」

「何言ってるの？」

一ミリも表情筋の動かない鉄壁の無表情ロルフだが、どこかしらきよんとした雰囲気が見て取れるような気がする。あくまで気がするだけなので、実際に俗世に無関心なこの少年がどう思っているかはわからないが。

——いやいや、最近の少年はこんな感じだろ。ほら、反抗期とかそんな感じで。

果たして無関心は反抗期の内に入るのだろうか。

——それよりここから出たいんじゃないのか？

そう、それ。

けど、いわゆる「声さん」は知っているのか？ここから出る方法って。

——声さんは新鮮だな。ま、いいや。その腰の物使ってみれば？もしかしたらただけど

出

れるかもね。

随分と投げやりな回答をよこす声だこと。

腰の物、とまるで刀でも差しているような表現だが、俺の腰にはそんな物騒な物はリルヤコルと違って差していない。

あるのはただ一つ。銀色のチェーンに吊るされた立方体、太陽と月と星を、虹で結んだイリスの紋章で彩られた、純白の匣一つ。

——随分と変わった物を持っている。それ使えば、案外うまくいくかも。当然ながらもしかしたら、だけどね。

二回目の曖昧な回答。

けど、確かにこれはある種の賭けだ。まさ賭けと言つても、出れるか出れないかの2択なのだが。

しかしかまあ、確かに他の手段はすぐには思いつかないし、時間が経てば向こうも終わっているかもしれない。そうなつてしまつてはどうしようもない。

チヨイスの結果次第では案外もう白蘭との戦いは終わっているかもしれないし。

……そう考えると今の状況つて結構まずいか。

ボウ！

色鮮やかに、何色にも染まらない純白の炎が、フィオーレリングから迸る。

真つ白な世界に置いて、その存在感は滞る事無く、後ろのロールも瞳を少し見開いて魅入っている。

リングを填めた手と逆の手で、純白の匣を手に、炎を注ぎ込んだ。

「さーと、それじゃいくか。『白^{デア・イリス}虹』」

炎を注ぎ開いた匣から出てきたのは、純白の光。

不規則に揺らめき陽炎のように中空にとどまった白い炎、白夜の炎は、次第にその姿をぐにやりと歪ませ、まるで生き物のように無形の形を変えて、俺の手に絡みつかせてきた。人肌より少し暖かいような、心地よい炎の不思議な感覚。手の平の上で再び、次第にその形状を変えていった。

この匣はイリス技術主任であるルイが、制作不可能と判断されたジエペットの知られざ

る設計書から作り出した匣。

白夜の炎を使い創り出した、過去未来、並行世界に一つしかない、白夜の匣。

「………それ、剣？」

「そうか、今回は『こう』だったか。それじゃまあ早速、てえいやああ!!」

気合を入れる必要があるかどうか、少なくとも叫ぶ必要は無いだろうが、周りが白い白いただ広い世界だったので、一つ気合を入れてみた。

握られた白閃は鋭い軌跡を描き、辺り一面の純白の世界に、亀裂を生み出した。

裂ける空間。その向こうには、無機質な白い世界の明るさではない、自然が生み出す太陽の光が溢れていた。

視えるは森、大地に芽吹く新緑の光。そして、燃え盛る分解の性質を持った紅蓮の炎

が目飛び込んだ。

「——見えた！」

その瞬間、俺はロルフの腕を掴み、外へと飛び出した。

——その道標を残した物に感謝するといひさ。そうでなくては、世界の反対側に出ていたかもしれないからね。

風の流れが飛び込み、消えかかる白い世界から、わずかに聞こえる不思議な声。

助かったけど、結果的には誰か分からなかった。

ただまあ、礼は言うよ、声さん。

——その必要は無い。結果的に良かったが、もしかしたらダメだったかもしれない。ならば、その可能性を考えれば礼など相殺される。まあ、出られたなら頑張るといい。

その声を最後に、俺は白い世界を後にした。

後に、亀裂が閉じると同時に、世界はパンドラの匣に閉ざされた無機質な空間へと戻る。

だがやはり微かに、最後に声が聞こえた気がした。

——頑張りたまえ、ファイオーレリングを継ぐ者。花は再び、咲き誇る。

瞬間、白神光努とロルフ・ミーガンは、ザクロ、獄寺、リル、ラル、γのいる焦土の上へと降り立った。

光努の並外れた動体視力の瞳が、眩い太陽の下、黒々と焼け焦げた焦土の上に横たわる獄寺、リル、ラル、γを捉え、同じ視界の中で獄寺とリルがこちを振り向こうとしているのも分かった。同時、ただ一人立ち上がり炎を噴き出す右手を掲げていた赤黒い影、ザクロ。ザクロも一体何事かと、ギョロリと瞳だけで光努の方へと向くのも見えた。

「て——」

そして光努は、がら空きのザクロの胴体を一足に蹴り抜いた。

ドゴオオオオオオ!!

およそ生物が生物を蹴り抜いた音とは思えない、爆発音のような音と共に、くの字に折れ曲がったザクロは絶叫を残す暇もなく、巨人が踏み抜いたように木々をなぎ倒し吹き飛ばされて行った。

「おまー………光努ー！」

「よ、隼人。みんな怪我してるな。リル、大丈夫か?」

中ほどから焼け焦げた大木に寄りかかって座り、深呼吸して呼吸を整えていたリルは、光努の姿を確認すると同時に瞳を見開くが、すぐに柔らかな笑みを浮かべた。

「あ、光努。おかえり」

「はいよ、ただいま」

どうにもリルがやられているという姿を想像していなかったので少し驚いた風だったが、無理やりではない、今の状況に対して心底笑ったことで、光努も少し安心したようだった。

だが突如顔に影が差したと思ったら、上空から炎が降り注ぐ。

荒々しく燃える紅蓮の業火の雨。先ほどザク口が放出し、そのまま腕と共に地面にぶつける算段だったのだろうが、その前に光努がザク口のみを吹き飛ばしたので、残された炎が降り注ぐという。

当然、その範囲に獄寺もγもラルも、リルも入っていた。

ここで選択するのは、1つ炎を吹き飛ばす、2つ全員連れて安全地帯に退避。

もしくは、

「守ればいい。それだけだ!」

ボオウウ。

光努の手の絡みついていた純白の炎でできた匣兵器、デア・イリス白虹が、弾けたと思つたら獄寺、リル、γ、ラルの三人を覆つた。

「これは……！」

触れば透けてしまいそうな暖かな白い炎の膜。そして同時に、空から降り注ぐ赤い炎の雨。地面を抉り火柱を起こしたにも拘わらず、晴ればそこには変わらぬ、佇む光努と周りにいる者達は一切の傷なく、無傷でそこにいた。そして炎が止むと同時に、纏われた純白の炎が全て光努に集約され、まるで服のように纏われた。

その光景に、意識のある獄寺とリルは啞然としていた。

「とりあえず回復してろ。と言つても了平はいないからな。ふむ……じゃあ——」

「だったら、私が見てあげるわ♪」

「お前は確か……飯係！」

「その呼ばれ方は初めてで少し驚いたわ……」

あははと笑うのは、サンガラスをかけた男、もとい女性口調を使いこなす通称おかま、ルツスーリア。

ボンゴレの独立暗殺部隊、ヴァリアーの精鋭幹部の一人であり、晴の炎の使い手。そして当然ながら、ヴァリアーの唯一の良心であり回復担当。またの名を、ヴァリアーのおかん。

ミルファイオーレと戦うべく、ボンゴレの補佐に、独立暗殺部隊ヴァリアーはイタリヤより飛び立ち、たつた今到着した所だった。

ちなみに、この世界に来た当初、光努はヴァリアー本部に無断侵入し、そこでルツスーリアにご飯を食べさせてもらった経緯があつた。(2話参照)

「まあいいや、じゃあ後は任せた。ちなみに向こうの爆発は？」

「あつちならボス達がいるわ。真6吊花の、確かブルーベルつて子と戦つてるのよ。後コルもいるわよ……てりルちゃん!? 大げがじゃないの! それに他の子達も、すぐ治療してあげるわ!」

これが本当に暗殺部隊の幹部なのだろうか。光努はふとそんな疑問を思うが、ヴァリアーの中では比較的まともな方らしい。一応。

リルの他にコルの居場所も知れたのは光努的には大きい。見えた状況、聞いた情報。光努には、この場の状況把握がだいたい終えていた。

そしてその為光努が今から行うのは、吹き飛ばしたザクロの追撃。ついでに言えば、吹き飛ばした方向に人の気配や炎を感じる。

「さてと、行きますか」

「ていう事があつて、現在に至る。ほら、簡単な事だろ？」

「おお！意外と大冒険していたのですな、光努殿」

「いやいやいや、それだけで済ませちゃだめでしょ」

光努が軽く語る内容に対して、キラキラと瞳を輝かせて尊敬の眼差しを送るバジル。そしてそれを見て無表情でひらひらと手を振るコルだった。

詳細を細かく語ると時間がかかるので、心理描写を省いて簡潔に説明しただけだが、普通に考えてドン引きの内容も含まれている。

特に脱出してそうそうザク口を問答無用で吹き飛ばしたのは神業的ファインプレーだが、同時にザク口でなければ死んでいたのでは危ぶまれるので幾人ドン引きである。「あ、ちなみにロルフはリル達の所に置いてきた。あいつ匣なければ完全に非戦闘員だからな」

おそらく個人が潜在的に持つ炎の量ならトップクラスの炎圧を誇るロルフだが、個人的な身体能力や戦闘能力はほぼ皆無であり、砲撃要塞型の匣である雷エレットリコ・フォルテツツア要塞が無け

れば戦闘でできる事はほぼ皆無。せいぜいがリングの炎で身を守るくらいというので、当然の如く置いてきたのは正しい判断だろう。

そもそもがマフィアとは何の関係も無い一般人であるのだから。

「ハハン、腑に落ちない点はありませんが、あなたがここにいるというのは事実。ならば、目的を遂行するまでですな」

まるで天空の大舞台で指揮棒ダクトを振るように、わずかに右手を動かすと同時に、桔梗は仕掛けた。

桔梗の結った髪先から伸びる変形増殖された首長の恐竜の頭の数々。それは一度下の湖に浸かり、再び水面に出しているが、湖底を突き破り地面へと潜らせる。

見た目だけでは判断がつかないが、人の立つ大地の←という完全なる死角からの奇襲攻撃。そして桔梗は、光努の足元へと恐竜の頭を潜り込ませる。

そしてそれは桔梗の合図と共に、光努へと向けと、水面を動くように滑らかに、地面から地上へと飛び出した。だれもそれに気づかない。会話と会話の合間の出来事は、言葉を発する対象を見ている。気づくのは桔梗一人。

桔梗は、気づいた。わずかに、自身が狙い定めた地点、光努の足元の真下へと恐竜を動かすと同時に、その場からわずか半歩程後ろに下がった光努を。

だがそれでも、恐竜到達地点の真下にいる事には変わらない。地面を粉碎する爆発音

と同時に、光努の足元から凶刃な牙を備えた巨大な竜の顎が跳び出した。

凶刃な牙が肉体に食い込み、引きちぎるように天空へと駆け上がり血潮をまき散らす、と予想をしていただけに、この光景には正直予想外だった。

問題なく地面から跳び出し、そのまま光努の体を空へと吹き飛ばした。だが、本来なら恐竜に喰われる予定だっただけに解せない。同時に理由もわかる。

光努がわずかに下がった半歩、その足でもって、跳び出した恐竜の鼻先へと足の裏を当てた。まるで、どこから恐竜が出てくるのがわかっていたかのような絶妙なタイミングの移動。

無傷のまま下から持ち上げられて、光努の体は天空へと飛び出した。

「光努ー」

誰が叫んだのか、一瞬の出来事に皆驚くが、止めとばかりに放たれた業火が上空の光努を再び飲み込んだ。

誰が見ても分かる紅蓮の業火、ザクロの放出した嵐の炎だった。驚きに包まれるが、ザクロ本人は訝し気な表情ですぐれない。同様に桔梗も、良い表情はしていない。

それは先ほどの二の舞だと、理解したからだろう。一度変えならまぐれで片付けられる状況も、真6 弔花の圧倒的な力に2度目は通常存在しない。だが、光努はあっさりと

初撃を凌いだ。いや、凌いだという表現も正しくないかもしれない。光努にとって、この程の炎は、苦でもなんでもなかったから。

ボオオウウ!!

ぶわりと、自身の身に纏う純白の炎の衣を翻し、振り払った業火を纏って中空へと降り立つ。

チリチリと吹きさす紅い火の粉が小さく純白を照らし、一枚絵のように炎の上に降り立つ姿は、同じ人間とは思えない神々しさに包まれていた。

破壊と分解をまるで物ともしない所作に、まるで水を掬うように紅蓮の炎に素手で触れ、さらさらと空に溢す。

「白夜の炎の特性は『適応』。この炎にはもう、慣れた」

純白の炎を身に纏い白神光努は、楽し気に笑った。

『白夜解体打倒幽霊』

最も強い物が生き残るのではなく、最も賢い物が生き延びるでもない。

唯一生き残るのは、変化できる者である。

イギリスの自然科学者、チャールズ・ダーウインはそう語った。

地球上に住む全ての生物は、太古の大陸を跋扈していた祖先が、星の成長と共に振りかかる災厄に対応する為に、進化を続けていた。劣悪な環境があるのであれば、そこが劣悪でなくなるよう、生物としての本質を改造する。それは自然の中で何億年と行われてきたある種の本能であり、そのおかげで現代多くの生物が現存している。

しかし、それは通常一種の生物が何億年と時間をかける事で、後の子孫が生きながらえる術を見つけ出す気の長い能力。環境に適応するということ事は、簡単な事ではなかった。

しかし、それをあつさりとやってのけのが、白神光努という人物。

正確には、彼の持つ『白夜の炎』の能力。

白夜の炎の特性である、適応、は、自身に振りかかる害悪、負荷、災いに対して、完

全対応を施す未知の炎。さらには、それを増長させ特性を最大限まで引き出す匣兵器、『白虹』デア・イリス。

強靱な分解力を持つ嵐の炎を粉碎し、対象を沈静させる雨の炎を中和し、惑わしの霧の炎の幻術を見破る。

本来なら強度という点で言えば皆無な白夜の炎だが、白神光努という人物にとつてその程度はハンデの内に入らなかつた。

堅牢な鎧を身に着けるよりもはるかに、白神光努という人物の力は人としての限界を超えていたから。

「なるほど、少しですが腑に落ちました。僕の地獄道が徐々に効かなくなつていったのは、あなたの体内に流れる白夜の炎の力、という事ですね、白神光努」

サク、サクと、柔らかく風を受け止める草むらを歩く音と共に、風に乗つて来た声は、その場に振りかかり全員の挙動を一瞬硬直させる。森の木々を抜けて、木と木の間から現れた人物は、人を怪しく惑わすような笑みを浮かべ、後頭部で結われた長い黒髪を揺らす。

ゆらゆらと死神のようでありながら、特徴的な独特の髪型と、その右目宿すのは、血のように真つ赤に映る瞳と、刻まれた『六』の文字。

ボンゴレ霧の守護者、六道骸、その10年後の姿である未来の骸が、優雅に笑みを浮

かべて現れた。

「ししよー。あんまり前に出ないでくださいよ。すぐ真ん中立つて目立とうとするんですからー」

「お前の頭が邪魔だからですよ。不詳のダメ弟子よ」

10年後の大人へと成長した骸、そしてその後ろにひよつこりと出てきたのは、ヴァリアー幹部のフラン。

黒々とした蛙の着ぐるみのような帽子をかぶり、ヴァリアー揃いの隊服に身を包んだ姿とは裏腹に、適当さの漂う覇気のない表情は本当に暗殺部隊かと思う程。だがその実、霧の幹部としての幻覚能力は世界でも五本の指に入ると言われており、実は骸の弟子という、この10年の間に何があったのかが非常に気になる存在だった。

抑揚の無い棒読みのような口調のフランは、同僚のベルを見つけ、ひらひらと手を振った。

「あ、ベルせんぱーい。無事でしたねー、あー、よかったよかった。ミーの活躍見てくれましたか？」

「お前何もしてねーだろ！あとその棒読みやめろ。ぜってー心配なんてしてなかっただろ、むしろくたばれて思ってただろ！」

「それはお互い様という者ですよ。それに形式上でも心配されるんですから感謝されこ

そ罵られる筋合いはないですよー」

「このくそ蛙が……」

ザクシュ!

ベルとフランによる言葉の応酬が始まろうとしたときに、それを遮るかのように骸の手の槍が、フランの蛙頭を貫いた。

『!』

突然行われた骸の無言脳天貫きに、幾人かは驚いたように表情を変えるが、等の突き刺された本人はどこ吹く風と、無表情を崩す事無くお助けーと棒読みでつぶやいてい

る。そんな弟子の様子も特に関係となしに、骸は問答無用で突き刺した槍をぐりぐりと動かしているが、まったく手元を意に変えさず会話を続ける。

「お久しぶりですね、白神光努。あなたとこうして会うのは、この世界での黒曜ランド以来ですね」

「お前の手元が気になるけどいいや。あつたと言っても実態じゃなかったけどな。なんだ、俺より先にヴァリアーと合流してたのか」

「ええ。本当なら幻覚を使って敵のデータを引き出そうと思ったのですが、あなたのおかげでその必要が無くなりましたね」

六道骸は、この10年復讐者の牢獄に囚われていた。

流石に骸といえど、最下層の牢獄からの脱出は困難を極める。しかし通常の囚人ならともかく、骸の場合は特殊な憑依弾の事情があり、精神だけを飛ばして波長の合う別の肉体に映る事ができる。その対象者としては、主な例ではクローム髑髏、そしてこの10年後の現在では、霧の匣兵器であるムクロウへと一度憑依をしている。光努、がクロームとこの時代で合流する時、グロキシニアの匣兵器を乗っ取り、その時に一度邂逅していた。

しかし、それでも肉体は囚われたまま。それを開放したのが、骸の弟子でありヴァリアー霧の幹部であるフランだった。

本来なら白蘭が、最後の真6弔花であるGHOSTを復讐者から解放するために取引をしたのだが、白蘭の使者が赴くよりも早く、その使者に幻覚でなりすまし、復讐者を欺き六道軀を開放したという。

それは白蘭と復讐者の取引内容が、「GHOSTの解放」では無く、「最下層の囚人の男の解放」だったからこそ可能な作戦だと言える。同じ最下層に幽閉されている骸を解放しても、復讐者は不思議に思わない。

寧ろ、彼らを欺いたフランの幻覚能力の高さに驚嘆すべきだろう。彼ら曰く、自分達を欺ける術士など世界に5人といない、らしいのだから。

無事に脱獄を、いや、一応合法的な出獄を果たした骸は、そのままフラン他、千草や犬、MMと同時からの仲間と共に日本に渡り合流。

ここで骸のウォーミングアップに幻覚を使い、真6甲花の戦い方や技などのデータを引き出そうと考えたが、その前に光努が現れ、結果として光努、そしてコルによつて敵の全貌は大方暴かれた。

光努が桔梗の地中攻撃を引き出したように、コルもブルーベルの秘密を暴いた。

それは、ブルーベルが自身からおよそ半径5メートル程に纏う、透明な純度100%の雨の炎の防壁。これは本来防壁という物でなく、放出するバリアを突き抜け、自身の射程内に入った人間を一気に殲滅するための防壁。純度100%の雨の炎は、特性である“鎮静”作用を極限まで高め、振れる物の分子をほぼ停止に近づける。肉体の機能を停止させらるという事は、生物には成すすべない絶対の攻撃にもなる。それが透明で展開されているのだから、初見で何人もやられてもおかしくない。

しかし、今回はブルーベルの相手が悪かったと言わざるを得ない。

コルは自身と同属性、すなわち雷と雨の炎に関しては常人やりはるかに高い感覚で察知できる。

故に、ブルーベルが自身に纏っている隠蔽された強大な雨の炎に対して、気づくことができた。それでも微かに違和感だったのだろうが、極大の大太刀、『彩式改・蒼碧水紋

魔太刀』によって実際にブルーベルの近くを遠くから斬りつけることで、伝わる感触から実際に雨の炎があるという確信を得るに至った。そしてそれは、すぐに合流したヴァリアーに伝えられる事になったという。

「さて、それではそろそろ戦闘開始、と行きましようか。そこにいる彼も、痺れを切らし
ているようですし」

そう言つて森の影を見ると、いつの間にかいたのか、もう一人増えていた。

黒い学ランと、紅い風紀の腕章。そして黒髪の下で鋭い肉食獣のような鋭い眼光を持つトンファーを持った少年、雲雀恭弥。

そういえばとその存在をすっかり忘れていたが、今の会話の中でここへと到達したようだ。隠す様子もないぴりぴりとした殺気を身に纏っているが、その視線はそこに佇む肉体を持った六道骸をじろりと睨んでいた。

だが骸は、余裕そうにその視線を受け流し、眼前の真6吊花をじつと見る。

「さて、例えば彼らの技が分かったところで、弱点が分かったわけではありません。ここからが本当の死闘となるでしょう」

「はい、本番始いきまーす」

骸のシリアス感をぶち壊すフランの発現は全員が無視する。

雲雀やXANXUSも思う所は色々あるだろうが、同じボンゴレやイリスではなく

目の前にいる真6弔花を咲きに潰す、という事に関しては同意を示した。それに対して、真6弔花の桔梗、ザクロ、ブルーベルは不敵に笑みを浮かべる。

この戦力差に対して、臆することも無い。今の会話の中で、ザクロが左腕を完全に完治させたというのもある。

（やはり気がかりは、白神光努、彼だけでしょうか）

桔梗の中で一番警戒警報鳴らしていたのは、やはり光努。

白蘭から各人全ての技の攻略法を伝授された真6弔花だが、ボンゴレ匣と白神光努本人の情報だけは皆無。了平との対戦もあり、ボンゴレ匣は驚異的だが自分達を打倒する程でもないという評価を下したばかり。

だが光努に関しては、今さっきの攻防だけでも、人と見ていいのか果てしなく疑問を浮かべざるを得ない程の怪物、という事を理解していた。

「恭弥今までどこにいたんだ？俺さっき来たばかりだから全然知らんのだが」

「なんだ。君、生きてたんだ」

「ひびくー」

まあ一時期封印状態にされていて生死不明だったので雲雀の言いたい事も分かるのだが。

しかしそれは置いておいて、そろそろ殺気の火花がチリチリと弾け、戦いが始まろう

としている。

ボンゴレ、イリス、ミルフィオーレとの戦いも、これがラスト。何度目かのラスト宣言

など関係なく、戦いの火蓋は切って落とされた。

「えーヴァリアーが!?それに光努も!あと骸と雲雀さん!?ああ、なんかいつの間にかすごい事になってるんだけど!!」

「みんな続々集まってきてるみてーだな」

通信機から流れる戦闘音と、治療中の仲間からの伝令。

イタリアにいたはずのヴァリアーが現れ、パンドラの匣に囚われていた光努がいつの間にか出て、脱出不可能の牢獄にいた骸もいて、並盛中を最後に消息の消えた雲雀がいる。

本来どこにいたのかもわからない連中が、ツナの預かり知らぬ所でわらわらと集まるという事態に驚き、さらには一人一人がツナを縮み上がらせる様な戦闘力を有する者ばかりなので、驚くのも頷ける。

「そうか、光努も戻って来たか。思ったよりも早かったな。まあよかった」

表情のあまり変わらないルイの言葉は、まさに研究者といった感じではあるが、会話の節々と雰囲気にはやはりほつとしたような感じがする。おそらく神器、匣に関してはこの場の誰よりも膨大に理解があるから、心配もするし、同時に安心もする。

「ツナ、光努の様子はどうか？何か武器を持っていたり体に纏つたりしてるか？」

「あ、うん。なんか白い炎みたいな服を着てるって、獄寺君言ってたよ」

「白い炎の服、そうだったか。てことは、今はそれ程緊迫した状況じゃなさそうだな……」

光努的には「

「どういふことだい、ルイ。白い炎っていうのは光努君の白夜の炎の事だよ。それが服っていうのは……」

今だ寝たままの入江は、ルイの言葉にいくらか疑問を抱く。

そもそもが、光努の持つ白炎、白夜の炎自体の詳細もあまり詳しくない。それは入江だけでなくツナ達も同様なのだが、技術者である入江をもつてしても、いや、白蘭でしても白夜の炎の詳細を見つづける事は敵わなかった。何しろ、調べる為には実物を調査す

る必要があり、その実物が存在した事実が無いから。

10年前の段階で、光努は白夜の炎を使用した形跡が無い、それどころかフィオーレリングを填めた事すら基本無い。だからこそ、白蘭の能力が使える10年前からだろうと詳細を知る術は存在しない。未来世界に置いて初めてフィオーレリングを使用した光努と、それを調べたルイ以外には。

「正一も聞いた事くらいあるだろ。ジエベットの残した設計書の制作不可能な奴」

「確かに聞いた事あるけどあれって確かそういう噂ってだけで本当にあるかどうかは……まさかルイ！」

「そう、実在する。そして、それ俺が作った。だからと言って、俺がヴェルデ達よりも優秀とかそういうわけじゃないけどな。あれを作るのに白夜の炎が一番適してたってだけだからな」

技術的に誰が優れていたか、なんてのは今更言っても意味がない。この場合重要なのは、彼らの元には何もなく、ルイの元には白夜の炎があった、ただそれだけの違いだろう。

3人の天才匪職人達がいた時代、もしも白夜の炎かそれに類する別の物質があれば、不可能という判断は下さなかつただろう。

「光努に流れる波動は、白夜の波動。純白の炎。その特性は“適応”。常に変化し続

け、常にその状況に適応し、常に万全の態勢で迎え撃つ炎。あの炎は、少し大空の炎に似ているな」

「大空の炎にかい？」

「大空の炎は全ての属性の匣を開く事ができるが、白夜の炎も同様に他の匣を開く事ができる。それは白夜の炎が、その匣に対して適応しているからなんだ。実際に試してみたら確かだ」

チヨイスが始まるまでの10日の間で、様々な実験と試行錯誤を繰り返した。

実際に、ファイオーレリングから発せられる白夜の炎により、ルイが用意した雲の匣や嵐の匣、雨の匣などはなんの問題も苦も無く開匣する事に成功した。

確かにここだけ見れば、特性は異なるが大空の炎と同じ。だが、根本的に似て非なる物。

「そういえば、光努君はメローネ基地で雲や晴、嵐の炎なんかも使ってたけど、彼には他に波動が流れているのかい？」

「いや、光努に流れているのは白夜の波動のみだ」

「え!? それってどういうこと？」

入江の疑問から、ルイの否定の言葉。そしてその言葉に驚くツナだが、すぐにルイは答えてくれた。

「光努に流れる白夜の波動は適応の波動。流れる波動は一致するリングに関係なく、己を適応させ炎を変質させる」

「えつと……つまりどういう事？」

「つまり、光努は身に着けたリングの炎を全部出せるって事だな」

「え、それなんてチート？」

リボーンという言葉に、啞然とするツナ。

例えば雨のリングを付けたなら雨の炎を、嵐のリングを付けたなら嵐の炎を、雲のリングを付ければ雲の炎を、晴のリングを付ければ晴の炎を、放出できる。

ルイから渡された晴のリングを使い、晴の匣フォレスト・パルツ迷いの森を開いた。ニゲラ・ベアバンクルの持つ雲のリングを使い雲のアップデート匣を開匣した。リルの持つ嵐のDリングを使い嵐の匣である真紅オリゾンテの輪を開く。雨のリングを使つて雨の匣スプリット・メーゼ、十五月を使用する。

そのどれも、リングと同属性の炎、それも高純度の炎を発現させた。

光努の体内に流れる波動が、リングに適応し炎を創る。故に複数の波動が流れていないにも関わらず、単一の波動のみで炎を派生させている。

「なる程な。光努の炎に関して少しわかったな。獄寺の例もあるから複数の炎を持つ事はありえなくねーが、光努のは少しちげーと思つたしな」

「でもそれってすごい事だよな」

「何言ってるんだ。おめーの天空の炎も似たような物だろ。それに、複数の炎が出せれば強い、なんて事は無いぞ。現に光努は基本的に自分の肉体だけで戦ってるしな」

「確かに。そもそも光努が炎を使って戦ってるのなんて俺見た事無いよ」

ツナのいう事ももつとも。

無手の戦闘スタイルである光努は、ツナのようにグローブを付けて炎を纏わせる、なんて事はしない。

そもそも白夜の炎は、炎としての防御力は皆無の為、あまり攻防には向かない。

「まあでも白夜の波動ってのは便利そうだけどな。今までの光努の怪物じみた能力がいくつか説明できるぞ。幻覚がほとんど効かないのと、ツナの炎を素手で受け止めた事とかな」

「腕力はともかく、熱による耐性とかな」

「あー、なるほど。あれ全部説明できたんだ」

光努が単純におかしいだけかと思った、とは口が裂けても言えないツナ。

まあ通常の炎の波動と違う波動が流れている事と、それを抜きにしても身体能力が異常な事はどうやっても否定できないのだが。

「多分光努君なら、トリカブトの修羅開匣も徐々に慣れて、最終的には幻覚を破る事がで

きるんじゃないかな」

「うそっ！」

「そいつはやべーな」

あくまで入江の推測の域を超えないが、ボンゴレの超直感すら封じた修羅開匣の幻覚を破るとなると、かなりとんでもない。あれは術士としてある種限界を超えた先に到達した物、超一流とでもいうような人物で無いと、おそらく対抗できない部類の物だろう。ふと、トリカブトの名前を聞いて、ルイは思い出した、とでもいうボンと世に手を打つ。

「ああ、それとツナ達はリルの使った『ホワイトナイト白夜の騎士』は見たな」

その言葉に脳裏に思い出されるのは、リルの剣に纏われた白い炎。嵐の炎と混ざり合
い、緋の炎を創りだした特異な匣。

ホワイトナイト白夜の騎士は、白夜の炎を使用したアップデート匣の一種。

既存の炎、武器、身体に対して適応し、白夜の炎を纏わせ合成、単純に言えばどんな人、物に対して能力値を強化する匣。一見すれば炎だけを放出するのでバッテリー匣の様にも見えるが、その実オールランドに扱う事ができるブースト匣。

白夜の匣は誰に対しても、どの属性に対しても平等に開く権利を与える。だから白夜の波動が無いリルでも、簡単に開匣する事ができる。

白炎とと赤炎で緋炎。なるほど、なかなかにわかりやすいじゃないか。「ツナも使おうと思えば使えるぞ。まあ今は手元にないけどな」

何も持っていない、という事をアピールするように両手をひらひらと振るルイ。決戦の前、リルにチョイスとトリカブト戦で壊れた物と交換して新しい4本のグラディエーションを渡したが、基本はそれだけ。それ以外の武装に関してはチョイス前に全て渡してあるので、後は本人次第という。

(このままゴリ押しで行けば光努もいるしおそらく真6弔花の3人には勝てる。だがあと

気がかりなのは、いまだ戦場に来ていない白蘭と、最後の真6弔花。さて、どうなるか)

ルイは今だ戦線に参加していない白蘭の事を考えつつ、祈るように両手を組んでじつとしているユニをちらりと見る。

ユニを目的としているのであれば、白蘭は必ず現れる。問題は、そのタイミング。様々な力が集約し、混沌と化した戦場において、何かを待っているかのように手を出さずに傍観を決め込む白蘭。

時が来れば動くのか、その時はいつなのか。

その瞬間、遠目からにも分かる細い閃光。

翡翠のような閃光と共に、戦場に異変が生じた事をこの場にいる者達は感じ取った。戦況が、動き出した。

苛烈を極めたボンゴレ、イリス、ミルフィオーレの戦場の中で、白蘭の手による一手。

戦場が激変するまで、あと数分。

「おらぁー喰らえー！」

元より一回り程巨大となった、ザクロの剛腕。

木々をなぎ倒し、炎を薙ぎ払い、人であればまさに真綿を巻るように引き裂けるが、相手が悪かったとしか言いようが無いだろう。

目もくらむような純白の炎を服の形状にして身に纏い、楽し気に笑う少年、白神光努。頭蓋を砕かんと迫るザクロの腕に対して、下から組んだ手をぶち当てて、強引に上へと弾く。上から振り下ろせばダブルスレッジハンマーとでも呼ばれそうな動きだが、今

回は逆から跳ね上げるようにして軌道を逸らす。最も、それを光努の腕力で繰り出せば、到底逸らすだけでは済まさないダメージをザクロは受けていた。

(バーロオ！まるで鋼のハンマーでぶつ叩かれたみてーな衝撃だあ！こいつ、どういう肉体してやがる!?)

ぎろりと瞳を動かし、跳ね上げられた腕をそのまま振り下ろそうとする。同時に掌と爪に嵐の炎を纏い、威力を底上げする。例え光努といえど、至近距離から炎込みの剛腕を喰らえば、流石にただでは済まないだろう。無論それも、無事に当てられたら、の話だが。

「白道・白穿打」
はくせんた

ドオオオオン！

ザクロが豪腕を振り下ろすより早く、跳ね上げた腕を潜りザクロの目の前へと自身の体を潜り込ませた光努は、組んだ両手はそのままに、左手で押し出すよう、右肘をがら空きのザクロの水月へと打ち込んだ。

灯夜に教わった源流無道流において、大地を踏みしめ、加速した勢いを殺す事無くただ一点に集約する技術、穿打せんた。それに加え光努は捻りを加え、コークスクリューブローのような体当たりをするかのような威力を肘の一点に集約し、ザクロを撃ち抜いた。

爆発音と間違うような音を置き去りにしながら、桔梗の恐竜を数体巻き込みザクロは

風と重力に逆らって吹き飛ばされた。

「ザクロー！」

「どこ見てやがる」

ザクロの方へと一瞬意識を向けた桔梗に、相対していたXANXUSは両手の二丁拳銃の引き金を引き、圧縮された圧倒的な破壊力を持つ憤怒の炎を撃ち出した。

すぐさま、桔梗は自身の分身でもある増殖した恐竜を己とXANXUSの間に動かし、身を守る盾にする。

例え破壊されたとしても、雲の増殖によつて増やす事の出来る帰郷にとつて、恐竜一体一体を使った攻撃も防御も自由自在。高い硬度の盾ではないが、無限に増え続けるというのはなかなかどうしてうつつとうしい。破壊力のあるXANXUSの炎も、数体は普通に吹き飛ばせるが、攻撃に気を寄せ過ぎれば他の恐竜が狙ってくる。

「ちっー！」

軽く舌打ちし、眼下に向けた拳銃から炎を噴出し、その推進力を利用して一瞬で移動して恐竜の猛攻を躲す。

増え続ける恐竜を破壊し続けるという無意味な攻防を終わらせるには、桔梗本体をどうにかして撃破しなくてはならない。それにはまず恐竜を倒す。

これでは矛盾した攻防の繰り返しだ。その攻防を回避するには、新しい手を打ち込む

必要がある。高速で桔梗と恐竜達の周りを飛び回るXANXUSは、片腕で拳銃を、空いた手で耳に備えたインカムに手を当て、ぽつりと呟く。

「——やれ」

瞬間、桔梗の顔が爆発した。

突然の爆風に、ピンポイントに桔梗の上半身が煙で多い隠される。

突如飛来した攻撃。それを撃ち出したのは、桔梗のいる地点からおよそ500メートル以上離れた場所に位置する人物。

森の中にひっそりとたたずみ、溶け込むように一際大きい大木の中腹の枝の上で、片膝立ちで戦場を見ている人物は、ガシヤリとその両手に持った狙撃銃を構え直す。

闇夜のような黒髪をキャップに収め、ヴァリアー特有の隊服に身を包んでいたのは、ヴァリアー雲の幹部、蔵見考魔。

通常よりも少し長い黒塗りの狙撃銃を構え、スコープ越しに桔梗の姿を見て、ぽつりと呟く。

「……ボス、防がれた」

晴れた煙の中央に佇む桔梗は、両腕をクロスさせ、純度の高い雲の炎を纏っていた。わずかに腕が負傷しているが、戦闘不能になるほどではない。

不安定な枝の上、さらには500メートル以上離れた地点から人の頭を狙撃銃で撃ち

抜く考魔の手腕は見事と言わざるを得ないが、驚くべきは、知覚外から飛来した亜音速の弾丸を、咄嗟の光と炎を見てから反射的にガードした桔梗の能力の高さだろう。

結果としてわずかに傷を残したが、大した傷ではない。入江特性のレーザートラップを全て、リングの炎のみで防ぐほどに、修羅開匣して恐竜が目立っているとはいえ、桔梗単体の防御能力も遥かに高かった。

「ハハン、狙撃兵を一人配置していましたか。けど、場所が割れてしまつては役に立ちませんね」

そう言うと、桔梗は自身の配下の恐竜を複数分裂させてる。狙撃兵の対処方法として一般的なのは、遮蔽物の影に隠れる事。

そして桔梗は、己の恐竜を複雑に増殖させ、自身を守る盾にすると同時に自身の姿を隠す遮蔽物とした。それに加え動き回る戦場の中では、そう簡単に当てられる物でもない。

広範囲を狙う雲の炎を利用した増殖攻撃も考魔にはあるが、乱戦の中だと味方に当たる恐れもあるので愚策。故に、考魔は狙撃銃を降ろし、自身の愛銃をガンベルトから引き抜き、戦場へと歩を進めた。

入り乱れる炎。混沌と化す人と怪物の宴。

大地を抉り、空気を切り裂き、木々をへし折る。強大な力と力がぶつかり合い、森の

被害など考えるのも馬鹿らしくなるようなまさに戦場。

この戦場に誰が割り込むことなどできよう。誰にも止められよう。

もしもこの戦の空気を止める物があるとするれば、それは確実に、人間ではなかった。

天より降り注ぐように、白蘭の悪意が戦場に舞い降りた。

突然の閃光に、思わず皆戦いの手を一時的に中断する。

空気から生み出されたかのように、突如空間より出現した強大な雷。

眩いばかりに辺りを照らす閃光に一同目を眩ませるが、光の中央に見える影に驚愕を顕わにする。

果たしてそれを、人と言っても良いのだろうか。

波打つ髪と、視線を宿さない瞳。右目の下の三つ爪のマーク。腕もあり足で地に立つ姿。

人としての特徴を持ちながら、誰もそれを人間と表現する事が出来なかった。

およそ3メートルはあろうかという体格。なにより、全身うつつすらと発光し、まるで亡霊のようでもあり、自動駆動の人形のようでもあり、ただその場にいるだけで、雷の化身とも言ってもよかった。

だが、その存在をボンゴレ、イリス、ミルフィオーレを含めて全員がすぐに理解した。指に填め込まれた、雷のマーレリング。

その存在から、姿の見えない最後の真6弔花という事は分かる。

だが、桔梗、ザクロ、ブルーベルの3人からは援軍が来たという喜びの感情は一切無い。

驚愕、動揺、焦り、恐れ。到底、同じ真6弔花の仲間が登場した事とする表情では無かった。

しかしそんなことはお構いなしとばかりに、硬直した桔梗達を保留とし、突如現れた最後の真6弔花、GHOSTゴーストに対して、ボンゴレ側は先手を仕掛けた。

ベルフェゴールの嵐の炎を纏ったナイフ。レヴィのパラボラから放たれた雷撃。どちらも10年前のリング争奪戦より炎と熟練度を上乘せしたパワーアップした一級品。

回避、防御、反撃、あらゆるGHOSTの行動を想定したが、結果としてどれも違った。

奴は——何もしなかった。

スカ!

擬音が無ければ無音が支配していたであろう、攻撃の素通り。確かにそこにいるのに、攻撃の手ごたえが皆無という状況。

まるで半透明なホログラムを攻撃したかのように、ベルのナイフは上から素通りして地面に突き刺さり、レヴィの雷撃は正面から抜けて背後の雷の当たる。

一体自分達は何と戦っているのか、幻覚なのか？だがその考えは、骸と弟子のフランによって否定された。

「間違いない、GHOSTは実在している。それに白神光努、君にもしつかりと見えてい
るはずです」

「まあな。確かにあれは幻覚じゃないみたいだけど、じゃあなんだ？」

確固たる骸の言葉の真意を疑う物などいない。このメンバーの中では、幻覚能力に置いて骸、次いでフランの右に出る者は存在しない。

そして光努。白夜の特性を持つ光努は幻覚ならすぐに見破る事ができるが、光努の瞳にはしつかりと、発光する雷の巨人が映っていた。

だからこそ不可解。幻覚で無いのであれば、あれは何なのか。皆の言葉を、光努は代弁した。

ただそこにいるだけの、まさに幽霊^{ゴースト}。

攻撃してくる気配の無い物体に対して、バジルは了平と獄寺に提案する。

「複合属性の炎なら効くかもしれません。今こそ匣コンビネーションです！」

バジルの匣兵器、ドルファイネ・デイ・ヒョウシヤ 雨イルカは匣の中でも特徴的に知能が高く、それ故に他の匣

アニマルと意識を共有し、ボックスコンピネーション高次元匣連携能力を可能とする。

バジルのアルフィンの雨の炎、了平の漢我流の晴の炎、それら統合して、獄寺の瓜に向

かって放出し、3種の炎を集めた。

本来なら昨夜行つたばかりで、まだコントロールに難があるが、今のGHOSTは攻撃の意志を一切見せず、悠々とゆつくりと歩いている。ならば、試してみる価値はある。

瓜、ガット・テンベスタ嵐 猫は晴の炎によつてアップデートし、バンテラー・テンベスタ嵐 豹へと成長を遂げる特殊な

匣。複合された死ぬ気の炎を身に纏い、獰猛なる豹はGHOSTへとその牙を、爪を、肉体を打ち当てる。

たいえんらんくうが太炎嵐空牙！

アルフィンの匣コンピネーションにより編み出された、独自の必殺技。

真6甲花でさえも食らうのは勘弁、半端ないと太鼓判を押しせる程の威力を誇る猛獣は、一直線に向かう。

だがそれでも、歩みを止めない緑光の幽鬼。何もすること無く、ただそこにいて、ただ歩いているだけ。変わる事など無い。

だが瓜がGHOSTに触れた瞬間、変わった。

纏われる雰囲気、がらりと変わる。

雰囲気、なんて言葉を使えばいいのかは不明だ。

そもそも人間とは思えないGHOSTだが、一つだけ言える事があるとすれば、確実に変化は起こった。まるで自身を守るバリアでも張るかのように、激しい光球に包まれるGHOSTに、明らかにただ歩いていただけの先ほどとは異質な変化を、この場にいる全員が感じ取った。

不意に、光努は自分の体に起こる変化を感じ取った。正確には光努自身ではなく、彼が纏う純白の炎、デア・イリス白虹にだ。

明らかに不自然に、まるで糸で引つ張られるかのように炎がうごめく。そしての先にいる人物は、GHOST。その時、光努はGHOSTの特性を理解した。

瞬間、球状の炎に包まれたGHOSTから、眩いばかりの閃光と共に、無数の帯が放たれた。先端が少し膨らんだ触手のような異様な物体。

地面を除く全方位に放たれた触手は、何を狙ってか周りにいた者に無差別に襲い掛かる。

得体のしれない攻撃に対して、無様に受けるのは得策ではない。そう全員は瞬時に判断し、すぐに躲しにかかる。だが、皆が同じような判断を咄嗟にできたわけでもなく、怪我人も多いこの中で、何人が確実に躲す事ができたのだろうか。何人が躲す事が出来なかっただろうか。

「白鴉」
レウコン

ならその穴を、埋めればいい。

骸は、GHOSTの閃光の中で、ぼそりと眩かれた光努からあふれ出るように零れ落ちる物を見つけた。ひらひらと、淡い光を放ちながら、空気に流れるように落ちる物。

（あれは……白い羽？）

その時、無数の白い羽の一枚一枚が、むくりと膨れ上がったかと思うと、嘴、瞳、足、翼を出現させ、無数の鳥が出現した。それも、本来なら生物学上めつたに存在しない、純白の鴉が。

「全員なんとか避けろよ。あの雷様、人の炎奪うぞ？」

光努の言葉と共に、無数の鴉が放たれ、GHOSTの触手にぶつかつた。瞬間、その場で縫い付けるように、鴉がバサバサと翼をはためかせる。

無論、それで全てが止められるわけでは無い。今この瞬間にも、ガンガンリングから、匣アニマルから、炎が無理やり吸い続けられている。

「な、なんだこいつは!？」

「あれは白い鴉？白神光努、これはあなたの匣兵器の仕業ですか……」

訝し気な桔梗だが、その理由も分かる。

光努は今GHOSTの触手をあらかた止めている。無論それで全てを防いだわけで

は無いが、それでもイリス、ボンゴレ、ミルフィオーレを構わず守る姿勢に、一体何のつもりかと考える。だが、光努からしてみれば、何を言っているんだこいつ、という感じだった。

「あのなあ、桔梗。GHOSTは無差別攻撃してんだから、この場にいる全員の敵って事だろ？ だったら、誰が攻撃しようが誰が防ごうか、関係ないさ」

何のことは無い。ひどく単純な言葉に、桔梗を含め、真6弔花は少々ぼかんとしたような表情だっただろう。だがそれでも、避け続けているのは流石の一言。同じように、獄寺達もコルもヴァリアー達も避け続けている。

リングはつけているだけで炎を吸われ、触手に触れた匣アニマルは炎を一瞬で吸い尽くされ、おそらく人が喰らっても一瞬で絶命に至る吸引力。

何人が飛び道具を投げつけたりしてみたが、一向に当たる気配は見当たらない。

空気に色を付けただけのような幽霊は、炎を吸い尽くすだけ吸い尽くし、物理攻撃の一切を透過させる怪物。

この場にいる全員、どうやって回避するか、そしてこの後どうするか考えていた。

ゆつくりとだが歩いてユニの元へと向かうGHOSTを止める手段が無い。確実に手詰まりな状況。

そんな状況下で、光努は冷静な瞳でじつと見、何を考えているかといえは。

(さてと。あれ……どうやって潰そうかな)

冷静ではあるが、人の苦悩を無視した割と物騒な考え方をしていた。

『炎の力』

「おや、クローム。無事で何よりです」

「む、骸様?!」

木々に囲まれた森の中で、今まさに戦鬪が行われている前線へと出てきたクロームは突然声を掛けられると同時に、おもわず声が裏返る。

唐突な呼びかけというのものもあるが、その人物が自身の最も敬愛する六道骸、しかも最後に会った骸よりも10年成長した大人になった姿。白い頬を朱に染め、瞳をキラキラとさせてクロームは骸を見ていた。今クロームの瞳には無駄に美化200%くらいのフィルターが掛かって見えている事だろう。見つめ合っている二人の背後に色とりどりの花でも見えそうな気がする。

「クフフ。再開を喜びたいところですが、今はG O H S Tが覚醒し状況が状況です。霧のボンゴレリングとボンゴレ匣をお借りしても?」

「あ、はい!」

穏やかに、まるで紳士の手本のように柔らかく話す骸に、クロームは鳴り響いていた

動悸を落ち着かせ、自身の指に嵌った霧のボンゴリングを骸へと手渡す。

旗から見れば中々に優雅な光景だが、現在進行形で骸の背後では覚醒したGHOSTの触手と光努の白鴉がせめぎ合い、真6弔花もヴァリアーも皆獅子奮迅の回避劇を繰り広げていく

まさに乱戦状態。実際は戦っているわけでは無いのに乱戦とはこれいかに。しかしながらクロームの瞳の中には目の前に骸が映っているだけであり、まったくもって気しない。

背後で骸の弟子であるフランがGHOSTの吸炎性の触手を受け止め、炎を吸われて棒読みで「お助けー」と静かに叫んでいるが、骸もクロームも普通にスルーしているのは内緒である。

ちなみにフランは棒読みで声色は平気そうだが、幻覚で構築されている被り物が炎を吸われると同時にしおしおと萎れていくので、確実に放っておけば危ないのは確かであつた。

するりと骸はリングを填めると同時に、クロームのそばに佇んでいた霧ムクフクロウは骸のそばへと音もなく移動する。横目にちらりと確認すると同時に、骸は呟いた。

「ムクロウ、カンビョウ・フォルマ形態変化」

その言葉と共に、高純度の霧の炎を纏うムクロウは、その身の形態を変える。

丸く縁どられ、羽があしらわれた黒いレンズ。3枚の大小事なるレンズが、軀の瞳に合わさるようにして、空間に浮いていた。

初代霧の守護者の持つ武器を参考にして作られたボンゴレの技術の結晶。

そのレンズ越しに睨まれた物は、その身に呪いを受け、次の日には海に浮かんでいたという曰くの持つ。

実態の掴めぬ幻影と謳われた、D・スペードの魔レンズ！

その本質は、解析と分析。

直接的な戦闘用の匣ではなく、レンズ越しに見た対象の全てを暴く魔のレンズ。

骸は木々の隙間から、発光するGHOSTを魔レンズ越しに除く。澄んだ水を形にしたような透明なレンズに、GHOSTを映すと同時に次々と分析の結果がレンズ越しに浮かび上がる。

だが、その結果に骸は驚きを顕わにする。

「クローム、お前はGHOSTの攻撃に当たらぬように離れていなさい」「骸様？」

「あれは戦うべき敵ではない。あれは生物というより、現象に近い」

言うなれば、自然災害がそこで歩いているようなもの。

魔レンズの分析結果を見て、骸はGHOSTの本質を見抜いた。だが、その結果導き

出されたのは「現象」という言葉。

嵐に人はどう抗うか。

「どうやって人の手で雨を止ませられるか。」

人はどうすれば太陽が隠せるか。

骸が出した結論は、GHOSTは生物では無い。人の手の触れられない存在であるという事。

(これでは、手が出せない……まさに幽霊^{ゴースト}。白蘭め、何を企んでいる)

背後で隠れるクロームを確認しつつ、骸の頬をたらりと冷や汗を一筋流す。

意志を発する事なく、感情をあらわにする事もなく、生気を宿す事なく、ただただその場で歩き続けるGHOST。

物理攻撃は全て透過し、炎による攻撃も全て吸収する。そうなつては、打つ手は存在しない。

「お、クローム。久しぶり。そんな所で何してるんだ?」

「!?こ、光努!ひ……久しぶり」

クローム、肩をびくりと震わせて、本日二度目の驚き。

まあ背後から気配を消して近づかれ声を掛けられたのだから、当然といえば当然だろう。GHOSTを見ていた骸もクロームの声に振り向き、光努の登場に少し、というか

かなり驚いたようだった。てっきりまだGHOSTの近くで防御していたものとはかり思っていたらしい。現に、GHOSTの周りではいまだ触手を受け止める白い鴉の姿が複数見える。

「骸ー、GHOSTどうだった？それって確か見たら色々わかるんだろ。なんだっけ、虫眼鏡？スカウター？」

「人聞きの悪い事を言わないでください。魔レンズです。それより、これからどうするつもりですか？あのGHOSTとやら、人の手に負える者じゃありませんよ」

「師匠ーお助けー。暢気に話しないでミーの前で盾になってくださいーい」

「光努ー！てめえも早くこっち来て何とかしやがれ！」

「バーロオ！避ける避けるお!!」

「ちよ！桔梗！あんたの恐竜邪魔よ！」

「やつべー！あの触手追ってくるんだけど！王子的にもこれやばくね？」

「炎吸われて疲れた。物理弾も通過するし、どうしようか。レヴィ盾」

「ふざけるなあ!!」

「とつとと消えろ、ドカスが」

「ブルーベル！もつと離れないと危ないですよ！」

「ぬおおお！極限に危ないぞお！」

「あ、了平。曲がってくるからそこも危ないよ」

「コル殿！前から来てますよお！」

「……」

確かに暢気に会話をしすぎていた気がする。

光努、骸、クロームの背後からは、いまだ阿鼻叫喚となる戦場の声が多数聞こえる。もはやボンゴレもイリスもミルフィオーレも関係無く、皆が皆GHOSTの攻撃(?)に空を飛び交い大地を走り、木々を渡って躲し続けていた。

「それで、結局GHOSTって何なんだ？対抗策は？」

「無しです。通常の攻撃は効かず、この時代の根幹たるリングと匣の炎その物を吸収する力。これでは、我々に打てる手はありません」

奥歯をわずかに噛みしめた様に絞り出す骸の言葉は、この場で聞いていない者達も同意を示すだろう。

物理攻撃も炎も効かない以上打つ手なし。これで誰か超能力でも魔法でも使えるのなら希望はあったかもしれないが、当然ながらそんな事ができるやからは存在しない。攻撃を当てる手段が無い以上、現状維持を続けるしかない。しかしそれも、回避するだけ。さらにはGHOSTはじりじりとだが、ユニのいる方角へと歩を進めている。

これではユニが捕まるのが早いか遅いかの違いでしかなかった。

絶望的な状況下において、光努は顎に手を当ててふむと、思案する。

「炎に白蘭似の巨人、GHOSTか。その魔レンズでもわからないと、どうするか。クロームどう思う?」

「え!? えつと……魔レンズの結果で無理なら、私では何とも……」

「案外、君ならどうにかできるのではないですか? 白神光努」

「どうにかと言われてもなあ。しかし炎を吸うとか、ツナとXANXUSの戦いを思い出すな」

「ああ、そういうえばそんなこともありましたね。沢田綱吉の零地点突破・改ですか」

「そうそうその零地点突……破?」

「ええ、零地点……」

一瞬、二人の間で無言の空気が流れた。

思い出されるのは、10年前の大空のリング戦いにおいて、XANXUSの放つ炎の銃弾を、ツナが吸収し自らの糧とする技。

「それだ(です)！」

「え、どうしたの二人とも……」

突然の二人の叫びにおろおろとするクロームを無視し、光努と骸は一瞬辺りを見渡すように瞳を動かしたと思ったら、木陰で隠れる獄寺の姿を見つけた。

「隼人！今すぐツナを呼べ！」

「獄寺隼人！沢田綱吉をここへ呼びなさい！」

その言葉に、獄寺は驚いたようにしたが、すぐに通信を行う。

後半からここに来た光努、骸は通信機を持っていないので連絡は取れず、クロームも普通に通信機を持っていないという。

まあ今時点でこの場にボンゴレイリス側の人間は多数いるので、そこで通信に困らないのが幸いだ。そして、ツナが来れば一つの活路になるかもしれない。

炎を吸収するGHOSTに対抗できるとした、同じく炎を吸収する技を持つツナ。あくまで可能性であり絶対では無いが、やる価値は十分にある。あとはそれまで、持たせられるか。

「じゃ、ちよつと俺足止めしてくるから、よろしく」

「え？ちよつと待つてくください光努。攻撃の効かないGHOSTにどうや……て、早いですね。ふむ……どれどれ」

いつの間にか隣にいた光努は、光続けるGHOSTに向かっていて。そんな後姿を見て、骸は状況的にはおかしいが、興味本位で魔レンズを操作して、光努を映し出した。

走り続ける光努と身に纏われる白炎。映し出されたレンズには複雑な図形や文字が

浮かび上がり、その解析結果を映し出す。それを見たとき、骸の瞳が驚愕に見開かれた。（これは！絶え間なく炎の性質が変化し続けている。それだけではない、あの炎の衣だけでなく、光努自身の肉体にも白夜の炎が張り巡らされている！それにこれは、一体どういうことですか……）

周りの環境に揺さぶられ、瞬時にその性質を変質させ、最善を導き出す適応の炎、白夜の炎。その炎を全身に流し、全身に纏う少年、白神光努。

この状態を見てみれば、これまでの光努の馬鹿げた能力も少々だが納得しても良い気がしてくる。だが、骸が不可解と感じたのはその事だけではない。

（これはまるで、GHOSTの状態に一部似ている。己の肉体を現象へと昇華している？馬鹿な!）

人が幽鬼の世界へ足を踏み入れる事ができるだろうか。この世界に顕現する物質足る肉体を、霧にして空気に溶かす事ができようか。不可能だ。

質量もエネルギーも完全に無視したような適応性。果たしてそれは適応と呼ぶのだろうか。もしくはある種、それを種の進化と呼ぶのかもしれない。

光努の腕が、眩い白光に包まれる。まるでGHOSTと同じような光、いや、纏われているという単純な話では無いのかもしれない。その腕そのものが、GHOSTと同じ状態へと向かっていく。

その結果がどうなるだろうか。

次元の違うGHOSTに攻撃が当てられない。なら、同じ次元に行けばどうなるか？
ドゴオオオ！

殴れない相手を、殴り飛ばせる。

「おらあー！」

全てを受け止め、全てを透過するGHOSTが、胸の中央に拳を当てられて、初めてゆつたりとしたその歩みを止めた。それどころか、わずか数メートルだが、背後に吹き飛ばされた。ふわりと体重を全く感じさせずに、地面へと音もなく着地するGHOSTは不気味としか言いようがない。だがこの場において、GHOSTよりもはるかに恐ろしい存在は、拳を当てたという光努の方だった。

「GHOSTを……殴った!?」

誰から漏れた言葉かは分からない。

だがこの瞬間、光努本人以外の全員は全く同じように驚愕に、まるで夢か幻覚にでもかけられたかのように錯覚させられた。

だがそれでも、GHOSTは再び歩みを再開する。敵対という意志など幽鬼には最初から存在しない。この場に存在するという時点で、世界への害は始まっている。

災いを振りまき害を与える。現象、災害とは、その場いるだけで害を与えるから災害

なのだ。

光努、殴り飛ばした右手を握ったり開いたりしていたが、何か考えたのか再び拳を固める。

（なるほど、炎を吸収する炎の塊、それがGHOSTの正体か。これは確かに、現象と言ってもいいな。それに……こいつあ半端だな）

自信の触れた感触を確かめるように拳を握りこむが、光努は一度触れて近づいた事でGHOSTの正体をおよそ把握したと同時に、骸の現象という言葉にも納得する。いわばここにいるのは、意思を持った炎そのもの。しかも、光努はその根本に根付く不可解な小さな火種に気づいた。

光努はくるりと首だけ振り返り、手近にいた骸に声を投げかけた。

「骸お！朗報だ！ツナ呼ばなくてもいいかもだ」

その言葉に、骸のみならず、その場の全員に唾然とした驚きに包まれる。

その言葉が正しいなら、光努にはGHOSTの攻略方法が分かったという。それならば全員でやればいいのか？と思う者もいたが、それは不可能だ。

そのやり方は、光努にしかできないやり方だから。

「つーわけで、天の狭間に消えな、GHOST。お前は人なのか幽霊なのか炎なのか、決めてやる」

人でなく、幽霊でもない、動く炎、GHOST。だが、光努はGHOSTと同じように、肉体を持たずに炎単体で意思を持つて動く生物を知っている。己に纏う純白の鳥を。

べきりと己の右手の指を鳴らし、光努は地面を凹ませ、GHOSTの光を無視して特攻を仕掛けた。

「光努！」

「あ、あれは！・白夜の炎が、白虹デアリスがGHOSTの触手を受け止めている！」

GHOSTの光から発生する触手は、触れるだけで炎を限界まで搾り取りとる。それは生物の根幹、生命エネルギーたる炎を奪う行為であり、その結果として炎を失った生物は死亡する。故に、ボンゴレ、イリス、ミルフィオーレの全員は、炎を無条件で漏れさせるリングを外し、炎で生きるアニマル達を下がらせ、直接自身の体に触れないように避けるか、間に間接的に何かを挟んで吸炎量を減らす。触手は一度触れればくっつくので、体に触れる前に自身の武器であったり、匣兵器だったりを間に挟めば、命の危機を回避できる程には吸炎量はかなり緩やかになる。

だが、あろう事か光努の纏う白夜の炎の適応性は、炎を奪う触手に対して明確に“遮断”という行為を実現させた。これはある種、GHOSTに適応した一つの対抗策であろう。もしも時間をかけたならば、逆に炎を奪い取る事も可能だったかもしれないが、

その推測が来る前に決着が着く。

フィオーレリングから放たれた光が光努の腕を包み込み、まばゆい極光を生み出す。

誰もが目もくらむ中、一足で移動し、GHOSTの前へと瞬時に表れた光努は、己の腕を

GHOSTのあるかわからない心臓部へと突き立てた。

ズン!!

その光景に、だれもが目を見開く。

白神光努が、雷の巨人GHOSTへと腕を突き立てている姿に。

(GHOSTから感じた小さな炎の波動。あれは紛れもない、白夜の波動だった。こいつは、世界の壁を超えてきた存在！)

GHOSTの正体は、白蘭の手によって別の平行世界から無理やり連れてこられてた元人間。

だが、一つの世界を滅ぼしてまで連れてきても、技術的に不完全な点はやはり多すぎた。故にGHOSTは人の形こそすれど、それは到底人と呼べるものではなく、全身が炎で作られた霞のような巨人に成り下がってしまった。

だがその形を保たてていたのは、世界と世界を移動するという無茶を成し遂げた際に生まれた、小さな適応の炎。白蘭も気づかなかったそのわずかな適応性があったからこ

そ、この場に立つ権利をGHOSTは得た。その権利を、光努はさらに増幅してやろうという。

適応の方向は、炎に。

「白夜の炎よ、GHOSTを戻してやれ！」

「——!!」

「!?……そうか、お前は」

ポオウウン!!

一瞬の出来事だった。

いくら炎を吸収しても変化の無かったがGHOSTが、明確に膨れ上がり、次の瞬間、激しい雷光を迸ると同時に、その身を霧散させた。名も言わぬ、ただの炎として。

光努の流し込んだ白夜の炎が、人と炎の間で揺れ動くGHOSTを、炎としてこの世界へと適応させた。ゆえに、GHOSTは意思と形を手放して、炎としてその場で霧散した。

ちりちりとわずかに体を刺し続けるGHOSTの残骸に、光努の聴覚は消滅の瞬間、確かに消えるGHOSTの人としての叫びを受け止めた。

「そうか、GHOST。お前、平行世界の白蘭だったのか……」

啞然とした雰囲気に含まれている中で、上空に影が差したのに誰も気づかなかった。

それは天使か、はたまた悪魔なのか。

『イノベーション・アライアンス・イリス』

白蘭は、眼下に見える光景に対して、相も変わらず金剛不快の笑みを浮かべていた。絶対的な有利を確信し、絶対崩れない最高の牙城を築いた事に疑問を持たない。過信か慢心かと思う程の確信だが、そう思える程に、白蘭の策は滞りなく進んでいた。

己に絶対の忠誠を誓う配下である真6吊花と、敵対勢力であるイリス、ボンゴレとのルール無用の最後の戦い。そして戦いが佳境になる頃に投入される、ある種最も信頼する男、GHOST。その能力により、全炎を無差別に吸い尽くし、それはそのままこの世界に存在するGHOST、つまりは白蘭の元へと流れ込む。

元を辿れば同じ人間だからこそ、間に道具も距離も関係に無く、GHOSTの炎は白蘭へと直接流れ込む。

自分が二人いれば楽だ、だから連れてこよう。そんな安直な考えを実行し、平行世界の一つを潰してまで、技術的不完全な状態で届いたGHOSTだったが、最後はあつさりとやられたにも拘わらず、実にいい働きをしてくれた。元は同じ白蘭だったのである

うが、この世界に來た時点でそれは変わったのだろう。白蘭ではなく、GHOSTという名称を与えたのも、自分は別の存在である、自分の影であるという意味合いをつけたのかもしれない。

だが結果として、白蘭は万全のコンディションで最後の戦いに臨める。

広大な海を意味すマーリングの適応者、白蘭には、果てしない程の容量、炎を取り込めるだけの才能があつた。GHOSTが吸い込んだ匣、リング、人を問わない死ぬ気の炎の数々は、たった一人に集約されたにも拘わらずに、白蘭はそれを全て受け入れ、己の糧とした。

崩れない笑みを浮かべる白蘭の背には、二対の翼。

圧縮した死ぬ気の炎の塊なのだろうが、白蘭が求めたそういつた理論的な答えでは無い。

それは象徴。この時点でより、人を超えた証であるという力の象徴だった。

そしてそれはある意味正しく、ある意味誤り。

この場にいる全員が、今は白蘭には足元にも及ばないだろう。単純に、GHOSTが吸い込んだ炎の量は一人一人から限界まで吸い上げる。現れた瞬間骸とXANXUSが一度攻撃を仕掛けたが、炎のほぼ切れた二人の攻撃を、白蘭は片手で振り払った。万全の状態ならいざ知らず、炎を吸われた状態で白蘭に立ち迎える者など、今はこの場に

いない沢田綱吉一人だけだろう。誰もかそう考える。

が、ここで一つだけ誤算があるとすれば、彼の存在だった。

どこか白蘭と似通った、楽し気な笑みを浮かべる少年の存在。

イリスファミリーボス、白神光努は、上空に表れた白蘭の存在に、やはり、楽し気な笑みを浮かべる。

次の瞬間、白神光努は空中にいた白蘭の前へと、無謀に躍り出るのだった。

「あはは♪やっぱり君は思ったより元気そうじゃないか、光努君！ま、せっかく準備して来たんだから、他の有象無象と同じように地面に這いつくばるなんて、興覚めもいい所だけどね！」

「人を閉じ込めたり炎吸ったり、準備に随分と時間がかかるな。それでやつと人の前に表れたと思ったらフル装備。折角チョイスで俺とツナがいたんだからお前も出てくれ

ばよかったのに、そうすればバランスよかったのにな」

「しようがないじゃん。あれってジャイロルーレットが勝手に決めた事だし、僕は不干涉だよ。第一僕が出れなかったに加えて、最高戦力であるボス自ら出場できたんだから、二人とも運はすごくよかったと思うけど。光努君は猶更だけどね」

「それでパンドラ送りにされたけど、なんかいいように利用された気分だなあ」

ドオオオン!!

気づけば上空にいたのは、拳を振りぬく白神光努と、それを片腕で受け止める白蘭の姿だった。

さらに、追撃する光努の拳と、やはりそれを防ぐ白蘭。数度の攻防を繰り返しているが、そのどれもが銅鑼でも鳴らしたような鈍い音を響かせ、びりびりとした空気の振動を辺りにまき散らす。大地を抉り、木々を薙ぎ倒すような光努の拳を、白蘭は受け続けていた。

驚嘆すべきはGHOST襲来後の状況下においてもその猛威を振るう光努なのか、その拳を受け止める膂力を見せた白蘭なのか。どちらにしても化け物じみている。その戦いを観戦する眼下のボンゴレ、イリス、ミルフィオーレ勢は、全員同じ面持ちだった。「あいつ、なんでGHOSTに炎吸われた後であんな元氣なんだよ……」

「まあ光努だし」

「いやいや、どう考えもそれで説明つかないだろ」

既にこの場に集まってきていたリルの無条件に光努を信頼した発言に、同じく一先ずの治療を終えた獄寺は容赦なく突っ込む。この場合獄寺と同じ考えの人間の方が多いだろうが、リルと、その弟であるコル的にはそうは感じない。むしろ白神光努という人物の出鱈目さを知っているからこそ、今の状況が決して良い物とは考えなかった。

「光努、思ったよりパワーが落ちてる。白蘭一人吹っ飛ばせないなんて」

「なによ、びやくらんの方が弱いつての〜?」

「コルに賛成。多分この中でも結構炎吸われた方だと思うよ、光努」

「もう!何なのこの姉弟!むかつく!」

「ブルーベル落ち着いて。白蘭様が悪るかどうかはともかく、確かに白神光努は先の

GHOST戦で我々同様か、それ以上に炎を吸われているはずです」

無条件光努押しのコルを、こちらにも無条件白蘭押しの実6弔花ブルーベルは実に子供らしく頬を膨らませて睨みつける。傍か見れば白蘭がGHOSTを使い両陣営全滅を図ったようだが、こうして今光努と戦っている様子を見ればまるで真6弔花を助けに来てくれたようにも見えるから実に不思議だ。

しかし桔梗の中では、既に白蘭の中に自分達の存在がいるかどうか疑問だった。

GHOSTという存在は知らされていた者の、その能力はあまりにも暴力的に、そこ骸の推定した災害とも呼べる一つの現象。もしも光努がいなければ、今より被害は甚大だっただろう。炎を吸い尽くされ、死へと誘われていた者もいたかもしれない。

だからこそ、桔梗は冷静に今の状況を見る事が出来た。

白蘭への忠誠は変わらない。だが、白蘭はどう思っているのか。それに、光努はやはり弱体化している。

最もGHOSTの近くで体を張り、最もGHOSTを止めた男。

例えGHOSTの光の触手を直接体に受けなくても、GHOST本体がいるだけで引力のように炎を引き寄せる。実際、光努がGHOSTのそばにいる時も、普通にフィオーレリング、それに白虹デア・イリスからは炎が徐々に抜かれ続けていた。

(故に……恐ろしい)

たらりと、桔梗の額に冷や汗が流れる。

もしも光努が万全の状態であったのなら、今互角の攻防を繰り広げている白蘭は、あつという間にやられていたのではないのだろうか？

桔梗はその考えを一瞬考え、頭を振るう。一瞬とは言えば、主の敗北を認めるような事はならない。

例え白蘭が裏切ろうとも、根柢の揺らがない誠の忠誠心は、再び戦いを瞳に映す。

その攻防は、やはり常軌を逸していた。

ドオオンン！

再び爆音を響かせ、光努の拳と白蘭の手の平がぶつかる。

じりじりと互いに力を込め合いながらも、楽し気に二人は笑みを浮かべていた。

「お前、もう少し絡めて来るタイプかと思ったら、意外とパワータイプだな。正直俺腕力には結構自信あつたんだけどなあ、ちよつとへこむぜ」

「あは、全然そんな顔してないくせに。それに炎圧カンストした僕と正面から対峙出来るだけで、冗談抜きで光努君馬鹿げてるから。まあ今は結構弱ってるみたいだね。GHOSH T様様だね。君の纏っていた白夜の炎も、もう消えちゃってるし」

「これはあれだ、ちよつと出かけてるんだよ。ほら、あいつ鴉だから光物に目が無くてさ。それより、お前素手ばっかだけど匣とか無いのか？ミルフィオーレのボスなんだから今更出し惜しみなしだぜ」

「思つたよりも光努君余裕そうだね。それならちよつと見せちゃおつかな。ちよつと飛び入りの来客みたいだしね」

その言葉と、白蘭が光努とは別の方向をちらりと見るのを確認すると、光努も同じ方

向を見てみる。

そこに映った小さな灯は、次第に速度と炎圧を増し、白蘭と光努に向かって飛んできた。

さながら一筋の流星の如く、沢田綱吉はグローブから澄んだ大空の炎を噴出し、今戦場に駆け付けた。

「白蘭！光努！」

既に獄寺達より通信機で、この場の状況は伝わっている。故に、ツナは迷いなく、一直線に白蘭に拳を振るった。

大空の7属性随一の炎の推進力を糧とした、必殺の拳打。間違っても光努に当たらないように、白蘭を中心とした光努との対角線上から攻める一手は、この光景を見た瞬間に最善を導き出す超直感の賜物だろう。

だがそれすらも、今の白蘭が持つ圧倒的な力が、嘲り笑う。

ガッ！

「!？」

「あれ？どうしたんだい？君の精一杯フルパワーはこんなもんかい？」

余裕の笑みで言葉を交わす白蘭だが、相對するツナは冷や汗を感じる。

己の振るう拳が、あろうことが白蘭のたつた一本の指で受け止められているのだから。その事実を知ったとき、一様に驚きの波が広がる。

同時進行で光努とは腕による罅迫り合いを演じている為片腕しか使えない状態だが、白蘭は片腕でも多いと、ツナに割いた己の肉体は指一本ただそれだけ。だがそれだけで、ツナは簡単に止められてしまった。

まるで強大な山に拳を当てているような不動の圧力。

「じゃあ、僕の番だ♪白指！」

瞬間、ツナを受け止めている手に嵌められたマーレリングに光が灯り、洪水のような勢いで衝撃がツナを襲った。

圧倒的な力の奔流に抗えず、眼下の森へと激突した。

木々と葉と地面をグラグラと揺らす衝撃に、下の全員思わず顔を腕で覆う。衝撃が収まったと同時に見てみれば、そこにはうまく中空で身を翻したツナ。だがその衝撃を殺す事は

出来ず、激突の威力に片膝を着いた状態だった。

「これくらいで参ってもらっちゃ困るよ。まだ——おっと」

ビュン！

話途中に、光努の蹴りが白蘭の頭を打ちぬく。正確には、撃ち抜こうとした矢先、白

蘭が屈みこむようにあっさりと躲し、そのままばさりと翼を翻して距離を取る。その対応に、光努は楽し気になりにやりと笑みを浮かべる。

「どうした、白蘭。折角だからさつきみたいに、指一本で受け止めてみるよ」

「冗談♪僕の指がへし折れるって。流石に君の拳や蹴りには、片腕使わざるを得ないかな」

そう言ってひらひらと手を振る白蘭だが、どこまでもその表情には余裕という言葉が剥がれ落ちない。使わざるを得ない、なんて言葉を使つて自身を低く見せているが、それは裏を返せば、片手で十分だ、そう暗に物語っていた。

だがそれでも、決して崩せないわけではないという事を、光努は証明している。

「流石にツナの拳を指一本つてのには驚いたけど……」

「その白蘭に躲す選択をさせる程の威力を放つ白神光努の方に驚きですね」

「師匠、あの人本当はサイボークかなんかじゃないんですかー」

下で前にも言われた事があるような発言が聞こえた気がしたが、光努はあえて無視する。

今日の前にいる白蘭を、どう料理してくれようかと楽し気に口角を持ち上げ、指をバキバキと鳴らしていた。

完全フルパワー状態の白蘭を前にその態度は味方としては頼もしい限りだが、同時に

人間離れた行動に若干ドン引き物でもあった。まあ相手が相手なので、一週まわってなんだ普通に見えてしまうのもなぜか悲しい。

「やる気満々みたいだね光努君。それに比べて、綱吉君はいつまでへたり込んでいるんだい？それとも、そのままそこでじっと見ているかい？この未来世界の命運を、光努君に託して傍観者となる。それも一つの選択肢だと思うけどね」

甘く響くような、白い悪魔の囁き。まあ上の二人はどちらも白いが。

現状の戦力差を考えれば、今のツナよりは光努の方が勝機がある事は見れば分かる。元々ツナは戦いを好まない性格であり、待ってればもしかしたら白蘭を代わりに倒してくれる。その可能性だつてある。光努の強さはツナもよく知っている。

だが、本当にそれでいいのか？

「元々君は何の変哲も無い一般人だったんだ。君が戦いたくないと言えば、皆わかってくれるよ。光努君は元々僕に用があるみたいだし、僕も相手になる。それだけの実力もある。だけど、君には無い。このまま闘えば、綱吉君、君の命はあっさりと散ってしまおう」

残酷に無情に、感慨も無く、冷徹な目で白蘭は事実を語る。

たつた一撃とはいえ、己の炎と拳を余裕綽々と反撃された。嘗て、これ程まで圧倒的だった敵はいただろうか？ここまでツナの攻撃を正面から受け止めて、笑っていた人物

がいただろうか？

(いや、光努も笑ってたな……)

残酷な言葉と共に、冷水を浴びせられたようなツナの脳裏に思い出されたのは、模擬戦でわずかに拳を合わせた、楽し気に笑う光努の姿。

それを思い出したとき、ツナは絶望の淵に立つてなお、ふと笑った。

「さてと、それじゃ始めようか、光努く——ッ！」

湧き上がる大空の炎柱。人の死角の一つである、真下から炎の拳を、不意をついた事もあり、先ほどの余裕さとは打って変わり、白蘭は咄嗟に躲して距離を取った。

光努も少し驚いた風に、自分の隣に飛び現れた少年、ツナを見る。

純度の高い大空の炎を身に纏い、見透かすような瞳を相対者、白蘭へと向ける。先ほどとは違う、覚悟の強い、大河のように流れる大空の炎がリングより迸っていた。肌を突き刺すような、強い炎の力を誰もが感じていた。

「いいのかい？綱吉君。君と僕には圧倒的な力の差がある。それでも挑むという事は、到底まともな結果にならないと思うけど」

「そんな事は関係ない」

「……へえ」

「俺は、皆で無事に過去に帰る為に戦う。そして何より光努を、仲間を一人で戦わせて外

から見てるなんて、俺が俺自身を許せない！」

そこに滾る覚悟も、炎も、全てが本物。まだ中学生とは言え、数々の死闘を潜り抜けてきたツナに、今更引く、という選択肢は最初から存在していなかった。自分の隣で拳を握るツナに、光努はふと珍し気に柔らかく微笑んだ。

「なるほどなあ……よし！なあツナ」

「光努？」

ちよいちよいとした手招き。

微笑みから一転して、楽し気な笑みを浮かべた光努。先ほどまでとは打って変わり、まるで悪戯を思いついた子供のようにでもあり、プレゼントを開ける前の子供のような、実に楽し気な笑みを浮かべた。

急にどうしたものと、少し疑問に思う光努だが、次の言葉で一瞬呆けた。

「なあツナ、同盟組もうぜ。イリスとボンゴレで」

それは何気ない一言だったのかもしれない。聞く側もそれまで軽い気分で聞いていたのかもしれない。

しかしそこに込められた意味合いは、到底軽いなんて物で済まされる物ではない。ただの同盟ならばこうはならないだろう。そこに出てくるのがイリスという言葉になれば、天地を揺るがし歴史を転換する一言だった。

過去、マフィアの中でも古豪であるボンゴレ並みの歴史を持つ大組織、イリスファミリーだが、その中で他のファミリーと同盟を結んだ記録は存在していない。仕事上の契約などは探せばいくらでも転がり出てくるが、マフィアとして他のマフィアと対等なる同盟、不可侵を結ぶ事は無い。それは基本中立を行くイリスの伝統なのか、それともただただ誰もがイリスという力と組まないように牽制したった結果だったのか、結果としてイリスは今日まで同盟はしていない。

この未来の状況下でさえ、イリスとボンゴレはほぼ協力関係と言っても過言ではない。自他共に認める周知の事実だが、それでさえ同盟を正式に結んだわけではなかった。

イリスは誰とも同盟を結ばない。誰も味方にしない、誰も敵にしない。

マフィア間でも有名な共通認識が、今この瞬間に崩れ去ろうとしている。

「馬鹿な！あのイリスがボンゴレと同盟を組む?!」

「光努、本気みたいだけど……後で灯夜に怒られないかな……」

「どういう事だ！極限にもはや光努は俺たちの仲間だろ?」

「確かに協力関係を築いていますが、光努殿が言ったのはボンゴレとイリスによる正式な同盟提案。これは過去初めてですよ!」

興奮したようなバジルの言葉だが、それもしょうがない。

古くは自警団を前身に、強大な力を高め続けた歴史と力のボンゴレ。そしてボンゴレ

と同等の歴史を誇る、世界に名だたる会社をその身に宿す大企業イリス。その二つが同盟となれば、ただ事ではない。

しかしバジルの言葉に、ぴたりと光努は指を一つ立てて訂正を促す。

「二つ勘違いがある。ボンゴレとイリスの同盟はこれが初めてじゃない。これはイリスの歴史を調べて少し前に知ったことだが、イリスとボンゴレの前身を作り出した二人の人物、初代イリスとボンゴレI世は嘗て互いに対等なる不可侵協定を結んでいたらしい。まあ不可侵って言っても潰し合わないだけで不干渉ってわけじゃないけどな」

それは初耳だ、というような反応がほとんど、というか全員がそうだった。

歴史の裏側、奇しくもマファイアとしての歴史以前の個人的なやり取りの部分だったからこそ、記録を見つける事が出来なかったのであろうが、まさか現代に残る巨大マファイアの創始者がそんな協定を結んでいたとは夢にも思わなかった。確かにボンゴレとイリスの初代達は仲が良かったらしいという話は聞いたが、この内容には白蘭も驚いた様子だった。

「へえ、イリスファミリーには初代イリスの文献が残っていたんだ。それは知らなかったな。何せ、初代イリスに関する記録はほとんど残っていないからね」

「まあ正式なやり取りじゃなく手紙のやり取りだったみたいだからね。内容も「やほー、ジョット。僕ら組織作ったけど今そつちとバトるとなんか面倒だからしばらく不可

侵つてことで☆あ、武器と食料減つたら3割引きで提供しとくよ、それじゃよろしく♪」とかそんな感じだしな。あ、ジョットってボンゴレI世の名前な」

「軽っ！初代イリス軽っ！」

思わずツナが突つ込むが、白蘭含めて全員気持ちは一つだった。

思つたよりも軽い手紙内容に、思わず光努が捏造したんじゃないか？と思つたが、実際にこの内容だつたらしい。

しかし後に、初代イリスは行方をくらませる直前にその協定を、敷いてはその時築いていた他の同盟関連などを全て白紙に戻したという。無論それは相手からもきちんとした了承あつての事なので問題は無いが、なぜ初代イリスがそのような行動をとつたかまでは流石に記録には残っていなかった。それを知るのは、当時を生きた嘗ての過去の偉人達のみだった。

「せつかく仲間なんて言つてくれたのに、ただの協力は無いだろ。今この瞬間、俺は正式にイリスファミリーボスとして、ボンゴレに同盟を申し入れる」

「いいのかい？それをするつてことは、初代イリスの残したイリスファミリーの根本が壊れるつて事を意味すると思うんだけど、光努君。君はそれを望むのかい？」

「上等。それにイリスはマフィアの伝統ルンで成り立つてるんじゃないやねえ、ボスが

あり方を決めるんだ。だから、俺は同盟する事に異論を唱えさせない。というわけで

ツナ、どうよ？」

澄んだ純白の石の嵌め込まれた、フィオーレリングを身に着けた拳を握り、ツナへと向ける。

光努の目の前のツナは、瞳を見開き、そして微笑んだ。

横暴なんて物じゃない。この少年は確かに根本を揺るがそうとも、必ず己が頂点より引つ張る事をするだろう。決してファミリーを、無下にはしない。

ツナも自然と、ボンゴレリングの嵌る拳を握りこんだ。

「ああ、頼むぞ、イリス！」

「こつちもな、ボンゴレ！」

フィオーレリングとボンゴレリング。

カチリと互いにつつかり合い、触れた拳が誓いを立てた。

二人のリングが互いを共鳴しあうかのように光輝き、揺れる白夜と大空の炎が絡み合い、太陽の光に照らされてさらに光を生み出す。リングとリングが、互いに共鳴しあうかのように光を灯し、まるでリングが喜んでいるかのように暖かい炎を辺りにばら撒く。

正式な場ではないが、空の上で互いを称え、イリスとボンゴレは同盟で結ばれた。

「あ、了承したからこれでツナも正式にボンゴレ10代目か」
「ここで水差さないでよ！」

『そう単純な話じゃなかったよ』

「同盟って言うけど、今更そんなのに意味あるのかな？正直光努君と綱吉君が二人とも僕に向かってくるのは最初の最初からわかりきっていた事だし、今更感あるけど」

拳を合わせた光努とツナの二人に向かって、少し口を出しながら傍観していた白蘭が、心底楽し気に話しかける。

圧倒的な優位は揺るがず、ただの協力関係の強化版だと言いたげだが、実際にその通り。二人が手を組んだからと言って、その力を互いに増幅する、とかそういうシンクロイベントは存在しない。もつと言えば、この場で同盟をする必要性もほとんど皆無。無論、そんな事はここにいる誰にも分っていたし、光努本人もわかっていた。

だが、光努はツナの覚悟と心意気に答えてやりたかった

どこか虚構と虚無を映すような、傍観者のようなイリスの立場を、崩したかった。

光努個人としてはツナ達は友達だから協力してたけど、イリスとしてはほぼ何もしてない。もつと言えば、協力というのも別に協力して誰かを撃退する、なんてこともほぼなかった。たまたまそこにいれば、一人ずつ戦い、炙れた敵を単独で仕留め、光努一

人で片づけに行く。光努単体の戦力が膨大だからこそ、光努は一人で戦いに臨めたし、それが一番効率的だったのも事実だろう。

だから崩した。

イリスファミリー2代目ボスとして、ファイオーリングに選ばれた者として。今代でイリスは変わった。

そして、同盟をしてどうなるかという事だけだ。

「同盟の結果、ボンゴレの敵はイリスの敵。ってことで白蘭、最初はお前を全力を持って潰す事にしたからよろしく。あ、さつきよりはやる気も結構上がった」

「……」

(……まずい事しちゃったかなあ)

ツナは内心、この後の展開上、白蘭に少し同情した。

白神光努という人物が全力を持って、と言葉にした以上白蘭の言った通り、確な結果にならないだろうから。

無論それは、白蘭にとって、だけだ。

「そんなわけでツナ、ちよつとここよろしく」

「えっ！光努!？」

「いや、とりあえず白蘭潰すのに準備しようかと。それに少し忘れてたことがあつてさ」

「その間に白蘭を止めていろ、と」

「可能だったら仕留めてもいいぜ」

「はあ、まあ善処するよ。早めに戻って来いよ」

「分かつてるって」

突然の光努の提案、というかお願いに、ツナはやれやれといったように了承をした。

戦闘能力に関して光努は出鱈目だが、ここら辺の出鱈目さも割と身に染みているツナは、光努を送り出す。無論、このまま逃げるなんてことは微塵も考えていない。必ず戻ってくる。

白蘭を倒す前に、やっておくことがあつた、そう言った。なら、それが終わればすぐに駆け付けるといふ。

一足で、Tシユーズから出現させた炎のプレートを踏みしめ、光努は空中で加速した。白蘭がいる方角とは別の方向。突然の敵前逃亡に、白蘭もだが、当然ながら味方側も驚いて様だった。

「この状況で一体どこに行こうっていうんだい？光努、くん！」

炎の翼をばさりと羽ばたき、白蘭も加速する。

だが、自身の目の前に躍り出た影に足ならぬ、翼を止めた。

拳がから噴き出す炎は、琥珀のように澄んだ橙をしており、不純物の無い純度の高さは覚悟の現れ、

ツナと白蘭、二つのファミリーのボスが、再び対峙しあう。

「光努君に後押されて戻ってきたけど、僕に勝つつもりかい？綱吉君。最初の一撃で戦力の差は十分に理解していると思うんだけどね」

「それがどうした。勝つ可能性は0ではない。戦力差が、戦いを避ける理由にはならない！」

「……はは♪上等だよ！さつきより随分炎も強くなつたみたいだし、そうこなくっちゃね！」

どこか狂気的な笑みを、先ほどの言葉とは打って変わり、まるでこの戦いを待ち望んでいたかのように笑みを浮かべる。

この戦いも、ユニを手に入れる為に白蘭の考えたシナリオの一つ。だが、闘わなくては誰も先へは進めない。

故に闘う、故に拳を振るう、故に炎を灯す。

頂上決戦第二弾、ツナVS白蘭の火蓋が切つて落とされた。

ツナが白蘭と戦いに臨んでいるその頃、待機中であるリボーン、入江、ルイ、フウ太、京子、ハル、そして白蘭のターゲットであるユニのみの非戦闘員チーム。リボーン除く。戦場から離れた森の一角で、リボーンと入江、そしてルイは通信機片手に状況を把握し続けていた。

ツナが飛び去る前にも後にも、先頭の合間に治療中の者から通信をもらい、おおよその戦況は把握していた。

無論現在、白蘭が現れた事も、光努が戻ってきた事も。

「はあ、光努も思い切った事をするなあ」

「まさか、イリスとボンゴレが同盟を結ぶ事になるなんて……はは、すごい現場に居合わせちやつたかな……」

「つつても、白蘭に負けたら全部おじゃんだけだな」

「ちよー！リボンさん！不吉な事言わないで！ああ、胃が……」

「えっと、大丈夫？」

「あー、平気平気。正一のこれはいつもの事だからか」

例によって不安と緊張から胃がキリキリと痛む入江をフウ太が心配するが、ルイは手をひらひらと振って大丈夫と言う。さすがに未来での付き合いが長く、白蘭打倒に一枚噛んでいる技術者同士なだけある。入江がこうなるのは割とよくある事、実際メローネ基地司令の時も定期的にお腹を押さえていた。まあその原因はイリスボンゴレの強襲だが。

「現状戦力はほぼ炎を吸い取られたみたいだな。それで、万全なのは白蘭とツナの二人のみ。ちなみに光努も結構炎取られたけど、闘う分には割と問題ないみたい。まあ本調子ではないがな」

「そんな状態で白蘭さんと互角だったんだ……」

ルイの言葉に、冷や汗を足らりと流す入江。はたまた胃痛の種になりそうかと思った

が、白蘭を倒せる可能性が出てきたという事でもあり、少しだけほっと安心する。

その空気を察してか、絶妙のタイミングでユニがコップに注がれた水を差しだした。

「どうぞ？」

「ああ、ありがとう、ユニさん」

いつの間にかからからと乾いていた喉が、水を通して潤い入江を落ち着かせる。そして少し目を細めて思考する。

確かにGHOSTに炎を全員吸われたのは痛手だが、その分真6弔花の相手をする必要がなくなったと考えれば少しはポジティブになる。彼ら一人一人の戦力だって、軍隊に匹敵する。それがなくなり、白蘭一人を倒せばいい、そう考えればまだ気が楽だ。いや、そう考えないと気が楽にならない。

（分かっている……現状が好転したわけじゃない。真6弔花と戦わなくていい分、彼らを含めた全員の炎を白蘭さんが手に入れた。まさか最後の真6弔花の使い方がこんな逆転の一手だなんて。最初から、白蘭さんにとって僕らと真6弔花の戦いは誰が戦おうが関係なかったんだ）

炎を吸収し、己に直接送り込むGHOSTが手元にある時点で、白蘭の目的は、最も強い者達が互いに拮抗しあう状況こそが重要だった。これで片方が倒れてしまつては、吸い込める炎の量が少なくなる。ボンゴレイリス側が倒れたのなら何も問題無いが、覚

悟が強く炎量が単騎で強大な真6弔花からは必ず炎を取りたかった。そしてあとは、残った敵を自分が一掃すればいいと。

なんて暴力的で、全てをあつさり壊滅的に追い込む手札。

だがそれでも、白神光努という人物は、この場において最も異様に成果を上げた。

「あ、今光努が離脱した。ツナと白蘭の一騎打ちだつて」

「ええ!? 光努君どこ行つたの!？」

「ちよつと行つてくるつて」

「ルイそれ説明になつてないよ!」

「まあまあ落ち着け。ほらユニ」

「はい、入江さん。お水です」

「あ、ありがとう……」

再びごくりと水を喉に通す。冷たい水が暖かくなった喉を冷やし、心地よい感覚を――

「て、そうじゃないでしょ!」

「おい正一、一つ聞きたいんだがいいか?」

「あ、リボンさん。どうしたの?」

「このままじゃ入江が止まらないと思つたのか、普通に面倒だつたのかは分からない

が、黄色いおしやぶりのアルコバレーノ、リボーンは、入江に一度ストップをかけて質問する。

ある意味これは最初に聞くべきだったかも知れないし、どうにか調べてみる必要があった事項の一つだろう。ぎりぎりもいいタイミングでの質問になるが、リボーンとしては入江が知っているか聞いておきたかった。

「実際の所、白蘭つてのはどのくらい強っえ—んだ？」

単純なる、白蘭の強さについて。

リボーンを含め、ボンゴレもイリスも誰も知らない。

それは、白蘭本人が直接戦っている所を誰も見た事が無いから。ミルフィオーレのボスであるという事だから、狡猾に計算高く知略を尽くせる能力はあるだろう。入江と同じ大学だったという話だから、技術力も入江程ではないが高いだろう。

だが、チョイスの時も傍観していた為、白蘭の戦闘能力を計る瞬間が今日まで訪れなかった。

そしてその質問に対して入江は少し目を見開いたが、すぐに伏せる。独白するよう
に、ぼつりと呟いた。

「実は僕も白蘭さんが戦っている所は直接見た事あるわけじゃないんだ。確かに本人はよく知っているから、チョイスも一緒に作つたし、スポーツも万能だった。ちよつと不

真面目だけど成績もよかった。ミルフィオーレになってからも、基本的に指示を出すことがほとんど、というか僕がメローネ基地に来たから白蘭さんとモニター越しではあっても直接会う機会も減ったしね」

「てことは、誰も白蘭の戦闘能力やスタイルは知らないのか？」

「スタイルとかは分からないけど、そういえば白蘭さんは一度骸君と戦っていたね」

「ああ、お前が寝ぼけて白蘭の伝言メッセージの録画を再生した時に見覚えの無い子供が映ってた時か」

「そうそう。そのと……ちよつとまって、そんな時って僕まだメローネ基地にいたんだけど！なんで僕の私室の出来事知ってるの!?もしかして盗聴器とか仕掛けてたの!？」

「それはどうでもいいが、確かあの時ミルフィオーレ本部で白蘭と骸2人だけで戦ったらしいな」

「ちよールイー！」

嘗てこの世界の10年後の骸は、とある男に憑依して活動していた。

ガイド・グレコという殺人鬼であり、クロームの他に骸が憑依できる精神性を持ち合わせた珍しい人間だったという。その肉体を乗っ取り、ミルフィオーレの本部に潜入、白蘭の秘書のような立場になって情報を集めていたという。

ちなみにこの際本来の白蘭秘書となりかわった為、秘書の代わりをしたグレコに憑依

した骸となる。面倒だからこれは特に覚える必要は無い。

そして白蘭に正体がばれ、二人は激突した。

「骸君が精神だけの憑依体って事まり白蘭さんが有利だけど、それに加えてその場所は白蘭のフィールド。敵地で戦う骸君にとつて圧倒的に不利な状況だったらしいから正確な事は分からないけど、結果として白蘭さんは無傷で完封したらしい」

「完封？あの骸をか！」

戦いで笑みを浮かべるのは余裕の証拠とどこかの誰かが言っていたが、白蘭からしたら憑依体の骸は話にならないレベルの戦力差だったらしい。

リポーンは骸の強さを知っているが故に驚く。

骸本来の肉体では無いとはいえ、そうそうできる芸当じゃない。その強さは10年前の時点で、クロームの体を借りてアルコバレーノのマーモンをこちらも完封した程だ。

「当然その時に今と同じだけ炎があつたとは考えにくい。白蘭もそうとうやるみてーだな」

「ま、ボスが部下より弱くちや話ならない、つて所か」

ルイの言葉も確かに的を得ている。

人外を自称する真6弔花だからこそ、自分より弱い者に従うとは考えにくい。

無論戦闘能力だけで桔梗達が忠誠を誓ったわけではないが、世界を駆け抜ける大空の

マーレリング保持者が、中途半端な力の持ち主なわけではない。

「うーむ。光努君の力も、チョイスの時は僕もフィールドにいたからよく見たわけじゃないけど、どっちが勝つんだろ？」

「その話なら、今行けば白蘭の方だけ実物見られるぞつと」

その時、がさがさと草木をかき分けて、何かを担いだ、火中の人物である光努が姿を現した。

いきなりの登場に、しかもまるで熊のように出てきた事で、この場の大半は驚いた。

「はひー！光努さんどこから来たんですか!？」

「よー、ハルも京子も久しぶりー。怪我してない？」

「あ、ツナ君達が守ってくれたから大丈夫だよ」

「そうか」

太陽のように眩しく笑う京子の言葉に、光努はまるで微笑ましい物を見るように柔らかに微笑む。二人の表情から、光努は強い信頼感を感じ取った。

この時代に来てから、一度二人の表情には影ができた。それはボンゴレの基地にて家事ボイコットという形で現れたが、全てを知ってからも、元のように笑って過ごすようになった。チョイスにあたりその後の近況を知らなかった光努だが、今の二人を見て、戦いの最中ではあるが、少し安心したのだった。

「光努君!?!どこに行つたかと思つたらなんでここに!?!ていうかよく戻つてこれらたね!」

「正一落ち着け。そんなに興奮してばかりだと胃が爆発するぞ。ああ、パンドラに関しては色々あつたけど問題は無い、安心しろ」

全く説明になつていないのに、なぜか説得力があるように感じる、そんな迫力が光努にはあつた。

そしてすたすたと歩くと、余つた毛布を地面に敷き、その上に背負つていた物を下した。

どう考えても人。手足も体も顔も存在する人。そしてその人物に、リポーンは見覚えがあつた。

「ん?光努、そいつは確か、緑鬼つてやつか」

「リポーンもなんだか久しぶりだなあ。そうそう、名前はロルフだ。ちよつと疲れたらしいから寝かしとくぞ。さすがに森に一人で放置は無いからな」

「あれ?でもさつきまで白蘭さんのいる戦場にいなかったつて事は、今まで森の中で一人でいたつたてことに——」

「よし、じゃあそろそろ戻るとするか!」

「普通に無視された!?!」

がつくしと項垂れる入江を他所に、光努は首をこきりと鳴らし、特に必要は無いが手首をぐるぐると、柔軟でもするように回す。

その時、ふと自分を見つめる視線に気づいた。いや、最初から自分も分かっていた。白い衣装に身を包む、全てを見通すような瞳の少女、ユニ。

「初めまして、白神光努さん」

「ああ、初めましてだな。確かブラックスペルのボス……で、ここにいるから元か？」
「ええ。チョイス終了と共に、私はミルフィオーレを脱退しました」

チョイス終了と共にミルフィオーレ脱退。そしてこの戦いに来るまでを、光努は短い時間で掻い摘んで聞いた。

「ふむ、イリスの方が少し気になるな。大丈夫かなあ」

「おそらく白蘭はミルフィオーレの精鋭を向かわせたと思いますが、ここからでは様子が分かりません。私も、イリスの皆様が無事であることを祈ります」

「いや、灯夜達やりすぎてないかなって。籠もいるし、槍時も戻ってるみたいだし」
「そつちなの!?!光努君イリスをもっと労わってあげて!」

「労わってもミルフィオーレの精鋭とやらが潰される事には変わりないがな」

「『アヤメ』怖すぎ……」

光努をしてやりすぎないか、という言葉に入江は若干ドン引きしていた。

「それにしても、ユニ……だったな」

「はい、光努さん」

「こうしてみると……やっぱアリアに似てるな。リボーンもそう思わない?」

「ああ、それにユニの祖母のルーチェにも似ているぞ」

「光努さんは母に会ったことあるのですか?」

「数回だけだな。イリスのボスになった時もジツリヨには挨拶周りに行つたからな。その後数回。あ、ちなみにその時γにも会つてたんだ。確かあいつ6吊花だったらしいな」

イリスのボスになって少しの時、灯夜の操縦する戦闘機に乗つて、様々なボス巡りをした記憶を思い出す光努。その時、目の前にいるユニの母である、当時の大空のアルコバレーノであるアリアと出会つていた。ジツリヨネロファミリーのボスでもあり、さらにはあそのアリアの母であるルーチェはリボーンと同時期にアルコバレーノになつた者。

いわば初代大空のアルコバレーノのルーチェ。そしてその娘アリアが2代目、そしてユニが3代目、みたいな?

そして、今共同戦線を張つていたγだが、ツナ達とは通算3度以上再開した事あるにも拘わらず、光努とはこの未来では一度も会つたことなかった。正確な事を言えばγは

GHOST戦の時に光努を見ていたが、色々あったので互いに話しかけるタイミングが無かったという。最も、光努の方はGHOST↓白蘭と対象としていたのでYに気づかなかったのだが。

「さてと、それじゃあ行って白蘭ぶちのめしてくるか」

「さらつととんでもねーこと言うな。勝算はあるのか？」

「愚問だな、リポーン。今の俺には、勝算以外は存在しない」

その言葉は、無謀とも慢心とも取れるが、事光努が言うとなると、頼もしい限りだ。だが、その言葉の後に光努がふつと笑い、茶目つ気たつぷりに語る。

「ま、勝算度外視の状況とかだったら分らないけどな♪」

「不吉な事言わないでよお！」

「不吉なのか？」

何が言いたいかと言えば、まあ何が起こるか分からないのが常であると、まあそういう事だろう。

「というわけで、そろそろ俺行くから。あ、そうだユニ」

「?どうしましたか？」

唐突に、足先に力を入れて駆けだす直前、ユニに話しかける。

今この状況下で、一体どんな話があるのだろうか。と、全員思っていたのだが、光努

の口から飛び出たのは、驚くことではないけれど、少し意表を突くような言葉だった。「サンキューな、ユニ。じゃっ」

そう言つて、爆発的な力で光努は弾丸のように森の中へと飛び出していく。

地面から土埃が立たないように柔らかに移動したにも関わらず、その速度は常人から見ればあつという間に消えていったようにも見える程常軌を逸しているが、それを成したのが光努という事実があるなら皆大した事の無いように思えるのだった。

「そう言えばユニ。光努が誰かを助けてくれるつて未来を予知してたが、それはいつの事かはわからねーんだよな？」

「はい。ただ戦闘の最中に光努さんが戻ってきたので、先のGHOSH戦でその予知は終わっているかもしれません」

確信を持って言える予知はあるが、正確な時間の分からない漠然とした予知。課せられた運命の糸を解き、光努が誰かの命を救うというユニの予知。

だがそれは、あくまでそうなる事が分かっているだけである、もしかしたらもう終了しているかもしれない。夜明け前の作戦会議のタイミングではまだだと分かったが、可能性としては光努がこの世界に戻ってきてから今に至るまで。そしてそれを考えると、光努が救った人間は実が多い。現に、今現状ボンゴレもイリスもミルフィオーレも、GHOSHは例外として一人の死者も出ていなかった。

本来死ぬべき人間の運命。それはいったい誰だったのか。

残る可能性としては、パンドラの世界で光努と共にいた少年、ロルフ・ミーガン。けど、ユニにはその予知が終了したと証明する事はできなかった。

「そういえば、ロルフさんは一体どうして眠っているのでしょうか？何か疲れたと言っていましたか」

「まあパンドラの世界にいたんだ。無理もないよ。光努君の方は……まあいつも通りだけど、案外この子の方が普通の反応なのかもしれないしね」

あはは、と少々苦笑気味な入江だが、現状暴れまわる光努の事を考えると、確かに光努が一般的だとは誰も考えられない。パンドラの世界は、それだけ過酷だったのかもしれない。

最も、案外そうでもなかった事は、入江を含めて誰も分からないだろう。結果として、小さな疑問だけを残して沈黙するのだった。

カアアアン！

ふと、光努がいなくなり静寂が支配したこの空間において、異質な音が響いた。

何かをすり合わせ、鳴らしたような、だが不思議と暖かさのある音。何かと何かがぶ

つかり合うような音が辺りに響いたとき、極大の光が空間を支配した。

「はは！揺るがない覚悟、溢れ出す強い炎。いい調子だよ、綱吉君！」

「俺は必ずお前を倒し、皆で過去に帰る！」

ツナが振るう拳を、余裕綽々と受け止める白蘭。

何度この攻防が続いただろうか。もつと言えば、二人が戦い始めてどれだけ圧倒的な距離が見えただろうか。

ツナの持つ攻撃手段は、基本的に大空の炎を纏ったグローブを装備しての徒手空拳。

そしてもう一つは、ツナ専用で作られた大空のボンゴレ匣。

レオネデーチェリー パージョンボンゴレ
大空ライオン・Ver. Vには、2つの戦い方が存在する。

1つ目は、変化なしのナッツによる戦闘方法。主に大空ライオン特有の咆哮による戦い方を行い、強い力を持つ。

2つ目は、カンビオ・フォルマ形態変化による、攻守変化。ツナのレオネ・テイ・チエリ天空ライオン・Ver. Vは他のボン

ゴレ匣と違って特徴があり、それが攻撃モードと防御モードの二種類。

防御モードはトリカブト戦でも使用した、一I世のマント《マンテツロ・テイ・ボンゴレプリーモ》、そして攻撃モードは、嘗てI世が渾身の炎を込めた時、形態変化したグローブを元にした、Xバーナー級の究極の炎の拳。

それこそ、ミテーナ・テイ・ボンゴレプリーモI世のガントレット！

が、白蘭がHOSTから受け取った炎は、十数人分の強大な炎。

白拍手、そう白蘭の扱う奥義は、強大な炎を両手に集め、拍手のように手を叩く圧力によって、迫る炎をかき消す。白蘭曰く、どんな攻撃も粉碎する絶対防御技、だという。

しかしその言葉に偽りが無いかのように、ツナの攻撃は一瞬でかき消された。余裕をもつて、笑みを浮かべたまま。

嘗てツナが味わった事のない、絶望的なまでの戦力差。

骸の時も、XANXUSの時も、幻騎士やトリカブトの時も、ツナは相手に対して善戦した。知恵を使い、修行の成果を存分に発揮し、技術を駆使し、例え自分よりも格上の相手に対しても決して負けなかった。

だが、今日の前にいる男はどうだろうか。

炎も、技術も、知恵も、体技も、たった一度の拍手で吹き消してしまふ。

炎は人の生命エネルギー。それが莫大な白蘭は、単純な肉体強度もこの場で群を抜いている。

絶望的、その状況がツナを取り巻く。

だが、それでもツナはあきらめなかった。少なくとも、この場には光努に任せられたからには、果たさねばならない。

ゴオウ！

「この圧倒的な状況でも、君の覚悟は鈍らないみたいだね。安心したよ、だから僕も、少し炎を強くしてあげようかな」

ツナの覚悟と共に、強く燃える炎を瞳に映し、白蘭は心底楽し気に笑う。

そして自らも、大空のマーレリングに覚悟と力を載せ、強大な炎を噴出した。

「くう！ 凄い炎の応酬です！」

「流石沢田綱吉、と言ったところででしょうか。凄まじい底力です」

ツナが覚悟を引き出せば、白蘭も炎を強め、またツナも負けじと炎の底力を見せる。

相互が炎を増幅し合い干渉し、極大の2つの大空の炎が辺りを照らし、空気をびりびりと揺らした。

カアアアン！

そしてそれこそが、白蘭の狙いだった。

「来たー！」

それが待ち望んでいたと暗に言わんばかりに表情を綻ばせ、ツナはこの現象に対して、驚愕に表情を染める。

ゆらゆらと揺らめく炎の形状が、XANXUSの持つ憤怒の炎に近い、重なり合う球状に変化。ボンゴレリングとマーレリング、二つの7トゥリニセツテを中心とした大空の炎球が二人を包み、その大きさを広大させていく。同時に、炎に触れた木々を含めた全てが排除されていく。

雲雀の匣兵器にある裏球針体は、あらゆる匣兵器を排除して、結界内に人のみを残すが、今の状況はあれと酷似している。

ツナと白蘭、二人の大空以外を全て押しつけ排除する炎の結界は、半径20メートル程でその大きさを止めるが、それはあらゆる攻撃脱出を無効化する、完全なる炎。

「一体何が起こってるんだ？」

トゥリニセツテ

「驚いたかい？ 7・トゥリニセツテの大空はとてつもない炎を放出し合うと、こんな特別な状態になるんだ。僕ら以外誰にも邪魔されない、スペシャルステージさ♪ま、あと一人特別ゲストが来るんだけどね」

「何?」

「ほら、見えたよ」

「……………ユニ!」

カアアアン!

ツナの視界がとらえたのは、白い衣装に身を包んだ大空のアルコバレーノ、ユニの姿。白蘭の目的でもある少女がその場にいるという事にも驚いたのだが、その登場の仕方、白蘭やツナと同じタイプの大空の炎の結界に包まれて、森の木々に影を落としながらゆっくりとこちらに近づいてくるという登場方法だった。

「あの娘!自ら近づくんなんて何を考えている!」

「…………大空のリングとおしゃぶりが共鳴し、呼び合っている? 炎の過負荷による引力が発生しているというのですか…………」

分析しようとする骸だが、これは到底人が科学的根拠に基づいて説明できる類の話ではない。

世界の礎 トゥリニセツテ 7・ニによる3つの大空の共鳴現象。

白蘭の言葉が正しいとすれば、それは強大な炎を灯し合った結果、大空のボンゴレリング、マーレリング、おしゃぶりが一か所に集まろうとするのは必然の事態だったようだ。

ゆつくりと、だが徐々に近づくとユニを止めようと、ヴァリアーや骸、コルもなければ、炎で境界を破壊すべく攻撃を行うが、そのどれもが空しく弾かれる。例えばこれは万全な状態だったとしても、生半可な攻撃力では到底破壊する事は出来ないだろう。

炎を吸われたのでなおの事、罅を入れることすらできない。

そしてユニは、ツナと白蘭のいる境界の中へと入っていった。

「やあユニちゃん！よく来たね。ここなら誰の邪魔も入らない。綱吉君も、もう用は無いからすぐ消えてもらおうしね」

これが、白蘭の作戦。

白蘭はツナとぶつかることでリングの共鳴反応を利用し、どこに隠れていたとしても、強制的にユニをこの場に引き寄せる方法をとった。最も確実であり、最も堅実な方法ともいえる。この方法が成功すれば、ユニを引き寄せるだけでなく、誰にも破れない炎の境界すら作り出せるのだから。

その思惑に、ツナはまんまと嵌ってしまった。先の光努との闘いでツナを鼓舞するのにも、白蘭の策略の内だったのかもしれない。そう思うと、ツナは歯噛みするが、それで状況が好転したわけでもなく、最悪になったわけでもない。まだユニが、白蘭に捕まっていたわけではない。

そう思い、ツナは炎噴出、そして白蘭の顔面へと打ち込んだ。

ガキ！

「無駄な努力程空しい物は無いね、綱吉君。君の攻撃じゃ、僕には傷一つつけられない」
ぎりぎりと、万力のようにツナの拳を掌で掴み受け止める。勢いをつけた拳を、最初と同じようにあっさりりと防がれた。いや、防がれなかったとしても、大したダメージにはならないだろう。

そしてこの場にユニが現れた事で、白蘭はもうツナと戦^{あそぶ}う必要は無くなった。

「それじゃあそろそろとどめでも刺そうか、綱吉君。心臓を一突きすれば、さすがに死ぬ気もへつたくれも無いよね？」

微笑んではいるが、その笑みをはぞつとするような冷たさを波乱でいる。

白蘭にとって、ツナという存在はいてもいなくても変わらない。むしろボンゴレリングを手に入れるのに邪魔な分、いない方が良いと言う程だ。

ツナの拳を締め付ける白蘭の手と反対の手に、白き龍が現れる。

ミルフィオーレの技術力により作り出した、架空生物の匣兵器。白蘭専用の一点物でもある、白龍。汚れの見えない真つ新たな白龍は、おの流麗な見た目に反して恐るべき攻撃力を秘めている。

「やめてー！」

「ん？今更やめて、なんて、どの口が言うの？ユニちゃん。最初から僕には勝てない事は

分かってたのに、それでもボンゴレもイリスも巻き込んで君の逃走劇につき合わせ、無駄な犠牲を増やす。自分勝手にも程があるよね♪」

残酷な現実を突きつける言葉に、ユニは押し黙る。

他の狙いがある、勝利の可能性もあった。だが、今絶望的なこの現状で言われてしまえば、何も言えない。

否、何も、言うわけにはいかない。それが、白蘭の目的があるように、ユニの逃走劇に仕組まれたユニの目的だから。

だが、白蘭の瞳は、押し黙るユニに対して当然の結果と言わんばかりの笑みを浮かべながらも、わずかにちらついていた光を確かにとらえた。

炎の結界に包まれた光の空間において、ユニのマントの内側から漏れ出る別種の光。

「ダメです……まだ、ダメ……」

押さえつけるようなユニだが、その抵抗はあまり意味をなさんかった。

羽織った白いマントの内側からぼとぼと転がり落ちてた物体を見て、白蘭を含めてこの場の全員驚愕する。

「あれは！アルコバレーノのおしやぶり！」

「それだけじゃない！おしやぶりの表面から、何か飛び出している！」

そう、ユニの懐から落ちたのは、仲間のおしやぶり。大空と晴以外の5つのおしやぶ

りそれぞれから、何か飛び出している。

それはどれもバラバラに、バンドナ、ローブ、サングラス、眼鏡、三つ編み。一見共通点の無いそれらは全て、おしゃぶりに対応するアルコバレーノの持つ体の一部だった。

青色のおしゃぶりのコロネロの持つバンドナ。

藍色のおしゃぶりのマーモンの着るローブ。

紫色のおしゃぶりのスカルの被るヘルメットのサングラス。

緑色のおしゃぶりのヴェルデの掛けた眼鏡。

赤色のおしゃぶりの風の結った三つ編み。

おしゃぶりから飛び出てきたのは、紛れもなアルコバレーノの肉体の一部分だった。

「こいつあ、アルコバレーノの肉体の再構成、分かりやすく言えば復活リ・ボーンして事だ。大空のアルコバレーノの力を持つてすれば、仮死状態のアルコバレーノを生き返らせる事ができると聞いた事がある……。だけど、まさかおしゃぶりからは……」

いつの間にやら、フウ太の肩に乗ってやってきたリボーンによる解説だが、その内容が正しければとてつもない話だ。

リボーンも半信半疑の内容だったらしく、語った本人も訝し気に驚いているが、ユニの様子からするとその内容で間違いないらしい。もしもそれが叶うなら、失われた7・

による世界の秩序が回復し、この時間軸による歪みは全て修正される。それは、平和な過去へ帰る為に必要不可欠な修正。

ユニが逃亡という選択をしたのも、この時間を稼ぐため。ユニが自身の炎をおしやぶりに注ぎ果たされる復活には、必要な時間が存在する。そしてその時間を、白蘭はユニの様子と逃亡タイミングなどから、今からでもおよそ1時間程かかると察した。

希望から一転しての絶望の言葉。

アルコバレーノが復活する事は喜ばしい限りだが、それに時間がかかるのであれば、その間に白蘭によって全てが終わってしまう。

「誰が復活しようと関係ないけど、結局誰も僕を止められない。綱吉君も、今終わるよ」「くっー！」

「沢田さん!!」

ツナは捕まれた拳を振りほどこうとするが、今の白蘭の力はツナの遥か上を行く。

マーレリングから集約された大空の炎が、白龍に集まり、その威力は例えツナが防御しようとも、体をなすすべなく貫く結果となるだろう。ツナにはもう、止める力が無い。

悲痛なるユニの叫びを嘲笑うように、白蘭が凶刃を振るう。

「はははーもう誰も、この結界の中には入ってこれない！」

「それはどうか？」

ぞくりと、冷たい刃を突き立てかのような悪寒が、白蘭の背中を這う。

ありえない物でも見たかのように瞳を見開き、咄嗟にツナの手を放してくると身体を反転し、右腕の白龍を背後を視認せずに一直線に叩き込んだ。容赦無しの問答無用の一撃。

が、背後に見えた白い影にぶつかる直前に止められた。相対者の振るう右腕によって、白龍の長い上顎と下顎を掌で掴まれ、一ミリたりとも動かない。その事実には白蘭は驚くが、掴んだ敵を見て目を細める。

「さつきより力が上がってる気がしたけど、何をしてきたんだい？ 光努君」

「その前にやる事とか言う事とかもあるだろう。まあひとまず——」

ゴツ！

「——ッ！」

白龍を仁王のごとき怪力で掴んで白蘭を捉えていた光努が、右足を振りぬき、白蘭を撃ち抜いた。白蘭も咄嗟に左手で防御したにも関わらず、受け止めきれずに吹き飛ばされて境界に激突した。これにより、ツナやユニから白蘭が強制的に突き放された。

蹴りぬいた態勢を戻し、白蘭の手から逃れたツナの隣へと降り立つ。

その様子を見て、ツナはやれやれ、といったような溜息を吐いた。

「遅かったな、光努」

「悪いな、すこおし手こずったけど、後は任せておけ」

ひらひらと手を振りながら、先ほど自分が吹き飛ばした方向を見る。

そこには、背中の翼で緩やかに地面へと降り立つ、対した傷の見えない白蘭の姿があった。その表情には、先ほどまで浮かんでいた笑みは消えている。底冷えするような眼光が、一直線に光努を射貫いていた。

「いくら光努君とはいええ、まさかこの大空の結界の中に入ってくるとは思わなかったよ。どうやったんだい？」

そう言いながら、白蘭は大方予想ついていた。

光努の炎は、白夜の炎。そしてそれは、トウリニセツテ7・アルトラドゥエ2の一角を操る炎。

適応の能力は、自身を遮断する結界にも作用したと推測できる。

そしてそれは、当たっていた。

「そう単純じゃな話じゃなかったよ。トウリニセツテ流石に7・アルトラドゥエ3つが作り出した結界なだけある。完全に適応して入れるのに少し時間がかかった」

その言葉に、リボーンはなるほどと思った。

明らかに光努がこの戦場に来るよりも早くユニ、リボーン達に来る方が早いなんておかしい。つまりはリボーンが来ているのに光努がいけないのはなぜか、と思っていたが、どうやら大空の結界に対して光努も意外と手こずっていたらしい。

こうなつては、結界を作り出すのにツナも原因の一旦を担っているだけに、少しだけ光努を糾弾しにくい。あくまで少しだけ、だけど。

「ま、入ってしまえばこっちのもんだ。じゃ、白蘭、最終決戦始めようぜ」
ばかり、と指を鳴らし、光努は不適に笑う。

大空の結界の中にいる、光努、ツナ、ユニ、白蘭の4人。

3人の大空と、1人白夜。

役者と舞台は全て揃った、と言わんばかりの強靱な炎のステージ。

長い未来の戦いも、終わりが近づくのだった。

『白夜の鴉と揺るぎない覚悟』

雲一つない快晴の空を、飛行機雲のような白い筋が通った。

雲ではない。純白の羽をふわりと羽ばたき、緩やかに滑空するのは、一羽の鳥だった。すいっと、空気に乗って羽を広げ、目的となる場所へと降りて行った。

眼下に見える、オレンジ色の球体。

近づくものを強制的に遮断する、絶対的な炎の結界。

破壊も敵わない結界に対して、鳥は高度を落とす、スピードを緩める事なく突っ込む。ぶつかる、そう思われたが、目の前の結果は全く予想に反して、鳥は結界を突き抜け中へと入っていく。抵抗するそぶりすら見せず、まるでそこには何もなかったかのように鳥は結界の中を悠々と飛び、一人の男の腕に止まった。

柔らかな白い髪を揺らし、楽し気な笑みを浮かべた少年、白神光努の腕へと。

「レウ、ご苦労だ」

クア——と、光努の労いに小さく鳴く白鴉の姿は中々に可愛らしい。一見すれば珍しい色合い以外は普通の鴉に見えるが、とどころ羽や羽毛の先がゆらゆらと小さく陽炎を作っているのを見ると、ただの鴉で無い事を嫌でも理解する。だがそれでも、花草その物は、人によく懐く鳥類と同じ物である事は疑いようもなかった。

「その鳥、結界を突き抜けてきたけど、そういえばそれも光努君の白夜の炎を受けた匣兵器だったね」

「ああ。^{デア・イリス}白虹は全てこの1羽に集約して飛ばしてたんだ。んで、戻ってきたって事は準備が終わったって事だ」

「どういふことだ？ 光努」

今の言葉で分かったのは、光努の使用する白夜の匣兵器、『^{デア・イリス}白虹』が通常、という言い方は少々語弊があるが、通常形態である無形の炎の形から、1羽の白い鴉の姿をとっているという事。元が動きに制限のついた個の形で無い為、やろうとおもったらGHO ST戦の時同様に複数羽に分裂できるにも拘わらず1羽のみを顕現させた事には、無論意味があつた。

そもそも白夜の炎は攻撃力という点はほぼ皆無であり、生物の形態をとつたとしてもその攻撃力はたかがしれている。その為、今の形態もあくまで、光努の援護用にとつた形であること。

そしてその用途は、おおよそ今見える小さな体躯からは、想像もつかないような事だった。

「レウ、少し休んでくれ、後は任せろ」

慈しむ様な柔らかい言葉と共に、白鴉レウは一声鳴き声を上げ、その体を揺らす。1枚、また1枚と落ちる純白の羽は、空中でその霧散し、一筋の炎となつて、光努の指に嵌るフィオーレリングへと吸い込まれていく。同時に、レウの体が白く発光、その身崩しゆらりと揺らめき、淡い炎となつて光努に纏われていく。

ポオオウ!!

瞬間、莫大の光が結界の中を包み込んだ。

「くっ！光努!」

「心配するな、ツナ。ただの炎の供給だ、害は無い」

光の中でそう言う光努の姿は見えないが、声色に焦りや焦燥は見られない。おそらく本当に大丈夫なのだろう。最も、光努がそこまで声色に出す程焦るような事は見たことが無い気がする、というのがツナの本音だが。

しかし白蘭は、その光努の言葉に反応した。

「炎の供給？光努君、一体何をしようとしているんだい？」

「まあ極端な事を言えば、お前がGHOSTを使ってやった事と変わらないよ。他人の

炎をもらった、ただそれだけ。ま、強制じゃないから俺の方が良心的だろ？」

パライイ!!

光努を包み込んだ眩い純白に、鋭く切れるような緑色の閃光が迸る。

それは大空の7属性において、最高の硬度と名刀の如き切れ味を誇る炎、雷の炎。不可解な、白夜の中に混ざり合うように迸る雷に、この場の全員に衝撃が走る。

「白夜の炎と、雷の炎。適応………なるほど、光努君。雷の炎を白夜の炎に変換して、自分に取り込んでいるんだね」

「という事は、さっきの鴉は雷の炎の塊?！」

「ま、そういう事。ツナ、少し待ってる。すぐに、適応する」

その言葉を皮切りに、ぱちぱちと弾けていた雷が収縮し、同時に眩いばかりの莫大な光が一気に霧散した。

霧散した光の粒子がキラキラと空気中で輝き、その中央に立つ光努は、何も無い、無傷の状態。全ての炎を、己の指にはまるファイオーリングに集約したのだろう。その表情は何も変わらず、実に楽しそうだ。

「まさか、こんな方法があるなんてね。光努君、もしかしてロルフ君から雷の炎をもらったんじゃない?というか、それしか考えられない。GHOSTに炎を吸われていない者達の中で、ここまで莫大な雷の炎を出せるなんて、あの子くらいだしね」

「よくわかったな。ちなみに今は寝かせてあるぞ」

光努と白蘭の会話に、リボーンは納得したように相槌を打つ。

光努が連れて帰ってきた少年、ロルフ・ミーガン。チョイスの雷のプレイヤーとして参加し、個人的な戦闘能力は低いが、単騎で超炎リング転送システムを作動できると言われる程の莫大な炎を体内に宿した少年。その莫大な炎による、強大な要塞型匣兵器を操っていた。

彼は先ほど光努がリボーンやユニの元へと戻ってきた時に、疲れたのか光努に担がれてきた。あれはパンドラに入って疲れただけでなく、光努に雷の炎を与えて来た疲労なのだろう。その雷の炎が、先ほどの白鴉の中に収められていたという事。

白蘭としては、ロルフが協力したのに少し驚いたが、光努が炎を吸収したという事に驚いていた。まるでもう一人の白蘭、GHOSTのようでもあり、炎を自らの力に変化するボンゴレ、沢田綱吉のように。

しかし、光努のとった方法は、どちらかといえばGHOSTのやり方に近い。

ツナの使用する零地点突破改は、自らの死ぬ気をマイナスに振り切り、マイナスになった分炎を取り込み、自らの力として増幅する、ある意味捨て身とも言える技。最も、今のツナにとっては捨て身なんてものでなく、強力な奥義の一つなのだが。

対して白蘭がやったのは、GHOSTに吸収させた炎を距離も空間も全てを除外し、

直接白蘭の内に送り込む。

本来なら自分の炎以外の炎が内に入るのは異物が入り込むように害でしかないのだが、二人の属性である大空の「調和」によって、それらの炎をうまく統合し、自分の炎として扱えた。

それは「調和」とはまた違った「適応」の特性を持つ白夜の炎を持つ光努も一緒。ロルフの莫大な雷の炎を一度白虹デア・イリスの中で白夜の炎に適応させ、光努へと取り込む。

しかし本来光努なら、莫大な容量と元々適応の白夜の炎を持っているので、特に間に經由する必要なく自分に取り込める。

ならなぜ、わざわざ一度白鴉のレウに取り込み貯蓄したのかと言えば。

「折角だから白蘭の前でやってやろうかと思っただけさ」

「君も案外食えない性格だよ。しかし一つ気になってるんだけど、ロルフ君はどうやって雷の炎を出したんだい？あの子の持っていたリングはただの匣起動用ってことで、良くてBー程度のリングだ。それくらいじゃ、さつきみたいな炎は出すことは出来ないはず。一体どうして……………」

「二つ忘れてるだろ、白蘭。この世で最も強力な雷のリングを、お前は知っているか？」

「最も強力？……………まさか！」

光努の言葉と同時に、瞬間、白蘭の脳裏に浮かんだ予想が目の前に現れた。

光努の手に握られていたのは、神聖さを醸し出す、楕円の石に羽の意匠が施されたり
ングだった。

「光努！それって、マーレリング！一体どこで手に入れたんだ！」

「これ？GHOSTがつけてたやつだよ。ちよおおつと、消す時に拝借しておいたんだ」
全く持つて穏やかでない物騒な表現だが、事実なのでしようがない。しかしまさかあの瞬間、GHOSTから抜け落ちた雷のマーレリングを拝借していたとは、この場の全員夢にも思わなかった。

ボンゴレリングもマーレリングも、大空のボスリングに関してはそれぞれが適応者である人を選ぶ。ボンゴレならボンゴレの血を受け継ぐ者を選ぶように。しかし共にある守護者のリングに関しては、言ってしまうえば使おうと思えば誰でも扱う要素は持っている。マーレリングなら猶更。この辺りはボスの直系とか関係ないので、炎を出すだけならロルフにも扱えたのだった。

今、見た目には何の変化も持たないが、光努の内には莫大な炎が取り込まれた。白蘭がGHOST経由で取り込んだ炎と比べたらおそらく光努の方が低いだろが、それでも、ロルフの炎は一人の人間から出たとは思えない程に強大な炎を放出した。

「というわけで、始めようか白蘭」

「来なよ。君がいなくなれば、僕の障害は無くなる」

その言葉を皮切りに、白蘭と光努の二人は互いに飛び出した。

「白龍！」

白蘭の右腕と同化するように現れた白龍は、一直線に容赦なく、一撃必殺の威力を込めて光努の顔面に放たれる。いつ開いたかもわからない高速開匣。だが、自分の顔面に向かつて放たれた白い龍を、光努は瞳を閉じる事なく、静謐な面持ちで見つめていた。

「——っ」

小さく、蚊が鳴くような息を吐きだし、光努は左手に掌底を作り出す。空手で言う所の手刀受けに近い形だが、それ程精錬された物でもなく、もつと無骨な受け流し方。自身の顔を狙った白龍を、白蘭の右腕を光努の掌で外側へと押し出し、直線の力を受け流した。

が、それだけで終わらなかった。

左手で白蘭の右腕を、自身の右に逸らすと同時に、己を中心に回転。そのまま、右の肘を白蘭の右脇へと叩き込んだ。

ムエタイでいう所の回転肘打ちと呼ばれる技、人体の急所である脇の下への攻撃。下手をすれば死んでもおかしくないような箇所。わずかにメキメキという音が聞こえたような気がしたが、それでも、白蘭はまだ奥歯を噛みしめ、不適に笑う。

(流石にそう簡単に当たってくれないか……けど、甘いよ！)

攻撃を当てられたにも拘わらず、白蘭の表情はまだ笑みを崩さない。

右腕に絡みつかれた白龍を、前方へと射出。そしてこれは銃でも無ければ大砲でも無い。一直線に進む兵器ではない白龍は、飛び出してその場でくるりと反転し、背後から光努に向かつて牙を向く。

人は攻撃の瞬間、攻撃が決まった直後にこそ隙ができるというが、まさにそれだ。白蘭自身が囷とでも言うように、急所へと攻撃を当てたのなら、少なからず手ごたえを感じ、隙ができるはず。この白龍は、完全なる背後からの奇襲。

だが、この状況下で光努は、楽し気に笑っていた。

音を殺して背後から頭蓋を砕かんとする白龍は、正確に光努を狙う。

が、目標を見失った。

白龍は、突然目の前にいた光努の頭が消えた事に一瞬困惑し、硬直するが、次の瞬間下から来た衝撃に意識を手放す。

そこにあつたのは、光努の足の裏。

白蘭を肘打ちしたと同時に、両手を地面に着き、絶妙なバランス感覚で足裏を、頭を狙ってきた白龍にぶつけ、さらにそのまま前方に回転して、白龍事足裏を白蘭へと叩き込んだ。

「ぐう——ぐはあ!!」

カポエイラのようなアクロバティックな動き方を、わずか一瞬の攻防の間に行った事に、傍から見たら訳が分からないだろう。気が付いていたら光努が逆さになり、気がついていたら白蘭が吹き飛ばされた。

（攻撃を受け流されて、さらに背後の奇襲も読まれている！チヨイスを見て身体能力任せかと思つてたけど、それだけじゃない！光努君は、技術力もずば抜けている）

「すい………」

結界の周りから観戦する者達は、感嘆の声を漏らす。

先ほどまでツナを圧倒し続けていた白蘭が、当初は光努と互角だったにも拘わらず、今はその光努が圧倒している。

理屈だけ言えば簡単かもしれない。

炎を吸われた状態で互角だったのに、光努が炎を回復したのならその分白蘭を上回るのは簡単な理屈だ。だが、それだけでここまで圧倒できるのか。いや、むしろ最初に闘っていた時は手加減していたんじゃない、そう思うような天地を無視した縦横無尽な戦い方。

「——らあ！」

白蘭の背で燃える翼が瞬くと同時に、炎の龍が2頭光努に向かっていく。

獯猛な獣よりも恐ろしい、強靱な炎の龍だが、光努を射貫くには心もとなかった。

まるで龍を受け入れるように両腕を広げたと思ったら、迫る龍の顔面を、1頭ずつ片手で巻きこみ、容赦なくぐしやりと潰し、ただの炎として霧散させてしまった。

光努はツナと白蘭の戦闘を見ていなかったが、その姿は白蘭が行った白拍手に酷似し、まるで意趣返しのような展開だった。

最も、白蘭も光努も、ある意味力業という点では同じ様な物ではあるが。

「そう——らあつとー」

今度は光努から仕掛けた。が、単調な攻撃程避けやすい物は無いだろう。

真正面から右の拳を突き出す光努だが、それを見据えて白蘭は余裕をもって、上空へと飛び出す。

制空権を取ったが、光努にも空を踏みしめ翔け抜ける手段がある事はとうに分かっている。それで油断するような事はしない。

(けど、今のただの一撃。まるで………僕を上へと誘いこんだ?)

そう思ってしまう程に単調な攻撃だったが、それはそれでおかしい。同じく空を移動できるツナと連携しての攻撃ならわからないでも無いが、ツナは今変わらさず眼下の地面で膝を着いている。囷にかかって敵に攻撃を仕掛ける人物が囷になるなど、馬鹿げた話だ。やはり意味などないただの単調な一撃だったのだろう。

そうではなくては、ただ白蘭を上空へ上がらせる為だけに、先程の攻撃をした事になる。

「いや、間違つてないぜ、白蘭。俺は一度お前に上にあがってもらいたかった」

「その理由、聞いてもいいか——なっ!!」

白蘭の手に入れた莫大な炎を載せた拳を、上空に駆け上がった光努に振るう。余波だけで空気を叩く一撃だが、光努は自分の顔面に迫る拳を、首を傾げるだけで躲し、滑り込ませた己の掌で受け止めてがっちり固定した。

「白撃しろうち——」

瞬間、マーレリングから光輝く炎が迸り、光努に向かって爆発的な衝撃波が放たれた。

ツナの攻撃を受け止め吹き飛ばした、“白指”の拳を使用した強化版。

指一本でツナを大地に叩きつける程の威力を發揮したの技の、およそ数倍。大空の境界を破壊する程ではないが、膨大な炎の一撃は結界をわずかに揺らした。

その光景に、皆一様に心配を瞳に映すが、攻撃を仕掛けた白蘭本人の瞳に映つたのは、驚愕。

煙の晴れた上空で、自分の拳を今もぎりぎり握む光努の姿が、視界に映つた。

所々衣服には焦げ跡と、裾がボロボロになった姿が見える。髪もところどころ跳ね、顔面で爆発でも喰らったかのように。いや、実際喰らったが。皮膚のあちこち黒く煤けてはいるが、それでも、傷は一つも存在しない。だがそれでも完全無効、というわけで

もなく、光努は咳き込むように口からわずかに煙を吐く。

「けほっ……少し驚いたけど、耐えられない事はなかったな」

「……………おかしいね。光努君って本当に人間かい？」

「さあな。ただ炎の熱量を白夜の炎で耐性つけて相殺すれば、後は衝撃を耐えるだけ。問題ないだろ？」

「いやいやいや、それは問題ありすぎじゃ——」

「あ、それと白蘭。お前は上空に上げた理由だけど」

「へ？」

間の抜けた白蘭の声だが、そんな趣とは反対に、頬にはたたりと冷や汗が流れる。

先ほどから、堅い岩に沈めたように拳が全くとっていい程、動かない。

そんな白蘭の様子に、光努は楽しげに笑った。

「天上から突き落とすって、宣言したからなあ!!」

ドゴオツ!!

光努の拳が、惚けた白蘭の顔面に突き刺さり、炎の渦を引いて大地へと叩きつけられた。びりびりと結界を揺らす程の衝撃が響き、辺り一面を炎の余波と煙が一瞬覆う。

それと同時に、光努も地面へと降り立つ。

覗いていた外野からも、これは白蘭死んだんじや、と思われるような無慈悲な一撃。だ

がそこに込められた拳は、光努がチヨイスで宣言した通りだった。生死の境をさまよう幻騎士に対して、絶対の真実を語る様な強い言葉を。

「は、ははは！すごい！すごいよ！光努君！君だけだよ！ここまで僕を追いつめて、あまつさえ血を吐かせた者は！」

明るいその言葉に、ぞくりとした気配を漂わせる。

まるで狂気に飲まれたようにも見える、樂しげに笑う白蘭の口元には、たしかにたりと血が流れ、全身にも少なくとも傷が見える。

その状態でさえ、白蘭はまるで待ち望んでいたかのようにもあつた。

「強くなりすぎた自分を止めてくれる奴を待ち望んでいた、とでも言いたいか、白蘭？いや、お前はそういう奴じゃ無いだろ。ただ楽しんでるだけだ。世界を支配するゲームを楽しみ、その課程に生まれた強い敵キャラとの闘いあそびを楽しむ、ただそれだけだ」

「それがどうしたと言うんだい？すでに他のパラレルワールドは僕の手によってほとんどが掌握されている。クリア間近だ！光努君の言う事は、実に正しいよ！僕は自分を倒してくれる存在じゃなく、僕を楽しませる存在も待っていた！やはり、こうでなくちゃゲームは面白くない！」

その言葉に、どれだけ人としての感情が込められていたのだろうか。

熱く語る白蘭の瞳は、感情のままをさらけ出し、ある種純粹でもあり、ある種異常で

もある。それは次元を越える程の強大な力を手に入れてしまった代償なのか、はたまた白蘭という人間の本質が肥大化してしまった物なのか。

しかしその光景を見ても、光努は笑う。

ある意味、光努もどこか白蘭と、似ているから。

「それじゃあ、覚えておく事だな、白蘭。ゲームには、ゲームオーバーって言葉があるって事をな」

「そつちこそ忘れてるんじゃない？光努君」

「ん？」

「ゲームプレイヤーは、どっかでレベルアップがあるって事を、さ」

「……………っ!？」

瞬間、光努の背筋にぞわりとした感覚が、黒くどす黒い手が背筋を撫でるような不思議な感覚を味わった。

「……………光努？」

ツナの呟くような言葉に、光努は反応しない。光努にしては珍しく、というより、初めてツナは、光努のこんな表情を見たかもしれない。その頬はたたりとした冷や汗を流れているがそれより気になるのは、光努自身でさえどうしてこれ程までに自分が不思議な感覚に包まれているのか分かっていないという事だった。

（この世界に来て、初めてかもしれない。その原因は………白蘭の手にあるあの黒い石！）

マーレリングを填めた白蘭の指に摘まれていたのは、黒く、深い闇という闇を塗り固めたかのような、無骨な黒い石だった。その石を見た瞬間、光努以外誰もが疑問符を抱く。真6弔花も、ヴァリアーも、ボンゴレも、イリスも………ただ一人、ユニを除いて。

「ダメ………ダメです！白蘭！それを使っては！」

「ユニ!？」

ただ事ではないユニの様子。そこから察するには、白蘭が持っている黒い石は、ただの石ではない。

「はは、ユニちゃんを手に入れられ無いから、しょうがないよね。ま、界羅に感謝しとかないと、ね♪」

バキン！

砕かれた黒い石は、灰の様にさらさらと細かく風に乗れり、マーレリングへと吸い込まれていく。じわりと黒い絵の具を垂らしたように、大空のマーレリングにはめこまれた石が、黒く染まった。

瞬間、白蘭の周囲、黒々とした混沌とした大空の炎が渦巻き吹き出す。そして炎の中

に立つ白蘭には、黒い翼、腕、その表情は、愉快に歪んでいた。

「やー、まさかこうなるとは僕も思わなかったよ。本当に。正直光努君がここまでとはねえ。残念だけど、捨て身でやらせてもらおうか」

鋭い眼光が、黒く染まる。白蘭がその場を飛び出した瞬間、応戦しようとした光努は動かなかつた。否、動けなかつた。

「!?!」

光努の右足を、地面から抜け出した黒い手が掴み、その場に縫い留めていた。

地面をよく見てみると、黒い影のような物が白蘭の足下、正確には黒い炎の翼から延びて、足下へと伝っている影から、炎の腕が光努の足を掴んでいた。

「らああ!!」

瞬間、地面を滑るように背中の翼で光努に近づいた白蘭が、再び腕を振るう。黒く染まった腕だが、光努はその手をじつと見つめ、再び受け流すべく自身も腕を振るう。が、それを待っていたと言わんばかりに、白蘭は口元を歪めた。

振るう白蘭の腕と連動するように背中の黒い翼をはためかせ、そこから現れた無数の炎でできた黒い腕が、光努の視界を一瞬で埋め尽くした。

「光努!」

ツナも焦る。あれでは、攻撃を受け流すどころではない。流石の光努も腕は2本しか

存在しない。それに比べて、白蘭の繰り出す攻撃は優に数十を超える手数。

「手が足りないなら、量より質かなあつ」

一蹴。

莫大な腕力と炎による力任せの一撃は、手数で圧倒しようとする相手の作為を根底から破壊する。事実、光努の振り抜いた立ったひと振りの渾身の拳は、白蘭の黒い腕と白蘭自身を吹き飛ばし、強制的に結界の壁へと叩きつける。

いや、叩きつけたと思った。

「!？」

がくりと危うく地面へと膝を着きそうになるが、思いとどまる。

その原因は、自身の足に絡みついた黒い腕。

その大元を辿っていけば、予想通りに、白蘭の翼へと伸びている。殴られたと同時に、光努の足に絡みつかせて結界の壁際まで吹き飛ばされるのを防いだのだろう。あの攻防の中で光努に気づかれずに罠を仕掛ける白蘭も白蘭だが、それに対して倒れる事無くその場に踏みとどまる光努も光努で、両者ともに常軌を逸している。

その光景に、ツナは心臓を圧迫されるような感覚を味わった。

(何も、できないでいる……………)

戦った。持てる炎と拳を匣を使い、戦った。だが、結果として白蘭にはほとんど届か

なかった。ぎりぎり、足止めと時間稼ぎで精一杯だった。

今日の前で繰り広げられる攻防に、自分は果たしてついていく事ができるのか？

否、無理だ。どちらも頂きに立ち、常軌を逸した力を振るう怪物共だ。さりげなく光努もその中に入れているが、今更感があり誰も否定しないだろう。それに努りらかと言え、白蘭より光努の方がおかし。

しかし、ツナは自分が何もできないでいる事に、歯がゆい思いしかなかった。

結果として、自分がやったことは、炎を無理やり強めて大空の共鳴により、ユニを呼び寄せるという、結果論だが、白蘭の手助けのみ。そしてやはり、足止めが精一杯。

自分の言葉に、光努は対等な協力を、同盟をもし出してくれた。

だが、それに値する物を、自分は逆に光努を手助けできるのか？

「いや、何もできないから、何もしないじゃない。俺は……皆を助けたい！」

澄み切った純度の高い大空の炎は、ツナの覚悟の現れた炎。

この時代に来て、ツナは多くの者に助けられた。これが最後の戦い。なら、その借りをここで返さなくて、いつ返す？ 全ての現況にして、人の思惟を無邪気に踏みにじる白蘭に、この拳を、みんなの思いが詰まった、この炎をぶつけない。

——いい答えだ、デーヂモX世。お前の考えに、俺も賛成だ。

不意に、どこからか聞こえた。いや、聞こえたという表現も怪しげな、まるでふわり

と宙を漂うかのように脳裏に響き渡る声は、この場にいる全員に届いた。

その柔らかな言葉に、思わず白蘭と光努も戦いの手を止めた。

「今の声……………」

「……………ツナ？」

ツナのそばから聞こえた超常の声が何かを理解した者はこの場にはいない。

ただ一人、ユニにはその声が誰かを直感的に察していた。

「これは！」

ツナ自身も驚き、ボンゴレリングが眩い光を放つと同時に、空中に浮かび上がる光の模様。ボンゴレ貝と、中央に銃弾を添えたボンゴレファミリーの紋章。そして紋章を挟み、ツナ

と対面になるようにして浮かび上がる一人の影。

緩やかな金色の髪と、鮮やかな炎を閉じ込めたような琥珀色の瞳。

どこかツナに似た面影を宿し、額に煌々と燃える大空の炎。

全てを見透かすようであり、全てを包み込むような雰囲気を持ち、悠然と佇むその姿には、人を引き付ける風格が滲みだしていた。

(ボンゴレの創始者、初代ボンゴレファミリー……………)

唯一ユニだけ、その人物が分かった。会ったことは無論無い、見たことも無い、会話した事も無い。だが、大空のアルコバレーノのユニには、ほとんど直感のような予兆が

過る。目の前の人物は、遠いツナの祖先、ボンゴレファミリー初代ボス、ボンゴレI世^{フリーモ}。

——揺るぎない覚悟と、仲間を思うその心。俺の真の後継者に力を貸してやりたいが、それは出来ない。その変わり、枷を外してやろう。

『虹と貝と海と、花と』

「ボンゴレ^{フリーモ}一世。まさか、ボンゴレリングにいたとはねえ。あれが、^{トゥリニセツテ}7・⁷の中でもボンゴレリングにだけ宿る“縦の時間軸の軌跡”による歴史の重みか」

まるで遠い過去を懐かしむかのようにしみじみと語る子供の声。

薄く光るような金色の瞳に映る眼下の世界に白銀の髪を揺らす少年、ハクリは、高く聳え立つ木の頂上から、小さく見える炎の結界を見ていた。

「限らない広がりを見せるマーレリングに、歴史を積み重ねるボンゴレリング。そして時折現れはかなく消えるアルコバレーノのおしやぶり。この三つが一堂に会する機会などそうは無い、これは壮観だね」

まるで光努のように、楽し気に笑い、その姿は本当に無邪気な子供の様。実際、ハクリ自身に何か裏があるわけでも、何かを企んでいるわけでもない。ただただ、自分しか知らない事実を知って、傍観者として、第三者として、その立場を楽しんでいるだけ。

今日の前の状況で行っている事でも、同じ事が言えた。

「しかし、それに加えて白夜のフィオーレリングと破滅のヘレスリングの欠片か。この2つが一緒にいるって割とまずいような……。墓造会も面倒な物を白蘭に渡してくれる」

少しだけ面倒そうに、しかしそれでも楽しそうに笑う。

手元で自分の持つ、白く光るおしやぶりをころころと弄りる。

ユニの持つ大空のおしやぶりに反応しているのか、それとも共鳴する大空の結界に反応したのか、はたまた光努の放つ白夜の炎に反応しているのか、ハクリの胸元に下がるおしやぶりがゆらゆらと光ながらわずかに白い炎を覗かせる。

「海はその広がりに関りを知らず、貝は代を重ねその姿受け継ぎ、虹は時折現れはかなく消える、か」

呟かれる詩は、大空のアルコバレーノが記憶に受け継ぐ、トゥリニセツテ 7・の大空の在り方を示した詩。この詩は、ユニも生まれた時から知っているらしい。

その意味は、マイレ海、ボンゴレあさり貝、アルコバレーノ虹。

どこまでも広がる『マイレ海』は横の時空軸。

平行に広がるバラレルワールド平行世界。

代を重ねる『ボンゴレあさり貝』は縦の時空軸。

ボンゴレI世フリーモから脈々とボンゴレの血を受け継がれる、過去から未来への伝統の継承。

そして『アルコバレーノ虹』はそのどちらでも無い。両方の時空軸に線ではなく、点として存在する。

白蘭が横に広がる平行世界パラレルワールドから知識を得られるように、ツナにはボンゴレリングに宿り受け継ぐ、ボンゴレの“時間”が存在する。積み重なる歴史あるボンゴレの伝統。嘗てメローネ基地襲撃よりも前、ツナは10年後の雲雀との修行で、リングに宿る歴代ボンゴレボス達との邂逅を果たしていた。故にツナは目の前に現れた男が、紛れもないボンゴレI世フリーモだという事が分かった。

そして彼の語る、ボンゴレリングの“枷”

7・トゥリニセツテの頂点に君臨する三つの大空、ボンゴレリング、マーレリング、アルコバレーノのおしやぶりは、炎を灯せるあらゆる物質において最高の精製度を誇る。

その力は、精製度B以下のリングを炎の放出だけで破壊するリングクラッシャー雲雀恭弥の破格の波動を持ってしても、原型を一ミリも歪めない程。GHOSTによる炎吸取を受けた白蘭の炎を受け止めている事からも、ただのリングとは比較にならない力を宿している。

しかしそれでなおボンゴレI世フリーモ曰く、マーレリングとおしやぶりはともかくとして、

ボンゴレリングの最高出力は発揮されていない。

元々他の7・^{トウリニセツテ}と同等の力を発揮するボンゴレリングだが、ある時期より厳格な継承の為、ボスと門外顧問がリングを分割し、それぞれ保管する事になった。

だが、分割する構造を保つ為には、元のボンゴレリングの力は強大過ぎた為、炎の最高出力を押さえて分割したという。この分割したリングが、XANXUSとの死闘でツナが勝ち取ったハーフボンゴレリングである。

「しかしオリジナルのボンゴレリングを見るのはいつぶりだろうか。まあそもそも形が変わってたの知らなかったんだけど」

やれやれと、そばに誰がいるわけでもないが、妙に芝居がかかったように肩をすくめ、しかし楽しそうに笑いながら溜息を吐いた。再び、手元でおしゃぶりをころころと弄る。

さらさらと白銀の髪を揺らし、木々の頂上から下界を眺めるこの人物は、一体何を考えているのだろうか。

「ユニは知っているかな。その詩には続きがあるんだ」

子供の様に無邪気に笑い、老獺のように黄昏る。10年前は赤ん坊、やってきた未来では小さな少年の姿。異界より降り立ち、異常な叡智をその身に宿し、適応の白夜を纏う。

世界を渡る白き旅人は、戦いの佳境を静かに見守っていた。

——花は蕾となりて再び咲き誇り——

これは、世界に適應する『花』^{ファイオーレ}の詩。

そしてもう一説、その続きは——

キイイイン!

誰もが予想しなかつた光景が、今日の前に広がっている。

ボンゴレI世^{ブリーモ}により、枷を外されたツナとその守護者の持つ7つのボンゴレリング

は、真の姿を解放された。黒とシルバーであしらわれていたリングは、輝きと共にその姿を変貌させ、本来の、7^{トゥリニセツテ}の一角たるボンゴレリングとしての姿を現す。

それぞれの属性の炎を形にしたような色鮮やかなクリスタルと、伝統を受け継ぐボン

ゴレの紋章を宿し、精緻な意匠の施された7つのボンゴレリング。

それを見届けたと同時に、1世はふっと笑い、ツナの肩にそつと手を触れた。

——さあ、マールプリモの小僧に一泡吹かせてこい。

不意に、白夜の炎を纏う光努にわずかに視線を滑らせ、微笑んだまま空間に溶け込むように消えていくのだった。

「く、ははー！そうとうふざけたご先祖様だ——」

ドオオオオン!!

楽し気に笑う白蘭の言葉が終わるかどうかという所で、背後から打ち込まれた衝撃に、一瞬の間も無く吹き飛ばされた。

唐突な初代ボンゴレとの邂逅劇に油断していた事は認めよう、揺るがない己の優位と一度圧倒的力の差を見せたツナに対して慢心があった事も認めよう。

だがそれを抜きにしても、今のツナの速度は尋常ではなかった。背後から攻撃された白蘭はともかく、観戦していた者達もツナの急激な超スピードに反応できた者はどれだけいただろうか。

「……………へえ」

そして、そのスピードを間近で見ても、光努は楽し気に笑った。

「ふうん、少しは変わったみたいだね、綱吉君！」

吹き飛ばされても、地面にこすりながら壁際まで飛ばされるのを防ぎ、止まる。その表情は、実に歪んだ笑みを浮かべ、闇のような瞳を見開き、ツナを見ていた。瞬間、翼を一瞬はためかせたと思ったら、黒い龍がぐるぐると白蘭の周りを渦巻き始める。そしてツナに照準を合わせるが、それをさせまいと動く影が一つ。

「ほら、気を取られてると、危ないぞおっと！」

ツナに狙いを定め、攻撃動作に入った白蘭に背後からの奇襲。2対1という状況下であり互いに認識してる範囲内で奇襲も何も無いかもしれないが、ニューボンゴレリングを得たツナと光努という組み合わせ、そして白蘭自身に起こった異変によるところも大きい。

しかしそれでも、爆発するかのような白蘭の全方位の攻撃。そして同時に、背後の光努から離れ空中へと飛び出す。

そのまま地面を踏みしめ、追撃を仕掛けようとした光努は、自身に起こった違和感に、その場に思いとどまった。

「?どうしたんだ、光努は」

「Tシューズが破損している。多分あの黒い腕に捕まれた時だ」

じつと瞳を細めたコルの言葉で、白蘭の動き、黒い腕を影のように伸ばし、光努の足を抑えつけた時の事を思い出す。その場で光努を止めるつもりだったのだろうか、同時

い炎プレートを足裏に作り出す空中移動を可能にするTシユーズを破壊しての機動力減衰を行った事に、今更に気づいた。

その為光努も思わず足を止めるが、その表情には別段焦りや動揺も見られなかった。「確かに気づかなかったけど、白蘭また忘れてるぞ。今は空の上も、安全じゃないつて事をさ」

「ぐああー！」

白蘭は再び、背後から迫る衝撃に思わずうめく。背後を首だけで振り向くと、そこには自分に一撃を入れたツナの姿。

だがそれだけではない。ナッツを形態変化させ、ガントレット形態を右腕に、渾身の炎を込めたツナの姿がそこにはいた。

「——っ！」

「ビックバン——アクセル!!」

大空の炎の塊。さながら小さな太陽のような拳の炎は、螺旋の軌道を描いて白蘭へと迫った。メローネ基地の3ブロックを一撃で吹き飛ばしたXバーナー級、尚且つ枷の解放されたボンゴレリングによって本来の力を引き出されたその威力は、まともに受ければ白蘭とは言えたただでは済まない。

「——まはくはくし黒拍手」

身体を脈打つように表面を伝う黒い影が、白蘭の両手を黒く染める。

黒腕を振り、押し潰さんと炎を爆発させツナのビツクバンアクセルの炎球を黒が飲み込む。それは、まるで太陽を喰らう黒い獣のようでもあり、徐々に鮮やかな大空の炎は黒い炎へと変質させられ、深い闇はついには、全ての炎を喰らった。

だがそれでも前回同様余裕綽綽という様子ではなかった。炎は避けたものの、衝撃に顔をしかめ、荒く息を吐く。その額には、余裕そうに笑っていた先ほどまでの白蘭と同一とは思えない程に、大粒の脂汗が浮かんでいた。だがそれでも、ツナの渾身の炎の一撃を消したのは事実。

（なんだ、この違和感。白蘭のあの黒い翼や腕、最初にみた石。………炎が、飲み込まれた？）

一瞬の思考、だがその一瞬が命取りとなる。

白蘭の翼から伸びる黒い影が、ツナに迫る。

寸前で、白蘭は横合いの攻撃で再び吹き飛ばされた。

「考え事は危険だが、ツナ。一旦仕切り直しするか」

ツナに意識を持っていかれた隙とばかりに、背後から奇襲で拳を振るう光努の姿。

こんな状況でさえ楽しげに笑うその姿に、ツナはひどく安心感を覚える。際限ない自信を塊にしたような存在、白神光努という人物は常識離れしているが、それだけ荒事の

ようなこういう状況だと、とても頼もしく見える。別に、普段がだらしないとは言わな
いが。

「はは……………これは予想…外……………だね！」

「随分ときつそうだな、白蘭。ほうっておいてもお前、長くなさそうだな」

「光努、白蘭に一体何があつたのか、わかるのか？」

「ん、ユニの方がどちらかと言えば詳しそうだけど、今は取り込み中みたいだし、憶測
でいいなら教えてやる」

ちらりと視線だけで見てみると、祈りささげるように手を組むユニの姿が映る。その
周りには大空の炎が、彼女を守るための結界のように噴出していた。

大空のアルコバレーノとしての使命。この時代を創ってしまった者の一人としての
責任。ユニの炎に込められた思いは、彼女の姿を見るだけでひしひしと伝わってきた。
そしておしやぶりから噴き出す炎を見て、時間が無い事も。

「原因はあの黒い石。あれに関して俺は何も知らないが、どうも大空の“調和”であの
黒い石の力がツナの炎を侵食したみたいだな。というか、炎全般は多分普通にやっても
食われるだけだ」

「だが、それだと光努はどうして？」

「ま、白夜の“適応”ならどうにかなる。が、できる事なら早期決着が望ましいな

……」

ちりちりと、手の中で燃える白い炎を弄りながら、光努は白蘭をじつと見つめる。

そこに立っているのは、一言で言えば異形、そう形容すべき姿。黒い炎の翼と、体中どこどころを黒く染め、闇を映す瞳を見開く白蘭の姿。

「本格的におしやぶりへの炎の供給が始まっている。そう、ユニちゃんも時間が無いか。なら、君らにかまけてる時間は無いねえ、綱吉君に、光努君！」

黒い炎の翼を動かし、空へと躍り出る。

「最も難易度高く、全平行世界パラレルワールドを見てもこの時空に存在する世界ゲームは僕の中でも最高だよ！二人とも！だからこそ、今この瞬間にたどり着くまでに苦労した。だから、立ちほだかるというなら全力で排除させてもらおうよ！」

「あまり行き過ぎるなよ、ツナ」

「ああ、分かっている！」

ガアア！

グローブから炎を爆発させ、振ったツナの拳を白蘭はガードして受け止めた。

流石に何度もツナの超スピードを受けて、多少は慣れたのだろう。ツナはガードされたと感じると同時に一瞬で離れ、再び白蘭の周囲に現れ攻撃を繰り返す。

黒い炎に触れられないのであれば、一瞬の攻撃を繰り返すヒットアンドアウェイの戦法。奇襲と離脱。まるで見えない拳に全方位から殴られているかのようでもあるが、それをことごとく、白蘭は防いだ。

「白蘭、お前だけは、許さない！俺達もユニも、お前の道具じゃない！」

「はは！偽善的なセリフだね、綱吉君！不条理を身を委ね、目に映るすべてを救う、そんな高尚な事を、君は言うのかい？」

「それは——」

「言わないよ。君という人間は、例えば目の前で誰かが困っていようと、人の事よりも自分の事を考える。己の保身を第一に、安全圏に身を置くのが君さ。自分の過去を振り返ってみなよ。全ての悪に自分から立ち向かった、なんているのかい？」

黒い龍を模した炎がツナへと迫る。

受けるのはまずいと直感し、瞬時にその場を離脱し、再び白蘭の背後に回り込む。そのままぐるりと回転して、蹴りを叩き込むが、やはりこれも防がれた。

「それでもこの時代まで戦い抜いたのは、誰かに後ろから突き飛ばされたからなし崩しのにだろ。それに、自分の為さ。自分の平和の為に全てを利用する。君は僕と変わらな
いよー」

「そんな事は、無い！」

断言する意思を体现するかのように、振り抜いた超速の拳は白蘭を吹き飛ばす。飛ばされながらも、炎を放出して、空中に白蘭は留まる。

目の前に立つのは、大空の炎を両手に灯し、確固たる覚悟を映す瞳を秘めたツナ。額の炎は純度高く澄み渡り、激動する戦いに呼応するかのように荒々しく燃え上がった。

「お前とは違う！俺一人が無事でも、過去に帰っても、意味なんて無い！未来を平和にして、安心して皆で過去に帰る！それが、俺の覚悟だ!!」

「その覚悟、どこまで続くかな！」

白蘭の炎は、もはやただの極大の大空の炎とは言えない。世界を統べる程の智識ちからを得て、一人では普通なら扱いきれない莫大な炎ちからも得た。だがこの時代のこの時空において、得られる知識は未知に侵食され、捨て身の力、黒い石によって莫大な炎を削り続けながら、破壊の炎を生成し続ける。

白蘭にとつても、時間が無い。故に、全てを決めに来る。

「ぐうー！」

黒い龍が、ツナを吹き飛ばす。そのまま地面をがりがり削るが、一度手を付いて支柱としてくるりと回転し、着地する。が、白蘭の悪意はツナを蝕まんと燃えがった。

「まずい！ツナ、右手だ！」

結界の外から見ていたディーノの叫びにツナは己の炎が纏われた右手を見ると、右手

のグローブに纏われた炎に小さく、黒い炎が紛れ込んでいた。小さく、だが徐々に、ツナの右手の炎を黒く染め上げていった。

(炎が……消えない！まずい！)

そしてツナの超直感が感じた背筋を駆け抜ける悪寒。前を見てみると、地に足を付けた白蘭。だが、その足からは黒い炎が噴き出し地面に己を固定し、黒く染まったマールリングを嵌めた右腕には、どす黒い欲望を具現化したような黒い炎が集中させられていた。

内に残った炎をかき集め、おそらく今まで最も強い一撃を放つつもり。

まともに受ければどうなるかは目に見えている。だが、炎を侵食されつつあるツナには、それを迎え撃てる体制が整わない。

(このままだと——やられる)

その時、肩に触れる人の手の感触を感じ取った。同時に、暖かいぬくもりが右手を包み込み、ツナは驚いた瞳を見開いた。

しゃがみ込む自分の肩に手を置いたのは、いつの間にか近くに来ていた光努だった。

「だから、あまり行き過ぎるなど言っただろう。ま、大したこと無くて良かったな」

「光努！これは、白夜の炎！」

白く染まる炎がツナの腕を伝い、黒い炎に触れて灰色に、次第に無色に変わり、消え

ていく。幻想的な光景に思わず驚き、右手の炎を食い尽くさんと蠢く黒い炎は、すぐに光努の手によって消火してしまった。

じんわりと暖かく、光努の白夜の炎がツナの右手、そして左手へと浸透し、白と橙の炎が混ざり合った。自分の者とは違う他者の炎は通常拒絶させる。

だが、大空の炎の特性である“調和”と、白夜の炎の特性である“適応”は、自然に一切の不自然無く、まるで最初から自分の炎であったかのように、完全に溶け込んだ。「さてと、白蘭も次で最後の一撃みたいだからな。こっちも最大火力ぶっぱなすぞ、ツナ。そうすれば、後はエンドロール見て終わりだ」

ばきりと手を鳴らし、ファイオーレリングから白炎を噴出す。その炎を瞳に映し、ツナも渾身の一撃を込めるべく、眩いた。

「……………オペレーション X^{イクス}」

その言葉に、ヘッドホンから機械的な音声が聞こえ、ツナの瞳のコンタクトレンズに X のゲージが映し出される。右手から放出される支えの柔の炎。左手に込められた剛の炎。

「さてと、全てに適応しろ『^{デア・イリス}白虹』」

光努の全身を包むコートのように纏われた白夜の炎が、一際膨らむと同時に、光努の右手に集約された。握られた拳の隙間からは、眩いばかりの純白の極光が放たれた。

破滅と欲望の具現とした黒い炎、純真な覚悟を称える橙の炎。そして全てに適応せんとする白い炎。三種の炎が天空の結界をびりびりと震わし、今まさに強大な力の前に崩れんと罅を作り続けている。次の一撃で、おそろく決まる。

「全ての至宝を集め、全時空の覇者になる！最後のピースが僕の手に来るのを邪魔するのなら、容赦なく潰す！消えろおお！」

「人を道具のように利用し、縫られた手を踏みにじる、そんなのは夢じゃない！白蘭！お前の見ている物は、ただの悪夢だ！」

ツナの覚悟の炎と、白蘭の欲望の炎がぶつかり合う。

対峙する2色の極大な炎はぶつかり合い、互いに削り合わんとせめぎ合うが、徐々に白蘭の炎がツナの炎を侵食していく。

「うおおおおお！」

「この世界はただのゲームさ！上等な駒を扱い、支配し、勝者こそが全てを手に入れる権利を得る！この世界は、そうやってできている！君のお友達ごっこで勝てる程、甘い世界じゃない！」

微弱な徒党は強大な力の前に屈する事もあるだろう。

勝った物が全てを奪い、敗者はこの世を去る事もあるだろう。

助けた者に裏切られ、裏切つて者に切り捨てられる事もあるのだおる。

因果応報、この世界はそうあるべきなのかもしれない。

だが、世界はそれだけじゃ回らない。

現実を見据える合理的な思想は、革新的なアイディアに前へと引つ張られるかもしれない。強大な個は、互いに認め合う集団に撃ち負けるかもしれない。手を差し伸べた者に、今度は手を差し伸べられるかもしれない。

世界は偽善も偽悪もごちゃまぜに、正義と悪も混ざり合つて世界を成している。

「だから白蘭、今この世界の完全なる巨悪は、お前の敗因は、破滅をその身に受け入れた事さー！」

地面にびしりと亀裂を走らせ、足を踏み込む光努は、極光に纏われた拳を振るい、眩い純白の光を撃ち放った。放たれた白き虹は、ツナの大空の炎と溶け込み合い、極大の炎を生み出し、黒い炎を飲み込む。

その光景に瞳を見開いた白蘭は、内の炎をかき集めるが、足りない。

命を削つても足りない。限界を絞り出しても足りない。

破壊力の無い白夜の炎だけなら勝てるだろう。

炎を喰らう有利性のあるこちらなら大空の炎に恐れる事は無い。

だが、この二つが合わさった時、勝てる術は無くなった。
これが——敗北。

「がああああああ!!」

瞬間、白蘭は大空と白夜の炎に飲み込まれた。

なんでかなあ。

苦勞してミルファイオーレを創って、ユニちゃんも一度は取り込んでマーレリングだつておしやぶりだつて手に入れたのに、最後は全部パアになる。

こんな事つてあると思うかい？

「ま、そこまで牙城を固めたらそうそう無いだろうな。けど、崩れたつて事はどこかに綻

びがあつたつて事だろ。さしずめ、お前の一歩の敗因は、ユニの力を見誤つた事じやないのか？」

なるほど確かに。言われてみたらそうかもしれない。

今もなお僕の元にユニちゃんがいたのなら、結果は大分違つたかもしれない。

チョイス終了時に彼女が現れなければ、チョイス無効という判定も無く、あの時点でボンゴレリングもフィオーレリングもおしやぶりも手に入ったかもしれない。

ああ、でもあの場でユニちゃんが起きていなければ、おしやぶりの覚醒も無い、すなわち7・^{トウリニセツテ}の覚醒も起きない。そうなれば、他のパラレルワールド同様、アイテムは集めたけどフラグ回収し忘れて次のイベントに進まない、みたいな事になつてたかもね。

「ゲームに例えるのは分かるやつに分かるが、お前そんなゲーム好きだったのか？」
まあ好きな方だね。

そもそも僕は、この世界を世界なんて思つて無い。

普通の学生をしてたけど、ある日パラレルワールドに跳べて、そんなおかしなことが起こる現実リアルなんてあるわけない。そう思つたら、確かに来たよ。マーレリングの適応者にふさわしいってさ。

「と言つても、ユニがボスのジツリヨにマーレリングはあつたんだからそれまで持つてなかつたわけだろ？」

必然というのか、運命というのか、どうにも僕の手に来る定めだったらしいけど、まあそこらへんは正直どうでもいいかな。結果的にはマーレリングは僕の元へと来たわけだし。

ああ、その過程で、二人の大空が僕の邪魔をしに来るかもって忠告は受けたんだつたよ。

それが、綱吉君とユニちゃん。まあ確かに、この二人には一番邪魔されちゃった形になつたね。

それに、光努君にもね。

「俺に対しての忠告は受けてないのか」

ん、そもそも君の存在はアルコバレーノに少し近いかもしれないね。

過去未来現在、それに平行世界を渡る線の上に、突然降って来たたつた一つの点の存在。それが君さ。まあ確かに君の忠告は受けたよ。ゲームで例えるのなら、小さなバグがおこるかもしれないってさ。

小さいなんて、笑っちゃうよね。

この世界の根幹を破壊しかねない重大なバグだよ。

「人を病原菌みたいに言うな。バグがあるのはお前の頭の中だろうが」

うまい事を言うねえ。

でも、確かにそうかもしれない。

僕は人間さ。だけど、本当に人間で合ってるのか正直自信は無いよ。

いやね、生物学的にも確かに人間だけどき、どうにも僕には周りの風景は全部景色みたいに見えたり、ただただ人生の道を、辺りをきよきよ見渡しながら歩いているだけのただの人生。

だから自分に不思議な力が備わった時はやったと思ったし、マーレリングの保持者になつた時も面白くなってきたって思ってたさ。

感情が無いわけでも、人間が嫌いなわけでもないんだよ。

面白いビデオとか雑誌だつて見たりすれば笑うし、マシユマロの甘味だつて味わうし、感動したらじんときたりもするんだ。

でもね、深い所だとうにも違和感だらけでね。なんだか胸の中がぼっかり空洞になつてるような気分なんだ。こんなんだからマーレリングの保持者になつたのかも知れないけどね、はは♪

「だんだん自虐じみてきてるな」

まあね。

だからね、この空洞を埋めるには、それ相応に大それた事をすればいいかなって思ってたんだ。世界の支配者、全時空の支配、これ程やりのある夢はそうそう無いだろ？

光努君だって、一つの大企業を成長させてるみたいじゃない。僕の事も、少しは分からないかい？

「お前はあれだな、子供みたいだな。スケールがでかい」
は、言ってくれるね。

人は皆子供さ。欲望をさらけ出して、自分の理性を抑え込む。

その逆をすれば確かに大人だけど、そんな窮屈な人生は真つ平さ。

それに、僕にはそうしたって十分な能力もあつたことだしね。おかげで、君達が来るまで万事うまくいったわけだし。

「けど、結局はお前の負けだよ、白蘭」

ドヤ顔でもするかい？

力を合わせれば困難は必ず覆せるって、言うかい？

「必ずとは言わないが、少なくともお前は止める事はできたよ。兵を使つては捨て続けるお前が、最後には一人だけで立ち向かうのは当然だった。逆に、力を合わせて敵を倒すツナ達が最後にお前に挑むのも、分かつた」

正直光努君の事は色々予想外だったけどね。

「俺の存在があつたにしろ、もう少し別の戦い方もあつたはずだ。ユニが一般人を巻き込みたく無いってのは分かるが、戦力や戦略をもう少し整えておけば、俺達は負けてた

かもしれないしな」

意外だね、光努君の口から負けるなんて単語が出てくるなんて。

正直これほど似合わない言葉は無いくらいには思っていたけど。

「誉め言葉と受け取っておくよ。まあ戦力とか戦略とか言つてたけど何が言いたいかと言うとさ……あんまりお前を慕う奴らを無下にするなって事さ」

「幻騎士もだし、真^{リアル}6 弔花もさ、お前への忠誠心は本物だ。それにジツリヨ主体のブラックスペルはともかく、ホワイトスペル前身のジェツソファミリーだつてお前が作つたんだ。全員が全員反抗的なわけないだろ」

まるで僕より僕のファミリーが分かつてみたいだね。

「お前が分かつてないだけ、ああいや——分かつてなかつただけだ」

確かに、そうかもしれないね。

今まで気にも留めなかつたよ。人は自分と同じ物、同じ価値観の物に対して同情が湧くものさ。だけど、僕にはそれが無かつた。

確かに、説教喰らつてもしようがないくらいダメだねえ。

「ま、それとは別に次会つたらとりあえず一発殴るくらいはするけどな。いや、一発じゃ足りないからやつぱ3発くらい」

あはは、容赦無いねえ……。

それに、次に会ったら、ね。

「さてと、頃合いだし。今なら伝言くらい聞いてやるけど?」

ああ、だったら一つだけ伝えてくれないかい?

僕を打倒した光努君、君と、綱吉君にさ。

「いいぞ、何て言う?」

——完敗だ! 君達の勝ちだ! ってね♪

『助けてくれてありがとう』

巻き起こる塵芥を吹き飛ばし、白夜と大空の2種の炎が去った場所には、抉れた地面のみ。その上からぼとりと、太陽の光を反射して一つの指輪が落ちた。

大空を駆け抜けるような羽の意匠が施された、マーレリングだった。

「ツナ！」

マーレリングが力を失ったと同時に、拮抗の上で成り立つ大空の結界は崩壊した。

音も無く砕け散り、破片は炎となって霧散し、傍観するしかなかった者達がツナや光努の元へとぞくぞくと集まってきた。

「やったな、ツナ、光努！白蘭を倒したぞ！」

「よっしゃあ！勝ったぜ！」

皆思い思いに、勝利の雄たけびをあげる。

白蘭という、嘗て無い程の強大な敵を打倒した。過去へと変える事ができる。

この未来に来てから、これ程までに喜びと安堵に包まれた事は無いだろう。張りつめ

た空気は弛緩し、嬉々とした雰囲気に包まれた。

その中で、真6弔花である桔梗、ザクロ、ブルーベルの3人だけは、己の主を失った事に悲痛そうな表情を浮かべた。

「白蘭様！」

「うそ！びやくらんやられちゃったの!?!」

「んだとお!?バーロー！」

「まあお前ら落ち着け」

ガツクシと膝を着いて項垂れる桔梗の肩を、後ろからポンと叩いてなだめようとする光努だが、その瞬間視線だけで人を射殺せそうな程鋭い殺気を放ち、桔梗達3人は光努を睨みつけた。

「てめえ、白神光努！よくも白蘭様をやりやがって！」

「うにゆう!!よくもお！」

「2人共！やめ——」

「ていつ」

ズガン！

片手で綺麗に一人ずつ、首筋に割と力を込めた光努の一撃が、人体からしてはいけなような音を出しながらザクロとブルーベルを昏倒させ、一瞬の攻防すら無く地に沈め

たのだった。炎がほほ吸い取られて極端に疲弊していたとはいえ、やはり光努という存在はどうにも常識の枠に当てはめにくい。

そしてこの結果を半ば予想していた桔梗は賢く、思いとどまった自分を密かに心の中で誉めるのだった。

「まったく、この二人は好戦的なんだから。まあ、忠誠心は流石に本物だな。桔梗、白蘭はもういいけど、今更何かするつもりあるのか？まあまだ暴れる気力があるなら、相手くらいはしてやるけど」

ころころと、いつの間にか拾ったのか大空のマーレリングを手で弄び、反対の手をばきりと鳴らしながら言うが、中々に意地の悪い質問だ。今更何かをする気も意味も無いし、そもそも暴れる力も残っていない。敵陣の真ただ中に孤立したようなこの状況で、果たして何ができようが。今日の前で気絶させられたザクロとブルーベルの二の舞になるのは目に見えていたので、桔梗は押し黙るしかなかった。

「ししし、情けとかいらねーだろ。もう白蘭もくたばってこいつらどうしようもねーし」「こんな奴庇ったところで害にしかならん。殺ししかできぬ怪物だぞ」

「見方を変えたらそれブルーメランだぞ、レヴィ」

暗殺部隊らしく容赦ない冷血発言だが、これが彼らの平常運手。そして暗殺部隊だけあってレヴィの言う事はお前らもそうじゃね？と思つた光努だが、少しだけオブラート

に包んで突つ込むのだった。あくまで少しだけ、だけど。

しかし、レヴィの言葉に否定したのは、まだまだ満身創痍な入江だった。

「いや、彼らは一般人だよ。僕はミルフィオーレ時代優秀な人材を探して世界各国の軍人や科学者達のデータを見たけど、彼らは見たことが無い。考えられるとすれば、リストアップされていない一般人だという事……」

入江の言葉が本当なら、今ツナ達を苦しめた人外の怪物集団真6 弔花は、戦いとは全くの無縁の世界で育った一般人だという。嘗てのミルフィオーレは戦力増強、技術増大、組織の勢力拡大において育成という手段は使わず、基本ある一定水準の実力や頭脳を持つ者達をスカウトしてファミリーに入れた。その為軍人、殺し屋、マフィアなどの戦い慣れした者のデータを見た事がある入江だが、そこにいないというのであれば確かに、一般人と言わざるを得ない。

が、桔梗は入江の言葉に、心外だとばかりに鼻を鳴らす

「ハハーン！一般人とは安い言われようですね。我々は世が世なら、各分野で天下を取つた人間だ！」

もしかしたら、世界を股に掛けた大企業の代表だったのかもしれない、歴史を揺るがす発見をした科学者だったかもしれない、世界に名だたるアスリートだったのかもしれない。

可能性の世界だが、桔梗達は確率的には高い確率で天下を取れる人材だったのである。おそらく他の平行世界を見るならば、8兆という可能性の中でもほとんどが種別が多少違えど同じように天下を取った未来が映っているはず。が、可能性の低い不運に見舞われ、その道を断念した者達の集まり、それが真6弔花。やるせないその気持ちを、白蘭は力としてマーレリングを与えた。

だからこそ、彼らは白蘭に忠実に、忠誠を誓った。

「黙れ」

ズガガアアーン！

短く吐かれた言葉と同時に、XANXUSの銃口から炎の弾丸が桔梗に放たれ、爆炎を上げた。

容赦の無い一撃。温情の欠片も無い非常なる暗殺者に相応しい暴君の力は、まっすぐに桔梗に飛び頭を撃ち抜く——寸前、光努の右手が挟み込まれ、炎を握りつぶした。その際、衝撃を受けた桔梗はぐらりと、気絶して地面へと倒れる。

「こういう時くらい後腐れ無くしてやれよXANXUS。どうせお前後半見てただけなんだし」

「黙れ」

先程と同じ言葉だが、微妙にニュアンスが違う事を感じと取ったのはわずかだった。

「先ずもう人死にが無いと分かったことに、ツナも再び安堵するが、その瞬間叫ばれた声に瞳を見開いた。

「頼む！ 姫！ ここを開けてくれ！」

焦りを含むγの声。

その声の方を振り向いてみれば、そこにいたのはγ、野猿、太猿。そして彼らの前にあったのは、球状に燃え上がる大空の炎。そしてその中央には、祈るように手を組んだユニの姿がそこにはあった。

「ユニ！ どうして！」

「沢田さん。おめでとうございます。これでこの未来世界において、立ちほだかる脅威はいなくなりました。次第にこの世界は、平和な時を迎える事になるでしょう」

「だったら——」

「でも、アルコバレーノが復活しなくては、過去へは帰れません」

「——っ！」

「今世界の時空は歪みに歪み切っています。今のままでは過去へ帰ろうとも、沢田さん達のいた時代に帰れないでしょう。この歪みを戻す為に、アルコバレーノを復活させ、

トウリニセツテ

7 ■ のバランスを元通りに戻す必要があります」

「だが、それをしたらユニは——」

「ええ、私はここで、自らの命を使います」

確固たる意志を秘めたユニの言葉に、ツナ達は冷水を頭から浴びせられたような衝撃を受ける。己の炎を使い、おしやぶりからアルコバレーノを復活させる大空のアルコバレーノであるユニにのみ許された奥義。だがその代償は、ユニ自身の命となる全ての炎だった。

だが、それを黙って見過ごす事など、ツナ達にはできない。

「ユニ！他に方法があるはずだ！」

「そうだ！白蘭はもういねーんだし、わぎわぎユニがそこまでする必要だってねーはずだ」

「いや、獄寺君。ユニさんの言う事は正しいよ」

ツナ達の言葉を否定し、ユニを肯定したのは、入江。次いで黙ってはいるが、後ろに立っているルイも同意見。それに加え、ディーノや骸達も、反論するそぶりすら見せなかった。

「君達が今10年バズーカの5分以上の時をこの時代で過ごしているのは確かに僕が作った装置の影響だけど、それを解除したとしてもユニさんの言う通り、トウリニセツテ7 ■ の欠け

た状態の世界は歪んでいる。そんな状態じゃ、どこに飛ばされるかは僕にもわからない」

「けど！今は白蘭も倒して平和だ！何か他の方法を探せば！」

「それが見つかるとは、いつでしょうか」

「——っ！」

すつと目を細めるユニ。

見た目は少女でも、その魂に秘められた力は強く、その意思は誰よりも強靱。彼女の語る言葉には、嘘偽りは存在しない。

「確かに可能性は0では無いかもしれませんが、けど、その低い可能性が見つかるまで、沢田さん達は未来に留まらなくてはならない。それは、ようやく白蘭を打倒できた今あつてはなりません」

「でも！」

「いいのです。これが大空のアルコバレーノの使命。それにこうなる事は最初から分かっていたので、悲観しないでください。あなた達が平和な過去に帰って笑ってくれる事を、私は一番に望んでいるのですから」

有無を言わさない口調だが、その声色は柔らかく、果てしない慈愛に満ちている。

本気で世界を憂い、皆を思い、運命に従事し、命を懸ける。ユニの意思は、誰よりも

固かった。

ドオン！

「俺は認め無い！ 姫！ あんたは俺達ジツリヨネ口のボスだ！ そんなあんたが一人で命を懸けるのを、黙って見過ごすことなんかできねえ！」

「γ——！」

ユニ一人を包み込む大空の結界に拳をぶつけるが、びくともしない。

純度の高く、炎を灯せる物質では最高峰の大空のおしゃぶりから溢れ出す生命の炎。人の拳でどうこうできる物でも無いが、ユニ一人を包む小さな結界だ。下手に大技を出して中のユニまで傷つけては本末転倒。これでは、誰も手が出せない。

結界の中で、ユニは静かに瞳を閉じて祈る。

（これでいいのです。皆さん、私の事は気にせず、各々の時を生きてください。γ、野猿、太猿、ジツリヨネ口の皆には、申し訳無いですけど）

おしゃぶりへの炎の供給は、あと少し。もう一押しトウリニセツテの炎の勢いがあれば、これで全てが終わる。7・のバランストウリニセツテは正常になり、時空の歪みは修正され過去未来の時間軸

は元に戻る。

（皆さん、さようなら——）

「それは困るな、ユニ」

ゆらりと陽炎のように聞こえた言葉に、ユニは思わず目を見開いた。

自分の立つ僅か数十センチ手前。いつからいたのか、結界の中を悠々と立ち尽くす人物に驚き、彼の体から立ち上る白い炎に再び驚く。唯一の白い炎を身に纏う少年、白神光努は、楽しげに笑いながら、ユニを見つめた。

「光努さん！ どうしてここに—— 白夜の炎！」

「正解。外から結界に入るのは一度やったからな、二回目はそう難しくないぜ」

につ、と屈託なく笑う光努。脳裏に思い出す、ツナと白蘭の戦いに割って入る時も、大空の結界の中へとするりと自然に入り込んだ。白夜の炎の特性により、光努自身大空の結界に『適応した』といったところだろうか。よくよくと考えれば、今の状況は当然の結果だと言える。

「けど、私の意思は変わりません。ここで命を賭けなくては、アルコバレーノは復活しません」

「それはどうか。さっきのツナとの会話を聞くに、代案があればお前は命を賭ける必要なんて無いだろう？」

「……………確かにそうですけど……………でも！ そんなのはありません！ 私の炎なしで、アルコバレーノの復活なんてできません！」

ユニ言う事は最もだ。確定している。

それはツナの炎でもリボーンの炎でも、ユニの代わりにはならない。

「けど、白夜の炎はまた別だ。お前の炎に適應して代わりになつてやるよ。それでお前は死ぬ必要なく、アルコバレーノも復活。万々歳だろ？」

光努の提示した案は、白夜の炎を代用に使う。

全てに適應する白夜の炎を、一度ユニの炎に適應させ同様の者へと変質させ、アルコバレーノのおしやぶりへと供給する。適應の範囲の割と広い白夜の炎であるならば、確かに触れればユニの持つ大空の命の炎と同種の炎へと適應する事も不可能ではない。

だが、この案には一つだけ欠点がある。

「それでは！光努さんの命が——！それはいけません！無暗に自分の命を賭けるような事など」

「はあ。そのセリフ、そつくりそのまま返したい所だけど、今回はいいや。ユニ、そんなに死に急ぎたいわけじゃないだろ？代案があるならそつちに動け」

「で、でも……………私には——」

「大空の短命の呪いがある、か？」

「——っ！」

光努の言葉に、思わずユニは押し黙った。

光努が結界の中へと入った時から、大空の結界は白夜の炎がわずかに混ざり、中の会

話が聞こえなくなっている。今ツナ達には、ユニと光努が何を話しているのかはわからなかったが、ユニの驚きようがただ事では無い様だけは伝わった。

「……………はい。私の命はあまり長くありません。なら、光努さん、今を生きるのはあなたの方が相応しい。私はただ、己の寿命が少しだけ早く来る。それだけですから。どうか、長く生きてください」

「そんなに長く生きる事が大事か？」

「え……………」

「お前は呪いを免罪符に、死を持つて全ての罪を償おうとしているようにも聞こえる。無論心底俺達を平和な過去へと返したいというのは分かるが、それとお前が命を賭ける事はまた別だ」

「けど、尽きる命よりは生きる命。私は今ここでした選択に悔いはありません！」

その言葉に滲む確固たる意志は、光努も理解している。だが、それだけで納得してやる程に、光努は愚かなお人よしではなかった。

ビシ！

「あうー！」

一瞬何が起きたのかユニは理解できなかったのか、すぐに自分の額が光努の指で弾かれたと理解した。その瞬間額を押さえて、思わずうづくまる。やれやれという風に肩を

疎める光努だが、背後の壁ではＹが怒りの表情で結界を叩いているのを一瞬だけちらりと確認すると、何事も無かったのようにスルーするのだった。

「つたく。生きる意味を探すならいいが、死ぬ意味なんて見つけるな。運命？無視しろ。指名？俺が代わるし関係なし。生きた時間の長さが人生じゃねえ。どんな人生を生きたかが人にとっては重要だ。ユニ、お前はまだ平和な世界をゆつくり見てないだろ。それを見てこい」

「ですが………それだと光努さんは私の為に死ぬと言っている様な者です！どうしてそこまで！」

「ああ、さっき言ったのは半分くらいは本音だけど半分くらいは建前だ。それに俺は別に死ぬつもりは無いしな」

「ええ!？」

一応本心からの言葉ではあるのは認めるが、それだけの為ではなかった。光努は右手の指に嵌ったフィオーレリングから、溢れんばかりの白夜の炎を噴出し、自身に纏った。すつと右手を伸ばして、ユニの首から下げられたおしゃぶりへと触れる。

「これが、命の炎。そしてこつちがアルコバレーノのおしゃぶりか」

じやらりと、いつの間にか光努の手には、ユニが持っていたおしゃぶりが握られていた。まるで手品のような動きに思わず瞳を見開いた瞬間、ユニは光努の手で肩を押され

た。

トン！

降れた肩から湧き上がる白夜の炎が、ユニの全身を包み込み、よろよろと交代するユニが境界の壁へと触れた瞬間、一瞬溢れるように膨張した白夜の炎は、ユニの体をするりと境界から逃がし、外にいたγの腕の中へとぼすりと収まった。

白夜の炎によってわずかに開いた入口が閉じる瞬間、呟くような言葉がユニの耳に入り込んだ。

「お前には借りがあるからな。帰り道を、教えてくれてありがとうな」

その瞬間、まばゆいばかりの閃光が、ユニを含めたツナ達の視界を遮った。目に痛くない

程に暖く柔らかなオレンジ色の光。その光を瞳に映しながら、ユニは森で会話をした己の言葉を思い出していた。

——彼が、私達の誰かの命を、運命を救ってくれる

自分で語る予知。その言葉を思い出した瞬間、ユニの瞳から一筋の涙が頬を伝って流れた。ありえないと思っていた事象が覆り、自分にも無限に等しい可能性の未来が提示

された瞬間。白神光努に示してもらった新たな道は、ユニに感謝と悲哀の二つの感情を蜂起させる。

（私が視た救われる死の運命は、私の運命——！！）

次第に光は収まり、最後に残ったのは、地面に落ちたおしやぶりと、マーレリングのみだった。

「またこれか。俺って異空間に飛ばされる系結構多いよな。なんでだろうか？」

「そりやあ当然、バクみたいな戦闘力の光努君みたいな怪物キヤラはどうにか戦いに参加させないようにするのが鉄則だからね」

やれやれと肩をすくめて嘆息するが、その表情はなんら変わる事無く、焦りや怯えとは一切無縁。すでに数回経験のあるこの状況には慣れた、彼風に言うなら「適応した」といった所だろうが、それを抜きにしてもそうそう驚く事も稀だ。

今更このような状況が来たとしても、大した心配も無く、疲れて無いが気分的に腕を伸ばし、体を解した。若干ぼきぼきと心地よい音が体から鳴り、息を吐くと同時に伸びを縮める。

そして今更ながら、自分の独り言に応じた人物であるハクリに向かって、光努は視線を向けた。

「で、(ハ)クリ(デ)？」

「ん、正確な名称は無いけど、しいて言うなら時空と時空の狭間とか、天国と地獄の境界とか、まあそんな感じでいいんじゃない」

「ま、正直それはどうでもいいけど。ていうかお前また縮んでるな」

「そりゃあここはもう10年後の世界じゃないからね。少し元に戻る必要も無いし」
「そういうものか」

地面かどうか分からない場所から飛び跳ねて、くるくると回転して赤ん坊サイズのハクリは、白いおしゃぶりを胸元で揺らしつつ、光努の頭の上にぼすりと収まった。

「それで、ツナ達はどうした？」

「ああ、彼らは無事に過去に帰ったよ。過去から飛ばされた時とさほど時間もたたずにね。そこらへんは正一達が頑張って調整したらしいしよ」

「アルコバレーノはどうなった？普通に復活した？」

「ああ、コロナもスカルもマーモンも風もヴェルデも、とりあえず全員蘇るのには成功したよ。おかげで時空も元通りらしいね」

ユニの炎に適應して増幅させた命の炎は、仮死状態となっていたアルコバレーノのを復活させる事に成功した。それにより、世界のバランスが元通りに戻り、時空間を移動するタイムトラベルの障害も無く、ツナ達は安全に過去に帰る事ができた。

ハクリからその事を聞いた時、光努は肩の荷が降りたかのように息を吐いた。

「一先ず安心かあ。ああ、そういえば桔梗とブルーベル、それにザクロはどうした？一応気絶させたけどまさかその後殺された、なんて事は無いよな？」

「安心しなよ。誰も痛みなくいけただろう」

「……………」

「問題なく行けたさ、イリスにさ」

「危うくお前の締め上げる所だったから言葉は選べ。ま、イリスなら問題ないだろ。ミルフイオーレは解体だろうし、流石にボンゴレ側に行くのもどっちも嫌だろう。新しく組織を立ち上げられても困るなら、イリスで監視の意味合いも込めて雇うのが妥当か」
「まあ灯夜は使える物は使う方だしね」。それに、暴れようとしても問題無いだろうし」
灯夜の性格を知る光努としても、ハクリの言葉に心の中で同意する。

結構な仕事人である灯夜なら、己と組織にメリツトがあるのならある程度の事情やデ

メリットを無視してもイリスに入れる様子がある。そうでなくては、どこの誰かもわからない光努を二つ返事でボスに就任させるような暴挙はあまりしないだろう。

「しかし、光努君も中々に無茶をするねえ。確かにユニの代わりを果たしても光努君なら死ぬわけじゃないけど、もしかして分かってやったのかい？」

「ん？ いや、そんなの分かるわけないだろ？」

「？ じゃあ一体どうしてユニの代わりを？ 本当に死んでいたらどうしたのさ？」

「ま、根拠があるわけじゃないけど死ぬ気は無かったのは本当だ。それに、ユニにはパンドラの匣から出るのに助けてもらったからな。ここで借りを返さないと次返す機会なさそうだし」

「白蘭倒したし十分だと思っけどねえ」

「俺の問題だ。それより、この後俺はどうなるんだ？」

「ま、ツナ達とはすこおしだけ時間は空くけど、元の時間軸には帰ってもらおうてさ。このままにここにいられると、精密機械の歯車に小石が入り込んだ感じで邪魔だと」

「ひどい言われようだな……。その少しつてどれくらいだ？」

「まー、数日くらいだつてさ」

「そうか、と光努は言葉を零す。

「ここで数年後とか言われたら果てしなく面倒な事になっていたので、対して影響の出

俺もその炎に触れたし」

トクリニセツテ

白蘭を倒すことは、7・7の一角であるマーレリングの力を無効にする事と同義となる。それは、全平行世界パラレルワールド、全時空全ての過去を遡り、引き起こされた出来事を抹消する。それは白蘭、つまりはミルフィオーレファミリーに殺された仲間や一般人達も、全てその死自体が無かつた事となる。

悪は打倒しても失つた者は帰つてこない。そんな涙で濡らす悲壮な現実をぶち壊し、白蘭の支配が起きなかつた未来へと時間を作り変える。神の御業のような出来事だが、事実それが白蘭を倒した事によつて齎される平和の実現。

光努が肩代わりしたが、確かにユニは己の命を賭けて、確実な平和を実現しようとし、それは叶つた。

さらには、アルコバレーノを復活させた“命の炎”を、アルコバレーノ全員の奥義で永久発火させる事で、過去の時代に存在するマーレリングを封印し、第二の白蘭が現れないようにしたという。

ただただ時間を重ねたわけではなく、表面状の平和でもなかつた。

紛れもない、恒久的な平和をユニは実現させたのだつた。

科学者である入江正一に言わせてみれば、因果律を操作して世界の法則を無視するよ
うなそんな事が、本当に起こりうるものかと疑問もあるが、アルコバレーノ一の頭脳と

科学力を持つ、緑色のおしやぶりのアルコバレーノであるヴェルデに言わせてみれば、今の人類に答えなど出せない。

今言えるとするれば「奇跡」もしくは「何者かの意思」が適切だと。

「ま、奇跡だろうが何者の意思だろうが、ご都合主義でも偶然でも必然でも、平和に過ごせるならそれでいいか。帰る時に皆笑えてるなら、それでな」

「ふうん、そうかい。じゃ、そろそろ帰ろうか」

「今から帰れるのか」

「ま、時間の流れとかそこらへんの問題だよ。というわけで、さあ行こうか！」

天を仰ぐと、ハクリの胸元に下がった白いおしやぶりが光を放ち、純白の白夜の炎が火山の如く噴出した。天を覆い、自分と共に光努を包み込み、その光は輝きを増す。

「さてと、久しぶりに帰るか」

その言葉を残し、空間には誰もいなくなつた。

「さあ！みんな過去に帰るよ！別れを惜しんでいたらキリが無いからね、アルコバレーノ達は過去のマーレリングを封印したら戻ってくる予定だ！」

ようやく見せた、入江正一の心の底からの明るい笑顔は、白蘭という魔物を生み出してしまった責任を果たされた今、最も輝いていた。

ここは入江が作り出した白い装置（仮称）のある場所。メローネ基地でツナ達が目的とした装置であり、この装置を解除する事によって、ツナ達は過去へと帰還する事ができる。

同時に、過去に行って時空を変える事の無いように装置の中に、言い方はあれだが保管されていた10年後のツナ達もこの未来世界へと戻ってくる。

今この場には、ツナ達過去勢の他に、復活したアルコバレーノ達やユニにラル、ディーノやフウ太にビアンキ、スパナ達。それにリルとコルとルイのイリス勢が見送りに来ていた。

それ以外、XANXUS達ヴァリアーやチーム骸に関してはそれぞれ個々に別れを済ませ、すでにこの場にはいないのだった。

「ところで、桔梗達は大丈夫かなあ。ひどい事になってなきやいいけど」

「大丈夫だってツナ。何かあっても灯夜達なら制圧できると思うし」

「いやそれ全然大丈夫じゃないよね!? ていうか元真6 甲花制圧できるってイリスどんだけなの!」

「まあマーレリングももう無いし、前みたいな人外級の戦闘力は無いからね」

コルのその言葉に、なるほどとツナの他その場のボンゴレ勢も割と納得する。

デイーノも言っていたが、いくら人間を超えたと自称する真6 甲花も、マーレリングが無ければただの人と変わらない。胸の修羅開匣の匣こそそのままだが、あれを開ける程のリングはそうそう手に入らないだろう。

「そーいや普通に立ってるけど、リルの怪我はもう大丈夫なのか? 結構な大怪我した後だしまだ安静にした方がいいんじゃないか?」

少し心配そうにする山本だが、確かにそれもしょうがないだろう。腹部の負傷なので服の下の包帯は見えないが、重症と言って差し支えない怪我。が、今のリルの立姿を見てみると、本当に怪我しているのかと若干疑う程に自然体を貫いている。

「二応ルツスーリアにもある程度回復してもらったし、休んだからね。普通にする分には問題無いよ」

柔らかく笑うリルの表情から、本当に問題無いという事も皆察した。相変わらず肌身離さずに重量のある刀を腰に差している姿から、回復力は常人を遥かに超えるらしいという事も感じるのだった。

一瞬の静寂のタイミングで、一步前へと出たユニは、白いマントを揺らし、深々と腰を折って頭を下げた。

「皆さん、本当にありがとうございます。どんな言葉を並べようとも、感謝しきれません。よくぞ、過酷な未来に打ち勝ってくれました」

「いいよ、ユニ。俺達皆で選んで望んだ戦いなんだから、ユニ一人が責任感じる事ないよ」

「そうだけ、みんな無事に過去に帰れる事だしな」

「……………はい、ありがとうございます」

「それよりユニ、本当に光努は戻ってくるん……………だよな?」

ツナの言葉に、ぴくりと反応するリルとコルだが、特に動かない。

そして一瞬の静寂が示すのは、ツナだけでなくこの場の他の面々も同様に聞きたかった事だろう。一応の説明は受けたが、過去に戻る前にもう一度、聞いておきたかった。

しかし、皆の不安は他所に、ユニは太陽のような微笑みをツナ達に向けた。

「大丈夫です。今いる時空が違うので帰りには少しの《ずれ》がありますが、数日の誤差以内で過去の世界に戻ります。白夜の炎の情報と、ハクリさんの情報を総合したので、間違いはありません」

ユニの元から持つ7・トウリニセツテや命の炎の効力と副作用、それにユニ同様に光努によって白

夜の炎を介して伝えられた情報、最後にユニがハクリから伝えられた言葉。

光努の無事は、ほほ確実に保証された。

その言葉に、一瞬だけぴりつとした空気は霧散し、皆安堵の息をついた。

「入江さんの言う通り、別れを惜しんではいつまでも過去には戻れません。本当に、ありがとうございます」

「うんーさようなら」

入江が装置の力を解除すると同時に、ツナ達は光に包み込まれた。

辛いことも多くあった。苦難も多くあった。けど、それ以上に嬉しい事も、多くの事も与えてもらった。

輝く視界の中で、この時代に感謝を送り、ツナ達は過去へと帰っていくのだった。

こうして、未来での戦いは、幕を閉じたのだった。

『エピソード・イリス』

「たっだいまあー！灯夜——！帰ったよ——！」

広大な敷地の中央に建つ建物の扉を開き、快活な元気な少女の声が響いた。

某所、イリスファミリー本拠地母屋の中に入る影は3つ。軽快に靴音を鳴らす少女の後に続いて、二人の男がその後が続いて母屋へと入った。

「リル、あまり叫ばない方がいい。また傷が開くよ」

「安心しろコル。一先ず傷は塞がったからよっぽどの無茶が無い限り大丈夫だろう。しばらく本調子の戦闘は安静だが、叫ぶだけならいくらでも叫べばいい」

若干の面倒くさそうな声色の男、ルイはてくてくと歩き、すぐそばにあつたソファにどっかりと座り込み、一息吐いた。10年前の時点では果てしなく面倒くさがりな彼が、ここまで普通に歩いて移動を重ねることができたのは、この10年の成長の賜物と言えるだろう。

一足飛びで過去から未来へ来た光努的には珍しい物ではあつたが、同じように成長を

重ねた未来に住む人間たるリル達にとっては、もはや過去の非日常は、未来の日常の一部となっているのであった。

バン！

「帰ったか、3人共」

静寂をぶち破るような音という一般人ならびくりとするような演出にも、リルとコルとルイは微動だにせず音源の方へと顔を向ける。

静謐な声音と共に扉を開いて現れたのは、灯夜だった。勝手知ったる顔だが、リル達3人は珍し気に顔を少し驚かせる。

原因は2つ。

普通ならあまりしないような足でけり飛ばして扉を開けるといいう、無駄に荒っぽい方法。

そしてもう一つは、その恰好、出で立ち。

いつも着ている黒スーツは上着を脱ぎ、白いワイシャツのみとなっているラフな恰好だが、袖を肘までまくり上げ、さらに両手に持っているのは、なみなみと水の入ったバケツにモップと箒とチリトリ。

まるで今の今まで掃除をしているような姿。そして灯夜にしては実に妙な恰好に、コルもルイも突っ込むべきかと迷っていたのだが、

「何その恰好。灯夜掃除でもしてたの？」

リルには割と関係なかった。

「見た通り、掃除だ。お前ら、俺は今からここを掃除するから、向こうの客間で休んでろ。おそらく掃除も終わってるはずだ」

有無を言わさない言葉だが、すぐに帰ってきたリル達に強制的に掃除参加をさせずにしっかりと休ませる辺り、流石と言ったところだろう。ファミリーを労わる事に關しては、中々に心得ているイリスナンバー2だった。

さっさと掃除に入りる灯夜を他所に、リル達はスムーズに扉をくぐって客間へと向かうのであった。

「そういえば灯夜はなんで掃除なんてしてるんだ？」

「そうだな、日本では年末ジャホンに掃除をする習慣があると聞いた事があるが」

「ルイ、まだ年末には2か月くらい早いよ？」

ちなみにヨーロッパでは春、中国では正月、モンゴルでは同じく年末に大掃除をするらしい。そしてアメリカに年末にも春にも大掃除の習慣は、無い！

窓から差し込む光が反射しているかのようピカピカに磨かれた廊下を眺めていると、灯夜の仕事に対しての姿勢がよく見える。最も、なんで彼が使用人がしそうな事をしているのかはとてつもない疑問ではあるのだが。

「ところで、灯夜の口ぶりだと他にも掃除してる人がいるらしいけど、今って他に誰かいたっけ？」

「確か灯夜の他だと籠コゴとラツシユに槍時。ああ、そういえばクルドと師匠もいたはずだったな」

「パパとママも！ やった！」

「二人揃ってるなんて珍しいね。客間にいるかな」

「いや、母屋広いしそうそう出会えるわけ——」

ルイの言葉が終わるよりも早く、リルは目と鼻の先に迫った客間へと飛び込んだ。

「パパ、マ………ま？」

「あ」

部屋に飛び込んだリルは、その場の時が止まったかの如く対面した人物と目を合わせる。同様に、相手も時が止まったかのように瞳を見開き、リルと対面した。

大海原を思わせるような蒼海色の長い髪を流し、同色の瞳は丸く見開き驚きに表情を染めていたのは、リル達より幾分か幼くみえる少女だった。

見た事ある顔だけになぜここに？ という疑問が浮上し、そしてその恰好にさらに疑問符。

黒を基調としたロングスカートに純白のエプロンドレスとホワイトプリムを頭に装

着した姿は、まさにザ・メイドと言うような出で立ち。数本の花を持って今まさに机の上の花瓶に入れようとしている姿は、家を守るメイドそのものだった。

そしてそのメイド姿の少女が元真6吊花という事実。

「ブ…ブルーベル!?何してるの!？」

「うにゅ!そういうあんたは確か………イリスのリル!？」

じとりとした視線を浴びつつ、リル達はテーブルに着き、後ろからするりと燕尾服の男の差し出す紅茶をこくりと飲む。

ストレートでありながら、まろやかな甘さが舌の上を溶け、喉を通る。ほんわかとした気分包ま——

「無視するなあ!!あんたら何呑気に紅茶なんか飲んでんのよお!だいたいなんでこんなところにいるのよ!」

「それはこっちのセリフだ、ブルーベル。自分の家に帰って何か言う事はあっても、何か

言われる筋合いは無いな」

「うにゆう……何よ。あんた、私の邪魔したイリスのコレね……」

「まあまあ二人とも。今は同じイリスなんだから仲良くしてよ。お姉ちゃんからのお願
い」

一瞬で険悪な雰囲気を作り出したコレとブルーベルの間に立ち笑顔を向けるリルは、
確かに姉らしかった。

リルの言葉にコレは無表情ながら気を落ち着けたのか、椅子に座り直し目の前に差し
出された紅茶をすすする。その態度にも、ブルーベルはやはり不満げに頬を膨らませるの
だった。

リルも飲み干した紅茶を机に戻し、ぎつと視線を動かして口を開く。

「それで、結局こんな所で何してるんだ？ブルーベルと……桔梗」

「おや、気づいていましたか。流石イリスに名高い科学者リルですね。感服致しました」
「お前絶対馬鹿にしてるだろ」

背後から聞こえる柔らかい口調。

リルとコレも振り返ってみれば、そこにいたのは元真6弔花の桔梗。

黒い燕尾服に身を包み、手に持ったトレーには紅茶の入ったポットを持ち、静かに壁
際にたたずんでいる姿はまさに本職の執事を彷彿とさせる佇まい。元々物腰の柔らかか

い桔梗には、中々にその姿は似合っていた。というかもしかして今執事してたりするのか？誰の!？」

「何をしているも何も、並盛で私達を黒道灯夜に引き渡したのはあなた方ではないですか。今更何を」

やれやれという風に芝居がかったような桔梗だ、その姿も様になっっている。

が、そんなことは当事者であるリルもコルもルイも分かりきっている。この質問の意図として正しいのは、なんで執事とメイド？だ。

「うにゆにゆ………これには深い深いわけがあるのよ！」

「黒道灯夜にこの屋敷の掃除の掃除の手伝いを頼まれましたね。一先ずこの格好で各自掃除を
していたところなんですよ」

「もおー！桔梗！」

意味深な雰囲気を出していたが、あっさり桔梗にばらされてブルーベルは憤慨した。そしてそのやり取りを、隣でリル達は笑って見ていた。そこでふと、コルは今更ながらに思い出して口を開いた。

「そういえば、なんで今掃除なんてしてるんだ？」

「先のイリスとミルフィオーレの戦いで、母屋含め敷地が汚れたので、戦いも終わったので心機一転、という意味合いも込めての清掃らしいですよ。ま、我々としては仕事が軽

すぎて少々物足りないですけどね」

そりや今まで大規模破壊並みの任務しかしてこなかったのだから、マフィアと全く関係の無い掃除任務には軽いと言いたくもなるだろう。しかしながら、優雅に語る桔梗と裏腹に、ブルーベルは若干青ざめているのが少し気になった。

「どうしたの？ブルーベル」

「軽い？……ふふ、桔梗もとうとうダメになっちゃったんだ」

「ブルーベル？」

「これは掃除なんかじゃないわ……ある意味拷問よ！」

「どうしたのブルーベル!？」

突然ホラー映画の一幕のように叫び声をあげるブルーベルに、リルは驚き心配になってきた。一体何があればこうなるのか、そしてよくよくと見れば、先ほどまで笑っていた桔梗も、若干顔が青ざめている。一体何が!？」

「黒道灯夜、あいつは鬼よ! 私達が人間を超越した存在である事を利用して、戦いが終わって今の今まで、私達不眠不休で掃除し続けていたのよ!」

「驚愕すべきイリスの実態。それはコールタールのように塗りつぶされたブラック企業!」

「いやいや、イリスは白夜の空もたじろぐ純白のホワイト企業だ。人間きの悪い事を言

うな」

と思つたら、ルイに反論された。

まあイリス傘下の企業を見て見れば、そこにブラックの欠片も無い事はすぐに分かるだろう。しかし、現状どろつどろのブラック任務（掃除）中のブルーベルと桔梗的には、その言葉こそまさに反論したい一言。

「現状私達の状況的にその反論を聞き入れるのは難しいですね。では、このクマの正体をどう説明するのですか！」

びしりと擬音が付きそうに、自分の目の下を指さして見て見れば、確かにうつすらとクマができています。元真6弔花のリーダー桔梗にここまで働かせる灯夜つて一体。

そして疲労がピークに差し掛かっているのか、若干桔梗のテンションと口調が壊れ始めている気がした。

「そういえば二人以外は？ ザクロとデージーと。あ、トリカブトとGHOSTはいないんだよね確か」

GHOSTは光努によつてこの世界の炎へと還され、トリカブトは本体の仮面をリルによつて両断され、この世に未練を残す暇も無く消された。この場にいる二人以外では、後はリルの言う通りザクロとデージーも一緒にここに来てはいるはず。姿が見えないので、同じように他の場所を掃除しているか、はたまたそれとも。

「ザクロは熱中症でちよつと前に倒れたわ」

「待って、僕は今何かすごくおかしい言葉が聞こえた気がする。桔梗、もう一回お願い」
「ザクロは熱中症で倒れましたよ」

「……………できれば聞き間違えであつて欲しかった」

まさかマグマ風呂で口笛を吹くザクロが、熱中症とは悪い冗談だ。どうやら掃除と言うちまちました作業が面倒そうだったので、外で木を切り倒したり瓦礫を運んだりと力仕事を重点的に行つた結果、今に至ると。

「いやあ、不眠不休に太陽の下での外作業の連続。実に悲しい事ですよ」

無駄に優雅に肩を竦める桔梗。心底心配しているのか面白おかしんでいるのか桔梗自身もテンションが変になっているか微妙な所である。

実を言うともう一つ原因がある。

彼ら元真6弔花がこのイリスの本拠地をやつてきたのは、最終決戦が終わり割とすぐ。まあ簡単な事を言えば、疲労が取れていない。

「「ああ……………」」

その言葉を聞いて、イリス組の3人は同情的な視線を向けた。

ただ疲れているだけではなく、GHOSTに炎も取られているので、その疲労は計り知れない。あれから時も経っているので多少は回復したが、全快と言われるとまた違

う。こんな所で永遠と掃除をし続けていれば当然と言えるだろう。寧ろ今この場でまだ掃除をしていた桔梗とブルーベルに対して賞賛するべきだろう。

リルは自分の持ち物のバッグの中をこそごと探り、中に入っていた日本土産のもみじ饅頭を二つ机の上の置いた。

「二人共、よかつたらこれ食べて」

「優しくしないでよ！なんか悲しくなる！でも食べるわ！ありがとう！」

「喜んで頂きましょう」

即座に食べ始めるに、中々に疲れていたのだろう。ここまでくると、命じたであろう灯夜が鬼か悪魔じゃないかと思えてくる。

「灯夜って実は鬼かなんかじゃないかな」

「リルも言うときは言うね。ま、実際はそんな生易しい物じゃないけどね」

「どういう事？」

寧ろ魔王か何かだとも言いたいのか？

そう思っていたら、客間の扉が開いて新たな乱入者。

「大変だあ！デイジーもついに眠ったあ！」

「あ、ラツシユただいま」

「ああ、お帰り。一応無事そうだな………て、そうじゃなくて」

入って来たのは、ラツシユ・ギナ。リルやコルと同じ、イリス第二戦闘部隊『シャガ』の一員である男。

いつものように迷彩柄の服装だが、今は上着を脱いで黒いシャツのみとなっており、頭にはいつもの帽子では無く柄は同じ迷彩柄のバンダナが巻かれていた。その背には、彼も掃除担当である事が分かりやすいように、ゴミの入った籠が背負われていた。そして小脇に抱えるようにして、ぐったりとしたデイジーがいる。

「おや、不死身に定評のあるデイジーもついに倒れてしまいましたか。不死身なのに倒れるとは、これ如何に？」

「やっぱり桔梗も疲れてるわね。いつになくおかしいわ」

「いやいや、お前ら一旦休めよ」

ラツシユは苦笑いしつつ、抱えていたデイジーを空いているソファに寝かせる。

不死身の肉体を持つと言われるデイジーだが、流星に不眠不休労働には叶わなかったようだった。まあ今は元真6弔花のメンバーはリングを持たず、力のほとんどが激減しているのでこれも当然と言えば当然の結果と言えるのではあるが。

「ラツシユはよく平気だね。一番最初に倒れそうなのに」

「ひどい言い草。つーかこいつらと違って普通に適度に休んでるからな。当然だ」

「え？何それ元真6弔花めっちゃこき使ってるの？灯夜やっぱり鬼？」

まさかの自分の上司の実態に、リルは若干引き始める。元々仕事中毒ワーカホリックの気が多い灯夜ではあるが、まさかここまでとは。しかし、リルの言葉にラッシュは、手をひらひらと振って軽く否定した。

「ああ、違う違う。別に灯夜は不眠不休の強制労働とかして無いから」
「え？じゃあ今のこの地獄絵図な現状何？」

働き過ぎてテンションがおかしくなった桔梗にブルーベル、熱中症になったザクロに疲れで倒れたデイジー。

嘗てのミルフィオーレファミリーを知っていたらありえない現実だ。そしてその現実を作り出したのは誰かと言えば。

「いや、そもそもブルーベルのせいだろうか」

「それってどういう事？」

「とりあえず冗談半分で灯夜が寝ずに働けって言ったたら、ブルーベルが「上等よ！そんなのちよちよいのちよいだわ！」みたいな感じで言ったからその通りにさせられてるな。灯夜は有言実行だし」

（ブルーベル……………）

（灯夜は本当に冗談半分だったのかな？）

（お腹すいたなあ）

「な、なによーその目はあー！」

一人だけ場違いな事を考えているが、三者三葉で呆れていた。原因を探ってみれば、ブルーベルの負けず嫌いな言葉が原因だと。そして他の元真6弔花もそれに引つ張られていると。

「あ、ちなみに灯夜も寝ずに働いているぞ。あれサイボークか何かじゃないか？」

ラツシユの言葉に、さらにリル達は、苦笑いするしかなかった。

元真6弔花もそうだったが、灯夜も例にもれず疲れているはず。

灯夜含めイリスファミリー第一戦闘部隊『アヤメ』の海棠槍時、獄燈籠、クルドの3人に加えて、第二戦闘部隊『シヤガ』のラツシユ。

彼らは白蘭と真6弔花が並盛を襲撃している間、ミルフィオーレA級兵士軍隊による襲撃を受け、それを迎撃していた。それはメローネ基地の数百倍の戦力と言っても過言では無い程であり、一マフィアであれば瞬く間に壊滅させられる程だろう。

が、逆に返り討ちにしてしまった。果てしなく恐ろしい。

主に前衛として敵の部隊を殲滅させた灯夜とクルドの二人が、最も恐ろしかったと言えるだろう。さながら敵は、魔王の降臨でも見たような気分だったと言われている。

そして、その戦いの後から今にかけて、元真6弔花と同様に灯夜も、休まず動き回っている。

「灯夜もたいがいだね……………」

先ほどコルが言っていた、鬼と表現する事が生易しい、というのが分かった気がする。

あそこまで行けば鬼じゃなくてサイボークがゾンビなのかもしれない。正直リルとコル、ルイなどイリス勢にとって、灯夜が疲れ果てている、という光景は中々想像できない物であった。

「なんだ、お前ら全員ここに居たのか。現場はどうだ」

ラツシユに続き、再び先ほどあった灯夜が戻って来た。相変わらずのスーツを着崩した掃除スタイルは今更だが、一体どうしたのだろうか。

「ああ、灯夜さん。デイジーがダウンしましたよ。やっぱ俺達だけじゃきついですって。一旦休むかももう少し業者雇いましょうよ」

「ていうかここに広いんだしそうしなよ」

イリスファミリーの敷地は広い。

そして戦闘被害にあったのはおおよそ全域。破壊された建物多数、燃え尽きたり切り刻まれた木々多数、森もほぼ全壊、地面も抉れ、瓦礫が辺りを埋まる。母屋だけはほぼ無傷で残ったのは、そういう戦い方をしたからである。

そしてこの全域の瓦礫や木々の撤去が、一番大変。だから外作業だったザクロやデイジーも倒れたのである。

ラッシュユの言葉に、灯夜もやれやれという風に溜息を吐く。

「しようがない、伝手はあるから一度全域改築するか。それとも一度更地にした方がいいか」

「物騒な事いうわね、この男」

「ハハン。その方がいいのでは？我々の負担も軽減する事ですし」

割と物騒な提案も、真6吊花にとつては些細な事なのだろう。確かに瓦礫などをどかす手間を考えれば、全て消し飛ばした方が早いと言えるが。

「そんな事できるの？」

「籠に頼めば時間はかからないだろう。その後で新しく建てて整備すればいい」

「すごい計画内容がざっくりしてるね」

「よし、とりあえず全員休暇だ。暫く休んでいいぞ。数日したら再会する。ていうかほぼ限界だろ？」

その言葉に桔梗とブルーベルは心の中でガッツポーズした。ブルーベルのせいではあるが、それを鵜呑みにした灯夜も灯夜である。

「さてと、それじゃあ飯にするか。食堂に來い。今頃槍時が全員分作り終わってる頃だろうからな」

「やった！ブルーベルも、早く行く」

「ちよ、待ちなさいよ！」

「それじゃあ行こうか。桔梗も。デイジーはまだ寝かせておこう」

「それがいいですね。空腹では無く寝不足が原因のようでもありますし」

「ラツシュ、ザクロはどうしてるんだ？」

「医務室で寝てるよ。ま、熱中症っていうよりこっちも寝不足だったのもあるし、少し寝たら戻ると思うぜ？」

何て事の無いやり取りをして、皆は部屋を出て食堂へと向かう。

嘗て真6弔花として、イリスにも攻め入った4人が、イリスのこの屋敷で働くとは思議な事である。それもボスである光努がその場のノリでしたのかもしれないが、イリスの皆は割とそれを受け入れた。元々ミルフィオーレからのイリスに対しての被害がそこまで大きく無かったというのもあるが、それでも誰も拒まなかった。

元真6弔花の者達にとって、イリスが新たな主となるのかはまだ分からない。

それでも、今は皆笑い、同じ場所で暮らしているのだった。

今もイリスファミリ―母屋の食堂から、楽し気な声が聞こえてくるのだった。

繋ぎの日常編

『何気ない日常の幸せ・前編』

「10代目！おはようございます！」

「よ！ツナ！はよー！」

「あ、山本に獄寺君おはよう」

何の変哲もない日常の中で、並盛中学への通学路を歩くツナの後ろから声をかけてきたのは、獄寺隼人と山本武の2人。別段仲が良いわけでは無いこの2人が（獄寺が一方的に山本を睨んでるだけだが）なぜ一緒に登校しているのか。

まあ言ってしまうえば、偶々そこで会っただけである。同じ学校の同じクラスに通っているのであるならば、同じ通学路で出会ってもおかしくない。そして前方にツナを見つけたので2人して声をかけたという事である。

「学校なんかすげー久しぶりな気がするな」

「あ、うん。確かに、未来に行ってたからね」

第三者が聞けば「大丈夫かしらこの子？」と言いたげなツナの発言だが、事実なのでしようがない。

ツナ達が未来にいた期間はおよそ1ヶ月程。

しかし十年バズーカと入江の装置の機能上ツナ達が10年後の未来で長い時間を過ごしたとしても最終的に戻ってきた時間はたったの5分後。その為、何も変わらない日常のまま、中学生のツナ達は今日も元気に登校する。

何気ない日常が、この上なく幸せに感じる。

一応言っておくと、白蘭を倒した後から帰るまでにしっかりと休養はとったので、別段戦い終わってすぐに学校、というスパルタスケジュールにはなっていない。流石の鬼の家庭教師であるリボンも、その辺りは弁えている。

「あ、そういうえば10代目！聞きましたか！」

「どうしたの？なんだか……すごく嬉しそうだね」

実にいい笑顔の獄寺の報告だが、ツナは何となく表情通りの内容とは思えない。ツナ達の中で最もツナをボンゴレ10代目として慕い最もマフィアと関りを持つが故に、その情報は時々ツナの望む日常からかけ離れたとんでもない事を言いだしたりする。仮にこの後のセリフで「ちよつと他のマフィアぶつ潰してきましたよ！」とか言われたらツナとしてはもうどうしたらいいのかわからない。

ちなみに、戦闘能力が未来で劇的に向上した事もあり、ボンゴレ内の戦力状況でツナ達は確実にトップクラスに入っている為、不可能ではない事も知っている。主に未来の知識、戦いの経験、そして未来の技術による物が、多大なアドバンテージとなっている。その証拠として、彼らの指に嵌まったり、もしくは首から下げたチェーンにかけられたりで身に着けている、肌身離さずと言われているボンゴレリングと、彼らに対応して作られたもう一つのリング。

それが、過去に帰るツナ達への贈り物として造られた『アニマルリング』。復活したアルコバレーノの一角、緑のおしやぶりのアルコバレーノである随一の天才科学者ヴェルデによって、ボンゴレ匣を指輪型へと改良してツナたちにプレゼントしてくれたという。

小型化する事による携帯性と、リング状の為に両手を使わずとも開匣できる機能性（匣型ではなくなったので開匣という言い方もおかしいが）未来で共に戦ったボックスアニマル達も嬉しそうにツナ達を見守っている。

ちなみに、その作業において、嘗て匣制作に携わっていたヴェルデ達の手伝いをしていたイリスのルイも、今回強制的に手伝わされて割と疲弊したりしたのは余談である

閑話休題

ともあれ、獄寺の言葉をなんとか予想しようとしたツナの横で、底抜けに明るい山本

の声が聞こえる。

「ああ、それってあれだろ？ 今度集団転校生が来るって話だろ！」

「集団転校生？」

「ああ。確か前に起きた地震のせいで危なそうな地域の学校の奴らが、並中に何人か転校してくるんだってよ。並盛って地震が起きにくい地域らしいって。楽しみだよな」

「その地震つてもしかして……」

ツナには、その地震の心当たりが——ある。

それは未来から帰る時の話。

未来で白蘭を倒した事により平和な未来となったが、トウリニセツテ 7・7の一角であるマーレリン

グはいまだに顕在だ。

本来、白蘭が持つ並行世界を覗く能力、厨二風に名づけるならば『パラレル・ヴィジョン平行視界(笑)』とも言えそうな能力は、マーレリングを手に入れる前からの個人の能力。それ故にマーレリングに適合したと言えるが、それはボンゴレリングの様に血統など関係なく、偶然がいくつも重なって生まれた存在。

つまる所、マーレリングに適合する者は再び現れるかもしれない。それこそ、第二第三の白蘭が現れて再び未来世界の危機に陥る可能性もある。

その為の対処手段が、この時代のマーレリングの封印。

現在は大空のアルコバレーノが率いるジツリヨネロファミリーが所有するマーレリングだが、ユニの生み出した命の炎を、アルコバレーノそれぞれの最大奥義によって永久発火させる事で、トゥリニセツテ7・の安定を崩さないままに永久的に封印するという。

そして復活したアルコバレーノ達によってその目論見は成功し、無事に世界の平和が保たれた。

ここで問題、というか少しだけ起きた出来事を補足するならば、その最大奥義の影響で少しだけ地殻に影響を与えたという所。

つまり、先程話題にした地震の原因が、それである。

「オレ達が未来に行ったから起きた事だし、なんとなく申し訳ない気がするな」

「つつても、別にそれで災害起きたとかってわけじゃねーしよ、気にしてもしょうがねーって。今は、どんな奴らが転校して来るか楽しもーぜ」

「流石山本。……うん、そうだねー！」

能天気とも言える底抜けの明るさが、山本の美德。

裏表の無いその笑顔に、ツナも表情を明るくした。

「——て、そうじゃねえ！転校生なんか知るか！」

「ん？違ったか？」

「全然違えよ！そんな訳の分からない奴らと10代目に何の関係あるんだよ！」

「ええ!? 違うの!?!」

意外と、というか通常運転で顔も知らな転校生など知らんとばかりに山本に突つかかる獄寺。そして獄寺の内容が全く違う事に驚くツナ。

しかし冷静に考えてみれば、転校生が来るという内容で喜ぶはずも無いだろう。ならば彼は一体何に対して嬉しそうにしていたのか。

「それで、結局どうしたの? 獄寺君」

「はい10代目! 実はシヤマルの奴が並中クビになるらしいですよ!」

(ええええ!? それがいい事!?! でもめっちゃくちや嬉しそうだ! というか獄寺君すっげーいい笑顔なんですけど!?!)

D r. シヤマルとは、並盛中学の養護教師であり、一流の闇医者でもあり、元獄寺家の専^{ドクター}属医でもあり、獄寺の(一時)家庭教師でもあり、女たらしのナンパ好きであり、66の不治の病の病原菌を持ち蚊を媒介に相手を殺害する殺し屋『トライデント・シヤマル』の異名を持つ。

ヴァリアーとの戦いでは獄寺に修行をつけて鍛えてくれたが、基本女しか診察しないと堂々と公言する程のナンパ野郎であり、某国の妃に手を出して国際指名手配をされて日本に逃げてきたという噂を持つ男。

まあ色々と肩書はあるが、結局ツナ達からみればダメな大人の見本である。

とはいえ、獄寺の言葉は色々省略し過ぎで自分の願望も入っている為真実ではない。

「あ、皆おはよう」

「あんたら、相変わらず仲いいね」

「京子ちゃん、黒川！おはよう」

いつの間にか教室に着いたツナ達に声をかけたのは、同級生の笹川京子と黒川花。

急に2人に、特に秘かな思いを寄せる京子に声をかけられた事に思わずどぎまぎしてしまうツナだが、未来での出来事を共に経験した京子が、今柔らかく笑っている事に、内心では安堵していた。

「獄寺君と山本君もおはよう。何の話をしたの？」

「おう笹川。実はシャマル先生が並中やめるじゃねーかって獄寺がさ」

「え？私しばらく長期出張するって聞いたけど」

「そうなのか？」

「あー、私もその話聞いたね。それで代わりに先生が来てるらしいわよ」

京子と黒川の情報に間違いが無ければ、別にシャマルはクビになるわけでは無いらしい。

ただの仕事の関係でしばらく並盛から離れる、という事らしい。

どうやら獄寺は新しい養護教諭が来るという情報のみで先の判断を下したらしい。まあ通常養護教諭を何人も雇う事も無いと思うので、しようがないと言えばしようがないが。

ついでに言えばシャマルの勤務態度もまともと言い難いので、当然と言えば当然か。

とはいえ、マフィア関係者がそこそこ跋扈する並中な為、マフィア関係者であるシャマルは適任と言えば適任。実際過去、柿本千種と獄寺隼人の戦いでは毒を喰らった獄寺の治療に貢献（シャマル曰く今回だけの例外で基本男性は診ない）した。逆に言えば学校内でマフィア関連の事件が勃発した時に、ただの養護教諭で果たして対応できるかどうか。

「それで、新しい保険の先生ってどんな人だ？」

「私はまだ見た事無いけど、花ちゃんは？」

「あ、私は見た事ある。女の人でなかなか美人の先生だったね」

キーンコーンカーンコーン。

予鈴が鳴った為、担任が教室に入りツナ達は席に戻る。

頬杖を突きつつ、ツナは窓の外に広がる青い大空を、ぼんやりと眺める。

いつもの日常、つい数日前まで未来の並盛で激闘を繰り広げていたのが嘘の様に、目の前に広がるこの光景は紛れもないいつもの日常。

しかし、まだ元の日常に少しだけ足りないピースが存在する事をツナは知っている。それは今は話題にしていらないだけで、獄寺や山本や京子も同様だった。絶対に大丈夫、という信頼できる言葉はもらっているが、それはそれとして心配な物は心配だった。

ちらりと視線を向かわせたのは、教室の中で唯一誰も座る者がいない空白の机。形式上学校には、家の用事の為海外に行っているとされていいる人物。

自分達と同じように、共に未来で戦ったクラスメートの事を考えながら、ツナは再び空を見上げる。

(光努……………いつ頃帰ってくるかなあ)

「んで、こいつあ一体どういう事だよ。なんで、中華圏が行動範囲のオメーがこんな所に

いやがんだよ。俺は今からかわいこちゃん探すのに忙しいんだよ。とつとどきな」

「はっはっは！相も変わらず節操の無い奴だな。そう邪険にするな、シヤマルよ。儂も無駄話をしに来たのではない。お主に用があるからわざわざここへと来たんだ」

北アメリカのとある街で、男が2人会話を交わしていた。

しかし片や不機嫌そうに、片や豪快に笑いご機嫌に。正反対に会話する二人の距離は、およそ3メートル程。互いに仕掛けるには微妙な距離感だが、不機嫌そうな男性シヤマルは白衣のポケットに手をつ突っ込んだまま、無然と溜息を吐く。

「やだねー。これだから人気者は辛いぜ。つーか、お前今回はどこに雇われて来たんだよ。いい加減俺狙うのは諦めろって」

「むむう？シヤマルよ、お主何か勘違いしておらんか？今回の儂は、ただの代理人として来ただけだ」

「何？」

心外だ、とばかりに大げさに肩を竦める人物は、おおよそ一般人とは言い難い風体をしていて。

2メートルはあろう巨漢に加え、ライオンの様な逆立つ黒髪と顎髭に猛獣の様な鋭い瞳。しかしその右目は黒い眼帯に覆われている。さらにアメリカでは珍しい漢服は少々大きめらしくダボつとしているが、それでも筋骨隆々としたその身は傍目にも分か

り、通常の倍以上にその人物を大きく見せている。

男の名は、秦捧日。シンホウジツ

中国マフィアの間を用心棒として渡り歩く大男であり、実は過去に中華圏に入ったシャマルを何度か狙った事もあったりする。だいたいがシャマルに恨みのあるマフィアだったり女がらみだったりどこかからの依頼で、捧日《ホウジツ》本人には全くシャマル自身に恨みは無いが。

そんな男が、わざわざ遠いアメリカの地にてシャマルを待ち構えて、さらには代理人ときた。一体何事かと疑るのは当然とも言えるだろう。

「まあこんな所で立ち話もなんだ。適当な店で茶にでもするか？ 儂が奢るぞ」

「野郎と連れ立ってカフェなんて、おぞましい事言うな。話をするならその辺りの公園で充分だ、おら行くぞ。後ろのオメーも来るんだろ」

「ああ、やはり気がついていましたか。これは、ご挨拶もせず失礼」

シャマルの言葉に、捧日の背後からゆらりと現れたのは、瘦躯の男。

見た目上は特に不自然な点の見当たらない清潔な恰好であり、丸眼鏡とその奥の細い瞳が印象的だが、それ以外に全く気配を出していない。革の手袋を嵌めた手をぶらぶらとさせているが、何かあればすぐに対処する術を隠し持っている事だろう。

男の名は、アラン・バロー。

フランスのジュールファミリーに属しており、『死神アラン』の異名を持つ暗殺者でもある。主武器は、その身のあちこちに仕込んだナイフを中心とした暗器の数々と、その暗殺者より抜きんできた気配遮断の能力。

今回は戦闘目的でない為大して気配を隠したわけでは無いが、それでも一般人やその辺りのマフィア程度では一切気づく事ができない技術。故に、あつさりと気づいてきたシャマルに内心称賛していた。

「ジュールの『死神』か。捧日といい………珍しい組み合わせだな。一体、俺に何の用だっただってんだ？」

フランスのマフィアの暗殺者と、中国の用心棒。全く違う国の2人が、太平洋と大西洋を横断してこのアメリカの地にて偶然出会う………なんて事があるわけがない。

アランも同様に、シャマルに用事があって来たのはもはや分かりきっていた。

その為単刀直入にとばかりに、アランは懐から取り出した物をシャマルに見せる。

「シャマルさんにお願いたしたいのは、治療です。この女性の病を是非治して下さい」

1人の女性の写真を取り出して、アランはそう切り出した

『何気ない日常の幸せ・後編』

シンホウジツ
秦捧日とアラン・バロー。

それぞれ中国とフランスを活動拠点に置き、基本他国にあまり出ないこの2人が、どちらとも接していない遠い海を挟んだアメリカの地にて連れ立っている。

本来なら接点も無く知り合いでも無いこの2人、どう考えても共通点など存在しない。

まあそれはあくまでこの時代での話だが。

2人は、未来の10年後において共に戦った仲である。

イリス、ボンゴレ、ミルフィオーレの命運をかけた戦い『チヨイス』において、敵側であるミルフィオーレファミリー『チームガロファール』として共にイリス、ボンゴレと戦ったチームメイト。

龍、死神、緑鬼。

白蘭がつけた適当なコードネームの3人の戦士であり、龍は捧日、死神はアラン。階

級はミルファイオーレで言う所の元々や入江正一の所属していた旧6弔花と同等のA級兵士^{ソルジャー}。とはいえ元々属するファミリーがミルファイオーレに吸収されたりなんなりで、白蘭の命でなし崩し的にチョイスに参加した為、別段イリスとボンゴレに恨みがあるとかではない。

最終的にはチョイスの中で、光努とリルのイリス戦士2人とぶつかり敗北した。

そしてその後、敗北した2人をチョイスの舞台である雷フィールドに置き去りにしたわけではなく、イリスファミリーに持ち帰られた。足止め役に残った黒道灯夜がハクリと共に超炎リング転送装置でイリスファミリーに帰還した際に回収されており、チョイス終了後にイリスファミリー本拠地にて灯夜が持つていた棺桶の中身が実はそうだったりする（未来編VI『最終決戦』第150話『二つ目の誤算』参照）。

そして実際にツナ達のように、未来の人物と入れ替わりに本人がやって来た者達以外にも、関係者には未来の記憶は伝わっている。未来で共に戦ったボンゴレの独立暗殺部隊ヴァリアアの面々や、キャバツローネファミリーのディーノ。ミルファイオーレで言えば入江やスパナ、他にもイリスの『アヤメ』『シャガ』の者達や灯夜やルイなどなど、他にも関係者は多いが、実際に未来に来ていない者達にも未来での戦いの記憶は伝わっている。

そしてそれは、捧日とアランの2人にも言える事だった。

過去——というより現在では接点の無い2人が、この場で一緒にいる原因がソレだ。

今現在接点が無いのに未来で先に接点を持つてから現在で約束をするというのは、中々に奇妙な話だ。しかし過去改変とは違い未来の可能性の変更の話なので、よくあるタイムパラドックスには抵触しないかもしれない。

この2人が一緒にいる原因はそれとして、今回シヤマルの元へとやってきたのは当然理由がある。アランが提示した、ある女性の治療。

それは10年後の未来における2人の心残りであり、依頼でもあったから。

依頼人は、白神光努。

イリスファアミリー2代目ボスによる依頼であり、ボンゴレも一枚噛んでいるこの話。最もその依頼自体は、未来にいる時に聞いた話だった。

「よし！任せとけ！」

意外にも、アランの言葉に即答して見せたシャマルを、あまりにもあつさりと快諾した事で逆に2人は訝しげる。シャマルという人物を知っているだけに、捧日辺りは眉を顰めるが、その表情にシャマルは肩を竦める。

「んだよ、せつかく人がオツケーしてるのにその顔は。なんか文句でもあんのか？」

「いや、大いに結構だが、お主そういう奴だったか？儂ら、というより男からの依頼をあつさり引き受けるなんて。面倒事は嫌いだろう？」

「何言っている。あまねく女性の治療は俺の仕事だぜ？相手が美人なら断る方が逆に失礼ってモンじゃねーか。当然の事だろ」

「ああ、お主はそういう奴だったな。納得したぞ」

背後に薔薇をばらまきながら、うっとりのアランの渡した写真の女性を眺めるシャマルを見ながら、捧日はやや半眼で溜息を吐く。隣のアランも、なんとなくやれやれと言いたげな雰囲気を発していたが、事が思いのほかあつさりと進んだので空気を読んで突っ込む事をやめた。

「で、誰なんだこの女性は？歳は？スリーサイズは？」

「依頼を受けてから最初の質問がそれってどうなんだ？言っておくがこの女性は既婚者で息子もおるのだぞ？」

「なるほど……アリカ」

「はいはい、面倒なのでさっさと依頼について話ちやいますね。とはいえ、この女性の治療をお願いしたいだけなので、多く話す事も無いのですけどね。問題なのは不治の病だという事。シャマルさんの担当ですよね？」

「そいつあいいが、病名は？」

「確か『五十三万歩病』ですね」

「なんだか戦闘力が高そうな病名だな。シャマルよ、これはどういう病だ？」

「あー、確かに珍しい病だな」

シャマルは病が吸着しやすい体質であり、その身には相反する333対の病、合計666の病を常に発症している。それでもシャマルが平然としているのは、病と病が症状を打ち消しあっているからに他ならない。例えば「体温を上げる病気」と「体温を下げる病気」を同時に発症する事で、結果的に体温に変化が起きない、といった風に。

その病はバラエティに富んでおり、過去にツナが死ぬ気弾の使い過ぎで発症した、発症者の恥を語りながら最終的に死に至るドクロの痣を大量に浮かべる『ドクロ病』など最もたる例だろう。ちなみにその時は色々あってシャマルが特別に『エンジェル病』をツナに打ち込んで相殺させて治療したらしい。

シャマルの治療法は、己の内の病気を蚊を媒介にして相手に注入するという物。

それによつて治療とは少々異なるが、病気を病気で相殺させる事ができる。その反面毒薬よりも凶悪な病を健康体の相手に発症させて殺害する殺し屋としての側面を持っている。

とはいえ、不治の病という分野において、シヤマル以上の適任はおそらく存在しないだろう。それこそ、並行世界の知識を持つて治療法を探す未来の白蘭なら対抗できるか、と言つた所だろうから。

さて、シヤマルの説明も済んだ事で、問題の『五十三万歩病』とは何か。

治療法が確立されていない不治の病の一種であり、この病気は「歩く」という行為によつて病状が進行する病。

名前の通り、発症してから五十三万歩歩く事で死亡するという、特異な不治の病だ。

女性の一日の平均歩数はおよそ6000歩。その歩数で毎日を過ごしたとしたら、約3カ月程で死に至る恐ろしい病だが、対処療法としては「歩かない」という手段がある。

極端な話、一生をベッドの上で過ごし歩かなければ、病によつて死ぬ事は無いだろう。ただし、この病気は最終結果が死というだけで、その過程で問題が発生する事は一切ない。本当に発症してから五十三万歩目で、何の前触れも無く死ぬのだ。故に、死なないう様にベッドで生活するという事は、健康体で一生をベッドで過ごす事になるので、おそ

らく精神的にやばい事になるからあまりお勧めはしない。

そもそも、発症者は自分が不治の病という自覚すら無いだろう。

『五十三万歩秒』ねえ。ちなみにこの子って今何歳？」

「名前はレイチエル・ミーガン。歳は27。専業主婦で趣味は散歩と御菓子作りだそうですよ」

「ドンピシャじゃねえか……。27つて事は、単純に80まで生きるにや一日27歩以上は歩けないつて事か。やれやれだ」

「それで、お主はこの病は治せるのか？」

「はっ、愚問だな。俺もこの病は持っている。対となる病気を打ち込めば、すぐに治るさ」

「おお、流石だな」

伊達や酔狂で闇医者をやっていないく、殺し屋をやっていない。性格に難はあるが、その実力は嘗て2代前のヴァリアーにスカウトされた程に本物だ。だからこそ、2人もシヤマルを頼ってきたのだ。

しかし、シヤマルとしては、この為だけに2人が来たとも考えづらい。

「別に治療は構わないが、お前ら本当にその為だけに来たのか？ だいたい、俺がここにいらつて誰から聞いたんだ？ 知つてたから、わざわざお前らこんな所にいるんだろうが」

ジロリと、やや威圧的に睨みつけるシャマル。

偶々シャマルを探してアメリカに來たら見つけた、なんてのは都合が良すぎる。その為にはアメリカなんて専門外の捧日とアランがいるのもおかしすぎる。

故に、誰かにシャマルの居場所を聞いた、というのが最もありそうな話だ。実際、それは正解なのだが。

「言つただらう、儂らはただの代理人だ。この依頼の大本はイリスとボンゴレだ。ほれ、これが9代目の勅命だ。それに、イリスはお前の方に元々連絡があつたのでは？」

「……………そいつあ、死炎印か。なるほどな、お前らグルだつたのか」

「否定はしませんけど、グルとは人間きが悪いですね。別に悪巧みをしているわけでは無いのですから」

シャマルからしたら、今回のアメリカ行きも唐突な話だつた。いつも通り並中の保健室で適当に過ごしていたら、イリスファミリーの1人から依頼を受けてこの地にやつて來た。省略すれば詳しい話は向こうで、という事でまあ色々揉めたが結局來た。そして捧日達に会つてうすうす分かつてはいたが、捧日の取り出した死炎印の手紙を見て納得した。

死炎印は、ボンゴレファミリーの使用する証明であり、個々で異なる死ぬ気の炎を手紙に宿し、本人の証明を行う。そして今日の前に出された死炎印は、間違いなくボンゴ

レ区世^{レノ}の物だ。

2つのファミリーによる依頼。

それだけ、重要な事なのだろう。

シャマルとしては治療相手が既婚だが美人（ここ重要）だったので別に問題は無いが、なんだか嵌められた気がしてやや釈然としない面持ちだったりする。

「はあ、まあいいか。それで、お前らはこの後どうするんだ？」

「我々も少しやる事があるんですよ。シャマルさんは、未来での顛末は幾分か聞いてますね？」

「ああ。眉唾っぽいけど、ざっくりと聞いてはいるよ。ボンゴレもイリスも冗談言わねー様な奴らが言ってたからな」

「なら話が早い。実はこの女性レイチェルの旦那であるライリー・ミーガンが、およそ数ヶ月後に亡くなります。その原因は、この近辺を根城にするアメリカンマフィアの抗争による巻き添えです」

「あー、確かにこの辺りはトラッド^{シックス}6もまだ手を伸ばして無い地域だからな。そういう事もあるか」

トラッド6とは半年で北米の3分の1を手中に収めた新進気鋭のマフィアであり、ボンゴレファミリーとも友好を結んでいる。そんな新進気鋭のマフィアがまだ手を伸ば

していない範囲で、アメリカにもいくつかマフィア団体が存在するが、その中でも過激派とも呼べるようなマフィアがいくつかわかり、その抗争に巻き込まれる形で件の女性の旦那が死亡するらしい。

今から数か月後の話なのに確定する様なその話方に、シャマルは違和感を覚えない。それは先の未来の話で、聞いていたから。

しかしわからないのは、なぜこの家族をここまで助けようとしているのか。

「ではシャマルよ、後は頼むぞ。俺らはこれからこの辺りのアメリカンマフィアを潰してくるからな」

「タイムリングは任せますが、早めの治療を希望します。治療が完了したらご報告してください。その間私も過激派のボスを暗殺してきますので」

「笑顔でさらつとんでもない事言いやがるなお前ら。しかしわかんねーな。なんでそうまでしてこの家族を救おうとする。資料を見ても、なんの変哲も無い一般人だぞ？」

イリスからもボンゴレからも、その調査結果は総じて一般人。

ツナの様には実はマフィアのボス候補だった、という様な奇想天外な人生など用意されているわけでも無く、強いて言えばこの後死ぬ予定が入っているくらいか。それでも十分だが、別段同様の事例で死ぬ者は、言ってしまうと珍しくない。

その為、なぜこの2人をわざわざ助ける必要があるのか、という事だ。その為にシャ

マルをわざわざ呼び、わざわざ他のマフィアを潰しに行くなど。

「はは、なあに。ただの約束だそうさ。それに若人の心配は当然だし、それに、儂らはイリスと白神光努に借りがあるからだ。なあ死神」

「ええ、借りた物は返さなくては。それに、これは私達の心残り、虚ろなチームメイトに何も出来なかつた、もつと言えば我儘でもありますから。ねえ龍」

「へいへい、仲良い事で。ま、詳しい話はまた今度でいいわ。それじゃ、おれはちよつと美人のねーちゃんに声かけて来るわ。多少旦那と子供がいたつて、少し世間話するくらい問題ないだろうからな。ついでに、治療でもしてくるさ」

そう言つて、ひらひらと手を振つたシヤマルの姿を見送つて、捧日とアランは楽し気に笑う。

その後、いくつかのマフィアが壊滅され、都市伝説の様に一時的に“龍”と“死神”の名が響き渡つたのだった。

アメリカ在住のしがない技術者であるライリー・ミーガンは、軽く残業を終えて帰宅した。何の変哲も無い日常だが、彼にとってはそれがこの上無く幸せだった。

「あら、お帰りなさいあなた。今日は早いのね」

迎えてくれたのは、彼の妻であるレイチエル・ミーガン。柔らかな金髪のウェーブと、美しい翠玉エメラルドの瞳が特徴的な女性であり、夕餉の準備を終えいつもより早い帰宅の夫に顔を綻ばせて出迎えた。

「ただいまレイチエル。思ったよりも早く仕事が片付いてね。それに、今日は近所で警察が騒いでたから、早く帰る事にしたんだ」

「事件かしら?」

「もう収束していたみたいだし、大丈夫だよ。なんだか、どこかのギャングが壊滅したとか」

「物騒ねえ」

彼は知らない。

その壊滅したギャングが、自らの生を脅かす存在だった事を。平凡な生活はわずかな時を経て崩れ落ちる可能性があった事。しかしその可能性はとある龍と死神によつて潰えた為、彼は眞実を知る事は無いだろう。

「ん？レイチエル腕が少し赤くなつてな。どうしたんだ？」

「ああ、これ？買い物してゐる時にちよつと蚊に刺されたみたいで。でも、大した事は無さそうよ」

「それならいいが」

「ええ、あとその時知らない男の人にお茶に誘われたくらいね」

「その男の特徴は？ちよつと警官ポビを呼んで警戒してもらうか。後この英国ブラウンス火打石銃をどこかに忍ばせて——」

「別に変質者じゃないからそこまでしなくていいわよ。きちんとお断りしたし、あとそれマスケット銃だから忍ばせられないわ」

ていうか英国イギリスって銃規制日本より厳しい国じゃなかったっけ？色んな意味で良く持つてたわね、などと思つたが、ライリーの事だから資格持つていたり抜かりは無いだろうと言う信頼から、特にその辺りをレイチエルが追及する事は無かつた。

「しかし秋も半ばなのに蚊がいるとはね。あまり袖の短い服は気をつけなさい。日本ジャパンか

ら蚊取り線香を取り寄せようか？」

「流石にそこまでしなくても大丈夫よ、ありがとうね」

淡々と意見を出しているが内心おろおろしている夫に、やんわり嗜めるレイチェル。柔らかな彼女の言葉に、ライリーは安堵しつつ、うろたえた自分が少しだけ恥ずかしくなってくる。

彼女は知らない。

自分が普通に生活していたとしたら、1年もたたずに不治の病によって死亡していたであろう事を。ただ歩くだけで死ぬ病が、実在したという事を。そして蚊に刺された事が、彼女の不治の病を相殺して彼女を生かした事を、彼女は知る事は無いだろう。

「そういえばあの子はもう寝てるのかい？」

「あら、すぐに来ると思うわよ。——ほら、噂をすれば」

どたどたと、軽い子供の足音が響き扉が開く。

弾丸の如く飛び出してきた小さな影を、ライリーは全身で受け止めた。

「父さん！お帰りなさい！」

眩しいばかりの笑顔を振りまき、ライリーに抱き着いた小さな影は、10にも満たな

い齡の彼の一人息子。

父に似た銀髪は子供特有の柔らかな髪質を、そしてその瞳は、母親レイチエルと同じ暖かな翠玉エメラルドの瞳だった。

「ああ、ただいま。いい子にしていたかい、ロルフ」

「うん！」

息子の柔らかな髪を撫でながら、ライリーは表情を綻ばせる。

妻と息子に囲まれた、温かい家庭。確かに、幸せはここにあった。

少年は知らない。

遠く無い未来、己の両親が亡くなっていた可能性があつた事を。

天涯孤独でこの広大な地を一人数年彷徨う結果になつていただろう事を。

ただ何も考えず絶望にその身を沈めた事を。

世界に希望を見いだせなかつた事を。

いつそ消えてしまいたい、そう思い続けた事を。

少年は知らない。

遠い10年後の未来、世界の命運をかけた戦いに、己が参戦する事を。

たった1人を道連れにする鬼として、緑色の面をかぶる事になる事を。その1人によって自分が救われる事を。

しかし、その未来は訪れる事は無い。

適応の炎をその身に宿した白い少年は、すぐにこの世界に帰れない己の代わりに龍と死神を遣わした。借りを返すべく2人が全霊を当たった事により、確実に未来は変わった。

遠い未来に己の存在を否定し続ける少年は、もういない。

少年も父親も母親も、彼らを不幸にする可能性は、もう摘み取られた。

今後10年20年を超えて、己の生きる人生の幸せを、噛み締める事だろう。

嘗て自分達の人生が絶望に潰される未来が存在した事を、彼らは知らない。

知る事も無い。知らなくても良い。

そうあれと、白い少年は決めたから。

何も知らずとも生きる何気ない無い日常とは、ただ幸せな物だから。

『プレイ・ウィズ・ヴァリアー・シューター・前編』

「う”お”おい!!ようやく集まったかあ、てめえら!!」

騒々しい程の叫び声は、彼らの部下達なら思わず竦み上がる程に威圧感満載だった。しかし幹部達にとって、その叫び声は実に日常的な光景。故に、この場の誰もが特に怯える事無く、目の前の夕食に舌鼓を打っていた。

ここは、ボンゴレの独立暗殺部隊ヴァリアーアジト。

そして先程の叫び声は、その作戦隊長である長い銀髪が特徴的なボンゴレ最強格の剣士、スベルビS・スクアアローの声だった。

「ししし。スクアアロー、いきなり緊急会議なんてどうしたんだよ。旅行の支度はまだだぜ」

「あら、それとは別件らしいわよ。なんでも、最近調べ事してその結果が届いたとか何とかってね」

金髪の前髪で目元を隠し、楽し気に歯を出して笑う少年は、ベルフェゴール。某国の

王子の証の王冠を頭に寄せ、若干16歳ながら卓越した殺しの才を持った少年幹部。自前のオリジナルナイフ術が主な戦闘手段。

そして隣で女性口調で喋る男性はルッスーリア。超人的な格闘能力を持ったムエタイ使いであり、モヒカンの様な髪型と昼夜問わずに着用するサングラスが特徴。割と家庭的でもありヴァリアー内では姐さんと呼ばれていたりする。

「てめえーらを今回集めたのは他でもねえ。V A R I A の新しい勧募候補生をスカウトする為だあ」

「幹部候補生？」

「そうだあ。人選は既に済んでいる。お前達も未来でのミルフィオーレとの戦いの記憶を持つているはずだあ」

「む、あの夢か」

スクアーロの言葉に反応したのは、レヴィ・ア・タン。

任務に命を懸け、ボスからよくやったと言われたいが為に頑張るボス崇拜の少々おかしな男。幹部内で最も鈍重とも言われ、必殺技は電気傘パラボラによる雷攻撃『レヴィ・ボルタ』！

それはそれとして、スクアーロの言う幹部候補生と未来の記憶は関係する。

何せ、その未来の記憶を元に現在の幹部を探したというのだから。

「一人目は、あの10年後の未来で新米幹部だった、フランって術士だ」
フラン。

10年後の未来において、ヴァリアーの霧の幹部を務めていた少年。六道骸の弟子でもあり、個々の私の強いヴァリアーの中でも終始マイペースな性格だが、その実力は本物。マフィア界の掟の番人でもある復讐者^{ヴァインディチェ}を幻覚で欺き骸を出獄させた手並みは間違はなく術士として超一流に位置する。

しかし、問題はやはりその性格だからか、フランの名前を聞いただけでベル、ルッスーリア、レヴィの3人は思わず食べていた料理を吹き出してしまふ。

「フランって、10年後の未来で俺の事を『墮王子』とか『王子(仮)』とか言いやがったあのクソガエル……………?」

「そうだあ」

「10年後の私に『変態クジャクオカマ』って言い放った子かしら」

「そうだあ」

「レヴィの事をキモイエロイヒゲハナゲ死ねって言ってたあのカエルかよ」

「そこまで言つとらん!」

まあ今のレヴィの悪口はベルの捏造だが、それに近い別の言葉で随分と貶していたのは事実。実際には『情けない』『見掛け倒し』『変態雷親父』とか言っていた。ボン

ゴレ最強の殺し屋集団であるヴァリアー幹部全員にそんな態度だった為、相当マイペースと言える。

ちなみに、この間終始「？」を浮かべていたマーモン。

藍色のおしやぶりを持つ虹アルコバレーンの赤ん坊の1人であり、ヴァリアー霧の幹部。10年後の未来においてはミルフィオーレによってアルコバレーノはユニを除いて全員死んでいた為、いまいち話題のフランの事が理解できていないが、当然の事だった。

とはいえ、スクアーロが言いたいの、10年後の未来の戦いの記録を、記憶と経験としてスクアーロ達同様に、フランも持っているという事。

「つまり、今の奴を入隊させても即戦力となる。むしろVAARIAちに入れない手はねえ」

「隊長心広いなー。あのカエルが、アホのロン毛隊長」って言ってたの許すんだ」

「嘘をつけえ！それはてめえーらの思ってる事だろお!!」

「うむ、言ってたぞ」

「私も聞いた事あるわよ♪」

「るせえ！」

そんな些細な口喧嘩から、拳と刃を取り出す喧嘩に発展する。ヴァリアーの中では、実によくある光景だった。そしてだいたいその中で最も鈍重なレヴィが大げがをしただりするのが常である。

しかし、その中でも未来のフランを唯一知らないマーモンはその光景に冷静に辟易していたが、スクアアロの言葉に「つだけ引っかけかりを覚えたので口を出す事にした。」

「スクアアロ、その幹部候補生さつき、1人目」って言った？」

マーモンの言葉に、荒れ狂っていたヴァリアー幹部がピタリと停止した。

「1人目？………つー事は、もしかして2人目って——」

嫌な予感がする、そういわんばかりの苦笑いを浮かべるベルの言葉。しかしそれもしようがないだろう。彼は、フランとはまた別ベクトルで色々と厄介であったから。

「そうだあ。幹部候補は2人。1人はフランでもう1人は、同じく新米幹部だった狙撃手、蔵実考魔だあ」

「げっ、マジかよ………」

スクアアロの言葉に、今度はベルが苦言を漏らす。

蔵実考魔とは、10年後の未来において雲の幹部を務める狙撃手であり銃士^{ガンマン}。マイペースなヴァリアー幹部の中でもマイペースな人物ではあるが、最も摩擦なく適当にしながら生活する冷静な男。冷静でもあり冷徹でもあるので、フランとは別ベクトルだが暴言を普通に吐いたりもする。

流石にフランと比べればそこまでめちやくちやではないが、唯一ベルとはそれなりに険悪な関係だ。

主に同じ年という事と、銃とナイフという相いれない武器を使用しているからなのか。

その為、この中でベルのみが唯一苦い表情をする。

「考ちゃんねえ、私は別にいいと思うわよ。あの子一番まともな気がするしね」

「好きにするといい」

「レヴィも心広いな。普通にフランと一緒に暴言吐いてたぜ。特に捨て石頭張れって感じだし」

「嘘つけえ！」

「あー、確かにそんな感じの事言ってたわねえ。あの子言う時は普通に辛辣だしねえ」

10年後の未来の記憶を思い出しながら、ルツスーリアもやや肩を竦めるのだった。

「それで、あいつらどこにいんの？すぐにスカウト行くわけ？」

「あいにくフランは今調査中だが、考魔については調べがついている。というより、向こうから居場所知らせてきやがったんだあ」

「どういう事？」

未来の記憶を経てから、スクアーロはすぐにフランと考魔の2人の居場所を探し元々スカウトするつもりだった。しかしながら、まだ未来から戻って数日の為、流星にそう簡単には見つからない。

しかし、向こうからコンタクトがあったなら話は別だ。

「考魔本人じゃねえが、奴の関係者からV A R I Aうに直通で連絡があった。場所が場所だけに面倒だがあ、明日向かうぞ」

「……………それで、一体あいつどこにいんの？」

なんとなくだが、スクアーロの表情が微妙に疲れた感じが伝わる気がする。連絡があった者が問題なのか、これから行く場所が問題なのか。

そしてスクアーロから紡がれた言葉に、その場の者は一様に驚きを隠せなかった。

「奴の居場所は、イリスファミリー本拠地だあ」

コロン。

机の上に転がされたのは、3つの匣。

シンプルなデザインでどれも模様バラツキがあるが、特徴的なのは2つの匣に刻ま

れたイリスの紋章と一つの匣に刻まれたミルフィオーレの紋章。この時代に存在しないミルフィオーレの紋章だが、それは制作者が記憶だよりに区別の為に作った物。

本来この時代に匣兵器は存在しない。

性格に言えば、既にこの時代から匣の試作品は存在した為、同じ様な形の物は確かに存在する。しかし、目の前に存在するこの3つの匣は、匣兵器ではない。

3つの匣には、それぞれ鎖を巻き付け封印が施してある。無暗に開かない様に、誰も開かない様に。その為に、わざわざこの形で作り出した。

「これが記憶の匣か。注文通りとはいえ、よくできたな」

「ま、未来の技術と知識、後は色々とサポートがあつたから、そう難しくは無かつたよ。あとはいつ開くか、もしくは開かずに永久封印するかな。ああ、疲れた。もうしばらく休んでもいいか？」

「……………まあここ最近はいつても以上に働いたから、俺としては別に構わない。例のアニマルリング関連でも引つ張りまわされてたらしいからな」

「ヴェルデが以外と人使い荒いんだ。まあ、楽しかつたらいいけどな」

ソファで寝そべてだらけきつた姿をする男の名はルイ。

イリスファミリーの技術主任であり、若干18歳という年齢でありながらその技術力化学力はトップクラスを誇る。未来世界において、3人の匣開発の天才の手伝いをして

いた事もあり、その技術力は現在でも相当高かったが、未来の知識を経てさらに磨きがかかった。

問題は、技術力と正対な体力の無さだろうか。しかし未来の知識と経験を経てから多少トレーニングをしてマシになったらいい。まあそれでも、1キロ完走する事もままならないだろうけど。

後ろで一つにまとめた長い金髪を垂らしながら、一仕事終わったばかりのルイは全力でだらけきっていた。そしてその事に、苦言を呈す者はいない。

「まあしばらく休め。最低でも光努が返ってくるまではしばし休暇と思え」

そう言っつてルイを労わる男は、黒道灯夜。

自他共に認める、イリスファミリーボス代理のナンバー2。

イリスファミリーのボスがいない間には、ボス代理として全権指揮する男であり、仕事有能なものもそうだが、未来においてイリスファミリーにせめて来たミルフィオーレのA級兵士軍団総勢500名以上を戦闘部隊『アヤメ』と一緒に壊滅させた実績を持つ程に、腕もたつ男。

「ん？珍しい物ありますねー灯夜さん、それって匣？この世界に？」

「ああ、ラッシュユか。この匣は少し特別だな」

ひよいと部屋に入ってきた明るい声。

金髪を押し込んだ帽子、全身の服装は迷彩柄に染められており、腰に差した2刀の奇怪な大ぶりのナイフが特徴的な、端的に言えば軍人の様な男、年齢で言えばまだ10代半ば、少年と言える程だった。

彼の名前は、ラツシュ・ギナ。

後の未来において、イリスファミリー第二戦闘部隊『シヤガ』に属する男であり、現在には傭兵稼業を行っている。

一時期六道骸に雇われて、黒曜ランドで光努と戦った事があり、敗北している。

未来の記憶を受け取り、その後自身の師に捕まって引きずられ、現在イリスファミリーに仮入隊の状態となっている立場である。半分乗り気だが、半分は不本意でもある。それは、彼の師匠に関係する事だから。

それはそれとして、机の上に転がされた匣に興味を持つラツシュに、灯夜が説明してくれる。

「実はクルドと光努の希望だな。この匣の中には10年後の未来の記憶、リルとコルとロルフ・ミーガンの記憶が詰まっている」

「記憶が!? ロルフって、確かチヨイスで戦って光努と一緒にスカートラ・ディ・バンドラ・メタバンドラの疑似匣に閉じ込められたっていうミルフィオーレの緑鬼って子か。この時代だと、リルとコルと似た年齢でしたっけ？」

「ああ。既に素性は調べ、使いを送ったからあの少年が今後マフィアと関わる事は無いだろう。それを見越して、未来で光努は過去のロルフの記憶を封じて欲しいと言つてきたんだ」

今の時点では、まだ年端もいかない子供。

両親と幸せに過ごす子供に、先の未来の絶望を伝える必要など無い。そう考えての処置を捧日アランを送り、シャマルに依頼し、成功した。今後、ロルフ・ミーガンという少年に絶望的な不幸は訪れる事は無いだろう。

「はあ、やりますねー。それで、光努の方は分かりましたけど、残りのリルとコルの分つていうのは？クルドさんつて『アヤメ』のリーダーであの子達の父親ですよ？なんでまた」

「父親であり、剣の師でもあるから、だ。未来の記憶という事は、この先あの子達に教えるはずだった技術や技も含んでいる。あいつとしては、段階的に教えていきたい事もあるのだろう」

10年後の未来において、第二戦闘部隊『シャガ』に属するリルとコルは、それだけ父であり師であるクルドより剣の皆伝を貰っている事だろう。しかしそれは、10年前の今の時点で全て知つていい物でもない。

山本武が父より習った時雨蒼燕流が技を伝えるのは1度だけ、2度目は無い。そう

いった決まり事や剣の奥義、秘奥などあるのはどこの流派も同じだ。それ故のクルドの判断なのだろう。

もう一つは、まだ小さなリルとコルが凄惨な未来を見て、悪い変化があるのではという父としての不安。まだまだ無邪気な子供達を見ていたいという親心であり我儘もあるかもしれない。

その為に、未来の記憶を受け取るに足ると判断したその時は、目の前の記憶の匣を開匣して、全てを伝える事になるだろう。果たしてそれは、何年後かはまだわからないが。「そういえば、来る途中リルとコル見かけましたけど、なんだか意気消沈してましたねー。どうしたんです？」

「ああ、あいつらの両親は今日本にいるからな。入れ違いになってがっかりしてるんだ。まあここに来たいと言ったのはあいつらだから、自業自得とも言えるがな」

「あー、それは確かにあちらを取ればこちらが、て奴ですな……………」
ここはイリスファミリー本拠地、日本ではない。

そもそもこの場所に灯夜、ルイ、リル、コルといった、日本にいたイリスファミリーの者達が来た理由は一つ。光努がこの場所に帰ってくるからだ。

元々イリスファミリー本拠地母屋でルイの部屋から10年バズーカの弾を使って未来に跳んだ光努。そして戻ってくる時も、ほぼ同じ場所、イリスファミリー本拠地に

戻ってくるというのを未来でユニに聞いている。

その為、事前にこの場所に戻り待っている。

リルとコルも、未来の記憶は無いが単純に光努に会いたかったたので、当初の予定では灯夜とルイのみ戻ってくるはずが便乗してついてきた。結果として、そのせいで両親と入れ違いに日本を出国してしまったので、まあ自業自得と言っても過言ではない。

この場合は本人達が、というよりただタイミングが悪かったとしか言い様が無いが。「そういえばラツシュ。何か用か？籠達と一緒に実験場にいたんじやなかったのか？」
「……………ああ！忘れてた！いや、ちよつと師匠から言伝ありまして」

「言伝？籠が？なんと言つてた」

「ええ。なんでも「ちよつとV A R I A^{ヴァリアー}を実験場に招待した」だ、そうです」

灯夜は自身の額を指とトントンと叩きつつ、ラツシュの言葉を脳内で反芻しながら、肩を落として溜息を吐くのだった。

『プレイ・ウイズ・ヴァリアー・シューター・後編』

イリスファアミリー本拠地は、広大な敷地だ。

灯夜含めたファアミリー重要人物が滞在する様の母屋を中央に添え、その周囲には様々な建物と自然が存在する。森や川や山を含めればチョイスフィールド以上の敷地の中には、技術主任であるルイが管理する技術舎や他にも医療舎、そして戦闘部隊『アヤメ』御用達の施設も存在する。

その中の1つに、『アヤメ』の1人であり最年長、某国陸軍将校と言う噂も飛び交う男、獄燈籠ごくとうろうの所有する建物もいくつか存在する。

獄燈籠自身の主兵装メイン・ウェポンでもある銃火器を取り扱つてる兵器舎や火薬庫爆薬庫など物騒な建物はだいたいそうであり、その中の一つに“実験場”と称される建物がいくつか存在する。第1実験場から第10実験場まで存在するその建物は、端的に言つてしまえば獄燈籠の遊び場だ。

基本、イリスファアミリー本拠内のセキュリティを担当する獄燈籠は、罨を考えるのも

好きだ。それ故、実験場の建物内部には獄燈籠が試作中の罫が組み込まれている。あとは誰かで試し打ちでもして実験すれば完璧だが、そんな時吉報が入った。

それは、未来の記憶。

そしてその中で、彼の弟子であるラツシュと考魔の内、考魔がヴァリアーに入隊していたという10年後の記憶。

現時点でも狙撃手として高い実力を誇り、未来の記憶を経てその力は独立暗殺部隊幹部として相応しいまでに高まった。それ故に、ヴァリアーが現在空席の雲の幹部確保の為に考魔を探す事を、獄燈籠は読んでいた。

その為一計を案じた。

というより、獄燈籠はついでとばかりに遊ぶ事にした。

考魔を探し出しイリスファミリー本拠地に呼び寄せて、その後ヴァリアーに連絡し招き入れる。

全ては、ただ自分の作品を試してみたいという単純な欲求。

ボンゴレでも屈指の実力を誇る独立暗殺部隊ヴァリアーなら申し分ない。

そんなこんなで始まった獄燈籠の遊びに、ヴァリアーが巻き込まれる。

そんな話である。

「う」お、おい!! 久しぶりだなあ、獄燈籠ごくとうろう！まさかそつちから声をかけてくるとは思わなかったが、V A R I Aうちにとっては朗報だあ。考魔はどこだあ！」

ヴァリアー本拠地より飛行機とヘリと車を乗り継いでやって来た場所は、イリスファミリー本拠地で獄燈籠の管理する第1実験場。

立幅500メートルはあろう巨大な建物の前で階段に腰かけていた男は、よつこらせと言わんばかりにゆつくりと立ち上がる。

スクアーロの威圧的な声も、後ろに控えるヴァリアー幹部の面々にも気圧される事が無く風の様に笑うが、寧ろ逆だ。見た目だけなら最も弱く無害にも見えるが、その瞳の鋭さは死線を潜り抜けた自分達以上の化け物だと理解している。

軍人の様な深緑の服装、バンドナに押し込められた白髪と同じく白い顎鬚。年期の

入った深い皺を見るに、およそ年齢は60を超えていそうだが、その雰囲気はとも老体とは思えない程に威圧感に満ちている。

「久しいなスクアーロ。相変わらず血圧高そうな声色をしておるのう。10年前も今後10年も変わらないと思うと、やれやれ」

「う”お” おい!! 一つの話をしてやがる! てめーは俺のじいさんじゃねえぞ! あと血圧高いとか老人のてめえに言われたくねえ!」

開口一番で笑みを浮かべながら肩を竦める獄燈籠に対して、スクアーロは激しく怒鳴り散らす、いつもの事だ。ちよつとした、昔の知り合いという事だ。おそらく、ヴァリアー内で『アヤメ』のメンバー3人全員と接点を持つのは、スクアーロだけだ。まあその接点も、かなり昔のものも含まれている。それこそ獄燈籠が言った通り、スクアーロがまだ10前後の子供の頃にも会った事がある。

「懐かしいのう。あの時いきなりやってきてクルドに剣で挑んでではあつさりボコボコにされたしのう」

「るせえぞ! 俺がガキの頃の話だろうがあ! 今やれば俺が勝つ!」

「それも根拠の内自信じゃが………やれやれ」

「なんか文句でもあんのかあ! う”お” おい!!」

殺気を隠そうともせず睨みつけるスクアーロと、それを笑って流す獄燈籠。

そんな2人の姿を見ながら、同じようにこの場所にやって来た幹部であるベル、マーマン、ルツスーリア、レヴィはやや呆れた様に困惑した様に、驚いた様に楽しそうに眺めていた。

「ししし、スクアーロがガキ扱いじゃん。あの爺さんが、イリス戦闘部隊『アヤメ』の獄燈籠か。ホントに爺？全然現役じゃんかよ。つーか何歳だよ」

「ボンゴレ9代目と同年代らしいよ。それだけ戦いを潜り抜けてるから、生半可老人じゃないって噂さ。まあ見た感じ、確かに只者じゃないみたいだね」

歯を出して笑うベルの言葉に、マーマンは目の前の光景にやれやれと肩を竦める。

御年70歳でありながら嘗て自分達のボスを1対1で封緘した力を誇るボンゴレ区世ノリといった例があるから、老兵とはいえ油断するつもりはなかったが、目の前に立てると確かに予想以上だ。

そこに立っているだけなのに、まるで無数の銃口に狙われた様に錯覚する。自然と、ヴァリアー幹部達も緊張していたが、目の前のスクアーロとの他愛もないやりとりでなんだか拍子抜けしてしまった。

「それはそうと、奴は例の蔵実考魔とはどういう関係なのだ？そもそも、なぜ考魔がこのイリスファミリー本拠地にいる。奴はイリスの人間ではないだろう」

「あら、レヴィ聞いて無かったの？その考ちゃん、どうやらあの獄燈籠の弟子らしいわ

よ。もう一人ラツシュって弟子もいるけど、そつちは10年後ではイリスに入ってたみたいね。んで、向こうが先に考ちやん捕まえたから、引き取りたかつたら来てもいいって感じで、連絡来たらしいわよ」

フリーの傭兵であったラツシュと考魔。それに獄燈籠。

なるほど、伊達や酔狂で同じような軍人スタイルの服装をしていたわけでは無いという事か!……と、微妙にズレた納得の仕方をしているレヴィ。

そんなレヴィの心境は誰も知らず、スクアーロと獄燈籠の話し合いは進む。

「う”お”おい!!わざわざ呼ばれたから来てやったんだあ!とつと考魔をだせえ!」
「まあ落ち着け。あ奴なら、この建物の奥で自分の銃の手入れをしておく。行くなら好きにせい」

そう言つて自身の背後の建物を親指で指しながら、好きにしろと足元の階段に再び腰を下ろす。そのまま腰のポーチからごそりと醬油煎餅の袋を取り出して、中身をバリバリと食べ始めた。その光景は、独立暗殺部隊ヴァリアーの面々を前にしてするにはあまりにも呑気な態度だが、別段今日は戦いに来たわけでも無いし、怯える程に弱者なわけでも無い。

それはそれで手っ取り早いと思ひ、スクアーロはさつさと要件をすますべく眼前の建物に向かつて歩を進める。

「ああ、そういえばXANXUSは来ておらんのか? といつても、あ奴がわざわざこんな所まで来るとは思えんけどな。ボンゴレIX世と沢田綱吉にやられて、少しは殊勝になったと思つたんじゃがなあ」

「う」お おい!! そのセリフぜつてえボスの前で言うんじゃねえぞ!」

「やれやれ、わかつとるわい」

再び、呑気に煎餅を食べる獄燈籠を無視して、スクアーロはスタスタと歩いていく。そして獄燈籠の横を通り過ぎて、ベル達も続き、建物の扉をガラガラと開いて中へと入って行った。

ちなみに、先日の緊急会議の時からXANXUSは普通に参加していた。ただ料理を食って幹部候補生に興味が無かった為、会話に参加しなかっただけだ。ちなみにその状態で邪魔するとXANXUSの怒りに触れるので、会議で喧嘩してもXANXUSには被害が行かない様に皆細心の注意を払って喧嘩していたらしい。

そして当然ながら幹部候補の為にボスは動かない。よつて当然不参加だ。単純に面倒だと思つているかもしれないが。

ヴァリアアの面々が見えなくなつた所で、ヒョイと建物の横からやつてきたラツシユは、ヴァリアアの入つた建物をじつとり眺めながら、獄燈籠の隣までやつてくる。

「師匠、あの中歩かせていいのかよ」

「なんじゃ、ラツシユ。何か問題でもあるのか？」

「いや、だってあの実験場って師匠が未来の記憶もらってからこさえた罨満載じゃん。確かに考魔一番奥の部屋にいるけど、あいつら大丈夫か？」

「ま、伊達に独立暗殺部隊はやっておらん。心配ないじやろう。……きつと何人かはたどり着く」

「それって何人かどつかで脱落するって思ってる？」

「ふむ、それはそれ。わしの罨もまだまだ捨てた物じゃないって事じやな！」

「このじーさんは……」

普通にほうって置けば考魔はいずれヴァリアーの情報網に引っかかってコンタクトを取られ、入隊していた事だろう。しかし、その前に獄燈籠はかなりややこしくした。ちようど自分の罨を試したいという欲求で。

既に隠居してもおかしくない年齢なのに妙な少年心を忘れない師匠にラツシユは苦笑しつつも、何となく理解できるので実験場に入ったヴァリアーの面々に同情するのだった。

まずレヴィが脱落した。

状況を説明しよう。

スクアアローを筆頭にベル、マーモン、ルツスーリア、レヴィが中へと入る。

幅10メートル、高さ10メートルもある一本道の廊下。所々備え付けの証明が、扉を開いたと同時に点灯した為、明るさには困らない。全く何も無い通路。

明らかに怪しい場所ではあるが、場所と管理者が管理者だけに、最悪危険は無いと判断した。正確に言うならば、ヴァリアーであればなんとか対処できるレベルだと、スクアアローは判断した。

それはイリスという不可侵マフィアの特徴でもあり、獄燈籠という人物を知っているからこそだとも言える。回りくどく、考魔自身を連れてくるか、こんな場所じゃなく適当な客間でも通す方が簡単だ。それなのに、わざわざ獄燈籠が待ち構えての事。

スクアアローには暗に「この道くらい通って見せる。安心しろ、ちゃんと考魔は先にい

るし問題ない」と言っている様に聞こえた。そして、それは大分正しい。

強いて言うならそれは獄燈籠からの試練的な思惑ではなく、遊びが大半だったとう事ぐらいだろうか。比率で言えば2：8くらいには。

その為、この実験場をぶっ壊すくらいの意気込みでスクアーロはじめヴァリアーの面々は歩き出した。

そして、レヴィが脱落した。

より具体的に説明するなら、歩いているレヴィの足元がパツカリと開き、まっすぐ落とし穴の中に落ち、床が閉じる。以上！

「作戦隊長ー、レヴィが落とし穴に落ちて消えましたー」

「……………ほっとけえ」

「あら冷たいわね。ま、レヴィの事だからどうせその内這いあがってくるでしょうね♪」

「僕は今時あんなベタな罠に引っかかる奴初めて見たよ」

「まあマーモンは基本飛べるし落とし穴なんて関係ないわよねえ」

けらけらと笑うルツスーリアと反対に、スクアーロは最初の時点で疲れた様のため息を吐く。まさか入って50メートルも進まない所で一人脱落するとは思わなかった。と。

確かにベタ過ぎて逆に盲点であり、レヴィが予想以上に鈍重だったが、実に情けない

とスクアアロは思うのだった。

「つーか、なんだよこの罨屋敷。明らかに殺る気満々じゃねーのかよ」

「まあ私達にかかれれば、これくらいなんて事ないわねえ」

「僕もう帰っていい？」

「強制参加だあ！帰ったら搔つ捌くぞお！」

「……………面倒だ」

軽く会話を交わしているが、その間にも壁が開き無数の矢が飛んできたり、天井から鉄球が降ってきたりと、古典的な罨が彼らを襲う。雨あられと飛んできると罨の数々だが、V A R I A ^{彼ら}にとつては些細な罨だ。

独立暗殺部隊ヴァリアーという看板に一切の偽り無し。並の戦闘員であるならば、ここまでで10回は死ぬ。それを服にすら掠らせもせず突き進むのは、まさにヴァリアークオリティと呼ぶにふさわしい。

「それで、あとどれくらいこうしてるんだ？」

キイン！キイン！

飛んでくる矢を自前のオリジナルナイフで弾きながら、前を走るスクアアロに尋ねる。同様にスクアアロも自らの剣を、ルツスーリアは己の肉体を使った迎撃していた。そしてマーモンは一番後ろから安全地帯をふよふよと浮いてくる。

相手が機械である以上、実体の無い幻覚はたいして意味をなさないので、まあ当然と言えれば当然の判断だった。

「ひたすらまっすぐ進む。それだけだあ！とはいえ、そう時間はかからないはずだあ！外からみた限りじゃあ、あと300メートルって所かあ！」

「ま、ちよつと面倒ねえ。まあ、このくらいの罠じゃ、私達を止められないけどね！」
「ししし、1人あつさり止められた奴がいたけどな」

笑いながら、余裕そうに、罠を迎撃して突き進む。

だが、唐突に先頭のスクアーロが立ち止まった。

その姿にベル達も唐突に立ち止まり、何事かとスクアーロに尋ねようとした瞬間、異様な気配を感じて口を閉じた。

目の前の廊下には、何も無い。

とはいえ、おそらく目の前の廊下にも罠が満載なのだろう。それは確定、間違いは無い。にもかかわらず、彼らは異様な気配を、感覚的に察した。何が、と言われれば不明としか言いようが無いが、それは数多くの死線を潜り抜けてきた直感だった。

「う、お、おい、てめえら。少し強い引き締めろよ。獄燈籠の異名は主に2つあるが、その1つは「ワシマン・アーミー単騎軍隊」。奴の銃火器や罠の扱いは1つの軍隊を相手にするように変幻自在で容赦がねえ。舐めてかかるとレヴィの二の舞になるぞお」

そう言つて、スクアーロは前へと進みだす。

その言葉が冗談ではない事を察して、ベル達もわずかに気を引き締め、走り出す。そしてその予測は、すぐに当たりだと理解した。

ゴオオウ!!

床を踏みしめた瞬間、壁から噴き出したのは、熱線。

しかも、この時代においてほとんど見た事無いが良く知っている光。

それは、嵐の死ぬ気の炎によるレーザー装置だった。

「んなあー！こいつつて、俺と同じ嵐の死ぬ気の炎！しかも、レーザーにするとか容赦ねえな！」

「今までの罨は、小手調べつて事なのねえ！」

先程の比ではない猛攻。

殺傷能力は、矢や鉄球と比べれば格段に上がった事だろう。かすり傷ですらおそらく嵐の分解によつて重症に変えられる。

しかし、それは当たつたらの話だ。

やはり、これくらいじゃまだ彼らを仕留めるには足りない。

故に、第二波が来る。

「ん？今度は………嵐の炎を纏つた矢？」

「んまーそれも、すごい数また来たわよー！」

横と天井と前方から、飛び出して来る鏃に嵐の炎を纏った矢。

しかし、それを瞬間マーモンが唐突に叫ぶ。

「!? 気を付けて! あの矢幻覚が混じってる!」

「んな!」

その言葉と同時に身構えた3人の背後から、大量の水が押し寄せた。

しかし、それに対して一切の抵抗する素振りを見せず前から飛んでくる矢を注視する。押し寄せる水が彼らの体を通過するが、一切濡れる事すらなく一切の負荷がかからない。

しかし、前方から飛んできた矢のいくらかを消し去り、さらには何も無い空間からいくつも矢が出現した。

「う」 お、おい! よくやったあ! マーモン!

マーモンの幻覚によって、相手の幻覚を消し去った。

それにより、本来の場所に現れた矢を迎撃する。然程時間はかからずに、一瞬で通路一面は迎撃された矢が散乱する結果となった。当然、誰もかすり傷すら存在しない。

「……………そういえば未来の記憶だが、獄燈籠はメインに嵐の炎だが、サブで霧の炎を使うそうだな。気をつけろ」

「いや、もっと早く行ってくれよ……………」

「そうよ！うっかり傷もらっちゃうところだったわ！」

「るせえ！それくらいどうにかしろお！おらあ、行くぞ！」

荒々しい声を上げて、突き進む。

あと、200メートル。

「……………」

という光景を携帯モニターで覗いていた獄燈籠とラッシュは、やや呆れた様な面持ちだった。

ある意味想定通りの結果ともいえる。

人の思考が入らない単純なパターンの罠の数々。主に物量攻めを目的とした罠が多

い為、それなりの能力を持つ物なら難しく無く、集団ならなお容易いと思っていたし、実際にヴァリアーはそれだけの實力を見せた。

「とはいえ、まさか最初の落とし穴で落ちる奴がおるとはな。落第点を後でボンゴレに送っておこうかのう」

「いや、余計な反感買うからやめとけって師匠。ていうかもう遊びすぎたしいいんじゃないのか？」

「ここまで来て何を言っておる。後少しで目的地だぞ、ここでストップしたら奴らがかわいそうじゃろ。ほれ、続きを見るぞ」

実に楽し気にモニターを眺める自身の師を見ながら、ラツシユは小さくため息を吐く。これは、何を言っても聞かなさそうだと。かといって無理やり止めて後で自分に罰が下るのも嫌なので、傍観する事に決めた。

実際、ヴァリアーの面々は相当手ごわいので、普通にこのまま目的地までたどり着きそうだとも思う。が、それを許さない罫の名手が、獄燈籠という人物だ。

(あー、俺どうするかなー)

10年後の未来ではイリスファミリー第二戦闘部隊『シャガ』に属するラツシユではあるが、今の時点ではまだイリスファミリー(仮)の状態だ。そもそも『シャガ』の戦闘部隊のメンバーはラツシユ、コル、そしてリーダーのルルを据えての『アヤメ』同様

の3人体制が基本。リルとコルが今の時点でまだ戦力外なので、当然の如くラツシユ一人で『シャガ』と言うわけにはいかない。

故に、現在は未来の記憶を持っていてイリスとも関りができてしまったので、獄燈籠の弟子という事もあり師匠預かりのイリスファミリー（仮）状態だ。

今後どうなるのかは、まだわからない。

（そう考えると、考魔は進路がスムーズでいいなあ）

同じ弟子として暗殺部隊に強制スカウトはやや同情しつつも羨ましいと思う。

とはいえ、考魔も色々と考えての事みたいなので、そこまで口を出す事は無い。

せめて、同門として親友として、所属する組織の幹部達の力を見ておこう。

そう思って、ラツシユは再び獄燈籠の携帯モニターに視線を落とすのだった。

「ぜえ……………ぜえ、ようやく……………ここまで……………来たね」

「……………う”お”おい、他の奴らはどうしたあ」

「……………ベルもルツスーリアも、途中で脱落したみたいだね」

満身創痍、というのを見た目の傷は一切無いが、実に疲れた様子のスクアーロとマーマンの2人は、廊下の先をじろりと睨んでいる。あと50メートルの先には、扉が見える。おそらくは、そこが目的地。

ここにたどり着くまでに、他のメンバーは脱落した。

レヴィは言わずもがな、ルツスーリア、ベルの順番で徐々に。

「まさか……………ルツスーリアがあんな退場の仕方するなんてね」

「言うなあ」

突き進むスクアーロ達。

そして眼前に現れた人型のロボット。

明らかに対人を想定した動きで両手の鉄の拳を振るロボットは、嘗て10年後の未来でもツナを苦戦させたモスカとも違う技術的に不安定そうなタイプだ。死ぬ気の炎を動力源としているようだが、目の前のロボは格闘戦を重視するというロボットの利点の兵器搭載をおろそかにしたような異様な物体。

しかしそれを補うように各部装甲を取り付け、防御攻撃能力を上昇させている為、コ

ンセプトが全く違うのかもしれない。

そして、そんなロボに相對するのは、ルツスーリア。

ヴァリアー晴れの幹部であり、軽快なフットワークを持ち左膝に埋め込まれた鋼鉄メタル・ニーを武器に持つムエタイの達人。オネエ言葉の派手好きだが、その実力は本物だ。

いくら人の動きを真似ようとも、ロボの技術は十全ではない。10年後の未来において死ぬ気の炎を動力源とした火力兵器搭載のモスカでさえ、精々がB―級。

ヴァリアー幹部を倒すには、全く持って何もかも足りていない。

その自信通りにキレのある、ある種ミサイルに匹敵する破壊力を秘めた跳カオび膝蹴ロイりを眼前のロボに向かって打ち放った。

その瞬間、廊下の壁が飛び出してロボ事ルツスーリアを突き飛ばすとはさすがに予想していなかった。

ついでにいうと同時に反対側の壁が開き、突き飛ばしたルツスーリアとロボを放り込んで閉じてしまった。

この間わずか0・5秒。

さすがに全員唾然としてしまった。

目の前のロボットを囿にして罠を張るとは、中々に嫌らしいと。壁の罠だけなら対処できていただろうが、目の前の戦闘ロボに集中しすぎたのがルツスーリアのミスと言えよう。実に残念な話だ。

「それに、ベルは正直ギリギリアウトだったね」

「う〱お〱おい、言うなあ。まあれはあいつが悪いなあ」

ベルを脱落させたギミック、それは磁力だ。

それも、雷の炎を使用しての強力な電磁石装置。床から発せられた磁力によって、金属は全て床に吸い付く。しかし効果範囲は精々が床から3メートル程度。咄嗟に飛びのいて天井に剣を突き刺して事なきを経たスクアー口と、元々飛んでいたので簡単に回避したマーモン。

しかしベルは一手後れただけでなく、全身に金属製オリジナルナイフを仕込んでいた為、あつという間に上から見えない手で押しつぶされ様に俯せに床に倒れ伏した。そのまま床が磁力を発したままあつという間に下へと落ちていき、スライドする様に新たな床が出てきて蓋をする。そしてベルは脱落した。

実に残念な結果だ。

せめてベルの持つナイフの本数もう少し少なければ結果は変わったかもしれない

し、変わらないかもしれないが。

「……………う”お”おい、さて、さっさと行くぞお」

「うん……………そうだ「カアアン！」ぶぎゃー！」

「マーモン!?!」

マーモンの姿は消えていた。

しかし、驚異的な動体視力を誇るスクアーロには、辛うじてその姿を残像の様にとらえていた。

実に簡単な話だ、天井が開いて落ちてきたたらいがマーモンに直撃し、そのまま墜落した所で床が開いてそのまま真つ逆さま。そして床が閉じた、これだけだ。

「……………」

予想以上にアナログで残念な手法で落とされた幹部達に呆れ果てる。

とはいえ、高度に設計された罠の出来は確かに驚異的だった事はスクアーロも認めている。ここは幹部達を貶すのではなく、罠を褒めよう。

と、ため息を吐いたまま歩き出し、残りの廊下を突っ切った。

ドガアアアア！

「う”お” おい!!考魔あ!!とつとと出てこおい!!」

実に荒々しく扉をぶち破りながら、スクアア口は怒鳴り声と共に中へと突入する。これが任務ならもつとスマートな入り方をするが、ここは別に適地ではない。そして十分に洗礼を受けたので、この程度全く問題ないとも思っている。

そして中にいた人物は、全く動じる事無く入って来たスクアア口を視界に納める。

ゴーグルをつけた迷彩柄の帽子に、同色の服装に身を包んだ姿は、獄燈籠同様にどこかの軍人スタイル。腰や背のホルスターには愛用の拳銃を備え、机の上で長い銃を組み立てている姿は、未来の記憶から掘り起こされる。

蔵実考魔。

ラツシユと同じいまだ16歳の少年であり、獄燈籠の弟子であり、10年後の未来においてヴァリアアの雲の幹部を務める狙撃手だった。

「やあ作戦隊長。久しぶり、じゃなくて未来ぶり？」

「う」お、おい！ようやく見つけたぞお！手間あかけさせやがって！」

「いや、僕に言われても。だいたい師匠にここで待機命令出されてたし。それに表から入ってくればいいじゃない」

「表？」

「そこ、裏口だよ」

当然の事ではあるが、巨大な建物において出入口がたった一つしか存在しない、なんて事は基本ありえない。まして、正面から入って500メートル近い通路を通つてから部屋がある、なんてのも基本ありえない。

この実験場は、獄燈籠の罟を試す場でもあり、通路から部屋に通じる扉はいわばおまけだ。建物の大半は長い通路だが、最も端に位置する部屋部分は、端なので当然外へと通じる道、表口が存在する。

元々考魔もそこから入ったし、出入り自由だ。

まあ当然の如く、獄燈籠の悪戯である。

「う」お、おい！あの野郎！搔つ捌いてやろうかあ！それで、途中落ちていった奴らはどこいったあ！」

「あー、多分入つて来た所に戻されてると思うよ。それより、要件があつて来たんでしょ？まあ内容は、わかりきつてるけど」

「……………なら話は早い。考魔、ヴァリアーに入隊しろお！てめーの実力は未来の記憶を見て理解してる。手っ取り早く幹部だあ、文句は言わせねえぞ」

剣を突き付けながら、有無を言わさぬ迫力で考魔を、スカウトと言うには荒々しい文句で誘う。

考魔も予想していた。未来の記憶を現実と理解した時から、こうなるだろうとは思っていた。今の考魔にとって、未来の自分がどういう経緯でヴァリアーに入隊したかはわからない。もはや可能性の自分だ、今の自分とは違う。

とはいえ、きつかけがあつて未来の自分が考えて入る決断をした。そしてそのきつかけが、自分の予想より早く来た、それだけだ。

だからこそ、考魔は断らなかつた。

「うん、よろしく頼むよ、スベルビS・スクアーロ作戦隊長」

「う」お、おい！きつちり働いてもらうぞ、歳実考魔！」

考魔はこの選択を後悔しない。未来の記憶にただ従っているわけでは無い。傭兵稼業を続けて放浪していたが、一カ所に留まるのも悪くないと思つた。

長年コンビを組んでいたラッシュには悪いと思うが、その辺りももう話し合ひは済んである。

心置きなく、考魔はこの地を離れる事にした。

こうして、ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーは、1人の戦力を確保する事に成功したのだった。

その後、気絶した幹部達は飛行機に詰められて彼らは本部に帰還したのだった。
新しい幹部、考魔を連れて。

『クリーニング・オフ』

その日は、いつも通りの日常だった。

「うわああ！誰か助けてえ!!」

ツナが叫びながら、子犬に追いかけられるという、ある意味久しぶりの様にも感じるいつも通りの光景だった。チワワでさえ怖がる自他ともに認めるダメツナ。今回は子犬とはいえ、背後から追いかけるブルドックはまさに恐怖の対象。

ツナにしてみたら、一般人がライオンに追いかけられる様な恐怖だ。

ライオンをパートナーにしているツナが何を言ってるんだという話だが、まあ普通に自分には吠えてくる獣が怖いんだ。

「相変わらずダメツナだな。世界広しと言えど、小型犬に追いかけられる中学生はお前くらいだな」

「言っていないで助けてよ!」

「やれやれ、もつとすごい経験をしてるって言うのに、変わらない」

脱獄囚や暗殺部隊や敵対ファイアなど様々な強敵と戦ってきたツナではあるが、相も変わらず怖い物は怖い。その変わらなさは、ある意味美德とも言えるが。

ツナに括り付けた紐の先、凧に変化したレオンに捕まって空から悠々と眺めているリボーンに助けを期待するツナだが、この程度で助けてくれるわけがない。

逃げ続けたツナの先、並盛神社に向かう階段を上がる所で、ブルドックは急にピタリと止まり、怯えた様に前後反転して逃げ出した。その様子を上空からリボーンは見ているが、気づかないツナは一心不乱に階段を駆け上がる。

その上がった先に、さらなる恐怖があるという事を。

ヒュヒュン！ギイイン！

「うわあ！一体何!？」

階段を駆け上がり境内に立ったツナの目の前に、何か鋭い物が一瞬通り過ぎた。何事か、と思つたがその正体はすぐにわかつた。

「お！ツナじゃねえか！今ちよつと取り込み中だから離れててくれ」

「余所見なんて、余裕だね」

「恭弥！ほらツナだ、一旦休憩しようぜ」

「僕には関係無いね」

目の前で繰り広げられている戦いは、キャバツローネファミリー10代目ボスのデイーノ、並中最強の風紀委員長にしてボンゴレ雲の守護者（本人未認証）の雲雀恭弥。元リボーンの教え子であり兄弟子のデイーノは、ヴァリアーとの闘いにおいて雲雀の家庭教師を務めた事がある。最も、群れるのを嫌う孤高の守護者である雲雀は、リング戦までひたすらあらゆる環境でデイーノと1対1で戦い続けるというトレーニングを続けただけではあるが。

そして雲雀本人的には師匠面するデイーノが気に入らないのと強者と戦える為、定期的に噛み殺す為に戦いをしているという。デイーノも呆れ果てた孤高っぷりだが、それに付き合うデイーノもデイーノで大概面倒見が良い。

大抵は並中の屋上で戦っているが、今回は並盛神社の境内で2人は毎度恒例の戦いをしているという。近くで戦いを観戦しているのは、デイーノの部下であるキャバツローネファミリーのロマーリオのみである。

ちなみに、ヴァリアー編の時から今に至るまで定期的に戦うデイーノと雲雀にツナはややドン引きである。

「……………雲雀さん、相変わらずのバトルマニアなんだ。ていうかデイーノさんもよくやるね」

「ま、デイーノも雲雀の扱いがうまくなったが、ツナと同じでまだまだだつて事だな」

「ていうかりボーン！なんで助けてくれなかったんだよ！」

「子犬に追いかけられて助けを呼ぶなんて、恥を知らダメツナ」ブン！

「痛つてえ!!」

地上に降り立ち、ハンマーに変形したレオンによつて、弁慶の泣き所を強打されたツナは思わず蹲る。リボーンによるスパルタ指導は、今なお健在だった。

「お前も雲雀を見習つて、もつと自分から強者に立ち向かう努力をしろ」

「嫌だよ！なんでわざわざ自分から危険に巻き込まれなきやいけないんだ！」

「小さなブルドックを危険と思うなんて、やっぱりまだまだ………ん？」

やれやれと言うリボーンだが、途中で言葉を中断して背後に視線を向ける。

その様子に訝しげるツナだが、同様に雲雀とディーノもリボーンと同じ方向、つまり並盛神社に続く入り口の階段へと視線を向ける。ツナも、誰かが階段を登ってくるのを感じ取った。

そして僅か数秒で、境内に1人の人物が上がつて来た。

「おや、これは珍しい人達がいいますね。アルコバレーノリボーン、キャバツローネのディーノ君にロマールリオさん。そしてボンゴレ10代目綱吉君とその守護者雲雀君。いったい、これはどういう集まりですか？」

その人物を、この場の全員が知っていた。

良く知っている物、名前と情報だけ知っている物、名前は知らないが会った事ある物、ただ数度の会話しかした事無い物。そこは様々ではあったが、相手は一応この場の全員を知っている。

青黒い髪を揺らした、端正な顔立ちをした20代半ば程の男性。

シャツやジャケットなど、あまり特徴的ではない普通の恰好、肩にかけてたバッグもおかしなところは見当たらない。強いて言うなら、腕に着けた立方体の様なアクセントのブレスレットが特徴的くらいか。

男は実に自然体はこの場に立つが、逆にそれが怪しく思える。

当然、ツナ達の情報を知る者など限られている。一般人としてはあり得ない。

つまり、この男は一般人ではない。無論、それはツナ達も良く知っていた。

「槍時か。久しぶりだな。並中でのヴァリアーとの戦い以来だな」

「そうですね。まあ、僕は光努に頼まれて少し手伝いに行っただけで、あまり大した事はしてないですけどね」

男の名は、かいどうそうじ海堂槍時。

イリスファアミリー戦闘部隊『アヤメ』のメンバーである槍使いの男。威圧的な他のマフィアと比べたら随分と温和であり、『アヤメ』の中でも基本常識的。その常識さは初対面のツナに“いい人”と称される程だった。

槍時の登場に、ディーノも雲雀も思う所があるのか一旦戦いの手を止めた。

まあ思う所と言っても、ディーノ自身何度か槍時と会って話した事があるので、別段敵対心を抱いているわけでは無い。キャバッローネにとつても、イリスはいい取引相手である事には変わらないから。

問題は雲雀の方にある。

「おい恭弥。なんでそんな殺気まみれで槍時を睨んでるんだよ。誰これ構わず喧嘩仕掛けるのやめろって」

「別に誰でも良いわけじゃないよ。この人、前に僕の得物を横から邪魔したからね。代わりに、今僕と戦ってもらおう事にしたよ」

それはヴァリアーとの、大空のリング戦の事。

途中説明を省略して、リング戦に託けて攻めてきた造墓会のメンバーである。道化師“ジャンピエロと雲雀は戦う事になった。

雲雀はその前までの戦いで浅くない傷を負いながらも、両者共に引かぬ戦いを繰り広げていたが、その後参戦してきた槍時によって戦いは中断された。まあ実際、毒から回復したばかりであり、ベルとの戦いで傷やプレギーラとの構成員との戦闘、出血多量につき気力のみで戦っていた状態である雲雀が優勢とも言えなかつたので、中断させた槍時の判断は間違つてなかつたが、それはそれで雲雀の心情的に納得できる物ではな

い。

ちなみに、その後槍時はすぐになくなったので、そのイライラをディーノにまとめぶつけて戦いを挑んだのは余談でもある。

とりあえず、雲雀には槍時に戦いを挑む理由があった、という事だ。

突き刺す様な殺気を出す雲雀だが、流石に槍時は少し困った笑み浮かべるが全く持つて自然体のままだ。槍時的には光努の頼みでもあり善意の行動だっただけに、どう対応したら良い物かと思ってるのだろう。

「はあ、たく恭弥は。それはそうと槍時、どうしてこんな所に。ここは並盛神社だぜ？」

「ええ、並盛神社に用があるので間違いないですね。掃除に来たんですよ、ほら」

そう言つて槍時がバッグから取り出したのは、バケツ、雑巾、タワシ、折り畳み式のモップ、などなどの掃除道具だった。

「ええ!? 本当にただの掃除道具だ!」

イリス戦闘部隊『アヤメ』のメンバーという槍時からありえない物が出てきた事により、ツナは普通に驚く。しかし、マフィアの中では槍時が最も常識的と感じるだけあって、ある意味普通に似合うとも思ってしまった。

「槍時だけに掃除が似合うってか。ツナも言うようになったな」

「言つてないよ! 俺の心の中を読むなって!」

「まあまあ。僕も掃除は好きですので、別に構いませんよ」
「槍時さん予想以上にいい人だ！」

柔和に笑う槍時に、感動するツナ。最近では自分の周りは物騒になったから、感動と癒しを与えてくれる人が貴重になりつつあった。ちなみに癒しナンバーは笹川京子一択とはツナ談だ。

「……………そう、なら今日はいいや」

「んな！恭弥！」

「並盛の風紀の為に動くなら、今日は見逃してあげる。でも、次は戦ってもらうから」
そう言つて興が覚めたのか、そのまま階段を降りて行つて雲雀は並盛神社を後にした。

その光景を、茫然と見つめるディーノ。とはいえ雲雀が戦いを途中で中断するなんて、ディーノからしてみれば中々にレアな光景なのは間違いないだろう。

しかし同時に、並中をこよなく愛する雲雀であり、並盛全土自身の縄張りか所有物の様に振舞う雲雀。実際に並盛町の秩序は風紀委員によって保たれているといつても過言ではないが。

その為、今回並盛神社を掃除に来たという槍時の行動は雲雀的に割とポイントが高い。よつて、今回個人的な恨みは置いておいて、並盛の為に見逃した、という事である。

「まさか、雲雀さんが途中で戦いをやめるなんて……………」

「ま、並盛大好きなアイツらしいな。でも槍時、神社に掃除に来たのはいいいけど、お前がわざわざこの場所に来るのはどういう理由だ？お前と並盛神社に関係あるなんて、初めて聞いたぞ」

「あ！そういうえばそうだね！一体槍時さんどうして!？」

その言葉に、槍時は少し考え込む様に瞑目するが、特に問題は無いか、そう結論を出し歩み始める。

「この日本には、初代イリスファミリーの遺産と呼ばれる建物が2つ存在します。〃夜明殿〃と〃奈落殿〃の2つ。その1つの所在が、この場所なんですよ」

「なっ!？」

「初代イリスファミリーの遺産、だと？俺も初耳だな」

「ええ、それはイリスの機密事項の1つですから。まあ喋っても特にデメリットは無いのですが。とはいえ、あまり吹聴しないでくださいね。出ないと、口封じをしないといけませんから」

口元に1本指を当てて薄く笑う槍時の雰囲気は変わらないが、その中には先程までは欠片も存在しなかった小さな威圧感を少しだけ覗かせる。

興味本位か、神社の中に入っていく槍時の後に続くツナ達。拒まないという事は特に

問題ないらしく、槍時も前へ前へと進んでいく。

「初代イリスファミリーの中枢は、現在と同じようにボスとボス代理、それに3人のメンバーをそろえた戦闘部隊と同じ構成をされています。まあ初代以降ボスの不在と例外的な状況によって戦闘部隊の数が増える事はありますが、基本は同じです」

例外的な状況とは、10年後のミルフィオーレとの戦いの時の様な、全面的に危機に陥った場合など。その様な時には、第二戦闘部隊『シャガ』の様に、通常1つの戦闘部隊を増やしたりする場合もあるという。

とはいえ、基本の原型は同じ。

ボスである白神光努。

ボス代理のナンバー2である黒道灯夜。

戦闘部隊『アヤメ』のリーダークルドと、メンバーの獄燈籠、海棠槍時。

この5人こそが、イリスファミリーの中枢ともいえる戦力であり、それにプラスして現在は技術主任のルイや医療主任などいるが、基本はこの5人。

初代イリスの時代も、この構成と同じであったとされている。

「初代イリスファミリー戦闘部隊、その3人のメンバーが遺したとされている物の一つが、この並盛神社の地下に隠された『夜明殿』です」

「うっそお!? 並盛神社の地下にそんなものが隠されてたなんて初耳だよ!? ていうか、並

盛神社の地下って未来でボンゴレのアジトがあつた場所だよね!？」

「正確には、雲雀が組織する風紀財団のアジトだったけどな」

「いや、そうだけどー！」

「それは単に、建築時見つからなかっただけです。地下と言っても、本当に土の中にあるわけではないですから」

並盛神社、その床下を開き階段を降りる。

その先には、御神体が祭られているかのような祭壇が置いてあるが、祭壇の中央には小さな鍵穴。槍時が取り出した小さな鍵を鍵穴に差し込むと、ガタンと音がした。

「うわあ！開いたー！」

「いちいちビビり過ぎだぞ、ツナ」

「安心しろって、俺もリボーンも槍時もあるんだ。予想外の最悪の事態があつても、なんとかしてやるよ」

「ええ、そんな事言つても……………」

怖い物は怖い、と言うツナだが、どうせ何かあつてもリボーンが助けてくれる事は滅多にないし、デイーノの部下であるロマーリオが外で待機しているのでこの場にはいないというのも理由の1つ。

デイーノは部下が近くにいないと戦闘能力が半分以下に激減する、部下の為に力を発

揮するある意味究極のボス体質。そんな事もあって、怪しげな雰囲気的神社地下でツナはややおびえ気味なのだった。

しかし、そんな気持ちも、開いた先の空間に立った時に吹き飛んだ。

広大な自然を見た時の様に、精緻な技巧の果てに生み出された作品を見た様に。

ありもしない風が全身を吹き抜ける様な、不思議な感覚をツナは味わった。

「ここが、初代イリスファミリ―戦鬪部隊『ビフレスト』の1人、七代ななよの舞刀姫ぶとうひめ”と謳われた剣士の刀が眠る、”夜明殿”です」

そこは、草原だった。

広大な草原、そしてその上に浮かぶは、満点の星空の浮かぶ夜の空。

そして草原の上に佇むは、1つの社。全てに木材と石を使用したであろう質素な作りだが、所々に備えられた装飾は緩やかに優美な雰囲気、星の下に荘厳に佇む姿は、まさに神秘的と呼ぶにふさわしい姿だった。

そして社の奥に扉越しに微かに見えるのは、1本の刀。

全身を鞘鎖鎖が巻き付けられ封じられているが、その威圧感は並大抵の物ではない。ただそこにあるだけで、圧倒的な存在感を放っている。ツナがそれ程の物を見たのは、ここ最近では未来でのみ。

10年後のルルの持つ神器『クレイブソリッシュ純然たる剣』を見て以来か。

「夜空………！俺達は地下に入ったはずなのに、これは一体………」

「え！え！?!どい事！」

「こいつはスゲーな」

「間違い無いですよ、ここは地下。ただ潜った扉の先は、パンドラの匣の技術が使われた別空間、と言った方が正しいですね。これと同じですよ」

そう言つて見せる様に腕を持ち上げると、その腕に下がったブレスレットが視界に入る。立方体の様なアクセントの入ったブレスレット、その姿に見覚えが、3人にはある。(あれは、未来でリルが持っていた、神器を封じていたパンドラスカイトラ・デイ・パンドラ・レブリカの劣化匣。こつちの時代で、未来の知識を経たルイ辺りが造ったのか。ん？だが、細部形状が異なる気がするな。同じ物じゃないのか?)

少しだけ訝しげるリボンだが、当の本人である槍時はサクサクと草原を進み、社の前に佇んで丁寧に、祈る様に手を合わせる。

よく見れば、社の扉にはイリスの紋章があり、初代イリスファミリーの遺産というのは間違いないだろう。

数秒瞑目して祈りを捧げた槍時は、掃除道具を取り出して草原の上に置いておく。

そしてくるりとツナ達の方を向いて、柔らかに笑った。

「では掃除を始めましょうか。もちろん皆さん、手伝つてくれますよね？」

その笑顔は、ここまでの柔らかさと異なり有無を言わさぬ迫力があつた気がする、後にツナは語るのだった。

「ありがとうございます。掃除を手伝ってもらつたおかげで、予定より早く切り上げる事が出来ました。感謝します」

「槍時は、この後別の仕事でも入ってんのか？」

「いえ、そもそも今日は休暇オフなので、日本にいたのでせっかくだからと来たまでですよ。ま、後はもう1つの遺産の掃除はまた今度にしますけどね」

「『奈落殿』って言ったっけか」

「ええ、まあ。それではディーノ君と綱吉君も、また。もしかしたら、そう遠くない時にまた会う事になるかもしれませんか」

「わざわざすみませんね。せっかくですので、お言葉に甘えさせていただきます」

「そいつは構わないけど、俺達イリスの部外者にあんな場所見せても良かったのか？あの社に祀ってあった御神体は、初代イリスファミリーの遺産の刀、もつと言えば神器の1つだろ？」

ロマーリオの運転する車の中で、丁寧な礼を述べる槍時に、デイーノは尋ねる。話題は、あの社『夜明殿』の中身について。

デイーノが思い出すのは、ヴァリアーとの闘いにおいて『棟梁』ウィーラの所有していた、小さな槌。後で槍時から、それがおそらく神器の1つであろう事を聞いたが、少なくともあれと同質の威圧感を、封印越しにデイーノは感じた。

そして、その直感は正しい。

「やはり気づきますか。ええ、お察しの通り、あの刀は神器の1つ。しかし、特に問題はありませんね。デイーノ君も見た通りに、あれには封印が施されています。それも、初代イリスが自ら施した封印が」

「何？」

「あの刀に限らず、世界にいくつか初代イリスが施した封印が点在しています。しかし、それを扱える物は存在しません。唯一可能なのは、初代イリスと同じ炎を持つ者」

「つまり、現時点で光努にしか解けない封印って事か」

「はっ」

初代イリスの時代に、いくつか神器を収集していた事もあったという。にも拘らず、この時代にはほとんど残っていない。放置するだけでどれだけ災厄を呼び込むかも不明な物質な為、失くした、なんて事は無いだろう。それに本来神器とは人知を超えた神域の武器。破壊されて滅った、などと考える事自体もナンセンス。

ではなぜこの時代にほとんど伝わっていないのか。

それは、初代イリスが消える前に再度封印を施したから。

それは誰にも解くことができない封印。その為、未来でも白蘭はいくつか並行世界の知識で場所を特定しようとも、そもそも封印が解けない為に使用を断念した神器の話もある。

並行世界を覗きあらゆる不可能を可能とする白蘭でも、明らかに不可能な事が存在する。

唯一造られたボンゴレ匣の詳細が分からなかった様に。

特異点と称される、白夜の炎を手に入れる事が出来なかった様に。

白神光努の情報を並行世界で手に入れる事が出来なかった様に。

初代イリスの施した封印を、白夜の炎なしに解けない様に。

故に、槍時としては特に知られても問題なかった。

例え知ろうとも、誰にも扱う事が出来ないのだから。

「そもそも、あの空間も一応鍵が必要な場所ですからね。これの技術を、少しアレンジした物ですし」

そう言ってみせるのは、腕に嵌まるブレスレット。立方体の様なアクセントの施された、異質なブレスレット。

「それは確か、スカートラ・デイ・バンドラの匣を参考に作ったって言う……」

「ええ、スカートラ・デイ・バンドラの疑似匣。なんでも入る不思議な箱。昨今のゲーム風に言えばアイテムボックスと言った所ででしょうか。といっても、今は1つ入れただけで容量一杯ですけどね」

柔らかに笑う槍時。

しかし、デイーノにはその中身が何となく想像がついた。たった1つの物しか入れる事が出来ないのではなく、容量をフルに使わないと入れる事が出来ない、たった1つの

物質。しかし、それを特にこの場で言及する事は無かった。

それもまた、イリスの機密の1つであると察したから。

「そういえば、このタイミングで日本にいるのは、例の式典に出席するからですか？」

「ああ、知ってたか。ま、せっかくの晴れ舞台だしな、早めに準備も必要だからな。イリスにも招待状行ってるんじゃないのか？」

「さて、どうでしょうか。そもそも光努はまだ帰ってきてませんしね。まあ、その時は灯夜さんの判断に委ねますけど」

「なるほどな。まあ、楽しみにしてるぜ」

軽い談笑する槍時とディーノを乗せた車は、緩やかに並盛の町を走るのだった。